

2022年度 大学院人文科学研究科 講義概要（シラバス）



法政大学

科目一覧

【発行日：2022/5/2】最新版のシラバスは、法政大学 Web シラバス (<https://syllabus.hosei.ac.jp/>) で確認してください。

哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0000】	言語分析哲学研究Ⅰ-1 [中釜 浩一]	春学期授業/Spring	1
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0001】	言語分析哲学研究Ⅰ-2 [中釜 浩一]	秋学期授業/Fall	2
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0002】	言語分析哲学研究Ⅱ-1 [中釜 浩一]	春学期授業/Spring	3
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0003】	言語分析哲学研究Ⅱ-2 [中釜 浩一]	秋学期授業/Fall	4
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0004】	形而上学研究Ⅰ-1 [齋藤 元紀]	春学期授業/Spring	5
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0005】	形而上学研究Ⅰ-2 [齋藤 元紀]	秋学期授業/Fall	6
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0006】	古代哲学史研究Ⅰ-1 [奥田 和夫]	春学期授業/Spring	7
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0007】	古代哲学史研究Ⅰ-2 [奥田 和夫]	秋学期授業/Fall	8
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0008】	古代哲学史研究Ⅱ-1 [奥田 和夫]	春学期授業/Spring	9
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0009】	古代哲学史研究Ⅱ-2 [奥田 和夫]	秋学期授業/Fall	10
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0010】	論理学研究Ⅰ-1 [安東 祐希]	春学期授業/Spring	11
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0011】	論理学研究Ⅰ-2 [安東 祐希]	秋学期授業/Fall	12
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0012】	論理学研究Ⅱ-1 [計良 隆世]	春学期授業/Spring	13
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0013】	論理学研究Ⅱ-2 [計良 隆世]	秋学期授業/Fall	14
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0014】	近代倫理学史研究Ⅰ-1 [菅沢 龍文]	春学期授業/Spring	16
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0015】	近代倫理学史研究Ⅰ-2 [菅沢 龍文]	秋学期授業/Fall	17
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0016】	近代倫理学史研究Ⅱ-1 [菅沢 龍文]	春学期授業/Spring	19
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0017】	近代倫理学史研究Ⅱ-2 [菅沢 龍文]	秋学期授業/Fall	20
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0018】	実践哲学研究Ⅰ-1 [山口 誠一]	春学期授業/Spring	22
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0019】	実践哲学研究Ⅰ-2 [山口 誠一]	秋学期授業/Fall	23
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0020】	近代ドイツ哲学史研究Ⅰ-1 [吉田 敬介]	春学期授業/Spring	24
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0021】	近代ドイツ哲学史研究Ⅰ-2 [吉田 敬介]	秋学期授業/Fall	25
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0022】	現代哲学研究Ⅰ-1 [大池 惣太郎]	春学期授業/Spring	26
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0023】	現代哲学研究Ⅰ-2 [大池 惣太郎]	秋学期授業/Fall	27
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0024】	科学哲学研究Ⅰ-1 [佐藤 真人]	春学期授業/Spring	28
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0025】	科学哲学研究Ⅰ-2 [佐藤 真人]	秋学期授業/Fall	29
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0026】	科学哲学研究Ⅱ-1 [佐藤 真人]	春学期授業/Spring	31
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0027】	科学哲学研究Ⅱ-2 [佐藤 真人]	秋学期授業/Fall	32
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0028】	近代西洋哲学研究Ⅰ-1 [松井 久]	春学期授業/Spring	34
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0029】	近代西洋哲学研究Ⅰ-2 [松井 久]	秋学期授業/Fall	35
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0030】	近代フランス哲学史研究Ⅰ-1 [酒井 健]	春学期授業/Spring	36
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0031】	近代フランス哲学史研究Ⅰ-2 [酒井 健]	秋学期授業/Fall	37
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0032】	近代フランス哲学史研究Ⅱ-1 [酒井 健]	春学期授業/Spring	38
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0033】	近代フランス哲学史研究Ⅱ-2 [酒井 健]	秋学期授業/Fall	39
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0034】	超越論哲学研究Ⅱ-1 [大森 一三]	春学期授業/Spring	40
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0035】	超越論哲学研究Ⅱ-2 [鶴澤 和彦]	秋学期授業/Fall	41
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0036】	ヨーロッパ精神史研究Ⅰ-1 [半田 勝彦]	春学期授業/Spring	42
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0037】	ヨーロッパ精神史研究Ⅰ-2 [半田 勝彦]	秋学期授業/Fall	43
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0038】	ヨーロッパ精神史研究Ⅱ-1 [長谷川 悦宏]	春学期授業/Spring	44
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0039】	ヨーロッパ精神史研究Ⅱ-2 [長谷川 悦宏]	秋学期授業/Fall	45
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0042】	哲学ドイツ語研究 1 [吉田 敬介]	春学期授業/Spring	46
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0043】	哲学ドイツ語研究 2 [吉田 敬介]	秋学期授業/Fall	47
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0044】	哲学フランス語研究 1 [酒井 健]	春学期授業/Spring	48
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0045】	哲学フランス語研究 2 [酒井 健]	秋学期授業/Fall	49
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0046】	哲学基礎研究Ⅰ [山下 真]	春学期授業/Spring	50
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0047】	哲学基礎研究Ⅱ [板橋 勇仁]	秋学期集中/Intensive(Fall)	51
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0048】	日本思想史研究Ⅰ-1 [西塚 俊太]	春学期授業/Spring	52
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0049】	日本思想史研究Ⅰ-2 [西塚 俊太]	秋学期授業/Fall	54
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0050】	日本思想史研究Ⅱ-1 [西塚 俊太]	春学期授業/Spring	55
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0051】	日本思想史研究Ⅱ-2 [西塚 俊太]	秋学期授業/Fall	57
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0052】	現象学研究Ⅰ-1 [君嶋 泰明]	春学期授業/Spring	58
哲学専攻 (修士課程)-専門科目	【X0053】	現象学研究Ⅰ-2 [君嶋 泰明]	秋学期授業/Fall	59
哲学専攻 (博士後期課程)	【X0055】	哲学特殊研究Ⅰ [君嶋 泰明]	春学期授業/Spring	60

哲学専攻 (博士後期課程)	[X0056]	哲学特殊研究 2 [君嶋 泰明]	秋学期授業/Fall	61
哲学専攻 (博士後期課程)	[X0057]	哲学特殊研究 1 [山口 誠一]	春学期授業/Spring	62
哲学専攻 (博士後期課程)	[X0058]	哲学特殊研究 2 [山口 誠一]	秋学期授業/Fall	63
哲学専攻 (博士後期課程)	[X0059]	言語分析哲学特殊講義 1 [中釜 浩一]	春学期授業/Spring	64
哲学専攻 (博士後期課程)	[X0060]	言語分析哲学特殊講義 2 [中釜 浩一]	秋学期授業/Fall	65
哲学専攻 (博士後期課程)	[X0061]	古代哲学史特殊講義 1 [奥田 和夫]	春学期授業/Spring	66
哲学専攻 (博士後期課程)	[X0062]	古代哲学史特殊講義 2 [奥田 和夫]	秋学期授業/Fall	67
哲学専攻 (博士後期課程)	[X0063]	論理学特殊講義 1 [安東 祐希]	春学期授業/Spring	68
哲学専攻 (博士後期課程)	[X0064]	論理学特殊講義 2 [安東 祐希]	秋学期授業/Fall	69
哲学専攻 (博士後期課程)	[X0065]	近代倫理学史特殊講義 1 [菅沢 龍文]	春学期授業/Spring	70
哲学専攻 (博士後期課程)	[X0066]	近代倫理学史特殊講義 2 [菅沢 龍文]	秋学期授業/Fall	72
哲学専攻 (博士後期課程)	[X0067]	実践哲学特殊講義 1 [山口 誠一]	春学期授業/Spring	73
哲学専攻 (博士後期課程)	[X0068]	実践哲学特殊講義 2 [山口 誠一]	秋学期授業/Fall	74
哲学専攻 (博士後期課程)	[X0069]	近代ドイツ哲学史特殊講義 1 [吉田 敬介]	春学期授業/Spring	75
哲学専攻 (博士後期課程)	[X0070]	近代ドイツ哲学史特殊講義 2 [吉田 敬介]	秋学期授業/Fall	76
哲学専攻 (博士後期課程)	[X0071]	科学哲学特殊講義 1 [佐藤 真人]	春学期授業/Spring	77
哲学専攻 (博士後期課程)	[X0072]	科学哲学特殊講義 2 [佐藤 真人]	秋学期授業/Fall	79
哲学専攻 (博士後期課程)	[X0073]	近代フランス哲学史特殊講義 1 [酒井 健]	春学期授業/Spring	80
哲学専攻 (博士後期課程)	[X0074]	近代フランス哲学史特殊講義 2 [酒井 健]	秋学期授業/Fall	81
哲学専攻 (博士後期課程)	[X0077]	現象学特殊講義 1 [君嶋 泰明]	春学期授業/Spring	82
哲学専攻 (博士後期課程)	[X0078]	現象学特殊講義 2 [君嶋 泰明]	秋学期授業/Fall	83
哲学専攻 (博士後期課程)	[X0079]	日本思想史特殊講義 1 [西塚 俊太]	春学期授業/Spring	84
哲学専攻 (博士後期課程)	[X0080]	日本思想史特殊講義 2 [西塚 俊太]	秋学期授業/Fall	86
哲学専攻 (博士後期課程)	[X0082]	哲学特殊研究 1 [酒井 健]	春学期授業/Spring	87
哲学専攻 (博士後期課程)	[X0083]	哲学特殊研究 2 [酒井 健]	秋学期授業/Fall	88
日本文学専攻 (修士課程)-専門科目	[X0100]	日本文芸学 A [一柳 廣孝]	春学期授業/Spring	89
日本文学専攻 (修士課程)-専門科目	[X0101]	日本文芸学 B [一柳 廣孝]	秋学期授業/Fall	90
日本文学専攻 (修士課程)-専門科目	[X0102]	日本文芸批評史 A [田中 和生]	春学期授業/Spring	91
日本文学専攻 (修士課程)-専門科目	[X0103]	日本文芸批評史 B [田中 和生]	秋学期授業/Fall	93
日本文学専攻 (修士課程)-専門科目	[X0104]	日本古代文芸原典研究 A [坂本 勝]	春学期授業/Spring	94
日本文学専攻 (修士課程)-専門科目	[X0105]	日本古代文芸原典研究 B [坂本 勝]	秋学期授業/Fall	95
日本文学専攻 (修士課程)-専門科目	[X0106]	日本古代文芸演習 A [加藤 昌嘉]	春学期授業/Spring	96
日本文学専攻 (修士課程)-専門科目	[X0107]	日本古代文芸演習 B [加藤 昌嘉]	秋学期授業/Fall	97
日本文学専攻 (修士課程)-専門科目	[X0108]	日本中世文芸原典研究 A [阿部 真弓]	春学期授業/Spring	98
日本文学専攻 (修士課程)-専門科目	[X0109]	日本中世文芸原典研究 B [阿部 真弓]	秋学期授業/Fall	99
日本文学専攻 (修士課程)-専門科目	[X0110]	日本中世文芸演習 A [伊海 孝充]	春学期授業/Spring	100
日本文学専攻 (修士課程)-専門科目	[X0111]	日本中世文芸演習 B [伊海 孝充]	秋学期授業/Fall	101
日本文学専攻 (修士課程)-専門科目	[X0112]	日本近世文芸原典研究 A [小林 ふみ子]	春学期授業/Spring	102
日本文学専攻 (修士課程)-専門科目	[X0113]	日本近世文芸原典研究 B [小林 ふみ子]	秋学期授業/Fall	103
日本文学専攻 (修士課程)-専門科目	[X0114]	日本近世文芸演習 A [高木 元]	春学期授業/Spring	104
日本文学専攻 (修士課程)-専門科目	[X0115]	日本近世文芸演習 B [高木 元]	秋学期授業/Fall	105
日本文学専攻 (修士課程)-専門科目	[X0116]	日本近代文芸原典研究 A [中丸 宣明]	春学期授業/Spring	106
日本文学専攻 (修士課程)-専門科目	[X0117]	日本近代文芸原典研究 B [中丸 宣明]	秋学期授業/Fall	107
日本文学専攻 (修士課程)-専門科目	[X0118]	日本近代文芸演習 I A [藤村 耕治]	春学期授業/Spring	108
日本文学専攻 (修士課程)-専門科目	[X0119]	日本近代文芸演習 I B [藤村 耕治]	秋学期授業/Fall	109
日本文学専攻 (修士課程)-専門科目	[X0120]	日本言語学原典研究 A [間宮 厚司]	春学期授業/Spring	110
日本文学専攻 (修士課程)-専門科目	[X0121]	日本言語学原典研究 B [間宮 厚司]	秋学期授業/Fall	111
日本文学専攻 (修士課程)-専門科目	[X0122]	日本言語学演習 I A [尾谷 昌則]	春学期授業/Spring	112
日本文学専攻 (修士課程)-専門科目	[X0123]	日本言語学演習 I B [尾谷 昌則]	秋学期授業/Fall	113
日本文学専攻 (修士課程)-専門科目	[X0124]	日本言語学演習 II A [王 安]	春学期授業/Spring	114
日本文学専攻 (修士課程)-専門科目	[X0125]	日本言語学演習 II B [王 安]	秋学期授業/Fall	116
日本文学専攻 (修士課程)-専門科目	[X0126]	日本語学特講 A [古牧 久典]	春学期授業/Spring	117
日本文学専攻 (修士課程)-専門科目	[X0127]	日本語学特講 B [古牧 久典]	秋学期授業/Fall	118
日本文学専攻 (修士課程)-専門科目	[X0128]	沖縄文芸史 A [福 寛美]	春学期授業/Spring	119
日本文学専攻 (修士課程)-専門科目	[X0129]	沖縄文芸史 B [福 寛美]	秋学期授業/Fall	121
日本文学専攻 (修士課程)-専門科目	[X0130]	中国文学 A [甲斐 雄一]	春学期授業/Spring	122
日本文学専攻 (修士課程)-専門科目	[X0131]	中国文学 B [甲斐 雄一]	秋学期授業/Fall	123

日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0132】	日本文芸特講ⅠA(文芸と音楽)[スティーヴン・ネルソン]	春学期授業/Spring	124
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0133】	日本文芸特講ⅠB(文芸と音楽)[スティーヴン・ネルソン]	秋学期授業/Fall	125
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0134】	日本文芸特講ⅡA(アートマネジメント研究)[中沢 けい]	春学期授業/Spring	126
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0135】	日本文芸特講ⅡB(アートマネジメント研究)[中沢 けい]	秋学期授業/Fall	127
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0138】	女性文学A[藤木 直実]	春学期授業/Spring	128
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0139】	女性文学B[藤木 直実]	秋学期授業/Fall	130
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0140】	文芸と視聴覚芸術A[越川 道夫]	春学期授業/Spring	131
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0141】	文芸と視聴覚芸術B[越川 道夫]	秋学期授業/Fall	132
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0142】	学際的文学論A(文学の境界領域、文学と宗教等)[リネベ・アンドレ]	春学期授業/Spring	133
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0143】	学際的文学論B(文学の境界領域、文学と宗教等)[リネベ・アンドレ]	秋学期授業/Fall	135
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0144】	文学と風土A[庄司 達也]	春学期授業/Spring	136
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0145】	文学と風土B[庄司 達也]	秋学期授業/Fall	137
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0146】	能楽作品研究A[山中 玲子]	春学期授業/Spring	138
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0147】	能楽作品研究B[山中 玲子]	秋学期授業/Fall	139
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0148】	能楽資料研究A[宮本 圭造]	春学期授業/Spring	140
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0149】	能楽資料研究B[宮本 圭造]	秋学期授業/Fall	141
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0150】	現代能楽論[山中玲子・観世鍬之丞・観世喜正・中司由起子]	秋学期授業/Fall	142
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0151】	日本語・日本文学の基礎A[竹林 一志]	春学期授業/Spring	143
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0152】	日本語・日本文学の基礎B[竹林 一志]	秋学期授業/Fall	144
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0153】	表現と社会[内藤 裕之]	春学期授業/Spring	146
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0154】	編集理論[仲俣 暁生]	秋学期授業/Fall	147
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0155】	作家特殊研究A[温 又柔]	春学期授業/Spring	148
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0156】	作家特殊研究B[温 又柔]	秋学期授業/Fall	149
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0157】	文芸創作研究A[島田 雅彦]	春学期授業/Spring	150
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0158】	文芸創作研究B[島田 雅彦]	秋学期授業/Fall	151
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0159】	日本文芸特殊研究ⅠA[坂本 勝]	春学期授業/Spring	152
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0160】	日本文芸特殊研究ⅠB[坂本 勝]	秋学期授業/Fall	153
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0161】	日本文芸特殊研究ⅡA[小秋元 段]	春学期授業/Spring	154
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0162】	日本文芸特殊研究ⅡB[小秋元 段]	秋学期授業/Fall	155
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0163】	日本文芸特殊研究ⅢA[小林 ふみ子]	春学期授業/Spring	156
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0164】	日本文芸特殊研究ⅢB[小林 ふみ子]	秋学期授業/Fall	157
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0165】	日本文芸特殊研究ⅣA[スティーヴン・ネルソン]	春学期授業/Spring	158
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0166】	日本文芸特殊研究ⅣB[スティーヴン・ネルソン]	秋学期授業/Fall	159
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0167】	日本文学・国際日本学基礎演習[本塚 亘]	秋学期授業/Fall	161
日本文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0168】	日本文学・国際日本学論文作成基礎実習[金子 広幸]	秋学期授業/Fall	162
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0200】	米文学特殊研究第二(小説論)A[小島 尚人]	春学期授業/Spring	164
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0201】	米文学特殊研究第二(小説論)B[小島 尚人]	秋学期授業/Fall	165
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0202】	英米文学演習第二(American Fiction)A[宮川 雅]	春学期授業/Spring	167
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0203】	英米文学演習第二(American Fiction)B[宮川 雅]	秋学期授業/Fall	168
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0204】	英米文学演習第三(British Fiction)A[丹治 愛]	春学期授業/Spring	169
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0205】	英米文学演習第三(British Fiction)B[丹治 愛]	秋学期授業/Fall	170
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0206】	英語学演習(英語史・言語変遷理論)A[福元 広二]	春学期授業/Spring	171
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0207】	英語学演習(英語史・言語変遷理論)B[福元 広二]	秋学期授業/Fall	172
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0208】	言語学演習(応用言語学)A[川崎 貴子]	春学期授業/Spring	173
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0209】	言語学演習(応用言語学)B[川崎 貴子]	秋学期授業/Fall	174
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0211】	英語学特殊研究第二(英語リーディングの科学)A[濱田 彰]	春学期授業/Spring	175
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0212】	英語学特殊研究第二(英語リーディングの科学)B[濱田 彰]	秋学期授業/Fall	176
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0213】	言語学特殊研究(理論言語学・認知科学)A[石川 潔]	春学期授業/Spring	177
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0214】	言語学特殊研究(理論言語学・認知科学)B[石川 潔]	秋学期授業/Fall	178
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0215】	英語教育学研究A[印南 洋]	春学期授業/Spring	179
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0216】	英語教育学研究B[印南 洋]	秋学期授業/Fall	180

英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0217】英語発音法A [高橋 豊美] 春学期授業/Spring	182
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0218】英語発音法B [高橋 豊美] 秋学期授業/Fall	184
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0219】英語表現演習A [ニアル・ムルター] 春学期授業/Spring	186
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0220】英語表現演習B [ニアル・ムルター] 秋学期授業/Fall	187
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0221】文学方法論A [宮川 雅] 春学期授業/Spring	188
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0222】文学方法論B [宮川 雅] 秋学期授業/Fall	189
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0225】理論言語学・認知科学A [ブライアン・ウィスナー] 春学期授業/Spring	190
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0226】応用言語学・理論研究A [熊澤 孝昭] 春学期授業/Spring	191
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0227】応用言語学・理論研究B [熊澤 孝昭] 秋学期授業/Fall	192
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0228】言語科学方法論A [石川 潔] 春学期授業/Spring	193
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0229】言語科学方法論B [ブライアン・ウィスナー] 秋学期授業/Fall	194
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0232】比較文学研究A [日中 鎮朗] 春学期授業/Spring	195
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0233】比較文学研究B [日中 鎮朗] 秋学期授業/Fall	196
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0234】Academic English (Effective Writing) A [安部 義治] 春学期授業/Spring	198
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0235】Academic English (Effective Writing) B [安部 義治] 秋学期授業/Fall	199
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0236】Academic English (Oral Presentation) A [安部 義治] 春学期授業/Spring	200
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0237】Academic English (Oral Presentation) B [安部 義治] 秋学期授業/Fall	201
英文学専攻(博士後期課程)	【X0241】言語学特殊演習 I A [ブライアン・ウィスナー] 春学期授業/Spring	202
英文学専攻(博士後期課程)	【X0242】言語学特殊演習 I B [ブライアン・ウィスナー] 秋学期授業/Fall	203
英文学専攻(博士後期課程)	【X0243】文学方法論特講 A [宮川 雅] 春学期授業/Spring	204
英文学専攻(博士後期課程)	【X0244】文学方法論特講 B [宮川 雅] 秋学期授業/Fall	205
英文学専攻(博士後期課程)	【X0245】言語科学方法論特講 A [石川 潔] 春学期授業/Spring	206
英文学専攻(博士後期課程)	【X0246】言語科学方法論特講 B [ブライアン・ウィスナー] 秋学期授業/Fall	207
英文学専攻(博士後期課程)	【X0247】英米文学特講Ⅱ A [丹治 愛] 春学期授業/Spring	208
英文学専攻(博士後期課程)	【X0248】英米文学特講Ⅱ B [丹治 愛] 秋学期授業/Fall	209
英文学専攻(博士後期課程)	【X0249】英米文学特講Ⅳ A [宮川 雅] 春学期授業/Spring	210
英文学専攻(博士後期課程)	【X0250】英米文学特講Ⅳ B [宮川 雅] 秋学期授業/Fall	211
英文学専攻(博士後期課程)	【X0251】英米文学特講Ⅴ A [日中 鎮朗] 春学期授業/Spring	212
英文学専攻(博士後期課程)	【X0252】英米文学特講Ⅴ B [日中 鎮朗] 秋学期授業/Fall	213
英文学専攻(博士後期課程)	【X0253】言語科学特講Ⅰ A [椎名 美智] 春学期授業/Spring	215
英文学専攻(博士後期課程)	【X0254】言語科学特講Ⅰ B [椎名 美智] 秋学期授業/Fall	216
英文学専攻(博士後期課程)	【X0255】言語科学特講Ⅲ A [石川 潔] 春学期授業/Spring	217
英文学専攻(博士後期課程)	【X0256】言語科学特講Ⅲ B [石川 潔] 秋学期授業/Fall	218
英文学専攻(博士後期課程)	【X0257】言語科学特講Ⅴ A [ブライアン・ウィスナー] 春学期授業/Spring	219
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0260】英語学特殊研究第一(英文法・文体論・語用論) A [椎名 美智] 春学期授業/Spring	220
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0261】英語学特殊研究第一(英文法・文体論・語用論) B [椎名 美智] 秋学期授業/Fall	221
英文学専攻(博士後期課程)	【X0263】言語科学特講Ⅱ A [福元 広二] 春学期授業/Spring	222
英文学専攻(博士後期課程)	【X0264】言語科学特講Ⅱ B [福元 広二] 秋学期授業/Fall	223
英文学専攻(博士後期課程)	【X0265】英米文学特講Ⅰ A [小島 尚人] 春学期授業/Spring	224
英文学専攻(博士後期課程)	【X0266】英米文学特講Ⅰ B [小島 尚人] 秋学期授業/Fall	225
英文学専攻(博士後期課程)	【X0267】英米文学特殊演習Ⅰ A [丹治 愛] 春学期授業/Spring	227
英文学専攻(博士後期課程)	【X0268】英米文学特殊演習Ⅰ B [丹治 愛] 秋学期授業/Fall	228
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0269】英文学特殊研究第一(British Fiction) A [田中 裕希] 春学期授業/Spring	229
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0270】英文学特殊研究第一(British Fiction) B [田中 裕希] 秋学期授業/Fall	230
英文学専攻(博士後期課程)	【X0271】言語科学特講Ⅳ A [川崎 貴子] 春学期授業/Spring	231
英文学専攻(博士後期課程)	【X0272】言語科学特講Ⅳ B [川崎 貴子] 秋学期授業/Fall	232
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0275】米文学特殊研究第一(文学史) A [利根川 真紀] 春学期授業/Spring	233
英文学専攻(修士課程)-専門科目	【X0276】米文学特殊研究第一(文学史) B [利根川 真紀] 秋学期授業/Fall	234
英文学専攻(博士後期課程)	【X0277】英米文学特講Ⅲ A [利根川 真紀] 春学期授業/Spring	235
英文学専攻(博士後期課程)	【X0278】英米文学特講Ⅲ B [利根川 真紀] 秋学期授業/Fall	236
英文学専攻(博士後期課程)	【X0279】英米文学特講Ⅵ A [田中 裕希] 春学期授業/Spring	237
英文学専攻(博士後期課程)	【X0280】英米文学特講Ⅵ B [田中 裕希] 秋学期授業/Fall	238
史学専攻(修士課程)-専門科目	【X0300】日本史学研究Ⅰ [小倉 慈司] 春学期授業/Spring	239
史学専攻(修士課程)-専門科目	【X0301】日本史学研究Ⅱ [及川 亘] 春学期授業/Spring	240
史学専攻(修士課程)-専門科目	【X0302】日本史学原典研究Ⅰ [大塚 紀弘] 春学期授業/Spring	241

史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0303]	日本史学原典研究Ⅱ [大塚 紀弘]	秋学期授業/Fall	242
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0304]	日本古代史特殊研究Ⅰ [山口 英男]	春学期授業/Spring	243
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0305]	日本古代史特殊研究Ⅱ [山口 英男]	秋学期授業/Fall	244
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0306]	日本中世史特殊研究Ⅰ [末柄 豊]	春学期授業/Spring	245
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0307]	日本中世史特殊研究Ⅱ [末柄 豊]	秋学期授業/Fall	246
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0308]	日本中世史特殊研究Ⅲ [仁平 義孝]	春学期授業/Spring	247
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0309]	日本中世史特殊研究Ⅳ [仁平 義孝]	秋学期授業/Fall	248
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0310]	日本近世史特殊研究Ⅰ [落合 功]	春学期授業/Spring	249
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0311]	日本近世史特殊研究Ⅱ [落合 功]	秋学期授業/Fall	250
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0312]	日本近世史特殊研究Ⅲ [西沢 淳男]	春学期授業/Spring	251
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0313]	日本近世史特殊研究Ⅳ [西沢 淳男]	秋学期授業/Fall	252
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0314]	日本近代史特殊研究Ⅰ [内藤 一成]	春学期授業/Spring	253
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0315]	日本近代史特殊研究Ⅱ [内藤 一成]	秋学期授業/Fall	254
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0316]	日本近代史特殊研究Ⅲ [森田 貴子]	春学期授業/Spring	255
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0317]	日本近代史特殊研究Ⅳ [森田 貴子]	秋学期授業/Fall	256
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0318]	日本考古学特殊研究Ⅰ [阿部 朝衛]	春学期授業/Spring	257
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0319]	日本考古学特殊研究Ⅱ [阿部 朝衛]	秋学期授業/Fall	258
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0320]	日本考古学特殊研究Ⅲ [小倉 淳一]	春学期授業/Spring	259
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0321]	日本考古学特殊研究Ⅳ [小倉 淳一]	秋学期授業/Fall	260
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0322]	日本古代史演習Ⅰ [小口 雅史]	春学期授業/Spring	261
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0323]	日本古代史演習Ⅱ [小口 雅史]	秋学期授業/Fall	262
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0324]	日本古代史演習Ⅲ [小口 雅史]	春学期授業/Spring	263
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0325]	日本古代史演習Ⅳ [小口 雅史]	秋学期授業/Fall	264
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0326]	日本中世史演習Ⅰ [大塚 紀弘]	春学期授業/Spring	265
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0327]	日本中世史演習Ⅱ [大塚 紀弘]	秋学期授業/Fall	266
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0328]	日本近世史演習Ⅰ [松本 剣志郎]	春学期授業/Spring	267
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0329]	日本近世史演習Ⅱ [松本 剣志郎]	秋学期授業/Fall	268
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0330]	日本近代史演習Ⅰ [内藤 一成]	春学期授業/Spring	269
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0331]	日本近代史演習Ⅱ [内藤 一成]	秋学期授業/Fall	270
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0332]	日本考古学演習Ⅰ [小倉 淳一]	春学期授業/Spring	271
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0333]	日本考古学演習Ⅱ [小倉 淳一]	秋学期授業/Fall	272
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0334]	日本古文書学研究Ⅰ [大塚 紀弘]	春学期授業/Spring	274
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0335]	日本古文書学研究Ⅱ [大塚 紀弘]	秋学期授業/Fall	275
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0336]	日本古代史研究Ⅰ [春名 宏昭]	春学期授業/Spring	276
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0337]	日本古代史研究Ⅱ [春名 宏昭]	秋学期授業/Fall	277
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0338]	日本古代史料研究 [新井 重行]	春学期授業/Spring	278
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0339]	日本中世史研究 [及川 亘]	秋学期授業/Fall	279
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0340]	日本近世史科学研究Ⅰ [松本 剣志郎]	春学期授業/Spring	280
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0341]	日本近世史科学研究Ⅱ [松本 剣志郎]	秋学期授業/Fall	281
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0342]	日本近代史研究Ⅰ [内藤 一成]	春学期授業/Spring	282
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0343]	日本近代史研究Ⅱ [内藤 一成]	秋学期授業/Fall	283
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0344]	沖縄学入門Ⅰ [大里 知子]	春学期授業/Spring	285
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0345]	沖縄学入門Ⅱ [大里 知子]	秋学期授業/Fall	286
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0346]	東洋史学特殊研究Ⅰ [塩沢 裕仁]	春学期授業/Spring	287
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0347]	東洋史学特殊研究Ⅱ [塩沢 裕仁]	秋学期授業/Fall	288
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0348]	東洋史学特殊研究Ⅲ [大島 誠二]	春学期授業/Spring	289
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0349]	東洋史学特殊研究Ⅳ [大島 誠二]	秋学期授業/Fall	290
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0350]	東洋史学演習Ⅰ [齋藤 勝]	春学期授業/Spring	291
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0351]	東洋史学演習Ⅱ [齋藤 勝]	秋学期授業/Fall	292
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0352]	東洋史学演習Ⅲ [水上 和則]	春学期授業/Spring	293
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0353]	東洋史学演習Ⅳ [水上 和則]	秋学期授業/Fall	294
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0354]	東洋史学演習Ⅴ [久野 美樹]	春学期授業/Spring	295
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0355]	東洋史学演習Ⅵ [久野 美樹]	秋学期授業/Fall	296
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0356]	東洋古代史研究Ⅰ [齋藤 勝]	春学期授業/Spring	297
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0357]	東洋古代史研究Ⅱ [齋藤 勝]	秋学期授業/Fall	298
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0358]	東洋中世史研究Ⅰ [宇都宮 美生]	春学期授業/Spring	299
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0359]	東洋中世史研究Ⅱ [宇都宮 美生]	秋学期授業/Fall	300

史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0360]	東洋近代史研究Ⅰ	[芦沢 知絵]	春学期授業/Spring	301
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0361]	東洋近代史研究Ⅱ	[芦沢 知絵]	秋学期授業/Fall	302
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0362]	西洋史学特殊研究Ⅰ	[松原 俊文]	春学期授業/Spring	303
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0363]	西洋史学特殊研究Ⅱ	[松原 俊文]	秋学期授業/Fall	304
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0364]	西洋史学特殊研究Ⅲ	[篠原 琢]	春学期授業/Spring	305
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0365]	西洋史学特殊研究Ⅳ	[篠原 琢]	秋学期授業/Fall	307
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0366]	西洋史学特殊研究Ⅴ	[稲垣 春樹]	春学期授業/Spring	308
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0367]	西洋史学特殊研究Ⅵ	[稲垣 春樹]	秋学期授業/Fall	309
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0368]	西洋史学演習Ⅰ	[後藤 篤子]	春学期授業/Spring	310
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0369]	西洋史学演習Ⅱ	[後藤 篤子]	秋学期授業/Fall	311
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0370]	西洋史学演習Ⅲ	[高澤 紀恵]	春学期授業/Spring	312
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0371]	西洋史学演習Ⅳ	[高澤 紀恵]	秋学期授業/Fall	313
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0372]	西洋史学演習Ⅴ	[大澤 広晃]	春学期授業/Spring	314
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0373]	西洋史学演習Ⅵ	[大澤 広晃]	秋学期授業/Fall	315
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0374]	西洋古代史研究Ⅰ	[後藤 篤子]	春学期授業/Spring	316
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0375]	西洋古代史研究Ⅱ	[後藤 篤子]	秋学期授業/Fall	317
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0376]	西洋中世史研究Ⅰ	[大貫 俊夫]	春学期授業/Spring	318
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0377]	西洋中世史研究Ⅱ	[大貫 俊夫]	秋学期授業/Fall	319
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0378]	ヨーロッパ近現代政治史研究Ⅰ	[高澤 紀恵]	春学期授業/Spring	320
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0379]	ヨーロッパ近現代政治史研究Ⅱ	[高澤 紀恵]	秋学期授業/Fall	321
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0380]	アーカイブズ学Ⅰ	[宮間 純一]	春学期授業/Spring	322
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0381]	アーカイブズ学Ⅱ	[宮間 純一]	秋学期授業/Fall	323
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0382]	文書館管理研究Ⅰ	[宇都宮美生・青木直己・葦名ふみ・新井浩文・冨塚一彦・白石烈]	春学期授業/Spring	324
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0383]	文書館管理研究Ⅱ	[宇都宮美生・青木陸・赤松道子・長谷部圭彦・山田太造・渡辺浩一]	秋学期授業/Fall	325
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0384]	記録史料学研究Ⅰ	[小宮山 敏和]	春学期授業/Spring	326
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0385]	記録史料学演習Ⅰ	[小宮山 敏和]	秋学期授業/Fall	327
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0386]	記録史料学研究Ⅱ	[浅井 良亮]	春学期授業/Spring	328
史学専攻(修士課程)-専門科目	[X0387]	記録史料学演習Ⅱ	[浅井 良亮]	秋学期授業/Fall	329
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0400]	地形学研究Ⅰ	[前空 英明]	春学期授業/Spring	330
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0401]	地形学研究Ⅱ	[前空 英明]	秋学期授業/Fall	331
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0402]	地形学演習Ⅰ	[前空 英明]	春学期授業/Spring	332
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0403]	地形学演習Ⅱ	[前空 英明]	秋学期授業/Fall	333
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0404]	気候学研究Ⅰ	[山口 隆子]	春学期授業/Spring	334
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0405]	気候学研究Ⅱ	[山口 隆子]	秋学期授業/Fall	335
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0406]	気候学演習Ⅰ	[山口 隆子]	春学期授業/Spring	336
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0407]	気候学演習Ⅱ	[山口 隆子]	秋学期授業/Fall	337
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0408]	水文学研究Ⅰ	[小寺 浩二]	春学期授業/Spring	338
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0409]	水文学研究Ⅱ	[小寺 浩二]	秋学期授業/Fall	340
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0410]	水文学演習Ⅰ	[小寺 浩二]	春学期授業/Spring	341
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0411]	水文学演習Ⅱ	[小寺 浩二]	秋学期授業/Fall	342
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0412]	第四紀学研究Ⅰ	[藁谷 哲也]	春学期授業/Spring	343
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0413]	第四紀学研究Ⅱ	[藁谷 哲也]	秋学期授業/Fall	345
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0414]	自然地理学文献講読Ⅰ	[前空 英明]	春学期授業/Spring	346
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0415]	自然地理学文献講読Ⅱ	[前空 英明]	秋学期授業/Fall	347
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0416]	自然地理学特殊講義Ⅰ	[荻谷 愛彦]	春学期集中/Intensive(Spring)	348
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0417]	自然地理学特殊講義Ⅱ	[町田 功]	秋学期集中/Intensive(Fall)	350
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0418]	人文地理学研究Ⅰ	[伊藤 達也]	春学期授業/Spring	351
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0419]	人文地理学研究Ⅱ	[伊藤 達也]	秋学期授業/Fall	352
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0420]	人文地理学演習Ⅰ	[伊藤 達也]	春学期授業/Spring	353
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0421]	人文地理学演習Ⅱ	[伊藤 達也]	秋学期授業/Fall	354
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0422]	社会経済地理学研究Ⅰ	[小原 文明]	春学期授業/Spring	355
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0423]	社会経済地理学研究Ⅱ	[小原 文明]	秋学期授業/Fall	356
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0424]	社会経済地理学演習Ⅰ	[小原 文明]	春学期授業/Spring	357
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0425]	社会経済地理学演習Ⅱ	[小原 文明]	秋学期授業/Fall	358
地理学専攻(修士課程)-専門科目	[X0426]	文化地理学研究Ⅰ	[中俣 均]	春学期授業/Spring	359

地理学専攻(修士課程)-専門科目	【X0427】文化地理学研究Ⅱ	[中俣 均]	秋学期授業/Fall	360
地理学専攻(修士課程)-専門科目	【X0428】文化地理学演習Ⅰ	[中俣 均]	春学期授業/Spring	361
地理学専攻(修士課程)-専門科目	【X0429】文化地理学演習Ⅱ	[中俣 均]	秋学期授業/Fall	362
地理学専攻(修士課程)-専門科目	【X0430】空間構成論研究Ⅰ	[小田 宏信]	春学期授業/Spring	363
地理学専攻(修士課程)-専門科目	【X0431】空間構成論研究Ⅱ	[小田 宏信]	秋学期授業/Fall	365
地理学専攻(修士課程)-専門科目	【X0432】歴史地理学研究Ⅰ	[米家 志乃布]	春学期授業/Spring	366
地理学専攻(修士課程)-専門科目	【X0433】歴史地理学研究Ⅱ	[米家 志乃布]	秋学期授業/Fall	367
地理学専攻(修士課程)-専門科目	【X0434】歴史地理学演習Ⅰ	[米家 志乃布]	春学期授業/Spring	368
地理学専攻(修士課程)-専門科目	【X0435】歴史地理学演習Ⅱ	[米家 志乃布]	秋学期授業/Fall	369
地理学専攻(修士課程)-専門科目	【X0436】人文地理学文献講読Ⅰ	[米家 志乃布]	春学期授業/Spring	370
地理学専攻(修士課程)-専門科目	【X0437】人文地理学文献講読Ⅱ	[米家 志乃布]	秋学期授業/Fall	371
地理学専攻(修士課程)-専門科目	【X0438】地理情報システム研究Ⅰ	[中山 大地]	春学期授業/Spring	373
地理学専攻(修士課程)-専門科目	【X0439】地理情報システム研究Ⅱ	[中山 大地]	秋学期授業/Fall	374
地理学専攻(修士課程)-専門科目	【X0440】地理学現地研究Ⅰ	[専任教員が担当]	春学期集中/Intensive(Spring)	375
地理学専攻(修士課程)-専門科目	【X0441】地理学現地研究Ⅱ	[専任教員が担当]	秋学期集中/Intensive(Fall)	376
地理学専攻(博士後期課程)	【X0443】地理学特別演習Ⅰ	[前杵 英明]	春学期授業/Spring	377
地理学専攻(博士後期課程)	【X0444】地理学特別演習Ⅱ	[前杵 英明]	秋学期授業/Fall	378
地理学専攻(博士後期課程)	【X0445】地理学特別演習Ⅰ	[小原 丈明]	春学期授業/Spring	379
地理学専攻(博士後期課程)	【X0446】地理学特別演習Ⅱ	[小原 丈明]	秋学期授業/Fall	380
地理学専攻(博士後期課程)	【X0447】地理学特別演習Ⅰ	[伊藤 達也]	春学期授業/Spring	381
地理学専攻(博士後期課程)	【X0448】地理学特別演習Ⅱ	[伊藤 達也]	秋学期授業/Fall	382
地理学専攻(修士課程)-専門科目	【X0449】人文地理学特殊講義Ⅰ	[増淵 敏之]	春学期授業/Spring	383
地理学専攻(修士課程)-専門科目	【X0450】人文地理学特殊講義Ⅱ	[梶田 真]	春学期集中/Intensive(Spring)	384
地理学専攻(博士後期課程)	【X0451】自然地理学特別講義Ⅰ	[中山 大地]	春学期授業/Spring	385
地理学専攻(博士後期課程)	【X0452】自然地理学特別講義Ⅱ	[中山 大地]	秋学期授業/Fall	386
地理学専攻(修士課程)-専門科目	【X0454】地域社会論研究Ⅰ	[佐々木 達]	春学期授業/Spring	387
地理学専攻(修士課程)-専門科目	【X0455】地域社会論研究Ⅱ	[佐々木 達]	秋学期授業/Fall	388
地理学専攻(修士課程)-専門科目	【X0456】地域社会論演習Ⅰ	[佐々木 達]	春学期授業/Spring	389
地理学専攻(修士課程)-専門科目	【X0457】地域社会論演習Ⅱ	[佐々木 達]	秋学期授業/Fall	390
心理学専攻(修士課程)-必修科目	【X0500】心理学研究法演習Ⅰ	[竹島 康博]	春学期授業/Spring	391
心理学専攻(修士課程)-必修科目	【X0501】心理学研究法演習Ⅱ	[竹島 康博]	秋学期授業/Fall	392
心理学専攻(修士課程)-必修科目	【X0502】心理学研究法演習Ⅰ	[高橋 敏治]	春学期授業/Spring	393
心理学専攻(修士課程)-必修科目	【X0503】心理学研究法演習Ⅱ	[高橋 敏治]	秋学期授業/Fall	394
心理学専攻(修士課程)-必修科目	【X0504】心理学研究法演習Ⅰ	[渡辺 弥生]	春学期授業/Spring	395
心理学専攻(修士課程)-必修科目	【X0505】心理学研究法演習Ⅱ	[渡辺 弥生]	秋学期授業/Fall	397
心理学専攻(修士課程)-必修科目	【X0506】心理学研究法演習Ⅰ	[福田 由紀]	春学期授業/Spring	398
心理学専攻(修士課程)-必修科目	【X0507】心理学研究法演習Ⅱ	[福田 由紀]	秋学期授業/Fall	399
心理学専攻(修士課程)-必修科目	【X0508】心理学研究法演習Ⅰ	[島宗 理]	春学期授業/Spring	400
心理学専攻(修士課程)-必修科目	【X0509】心理学研究法演習Ⅱ	[島宗 理]	秋学期授業/Fall	402
心理学専攻(修士課程)-必修科目	【X0510】心理学研究法演習Ⅰ	[越智 啓太]	春学期授業/Spring	404
心理学専攻(修士課程)-必修科目	【X0511】心理学研究法演習Ⅱ	[越智 啓太]	秋学期授業/Fall	405
心理学専攻(修士課程)-必修科目	【X0512】心理学研究法演習Ⅰ	[藤田 哲也]	春学期授業/Spring	406
心理学専攻(修士課程)-必修科目	【X0513】心理学研究法演習Ⅱ	[藤田 哲也]	秋学期授業/Fall	407
心理学専攻(修士課程)-必修科目	【X0514】心理学研究法演習Ⅰ	[荒井 弘和]	春学期授業/Spring	409
心理学専攻(修士課程)-必修科目	【X0515】心理学研究法演習Ⅱ	[荒井 弘和]	秋学期授業/Fall	410
心理学専攻(修士課程)-必修科目	【X0516】心理学研究法演習Ⅰ	[林 容市]	春学期授業/Spring	412
心理学専攻(修士課程)-必修科目	【X0517】心理学研究法演習Ⅱ	[林 容市]	秋学期授業/Fall	413
心理学専攻(修士課程)-基礎科目	【X0518】学習心理特論	[藤田 哲也]	春学期授業/Spring	414
心理学専攻(修士課程)-基礎科目	【X0519】社会心理特論	[越智 啓太]	春学期授業/Spring	415
心理学専攻(修士課程)-展開科目	【X0520】読書心理特論	[平山 祐一郎]	秋学期授業/Fall	417
心理学専攻(修士課程)-展開科目	【X0521】教育心理特論	[平山 祐一郎]	秋学期授業/Fall	418
心理学専攻(修士課程)-展開科目	【X0522】犯罪心理特論	[越智 啓太]	秋学期授業/Fall	419
心理学専攻(修士課程)-展開科目	【X0523】知覚研究論演習	[竹島 康博]	秋学期授業/Fall	420
心理学専攻(修士課程)-展開科目	【X0524】学習指導特論	[藤田 哲也]	秋学期授業/Fall	421
心理学専攻(修士課程)-展開科目	【X0525】精神生理特論	[高橋 敏治]	秋学期授業/Fall	423
心理学専攻(修士課程)-展開科目	【X0526】臨床心理特論	[中村 玲子]	春学期授業/Spring	424
心理学専攻(修士課程)-基礎科目	【X0527】発達心理特論	[渡辺 弥生]	秋学期授業/Fall	425

心理学専攻(修士課程)-展開科目	【X0528】	障害児心理特論〔奥田 健次〕	秋学期集中/Intensive(Fall)	427
心理学専攻(修士課程)-展開科目	【X0529】	人格心理特論〔大森 美香〕	春学期授業/Spring	428
心理学専攻(修士課程)-基礎科目	【X0530】	言語心理特論〔福田 由紀〕	秋学期授業/Fall	430
心理学専攻(修士課程)-基礎科目	【X0531】	精神保健特論〔高橋 敏治〕	春学期授業/Spring	431
心理学専攻(修士課程)-展開科目	【X0532】	学校カウンセリング演習〔渡辺 弥生〕	春学期授業/Spring	433
心理学専攻(修士課程)-基礎科目	【X0533】	発達行動特論〔島宗 理〕	春学期授業/Spring	434
心理学専攻(修士課程)-展開科目	【X0534】	生徒指導特論〔小澤 真〕	秋学期授業/Fall	436
心理学専攻(修士課程)-展開科目	【X0535】	言語心理演習〔福田 由紀〕	春学期授業/Spring	437
心理学専攻(修士課程)-展開科目	【X0536】	認知学習過程演習〔藤田 哲也〕	春学期授業/Spring	438
心理学専攻(修士課程)-展開科目	【X0537】	心理教育アセスメント特論〔杉山 崇〕	秋学期授業/Fall	440
心理学専攻(修士課程)-展開科目	【X0538】	心理教育アセスメント演習〔熊 仁美〕	春学期集中/Intensive(Spring)	441
心理学専攻(修士課程)-基礎科目	【X0539】	スポーツ心理特論〔江田 香織〕	春学期授業/Spring	442
心理学専攻(修士課程)-基礎科目	【X0540】	健康心理特論〔林 容市〕	秋学期授業/Fall	443
心理学専攻(修士課程)-基礎科目	【X0541】	心理研究法特論〔竹島 康博〕	春学期授業/Spring	444
心理学専攻(修士課程)-基礎科目	【X0542】	応用心理統計Ⅰ〔山際 勇一郎〕	春学期授業/Spring	445
心理学専攻(修士課程)-基礎科目	【X0543】	応用心理統計Ⅱ〔山際 勇一郎〕	秋学期授業/Fall	446
心理学専攻(博士後期課程)	【X0545】	心理学特殊研究Ⅰ〔島宗 理〕	春学期授業/Spring	447
心理学専攻(博士後期課程)	【X0546】	心理学特殊研究Ⅱ〔島宗 理〕	秋学期授業/Fall	449
心理学専攻(博士後期課程)	【X0547】	心理学特殊研究Ⅰ〔藤田 哲也〕	春学期授業/Spring	450
心理学専攻(博士後期課程)	【X0548】	心理学特殊研究Ⅱ〔藤田 哲也〕	秋学期授業/Fall	452
心理学専攻(博士後期課程)	【X0549】	心理学特殊研究Ⅰ〔高橋 敏治〕	春学期授業/Spring	453
心理学専攻(博士後期課程)	【X0550】	心理学特殊研究Ⅱ〔高橋 敏治〕	秋学期授業/Fall	455
心理学専攻(博士後期課程)	【X0551】	心理学特殊研究Ⅰ〔越智 啓太〕	春学期授業/Spring	457
心理学専攻(博士後期課程)	【X0552】	心理学特殊研究Ⅱ〔越智 啓太〕	秋学期授業/Fall	458
心理学専攻(博士後期課程)	【X0555】	心理学特殊研究Ⅰ〔荒井 弘和〕	春学期授業/Spring	459
心理学専攻(博士後期課程)	【X0556】	心理学特殊研究Ⅱ〔荒井 弘和〕	秋学期授業/Fall	460
心理学専攻(博士後期課程)	【X0557】	心理学特殊研究Ⅰ〔渡辺 弥生〕	春学期授業/Spring	461
心理学専攻(博士後期課程)	【X0558】	心理学特殊研究Ⅱ〔渡辺 弥生〕	秋学期授業/Fall	463
心理学専攻(博士後期課程)	【X0559】	大学教員心理学基礎講座〔藤田 哲也〕	春学期授業/Spring	464
心理学専攻(博士後期課程)	【X0560】	発達心理学特殊講義〔渡辺 弥生〕	秋学期授業/Fall	465
心理学専攻(博士後期課程)	【X0561】	犯罪心理学特殊講義〔越智 啓太〕	春学期授業/Spring	466
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0600】	日本文学特殊演習A〔加藤 昌嘉〕	春学期授業/Spring	467
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0601】	日本文学特殊演習B〔加藤 昌嘉〕	秋学期授業/Fall	468
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0604】	日本文学特殊演習A〔伊海 孝充〕	春学期授業/Spring	469
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0605】	日本文学特殊演習B〔伊海 孝充〕	秋学期授業/Fall	470
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0606】	日本文学特殊演習A〔スティーヴン・ネルソン〕	春学期授業/Spring	471
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0607】	日本文学特殊演習B〔スティーヴン・ネルソン〕	秋学期授業/Fall	473
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0608】	日本文学特殊演習A〔中丸 宣明〕	春学期授業/Spring	474
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0609】	日本文学特殊演習B〔中丸 宣明〕	秋学期授業/Fall	475
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0610】	日本文学特殊演習A〔藤村 耕治〕	春学期授業/Spring	476
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0611】	日本文学特殊演習B〔藤村 耕治〕	秋学期授業/Fall	477
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0612】	日本文学特殊演習A〔山中 玲子〕	春学期授業/Spring	478
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0613】	日本文学特殊演習B〔山中 玲子〕	秋学期授業/Fall	479
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0614】	日本文学特殊演習A〔小林 ふみ子〕	春学期授業/Spring	480
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0615】	日本文学特殊演習B〔小林 ふみ子〕	秋学期授業/Fall	481
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0616】	日本文学特殊演習A〔宮本 圭造〕	春学期授業/Spring	482
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0617】	日本文学特殊演習B〔宮本 圭造〕	秋学期授業/Fall	483
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0618】	日本文学特殊演習A〔田中 和生〕	春学期授業/Spring	484
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0619】	日本文学特殊演習B〔田中 和生〕	秋学期授業/Fall	485
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0620】	日本文学特殊演習A〔尾谷 昌則〕	春学期授業/Spring	486
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0621】	日本文学特殊演習B〔尾谷 昌則〕	秋学期授業/Fall	487
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0622】	日本文芸学特殊研究A〔一柳 廣孝〕	春学期授業/Spring	488
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0623】	日本文芸学特殊研究B〔一柳 廣孝〕	秋学期授業/Fall	489
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0624】	日本文芸批評史特殊研究A〔田中 和生〕	春学期授業/Spring	490
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0625】	日本文芸批評史特殊研究B〔田中 和生〕	秋学期授業/Fall	491
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0626】	日本古代文芸特殊研究A〔坂本 勝〕	春学期授業/Spring	493
日本文学専攻(博士後期課程)	【X0627】	日本古代文芸特殊研究B〔坂本 勝〕	秋学期授業/Fall	494

日本文学専攻 (博士後期課程) 【X0628】 日本中世文芸特殊研究A [阿部 真弓] 春学期授業/Spring	495
日本文学専攻 (博士後期課程) 【X0629】 日本中世文芸特殊研究B [阿部 真弓] 秋学期授業/Fall	496
日本文学専攻 (博士後期課程) 【X0630】 日本近世文芸特殊研究A [小林 ふみ子] 春学期授業/Spring	497
日本文学専攻 (博士後期課程) 【X0631】 日本近世文芸特殊研究B [小林 ふみ子] 秋学期授業/Fall	498
日本文学専攻 (博士後期課程) 【X0632】 日本近代文芸特殊研究A [中丸 宣明] 春学期授業/Spring	499
日本文学専攻 (博士後期課程) 【X0633】 日本近代文芸特殊研究B [中丸 宣明] 秋学期授業/Fall	500
日本文学専攻 (博士後期課程) 【X0634】 日本言語学特殊研究A [間宮 厚司] 春学期授業/Spring	501
日本文学専攻 (博士後期課程) 【X0635】 日本言語学特殊研究B [間宮 厚司] 秋学期授業/Fall	502
日本文学専攻 (博士後期課程) 【X0636】 能楽作品特殊研究A [山中 玲子] 春学期授業/Spring	503
日本文学専攻 (博士後期課程) 【X0637】 能楽作品特殊研究B [山中 玲子] 秋学期授業/Fall	504
日本文学専攻 (博士後期課程) 【X0638】 能楽資料特殊研究A [宮本 圭造] 春学期授業/Spring	505
日本文学専攻 (博士後期課程) 【X0639】 能楽資料特殊研究B [宮本 圭造] 秋学期授業/Fall	506
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1000】 国際日本学演習Ⅰ [君嶋 泰明] 春学期授業/Spring	507
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1001】 国際日本学演習Ⅱ [君嶋 泰明] 秋学期授業/Fall	508
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1002】 国際日本学演習Ⅰ [西塚 俊太] 春学期授業/Spring	509
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1003】 国際日本学演習Ⅱ [西塚 俊太] 秋学期授業/Fall	510
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1004】 国際日本学演習Ⅰ [伊海 孝充] 春学期授業/Spring	512
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1005】 国際日本学演習Ⅱ [伊海 孝充] 秋学期授業/Fall	513
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1006】 国際日本学演習Ⅰ [甲斐 雄一] 春学期授業/Spring	514
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1007】 国際日本学演習Ⅱ [甲斐 雄一] 秋学期授業/Fall	515
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1008】 国際日本学演習Ⅰ [王 安] 春学期授業/Spring	516
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1009】 国際日本学演習Ⅱ [王 安] 秋学期授業/Fall	517
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1010】 国際日本学演習Ⅰ [尾谷 昌則] 春学期授業/Spring	519
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1011】 国際日本学演習Ⅱ [尾谷 昌則] 秋学期授業/Fall	520
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1012】 国際日本学演習Ⅰ [小秋元 段] 春学期授業/Spring	521
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1013】 国際日本学演習Ⅱ [小秋元 段] 秋学期授業/Fall	522
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1014】 国際日本学演習Ⅰ [小林 ふみ子] 春学期授業/Spring	523
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1015】 国際日本学演習Ⅱ [小林 ふみ子] 秋学期授業/Fall	524
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1016】 国際日本学演習Ⅰ [坂本 勝] 春学期授業/Spring	525
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1017】 国際日本学演習Ⅱ [坂本 勝] 秋学期授業/Fall	526
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1018】 国際日本学演習Ⅰ [スティーヴン・ネルソン] 春学期授業/Spring	527
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1019】 国際日本学演習Ⅱ [スティーヴン・ネルソン] 秋学期授業/Fall	528
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1020】 国際日本学演習Ⅰ [間宮 厚司] 春学期授業/Spring	530
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1021】 国際日本学演習Ⅱ [間宮 厚司] 秋学期授業/Fall	531
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1022】 国際日本学演習Ⅰ [川崎 貴子] 春学期授業/Spring	532
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1023】 国際日本学演習Ⅱ [川崎 貴子] 秋学期授業/Fall	533
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1024】 国際日本学演習Ⅰ [椎名 美智] 春学期授業/Spring	534
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1025】 国際日本学演習Ⅱ [椎名 美智] 秋学期授業/Fall	535
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1026】 国際日本学演習Ⅰ [小口 雅史] 春学期授業/Spring	536
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1027】 国際日本学演習Ⅱ [小口 雅史] 秋学期授業/Fall	537
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1028】 国際日本学演習Ⅰ [松本 剣志郎] 春学期授業/Spring	538
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1029】 国際日本学演習Ⅱ [松本 剣志郎] 秋学期授業/Fall	539
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1030】 国際日本学演習Ⅰ [伊藤 達也] 春学期授業/Spring	539
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1031】 国際日本学演習Ⅱ [伊藤 達也] 秋学期授業/Fall	540
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1032】 国際日本学演習Ⅰ [小原 丈明] 春学期授業/Spring	541
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1033】 国際日本学演習Ⅱ [小原 丈明] 秋学期授業/Fall	542
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1034】 国際日本学演習Ⅰ [米家 志乃布] 春学期授業/Spring	543
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1035】 国際日本学演習Ⅱ [米家 志乃布] 秋学期授業/Fall	544
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1036】 国際日本学演習Ⅰ [島田 雅彦] 春学期授業/Spring	545
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1037】 国際日本学演習Ⅱ [島田 雅彦] 秋学期授業/Fall	546
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1038】 国際日本学演習Ⅰ [謝 荔] 春学期授業/Spring	547
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1039】 国際日本学演習Ⅱ [謝 荔] 秋学期授業/Fall	548
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1040】 国際日本学演習Ⅰ [高田 圭] 春学期授業/Spring	549
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1041】 国際日本学演習Ⅱ [高田 圭] 秋学期授業/Fall	551
国際日本学インスティテュート (修士課程)-必修科目 【X1042】 国際日本学合同演習Ⅰ [椎名 美智] 春学期授業/Spring	552

国際日本学インスティテュート(修士課程)-必修科目	【X1043】 国際日本学合同演習Ⅱ [椎名 美智] 秋学期授業/Fall	553
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1044】 世界の日本論と日本学Ⅰ [リネベ・アンドレ] 春学期授業/Spring	554
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1045】 世界の日本論と日本学Ⅱ [リネベ・アンドレ] 秋学期授業/Fall	556
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1046】 国際日本学論文作成実習(英語)Ⅰ [ステイーヴン・ネルソン] 春学期授業/Spring	557
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1047】 国際日本学論文作成実習(英語)Ⅱ [ステイーヴン・ネルソン] 秋学期授業/Fall	559
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1048】 国際日本学論文作成実習(英語)Ⅰ [ヤナ・ウルバノヴァー] 春学期授業/Spring	560
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1049】 国際日本学論文作成実習(英語)Ⅱ [ヤナ・ウルバノヴァー] 秋学期授業/Fall	562
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1050】 日本語論文作成実習Ⅰ [山中 玲子] 春学期授業/Spring	563
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1051】 日本語論文作成実習Ⅱ [山中 玲子] 秋学期授業/Fall	564
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1052】 日本語論文作成基礎AⅠ [幸田 佳子] 春学期授業/Spring	565
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1053】 日本語論文作成基礎AⅡ [中島 久朱] 春学期授業/Spring	566
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1054】 日本語論文作成基礎AⅢ [幸田 佳子] 秋学期授業/Fall	567
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1055】 日本語論文作成基礎AⅣ [中島 久朱] 秋学期授業/Fall	568
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1056】 日本語論文作成基礎BⅠ [幸田 佳子] 春学期授業/Spring	569
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1057】 日本語論文作成基礎BⅡ [中島 久朱] 春学期授業/Spring	570
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1058】 日本語論文作成基礎BⅢ [幸田 佳子] 秋学期授業/Fall	571
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1059】 日本語論文作成基礎BⅣ [中島 久朱] 秋学期授業/Fall	572
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1060】 日本語の性格Ⅰ [滝浦 真人] 春学期授業/Spring	573
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1061】 日本語の性格Ⅱ [滝浦 真人] 秋学期授業/Fall	574
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1062】 伝統文化と民衆世界Ⅰ [ヤナ・ウルバノヴァー] 春学期授業/Spring	575
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1063】 伝統文化と民衆世界Ⅱ [横山 泰子] 秋学期授業/Fall	577
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1064】 日本の思想・西欧の思想Ⅰ [高田 圭] 春学期授業/Spring	578
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1065】 日本の思想・西欧の思想Ⅱ [高田 圭] 秋学期授業/Fall	579
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1066】 史料から読む琉球とアジアⅠ [得能 壽美] 春学期授業/Spring	580
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1067】 史料から読む琉球とアジアⅡ [得能 壽美] 秋学期授業/Fall	581
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1068】 戦後沖縄と対外関係Ⅰ [明田川 融] 春学期授業/Spring	582
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1069】 戦後沖縄と対外関係Ⅱ [明田川 融] 秋学期授業/Fall	584
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1070】 仏教思想と仏教美術Ⅰ [高橋 悠介] 春学期授業/Spring	585
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1071】 仏教思想と仏教美術Ⅱ [高橋 悠介] 秋学期授業/Fall	586
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1072】 データ分析法Ⅰ [田中 邦佳] 春学期授業/Spring	587
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1073】 データ分析法Ⅱ [田中 邦佳] 秋学期授業/Fall	588
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1074】 サブカルチャー論Ⅰ [倉本 さおり] 春学期授業/Spring	589
国際日本学インスティテュート(修士課程)-基幹科目	【X1075】 サブカルチャー論Ⅱ [倉本 さおり] 秋学期授業/Fall	591
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	【X1076】 日本文学・国際日本学基礎演習 [本塚 亘] 秋学期授業/Fall	592
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	【X1077】 日本文学・国際日本学論文作成基礎実習 [金子 広幸] 秋学期授業/Fall	593
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	【X1078】 近代の文芸批評Ⅰ [田中 和生] 春学期授業/Spring	595
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	【X1079】 近代の文芸批評Ⅱ [田中 和生] 秋学期授業/Fall	597
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	【X1080】 神話と歌Ⅰ [坂本 勝] 春学期授業/Spring	598
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	【X1081】 神話と歌Ⅱ [坂本 勝] 秋学期授業/Fall	599
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	【X1082】 平安時代の物語Ⅰ [加藤 昌嘉] 春学期授業/Spring	600
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	【X1083】 平安時代の物語Ⅱ [加藤 昌嘉] 秋学期授業/Fall	601
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	【X1084】 書誌学と文献学Ⅰ [阿部 真弓] 春学期授業/Spring	602
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	【X1085】 書誌学と文献学Ⅱ [阿部 真弓] 秋学期授業/Fall	603
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	【X1086】 能と楽劇Ⅰ [山中 玲子] 春学期授業/Spring	604
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	【X1087】 能と楽劇Ⅱ [山中 玲子] 秋学期授業/Fall	605
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	【X1088】 江戸の文芸と文化Ⅰ [小林 ふみ子] 春学期授業/Spring	606

国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1089】 江戸の文芸と文化Ⅱ [小林 ふみ子] 秋学期授業/Fall	607
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1090】 江戸の思想史Ⅰ [高木 元] 春学期授業/Spring	608
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1091】 江戸の思想史Ⅱ [高木 元] 秋学期授業/Fall	609
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1092】 日本語の歴史と現在Ⅰ [竹林 一志] 春学期授業/Spring	610
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1093】 日本語の歴史と現在Ⅱ [竹林 一志] 秋学期授業/Fall	611
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1094】 現代日本語のしくみⅠ [古牧 久典] 春学期授業/Spring	613
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1095】 現代日本語のしくみⅡ [古牧 久典] 秋学期授業/Fall	614
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1096】 沖縄文芸史Ⅰ [福 寛美] 春学期授業/Spring	615
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1097】 沖縄文芸史Ⅱ [福 寛美] 秋学期授業/Fall	616
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1098】 女性文学Ⅰ [藤木 直実] 春学期授業/Spring	618
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1099】 女性文学Ⅱ [藤木 直実] 秋学期授業/Fall	619
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1100】 文学と映画Ⅰ [越川 道夫] 春学期授業/Spring	621
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1101】 文学と映画Ⅱ [越川 道夫] 秋学期授業/Fall	622
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1102】 文学と風土Ⅰ [庄司 達也] 春学期授業/Spring	623
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1103】 文学と風土Ⅱ [庄司 達也] 秋学期授業/Fall	624
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1104】 表現と社会 [内藤 裕之] 春学期授業/Spring	625
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1105】 編集理論 [仲俣 暁生] 秋学期授業/Fall	626
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1106】 英語発音法Ⅰ [高橋 豊美] 春学期授業/Spring	627
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1107】 英語発音法Ⅱ [高橋 豊美] 秋学期授業/Fall	629
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1108】 行動科学方法論Ⅰ [石川 潔] 春学期授業/Spring	631
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1109】 西欧比較文学Ⅰ [日中 鎮朗] 春学期授業/Spring	632
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1110】 西欧比較文学Ⅱ [日中 鎮朗] 秋学期授業/Fall	633
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1111】 西欧の思想Ⅰ [山下 真] 春学期授業/Spring	635
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1112】 西欧の思想Ⅱ [板橋 勇仁] 秋学期集中/Intensive(Fall)	636
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1113】 東北アジアの文化伝播Ⅰ－１ [阿部 朝衛] 春学期授業/Spring	637
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1114】 東北アジアの文化伝播Ⅰ－２ [阿部 朝衛] 秋学期授業/Fall	638
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1115】 東北アジアの文化伝播Ⅱ－１ [小倉 淳一] 春学期授業/Spring	639
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1116】 東北アジアの文化伝播Ⅱ－２ [小倉 淳一] 秋学期授業/Fall	640
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1117】 東北アジアの文化伝播Ⅲ－１ [小倉 淳一] 春学期授業/Spring	641
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1118】 東北アジアの文化伝播Ⅲ－２ [小倉 淳一] 秋学期授業/Fall	642
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1119】 東アジアの律令文化Ⅰ－１ [小口 雅史] 春学期授業/Spring	644
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1120】 東アジアの律令文化Ⅰ－２ [小口 雅史] 秋学期授業/Fall	645
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1121】 東アジアの律令文化Ⅱ－１ [小口 雅史] 春学期授業/Spring	646
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1122】 東アジアの律令文化Ⅱ－２ [小口 雅史] 秋学期授業/Fall	647
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1123】 王権の政治文化Ⅰ [春名 宏昭] 春学期授業/Spring	648
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1124】 王権の政治文化Ⅱ [春名 宏昭] 秋学期授業/Fall	649
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1125】 天皇制と政務・儀礼Ⅰ [山口 英男] 春学期授業/Spring	650
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1126】 天皇制と政務・儀礼Ⅱ [山口 英男] 秋学期授業/Fall	651
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1127】 日本の歴史と宗教 [及川 亘] 春学期授業/Spring	652
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1128】 古文書から読む江戸社会・入門編Ⅰ [松本 剣志郎]	
	春学期授業/Spring	653
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1129】 古文書から読む江戸社会・入門編Ⅱ [松本 剣志郎]	
	秋学期授業/Fall	654
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1130】 江戸の地方文化Ⅰ [西沢 淳男] 春学期授業/Spring	655
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1131】 江戸の地方文化Ⅱ [西沢 淳男] 秋学期授業/Fall	656
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1132】 日本文化と西洋文化Ⅰ [森田 貴子] 春学期授業/Spring	657
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1133】 日本文化と西洋文化Ⅱ [森田 貴子] 秋学期授業/Fall	658
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1134】 日本の近代と国際社会Ⅰ [内藤 一成] 春学期授業/Spring	659
国際日本学インスティテュート (修士課程)-関連科目	【X1135】 日本の近代と国際社会Ⅱ [内藤 一成] 秋学期授業/Fall	661

国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	[X1136]	沖縄学入門Ⅰ [大里 知子]	春学期授業/Spring	662
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	[X1137]	沖縄学入門Ⅱ [大里 知子]	秋学期授業/Fall	663
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	[X1138]	アーカイブズ学Ⅰ [宮間 純一]	春学期授業/Spring	664
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	[X1139]	アーカイブズ学Ⅱ [宮間 純一]	秋学期授業/Fall	665
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	[X1140]	文書館管理研究Ⅰ [宇都宮美生・青木直己・葦名ふみ・新井浩文・富塚一彦・白石烈]	春学期授業/Spring	666
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	[X1141]	文書館管理研究Ⅱ [宇都宮美生・青木睦・赤松道子・長谷部圭彦・山田太造・渡辺浩一]	秋学期授業/Fall	667
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	[X1142]	記録史料学研究Ⅰ [小宮山 敏和]	春学期授業/Spring	668
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	[X1143]	記録史料学演習Ⅰ [小宮山 敏和]	秋学期授業/Fall	669
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	[X1144]	記録史料学研究Ⅱ [浅井 良亮]	春学期授業/Spring	670
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	[X1145]	記録史料学演習Ⅱ [浅井 良亮]	秋学期授業/Fall	671
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	[X1146]	日本の環境論Ⅰ [伊藤 達也]	春学期授業/Spring	672
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	[X1147]	日本の環境論Ⅱ [伊藤 達也]	秋学期授業/Fall	673
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	[X1148]	日本の都市と産業Ⅰ [小原 丈明]	春学期授業/Spring	674
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	[X1149]	日本の都市と産業Ⅱ [小原 丈明]	秋学期授業/Fall	675
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	[X1150]	地図の文化誌Ⅰ [米家 志乃布]	春学期授業/Spring	676
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	[X1151]	地図の文化誌Ⅱ [米家 志乃布]	秋学期授業/Fall	677
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1153]	国際日本学研究Ⅰ [スティーヴン・ネルソン]	春学期授業/Spring	678
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1154]	国際日本学研究Ⅱ [スティーヴン・ネルソン]	秋学期授業/Fall	680
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1155]	国際日本学研究Ⅰ [川崎 貴子]	春学期授業/Spring	681
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1156]	国際日本学研究Ⅱ [川崎 貴子]	秋学期授業/Fall	682
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1157]	国際日本学研究Ⅰ [伊藤 達也]	春学期授業/Spring	683
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1158]	国際日本学研究Ⅱ [伊藤 達也]	秋学期授業/Fall	684
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1159]	国際日本学研究Ⅰ [小口 雅史]	春学期授業/Spring	685
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1160]	国際日本学研究Ⅱ [小口 雅史]	秋学期授業/Fall	686
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1161]	国際日本学研究Ⅰ [小林 ふみ子]	春学期授業/Spring	687
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1162]	国際日本学研究Ⅱ [小林 ふみ子]	秋学期授業/Fall	688
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1163]	国際日本学研究Ⅰ [小秋元 段]	春学期授業/Spring	689
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1164]	国際日本学研究Ⅱ [小秋元 段]	秋学期授業/Fall	690
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1167]	国際日本学研究Ⅰ [尾谷 昌則]	春学期授業/Spring	691
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1168]	国際日本学研究Ⅱ [尾谷 昌則]	秋学期授業/Fall	692
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1169]	国際日本学特殊講義BⅠ [滝浦 真人]	春学期授業/Spring	693
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1170]	国際日本学特殊講義BⅡ [滝浦 真人]	秋学期授業/Fall	694
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1171]	国際日本学特殊講義CⅠ [ヤナ・ウルバノヴァー]	春学期授業/Spring	695
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1172]	国際日本学特殊講義CⅡ [横山 泰子]	秋学期授業/Fall	696
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1173]	国際日本学特殊講義DⅠ [高田 圭]	春学期授業/Spring	697
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1174]	国際日本学特殊講義DⅡ [高田 圭]	秋学期授業/Fall	698
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1175]	国際日本学特殊講義EⅠ [得能 壽美]	春学期授業/Spring	700
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1176]	国際日本学特殊講義EⅡ [得能 壽美]	秋学期授業/Fall	701
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1177]	国際日本学特殊講義FⅠ [明田川 融]	春学期授業/Spring	702
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1178]	国際日本学特殊講義FⅡ [明田川 融]	秋学期授業/Fall	703
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1179]	国際日本学特殊講義GⅠ [高橋 悠介]	春学期授業/Spring	705
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1180]	国際日本学特殊講義GⅡ [高橋 悠介]	秋学期授業/Fall	706
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1181]	国際日本学特殊講義JⅠ [田中 邦佳]	春学期授業/Spring	707
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1182]	国際日本学特殊講義KⅠ [田中 邦佳]	秋学期授業/Fall	708
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1183]	国際日本学特殊講義LⅠ [倉本 さおり]	春学期授業/Spring	709
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1184]	国際日本学特殊講義LⅡ [倉本 さおり]	秋学期授業/Fall	710
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1187]	国際日本学研究Ⅰ [島田 雅彦]	春学期授業/Spring	712
国際日本学インスティテュート(博士後期課程)	[X1188]	国際日本学研究Ⅱ [島田 雅彦]	秋学期授業/Fall	713
国際日本学インスティテュート(修士課程)-必修科目	[X1189]	国際日本学演習Ⅰ [水野 和夫]	春学期授業/Spring	714
国際日本学インスティテュート(修士課程)-必修科目	[X1190]	国際日本学演習Ⅱ [水野 和夫]	秋学期授業/Fall	715
国際日本学インスティテュート(修士課程)-必修科目	[X1191]	国際日本学演習Ⅰ [佐々木 達]	春学期授業/Spring	716
国際日本学インスティテュート(修士課程)-必修科目	[X1192]	国際日本学演習Ⅱ [佐々木 達]	秋学期授業/Fall	717
国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	[X1193]	日本の農業と農村Ⅰ [佐々木 達]	春学期授業/Spring	718

国際日本学インスティテュート(修士課程)-関連科目	[X1194]	日本の農業と農村Ⅱ [佐々木 達]	秋学期授業/Fall	719
国際日本学インスティテュート(修士課程)-必修科目	[X1195]	国際日本学演習Ⅰ [福元 広二]	春学期授業/Spring	720
国際日本学インスティテュート(修士課程)-必修科目	[X1196]	国際日本学演習Ⅱ [福元 広二]	秋学期授業/Fall	721
哲学専攻(博士後期課程)	[X1197]	国際日本学研究Ⅰ [君嶋 泰明]	春学期授業/Spring	722
哲学専攻(博士後期課程)	[X1198]	国際日本学研究Ⅱ [君嶋 泰明]	秋学期授業/Fall	723
史学専攻(博士後期課程)	[X1300]	史学特殊演習AⅠ [小口 雅史]	春学期授業/Spring	724
史学専攻(博士後期課程)	[X1301]	史学特殊演習AⅡ [小口 雅史]	秋学期授業/Fall	725
史学専攻(博士後期課程)	[X1302]	史学特殊演習AⅠ [大塚 紀弘]	春学期授業/Spring	726
史学専攻(博士後期課程)	[X1303]	史学特殊演習AⅡ [大塚 紀弘]	秋学期授業/Fall	726
史学専攻(博士後期課程)	[X1304]	史学特殊演習AⅠ [松本 剣志郎]	春学期授業/Spring	727
史学専攻(博士後期課程)	[X1305]	史学特殊演習AⅡ [松本 剣志郎]	秋学期授業/Fall	728
史学専攻(博士後期課程)	[X1306]	史学特殊演習AⅠ [内藤 一成]	春学期授業/Spring	729
史学専攻(博士後期課程)	[X1307]	史学特殊演習AⅡ [内藤 一成]	秋学期授業/Fall	730
史学専攻(博士後期課程)	[X1308]	史学特殊演習AⅠ [後藤 篤子]	春学期授業/Spring	731
史学専攻(博士後期課程)	[X1309]	史学特殊演習AⅡ [後藤 篤子]	秋学期授業/Fall	732
史学専攻(博士後期課程)	[X1310]	史学特殊演習AⅠ [小倉 淳一]	春学期授業/Spring	733
史学専攻(博士後期課程)	[X1311]	史学特殊演習AⅡ [小倉 淳一]	秋学期授業/Fall	734
史学専攻(博士後期課程)	[X1312]	日本史学特殊講義AⅠ [阿部 朝衛]	春学期授業/Spring	735
史学専攻(博士後期課程)	[X1313]	日本史学特殊講義AⅡ [阿部 朝衛]	秋学期授業/Fall	736
史学専攻(博士後期課程)	[X1314]	日本史学特殊講義BⅠ [山口 英男]	春学期授業/Spring	737
史学専攻(博士後期課程)	[X1315]	日本史学特殊講義BⅡ [山口 英男]	秋学期授業/Fall	738
史学専攻(博士後期課程)	[X1316]	日本史学特殊講義CⅠ [末柄 豊]	春学期授業/Spring	739
史学専攻(博士後期課程)	[X1317]	日本史学特殊講義CⅡ [末柄 豊]	秋学期授業/Fall	740
史学専攻(博士後期課程)	[X1318]	日本史学特殊講義DⅠ [落合 功]	春学期授業/Spring	741
史学専攻(博士後期課程)	[X1319]	日本史学特殊講義DⅡ [落合 功]	秋学期授業/Fall	742
史学専攻(博士後期課程)	[X1320]	日本史学特殊講義EⅠ [森田 貴子]	春学期授業/Spring	743
史学専攻(博士後期課程)	[X1321]	日本史学特殊講義EⅡ [森田 貴子]	秋学期授業/Fall	744
史学専攻(博士後期課程)	[X1322]	東洋史学特殊講義AⅠ [大島 誠二]	春学期授業/Spring	745
史学専攻(博士後期課程)	[X1323]	東洋史学特殊講義AⅡ [大島 誠二]	秋学期授業/Fall	746
史学専攻(博士後期課程)	[X1324]	東洋史学特殊講義BⅠ [水上 和則]	春学期授業/Spring	747
史学専攻(博士後期課程)	[X1325]	東洋史学特殊講義BⅡ [水上 和則]	秋学期授業/Fall	748
史学専攻(博士後期課程)	[X1326]	西洋史学特殊講義AⅠ [松原 俊文]	春学期授業/Spring	749
史学専攻(博士後期課程)	[X1327]	西洋史学特殊講義AⅡ [松原 俊文]	秋学期授業/Fall	750
史学専攻(博士後期課程)	[X1328]	西洋史学特殊講義BⅠ [篠原 琢]	春学期授業/Spring	751
史学専攻(博士後期課程)	[X1329]	西洋史学特殊講義BⅡ [篠原 琢]	秋学期授業/Fall	753
史学専攻(博士後期課程)	[X1330]	西洋史学特殊講義CⅠ [稲垣 春樹]	春学期授業/Spring	754
史学専攻(博士後期課程)	[X1331]	西洋史学特殊講義CⅡ [稲垣 春樹]	秋学期授業/Fall	755
史学専攻(博士後期課程)	[X1332]	史学特殊演習BⅠ [大塚 紀弘]	春学期授業/Spring	756
史学専攻(博士後期課程)	[X1333]	史学特殊演習BⅡ [大塚 紀弘]	秋学期授業/Fall	757
史学専攻(博士後期課程)	[X1334]	史学特殊演習BⅠ [小口 雅史]	春学期授業/Spring	757
史学専攻(博士後期課程)	[X1335]	史学特殊演習BⅡ [小口 雅史]	秋学期授業/Fall	758
史学専攻(博士後期課程)	[X1336]	史学特殊演習BⅠ [小倉 淳一]	春学期授業/Spring	759
史学専攻(博士後期課程)	[X1337]	史学特殊演習BⅡ [小倉 淳一]	秋学期授業/Fall	760
史学専攻(博士後期課程)	[X1338]	史学特殊演習BⅠ [後藤 篤子]	春学期授業/Spring	761
史学専攻(博士後期課程)	[X1339]	史学特殊演習BⅡ [後藤 篤子]	秋学期授業/Fall	762
史学専攻(博士後期課程)	[X1340]	史学特殊演習BⅠ [内藤 一成]	春学期授業/Spring	763
史学専攻(博士後期課程)	[X1341]	史学特殊演習BⅡ [内藤 一成]	秋学期授業/Fall	764
史学専攻(博士後期課程)	[X1342]	史学特殊演習BⅠ [松本 剣志郎]	春学期授業/Spring	765
史学専攻(博士後期課程)	[X1343]	史学特殊演習BⅡ [松本 剣志郎]	秋学期授業/Fall	766
史学専攻(博士後期課程)	[X1345]	史学特殊演習AⅠ [塩沢 裕仁]	春学期授業/Spring	767
史学専攻(博士後期課程)	[X1346]	史学特殊演習AⅡ [塩沢 裕仁]	秋学期授業/Fall	768
史学専攻(博士後期課程)	[X1347]	史学特殊演習BⅠ [塩沢 裕仁]	春学期授業/Spring	769
史学専攻(博士後期課程)	[X1348]	史学特殊演習BⅡ [塩沢 裕仁]	秋学期授業/Fall	770

PHL600B1

言語分析哲学研究Ⅰ－Ⅰ

中釜 浩一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「自己」はデカルト以来、最も困難な哲学的問題の一つである。この授業では、①なぜ「自己」が哲学の問題になるのか、②現代哲学はどのような方法によって「自己」を論じるのか、③「自己」の正体に関して、どのような議論に基づき、どのような主張がなされているか、を代表的論者の論文を読解しながら検討する。

【到達目標】

「自己」に関する現代哲学の主要な立場、その論拠と問題点の正しい理解を獲得し、「自己」の正体に関する各自の立場を確立するための基礎を形成する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

教員が配布する代表的論者の論文に関して、担当者がレジュメを作成し、それに基づいて全員でディスカッションを行う

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	教員による現代の心の哲学に関する一般的説明。
第2回	Quassim Cassam The Embodied Self	pp.139-142
第3回	Quassim Cassam The Embodied Self	pp.142-145
第4回	Quassim Cassam The Embodied Self	pp.145-147
第5回	Quassim Cassam The Embodied Self	pp.148-150
第6回	Quassim Cassam The Embodied Self	pp.151-152
第7回	Quassim Cassam The Embodied Self	pp.152-154
第8回	Galen Strawson The Minimal Subject	pp.253-255
第9回	Galen Strawson The Minimal Subject	pp.256-259
第10回	Galen Strawson The Minimal Subject	pp.260-263
第11回	Galen Strawson The Minimal Subject	pp.264-267
第12回	Galen Strawson The Minimal Subject	pp.266-271
第13回	Galen Strawson The Minimal Subject	pp.271-277
第14回	まとめ	まとめとディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。発表担当者は、担当箇所のレジュメを作成し、事前に配布する。全員がテキストをあらかじめ精読したうえでレジュメを確認し、疑問点、反論等を整理しておく。

【テキスト（教科書）】

The Oxford Handbook of The Self, Oxford 2011

授業時にコピーを配布する。

【参考書】

Descartes, Perfit, Davidson, Shoemaker, Evans, 等の諸著作。

【成績評価の方法と基準】

レジュメの作成 60%

ディスカッションでの貢献 40%

【学生の意見等からの気づき】

読解とディスカッションによる従来の方法が有効である。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

科学哲学、言語哲学、心の哲学、イギリス経験論

<研究テーマ>

パースペクティヴィズムの形而上学的可能性

<主要研究業績>

著書 「できごとと対象—ホワイトヘッド科学哲学の中心概念」（哲学論叢）、「時間空間論における規約主義」（哲学研究）、「説明と形而上学的コミットメント」（科学哲学）、「指標語を巡る哲学的諸問題Ⅰ、Ⅱ」「マスターアークメントとパースペクティヴィズム」（法政大学文学部紀要）、「自然観の相克」（岩波新・哲学講座）「科学論の帰趨」（ミネルヴァ書房『科学技術のゆくえ』）、「ホワイトヘッド」（中公新社「哲学の歴史」8）等、翻訳：ヘンリー・ゲアラック「ニュートンと分析的方法」（西洋思想大事典、平凡社）、ジョージ・レーゲン「エントロピー過程と経済法則」（共訳、みすず書房）、デイヴィッド・ヒューム「人間本性論」（共訳、法政大学出版局）

【Outline (in English)】

Course outline: This course deals with the Problems of the self approached by modern philosophers of language.

Learning Objectives: To acquire a deeper understanding of self and to

learn more about methods of analytical philosophy.

Learning activities outside of classroom: After each class meeting,

students are expected to spend four hours to understand the content of the day and to prepare the next class meeting.

Grading Criteria: preparing resumes: 60%, contribution to the class discussion: 40%

PHL600B1

言語分析哲学研究Ⅰ－2

中釜 浩一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「自己」はデカルト以来、最も困難な哲学的問題の一つである。この授業では、①なぜ「自己」が哲学の問題になるのか、②現代哲学はどのような方法によって「自己」を論じるのか、③「自己」の正体に関して、どのような議論に基づき、どのような主張がなされているか、を代表的論者の論文を読解しながら検討する。

【到達目標】

「自己」に関する現代哲学の主要な立場、その論拠と問題点の正しい理解を獲得し、「心」の正体に関する各自の立場を確立するための基礎を形成する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

教員が配布する代表的論者の論文に関して、担当者がレジュメを作成し、それに基づいて全員でディスカッションを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	教員による一般的解説
第2回	Sydney Shoemaker On What we are	pp.352-354
第3回	Sydney Shoemaker On What we are	pp.354-356
第4回	Sydney Shoemaker On What we are	pp.357-359
第5回	Sydney Shoemaker On What we are	pp.359-363
第6回	Sydney Shoemaker On What we are	pp.363-367
第7回	Sydney Shoemaker On What we are	pp.367-370
第8回	John Perry On knowing one's self	pp.372-375
第9回	John Perry On knowing one's self	pp.375-378
第10回	John Perry On knowing one's self	pp.378-383
第11回	John Perry On knowing one's self	pp.383-386
第12回	John Perry On knowing one's self	pp.386-388
第13回	John Perry On knowing one's self	pp.388-392
第14回	まとめ	全員によるディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。発表担当者は、担当箇所のレジュメを作成し、事前に配布する。全員がテキストをあらかじめ精読したうえでレジュメを確認し、疑問点、反論等を整理しておく。

【テキスト（教科書）】

The Oxford Handbook of Self, Oxford Univ. Press 2011
授業時にコピーを配布する。

【参考書】

Descartes, Parfit, Davidson, Evans 等の諸著作。

【成績評価の方法と基準】

レジュメの作成 60%
ディスカッションでの貢献 40%

【学生の意見等からの気づき】

テキスト精読とディスカッションによる従来の方法が有効である。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞
科学哲学、言語哲学、心の哲学、イギリス経験論
＜研究テーマ＞
パースペクティヴィズムと現代形而上学
＜主要研究業績＞

著書 「できごとと対象—ホワイトヘッド科学哲学の中心概念」（哲学論叢）、「時間空間論における規約主義」（哲学研究）、「説明と形而上学的コミットメント」（科学哲学）、「指標語を巡る哲学的諸問題Ⅰ、Ⅱ」「マスターアークメントとパースペクティヴィズム」（法政大学文学部紀要）、「自然観の相克」（岩波新・哲学講座）「科学論の帰趨」（ミネルヴァ書房『科学技術のゆくえ』）、「ホワイトヘッド」（中公新社「哲学の歴史」8）等、翻訳：ヘンリー・ゲアラック「ニュートンと分析的方法」（西洋思想大事典、平凡社）、ジョージ・レーゲン「エントロピー過程と経済法則」（共訳、みすず書房）、デイヴィッド・ヒューム「人間本性論」（共訳、法政大学出版局）

【Outline (in English)】

Course outline: This course deals with the Problems of the self approached by modern philosophers of language.
Learning Objectives: To acquire a deeper understanding of self and to learn more about methods of analytical philosophy.
Learning activities outside of classroom: After each class meeting, students are expected to spend four hours to understand the content of the day and to prepare the next class meeting.
Grading Criteria: preparing resumes: 60%, contribution to the class discussion: 40%

PHL500B1

言語分析哲学研究Ⅱ－１

中釜 浩一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代プラグマティズムを代表する哲学者 R.Rorty の議論と、様々な論者たちのそれに対する反論を検討することで、現代の哲学的問題への多角的視点を獲得する。

【到達目標】

哲学の諸問題に取り組むための現代プラグマティズムの方法と議論に習熟する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

教員が配布する代表的論者の論文に関して、担当者がレジュメを作成し、それに基づいて全員でディスカッションを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	教員による一般的説明
第 2 回	Davidson, Truth Rehabilitated	pp.65-66
第 3 回	Davidson, Truth Rehabilitated	pp.67-69
第 4 回	Davidson, Truth Rehabilitated	pp.70-73
第 5 回	Rorty's Response	pp.74-75
第 6 回	Rorty's Response	pp.76-79
第 7 回	Putnam Richard Rorty on Reality and Justification	pp.81-83
第 8 回	Putnam Richard Rorty on Reality and Justification	pp.84-87
第 9 回	Rorty's Response	pp.87-88
第 10 回	Rorty's Response	pp.88-90
第 11 回	Dennett The Case for Rorts	pp.91-93
第 12 回	Dennett The Case for Rorts	pp.94-97
第 13 回	Dennett The Case for Rorts	pp.98-101
第 14 回	Rorty's Response	pp.101-107

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。発表担当者は、担当箇所のレジュメを作成し、事前に配布する。他の者はテキストをあらかじめ精読したうえでレジュメを確認し、疑問点、反論等を整理しておく。

【テキスト（教科書）】

Rorty and His Critics, Blackwell, 2000

【参考書】

Quin, Davidson, Putnam, Dennett, 等の諸著作。

【成績評価の方法と基準】

レジュメの作成 60%

ディスカッションでの貢献 40%

【学生の意見等からの気づき】

テキスト精読とディスカッションによる従来の方法が有効である。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

科学哲学、言語哲学、心の哲学、イギリス経験論

<研究テーマ>

パースペクティヴィズムと現代形而上学

<主要研究業績>

著訳書 「できごとと対象—ホワイトヘッド科学哲学の中心概念」（哲学論叢）、「時間空間論における規約主義」（哲学研究）、「説明と形而上学的コミットメント」（科学哲学）、「指標語を巡る哲学的諸問題Ⅰ、Ⅱ」「マスターアーギュメントとパースペクティヴィズム」（法政大学文学部紀要）、「自然観の相克」（岩波新・哲学講座）「科学論の帰趨」（ミネルヴァ書房『科学技術のゆくえ』）、「ホワイトヘッド」（中公新社「哲学の歴史」8）等、翻訳：ヘンリー・ゲアラック「ニュートンと分析的方法」（西洋思想大事典、平凡社）、ジョージ・レーゲン「エントロピー過程と経済法則」（共訳、みすず書房）、デヴィッド・ヒューム「人間本性論」（共訳、法政大学出版局）

【Outline (in English)】

Course outline: This course deals with problems of modern pragmatism through reading R. Rorty's and his Critics' Papers
Learning Objectives: To acquire a deeper understanding of modern pragmatism.

Learning activities outside of classroom: After each class meeting,

students are expected to spend four hours to understand the content of the day and to prepare the next class meeting.

Grading Criteria: preparing resumes: 60%, contribution to the class discussion: 40%

PHL500B1

言語分析哲学研究Ⅱ－2

中釜 浩一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

H.Putnam の 'Realism with a Human Face' 所収の何篇かの論文を精読し、プラグマティズムと現代哲学に関する一般的理解と得る。

【到達目標】

哲学の諸問題に取り組むための現代プラグマティズムの方法と議論に習熟する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

H.Putnam の 'Realism with a Human Face' をテキストとして、担当者がレジメを作成し、それに基づいて全員でディスカッションを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	教員による一般的説明
第2回	A Defence of Internal Realism	pp.30-32
第3回	A Defence of Internal Realism	pp.32-33
第4回	A Defence of Internal Realism	pp.33-35
第5回	A Defence of Internal Realism	pp.37-40
第6回	A Defence of Internal Realism	pp.40-42
第7回	William James's Ideas	pp.217-219
第8回	William James's Ideas	pp.219-221
第9回	William James's Ideas	pp.222-224
第10回	William James's Ideas	pp.224-226
第11回	William James's Ideas	pp.226-228
第12回	William James's Ideas	pp.228-230
第13回	William James's Ideas	pp.230-231
第14回	まとめ	教員によるまとめと全員によるディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表担当者は、担当箇所のレジメを作成し、事前に配布する。他の者はテキストをあらかじめ精読したうえでレジメを確認し、疑問点、反論等を整理しておく。

【テキスト（教科書）】

H.Putnam, Realism with a Human Face, Harvard Univ. Press, 1990,

【参考書】

Quine, Davidson, Rorty 等の諸著作。

【成績評価の方法と基準】

レジメの作成 60%

ディスカッションでの貢献 40%

【学生の意見等からの気づき】

テキスト精読とディスカッションによる従来の方法が有効である。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

科学哲学、言語哲学、心の哲学、イギリス経験論

＜研究テーマ＞

パースペクティヴィズムと現代形而上学

＜主要研究業績＞

著訳書 「できごとと対象—ホワイトヘッド科学哲学の中心概念」（哲学論叢）、「時間空間論における規約主義」（哲学研究）、「説明と形而上学的コミットメント」（科学哲学）、「指標語を巡る哲学的諸問題Ⅰ、Ⅱ」「マスターアークメントとパースペクティヴィズム」（法政大学文学部紀要）、「自然観の相克」（岩波新・哲学講座）「科学論の帰趨」（ミネルヴァ書房『科学技術のゆくえ』）、「ホワイトヘッド」（中公新社「哲学の歴史」8）等、翻訳：ヘンリー・ゲアラック「ニュートンと分析的方法」（西洋思想大事典、平凡社）、ジョージ・レーゲン「エントロピー過程と経済法則」（共訳、みすず書房）、デイヴィッド・ヒューム「人間本性論」（共訳、法政大学出版局）

【Outline (in English)】

Course outline: This course deals with problems of modern pragmatism through reading some of H. Putnam's papers

Learning Objectives: To acquire a deeper understanding of modern pragmatism.

Learning activities outside of classroom: After each class meeting,

students are expected to spend four hours to understand the content of the day and to prepare the next class meeting.

Grading Criteria: preparing resumes: 60%, contribution to the class discussion: 40%

PHL600B1

形而上学研究Ⅰ－1

齋藤 元紀

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、マルティン・ハイデガー著『存在と時間』（M. Heidegger, *Sein und Zeit*）の読解をととして、学生が批判的な哲学的思考力を獲得することを目指す。

【到達目標】

この授業では、ハイデガーの著書『存在と時間』の精密な読解と討論をととして、学生が（１）哲学的文章を原文で読み解き、（２）彼の存在論についての理解を深め、さらに（３）自ら哲学的な批判的考察ができるようになることを目的とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

ハイデガーの著書『存在と時間』は、従来のさまざまな哲学思想を引き受けながら、西洋哲学に対する抜本的批判を企てた書物である。そこには、古代ギリシア哲学にはじまり、中世神学、近世・近代哲学、そして現象学や解釈学をはじめとする当時の同時代の哲学思想との対決が織り込まれている。またその対決をととして展開された彼の思想は、哲学のみならず、現代の諸学問に今なお甚大な影響を与えている。この授業では、ドイツ語原文の精確な読解をととして、上述のような多様な位相にわたるハイデガーの存在論的思考の本質を見極めてゆくことに努める。読解にあたっては、のちのハイデガー自身の『存在と時間』に対する自己批判の言及もあわせて検討し、中後期思想への展開の意図についても考察を行う。理解を深めるため、ディスカッション、関連文献の読解、研究報告等も適宜織り交ぜる。ドイツ語以外の言語（日・英・仏）による参加にも配慮する。春学期は、『存在と時間』第一部第二編第 59 節から読み始める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション①	授業の進め方の説明・ハイデガー哲学の全体像
第 2 回	イントロダクション②	『存在と時間』の全体像
第 3 回	イントロダクション③	『存在と時間』の基本思想
第 4 回	第 59 節の読解①	良心の実存論的解釈と通俗的良心解釈との連関
第 5 回	第 59 節の読解②	通俗的良心解釈に対する反駁
第 6 回	第 59 節の読解③	通俗的良心解釈の基礎としての良心の根源的意味
第 7 回	第 60 節の読解①	覚悟性
第 8 回	第 60 節の読解②	状況
第 9 回	第 60 節の読解③	良心において証される本来的存在可能の実存論的構造
第 10 回	第 61 節の読解	現存在の本来的な全体存在の確定から時間性の現象的打開への方法的進路の素描
第 11 回	第 62 節の読解①	先駆的覚悟性
第 12 回	第 62 節の読解②	先駆的覚悟性としての現存在の実存的可能＝本来的な全体存在可能
第 13 回	第 63 節の読解①	関心の存在意味の解釈のために得られた解釈学的状況
第 14 回	第 63 節の読解②	実存論的分析論全般の方法的性格

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前にテキストを精読したうえで参加すること。また事典や関連文献を参考に、主要な概念や術語の意義についても確認しておくこと。

【テキスト（教科書）】

Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, Max Niemeyer Verlag, Tübingen 1927.
Martin Heidegger, *Sein und Zeit*(Gesamtausgabe Bd. 2), Vittorio Klostermann, 1977.

Martin Heidegger, *Zu eigenen Veröffentlichungen*(Gesamtausgabe Bd. 82), Vittorio Klostermann, 2018.

原佑・渡邊二郎訳『存在と時間Ⅱ』中公クラシックス、2003 年。

細谷貞夫訳『存在と時間』ちくま学芸文庫、1994 年。

熊野純彦訳『存在と時間』岩波文庫、2013 年。

高田珠樹訳『存在と時間』作品社、2013 年。

【参考書】

①木田元『存在と時間の構築』岩波現代文庫、2000 年。

②細川亮一『ハイデガー哲学の射程』創文社、2000 年。

③齋藤元紀『存在の解釈学——ハイデガー『存在と時間』の構造・転回・反復』法政大学出版局、2012 年。

④齋藤元紀（共編著）『始まりのハイデガー』見洋書房、2015 年。

⑤渡邊二郎編『ハイデガー『存在と時間』入門』講談社学術文庫、2011 年。

⑥A. Luckner, *Martin Heidegger: » Sein und Zeit «*, 2. Aufl., Schöningh 2001.

⑦M. King(Author), J. Llewelyn(ed.), *A Guide to Heidegger's Being and Time*, SUNY Press, 2001.

⑧T. Rentsch(Hg.), *Sein und Zeit*, 2. Aufl., Akademie Verlag 2008.

⑨M. A. Wrathall(ed.), *The Cambridge Companion to Heidegger's 'Being and Time'*, Cambridge University Press, 2013.

⑩M. Heinz und T. Bender (Hg.), *Sein und Zeit neu verhandelt*, Felix Meiner Verlag, 2019.

⑪ハイデガー・フォーラム編『ハイデガー事典』昭和堂、2021 年。

【成績評価の方法と基準】

上記「到達目標」で示した達成度を授業中の参加の度合（35 %）、貢献度（35 %）に加え、レポート（30 %）を考慮し、総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】

厳密な読解と徹底した議論をととして哲学的思考を深める講義は例年好評を得ている。本年も基本的にその形式を踏襲し、ハイデガー存在論のさらなる理解を進めてゆく予定。積極的な授業参加を期待する。

【その他の重要事項】

ドイツ語辞書（紙・電子媒体いずれでもよい）を持参のこと。ただし初級用ではなく、「独和大辞典」（小学館）クラスが望ましい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

哲学・倫理学・思想史。

<研究テーマ>

ハイデガーをはじめとする現代哲学・現象学・解釈学・実存哲学の研究。環境思想や身体論等の応用哲学・応用倫理学研究。哲学対話をはじめとする哲学教育研究。

<主要研究業績>

『ハイデガー事典』（共編、昭和堂、2021 年）『「存在と時間」——ハイデガーの衝撃』（『ドイツ文化事典』丸善出版、2020 年）、『存在論の神話』（『現代思想』青土社、2018 年 2 月臨時増刊号）、「気遣いえぬもの」（ハイデガー研究会編『Zuspiel』第 1 号、2017 年）『終わりになきデリダ——ハイデガー、サルトル、レヴィナスとの対話』（共編著、法政大学出版局、2016 年）、『21 世紀の哲学をひらく——現代思想の最前線への招待』（共編著、ミネルヴァ書房、2016 年）、『ハイデガー哲学は反ユダヤ主義か——黒ノートをめぐる討議』（共編著、水声社、2015 年）、『現代日本の四つの危機』（編著、講談社選書メチエ、2015 年）、『始まりのハイデガー』（共編著、見洋書房、2015 年）、『ハイデガー読本』（共著、法政大学出版局、2015 年）『存在の解釈学——ハイデガー『存在と時間』の構造・転回・反復』（法政大学出版局、2012 年）、『科学と技術への問い——ハイデッガー研究会第三論集』（共編著、理想社、2012 年）、『概説 現代の哲学・思想』（共編著、ミネルヴァ書房、2012 年）、『ヨーロッパ現代哲学への招待』（共編著、梓出版社、2009 年）、『ハイデッガー『存在と時間』の現在 刊行 80 周年記念論集』（共著、南窓社、2007 年）、『ハイデッガーと思索の将来——哲学への〈寄与〉』（共著、理想社、2006 年）。リチャード・J・バーンスタイン『暴力——手すりなき思考』（監訳、法政大学出版局、2020 年）、ユルゲン・トラバント『人文主義の言語思想——フンボルトの伝統』（監訳、岩波書店、2020 年）、ギュンター・フィガール『問いと答え——ハイデガーについて』（監訳、法政大学出版局、2017 年）、トム・ロックモア『カントの航跡のなかで——二十世紀の哲学』（共訳、法政大学出版局、2008 年）。

【Outline (in English)】

In this course, students will read Martin Heidegger's "Being and Time". On top of deepening their understandings of this book, this course aims for students to acquire the ability to better think in a critical and philosophical manner. Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter from the text. Your required study time is at least four hour for each class meeting. Final grade will be calculated according to the following process each reading report on each class meeting (35%), in-class contribution(35%), and term-end report (30%).

PHL600B1

形而上学研究Ⅰ－2

齋藤 元紀

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】
この授業では、マルティン・ハイデガー著『存在と時間』（M. Heidegger, *Sein und Zeit*）の読解をととして、学生が批判的な哲学的思考力を獲得することを目指す。

【到達目標】
この授業では、ハイデガーの著書『存在と時間』の精密な読解とそれをめぐる討論をととして、学生が（１）哲学的文章を原文で読み解き、（２）彼の存在論・現象学・解釈学についての理解を深め、（３）西洋哲学史上のさまざまな知識に習熟するとともに、（４）自ら哲学的な批判的考察ができるようになることを目的とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】
ハイデガーの著書『存在と時間』は、従来のさまざまな哲学思想を引き受けながら、西洋哲学に対する抜本的批判を企てた書物である。そこには、古代ギリシア哲学にはじまり、中世神学、近世・近代哲学、そして現象学や解釈学をはじめとする当時の同時代の哲学思想との対決が織り込まれている。またその対決をととして展開された彼の思想は、哲学のみならず、現代の諸学問に今なお甚大な影響を与えている。この授業では、ドイツ語原文の正確な読解をととして、上述のような多様な位相にわたるハイデガーの存在論的思考の本質を見極めてゆくことに努める。読解にあたっては、のちのハイデガー自身の『存在と時間』に対する自己批判の言及もあわせて検討し、中後期思想への展開の意図についても考察を行う。理解を深めるため、ディスカッション、関連文献の読解、研究報告等も適宜織り交ぜる。ドイツ語以外の言語（日・英・仏）による参加にも配慮する。秋学期は、春学期に続き『存在と時間』第一部第二編第 60 節から読み進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション①	授業の進め方の説明・ハイデガー哲学の概要
第 2 回	イントロダクション②	『存在と時間』の全体像
第 3 回	イントロダクション③	『存在と時間』の基本思想
第 4 回	第 64 節の読解①	関心と自己性
第 5 回	第 64 節の読解②	自我と自己性
第 6 回	第 64 節の読解③	常性性と自立性
第 7 回	第 65 節の読解①	関心全体の統一態を可能とするもの
第 8 回	第 65 節の読解②	本来的な関心の意味としての時間性
第 9 回	第 65 節の読解③	関心の根源的統一態としての時間性
第 10 回	第 65 節の読解④	脱自態としての時間性
第 11 回	第 65 節の読解⑤	根源的本来の時間性における将来の優位
第 12 回	第 66 節の読解①	日常性と歴史性
第 13 回	第 66 節の読解②	内時性
第 14 回	まとめ	『存在と時間』の制約と可能性

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
事前にテキストを精読したうえで参加すること。また事典や関連文献を参考に、主要な概念や術語の意義についても確認しておくこと。

【テキスト（教科書）】
Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, Max Niemeyer Verlag, Tübingen 1927.
Martin Heidegger, *Sein und Zeit*(Gesamtausgabe Bd. 2), Vittorio Klostermann, 1977.
Martin Heidegger, *Zu eigenen Veröffentlichungen*(Gesamtausgabe Bd. 82), Vittorio Klostermann, 2018.
原佑・渡邊二郎訳『存在と時間Ⅱ』中公クラシックス、2003 年。
細谷貞夫訳『存在と時間』ちくま学芸文庫、1994 年。
熊野純彦訳『存在と時間』岩波文庫、2013 年。
高田珠樹訳『存在と時間』作品社、2013 年。

【参考書】
①木田元『存在と時間の構築』岩波現代文庫、2000 年。
②細川亮一『ハイデガー哲学の射程』創文社、2000 年。
③齋藤元紀『存在の解釈学——ハイデガー『存在と時間』の構造・転回・反復』法政大学出版局、2012 年。
④齋藤元紀（共編著）『始まりのハイデガー』晃洋書房、2015 年。
⑤渡邊二郎編『ハイデガー『存在と時間』入門』講談社学術文庫、2011 年。
⑥A. Luckner, *Martin Heidegger: » Sein und Zeit «*, 2. Aufl., Schöningh 2001.

⑦ M. King(Author), J. Llewelyn(ed.), *A Guide to Heidegger's Being and Time*, SUNY Press, 2001.
⑧ T. Rentsch(Hg.), *Sein und Zeit*, 2. Aufl., Akademie Verlag 2008.
⑨ M. A. Wrathall(ed.), *The Cambridge Companion to Heidegger's 'Being and Time'*, Cambridge University Press, 2013.
⑩ M. Heinz und T. Bender (Hg.), *Sein und Zeit neu verhandelt*, Felix Meiner Verlag, 2019.
⑪ハイデガー・フォーラム編『ハイデガー事典』昭和堂、2021 年。

【成績評価の方法と基準】
上記「到達目標」で示した達成度を授業中の参加の度合（35 %）、貢献度（35 %）に加え、レポート（30 %）を考慮し、総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】
厳密な読解と徹底した議論をととして哲学的思考を深める講義は例年好評を得ている。本年も基本的にその形式を踏襲し、ハイデガー存在論のさらなる理解を進めてゆく予定。積極的な授業参加を期待する。

【その他の重要事項】
ドイツ語辞書（紙・電子媒体いずれでもよい）を持参のこと。ただし初級用ではなく、『独和大辞典』（小学館）クラスが望ましい。

【担当教員の専門分野等】
＜専門領域＞
哲学・倫理学・思想史。
＜研究テーマ＞
ハイデガーをはじめとする現代哲学・現象学・解釈学・実存哲学の研究。環境思想や身体論等の応用哲学・応用倫理学研究。哲学対話をはじめとする哲学教育研究。
＜主要研究業績＞
「『存在と時間』——ハイデガーの衝撃」（『ドイツ文化事典』丸善出版、2020 年）、「存在論の神話」（『現代思想』青土社、2018 年 2 月臨時増刊号）、「気遣いえぬもの」（ハイデガー研究会編『Zuspiel』第 1 号、2017 年）『終わりにきデリダ——ハイデガー、サルトル、レヴィナスとの対話』（共編著、法政大学出版局、2016 年）、「21 世紀の哲学をひらく——現代思想の最前線への招待」（共編著、ミネルヴァ書房、2016 年）、「ハイデガー哲学は反ユダヤ主義か——黒ノートをめぐる討議」（共編著、水声社、2015 年）、「現代日本の四つの危機」（編著、講談社選書メチエ、2015 年）、「始まりのハイデガー」（共編著、晃洋書房、2015 年）、「ハイデガー読本」（共著、法政大学出版局、2015 年）『存在の解釈学——ハイデガー『存在と時間』の構造・転回・反復』（法政大学出版局、2012 年）、「科学と技術への問い——ハイデッガー研究会第三論集」（共編著、理想社、2012 年）、「概説 現代の哲学・思想」（共編著、ミネルヴァ書房、2012 年）、「ヨーロッパ現代哲学への招待」（共編著、梓出版社、2009 年）、「ハイデッガー『存在と時間』の現在 刊行 80 周年記念論集」（共著、南窓社、2007 年）、「ハイデッガーと思索の将来——哲学への〈寄与〉」（共著、理想社、2006 年）。リチャード・J・バーンスタイン『暴力——手すりなき思考』（監訳、法政大学出版局、2020 年）、ユルゲン・トラバント『人文主義の言語思想——フンボルトの伝統』（監訳、岩波書店、2020 年）、ギンター・フィガール『問いと答え——ハイデガーについて』（監訳、法政大学出版局、2017 年）、トム・ロックモア『カントの航跡のなかで——二十世紀の哲学』（共訳、法政大学出版局、2008 年）。

【Outline (in English)】
In this course, students will read Martin Heidegger's "Being and Time". On top of deepening their understandings of this book, this course aims for students to acquire the ability to better think in a critical and philosophical manner. Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter from the text. Your required study time is at least four hour for each class meeting. Final grade will be calculated according to the following process each reading report on each class meeting (35%), in-class contribution(35%), and term-end report (30%).

PHL600B1

古代哲学史研究Ⅰ－１

奥田 和夫

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

アリストテレス『形而上学』を講読する。西洋哲学史上きわめて重要な著作であり、難解な著作である。注意深く精読をすすめ、アリストテレスの思考法、重要概念の内容を正確に理解することが目標である。さらに、この著作（論文集）が伝えるアリストテレスの思想を把握したうえで、可能であれば、その有効性にまで考察をおよぼすことが最終的な目的である。今年度春学期は第13巻第3章1078a15から同巻末（第9章末）までを読解する。

【到達目標】

上のべたように、内容の正確な理解を得ることが目標である。アリストテレスには世界や事象を認識するにあたり彼独特の思考法がある。この思考法はさまざまなテーマについて多様な仕方でも繰り返される。正確な理解を得るためには、その思考法のパターンとその基礎にある概念やその使用法を理解し習熟することが第一の目標となる。アリストテレスの『形而上学』は西洋哲学史上、広大な影響力を有しているだけに、本書について正確な理解を得ることは、後代の哲学の理解に際しても重要である。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

古典ギリシア語原典を訳読できる履修者が出席する場合、その者がまず原典を訳読し、次にそれ以外の履修者が英訳テキストを訳読する、という形式ですすめる。精読を旨とする。訳読の他に、授業では毎回、内容要約と内容の検討、討議をおこない理解を深める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	春学期イントロダクション	アリストテレスの基本用語 数学の対象
	第13巻第3章の精読・検討・理解	
第2回	第13巻第4章の精読・検討・理解	アイデアの想定
第3回	第13巻第4章の精読・検討・理解	アイデア論の由来
第4回	第13巻第5章の精読・検討・理解	アイデア論批判 感覚的事物の存在理由の観点から
第5回	第13巻第5章の精読・検討・理解	アイデア論批判 感覚的事物の変化の観点から
第6回	第13巻第6章の精読・検討・理解	感覚的事物の原因としての数およびアイデア論
第7回	第13巻第6章の精読・検討・理解	数に関するプラトンの主張とスベウシッポスの主張
第8回	第13巻第7章の精読・検討・理解	エイドスとしての数批判
第9回	第13巻第7章の精読・検討・理解	エイドスとしての数はありえない
第10回	第13巻第8章の精読・検討・理解	数をめぐってのアイデア論批判
第11回	第13巻第8章の精読・検討・理解	エイドスとしての数への再批判
第12回	第13巻第9章の精読・検討・理解	幾何学の対象に対する考察
第13回	第13巻第9章の精読・検討・理解	エイドスとしての数批判のまとめとアイデア論批判のまとめ

第14回 第13巻第10章の精読・検討・理解
まとめ
ウーシアアの離在性とその原理の普遍性と個別性
学期の学習内容の確認と整理

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
授業計画にもとづき、次回の授業が対象とする範囲を予習する（訳読のための準備し、疑問点、課題点を明確にしておく）。『形而上学』全体の構成をつねに確認する。

【テキスト（教科書）】

1. Aristotle's Metaphysics, A Revised Text with Introduction and Commentary by W.Ross, volume II, Oxford at the Clarendon Press, 1924. (ギリシア語原典訳読用)
2. Aristoteis Metaphysica, Recognovit Brevique Adnotatione Critica Instravit W.Jaeger, Oxford Classical Texts, 1957. (ギリシア語原典訳読用)
3. The Works of Aristotle translated into English under the Editorship of Sir David Ross, volume viii Metaphysica, second Edition, Oxford at the Clarendon Press, 1928. (英訳読用 出席者にはコピーを配布する。)

【参考書】

出隆訳『形而上学』（岩波文庫 上・下 第11巻以下は下巻に収録）。その他は、適宜、紹介する。

【成績評価の方法と基準】

「到達目標」に記した内容理解度、毎回の英語訳の完成度、討論への貢献度、まとめのレポート内容、によって評価する（各25%ずつ）。

【学生の意見等からの気づき】

可能な限り最新研究の情報をも履修者と共有したい。

【学生が準備すべき機器他】

なし。

【その他の重要事項】

古代哲学史研究Ⅰ－2（秋学期）と併せて履修することが望ましい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> ソクラテス、プラトンを中心とする古代ギリシア哲学
<研究テーマ> 現在の持続的テーマはプラトンの政治哲学である。
<主要研究業績> 「正しい人の快楽—プラトン『国家』第九卷における快楽論の意味—」（『法政大学文学部紀要』第48号 2003年）「プラトンの人間観—『国家』における国家と人間の類型論を中心に—」（『プラトニズムにおける人間観の変遷』平成14～17年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（1））研究成果報告書 所収 2006年）「自然と人間—プラトンの自然思想から」（共編著『自然と人間』梓出版社 2006年 所収）「哲人王の行方」（日本西洋古典学会編『西洋古典学研究』第59号 岩波書店 2011年）「哲人王の行方」補説」（『西洋古典研究会論集』第21号 2012年）「最善の国家と次善の国家—プラトン『法律』708E-712B, 739A-E, 875-C-D—」（『法政大学文学部紀要』第80号 2020年）

【Outline (in English)】

(Course outline) In this course we read Aristotle's "Metaphysics". In the term we will read from Book 13, ch.3 to the end of the Book (ch.9).

(Learning Objectives) The goals of this course are careful reading, understanding of the way the author thinks and estimation of his thoughts.

(Learning activities outside of classroom) Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

(Grading Criteria / Policy) Final grade will be calculated according to the following process, term-end examination (50%), and in-class contribution (50%).

PHL600B1

古代哲学史研究Ⅰ－Ⅱ

奥田 和夫

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

アリストテレス『形而上学』を講読する。西洋哲学史上きわめて重要な著作であり、難解な著作である。注意深く精読をすすめる、アリストテレスの思考法、重要概念の内容を正確に理解することが目標である。さらに、この著作（論文集）が伝えるアリストテレスの思想を把握したうえで、可能であれば、その有効性にまで考察をおよぼすことが最終的な目的である。今年度秋学期は第14巻第1章から第14巻末（『形而上学』末）までを読解する。

【到達目標】

上にのべたように、内容の正確な理解を得ることが目標である。アリストテレスの『形而上学』は西洋哲学史上、広大な影響力を有しているが、可能なかぎり正確な読解をすすめることにより、古代哲学を専攻する、しないにかかわらず、本書に関して哲学的にも正確なアリストテレス哲学の内容理解をめざす。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

古代哲学を専門とする履修者がまず古典ギリシア語原典を訳読し、次に古代哲学を専攻としない履修者が英訳テキストを訳読する、という形式です（ただし履修生の状況を勘案する）。精読を旨とする。訳読の他に、授業では毎回、内容要約とその検討、討議をおこなう理解を深める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	秋学期イントロダクション	「不定の二」批判
	第14巻第1章の精読・検討・理解	
第2回	第14巻第1章の精読・検討・理解	「不定の二」の諸形態
第3回	第14巻第2章の精読・検討・理解	パルメニデスに対するプラトンの対応の誤り
第4回	第14巻第2章の精読・検討・理解	エイドスとしての数、数学の数
第5回	第14巻第3章の精読・検討・理解	数を実体とする説の難点
第6回	第14巻第3章の精読・検討・理解	ピュタゴラス派の数についての考
第7回	第14巻第3章の精読・検討・理解	えの誤り ピュタゴラス派批判
第8回	第14巻第4章の精読・検討・理解	構成要素・原理と善美との関係
第9回	第14巻第4章の精読・検討・理解	数を実体とする説の難点
第10回	第14巻第5章の精読・検討・理解	批判された人々は構成要素・原理から数をいかにして生成させるのか
第11回	第14巻第5章の精読・検討・理解	批判された人々の数は何の原理となるのか
第12回	第14巻第6章の精読・検討・理解	原理としての数への批判
第13回	第14巻第6章の精読・検討・理解	ピュタゴラス派の数についての思想批判

第14回 まとめ

アリストテレスの思考法の意義と制限

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
授業計画にもとづき、次回の授業が対象とする範囲を予習する。
『形而上学』全体の構成をつねに確認する。

【テキスト（教科書）】

1. Aristotle's Metaphysics, A Revised Text with Introduction and Commentary by W.Ross, volume II, Oxford at the Clarendon Press, 1924. (ギリシア語原典訳読用)
2. Aristoteis Metaphysica, Recognovit Brevique Adnotatione Critica Instravit W.Jaeger, Oxford Classical Texts, 1957. (ギリシア語原典訳読用)
3. The Works of Aristotle translated into English under the Editorship of Sir David Ross, volume viii Metaphysica, second Edition, Oxford at the Clarendon Press, 1928. (英訳読用 出席者にはコピーを配布する。)

【参考書】

出隆訳『形而上学』（岩波文庫）。その他は、適宜、紹介する。

【成績評価の方法と基準】

「到達目標」に記した内容理解度、毎回の英語訳の完成度、討論への貢献度、まとめのレポートの内容、によって評価する（各25%ずつ）。

【学生の意見等からの気づき】

可能なかぎり最新研究の情報をも履修者と共有したい。

【学生が準備すべき機器他】

なし。

【その他の重要事項】

古代哲学史研究Ⅰ－Ⅰ（春学期）と併せて履修することが望ましい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> ソクラテス、プラトンを中心とする古代ギリシア哲学
<研究テーマ> 現在の持続的テーマはプラトンの政治哲学である。
<主要研究業績>

「正しい人の快楽—プラトン『国家』第九巻における快楽論の意味—」（『法政大学文学部紀要』第48号 2003年）
「プラトンの人間観—『国家』における国家と人間の類型論を中心に—」（『プラトニズムにおける人間観の変遷』平成14～17年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（1））研究成果報告書 所収 2006年）
「自然と人間—プラトンの自然思想から」（共編著『自然と人間』梓出版社 2006年 所収）
「哲人王の行方」（日本西洋古典学会編『西洋古典学研究』第59号 岩波書店 2011年）
「哲人王の行方」補説」（『西洋古典研究会論集』第21号 2012年）
「最善の国家と次善の国家—プラトン『法律』708E-712B, 739A-E, 875-C-D—」（『法政大学文学部紀要』第80号 2020年）

【Outline (in English)】

(Course outline) In this course we read Aristotle's "Metaphysics". In the term we will read from Book 14, ch.1 to the end of "Metaphysics" (the Book 14, ch.6).

(Learning Objectives) The goals of this course are careful reading, understanding of the way the author thinks and estimation of his thoughts.

(Learning activities outside of classroom) Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

(Grading Criteria / Policy) Final grade will be calculated according to the following process, term-end examination (50%), and in-class contribution (50%).

PHL500B1

古代哲学史研究Ⅱ－１

奥田 和夫

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

プラトンの初期作品『ゴルギアス』を読解し、ソクラテス哲学の影響の下、初期プラトン哲学の重要な出発点の内容を検討する。この検討によって、今日の社会、人間を考察する際のひとつの重要な視点を獲得することが目的である。

なお、この授業（夜間授業）はとくに社会人の履修を念頭においているが、通常の院生の出席も歓迎する。

【到達目標】

上に述べた「目的」に照らして、とりわけプラトンがソクラテスから受け継いだ道徳哲学・倫理学の出発点を確認し、その意義を確認・理解することが具体的な到達目標となる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は演習形式ですすめる。具体的には、履修者による「担当箇所の内容要旨・問題点・考察」の発表および発表者と参加者との討議によりすすめる。

発表者は発表にあたり、次の点に留意すること。１．内容要旨の作成にあたっては正確さを旨とする。２．問題点の指摘については、不明な点を明確にし、必要に応じて関連情報の収集をおこなう。３．うへの１．２．を基礎に、担当箇所の内容に関する考察は、まず自分で考え、自分の言葉で説明することに留意する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	プラトン著作における『ゴルギアス』の位置づけと関連事項
第 2 回	『ゴルギアス』第 1－4 章の精読・検討・理解	対話篇のプロローグ。ゴルギアスとの対話の開始
第 3 回	第 5－8 章の精読・検討・理解	弁論術と技術
第 4 回	第 9－12 章の精読・検討・理解	弁論術と正義
第 5 回	第 13－16 章の精読・検討・理解	承 前 ポロスとの対話の開始
第 6 回	第 17－20 章の精読・検討・理解	弁論術と技術と快楽
第 7 回	第 21－24 章の精読・検討・理解	弁論術と権力
第 8 回	第 25－28 章の精読・検討・理解	不正をなすことと不正を被ること
第 9 回	第 29－32 章の精読・検討・理解	承 前 美と有益さ
第 10 回	第 33－36 章の精読・検討・理解	正義と罰と善
第 11 回	第 37－40 章の精読・検討・理解	カリクレスとの対話の開始自然の正義
第 12 回	第 41－44 章の精読・検討・理解	政治的生活と哲学的生活
第 13 回	第 45－48 章の精読・検討・理解	カリクレス反駁 欲望と節制
第 14 回	第 49－52 章の精読・検討・理解	快楽主義 春学期のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

『ゴルギアス』を通読し全体の構成を理解すること。授業計画にもとづき、各回の問題点、疑問点を明確にすること。

【テキスト（教科書）】

プラトン『ゴルギアス』（加来彰俊訳 岩波文庫または藤沢令夫訳 中公クラシックス）。必要に応じて、ギリシア語/英訳対訳本その他のを参照するが、その際は担当教員が準備する。

【参考書】

田中美知太郎『プラトン』Ⅰ－Ⅳ（岩波書店）
同 『ソクラテス』（岩波新書）
藤沢令夫『プラトンの哲学』（岩波新書）
加来彰俊『プラトンの弁明』（岩波書店）など。その他は随時指示する。

【成績評価の方法と基準】

「到達目標」に記したソクラテス・プラトンの道徳哲学の意義についての理解度、担当箇所のレジュメ作成・発表・その内容、討論への貢献度、期末レポートの内容、を勘案して評価する。（各 25% ずつ）

【学生の意見等からの気づき】

特にありません。

【学生が準備すべき機器他】

なし。

【その他の重要事項】

古代哲学史研究Ⅱ－２ と併せて履修することが望ましい。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ ソクラテス、プラトンを中心とする古代ギリシア哲学
＜研究テーマ＞ 現在の持続的テーマはプラトンの政治哲学である。
＜主要研究業績＞ 「正しい人の快楽—プラトン『国家』第九巻における快楽論の意味—」（『法政大学文学部紀要』第 48 号 2003 年）
「プラトンの人間観—『国家』における国家と人間の類型論を中心に—」（『プラトニズムにおける人間観の変遷』平成 14～17 年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（1））研究成果報告書 所収 2006 年）
「自然と人間—プラトンの自然思想から」（共編著『自然と人間』梓出版社 2006 年 所収）
「哲人王の行方」（日本西洋古典学会編『西洋古典学研究』第 59 号 岩波書店 2011 年）
「哲人王の行方」補説（『西洋古典研究会論集』第 21 号 2012 年）
「最善の国家と次善の国家—プラトン『法律』708E-712B, 739A-E, 875-C-D—」（『法政大学文学部紀要』第 80 号 2020 年）

【Outline (in English)】

(Course outline) In this course we read Plato's "Gorgias". In the term we will read from ch.1,447A(beginning) to ch.52,498D. (Learning Objectives) The goals of this course are careful reading, understanding of the way the author thinks and estimation of his (Socratic) thoughts. (Learning activities outside of classroom) Before/after each class meeting, students will be expected to spend two hours to understand the course content. (Grading Criteria /Policy) Final grade will be calculated according to the following process, term-end examination (50%), and in-class contribution(50%).

PHL500B1

古代哲学史研究Ⅱ－２

奥田 和夫

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

プラトンの初期作品『ゴルギアス』を読解し、ソクラテス哲学の影響の下、初期プラトン哲学の重要な出発点の内容を検討する。この検討によって、今日の社会、人間を考察する際のひとつの重要な視点を獲得することが目的である。

なお、この授業（夜間授業）はとくに社会人の履修を念頭においているが、通常の院生の出席も歓迎する。

【到達目標】

上に述べた「目的」に照らして、とりわけプラトンがソクラテスから受け継いだ道徳哲学・倫理学の出発点を確認し、その意義を確認・理解することが具体的な到達目標となる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は演習形式です。具体的には、履修者による「担当箇所の内容要旨・問題点・考察」の発表および発表者と参加者との討議によりすすめる。

発表者は発表にあたり、次の点に留意すること。１．内容要旨の作成にあたっては正確さを旨とする。２．問題点の指摘については、不明な点を明確にし、必要に応じて関連情報の収集をおこなう。３．うえの１．２．を基礎に、担当箇所の内容に関する考察は、まず自分で考え、自分の言葉で説明することに留意する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	秋学期イントロダクション	Ⅱ－１の復習 快楽主義反駁
	『ゴルギアス』第 5 3－5 6 章の精読・検討・理解	
第 2 回	第 5 7－6 0 章の精読・検討・理解	政治家
第 3 回	第 6 1－6 4 章の精読・検討・理解	正義と弁論術
第 4 回	第 6 5－6 8 章の精読・検討・理解	弁論術の虚実
第 5 回	第 6 9－7 2 章の精読・検討・理解	再度、政治家について
第 6 回	第 7 3－7 6 章の精読・検討・理解	真の政治家
第 7 回	第 7 7－8 0 章の精読・検討・理解	ソクラテスの主張
第 8 回	第 8 1－8 3 章の精読・検討・理解	死後のミュートス（神話・物語）
第 9 回	『ゴルギアス』全体のまとめ	『ゴルギアス』の構成の確認
第 10 回	承 前	快楽主義に対する哲学的生の意義
第 11 回	倫理と社会	発表と討議
第 12 回	倫理と教育	発表と討議
第 13 回	倫理と政治	発表と討議
第 14 回	政治と哲学 まとめ	発表と討議 まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

『ゴルギアス』を通読し全体の構成を理解すること。授業計画にもとづき、各回の問題点、疑問点を明確にすること。

【テキスト（教科書）】

プラトン『ゴルギアス』（加来彰俊訳 岩波文庫または藤沢令夫訳中公クラシックス）。必要に応じて、ギリシア語/英訳対訳本その他を参照するが、その際は担当教員が準備する。

【参考書】

田中美知太郎『プラトン』Ⅰ－Ⅳ（岩波書店）
同 『ソクラテス』（岩波新書）
藤沢令夫『プラトンの哲学』（岩波新書）
加来彰俊『プラトンの弁明』（岩波書店）など。その他は随時指示する。

【成績評価の方法と基準】

「到達目標」に記したソクラテス・プラトンの道徳哲学の意義についての理解度、担当箇所のレジュメ作成・発表・その内容、討論への貢献度、期末レポートの内容、を勘案して評価する。（各 2 5 % ずつ）

【学生の意見等からの気づき】

特にありません。

【学生が準備すべき機器他】

なし。

【その他の重要事項】

古代哲学史研究Ⅱ－１ と併せて履修することが望ましい。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ ソクラテス、プラトンを中心とする古代ギリシア哲学
＜研究テーマ＞ 現在の持続的テーマはプラトンの政治哲学である。
＜主要研究業績＞ 「正しい人の快楽—プラトン『国家』第九巻における快楽論の意味—」（『法政大学文学部紀要』第 48 号 2003 年）
「プラトンの人間観—『国家』における国家と人間の類型論を中心に—」（『プラトニズムにおける人間観の変遷』平成 14～17 年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（1））研究成果報告書 所収 2006 年）
「自然と人間—プラトンの自然思想から」（共編著『自然と人間』梓出版社 2006 年 所収）
「哲人王の行方」（日本西洋古典学会編『西洋古典学研究』第 59 号 岩波書店 2011 年）
「哲人王の行方」補説（『西洋古典研究会論集』第 21 号 2012 年）
「最善の国家と次善の国家—プラトン『法律』708E-712B,739A-E,875-C-D—」（『法政大学文学部紀要』第 80 号 2020 年）

【Outline (in English)】

(Course outline) In this course we read Plato's "Gorgias". In the term we will read from ch.53,498D to ch.83,527E(the end). (Learning Objectives) The goals of this course are careful reading, understanding of the way the author thinks and estimation of his (Socratic) thoughts.

(Learning activities outside of classroom) Before/after each class meeting, students will be expected to spend two hours to understand the course content.

(Grading Criteria /Policy) Final grade will be calculated according to the following process, term-end examination (50%), and in-class contribution(50%).

PHL600B1

論理学研究 I - 1

安東 祐希

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

帰納的関数論により、計算できるとはどういうことか、どのように表現されるのかを学ぶ。なお、ここでいう計算とは、広く一般に何らかの手続き（アルゴリズム）のことであり、狭い意味での数の計算にとどまらない。

【到達目標】

帰納的関数の定義について理解し、具体的な関数について計算可能性を論ずることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

教科書に従い、省略されている詳細部分も含め、定義・定理・証明あるいは例を履修者が分担して発表し、それに対して教員および他の参加者により質疑応答を行う。（発表が「課題」であり、質疑応答において「フィードバック」する。）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	computability	教科書第 1 節
第 2 回	functions and relations	教科書第 2 節
第 3 回	the basic machine	教科書第 3 節
第 4 回	macros	教科書第 4 節
第 5 回	closure properties	教科書第 5 節
第 6 回	definitions of recursive functions (constant etc.)	教科書第 6 節前半
第 7 回	definitions of recursive functions (inductive definition etc.)	教科書第 6 節後半
第 8 回	codes	教科書第 7 節
第 9 回	indices (enumeration theorem etc.)	教科書第 8 節前半
第 10 回	indices (parameter theorem etc.)	教科書第 8 節後半
第 11 回	Church's thesis	教科書第 9 節
第 12 回	word problem (halting problem etc.)	教科書第 10 節前半
第 13 回	word problem (semigroup etc.)	教科書第 10 節後半
第 14 回	undecidable theories	教科書第 11 節

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

教科書の内容について、具体的な例を考え、紙に書きながら十分な演習を行うこと。なお、予復習時間の標準は 4 時間である。

【テキスト（教科書）】

Joseph R. Shoenfield, *Recursion Theory* (Lecture Notes in Logic 1), A K Peters/CRC Press, 2001 (Springer-Verlag, 1993).

【参考書】

Hartley Rogers, Jr., *Theory of Recursive Functions and Effective Computability*, The MIT Press, 1987 (McGraw-Hill, 1967).

【成績評価の方法と基準】

到達目標に関する問題の提示・解題能力を担当箇所の発表内容（60 %）において、さらに、目標の問題全般にわたる理解度を他者担当時の質疑応答（40 %）において評価する。

【学生の意見等からの気づき】

担当者の発表と教員からの指摘について時間配分をより適切なものにした。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉
数理論理学（証明論）
〈研究テーマ〉
証明図の正規化手続きに関する諸性質
〈主要研究業績〉

・ Church-Rosser property of a simple reduction for full first-order classical natural deduction, *Annals of Pure and Applied Logic* 119(2003) pp225-237, Elsevier.

・ A representation of essential reductions in sequent calculus (abstract), *The Bulletin of Symbolic Logic* 11 (2005) pp265-265, The Association for Symbolic Logic.

・ Gentzen's unpublished normalization theorem and its successors, 数理解析研究所講究録 2083『証明論と証明活動』（2018）pp146-149, 京都大学数理解析研究所.

【Outline (in English)】

[Course outline]

This course deals with the theory of recursive functions.

[Learning Objectives]

By the end of the course, students should be able to do the followings:

-To comprehend the definition of recursive functions.

-To explain the computability of some specific functions.

[Learning activities outside of classroom]

Students will be expected to do exercises by writing them on paper. Your study time will be more than four hours for a class.

[Grading Criteria/Policies]

Final grade will be calculated according to the following process:

Presentation as the person in charge for some parts of the text (60%) and contribution in question-and-answer sections (40%).

PHL600B1

論理学研究 I - 2

安東 祐希

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

春期科目の「論理学研究 I - 1」に引き続き、帰納的関数論により、相対的な計算可能性とは何かを学ぶ。

【到達目標】

計算可能という概念の相対化について理解し、相対化に従って得られる階層構造について論ずることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

教科書に従い、省略されている詳細部分も含め、定義・定理・証明あるいは例を履修者が分担して発表し、それに対して教員および他の参加者により質疑応答を行う。（発表が「課題」であり、質疑応答において「フィードバック」する。）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	relative recursion	教科書第 12 節
第 2 回	the arithmetical hierarchy (arithmetical relation etc.)	教科書第 13 節前半
第 3 回	the arithmetical hierarchy (arithmetical hierarchy theorem etc.)	教科書第 13 節後半
第 4 回	recursively enumerable relations (RE parameter theorem etc.)	教科書第 14 節前半
第 5 回	recursively enumerable relations (graph theorem etc.)	教科書第 14 節後半
第 6 回	degrees (definition of degree etc.)	教科書第 15 節前半
第 7 回	degrees (Post's problem etc.)	教科書第 15 節後半
第 8 回	evaluation of degrees (Rice's proposition etc.)	教科書第 16 節前半
第 9 回	evaluation of degrees (Rogers' proposition etc.)	教科書第 16 節後半
第 10 回	large RE sets (simple set etc.)	教科書第 17 節前半
第 11 回	large RE sets (Dekker's proposition etc.)	教科書第 17 節後半
第 12 回	functions of reals	教科書第 18 節
第 13 回	the analytical hierarchy	教科書第 19 節
第 14 回	the projective hierarchy	教科書第 20 節

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

教科書の内容について、具体的な例を考え、紙に書きながら十分な演習を行うこと。なお、予復習時間の標準は 4 時間である。

【テキスト（教科書）】

Joseph R. Shoenfield, *Recursion Theory* (Lecture Notes in Logic 1), A K Peters/CRC Press, 2001 (Springer-Verlag, 1993).

【参考書】

Hartley Rogers, Jr., *Theory of Recursive Functions and Effective Computability*, The MIT Press, 1987 (McGraw-Hill, 1967).

【成績評価の方法と基準】

到達目標に関する問題の提示・解題能力を担当箇所の発表内容 (60 %) において、さらに、目標の問題全般にわたる理解度を他者担当時の質疑応答 (40 %) において評価する。

【学生の意見等からの気づき】

担当者の発表と教員からの指摘について時間配分をより適切なものになりたい。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

数理解論学（証明論）

〈研究テーマ〉

証明図の正規化手続きに関する諸性質

〈主要研究業績〉

・ Church-Rosser property of a simple reduction for full first-order classical natural deduction, *Annals of Pure and Applied Logic* 119 (2003) pp225-237, Elsevier.

・ A representation of essential reductions in sequent calculus (abstract), *The Bulletin of Symbolic Logic* 11 (2005) pp265-265, The Association for Symbolic Logic.

・ Gentzen's unpublished normalization theorem and its successors, 数理解析研究所講究録 2083『証明論と証明活動』(2018) pp146-149, 京都大学数理解析研究所.

【Outline (in English)】

[Course outline]

This course deals with the relative computability.

[Learning Objectives]

By the end of the course, students should be able to do the followings:

-To comprehend the notion of "relative" on computability.

-To explain the hierarchy introduced by using the relative computability.

[Learning activities outside of classroom]

Students will be expected to do exercises by writing them on paper. Your study time will be more than four hours for a class.

[Grading Criteria/Policies]

Final grade will be calculated according to the following process:

Presentation as the person in charge for some parts of the text (60%) and contribution in question-and-answer sections (40%).

PHL500B1

論理学研究Ⅱ－1

計良 隆世

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

インド仏教思想における真理説・レトリック（説得方法）・真理説論証・真理観。
 インド初期仏教は自らが示す真理説を聞き手に納得させるためにどのようなレトリックを用いたのか、またインド大乘仏教は真理説を根拠付け合理的に正当化するためにどのような論証を行ったのか、そのレトリックと論証方法を、初期經典の『無我相経』等、大乘經典の『稲苺経』とそれに対する後期中観派の注釈、『中論』等の大乘論書の原典からの英訳または和訳を輪読しながら、分析し理解していく。他方、インド仏教の真理観について、その特徴と西洋の哲学思想における真理観との差異とを、比較思想的方法を用いることにより、理解する。加えて最後に、仏教の言語観・言語理論（アポーハ論）を取り上げ、文献資料を用いながら、仏教の真理観と言語観との関係、アポーハ論と仏教論理学との関係、自身の言語観に基づくとも考えられる仏陀の教育指導法とその論理、そして大乘仏教の真理説論証（法無我・無自性性論証）で用いられる、帰謬法・自立論証等の論証方法についても学習し、理解する。

【到達目標】

- ・インド仏教が提示する三法印等の真理説の論理的構造を理解する。
- ・真理説を聞き手に納得させるために初期仏教が用いたレトリック、そして真理説を根拠付けるために大乘仏教が採用した論証方法とを理解する。
- ・仏教思想における真理観の特徴を理解する。
- ・仏教の言語観と言語理論（アポーハ論）、そしてアポーハ論と仏教論理学との関連を理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業形態：オンライン授業（リアルタイム配信型）。講義と演習の両形態を採る。
 授業の進め方：基本的には、各回、まずテーマについて概説し、文献資料と一緒に読み（もしくは担当者に訳文を発表してもらい）、その後で、学生に意見・感想を述べてもらう、という形になる。
 仏教の基本思想や関連する西洋哲学思想について、しばしば課題を出す予定である。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	仏教思想の出発点（1）	東西両哲学思想の比較研究の可能性、ウパニシャッドの哲学
第2回	仏教思想の出発点（2）	ブラフマニズムへの不信心、絶対神・創造神の否定
第3回	仏教の真理説「諸行無常」（1）	無常性の根拠、「諸行無常」から導出されること、無常性の解釈と根拠付け
第4回	仏教の真理説「諸行無常」（2）	「諸行無常」の真理観、西洋の真理観との比較
第5回	仏教の真理説「諸行無常」（3）	西洋の真理観との比較（続き）、ニーチェの仏教評価
第6回	仏教の真理説「一切皆苦」（1）	苦と苦の根拠、四諦説（苦諦・集諦）、十二支縁起

第7回	仏教の真理説「一切皆苦」（2）	苦の滅と苦の滅に至る方法、四諦説（滅諦・道諦）、八支聖道、中道、「苦からの解放」についてのニーチェの評価、苦滅と生の充実
第8回	仏教の真理説「諸法無我」（1）	我（アートマン）説、『無我相経』講読、非我と無我、無我説の説得方法（レトリック）
第9回	仏教の真理説「諸法無我」（2）	大乘仏教の無我解釈、中観思想（縁起・空・中）、中観派が提示する法無我的論理的根拠とその根拠の論理的構造
第10回	大乘仏教の縁起思想（1）	『稲苺経』・『稲苺経註』英訳講読（1）、外縁起と内縁起、縁起の二種観察法
第11回	大乘仏教の縁起思想（2）	『稲苺経』・『稲苺経註』英訳講読（2）、刹那滅論証、刹那滅と縁起・此縁性
第12回	大乘仏教の縁起思想（3）	『稲苺経』・『稲苺経註』英訳講読（3）、真理説に関する大乘仏教と小乗仏教との思想的差異、世俗と勝義の関係、これまでのまとめ
第13回	仏教の言語観・言語理論	インド版普遍論争、仏教の言語理論と仏教論理学
第14回	仏教の教育指導法とその論理	仏陀の対機説法と論理、帰謬法、自立論証と帰謬論証、否定対象と否定

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
 授業前学習：文献資料の熟読、仏教専門用語の理解。授業内で出された

課題の発表用意（担当者のみ）。

授業後学習：参考文献の熟読。

【テキスト（教科書）】

『スッタニパータ』：中村元訳『ブッダのことば』、岩波文庫、東京、1958年。
 『ダンマパダ』：中村元訳『真理のことば・感興のことば』、岩波文庫、東京、1978年。
 『大パリニッバーナ経』：中村元訳『ブッダ最後の旅』、岩波文庫、東京、1980年。
 『無我相経』：中村元監修、及川・羽矢・平木訳『原始仏典Ⅱ 相応部 經典第三卷』、春秋社、東京、2012年。
 『稲苺経』・『稲苺経註』：Jeffrey Schoening, *Çālistambasūtra and its Indian commentaries*, Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien Universität Wien, Wien, 1995。
 『ミリンダ王経』：長尾雅人監修、服部・宇野・大地原・その他訳『世界の名著 1 バラモン教典・原始仏典』、中央公論社、東京、1969年。

【参考書】

・高崎直道監修、桂・齋藤・下田・その他編集『シリーズ大乘仏教9 認識論と論理学』、春秋社、東京、2012年。
 ・桜部・上山『仏教の思想2 存在の分析・アビダルマ』、角川文庫ソフィア、東京、1996年。
 ・桂紹隆「概念：アポーハ論を中心に」、『岩波講座・東洋思想10 インド仏教3』、岩波書店、東京、1989年。
 ・御牧克己「刹那滅論証」、『講座大乘仏教9 認識論・論理学』、春秋社、東京、1984年。
 ・齋藤明「中観思想の成立と展開：ナーガールジュナの位置づけを中心として」、『シリーズ大乘仏教6 空と中観』、春秋社、東京、2012年、pp. 3-41。

【成績評価の方法と基準】

評価方法：ゼミでの発表・訳読・質疑応答（30%）、議論への参加度・授業への貢献度（30%）、学期末レポート（40%）
 評価基準：主として、「到達目標」に掲げた事柄の理解度による。その他、授業前学習・授業後学習をきちんと行っているか

どうかも基準に含める。

【学生の意見等からの気づき】

仏教の認識論・言語理論など、仏教思想の詳細を学んだことのない学生がほとんどだと思いますので、授業では、丁寧な指導・解説を心掛けたいと思います。

【その他の重要事項】

必要な文献資料は学習支援システムにおいて配布する予定。履修者は授業前日までにダウンロードし、文献資料に目を通しておくこと。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ インド哲学・仏教思想

＜研究テーマ＞ インド後期中観思想

＜主要研究業績＞

① Ryusei Keira, *Mādhyamika and Epistemology: A Study of Kamalashīla's method for proving the voidness of all dharmas; Introduction, annotated translations and Tibetan texts of selected sections of the second chapter of the Madhyamakāloka*. Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien Universität Wien, Wien, 2004.

② Ryusei Keira, The proof of voidness and scriptural authority: Kamalashīla's way of adoptiong scriptures. 『法華経と大乘仏教の研究』, 山喜房仏書林, 東京, 2006年, pp. 177-192.

③ Ryusei Keira, The description of niHsvabhāvatā and its intentional meaning: Kamalashīla's solution for the doctrinal conflict between Mādhyamika and Yogācāra, *Acta Tibetica et Buddhica* 2, Monobusan University, Minobu, 2009, pp. 1-24.

④ 計良龍成, 「カマラシーラの中観思想」, 『シリーズ大乘仏教6 空と中観』, 春秋社, 東京, 2012年, pp. 89-112.

⑤ 計良龍成, 「『中観光明論』(*Madhyamakāloka*) 後主張第1章「聖典による一切法無自性性の証明」の研究(1): 和訳・註解・チベット語訳校訂テキスト」, *Acta Tibetica et Buddhica* 9, Monobusan University, Monobu, 2016, pp. 1-121.

⑥ 計良龍成, 「『中観光明論』(*Madhyamakāloka*) が引用する『入楞伽經』 X 256-258 について」, *Acta Tibetica et Buddhica* 12, Monobusan University, Monobu, 2019, pp. 1-33.

【Outline (in English)】

The aim of this course is to give participants the understandings of the Indian Buddhist way of persuasion (rhetoric) used for persuading audience their doctrinal truth and their way of proof used for rationally justifying that truth.

By the end of the course, participants should be able to understand the followings:

1. The logical structure of the three statements expressing the seals of the dharma (dharmamudrā).
2. The characteristic(s) of Buddhist view of truth.
3. Buddhist linguistic theory (apoha theory) and logic.

Before/after each class meeting, participants will be expected to spend four hours to understand the course content.

Your overall grade in the class will be decided based on the following: Presentation (30%), Term-end report (40%) and Contribution in class (30%).

PHL500B1

論理学研究Ⅱ－2

計良 隆世

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

中観思想と認識論・論理学；

インド大乘仏教後期中観派の学者 Kamalashīla は、自身の中観思想の確立のために、仏教論理学者 Dharmakīrti の認識論・論理学をどのように受け入れ、解釈したのか。

【到達目標】

・經典の權威に関する Dharmakīrti と Kamalashīla の立場と、Kamalashīla の經典解釈法を理解する。

・後期中観派の法無我・無自性性論証（真理説論証）の構造と特色とを理解する。

・法無我という真理の直観知はどのようにして成立するのか、その知の成立構造を理解する。

・後期中観派が示す「瞑想の階梯」から見て、中観思想はどのような哲学思想と言い得るか、その哲学思想としての本質について、自分の考えを纏めてみる。

・後期中観派が説く、菩薩の生き方・人生観を理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業形態：オンライン授業（リアルタイム配信型）。

授業の進め方：まず、仏教の基礎知識として、仏教の世界観、その特徴、初期・部派仏教と大乘仏教の間では、思想・教義の変化に応じて世界観がどのように変化したのか、これらについて概説する。次に、Kamalashīla の中観思想とそれを最も特徴付けている Dharmakīrti の認識論・論理学とを、Kamalashīla が著した中観仏教習得実践マニュアル『修習次第初編』(*First Bhāvanākrama* (= BK I)) の原典英訳（和訳参照可）を輪読しながら、理解していく。そのテキストの輪読の途中、經典の權威に関する Dharmakīrti と Kamalashīla の立場、Kamalashīla の經典解釈法、Kamalashīla の無自性性論証の論理については、論文講読を行い、中観思想と仏教論理学についての深い知識を習得する。後期中観派が提示する「瞑想の階梯」についてテキストを読解した後、中観思想の哲学思想としての本質について議論を行う。最後に、仏教徒の生き方・実践知の確立にとって最も重要な手がかり・手段となる「中道」と「中道の確立方法」とをテキストを通して学習してから、後期中観思想が説く、菩薩の人生観について考え、理解する。

授業は、概説・講義の回もあるが、基本的に演習形式である。担当者を決め、テキストや英語論文の訳文を発表してもらう。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	仏教の世界観とその変遷	『俱舍論』が説く世界観、大乘仏教の世界観
第2回	慈悲の修習	BK I, §1-§2, pp. 187, 1-190, 12.
第3回	慈悲心と中道	BK I, §5-§8, pp. 193, 13-198, 7.
第4回	無自性性論証と經典の權威	BK I, §9-§10, pp. 198, 8-200, 13.
第5回	後期中観派の經典解釈法	英語論文講読1：The description of niHsvabhāvatā and its intentional meaning.
第6回	仏教論理学の基礎知識	遍充論、推理論、正しい論証因、誤謬論

第 7 回	Dharmakīrti の論理 学と無自性論証	知覚不可能なものの否定は可 能か、 論証因の成立・不成立、 基体不成立
第 8 回	Kamalashīla による 無自性論証の整理	BK I, §10-§11, pp. 200, 13-204, 9.
第 9 回	無自性論証の論理 (1)	正しい認識手段の成立、主張命題 の構造と解釈
第 10 回	無自性論証の論理 (2)	Dharmakīrti の無知覚理論 (英 語論文講読)
第 11 回	無自性論証の論理 (3)	Kamalashīla による無知覚理論 の解釈 (BK I, §16-§18, pp. 210, 5-217, 14.)
第 12 回	瞑想の階梯	ヨーガ行者の直接知覚、 法無我という真理の直観智
第 13 回	中道の確立	BK I, §20-§21, pp. 219, 21-223, 5.
第 14 回	菩薩の人生観	智慧と方便の双運道

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

授業前学習：テキスト該当箇所の精読・訳文準備、論文等文献資料の熟読

授業後学習：参考文献の熟読

【テキスト（教科書）】

『修習次第初編』：

- ・ G. Tucci, *Minor Buddhist Texts, part 2: First Bhāvanākrama of Kamalashīla, Sanskrit and Tibetan Texts with Introduction and English Summary*. Serie Orientale Rome IX 2, Rome 1958.
- ・ Martin T. Adam, *Meditation and the Concept of Insight in Kamalashīla's Bhāvanākramas*. A Thesis submitted to McGill University in partial fulfillment of the requirements of the degree of Doctor of Philosophy, Montreal 2002.

【参考書】

- ・ 桜部・上山『仏教の思想 2 存在の分析・アビダルマ』, 角川文庫ソフィア, 東京, 1996年
- ・ Ryusei Keira, *Mādhyamika and Epistemology: A Study of Kamalashīla's method for proving the voidness of all dharmas; Introduction, annotated translations and Tibetan texts of selected sections of the second chapter of the Madhyamakāloka*. Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien Universität Wien, Wien, 2004.
- ・ Ryusei Keira, The proof of voidness and scriptural authority: Kamalashīla's way of adopting scriptures. 『法華経と大乘仏教の研究』, 山喜房仏書林, 東京, 2006年, pp. 177-192.
- ・ Ryusei Keira, The description of niHsvabhāvatā and its intentional meaning: Kamalashīla's solution for the doctrinal conflict between Mādhyamika and Yogācāra, *Acta Tibetica et Buddhica* 2, Monobusan University, Minobu, 2009, pp. 1-24.
- ・ 計良龍成, 「カマラシーラの中観思想」, 『シリーズ大乘仏教 6 空と中観』, 春秋社, 東京, 2012年, pp. 89-112.
- ・ 計良龍成, 「『中観光明論』(Madhyamakāloka) 後主張第 1 章「聖典による一切法無自性性の証明」の研究 (1) : 和訳・註解・チベット語訳校訂テキスト」, *Acta Tibetica et Buddhica* 9, Monobusan University, Monobu, 2016, pp. 1-121.

【成績評価の方法と基準】

評価方法：訳読・質疑応答（60%）、

議論への参加度・授業への貢献度（40%）

評価基準：主として、「到達目標」に掲げた事柄の理解度による。

その他、授業前学習・授業後学習をきちんと行っているかどうかも基準に含める。

【学生の意見等からの気づき】

東アジアに殆ど伝えられることが無かったインド後期中観思想を学ぶのは、多くの学生にとって初めてのことだと思います。授業では、丁寧な指導・解説を心掛けたいと思います。

【その他の重要事項】

必要な文献資料は学習支援システムにおいて配布する予定。履修者は授業前日までにダウンロードし、文献資料に目を通しておくこと。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ インド哲学・仏教思想

＜研究テーマ＞ インド後期中観思想

＜主要研究業績＞

① Ryusei Keira, *Mādhyamika and Epistemology: A Study of Kamalashīla's method for proving the voidness of all dharmas; Introduction, annotated translations and Tibetan texts of selected sections of the second chapter of the Madhyamakāloka*. Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien Universität Wien, Wien, 2004.

② Ryusei Keira, The proof of voidness and scriptural authority: Kamalashīla's way of adopting scriptures. 『法華経と大乘仏教の研究』, 山喜房仏書林, 東京, 2006年, pp. 177-192.

③ Ryusei Keira, The description of niHsvabhāvatā and its intentional meaning: Kamalashīla's solution for the doctrinal conflict between Mādhyamika and Yogācāra, *Acta Tibetica et Buddhica* 2, Monobusan University, Minobu, 2009, pp. 1-24.

④ 計良龍成, 「カマラシーラの中観思想」, 『シリーズ大乘仏教 6 空と中観』, 春秋社, 東京, 2012年, pp. 89-112.

⑤ 計良龍成, 「『中観光明論』(Madhyamakāloka) 後主張第 1 章「聖典による一切法無自性性の証明」の研究 (1) : 和訳・註解・チベット語訳校訂テキスト」, *Acta Tibetica et Buddhica* 9, Monobusan University, Monobu, 2016, pp. 1-121.

⑥ 計良龍成, 「『中観光明論』(Madhyamakāloka) が引用する『入楞伽經』 X 256-258 について」, *Acta Tibetica et Buddhica* 12, Monobusan University, Monobu, 2019, pp. 1-33.

【Outline (in English)】

This is a course to learn the Indian mahayana Buddhist Mādhyamika philosophy and Buddhist epistemology. The main aim of this course is to give participants an understanding of how Kamalashīla, a later Mādhyamika philosopher, used Dharmakīrti's Buddhist logic and epistemology in order to establish his madhyamaka philosophy.

By the end of the course, participants should be able to understand the followings:

1. Logical structure of the proof of the truth consisting in the selflessness of all dharmas.
2. The structure of the cognition which directly understand the truth of selflessness.
3. Later Mādhyamika view of life.

Before/after each class meeting, participants will be expected to spend four hours to understand the course content.

Your overall grade in the class will be decided base on the following: Presentation (60%) and Contribution in class (40%).

PHL600B1

近代倫理学史研究 I - 1

菅沢 龍文

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

カント『純粋理性批判』を読む

——魂の不死について——

カントの『純粋理性批判』の「弁証論」では「魂の不死」の理念について論ぜられる。その箇所を、第二版で大幅に書き換えられたテキストで読む。「魂の不死」はアリストテレスの『魂について（De Anima）』以来の西洋哲学の根本問題であり、この箇所を詳しく読み解くことで、「魂の不死」についてのカントの思想について考える。

【到達目標】

カントの古典的テキストに関して、次のような態度・技能・知識を身につける。

- （１）原典テキストへ立ち返り、思想家の思想そのものを掘り起こす。
- （２）対象について、疑問点を発見、調査、考察して、理解を深める。
- （３）他人の意見も参照して、いっそう説得力のある意見を形成する。
- （４）テキストから掘り起こした思想と他の思想とを比較対照できる。
- （５）レポートにおいて、内容を分かりやすく、しかも正しく伝えられる。
- （６）ドイツ語テキストを訳読する参加者は、ドイツ語原典を正確に読み解ける。
- （７）翻訳書での参加者は、翻訳語や翻訳文の意味を適切に理解できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- （１）最初に前回ゼミのまとめをして質問に答える。
- （２）参加者がテキストの訳読を進め、適宜参考資料も用いて、質疑応答により、ドイツ語文章の内容の理解を深める。
- （３）テキストに秘められた思想を読み取って話し合い、その思想について考えを深める。
- （４）ドイツ語の初学者も、プロトコル（前回のまとめ）やレポート発表などで積極的に参加できるようにする。
- （５）初めてカントのテキストに挑戦する人にも内容がよく分かるように解説する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	（１）ゼミの方式、テキスト等について （２）カントの『純粋理性批判』の背景・全体像 （３）これから読む箇所のテーマ「魂の不死」の理念の意味について
第 2 回	超越論的理念	カント『純粋理性批判』原典テキスト PhB:441-442 ページ
第 3 回	弁証論的理性推理	同上 442-443 ページ
第 4 回	「私は思考する」	同上 443-444 ページ
第 5 回	合理的靈魂論	同上 444-445 ページ
第 6 回	合理的靈魂論の論題	同上 445-446 ページ
第 7 回	不死性 超越論的主観 = X	同上 446-447 ページ
第 8 回	経験の心理学 合理的心理学	同上 447-448 ページ
第 9 回	規定可能な自己の意識	同上 449-450 ページ

- 第 10 回 １）規定する主語 同上 450-451 ページ
２）単一のもの
３）主語の同一性
- 第 11 回 ４）私から区別された 同上 451-452 ページ
もの
単純な実体（人格性、物質から切り離された自己の現存）
- 第 12 回 誤謬推理 同上 452-454 ページ
- 第 13 回 主語として現存できる 同上 454-455 ページ
が、述語として現存できない物
- 第 14 回 春学期の振り返り 期末レポート発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
前回の内容を復習して理解を深めること。次回テキストの内容の全体を把握しておくこと。そして疑問点や問題点について調べておくこと。ドイツ語原典の訳読担当者は訳読の準備をし、プロトコル担当者は前回のまとめのプリントを用意すること。

【テキスト（教科書）】

I. Kant, *Kritik der reinen Vernunft*. Herausgegeben von Jens Timmermann. Felix Meiner Verlag.

（邦訳書）『カント全集』岩波書店版・第 5 巻、理想社版・第 5 巻、その他多数。ゼミのなかで紹介する。

（英訳書）ケンブリッジ版 I. Kant, *Critique of Pure Reason* (The Cambridge Edition of the Works of Immanuel Kant) ほか多数。

【参考書】

<カントの著作>

『プロレゴメナ』1783 年

<関連性の高い文献>

御子柴善之『カント 純粋理性批判』（角川選書）

ヨハン・シュルツ『カント『純粋理性批判』を読むために』菅沢・渋谷・山下訳（梓出版社）

その他、ゼミで適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】

原典テキストの読解力、問題の発見、調査、考察、理解力、コミュニケーション力、諸思想緒を比較する力、レポート作成力に関して、次の 2 方面から評価する。

- （１）プロトコル（前回のまとめ）発表、テキスト読解や質疑応答で観察される到達目標達成度（70 %）
- （２）期末レポート課題で確認される到達目標達成度（30 %）

【学生の意見等からの気づき】

言葉を明瞭に発音するように心がける。

定刻どおりに終わるように心がける。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

西洋近代の哲学・倫理学

<研究テーマ>

カント哲学・倫理学

<主要研究業績>

「カントにおける「人間性の権利」概念について——カントの『法論』は批判哲学に基づくのか——」『法政大学文学部紀要』第 80 号、2020 年。

「世界平和と基本的人権、その指標としての「訪問権」——カントによる世界市民権概念について——」『法政大学文学部紀要』第 76 号、2018 年。

「ヨブの幸福とカント——最高善概念を手がかりに——」『法政大学文学部紀要』第 70 号、2015 年。

（欧文）Kant und das Problem des Lügens. Über Nebeneinanderbestehen der moralischen Pflichten, in; *Kant und die Philosophie in weltbürgerlicher Absicht*, Akten des XI. Internationalen Kant-Kongresses Bd. 3, Berlin, De Gruyter, 2013. （翻訳：共訳）マンフレッド・キューン『カント伝』（春風社、2017 年）。

【Outline (in English)】

Reading Kant's Critique of Pure Reason

— On the Immortality of the Soul —

In the "Dialectic" of *Kant's Critique of Pure Reason*, he discusses the idea of "immortality of the soul". We will read the text rewritten in the second edition. The immortality of the soul has been a fundamental issue in Western philosophy since Aristotle's *On the Soul (De Anima)*. By reading this text in detail, we will consider Kant's thought about the "immortality of the soul".

[Learning Objectives]

Students will acquire the following attitudes, skills, and knowledges regarding Kant's classical texts.

- (1) To go back to the original text and uncover the thinker's thoughts themselves.
- (2) To deepen their understanding of the subject by discovering, investigating, and considering questions.
- (3) To formulate more persuasive opinions by referring to the opinions of others.
- (4) To compare and contrast ideas from the text with other ones.
- (5) To communicate the content of reports in a clear and correct manner.

- (6) Participants translating a German text should be able to read and understand the original German text accurately.
- (7) Participants should be able to understand the meaning of the translated words and sentences.

[Learning activities outside of classroom]

The standard preparation and review time for this class is each 2 hours.

To review and deepen our understanding of the previous lesson. To understand the entire contents of the next text, and to investigate any questions or problems. Those in charge of translating the German original text should prepare for the reading, and those in charge of protocol should prepare a handout summarizing the previous reading.

[Grading Criteria /Policy]

- (1) 70% of the evaluation will be made in terms of the comprehension of source texts, the ability to find, investigate and consider problems, the communication skills for exchanging opinions, the ability to compare ideas, and the completion of the protocol (summary of the previous session).
- (2) 30% of the evaluation will be made in terms of achievement level of the final report.

PHL600B1

近代倫理学史研究 I - 2

菅沢 龍文

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

カント『純粋理性批判』を読む

——魂の不死について——

カントの『純粋理性批判』の「弁証論」では「魂の不死」の理念について論ぜられる。その箇所を、第二版で大幅に書き換えられたテキストで読む。「魂の不死」はアリストテレスの『魂について (De Anima)』以来の西洋哲学の根本問題であり、この箇所を詳しく読み解くことで、「魂の不死」についてのカントの思想について考える。

【到達目標】

カントの古典的テキストに関して、次のような態度・技能・知識を身につける。

- (1) 原典テキストへ立ち回り、思想家の思想そのものを掘り起こす。
- (2) 対象について、疑問点を発見、調査、考察して、理解を深める。
- (3) 他人の意見も参照して、いっそう説得力のある意見を形成する。
- (4) テキストから掘り起こした思想と他の思想とを比較対照できる。
- (5) レポートにおいて、内容を分かりやすく、しかも正しく伝えられる。
- (6) ドイツ語テキストを訳読する参加者は、ドイツ語原典を正確に読み解ける。
- (7) 翻訳書での参加者は、翻訳語や翻訳文の意味を適切に理解できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- (1) 最初に前回ゼミのまとめをして質問に答える。
- (2) 参加者がテキストの訳読を進め、適宜参考資料も用いて、質疑応答により、ドイツ語文章の内容の理解を深める。
- (3) テキストに秘められた思想を読み取って話し合い、その思想について考えを深める。
- (4) ドイツ語の初学者も、プロトコル（前回のまとめ）やレポート発表などで積極的に参加できるようにする。
- (5) 初めてカントのテキストに挑戦する人にも内容がよく分かるように解説する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	魂の持続性	カント『純粋理性批判』原典テキスト PhB:455-456 ページ
第 2 回	魂の分割	同上： 456-457 ページ
第 3 回	思考する存在者	同上： 457-458 ページ
第 4 回	私は思考しつつ現存する	同上： 458-459 ページ
第 5 回	唯物論や唯心論に陥らないための訓練としての合理的心理学	同上： 469-460 ページ
第 6 回	純粋な自己意識	同上： 460-461 ページ
第 7 回	「私は思考する」という命題において与えられた物	同上： 461-462 ページ
第 8 回	来世を想定する権能や必然性	同上： 462-463 ページ
第 9 回	意識の統一	同上： 463-464 ページ
第 10 回	魂は死後にも人格であるか	同上： 464-465 ページ

第11回 私とは、思考の主語、 同上：465-466 ページ
思考の根拠、存在者そのもの

第12回 純粹意識の客観 同上：466-467 ページ

第13回 道徳法則の意識 同上：467-468 ページ

第14回 秋学期の振り返り 期末レポートの発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

前回の内容を復習して理解を深めること。次回テキストの内容の全体を把握しておくこと。そして疑問点や問題点について調べておくこと。ドイツ語原典の訳読担当者は訳読の準備をし、プロトコル担当者は前回のまとめのプリントを用意すること。

【テキスト（教科書）】

I. Kant, *Kritik der reinen Vernunft*. Herausgegeben von Jens Timmermann. Felix Meiner Verlag.

(邦訳書)『カント全集』岩波書店版・第5巻、理想社版・第5巻、その他多数。ゼミのなかで紹介する。

(英訳書)ケンブリッジ版 I. Kant, *Critique of Pure Reason* (The Cambridge Edition of the Works of Immanuel Kant) ほか多数。

【参考書】

＜カントの著作＞

『プロレゴメナ』1783年

＜関連性の高い文献＞

御宇柴善之『カント 純粹理性批判』（角川選書）

ヨハン・シュルツ『カント『純粹理性批判』を読むために』菅沢・渋谷・山下訳（梓出版社）

その他、ゼミで適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】

原典テキストの読解力、問題の発見、調査、考察、理解力、コミュニケーション力、諸思想緒を比較する力、レポート作成力に関して、次の2方面から評価する。

(1) プロトコル（前回のまとめ）発表、テキスト読解や質疑応答で観察される到達目標達成度（70 %）

(2) 期末レポート課題で確認される到達目標達成度（30 %）

【学生の意見等からの気づき】

言葉を明瞭に発音するように心がける。

定刻どおりに終わるように心がける。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

西洋近代の哲学・倫理学

＜研究テーマ＞

カント哲学・倫理学

＜主要研究業績＞

「カントにおける「人間性の権利」概念について——カントの『法論』は批判哲学に基づくのか——」『法政大学文学部紀要』第80号、2020年。

「世界平和と基本的人権、その指標としての「訪問権」——カントによる世界市民権概念について——」『法政大学文学部紀要』第76号、2018年。

「ヨブの幸福とカント——最高善概念を手がかりに——」『法政大学文学部紀要』第70号、2015年。

(欧文) Kant und das Problem des Lügens. Über Nebeneinanderbestehen der moralischen Pflichten, in: *Kant und die Philosophie in weltbürgerlicher Absicht*, Akten des XI. Internationalen Kant-Kongresses Bd. 3, Berlin, De Gruyter, 2013.

(翻訳：共訳) マンフレッド・キューン『カント伝』（春風社）、2017年。

【Outline (in English)】

Reading Kant's Critique of Pure Reason

— On the Immortality of the Soul —

In the "Dialectic" of Kant's *Critique of Pure Reason*, he discusses the idea of "immortality of the soul". We will read the text rewritten in the second edition. The immortality of the soul has been a fundamental issue in Western philosophy since Aristotle's *On the Soul* (*De Anima*). By reading this text in detail, we will consider Kant's thought about the "immortality of the soul".

[Learning Objectives]

Students will acquire the following attitudes, skills, and knowledges regarding Kant's classical texts.

(1) To go back to the original text and uncover the thinker's thoughts themselves.

(2) To deepen their understanding of the subject by discovering, investigating, and considering questions.

(3) To formulate more persuasive opinions by referring to the opinions of others.

(4) To compare and contrast ideas from the text with other ones.

(5) To communicate the content of reports in a clear and correct manner.

(6) Participants translating a German text should be able to read and understand the original German text accurately.

(7) Participants should be able to understand the meaning of the translated words and sentences.

[Learning activities outside of classroom]

The standard preparation and review time for this class is each 2 hours.

To review and deepen our understanding of the previous lesson. To understand the entire contents of the next text, and to investigate any questions or problems. Those in charge of translating the German original text should prepare for the reading, and those in charge of protocol should prepare a handout summarizing the previous reading.

[Grading Criteria /Policy]

(1) 70% of the evaluation will be made in terms of the comprehension of source texts, the ability to find, investigate and consider problems, the communication skills for exchanging opinions, the ability to compare ideas, and the completion of the protocol (summary of the previous session).

(2) 30% of the evaluation will be made in terms of achievement level of the final report.

PHL600B1

近代倫理学史研究Ⅱ－1

菅沢 龍文

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

カント『たんなる理性の限界内の宗教』を読む

— 悪の原理と善の原理との戦いについて —

カントの『たんなる理性の限界内の宗教』の第1編では人間の「根本悪」と「回心」について論ぜられ、第2編では「善の原理による悪の原理との戦い」が論ぜられる。本年度春学期は、前年度に引き続き、第1編の最後の箇所から始めて、第2編の原典テキストを中心に読み解き、その内容を検討する。ゼミでは、カントの道徳思想の理解を深め、人間における善と悪について考える。なお、ゼミではドイツ語テキストの読解力も研鑽する。ただし、ドイツ語テキストの訳読担当はしなくても、日本語でテキストの検討に参加し、レジュメやレポートを作成することにより、上記目的を達成できる。

【到達目標】

カントの古典的テキストに関して、次のような態度・技能・知識を身につける。

- (1) 原典テキストへ立ち返り、思想家の思想そのものを掘り起こす。
- (2) 対象について、疑問点を発見、調査、考察して、理解を深める。
- (3) 他人の意見も参照して、いっそう説得力のある意見を形成する。
- (4) テキストから掘り起こした思想と他の思想とを比較対照できる。
- (5) レポートにおいて、内容を分かりやすく、しかも正しく伝えられる。
- (6) ドイツ語テキストを訳読する参加者は、ドイツ語原典を正確に読み解ける。
- (7) 翻訳書での参加者は、翻訳語や翻訳文の意味を適切に理解できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

事前準備のうえゼミ本番では次のように進行する。

- (1) 最初に前回ゼミのまとめをして質問に答える。
- (2) テキストの訳読を進め、適宜参考資料も用いて、質疑応答により、ドイツ語文章の内容の理解を深める。
- (3) テキストに秘められた思想を読み取って話し合い、その思想について考えを深める。
- (4) ドイツ語の初学者も、プロトコル（前回のまとめ）やレポート発表などで積極的に参加する。
- (5) 初めてカントのテキストに挑戦する人も、初歩的な質問をして基本理解をゼミ内で共有する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ゼミへのイントロダクション	①ゼミのテーマと目標、方式について ②『たんなる理性の限界内の宗教』について ③これまでに読み進めた箇所と今後について
第2回	心術の革命、および漸次的改革	『たんなる理性の限界内の宗教』原典テキスト 61-63 ページ
第3回	よき人間の模範	同上 63 ページ
第4回	根源的な道徳的素質	同上 64-65 ページ
第5回	自由の概念	同上 64-65 ページ
第6回	自力による、道徳的秩序の回復	同上 66-67 ページ

第7回 道徳的宗教（よき生き 同上 67-68 ページ
方の宗教）

第8回 恩寵の作用を招き寄せること：魔術 同上 68-69 ページ

第9回 徳 同上 73-74 ページ

第10回 徳の「光り輝く悲惨」 同上 74-75 ページ

第11回 自然的傾向性と、思慮 および知恵 同上 74-76 ページ

第12回 悪霊 同上 76-77 ページ

第13回 創造の目的 同上 77-78 ページ

第14回 春学期のまとめ：期末 レポート発表
レポート

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

準備学習（2時間）：訳読担当者は翻訳文を作成する。事前に配られた翻訳文およびコメントを読んで内容を把握する。

復習・宿題（2時間）：プロトコル担当者は復習用レジュメを作成する。事前に共有された復習用レジュメおよびコメントを読んで、理解を確認する。

【テキスト（教科書）】

I. Kant, *Die Religion innerhalb der Grenzen der bloßen Vernunft*, Felix Meiner Verlag.

（翻訳書）『カント全集』岩波書店版・第10巻、理想社版・第9巻など。（英訳書）ケンブリッジ版（I. Kant, *Religion and Rational Theology*, The Cambridge Edition of the Works of Immanuel Kant）に所収されたものなど。

【参考書】

カント『道徳形而上学の基礎づけ（人倫の形而上学の基礎づけ）』（宇都宮芳明訳他、翻訳書多数）※その他、カントのいわゆる「三批判書」も関係が深い書物。

中島義道『カントの「悪」論』（講談社学物文庫）

バーンスタイン『根源悪の系譜：カントからアレントまで』（法政大学出版局）

その他の関連する文献は、ゼミで適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

(1) ゼミで示される、原典テキスト読解力、問題を発見、調査、考察する力、意見交換のコミュニケーション力、思想を比較する力、プロトコル（前回のまとめ）の完成度、といった観点から評価する（70 %）。

(2) 期末レポートの到達度から評価する（30 %）。

【学生の意見等からの気づき】

言葉を明瞭に発音するように心がける。

定刻どおりに終わるように心がける。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

西洋近代の哲学・倫理学

<研究テーマ>

カント哲学・倫理学

<主要研究業績>

「カントにおける「人間性の権利」概念について——カントの『法論』は批判哲学に基づくのか——」『法政大学文学部紀要』第80号、2020年。

「世界平和と基本的人権、その指標としての「訪問権」——カントによる世界市民権概念について——」『法政大学文学部紀要』第76号、2018年。

「ヨブの幸福とカント——最高善概念を手がかりに——」『法政大学文学部紀要』第70号、2015年。

（欧文）Kant und das Problem des Lügens. Über Nebeneinanderbestehen der moralischen Pflichten, in; *Kant und die Philosophie in weltbürgerlicher Absicht*, Akten des XI. Internationalen Kant-Kongresses Bd. 3, Berlin, De Gruyter, 2013. （翻訳：共訳）マンフレッド・キューン『カント伝』（春風社、2017年）。

【Outline (in English)】

Reading Kant's *Religion within the boundaries of mere reason*: the battle of the good against the evil principle

The first part of Kant's *Religion within the boundaries of mere reason* deals with the human "radical evil" and the "conversion" and the second part deals with "the battle of the good against the evil principle". Following the last semester we read the text of the first and the second part. In the seminar we deeply understand Kant's moral philosophy, think of the human good and evil, and improve our German reading comprehension. Without reading German texts however one may participate in our Japanese discussions and write Japanese resumes or reports to achieve the above objectives.

[Learning Objectives]

Students will acquire the following attitudes, skills, and knowledges regarding Kant's classical texts.

- (1) To go back to the original text and uncover the thinker's thoughts themselves.
- (2) To deepen their understanding of the subject by discovering, investigating, and considering questions.
- (3) To formulate more persuasive opinions by referring to the opinions of others.
- (4) To compare and contrast ideas from the text with other ones.
- (5) To communicate the content of reports in a clear and correct manner.
- (6) Participants translating a German text should be able to read and understand the original German text accurately.
- (7) Participants should be able to understand the meaning of the translated words and sentences.

[Learning activities outside of classroom]

Preparatory study (2 hours): Students in charge of translation will prepare a translation. Participants read and understand the translated texts and comments delivered in advance.

Review and homework (2 hours): Students in charge of protocol should prepare a resume for review. Students will read the review resume and comments shared in advance to confirm their understanding.

[Grading Criteria /Policy]

- (1) 70% of the evaluation will be made in terms of the comprehension of source texts, the ability to find, investigate and consider problems, the communication skills for exchanging opinions, the ability to compare ideas, and the completion of the protocol (summary of the previous session).
- (2) 30% of the evaluation will be made in terms of achievement level of the final report.

PHL600B1

近代倫理学史研究Ⅱ－2

菅沢 龍文

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

カント『たんなる理性の限界内の宗教』を読む

— 悪の原理と善の原理との戦いについて —

カントの『たんなる理性の限界内の宗教』の第1編では人間の「根本悪」と「回心」について論ぜられ、第2編では「善の原理による悪の原理との戦い」が論ぜられる。本年度秋学期は、春学期に引き続き、第2編の原典テキストを読み解き、その内容を検討する。ゼミに参加するなかで、カントの道徳思想の理解を深め、人間における悪と善の問題にアプローチする。なお、ゼミではドイツ語テキストの読解力も研鑽する。ただし、ドイツ語テキストの訳読担当はしなくても、日本語でのテキストの検討に参加し、日本語レジュメの作成を担当することにより、上記目的を達成できる。

【到達目標】

カントの古典的テキストに関して、次のような態度・技能・知識を身につける。

- (1) 原典テキストへ立ち返り、思想家の思想そのものを掘り起こす。
- (2) 対象について、疑問点を発見、調査、考察して、理解を深める。
- (3) 他人の意見も参照して、いっそう説得力のある意見を形成する。
- (4) テキストから掘り起こした思想と他の思想とを比較対照できる。
- (5) レポートにおいて、内容を分かりやすく、しかも正しく伝えられる。
- (6) ドイツ語テキストを訳読する参加者は、ドイツ語原典を正確に読み解ける。
- (7) 翻訳書での参加者は、翻訳語や翻訳文の意味を適切に理解できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

事前に訳読担当者は訳読文をPDFでゼミ内に配布する。そしてプロトコル担当者は前回の復習用レジュメをゼミ内に配布する。これらをまとめた、さらにコメント（フィードバック）の入った教材PDFをゼミ内に配布される。その後ゼミ本番では次のように進行する。

- (1) 最初に前回ゼミのまとめをして質問に答える。
- (2) テキストの訳読を進め、適宜参考資料も用いて、質疑応答により、ドイツ語文章の内容の理解を深める。
- (3) テキストに秘められた思想を読み取って話し合い、その思想について考えを深める。
- (4) ドイツ語の初学者も、プロトコル（前回のまとめ）やレポート発表などで積極的に参加する。
- (5) 初めてカントのテキストに挑戦する人も、初歩的な質問をして基本理解をゼミ内で共有する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	道徳的完全性の理想	『たんなる理性の限界内の宗教』 原典テキスト 78-79 ページ
第2回	神の御子への実践的信仰	同上 79-80 ページ
第3回	道徳的不信仰	同上 80-81 ページ
第4回	神人	同上 81-83 ページ
第5回	類推の図式論：擬人観	同上 83-84 ページ
第6回	心術の義	同上 84-85 ページ
第7回	回心	同上 86-87 ページ
第8回	自然的幸福	同上 87-88 ページ
第9回	おそれとおのき	同上 88-89 ページ

- 第10回 浄福なる永遠への展望 同 89-93 ページ
か、忌まわしい永遠への展望か
- 第11回 地獄の罰 同 90-91 ページ
- 第12回 この世での罰 同 91-92 ページ
- 第13回 無限の罰（罪責の無限性） 同 93-94 ページ
- 第14回 秋学期のまとめ：期末 レポート発表
レポート

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

準備学習（2時間）：訳読担当者は翻訳文を作成する。事前にゼミ内で共有された翻訳文およびコメントを読んで内容を把握する。
復習・宿題（2時間）：プロトコル担当者は復習用レジュメを作成する。事前に共有された復習用レジュメおよびコメントを読んで、理解を確認する。

【テキスト（教科書）】

I. Kant, *Die Religion innerhalb der Grenzen der bloßen Vernunft*, Felix Meiner Verlag.
（翻訳書）『カント全集』岩波書店版・第10巻、理想社版・第9巻など。（英訳書）ケンブリッジ版（I. Kant, *Religion and Rational Theology*, The Cambridge Edition of the Works of Immanuel Kant）に所収されたものなど。

【参考書】

カント『道徳形而上学の基礎づけ（人倫の形而上学の基礎づけ）』（宇都宮芳明訳他、翻訳書多数）※その他、カントのいわゆる「三批判書」も関係が深い書物。
中島義道『カントの「悪」論』（講談社学物文庫）
バーンスタイン『根源悪の系譜：カントからアーレントまで』（法政大学出版局）
その他の関連する文献は、ゼミで適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

ゼミでのテキストの読解および検討、プロトコルへの貢献度や、レポートの完成度といった観点から評価する。
（1）プロトコル（前回のまとめ）発表、テキスト読解や質疑応答で観察される到達目標達成度
（2）レポート課題で確認される到達目標達成度
（1）を70%、（2）を30%で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

言葉を明瞭に発音するように心がける。
定刻どおりに終わるように心がける。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

西洋近代の哲学・倫理学

<研究テーマ>

カント哲学・倫理学

<主要研究業績>

「カントにおける「人間性の権利」概念について——カントの『法論』は批判哲学に基づくのか——」『法政大学文学部紀要』第80号、2020年。

「世界平和と基本的人権、その指標としての「訪問権」——カントによる世界市民権概念について——」『法政大学文学部紀要』第76号、2018年。

「ヨブの幸福とカント——最高善概念を手がかりに——」『法政大学文学部紀要』第70号、2015年。

（欧文）Kant und das Problem des Lügens. Über Nebeneinanderbestehen der moralischen Pflichten, in; *Kant und die Philosophie in weltbürgerlicher Absicht*, Akten des XI. Internationalen Kant-Kongresses Bd. 3, Berlin, De Gruyter, 2013.
（翻訳：共訳）マンフレッド・キューン『カント伝』（春風社）、2017年。

【Outline (in English)】

Reading Kant's *Religion within the boundaries of mere reason*: the battle of the good against the evil principle

The first part of Kant's *Religion within the boundaries of mere reason* deals with the human "radical evil" and the "conversion" and the second part deals with "the battle of the good against the evil principle". Following the last semester we read the text of the second part. In the seminar we get the deep understanding of Kant's moral philosophy, think of the human good and evil, and improve our German reading comprehension. Without reading German texts however one may participate in our Japanese discussions and write Japanese resumes or reports to achieve the above objectives.

[Learning Objectives]

Students will acquire the following attitudes, skills, and knowledge regarding Kant's classical texts.

(1) To go back to the original text and uncover the thinker's thoughts themselves.

(2) To deepen their understanding of the subject by discovering, investigating, and considering questions.

(3) To formulate more persuasive opinions by referring to the opinions of others.

(4) To compare and contrast ideas from the text with other ideas.

(5) To communicate the content of reports in a clear and correct manner.

(6) Participants translating a German text should be able to read and understand the original German text accurately.

(7) Participants should be able to understand the meaning of the translated words and sentences.

[Learning activities outside of classroom]

Preparatory study (2 hours): Students in charge of translation will prepare a translation. Participants read and understand the translated texts and comments delivered in advance.

Review and homework (2 hours): Students in charge of protocol should prepare a resume for review. Students will read the review resume and comments shared in advance to confirm their understanding.

[Grading Criteria /Policy]

(1) 70% of the evaluation will be made in terms of the comprehension of source texts, the ability to find, investigate and consider problems, the communication skills for exchanging opinions, the ability to compare ideas, and the completion of the protocol (summary of the previous session).

(2) 30% of the evaluation will be made in terms of achievement level of the final report.

PHL600B1

実践哲学研究Ⅰ－Ⅰ

山口 誠一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ニーチェのデビュー作『悲劇の誕生—あるいはギリシア精神とベシミズム』の世界へ案内します。さらにその世界ののスリリングな地下通路を踏み歩くことにします。そこでは、根源的矛盾というニーチェ流の弁証法や自然理解が見えてくるでしょう。

【到達目標】

根源的矛盾というニーチェ流の弁証法や自然理解が見えてくるようにします。また、ドイツ語の哲学原典を読む力を錬成します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

現代日本でもっともよく親しまれているニーチェの原型を、ディオニュソスのものとアポロンのものの関係、そして根源一者の根源矛盾・根源苦痛に求めます。そのために『悲劇の誕生』を最初から関連資料も使用しながら精読します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ゼミオリエンテーション	訳読計画について
第2回	晩期ニーチェの『悲劇の誕生』批判	『悲劇の誕生』「或る自己批判の試み」前半部の検討
第3回	晩期ニーチェのディオニュソス哲学	『悲劇の誕生』「或る自己批判の試み」後半部の検討
第4回	ディオニュソスのものとアポロンのものとアポロンの夢とディオニュソスの陶醉	『悲劇の誕生』第1節前部の検討
第5回	ディオニュソス音楽「歓喜の歌」	『悲劇の誕生』第1節中間部の検討
第6回	自然としての芸術力	『悲劇の誕生』第1節後部の検討
第7回	ディオニュソス文化の先駆者抒情詩人について	『悲劇の誕生』第2節の検討
第8回	根源矛盾について	『悲劇の誕生』第4節前半部の検討
第9回	ソフォクレスのギリシア悲劇	『悲劇の誕生』第4節後半部の検討
第10回	アイスキュロスのギリシア悲劇	『悲劇の誕生』第9節前半部の検討
第11回	ギリシア悲劇のディオニュソスの本質	『悲劇の誕生』第9節後半部の検討
第12回	ギリシア悲劇の没落	『悲劇の誕生』第10節の検討
第13回	ギリシア悲劇の現代	『悲劇の誕生』第11節の検討
第14回	再生	『悲劇の誕生』第21節の検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の授業で扱うテキストを事前に精読し、疑問点を明確にしておいてください。

【テキスト（教科書）】

主要テキストとしては、ニーチェ講読には、F. Nietzsche, Die Geburt der Tragödie(Nietzsche・KSA1)を用います。邦語訳としては『ニーチェ全集 2 悲劇の誕生』(塩屋竹男訳、ちくま学芸文庫)を用います。

【参考書】

W. ミュラー＝ラウター『ニーチェ矛盾の哲学』、秋山英夫他訳、以文社

渡邊二郎編訳『ニーチェ・セレクション』、平凡社ライブラリー

山口誠一著『ニーチェとヘーゲル』、法政大学出版局

【成績評価の方法と基準】

原則として、訳読などのレポート (60%) と平常点 (40%) で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

とくになし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

ニーチェ/ヘーゲルを中心とするドイツ近現代哲学、新プラトン主義の影響史的解明、日本における西洋哲学受容の解明、国際ヘーゲル研究誌 *Jahrbuch für Hegelforschung* 国際顧問

＜研究テーマ＞

弁証法哲学の哲学史的研究、ヘーゲル『精神現象学』序説の註解、新訳ヘーゲル全集の編纂、ヘーゲル日本語文献目録国際版の編集、現代日本におけるニヒリズムの解明など。

＜主要研究業績＞

『ヘーゲル哲学の根源——〈精神現象学〉の問いの解明』、法政大学出版局、

Die japanischsprachige Hegel-Rezeption(1878-2001). Eine Bibliographie. Peter Lang Edition, 2013 (共編著)

『ニーチェ《古代レトリック講義》訳解』、知泉書館、2011年

『ニーチェとヘーゲル—ディオニュソス哲学の地下通路』、法政大学出版局、2010年

『ヘーゲル《新プラトン主義哲学》註解』、知泉書館、2005年

『ヘーゲルのギリシア哲学論』、創文社、1998年

【Outline (in English)】

(Course outline)

The aim of this course is to provide students with an essential understanding of Nietzsche's philosophy, with texts drawn from German and Japanese.

(Learning activities outside of classroom)

Before this class meeting, students will be expected to have read the text. Your required study time is at least one hour for this class meeting.

(Grading Criteria /Policies)

Final grade will be calculated according to the following process: Mid-term reports (60%) and in-class contribution(40%).

PHL600B1

実践哲学研究Ⅰ－2

山口 誠一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ヘーゲルの概念把握的思考による哲学命題の運動で生ずる矛盾と否定を解明する。

【到達目標】

ヘーゲルの概念把握的思考による哲学命題の運動で生ずる矛盾と否定を理解できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

『精神現象学』第 58 節以下を精読しながら、質疑応答する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	訳読計画など。
第 2 回	哲学研究に際しての条件	『精神現象学』第 58 節前半部の検討
第 3 回	概念に内在する。	『精神現象学』第 58 節後半部の検討
第 4 回	理窟をつける思考	『精神現象学』第 59 節前半部の検討
第 5 回	概念把握的思考	『精神現象学』第 59 節後半部の検討
第 6 回	概念把握的思考による命題	『精神現象学』第 60 節前半部の検討
第 7 回	哲学命題での主語と述語	『精神現象学』第 60 節前半部の検討
第 8 回	思弁命題	『精神現象学』第 61 節の検討
第 9 回	神は存在である。	『精神現象学』第 62 節前半部の検討
第 10 回	現実はある。	『精神現象学』第 62 節後半部の検討
第 11 回	命題形式と命題内容	『精神現象学』第 63 節の検討
第 12 回	彫塑的論述	『精神現象学』第 64 節の検討
第 13 回	哲学命題と体系叙述の関係	『精神現象学』第 65 節の検討
第 14 回	まとめ	矛盾の具体的理解をめぐって

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

訳読箇所を予め自分なりに調べておくこと

【テキスト（教科書）】

G. W. F. Hegel, *Phänomenologie des Geistes*. Hrsg. v. H.-F. Wessels u. H. Clairmont, Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1988.

【参考書】

ヘーゲル全集第 8 巻 1 精神現象学Ⅰ、責任編集・訳・注解 山口誠一、知泉書館、2021。

【成績評価の方法と基準】

原則として、訳読などのレポート（60%）と平常点（40%）で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

とくになし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

ニーチェ/ヘーゲルを中心とするドイツ近現代哲学、新プラトン主義の影響史的解明、日本における西洋哲学受容の解明、国際ヘーゲル研究誌 *Jahrbuch für Hegelforschung* 国際顧問

<研究テーマ>

弁証法哲学の哲学史的研究、ヘーゲル『精神現象学』序説の註解、新訳ヘーゲル全集の編纂、ヘーゲル日本語文献目録国際版の編集、現代日本におけるニヒリズムの解明など。

<主要研究業績>

『ヘーゲル哲学の根源——〈精神現象学〉の問いの解明』、法政大学出版局、

Die japanischsprachige Hegel-Rezeption(1878-2001). Eine Bibliographie. Peter Lang Edition, 2013 (共編著)

『ニーチェ《古代レトリック講義》訳解』、知泉書館、2011年
『ニーチェとヘーゲル—ディオニュソス哲学の地下通路』、法政大学出版局、2010年

『ヘーゲル《新プラトン主義哲学》註解』、知泉書館、2005年

『ヘーゲルのギリシア哲学論』、創文社、1998年

【Outline (in English)】

(Course outline)

The aim of this course is to provide students with an essential understanding of Hegel's Dialectic, with texts drawn from German and Japanese.

(Learning activities outside of classroom)

Before this class meeting, students will be expected to have read the text. Your required study time is at least one hour for this class meeting.

(Grading Criteria /Policies)

Final grade will be calculated according to the following process: Mid-term reports (60%) and in-class contribution(40%).

PHL600B1

近代ドイツ哲学史研究 I - 1

吉田 敬介

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、アドルノの講演テキスト「哲学のアクチュアリティ」（Die Aktualität der Philosophie）の精読を通して、近現代における哲学的思考のあり方について考察します。

「哲学のアクチュアリティ」は、1931 年になされた Th・W・アドルノの私講師就任講演です。この講演においてアドルノは、新カント派や生の哲学、フッサールの現象学やハイデッガーの存在論といった同時代思想と批判的に対決しながら、「意図なき現実の解釈」という哲学の課題を提示します。授業では、この講演原稿の講読を通して、アドルノによる「哲学」論を精確に理解し、その思想史・哲学史上の意義を考察することを試みます。また同時に、アドルノから読み取れる哲学的思考のあり方について、現代のコンテキストを見据えつつ、批判的に議論することも目指されます。春学期には、講演原稿の前半についてドイツ語原文を講読し、議論をする予定です（英語訳での参加も可能です）。

【到達目標】

- (A) 「哲学のアクチュアリティ」における「哲学」論をテキストに即して精確に理解できる。
 - (B) アドルノの「哲学」論の思想史・哲学史的意義を考察できる。
 - (C) アドルノの「哲学」論について理解・考察したことを、現代のコンテキストから批判的に再検討できる。
- ※修士課程と博士後期課程では、それぞれ相応の学修と成果が求められます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

はじめにアドルノの思想と著作について簡単に導入をした後、「哲学のアクチュアリティ」（Die Aktualität der Philosophie）のドイツ語原文を輪読形式で講読します（英語訳での参加も可能です）。

講読に際しては、受講者全員が事前にテキストを十分に予習していることを前提とします。予習した内容に基づき、テキストを精確に訳読し、意味内容を厳密に確認した上で、疑問点や議論したい点を発言してもらいます。また各回に記録担当者を設定します。該当者には、担当する回の講読内容やなされた議論を記録し、レジュメにまとめて次回の冒頭に発表してもらいます。その他、進捗や要望に応じて、受講者による発表を行ってもらう可能性があります。受講する皆さんには積極的な参加を望みます。

なお、重要なお知らせをすることもありうるので、適宜、授業支援システム Hoppii を確認するようお願いします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業の進め方の確認
第 2 回	アドルノの思想と著作について導入	アドルノの思想および著作の内容や性格について
第 3 回	「哲学のアクチュアリティ」について導入	「哲学のアクチュアリティ」の成立事情と性格、重要な諸論点
第 4 回	「哲学のアクチュアリティ」の講読 (1)	325 頁の精読、検討
第 5 回	「哲学のアクチュアリティ」の講読 (2)	325-326 頁の精読、検討
第 6 回	「哲学のアクチュアリティ」の講読 (3)	326 頁の精読、検討
第 7 回	「哲学のアクチュアリティ」の講読 (4)	326-327 頁の精読、検討

第 8 回	「哲学のアクチュアリティ」の講読 (5)	327-328 頁の精読、検討
第 9 回	「哲学のアクチュアリティ」の講読 (6)	328-329 頁の精読、検討
第 10 回	「哲学のアクチュアリティ」の講読 (7)	329-330 頁の精読、検討
第 11 回	「哲学のアクチュアリティ」の講読 (8)	330-331 頁の精読、検討
第 12 回	「哲学のアクチュアリティ」の講読 (9)	331-332 頁の精読、検討
第 13 回	「哲学のアクチュアリティ」の講読 (10)	332 頁の精読、検討
第 14 回	春学期のまとめ	春学期の講読内容の整理・検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

・Th. W. Adorno, "Die Aktualität der Philosophie", in: Gesammelte Schriften, Suhrkamp, Bd. 1, S. 325-344.
(なおテキストの詳細に関しては、第一回の授業で説明をするので、準備はそれから構いません)

【参考書】

・Th. W. Adorno, "The Actuality of Philosophy", in: The Adorno Reader, ed. by B. O'Connor, Blackwell Publishing, pp. 23-39 (英語訳)
・T・W・アドルノ『哲学のアクチュアリティ』（細見和之訳）、みすず書房
・麻生博之「アドルノ」（『哲学の歴史 第 10 巻 危機の時代の哲学【20 世紀 I】』中央公論新社、所収）
その他の参考文献は、授業中に指示します。

【成績評価の方法と基準】

成績配分は、平常点（講読時のテキスト理解、議論への参加、その他の授業への取り組みなどの総合評価）60 %、発表への取り組み 40 %です。

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更により昨年度のフィードバックはできませんが、受講者の意見はできるだけ取り入れたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】

オンライン授業の場合に必要なため、Zoom に接続可能な機器を準備してください。

【その他の重要事項】

春学期・秋学期合わせての履修を推奨します。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞社会哲学、宗教哲学
＜研究テーマ＞キルケゴールの思想、アドルノやホルクハイマーの批判理論、ドイツ近現代思想
＜主要研究業績＞「『啓蒙の弁証法』から読むキルケゴール—反知性主義か、啓蒙の自己省察か」（論文）、『社会思想史研究』第 45 号、2021 年、「隠された内面性から、外的世界との衝突へ—キルケゴールの「内面性」概念を再解釈する試み」（論文）、『哲学』第 72 号、2021 年、「Adornos Kierkegaard-Aneignung als Säkularisierung des Religiösen」（論文）、in: Der Schein des Lichts, der ins Gefängnis selber fällt: Religion, Metaphysik, Kritische Theorie, 2018, S. 161-178、「キルケゴール・ルネッサンスの影」（論文）、『学習院大学人文科学論集』第 22 号、2013 年〔ドイツ語版〕:"Der Schatten der Kierkegaard-Renaissance", Kierkegaard Studies Yearbook, 2015]

【Outline (in English)】

Course outline: This course deals with Adorno's conception of philosophy in his lecture "The Actuality of Philosophy".

Learning Objectives: The goals of this course are to (A) understand Adorno's conception of philosophy, (B) discuss its significance in the history of philosophy, and (C) examine it in the contemporary context.

Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

Grading Criteria/Policies: Grading will be decided based on in-class contribution (60%), and in-class presentations (40%).

PHL600B1

近代ドイツ哲学史研究 I - 2

吉田 敬介

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、アドルノの講演テキスト「哲学のアクチュアリティ」(Die Aktualität der Philosophie) の精読を通して、近現代における哲学的思考のあり方について考察します。

「哲学のアクチュアリティ」は、1931年になされた Th・W・アドルノの私講師就任講演です。この講演においてアドルノは、新カント派や生の哲学、フッサールの現象学やハイデッガーの存在論といった同時代思想と批判的に対決しながら、「意図なき現実の解釈」という哲学の課題を提示します。授業では、この講演原稿の講読を通して、アドルノによる「哲学」論を精確に理解し、その思想史・哲学史上の意義を考察することを試みます。また同時に、アドルノから読み取れる哲学的思考のあり方について、現代のコンテキストを見据えつつ、批判的に議論することも目指されます。秋学期には、春学期に引き続き、講演原稿の後半についてドイツ語原文を講読し、議論をする予定です（英語訳での参加も可能です）。

【到達目標】

- (A) 「哲学のアクチュアリティ」における「哲学」論をテキストに即して精確に理解できる。
 (B) アドルノの「哲学」論の思想史・哲学史的意義を考察できる。
 (C) アドルノの「哲学」論について理解・考察したことを、現代のコンテキストから批判的に再検討できる。
 ※修士課程と博士後期課程では、それぞれ相応の学修と成果が求められます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

はじめに春学期の講読内容を確認した後、引き続き、「哲学のアクチュアリティ」(Die Aktualität der Philosophie) のドイツ語原文を輪読形式で講読します（英語訳での参加も可能です）。

講読に際しては、受講者全員が事前にテキストを十分に予習していることを前提とします。予習した内容に基づき、テキストを精確に訳読し、意味内容を厳密に確認した上で、疑問点や議論したい点を発言してもらいます。また各回に記録担当者を設定します。該当者には、担当する回の講読内容やなされた議論を記録し、レジュメにまとめて次回の冒頭に発表してもらいます。その他、進捗や要望に応じて、受講者による発表を行ってもらう可能性があります。受講する皆さんには積極的な参加を望みます。

なお、重要なお知らせをすることもありうるので、適宜、授業支援システム Hoppii を確認するようお願いします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の進め方の確認
第2回	春学期の振り返り	「哲学のアクチュアリティ」 325-332 頁の内容・論点の確認
第3回	「哲学のアクチュアリティ」の講読 (1)	332-333 頁の精読、検討
第4回	「哲学のアクチュアリティ」の講読 (2)	333-334 頁の精読、検討
第5回	「哲学のアクチュアリティ」の講読 (3)	334-336 頁の精読、検討
第6回	「哲学のアクチュアリティ」の講読 (4)	336-337 頁の精読、検討
第7回	「哲学のアクチュアリティ」の講読 (5)	337-339 頁の精読、検討

第8回	「哲学のアクチュアリティ」の講読 (6)	339-340 頁の精読、検討
第9回	「哲学のアクチュアリティ」の講読 (7)	340-341 頁の精読、検討
第10回	「哲学のアクチュアリティ」の講読 (8)	341-342 頁の精読、検討
第11回	「哲学のアクチュアリティ」の講読 (9)	342-343 頁の精読、検討
第12回	「哲学のアクチュアリティ」の講読 (10)	343-344 頁の精読、検討
第13回	秋学期のまとめ	秋学期の講読内容の整理・検討
第14回	一年間のまとめ・展望	一年間の講読内容の整理・検討 議論と展望

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

・Th. W. Adorno, "Die Aktualität der Philosophie", in: Gesammelte Schriften, Suhrkamp, Bd. 1, S. 325-344.

【参考書】

・Th. W. Adorno, "The Actuality of Philosophy", in: The Adorno Reader, ed. by B. O'Connor, Blackwell Publishing, pp. 23-39 (英語訳)

・T・W・アドルノ『哲学のアクチュアリティ』（細見和之訳）、みすず書房

・麻生博之「アドルノ」（『哲学の歴史 第10巻 危機の時代の哲学【20世紀I】』中央公論新社、所収）

その他の参考文献は、授業中に指示します。

【成績評価の方法と基準】

成績配分は、平常点（講読時のテキスト理解、議論への参加、その他の授業への取り組みなどの総合評価）60%、発表への取り組み40%です。

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更により昨年度のフィードバックはできませんが、受講者の意見はできるだけ取り入れたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】

オンライン授業の場合に必要なため、Zoom に接続可能な機器を準備してください。

【その他の重要事項】

春学期・秋学期合わせての履修を推奨します。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞社会哲学、宗教哲学

＜研究テーマ＞キルケゴールの思想、アドルノやホルクハイマーの批判理論、ドイツ近現代思想

＜主要研究業績＞「『啓蒙の弁証法』から読むキルケゴール—反知性主義か、啓蒙の自己省察か」（論文）、『社会思想史研究』第45号、2021年、「隠された内面性から、外的世界との衝突へ—キルケゴールの「内面性」概念を再解釈する試み」（論文）、『哲学』第72号、2021年、「Adornos Kierkegaard-Aneignung als Säkularisierung des Religiösen」（論文）、in: Der Schein des Lichts, der ins Gefängnis selber fällt: Religion, Metaphysik, Kritische Theorie, 2018, S. 161-178、「キルケゴール・ルネッサンスの影」（論文）、『学習院大学人文科学論集』第22号、2013年〔ドイツ語版〕:"Der Schatten der Kierkegaard-Renaissance", Kierkegaard Studies Yearbook, 2015]

【Outline (in English)】

Course outline: This course deals with Adorno's conception of philosophy in his lecture "The Actuality of Philosophy".

Learning Objectives: The goals of this course are to (A) understand Adorno's conception of philosophy, (B) discuss its significance in the history of philosophy, and (C) examine it in the contemporary context.

Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

Grading Criteria/Policies: Grading will be decided based on in-class contribution (60%), and in-class presentations (40%).

PHL600B1

現代哲学研究Ⅰ－1

大池 惣太郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

フランスの哲学者ジャン＝リュック・ナンシーの『自由の経験』（1988）を読む。分有や共同体などといったナンシー哲学の鍵概念を学びながら、自由であること、自由に思考すること、自由に（ついで）語ること、これらの経験の限界や条件、可能性について考察する。

【到達目標】

- ・ナンシーの「自由の経験」に関する考え方や概念の掘り方を学び、それを通じて、現代哲学における主体論の基礎的な論点を一定程度の水準で理解する。
- ・レポートや発表を通じて、学んだ知見を適切な形で報告・論述できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・参加者全員が指定されたテキストを読んだ上で授業に参加する。
- ・発表担当者は、指定範囲のレジュメを作成する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	自由という主題の必然性について	第1章の講読
第2回	自由の条件（事実としての自由／権利としての自由）	第2章の講読
第3回	自由について語ることについて（自由の実践理性批判）	第3章の講読
第4回	ハイデガーにおける自由の検討	第4章の講読
第5回	自由な思考とは何か	第5章の講読
第6回	自由の論理について	第6章の講読
第7回	自由の分有について	第7章の講読
第8回	自由の経験と共同性について	第8章の講読
第9回	物、力、視線としての自由について	第9章の講読
第10回	絶対的自由？	第10章の講読
第11回	自由の贈与性について	第11章の講読
第12回	自由と悪の関係について	第12章の講読
第13回	自由と犠牲の問題	第13章の講読
第14回	総括	第14章の講読、今学期の授業のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・参加者は、指定された文献をあらかじめ読んだ上で授業に参加する。
- ・発表担当者はレジュメを作り、事前に論点や疑問点を整理して授業に臨む。
- ・本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

ジャン＝リュック・ナンシー『自由の経験』（澤田直訳、未来社、2000）

【参考書】

ジャン＝リュック・ナンシー『限りある思考』（合田正人訳、法制大学出版局、2011）

【成績評価の方法と基準】

授業への発表・参加（70%）と学期末のレポート（30%）で総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門分野＞ 20 世紀フランス思想・文学

＜研究テーマ＞ バタイユ研究

＜主要研究業績＞ 「供犠の思考、内在性の思考

ジョルジュ・バタイユ『無神学大全』三部作の通時的読解」（日本フランス語フランス文学会、2020 年 117 巻）

【Outline (in English)】

The aim of this seminar is to Read The Experience of Freedom (1988) of Jean-Luc Nancy. We will study key concepts of Nancy's philosophy, such as "sharing" and "community", and discuss the limits, conditions, and possibilities of experiences of being free, thinking freely, and speaking freely.

At the end of the course, students are expected to get a certain level of understanding of the basic issues in Nancy's philosophy and the conceptual expansions of his idea of "experience of freedom".

Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

Evaluation is based on class presentation and participation (70%) and end-of-term reports (30%).

PHL600B1

現代哲学研究Ⅰ－2

大池 惣太郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ジョルジュ・バタイユの戦後の神秘主義関連の論考を読む。後期バタイユ思想と実存主義との差異に注意しながら、バタイユが「経験」の孤独と複数性をいかに同時に擁護しようとしたかについて考える。

【到達目標】

- ・バタイユの後期思想と実存主義との差異を理解したうえで、彼の神秘主義の争点について一定水準の水準で哲学的に分析できるようになる。
- ・レポートや発表を通じて、学んだ知見を適切な形で報告・論述できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・参加者全員が指定されたテキストを読んだ上で授業に参加する。
- ・発表担当者は、指定範囲のレジュメを作成する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	バタイユの神秘主義について
第2回	神秘主義と思考	「第一の要請」を読む
第3回	「非知」の限界	「非知」を読む
第4回	バタイユの神秘主義	「真面目さの彼方」を読む
第5回	神秘主義と「一般経験」	「飽和状態の惑星」を読む
第6回	経験と幸福	「純然たる幸福」を読む
第7回	エロティシズムの問題(1)	「逆説」を読む
第8回	エロティシズムの問題(2)	「道徳の支え」を読む
第9回	エロティシズムの問題(3)	「存在を疑うこと」を読む
第10回	ヘーゲルとの対決(1)	「死と供儀」を読む
第11回	ヘーゲルとの対決(2)	「人間と歴史」を読む
第12回	ヘーゲルとの対決(3)	「ヘーゲル弁証法の基底への批判」を読む
第13回	芸術と神秘主義(1)	「残虐の実践」を読む
第14回	芸術と神秘主義(2)	「作家の二律背反」を読む

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・指定された文献をあらかじめ読んで授業に参加（担当者はレジュメを作成、事前に論点や疑問点を整理する）。
- ・本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

ジョルジュ・バタイユ『純然たる幸福』（酒井健訳、ちくま学芸文庫、2009年）

【参考書】

ジャン＝リュック・ナンシー『限りある思考』（合田正人訳、法政大学出版局、2011年）

【成績評価の方法と基準】

授業への発表・参加（70%）と学期末のレポート（30%）で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

とくになし

【担当教員の専門分野等】

<専門分野> 20世紀フランス思想・文学

<研究テーマ> バタイユ研究

<主要研究業績> 「供儀の思考、内在性の思考

ジョルジュ・バタイユ『無神学大全』三部作の通時的読解」（日本フランス語フランス文学会、2020年117巻）

【Outline (in English)】

We read Georges Bataille's late works on mysticism. While paying attention to the differences between his late philosophy and the existentialism of his time, we consider how Bataille tried to defend the solitude and plurality of "experience".

At the end of the course, students are expected to get a certain level of understanding of the basic issues in Bataille's mysticism and its difference from the existentialism.

Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

Evaluation is based on class presentation and participation (70%) and end-of-term reports (30%).

PHL600B1

科学哲学研究Ⅰ－1

佐藤 真人

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

初期デカルトの革新的な認識論の到達点でありながら未完の著作である『精神指導の規則（規則論）』をフランス語で丁寧に読解します（原文はラテン語なので、適宜ラテン語原文を参照しつつ、フランス語訳で読解します）。

『方法序説（叙説）』第二部で語られた有名な「四つの方法」は、それだけでは理解が困難な箇所であり、その詳細は『規則論』を読まなければわかりません。

本書の精読によって、若きデカルトが何をめざし、それはいかなる研究による成果なのか、そして本書はなぜ未完のまま残されたのかといった点について、つまり初期デカルト認識論の射程と達成、そしてその限界について読み解くことで、『方法序説』までの初期デカルト哲学の理解をめざします。

【到達目標】

- ① デカルト『精神指導の規則』のフランス語の精確な訳読ができる（フランス語の初学者や邦訳書による受講者は、著作内容の精確な理解ができる）。
- ② 内容を精確に理解し、それについて論理的な説明と議論ができる。
- ③ テーマや問題点を自ら探し、必要な文献を読んで考察を深め、文章で表すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

以下の手順で進めます。

- ① 担当者による訳読と、その内容や背景等の説明
- ② 質疑応答や全体での議論（フランス語や日本語訳の確認、内容の解釈や背景の説明等について）
- ③ 教員のコメントと補足説明（考えられうる掘り下げや問題点等について）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の概要や今後の進め方の説明、『規則論』とはいかなる著作か
第2回	『規則論』 「第一規則」	人間的知恵とは何か、訳読、解釈、議論
第3回	「第一規則」	学問の連鎖について、訳読、解釈、議論
第4回	「第二規則」	明証性とは何か、訳読、解釈、議論
第5回	「第三規則」	直観と演繹について、訳読、解釈、議論
第6回	「第四規則」	真理探究の方法の形成について、訳読、解釈、議論
第7回	「第四規則」	真理の種子と解析について、訳読、解釈、議論
第8回	「第四規則」	普遍数学について、訳読、解釈、議論
第9回	「第五規則」	探究の順序について、訳読、解釈、議論
第10回	「第六規則」	事物の単純性と比例関係について、訳読、解釈、議論
第11回	「第七規則」	絶対的なものと相対的なものについて、訳読、解釈、議論

第12回 「第七規則」	純粋数学の核心とは何か、訳読、解釈、議論
第13回 「第八規則」	探究の進め方について — 数学と屈折光学の例、訳読、解釈、議論
第14回 「第八規則」	認識の本質と射程について — デカルト認識論の革新性とは何か、訳読、解釈、議論、学期の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

訳読担当者は、担当箇所について、自分の言葉による日本語訳とその説明（解釈）を準備すること。

その他の受講者は当該箇所を熟読し、何が問題となっているのかを考えて授業に臨むこと。

本授業の準備学習・復習は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

以下のうち、どちらか一つ。

① René Descartes, *Œuvres complètes I. Premiers écrits: Règles pour la direction de l'esprit*, Gallimard (collection « tel »), 2016 (ISBN: 978-2070786756)

② René Descartes, *Œuvres complètes*, Vrin, 1996;2000 (ISBN: 978-2711612673) のうち、第10巻 (X)

なお、②にはラテン語原文のみで、フランス語訳はないので、②を入手する人は、別途 René Descartes, *Règles pour la direction de l'esprit*, livre de poche, 2002 (ISBN: 978-2253067535) などのフランス語訳を入手したほうがよい。

①か②のどちらかを入手するのが望ましいが、希望者には②の pdf を配布する予定。

【参考書】

邦訳はデカルト、『精神指導の規則』（野田又夫訳、岩波文庫）

または、『デカルト著作集〔4〕』（白水社）。

まずは参考書に頼らず、原典（仏訳かラテン語原文）の熟読から始め、内容の精確な理解に努めてください。そのうえで、テーマに関連する参考書を各自で探すこと（授業内でも参考書については適宜言及します）。

なお、デカルトの著作は以下で検索可能。

<https://www.unicaen.fr/puc/sources/prodescartes/recherche>

ネット上の哲学辞典としては、「スタンフォード哲学百科事典」を勧めます。

<https://plato.stanford.edu/index.html>

【成績評価の方法と基準】

発表者としての内容（訳読と説明、解釈）40%、受講者としての演習への参加内容（議論への参加とその内容など）25%、レポート35%（またはレポートを課さない場合、発表内容65%、参加内容35%）の割合で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

受講者の理解度に応じて、内容と進展の具合を勘案します。

【その他の重要事項】

講義の進展に伴い、初期デカルトの関連する他の著述を読む可能性もあり、その場合、講義の内容や順序が若干変わるかもしれません。読了することより、受講者の丁寧な読解と議論を重視したいので、年度中に読了しない可能性もあります。

【担当教員の専門分野等】

デカルトの哲学、フランス哲学と西洋近世の哲学

【研究テーマ】

主に自然本性概念からみたデカルト哲学の総合的研究と、西洋近世哲学におけるその位置づけと発展

【主要研究業績】

「信仰を支える人間的な論拠 — デカルトの『表面』について」（日本哲学会、『哲学』、第73号、2022年）

「デカルト形而上学の論証の方法 — 類比的考察を通じて」（日仏哲学会、『フランス哲学・思想研究』、第26号、2021年）

「デカルトの『自然の教え』とは何か — ストア派の自然本性概念との対比で —」（日本倫理学会、『倫理学年報』、第70集、2021年）

「無限か広大無辺か — デカルト形而上学の一極点の考察」（東洋大学国際哲学研究センター、『国際哲学研究』、第8号、2019年）

「デカルトはラmus主義者か — 初期デカルト認識論に見る数学的方法の一側面」（日仏哲学会、『フランス哲学・思想研究』、第23号、2018年）

「『規則論』は断絶した著作か — 自然学と神の問題における『規則論』の方法—」（『理想』、第 699 号、2017 年）

« La métaphysique de la “nature” dans les natures simples chez Descartes »（日仏哲学会、『フランス哲学・思想研究』、第 21 号、2016 年）など。

【Outline (in English)】

We will carefully read Descartes' *Rules for the direction of the mind* in French (the original text is in Latin and we will refer to the Latin original as necessary), which is innovative epistemological achievement of the early Descartes, but also his unfinished work.

The famous "Four Methods" discussed in the *Discourse on method* II are difficult to understand on their own, and their details can only be understood by reading the *Rules*.

Through a close reading of this book, we will try to understand what the young Descartes aimed at, what kind of research resulted in it, and why this book was left unfinished. In other words, we aim to deepen our understanding of the early Cartesian philosophy until *Discourse* by considering the scope and the accomplishment of the early Cartesian epistemology, as well as its limit.

Students are expected by the end of the course to understand, translate and explain by themselves Descartes' text in French and its background thoughts, to construct their arguments logically through readings and discussions, and to search by themselves for issues and themes they will address in their own arguments and thesis.

Before each class meeting, students are to read, translate and interpret carefully the relevant text of the next class and to consider the arguments of the text and its possible background sources and thoughts. Students in charge of presentation of the day are to prepare a resume of translation and arguments to be distributed. Required study time is two hours each before and after the class.

Grade will be decided on the following proportion. Presentation: 40%, In-class contribution: 25%, Report: 35% (if no report is assigned, Presentation: 65% & In-class contribution: 35%).

PHL600B1

科学哲学研究 I - 2

佐藤 真人

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

前期から引き続き、初期デカルト認識論の到達点である『精神指導の規則（規則論）』をフランス語で丁寧に読解します（原文はラテン語なので、適宜ラテン語原文を参照しつつ、フランス語訳で読解します）。

『方法序説（叙説）』第二部で語られた有名な「四つの方法」は、それだけでは理解が困難な箇所であり、その詳細は『規則論』を読まなければわかりません。

本書の精読によって、若きデカルトが何をめざし、それはいかなる研究による成果なのか、そして本書はなぜ未完のまま残されたのかといった点について、つまり初期デカルト認識論の射程と達成、そしてその限界について読み解くことで、『方法序説』までの初期デカルト哲学の理解をめざします。

【到達目標】

- ① デカルト『精神指導の規則』のフランス語の正確な訳読ができる（フランス語の初学者や邦訳書による受講者は、著作内容の正確な理解ができる）。
- ② 内容を正確に理解し、それについて論理的な説明と議論ができる。
- ③ テーマや問題点を自ら探し、必要な文献を読んで考察を深め、文章で表すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

以下の手順で進めます。

- ① 担当者による訳読と、その内容や背景等の説明
- ② 質疑応答や全体での議論（フランス語や日本語訳の確認、内容の解釈や背景の説明等について）
- ③ 教員のコメントと補足説明（考えられうる掘り下げや問題点等について）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	『規則論』 「第九規則」	容易な事物の考察について、訳読、解釈、議論
第 2 回	「第十規則」	発見としての哲学について、訳読、解釈、議論
第 3 回	「第十一規則」	思惟の運動による通覧について、訳読、解釈、議論
第 4 回	「第十二規則」	外部感覚と共通感覚について、訳読、解釈、議論
第 5 回	「第十二規則」	知性と想像力について、訳読、解釈、議論
第 6 回	「第十二規則」	単純本性とは何か、訳読、解釈、議論
第 7 回	「第十二規則」	単純本性の結合について、訳読、解釈、議論
第 8 回	「第十三規則」	単純性の抽出について — 磁石の例、訳読、解釈、議論
第 9 回	「第十三規則」	確実な知識の探究について — 「場所」と自然学上の例、訳読、解釈、議論
第 10 回	「第十四規則」	比較による認識について、訳読、解釈、議論
第 11 回	「第十四規則」	類比による認識について、訳読、解釈、議論

第12回「第十四規則」	知性による認識と想像力による認識について－延長の例、訳読、解釈、議論
第13回「第十四規則」	尺度による認識について、訳読、解釈、議論
第14回「第十五規則」以下	『規則論』の狙い・達成・限界について、訳読、解釈、議論、学期の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

訳読担当者は、担当箇所について、自分の言葉による日本語訳とその説明（解釈）を準備すること。
その他の受講者は当該箇所を熟読し、何が問題となっているのかを考えて授業に臨むこと。
本授業の準備学習・復習は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

以下のうち、どちらか一つ。

① René Descartes, *Œuvres complètes I. Premiers écrits: Règles pour la direction de l'esprit*, Gallimard (collection « tel »), 2016 (ISBN: 978-2070786756)

② René Descartes, *Œuvres complètes*, Vrin, 1996;2000 (ISBN: 978-2711612673) のうち、第10巻 (X)

なお、②にはラテン語原文のみで、フランス語訳はないので、②を入手する人は、別途 René Descartes, *Règles pour la direction de l'esprit*, livre de poche, 2002 (ISBN: 978-2253067535) などのフランス語訳を入手したほうがよい。

①か②のどちらかを入手するのが望ましいが、希望者には②の pdf を配布する予定。

【参考書】

邦訳は デカルト、『精神指導の規則』（野田又夫訳、岩波文庫）

または、『デカルト著作集 [4]』（白水社）。

まずは参考書に頼らず、原典（仏訳かラテン語原文）の熟読から始め、内容の精確な理解に努めてください。そのうえで、テーマに関連する参考書を各自で探すこと（授業内でも参考書については適宜言及します）。

なお、デカルトの著作は以下で検索可能。

<https://www.unicaen.fr/puc/sources/prodescartes/recherche>

ネット上の哲学辞典としては、「スタンフォード哲学百科事典」を勧めます。

<https://plato.stanford.edu/index.html>

【成績評価の方法と基準】

発表者としての内容（訳読と説明、解釈）40%、受講者としての演習への参加内容（議論への参加とその内容など）25%、レポート 35%（またはレポートを課さない場合、発表内容 65%、参加内容 35%）の割合で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

受講者の理解度に応じて、内容と進展の具合を勘案します。

【その他の重要事項】

講義の進展に伴い、初期デカルトの関連する他の著述を読む可能性もあり、その場合、講義の内容や順序が若干変わるかもしれません。

【担当教員の専門分野等】

デカルトの哲学、フランス哲学と西洋近世の哲学

【研究テーマ】

主に自然本性概念からみたデカルト哲学の総合的研究と、西洋近世哲学におけるその位置づけと発展

【主要研究業績】

「信仰を支える人間的な論拠－デカルトの『表面』について」（日本哲学会、『哲学』、第73号、2022年）

「デカルト形而上学の論証の方法－類比の考察を通じて」（日仏哲学会、『フランス哲学・思想研究』、第26号、2021年）

「デカルトの『自然の教え』とは何か－ストア派の自然本性概念との対比で－」（日本倫理学会、『倫理学年報』、第70集、2021年）

「無限か広大無辺か－デカルト形而上学の一極点の考察」（東洋大学国際哲学研究センター、『国際哲学研究』、第8号、2019年）

「デカルトはラムス主義者か－初期デカルト認識論に見る数学的方法の一側面」（日仏哲学会、『フランス哲学・思想研究』、第23号、2018年）

「『規則論』は断絶した著作か－自然学と神の問題における『規則論』の方法－」（『理想』、第699号、2017年）

« La métaphysique de la “nature” dans les natures simples chez Descartes »（日仏哲学会、『フランス哲学・思想研究』、第21号、2016年）など。

【Outline (in English)】

We will carefully read Descartes' *Rules for the direction of the mind* in French (the original text is in Latin and we will refer to the Latin original as necessary).

The famous "Four Methods" discussed in the *Discourse on method* II are difficult to understand on their own, and their details can only be understood by reading the *Rules*.

Through a close reading of this book, we will try to understand what the young Descartes aimed at, what kind of research resulted in it, and why this book was left unfinished. In other words, we aim to deepen our understanding of the early Cartesian philosophy until *Discourse* by considering the scope and the accomplishment of the early Cartesian epistemology, as well as its limit.

Students are expected by the end of the course to understand, translate and explain by themselves Descartes' text in French and its background thoughts, to construct their arguments logically through readings and discussions, and to search by themselves for issues and themes they will address in their own arguments and thesis.

Before each class meeting, students are to read, translate and interpret carefully the relevant text of the next class and to consider the arguments of the text and its possible background sources and thoughts. Students in charge of presentation of the day are to prepare a resume of translation and arguments to be distributed. Required study time is two hours each before and after the class.

Grade will be decided on the following proportion. Presentation: 40%, In-class contribution: 25%, Report: 35% (if no report is assigned, Presentation: 65% & In-class contribution: 35%).

PHL600B1

科学哲学研究Ⅱ－1

佐藤 真人

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

デカルト『方法序説（叙説）』を原典（フランス語）で丁寧に読解します。
これはデカルトの半生にわたる精神の歴史が語られたものであると同時に、デカルト哲学の原理である形而上学から、その果実である自然学や医学に至るまでの広範な内容が著者自身の言葉で明快に説明された、おそらく哲学書としては世界で最も多く読まれてきた（同時に多くの誤解もされてきた）著作の一つです。
本書の精読によって、この著作がいかなる意味で西洋哲学史において革新的だったのか、そして、デカルトが自らの哲学体系を樹立するうえでいかなる意義があったのかを考察します。

【到達目標】

- ① デカルト『方法序説』のフランス語を正確に訳読できる（フランス語の初学者や邦訳書による受講者は、著作内容の正確な理解ができる）。
- ② 内容を正確に理解し、それについて論理的な説明と議論ができる。
- ③ テーマや問題点を自ら探し、必要な文献を読んで考察を深め、文章で表すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

以下の手順で進めます。

- ① 担当者による訳読と、その内容や背景等の説明
- ② 質疑応答や全体での議論（フランス語や日本語訳の確認、内容の解釈や背景の説明等について）
- ③ 教員のコメントと補足説明（考えられうる掘り下げや問題点等について）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の概要や今後の進め方の説明
第2回	『方法序説』第一部	理性をいかに導くか、訳読、解釈、議論
第3回	『方法序説』第一部	学校で学ぶ学問について、訳読、解釈、議論
第4回	『方法序説』第一部	修辞学・数学・哲学について、訳読、解釈、議論
第5回	『方法序説』第一部	「世間という書物」について、訳読、解釈、議論
第6回	『方法序説』第二部	若きデカルトの音楽研究について、訳読、解釈、議論
第7回	『方法序説』第二部	若きデカルトの数学研究について、訳読、解釈、議論
第8回	『方法序説』第二部	方法の発見について、訳読、解釈、議論
第9回	『方法序説』第二部	方法の射程と意義について、訳読、解釈、議論
第10回	『方法序説』第三部	道徳の第一格律について、訳読、解釈、議論
第11回	『方法序説』第三部	道徳の第二格律について、訳読、解釈、議論
第12回	『方法序説』第三部	道徳の第三格律について、訳読、解釈、議論
第13回	『方法序説』第三部	「暫定的道徳」とは何か、訳読、解釈、議論

第14回 『方法序説』第四部 形而上学への着手について、訳読、解釈、議論、学期の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

訳読担当者は、担当箇所について、自分の言葉による日本語訳とその説明（解釈）を準備すること。
その他の受講者は当該箇所を熟読し、何が問題となっているのかを考えて授業に臨むこと。
本授業の準備学習・復習は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

以下のうち、どちらか一つ。

① René Descartes, *Œuvres complètes III. Discours de la Méthode et Essais*, Gallimard (collection « tel »), 2009 (ISBN:978-2070786770)

② René Descartes, *Œuvres complètes*, Vrin, 1996;2000 (ISBN:978-2711612673) のうち、第6巻 (VI)

どちらかを入手するのが望ましい（①のほうが入手は容易）が、希望者には②の pdf を配布する予定。

【参考書】

邦訳書は『方法叙説』（小泉義之訳、講談社学術文庫）など。
まずは参考書に頼らず、原典の熟読から始め、内容の正確な理解に努めてください。そのうえで、テーマに関連する参考書を各自で探すこと（授業内でも参考書については適宜言及します）。
なお、デカルトの著作は以下で検索可能。

<https://www.unicaen.fr/puc/sources/prodescartes/recherche>

ネット上の哲学辞典としては、「スタンフォード哲学百科事典」を勧めます。

<https://plato.stanford.edu/index.html>

【成績評価の方法と基準】

発表者としての内容（訳読と説明、解釈）40%、受講者としての演習への参加内容（議論への参加とその内容など）25%、レポート35%（またはレポートを課さない場合、発表内容65%、参加内容35%）の割合で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

受講者の理解度に応じて、内容と進展の具合を勘案します。

【その他の重要事項】

進展に応じて、関連する他の著述を読む可能性もあり、その場合は内容や順序が若干変わるかもしれません。
読了することより、受講者の丁寧な読解と議論を重視したいので、年度中に読了しない可能性もあります。

【担当教員の専門分野等】

デカルトの哲学、フランス哲学と西洋近世の哲学

【研究テーマ】

主に自然本性概念からみたデカルト哲学の総合的研究と、西洋近世哲学におけるその位置づけと発展

【主要研究業績】

「信仰を支える人間的な論拠 — デカルトの『表面』について」（日本哲学会、『哲学』、第73号、2022年）

「デカルト形而上学の論証の方法 — 類比的考察を通じて」（日仏哲学会、『フランス哲学・思想研究』、第26号、2021年）

「デカルトの『自然の教え』とは何か — ストア派の自然本性概念との対比で —」（日本倫理学会、『倫理学年報』、第70集、2021年）

「無限か広大無辺か — デカルト形而上学の一極点の考察」（東洋大学国際哲学研究センター、『国際哲学研究』、第8号、2019年）

「デカルトはラヌ主義者か — 初期デカルト認識論に見る数学的方法の一側面」（日仏哲学会、『フランス哲学・思想研究』、第23号、2018年）

「『規則論』は断絶した著作か — 自然学と神の問題における『規則論』の方法 —」（『理想』、第699号、2017年）

« La métaphysique de la “nature” dans les natures simples chez Descartes »（日仏哲学会、『フランス哲学・思想研究』、第21号、2016年）など。

【Outline (in English)】

This course offers a careful reading of Descartes' *Discours de la méthode* in French.

This book is probably one of the most widely read (and the most widely misunderstood) as philosophical work in the world, showing not only the philosopher's spiritual history, but also a wide range of topics from metaphysics as principle of Cartesian philosophy to nature or medicine as its one of the main fruits. A close reading of this book will help us to understand in what sense this work was revolutionary in the history of Western philosophy, how Descartes established his own system of philosophy in its broadest perspective, and what significance it had for the philosopher himself in the development of his own system.

Students are expected by the end of the course to understand, translate and explain by themselves Descartes' text in French and its background thoughts, to construct their arguments logically through readings and discussions, and to search by themselves for issues and themes they will address in their own arguments and thesis.

Before each class meeting, students are to read, translate and interpret carefully the relevant text of the next class and to consider the arguments of the text and its possible background sources and thoughts. Students in charge of presentation of the day are to prepare a resume of translation and arguments to be distributed. Required study time is two hours each before and after the class.

Grade will be decided on the following proportion. Presentation: 40%, In-class contribution: 25%, Report: 35% (if no report is assigned, Presentation: 65% & In-class contribution: 35%).

PHL600B1

科学哲学研究Ⅱ－2

佐藤 真人

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

前期から引き続き、デカルト『方法序説（叙説）』を原典（フランス語）で丁寧に読解します。

これはデカルトの半生にわたる精神の歴史が語られたものであると同時に、デカルト哲学の原理である形而上学から、その果実である自然科学や医学に至るまでの広範な内容が著者自身の言葉で明快に説明された、おそらく哲学書としては世界で最も多く読まれてきた（同時に多くの誤解もされてきた）著作の一つです。

本書の精読によって、この著作がいかなる意味で西洋哲学史において革新的だったのか、そして、デカルトが自らの哲学体系を樹立するうえでいかなる意義があったのかを考察します。

【到達目標】

- ① デカルト『方法序説』のフランス語を正確に訳読できる（フランス語の初学者や邦訳書による受講者は、著作内容の正確な理解ができる）。
- ② 内容を正確に理解し、それについて論理的な説明と議論ができる。
- ③ テーマや問題点を自ら探し、必要な文献を読んで考察を深め、文章で表すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

以下の手順で進めます。

- ① 担当者による訳読と、その内容や背景等の説明
- ② 質疑応答や全体での議論（フランス語や日本語訳の確認、内容の解釈や背景の説明等について）
- ③ 教員のコメントと補足説明（考えられうる掘り下げや問題点等について）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	『方法序説』第四部	「コギト」の発見について、訳読、解釈、議論
第2回	『方法序説』第四部	神の発見について、訳読、解釈、議論
第3回	『方法序説』第四部	神の真理と幾何学の真理について、訳読、解釈、議論
第4回	『方法序説』第四部	懐疑の解除と理性の明証性について、訳読、解釈、議論
第5回	『方法序説』第五部	『世界論』について、訳読、解釈、議論
第6回	『方法序説』第五部	自然法則と宇宙の形成について、訳読、解釈、議論
第7回	『方法序説』第五部	『人間論』について、訳読、解釈、議論
第8回	『方法序説』第五部	人体構造と機械について、訳読、解釈、議論
第9回	『方法序説』第六部	自然科学研究の目的について、訳読、解釈、議論
第10回	『方法序説』第六部	自然科学研究の方法について、訳読、解釈、議論
第11回	『方法序説』第六部	自然科学研究の現状と今後について、訳読、解釈、議論
第12回	『方法序説』第六部	自然科学の真理発見と実験について、訳読、解釈、議論

- 第13回 『方法序説』第六部 自然学の論証と循環論法について、訳読、解釈、議論
- 第14回 『方法序説』第六部 『方法序説』の狙いと達成について、訳読、解釈、議論と総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

訳読担当者は、担当箇所について、自分の言葉による日本語訳とその説明（解釈）を準備すること。

その他の受講者は当該箇所を熟読し、何が問題となっているのかを考えて授業に臨むこと。

本授業の準備学習・復習は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

以下のうち、どちらか一つ。

① René Descartes, *Œuvres complètes III. Discours de la Méthode et Essais*, Gallimard (collection « tel »), 2009 (ISBN:978-2070786770)

② René Descartes, *Œuvres complètes*, Vrin, 1996;2000 (ISBN:978-2711612673)のうち、第6巻(VI)

どちらかを入手するのが望ましい（①のほうが入手は容易）が、希望者には②のpdfを配布する予定。

【参考書】

邦訳書は『方法叙説』（小泉義之訳、講談社学術文庫）など。

まずは参考書に頼らず、原典の熟読から始め、内容の精確な理解に努めてください。そのうえで、テーマに関連する参考書を各自で探すこと（授業内でも参考書については適宜言及します）。

なお、デカルトの著作は以下で検索可能。

<https://www.unicaen.fr/puc/sources/prodescartes/recherche>

ネット上の哲学辞典としては、「スタンフォード哲学百科事典」を勧めます。

<https://plato.stanford.edu/index.html>

【成績評価の方法と基準】

発表者としての内容（訳読と説明、解釈）40%、受講者としての演習への参加内容（議論への参加とその内容など）25%、レポート35%（またはレポートを課さない場合、発表内容65%、参加内容35%）の割合で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

受講者の理解度に応じて、内容と進展の具合を勘案します。

【その他の重要事項】

進展に応じて、関連する他の著述を読む可能性もあり、その場合は内容や順序が若干変わるかもしれません。

読了することより、受講者の丁寧な読解と議論を重視したいので、年度中に読了しない可能性もあります。

【担当教員の専門分野等】

デカルトの哲学、フランス哲学と西洋近世の哲学

【研究テーマ】

主に自然本性概念からみたデカルト哲学の総合的研究と、西洋近世哲学におけるその位置づけと発展

【主要研究業績】

「信仰を支える人間的な論拠 — デカルトの『表面』について」（日本哲学会、『哲学』、第73号、2022年）

「デカルト形而上学の論証の方法 — 類比の考察を通じて」（日仏哲学会、『フランス哲学・思想研究』、第26号、2021年）

「デカルトの『自然の教え』とは何か — ストア派の自然本性概念との対比で —」（日本倫理学会、『倫理学年報』、第70集、2021年）

「無限か広大無辺か — デカルト形而上学の一極点の考察」（東洋大学国際哲学研究センター、『国際哲学研究』、第8号、2019年）

「デカルトはラムス主義者か — 初期デカルト認識論に見る数学的方法の一側面」（日仏哲学会、『フランス哲学・思想研究』、第23号、2018年）

「『規則論』は断絶した著作か — 自然学と神の問題における『規則論』の方法 —」（『理想』、第699号、2017年）

« La métaphysique de la “nature” dans les natures simples chez Descartes »（日仏哲学会、『フランス哲学・思想研究』、第21号、2016年）など。

【Outline (in English)】

This course offers a careful reading of Descartes' *Discours de la méthode* in French.

This book is probably one of the most widely read (and the most widely misunderstood) as philosophical work in the world, showing not only the philosopher's spiritual history, but also a wide range of topics from metaphysics as principle of Cartesian philosophy to nature or medicine as its one of the main fruits. A close reading of this book will help us to understand in what sense this work was revolutionary in the history of Western philosophy, how Descartes established his own system of philosophy in its broadest perspective, and what significance it had for the philosopher himself in the development of his own system.

Students are expected by the end of the course to understand, translate and explain by themselves Descartes' text in French and its background thoughts, to construct their arguments logically through readings and discussions, and to search by themselves for issues and themes they will address in their own arguments and thesis.

Before each class meeting, students are to read, translate and interpret carefully the relevant text of the next class and to consider the arguments of the text and its possible background sources and thoughts. Students in charge of presentation of the day are to prepare a resume of translation and arguments to be distributed. Required study time is two hours each before and after the class.

Grade will be decided on the following proportion. Presentation: 40%, In-class contribution: 25%, Report: 35% (if no report is assigned, Presentation: 65% & In-class contribution: 35%).

PHL600B1

近代西洋哲学研究 I - 1

松井 久

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

アンリ・ベルクソン最後の主著『道徳と宗教の二つの源泉』をフランス語で読む。テキストを批判的に読みながら、個人と社会の問題、哲学と科学の問題を深めることが目的である。

【到達目標】

哲学の古典を原語で正確に理解できるようになる。ベルクソンの議論を哲学史・科学史の文脈の中で理解できるようになる。ベルクソンのテキストの検討から出発して、社会と個人の問題に新しいアプローチができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

一文ずつ訳しながら、まとまったところで議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	授業の進め方の紹介と自己紹介
第 2 回	社会の秩序と自然の秩序 (1)	訳読
第 3 回	社会の秩序と自然の秩序 (2)	訳読と議論。(議論のテーマ) ベルクソンのホーリズム
第 4 回	社会の秩序と自然の秩序 (3)	訳読と議論。(議論のテーマ) 自然法則と社会の規則
第 5 回	社会の中の個人 (1)	訳読
第 6 回	社会の中の個人 (2)	訳読と議論。(議論のテーマ) 社会と個人の緊張関係の歴史的な文脈
第 7 回	個人の中の社会 (1)	訳読
第 8 回	個人の中の社会 (2)	訳読と議論。(議論のテーマ) 社会の個人への内在
第 9 回	自発的服従 (1)	訳読
第 10 回	自発的服従 (2)	訳読と議論。(議論のテーマ) 社会的本能
第 11 回	抵抗への抵抗 (1)	訳読
第 12 回	抵抗への抵抗 (2)	訳読と議論。(議論のテーマ) 力としての社会
第 13 回	抵抗への抵抗 (3)	訳読と議論。(議論のテーマ) 生物学的にとらえられた社会
第 14 回	まとめ	議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
テキストを読む。わからない単語は調べ、すべて文法的に説明できるようにする。毎回、内容的に、明確な問題提起を行えるようにする。

【テキスト（教科書）】

Bergson, Henri, Les deux sources de la morale et de la religion (1932), l'édition critique, Paris, PUF, 2013.

【参考書】

授業中に適宜指示する。

翻訳は『道徳と宗教の二つの源泉』（ちくま学芸文庫）合田正人、小野浩太郎訳、筑摩書房、2015 年。

【成績評価の方法と基準】

授業での訳読によってフランス語の習熟度を評価し（50 %）と議論への参加と学期末のレポートでベルクソン哲学への理解度を評価（50 %）する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞生物学の哲学、19 世紀哲学

＜研究テーマ＞生物学における個性性、環境概念の歴史的考察
＜主要研究業績＞

« L'individualité biologique chez Bergson », Implications philosophiques, Bergson ou la science (Ebook), 2013, p. 8-26.

« La "métaphysique positive" de Bergson et la pensée positive en France au 19e siècle », Tetsugaku : International Journal of the Philosophical Association of Japan, vol. 1, 2017, p. 58-72.

« Bergson dans l'histoire de la pensée biologique du milieu », フランス哲学・思想研究 22 号, 2017, p. 231-241.

【Outline (in English)】

(Course outline) This seminar analyzes Bergson's Les deux sources de la morale et de la religion.

(Learning Objectives) The goals are to read the original philosophical text precisely, to propose a new approach to the relations between the individual and the society.

(Learning activities outside of classroom) Before and after each class meeting, participants will be expected to spend two hours to understand the text.

(Grading Criteria /Policy) Final grade will be based on in-class contribution(50%) and term-end paper (50%).

PHL600B1

近代西洋哲学研究 I - 2

松井 久

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

アンリ・ベルクソン最後の主著『道徳と宗教の二つの源泉』をフランス語で読む。テキストを批判的に読みながら、個人と社会の問題、哲学と科学の問題を深めることが目的である。

【到達目標】

哲学の古典を原語で正確に理解できるようになる。ベルクソンの議論を哲学史・科学史の文脈の中で理解できるようになる。ベルクソンのテキストの検討から出発して、社会と個人の問題に新しいアプローチができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

一文ずつ訳しながら、まとまったところで議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	授業の進め方の紹介と自己紹介
第 2 回	定言命法（1）	訳読
第 3 回	定言命法（2）	訳読と議論。（議論のテーマ）カントの定言命法
第 4 回	責務と生（1）	訳読
第 5 回	責務と生（2）	訳読と議論。（議論のテーマ）ベルクソンのカント批判
第 6 回	閉じた社会（1）	訳読
第 7 回	閉じた社会（2）	訳読と議論。（議論のテーマ）道徳と社会
第 8 回	閉じた社会（3）	訳読と議論。（議論のテーマ）現代社会の分析への適用。
第 9 回	英雄の呼びかけ（1）	訳読
第 10 回	英雄の呼びかけ（2）	訳読と議論。（議論のテーマ）「呼びかけ」とは何か？
第 11 回	閉じた魂と開いた魂（1）	訳読
第 12 回	閉じた魂と開いた魂（2）	訳読と議論。（議論のテーマ）ベルクソンの対概念の検討。「自由」と「決定」、「創造」と「反復」
第 13 回	閉じた魂と開いた魂（3）	訳読と議論。（議論のテーマ）「開いた魂」は「閉じた魂」をどのようにして乗り越えることができるのか？
第 14 回	まとめ	議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
テキストを読む。わからない単語は調べ、すべて文法的に説明できるようにする。毎回、内容的に、明確な問題提起を行えるようにする。

【テキスト（教科書）】

Bergson, Henri, *Les deux sources de la morale et de la religion* (1932), l'édition critique, Paris, PUF, 2013.

【参考書】

授業中に適宜指示する。

翻訳は『道徳と宗教の二つの源泉』（ちくま学芸文庫）合田正人、小野浩太郎訳、筑摩書房、2015 年。

【成績評価の方法と基準】

授業での訳読によってフランス語の習熟度を評価し（50 %）と議論への参加と学期末のレポートでベルクソン哲学への理解度を評価（50 %）する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞生物学の哲学、19 世紀哲学

＜研究テーマ＞生物学における個性、環境概念の歴史的考察

＜主要研究業績＞

« L'individualité biologique chez Bergson », *Implications philosophiques, Bergson ou la science* (Ebook), 2013, p. 8-26.

« La "métaphysique positive" de Bergson et la pensée positive en France au 19e siècle », *Tetsugaku : International Journal of the Philosophical Association of Japan*, vol. 1, 2017, p. 58-72.

« Bergson dans l'histoire de la pensée biologique du milieu », *フランス哲学・思想研究* 22 号, 2017, p. 231-241.

【Outline (in English)】

(Course outline) This seminar analyzes Bergson's *Les deux sources de la morale et de la religion*.

(Learning Objectives) The goals are to read the original philosophical text precisely, to propose a new approach to the relations between the individual and the society.

(Learning activities outside of classroom) Before and after each class meeting, participants will be expected to spend two hours to understand the text.

(Grading Criteria / Policy) Final grade will be based on in-class contribution(50%) and term-end paper (50%).

PHL600B1

近代フランス哲学史研究Ⅰ－Ⅰ

酒井 健

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

フランスの思想家ジョルジュ・バタイユ（1897-1962）の後期の思想を理解する。作品としては 1950 年代の未発表草稿『至高性』を対象にする。バタイユの基本から理解していき、フランス現代思想との点を探る。

【到達目標】

【修士課程】

- ①「呪われた部分」「蕩尽」など基本的な概念をしっかり押さえて後期バタイユの重要概念「至高性」を理解する。
- ②とりわけ『至高性』第 2 部と第 3 部を中心に精読していく。
- ③各自の修士論文テーマとの関連を考えていく。

【博士後期課程】

より一層深いバタイユの理解へ達する。たとえば「交流」「共同体」の問題をフランス現代思想の視点に立って理解していく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- 1) ゼミ形式の講読の授業。原書でバタイユの文章を読んでいく。適宜、受講生の発表を交えていく。
- 2) 課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定
- 3) なお、本年度の開講は 2022 年 4 月 9 日土曜日（2 時限）に教室にて対面で行う予定である。ただし社会情勢に応じてオンラインのズーム授業に転じる場合もある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	授業紹介	春学期の予定を説明する。
第 2 回	『至高性』第 1 回	バタイユと『至高性』の概要説明
第 3 回	『至高性』第 2 回	第 3 部第 1 章第 1 節
第 4 回	『至高性』第 3 回	第 3 部第 1 章第 2 節
第 5 回	『至高性』第 4 回	第 3 部第 1 章第 3 節
第 6 回	『至高性』第 5 回	第 3 部第 1 章第 4 節
第 7 回	『至高性』第 6 回	第 3 部第 1 章第 5 節
第 8 回	『至高性』第 7 回	第 3 部第 2 章第 1 節
第 9 回	『至高性』第 8 回	第 3 部第 2 章第 2 節
第 10 回	『至高性』第 9 回	第 3 部第 2 章第 3 節
第 11 回	『至高性』第 10 回	第 3 部第 2 章第 4 節
第 12 回	『至高性』第 11 回	第 3 部第 2 章第 5 節
第 13 回	『至高性』第 12 回	第 3 部第 2 章第 6 節
第 14 回	『至高性』第 13 回	第 3 部第 2 章第 7 節

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

バタイユならびに現代思想に関心を持って読書を進めてほしい。とくに参考書にあげた文献は読んでおいてほしい。本授業は準備。復習に各 4 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

La Souveraineté in Œuvres Complètes de Georges Bataille, tome VIII, Gallimard

【参考書】

酒井健著『バタイユ入門』（ちくま新書）、湯浅博雄『消尽』（講談社学術文庫）、
バタイユ著『呪われた部分、全般経済学試論・蕩尽』（酒井健訳、ちくま学芸文庫）

【成績評価の方法と基準】

【修士課程】

- ①毎回の訳出（50 %）
 - ②学期末の発表（50 %）
- ≪ 到達目標との対応 ≫
上記①と②を通して、修士課程「到達目標」の①と②と③を確認していく。

【博士後期課程】

- ①毎回の訳出（50 %）
 - ②学期末の発表（50 %）
- 《到達目標との対応》
上記①と②を通して、博士後期課程の「到達目標」を確認していく。

【学生の意見等からの気づき】

特にない。

【学生が準備すべき機器他】

特にない。

【その他の重要事項】

特にない。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>フランス現代思想

<研究テーマ>バタイユ研究

<主要研究業績>

『夜の哲学 バタイユから生の深淵へ』（青土社、2016 年）

【Outline (in English)】

【Course outline】

The purpose of this course is to learn the thought of Georges Bataille.

【Learning Objectives】

Especially at the end of this course, students are expected to a good comprehension of one of his last works :Souveraineté. That is mainly by the reading of original French text of this work.

【Learning activities outside of classroom】

Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter from the text. Your study time will be more than four hours for a class.

【Grading Criteria】

Your overall grade in the class will be based on the following. Translation in each class meeting:50 % and presentation at the end of this course:50%.

PHL600B1

近代フランス哲学史研究Ⅰ－2

酒井 健

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

春学期に引き続きフランスの思想家ジョルジュ・バタイユ(1897-1962)の後期の思想を理解する。作品としては1950年代の未発表草稿『至高性』を対象にする。バタイユの基本から理解していき、フランス現代思想との点を探る。

【到達目標】

【修士課程】

- ①「呪われた部分」「蕩尽」など基本的な概念をしっかり押さえて後期バタイユの重要概念「至高性」を理解する。
- ②とりわけ『至高性』第3部と第4部を中心に精読していく。
- ③各自の修士論文テーマとの関連を考えていく。

【博士課程】

より一層深いバタイユの理解へ達する。たとえば「交流」「共同体」の問題をフランス現代思想の視点に立って理解していく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- 1) ゼミ形式の講読の授業。
- 2) 原書でバタイユの文章を読んでいく。適宜、受講生の発表を交える。
- 3) 課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定していく。
- 4) なお、本年度は教室にて対面で行う予定である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	授業紹介	秋学期授業の内容紹介とテキスト紹介
第2回	『至高性』第1回	第3部第2章第8節
第3回	『至高性』第2回	第3部第2章第9節
第4回	『至高性』第3回	第3部第2章第10節
第5回	『至高性』第4回	第3部第2章第11節
第6回	『至高性』第5回	第4部第1章第1節
第7回	『至高性』第6回	第4部第1章第2節
第8回	『至高性』第7回	第4部第1章第3節
第9回	『至高性』第8回	第4部第2章第1節
第10回	『至高性』第9回	第4部第2章第2節
第11回	『至高性』第10回	第4部第2章第3節
第12回	『至高性』第11回	第4部第2章第4節
第13回	『至高性』第12回	第4部第2章第5節
第14回	『至高性』第13回	まとめと出席者による発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

バタイユおよびフランス現代思想の著作に親しんでおくこと。
本授業は準備と復習にそれぞれ4時間かけることを標準とする。

【テキスト（教科書）】

La Souveraineté in Œuvres Complètes de Georges Bataille, tome VIII, Gallimard

【参考書】

『バタイユ入門』ちくま新書、酒井健著

【成績評価の方法と基準】

【修士課程】

- ①毎回の訳出（50 %）
- ②学期末の発表（50 %）

＜到達目標との対応＞

上記①と②を通して、修士課程「到達目標」の①と②と③を確認していく。

【博士課程】

- ①毎回の訳出（50 %）
- ②学期末の発表（50 %）

《到達目標との対応》

上記①と②を通して、博士後期課程の「到達目標」を確認していく。

【学生の意見等からの気づき】

概ね良好であった。学生からの要望には随時対応するので、気軽に伝えてほしい。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞フランス現代思想

＜研究テーマ＞バタイユ研究

＜主要研究業績＞

『バタイユ入門』ちくま新書

【Outline (in English)】

【Course outline】

The purpose of this course is to learn the thought of Georges Bataille.

【Learning Objectives】

Especially at the end of this course, students are expected to a good comprehension of one of his last works :Souveraineté. That is mainly by the reading of original French text of this work.

【Learning activities outside of classroom】

Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter from the text. Your study time will be more than four hours for a class.

【Grading Criteria】

Your overall grade in the class will be based on the following.
Translation in each class meeting:50 % and presentation at the end of this course:50%.

PHL600B1

近代フランス哲学史研究Ⅱ－Ⅰ

酒井 健

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

フランスの思想家ジャック・デリダ（1930-2004）の後期の思想を理解する。作品としては昨年度に引き続いて、1998年発表のブランション論 *Demeure*（邦題では『滞留』）の後半を読んでいく。デリダの基本から理解していき、フランス現代思想との接点を探る。

【到達目標】

【修士課程】

①「宗教」「文学」などに対するデリダの基本的な考え方を知って、現代思想への理解を深めていく。

②とりわけ *Demeure* 後半を中心に精読していく。

③各自の修士論文テーマとの関連を考えていく。

【博士後期課程】

より一層深いデリダの理解へ達する。たとえば「記号論」「正義論」の問題をフランス現代思想の視点に立って理解していく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

ゼミ形式の講読の授業。原書でデリダの文章を読んでいく。適宜、受講生の発表を交えていく。

課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定である。

今年度の授業は4月10日土曜日から教室にて対面形式で行う予定。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	授業紹介	今期の授業の概要の説明。デリダに関する院生の研究発表
第2回	<i>Demeure</i> 第1回	テキスト 123-125 頁の解説。
第3回	<i>Demeure</i> 第2回	テキスト 125-127 頁解説
第4回	<i>Demeure</i> 第3回	テキスト 127-129 頁解説
第5回	<i>Demeure</i> 第4回	テキスト 129-131 頁解説
第6回	<i>Demeure</i> 第5回	テキスト 131-133 頁解説
第7回	<i>Demeure</i> 第6回	テキスト 133-135 頁解説
第8回	<i>Demeure</i> 第7回	テキスト 135-137 頁解説
第9回	<i>Demeure</i> 第8回	テキスト 137-139 頁解説
第10回	<i>Demeure</i> 第9回	テキスト 139-141 頁解説
第11回	<i>Demeure</i> 第10回	テキスト 141-143 頁解説
第12回	<i>Demeure</i> 第11回	テキスト 143-144 頁解説
第13回	<i>Demeure</i> 第12回	授業内容に関する院生の研究発表
第14回	試験、まとめ	まとめと復習

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

デリダの入門書や翻訳書などを読んでおくこと。

たとえば

『ジャック・デリダ入門講義』仲正昌樹著、作品社

『ポジション』デリダ著、高橋允昭訳、青土社

【テキスト（教科書）】

Jacques Derrida, *Demeure*, Galilée, 1998

【参考書】

デリダ著『滞留』湯浅博雄監訳、郷原佳以訳、未来社

高橋哲哉著『デリダ』（講談社）等

【成績評価の方法と基準】

【修士課程】

①毎回の訳出（50 %）

②学期末の発表（50 %）

《到達目標との対応》

上記①と②を通して、修士課程「到達目標」の①と②と③を確認していく。

【博士後期課程】

①毎回の訳出（50 %）

②学期末の発表（50 %）

《到達目標との対応》

上記①と②を通して、博士後期課程の「到達目標」を確認していく。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞フランス現代思想

＜研究テーマ＞バタイユ研究

＜主要研究業績＞

『夜の哲学 バタイユから生の深淵へ』（青土社、2016年）

【Outline (in English)】

【Course outline】

The purpose of this course is to learn the thought of Jacques Derrida.

【Learning Objectives】

Especially at the end of this course, students are expected to have a good comprehension of one of his last works :*Demeure*. That is mainly by the reading of original French text of this work.

【Learning activities outside of classroom】

Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter from the text. Your study time will be more than four hours for a class.

【Grading Criteria】

Your overall grade in the class will be based on the following.

Translation in each class meeting:50 % and presentation at the end of this course:50%.

PHL600B1

近代フランス哲学史研究Ⅱ－2

酒井 健

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

フランスの思想家ジャック・デリダ（1930-2004）の後期の思想を理解する。作品としては写真論でもある *Demeure, Athènes* (邦題では『留まれ、アテネ』) を読んでいく。デリダの基本から理解していき、フランス現代思想との接点を探る。

【到達目標】

【修士課程】

- ①「宗教」「文学」などに対するデリダの基本的な考え方を知って、現代思想への理解を深めていく。
- ② *Demeure, Athènes* を中心に精読していく。
- ③ 各自の修士論文テーマとの関連を考えていく。

【博士後期課程】

より一層深いデリダの理解へ達する。たとえば「記号論」「正義論」の問題をフランス現代思想の視点に立って理解していく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- 1) ゼミ形式の講読の授業。
- 2) フランス語原文でデリダの文章を読んでいく。適宜、受講生の発表を交えていく。
- 3) 題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定
- 4) 本授業の開講は 2021 年 9 月 18 日土曜日（3 時限）、教室にて対面形式で行う予定である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	<i>Demeure, Athènes</i> 第 1 回	今期の授業の概要の説明。デリダに関する院生の研究発表
第 2 回	<i>Demeure, Athènes</i> 第 2 回	テキスト 9-13 頁解説
第 3 回	<i>Demeure, Athènes</i> 第 3 回	テキスト 13-17 頁解説
第 4 回	<i>Demeure, Athènes</i> 第 4 回	テキスト 17-21 頁解説
第 5 回	<i>Demeure, Athènes</i> 第 5 回	テキスト 21-25 頁解説
第 6 回	<i>Demeure, Athènes</i> 第 6 回	テキスト 25-29 頁解説
第 7 回	<i>Demeure, Athènes</i> 第 7 回	テキスト 29-33 頁、および 141-144 頁解説
第 8 回	<i>Demeure, Athènes</i> 第 8 回	テキスト 33-37 頁解説
第 9 回	<i>Demeure, Athènes</i> 第 9 回	テキスト 41-45 頁解説
第 10 回	<i>Demeure, Athènes</i> 第 10 回	テキスト 45-49 頁解説
第 11 回	<i>Demeure, Athènes</i> 第 11 回	テキスト 49-53 頁解説
第 12 回	<i>Demeure, Athènes</i> 第 12 回	テキスト 53 - 57 頁
第 13 回	<i>Demeure, Athènes</i> 第 13 回	テキスト 57 - 61 頁
第 14 回	まとめ	院生による発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

春学期に指示した文献を読んでおくこと。
本授業の準備・復習時間は各 4 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

Jacques Derrida, *Demeure, Athènes*; Galilée, 2009

【参考書】

デリダ著『留まれ、アテネ』、矢橋透訳、みすず書房

【成績評価の方法と基準】

【修士課程】

- ①毎回の訳出（50 %）
- ②学期末の発表（50 %）

≪ 到達目標との対応 ≫

上記①と②を通して、修士課程「到達目標」の①と②と③を確認していく。

【博士後期課程】

- ①毎回の訳出（50 %）
- ②学期末の発表（50 %）

≪ 到達目標との対応 ≫

上記①と②を通して、博士後期課程の「到達目標」を確認していく。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞フランス現代思想

＜研究テーマ＞ジョルジュ・バタイユ研究

＜主要研究業績＞近刊の訳書に『呪われた部分・全般経済学試論・蕩尽』（バタイユ著、ちくま学芸文庫）がある。

【Outline (in English)】

【Course outline】

The purpose of this course is to learn the thought of Jacques Derrida.

【Learning Objectives】

Especially at the end of this course, students are expected to have a good comprehension of one of his last works :*Demeure, Athènes*. That is mainly by the reading of original French text of this work.

【Learning activities outside of classroom】

Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter from the text. Your study time will be more than four hours for a class.

【Grading Criteria】

Your overall grade in the class will be based on the following. Translation in each class meeting:50 % and presentation at the end of this course:50%.

PHL600B1

超越論哲学研究Ⅱ－１

大森 一三

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この講義の目的は、学生が『判断力批判』の内容を理解し、カントの批判哲学におけるこの書の意義や今日的課題を説明できるようになることです。さらに学生が、カントの批判哲学の哲学的意義と今日的意義の両者の結びつきを理解することが、本講義の目的です。

【到達目標】

学生が、カント『判断力批判』の読解を通じて、この本の内容と意義を把握すること。

学生が、『判断力批判』の思想理解を応用して、それぞれの関心に応じた哲学的思考を展開することができるようにすること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的にはオンラインと対面を併用して授業を実施します。受講者の要望に応じて、時間や進め方について調整してゆく予定です。授業では、毎回報告者を決めて、内容考察のレポートやテキストの精読を担当していただき、相互の質疑応答により、内容理解と目的達成に努める。また、適宜、受講生にリアクションペーパーの提出を求め、授業内でフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	批判哲学の概要	批判哲学の思想史上の意義と課題
第2回	三批判書の特徴と内容	三批判書の狙いと構成について
第3回	『判断力批判』の内容と構成	第三批判の狙いと意義について
第4回	『判断力批判』序論について	2つの序論の内容と違いについて
第5回	『判断力批判』第1節の読解	「感性」の特徴と意味について
第6回	『判断力批判』第2節の読解	「趣味」とは何か
第7回	『判断力批判』第3節の読解	批判哲学における「快」の意義
第8回	『判断力批判』第4節の読解	「善」について考える
第9回	ディスカッション	現代における美・芸術と『判断力批判』について考える
第10回	『判断力批判』第5節の読解	「快」・「善」・「美」の比較
第11回	『判断力批判』第6節の読解	「美感的判断」とは何か
第12回	『判断力批判』第7節の読解	「美感的判断」と悟性の関係について
第13回	『判断力批判』第8節の読解	主観的判断と客観的判断の違いとその意味について
第14回	本範囲の振り返りと総括	趣味判断の特徴と意義について

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業内で示される講読範囲についての予習が必要です。また、各回での授業内容・訳読についての復習を行うことも推奨します。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

Immanuel Kant, Kritik der Urteilkraft. Meiner, (PHB 39a.), (Amazonにて、2000円程度)。岩波書店版『カント全集』第8巻（牧野英二訳・解説、5200円）。

【参考書】

高峯一愚『カント判断力批判注釈』（論創社、1990年）。『崇高の哲学—情感豊かな理性の構築に向けて』（法政大学出版局、2007年）、『新・カント読本』（法政大学出版局、2018年）いずれも牧野英二著・編。大森一三『文化の進歩と道徳性——カント哲学の「隠されたアンチノミー」』（法政大学出版局、2019年）、御子柴善之『カント 純粋理性批判』（角川書店、2020年）。

【成績評価の方法と基準】

訳読及び内容の報告・疑問点の提示を含む発表40%（発表数及び内容の適切さや独創性の評価を含む）、質疑応答30%（討論参加の回数、その努力や説得力の判定・評価）、春学期末提出のレポート（30%）。

【学生の意見等からの気づき】

できるだけ受講者の皆さんと話し合い、それぞれの興味関心や研究テーマに応じて授業を進めてゆく予定です。

【学生が準備すべき機器他】

オンライン授業に参加できるための機器（パソコン、タブレット、スマホ等）

【その他の重要事項】

初回の授業の際に、受講者からの要望を受けての調整を行いたいと思います。幅広い関心を持った学生の参加を期待しています。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

カント哲学、哲学的文明論、比較思想、教育哲学

<研究テーマ>

近現代哲学および文化、文明に関する哲学的考察

世界市民教育と哲学の関係についての研究

<主要研究業績>

文化の進歩と道徳性—カント哲学の隠されたアンチノミー』（法政大学出版局、2019年）、「世界市民教育としての哲学」（『哲学の返還と知の越境:伝統的思考法を問い直すための手引き』法政大学出版局、2019年）、「純粋理性宗教と歴史的信仰の相克」（牧野英二編『新・カント読本』、法政大学出版局、2018年）等

【Outline (in English)】

【Course outline】

The purpose of this course is to enable students to understand the contents of the "Critique of Judgment" and to explain the significance of this book in Kant's critical philosophy and its issues today. In addition, the aim of this lecture is for students to understand the connection between the historical and contemporary significance of Kant's critical philosophy.

【Learning Objectives】

To understand the content and significance of the Critique of Judgment.

To be able to apply the understanding of the ideas in "Critique of Judgment" to develop philosophical thinking in accordance with their own interests.

【Learning activities outside of classroom】

The class will be conducted both online and face-to-face, and the time and format will be adjusted according to the needs of the students.

In each class, a presenter will be assigned to write a report on the contents and to do a close reading of the text, and we will try to understand the contents and achieve the objectives through mutual questions and answers. In addition, students will be asked to submit reaction papers, and feedback will be given in class.

【Grading Criteria / Policy】

Report and presentation of the translation and its contents in each class (50%), A report at the end of the semester (50%).

PHL600B1

超越論哲学研究Ⅱ－２

鵜澤 和彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、カント『純粋理性批判』の「序文」（第1版及び第2版）を精読し、批判哲学に固有の問題設定と思考法を明らかにしていく。また、邦訳を使いながら、ドイツ語テキストの読解、並びに、論文の書き方に習熟することも本授業の目的とする。なお、ドイツ語を履修していない受講生にも配慮して、テキストの邦訳（教科書の欄を参考）による参加も可とする。

【到達目標】

- ①ドイツ語原文の文法、表現に関する疑問を解決していくことで、テキストを正確に読み、翻訳する能力を向上させることができる。また、ドイツ語の概念の語源と使用法について、正確な歴史的理解を深めることができる。
- ②カントの問題設定や思考法の特徴を捉えることで、哲学的な議論の組み立て方、論証方法、事例の使い方、要約の仕方、すなわち、論文の書き方を学ぶことができる。
- ③『純粋理性批判』の読解を通して、感覚と知覚、思考と認識、世界と自己との関係をより深く考察することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業は対面の演習形式で行う。(1) 前回の内容をまとめ、受講生から寄せられた質問に答える。(2) ドイツ語テキストの訳読を行い、ドイツ語の文章の内容理解を深める。(3) テキストの内容理解が困難な点を挙げ、質疑応答を通じて、テキストの理解を深める。(4) カントのテキストの内容がよく分かるように解説する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	教員紹介、ゼミの仕方、テキスト及び参考書、『純粋理性批判』の全体像とその意義の解説
第2回	理性の本性としての形而上学的関心	第1版序文、A VII から A XII (原書頁数)
第3回	純粋悟性概念の演繹	第1版序文（続）、A XIII から A XVII
第4回	直観と概念、分析と総合	第1版序文（続）、A XVIII から A XXII
第5回	学的認識としての数学と物理学	第2版序文、B VII から B XI
第6回	思考法の革命	第2版序文（続）、B XII から B XV
第7回	コペルニクスの転回	第2版序文（続）、B XVI から B XXI
第8回	思考、認識、経験	第2版序文（続）、B XXII から B XXVI
第9回	形而上学と実践哲学	第2版序文（続）、B XXII から B XXVI
第10回	純粋悟性概念の演繹	第2版序文（続）、B XXVII から B XXX
第11回	形而上学的関心と迷妄	第2版序文（続）、B XXXI から B XXXV
第12回	書き換えの意図	第2版序文（続）、B XXXVI から B XXXIX
第13回	晦渋な文体の弁明	第2版序文（続）、B XL から B XLIV

第14回 第1版と第2版序文 期末レポート発表のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

予習：授業で精読するテキストの箇所を読み、分りにくい点、疑問点などを洗い出す（2時間）。復習：分りにくい点や疑問点が解決されたかを確認し、その回の学習内容をまとめる（2時間）。

【テキスト（教科書）】

- ① I. Kant, *Kritik der reinen Vernunft*. Herausgegeben von Jens Timmermann. Felix Meiner Verlag.
- ② (邦訳書)『カント全集』岩波書店版・第5巻、理想社版・第5巻、その他多数。
- ③ (英訳書) ケンブリッジ版 I. Kant, *Critique of Pure Reason* (The Cambridge Edition of the Works of Immanuel Kant).

【参考書】

- ① 牧野英二編『新・カント読本』（法政大学出版局、2018年）
- ② 天野貞祐『「純粋理性批判」について』（講談社学術文庫、1980年）

【成績評価の方法と基準】

①前回のまとめ、テキスト読解や質疑応答で観察される到達目標達成度。②レポート課題で確認される到達目標達成度。①を50%、②を50%で評価する。その際、到達目標に挙げられた以下の基準に準拠する。①ドイツ語が正しく理解されているかどうか(30%)。②哲学的な論証の構造及び方法が理解できているかどうか(40%)。③認識の基本構造について十分な理解ができているかどうか(30%)。なお、ドイツ語未履修者の場合は、②と③がそれぞれ50%となる。

【学生の意見等からの気づき】

ゼミ参加者の研究テーマに配慮しながら、認識批判の諸概念を理解しやすく解説する。また、ドイツ語の読み方や文法の説明も併せて行う。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

オフィスアワーについては、授業終了後に質問を受け付ける。なお、随時、メールでの質問も受け付ける。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>カントを中心とする近現代ドイツ哲学

<研究テーマ>意味論、構想力論、心の哲学、解釈学、生命・医療倫理学

<主要研究業績>

(共著) Die japanische Edition von Kants Gesammelten Schriften, in: *Kant-Studien*, 2013, Band 104, Heft 3. S. 386-394. ヴィルヘルム・ディルタイ著『アカデミー版カント全集・前文』翻訳及び解説（日本ディルタイ協会『ディルタイ研究』第25号、2014年）、p.98-117. 「編集者としてのディルタイ・アカデミー版カント全集の歴史的経緯からの考察」（日本ディルタイ協会『ディルタイ研究』第26号、2015年）、p.56-72. 「カテゴリーの演繹論と図式論—超越論的真理概念をめぐる—」（牧野英二編『新・カント読本』、2018年）、「生命・医療倫理とゲシュタルトクライス—現代の論争点として仁恵原則を問う—」（『哲学の変換と知の越境』2019年）、「リベラル優生学のパラドックス—ゲノム編集における遺伝的多様性をめぐって—」（北里大学一般教育紀要第25号、2020年）、「直観と概念—カント理論哲学における現代の論争について—」（現代カント研究第15巻、晃洋書房、2021年）

【Outline (in English)】

Outline: In this class, we will read the Preface to Kant's *Critique of Pure Reason* (1st and 2nd editions) to clarify the problem-solving and thinking methods inherent in critical philosophy. We will also use the Japanese translation of the text to master the reading of the German text and the writing of the paper. However, students who have not yet completed a course in German may take the class using only the Japanese translation. **Homework:** To read the text preliminary and identify points that are difficult to understand or questions that you may have (2 hours). To check to see if you have solved the problems and summarize the contents of the text (2 hours). **Evaluation criteria:** (1) Level of achievement observed in previous summaries, text reading, and Q&A. (2) level of achievement of the attainment objectives as confirmed by the report assignment. Evaluation will be 50% for (1) and 50% for (2). The evaluation criteria are: (1) Whether the German language is correctly understood (30%). (2) Whether or not the structure and methods of philosophical argumentation are understood (40%). (3) Whether or not the student has a sufficient understanding of the basic structure of cognition (30%). For students who have not studied German, (2) and (3) will be 50% each.

PHL600B1

ヨーロッパ精神史研究Ⅰ－Ⅰ

半田 勝彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

アリストテレスの『ニコマコス倫理学』を講読する。これは、古代ギリシアにおいて初めて体系的に記述された倫理学書である。本書の読解を通じて、倫理学の根本問題である、幸福＝「よく生きること」について理解を深めることができる。

【到達目標】

・ギリシア語原典を文法的に正確に読解することができる。
・倫理学の諸問題（善、徳、正義、責任、快楽、友愛、無抑制など）についてのアリストテレスの考えを正しく理解することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

ギリシア語原典を講読する者がいれば、まずその者が訳読し、次にその箇所の英訳をその他の者が訳読していく。ギリシア語講読者がいなければ、英訳を輪読形式で読み進めていく。必要に応じて、研究論文も読みながら、アリストテレスの考えの意義や問題点などを検討する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の進め方
第2回	第1巻第1章	目的の階層
第3回	第1巻第2章	最も善きものを対象とする学
第4回	第1巻第3章	政治学
第5回	第1巻第4章	最も善きもの
第6回	第1巻第5章	生活類型
第7回	第1巻第6章	善のアイデア
第8回	第1巻第7章	幸福の定義
第9回	第1巻第8章	幸福の特性
第10回	第1巻第9章	幸福とは神的なもの
第11回	第1巻第10章	人生の変転
第12回	関連論文の調査	授業内容に関連した論文を調べる
第13回	研究論文の講読	論文の精読
第14回	総括	春学期のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

準備学習：テキストを精読し、疑問点や問題点を挙げておく。
復習：テキストの誤読がなかったかを確認し、疑問点や問題点を整理して自分の考えをまとめる。
本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

Oxford Classical Texts. 英訳はコピーを配布する。

【参考書】

『ニコマコス倫理学』の邦訳は、岩波文庫、岩波版『アリストテレス全集』（新・旧）、西洋古典叢書（京都大学学術出版会）、光文社古典新訳文庫にあるので、各自用意すること。

【成績評価の方法と基準】

訳読 70 %（テキストを文法的に正確に読解できているか）と、討論・質疑応答 30 %（アリストテレスの考えを、正しく理解した上で、適切に擁護ないしは批判できているか）を勘案して総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

テキストの内容を正確に理解した上で、研究論文を批判的に読めるようにする。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞古代ギリシア哲学

＜研究テーマ＞プラトンとアリストテレスの政治・倫理思想

＜主要研究業績＞①『自然と人間』（共著、梓出版社、2006年）

②「大衆の主権と政治参与——アリストテレスにおける「衆知の論」をめぐって——」（『倫理学年報』第61集、2012年）

③デモステネス『弁論集6』（共訳、京都大学学術出版会、2020年）

【Outline (in English)】

(Course outline) The aim of this course is to help students deepen their understanding of the good life for man (the life of happiness) by careful reading of Aristotle's *Nicomachean Ethics*.

(Learning Objectives) The goals of this course are to read the Greek text strictly, and to understand correctly Aristotle's thinking on ethical questions.

(Learning activities outside of classroom) Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

(Grading Criteria /Policy) Final grade will be calculated according to the following process. Reading the Greek text and the English translation (70%), and in-class contribution (30%).

PHL600B1

ヨーロッパ精神史研究Ⅰ－Ⅱ

半田 勝彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

アリストテレスの『ニコマコス倫理学』を講読する。これは、古代ギリシアにおいて初めて体系的に記述された倫理学書である。本書の読解を通じて、倫理学の根本問題である、幸福＝「よく生きること」について理解を深めることができる。

【到達目標】

・ギリシア語原典を文法的に正確に読解することができる。
・倫理学の諸問題（善、徳、正義、責任、快楽、友愛、無抑制など）についてのアリストテレスの考えを正しく理解することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

ギリシア語原典を講読する者がいれば、まずその者が訳読し、次にその箇所を英訳をその他の者が訳読していく。ギリシア語講読者がいなければ、英訳を輪読形式で読み進めていく。必要に応じて、研究論文も読みながら、アリストテレスの考えの意義や問題点などを検討する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の進め方
第2回	第5巻第1章	完全な徳としての正義
第3回	第5巻第2章	徳の部分としての正義
第4回	第5巻第3章	配分の正しさ
第5回	第5巻第4章	是正の正しさ
第6回	第5巻第5章	応報
第7回	第5巻第6章	社会的な正しさ
第8回	第5巻第7章	自然的なものと社会的なもの
第9回	第5巻第8章	不正な人と不正行為
第10回	第5巻第9章	自発的な不正行為
第11回	第5巻第10章	適正
第12回	関連論文の調査	授業内容に関連した論文を調べる
第13回	研究論文の講読	論文の精読
第14回	総括	秋学期のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

準備学習：テキストを精読し、疑問点や問題点を挙げておく。

復習：テキストの誤読がなかったかを確認し、疑問点や問題点を整理して自分の考えをまとめる。

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

Oxford Classical Texts. 英訳はコピーを配布する。

【参考書】

『ニコマコス倫理学』の邦訳は、岩波文庫、岩波版『アリストテレス全集』（新・旧）、西洋古典叢書（京都大学学術出版会）、光文社古典新訳文庫にあるので、各自用意すること。

【成績評価の方法と基準】

訳読 70 %（テキストを文法的に正確に読解できているか）と、討論・質疑応答 30 %（アリストテレスの考えを、正しく理解した上で、適切に擁護ないしは批判できているか）を勘案して総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

テキストの内容を正確に理解した上で、研究論文を批判的に読めるようにする。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞古代ギリシア哲学

＜研究テーマ＞プラトンとアリストテレスの政治・倫理思想

＜主要研究業績＞①『自然と人間』（共著、梓出版社、2006 年）

②「大衆の主権と政治参与——アリストテレスにおける「衆知の論」をめぐって——」（『倫理学年報』第 61 集、2012 年）

③デモステネス『弁論集 6』（共訳、京都大学学術出版会、2020 年）

【Outline (in English)】

(Course outline) The aim of this course is to help students deepen their understanding of the good life for man (the life of happiness) by careful reading of Aristotle's *Nicomachean Ethics*.

(Learning Objectives) The goals of this course are to read the Greek text strictly, and to understand correctly Aristotle's thinking on ethical questions.

(Learning activities outside of classroom) Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

(Grading Criteria /Policy) Final grade will be calculated according to the following process. Reading the Greek text and the English translation (70%), and in-class contribution (30%).

PHL600B1

ヨーロッパ精神史研究Ⅱ－1

長谷川 悦宏

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

J.S. ミルの『自由論』における社会的自由の諸問題を考察する。

【到達目標】

今日の政治哲学上の対立点などを明確に述べられるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

第五章冒頭より輪読形式で読み進める。授業内発表も行う（発表に対する講評・解説を発表後行う）。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	講義要項及び諸注意	『自由論』概説
2	危害原理への但書	テキスト 106-8 頁
3	毒薬販売のケース	テキスト 108-10 頁
4	飲酒、売春、賭博のケース	テキスト 110-13 頁
5	バターナリズム	テキスト 113-15 頁
6	無効な契約：奴隷制、婚姻関係のケース	テキスト 115-17 頁
7	教育における親子関係	テキスト 117-19 頁
8	義務教育	テキスト 119-20 頁
9	公的試験の在り方	テキスト 120-21 頁
10	親の道徳的義務	テキスト 121-22 頁
11	自由な国民に対する政治教育	テキスト 122-24 頁
12	官僚制、パダントクラシー	テキスト 124-27 頁
13	中央と地方の関係	テキスト 127-29 頁
14	第五章の総括	第五章全体の内容の検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

文法や内容に関する疑問点などのメモを作成する（予習）。関連文献に目を通す（復習）。予復習とも二時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

テキスト（J.S.Mill, On Liberty, Prometheus Books, 1986）はコピーを配布いたします。

【参考書】

『自由論』の邦訳は岩波文庫にあるので、各自用意すること。

【成績評価の方法と基準】

訳読 60 %、討論参加 30 %、レポート 10 % の割合で評価する。ミルの現代性に関して明快に述べることが重視される。

【学生の意見等からの気づき】

正確な訳読が前提であるが、今日の状況にも言及する。

【担当教員の専門分野】

＜専門領域＞ 19 世紀実証主義思想

＜研究テーマ＞ コントと J.S. ミルの思想の比較考察

＜主要研究業績＞①『自然と人間』（共著、梓出版、2006）②「J.S. ミルの宗教思想—希望の神学は人間性の宗教に何を付け加えたのか—」（『法政大学文学部紀要』第 57 号、2008）③「ミル経験主義とプラグマティズム序論」（『法政哲学』第 14 号、2018）

【Outline (in English)】

J. S. Mill's thoughts in his "On Liberty" are examined, and a problem of social liberty is considered. At the end of course, you are expected to talk the argument points on modern political philosophy. Before/after each meeting, you will be expected to spend four hours to understand the course content. Grading will be decided on reading and translation(60 %), in class contribution(30 %) and short reports(10 %).

PHL600B1

ヨーロッパ精神史研究Ⅱ－2

長谷川 悦宏

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

J.S. ミルの『功利主義論』における倫理学上の諸問題を考察する。

【到達目標】

ミルと今日の哲学者との対立点などを明確に述べられるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

冒頭より輪読形式で読み進める。授業内発表も行う（発表に対する講評・解説を発表後行う）。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	講義要項及び諸注意	『功利主義論』概説
2	道徳の基礎原理	テキスト 272-74 頁
3	暗黙の基準	テキスト 274-76 頁
4	快楽の質	テキスト 276-79 頁
5	経験による判定	テキスト 279-81 頁
6	質批判の検討	テキスト 281-83 頁
7	幸福批判、利己心	テキスト 283-85 頁
8	精神の開発	テキスト 285-87 頁
9	幸福批判の評価	テキスト 287-288 頁
10	黄金律という理想	テキスト 288-89 頁
11	行為の基準と動機	テキスト 289-93 頁
12	宗教、便宜	テキスト 293-95 頁
13	行為の計算	テキスト 295-98 頁
14	第一、二章の総括	第一、二章全体の内容の検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

文法や内容に関する疑問点などのメモを作成する（予習）。関連分野に目を通す（復習）。予復習とも二時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

テキスト (J.S.Mill and Jeremy Bentham, Utilitarianism, Penguin Books,1987) はコピーを配布いたします。

【参考書】

邦訳は『功利主義論集』（京都大学学術出版会）がある。

【成績評価の方法と基準】

訳読 60 %、討論参加 30 %、レポート 10 %の割合で評価する。ミルの現代性を明快に述べることが重視される。

【学生の意見等からの気づき】

正確な訳読が前提であるが、現代的なトピックにも大いに言及する。

【担当教員の専門分野】

< 専門領域> 19 世紀実証主義思想

< 研究テーマ> コントと J.S. ミルの思想の比較考察

< 主要業績>①『自然と人間』（共著、梓出版、2006）②「J.S. ミルの宗教思想－希望の神学は人間性の宗教に何を付け加えたのか－」（『法政大学文学部紀要』第 57 号、2008）③「ミル経験主義とプラグマティズム序論」（『法政哲学』14 号、2018）

【Outline (in English)】

J. S. Mil's thoughts in his 'Utilitarianism' are examined, and a problem of ethics is considered. At the end of course, you are expected to talk the argument points between Mill and critical philosophers of him. Before/after you are expected to spend four hours to understand the course content. Grading will be decided on reading and translation(60 %), in class contribution(30 %) and short reports(10 %).

PHL500B1

哲学ドイツ語研究 1

吉田 敬介

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、ドイツ語で書かれたテキストを読めるようになることを目指し、ドイツ語を基礎文法から学びます。ドイツ語の未習者、もしくは既習者で知識を深めたいと思う方が対象です。読解の技能を身に付けることが主眼ですが、一般的なドイツ語の知識も得られるようにします。

春学期は、教科書内の練習テキストを読解できるようになることを目指します（秋学期には、「神の死」をめぐるニーチェの幾つかのテキストの読解に挑戦します）。

【到達目標】

- (A) ドイツ語を正しく発音できる。
- (B) ドイツ語読解のための基本的な文法事項を理解できる。
- (C) 基本的な文法知識を用い、簡単なドイツ語のテキストを読む。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

教科書に基づいて進めます。まずは文法事項を説明し、それから練習問題や練習テキストを通して学習事項を定着していきます。受講者には、発音や文法事項の確認、テキスト内容の議論をしてもらうため、積極的な参加を望みます。

適宜、理解度の確認のための課題を出します。課題の提出後、次の授業時に解説を加えたフィードバックを行います。

なお、重要なお知らせをすることもありうるので、適宜、授業支援システム Hoppii を確認するようお願いします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション、ドイツ語の発音	授業の進め方の確認 ドイツ語の発音 (1)
第 2 回	Lektion 1 (1)	ドイツ語の発音 (2) 動詞の現在人称変化 sein と haben の現在人称変化
第 3 回	Lektion 1 (2) Lektion 2 (1)	動詞の位置 名詞の性 名詞の格変化 (1 格と 4 格)
第 4 回	Lektion 2 (2) Lektion 3 (1)	不規則動詞 werden ja, nein, doch の使い方 不規則動詞の現在人称変化
第 5 回	Lektion 3 (2) 練習テキスト読解	名詞の複数形 名詞の 2 格と 3 格 Die EU の読解
第 6 回	Lektion 4 ここまでの振り返り	前置詞と名詞の格 副文 ここまでの学習内容の確認・復習
第 7 回	練習テキスト読解 Lektion 5 (1)	Mahlzeit, Mahlzeit! の読解 人称代名詞の 3 格と 4 格 再帰代名詞と再帰動詞
第 8 回	Lektion 5 (2) 練習テキスト読解	非人称の es Gute Besserung! の読解
第 9 回	Lektion 6	定冠詞類 不定冠詞類 否定冠詞 kein と否定文
第 10 回	練習テキスト読解 Lektion 7 (1)	Ingeborg Bachmann: Malina 読解 zu 不定詞句

第 11 回	Lektion 7 (2)	分離動詞 非分離動詞
第 12 回	練習テキスト読解 Lektion 8 (1)	Erich Kästner: Das doppelte Lottchen 読解話法の助動詞
第 13 回	Lektion 8 (2) 練習テキスト読解 ここまでの振り返り	未来形 Michael Ende: Momo (1) 読解
第 14 回	春学期のまとめと解説	春学期の学習内容のまとめと解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
学習事項の定着のため、その都度、宿題や予習、課題を指示します。

【テキスト（教科書）】

・『ドイツ語の時間―読解編―（読めると楽しい！）』朝日出版社

【参考書】

・独和辞典（必須）
・『必携ドイツ文法総まとめ（改訂版）』白水社
・細見和之（編著）『ニーチェをドイツ語で読む』白水社

【成績評価の方法と基準】

成績配分は、平常点（予習、授業への取り組みなどの総合評価）50 %、課題への取り組み 50 %です。

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更により昨年度のフィードバックはできませんが、受講者の意見はできるだけ取り入れたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】

オンライン授業の場合に必要なため、Zoom に接続可能な機器を準備してください。

【その他の重要事項】

春学期・秋学期合わせての履修を推奨します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 社会哲学、宗教哲学
<研究テーマ> キルケゴールの思想、アドルノやホルクハイマーの批判理論、ドイツ近現代思想
<主要研究業績> 「『啓蒙の弁証法』から読むキルケゴール―反知性主義か、啓蒙の自己省察か」（論文）、『社会思想史研究』第 45 号、2021 年、「隠された内面性から、外的世界との衝突へ―キルケゴールの「内面性」概念を再解釈する試み」（論文）、『哲学』第 72 号、2021 年、「Adornos Kierkegaard-Aneignung als Säkularisierung des Religiösen」(論文), in: Der Schein des Lichts, der ins Gefängnis selber fällt: Religion, Metaphysik, Kritische Theorie, 2018, S. 161-178、「キルケゴール・ルネッサンスの影」（論文）、『学習院大学人文科学論集』第 22 号、2013 年〔ドイツ語版：“Der Schatten der Kierkegaard-Renaissance”, Kierkegaard Studies Yearbook, 2015〕

【Outline (in English)】

Course outline: The aim of this course is to help students acquire basic knowledge of German grammar. It also enhances the development of student's reading competence in German.
Learning Objectives: The goals of this course are to (A) pronounce German words, (B) understand the basic grammar of German language, and (C) read simple texts in German.
Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
Grading Criteria/Policies: Grading will be decided based on in-class contribution (50%), and short reports (50%).

PHL500B1

哲学ドイツ語研究 2

吉田 敬介

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、ドイツ語で書かれたテキストを読めるようになることを目指し、ドイツ語を基礎文法から学びます。ドイツ語の未習者、もしくは既習者で知識を深めたいと思う方が対象です。読解の技能を身に付けることが主眼ですが、一般的なドイツ語の知識も得られるようにします。

秋学期の前半は教科書に沿って進めますが、後半には「神の死」をめぐるニーチェの幾つかのテキストの読解に挑戦します。

【到達目標】

- (A) ドイツ語読解のための基本的な文法事項を身に付ける。
- (B) 基本的な文法知識を用い、一般的なドイツ語のテキストを読める。
- (C) 辞書や参考書を用い、専門的なドイツ語のテキストの大意を理解できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

前半は、教科書に基づいて進めます。まずは文法事項を説明し、それから練習問題や練習テキストを通して学習事項を定着していきます。後半は、「神の死」をめぐるニーチェの幾つかのテキストの読解をしていきます（ニーチェのテキストの詳細は授業時に指示します）。受講者には、発音や文法事項の確認、テキスト内容の議論をしてもらうため、積極的な参加を望みます。

適宜、理解度の確認のための課題を出します。課題の提出後、次の授業時に解説を加えたフィードバックを行います。

なお、重要なお知らせをすることもありうるので、適宜、授業支援システム Hoppii を確認するようお願いします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション、既習事項の復習	授業の進め方の確認 教科書 Lektion 1～8 の既習事項の復習
第 2 回	Lektion 9 (1)	動詞の三基本形 過去形 現在完了形 受動態
第 3 回	Lektion 9 (2) 練習テキスト読解	Die Sommerzeit 読解
第 4 回	Lektion 10 (1)	形容詞の用法 形容詞の格変化 比較級と最上級
第 5 回	Lektion 10 (2) 練習テキスト読解	Franz Kafka: Die Verwandlung の読解
第 6 回	Lektion 11	関係代名詞 命令形
第 7 回	練習テキスト読解 Lektion 12 (1)	Michael Ende: Momo (2) 読解 接続法とは
第 8 回	Lektion 12 (2)	接続法の人称変化 接続法の用法
第 9 回	練習テキスト読解 ここまでの振り返り	Michael Ende: Die unendliche Geschichte 読解 ここまでの学習内容の確認・復習
第 10 回	ニーチェのテキスト読解 (1)	ニーチェ思想および「神の死」をめぐる議論について導入 『悦ばしき知識』断章 108 の読解

- 第11回 ニーチェのテキスト読『悦ばしき知識』断章 125 の読解
解 (2)
- 第12回 ニーチェのテキスト読『悦ばしき知識』断章 125 の読解
解 (3) 『悦ばしき知識』断章 343 の読解
- 第13回 ニーチェのテキスト読『悦ばしき知識』断章 343 の読解
解 (4)
- 第14回 秋学期のまとめと解説 秋学期の学習内容のまとめと解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
学習事項の定着のため、その都度、宿題や予習、課題を指示します。

【テキスト（教科書）】

- ・『ドイツ語の時間―読解編―（読めると楽しい！）』朝日出版社
- ・F. Nietzsche, Die Fröhliche Wissenschaft（詳細は授業時に指示します）

【参考書】

- ・独和辞典（必須）
- ・『必携ドイツ文法総まとめ（改訂版）』白水社
- ・細見和之（編著）『ニーチェをドイツ語で読む』白水社

【成績評価の方法と基準】

成績配分は、平常点（予習、授業への取り組みなどの総合評価）50 %、
課題への取り組み 50 %です。

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更により昨年度のフィードバックはできません
が、受講者の意見はできるだけ取り入れたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】

オンライン授業の場合に必要となるため、Zoom に接続可能な機器
を準備してください。

【その他の重要事項】

春学期・秋学期合わせての履修を推奨します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 社会哲学、宗教哲学
<研究テーマ> キルケゴールの思想、アドルノやホルクハイマーの
批判理論、ドイツ近現代思想
<主要研究業績> 「『啓蒙の弁証法』から読むキルケゴール―反知性
主義か、啓蒙の自己省察か」（論文）、『社会思想史研究』第 45 号、
2021 年、「隠された内面性から、外的世界との衝突へ―キルケゴール
の「内面性」概念を再解釈する試み」（論文）、『哲学』第 72 号、2021
年、"Adornos Kierkegaard-Aneignung als Säkularisierung des
Religiösen"（論文）、in: Der Schein des Lichts, der ins Gefängnis
selber fällt: Religion, Metaphysik, Kritische Theorie, 2018, S.
161-178、「キルケゴール・ルネッサンスの影」（論文）、『学習院大
学人文科学論集』第 22 号、2013 年〔ドイツ語版："Der Schatten
der Kierkegaard-Renaissance", Kierkegaard Studies Yearbook,
2015〕

【Outline (in English)】

Course outline: The aim of this course is to help students
acquire basic knowledge of German grammar. It also enhances
the development of student's reading competence in German.
Learning Objectives: The goals of this course are to (A) acquire
basic knowledge of German grammar, (B) read various texts in
German, and (C) understand academic texts in German.
Learning activities outside of classroom: Before/after each
class meeting, students will be expected to spend four hours
to understand the course content.
Grading Criteria/Policies: Grading will be decided based on in-
class contribution (50%), and short reports (50%).

PHL500B1

哲学フランス語研究 1

酒井 健

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

フランス語で哲学書を読めるようにフランス語の読解能力をつける。
基本的な文法事項を確認しながら、哲学の主要テーマにそってフラ
ンス語原文にあたってあらたに中級文法の復習と習得につとめる

【到達目標】

【修士課程】

- ①初級文法を復習して確実にフランス語の基盤を作る。
- ②さらに中級文法へ理解を高める。
- ③哲学者の原文を読めるように語学力をアップする。

【博士後期課程】

上記①と②と③においてより高度の知見への到達をめざす。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示された
どの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針
に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- 1) 一回の授業の前半では、毎回の授業時に配布する文法の問題集を
こなし、後半では近現代のフランス人哲学者の文章の訳読にチャレ
ンジする。
- 2) 課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて
行う予定。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	授業紹介	春学期の予定を説明する。
第 2 回	文法事項・冠詞と実存主義論のテキスト第 1 回	冠詞に関する文法問題と実存主義論のテキストの読解（サルトル）
第 3 回	文法事項・所有形容詞と実存主義論のテキスト第 2 回	所用形容詞に関する文法問題と実存主義論のテキストの読解（サルトルその 2）
第 4 回	文法事項・形容詞と実存主義論のテキスト第 3 回	形容詞に関する文法問題と実存主義論のテキストの読解（サルトルその 3）
第 5 回	文法事項・不定形容詞と実存主義論のテキスト第 4 回	不定形容詞に関する文法問題と実存主義論のテキストの読解（サルトルその 4）
第 6 回	文法事項・関係代名詞第 1 回と実存主義論のテキスト第 5 回	関係代名詞に関する文法問題と実存主義論のテキストの読解（サルトルその 5）
第 7 回	文法事項・関係代名詞第 2 回と実存主義論のテキスト第 6 回	関係代名詞に関するより高度な文法問題と実存主義論のテキストの読解（サルトルその 6）
第 8 回	文法事項・関係代名詞第 3 回と実存主義論のテキスト第 7 回	関係代名詞に関するよりいっそう高度な文法問題と実存主義論のテキストの読解（カミュ）
第 9 回	文法事項・中性代名詞第 1 回と実存主義論のテキスト第 8 回	中性代名詞に関する文法問題と実存主義論のテキストの読解（カミュその 2）
第 10 回	文法事項・中性代名詞第 2 回と実存主義論のテキスト第 9 回	中性代名詞に関するより高度な文法問題と実存主義論のテキストの読解（カミュその 3）
第 11 回	文法事項・受動態第 1 回と実存主義論のテキスト第 10 回	受動態に関する文法問題と実存主義論のテキストの読解（カミュ）

第 12 回	文法事項・受動態第 2 回と実存主義論のテキスト第 11 回	受動態に関するより高度な文法問題と実存主義に関する現代のテキストの読解（ナンシー）
第 13 回	文法事項・疑問文第 1 回と実存主義論のテキスト第 12 回	疑問文に関するより高度な文法問題と実存主義に関する現代のテキストの読解（ナンシーその 2）
第 14 回	文法事項・疑問文第 2 回と実存主義論のテキスト第 13 回	疑問文に関するより高度な文法問題と他者に関する現代のテキストの読解（ナンシーその 3）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
日ごろからフランス語の文法問題集をこなして、仏検を目指すこと。

【テキスト（教科書）】

『新初等フランス語教本 文法編』
京都大学フランス語教室編 白水社

【参考書】

『フランス語文法問題集』白水社

【成績評価の方法と基準】

【修士課程】

- ①毎回の訳出（50 %）
- ②毎回の練習問題の対応度（50 %）

≪ 到達目標との対応 ≫

上記①と②を通して、修士課程「到達目標」の①と②と③を確認していく。

【博士課程】

- ①毎回の訳出（50 %）
- ②毎回の練習問題の対応度（50 %）

≪ 到達目標との対応 ≫

上記①と②を通して、博士後期課程の「到達目標」を確認していく。

【学生の意見等からの気づき】

概ね良好であった。受講者からの要望には随時対応するので、気軽に伝えてほしい。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞フランス現代思想

＜研究テーマ＞バタイユ研究

＜主要研究業績＞

『夜の哲学 バタイユから生の深淵へ』（青土社、2016 年）

【Outline (in English)】

【Course outline】

The purpose of this course is to learn the fundamental of French grammar.

【Learning Objectives】

Especially at the end of this course, students are expected to a good comprehension of the reading of French philosophical text.. That is mainly by learning of the fundamental of French grammar.

【Learning activities outside of classroom】

Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter from the text. Your study time will be more than four hours for a class.

【Grading Criteria】

Your overall grade in the class will be based on the following.
Translation in each class meeting:50 % and exercises in each class meeting:50%.

PHL500B1

哲学フランス語研究 2

酒井 健

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

フランス語の基礎を学びながら、フランス哲学の原典の平易な文章を読んでいく。フランス語で哲学書を読めるようにフランス語の読解能力をつける。

【到達目標】

【修士課程】

①初級文法を復習して確実にフランス語の基盤を作る。

②さらに中級文法へ理解を高める。

③哲学書の原典を読めるように語学力をアップする。

【博士後期課程】

上記①と②と③においてより高度の知見への到達をめざす。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

一回の授業の前半では、毎回の授業時に配布する文法の問題集をこなし、後半では近現代のフランス人哲学者の文章の訳読にチャレンジする。

課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	授業紹介	秋学期授業の内容紹介とテキスト紹介
第 2 回	文法事項・過去時制と共同体論のテキスト第 1 回	過去時制に関する文法問題と共同体に関する近代のテキストの読解（ルソー）
第 3 回	文法事項・過去時制と共同体論のテキスト第 2 回	過去時制に関するさらなる文法問題と共同体に関する近代のテキストの読解（ルソーのその 2）
第 4 回	文法事項・未来時制と共同体論のテキスト第 3 回	未来時制に関する文法問題と共同体に関する近代のテキストの読解（ルソーその 3）
第 5 回	文法事項・未来時制と共同体論のテキスト第 4 回	未来時制に関するさらなる文法問題と共同体に関する近代のテキストの読解（ルソーその 4）
第 6 回	文法事項・条件法と共同体論のテキスト第 5 回	条件法に関する文法問題と共同体に関する近代のテキストの読解（カミュ）
第 7 回	文法事項・条件法と共同体論のテキスト第 6 回	条件法に関するさらなる文法問題と共同体に関する近代のテキストの読解（サルトル）
第 8 回	文法事項・条件法と共同体論のテキスト第 7 回	条件法に関するより高度な文法問題と共同体に関する近代のテキストの読解（サルトルその 2）
第 9 回	文法事項・間接話法と共同体論のテキスト第 8 回	間接話法に関する文法問題と共同体に関する近代のテキストの読解（バタイユ）
第 10 回	文法事項・間接話法と共同体論のテキスト第 9 回	間接話法に関するさらなる文法問題と共同体に関する近代のテキストの読解（バタイユのその 2）
第 11 回	文法事項・間接話法と共同体論のテキスト第 10 回	間接話法に関するさらに高度な文法問題と共同体に関する近代のテキストの読解（バタイユのその 3）

第 12 回	文法事項・接続法と共同体論のテキスト第 11 回	接続法に関する文法問題と共同体に関する近代のテキストの読解（ブランショのその 1）
第 13 回	文法事項・接続法と共同体論のテキスト第 12 回	接続法に関するさらなる文法問題と共同体に関する近代のテキストの読解（ブランショのその 2）
第 14 回	文法事項・接続法と共同体論のテキスト第 13 回	接続法に関するさらなる高度な文法問題と共同体に関する近代のテキストの読解（ナンシー）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
日ごろからフランス語の文法問題集をこなして、仏検を目指すこと。
共同体論に関する問題に関心をもって、他の授業にのぞむこと。

【テキスト（教科書）】

『新初等フランス語教本 文法編』京都大学フランス語教室編、白水社

【参考書】

『フランス語文法問題集』白水社

【成績評価の方法と基準】

【修士課程】

①毎回の訳出（50 %）

②学期末の発表（50 %）

≪ 到達目標との対応 ≫

上記①と②を通して、修士課程「到達目標」の①と②と③を確認していく。

【博士課程】

①毎回の訳出（50 %）

②学期末の発表（50 %）

≪ 到達目標との対応 ≫

上記①と②を通して、博士後期課程の「到達目標」を確認していく。

【学生の意見等からの気づき】

概ね良好であった。学生からの要望には随時対応するので、気軽に伝えてほしい。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞フランス現代思想

＜研究テーマ＞バタイユ研究

＜主要研究業績＞

『バタイユ入門』ちくま新書

【Outline (in English)】

【Course outline】

The purpose of this course is to learn the fundamental of French grammar.

【Learning Objectives】

Especially at the end of this course, students are expected to a good comprehension of the reading of French philosophical text.. That is mainly by learning of the fundamental of French grammar.

【Learning activities outside of classroom】

Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter from the text. Your study time will be more than four hours for a class.

【Grading Criteria】

Your overall grade in the class will be based on the following.
Translation in each class meeting:50 % and exercises in each class meeting:50%.

PHL500B1

哲学基礎研究 I

山下 真

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この講義は、西洋哲学の歴史とその諸問題について、基礎的な知識を習得することを目的とします。古代ギリシャから現代に至るまで、哲学的思考は極めて多様な形態をとってきました。「哲学とは何か？」という自己理解すら一様ではなく、異なる仕方でも語り直されています。本講義では、主要な哲学者たちの思想を捉え、問いの展開を追うことを通じて、〈哲学〉という営み自体の本質的な性格を考察していきます。これにより受講者は、各人の専門研究にとって前提となり、視野を広くする、哲学の基本的態度や考え方を学ぶこととなるでしょう。

【到達目標】

受講者が達成すべき目標は、以下の三点です。

①西洋哲学史の基本展開と中心問題を学ぶ。

②個々の哲学者の課題と諸概念、思考方法を理解する。

③自分の専門研究との関係において、〈哲学〉の内実と意義とを考察する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は、配布資料を使って講義形式で進めます。毎回、テーマとなる哲学者の中心課題や基本概念を解説し、問題となっている事柄を捉えていきます。また、受講者に意見・質問を求めた上で、議論や応答をすることとします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	講義の概要と導入	哲学とは何か、哲学史概観
第 2 回	古代哲学（1）	ソクラテス以前の哲学者たち
第 3 回	古代哲学（2）	ソフィストとソクラテス
第 4 回	古代哲学（3）	プラトン
第 5 回	古代哲学（4）	アリストテレス
第 6 回	中世哲学	キリスト教の哲学と神学
第 7 回	近世哲学（1）	大陸合理論：デカルト
第 8 回	近世哲学（2）	大陸合理論：スピノザ、ライプニッツ
第 9 回	近世哲学（3）	イギリス経験論：ロック、バークリー、ヒューム
第 10 回	近世哲学（4）	カント
第 11 回	近世哲学（5）	ヘーゲル
第 12 回	現代哲学（1）	キルケゴールとニーチェ
第 13 回	現代哲学（2）	ハイデガーとヤスパース
第 14 回	講義全体の総括	哲学的思考の意義と広がり

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

受講者は、配布資料や指定した参考文献を読解し、予習・復習を実施して参加すること（大学の基準では、本授業の準備・復習時間は、毎回 4 時間以上が標準とされています）。

各回の連続性が高いので、欠席が多いと内容を理解できなくなります。学んだ事柄を自主的に整理した上で、極力休まず参加してください。

【テキスト（教科書）】

特定のテキストは使用しません。

【参考書】

最も基本的・通史的なものとして、以下数点だけ挙げておきます。

岩崎武雄『西洋哲学史（再訂版）』有斐閣、1975 年

生松敬三／木田元／伊東俊太郎／岩田靖夫編『概念と歴史がわかる 西洋哲学小事典』ちくま学芸文庫、2011 年（初刊：『西洋哲学史の基礎知識』有斐閣、1977 年）

峰島旭雄編著『概説 西洋哲学史』ミネルヴァ書房、1989 年

新田義弘『哲学の歴史 哲学は何を問題にしてきたか』講談社現代新書、1989 年

その他、各論については多岐に渡るので、授業内で配布資料に掲載して紹介します。

【成績評価の方法と基準】

出席状況および理解度や意見・質問の積極性、受講態度などの平常点（50 %）と、学期末の課題レポート（50 %）で、上記「到達目標」三点の達成度を総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

本講義は、今年度から新規に担当します。

各人の経験に引きつけて思考できるよう、常に具体的な実例を織り交ぜた説明を心がけています。また、背景となる哲学史的な知識や、様々な術語のニュアンスなど、詳しく話していきます。

【担当教員の専門分野等】

■専門分野

西洋哲学。特にカール・ヤスパースを中心とする近現代ドイツ哲学、実存思想。

■最近の研究業績

論文「ヤスパース『哲学』における〈共同性〉概念の意義と射程」（日本ヤスパース協会編『コムニカチオン』第 23 号、2016 年）

論文「世界定位から根本知へ——ヤスパースにおける哲学知とその媒体性」（日本ヤスパース協会編『コムニカチオン』第 25 号、2018 年）

論文「不死の共同性——ヤスパース『原子爆弾と人間の未来』読解」（日本倫理学会編『倫理学年報』第 68 集、2019 年）

論文「暗号のパスpekティヴィズム——ヤスパース『哲学』における一性と多性」（日本ヤスパース協会編『コムニカチオン』第 27 号、2020 年）

【Outline (in English)】

[Course outline]

This course deals with the history and central issues of western philosophy. The student will obtain basic knowledge about historical diversity and common universal character of the thinking by major philosophers.

[Learning Objectives]

The goals of this course are to

- (1) learn basic knowledge about the development and problems of western philosophy.
- (2) understand the thought process and concepts of major philosophers.
- (3) can consider the meaning of philosophical thinking in conjunction with each student's specialized research.

[Learning activities outside of classroom]

Before/ after each class meeting, students will be expected to have read the teaching materials and reference books. Your required study time is at least four hours for each class meeting.

[Grading Criteria]

Grading will be decided based on usual performance score (50%), and final paper (50%).

PHL500B1

哲学基礎研究Ⅱ

板橋 勇仁

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ショーペンハウアー哲学研究。ショーペンハウアー研究では、近年、欧米圏でも日本でも従来の解釈が誤解に基づくものとして大きく修正されてきている。「意志」とは実体であり「意志の否定」とはこの実体の消滅であるという解釈は、恣意的なものにすぎないことが明らかになってきている。ただし「意志」と「表象」との関係、意志の自由、意志の否定における倫理と宗教の関係など、彼の哲学の主要な思想は、いまだ十分に明らかになったとは言えない。本授業では、主著である『意志と表象としての世界 正編 Die Welt als Wille und Vorstellung, Band 1』（第三版）を講読していく。講読箇所を吟味し議論していくことで、受講者が最新の研究成果をふまえて彼の思想の内実と射程とを把握することを目的とする。とくに西欧哲学史における彼の思想の位置を測定することに注力し、そのことでショーペンハウアー哲学の意義を受講者なりに解釈できることをめざす。邦訳を用いつつ適宜原典を参照する予定であるが、受講者の希望に応じる。

【到達目標】

ショーペンハウアー哲学を専門にするかどうかにかかわらず、各自の研究会・学会における口頭発表や論文発表において、自身の問題意識と考察の筋道に即してショーペンハウアー哲学を援用できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業計画に示す毎回の講読箇所について教員から説明した後、問題を提起し受講者とともに解釈について議論する。受講者との相談のうえで、受講者にレジюмеを作成してもらいそれを元に議論することも試みる予定。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	『意志と表象としての世界』第 1 節～第 4 節	表象としての世界の思想についての検討
第 2 回	『意志と表象としての世界』第 5 節～第 10 節	身体性の思想についての検討
第 3 回	『意志と表象としての世界』第 11 節～第 16 節	理性と悟性の思想についての検討
第 4 回	『意志と表象としての世界』第 17 節～第 20 節	身体と意志の思想についての検討
第 5 回	『意志と表象としての世界』第 21 節～第 24 節	意志のアナロジーの思想についての検討
第 6 回	『意志と表象としての世界』第 25 節～第 29 節	意志としての世界の思想についての検討
第 7 回	『意志と表象としての世界』第 30 節～第 35 節	イデアの思想についての検討
第 8 回	『意志と表象としての世界』第 36 節～第 41 節	イデア認識と藝術の思想についての検討

第 9 回	『意志と表象としての世界』第 42 節～第 52 節	諸藝術の体系の思想についての検討
第 10 回	『意志と表象としての世界』第 53 節～第 55 節	意志の睿智的性格の思想についての検討
第 11 回	『意志と表象としての世界』第 56 節～第 61 節	意志と生の苦悩の思想についての検討
第 12 回	『意志と表象としての世界』第 62 節～第 67 節	意志の否定の倫理についての検討
第 13 回	『意志と表象としての世界』第 68 節～第 71 節	意志の否定の宗教についての検討
第 14 回	総括	総合的討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備・復習時間は、講読箇所の事前予習など、各 4 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

『意志と表象としての世界 I・II・III』（中公クラシックス）
『Die Welt als Wille und Vorstellung, Band 1』（Suhrkamp ほか）

【参考書】

板橋勇仁『底無き意志の系譜 ショーペンハウアーと意志の否定の思想』
高橋陽一郎『藝術としての哲学 ショーペンハウアー哲学における矛盾の意味』
伊藤貴雄『ショーペンハウアー 兵役拒否の哲学』

【成績評価の方法と基準】

授業内での講読箇所についての解釈や討論への取り組み（100 %）

【学生の意見等からの気づき】

本年度新規科目につきアンケートを実施していません

【学生が準備すべき機器他】

集中講義のため、授業開始前に受講者と連絡を取り合うことを予定しているので、学習支援システムにて授業登録を行うこと

【担当教員の専門分野等】

近代ドイツ超越論哲学・日本哲学
『西田哲学の論理と方法』
『歴史的現実と西田哲学』
『底無き意志の系譜』
『こわばる身体がほどけるとき』

【Outline (in English)】

This course enhances the development of students' skill in reading Arthur Schopenhauer's "Die Welt als Wille und Vorstellung, Band 1." At the end of the course, students are expected to acquire their own consequent interpretation. Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapters from the text. Your required study time is at least four hours for each class meeting. Final grade will be calculated according to the in-class contribution(100 %).

PHL600B1

日本思想史研究 I - 1

西塚 俊太

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

和辻哲郎の著作『日本倫理思想史（一）』『日本倫理思想史（二）』を読み進めることを通じて、日本近代哲学において西洋思想が受け入れられていく過程を把握していく。特に、日本近代において一体何が問われていたのか、日本の近代性とは一体いかなるものであったのか、などの点に関する理解を目指していく。

【到達目標】

- ・和辻哲郎の著作を中心に、日本近代の哲学のテキストを読み解くことが出来る。
- ・哲学的思索や考察内容を自身の言葉として語ることが出来る。
- ・議論を通じて、自身の思考内容を深めることが出来る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- （1）受講者全員に和辻哲郎の『日本倫理思想史（一）』『日本倫理思想史（二）』の担当箇所を割り当てる。
- （2）担当者は該当箇所に関するレジュメを作成し、講義で発表をする。
- （3）その発表に基づいて、テキスト解釈について参加者全員で議論する。
- （4）討論の中で見出された重要な論点を、次回の演習の冒頭で講評しフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	和辻哲郎『日本倫理思想史』に関する概要の説明と、講義内容や進め方および評価方法の説明。
第 2 回	和辻哲郎『日本倫理思想史』の「序」および「緒論」	和辻哲郎の「日本倫理思想史」の構想をおさえる pp.13-46（以下、岩波文庫版『日本倫理思想史（一）』の頁数表記による）
第 3 回	宗教的権威による統一	宗教的権威によって国民が統一されるあり方を捉える pp.49-83
第 4 回	神話伝説と神の意義	思想史における「神話」の位置付けの把握 pp.85-120 の 5 行目
第 5 回	清明心についての解釈	祭祀と道徳の関係について考察する pp.120-156 の 9 行目
第 6 回	国家統一の政治化	政治によって国家が統一されていく過程の把握 pp.156-193 の 2 行目
第 7 回	国家と人倫	国家の形成と人倫の拡がりについての考察 pp.193-232
第 8 回	天皇の存在について	「あきつかみ」として天皇が位置付けられていく過程の把握 pp.233-274

第 9 回 平安朝と皇室	朝廷の文化と皇室との関係の解釈 pp.275-296 および『日本倫理思想史 (二)』の pp.15-30 の 8 行目 (以下、岩波文庫版『日本倫理思想史 (二)』の頁数表記による)
第 10 回 武士社会の成立	武士社会という新たな文化・社会が成立する背景を捉える pp.30-68 の 6 行目
第 11 回 坂東武者の習い	武士社会の中でも特に「坂東武者」の倫理を把握する pp.68-103 の後ろから 2 行目
第 12 回 武士と公平無私	武士社会の中の「公平さ」「無私 の思想」を捉える pp.103-141 の後ろから 4 行目
第 13 回 鎌倉時代の文化	鎌倉時代の思想を、特に「神国 観」から捉える pp.141-177 の後ろから 5 行目
第 14 回 慈悲の道徳	仏教思想を「慈悲」の観点からお さえる pp.177-205

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の該当箇所を熟読した上で講義に参加することが必須である。特に、発表担当者は担当箇所を幾度も綿密に読み込んだ上でレジュメを作成することが強く求められる。本授業の準備・復習時間は、計 6 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

和辻哲郎『日本倫理思想史 (一)』『日本倫理思想史 (二)』（ともに岩波文庫）
参加者は各自で必ず入手した上で演習に参加すること。

【参考書】

まずは参考書などを参照せず、和辻哲郎の原典そのものにあって入念に読み込むことが先決である。そこで理解しきれなかった点を、演習内の議論を通じて深めていくことになる。参考文献は演習を通じて互いに提示し合うことになる。

【成績評価の方法と基準】

発表担当時の発表内容（レジュメの水準を含む）（70 %）と、講義内での発言や講義への参加姿勢（30 %）によって評価する。講義においては毎回の発言・質問を「必須」として求め、発言・質問しなかった場合は出席したものとは見なさないで、事前学習として事前に該当箇所を読み込んだ上で講義に出席することが必要である。

【学生の意見等からの気づき】

演習参加者の希望によっては、より多くの文献を演習内で扱っていききたい。

【学生が準備すべき機器他】

発表担当の際には必ずレジュメを作成し配布すること。紙媒体のレジュメが望ましいが、パワーポイントを使用する場合においても、議論を展開しやすいように重要箇所はなるべく文章形式を採用すること。パワーポイントの使用を希望する際には、前の週までに講義担当教員にその旨を連絡すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近代哲学・日本思想史
<研究テーマ> 京都学派を中心とした日本近代哲学の研究、ならびに日本思想史（神・儒・仏・物語・武士道など）の研究
<主要研究業績>
① 「『ひと』であること、「私」であること—三木清の「哲学的人間学」をめぐって—」（『日本倫理思想論究 第 2 号』、2014）
② 『科学技術の倫理学Ⅱ』（勢力尚雅 編共著、2015）
③ 「『三河物語』における譜代意識の根底—「慈悲」と「情」と「武辺」との関係から—」（『倫理学紀要第 24 輯』、2017）
より詳細な情報は「法政大学学術研究データベース」の西塚俊太のページ <http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/107/0010646/profile.html> を参照

【Outline (in English)】

The aim of this course is to acquire an understanding of Japanese philosophy through reading thoroughly "History of Japanese Ethical Thought" by Tetsuro Watsuji. By the end of this course, students should be able to fully grasp the background of Japanese thought in modern times.

Student will be expected to have completed the required assignments after each class. Your study time will be more than six hours for a class.

Grading will be decided based on the quality of the students' experimental performance in the lab 70%, in-class contribution 30%.

PHL600B1

日本思想史研究 I -2

西塚 俊太

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

和辻哲郎の著作『日本倫理思想史（二）』『日本倫理思想史（三）』を読み進めることを通じて、日本近代哲学において西洋思想が受け入れられていく過程を把握していく。特に、日本近代において一体何が問われていたのか、日本の近代性とは一体いかなるものであったのか、などの点に関する理解を目指していく。

【到達目標】

- ・和辻哲郎の著作を中心に、日本近代の哲学のテキストを読み解くことが出来る。
- ・哲学的思索や考察内容を自身の言葉として語ることが出来る。
- ・議論を通じて、自身の思考内容を深めることが出来る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- （１）受講者全員に和辻哲郎の『日本倫理思想史（二）』『日本倫理思想史（三）』の担当箇所を割り当てる。
- （２）担当者は該当箇所に関するレジュメを作成し、講義で発表をする。
- （３）その発表に基づいて、テキスト解釈について参加者全員で議論する。
- （４）討論の中で見出された重要な論点を、次回の演習の冒頭で講評しフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	和辻哲郎『日本倫理思想史』に関する概要の説明と、講義内容や進め方および評価方法の説明。
第 2 回	和辻哲郎『日本倫理思想史（二）』における、大名の出現について	大名の誕生による社会構造の変化を捉える pp.209-241（以下、岩波文庫版『日本倫理思想史（二）』の頁数表記による）
第 3 回	民衆の勢力の拡大	民衆の社会的な勢力の拡大について理解する pp.242-278 の 7 行目
第 4 回	神皇正統記と太平記	武士の背後の「天皇」の位置付けを把握する pp.278-317 の後ろから 2 行目
第 5 回	室町時代の教養のあり方	室町時代に花開いていく教養について考察する pp.317-347
第 6 回	謡曲の思想	謡曲に表現されている思想の把握 pp.349-387 の後ろから 3 行目
第 7 回	物語の倫理	物語に表現されている倫理思想についての考察 pp.387-424 の後ろから 6 行目
第 8 回	「物語る」という営み	物語らずにはいられない人間の心のあり方の把握 pp.424-448 および『日本倫理思想史（三）』 pp.15-30 の後ろから 6 行目（以下、岩波文庫版『日本倫理思想史（三）』の頁数表記による）

第 9 回	武士社会の再建	武士社会が再建される過程の把握 pp.30-71 の 9 行目
第 10 回	戦国武士社会の成立	戦国期の武士社会という新たな文化・社会が成立する背景を捉える pp.71-105 の後ろから 5 行目
第 11 回	戦乱における道義	武士社会の中で醸成されていく倫理を把握する pp.105-140
第 12 回	キリシタンの伝道	日本社会におけるキリシタンの位置付けを捉える pp.141-179 の後ろから 3 行目
第 13 回	儒教の興隆	日本思想における儒教の展開を把握する pp.179-213
第 14 回	民間思想	民間思想のあり方をおさえる pp.214-268 の 1 行目

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の該当箇所を熟読した上で講義に参加することが必須である。特に、発表担当者は担当箇所を幾度も綿密に読み込んだ上でレジュメを作成することが強く求められる。本授業の準備・復習時間は、計 6 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

和辻哲郎『日本倫理思想史（二）』『日本倫理思想史（三）』（ともに岩波文庫）
参加者は各自で必ず入手した上で演習に参加すること。

【参考書】

まずは参考書などを参照せず、和辻哲郎の原典そのものにあたって入念に読み込むことが先決である。そこで理解しきれなかった点を、演習内の議論を通じて深めていくことになる。参考文献は演習を通じて互いに提示し合うことになる。

【成績評価の方法と基準】

発表担当時の発表内容（レジュメの水準を含む）（70 %）と、講義内での発言や講義への参加姿勢（30 %）によって評価する。講義においては毎回の発言・質問を「必須」として求め、発言・質問しなかった場合は出席したものとは見なさないの、事前学習として事前に該当箇所を読み込んだ上で講義に出席することが必要である。

【学生の意見等からの気づき】

演習参加者の希望によっては、より多くの文献を演習内で扱ってきたい。

【学生が準備すべき機器他】

発表担当の際には必ずレジュメを作成し配布すること。紙媒体のレジュメが望ましいが、パワーポイントを使用する場合においても、議論を展開しやすいように重要箇所はなるべく文章形式を採用すること。パワーポイントの使用を希望する際には、前の週までに講義担当教員にその旨を連絡すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近代哲学・日本思想史
<研究テーマ> 京都学派を中心とした日本近代哲学の研究、ならびに日本思想史（神・儒・仏・物語・武士道など）の研究
<主要研究業績>
① 「『ひと』であること、「私」であること—三木清の「哲学的人間学」をめぐる—」（『日本倫理思想論究 第 2 号』、2014）
② 『科学技術の倫理学Ⅱ』（勢力尚雅 編共著、2015）
③ 「『三河物語』における諸代意識の根底—「慈悲」と「情」と「武刃」との関係から—」（『倫理学紀要第 24 輯』、2017）
より詳細な情報は「法政大学学術研究データベース」の西塚俊太のページ <http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/107/0010646/profile.html> を参照

【Outline (in English)】

The aim of this course is to acquire an understanding of Japanese philosophy through reading thoroughly "History of Japanese Ethical Thought" by Tetsuro Watsuji. By the end of this course, students should be able to fully grasp the background of Japanese thought in modern times.

Student will be expected to have completed the required assignments after each class. Your study time will be more than six hours for a class.

Grading will be decided based on the quality of the students' experimental performance in the lab 70%, in-class contribution 30%.

PHL500B1

日本思想史研究Ⅱ-1

西塚 俊太

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

田辺元の著作『死の哲学』を読み進めることを通じて、日本近代哲学において西洋思想が受け容れられていく過程を把握していく。特に、日本近代において一体何が問われていたのか、日本の近代性とは一体いかなるものであったのか、などの点に関する理解を目指していく。

【到達目標】

- ・田辺元の著作を中心に、日本近代の哲学のテキストを読み解くことが出来る。
- ・哲学的思索や考察内容を自身の言葉として語ることが出来る。
- ・議論を通じて、自身の思考内容を深めることが出来る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- （１）受講者全員に田辺元の『死の哲学』の担当箇所を割り当てる。
- （２）担当者は該当箇所に関するレジュメを作成し、講義で発表をする。
- （３）その発表に基づいて、テキスト解釈について参加者全員で議論する。
- （４）討論の中で見出された重要な論点を、次回の演習の冒頭で講評しフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	田辺元『死の哲学』に関する概要の説明と、講義内容や進め方および評価方法の説明。
第2回	田辺元『死の哲学』 「メメントモリ」の読解	「メメントモリ」に関する検討 pp.13-29（以下すべて岩波文庫版『死の哲学』の頁数表記による）
第3回	「禅源私解」（一）	「禅源私解」の解釈の開始 pp.33-43
第4回	「禅源私解」（二）	「禅源私解」の検討 pp.44-62
第5回	『マラルメ覚書』の 「一 詩と哲学」「二 イジチュール」	『マラルメ覚書』の検討の開始 pp.65-76
第6回	『マラルメ覚書』の 「三 アウグスティヌスの時間論」「四 イ ジチュールの由来」	『マラルメ覚書』の検討の続き pp.77-105
第7回	『マラルメ覚書』の 「五 イジチュールの 構想」「六 イジ チュールの限界」	『マラルメ覚書』の展開に関する 考察 pp.105-134
第8回	『マラルメ覚書』の 「七 イジチュールの 絶体絶命」「八 イ ジチュールの転回」	『マラルメ覚書』の検討を深める pp.134-166
第9回	『マラルメ覚書』の 「九 生死相関自覚の 逆説」「十 『双賽一 擲』解釈の立場」	田辺哲学における「死生」観の検 討の開始 pp.166-197

- 第10回 『マラルメ覚書』の「十一 『双賽一擲』の真実」「十二 『双賽一擲』試訳附註」「あとがき」 田辺哲学における「死生」観のさ
らなる検討
pp.197-218
- 第11回 『生の存在学か死の弁証法か』（一） 田辺哲学における「死生」観の本
格的考察の開始
pp.221-251
- 第12回 『生の存在学か死の弁証法か』（二） 「生の存在学」についての検討
pp.252-280
- 第13回 『生の存在学か死の弁証法か』（三）「補遺」 「死の弁証法」についての検討
pp.280-301
- 第14回 『生の存在学か死の弁証法か』「補遺の二」「試考」 田辺哲学における「死生」観のま
とめ
pp.302-339

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の該当箇所を熟読した上で講義に参加することが必須である。特に、発表担当者は担当箇所を幾度も綿密に読み込んだ上でレジュメを作成することが強く求められる。本授業の準備・復習時間は、計 6 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

田辺元『死の哲学』（田辺元哲学選Ⅳ、岩波文庫）

参加者は各自で必ず入手した上で演習に参加すること。

【参考書】

まずは参考書などを参照せず、田辺元の原典そのものにあたって入念に読み込むことが先決である。そこで理解しきれなかった点を、演習内の議論を通じて深めていくことになる。参考文献は演習を通じて互いに提示し合うことになる。

【成績評価の方法と基準】

発表担当時の発表内容（レジュメの水準を含む）（70 %）と、講義内での発言や講義への参加姿勢（30 %）によって評価する。講義においては毎回の発言・質問を「必須」として求め、発言・質問しなかった場合は出席したものとは見なさないで、事前学習として事前に該当箇所を読み込んだ上で講義に出席することが必要である。

【学生の意見等からの気づき】

演習参加者の希望によっては、より多くの文献を演習内で扱ってきたい。

【学生が準備すべき機器他】

発表担当の際には必ずレジュメを作成し配布すること。紙媒体のレジュメが望ましいが、パワーポイントを使用する場合においても、議論を展開しやすいように重要箇所はなるべく文章形式を採用すること。パワーポイントの使用を希望する際には、前の週までに講義担当教員にその旨を連絡すること。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近代哲学・日本思想史

＜研究テーマ＞京都学派を中心とした日本近代哲学の研究、ならびに日本思想史（神・儒・仏・物語・武士道など）の研究

＜主要研究業績＞

- ① 「「ひと」であること、「私」であること—三木清の「哲学的人間学」をめぐる—」（『日本倫理思想論究 第2号』、2014）
- ② 『科学技術の倫理学Ⅱ』（勢力尚雅 編共著、2015）
- ③ 「『三河物語』における譜代意識の根底—「慈悲」と「情」と「武辺」との関係から—」（『倫理学紀要第24輯』、2017）

より詳細な情報は「法政大学学術研究データベース」の西塚俊太のページ <http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/107/0010646/profile.html> を参照

【Outline (in English)】

The aim of this course is to acquire an understanding of Japanese philosophy through reading thoroughly "Philosophy of Death" by Hajime Tanabe. By the end of this course, students should be able to fully grasp the background of Japanese thought in modern times.

Student will be expected to have completed the required assignments after each class. Your study time will be more than six hours for a class.

Grading will be decided based on the quality of the students' experimental performance in the lab 70%, in-class contribution 30%.

PHL500B1

日本思想史研究Ⅱ-2

西塚 俊太

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

田辺元の著作『死の哲学』と『懺悔道としての哲学』を読み進めることを通じて、日本近代哲学において西洋思想が受け容れられていく過程を把握していく。特に、日本近代において一体何が問われていたのか、日本の近代性とは一体いかなるものであったのか、などの点に関する理解を目指していく。

【到達目標】

- ・田辺元の著作を中心に、日本近代の哲学のテキストを読み解くことが出来る。
- ・哲学的思索や考察内容を自身の言葉として語ることが出来る。
- ・議論を通じて、自身の思考内容を深めることが出来る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- （１）受講者全員に田辺元の『死の哲学』と『懺悔道としての哲学』の担当箇所を割り当てる。
- （２）担当者は該当箇所に関するレジュメを作成し、講義で発表をする。
- （３）その発表に基づいて、テキスト解釈について参加者全員で議論する。
- （４）討論の中で見出された重要な論点を、次回の演習の冒頭で講評しフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	田辺元の哲学と思想形成に関する概要の説明と、講義内容や進め方および評価方法の説明。
第 2 回	田辺元『死の哲学』内『生の存在学か死の弁証法か』『補遺三』の読解	『生の存在学か死の弁証法か』に関する検討 pp.340-356（以下、岩波文庫版『死の哲学』の頁数表記による）
第 3 回	『生の存在学か死の弁証法か』『補遺四』『補遺五』の読解	『生の存在学か死の弁証法か』の検討の完了 pp.357-392
第 4 回	『懺悔道としての哲学』内の論文「懺悔道」	『懺悔道としての哲学』の検討を開始する pp.11-31（これ以降の回は岩波文庫版『懺悔道としての哲学』の頁数表記による）
第 5 回	『懺悔道としての哲学』の「序」と「懺悔道の哲学的意義」	「懺悔道」の哲学的な意義を考察する pp.35-60 の後ろから 4 行目まで
第 6 回	『懺悔道としての哲学』の「懺悔道の哲学的意義」の考察	『懺悔道としての哲学』の検討の続き pp.60-93 の 7 行目まで
第 7 回	『懺悔道としての哲学』の論理の検討	『懺悔道としての哲学』の展開に関する考察 pp.93-125
第 8 回	『懺悔道としての哲学』の批判的側面の検討	『懺悔道としての哲学』の検討を深める pp.126-153 の 3 行目まで
第 9 回	『懺悔道としての哲学』の歴史性の考察	『懺悔道としての哲学』の「歴史」の扱いの考察 pp.153-188 の 4 行目まで

第 10 回	『懺悔道としての哲学』と自由論	『懺悔道としての哲学』の自由に関する扱いの検討 pp.188-221 の 3 行目まで
第 11 回	『懺悔道としての哲学』と「絶対無」	田辺元哲学における『懺悔道としての哲学』における「絶対無」の位置付けについて pp.221-251
第 12 回	『懺悔道としての哲学』内の「絶対媒介性」	『懺悔道としての哲学』における「絶対媒介性」導入の意義について pp.252-285 の 7 行目まで
第 13 回	『懺悔道としての哲学』における「救済」の位置付け	『懺悔道としての哲学』における「救済」の位置付けについての検討 pp.285-316 の後ろから 1 行目まで
第 14 回	『懺悔道としての哲学』における「三顧転入」の扱い	『懺悔道としての哲学』のまとめ pp.316-343

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の該当箇所を熟読した上で講義に参加することが必須である。特に、発表担当者は担当箇所を幾度も綿密に読み込んだ上でレジュメを作成することが強く求められる。本授業の準備・復習時間は、計 6 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

田辺元『死の哲学』（田辺元哲学選Ⅳ、岩波文庫）『懺悔道としての哲学』（田辺元哲学選Ⅱ、岩波文庫）
両著作とも、参加者は各自で必ず入手した上で演習に参加すること。

【参考書】

まずは参考書などを参照せず、田辺元の原典そのものにあって念に読み込むことが先決である。そこで理解しきれなかった点を、演習内の議論を通じて深めていくことになる。参考文獻は演習を通じて互いに提示し合うことになる。

【成績評価の方法と基準】

発表担当時の発表内容（レジュメの水準を含む）（70 %）と、講義内での発言や講義への参加姿勢（30 %）によって評価する。講義においては毎回の発言・質問を「必須」として求め、発言・質問しなかった場合は出席したものとは見なさないで、事前学習として事前に該当箇所を読み込んだ上で講義に出席することが必要である。

【学生の意見等からの気づき】

演習参加者の希望によっては、より多くの文献を演習内で扱ってきたい。

【学生が準備すべき機器他】

発表担当の際には必ずレジュメを作成し配布すること。紙媒体のレジュメが望ましいが、パワーポイントを使用する場合においても、議論を展開しやすいように重要箇所はなるべく文章形式を採用すること。パワーポイントの使用を希望する際には、前の週までに講義担当教員にその旨を連絡すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近代哲学・日本思想史
<研究テーマ> 京都学派を中心とした日本近代哲学の研究、ならびに日本思想史（神・儒・仏・物語・武士道など）の研究
<主要研究業績>
① 「「ひと」とであること、「私」とであること—三木清の「哲学的人間学」をめぐる一—」（『日本倫理思想論究 第 2 号』、2014）
② 『科学技術の倫理学Ⅱ』（勢力尚雅 編共著、2015）
③ 「『三河物語』における譜代意識の根底—「慈悲」と「情」と「武辺」との関係から—」（『倫理学紀要第 24 輯』、2017）
より詳細な情報は「法政大学学術研究データベース」の西塚俊太のページ <http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/107/0010646/profile.html> を参照

【Outline (in English)】

The aim of this course is to acquire an understanding of Japanese philosophy through reading thoroughly "Philosophy of Death" and "Philosophy as the Path of Penance" by Hajime Tanabe. By the end of this course, students should be able to fully grasp the background of Japanese thought in modern times.

Student will be expected to have completed the required assignments after each class. Your study time will be more than six hours for a class.

Grading will be decided based on the quality of the students' experimental performance in the lab 70%, in-class contribution 30%.

PHL600B1

現象学研究 I - 1

君嶋 泰明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

マルティン・ハイデガーが 1922 年夏学期講義（全集 62 巻）において行ったアリストテレス『自然学』第 1 巻第 2~3 章の解釈を読む。同章でアリストテレスは「万物は一つである」とするバルメニデスの存在観を批判しており、ハイデガーはこの批判に存在と言葉の関係にかんする重要な洞察が潜んでいると見ている。その洞察に迫るのが目標である。

なお受講者の関心に応じて、西洋と日本における存在と言葉についての考え方の違いも検討する。

【到達目標】

①アリストテレスのバルメニデス批判をハイデガーがどのように解釈しているかを理解する。

②そのことを通じて、存在と言葉の関係についてのハイデガーの見方を理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

担当者は、テキストの割り当てられた箇所を音読し、日本語訳を述べ、解釈が必要な点については自分の解釈を提示する。参加者はこれに基づき全員で議論し、内容についての理解を深める。別途課題を課した場合、それへのフィードバックは次回授業で行う。

なお、以下の授業計画に記したページ数はあくまで目安であり、進度に応じて適宜変更する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	概要の説明
第 2 回	ハイデガーの『自然学』解釈①	報告と討議（165-167 頁）
第 3 回	ハイデガーの『自然学』解釈②	報告と討議（168-170 頁）
第 4 回	ハイデガーの『自然学』解釈③	報告と討議（171-173 頁）
第 5 回	ハイデガーの『自然学』解釈④	報告と討議（174-176 頁）
第 6 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑤	報告と討議（177-179 頁）
第 7 回	ハイデガーの『自然学』解釈①	報告と討議（200-202 頁）
第 8 回	ハイデガーの『自然学』解釈②	報告と討議（203-205 頁）
第 9 回	ハイデガーの『自然学』解釈③	報告と討議（206-208 頁）
第 10 回	ハイデガーの『自然学』解釈④	報告と討議（209-211 頁）
第 11 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑤	報告と討議（212-214 頁）
第 12 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑥	報告と討議（215-217 頁）
第 13 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑦	報告と討議（218-220 頁）
第 14 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑧	報告と討議（221-223 頁）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。担当者は、テキストの割り当てられた箇所を音読、日本語訳、解釈を準備して授業に臨む。参加者は該当箇所を熟読してくる。

【テキスト（教科書）】

Martin Heidegger, *Phänomenologische Interpretationen ausgewählter Abhandlungen des Aristoteles zur Ontologie und Logik*, Gesamtausgabe Bd. 62, Vittorio Klostermann, 2005.

未邦訳。希望者には該当箇所のコピーを配布する。

【参考書】

アリストテレス著・内山勝利訳、『アリストテレス全集 4 自然学』、岩波書店、2017 年

William Charlton, *Aristotle Physics Books I and II*, Oxford University Press, 1970.

前者はアリストテレスの『自然学』の邦訳。後者はその英訳と注釈。これらも希望者には該当箇所のコピーを配布する。

【成績評価の方法と基準】

担当者としての評価が 80%、議論への参加度の評価が 20%。上記の到達目標がどれだけ達成されているかが主な評価基準となる。

【学生の意見等からの気づき】

受講者の理解度を配慮しながら適宜解説を加えつつ授業を進める。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現象学・解釈学

<研究テーマ>

ハイデガーの西洋哲学史観の批判的検討

<主要研究業績>

・「『存在忘却』とは何か」、『法政大学文学部紀要』82 号、2020 年。

・「信仰と哲学——ハイデガーの 아우グスティヌス 解釈について」、『アルケー』26 号、2018 年。

・「ハイデガーのデカルト解釈について」、『哲学論叢』41 号、2014 年。

・「不測の逸れに抗して真正な道を歩むこと——ハイデガー初期フライブルク講義に見る「形式的告示」が持つ含意」、『アルケー』20 号、2012 年。

【Outline (in English)】

(Course outline)

This course deals with Martin Heidegger's interpretation of Aristotle's *Physics*.

(Learning Objectives)

The goal of this course is to understand Heidegger's view on the relationship between being and language.

(Learning activities outside of classroom)

Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter(s) from the texts. Your required study time is at least two hours for each class meeting.

(Grading Criteria /Policies)

Grading will be decided based on short reports (80%) and in-class contribution (20%).

PHL600B1

現象学研究 I -2

君嶋 泰明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

春学期に引き続き、マルティン・ハイデガーが 1922 年夏学期講義（全集 62 巻）において行ったアリストテレス『自然学』第 1 巻第 2~3 章の解釈を読む。同章でアリストテレスは「万物は一つである」とするバルメニデスの存在観を批判しており、ハイデガーはこの批判に存在と言葉の関係にかんする重要な洞察が潜んでいると見ている。その洞察に迫るのが目標である。なお受講者の関心に応じて、西洋と日本における存在と言葉についての考え方の違いも検討する。

【到達目標】

①アリストテレスのバルメニデス批判をハイデガーがどのように解釈しているかを理解する。

②そのことを通じて、存在と言葉の関係についてのハイデガーの見方を理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

担当者は、テキストの割り当てられた箇所を音読し、日本語訳を述べ、解釈が必要な点については自分の解釈を提示する。参加者はこれに基づき全員で議論し、内容についての理解を深める。別途課題を課した場合、それへのフィードバックは次回授業で行う。なお、以下の授業計画に記したページ数はあくまで目安であり、進度に応じて適宜変更する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	春学期の振り返りと概要の説明
第 2 回	ハイデガーの『自然学』解釈①	報告と討議（224-226 頁）
第 3 回	ハイデガーの『自然学』解釈②	報告と討議（227-229 頁）
第 4 回	ハイデガーの『自然学』解釈③	報告と討議（230-232 頁）
第 5 回	ハイデガーの『自然学』解釈④	報告と討議（233-235 頁）
第 6 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑤	報告と討議（236-237 頁）
第 7 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑥	報告と討議（238-240 頁）
第 8 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑦	報告と討議（241-243 頁）
第 9 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑧	報告と討議（244-246 頁）
第 10 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑨	報告と討議（247-249 頁）
第 11 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑩	報告と討議（250-252 頁）
第 12 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑪	報告と討議（253-255 頁）
第 13 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑫	報告と討議（256-258 頁）
第 14 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑬	報告と討議（259-261 頁）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。担当者は、テキストの割り当てられた箇所の音読、日本語訳、解釈を準備して授業に臨む。参加者は該当箇所を熟読してくる。

【テキスト（教科書）】

Martin Heidegger, *Phänomenologische Interpretationen ausgewählter Abhandlungen des Aristoteles zur Ontologie und Logik*, Gesamtausgabe Bd. 62, Vittorio Klostermann, 2005.

未邦訳。希望者には該当箇所のコピーを配布する。

【参考書】

アリストテレス著・内山勝利訳、『アリストテレス全集 4 自然学』、岩波書店、2017 年

William Charlton, *Aristotle's Physics Books I and II*, Oxford University Press, 1970.

前者はアリストテレスの『自然学』の邦訳。後者はその英訳と注釈。これらも希望者には該当箇所のコピーを配布する。

【成績評価の方法と基準】

担当者としての評価が 80%、議論への参加度の評価が 20%。上記の到達目標がどれだけ達成されているかが主な評価基準となる。

【学生の意見等からの気づき】

受講者の理解度を配慮しながら適宜解説を加えつつ授業を進める。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

現象学・解釈学

＜研究テーマ＞

ハイデガーの西洋哲学史観の批判的検討

＜主要研究業績＞

・「『存在忘却』とは何か」、『法政大学文学部紀要』82 号, 2020 年.

・「信仰と哲学——ハイデガーの 아우グスティヌス 解釈について」, 『アルケー』26 号, 2018 年.

・「ハイデガーのデカルト 解釈について」, 『哲学論叢』41 号, 2014 年.

【Outline (in English)】

(Course outline)

This course deals with Martin Heidegger's interpretation of Aristotle's *Physics*.

(Learning Objectives)

The goal of this course is to understand Heidegger's view on the relationship between being and language.

(Learning activities outside of classroom)

Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter(s) from the texts. Your required study time is at least two hours for each class meeting.

(Grading Criteria /Policies)

Grading will be decided based on short reports (80%) and in-class contribution (20%).

PHL700B1

哲学特殊研究 1

君嶋 泰明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士後期課程の学生を対象に、博士論文完成に向けた指導を行う。

【到達目標】

博士論文を完成させること、ないしそのために必要な論文作成能力を身につけること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

毎回の担当者による博士論文ないし研究の進捗についての報告を受けて、参加者全員で討議する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	研究の進捗についての報告①	報告と討議（報告者 A の第一章）
第 2 回	研究の進捗についての報告②	報告と討議（報告者 B の第一章）
第 3 回	研究の進捗についての報告③	報告と討議（報告者 C の第一章）
第 4 回	研究の進捗についての報告④	報告と討議（報告者 A の第二章）
第 5 回	研究の進捗についての報告⑤	報告と討議（報告者 B の第二章）
第 6 回	研究の進捗についての報告⑥	報告と討議（報告者 C の第二章）
第 7 回	研究の進捗についての報告⑦	報告と討議（報告者 A の第三章）
第 8 回	研究の進捗についての報告⑧	報告と討議（報告者 B の第三章）
第 9 回	研究の進捗についての報告⑨	報告と討議（報告者 C の第三章）
第 10 回	研究の進捗についての報告⑩	報告と討議（報告者 A の第四章）
第 11 回	研究の進捗についての報告⑪	報告と討議（報告者 B の第四章）
第 12 回	研究の進捗についての報告⑫	報告と討議（報告者 C の第四章）
第 13 回	研究の進捗についての報告⑬	報告と討議（報告者 A の第五章）
第 14 回	研究の進捗についての報告⑭	報告と討議（報告者 B の第五章）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。学生は討議で指摘された点を参考にし、論文をよりよいものにする努力を続けていく。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。

【参考書】

報告内容に応じてそのつど指示する。

【成績評価の方法と基準】

報告内容と（90 %）、討議における議論への貢献度（10 %）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

前年度に引き続き、報告の不明瞭な点や疑問点を参加者全員で洗い出し、討議を通じて内容を徹底的に煮詰めていく。

【Outline (in English)】**(Course outline)**

To give doctoral students advise and guidance so as to help them complete their doctoral thesis.

(Learning Objectives)

The goal of this course is to learn how to complete doctoral thesis.

(Learning activities outside of classroom)

Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter(s) from the references. Your required study time is at least two hours for each class meeting.

(Grading Criteria /Policies)

Grading will be decided based on reports (90%) and in-class contribution (10%).

PHL700B1

哲学特殊研究 2

君嶋 泰明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士後期課程の学生を対象に、博士論文完成に向けた指導を行う。

【到達目標】

博士論文を完成させること、ないしそのために必要な論文作成能力を身につけること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

毎回の担当者による博士論文ないし研究の進捗についての報告を受けて、参加者全員で討議する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	研究の進捗についての報告①	報告と討議（報告者 C の第五章）
第 2 回	研究の進捗についての報告②	報告と討議（報告者 A の第六章）
第 3 回	研究の進捗についての報告③	報告と討議（報告者 B の第六章）
第 4 回	研究の進捗についての報告④	報告と討議（報告者 C の第六章）
第 5 回	研究の進捗についての報告⑤	報告と討議（報告者 A の第七章）
第 6 回	研究の進捗についての報告⑥	報告と討議（報告者 B の第七章）
第 7 回	研究の進捗についての報告⑦	報告と討議（報告者 C の第七章）
第 8 回	研究の進捗についての報告⑧	報告と討議（報告者 A の序論）
第 9 回	研究の進捗についての報告⑨	報告と討議（報告者 B の序論）
第 10 回	研究の進捗についての報告⑩	報告と討議（報告者 C の序論）
第 11 回	研究の進捗についての報告⑪	報告と討議（報告者 A の結論）
第 12 回	研究の進捗についての報告⑫	報告と討議（報告者 B の結論）
第 13 回	研究の進捗についての報告⑬	報告と討議（報告者 C の結論）
第 14 回	研究の進捗についての報告⑭	報告と討議（各報告者について残された課題の確認）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。学生は討議で指摘された点を参考にし、論文をよりよいものにする努力を続けていく。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。

【参考書】

報告内容に応じてそのつど指示する。

【成績評価の方法と基準】

報告内容と（90 %）、討議における議論への貢献度（10 %）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

前年度に引き続き、報告の不明瞭な点や疑問点を参加者全員で洗い出し、討議を通じて内容を徹底的に煮詰めていく。

【Outline (in English)】

(Course outline)

To give doctoral students advise and guidance so as to help them complete their doctoral thesis.

(Learning Objectives)

The goal of this course is to learn how to complete doctoral thesis.

(Learning activities outside of classroom)

Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter(s) from the references. Your required study time is at least two hours for each class meeting.

(Grading Criteria /Policies)

Grading will be decided based on reports (90%) and in-class contribution (10%).

PHL700B1

哲学特殊研究 1

山口 誠一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

初期ヘーゲルの先行研究の一つの中心となるヘンリッヒの **Konstellation** について検討する。

【到達目標】

初期ヘーゲルの先行研究の一つの中心となるヘンリッヒの **Konstellation** について理解できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

初期ヘーゲルの先行研究であるヘンリッヒの議論を D. Henrich, **Konstellationen** を訳読しながら整理し検討する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	授業オリエンテーション	D. Henrich, Konstellationen の訳読計画
第 2 回	昨年度の回顧	ヘンリッヒ説の検討
第 3 回	Konstellationen とは？	D. Henrich, Konstellationen .S.36f. の検討
。。	ドイツ古典哲学研究と D. Henrich, Konstellationen	D. Henrich, Konstellationen . S.36f. の検討
第 5 回	Konstellationen と対話	D. Henrich, Konstellationen . S.37f. の検討
第 6 回	対話における Konstellationen とは？	D. Henrich, Konstellationen . S.37f. についての討議
第 7 回	西洋哲学史と Konstellationen	D. Henrich, Konstellationen . S.38f. の検討
第 8 回	西洋哲学史と Konstellationen の基本	D. Henrich, Konstellationen . S.38f. についての討議
第 9 回	ヘルダーリンと Konstellationen	D. Henrich, Konstellationen . S.39f. の検討
第 10 回	書簡と Konstellationen	D. Henrich, Konstellationen . S.39f. についての討議
第 11 回	Konstellationen による研究の変化	D. Henrich, Konstellationen . S.40f. の検討
第 12 回	Konstellationen によるドイツ古典哲学研究の変化	D. Henrich, Konstellationen . S.40f.
第 13 回	まとめ-検討	D. Henrich, Konstellationen . S.36ff. の検討
第 14 回	まとめ-討議	D. Henrich, Konstellationen . S.36ff. についての討議

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

研究計画と授業計画に従って、ヘンリッヒの原典を自分なりに訳して理解しておくこと

【テキスト（教科書）】

D. Henrich, *Konstellationen. Probleme und Debatten am Ursprung der idealistischen Philosophie(1789-1795)*. Klett-Kotta, Stuttgart, 1991.

【参考書】

参考書を指定しない。

【成績評価の方法と基準】

原則として、訳読などのレポート (60%) と平常点 (40%) で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野】

<専門領域>

ニーチェ/ヘーゲルを中心とするドイツ近現代哲学、新プラトン主義の影響史的解明、日本における西洋哲学受容の解明、国際ヘーゲル研究誌 *Jahrbuch für Hegelforschung* 国際顧問

<研究テーマ>

弁証法哲学の哲学的研究、ヘーゲル『精神現象学』序説の註解、新訳ヘーゲル全集の編纂、ヘーゲル日本語文献目録国際版の編集、現代日本におけるニヒリズムの解明など。

<主要研究業績>

『ヘーゲル哲学の根源——〈精神現象学〉の問いの解明』、法政大学出版局、

Die japanischsprachige Hegel-Rezeption(1878-2001). Eine Bibliographie. Peter Lang Edition, 2013 (共編著)

『ニーチェ《古代レトリック講義》訳解』、知泉書館、2011年

『ニーチェとヘーゲル—ディオニュソス哲学の地下通路』、法政大学出版局、2010年

『ヘーゲル《新プラトン主義哲学》註解』、知泉書館、2005年

『ヘーゲルのギリシア哲学論』、創文社、1998年

【Outline (in English)】

(Course outline)

The aim of this course is to provide students with an essential understanding of young Hegel, with discussions.

(Learning activities outside of classroom)

Before this class meeting, students will be expected to have read the text. Your required study time is at least one hour for this class meeting.

(Grading Criteria /Policies)

Final grade will be calculated according to the following process: Mid-term reports (60%) and in-class contribution(40%).

PHL700B1

哲学特殊研究 2

山口 誠一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

初期ヘーゲル研究の先行研究の中心の一つヘンリッヒの *Konstellationen* による研究の新しさを解明する。

【到達目標】

初期ヘーゲル研究の先行研究の中心の一つヘンリッヒの *Konstellationen* による研究の新しさを理解できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

ヘンリッヒのテキストを毎回訳読し討論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1 回	後期授業オリエンテーション	D. Henrich, <i>Konstellationen</i> . III. の訳読計画
2 回	ドイツ古典哲学と <i>Konstellationen</i> 研究	D. Henrich, <i>Konstellationen</i> .S.42f. の検討
3 回	対話状況の <i>Konstellationen</i>	D. Henrich, <i>Konstellationen</i> .S.42f. についての討議
4 回	二つの <i>Konstellationen</i>	D. Henrich, <i>Konstellationen</i> .S.43f. の検討
5 回	ドイツ古典哲学研究の完成	D. Henrich, <i>Konstellationen</i> .S.43f. についての討議
6 回	二つの <i>Konstellationen</i> の関係	D. Henrich, <i>Konstellationen</i> .S.44. の検討
7 回	二つの <i>Konstellationen</i> の関係の逆転	D. Henrich, <i>Konstellationen</i> .S.44. についての討議
8 回	著作研究から <i>Konstellationen</i> 研究へ	D. Henrich, <i>Konstellationen</i> .S.44ff. の検討
9 回	<i>Konstellationen</i> 研究の新しさ	D. Henrich, <i>Konstellationen</i> .S.44ff. についての討議
10 回	<i>Konstellationen</i> 研究による哲学の学問性の解明	D. Henrich, <i>Konstellationen</i> .S.46. の検討と討議
11 回	小括	D. Henrich, <i>Konstellationen</i> .S.42ff. の概観
12 回	<i>Halfwassen</i> のヘーゲル研究	古代哲学からの研究
13 回	<i>Halfwassen</i> のヘーゲル新プラトン主義論研究	初期ヘーゲルの新プラトン主義受容
14 回	まとめ	ヘンリッヒから <i>Halfwassen</i> の初期ヘーゲル研究

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

研究計画と授業計画に従って、ヘンリッヒのテキストを自分なりに訳して理解しておくこと

【テキスト（教科書）】

D. Henrich, *Konstellationen. Probleme und Debatten am Ursprung der idealistischen Philosophie*(1789-1795). Klett-Kotta, Stuttgart, 1991.

【参考書】

国内外の関連研究書

【成績評価の方法と基準】

授業各回の訳読 (60%) と平常点 (40%)

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野】

＜専門領域＞

ニーチェ/ヘーゲルを中心とするドイツ近現代哲学、新プラトン主義の影響史的解明、日本における西洋哲学受容の解明、国際ヘーゲル研究誌 *Jahrbuch für Hegelforschung* 国際顧問

＜研究テーマ＞

弁証法哲学の哲学史的研究、ヘーゲル『精神現象学』序説の註解、新訳ヘーゲル全集の編纂、ヘーゲル日本語文献目録国際版の編集、現代日本におけるニヒリズムの解明など。

＜主要研究業績＞

『ヘーゲル哲学の根源——〈精神現象学〉の問いの解明』、法政大学出版局、

Die japanischsprachige Hegel-Rezeption(1878-2001). Eine Bibliographie. Peter Lang Edition, 2013 (共編著)

『ニーチェ《古代レトリック講義》訳解』、知泉書館、2011年

『ニーチェとヘーゲル—ディオニュソス哲学の地下通路』、法政大学出版局、2010年

『ヘーゲル《新プラトン主義哲学》註解』、知泉書館、2005年

『ヘーゲルのギリシア哲学論』、創文社、1998年

【Outline (in English)】

(Course outline)

The aim of this course is to provide students with an essential understanding of young Hegel's philosophy, with texts drawn from German.

(Learning activities outside of classroom)

Before this class meeting, students will be expected to have read the text. Your required study time is at least one hour for this class meeting.

(Grading Criteria /Policies)

Final grade will be calculated according to the following process: Mid-term reports (40%) and in-class contribution(60%).

PHL500B1

言語分析哲学特殊講義 1

中釜 浩一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「自己」はデカルト以来、最も困難な哲学的問題の一つである。この授業では、①なぜ「自己」が哲学の問題になるのか、②現代哲学はどのような方法によって「自己」を論じるのか、③「自己」の正体に関して、どのような議論に基づき、どのような主張がなされているか、を代表的論者の論文を読解しながら検討する。

【到達目標】

「自己」に関する現代哲学の主要な立場、その論拠と問題点の正しい理解を獲得し、「自己」の正体に関する各自の立場を確立するための基礎を形成する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

教員が配布する代表的論者の論文に関して、担当者がレジュメを作成し、それに基づいて全員でディスカッションを行う

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	教員による現代の心の哲学に関する一般的説明。
第2回	Quassim Cassam The Embodied Self	pp.139-142
第3回	Quassim Cassam The Embodied Self	pp.142-145
第4回	Quassim Cassam The Embodied Self	pp.145-147
第5回	Quassim Cassam The Embodied Self	pp.148-150
第6回	Quassim Cassam The Embodied Self	pp.151-152
第7回	Quassim Cassam The Embodied Self	pp.152-154
第8回	Galen Strawson The Minimal Subject	pp.253-255
第9回	Galen Strawson The Minimal Subject	pp.256-259
第10回	Galen Strawson The Minimal Subject	pp.260-263
第11回	Galen Strawson The Minimal Subject	pp.264-267
第12回	Galen Strawson The Minimal Subject	pp.266-271
第13回	Galen Strawson The Minimal Subject	pp.271-277
第14回	まとめ	まとめとディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。発表担当者は、担当箇所のレジュメを作成し、事前に配布する。全員がテキストをあらかじめ精読したうえでレジュメを確認し、疑問点、反論等を整理しておく。

【テキスト（教科書）】

The Oxford Handbook of The Self, Oxford 2011

授業時にコピーを配布する。

【参考書】

Descartes, Perfit, Davidson, Shoemaker, Evans, 等の諸著作。

【成績評価の方法と基準】

レジュメの作成 60%

ディスカッションでの貢献 40%

【学生の意見等からの気づき】

読解とディスカッションによる従来の方法が有効である。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

科学哲学、言語哲学、心の哲学、イギリス経験論

＜研究テーマ＞

パースペクティヴィズムの形而上学的可能性

＜主要研究業績＞

著訳書 「できごとと対象—ホワイトヘッド科学哲学の中心概念」（哲学論叢）、「時間空間論における規約主義」（哲学研究）、「説明と形而上学的コミットメント」（科学哲学）、「指標語を巡る哲学的諸問題Ⅰ、Ⅱ」「マスターアーギュメントとパースペクティヴィズム」（法政大学文学部紀要）、「自然観の相克」（岩波新・哲学講座）「科学論の帰趨」（ミネルヴァ書房『科学技術のゆくえ』）、「ホワイトヘッド」（中公新社「哲学の歴史」8）等、翻訳：ヘンリー・ゲアラック「ニュートンと分析的方法」（西洋思想大事典、平凡社）、ジョージ・レーゲン「エントロピー過程と経済法則」（共訳、みすず書房）、デイヴィッド・ヒューム「人間本性論」（共訳、法政大学出版局）

【Outline (in English)】

Course outline: This course deals with the Problems of the self approached by modern philosophers of language.

Learning Objectives: To acquire a deeper understanding of self and to

learn more about methods of analytical philosophy.

Learning activities outside of classroom: After each class meeting,

students are expected to spend four hours to understand the content of the day and to prepare the next class meeting.

Grading Criteria: preparing resumes: 60%, contribution to the class discussion: 40%

PHL500B1

言語分析哲学特殊講義2

中釜 浩一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「自己」はデカルト以来、最も困難な哲学的問題の一つである。この授業では、①なぜ「自己」が哲学の問題になるのか、②現代哲学はどのような方法によって「自己」を論じるのか、③「自己」の正体に関して、どのような議論に基づき、どのような主張がなされているか、を代表的論者の論文を読解しながら検討する。

【到達目標】

「自己」に関する現代哲学の主要な立場、その論拠と問題点の正しい理解を獲得し、「心」の正体に関する各自の立場を確立するための基礎を形成する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

教員が配布する代表的論者の論文に関して、担当者がレジュメを作成し、それに基づいて全員でディスカッションを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	教員による一般的解説
第 2 回	Sydney Shoemaker On What we are	pp.352-354
第 3 回	Sydney Shoemaker On What we are	pp.354-356
第 4 回	Sydney Shoemaker On What we are	pp.357-359
第 5 回	Sydney Shoemaker On What we are	pp.359-363
第 6 回	Sydney Shoemaker On What we are	pp.363-367
第 7 回	Sydney Shoemaker On What we are	pp.367-370
第 8 回	John Perry On knowing one's self	pp.372-375
第 9 回	John Perry On knowing one's self	pp.375-378
第 10 回	John Perry On knowing one's self	pp.378-383
第 11 回	John Perry On knowing one's self	pp.383-386
第 12 回	John Perry On knowing one's self	pp.386-388
第 13 回	John Perry On knowing one's self	pp.388-392
第 14 回	まとめ	全員によるディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。発表担当者は、担当箇所のレジュメを作成し、事前に配布する。全員がテキストをあらかじめ精読したうえでレジュメを確認し、疑問点、反論等を整理しておく。

【テキスト（教科書）】

The Oxford Handbook of Self, Oxford Univ. Press 2011

授業時にコピーを配布する。

【参考書】

Descartes, Parfit, Davidson, Evans 等の諸著作。

【成績評価の方法と基準】

レジュメの作成 60%

ディスカッションでの貢献 40%

【学生の意見等からの気づき】

テキスト精読とディスカッションによる従来の方法が有効である。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

科学哲学、言語哲学、心の哲学、イギリス経験論

＜研究テーマ＞

パースペクティヴィズムと現代形而上学

＜主要研究業績＞

著訳書 「できごとと対象—ホワイトヘッド科学哲学の中心概念」(哲学論叢)、「時間空間論における規約主義」(哲学研究)、「説明と形而上学的コミットメント」(科学哲学)、「指標語を巡る哲学的諸問題 I、II」(マスターアーギュメントとパースペクティヴィズム)(法政大学文学部紀要)、「自然観の相克」(岩波新・哲学講座)「科学論の帰趨」(ミネルヴァ書房『科学技術のゆくえ』)、「ホワイトヘッド」(中公新社「哲学の歴史」8)等、翻訳：ヘンリー・ゲアラック「ニュートンと分析的方法」(西洋思想大事典、平凡社)、ジョージ・レーゲン「エントロピー過程と経済法則」(共訳、みすず書房)、デヴィッド・ヒューム「人間本性論」(共訳、法政大学出版局)

【Outline (in English)】

Course outline: This course deals with the Problems of the self approached by modern philosophers of language.

Learning Objectives: To acquire a deeper understanding of self and to

learn more about methods of analytical philosophy.

Learning activities outside of classroom: After each class meeting,

students are expected to spend four hours to understand the content of the day and to prepare the next class meeting.

Grading Criteria: preparing resumes: 60%, contribution to the class discussion: 40%

PHL500B1

古代哲学史特殊講義 1

奥田 和夫

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

アリストテレス『形而上学』を講読する。西洋哲学史上きわめて重要な著作であり、難解な著作である。注意深く精読をすすめて、アリストテレスの思考法、重要概念の内容を正確に理解することが目標である。さらに、この著作（論文集）が伝えるアリストテレスの思想を把握したうえで、可能であれば、その有効性にまで考察をおよぼすことが最終的な目的である。今年度春学期は第 13 巻第 3 章 1078a15 から同巻末（第 9 章末）までを読解する。

【到達目標】

上にのべたように、内容の正確な理解を得ることが目標である。アリストテレスには世界や事象を認識するにあたり彼独特の思考法がある。この思考法はさまざまなテーマについて多様な仕方でも繰り返される。正確な理解を得るためには、その思考法のパターンとその基礎にある概念やその使用法を理解し習熟することが第一の目標となる。アリストテレスの『形而上学』は西洋哲学史上、広大な影響力を有しているだけに、本書について正確な理解を得ることは、後代の哲学の理解に際しても重要である。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

古典ギリシア語原典を訳読できる履修者が出席する場合、その者がまず原典を訳読し、次にそれ以外の履修者が英訳テキストを訳読する、という形式ですすめる。精読を旨とする。訳読の他に、授業では毎回、内容要約と内容の検討、討議をおこない理解を深める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	春学期イントロダクション	アリストテレスの基本用語 数学の対象
第 2 回	第 13 巻第 3 章の精読・検討・理解	アイデアの想定
第 3 回	第 13 巻第 4 章の精読・検討・理解	アイデア論の由来
第 4 回	第 13 巻第 5 章の精読・検討・理解	アイデア論批判 感覚的事物の存在理由の観点から
第 5 回	第 13 巻第 5 章の精読・検討・理解	アイデア論批判 感覚的事物の変化の観点から
第 6 回	第 13 巻第 6 章の精読・検討・理解	感覚的事物の原因としての数およびアイデア論
第 7 回	第 13 巻第 6 章の精読・検討・理解	数に関するプラトンの主張とスベウシッポスの主張
第 8 回	第 13 巻第 7 章の精読・検討・理解	エイドスとしての数批判
第 9 回	第 13 巻第 7 章の精読・検討・理解	エイドスとしての数はありえない
第 10 回	第 13 巻第 8 章の精読・検討・理解	数をめぐってのアイデア論批判
第 11 回	第 13 巻第 8 章の精読・検討・理解	エイドスとしての数への再批判
第 12 回	第 13 巻第 9 章の精読・検討・理解	幾何学の対象に対する考察
第 13 回	第 13 巻第 9 章の精読・検討・理解	エイドスとしての数批判のまとめとアイデア論批判のまとめ

第14回 第13巻第10章の精 ウーシアの離在性とその原理の
読・検討・理解 普遍性と個別性
まとめ 学期の学習内容の確認と整理

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
授業計画にもとづき、次回の授業が対象とする範囲を予習する（訳読のための準備し、疑問点、課題点を明確にしておく）。『形而上学』全体の構成をつねに確認する。

【テキスト（教科書）】

1. Aristotle 'Metaphysics, A Revised Text with Introduction and Commentary by W.Ross, volume II, Oxford at the Clarendon Press, 1924. (ギリシア語原典訳読用)
2. Aristotele's Metaphysica, Recognovit Brevique Adnotatione Critica Instravit W.Jaeger, Oxford Classical Texts, 1957. (ギリシア語原典訳読用)
3. The Works of Aristotle translated into English under the Editorship of Sir David Ross, volume viii Metaphysica, second Edition, Oxford at the Clarendon Press, 1928. (英訳読用 出席者にはコピーを配布する。)

【参考書】

出隆訳『形而上学』（岩波文庫 上・下 第11巻以下は下巻に収録）。その他は、適宜、紹介する。

【成績評価の方法と基準】

「到達目標」に記した内容理解度、毎回の英語訳の完成度、討論への貢献度、まとめのレポート内容、によって評価する（各25%ずつ）。

【学生の意見等からの気づき】

可能なかぎり最新研究の情報をも履修者と共有したい。

【学生が準備すべき機器他】

なし

【その他の重要事項】

古代哲学史研究Ⅰ－Ⅱ（秋学期）と併せて履修することが望ましい。

【担当教員の専門分野等】

<【担当教員の専門分野等】>

<専門領域> ソクラテス、プラトンを中心とする古代ギリシア哲学
<研究テーマ> 現在の持続的テーマはプラトンの政治哲学である。
<主要研究業績> 「正しい人の快楽—プラトン『国家』第九巻における快楽論の意味—」（『法政大学文学部紀要』第48号 2003年）
「プラトンの人間観—『国家』における国家と人間の類型論を中心に—」（『プラトニズムにおける人間観の変遷』平成14～17年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（1））研究成果報告書 所収 2006年）
「自然と人間—プラトンの自然思想から」（共編著『自然と人間』梓出版社 2006年 所収）
「哲人王の行方」（日本西洋古典学会編『西洋古典学研究』第59号 岩波書店 2011年）
「『哲人王の行方』補説」（『西洋古典研究会論集』第21号 2012年）
「最善の国家と次善の国家—プラトン『法律』708E-712B, 739A-E, 875-C-D—」（『法政大学文学部紀要』第80号 2020年）
専門領域><研究テーマ>
<主要研究業績>

【Outline (in English)】

(Course outline) In this course we read Aristotle's "Metaphysics". In the term we will read from Book 13, ch.3 to the end of the Book (ch.9).

(Learning Objectives) The goals of this course are careful reading, understanding of the way the author thinks and estimation of his thoughts.

(Learning activities outside of classroom) Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

(Grading Criteria /Policy) Final grade will be calculated according to the following process, term-end examination(50%), and in-class contribution(50%).

PHL500B1

古代哲学史特殊講義2

奥田 和夫

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

アリストテレス『形而上学』を講読する。西洋哲学史上きわめて重要な著作であり、難解な著作である。注意深く精読をすすめて、アリストテレスの思考法、重要概念の内容を正確に理解することが目標である。さらに、この著作（論文集）が伝えるアリストテレスの思想を把握したうえで、可能であれば、その有効性にまで考察をおよぼすことが最終的な目的である。今年度秋学期は第14巻第1章から第14巻末（『形而上学』末）までを講読する。

【到達目標】

上にのべたように、内容の正確な理解を得ることが目標である。アリストテレスの『形而上学』は西洋哲学史上、広大な影響力を有しているが、可能なかぎり正確な読解をすすめることにより、古代哲学を専攻する、しないにかかわらず、本書に関して哲学的にも正確なアリストテレス哲学の内容理解をめざす。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

古代哲学を専門とする履修者がまず古典ギリシア語原典を訳読し、次に古代哲学を専攻としない履修者が英訳テキストを訳読する、という形式ですめる（ただし履修生の状況を勘案する）。精読を旨とする。訳読の他に、授業では毎回、内容要約とその検討、討議をおこない理解を深める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	秋学期イントロダクション	「不定の二」批判
第2回	第14巻第1章の精読・検討・理解	「不定の二」の諸形態
第3回	第14巻第2章の精読・検討・理解	パルメニデスに対するプラトンの対応の誤り
第4回	第14巻第2章の精読・検討・理解	エイダスとしての数、数学の数
第5回	第14巻第3章の精読・検討・理解	数を実体とする説の難点
第6回	第14巻第3章の精読・検討・理解	ピュタゴラス派の数についての考えの誤り
第7回	第14巻第3章の精読・検討・理解	ピュタゴラス派批判
第8回	第14巻第3章の精読・検討・理解	構成要素・原理と善美との関係
第9回	第14巻第4章の精読・検討・理解	数を実体とする説の難点
第10回	第14巻第5章の精読・検討・理解	批判された人々は構成要素・原理から数をいかにして生成させるのか
第11回	第14巻第5章の精読・検討・理解	批判された人々の数は何の原理と
第12回	第14巻第6章の精読・検討・理解	原理としての数への批判
第13回	第14巻第6章の精読・検討・理解	ピュタゴラス派の数についての思想批判

第 14 回 まとめ

アリストテレスの思考法の意義と
制限

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
授業計画にもとづき、次の授業が対象とする範囲を予習する。
『形而上学』全体の構成をつねに確認する。

【テキスト（教科書）】

1. Aristotle's Metaphysics, A Revised Text with Introduction and Commentary by W.Ross, volume II, Oxford at the Clarendon Press, 1924. (ギリシア語原典訳読用)
2. Aristotele's Metaphysica, Recognovit Brevique Adnotatione Critica Instravit W.Jaeger, Oxford Classical Texts, 1957. (ギリシア語原典訳読用)
3. The Works of Aristotle translated into English under the Editorship of Sir David Ross, volume viii Metaphysica, second Edition, Oxford at the Clarendon Press, 1928. (英訳読用 出席者にはコピーを配布する。)

【参考書】

出隆訳『形而上学』（岩波文庫）。その他は、適宜、紹介する。

【成績評価の方法と基準】

「到達目標」に記した内容理解度、毎回の英語訳の完成度、討論への貢献度、まとめのレポートの内容、によって評価する（各 25 % ずつ）。

【学生の意見等からの気づき】

可能なかぎり最新研究の情報をも履修者と共有したい。

【学生が準備すべき機器他】

なし

【その他の重要事項】

古代哲学史研究 I - 1（春学期）と併せて履修することが望ましい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> ソクラテス、プラトンを中心とする古代ギリシア哲学
<研究テーマ> 現在の持続的テーマはプラトンの政治哲学である。
<主要研究業績>
「正しい人の快樂—プラトン『国家』第九巻における快樂論の意味—」
（『法政大学文学部紀要』第 48 号 2003 年）
「プラトンの人間観—『国家』における国家と人間の類型論を中心に—」
（『プラトニズムにおける人間観の変遷』平成 14～17 年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（1））研究成果報告書 所収 2006 年）
「自然と人間—プラトンの自然思想から」（共編著『自然と人間』梓出版社 2006 年 所収）
「哲人王の行方」（日本西洋古典学会編『西洋古典学研究』第 59 号 岩波書店 2011 年）
「『哲人王の行方』補説」（『西洋古典研究会論集』第 21 号 2012 年）
「最善の国家と次善の国家—プラトン『法律』708E-712B, 739A-E, 875-C-D—」（『法政大学文学部紀要』第 80 号 2020 年）

【Outline (in English)】

(Course outline) In this course we read Aristotle's "Metaphysics". In the term we will read from Book 14, ch.1 to the end of "Metaphysics" (the Book 14, ch.6).
(Learning Objectives) The goals of this course are careful reading, understanding of the way the author thinks and estimation of his thoughts.
(Learning activities outside of classroom) Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.
(Grading Criteria / Policy) Final grade will be calculated according to the following process, term-end examination (50%), and in-class contribution (50%).

PHL500B1

論理学特殊講義 1

安東 祐希

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

帰納的関数論により、計算できるとはどういうことか、どのように表現されるのかを学ぶ。なお、ここでいう計算とは、広く一般に何らかの手続き（アルゴリズム）のことであり、狭い意味での数の計算にとどまらない。

【到達目標】

関連分野への影響も踏まえながら、帰納的関数の定義について理解し、具体的な関数について計算可能性を論ずることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

教科書に従い、省略されている詳細部分も含め、定義・定理・証明あるいは例を履修者が分担して発表し、それに対して教員および他の参加者により質疑応答を行う。（発表が「課題」であり、質疑応答において「フィードバック」する。）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	computability	教科書第 1 節
第 2 回	functions and relations	教科書第 2 節
第 3 回	the basic machine	教科書第 3 節
第 4 回	macros	教科書第 4 節
第 5 回	closure properties	教科書第 5 節
第 6 回	definitions of recursive functions (constant etc.)	教科書第 6 節前半
第 7 回	definitions of recursive functions (inductive definition etc.)	教科書第 6 節後半
第 8 回	codes	教科書第 7 節
第 9 回	indices (enumeration theorem etc.)	教科書第 8 節前半
第 10 回	indices (parameter theorem etc.)	教科書第 8 節後半
第 11 回	Church's thesis	教科書第 9 節
第 12 回	word problem (halting problem etc.)	教科書第 10 節前半
第 13 回	word problem (semigroup etc.)	教科書第 10 節後半
第 14 回	undecidable theories	教科書第 11 節

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

教科書の内容について、具体的な例を考え、紙に書きながら十分な演習を行うこと。なお、予復習時間の標準は 4 時間である。

【テキスト（教科書）】

Joseph R. Shoenfield, *Recursion Theory* (Lecture Notes in Logic 1), A K Peters/CRC Press, 2001 (Springer-Verlag, 1993).

【参考書】

Hartley Rogers, Jr., *Theory of Recursive Functions and Effective Computability*, The MIT Press, 1987 (McGraw-Hill, 1967).

【成績評価の方法と基準】

到達目標に関する問題の提示・解題能力を担当箇所の発表内容 (50 %) において、さらに、目標の問題全般にわたる理解度を他者担当時の質疑応答 (50 %) において評価する。

【学生の意見等からの気づき】

担当者の発表と教員からの指摘について時間配分をより適切なもの にしたい。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

数理論理学 (証明論)

〈研究テーマ〉

証明図の正規化手続きに関する諸性質

〈主要研究業績〉

・ Church-Rosser property of a simple reduction for full first-order classical natural deduction, *Annals of Pure and Applied Logic* 119(2003) pp225-237, Elsevier.

・ A representation of essential reductions in sequent calculus (abstract), *The Bulletin of Symbolic Logic* 11 (2005) pp265-265, The Association for Symbolic Logic.

・ Gentzen's unpublished normalization theorem and its successors, 数理解析研究所講究録 2083『証明論と証明活動』(2018) pp146-149, 京都大学数理解析研究所.

【Outline (in English)】**[Course outline]**

This course deals with the theory of recursive functions.

[Learning Objectives]

By the end of the course, students should be able to do the followings with connectoins to related areas:

-To comprehend the definition of recursive functions.

-To explain the computability of some specific functions.

[Learning activities outside of classroom]

Students will be expected to do exercises by writing them on paper. Your study time will be more than four hours for a class.

[Grading Criteria/Policies]

Final grade will be calculated according to the following process:

Presentation as the person in charge for some parts of the text (50%) and contribution in question-and-answer sections (50%).

PHL500B1

論理学特殊講義 2

安東 祐希

実務教員：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

春期科目の「論理学特殊講義 1」に引き続き、帰納的関数論により、相対的な計算可能性とは何かを学ぶ。

【到達目標】

関連分野への影響も踏まえながら、計算可能という概念の相対化について理解し、相対化に従って得られる階層構造について論ずることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

教科書に従い、省略されている詳細部分も含め、定義・定理・証明あるいは例を履修者が分担して発表し、それに対して教員および他の参加者により質疑応答を行う。(発表が「課題」であり、質疑応答において「フィードバック」する。)

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	relative recursion	教科書第 12 節
第 2 回	the arithmetical hierarchy (arithmetical relation etc.)	教科書第 13 節前半
第 3 回	the arithmetical hierarchy (arithmetical hierarchy theorem etc.)	教科書第 13 節後半
第 4 回	recursively enumerable relations (RE parameter theorem etc.)	教科書第 14 節前半
第 5 回	recursively enumerable relations (graph theorem etc.)	教科書第 14 節後半
第 6 回	degrees (definiton of degree etc.)	教科書第 15 節前半
第 7 回	degrees (Post's problem etc.)	教科書第 15 節後半
第 8 回	evaluation of degrees (Rice's proposition etc.)	教科書第 16 節前半
第 9 回	evaluation of degrees (Rogers' proposition etc.)	教科書第 16 節後半
第 10 回	large RE sets (simple set etc.)	教科書第 17 節前半
第 11 回	large RE sets (Dekker's proposition etc.)	教科書第 17 節後半
第 12 回	functions of reals	教科書第 18 節
第 13 回	the analytical hierarchy	教科書第 19 節

第 14 回 the projective hierarchy 教科書第 20 節

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

教科書の内容について、具体的な例を考え、紙に書きながら十分な演習を行うこと。なお、予復習時間の標準は 4 時間である。

【テキスト（教科書）】

Joseph R. Shoenfield, *Recursion Theory* (Lecture Notes in Logic 1), A K Peters/CRC Press, 2001 (Springer-Verlag, 1993).

【参考書】

Hartley Rogers, Jr., *Theory of Recursive Functions and Effective Computability*, The MIT Press, 1987 (McGraw-Hill, 1967).

【成績評価の方法と基準】

到達目標に関する問題の提示・解題能力を担当箇所の発表内容 (50 %) において、さらに、目標の問題全般にわたる理解度を他者担当時の質疑応答 (50 %) において評価する。

【学生の意見等からの気づき】

担当者の発表と教員からの指摘について時間配分をより適切なものにしたい。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

数理論理学（証明論）

〈研究テーマ〉

証明図の正規化手続きに関する諸性質

〈主要研究業績〉

・ Church-Rosser property of a simple reduction for full first-order classical natural deduction, *Annals of Pure and Applied Logic* 119 (2003) pp225-237, Elsevier.

・ A representation of essential reductions in sequent calculus (abstract), *The Bulletin of Symbolic Logic* 11 (2005) pp265-265, The Association for Symbolic Logic.

・ Gentzen's unpublished normalization theorem and its successors, 数理解析研究所講義録 2083『証明論と証明活動』(2018) pp146-149, 京都大学数理解析研究所.

【Outline (in English)】

[Course outline]

This course deals with the relative computability.

[Learning Objectives]

By the end of the course, students should be able to do the followings with connectoins to related areas:

-To comprehend the notion of "relative" on computability.

-To explain the hierarchy introduced by using the relative computability.

[Learning activities outside of classroom]

Students will be expected to do exercises by writing them on paper. Your study time will be more than four hours for a class.

[Grading Criteria/Policies]

Final grade will be calculated according to the following process:

Presentation as the person in charge for some parts of the text (50%) and contribution in question-and-answer sections (50%).

PHL500B1

近代倫理学史特殊講義 1

菅沢 龍文

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

カント『純粹理性批判』を読む

——魂の不死について——

カントの『純粹理性批判』の「弁証論」では「魂の不死」の理念について論ぜられる。その箇所を、第二版で大幅に書き換えられたテキストで読む。「魂の不死」はアリストテレスの『魂について (De Anima)』以来の西洋哲学の根本問題であり、この箇所を詳しく読み解くことで、「魂の不死」についてのカントの思想について考える。

【到達目標】

カントの古典的テキストに関して、次のような態度・技能・知識を身につける。

- (1) 原典テキストへ立ち返り、思想家の思想そのものを掘り起こす。
- (2) 対象について、疑問点を発見、調査、考察して、理解を深める。
- (3) 他人の意見も参照して、いっそう説得力のある意見を形成する。
- (4) テキストから掘り起こした思想と他の思想とを比較対照できる。
- (5) レポートにおいて、内容を分かりやすく、しかも正しく伝えられる。
- (6) ドイツ語テキストを訳読する参加者は、ドイツ語原典を正確に読み解ける。
- (7) 翻訳書での参加者は、翻訳語や翻訳文の意味を適切に理解できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- (1) 最初に前回ゼミのまとめをして質問に答える。
- (2) 参加者がテキストの訳読を進め、適宜参考資料も用いて、質疑応答により、ドイツ語文章の内容の理解を深める。
- (3) テキストに秘められた思想を読み取って話し合い、その思想について考えを深める。
- (4) ドイツ語の初学者も、プロトコル（前回のまとめ）やレポート発表などで積極的に参加できるようにする。
- (5) 初めてカントのテキストに挑戦する人にも内容がよく分かるように解説する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	(1) ゼミの方式、テキスト等について (2) カントの『純粹理性批判』の背景・全体像 (3) これから読む箇所のテーマ「魂の不死」の理念の意味について
第 2 回	超越論的理念	カント『純粹理性批判』原典テキスト PhB:441-442 ページ
第 3 回	弁証論的理性推理	同上 442-443 ページ
第 4 回	「私は思考する」	同上 443-444 ページ
第 5 回	合理的靈魂論	同上 444-445 ページ
第 6 回	合理的靈魂論の論題	同上 445-446 ページ
第 7 回	不死性 超越論の主観 = X	同上 446-447 ページ
第 8 回	経験的心理学 合理的心理学	同上 447-448 ページ
第 9 回	規定可能な自己の意識	同上 449-450 ページ

- 第10回 1) 規定する主語 同上 450-451 ページ
 2) 単一のもの
 3) 主語の同一性
- 第11回 4) 私から区別された 同上 451-452 ページ
 もの
 単純な実体（人格性、
 物質から切り離された
 自己の現存）
- 第12回 誤謬推理 同上 452-454 ページ
- 第13回 主語として現存できる 同上 454-455 ページ
 が、述語として現存で
 きない物
- 第14回 春学期の振り返り 期末レポート発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
 前回の内容を復習して理解を深めること。次回テキストの内容の全体を把握しておくこと。そして疑問点や問題点について調べておくこと。ドイツ語原典の訳読担当者は訳読の準備をし、プロトコル担当者は前回のまとめのプリントを用意すること。

【テキスト（教科書）】

I. Kant, *Kritik der reinen Vernunft*. Herausgegeben von Jens Timmermann. Felix Meiner Verlag.

(邦訳書)『カント全集』岩波書店版・第5巻、理想社版・第5巻、その他多数。ゼミのなかで紹介する。

(英訳書) ケンブリッジ版 I. Kant, *Critique of Pure Reason* (The Cambridge Edition of the Works of Immanuel Kant) ほか多数。

【参考書】

＜カントの著作＞

『プロレゴメナ』1783 年

＜関連性の高い文献＞

御子柴善之『カント 純粋理性批判』（角川選書）

ヨハン・シュルツ『カント『純粋理性批判』を読むために』菅沢・渋谷・山下訳（梓出版社）

その他、ゼミで適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】

原典テキストの読解力、問題の発見、調査、考察、理解力、コミュニケーション力、諸思想緒を比較する力、レポート作成力に関して、次の2方面から評価する。

- (1) プロトコル（前回のまとめ）発表、テキスト読解や質疑応答で観察される到達目標達成度（70 %）
- (2) 期末レポート課題で確認される到達目標達成度（30 %）

【学生の意見等からの気づき】

言葉を明瞭に発音するように心がける。

定刻どおりに終わるように心がける。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

西洋近代の哲学・倫理学

＜研究テーマ＞

カント哲学・倫理学

＜主要研究業績＞

「カントにおける「人間性の権利」概念について——カントの『法論』は批判哲学に基づくのか——」『法政大学文学部紀要』第 80 号、2020 年。

「世界平和と基本的人権、その指標としての「訪問権」——カントによる世界市民権概念について——」『法政大学文学部紀要』第 76 号、2018 年。

「ヨブの幸福とカント——最高善概念を手がかりに——」『法政大学文学部紀要』第 70 号、2015 年。

(欧文) Kant und das Problem des Lügens. Über Nebeneinanderbestehen der moralischen Pflichten, in; *Kant und die Philosophie in weltbürgerlicher Absicht*, Akten des XI. Internationalen Kant-Kongresses Bd. 3, Berlin, De Gruyter, 2013.

(翻訳：共訳) マンフレッド・キューン『カント伝』（春風社）、2017 年。

【Outline (in English)】

Reading Kant's Critique of Pure Reason

— On the Immortality of the Soul —

In the "Dialectic" of Kant's *Critique of Pure Reason*, he discusses the idea of "immortality of the soul". We will read the text rewritten in the second edition. The immortality of the soul has been a fundamental issue in Western philosophy since Aristotle's *On the Soul* (*De Anima*). By reading this text in detail, we will consider Kant's thought about the "immortality of the soul".

[Learning Objectives]

Students will acquire the following attitudes, skills, and knowledges regarding Kant's classical texts.

(1) To go back to the original text and uncover the thinker's thoughts themselves.

(2) To deepen their understanding of the subject by discovering, investigating, and considering questions.

(3) To formulate more persuasive opinions by referring to the opinions of others.

(4) To compare and contrast ideas from the text with other ones.

(5) To communicate the content of reports in a clear and correct manner.

(6) Participants translating a German text should be able to read and understand the original German text accurately.

(7) Participants should be able to understand the meaning of the translated words and sentences.

[Learning activities outside of classroom]

The standard preparation and review time for this class is each 2 hours.

To review and deepen our understanding of the previous lesson. To understand the entire contents of the next text, and to investigate any questions or problems. Those in charge of translating the German original text should prepare for the reading, and those in charge of protocol should prepare a handout summarizing the previous reading.

[Grading Criteria /Policy]

(1) 70% of the evaluation will be made in terms of the comprehension of source texts, the ability to find, investigate and consider problems, the communication skills for exchanging opinions, the ability to compare ideas, and the completion of the protocol (summary of the previous session).

(2) 30% of the evaluation will be made in terms of achievement level of the final report.

PHL500B1

近代倫理学史特殊講義 2

菅沢 龍文

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

カント『純粋理性批判』を読む

——魂の不死について——

カントの『純粋理性批判』の「弁証論」では「魂の不死」の理念について論ぜられる。その箇所を、第二版で大幅に書き換えられたテキストで読む。「魂の不死」はアリストテレスの『魂について（De Anima）』以来の西洋哲学の根本問題であり、この箇所を詳しく読み解くことで、「魂の不死」についてのカントの思想について考える。

【到達目標】

カントの古典的テキストに関して、次のような態度・技能・知識を身につける。

- （1）原典テキストへ立ち返り、思想家の思想そのものを掘り起こす。
- （2）対象について、疑問点を発見、調査、考察して、理解を深める。
- （3）他人の意見も参照して、いっそう説得力のある意見を形成する。
- （4）テキストから掘り起こした思想と他の思想とを比較対照できる。
- （5）レポートにおいて、内容を分かりやすく、しかも正しく伝えられる。
- （6）ドイツ語テキストを訳読する参加者は、ドイツ語原典を正確に読み解ける。
- （7）翻訳書での参加者は、翻訳語や翻訳文の意味を適切に理解できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- （1）最初に前回ゼミのまとめをして質問に答える。
- （2）参加者がテキストの訳読を進め、適宜参考資料も用いて、質疑応答により、ドイツ語文章の内容の理解を深める。
- （3）テキストに秘められた思想を読み取って話し合い、その思想について考えを深める。
- （4）ドイツ語の初学者も、プロトコル（前回のまとめ）やレポート発表などで積極的に参加できるようにする。
- （5）初めてカントのテキストに挑戦する人にも内容がよく分かるように解説する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	魂の持続性	カント『純粋理性批判』原典テキスト PhB:455-456 ページ
第 2 回	魂の分割	同上： 456-457 ページ
第 3 回	思考する存在者	同上： 457-458 ページ
第 4 回	私は思考しつつ現存する	同上： 458-459 ページ
第 5 回	唯物論や唯心論に陥らないための訓練としての合理的心理学	同上： 469-460 ページ
第 6 回	純粋な自己意識	同上： 460-461 ページ
第 7 回	「私は思考する」という命題において与えられた物	同上： 461-462 ページ
第 8 回	来世を想定する権能や必然性	同上： 462-463 ページ
第 9 回	意識の統一	同上： 463-464 ページ
第 10 回	魂は死後にも人格であるか	同上： 464-465 ページ

第 11 回 私とは、思考の主語、 同上： 465-466 ページ

思考の根拠、存在者そのもの

第 12 回 純粋意識の客観 同上： 466-467 ページ

第 13 回 道徳法則の意識 同上： 467-468 ページ

第 14 回 秋学期の振り返り 期末レポートの発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

前回の内容を復習して理解を深めること。次回テキストの内容の全体を把握しておくこと。そして疑問点や問題点について調べておくこと。ドイツ語原典の訳読担当者は訳読の準備をし、プロトコル担当者は前回のまとめのプリントを用意すること。

【テキスト（教科書）】

I. Kant, *Kritik der reinen Vernunft*. Herausgegeben von Jens Timmermann. Felix Meiner Verlag.

(邦訳書)『カント全集』岩波書店版・第 5 巻、理想社版・第 5 巻、その他多数。ゼミのなかで紹介する。

(英訳書) ケンブリッジ版 I. Kant, *Critique of Pure Reason* (The Cambridge Edition of the Works of Immanuel Kant) ほか多数。

【参考書】

＜カントの著作＞

『プロレゴメナ』1783 年

＜関連性の高い文献＞

御子柴善之『カント 純粋理性批判』（角川選書）

ヨハン・シュルツ『カント『純粋理性批判』を読むために』菅沢・渋谷・山下訳（梓出版社）

その他、ゼミで適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】

原典テキストの読解力、問題の発見、調査、考察、理解力、コミュニケーション力、諸思想を比較する力、レポート作成力に関して、次の 2 方面から評価する。

- （1）プロトコル（前回のまとめ）発表、テキスト読解や質疑応答で観察される到達目標達成度（70 %）
- （2）期末レポート課題で確認される到達目標達成度（30 %）

【学生の意見等からの気づき】

言葉を明瞭に発音するように心がける。

定刻どおりに終わるように心がける。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

西洋近代の哲学・倫理学

＜研究テーマ＞

カント哲学・倫理学

＜主要研究業績＞

「カントにおける「人間性の権利」概念について——カントの『法論』は批判哲学に基づくのか——」『法政大学文学部紀要』第 80 号、2020 年。

「世界平和と基本的人権、その指標としての「訪問権」——カントによる世界市民権概念について——」『法政大学文学部紀要』第 76 号、2018 年。

「ヨブの幸福とカント——最高善概念を手がかりに——」『法政大学文学部紀要』第 70 号、2015 年。

(欧文) Kant und das Problem des Lügens. Über Nebeneinanderbestehen der moralischen Pflichten, in; *Kant und die Philosophie in weltbürgerlicher Absicht*, Akten des XI. Internationalen Kant-Kongresses Bd. 3, Berlin, De Gruyter, 2013. (翻訳：共訳) マンフレッド・キューン『カント伝』（春風社）、2017 年。

【Outline (in English)】

Reading Kant's Critique of Pure Reason

— On the Immortality of the Soul —

In the "Dialectic" of Kant's *Critique of Pure Reason*, he discusses the idea of "immortality of the soul". We will read the text rewritten in the second edition. The immortality of the soul has been a fundamental issue in Western philosophy since Aristotle's *On the Soul* (*De Anima*). By reading this text in detail, we will consider Kant's thought about the "immortality of the soul".

[Learning Objectives]

Students will acquire the following attitudes, skills, and knowledges regarding Kant's classical texts.

- (1) To go back to the original text and uncover the thinker's thoughts themselves.
- (2) To deepen their understanding of the subject by discovering, investigating, and considering questions.
- (3) To formulate more persuasive opinions by referring to the opinions of others.
- (4) To compare and contrast ideas from the text with other ones.
- (5) To communicate the content of reports in a clear and correct manner.
- (6) Participants translating a German text should be able to read and understand the original German text accurately.
- (7) Participants should be able to understand the meaning of the translated words and sentences.

[Learning activities outside of classroom]

The standard preparation and review time for this class is each 2 hours.

To review and deepen our understanding of the previous lesson. To understand the entire contents of the next text, and to investigate any questions or problems. Those in charge of translating the German original text should prepare for the reading, and those in charge of protocol should prepare a handout summarizing the previous reading.

[Grading Criteria /Policy]

- (1) 70% of the evaluation will be made in terms of the comprehension of source texts, the ability to find, investigate and consider problems, the communication skills for exchanging opinions, the ability to compare ideas, and the completion of the protocol (summary of the previous session).
- (2) 30% of the evaluation will be made in terms of achievement level of the final report.

PHL500B1

実践哲学特殊講義 1

山口 誠一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ニーチェのデビュー作『悲劇の誕生—あるいはギリシア精神とペシミズム』の世界へ案内します。さらにその世界ののスリリングな地下通路を踏み歩くことにします。そこでは、根源的矛盾というニーチェ流の弁証法や自然理解が見えてくるでしょう。

【到達目標】

根源的矛盾というニーチェ流の弁証法や自然理解が見えてくるようにします。また、ドイツ語の哲学原典を読む力を錬成します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

現代日本でもっともよく親しまれているニーチェの原型を、ディオニュソスのものとアポロンのものの関係、そして根源一者の根源矛盾・根源苦痛に求めます。そのために『悲劇の誕生』を最初から関連資料も使用しながら精読します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ゼミオリエンテーション	訳読計画について
第 2 回	晩期ニーチェの『悲劇の誕生』批判	『悲劇の誕生』「或る自己批判の試み」前半部の検討
第 3 回	晩期ニーチェのディオニュソス哲学	『悲劇の誕生』「或る自己批判の試み」後半部の検討
第 4 回	ディオニュソス的なものとアポロンのもの	『悲劇の誕生』第 1 節前部の検討
第 5 回	アポロンの夢とディオニュソスの陶醉	『悲劇の誕生』第 1 節中間部の検討
第 6 回	ディオニュソス音楽「歓喜の歌」	『悲劇の誕生』第 1 節後部の検討
第 7 回	自然としての芸術力	『悲劇の誕生』第 2 節の検討
第 8 回	ディオニュソス文化の先駆者抒情詩人について	『悲劇の誕生』第 4 節前半部の検討
第 9 回	根源矛盾について	『悲劇の誕生』第 4 節後半部の検討
第 10 回	ソフォクレスのギリシア悲劇	『悲劇の誕生』第 9 節前半部の検討
第 11 回	アイスキュロスのギリシア悲劇	『悲劇の誕生』第 9 節後半部の検討
第 12 回	ギリシア悲劇のディオニュソス的本質	『悲劇の誕生』第 10 節の検討
第 13 回	ギリシア悲劇の没落	『悲劇の誕生』第 10 節の検討
第 14 回	ギリシア悲劇の現代的再生	『悲劇の誕生』第 21 節の検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の授業で扱うテキストを事前に精読し、疑問点を明確にしておいてください。

【テキスト（教科書）】

主要テキストとしては、ニーチェ講読には、F. Nietzsche, Die Geburt der Tragödie(Nietzsche・KSA1)を用います。邦語訳としては『ニーチェ全集 2 悲劇の誕生』(塩屋竹男訳、ちくま学芸文庫)を用います。

【参考書】

W. ミュラー＝ラウター『ニーチェ矛盾の哲学』、秋山英夫他訳、以文社

渡邊二郎編訳『ニーチェ・セクション』、平凡社ライブラリー

山口誠一著『ニーチェとヘーゲル』、法政大学出版局

【成績評価の方法と基準】

原則として、訳読などのレポート(40%)と平常点(60%)で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

とくになし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

ニーチェ/ヘーゲルを中心とするドイツ近現代哲学、新プラトン主義の影響史的解明、日本における西洋哲学受容の解明、国際ヘーゲル研究誌 *Jahrbuch für Hegelforschung* 国際顧問

<研究テーマ>

弁証法哲学の哲学史的研究、ヘーゲル『精神現象学』序説の註解、新訳ヘーゲル全集の編纂、ヘーゲル日本語文献目録国際版の編集、現代日本におけるニヒリズムの解明など。

<主要研究業績>

『ヘーゲル哲学の根源——〈精神現象学〉の問いの解明』、法政大学出版局、

Die japanischsprachige Hegel-Rezeption(1878-2001). Eine Bibliographie. Peter Lang Edition, 2013 (共編著)

『ニーチェ《古代レトリック講義》訳解』、知泉書館、2011年

『ニーチェとヘーゲル—ディオニュソス哲学の地下通路』、法政大学出版局、2010年

『ヘーゲル《新プラトン主義哲学》註解』、知泉書館、2005年

『ヘーゲルのギリシア哲学論』、創文社、1998年

【Outline (in English)】

(Course outline)

The aim of this course is to provide students with an essential understanding of Nietzsche's philosophy, with texts drawn from German and Japanese.

(Learning activities outside of classroom)

Before this class meeting, students will be expected to have read the text. Your required study time is at least one hour for this class meeting.

(Grading Criteria /Policies)

Final grade will be calculated according to the following process: Mid-term reports (40%) and in-class contribution(60%).

PHL500B1

実践哲学特殊講義 2

山口 誠一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ヘーゲルの概念把握的思考による哲学命題の運動で生ずる矛盾と否定を解明する。

【到達目標】

ヘーゲルの概念把握的思考による哲学命題の運動で生ずる矛盾と否定を理解できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

『精神現象学』第 58 節以下を精読しながら、質疑応答する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	訳読計画など。
第 2 回	哲学研究に際しての条件	『精神現象学』第 58 節前半部の検討
第 3 回	概念に内在する。	『精神現象学』第 58 節後半部の検討
第 4 回	理窟をつける思考	『精神現象学』第 59 節前半部の検討
第 5 回	概念把握的思考	『精神現象学』第 59 節後半部の検討
第 6 回	概念把握的思考による命題	『精神現象学』第 60 節前半部の検討
第 7 回	哲学命題での主語と述語	『精神現象学』第 60 節前半部の検討
第 8 回	思弁命題	『精神現象学』第 61 節の検討
第 9 回	神は存在である。	『精神現象学』第 62 節前半部の検討
第 10 回	現実はある。	『精神現象学』第 62 節後半部の検討
第 11 回	命題形式と命題内容	『精神現象学』第 63 節の検討
第 12 回	彫塑的論述	『精神現象学』第 64 節の検討
第 13 回	哲学命題と体系叙述の関係	『精神現象学』第 65 節の検討
第 14 回	まとめ	矛盾の具体的理解をめぐって

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

訳読箇所を予め自分なりに調べておくこと

【テキスト（教科書）】

G. W. F. Hegel, Phänomenologie des Geistes. Hrsg. v. H.-F. Wessels u. H. Clairmont, Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1988.

【参考書】

ヘーゲル全集第 8 巻 1 精神現象学 I、責任編集・訳・注解 山口誠一、知泉書館、2021。

【成績評価の方法と基準】

原則として、訳読などのレポート(40%)と平常点(60%)で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

とくになし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

ニーチェ/ヘーゲルを中心とするドイツ近現代哲学、新プラトン主義の影響史的解明、日本における西洋哲学受容の解明、国際ヘーゲル研究誌 *Jahrbuch für Hegelforschung* 国際顧問
＜研究テーマ＞

弁証法哲学の哲学史的研究、ヘーゲル『精神現象学』序説の註解、新訳ヘーゲル全集の編纂、ヘーゲル日本語文献目録国際版の編集、現代日本におけるニヒリズムの解明など。

＜主要研究業績＞

『ヘーゲル哲学の根源——〈精神現象学〉の問いの解明』、法政大学出版局、

Die japanischsprachige Hegel-Rezeption(1878-2001). Eine Bibliographie. Peter Lang Edition, 2013 (共編著)

『ニーチェ《古代レトリック講義》訳解』、知泉書館、2011年

『ニーチェとヘーゲル—ディオニュソス哲学の地下通路』、法政大学出版局、2010年

『ヘーゲル《新プラトン主義哲学》註解』、知泉書館、2005年

『ヘーゲルのギリシア哲学論』、創文社、1998年

【Outline (in English)】

(Course outline)

The aim of this course is to provide students with an essential understanding of Hegel's Dialectic, with texts drawn from German

and Japanese.

(Learning activities outside of classroom)

Before this class meeting, students will be expected to have read the text. Your required study time is at least one hour for this class meeting.

(Grading Criteria /Policies)

Final grade will be calculated according to the following process: Mid-term reports (40%) and in-class contribution(60%).

PHL500B1

近代ドイツ哲学史特殊講義 1

吉田 敬介

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、アドルノの講演テキスト「哲学のアクチュアリティ」（*Die Aktualität der Philosophie*）の精読を通して、近現代における哲学的思考のあり方について考察します。

「哲学のアクチュアリティ」は、1931 年になされた Th・W・アドルノの私講師就任講演です。この講演においてアドルノは、新カント派や生の哲学、フッサールの現象学やハイデッガーの存在論といった同時代思想と批判的に対決しながら、「意図なき現実の解釈」という哲学の課題を提示します。授業では、この講演原稿の講読を通して、アドルノによる「哲学」論を精確に理解し、その思想史・哲学史上の意義を考察することを試みます。また同時に、アドルノから読み取れる哲学的思考のあり方について、現代のコンテキストを見据えつつ、批判的に議論することも目指されます。春学期には、講演原稿の前半についてドイツ語原文を講読し、議論をする予定です（英語訳での参加も可能です）。

【到達目標】

(A) 「哲学のアクチュアリティ」における「哲学」論をテキストに即して精確に理解できる。

(B) アドルノの「哲学」論の思想史・哲学史的意義を考察できる。

(C) アドルノの「哲学」論について理解・考察したことを、現代のコンテキストから批判的に再検討できる。

※修士課程と博士後期課程では、それぞれ相応の学修と成果が求められます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

はじめにアドルノの思想と著作について簡単に導入をした後、「哲学のアクチュアリティ」（*Die Aktualität der Philosophie*）のドイツ語原文を輪読形式で講読します（英語訳での参加も可能です）。

講読に際しては、受講者全員が事前にテキストを十分に予習していることを前提とします。予習した内容に基づき、テキストを精確に訳読し、意味内容を厳密に確認した上で、疑問点や議論したい点を発言してもらいます。また各回に記録担当者を設定します。該当者には、担当する回の講読内容やなされた議論を記録し、レジュメにまとめて次回の冒頭に発表してもらいます。その他、進捗や要望に応じて、受講者による発表を行ってもらう可能性があります。受講する皆さんには積極的な参加を望みます。

なお、重要なお知らせをすることもありうるので、適宜、授業支援システム Hoppii を確認するようお願いします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業の進め方の確認
第 2 回	アドルノの思想と著作について導入	アドルノの思想および著作の内容や性格について
第 3 回	「哲学のアクチュアリティ」について導入	「哲学のアクチュアリティ」の成立事情と性格、重要な諸論点
第 4 回	「哲学のアクチュアリティ」の講読 (1)	325 頁の精読、検討
第 5 回	「哲学のアクチュアリティ」の講読 (2)	325-326 頁の精読、検討
第 6 回	「哲学のアクチュアリティ」の講読 (3)	326 頁の精読、検討
第 7 回	「哲学のアクチュアリティ」の講読 (4)	326-327 頁の精読、検討

第 8 回	「哲学のアクチュアリティ」の講読 (5)	327-328 頁の精読、検討
第 9 回	「哲学のアクチュアリティ」の講読 (6)	328-329 頁の精読、検討
第 10 回	「哲学のアクチュアリティ」の講読 (7)	329-330 頁の精読、検討
第 11 回	「哲学のアクチュアリティ」の講読 (8)	330-331 頁の精読、検討
第 12 回	「哲学のアクチュアリティ」の講読 (9)	331-332 頁の精読、検討
第 13 回	「哲学のアクチュアリティ」の講読 (10)	332 頁の精読、検討
第 14 回	春学期のまとめ	春学期の講読内容の整理・検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

・Th. W. Adorno, "Die Aktualität der Philosophie", in: Gesammelte Schriften, Suhrkamp, Bd. 1, S. 325-344.

(なおテキストの詳細に関しては、第一回の授業で説明をするので、準備はそれから構いません)

【参考書】

・Th. W. Adorno, "The Actuality of Philosophy", in: The Adorno Reader, ed. by B. O'Connor, Blackwell Publishing, pp. 23-39 (英語訳)

・T・W・アドルノ『哲学のアクチュアリティ』（細見和之訳）、みすず書房

・麻生博之「アドルノ」（『哲学の歴史 第 10 巻 危機の時代の哲学【20 世紀 I】』中央公論新社、所収）

その他の参考文献は、授業中に指示します。

【成績評価の方法と基準】

成績配分は、平常点（講読時のテキスト理解、議論への参加、その他の授業への取り組みなどの総合評価）60 %、発表への取り組み 40 %です。

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更により昨年度のフィードバックはできませんが、受講者の意見はできるだけ取り入れたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】

オンライン授業の場合に必要なため、Zoom に接続可能な機器を準備してください。

【その他の重要事項】

春学期・秋学期合わせての履修を推奨します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 社会哲学、宗教哲学

<研究テーマ> キルケゴールの思想、アドルノやホルクハイマーの批判理論、ドイツ近現代思想

<主要研究業績> 「『啓蒙の弁証法』から読むキルケゴール—反知性主義か、啓蒙の自己省察か」（論文）、『社会思想史研究』第 45 号、2021 年、「隠された内面性から、外的世界との衝突へ—キルケゴールの「内面性」概念を再解釈する試み」（論文）、『哲学』第 72 号、2021 年、「Adornos Kierkegaard-Aneignung als Säkularisierung des Religiösen」（論文）、in: Der Schein des Lichts, der ins Gefängnis selber fällt: Religion, Metaphysik, Kritische Theorie, 2018, S. 161-178、「キルケゴール・ルネッサンスの影」（論文）、『学習院大学人文科学論集』第 22 号、2013 年〔ドイツ語版："Der Schatten der Kierkegaard-Renaissance", Kierkegaard Studies Yearbook, 2015〕

【Outline (in English)】

Course outline: This course deals with Adorno's conception of philosophy in his lecture "The Actuality of Philosophy".

Learning Objectives: The goals of this course are to (A) understand Adorno's conception of philosophy, (B) discuss its significance in the history of philosophy, and (C) examine it in the contemporary context.

Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

Grading Criteria/Policies: Grading will be decided based on in-class contribution (60%), and in-class presentations (40%).

PHL500B1

近代ドイツ哲学史特殊講義 2

吉田 敬介

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、アドルノの講演テキスト「哲学のアクチュアリティ」(Die Aktualität der Philosophie) の精読を通して、近現代における哲学的思考のあり方について考察します。

「哲学のアクチュアリティ」は、1931 年になされた Th・W・アドルノの私講師就任講演です。この講演においてアドルノは、新カント派や生の哲学、フッサールの現象学やハイデッガーの存在論といった同時代思想と批判的に対決しながら、「意図なき現実の解釈」という哲学の課題を提示します。授業では、この講演原稿の講読を通して、アドルノによる「哲学」論を精確に理解し、その思想史・哲学史上の意義を考察することを試みます。また同時に、アドルノから読み取れる哲学的思考のあり方について、現代のコンテキストを見据えつつ、批判的に議論することも目指されます。秋学期には、春学期に引き続き、講演原稿の後半についてドイツ語原文を講読し、議論をする予定です（英語訳での参加も可能です）。

【到達目標】

(A) 「哲学のアクチュアリティ」における「哲学」論をテキストに即して精確に理解できる。

(B) アドルノの「哲学」論の思想史・哲学史的意義を考察できる。

(C) アドルノの「哲学」論について理解・考察したことを、現代のコンテキストから批判的に再検討できる。

※修士課程と博士後期課程では、それぞれ相応の学修と成果が求められます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

はじめに春学期の講読内容を確認した後、引き続き、「哲学のアクチュアリティ」(Die Aktualität der Philosophie) のドイツ語原文を輪読形式で講読します（英語訳での参加も可能です）。

講読に際しては、受講者全員が事前にテキストを十分に予習していることを前提とします。予習した内容に基づき、テキストを精確に訳読し、意味内容を厳密に確認した上で、疑問点や議論したい点を発言してもらいます。また各回に記録担当者を設定します。該当者には、担当する回の講読内容やなされた議論を記録し、レジュメにまとめて次の冒頭に発表してもらいます。その他、進捗や要望に応じて、受講者による発表を行ってもらう可能性があります。受講する皆さんには積極的な参加を望みます。

なお、重要なお知らせをすることもありうるので、適宜、授業支援システム Hoppii を確認するようお願いいたします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業の進め方の確認
第 2 回	春学期の振り返り	「哲学のアクチュアリティ」 325-332 頁の内容・論点の確認
第 3 回	「哲学のアクチュアリティ」の講読 (1)	332-333 頁の精読、検討
第 4 回	「哲学のアクチュアリティ」の講読 (2)	333-334 頁の精読、検討
第 5 回	「哲学のアクチュアリティ」の講読 (3)	334-336 頁の精読、検討
第 6 回	「哲学のアクチュアリティ」の講読 (4)	336-337 頁の精読、検討
第 7 回	「哲学のアクチュアリティ」の講読 (5)	337-339 頁の精読、検討

第 8 回	「哲学のアクチュアリティ」の講読 (6)	339-340 頁の精読、検討
第 9 回	「哲学のアクチュアリティ」の講読 (7)	340-341 頁の精読、検討
第 10 回	「哲学のアクチュアリティ」の講読 (8)	341-342 頁の精読、検討
第 11 回	「哲学のアクチュアリティ」の講読 (9)	342-343 頁の精読、検討
第 12 回	「哲学のアクチュアリティ」の講読 (10)	343-344 頁の精読、検討
第 13 回	秋学期のまとめ	秋学期の講読内容の整理・検討
第 14 回	一年間のまとめ・展望	一年間の講読内容の整理・検討 議論と展望

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

・Th. W. Adorno, "Die Aktualität der Philosophie", in: Gesammelte Schriften, Suhrkamp, Bd. 1, S. 325-344.

【参考書】

・Th. W. Adorno, "The Actuality of Philosophy", in: The Adorno Reader, ed. by B. O'Connor, Blackwell Publishing, pp. 23-39 (英語訳)

・T・W・アドルノ『哲学のアクチュアリティ』（細見和之訳）、みすず書房

・麻生博之「アドルノ」（『哲学の歴史 第 10 巻 危機の時代の哲学【20 世紀 I】』中央公論新社、所収）

その他の参考文献は、授業中に指示します。

【成績評価の方法と基準】

成績配分は、平常点（講読時のテキスト理解、議論への参加、その他の授業への取り組みなどの総合評価）60 %、発表への取り組み 40 %です。

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更により昨年度のフィードバックはできませんが、受講者の意見はできるだけ取り入れたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】

オンライン授業の場合に必要なため、Zoom に接続可能な機器を準備してください。

【その他の重要事項】

春学期・秋学期合わせての履修を推奨します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 社会哲学、宗教哲学

<研究テーマ> キルケゴールの思想、アドルノやホルクハイマーの批判理論、ドイツ近現代思想

<主要研究業績> 「『啓蒙の弁証法』から読むキルケゴール—反知性主義か、啓蒙の自己省察か」（論文）、『社会思想史研究』第 45 号、2021 年、「隠された内面性から、外的世界との衝突へ—キルケゴールの「内面性」概念を再解釈する試み」（論文）、『哲学』第 72 号、2021 年、"Adornos Kierkegaard-Aneignung als Säkularisierung des Religiösen"（論文）、in: Der Schein des Lichts, der ins Gefängnis selber fällt: Religion, Metaphysik, Kritische Theorie, 2018, S. 161-178、「キルケゴール・ルネッサンスの影」（論文）、『学習院大学人文科学論集』第 22 号、2013 年〔ドイツ語版："Der Schatten der Kierkegaard-Renaissance", Kierkegaard Studies Yearbook, 2015〕

【Outline (in English)】

Course outline: This course deals with Adorno's conception of philosophy in his lecture "The Actuality of Philosophy".

Learning Objectives: The goals of this course are to (A) understand Adorno's conception of philosophy, (B) discuss its significance in the history of philosophy, and (C) examine it in the contemporary context.

Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

Grading Criteria/Policies: Grading will be decided based on in-class contribution (60%), and in-class presentations (40%).

PHL500B1

科学哲学特殊講義 1

佐藤 真人

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

初期デカルトの革新的な認識論の到達点でありながら未完の著作である『精神指導の規則（規則論）』をフランス語で丁寧に読解します（原文はラテン語なので、適宜ラテン語原文を参照しつつ、フランス語訳で読解します）。

『方法序説（叙説）』第二部で語られた有名な「四つの方法」は、それだけでは理解が困難な箇所であり、その詳細は『規則論』を読まなければわかりません。

本書の精読によって、若きデカルトが何をめざし、それはいかなる研究による成果なのか、そして本書はなぜ未完のまま残されたのかといった点について、つまり初期デカルト認識論の射程と達成、そしてその限界について読み解くことで、『方法序説』までの初期デカルト哲学の理解をめざします。

【到達目標】

① デカルト『精神指導の規則』のフランス語の精確な訳読ができる（フランス語の初学者や邦訳書による受講者は、著作内容の精確な理解ができる）。

② 内容を精確に理解し、それについて論理的な説明と議論ができる。

③ テーマや問題点を自ら探し、必要な文献を読んで考察を深め、文章で表すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

以下の手順で進めます。

① 担当者による訳読と、その内容や背景等の説明

② 質疑応答や全体での議論（フランス語や日本語訳の確認、内容の解釈や背景の説明等について）

③ 教員のコメントと補足説明（考えられうる掘り下げや問題点等について）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業の概要や今後の進め方の説明、【規則論】とはいかなる著作か
第 2 回	【規則論】	人間的知恵とは何か、訳読、解釈、議論
第 3 回	【第一規則】	学問の連鎖について、訳読、解釈、議論
第 4 回	【第二規則】	明証性とは何か、訳読、解釈、議論
第 5 回	【第三規則】	直観と演繹について、訳読、解釈、議論
第 6 回	【第四規則】	真理探究の方法の形成について、訳読、解釈、議論
第 7 回	【第四規則】	真理の種子と解析について、訳読、解釈、議論
第 8 回	【第四規則】	普遍数学について、訳読、解釈、議論
第 9 回	【第五規則】	探究の順序について、訳読、解釈、議論
第 10 回	【第六規則】	事物の単純性と比例関係について、訳読、解釈、議論
第 11 回	【第七規則】	絶対的なものと相対的なものについて、訳読、解釈、議論

- 第12回 「第七規則」 純粋数学の核心とは何か、訳読、
解釈、議論
第13回 「第八規則」 探究の進め方について — 数学と
屈折光学の例、訳読、解釈、議論
第14回 「第八規則」 認識の本質と射程について — デ
カルト認識論の革新性とは何か、
訳読、解釈、議論、学期の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

訳読担当者は、担当箇所について、自分の言葉による日本語訳とその説明（解釈）を準備すること。
その他の受講者は当該箇所を熟読し、何が問題となっているのかを考えて授業に臨むこと。
本授業の準備学習・復習は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

以下のうち、どちらか一つ。

① René Descartes, *Œuvres complètes I. Premiers écrits: Règles pour la direction de l'esprit*, Gallimard (collection « tel »), 2016 (ISBN: 978-2070786756)

② René Descartes, *Œuvres complètes*, Vrin, 1996/2000 (ISBN: 978-2711612673) のうち、第10巻 (X)

なお、②にはラテン語原文のみで、フランス語訳はないので、②を入手する人は、別途 René Descartes, *Règles pour la direction de l'esprit*, livre de poche, 2002 (ISBN: 978-2253067535) などのフランス語訳を入手したほうがよい。

①か②のどちらかを入手するのが望ましいが、希望者には②の pdf を配布する予定。

【参考書】

邦訳は デカルト、『精神指導の規則』（野田又夫訳、岩波文庫）

または、『デカルト著作集 [4]』（白水社）。

まずは参考書に頼らず、原典（仏訳かラテン語原文）の熟読から始め、内容の精確な理解に努めてください。そのうえで、テーマに関連する参考書を各自で探すこと（授業内でも参考書については適宜言及します）。

なお、デカルトの著作は以下で検索可能。

<https://www.unicaen.fr/puc/sources/prodescartes/recherche>

ネット上の哲学辞典としては、「スタンフォード哲学百科事典」を勧めます。

<https://plato.stanford.edu/index.html>

【成績評価の方法と基準】

発表者としての内容（訳読と説明、解釈）40%、受講者としての演習への参加内容（議論への参加とその内容など）25%、レポート35%（またはレポートを課さない場合、発表内容65%、参加内容35%）の割合で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

受講者の理解度に応じて、内容と進展の具合を勘案します。

【その他の重要事項】

講義の進展に伴い、初期デカルトの関連する他の著述を読む可能性もあり、その場合、講義の内容や順序が若干変わるかもしれません。読了することより、受講者の丁寧な読解と議論を重視したいので、年度中に読了しない可能性もあります。

【担当教員の専門分野等】

デカルトの哲学、フランス哲学と西洋近世の哲学

【研究テーマ】

主に自然本性概念からみたデカルト哲学の総合的研究と、西洋近世哲学におけるその位置づけと発展

【主要研究業績】

「信仰を支える人間的な論拠 — デカルトの『表面』について」（日本哲学会、『哲学』、第73号、2022年）

「デカルト形而上学の論証の方法 — 類比的考察を通じて」（日仏哲学会、『フランス哲学・思想研究』、第26号、2021年）

「デカルトの『自然の教え』とは何か — ストア派の自然本性概念との対比で —」（日本倫理学会、『倫理学年報』、第70集、2021年）

「無限か広大無辺か — デカルト形而上学の一極点の考察」（東洋大学国際哲学研究センター、『国際哲学研究』、第8号、2019年）

「デカルトはラムス主義者か — 初期デカルト認識論に見る数学的方法の一側面」（日仏哲学会、『フランス哲学・思想研究』、第23号、2018年）

「『規則論』は断絶した著作か — 自然学と神の問題における『規則論』の方法 —」（『理想』、第699号、2017年）

« La métaphysique de la “nature” dans les natures simples chez Descartes »（日仏哲学会、『フランス哲学・思想研究』、第21号、2016年）など。

【Outline (in English)】

We will carefully read Descartes' *Rules for the direction of the mind* in French (the original text is in Latin and we will refer to the Latin original as necessary), which is innovative epistemological achievement of the early Descartes, but also his unfinished work.

The famous "Four Methods" discussed in the *Discourse on method* II are difficult to understand on their own, and their details can only be understood by reading the *Rules*.

Through a close reading of this book, we will try to understand what the young Descartes aimed at, what kind of research resulted in it, and why this book was left unfinished. In other words, we aim to deepen our understanding of the early Cartesian philosophy until *Discourse* by considering the scope and the accomplishment of the early Cartesian epistemology, as well as its limit.

Students are expected by the end of the course to understand, translate and explain by themselves Descartes' text in French and its background thoughts, to construct their arguments logically through readings and discussions, and to search by themselves for issues and themes they will address in their own arguments and thesis.

Before each class meeting, students are to read, translate and interpret carefully the relevant text of the next class and to consider the arguments of the text and its possible background sources and thoughts. Students in charge of presentation of the day are to prepare a resume of translation and arguments to be distributed. Required study time is two hours each before and after the class.

Grade will be decided on the following proportion. Presentation: 40%, In-class contribution: 25%, Report: 35% (if no report is assigned, Presentation: 65% & In-class contribution: 35%).

PHL500B1

科学哲学特殊講義 2

佐藤 真人

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

前期から引き続き、初期デカルト認識論の到達点である『精神指導の規則（規則論）』をフランス語で丁寧に読解します（原文はラテン語なので、適宜ラテン語原文を参照しつつ、フランス語訳で読解します）。

『方法序説（叙説）』第二部で語られた有名な「四つの方法」は、それだけでは理解が困難な箇所であり、その詳細は『規則論』を読まなければわかりません。

本書の精読によって、若きデカルトが何をめざし、それはいかなる研究による成果なのか、そして本書はなぜ未完のまま残されたのかといった点について、つまり初期デカルト認識論の射程と達成、そしてその限界について読み解くことで、『方法序説』までの初期デカルト哲学の理解をめざします。

【到達目標】

- ① デカルト『精神指導の規則』のフランス語の正確な訳読ができる（フランス語の初学者や邦訳書による受講者は、著作内容の正確な理解ができる）。
- ② 内容を正確に理解し、それについて論理的な説明と議論ができる。
- ③ テーマや問題点を自ら探し、必要な文献を読んで考察を深め、文章で表すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

以下の手順で進めます。

- ① 担当者による訳読と、その内容や背景等の説明
- ② 質疑応答や全体での議論（フランス語や日本語訳の確認、内容の解釈や背景の説明等について）
- ③ 教員のコメントと補足説明（考えられうる掘り下げや問題点等について）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	『規則論』 「第九規則」	容易な事物の考察について、訳読、解釈、議論
第 2 回	「第十規則」	発見としての哲学について、訳読、解釈、議論
第 3 回	「第十一規則」	思惟の運動による通覧について、訳読、解釈、議論
第 4 回	「第十二規則」	外部感覚と共通感覚について、訳読、解釈、議論
第 5 回	「第十二規則」	知性と想像力について、訳読、解釈、議論
第 6 回	「第十二規則」	単純本性とは何か、訳読、解釈、議論
第 7 回	「第十二規則」	単純本性の結合について、訳読、解釈、議論
第 8 回	「第十三規則」	単純性の抽出について — 磁石の例、訳読、解釈、議論
第 9 回	「第十三規則」	確実な知識の探究について — 「場所」と自然学上の例、訳読、解釈、議論
第 10 回	「第十四規則」	比較による認識について、訳読、解釈、議論
第 11 回	「第十四規則」	類比による認識について、訳読、解釈、議論

第 12 回 「第十四規則」	知性による認識と想像力による認識について — 延長の例、訳読、解釈、議論
第 13 回 「第十四規則」	尺度による認識について、訳読、解釈、議論
第 14 回 「第十五規則」 以下	『規則論』の狙い・達成・限界について、訳読、解釈、議論、学期の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

訳読担当者は、担当箇所について、自分の言葉による日本語訳とその説明（解釈）を準備すること。
その他の受講者は当該箇所を熟読し、何が問題となっているのかを考えて授業に臨むこと。
本授業の準備学習・復習は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

以下のうち、どちらか一つ。

① René Descartes, *Œuvres complètes I. Premiers écrits: Règles pour la direction de l'esprit*, Gallimard (collection « tel »), 2016 (ISBN: 978-2070786756)

② René Descartes, *Œuvres complètes*, Vrin, 1996;2000 (ISBN: 978-2711612673) のうち、第 10 巻 (X)

なお、②にはラテン語原文のみで、フランス語訳はないので、②を入手する人は、別途 René Descartes, *Règles pour la direction de l'esprit*, livre de poche, 2002 (ISBN: 978-2253067535) などのフランス語訳を入手したほうがよい。

①か②のどちらかを入手するのが望ましいが、希望者には②の pdf を配布する予定。

【参考書】

邦訳は デカルト、『精神指導の規則』（野田又夫訳、岩波文庫）

または、『デカルト著作集 [4]』（白水社）。

まずは参考書に頼らず、原典（仏訳かラテン語原文）の熟読から始め、内容の正確な理解に努めてください。そのうえで、テーマに関連する参考書を各自で探すこと（授業内でも参考書については適宜言及します）。

なお、デカルトの著作は以下で検索可能。

<https://www.unicaen.fr/puc/sources/prodescartes/recherche>

ネット上の哲学辞典としては、「スタンフォード哲学百科事典」を勧めます。

<https://plato.stanford.edu/index.html>

【成績評価の方法と基準】

発表者としての内容（訳読と説明、解釈）40%、受講者としての演習への参加内容（議論への参加とその内容など）25%、レポート 35%（またはレポートを課さない場合、発表内容 65%、参加内容 35%）の割合で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

受講者の理解度に応じて、内容と進展の具合を勘案します。

【その他の重要事項】

講義の進展に伴い、初期デカルトの関連する他の著述を読む可能性もあり、その場合、講義の内容や順序が若干変わるかもしれません。

【担当教員の専門分野等】

デカルトの哲学、フランス哲学と西洋近世の哲学

【研究テーマ】

主に自然本性概念からみたデカルト哲学の総合的研究と、西洋近世哲学におけるその位置づけと発展

【主要研究業績】

「信仰を支える人間的な論拠 — デカルトの『表面』について」（日本哲学会、『哲学』、第 73 号、2022 年）

「デカルト形而上学の論証の方法 — 類比の考察を通じて」（日仏哲学会、『フランス哲学・思想研究』、第 26 号、2021 年）

「デカルトの『自然の教え』とは何か — ストア派の自然本性概念との対比で —」（日本倫理学会、『倫理学年報』、第 70 集、2021 年）

「無限に広大無辺か — デカルト形而上学の一極点の考察」（東洋大学国際哲学研究センター、『国際哲学研究』、第 8 号、2019 年）

「デカルトはラムス主義者か — 初期デカルト認識論に見る数学的方法の一側面」（日仏哲学会、『フランス哲学・思想研究』、第 23 号、2018 年）

「『規則論』は断絶した著作か — 自然学と神の問題における『規則論』の方法 —」（『理想』、第 699 号、2017 年）

« La métaphysique de la “nature” dans les natures simples chez Descartes » (日仏哲学会、『フランス哲学・思想研究』、第 21 号、2016 年) など。

【Outline (in English)】

We will carefully read Descartes' *Rules for the direction of the mind* in French (the original text is in Latin and we will refer to the Latin original as necessary).

The famous "Four Methods" discussed in the *Discourse on method* II are difficult to understand on their own, and their details can only be understood by reading the *Rules*.

Through a close reading of this book, we will try to understand what the young Descartes aimed at, what kind of research resulted in it, and why this book was left unfinished. In other words, we aim to deepen our understanding of the early Cartesian philosophy until *Discourse* by considering the scope and the accomplishment of the early Cartesian epistemology, as well as its limit.

Students are expected by the end of the course to understand, translate and explain by themselves Descartes' text in French and its background thoughts, to construct their arguments logically through readings and discussions, and to search by themselves for issues and themes they will address in their own arguments and thesis.

Before each class meeting, students are to read, translate and interpret carefully the relevant text of the next class and to consider the arguments of the text and its possible background sources and thoughts. Students in charge of presentation of the day are to prepare a resume of translation and arguments to be distributed. Required study time is two hours each before and after the class.

Grade will be decided on the following proportion. Presentation: 40%, In-class contribution: 25%, Report: 35% (if no report is assigned, Presentation: 65% & In-class contribution: 35%).

PHL500B1

近代フランス哲学史特殊講義 1

酒井 健

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

フランスの思想家ジョルジュ・バタイユ（1897-1962）の後期の思想を理解する。作品としては 1950 年代の未発表草稿『至高性』を対象にする。バタイユの基本から理解していき、フランス現代思想との点を探る。

【到達目標】

【博士後期課程】

より一層深いバタイユの理解へ達する。たとえば「交流」「共同体」の問題をフランス現代思想の視点に立って理解していく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- 1) ゼミ形式の講読の授業。原書でバタイユの文章を読んでいく。適宜、受講生の発表を交えていく。
- 2) 課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定
- 3) なお、本年度の開講は 2022 年 4 月 9 日土曜日（2 時限）に教室にて対面で行う予定である。ただし社会情勢に応じてオンラインのズーム授業に転じる場合もある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	授業紹介	春学期の予定を説明する。
第 2 回	『至高性』第 1 回	作品の概要説明
第 3 回	『至高性』第 2 回	第 3 部第 1 章第 1 節
第 4 回	『至高性』第 3 回	第 3 部第 1 章第 2 節
第 5 回	『至高性』第 4 回	第 3 部第 1 章第 3 節
第 6 回	『至高性』第 5 回	第 3 部第 1 章第 4 節
第 7 回	『至高性』第 6 回	第 3 部第 1 章第 5 節
第 8 回	『至高性』第 7 回	第 3 部第 2 章第 1 節
第 9 回	『至高性』第 8 回	第 3 部第 2 章第 2 節
第 10 回	『至高性』第 9 回	第 3 部第 2 章第 3 節
第 11 回	『至高性』第 10 回	第 3 部第 2 章第 4 節
第 12 回	『至高性』第 11 回	第 3 部第 2 章第 5 節
第 13 回	『至高性』第 12 回	第 3 部第 2 章第 6 節
第 14 回	『至高性』第 13 回	第 3 部第 2 章第 7 節

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
バタイユならびに現代思想に関心を持って読書を進めてほしい。とくに参考書にあげた文献は読んでおいてほしい。

【テキスト（教科書）】

La Souveraineté in Œuvres Complètes de Georges Bataille, tome VIII, Gallimard

【参考書】

酒井健著『バタイユ入門』（ちくま新書）、湯浅博雄『消尽』（講談社学術文庫）、
バタイユ著『呪われた部分、全般経済学試論・蕩尽』（酒井健訳、ちくま学芸文庫）

【成績評価の方法と基準】

【博士後期課程】

- ①毎回の訳出（50 %）
 - ②学期末の発表（50 %）
- ≪ 到達目標との対応 ≫

上記①と②を通して、博士後期課程の「到達目標」を確認していく。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞フランス現代思想

＜研究テーマ＞バタイユ研究

＜主要研究業績＞

『夜の哲学 バタイユから生の深淵へ』（青土社、2016 年）

【Outline (in English)】

【Course outline】

The purpose of this course is to learn the thought of Georges Bataille.

【Learning Objectives】

Especially at the end of this course, students are expected to a good comprehension of one of his last works :Souveraineté. That is mainly by the reading of original French text of this work.

【Learning activities outside of classroom】

Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter from the text. Your study time will be more than four hours for a class.

【Grading Criteria】

Your overall grade in the class will be based on the following.
Translation in each class meeting:50 % and presentation at the end of this course:50%.

PHL500B1

近代フランス哲学史特殊講義 2

酒井 健

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

春学期に引き続きフランスの思想家ジョルジュ・バタイユ(1897-1962)の後期の思想を理解する。作品としては 1950 年代の未発表草稿『至高性』を対象にする。バタイユの基本から理解していき、フランス現代思想との点を探る。

【到達目標】

【博士課程】

より一層深いバタイユの理解へ達する。たとえば「交流」「共同体」の問題をフランス現代思想の視点に立って理解していく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- 1) ゼミ形式の講読の授業。
- 2) 原書でバタイユの文章を読んでいく。適宜、受講生の発表を交える。
- 3) 課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定でいく。
- 4) なお、本年度の授業は教室にて対面で行う予定である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	授業紹介	秋学期授業の内容紹介とテキスト紹介
第 2 回	『至高性』第 1 回	第 3 部第 2 章第 8 節
第 3 回	『至高性』第 2 回	第 3 部第 2 章第 9 節
第 4 回	『至高性』第 3 回	第 3 部第 2 章第 10 節
第 5 回	『至高性』第 4 回	第 3 部第 2 章第 11 節
第 6 回	『至高性』第 5 回	第 4 部第 1 章第 1 節
第 7 回	『至高性』第 6 回	第 4 部第 1 章第 2 節
第 8 回	『至高性』第 7 回	第 4 部第 1 章第 30 節
第 9 回	『至高性』第 8 回	第 4 部第 2 章第 1 節
第 10 回	『至高性』第 9 回	第 4 部第 2 章第 2 節
第 11 回	『至高性』第 10 回	第 4 部第 2 章第 3 節
第 12 回	『至高性』第 11 回	第 4 部第 2 章第 4 節
第 13 回	『至高性』第 12 回	第 4 部第 2 章第 5 節
第 14 回	『至高性』第 13 回	まとめと出席者による発表。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

バタイユおよびフランス現代思想の著作に親しんでおくこと。
本授業は準備と復習にそれぞれ4時間かけることを標準とする。

【テキスト（教科書）】

La Souveraineté in Œuvres Complètes de Georges Bataille, tome VIII, Gallimard

【参考書】

酒井健著『バタイユ入門』（ちくま新書）

湯浅博雄『消尽』（講談社学術文庫）

バタイユ著『呪われた部分、全般経済学試論・蕩尽』（酒井健訳、ちくま学芸文庫）

【成績評価の方法と基準】

【博士後期課程】

①毎回の訳出（50 %）

②学期末の発表（50 %）

≪ 到達目標との対応 ≫

上記①と②を通して、博士後期課程の「到達目標」を確認していく。

【学生の意見等からの気づき】

概ね好評であった。学生からの要望には随時対応するので、気軽に伝えてほしい。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞フランス現代思想

＜研究テーマ＞ジョルジュ・バタイユ研究

＜主要研究業績＞酒井健著『バタイユと芸術』青土社、2019 年

【Outline (in English)】

【Course outline】

The purpose of this course is to learn the thought of Georges Bataille.

【Learning Objectives】

Especially at the end of this course, students are expected to a good comprehension of one of his last works :Souveraineté. That is mainly by the reading of original French text of this work.

【Learning activities outside of classroom】

Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter from the text. Your study time will be more than four hours for a class.

【Grading Criteria】

Your overall grade in the class will be based on the following.
Translation in each class meeting:50 % and presentation at the end of this course:50%.

PHL500B1

現象学特殊講義 1

君嶋 泰明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

マルティン・ハイデガーが 1922 年夏学期講義（全集 62 巻）において行ったアリストテレス『自然学』第 1 巻第 2~3 章の解釈を読む。同章でアリストテレスは「万物は一つである」とするパルメニデスの存在観を批判しており、ハイデガーはこの批判に存在と言葉の関係にかんする重要な洞察が潜んでいると見ている。その洞察に迫るのが目標である。
なお受講者の関心に応じて、西洋と日本における存在と言葉についての考え方の違いも検討する。

【到達目標】

- ①アリストテレスのパルメニデス批判をハイデガーがどのように解釈しているかを理解する。
- ②そのことを通じて、存在と言葉の関係についてのハイデガーの視方を理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

担当者は、テキストの割り当てられた箇所を音読し、日本語訳を述べ、解釈が必要な点については自分の解釈を提示する。参加者はこれに基づき全員で議論し、内容についての理解を深める。別途課題を課した場合、それへのフィードバックは次回授業で行う。
なお、以下の授業計画に記したページ数はあくまで目安であり、進度に応じて適宜変更する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	概要の説明
第 2 回	ハイデガーの『自然学』解釈①	報告と討議（165-167 頁）
第 3 回	ハイデガーの『自然学』解釈②	報告と討議（168-170 頁）
第 4 回	ハイデガーの『自然学』解釈③	報告と討議（171-173 頁）
第 5 回	ハイデガーの『自然学』解釈④	報告と討議（174-176 頁）
第 6 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑤	報告と討議（177-179 頁）
第 7 回	ハイデガーの『自然学』解釈①	報告と討議（200-202 頁）
第 8 回	ハイデガーの『自然学』解釈②	報告と討議（203-205 頁）
第 9 回	ハイデガーの『自然学』解釈③	報告と討議（206-208 頁）
第 10 回	ハイデガーの『自然学』解釈④	報告と討議（209-211 頁）
第 11 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑤	報告と討議（212-214 頁）
第 12 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑥	報告と討議（215-217 頁）
第 13 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑦	報告と討議（218-220 頁）
第 14 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑧	報告と討議（221-223 頁）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。担当者は、テキストの割り当てられた箇所を音読、日本語訳、解釈を準備して授業に臨む。参加者は該当箇所を熟読してくる。

【テキスト（教科書）】

Martin Heidegger, *Phänomenologische Interpretationen ausgewählter Abhandlungen des Aristoteles zur Ontologie und Logik*, Gesamtausgabe Bd. 62, Vittorio Klostermann, 2005.

未邦訳。希望者には該当箇所のコピーを配布する。

【参考書】

アリストテレス著・内山勝利訳、『アリストテレス全集 4 自然学』、岩波書店、2017 年

William Charlton, *Aristotle Physics Books I and II*, Oxford University Press, 1970.

前者はアリストテレスの『自然学』の邦訳。後者はその英訳と注釈。これらも希望者には該当箇所のコピーを配布する。

【成績評価の方法と基準】

担当者としての評価が 80%、議論への参加度の評価が 20%。上記の到達目標がどれだけ達成されているかが主な評価基準となる。

【学生の意見等からの気づき】

受講者の理解度を配慮しながら適宜解説を加えつつ授業を進める。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現象学・解釈学

<研究テーマ>

ハイデガーの西洋哲学史観の批判的検討

<主要研究業績>

・「『存在忘却』とは何か」、『法政大学文学部紀要』82 号、2020 年。

・「信仰と哲学——ハイデガーの 아우グスティヌス 解釈について」、『アルケー』26 号、2018 年。

・「ハイデガーのデカルト解釈について」、『哲学論叢』41 号、2014 年。

・「不断の逸れに抗して真正な道を歩むこと——ハイデガー初期フライブルク講義に見る「形式的告示」が持つ含意」、『アルケー』20 号、2012 年。

【Outline (in English)】

(Course outline)

This course deals with Martin Heidegger's interpretation of Aristotle's *Physics*.

(Learning Objectives)

The goal of this course is to understand Heidegger's view on the relationship between being and language.

(Learning activities outside of classroom)

Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter(s) from the texts. Your required study time is at least two hours for each class meeting.

(Grading Criteria /Policies)

Grading will be decided based on short reports (80%) and in-class contribution (20%).

PHL500B1

現象学特殊講義 2

君嶋 泰明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

春学期に引き続き、マルティン・ハイデガーが 1922 年夏学期講義（全集 62 巻）において行ったアリストテレス『自然学』第 1 巻第 2~3 章の解釈を読む。同章でアリストテレスは「万物は一つである」とするバルメニデスの存在観を批判しており、ハイデガーはこの批判に存在と言葉の関係にかんする重要な洞察が潜んでいると見ている。その洞察に迫るのが目標である。なお受講者の関心に応じて、西洋と日本における存在と言葉についての考え方の違いも検討する。

【到達目標】

①アリストテレスのバルメニデス批判をハイデガーがどのように解釈しているかを理解する。

②そのことを通じて、存在と言葉の関係についてのハイデガーの見方を理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

担当者は、テキストの割り当てられた箇所を音読し、日本語訳を述べ、解釈が必要な点については自分の解釈を提示する。参加者はこれに基づき全員で議論し、内容についての理解を深める。別途課題を課した場合、それへのフィードバックは次回授業で行う。なお、以下の授業計画に記したページ数はあくまで目安であり、進度に応じて適宜変更する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	春学期の振り返りと概要の説明
第 2 回	ハイデガーの『自然学』解釈①	報告と討議（224-226 頁）
第 3 回	ハイデガーの『自然学』解釈②	報告と討議（227-229 頁）
第 4 回	ハイデガーの『自然学』解釈③	報告と討議（230-232 頁）
第 5 回	ハイデガーの『自然学』解釈④	報告と討議（233-235 頁）
第 6 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑤	報告と討議（236-237 頁）
第 7 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑥	報告と討議（238-240 頁）
第 8 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑦	報告と討議（241-243 頁）
第 9 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑧	報告と討議（244-246 頁）
第 10 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑨	報告と討議（247-249 頁）
第 11 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑩	報告と討議（250-252 頁）
第 12 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑪	報告と討議（253-255 頁）
第 13 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑫	報告と討議（256-258 頁）
第 14 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑬	報告と討議（259-261 頁）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。担当者は、テキストの割り当てられた箇所の音読、日本語訳、解釈を準備して授業に臨む。参加者は該当箇所を熟読してくる。

【テキスト（教科書）】

Martin Heidegger, *Phänomenologische Interpretationen ausgewählter Abhandlungen des Aristoteles zur Ontologie und Logik*, Gesamtausgabe Bd. 62, Vittorio Klostermann, 2005.

未邦訳。希望者には該当箇所のコピーを配布する。

【参考書】

アリストテレス著・内山勝利訳、『アリストテレス全集 4 自然学』、岩波書店、2017 年

William Charlton, *Aristotle's Physics Books I and II*, Oxford University Press, 1970.

前者はアリストテレスの『自然学』の邦訳。後者はその英訳と注釈。これらも希望者には該当箇所のコピーを配布する。

【成績評価の方法と基準】

担当者としての評価が 80%、議論への参加度の評価が 20%。上記の到達目標がどれだけ達成されているかが主な評価基準となる。

【学生の意見等からの気づき】

受講者の理解度を配慮しながら適宜解説を加えつつ授業を進める。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

現象学・解釈学

＜研究テーマ＞

ハイデガーの西洋哲学史観の批判的検討

＜主要研究業績＞

・「『存在忘却』とは何か」、『法政大学文学部紀要』82 号、2020 年。

・「信仰と哲学——ハイデガーのアウグスティヌス解釈について」、『アルケー』26 号、2018 年。

・「ハイデガーのデカルト解釈について」、『哲学論叢』41 号、2014 年。

【Outline (in English)】

(Course outline)

This course deals with Martin Heidegger's interpretation of Aristotle's *Physics*.

(Learning Objectives)

The goal of this course is to understand Heidegger's view on the relationship between being and language.

(Learning activities outside of classroom)

Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter(s) from the texts. Your required study time is at least two hours for each class meeting.

(Grading Criteria /Policies)

Grading will be decided based on short reports (80%) and in-class contribution (20%).

PHL500B1

日本思想史特殊講義 1

西塚 俊太

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

和辻哲郎の著作『日本倫理思想史（一）』『日本倫理思想史（二）』を読み進めることを通じて、日本近代哲学において西洋思想が受け容れられていく過程を把握していく。特に、日本近代において一体何が問われていたのか、日本の近代性とは一体いかなるものであったのか、などの点に関する理解を目指していく。

【到達目標】

・和辻哲郎の著作を中心に、日本近代の哲学のテキストを読み解くことが出来る。

・哲学的思索や考察内容を自身の言葉として語ることが出来る。

・議論を通じて、自身の思考内容を深めることが出来る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

（1）受講者全員に和辻哲郎の『日本倫理思想史（一）』『日本倫理思想史（二）』の担当箇所を割り当てる。

（2）担当者は該当箇所に関するレジュメを作成し、講義で発表をする。

（3）その発表に基づいて、テキスト解釈について参加者全員で議論する。

（4）討論の中で見出された重要な論点を、次回の演習の冒頭で講評しフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	和辻哲郎『日本倫理思想史』に関する概要の説明と、講義内容や進め方および評価方法の説明。
第 2 回	和辻哲郎『日本倫理思想史』の「序」および「緒論」	和辻哲郎の「日本倫理思想史」の構想をおさえる pp.13-46（以下、岩波文庫版『日本倫理思想史（一）』の頁数表記による）
第 3 回	宗教的権威による統一	宗教的権威によって国民が統一されるあり方を捉える pp.49-83
第 4 回	神話伝説と神の意義	思想史における「神話」の位置付けの把握 pp.85-120 の 5 行目
第 5 回	清明心についての解釈	祭祀と道徳の関係について考察する pp.120-156 の 9 行目
第 6 回	国家統一の政治化	政治によって国家が統一されていく過程の把握 pp.156-193 の 2 行目
第 7 回	国家と人倫	国家の形成と人倫の拡がりについての考察 pp.193-232
第 8 回	天皇の存在について	「あきつかみ」として天皇が位置付けられていく過程の把握 pp.233-274

第 9 回 平安朝と皇室	朝廷の文化と皇室との関係の解釈 pp.275-296 および『日本倫理思想史 (二)』の pp.15-30 の 8 行目 (以下、岩波文庫版『日本倫理思想史 (二)』の頁数表記による)
第 10 回 武士社会の成立	武士社会という新たな文化・社会が成立する背景を捉える pp.30-68 の 6 行目
第 11 回 坂東武者の習い	武士社会の中でも特に「坂東武者」の倫理を把握する pp.68-103 の後ろから 2 行目
第 12 回 武士と公平無私	武士社会の中の「公平さ」「無私」の思想を捉える pp.103-141 の後ろから 4 行目
第 13 回 鎌倉時代の文化	鎌倉時代の思想を、特に「神国観」から捉える pp.141-177 の後ろから 5 行目
第 14 回 慈悲の道徳	仏教思想を「慈悲」の観点からおさえる pp.177-205

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の該当箇所を熟読した上で講義に参加することが必須である。特に、発表担当者は担当箇所を幾度も綿密に読み込んだ上でレジュメを作成することが強く求められる。本授業の準備・復習時間は、計 6 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

和辻哲郎『日本倫理思想史 (一)』『日本倫理思想史 (二)』（ともに岩波文庫）
参加者は各自で必ず入手した上で演習に参加すること。

【参考書】

まずは参考書などを参照せず、和辻哲郎の原典そのものにあって入念に読み込むことが先決である。そこで理解しきれなかった点を、演習内の議論を通じて深めていくことになる。参考文献は演習を通じて互いに提示し合うことになる。

【成績評価の方法と基準】

発表担当時の発表内容（レジュメの水準を含む）（70 %）と、講義内での発言や講義への参加姿勢（30 %）によって評価する。講義においては毎回の発言・質問を「必須」として求め、発言・質問しなかった場合は出席したものとは見なさないで、事前学習として事前に該当箇所を読み込んだ上で講義に出席することが必要である。

【学生の意見等からの気づき】

演習参加者の希望によっては、より多くの文献を演習内で扱っていききたい。

【学生が準備すべき機器他】

発表担当の際には必ずレジュメを作成し配布すること。紙媒体のレジュメが望ましいが、パワーポイントを使用する場合においても、議論を展開しやすいように重要箇所はなるべく文章形式を採用すること。パワーポイントの使用を希望する際には、前の週までに講義担当教員にその旨を連絡すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近代哲学・日本思想史
<研究テーマ> 京都学派を中心とした日本近代哲学の研究、ならびに日本思想史（神・儒・仏・物語・武士道など）の研究
<主要研究業績>
① 「『ひと』であること、「私」であること—三木清の「哲学的人間学」をめぐって—」（『日本倫理思想論究 第 2 号』、2014）
② 『科学技術の倫理学Ⅱ』（勢力尚雅 編共著、2015）
③ 「『三河物語』における譜代意識の根底—「慈悲」と「情」と「武辺」との関係から—」（『倫理学紀要第 24 輯』、2017）
より詳細な情報は「法政大学学術研究データベース」の西塚俊太のページ <http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/107/0010646/profile.html> を参照

【Outline (in English)】

The aim of this course is to acquire an understanding of Japanese philosophy through reading thoroughly "History of Japanese Ethical Thought" by Tetsuro Watsuji. By the end of this course, students should be able to fully grasp the background of Japanese thought in modern times. Student will be expected to have completed the required assignments after each class. Your study time will be more than six hours for a class. Grading will be decided based on the quality of the students' experimental performance in the lab 70%, in-class contribution 30%.

PHL500B1

日本思想史特殊講義 2

西塚 俊太

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

和辻哲郎の著作『日本倫理思想史（二）』『日本倫理思想史（三）』を読み進めることを通じて、日本近代哲学において西洋思想が受け入れられていく過程を把握していく。特に、日本近代において一体何が問われていたのか、日本の近代性とは一体いかなるものであったのか、などの点に関する理解を目指していく。

【到達目標】

- ・和辻哲郎の著作を中心に、日本近代の哲学のテキストを読み解くことが出来る。
- ・哲学的思索や考察内容を自身の言葉として語ることが出来る。
- ・議論を通じて、自身の思考内容を深めることが出来る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- （１）受講者全員に和辻哲郎の『日本倫理思想史（二）』『日本倫理思想史（三）』の担当箇所を割り当てる。
- （２）担当者は該当箇所に関するレジュメを作成し、講義で発表をする。
- （３）その発表に基づいて、テキスト解釈について参加者全員で議論する。
- （４）討論の中で見出された重要な論点を、次回の演習の冒頭で講評しフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	和辻哲郎『日本倫理思想史』に関する概要の説明と、講義内容や進め方および評価方法の説明。
第 2 回	和辻哲郎『日本倫理思想史（二）』における、大名の出現について	大名の誕生による社会構造の変化を捉える pp.209-241（以下、岩波文庫版『日本倫理思想史（二）』の頁数表記による）
第 3 回	民衆の勢力の拡大	民衆の社会的な勢力の拡大について理解する pp.242-278 の 7 行目
第 4 回	神皇正統記と太平記	武士の背後の「天皇」の位置付けを把握する pp.278-317 の後ろから 2 行目
第 5 回	室町時代の教養のあり方	室町時代に花開いていく教養について考察する pp.317-347
第 6 回	謡曲の思想	謡曲に表現されている思想の把握 pp.349-387 の後ろから 3 行目
第 7 回	物語の倫理	物語に表現されている倫理思想についての考察 pp.387-424 の後ろから 6 行目
第 8 回	「物語る」という営み	物語らずにはいられない人間の心のあり方の把握 pp.424-448 および『日本倫理思想史（三）』 pp.15-30 の後ろから 6 行目（以下、岩波文庫版『日本倫理思想史（三）』の頁数表記による）

第 9 回	武士社会の再建	武士社会が再建される過程の把握 pp.30-71 の 9 行目
第 10 回	戦国武士社会の成立	戦国期の武士社会という新たな文化・社会が成立する背景を捉える pp.71-105 の後ろから 5 行目
第 11 回	戦乱における道義	武士社会の中で醸成されていく倫理を把握する pp.105-140
第 12 回	キリシタンの伝道	日本社会におけるキリシタンの位置付けを捉える pp.141-179 の後ろから 3 行目
第 13 回	儒教の興隆	日本思想における儒教の展開を把握する pp.179-213
第 14 回	民間思想	民間思想のあり方をおさえる pp.214-268 の 1 行目

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の該当箇所を熟読した上で講義に参加することが必須である。特に、発表担当者は担当箇所を幾度も綿密に読み込んだ上でレジュメを作成することが強く求められる。本授業の準備・復習時間は、計 6 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

和辻哲郎『日本倫理思想史（二）』『日本倫理思想史（三）』（ともに岩波文庫）
参加者は各自で必ず入手した上で演習に参加すること。

【参考書】

まずは参考書などを参照せず、和辻哲郎の原典そのものにあたって入念に読み込むことが先決である。そこで理解しきれなかった点を、演習内の議論を通じて深めていくことになる。参考文献は演習を通じて互いに提示し合うことになる。

【成績評価の方法と基準】

発表担当時の発表内容（レジュメの水準を含む）（70 %）と、講義内での発言や講義への参加姿勢（30 %）によって評価する。講義においては毎回の発言・質問を「必須」として求め、発言・質問しなかった場合は出席したものとは見なさないの、事前学習として事前に該当箇所を読み込んだ上で講義に出席することが必要である。

【学生の意見等からの気づき】

演習参加者の希望によっては、より多くの文献を演習内で扱ってきたい。

【学生が準備すべき機器他】

発表担当の際には必ずレジュメを作成し配布すること。紙媒体のレジュメが望ましいが、パワーポイントを使用する場合においても、議論を展開しやすいように重要箇所はなるべく文章形式を採用すること。パワーポイントの使用を希望する際には、前の週までに講義担当教員にその旨を連絡すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近代哲学・日本思想史
<研究テーマ> 京都学派を中心とした日本近代哲学の研究、ならびに日本思想史（神・儒・仏・物語・武士道など）の研究
<主要研究業績>
① 「『ひと』であること、「私」であること—三木清の「哲学的人間学」をめぐる—」（『日本倫理思想論究 第 2 号』、2014）
② 『科学技術の倫理学Ⅱ』（勢力尚雅 編共著、2015）
③ 「『三河物語』における諸代意識の根底—「慈悲」と「情」と「武勇」との関係から—」（『倫理学紀要第 24 輯』、2017）
より詳細な情報は「法政大学学術研究データベース」の西塚俊太のページ <http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/107/0010646/profile.html> を参照

【Outline (in English)】

The aim of this course is to acquire an understanding of Japanese philosophy through reading thoroughly "History of Japanese Ethical Thought" by Tetsuro Watsuji. By the end of this course, students should be able to fully grasp the background of Japanese thought in modern times.

Student will be expected to have completed the required assignments after each class. Your study time will be more than six hours for a class.
Grading will be decided based on the quality of the students' experimental performance in the lab 70%, in-class contribution 30%.

PHL700B1

哲学特殊研究 1

酒井 健

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

モーリス・ブランショのテキストを対象にしてフランス現代思想の文学観を学ぶ。

【到達目標】

ブランショの基本となる概念をしっかり把握する。

とくに

- 1) 無為
- 2) 中性的なもの
- 3) エクリチュール

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

ブランショ著『文学空間』所収の「カフカと作品の要請」の後半を熟読玩味する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	授業の概要説明	ブランショ「カフカと作品の要請」について概要説明
第 2 回	ブランショ 1	「カフカと作品の要請」原文 83-84 頁
第 3 回	ブランショ 2	「カフカと作品の要請」原文 84-85 頁
第 4 回	ブランショ 3	「カフカと作品の要請」原文 85-86 頁
第 5 回	ブランショ 4	「カフカと作品の要請」原文 86-87 頁
第 6 回	ブランショ 5	「カフカと作品の要請」原文 87-88 頁
第 7 回	ブランショ 6	「カフカと作品の要請」原文 88-89 頁
第 8 回	ブランショ 7	「カフカと作品の要請」原文 89-90 頁
第 9 回	ブランショ 8	「カフカと作品の要請」原文 90-91 頁
第 10 回	ブランショ 9	「カフカと作品の要請」原文 91-92 頁
第 11 回	ブランショ 10	「カフカと作品の要請」原文 92-93 頁
第 12 回	ブランショ 11	「カフカと作品の要請」原文 93-94 頁
第 13 回	ブランショ 12	「カフカと作品の要請」原文 95-97 頁
第 14 回	まとめ	今学期の内容に即した発表を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回 10 頁読むので、事前に少なくともその分だけ内容を把握し、発表できるようにしておくこと。

本授業の準備・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

Maurice Blanchot, *Kafka et l'exigence de l'oeuvre*, in *L'Espace littéraire*, NRF, folio.Gallimard.

【参考書】

ブランショ著『カフカからカフカへ』山邑久仁子訳、書肆心水。2003 年

【成績評価の方法と基準】

無為、中性的なもの、エクリチュールなどのブランショの基本概念をどれだけしっかり理解しているかを基準にして成績をつける。平常点 50 %、期末のまとめの発表 50 %の割合を一つの目安とする。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ フランス現代思想

＜研究テーマ＞ バタイユ研究

＜主要研究業績＞ 『バタイユから生の深淵へ』 青土社

【Outline (in English)】

【Course outline】

The purpose of this course is to learn the thought of Maurice Blanchot.

【Learning Objectives】

Especially at the end of this course, students are expected to a good comprehension of the study of Blanchot on Kafka.

【Learning activities outside of classroom】

Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter from the text. Your study time will be more than four hours for a class.

【Grading Criteria】

Your overall grade in the class will be based on the following.
Translation in each class meeting:50 % and presentation at the end of this course:50%.

PHL700B1

哲学特殊研究 2

酒井 健

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文を制作するための院生に開かれた授業です。フーコーの文学論「著者とはなにか」を読んでいます。

【到達目標】

フーコーの著者論を理解する。原文を丁寧に読んでいく

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

フーコーの「著者とは何か」を精読する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	授業の概要説明	フーコーの思想の紹介
第 2 回	フーコー 1	フーコー「著者と何か」原文 1-2 頁
第 3 回	フーコー 2	フーコー「著者と何か」原文 3-4 頁
第 4 回	フーコー 3	フーコー「著者と何か」原文 5-6 頁
第 5 回	フーコー 4	フーコー「著者と何か」原文 7-8 頁
第 6 回	フーコー 5	フーコー「著者と何か」原文 9-11 頁
第 7 回	フーコー 6	フーコー「著者と何か」原文 12-13 頁
第 8 回	フーコー 7	フーコー「著者と何か」原文 14-15 頁
第 9 回	フーコー 8	フーコー「著者と何か」原文 16-17 頁
第 10 回	フーコー 9	フーコー「著者と何か」原文 18-19 頁
第 11 回	フーコー 10	フーコー「著者と何か」原文 20-21 頁
第 12 回	フーコー 11	フーコー「著者と何か」原文 21-23 頁
第 13 回	フーコー 12	フーコー「著者と何か」原文 23-25 頁
第 14 回	まとめと復習	学生の発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回一定の分量を読むので、事前に少なくともその分だけ内容を把握し、発表できるようにしておくこと。
本授業の準備・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

Michel Foucault: "Qu'est-ce qu'un auteur?" in Foucault, Dits et Ecrits, tome I, Gallimard, 1997

【参考書】

中山元著、『フーコー入門』ちくま新書

【成績評価の方法と基準】

エビステメー、知への意志、権力などのデリダの基本概念をどれだけしっかり理解しているかを基準にして成績をつける。平常点 50 %、期末のまとめの発表 50 %の割合を一つの目安とする。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ フランス現代思想

＜研究テーマ＞ バタイユ研究

＜主要研究業績＞ 『バタイユから生の深淵へ』 青土社

【Outline (in English)】

Course outline】

The purpose of this course is to learn the thought of Michel Foucault.

【Learning Objectives】

Especially at the end of this course, students are expected to a good comprehension of the study of Foucault on author.

【Learning activities outside of classroom】

Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter from the text. Your study time will be more than four hours for a class.

【Grading Criteria】

Your overall grade in the class will be based on the following.
Translation in each class meeting:50 % and presentation at the end of this course:50%.

LIT500B2

日本文芸学 A

一柳 廣孝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

テーマを「怪異の日本近代文学」とする。日本の近代文学は自然主義リアリズムを基調として発展してきた。そのため怪異を描くことは、常に何らかの屈折を強いられた。本授業では怪異を扱う文学テクニクを取り上げ、テクニクに内在する新たな読みの可能性を探ることを目的とする。怪異を軸としたテクニクの分析手法を理解することが目標となる。授業時間外には、分析対象のテクニクを精読しておくこと。成績評価は、個別発表の内容と質疑応答による。

【到達目標】

「怪異」という視点を理解したうえで、近現代にあって怪異を表現するテクニクの戦略を適切、かつ魅力的に分析して可視化すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式。授業内での発表を中心とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	授業概要の説明	今後の授業の流れ、スケジュールなどについて説明する。
第 2 回	怪異とは何か	怪異をめぐる昨今の研究状況について概説する。
第 3 回	文学テクニクの解析	具体的にテクニクを設定し、分析を試みる。
第 4 回	発表（幸田露伴）	幸田露伴「対髑髏」
第 5 回	発表（泉鏡花）	泉鏡花「龍潭譚」
第 6 回	発表（夏目漱石）	夏目漱石「夢十夜」
第 7 回	発表（森鷗外）	森鷗外「鼠坂」
第 8 回	発表（芥川龍之介）	芥川龍之介「妖婆」
第 9 回	発表（内田百閒）	内田百閒「冥途」
第 10 回	発表（岡本綺堂）	岡本綺堂「蟹」
第 11 回	発表（川端康成）	川端康成「抒情歌」
第 12 回	発表（吉屋信子）	吉屋信子「鬼火」
第 13 回	発表（三島由紀夫）	三島由紀夫「英霊の声」
第 14 回	総括	授業のまとめを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表とその発表にもとづく議論を中心とする。よって発表者は発表の準備をおこなう。また聴講する側は、発表の前提になるテクニクを読み込んでおく。なお大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は 1 回につき 4 時間以上が標準となる。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

紀田順一郎・東雅夫編『日本怪奇小説傑作集』全 3 巻（創元推理文庫）
東雅夫編『文豪怪談傑作選』全 18 巻（ちくま文庫）
東雅夫編『文豪怪異小品集』シリーズ（平凡社ライブラリー）など。

【成績評価の方法と基準】

発表の内容（70 %）、質疑応答の内容（30 %）

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更により、フィードバックできません。

【学生が準備すべき機器他】

発表用のレジメ。

【その他の重要事項】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

日本近現代文学・文化史

【日本近現代文学】

近代日本におけるフロイト精神分析の受容と「無意識」概念の文学における反映状況の研究など。『無意識という物語』（名古屋大学出版会）、『催眠術の日本近代』（青弓社）、『コレクションモダン都市文化 11 浅草の見世物・宗教性・エロス』（編著、ゆまに書房）など。

【日本近現代文化史】

近現代日本における「怪異」の文化表象、および文学的表現に関する研究。『怪異の表象空間』（国書刊行会）、『＜こっくりさん＞と＜千里眼＞・増補版』（青弓社）、『「学校の怪談」はささやく』（編著、青弓社）、『オカルトの帝国』（編著、青弓社）、『怪異の時空』全 3 巻（監修、青弓社）など。

【サブカルチャー研究】

ライトノベルなどの研究。『ライトノベル研究序説』『ライトノベル・スタディーズ』（ともに共編、青弓社）、『小説の生存戦略』（共著、青弓社）、『もう一度読みたい日本の古典文学』（共著、勉誠出版）など。

【None.】

None.

【Outline (in English)】

The theme is "mysterious modern Japanese literature". Modern Japanese literature has evolved on the basis of naturalistic realism. Therefore, drawing a mystery was always forced to have some kind of refraction. The purpose of this class is to take up literary texts dealing with mysteries and explore new reading possibilities inherent in the texts. The goal is to understand the text analysis method centered on mystery. Carefully read the text to be analyzed outside of class hours. Grades will be evaluated based on the content of individual presentations and questions and answers.

LIT500B2

日本文芸学B

一柳 廣孝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

テーマを「怪異の日本現代文学」とする。戦後から現代に至るまで、秘境、妖怪、怪獣、幻想文学、オカルト、精神世界などのブームを経て、新たなフレームのもとで怪異は魅力的な文学のテーマとなった。本授業では現代における怪異の文学に注目し、テキストの読みの可能性について考察する。怪異を軸としたテキストの分析手法を理解することが目標となる。授業時間外には、分析対象のテキストを精読しておくこと。成績評価は、個別発表の内容と質疑応答による。

【到達目標】

「怪異」という視点を理解したうえで、現代において怪異を表現するテキストの戦略を適切、かつ魅力的に分析して可視化すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式。授業内での発表を中心とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	授業概要の説明	今後の授業の流れ、スケジュールについて説明する。
第 2 回	怪異とは何か	怪異をめぐる昨今の研究状況について概説する。
第 3 回	文学テキストの解析	具体的にテキストを設定し、分析を試みる。
第 4 回	発表（半村良）	半村良「筆筈」
第 5 回	発表（吉田健一）	吉田健一「幽霊」
第 6 回	発表（澁澤龍彦）	澁澤龍彦「ぼろんじ」
第 7 回	発表（吉本ばなな）	吉本ばなな「ある体験」
第 8 回	発表（坂東眞砂子）	坂東眞砂子「正月女」
第 9 回	発表（北村薫）	北村薫「百物語」
第 10 回	発表（川上弘美）	川上弘美「海馬」
第 11 回	発表（森見登美彦）	森見登美彦「水神」
第 12 回	発表（澤村伊智）	澤村伊智「鬼のうみたりければ」
第 13 回	発表（小野不由美）	小野不由美「ゴーストハント」
第 14 回	総括	授業のまとめを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表とその発表にもとづく議論を中心とする。発表者は発表の準備をおこない、発表する。聴講する側は、発表の前提となるテキストを読み込んでおく。なお大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は 1 回につき 4 時間以上が標準となる。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

紀田順一郎・東雅夫編『日本怪奇小説傑作集』全 3 巻（創元推理文庫）
東雅夫編『平成怪奇小説傑作集』全 3 巻（創元推理文庫）
東雅夫編『文豪怪談傑作選』全 18 巻（ちくま文庫）
東雅夫編『文豪怪異小品集』シリーズ（平凡社ライブラリー）
東雅夫編『文豪妖怪名作選』（創元推理文庫）など。

【成績評価の方法と基準】

発表の内容（70 %）、質疑応答の内容（30 %）

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更により、フィードバックできません。

【学生が準備すべき機器他】

発表用のレジメ。

【その他の重要事項】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

日本近現代文学・文化史

【日本近現代文学】

近代日本におけるフロイト精神分析の受容と「無意識」概念の文学における反映状況の研究など。『無意識という物語』（名古屋大学出版会）、『催眠術の日本近代』（青弓社）、『コレクションモダン都市文化 11 浅草の見世物・宗教性・エロス』（編著、ゆまに書房）など。

【日本近現代文化史】

近現代日本における「怪異」の文化表象、および文学的表現に関する研究。『怪異の表象空間』（国書刊行会）、『＜こっくりさん＞と＜千里眼＞・増補版』（青弓社）、『心霊写真は語る』『学校の怪談』はささやく』『オカルトの帝国』（ともに編著、青弓社）、『怪異の時空』全3巻（監修、青弓社）など。

【サブカルチャー研究】

ライトノベルなどの研究。『ライトノベル研究序説』『ライトノベル・スタディーズ』（ともに共編著、青弓社）、『小説の生存戦略』（共著、青弓社）、『もう一度読みたい日本の古典文学』（共著、勉誠出版）など。

【None.】

None.

【Outline (in English)】

The theme is "Mysterious Japanese Contemporary Literature". From the postwar period to the present day, through the boom of unexplored regions, youkai, monsters, fantasy literature, occultism, and the spiritual world, ghosts have become a fascinating literary theme under a new frame. In this class, we will focus on the mysterious literature of modern times and consider the possibility of reading texts. The goal is to understand the text analysis method centered on mystery. Carefully read the text to be analyzed outside of class hours. Grades will be evaluated based on the content of individual presentations and questions and answers.

LIT500B2

日本文芸批評史 A

田中 和生

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の近代文学における文芸批評の歴史を、個々の文芸評論家の文章と批評自体の流れから概観します。

【到達目標】

まず近代文学における批評の役割を理解すること、次に日本の近代文学史を相対化する視点を手に入れることが目標になります。理想としては、文芸評論家の文章を要約・分析・模倣することを通じ、自らのうちに一つの批評眼を確立したいと思います。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義と発表を組みあわせて進めます。

まず講義では、具体的な評論文を読みながら批評自体の流れについて解説します。次に発表では、個々の文芸評論家の文章について、内容と文体の両面から紹介・解説・考察を加えてもらいます。

また個々の文芸評論家について理解が深まったところで、レポート提出を求めることがあります。レポートでは、文芸評論家の文章を模倣して自ら文芸批評を実践することによって、批評というものの内的な理解を目指します。

授業では、できるだけ学生からの発言と発表についての質疑を引き出すようにしますが、必要に応じて教員からのフィードバックを行い、授業内容についての理解を深めます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	日本の近代文学について	近代ヨーロッパと近代日本を比較して、近代文学全体について概説します。
第2回	森鷗外と北村透谷	森鷗外「早稲田文学の没理想」と北村透谷「人生に相渉るとは何の謂ぞ」を読み、その意義を理解します。
第3回	正岡子規と作家夏目漱石の誕生	正岡子規「歌よみに与ふる書」を読み、写生文の意義と夏目漱石の文学について解説します。
第4回	坪内逍遙『小説神髓』を読む	日本の近代文学の出発点として、坪内逍遙『小説神髓』について発表してもらいます。
第5回	自然主義と1910年	田山花袋「露骨なる描写」を読み、日本の近代文学史における自然主義の隆盛と1910年の状況を理解します。
第6回	正宗白鳥の評論文を読む	印象批評の例として、正宗白鳥の評論文について発表してもらいます。
第7回	佐藤春夫と永井荷風	佐藤春夫「創作月旦」と永井荷風「花火」を読み、その意義を理解します。
第8回	小林秀雄の登場	日本の文芸評論の誕生を告げる、小林秀雄の前期の評論文について発表してもらいます。
第9回	私小説から心境小説へ	広津和郎「散文芸術の位置」と久米正雄「『私』小説と『心境』小説」を読み、その意義を理解します。

- 第10回 保田與重郎の批評 戦前における文芸評論の到達点の一つである、保田與重郎の評論文について発表してもらいます。
- 第11回 プロレタリア文学と芥川龍之介の死 蔵原惟人「プロレタリア・レアリズムへの道」と宮本顕治『『敗北』の文学』を読み、その意義を理解します。
- 第12回 中村光夫の再出版 戦後文学の空間をかたちづくる、中村光夫の評論文について発表してもらいます。
- 第13回 河上徹太郎と平野謙 河上徹太郎「配給された『自由』」と平野謙「ひとつの反指図」を読み、その意義を理解します。
- 第14回 江藤淳の登場 戦後文学を問い直す視点を提示しつつけた、江藤淳の評論文について発表してもらいます。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

日本の近代文学史についての基礎的な知識を確認して授業を受けてください。また授業で取り上げられる作家や評論家の代表作に目を通してから授業に臨むことが望まれます。発表の対象となる文章は、ぜひ全員が読んで参加することで活発な議論が起きることを期待します。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

千葉俊二／坪内祐三編『日本近代文学評論選』[明治・大正篇]および[昭和篇]（岩波文庫）

【参考書】

必要に応じて授業で指示します。

【成績評価の方法と基準】

成績は平常点4割、発表およびレポート6割で総合的に評価します。

まず平常点では、きちんと出席しているか、授業内容に積極的に取り組んでいるか、授業外の学習ができているか、を授業態度から判断します。

また発表では、発表対象の評論文についてしっかり理解できているか、発表の仕方とレジュメの内容は適切か、ただの解説にとどまらず分析から考察まで行おうとしているか、を発表内容から判断します。加えてレポートでは、積極的に取り組んでいるかどうかを判断します。

【学生の意見等からの気づき】

発表の内容を受講生の研究テーマに応じて修正しました。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本近・現代文学、文芸評論
〈研究テーマ〉

現在の主な関心は、日本の近代文学の特質を明らかにすること、そこから現代文学の条件を考えること、同時に詩・物語・批評といった言葉の機能から文学について論じる方法を探ることである。具体的には戦後文学史の検証、北村透谷・小林秀雄についての研究、新しい近代文学史の切り口を準備している。

〈主要研究業績〉

- 1、『江藤淳』（慶應義塾大学出版会）2001年
- 2、『あの戦場を越えて——日本現代文学論』（講談社）2005年
- 3、『新約太宰治』（講談社）2006年
- 4、『吉本隆明』（アーツアンドクラフツ）2014年
- 5、『震災後の日本で戦争を引きうける』（現代書館）2017年

【Outline (in English)】

< Course outline > Acquire an overview of the history of literary criticism in the Japanese modern literature through the writings of each critic and the stream of criticism.

< Learning Objectives > The first goal is to understand the role of criticism in modern literature, and the second is to gain a relative perspective on the history of modern Japanese literature. Ideally, through summarizing, analyzing, and imitating the writings of literary critics, I would like to establish a critical eye within myself.

< Learning activities outside of classroom > Please come to class with a basic knowledge of the history of modern Japanese literature. It is also recommended that you read the representative works of the writers and critics discussed in the class before coming to class. All students are expected to read and participate in the texts to be presented, so that lively discussions can take place. The standard preparation and review time for this class is two hours each.

< Grading Criteria/Policy > Grades will be based on an overall evaluation of 40% of normal points and 60% of presentations and reports. In terms of the normal score, I will judge whether the student attends class properly, actively engages in the class content, and studies outside of class. In the presentation, we will judge whether you have a clear understanding of the critique you are presenting, whether your presentation style and resume are appropriate, and whether you have attempted to go beyond mere explanation to analysis and consideration. In addition, we will judge whether or not you are actively working on the report.

LIT500B2

日本文芸批評史 B

田中 和生

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の戦後文学における文芸批評の歴史を、個々の文芸評論家の文章と批評自体の流れから概観します。

【到達目標】

まず戦後文学における批評の役割を理解すること、次に日本の戦後文学史を相対化する視点を手に入れることが目標になります。理想としては、文芸評論家の文章を要約・分析・模倣することを通じ、自らのうちに一つの批評眼を確立したいと思います。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義と発表を組み合わせて進めます。

まず講義では、具体的な評論文を読みながら批評自体の流れについて解説します。次に発表では、個々の文芸評論家の文章について、内容と文体の両面から紹介・解説・考察を加えてもらいます。

また個々の文芸評論家について理解が深まったところで、レポート提出を求めることがあります。レポートでは、文芸評論家の文章を模倣して自ら文芸批評を実践することによって、批評というものの内的な理解を目指します。

授業では、できるだけ学生からの発言と発表についての質疑を引き出すようにしますが、必要に応じて教員からのフィードバックを行い、授業内容についての理解を深めます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	日本の戦後文学について	欧米と日本を比較して、現在までつづく戦後文学の空間について概説する
第 2 回	中野重治と高見順	中野重治「閏二月二九日」と高見順「描写のうしろに寝ておられない」を読み、その意義を理解します。
第 3 回	1945 年と無頼派の誕生	日本の敗戦の年である 1945 年前後の文学における変化に注意しながら、坂口安吾「墮落論」を読みます。
第 4 回	吉本隆明の出版	戦後文学の空間を超える普遍的な視点を提供しようとしてつづけた、吉本隆明の評論文について発表してもらいます。
第 5 回	戦前批判と戦後文学のはじまり	宮本百合子「歌声よ おこれ」と小野十三郎「詩論」を読み、その意義を理解します。
第 6 回	奥野健男の批評	戦後文学の代表的な文芸評論家である、奥野健男の評論文について発表してもらいます。
第 7 回	武田泰淳と竹内好	武田泰淳「滅亡について」と竹内好「近代主義と民族の問題」を読み、その意義を理解します。
第 8 回	磯田光一の批評	戦後文学の代表的な文芸評論家である、磯田光一の評論文について発表してもらいます。

第 9 回	福田恒存と国語の問題	福田恒存「私の国語教室」を読み、その意義を理解するとともに大岡昇平の新字新かなに対する態度について考察します。
第 10 回	蓮実重彦の登場	ポストモダン派の代表的な文芸評論家である、蓮実重彦の評論文について発表してもらいます。
第 11 回	言語論と吉本隆明	20 世紀以降の言語論の意義について考察した上で吉本隆明の評論文を読み、その意義を理解します。
第 12 回	加藤典洋の出版	ポストモダン派と戦後文学を架橋する視点を提供した、加藤典洋の評論文について発表してもらいます。
第 13 回	ポストモダン文学論	1970 年代以降の日本のポストモダン派の評論文について考察を加え、その意義を理解します。
第 14 回	斉藤美奈子の批評	フェミニズム批評の代表的な評論家である、斉藤美奈子の評論文について発表してもらいます。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

日本の戦後文学史についての基礎的な知識を確認して授業を受けてください。また授業で取りあげられる作家や評論家の代表作に目を通してから授業に臨むことが望まれます。発表の対象となる文章は、ぜひ全員が読んで参加することで活発な議論が起きることを期待します。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

千葉俊二／坪内祐三編『日本近代文学評論選』[昭和篇]（岩波文庫）

【参考書】

必要に応じて授業で指示します。

【成績評価の方法と基準】

成績は平常点 4 割、発表およびレポート 6 割で総合的に評価します。

まず平常点では、きちんと出席しているか、授業内容に積極的に取り組んでいるか、授業外の学習ができていているか、を授業態度から判断します。

また発表では、発表対象の評論文についてしっかり理解できているか、発表の仕方とレジュメの内容は適切か、ただの解説にとどまらず分析から考察まで行おうとしているか、を発表内容から判断します。加えてレポートでは、積極的に取り組んでいるかどうかを判断します。

【学生の意見等からの気づき】

発表の内容を受講生の研究テーマに応じて修正しました。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本近・現代文学、文芸評論

〈研究テーマ〉

現在の主な関心は、日本の近代文学の特質を明らかにすること、そこから現代文学の条件を考えること、同時に詩・物語・批評といった言葉の機能から文学について論じる方法を探ることである。具体的には戦後文学史の検証、北村透谷・小林秀雄についての研究、新しい近代文学史の切り口を準備している。

〈主要研究業績〉

- 『江藤淳』（慶應義塾大学出版会）2001 年
- 『あの戦場を越えて——日本現代文学論』（講談社）2005 年
- 『新約太宰治』（講談社）2006 年
- 『吉本隆明』（アーツアンドクラフツ）2014 年
- 『敗戦後の日本で戦争を引きうける』（現代書館）2017 年

【Outline (in English)】

< Course outline > Acquire an overview of the history of literary criticism in the Japanese postwar literature through the writings of each critic and the stream of criticism.

< Learning Objectives > The first goal is to understand the role of criticism in postwar literature, and the second is to obtain a perspective that relativizes the history of postwar literature in Japan. Ideally, through summarizing, analyzing, and imitating the writings of literary critics, I would like to establish a critical eye within myself.

< Learning activities outside of classroom > Please come to class with a basic knowledge of the history of Japanese postwar literature. It is also recommended that you read the representative works of the writers and critics to be discussed in the class before coming to class. All students are expected to read and participate in the texts to be presented, so that lively discussions can take place. The standard preparation and review time for this class is two hours each.

< Grading Criteria/Policy > Grades will be based on an overall evaluation of 40% of normal points and 60% of presentations and reports. In terms of the normal score, I will judge whether the student attends class properly, actively engages in the class content, and studies outside of class. In the presentation, we will judge whether you have a clear understanding of the critique you are presenting, whether your presentation style and resume are appropriate, and whether you have attempted to go beyond mere explanation to analysis and consideration. In addition, we will judge whether or not you are actively working on the report.

LIT500B2

日本古代文芸原典研究 A

坂本 勝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

万葉集を講読する。

【到達目標】

万葉集を読み進める。その中から各自が最も関心のある作品を取り上げ、注釈的な読解を中心に発表する。それにより、上代文献の基礎的な読解法、研究法を学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

各自選定したテーマや作品を中心に、注釈的な読解を行う。最終授業で、13 回までの講義内容のまとめや復習だけでなく、授業内で行った課題に対する講評や解説も行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	講義概説	万葉集と柿本人麻呂について概説する。
第 2 回	近江荒都歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 3 回	吉野讃歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 4 回	留京三首	左記のテーマについて批評、検討する。
第 5 回	安騎野歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 6 回	石見相聞歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 7 回	日並皇子挽歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 8 回	河嶋皇子挽歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 9 回	明日香皇女挽歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 10 回	高市皇子挽歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 11 回	泣血哀慟哭歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 12 回	吉備津采女挽歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 13 回	狭岑島死人歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 14 回	臨死歌	左記のテーマについて批評、検討する。 各自、春学期の研究テーマを総括し、新たな発展の方法を確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、毎週 4 時間以上を必要とする。

【テキスト（教科書）】

万葉集、原文のついているもの。

【参考書】

必要に応じて教室で指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表（50％）とレポート（50％）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

原典を読む基本的知識の重要性。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞上代文学

＜研究テーマ＞古事記・万葉集を中心とする上代文学研究

＜主要研究業績＞

『古事記の読み方』（岩波新書 2003 年）「亡き人に逢える鳥一万葉集卷一六・筑前国志賀白水郎歌を読む」（『法政大学文学部紀要』2008 年）「鴨山と石川の詩心ー柿本人麻呂臨死自傷歌群についてー」（『日本文学誌要』2008 年）「都市の大物主」（『日本文学誌要』2011 年）

【Outline (in English)】

【Course outline】Read the Manyoshu（万葉集）,

【Learning Objectives】To understand the basic research methods of Japanese literature of the upper ages.

【Learning activities outside of classroom】Please read the handouts carefully. The standard preparation and review time for a class is 2 hours each, (4 hours for a week).

【Grading Criteria /Polic】Grading will be based on the term paper(60%) and the submission of several assignments and reaction papers (40%). will be based on the term paper(60%) and the submission of several assignments and reaction papers (40%).

LIT500B2

日本古代文芸原典研究 B

坂本 勝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

万葉集を読む。

【到達目標】

上代文献の基礎的な読解法、研究法を学ぶ。各自、万葉集の中から学問的興味を持つ歌人、作品などを選定し、その作品について演習形式で読解を進める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

各自選定したテーマや作品を中心に、注釈的な読解を行う。最終授業で、13 回までの講義内容のまとめや復習だけでなく、授業内で行った課題に対する講評や解説も行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	授業概説	万葉集研究の方法について概説する。
第 2 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 3 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 4 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 5 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 6 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 7 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 8 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 9 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 10 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 11 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 12 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 13 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 14 回	まとめ	万葉集研究の方法と問題点を確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

予習、復習、課題など、毎週 3 時間以上の学習を必要とする。

【テキスト（教科書）】

万葉集、原文付き

【参考書】

授業の中で指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表（50 %）とレポート（50 %）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

原典を読むことの重要性。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本上代文学

＜研究テーマ＞古事記、万葉集の研究

＜主要研究業績＞

『古事記の読み方』（岩波新書 2003 年）「亡き人に逢える島一万葉集 卷一六・筑前国志賀白水郎歌を読む」（『法政大学文学部紀要』2008 年）「鴨山と石川の詩心－柿本人麻呂臨死自傷歌群について－」（『日本文学誌要』2008 年）「都市の大物主」（『日本文学誌要』2011 年）

【Outline (in English)】

【Course outline】Read the Manyoshu（万葉集），

【Learning Objectives】To understand the basic research methods of Japanese literature of the upper ages.

【Learning activities outside of classroom】Please read the handouts carefully. The standard preparation and review time for a class is 2 hours each, (4 hours for a week).

【Grading Criteria /Polic】Grading will be based on the term paper(60%) and the submission of several assignments and reaction papers (40%). will be based on the term paper(60%) and the submission of several assignments and reaction papers (40%).

LIT500B2

日本古代文芸演習 A

加藤 昌嘉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

『源氏物語』の写本を読みます。本年度は、河内本の「若紫」巻を解読してゆきます。

【到達目標】

以下の 2 点を身に付けることが目標です。

◎古文を翻訳する能力

◎語法を調査する能力

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

発表者は、『源氏物語』の写本を元に、整定本文と正確な現代語訳を作ります。それを元に、参加者全員で議論します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	『源氏物語』概説
2	「若紫」	わらは病
3	「若紫」	僧都
4	「若紫」	明石
5	「若紫」	竜王
6	「若紫」	尼
7	「若紫」	少女
8	「若紫」	僧都の坊
9	「若紫」	少女の出自
10	「若紫」	相談
11	「若紫」	和歌
12	「若紫」	聖
13	「若紫」	和歌
14	「若紫」	玉

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

「桐壺」巻と「若紫」巻を読み進めること。予習復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

『尾州家河内本源氏物語 第一巻』（八木書店）を用います。授業時に説明をします。

【参考書】

以下のいずれかを座右に置いてください。

◎柳井滋ほか校注『源氏物語』1（岩波文庫）

◎石田穰二ほか校注『新潮日本古典集成 源氏物語』1（新潮社）

◎伊藤博編集『源氏物語の鑑賞と基礎知識 若紫』（至文堂）

◎林望『謹訳源氏物語 改訂新修』1（祥伝社文庫）

◎大塚ひかり全訳『源氏物語』1（ちくま文庫）

【成績評価の方法と基準】

発表の出来 50 %、議論参加度 50 %。

【学生の意見等からの気づき】

議論しやすい雰囲気作りを心がけます。

【担当教員の専門分野等】

◆専門領域：日本古典文学

◆研究テーマ：平安時代の物語

◆主要研究業績：著書『『源氏物語』前後左右』（勉誠出版）

【Outline (in English)】

▼ 【Course outline】

This course deals with the manuscript of "The Tale of Genji". This year, we will decode "Kawachi-bon", "Wakamurasaki" chapter.

▼【Learning Objectives】

By the end of this course, students are expected to acquire A and B.

-A.The ability to translate ancient texts.

-B.The ability to investigate grammar.

▼【Learning activities outside of classroom】

Before each class meeting, students will be expected to have read "Kiritsubo" and "Wakamurasaki" chapter. Your study time will be more than four hours for a class.

▼【Grading Criteria /Policy】

Grading will be determined by the X and Y.

-X.Quality of the presentation. 50%

-Y.Participation in the discussion. 50%

LIT500B2

日本古代文芸演習 B

加藤 昌嘉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

『源氏物語』の写本を読みます。本年度は、河内本の「若紫」巻を解読してゆきます。

【到達目標】

以下の2点を身に付けることが目標です。

◎古文を翻訳する能力

◎語法を調査する能力

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

発表者は、『源氏物語』の写本を元に、整定本文と正確な現代語訳を作ります。それを元に、参加者全員で議論します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	『源氏物語』概説
2	「若紫」	管絃
3	「若紫」	左大臣邸
4	「若紫」	葵の上
5	「若紫」	手紙
6	「若紫」	惟光
7	「若紫」	藤壺
8	「若紫」	和歌
9	「若紫」	妊娠
10	「若紫」	夢
11	「若紫」	尼の家
12	「若紫」	遺言
13	「若紫」	若草
14	「若紫」	尼の死

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

「桐壺」巻と「若紫」巻を読み進めること。予習復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

『尾州家河内本源氏物語 第一巻』（八木書店）を用います。授業時に説明をします。

【参考書】

以下のいずれかを座右に置いてください。

◎柳井滋ほか校注『源氏物語』1（岩波文庫）

◎石田穰二ほか校注『新潮日本古典集成 源氏物語』1（新潮社）

◎伊藤博編集『源氏物語の鑑賞と基礎知識 若紫』（至文堂）

◎林望『謹訳源氏物語 改訂新修』1（祥伝社文庫）

◎大塚ひかり全訳『源氏物語』1（ちくま文庫）

【成績評価の方法と基準】

発表の出来50%、議論参加度50%。

【学生の意見等からの気づき】

絵や写真なども使い、理解を深めます。

【担当教員の専門分野等】

◆専門領域：日本古典文学

◆研究テーマ：平安時代の物語

◆主要研究業績：著書『揺れ動く『源氏物語』』（勉誠出版）

【Outline (in English)】

▼【Course outline】

This course deals with the manuscript of "The Tale of Genji". This year, we will decode "Kawachi-bon", "Wakamurasaki" chapter.

▼【Learning Objectives】

By the end of this course, students are expected to acquire A and B.

-A.The ability to translate ancient texts.

-B.The ability to investigate grammar.

▼【Learning activities outside of classroom】

Before each class meeting, students will be expected to have read "Kiritsubo" and "Wakamurasaki" chapter. Your study time will be more than four hours for a class.

▼【Grading Criteria /Policy】

Grading will be determined by the X and Y.

-X.Quality of the presentation. 50%

-Y.Participation in the discussion. 50%

LIT500B2

日本中世文芸原典研究 A

阿部 真弓

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業は、中世の文芸作品を緻密に読み解き、理解を深めることを目的とします。中世文芸の基礎的な研究方法を学ぶとともに、プレゼンテーション能力・ディスカッション能力を身につけ、他者との討論から新たな研究課題を見出すことを目指します。

今年度は、『百人一首』の古注釈である『百人一首 宗祇抄』を取り上げます。影印本を翻刻し、的確かつ詳細に注釈を施して現代語に訳していきます。また他の古注釈も参照し、『百人一首』が中世・近世でどのように解釈されていたかを確認し、『宗祇抄』の位置づけについても考察を試みます。

【到達目標】

- ①適切に文献を調査し、歌語や修辭等の和歌表現、また歌人についての確かつ精緻な注釈を施し、和歌を読み解く能力を身につける。
- ②中世において『百人一首』がどのように解釈されてきたか、考察できる。
- ③くずし字を読むことができる。
- ④プレゼンテーション能力を身につける。
- ⑤ディスカッション能力を身につけ、他者との討論から新たな研究課題を見出すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

古活字本の影印をテキストとし、受講生の発表・討論と教員の講義を取り混ぜながら、『百人一首 宗祇抄』を精読します。なお、授業のはじめに、リアクションペーパーに書かれた受講生からの質問や意見を取り上げてフィードバックし、前回授業の振り返りを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	授業の概要の説明
2	『百人一首』の概要について	『百人一首』に関する問題を整理し、説明する。
3	宗祇について	宗祇の事績等の説明。
4	『百人一首』研究史について	中世から現代に至るまでの研究史を概観する。
5	発表の方法について	発表にあたって調査すべき文献、注釈項目を説明する。
6	変体仮名について	変体仮名の解説・解読練習。
7	『百人一首 宗祇抄』読解	受講生 A による発表と討論
8	『百人一首 宗祇抄』読解	受講生 B による発表と討論
9	『百人一首 宗祇抄』読解	受講生 C による発表と討論
10	『百人一首 宗祇抄』読解	受講生 D による発表と討論
11	『百人一首 宗祇抄』読解	受講生 E による発表と討論
12	『百人一首 宗祇抄』読解	受講生 F による発表と討論
13	『百人一首 宗祇抄』読解	受講生 G による発表と討論
14	まとめ	春学期の内容に関する総括を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業前には参考書等を読み、『百人一首』に関する基礎的な知識を身につけておいて下さい。

発表にあたっては、担当者はわかりやすく、不備のない資料を作り、要を得た説明ができるよう、綿密に準備を行ってください。それ以外の受講者はテキスト、また注釈書等を確認し、どのような問題点のある和歌なのか予習をした上で、授業にのぞんでください。

本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

『影印本百人一首抄（宗祇抄）』（吉田幸一編、笠間書院、1969年）

【参考書】

・講談社学術文庫『百人一首』（有吉保、講談社、1983年）
・角川ソフィア文庫『新版 百人一首』（島津忠夫、KADOKAWA、1999年）

【成績評価の方法と基準】

【授業の到達目標】①～⑤に照らし、発表内容またはレポート 70 %（①～⑤）、討論への参加度 30 %（⑤）という配分で、総合的に判断します。

【学生の意見等からの気づき】

一度に複数の和歌を担当・発表する形ではなく、一首ずつ丁寧に読み進めます。また、受講者のレベルに合ったプリント教材を適宜配布し、随時、くずし字を読む練習も行います。

【その他の重要事項】

基本的に対面式授業ですが、第1回・第2回授業はオンライン式の授業です。第1回授業日までに、学習支援システム上の当科目「お知らせ」をよく確認し、受講してください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本中世文学

<研究テーマ> 日記文学、和歌

<主要研究業績> 「『とはずがたり』の恋一物語る二条」（『文学』8巻5号、2007年9月）、「『弁内侍日記』論—糾える言葉の連鎖—」（『日本古典文学研究の新展開』2011年、笠間書院）、「『嵯峨のかよひち』考—藤原為家の涙—」（『日本文学誌要』89号、2014年3月）

【Outline (in English)】

This course deals with *Hyakunin isschu So-gi sho*.

The aim of this course is to help graduate students acquire an understanding of the characteristics of the Medieval Japanese Literature and the fundamentals of the study of waka poetry. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

Your overall grade in the class will be decided based on the following

Oral presentation or Term-end report : 70%, in class contribution : 30%.

LIT500B2

日本中世文芸原典研究B

阿部 真弓

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業は、中世の文芸作品を緻密に読み解き、理解を深めることを目的とします。中世文芸の基礎的な研究方法を学ぶとともに、プレゼンテーション能力・ディスカッション能力を身につけ、他者との討論から新たな研究課題を見出すことを目指します。

今年度は、『百人一首』の古注釈である『百人一首 宗祇抄』を取り上げます。影印本を翻刻し、的確かつ詳細に注釈を施して現代語に訳していきます。また他の古注釈も参照し、『百人一首』が中世・近世でどのように解釈されていたかを確認し、『宗祇抄』の位置づけについても考察を試みます。

【到達目標】

- ①適切に文献を調査し、歌語や修辭等の和歌表現、また歌人についての的確かつ精緻な注釈を施し、和歌を読み解く能力を身につける。
- ②中世において『百人一首』がどのように解釈されてきたか、考察できる。
- ③くずし字を読むことができる。
- ④プレゼンテーション能力を身につける。
- ⑤ディスカッション能力を身につけ、他者との討論から新たな研究課題を見出すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

古活字本の影印をテキストとし、受講生の発表・討論と教員の講義を取り混ぜながら、『百人一首 宗祇抄』を精読します。なお、授業のはじめに、リアクションペーパーに書かれた受講生からの質問や意見を取り上げてフィードバックし、前回授業の振り返りを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	授業の概要の説明
2	春学期授業のふりかえり	春学期授業で浮かび上がった問題点・課題について整理を行う。
3	異種百人一首について	近世の異種百人一首について解説する。
4	百人一首かるたについて	百人一首と歌仙絵について考察する。
5	変体仮名について	古筆に関する解説。
6	変体仮名解読練習	変体仮名解読練習
7	『百人一首 宗祇抄』読解	受講生 A による発表と討論
8	『百人一首 宗祇抄』読解	受講生 B による発表と討論
9	『百人一首 宗祇抄』読解	受講生 C による発表と討論
10	『百人一首 宗祇抄』読解	受講生 D による発表と討論
11	『百人一首 宗祇抄』読解	受講生 E による発表と討論
12	『百人一首 宗祇抄』読解	受講生 F による発表と討論
13	『百人一首 宗祇抄』読解	受講生 G による発表と討論
14	まとめ	春学期の内容に関する総括を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業前には参考書等を読み、『百人一首』に関する基礎的な知識を身につけておいて下さい。

発表にあたっては、担当者はわかりやすく、不備のない資料を作り、要を得た説明ができるよう、綿密に準備を行ってください。それ以外の受講者はテキスト、また注釈書等を確認し、どのような問題点のある和歌なのか予習をした上で、授業にのぞんでください。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

『影印本百人一首抄〈宗祇抄〉』（吉田幸一編、笠間書院、1969年）

【参考書】

・講談社学術文庫『百人一首』（有吉保、講談社、1983年）
・角川ソフィア文庫『新版 百人一首』（島津忠夫、KADOKAWA、1999年）

【成績評価の方法と基準】

【授業の到達目標】①～⑤に照らし、発表内容またはレポート 70 %（①～⑤）、討論への参加度 30 %（⑤）という配分で、総合的に判断します。

【学生の意見等からの気づき】

一度に複数の和歌を担当・発表する形ではなく、一首ずつ丁寧に読み進めます。また、受講者のレベルに合ったプリント教材を適宜配布し、随時、くずし字を読む練習も行います。

【その他の重要事項】

基本的に対面式授業ですが、第1回・第2回授業はオンライン式の授業です。第1回授業日までに、学習支援システム上の当科目「お知らせ」をよく確認し、受講してください。

なお、秋学期科目のみの履修も可能ですが、理解を深めるために春学期科目Aの受講をおすすめします。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本中世文学

＜研究テーマ＞日記文学、和歌

＜主要研究業績＞「『とはずがたり』の恋一物語る二条」（『文学』8巻5号、2007年9月）、「『弁内侍日記』論—糾える言葉の連鎖—」（『日本古典文学研究の新展開』2011年、笠間書院）、「『嵯峨のかよひち』考—藤原為家の涙—」（『日本文学誌要』89号、2014年3月）

【Outline (in English)】

This course deals with *Hyakunin issshu So`gi sho`*.

The aim of this course is to help graduate students acquire an understanding of the characteristics of the Medieval Japanese Literature and the fundamentals of the study of waka poetry. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Your overall grade in the class will be decided based on the following
Oral presentation or Term-end report : 70%, in class contribution : 30%.

LIT500B2

日本中世文芸演習A

伊海 孝充

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本講義では、世阿弥の伝書を通して鬼の物真似・演技について考えていく。世阿弥は鬼の芸について、否定的な見解を述べる一方で、その演技の効果についても述べている。伝書を通してその演技を分析するとともに、能や狂言の作品も読んでいく。また、受講者の興味に関わらせて、能以前の鬼の芸能や、能以降の鬼の描き方についても取り上げたい。

【到達目標】

本講義では、世阿弥の伝書と能・狂言の作品の精読を通して、能や狂言、その他の芸能の基本的知識と研究手法を正確に理解することを目標とする。自分自身の研究を進めるためには、論文で論じるための問題点を見つけ方、それを掘り下げるための手法を身につける必要がある。本講義ではこの二点を意識して、当該資料を分析していく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式によって進める。参加者は当該資料から興味のある曲を選択し、資料分析とともに作品解釈を行なっていく。また発表者は自分自身の問題意識を提示してもらい、参加者で討論していく。専門外の者は、別な方法での発表も考える。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	受講生の自己紹介と半期の計画を相談。
第2回	鬼と芸能①	日本芸能史と鬼
第3回	鬼と芸能②	追儺について
第4回	世阿弥について	世阿弥の生涯
第5回	世阿弥の伝書	世阿弥伝書の概略
第6回	『花伝』第二物学条々①	諸本比較と注釈
第7回	『花伝』第二物学条々②	諸本比較と注釈
第8回	その他の世阿弥伝書①	諸本比較と注釈
第9回	その他の世阿弥伝書②	諸本比較と注釈
第10回	鬼能①	受講者の報告
第11回	鬼能②	受講者の報告
第12回	鬼狂言	受講者の報告
第13回	鬼狂言	受講者の報告
第14回	まとめ	本講義内容の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自主的に舞台鑑賞に行くことを勧める。能・狂言だけでなく、歌舞伎・人形浄瑠璃にも観劇に行ってほしい。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

授業内に指示する。

【参考書】

授業内に指示する。

【成績評価の方法と基準】

講義での発表 70 %

講義での発言 30 %

【学生の意見等からの気づき】

専門外の学生にも配慮してすすめる。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本中世文学

＜研究テーマ＞能楽

＜主要研究業績＞『切合能の研究』（檜書店、2011 年）「舞う身体としての曾我兄弟：幸若舞曲との比較から」（『能と狂言』19 号、2021 年 11 月）

【Outline (in English)】

In this lecture, we will study the mimicry and performance of Oni based on Zeami's biography. We will read Oni Noh and Oni Kyogen, and we will also cover Oni in other performing arts. The purpose of this lecture is to gain knowledge of classical performing arts and to learn how to study literature and performing arts. Grades will be based on presentations (70%) and remarks in class (30%).

LIT500B2

日本中世文芸演習 B

伊海 孝充

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

春学期同様、能・狂言における鬼の物真似・演技について考えていく。まず春学期に行った世阿弥伝書の鬼の演技についての記述や鬼能・鬼狂言をもとに、他のジャンルの鬼の描写と比較していく。

【到達目標】

本講義では、世阿弥の伝書と能・狂言の作品の精読を通して、能や狂言、その他の芸能の基本的知識と研究手法を正確に理解することを目標とする。さらにその知識や方法を別の研究にも応用できるようにする。本講義ではこの二点を意識して、当該資料を分析していく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式によって進める。参加者は当該資料から興味のある曲を選択し、資料分析とともに作品解釈を行なっていく。また発表者は自分自身の問題意識を提示してもらい、参加者で討論していく。専門外の者は、別な方法での発表も考える。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	春学期発表分の振り返り。秋学期からの参加者への概要説明。
第 2 回	世阿弥伝書における鬼の演技	春学期の復習
第 3 回	鬼能・鬼狂言	春学期の復習
第 4 回	説話文学の鬼と能楽の鬼①	受講者の発表
第 5 回	説話文学の鬼と能楽の鬼②	受講者の発表
第 6 回	説話文学の鬼と能楽の鬼③	受講者の発表
第 7 回	御伽草子の鬼と能楽の鬼①	受講者の発表
第 8 回	御伽草子の鬼と能楽の鬼②	受講者の発表
第 9 回	近世文学の鬼と能楽の鬼①	受講者の発表
第 10 回	近世文学の鬼と能楽の鬼②	受講者の発表
第 11 回	民俗芸能の鬼と能楽の鬼①	受講者の発表
第 12 回	民俗芸能の鬼と能楽の鬼②	受講者の発表
第 13 回	民俗芸能の鬼と能楽の鬼③	受講者の発表
第 14 回	総括	能・狂言の鬼のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自主的に舞台鑑賞に行くことを勧める。能・狂言だけでなく、歌舞伎・人形浄瑠璃にも観劇に行ってほしい。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

授業内に指示する。

【参考書】

授業内に指示する。

【成績評価の方法と基準】

講義での発表 70%

講義での発言 30%

【学生の意見等からの気づき】

専門外の学生にも配慮する。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本中世文学

＜研究テーマ＞能楽

＜主要研究業績＞『切合能の研究』（檜書店、2011 年）「舞う身体としての曾我兄弟：幸若舞曲との比較から」（『能と狂言』19 号、2021 年 11 月）

【Outline (in English)】

As in the spring semester, we will study the mimicry and performance of Oni in Noh and Kyogen. In this semester, we will compare and analyze Oni in Noh, Kyogen and other genres. The purpose of this lecture is to absorb knowledge of classical arts and to apply that knowledge to other research. Grades will be based on presentations (70%) and remarks in class (30%).

LIT500B2

日本近世文芸原典研究 A

小林 ふみ子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

春学期は 18 世紀後半～19 世紀前半における江戸狂歌の流行を背景とした狂歌摺物のうち、和漢の古典籍をテーマとして制作された作品を読解する。当時の和漢の学芸の流行をふまえて設定されたテーマを題として詠まれた狂歌と、それに取り合わされた北斎やその門人魚屋北溪、岳亭定岡など、北斎派の絵師、北尾派の窪俊満等の挿絵は、どのような関係にあるのか。いまだ定説をみないこの謎に挑んでみましょう！

【到達目標】

（１）作品を翻刻し、みずから注釈を施しながら読む力をつける。
（２）近世における基本的な知識、情報を調査するための文献に習熟する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

背景についての概説のあと、まずは作品を割り当ててテキストを翻刻し、相互に確認しましょう。
その後、それぞれの図像の分析とテキストとの関係について発表してもらいます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	講義 1	江戸狂歌の流行と摺物制作について
第 2 回	講義 2	浮世絵の歴史のなかの摺物・作品選定
第 3 回	講義 3	絵師の紹介
第 4 回	翻刻をしてみよう 1	くずし字の基本
第 5 回	翻刻をしてみよう 2	各自の担当作品の翻刻確認
第 6 回	学生の発表 1	作品 1
第 7 回	学生の発表 2	作品 2
第 8 回	学生の発表 3	作品 3
第 9 回	学生の発表 4	作品 4
第 10 回	学生の発表 5	作品 5
第 11 回	学生の発表 6	作品 6
第 12 回	学生の発表 7	作品 7
第 13 回	学生の発表 8	作品 8
第 14 回	まとめ	作品を評価する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
毎週、次の場面を確認してきましょう。
発表担当者は作品解釈の発表を用意してください。

【テキスト（教科書）】

とくになし。

【参考書】

江戸狂歌の基本については江戸狂歌研究会編『化物で楽しむ江戸狂歌』（笠間書院 2014）参照。

【成績評価の方法と基準】

毎回の出席は当然の前提とした上で、報告 70 %、授業中の質疑などの参加態度 30 %によって総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

翻刻の確認を通じて、おもに仮名のくずし字が読解できるようになるようにします。

各分野の参考文献を紹介することで、江戸の事物を調べるための基本的な知識が得られるようにします。

【その他の重要事項】

授業の実施形態は受講生の様子を見てみんなで相談して決めましょう。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近世文芸・日本近世文化

<研究テーマ>大田南畝・江戸狂歌・戯作

<著書>

【単著】

『へんちくりん江戸挿絵本』インターナショナル新書（集英社インターナショナル、2019）

『大田南畝 江戸に狂歌の花咲かす』（岩波書店 2014）

『天明狂歌研究』（汲古書院 2009）

【共編著】

『水都としての東京とヴェネツィア』（法政大学出版局 2022）

『最後の文人 石川淳の世界』集英社新書（集英社 2021）

『東アジア文化講座 3 東アジアに共有される文学圏』（文学通信 2021）

『好古趣味の歴史 江戸東京からたどる』（文学通信 2020）

『北斎 視覚のマジック 小布施・北斎館名品集』（平凡社 2019）

『〈奇〉と〈妙〉の江戸文学史』（文学通信 2019）

『別冊太陽 歌麿決定版』（平凡社 2016）

『日本人は日本をどうみてきたか—江戸から見る自意識の変遷』（田中優子編、笠間書院 2015）

『化物で楽しむ江戸狂歌』（笠間書院 2014）

『別冊太陽 北斎決定版』（平凡社 2010）

【Outline (in English)】

(Outline) Reading surimono, or privately published prints with verses produced in 18-19th century Edo to analyze relationship between texts and images.

(Learning activities outside of classroom) Before each class meeting, students will be expected to have read a designated part of the text. Your required study time is four hours for each class meeting.

(Grading Criteria /Policy) Final grade will be calculated according to the presentations(50%) and in-class contribution(50%).

LIT500B2

日本近世文芸原典研究B

小林 ふみ子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

江戸時代の絵入の作品を、挿絵と合わせて読解する。秋学期は、春学期の受講生と相談して作品を決定する。

【到達目標】

（１）作品を翻刻し、注釈を施しながら読む力をつける。

（２）近世における基本的な知識、情報を調査するための文献に習熟する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式で学生の分担によって進行する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	概説	作者と画工、時代状況についての概説
第 2 回	学生の発表	上巻 1
第 3 回	学生の発表	上巻 2
第 4 回	学生の発表	上巻 3
第 5 回	学生の発表	上巻 4
第 6 回	学生の発表	中巻 1
第 7 回	学生の発表	中巻 2
第 8 回	学生の発表	中巻 3
第 9 回	学生の発表	中巻 4
第 10 回	学生の発表	下巻 1
第 11 回	学生の発表	下巻 2
第 12 回	学生の発表	下巻 3
第 13 回	学生の発表	下巻 4
第 14 回	まとめ	作品を評価する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

毎週、次回のテキストを読んでくる。

発表担当者は語釈・解釈の発表を用意する。

【テキスト（教科書）】

なし

【参考書】

小林ふみ子『へんちくりん江戸挿絵本』（集英社インターナショナル・インターナショナル新書 2019）。その他、適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎回の出席は当然の前提とした上で、報告 70 %、授業中の質疑などの参加態度 30 %によって総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

翻刻を通じて、おもに仮名のくずし字が読解できるようになるようにします。

各分野の参考文献を紹介することで、江戸の事物を調べるための基本的な知識が得られるようにします。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近世文芸・日本近世文化

<研究テーマ>大田南畝・江戸狂歌・戯作

<近年の論文・その他書き物>

【論文】

「南畝の狂歌の評価軸」『近世文藝』113 号 2021（査読付）

「文政期前後の風景画入狂歌本の出版とその改題・再印―浮世絵風景版画流行の前史として」『浮世絵芸術』179号 2020（査読付）
「狂歌に文芸性はあるのか」『古典文学の常識を疑うⅡ』（単行本）勉誠出版） 2019

「書籍を模擬する遊び―「見立絵本」にかんする疑問、から―」『京都語文』26号 2018

「山東京伝の地方読者へのまなざし」『文学（隔月刊）』17巻4号 2016

【一般誌】「江戸の名所は、都市の発達と行楽文化の成熟とともに変化した」『歴史 REAL 大江戸の都市力』洋泉社 MOOK 2018
「歌麿が描いた江戸、描かなかった江戸」『別冊太陽 歌麿決定版』2016

「国芳時代の絵師ビジネス」『芸術新潮 2016年4月号

【Outline (in English)】

(Outline) Reading illustrated works to learn how to deeply read those kind of works from 18-19th century Edo.

(Learning activities outside of classroom) Before each class meeting, students will be expected to have read a designated part of the text. Your required study time is four hours for each class meeting.

(Grading Criteria /Policy) Final grade will be calculated according to the presentations(50%) and in-class contribution(50%).

LIT500B2

日本近世文芸演習 A

高木 元

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、日本の近世文芸を読み理解するに際して不可欠である注釈的読解に必要な参考資料群を紹介しつつ、具体的なテキストを注釈的に読解する演習を通じての読解力の養成と、その文学史における評価に際して要求される見識を育成することをめざす。

【到達目標】

近世期の板本に使用されている所謂崩し字を判読し、固有名詞を中心とした語句の注釈が適切に出来るようになる。この場合の注釈とは文脈上の語句の意味だけではなく、作者が如何なる典拠を用いていたかと言う点の解明に及ぶ必要がある。これらの、原テキストに拠る注釈的な読解を踏まえて、近世文学史における位置や、その意義について問題設定をして論じることが出来るようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

年度始めに受講生の顔ぶれとその専攻する分野を見きわめつつ、採り上げるに相応しいテキストを複数提示する。その後、受講生の希望を聞きつつ採り上げるテキストを決定する。テキストが決まったら、研究史における文学史的位置付けと、参考資料を提示しつつ概説的講義をする。その後、テキストを巻ごとに区切って発表担当者を決定した上で、毎回担当院生による注釈と現代語訳、そして担当部分から発見した問題点に関する発表と討議を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	テキストの決定	受講生の専攻する分野を聞きつつ、扱うテキストを選ぶ。
第2回	テキストに関する研究史概観	決まったテキストに関する研究史を踏まえた概説をする。
第3回	テキストの文学史的概括	テキストの近世文学史における位置について概観する。
第4回	第一巻注釈	第一巻の受講生による注釈
第5回	第一巻をめぐる諸問題	第一巻の受講生による問題提起ならびに討議
第6回	第二巻注釈	第二巻の受講生による注釈
第7回	第二巻をめぐる諸問題	第二巻の受講生による問題提起ならびに討議
第8回	第三巻注釈	第三巻の受講生による注釈
第9回	第三巻をめぐる諸問題	第三巻の受講生による問題提起ならびに討議
第10回	第四巻注釈	第四巻の受講生による注釈
第11回	第四巻をめぐる諸問題	第四巻の受講生による問題提起ならびに討議
第12回	第五巻注釈	第五巻の受講生による注釈
第13回	第五巻をめぐる諸問題	第五巻の受講生による問題提起ならびに討議
第14回	総括とまとめ	第一巻から第五巻を通じた問題点の整理と討議

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
テキストを読んでおくことは当然として、研究史を踏まえた問題の所在について考えてくる。発表者の注釈の可否については事前に調べてこないと論じられない。
また、授業で扱う範囲における問題の所在について検討してから授業に臨むことが不可欠である。

【テキスト（教科書）】

テキストが決定次第、原本（板本）のコピーを用意する。

【参考書】

二回目以降の授業で提示する。

【成績評価の方法と基準】

発表の水準を基準として、議論への参加の度合いを加味する（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

授業の進み具合を受講者の理解度にそくして、適宜かえてみる。

【学生が準備すべき機器他】

なし

【その他の重要事項】

なし

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本十九世紀文学

＜研究テーマ＞絵入小説史の書誌学的研究

＜主要研究業績＞『江戸読本の研究 -十九世紀小説様式攷-』（ぺりかん社 1995/10）、『中本型読本集』（国書刊行会 1988/1）ほか。

<https://fumikura.net> 参照

【Outline (in English)】

【Course outline】

This course aims to develop reading comprehension skills through exercises in the annotated reading of specific texts while introducing reference materials necessary for annotated reading, which is essential for reading and understanding Japanese early modern literature, and to cultivate the insights required for evaluation in literary history.

【Learning Objectives】

The student should decipher the Kuzushiji (manuscript characters) used in the early modern book block-printed books and appropriately annotate words and phrases, especially proper nouns. In this case, the annotations should cover the meaning of the words in the context and clarify what kind of sources the author used. The student should be set up a problem and discuss its place and significance in the history of early modern literature based on the annotated reading of the original text.

【Learning activities outside of classroom】

The standard preparation and review time required for this class is two hours each. It is necessary to read the textbook before the course and think about the problem's location based on the research history, because it is impossible to discuss whether the presenter's annotations are acceptable unless you have researched them beforehand. In addition, you must consider where the problems lie within the scope of the class before coming to class.

【Grading Criteria /Policy】

It will be based on the result of the student's presentation and participation in the discussion.

LIT500B2

日本近世文芸演習 B

高木 元

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、日本の近世文芸を読み理解するに際して不可欠である具体的なテキストを注釈的に読解する演習を通じての読解力の養成と、その文学史における評価に際して要求される見通しを育成することをめざす。

【到達目標】

近世期の板本に使用されている所謂崩し字を判読力をつける。参考図書を活用して語句の注釈が適切に出来るようにする。この場合の注釈とは文脈上の語句の意味だけではなく、作者が如何なる典拠を用いていたかと云う点の解明に及ぶ必要がある。これらの原本に拠る注釈的な読解を踏まえて、近世文学史における位置や、その意義について問題設定をして論じることが出来るようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講生の専攻する分野を見きわめつつ、受講生の希望を聞きつつ採り上げるテキストを決定する。テキストが決まったら、研究史における文学史的位置付けと、参考資料を提示しつつ概説的講義をする。その後に、テキストを巻ごとに区切って発表担当者を決定した上で、毎回担当院生による注釈と現代語訳、そして担当部分から発見した問題点に関する発表と討議を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	テキストの決定	受講生の専攻する分野を聞きつつ、扱うテキストを選ぶ。
第2回	テキストに関する研究史概観	決まったテキストに関する研究史を踏まえた概説をする。
第3回	テキストの文学史的概括	テキストの近世文学史における位置について概観する。
第4回	第一巻注釈	第一巻の受講生による注釈
第5回	第一巻をめぐる諸問題	第一巻の受講生による問題提起ならびに討議
第6回	第二巻注釈	第二巻の受講生による注釈
第7回	第二巻をめぐる諸問題	第二巻の受講生による問題提起ならびに討議
第8回	第三巻注釈	第三巻の受講生による注釈
第9回	第三巻をめぐる諸問題	第三巻の受講生による問題提起ならびに討議
第10回	第四巻注釈	第四巻の受講生による注釈
第11回	第四巻をめぐる諸問題	第四巻の受講生による問題提起ならびに討議
第12回	第五巻注釈	第五巻の受講生による注釈
第13回	第五巻をめぐる諸問題	第五巻の受講生による問題提起ならびに討議
第14回	総括とまとめ	第一巻から第五巻を通じた問題点の整理と討議

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。テキストを読んでくることは当然として、研究史を踏まえた問題の所在について考えてくる。発表者の注釈の可否については事前に調べてこないと論じられない。また、授業で扱う範囲における問題の所在について検討してから授業に臨むことが不可欠である。

【テキスト（教科書）】

テキストが決定次第、原本（板本）のコピーを用意する。

【参考書】

二回目以降の授業で提示する。

【成績評価の方法と基準】

発表の水準を基準として、議論への参加の度合いを加味する（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

受講生の理解度を見ながら授業の進行速度を調整する。

【学生が準備すべき機器他】

なし

【その他の重要事項】

なし

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本十九世紀文学

＜研究テーマ＞絵入小説史の書誌学的研究

＜主要研究業績＞『江戸読本の研究 -十九世紀小説様式攷-』（ぺりかん社 1995/10）、『中本型読本集』（国書刊行会 1988/1）ほか。

<https://fumikura.net> 参照

【Outline (in English)】

【Course outline】

This course aims to develop reading comprehension skills through exercises in the annotated reading of specific texts while introducing reference materials necessary for annotated reading, which is essential for reading and understanding Japanese early modern literature, and to cultivate the insights required for evaluation in literary history.

【Learning Objectives】

The student should decipher the Kuzushiji (manuscript characters) used in the early modern book block-printed books and appropriately annotate words and phrases, especially proper nouns. In this case, the annotations should cover the meaning of the words in the context and clarify what kind of sources the author used. The student should be set up a problem and discuss its place and significance in the history of early modern literature based on the annotated reading of the original text.

【Learning activities outside of classroom】

The standard preparation and review time required for this class is two hours each. It is necessary to read the textbook before the course and think about the problem's location based on the research history. because it is impossible to discuss whether the presenter's annotations are acceptable unless you have researched them beforehand.,in addition, you must consider where the problems lie within the scope of the class before coming to class.

【Grading Criteria /Policy】

It will be based on the result of the student's presentation and participation in the discussion.

LIT500B2

日本近代文芸原典研究 A

中丸 宣明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ①受講生各自の研究する作家・作品に関する注釈・分析・立論・評価の能力の養成。
- ②日本近・現代文学の文学史的展開のあり方を把握すること。①と関連して、各自の研究する対象の位置が明確になるように努める。
- ③「文学」を広く文化的視野でとらえられるように幅広い知見を身につける。
- ④上記の研究を推進しながら、論文作成へと連続させていくこと。
- ⑤各自の自己の研究分野における先行研究を批判的に摂取する。

【到達目標】

上記「授業のテーマ」で設定されていることが、受講者各自の研究テーマに即して実現されること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ①各自の研究テーマにそって研究発表をする。
- ②近代文学の研究史上エボックをなした（と思われる）研究書を取り上げ、その研究史上の意味と現在の研究に資する方法論を語る。
- ①②とも発表と討論によって構成される。
- ③先行研究文献の輪読。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	本授業（演習）の目的・運営など。
2	各自のテーマに即した研究発表	受講者各自のテーマによる研究発表
3	各自のテーマに即した研究発表	受講者各自のテーマによる研究発表
4	研究書精読	文学研究の方法探求
5	各自のテーマに即した研究発表	受講者各自のテーマによる研究発表
6	各自のテーマに即した研究発表	受講者各自のテーマによる研究発表
7	研究書精読	文学研究の方法探求
8	各自のテーマに即した研究発表	受講者各自のテーマによる研究発表
9	各自のテーマに即した研究発表	受講者各自のテーマによる研究発表
10	研究書精読	文学研究の方法探求
11	各自のテーマに即した研究発表	受講者各自のテーマによる研究発表
12	各自のテーマに即した研究発表	受講者各自のテーマによる研究発表
13	研究書精読	文学研究の方法探求
14	前期のまとめ	前期のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表者は担当作品に関する調査・研究を発表する。必要時間は無限。他の受講者は当該作品についての視点・論点の感想文を提出する。本授業の準備学習・復習時間は、各 24 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

受講者の便宜・要請に従って、決定する。発表者は当該作品のテキストを決

定し、ゼミ員に指示すること。See"outline and objectives

【参考書】

適宜指示する。また、各自の発表の中で、発表者の示すものに加えて指示。See"outline and objectives

【成績評価の方法と基準】

発表（40 %）および討論への参加（40 %）、期末レポート（20%）。

【学生の意見等からの気づき】

討議の中で聴取。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本近代文学

<研究テーマ>

近代文学の成立期の研究－19世紀文学論

自然主義文学の形成と構造

<主要研究業績>

・「紀久八狂乱-広津柳浪『乱菊物語』と小栗風葉『鬢下地』」「国語と国文学」（東京大学国語国文学会）2010. 5

・「草双紙のゆくえ-雑誌「人情世界」の位置」「文学」（岩波書店）2009. 11・12

・「『東京絵入新聞』の図像学-『金之助の話説』の成立まで」「日本近代文学」（日本近代文学会）2008. 5

【Outline (in English)】

< Course outline > See Japanese notation. Those who do not understand the Japanese language are not eligible. Because it is an academic lecture on Japanese literature, it requires more Japanese ability than daily conversation.

< Learning activities outside of classroom > Research presenters prepare for infinite time. Other students will be expected to spend 24 hours to understand the course content. See "outline and objectives"

< Grading Criteria/Policy > Completeness of research presentation (40 %), quality of discussion (40 %), year-end report (20%)

LIT500B2

日本近代文芸原典研究B

中丸 宣明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ①受講生各自の研究する作家・作品に関する注釈・分析・立論・評価の能力の養成。
- ②日本近・現代文学の文学史的展開のあり方を把握すること。①と関連して、各自の研究する対象の位置が明確になるように努める。
- ③「文学」を広く文化学的視野でとらえられるように幅広い知見を身につける。
- ④上記の研究を推進しながら、論文作成へと連続させていくこと。
- ⑤各自の自己の研究分野における先行研究を批判的に摂取する。

【到達目標】

上記「授業のテーマ」で設定されていることが、受講者各自の研究テーマに即して実現されること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたなどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ①各自の研究テーマにそって研究発表をする。
- ②近代文学の研究史上エボックをなした（と思われる）研究書を取り上げ、その研究史上の意味と現在の研究に資する方法論を語る。
- ①②とも発表と討論によって構成される。
- ③先行研究文献の輪読。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	前期からの継続	各自前期の成果を確認
第2回	各自のテーマに即した研究発表	各自の専門領域による発表・全員討論
第3回	研究書購読	研究方法の吟味・学習
第4回	各自のテーマに即した研究発表	各自の専門領域による発表・全員討論
第5回	研究書購読	研究方法の吟味・学習
第6回	各自のテーマに即した研究発表	各自の専門領域による発表・全員討論
第7回	研究書購読	研究方法の吟味・学習
第8回	各自のテーマに即した研究発表	各自の専門領域による発表・全員討論
第9回	研究書購読	研究方法の吟味・学習
第10回	各自のテーマに即した研究発表	各自の専門領域による発表・全員討論
第11回	研究書購読	研究方法の吟味・学習
第12回	各自のテーマに即した研究発表	各自の専門領域による発表・全員討論
第13回	研究書購読	研究方法の吟味・学習
第14回	一年間の総括	各自一年間の成果を確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表者は担当作品に関する調査・研究を発表する。必要時間は無限。他の受

講者は当該作品についての視点・論点の感想文を提出する。本授業の準備学

習・復習時間は、各24時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

受講者の便宜・要請に従って、決定する。発表者は当該作品のテキストを決

定し、ゼミ員に指示すること。

【参考書】

各自の発表の中で、発表者の示すものに加えて指示。

【成績評価の方法と基準】

発表（40 %）および討論への参加（40 %）、期末レポート（20%）。

【学生の意見等からの気づき】

去年度の最後のゼミ時における、総括の成果を踏まえる。このゼミナールの特色から各自の研究領域の独自性を最大限重んじた指導をするために、随時学生からのフィードバックを求めている。討議の中で聴取。

【担当教員の専門分野等】

< 専門領域 >

日本近代文学

< 研究テーマ >

近代文学の成立期の研究 - 19 世紀文学論

自然主義文学の形成と構造

< 主要研究業績 >

・「紀久八狂乱-広津柳浪『乱菊物語』と小栗風葉『鬢下地』」「国語と国文学」（東京大学国語国文学会）2010. 5

・「草双紙のゆくえ-雑誌『人情世界』の位置」「文学」（岩波書店）2009. 11・12

・「『東京絵入新聞』の図像学-『金之助の話説』の成立まで」「日本近代文学」（日本近代文学会）2008. 5

【Outline (in English)】

< Course outline > See Japanese notation. Those who do not understand the Japanese language are not eligible. Because it is an academic lecture on Japanese literature, it requires more Japanese ability than daily conversation.

< Method(s) > Acquire the basics of literary research. See "Course outline"

< Learning activities outside of class > Research presenters prepare for infinite time. Other students will be expected to spend 24 hours to understand the course content. See "outline and objectives"

< Grading Criteria/Policy > Completeness of research presentation (40 %), quality of discussion (40 %), year-end report (20%)

LIT500B2

日本近代文芸演習 I A

藤村 耕治

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

1. 日本近・現代の文芸作品（小説・評論・詩等）についての分析・検討をテーマとする。特に昭和期以降現代に到るまでの作家・作品を中心に扱う。
2. 受講者は自身の研究テーマに即して研究報告としてのレジュメを作成し、発表を行い、他の受講者との討議を通じて、より深く緻密な理解・分析・解釈・評価の力を身につける。

【到達目標】

1. 受講者が選択した作品の、作家の全業績における位置づけ及び文学史全体における位置づけを明確にし、作家論的な視点と歴史的な視点の双方を導入することによって、より幅広い文学的な視野と知見を身につける。
2. レジュメの作成・相互討議などを通じて自身の学問的な方法論を獲得するとともに、最終的にはその成果を学術論文・修士論文にまとめられる高度な文章力・論理構成力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

各回の発表担当者が、自身のテーマとする日本近・現代の作家・評論家・詩人等の作品についてレジュメを作成して発表、他の受講者を交えて討議する形で行う。受講者の人数によって若干異なるが、担当回数は二回程度を目処とする。そのため、取り上げる具体的な作品に関しては、受講者の関心・研究テーマによって決定する。セメスター末には、発表・討議を通しての考察を踏まえた、総括的な成果報告を行う。

上記のように、特に昭和期以降現代に到るまでの作家・作品を中心に取り上げるが、必要に応じてそれ以前の文学者についても取り上げる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	近現代文学研究についての概説	近現代の文学研究に関する概説及び受講者各自の研究テーマについて聞く。
第 2 回	担当者 1 による発表・報告①	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第 3 回	担当者 1 による発表・報告②	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
第 4 回	担当者 2 による発表・報告①	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第 5 回	担当者 2 による発表・報告②	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
第 6 回	担当者 3 による発表・報告①	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第 7 回	担当者 3 による発表・報告②	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
第 8 回	担当者 4 による発表・報告①	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第 9 回	担当者 4 による発表・報告②	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
第 10 回	担当者 5 による発表・報告①	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第 11 回	担当者 5 による発表・報告②	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。

- 第12回 担当者6による発表・発表者の研究テーマに即した形で報告①
 第13回 担当者6による発表・討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。報告②
 第14回 各発表担当者による総括 各自の発表・報告・討議に基づいた総括。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表担当者は、選択した作品について、自身の研究テーマに即した形での問題提起を行うとともに、主題・動機・時代背景・人物・構造・文体等についても目を配りながら、毎回2000字から4000字程度の報告用レジュメを作成する。したがって、発表担当者は準備に5～10時間程度を要することになります。

担当者以外の受講者も、当該作品について各自の問題意識に沿って分析・検討を行って行くこと。単に通り眼を通すというのではなく、担当者と互角に討議し、適確な批評が可能となるように十分な準備をしていく必要がある。また、担当者以外の受講生にも、当該作品に関する小レポートを提出してもらう。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

各自の研究テーマによって選択された作品。

【参考書】

必要に応じて、適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

- 発表・報告時におけるレジュメとプレゼンテーションの内容(40%)
- 総括レポートとしての論文の内容(30%)
- 担当時以外的小レポートの内容(10%)
- 討議の場における積極的な参加態度及び発言(20%)

【学生の意見等からの気づき】

各人の修士論文の一部を構成しうような高度な論文を年間に一本は完成させることを目指せるよう指導する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本近・現代文学

〈研究テーマ〉特に第二次大戦後の戦後派文学および彼らの文学精神・意識を継承した作家・作品。

〈近年の主要な研究業績〉

- 「笠原淳論序説」（『日本文学誌要 93号、2016』）
- 「高橋和巳 未完の可能性」（『高橋和巳の文学と思想』コールサック社、2018）
- 「高橋和巳と三島由紀夫覚書」（『新世紀人文学論究』第6号、2022）

【Outline (in English)】

Course outline

- The theme is the analysis and study of modern and contemporary Japanese literature.
- Students present their research results according to their own themes.
- To acquire advanced writing and logical composition skills for master's writing.

Learning Objectives

- Learners will acquire a broad literary perspective and knowledge through the presentation of the person in charge.
- Learners will acquire the ability finish academic papers based on the resumes they have created.

Learning activities outside of classroom

Presenters spend 5 to 10 hours preparing resumes, and other students spend 2 hours preparing to participate in the discussion.

Grading Criteria/policy

Evaluate by 40% of the presentation, 30% of the content of the report, 10% of the content of the sub-report, and 20% attendance attitude.

LIT500B2

日本近代文芸演習 I B

藤村 耕治

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- 日本近・現代の文芸作品（小説・評論・詩等）についての分析・検討をテーマとする。特に昭和期以降現代に到るまでの作家・作品を中心に扱う。
- 受講者は自身の研究テーマに即して研究報告としてのレジュメを作成し、発表を行い、他の受講者との討議を通じて、より深く緻密な理解・分析・解釈・評価の力を身につける。

【到達目標】

- 受講者が選択した作品の、作家の全業績における位置づけ及び文学史全体における位置づけを明確にし、作家論的な視点と歴史的な視点の双方を導入することによって、より幅広い文学的な視野と知見を身につける。
- レジュメの作成・相互討議などを通じて自身の学問的な方法論を獲得するとともに、最終的にはその成果を学術論文・修士論文にまとめられる高度な文章力・論理構成力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

各回の発表担当者が、自身のテーマとする日本近・現代の作家・評論家・詩人等の作品についてレジュメを作成して発表、他の受講者を交えて討議する形で行う。受講者の人数によって若干異なるが、担当回数は三回程度を目処とする。そのため、取り上げる具体的な作品に関しては、受講者の関心・研究テーマによって決定する。セメスター末には、発表・討議を通しての考察を踏まえた、総括的な成果報告を行う。

上記のように、特に昭和期以降現代に到るまでの作家・作品を中心に取り上げるが、必要に応じてそれ以前の文学者についても取り上げる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	近現代文学研究についての概説	近現代の文学研究に関する概説及び受講者各自の研究テーマについて聞く。
第2回	担当者1による発表・報告①	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第3回	担当者1による発表・報告②	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
第4回	担当者2による発表・報告①	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第5回	担当者2による発表・報告②	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
第6回	担当者3による発表・報告①	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第7回	担当者3による発表・報告②	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
第8回	担当者4による発表・報告①	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第9回	担当者4による発表・報告②	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
第10回	担当者5による発表・報告①	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第11回	担当者5による発表・報告②	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。

- 第12回 担当者6による発表・発表者の研究テーマに即した形で報告① 問題提起。
- 第13回 担当者6による発表・報告② 討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
- 第14回 各発表担当者による総括 各自の発表・報告・討議に基づいた総括。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表担当者は、選択した作品について、自身の研究テーマに即した形で問題提起を行うとともに、主題・動機・時代背景・人物・構造・文体等についても目を配りながら、毎回2000字から4000字程度の報告用レジュメを作成する。したがって、発表担当者は準備に5～10時間程度を要することになります。

担当者以外の受講者も、当該作品について各自の問題意識に沿って分析・検討を行って行くこと。単に通り眼を通すというのではなく、担当者と互角に討議し、適確な批評が可能となるように十分な準備をしていく必要がある。また、担当者以外の受講生にも、当該作品に関する小レポートを提出してもらう。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

各自の研究テーマによって選択された作品。

【参考書】

必要に応じて、適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

1. 発表・報告時におけるレジュメとプレゼンテーションの内容(40%)
2. 総括レポートとしての論文の内容(30%)
3. 担当時以外的小レポートの内容(10%)
4. 討議の場における積極的な参加態度及び発言(20%)

【学生の意見等からの気づき】

各人の修士論文の一部を構成しようような高度な論文を年間に一本は完成させることを目指せるよう指導する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本近・現代文学

〈研究テーマ〉特に第二次大戦後の戦後派文学および彼らの文学精神・意識を継承した作家・作品。

〈近年の主要な研究業績〉

- ①「笠原淳論序説」（『日本文学誌要』93号、2016）
- ②「高橋和巳 未完の可能性」（『高橋和巳の文学と思想』コールサック社、2018）
- ③「高橋和巳と三島由紀夫覚書」（『新世紀人文学論究』第6号、2022）

【Outline (in English)】

Course outline

1.The theme is the analysis and study of modern and contemporary Japanese literature.

2.Students present their research results according to their own themes.

3.To acquire advanced writing and logical composition skills for master's writing.

Learning Objectives

1.Learners will acquire a broad literary perspective and knowledge through the presentation of the person in charge.

2.Learners will acquire the ability finish academic papers based on the resumes they have created.

Learning activities outside of classroom

Presenters spend 5 to 10 hours preparing resumes, and other students spend 2 hours preparing to participate in the discussion.

Grading Criteria/policy

Evaluate by 40% of the presentation, 30% of the content of the report, 10% of the content of the sub-report, and 20% attendance attitude.

LIN500B2

日本語学原典研究A

間宮 厚司

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語学の研究方法について学びます。この授業では、上代・中古・中世における文学作品について言語学的に考え、正しく解釈する方法を学ぶことを目的にします。

【到達目標】

日本語研究に関する調査・分析・考察を学び、プリントを作成して発表する。時代を問わず、様々な視点から自分なりの論を立てられるようになることを目的にした授業です。修士論文の作成に役立つ知識やスキルを身につけることが到達目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講生による研究発表を中心に行います。発表者はプリントを人数分準備、配布して発表し、発表後に質疑応答や助言などを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業内容・受講の仕方・成績評価等についての説明
第2回	上代文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と今回の課題
第3回	上代文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と今回の課題
第4回	上代文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第5回	上代文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説
第6回	中古文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と今回の課題
第7回	中古文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と今回の課題
第8回	中古文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第9回	中古文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説
第10回	中世文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と今回の課題
第11回	中世文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と今回の課題
第12回	中世文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第13回	中世文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説と大レポートの説明
第14回	まとめ	大レポート提出と総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

研究テーマや課題について、まずはサイニーなどで先行研究を調査し、研究する余地があるか否か、よく考えて図書館等を大いに活用し、もしわからないことがあれば、授業の前後など、いつでも研究相談に来て下さい。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

プリントを配布し、テキストは指定しません。

【参考書】

『新編日本古典文学全集』（小学館）など、研究テーマにそって、そのつど紹介します。

【成績評価の方法と基準】

春学期における発表とレポートを各 50 % で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

留学生の受講生が、年々多くなっているため、わかりやすい授業を心がけるようにします。加えて、100 分授業における発表者数についても工夫します。

【担当教員の専門分野等】

日本古典語学・日本語史

<研究テーマ>

『万葉集』や『おもろさうし』等の言語研究

<主要研究業績>

『おもろさうしの言語』（笠間書院、2005 年）

『沖縄古語の深層 [増補版]』（森話社、2014 年）

『万葉異説 [増補版]』（森話社、2021 年）

【Outline (in English)】

This course will be an interactive lecture. In this course, you are going to have a presentation about what we learn in the class related to Japanese Language and a question and answer session.

Learning objectives of this class:

Students learn investigation, analysis, and consideration regarding Japanese language studies, and students prepare documents to have presentations.

Focus on theorizing your thoughts about Japanese language studies from different perspective and era.

Acquire the necessary skill and knowledge for writing master's thesis.

Learning activities outside of classroom:

Students need to research about their study theme and subject via website such as CiNii and make sure if there is still room for research.

Use the library for study and students can come to the laboratory for consultation before or after the class if needed.

As preparation and review of the class, students will be expected to spend about 2 hours.

Grading Criteria/Policies:

Your overall grade in the class will be decided based on the following:

Presentation (50%), Report (50%).

LIN500B2

日本語学原典研究 B

間宮 厚司

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語学の研究方法について学びます。この授業では、近世・近代・現代における文学作品について言語学的に考え、正しく解釈する方法を学ぶことを目的にします。

【到達目標】

日本語研究に関する調査・分析・考察を学び、プリントを作成して発表する。時代を問わず、様々な視点から自分なりの論を立てられるようになることを目的にした授業です。修士論文の作成に役立つ知識やスキルを身につけることが到達目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講生による研究発表を中心に行います。発表者はプリントを人数分準備、配布して発表し、発表後に質疑応答や助言などを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業の内容・受講の仕方・成績評価等についての説明
第 2 回	近世文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と今回の課題
第 3 回	近世文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と今回の課題
第 4 回	近世文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第 5 回	近世文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説
第 6 回	近代文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と今回の課題
第 7 回	近代文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と今回の課題
第 8 回	近代文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第 9 回	近代文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説
第 10 回	現代文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と今回の課題
第 11 回	現代文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と今回の課題
第 12 回	現代文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第 13 回	現代文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説と大レポートの説明
第 14 回	まとめ	大レポート提出と総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

研究テーマや課題について、まずはサイニーなどで先行研究を調査し、研究する余地があるか否か、よく考えて図書館等を大いに活用し、もしわからないことがあれば、授業の前後など、いつでも研究相談に来て下さい。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

プリントを配布し、テキストは指定しません。

【参考書】

『新編日本古典文学全集』（小学館）など、研究テーマにそって、そのつど紹介します。

【成績評価の方法と基準】

秋学期における発表とレポートを各 50 % で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

教室授業にしてほしい。

【担当教員の専門分野等】

日本古典語学・日本語史

<研究テーマ>

『万葉集』や『おもろさうし』等の言語研究

<主要研究業績>

『おもろさうしの言語』（笠間書院、2005 年）

『沖縄古語の深層 [増補版]』（森話社、2014 年）

『万葉異説 [増補版]』（森話社、2021 年）

【Outline (in English)】

This course will be an interactive lecture. In this course, you are going to have a presentation about what we learn in the class related to Japanese Language and a question and answer session.

Learning objectives of this class:

Students learn investigation, analysis, and consideration regarding Japanese language studies, and students prepare documents to have presentations.

Focus on theorizing your thoughts about Japanese language studies from different perspective and era.

Acquire the necessary skill and knowledge for writing master's thesis.

Learning activities outside of classroom:

Students need to research about their study theme and subject via website such as CiNii and make sure if there is still room for research.

Use the library for study and students can come to the laboratory for consultation before or after the class if needed.

As preparation and review of the class, students will be expected to spend about 2 hours.

Grading Criteria/Policies:

Your overall grade in the class will be decided based on the following:

Presentation (50%), Report (50%).

LIN500B2

日本語学演習 I A

尾谷 昌則

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、前半は認知言語学（認知意味論）の基本的な考え方を学ぶためにテキストを皆で読み進める。受講生は、要約レポートを毎週作成し、授業開始時に提出する。その後、基本概念についての質疑応答、疑問点についての討論を行う。後半は、テキストで学んだことが実際の言語研究でどのように利用されているのかを学ぶために、意味について分析している学術論文を読む。受講生は、論文の要約レポートを毎週作成し、授業開始時に提出する。授業内容は、前半と同じように進める。

【到達目標】

テキストに出てくる認知言語学および言語学一般の基礎概念・用語を理解するとともに、具体例を挙げながら他者にそれらの概念を説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

▼前半は、指定した教科書を皆で読み進める。当日の授業開始時までに要約レポートを Hoppii へ提出し、その後、その章の内容に関する確認の質疑応答を行い、最後に疑問点や問題点についてディスカッションを行う。

▼後半は、前半で学習した事項が分析に利用されている学術論文を毎週 1 本読むが、授業の進め方は前半と同じである。

▼必要に応じて、ZOOM を用いたオンライン授業を行う。その場合は、学習支援システムの「お知らせ」で URL や事前課題などを連絡する。チャット機能を利用した双方向授業になるため、通信環境を整えておくこと。

▼課題やリアクションペーパー等における良いコメント・質問は授業内で紹介・フィードバックして、さらなる議論に活かす。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	学習の仕方、要約の書き方、各種参考資料について	要約レポートの書き方などをレクチャーする
第 2 回	第 1 章「多義語をめぐる諸問題」	受講生による発表・討論
第 3 回	第 2 章「多義語の多様性：多義的別儀の自立生と関連性」	受講生による発表・討論
第 4 回	第 3 章「プロトタイプの意味の認定」	受講生による発表・討論
第 5 回	第 4 章「比喻から多義語へ」	受講生による発表・討論
第 6 回	第 5 章「放射状ネットワークモデルに基づく多義語の分析」	受講生による発表・討論
第 7 回	第 6 章「スキーマ・ティック・ネットワークモデルに基づく多義語の分析」	受講生による発表・討論
第 8 回	第 7 章「フレームに基づく多義語の分析」	受講生による発表・討論
第 9 回	第 8 章「統合モデルに基づく多義語の分析」	受講生による発表・討論
第 10 回	論文リポート 1（メタファーに関するもの）	受講生による発表・討論
第 11 回	論文リポート 2（メトニミーに関するもの）	受講生による発表・討論

- 第 12 回 論文レポート 3 (構文 受講生による発表・討論
的多義に関するもの)
- 第 13 回 論文レポート 4 (主体 受講生による発表・討論
化に関するもの)
- 第 14 回 まとめ 本授業の総括

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

【宿題】

- (1) テキストの該当箇所もしくは課題論文の要約レポート (A4 用紙一枚)。毎週、授業開始時までに提出する。(2 時間程度)
- (2) 課題論文に出てきた分からない概念・専門用語について、授業で質問されても答えられるように、調べておく。(1 時間程度)
- (3) 当日の授業で質問できるように、課題論文への反論・疑義・その他不備と思われる点をまとめておく。(1 時間程度)

【テキスト (教科書)】

『例解』日本語の多義語研究 認知言語学の視点から』(杉山洋介著、大修館書店、2021 年、3400 円 + 消費税)

【参考書】

『認知言語学大事典』(朝倉書店)
『意味論キーワード事典』(開拓社)
『新編 認知言語学キーワード事典』(研究社)
『ことばの認知科学事典』(大修館書店)
『日本語学キーワード事典』(朝倉書店)
『言語学大辞典』(三省堂)
『日本語文法大辞典』(明治書院)
『日本語学研究事典』(明治書院)
『語用論キーワード事典』(開拓社)
『日本語研究のための認知言語学』(杉山洋介著、研究社)
『認知意味論のしくみ』(杉山洋介著、研究社)
『認知意味論の新展開—メタファーとメトニミー』(谷口一美著、研究社)
『認知言語学 基礎から最前線へ』(森雄一・高橋英光編著、くろしお出版)

【成績評価の方法と基準】

- 宿題 (1)「要約レポート」(40 %)
宿題 (2)(3) 質疑応答・ディスカッションへの参加態度 (40 %)
学期末レポート (20 %)

【学生の意見等からの気づき】

論文を書くための基礎になる知識を中心に教えて欲しいとの要望があったので、知識と論文レビューの両方を行うこととした。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現代日本語における意味論、文法論、語用論、認知言語学
<研究テーマ>

認知言語学からみた意味拡張、文法化、構文ネットワーク
<主要研究業績>

「アマルガム構文としての『「全然」+肯定』に関する語用論的分析」
(『言葉と認知のメカニズム』 pp.103-115. ひつじ書房、2008 年)
「接続詞ケドの手続きの意味」(『語用論研究』第 7 号, pp.17-30. 2005 年)
『構文ネットワークと文法 —認知文法論のアプローチ』(共著、研究社、2011 年)

【Outline (in English)】

Course Outline:

To understand the basic concepts of cognitive linguistics, we read the textbook for cognitive linguistics(semantics) and academic papers on (cognitive) semantics. Students are supposed to submit a summary of the chapter(or a paper) that we are to read on the day.

Learning Objectives:

The objectives of this course are (1)to learn the basic (Cognitive) linguistic terms, (2)to acquire the ability to explain them with a lot of examples to other people.

Learning Activities Outside of the Classroom:

Before/after each class meeting, students will be expected to spend 2 hours to understand the course content.

Grading Criteria/Policy:

Your overall grade in the class will be decided based on the following:
assignments (40%), discussions (40%), term-end paper (20%).

LIN500B2

日本語学演習 I B

尾谷 昌則

実務教員：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

この授業では、(認知) 言語学的な研究手法を学ぶことができる雑誌記事・学術論文を読む。論文ごとに担当者を決め、担当者には、論文の要旨を分かりやすくレジュメにまとめたものを授業で配付し、口頭でレポートしてもらう。その後、質疑応答・ディスカッションを行い、論文の分析手法について批判的に検討する。

【到達目標】

- (1) 論文における主張と根拠を的確に理解し、分かりやすく要約してレポートができるようになる。
- (2) 言語学の諸概念が言語分析においてどのように応用されているのかを理解し、具体例を挙げながら、それらについて説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

演習形式で行う。発表者はレジュメを作って、論文の内容を分かりやすく他の受講者に伝える。知らない概念などは事前にすべて調べておき、それらについても補足的に説明できるよう準備しておく。受講者は、事前に論文の不明点や欠点について容赦なく質問し、発表者とひたすらディベートを行う。最後に皆でその論文の欠点と改善点について考える。

▼必要に応じて、ZOOM を用いたオンライン授業を行う。その場合は、学習支援システムの「お知らせ」で URL や事前課題などを連絡する。チャット機能を利用した双方向授業になるため、通信環境を整えておくこと。

▼課題やリアクションペーパー等における良いコメント・質問は授業内で紹介・フィードバックして、さらなる議論に活かす。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	論文レポートの方法について	論文の要約の仕方を学ぶ
第 2 回	論文レポート (1)	動詞の多義について
第 3 回	論文レポート (2)	形容詞の多義について
第 4 回	論文レポート (3)	接続詞の多義について
第 5 回	論文レポート (4)	言いさし文と文法化について
第 6 回	論文レポート (5)	モダリティ副詞と文法化について
第 7 回	論文レポート (6)	接続詞の文法化について
第 8 回	論文レポート (7)	談話標識について
第 9 回	論文レポート (8)	若者言葉と対話表現について
第 10 回	論文レポート (9)	待遇表現について
第 11 回	論文レポート (10)	活用の変化について
第 12 回	論文レポート (11)	新語の発生について
第 13 回	論文レポート (12)	コーパスについて
第 14 回	まとめ	総括をする

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

【宿題】

- (1) 課題論文の要約レポート (A4 用紙一枚)。毎週、授業開始時に提出する。(1 時間程度)
- (2) 課題論文に出てきた分からない概念・専門用語について、授業で質問されても答えられるように、調べておく。(1 時間程度)
- (3) 当日の授業で質問できるように、課題論文への反論・疑義・その他不備と思われる点をまとめ、授業内でそれを発言する (2 時間程度)。

【テキスト (教科書)】

使用しない。(必要に応じて、教員が資料を配付する。)

【参考書】

『認知言語学大事典』(朝倉書店)
『意味論キーワード事典』(開拓社)
『新編 認知言語学キーワード事典』(研究社)

『ことばの認知科学事典』（大修館書店）
 『日本語学キーワード事典』（朝倉書店）
 『言語学大辞典』（三省堂）
 『日本語文法大辞典』（明治書院）
 『日本語学研究事典』（明治書院）
 『語用論キータム事典』（開拓者）
 『日本語研究のための認知言語学』（初山洋介著、研究社）
 『認知意味論：言語から見た人間の心』（ジョージレイコフ著、紀伊国屋書店）
 『認知意味論のしくみ』（初山洋介著、研究社）
 『認知意味論の新展開—メタファーとメトニミー』（谷口一美著、研究社）
 『概念化と意味の世界—認知意味論のアプローチ』（深田智・仲本康一郎著、研究社）
 『認知言語学—基礎から最前線へ』（森雄一・高橋英光編著、くろしお出版）

【成績評価の方法と基準】

宿題 (1)(2)(3) 40 %
 授業中の議論 40 %
 学期末レポート 20 %

【学生の意見等からの気づき】

論文の書き方が具体的に理解できた、というコメントが多かったため、今年度の実際に多くの論文を取り上げる予定である。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
 現代日本語における意味論、文法論、語用論、認知言語学
 <研究テーマ>
 認知言語学からみた意味拡張、文法化、構文ネットワーク
 <主要研究業績>
 「アマルガム構文としての『「全然」+肯定』に関する語用論的分析」（『言葉と認知のメカニズム』pp.103-115. ひつじ書房、2008 年）
 「構文文法の歴史的背景と今後の展望」（『人間情報学研究』第 11 巻、pp.25-43. 2006 年）
 「接続詞ケドの手続き的意味」（『語用論研究』第 7 号、pp.17-30. 2005 年）
 「構文ネットワークと文法—認知文法論のアプローチ」（共著、研究社、2011 年）

【Outline (in English)】

Course Outline: We will read the academic papers on (cognitive) linguistics, semantics and pragmatics.

Learning Objectives: The objectives of this class are as follows.
 (1) To understand the outline of the paper and make a summary of it. (2) To understand how to use the linguistic concepts or theory for the linguistic analysis.

Learning Activities Outside of the Classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend 2 hours to understand the course content.

Grading Criteria/Policy:

Your overall grade in the class will be decided based on the following:
 assignments (40%), discussions (40%), term-end paper (20%).

LNG500B2

日本語学演習Ⅱ A

王 安

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日中対照研究に関する重要なトピックを中心に、重要文献・論文を精読し、日中両言語の類似性及び相違点への理解を深める。

【到達目標】

- 1、日中両言語の相違点・共通点を客観的に捉え、対照研究の研究方法を理論的かつ体系的に学ぶ。
- 2、批判的に論文を読む力を身に付け、言語現象や問題点を発見する問題意識、分析する能力を養う。
- 3、対照研究の研究方法を用いて自分の興味ある言語現象を説明できるように研究力を向上させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的に演習形式で行う。初回の授業で発表担当を決め、レジュメの作り方や授業のやり方について説明を行う。それ以後一週間または二週間に論文 1 本のペースで講読していく。具体的には、参加者全員が各自論文を読み、分からない用語や概念があれば事前に調べておく。発表担当者は論文の要点を要約しレジュメ (A4 サイズ 3～4 枚／一人で担当する場合は 6 枚) を用意する。発表担当者以外の学生は授業でコメント・質問ができるように準備をしておく (例えば質問リストを作成するなど)。

また、春学期の授業は日本入国できない受講生がいる場合には Zoom によるオンライン形式で行う。授業計画について変更がある場合、学習支援システムでまたは前回の授業で知らせる。

授業のフィードバックは随時授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	論文の紹介、授業の進め方、発表分担を決める
第 2 回	論文解説（その 1）	「対照言語学とは」（石綿、高田 1990）
第 3 回	論文解説（その 2）	（石綿、高田 1990）に関して議論を行う
第 4 回	論文解説（その 3）	「表現と発想」（石綿、高田 1990）
第 5 回	論文解説（その 4）	石綿、高田（1990）に関して議論を行う
第 6 回	論文解説（その 5）	「日本語の“はずだ”と中国語の“應該”について」王（2016）
第 7 回	論文解説（その 6）	王（2016）に関して議論を行う
第 8 回	論文解説（その 7）	中島（2012）「日中対照研究ヴォイス—受け身を中心として—」
第 9 回	論文解説（その 8）	中島（2012）に関して議論を行う
第 10 回	論文解説（その 9）	全体議論
第 11 回	論文解説（その 10）	沈（1995）「有界と無界」
第 12 回	論文解説（その 11）	沈（1995）に関して議論を行う
第 13 回	論文解説（その 12）	メタファー
第 14 回	まとめ	今学期に読んだ論文について意見交換し、各自の最も興味を持ったテーマ（最終レポートにするテーマ）について議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 1、参加者全員：論文中の知らなかった用語、概念について、事前に調べておく。

2、発表担当者：論文の要点を要約し、発表用レジュメを作成する
(論文要約レポート：二人で発表する場合一人当たり A4 サイズ 3～4 枚、一人で発表する場合は 6 枚以内)

3、発表担当者以外の学生は授業でコメント・質問ができるように準備をしておく(例えば質問リストを作成するなど)

本授業の準備学習・復習時間は、各 10～12 時間を標準とします。

【テキスト(教科書)】

特になし。授業で資料を配布する。

【参考書】

＜中国語学＞

○『現代中国語総説』松岡栄志・古川裕 監訳 2004 三省堂
○『現代漢語』北京大学中文系現代漢語教研室編 2003 商務印書館

『現代中国語文法総覧』劉月華他 1996 くおしお出版

『現代漢語專題教程』北京大学中文系現代漢語教研室編 2003 北京大学出版社

『語法講義』朱德熙 1982 商務印書館

『語法問答』朱德熙 1986

『現代漢語語法研究教程』陸俊明 2005 北京大学

『現代中国語用法辞典』呂叔湘 1983 現代出版

『現代漢語八百詞』呂叔湘 2008 商務印書館(虚詞が中心)

『漢語基本知識(語法篇)』施春宏 2011 北京語言大学出版社

『中国語学概論』王占華他 2004 駿河台出版社

＜対照言語学関係参考文献＞

井上優(2002)『対照研究と日本語教育』日本語と外国語との対照研究 X, 国立国語研究所

石綿敏雄 高田誠(1990)『対照言語学』桜楓社

生越直樹(2002)『シリーズ言語科学 4 対照言語学』東京大学出版会
大河内康内編(1997)『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお出版

寺村秀夫(1982)「言語の対照的分析と記述の方法」『講座日本語学 10 外国語との対照』明治書院

中川正之(1997)「類型論からみた中国語・日本語・英語」『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお出版

張 黎(2012)『漢語意合語法研究』白帝社

張麟声(2007)「言語研究のための対照研究について—日本国内の事例を中心に—」『言語文化学研究—言語情報編 2』1-14. 大阪府立大学.

＜中国語教育参考書＞

『中国語文法教室』杉村博文 1994 大修館書店

『中国語の文法書』相原茂 他 1996 同人社

『国際漢語語法と語法教学』楊玉玲他 高等教育出版社

【成績評価の方法と基準】

論文要約レポート(20%) + 論文内容発表(20%) + 質問・発言(20%) + 期末レポート(40%)で総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

春学期・秋学期合わせての履修を推奨。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

対照言語学、現代中国語文法、認知言語学

＜研究テーマ＞

形容詞の意味と機能、感情の概念化と言語の多様性、感情表現の構文パターンにおける類型論的研究

＜主要研究業績＞

「中国語の＜主観性＞の再考察—使役表出文を例として—」『認知言語学研究の広がり』大橋浩・川瀬義清・古賀恵介・長加奈子・村尾治彦編. pp.35-50. 2018. 開拓社

「感情の普遍性とその言語化—感情表現の類型論的研究に向けて—」『ことばのパースペクティヴ』(中村芳久教授退職記念論文集刊行会編. pp.71-84. 2018. 開拓社

第 8 章「主体化」『認知言語学 基礎から最前線へ』森雄一・高橋英光編 2013. くろしお出版

「感情表現における日中対照研究—感情の語り方と人称制限の普遍性に着目して—」『言語研究の諸相』pp.35-45. 2010. 北海道大学出版

【Outline (in English)】

The aim of this class is to help students understand the main topics in Japanese Chinese Contrastive Linguistics and to deepen the students' understanding of research methodologies in the field.

(Learning Objectives)

1.To capture the differences and similarities between Chinese and Japanese languages, and study the research methods of comparative study theoretically and systematically.

2. Cultivate the ability to read papers critically, and develop the problem awareness and analytical ability to discover language phenomena and problem points.

3. Improve research ability, and be able to explain language phenomena.

(Learning activities outside of classroom)

Before/after each class, students will be expected to spend 10 hours reviewing the course content.

(Grading Criteria /Policy)

Overall grade in the class will be decided based on the following parts:

– presentation: 40%

– discussion:20%

– final report:40%

LIN500B2

日本語学演習ⅡB

王 安

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

引き続き日中対照研究に関する重要なトピックを中心に、重要文献・論文を精読し、日中両言語の類似性及び相違点への理解を深める。また、学期後半の授業では各自の研究について発表をしてもらい、議論を行う。

【到達目標】

- 1、日中両言語の相違点・共通点を客観的に捉え、対照研究の研究方法を理論的かつ体系的に学ぶ。
- 2、批判的に論文を読む力を身に付け、言語現象、問題点を発見する問題意識、分析する能力を養う。
- 3、対照研究の研究方法を用いて自分の興味持つ言語現象を説明できるように研究力を向上させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的に演習形式で行う。初回の授業で発表担当を決め、レジュメの作り方や授業のやり方について説明を行う。それ以後一週間または二週間に論文1本のペースで講読していく。具体的には、参加者全員が各自論文を読み、分からない用語や概念があれば事前に調べておく。発表担当者は論文の要点を要約しレジュメ（A4サイズ3～4枚／一人で担当する場合は6枚）を用意する。発表担当者以外の学生は授業でコメント・質問ができるように準備しておく（例えば質問リストを作成するなど）。授業は対面形式で行う予定ですが、変更があった場合学習支援システムにてお知らせします。また、授業のフィードバックは随時授業内で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	論文の紹介、授業の進め方、発表分担を決める
第2回	論文解説（その1）	論文講読：日中対照表現論（藤田2007）
第3回	論文解説（その2）	メタファー関係
第4回	論文解説（その3）	メタファー関係
第5回	論文解説（その4）	研究発表1
第6回	論文解説（その5）	研究発表2
第7回	論文解説（その6）	研究発表3
第8回	論文解説（その7）	研究発表4
第9回	論文解説（その8）	研究発表5
第10回	論文解説（その9）	研究発表6
第11回	論文解説（その10）	研究発表7
第12回	研究発表（その1）	研究発表8
第13回	研究発表（その2）	研究発表9
第14回	まとめ	今学期に読んだ論文について意見交換し、各自の最も興味を持ったテーマ（最終レポートにするテーマ）について議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 1、参加者全員：論文中の知らなかった用語、概念について、事前に調べておく。
- 2、発表担当者：論文の要点を要約し、発表用レジュメを作成する（論文要約レポート：二人で発表する場合一人当たりA4サイズ3～4枚、一人で発表する場合は6枚以内）

3、発表担当者以外の学生は授業でコメント・質問ができるように準備をしておく（例えば質問リストを作成するなど）
本授業の準備学習・復習時間は、各10～12時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特になし。授業で資料を配布する。

【参考書】

- ＜中国語学＞
○『現代中国語総説』松岡栄志・古川裕 監訳 2004 三省堂
○『現代漢語』北京大学中文系現代漢語教研室編 2003 商務印書館
『現代中国語文法総覧』劉月華他 1996 くおしお出版
『現代漢語專題教程』北京大学中文系現代漢語教研室編 2003 北京大学出版社
『語法講義』朱德熙 1982 商務印書館
『語法問答』朱德熙 1986
『現代漢語語法研究教程』陸俊明 2005 北京大学
『現代中国語用法辞典』呂叔湘 1983 現代出版
『現代漢語八百詞』呂叔湘 2008 商務印書館（虚詞が中心）
『漢語基本知識（語法篇）』施春宏 2011 北京語言大学出版社
『中国語学概論』王占華他 2004 駿河台出版社
＜対照言語学関係参考文献＞

- 井上優（2002）『対照研究と日本語教育』日本語と外国語との対照研究 X, 国立国語研究所
石綿敏雄 高田誠（1990）『対照言語学』桜楓社
生越直樹（2002）『シリーズ言語科学4 対照言語学』東京大学出版会
大河内康内編（1997）『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお出版
寺村秀夫（1982）「言語の対照的分析と記述の方法」『講座日本語学10 外国語との対照』明治書院
中川正之（1997）「類型論からみた中国語・日本語・英語」『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお出版
張 黎（2012）『漢語意合語法研究』白帝社
張麟声（2007）「言語研究のための対照研究について—日本国内の事例を中心に—」『言語文化学研究—言語情報編2』1-14. 大阪府立大学。

＜中国語教育参考書＞

- 『中国語文法教室』杉村博文 1994 大修館書店
『中国語の文法書』相原茂 他 1996 同学社
『国際漢語語法与語法教学』楊玉玲他 高等教育出版社

【成績評価の方法と基準】

論文要約レポート（20%）＋論文内容発表（20%）＋質問・発言（20%）＋期末レポート（40%）で総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【その他の重要事項】

春学期・秋学期合わせての履修を推奨。

【担当教員の専門分野等】

- ＜専門領域＞
対照言語学、現代中国語文法、認知言語学
＜研究テーマ＞
形容詞の意味と機能、感情の概念化と言語の多様性、感情表現の構文パターンにおける類型論的研究
＜主要研究業績＞
「中国語の＜主観性＞の再考察—使役表出文を例として—」『認知言語学研究の広がり』大橋浩・川瀬義清・古賀恵介・長加奈子・村尾治彦編。pp.35-50. 2018. 開拓社
「感情の普遍性とその言語化—感情表現の類型論的研究に向けて—」『ことばのバースペクティヴ』（中村芳久教授退職記念論文集刊行会編。pp.71-84. 2018. 開拓社
第8章「主体化」『認知言語学 基礎から最前線へ』森雄一・高橋英光編 2013. くろしお出版
「感情表現における日中対照研究—感情の語り方と人称制限の普遍性に着目して—」『言語研究の諸相』pp.35-45. 2010. 北海道大学出版

【Outline (in English)】

The aim of this class is to help students understand the main topics in Japanese Chinese Contrastive Linguistics and to deepen the students' understanding of research methodologies in the field.

(Learning Objectives)

1.To capture the differences and similarities between Chinese and Japanese languages, and study the research methods of comparative study theoretically and systematically.

2. Cultivate the ability to read papers critically, and develop the problem awareness and analytical ability to discover language phenomena and problem points.

3. Improve research ability, and be able to explain language phenomena.

(Learning activities outside of classroom)

Before/after each class, students will be expected to spend 10 hours reviewing the course content.

(Grading Criteria /Policy)

Overall grade in the class will be decided based on the following parts:

- － presentation: 40%
- － discussion:20%
- － final report:40%

LIN500B2

日本語学特講 A

古牧 久典

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

認知言語学（主に認知意味論）の基本的な考え方を理解し、現代日本語の分析技法を学ぶ。テキストの認知意味論の概説書を通じて、毎回、実例分析・考察を行う。認知意味論を踏まえた現代日本語についての論文の読解や執筆につながる能力を身につける。

【到達目標】

- ・日本語学の見地から、現代日本語を観察することができる。
- ・認知意味論の基本的な考え方を理解することができる。
- ・認知意味論の基盤に沿って、現代日本語を説明することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業は、演習形式を基本とする。テキストを毎回 1 章のペースで読み進める。全受講者はテキスト指定部を熟読しておく。事前にテキストから担当箇所が指定されるので、担当学生はテキスト内容を発表する。内容に基づき、要点整理、疑問点、理解確認、発展可能性に関するディスカッションを実施する。内容によっては講義形式での解説から学習する。（受講者に応じ、追加で教材資料や論文を配布し、講読する場合もある。）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス／認知意味論の基本的な考え方（テキスト 第 1 章）	授業概要・形式と進め方・導入／日本語「大きい」についての分析・考察・討論
第 2 回	プロトタイプカテゴリー（テキスト 第 2 章）	日本語「悔し涙」「うれし泣き」についての分析・考察・討論
第 3 回	同じ物事に対する異なる捉え方（テキスト 第 3 章）	日本語「まだ三十二だよ」についての分析・考察・討論
第 4 回	焦点化の違いに基づく表現（テキスト 第 4 章）	日本語「後退」についての分析・考察・討論
第 5 回	視点の違いに基づく表現（テキスト 第 5 章）	日本語「来る」「行く」についての分析・考察・討論
第 6 回	主体化（テキスト 第 6 章）	日本語「小さくなる」についての分析・考察・討論
第 7 回	時間の捉え方（テキスト 第 7 章）	日本語「冬がやってくる」についての分析・考察・討論
第 8 回	百科事典的意味（テキスト 第 8 章）	日本語「石」についての分析・考察・討論
第 9 回	指示対象に対する他者の関与（テキスト 第 9 章）	日本語「雪だるま式」についての分析・考察・討論
第 10 回	フレームに基づく類義語の意味の違い（テキスト 第 10 章）	日本語「空地」「さら地」についての分析・考察・討論
第 11 回	典型例（テキスト 第 11 章）	日本語「おもちゃみたい」についての分析・考察・討論
第 12 回	顕著例・理想例（テキスト 第 12 章）	日本語「質問の雨」についての分析・考察・討論
第 13 回	ステレオタイプ（1）（テキスト 第 13 章）	日本語「サラリーマン教師」についての分析・考察・討論
第 14 回	ステレオタイプ（2）（テキスト 第 14 章）／授業全体総括	日本語「ロケットスタート」についての分析・考察・討論／授業全体の総まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・日本語学や言語学の最低限の基礎知識を事前に準備学習として各自習得しておくこと。（授業と並行して学習を進めることも可。）
- ・受講学生はテキスト指定部（毎回テキスト 1 章分）を事前に読み、疑問点などを挙げて整理しておく。
- ・発表担当回の学生はテキストについての発表資料を準備し、項目内容の大意と詳細、両者を授業内で説明できるようにしておく。
- ・準備学習・復習・宿題等の時間は、授業の前と後で、それぞれ 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

初山洋介 (2020) 『実例で学ぶ認知意味論』 研究社、2,000 円（＋税）

【参考書】

池上嘉彦 (2006) 『英語の感覚・日本語の感覚』, NHK ブックス.

大堀壽夫 (2002) 『認知言語学』, 東京大学出版会.

児玉一宏・谷口一美・深田智 編著 (2020) 『はじめて学ぶ認知言語学』, ミネルヴァ書房.

高橋英光・野村益寛・森雄一 編 (2018) 『認知言語学とは何かーあの先生に聞いてみよう』, くろしお出版.
谷口一美 (2006) 『学びのエクササイズ 認知言語学』, ひつじ書房.
辻幸夫 編 (2013) 『新編 認知言語学キーワード事典』, 研究社.
辻幸夫 編集主幹 (2019) 『認知言語学大事典』, 朝倉書店.
西村義樹・野矢茂樹 (2013) 『言語学の教室ー哲学者と学ぶ認知言語学』, 中公新書.
野村益寛 (2014) 『ファンダメンタル認知言語学』, ひつじ書房.
初山洋介 (2010) 『認知言語学入門』, 研究社.
森雄一 (2012) 『学びのエクササイズ レトリック』, ひつじ書房.
山梨正明 (2000) 『認知言語学原理』, くろしお出版.
吉村公宏 (2004) 『はじめての認知言語学』, 研究社.
(上記以外は授業時に提示。)

【成績評価の方法と基準】

テキスト内容紹介とディスカッションへの参加度 (紹介方法を含む) (50 %)
小レポート (レジュメ・リアクションペーパー等) (25 %)
期末レポート (25 %)

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【その他の重要事項】

日本語学・英語学・中国語学などの言語学関連の学部教養科目程度の知識を必須とする。
秋学期開講の同科目 B も合わせての履修することを推奨する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 認知言語学、意味論、語用論、コーパス言語学
<研究テーマ> 認知意味論と(認知)語用論の接点
<主要研究業績>
「<重複>表現とメトニミ」(坂原茂編『日仏名詞限定表現の対照研究』平成18~20年度科学研究費補助金・基盤研究(C)研究成果報告書2009年)
「トートロジー構文から迫る認知語用論」(山梨正明他編『認知言語学論考No.10』ひつじ書房2012年)
『語用論キータム事典』(共訳 開拓社2014年)
『語彙語用論と認知意味論』(辻幸夫 編集主幹『認知言語学大事典』朝倉書店2019年)

【Outline (in English)】

(Course outline)

This course gives an overview of basic theories with special reference to modern Japanese language, within Cognitive Semantics, as part of the field of Cognitive Linguistics, such as prototypes, construal, viewpoints, focusing, subjectification, and encyclopedic view on meaning. The aim of this class is to help students learn cognitive-semantic analysis to linguistic meaning in Japanese.

(Learning Objectives)

The goals of this course are to understand modern Japanese language from the linguistic perspectives; to understand basic cognitive-semantic concepts; and to apply them to Japanese language.

(Learning activities outside of classroom)

Students will be expected to spend four hours each class on out-of-class preparation by reading the relevant chapter from the textbook and giving brief and/or detailed presentations on it, to understand the course content.

(Grading Criteria /Policy)

Your overall grade in the class will be decided based on the following:

- In-class contribution: 50%
- Short reports: 25%
- Term-end report: 25%

LIN500B2

日本語学特講 B

古牧 久典

実務教員：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

認知言語学 (主に認知意味論) の基本的な考え方を理解し、現代日本語の分析技法を学ぶ。テキストの認知意味論の概説書を通じて、毎回、実例分析・考察を行う。認知意味論を踏まえた現代日本語についての論文の読解や執筆につながる能力を身につける。

【到達目標】

- ・日本語学の見地から、現代日本語を観察することができる。
- ・認知意味論の基本的な考え方を理解することができる。
- ・認知意味論の基盤に沿って、現代日本語を説明することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

本授業は、演習形式を基本とする。テキストを毎回 1 章のペースで読み進める。全受講者はテキスト指定部を熟読しておく。事前にテキストから担当箇所が指定されるので、担当学生はテキスト内容を発表する。内容に基づき、要点整理、疑問点、理解確認、発展可能性に関するディスカッションを実施する。さらに、追加で論文を講読する。(扱われている内容や受講者の研究テーマに応じ、追加配布資料による講義形式での解説で学習する場合もある。)

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス／メタファー (テキスト 第 15 章)	授業概要・形式と進め方・導入／日本語「マシーン」についての分析・考察・討論
第 2 回	メトニミー (テキスト 第 16 章)	日本語「食卓」についての分析・考察・討論
第 3 回	シネクドキー (テキスト 第 17 章)	日本語「結果」についての分析・考察・討論
第 4 回	比喩に基づく婉曲表現の仕組み (テキスト 第 18 章)	日本語「不幸」についての分析・考察・討論
第 5 回	多義語 (テキスト 第 19 章)	日本語「違い」についての分析・考察・討論
第 6 回	典型的な多義語 (テキスト 第 20 章)	日本語「かたい」についての分析・考察・討論
第 7 回	単義語寄りの多義語 (テキスト 第 21 章)	日本語「学校」についての分析・考察・討論
第 8 回	同音異義語寄りの多義語 (テキスト 第 22 章)	日本語「たずねる」についての分析・考察・討論
第 9 回	多義語のプロトタイプの意味 (1) (テキスト 第 23 章)	日本語「にらむ」についての分析・考察・討論
第 10 回	多義語のプロトタイプの意味 (2) (テキスト 第 24 章)	日本語「ところ」についての分析・考察・討論
第 11 回	メトニミーおよびフレームに基づく多義語 (テキスト 第 25 章)	日本語「聞く」についての分析・考察・討論
第 12 回	多義構造 (テキスト 第 26 章)	日本語「タマゴ」についての分析・考察・討論
第 13 回	もじりの認知意味論 (1) (テキスト 第 27 章)	日本語「昨日の敵は敵のまま」についての分析・考察・討論
第 14 回	もじりの認知意味論 (2) (テキスト 第 28 章)／授業全体総括	日本語「一姫 二トラ 三ダンブ」についての分析・考察・討論／授業全体の総まとめ

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

- ・日本語学や言語学の最低限の基礎知識を事前に準備学習として各自習得しておくこと。(授業と並行して学習を進めることも可。)
- ・受講学生はテキスト指定部 (毎回テキスト 1 章分) を事前に読み、疑問点などを挙げて整理しておく。
- ・発表担当回の学生はテキストや追加論文についての発表資料を準備し、項目内容の大枠と詳細、両者を授業内で説明できるようにしておく。
- ・準備学習・復習・宿題等の時間は、授業の前と後で、それぞれ 2 時間を標準とする。

【テキスト (教科書)】

初山洋介 (2020) 『実例で学ぶ認知意味論』 研究社、2,000 円 (+ 税)

【参考書】

池上嘉彦 (2006) 『英語の感覚・日本語の感覚』, NHKブックス.

大堀壽夫 (2002) 『認知言語学』, 東京大学出版会.
児玉一宏・谷口一美・深田智 編著 (2020) 『はじめて学ぶ認知言語学』, ミネルヴァ書房.
高橋英光・野村益寛・森雄一 編 (2018) 『認知言語学とは何かーあの先生に聞いてみよう』, くろしお出版.
谷口一美 (2006) 『学びのエクササイズ 認知言語学』, ひつじ書房.
辻幸夫 編 (2013) 『新編 認知言語学キーワード事典』, 研究社.
辻幸夫 編集主幹 (2019) 『認知言語学大事典』, 朝倉書店.
西村義樹・野矢茂樹 (2013) 『言語学の教室ー哲学者と学ぶ認知言語学』, 中公新書.
野村益寛 (2014) 『ファンダメンタル認知言語学』, ひつじ書房.
初山洋介 (2010) 『認知言語学入門』, 研究社.
森雄一 (2012) 『学びのエクササイズ レトリック』, ひつじ書房.
山梨正明 (2000) 『認知言語学原理』, くろしお出版.
吉村公宏 (2004) 『はじめての認知言語学』, 研究社.
(上記以外は授業時に提示。)

【成績評価の方法と基準】

テキスト内容紹介とディスカッションへの参加度 (紹介方法を含む) (50 %)
小レポート (レジュメ・リアクションペーパー等) (25 %)
期末レポート (25 %)

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【その他の重要事項】

日本語学・英語学・中国語学などの言語学関連の学部教養科目程度の知識を必須とする。
春学期開講の同科目Aも合わせての履修することを推奨する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 認知言語学、意味論、語用論、コーパス言語学
<研究テーマ> 認知意味論と(認知)語用論の接点
<主要研究業績>
「<重複>表現とメトニミ」(坂原茂編 『日仏名詞限定表現の対照研究』平成18~20年度科学研究費補助金・基盤研究(C)研究成果報告書 2009年)
「トートロジー構文から迫る認知語用論」(山梨正明他編 『認知言語学論考 No.10』ひつじ書房 2012年)
『語用論キータム事典』(共訳 開拓社 2014年)
『語彙語用論と認知意味論』(辻幸夫 編集主幹 『認知言語学大事典』朝倉書店 2019年)

【Outline (in English)】

(Course outline)

This course gives an overview of basic theories with special reference to modern Japanese language, within Cognitive Semantics, as part of the field of Cognitive Linguistics, such as metaphor, metonymy, synecdoche, and polysemy. The aim of this class is to help students learn cognitive-semantic analysis to linguistic meaning in Japanese.

(Learning Objectives)

The goals of this course are to understand modern Japanese language from the linguistic perspectives; to understand basic cognitive-semantic concepts; and to apply them to Japanese language.

(Learning activities outside of classroom)

Students will be expected to spend four hours each class on out-of-class preparation by reading the relevant chapter from the textbook and giving brief and/or detailed presentations on it, to understand the course content.

(Grading Criteria /Policy)

Your overall grade in the class will be decided based on the following:

- In-class contribution: 50%
- Short reports: 25%
- Term-end report: 25%

LIT500B2

沖縄文芸史 A

福 寛美

実務教員：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

- ・琉球王国初の文字資料『おもろさうし』に親しむ。
- ・琉球の口頭伝承を記した『遺老説伝 (いろうせつでん)』の説話を読む。
- ・また簡単な発表を通し、神歌や口頭伝承への理解を深める。
- ・琉球文学の古典に親しむ。

【到達目標】

- ・『おもろさうし』はおもろと称する神歌を集成した冊子である。おもろは日本本土のどのような歌謡とも似ていない。その世界観、そして神霊観を知ることとする。
- ・また琉球の口頭伝承を記した『遺老説伝 (いろうせつでん)』の説話を読み、その説話に影響を与えたと考えられる事象の考察も目的とする。
- ・琉球文学の古典に親しむことを目的とする。
- ・琉球文学を深く理解することを到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

- ・講義形式と演習形式をまぜて行う。
- ・講義をした後、講義の内容にかかわる事象を学生が調べ発表する、という形をとる。
- ・調べものは琉球・沖縄に関する基本的な文献 (辞典など) を使う程度とする。
- ・対面形式の授業とする。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	『おもろさうし』のおもろとおもろの鷺の用例を読む 1	おもろの読み方を知り、おもろ世界の鷺の用例を読む。
第 2 回	『おもろさうし』のおもろとおもろの鷺の用例を読む 2	おもろ世界の鷺の用例を読んでいく。
第 3 回	第 1 回、第 2 回の講義をふまえ、学生が調べたことを発表する	琉球・沖縄の文学や民俗に関する辞典の記述を読み、簡単に発表する。
第 4 回	おもろ世界の鷺の霊能、鷺のつく地名を考察する	おもろ世界の鷺は霊能ある存在とされている。そのことを考察していく。
第 5 回	鷺、そして鷺羽には戦勝の霊力があるとされた。そのことを考察する	おもろ世界の鷺、そして鷺羽の用例のうち、戦勝と関わる用例をみていく。
第 6 回	第 4 回、第 5 回の講義をふまえ、学生が調べたことを発表する	『おもろさうし』の研究書で鷺の用例を考察したのを読み、簡単に発表する。
第 7 回	おもろ世界の船と猛禽類のダブルイメージのおもろを読む	おもろ世界では船が猛禽類とダブルイメージされることがある。その用例を読んでいく。
第 8 回	琉球船は実際に猛禽類と重ね合わされていく。そのことを考察する	琉球船には猛禽類の目玉模様が付けられていた。その意味を考察していく。

- 第9回 第7回、第8回の講義をふまえ、学生が調べたことを発表する 琉球船の絵図は残っており、インターネットでも検索できる。その絵図、またおもろについて調べ、簡単に発表する。
- 第10回 『遺老説伝』を知る 琉球の口頭伝承を集成した『遺老説伝』について学び、鷺羽の説話を読む。
- 第11回 鷺のイメージを考察する おもろ世界の鷺のイメージ形成に関与した、と思われる神話を読む。また矢羽根として珍重された鷺の尾羽について学ぶ。
- 第12回 第10回、第11回の講義をふまえ、学生が調べたことを発表する 『遺老説伝』の現代語訳を読む、またインターネットで読める文献を読み、簡単に発表する。
- 第13回 鳥の墓の伝承、現代の八重山諸島で愛される「鷺之鳥節」について考察する 多良間（たらま）島の鳥の墓の伝承、現代も愛される「鷺之鳥節」とおもろ世界の鷺を比較する。
- 第14回 春学期の講義をふまえ、学生が調べたことを発表する 主に第13回の講義に関わる事象を簡単に調べ、発表し、春学期をまとめる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・『火山と竹の女神』（教科書）の「おもろ世界の鷺」の部分を読む。
- ・授業支援システムにおもろの読み方、「おもろ世界の鷺」に関わる事柄を記したプリントをアップするので、あわせて読む。
- ・大学の沖縄文化研究所にはおもろ、ほか琉球文学に必要な文献が揃っているため、発表する時はそこで辞書を引いたり、参考文献を読んだりする。
- ・学習時間は各自の任意とする。

【テキスト（教科書）】

- ・『火山と竹の女神』（福寛美、七月社、2021年）本体 2500円＋税

【参考書】

- ・『喜界島・鬼の海域』（福寛美、新典社、2008年）
- ・『『おもろさうし』と群雄の世紀』（福寛美、森話社、2013年）
- ・『ぐすく造営のおもろ』（福寛美、新典社、2015年）
- ・『奄美群島おもろの世界』（福寛美、南方新社、2018年）

【成績評価の方法と基準】

- ・期末試験は、問題を複数提示し、2問を選んでそれぞれ400字以上記述することとする。
- ・平常点に含まれる、出席回数、発表への積極性も評価基準とする。
- ・期末試験70%、平常点30%で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

担当者は琉球文学のほか、民俗学、神話学も専攻している。そのため、『おもろさうし』以外の学生の関心に応えることも可能である。

学生からの申し出があった場合、『おもろさうし』のほか、シャーマン、神話なども積極的に授業で対応していきたい。過去の授業では、学生からの申し出によってシャーマンについて述べた。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

春学期、秋学期ともに同じテキストを使用する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

琉球文学（『おもろさうし』）
民俗学（南西諸島のシャーマン）
神話学（日本神話、琉球神話）

【<研究テーマ>】

現在の研究テーマの中心は南西諸島の神霊観である。また『おもろさうし』の言語の中に奈良時代の東国方言と同じものがあることに注目し、研究を進めている。

【<主要研究業績>】

- 『ぐすく造営のおもろ』（新典社、2015年）
- 『うたの神話学』（森話社、2014年）
- 『ユタ神誕生』（南方新社、2013年）

『『おもろさうし』と群雄の世紀』（森話社、2013年）
『夜の海、永劫の海』（新典社、2011年）

【主要研究業績】

- 『琉球の恋歌』（新典社、2010年）
- 『喜界島・鬼の海域』（新典社、2008年）
- その他
『奄美三少年 ユタへの道』（円聖修著、南方新社、2017年）の監修

【Outline (in English)】

The Omoro Soshi is the first written compilation of sacred songs and poems collected by Ryukyu kingdom. The Ryukyuan folklores in the Irousetsuden and the Okinawan cultural background may have affected the development of its oral traditions. In this course, you will learn the Ryukyuan sacred songs and literature are related to the cultures of surrounding areas and developed their own unique styles. The members of this course will also be required to make a presentation to deepen their understandings. The goal is to have a deep understanding of Ryukyuan literature. For learning outside of class hours, read textbooks and references carefully. The method and criteria for grade evaluation are to attend at least 6 times and take a test. The test is 70% and the normal score is 30%.

LIT500B2

沖縄文芸史 B

福 寛美

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

・琉球文学・民俗を考察する際には南九州（薩摩）や薩南の島々についてよく知ることが必要である。・古代日本の神話において、南九州を重視する箇所がある。

・そのことを考察し、沖縄島を中心とする南西諸島への理解を深めるようつとめる。

・日本神話における隼人の重要性を理解することを到達目標とする。

【到達目標】

・日本神話の従来の研究とは別の視点で神話を考察することにより、見えてくるものは多い。そのことを学ぶ。

・日本神話を火山や噴火という視点で考察する研究はあまり見られなかった。しかし、火山列島の日本で古代の噴火は神の仕業とされていた。そのことに注目し、新たな知見を得る。

・神話のコノハナノサクヤビメと『竹取物語』のカグヤヒメを比較検討する。

・日本語のヨ（世・代・節）は南西諸島の祭祀においても重要な存在である。またヨは世界観や時間意識を表現する語でもあるので、そのことを学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

・講義を数回した後、学生が講義に関わる事象について簡単な発表をする、という形をとる。

・講義と演習の混合形式で授業を進める。

・対面授業とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	噴火・火山の女神	古代における火山の噴火と、火山の女神とされるコノハナノサクヤビメについて考察する。
第 2 回	コノハナノサクヤビメの行動	コノハナノサクヤビメが天上のアマテラス同様の行動をとったり、隼人の女神らしく振舞ったりすることを考察する。
第 3 回	ヨ（節）	ヨが竹の節を意味する事例を考察し、『竹取物語』のカグヤヒメがそこにいた意義を考察する。
第 4 回	学生の発表	第 1～3 回の講義の中で関心のある箇所を調べ、簡単に発表する。辞書を引く、参考文献の粗筋を紹介する、などの発表をする。
第 5 回	ヨと輝き・カグヤヒメのカグ	カグヤヒメは竹の節の間におり、ヨ（節）は輝いていた。カグヤヒメと香具山、火の神カグツチを比較検討する。
第 6 回	影（カゲ）	カグと関わるカゲ（影）は霊力や魂、そして光とも結びつく語である。そのことを考察する。
第 7 回	隼人と畿内	隼人は畿内に移住し、その痕跡は考古学的事象、地名などに残っている。そのことを考察する。
第 8 回	学生の発表	第 4～7 回の講義の中で、学生が興味を持った箇所について発表する。

第 9 回	コノハナノサクヤビメ・ナヨタケノカグヤヒメ	コノハナノサクヤビメとカグヤヒメが神話的に極めて興味深い対応をしていることを考察する。
第 10 回	富士山	コノハナノサクヤビメは富士山の女神とされている。その意義を考察する。
第 11 回	隼人と水の献上	隼人は朝廷で水を献上する役割を担っていた。そのことの意義を考察する。
第 12 回	日向出身の皇妃	日本古代、日向（現在の宮崎県）出身、つまり隼人の女性が皇妃になったことが語られる。そのことの意義を考察する。
第 13 回	隼人と狗吠え（いぬほえ）	隼人は魔を祓うため狗吠えという特殊な声を出す役割を担っていた。そのことを考察する。
第 14 回	学生の発表	第 9～13 回の講義で学生が興味を持った箇所を調べ、発表する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

・『火山と竹の女神』の「火山と竹の女神」をよく読むこと。

・教科書の理解を助けるため、学習支援システムにプリントをアップするので、プリントもあわせて読むこと。

・参考文献、インターネットで読める参考文献を指示するので、それを読むこと。

・学習時間については、各自の任意とする。

【テキスト（教科書）】

・『火山と竹の女神』（福寛美、七月社、2021 年）本体 2500 円＋税

【参考書】

・『夜の海、永劫の海』（福寛美、新典社、2011 年）

・『うたの神話学』（福寛美、森話社、2014 年）

・『新うたの神話学』（福寛美、新典社、2020 年）

【成績評価の方法と基準】

・学期末に期末試験を行う。問題を複数提示し、2 問選んでそれぞれ 400 字以上記述する、という形をとる。

・平常点も評価に加える。最低 6 回は出席すること。

・期末試験を 70%、平常点を 30%として評価する。

【学生の意見等からの気づき】

・筆者は琉球文学のほかに、南西諸島のシャーマン（ユタガミ・ユタ）の研究もしている。

・学生の関心が琉球文学や神話学よりもシャーマンの場合、シャーマンについても講じることは可能である。

・シラバスに沿った授業のほかに関心がある、という申し出が過去にあり、その対応をしたこともある。そのような場合、授業の時に申し出てほしい。

・また授業の内容があまり馴染みのないものであると、難解すぎる、という声が聞かれる。なるべくわかりやすく解説するようにつとめる。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

・春学期、秋学期は共に同じテキストを使用する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

・琉球文学（『おもろさうし』）

・神話学

・民俗学（シャーマン研究）

【<研究テーマ>】

・『おもろさうし』の文学研究

・日本神話・琉球神話研究

・奄美のシャーマン研究

【<主要研究業績>】

・『新うたの神話学』（新典社、2020 年）

・『奄美群島おもろの世界』（南方新社、2018 年）

・『歌とシャーマン』（南方新社、2015 年）

【<主要研究業績>】

・『ぐすく造営のおもろ』（新典社、2015 年）

・『『おもろさうし』と群雄の世紀』（森話社、2013 年）

・『ユタ神誕生』（南方新社、2013 年）

・『夜の海、永劫の海』（新典社、2011 年）

【＜主要研究業績＞】

・『うたの神話学』（森話社、2010 年）

・『琉球の恋歌』（新典社、2010 年）

・『喜界島・鬼の海域』（新典社、2008 年）

その他

『奄美三少年 ユタへの道』（円聖修著、南方新社、2017 年）の監修

【Outline (in English)】

The myth and folklore of Nansei Islands are closely related to Southern Kyushu. The Hayato were the people who sailed across the Southern Kyushu and Southern Satsuma islands. In this course, the myth of the Hayato and the people of the sea who sailed across the Nansei areas will be learned. The relationship between the Hayato from the Southern Kyushu and Japanese myths reveals the presence of Hayato people in Japanese myths. The culture of ancient Kyushu will be deeply learned. The members of this course will also be required to make a presentation to deepen their understandings. The goal is to understand the importance of Hayato in Japanese mythology. For learning outside of class hours, read textbooks and references carefully. The method and criteria for grade evaluation are to attend at least 6 times and take a test. The test is 70% and the normal score is 30%.

LIT500B2

中国文学 A

甲斐 雄一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

『文選』は、中国・梁代に編纂された、詩文をジャンル別に分類したアンソロジーである。中国では官吏任用試験である科挙受験の必読書となり、また日本においても広く流行した、中国古典文学の歴史的展開を考える上で重要な地位を占める書物である。

本授業では、『文選』巻 29「雑詩上」所収作品を読む。本文及び注釈（旧注）を対象に、テキストの校勘（日本伝存の旧鈔本・和刻本を含む）を行って訓読・日本語訳を作成し、本文批判を中心とした文献学の知識・技術、訓読を含めた中国古典の文言文テキストの読解力を養成することを身につけることを目標とする。さらに、作品読解のために必要な注釈を受講者自ら補うことで、先行する注釈・翻訳を土台に新たな解釈を提示する訓練とし、学術論文を執筆するための基礎力を身につけることを目指す。

【到達目標】

1. 『文選』についての基礎的な知識を習得する。
2. 本文批判を中心とした文献学の知識・技術、訓読を含めた中国古典の文言文テキストの読解力を養成することを身につける。
3. 古注（李善注・五臣注）を読み解きながら先行の訳注を批判的に検討し、『文選』所収作に新たな解釈・鑑賞を提示する力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

最初の数回のみ講義形式、残りは演習形式で行う。『文選』所収作品に対してそれぞれ担当者を定める。発表担当者は作品の校勘・訓読・日本語訳と注釈（旧注及び担当者注）を記載したレジュメを作成し、担当回に発表し、その内容を元にして全員で討論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス（1）	『文選』について—内容・編纂の背景・受容、及び担当者の決定
第 2 回	ガイダンス（2）	『文選』諸テキストについて
第 3 回	ガイダンス（3）	『文選』の注釈と日本語の訳注について
第 4 回	『文選』精読（1）	「古詩十九首」其一「行行重行行」
第 5 回	『文選』精読（2）	「古詩十九首」其二「青青河畔草」
第 6 回	『文選』精読（3）	「古詩十九首」其三「青青陵上柏」
第 7 回	『文選』精読（4）	「古詩十九首」其四「今日良宴会」
第 8 回	『文選』精読（5）	「古詩十九首」其五「西北有高楼」
第 9 回	『文選』精読（6）	「古詩十九首」其六「涉江采芙蓉」
第 10 回	『文選』精読（7）	「古詩十九首」其七「明月皎夜光」
第 11 回	『文選』精読（8）	「古詩十九首」其九「庭中有奇樹」
第 12 回	『文選』精読（9）	「古詩十九首」其十「迢迢牽牛星」
第 13 回	『文選』精読（10）	「古詩十九首」其十二「東城高且長」
第 14 回	『文選』精読（11）	「古詩十九首」其十九「明月何皎皎」

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表担当者はその準備、その他の受講者は発表者の担当部分について予習し、事前に内容を把握した上で、疑問点や検討を要する箇所について整理しておく。授業後には討論で得た情報と意見を自分なりにまとめる。なお、本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

テキスト（教科書）は使用しない。プリントを配布する。

【参考書】

- ・内田泉之助・網祐次・中島千秋『文選』（新釈漢文大系 14-15、79-83、93、明治書院、1963-2001 年）
- ・小尾郊一『文選』（全釈漢文大系 26-32、集英社、1974-76 年）
- ・川合康三等『文選 詩篇』（岩波文庫赤 45-1-6、2018-19 年）
- ・富永一登『文選李善注の研究』（研文出版、1999 年 2 月）
- ・岡村繁『文選の研究』（岩波書店、1999 年 4 月）
- ・清水凱夫『新文選学—『文選』の新研究』（研文出版、1999 年 10 月）

【成績評価の方法と基準】

担当者としての発表内容（70%）、討論への参加度・貢献度・積極性（30%）。

【学生の意見等からの気づき】

特になし（本年度新規担当のため）。

【その他の重要事項】

授業の進み具合によっては、事前に受講者に説明をした上で、授業内容を一部変更する可能性がある。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

中国古典文学

<研究テーマ>

宋代における、出版文化を背景とした文学作品の流通と受容について
<主要研究業績>

『南宋の文人と出版文化—王十朋と陸游をめぐる—』（著書、九州大学出版会、2016 年）

「陸游詩の自注について」（論文、『日本宋代文学学会報』6、2019 年）

【Outline (in English)】

Compiled in Liang era China, the Wen Xuan is an anthology containing poems that are classified by genre. In China, the Wen Xuan was a must-read for candidates for the imperial examinations, which were examinations for the selection of bureaucrats. The book was read widely in Japan as well and is an important text to explore the historical development of Chinese classical literature.

This course will involve reading poems included in the anthology section of Wen Xuan, vol. 29. The goals are for students to revise the main text and annotations of the book (including old abridged versions preserved in Japan and versions printed in Japan), read the Chinese text in Japanese (kundoku), and create a Japanese translation; to acquire knowledge and skills in philology, especially in textual criticism; and to develop reading comprehension in classical texts written in literary Chinese, including skills in reading Chinese texts in Japanese. A further aim is for students to develop the basic skills in writing academic articles by creating their own annotations to interpret the work and undergo training so that they can present new interpretations by building on previous annotations and translations.

LIT500B2

中国文学 B

甲斐 雄一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

【『文選』精読】

『文選』は、中国・梁代に編纂された、詩文をジャンル別に分類したアンソロジーである。中国では官吏任用試験である科挙受験の必読書となり、また日本においても広く流行した、中国古典文学の歴史的展開を考える上で重要な地位を占める書物である。

本授業では、『文選』巻 29「雑詩上」所収作品を読む。本文及び注釈（旧注）を対象に、テキストの校勘（日本伝存の旧鈔本・和刻本を含む）を行って訓読・日本語訳を作成し、本文批判を中心とした文献学の知識・技術、訓読を含めた中国古典の文言文テキストの読解力を養成することを身につけることを目標とする。さらに、作品読解のために必要な注釈を受講者自ら補うことで、先行する注釈・翻訳を土台に新たな解釈を提示する訓練とし、学術論文を執筆するための基礎力を身につけることを目指す。

【到達目標】

1. 『文選』についての基礎的な知識を習得する。
2. 本文批判を中心とした文献学の知識・技術、訓読を含めた中国古典の文言文テキストの読解力を養成することを身につける。
3. 古注（李善注・五臣注）を読み解きながら先行の訳注を批判的に検討し、『文選』所収作に新たな解釈・鑑賞を提示する力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

最初の数回のみ講義形式、残りは演習形式で行う。『文選』所収作品に対してそれぞれ担当者を決める。発表担当者は作品の校勘・訓読・日本語訳と注釈（旧注及び担当者注）を記載したレジュメを作成し、担当回に発表し、その内容を元にして全員で討論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス（1）	『文選』について—内容・編纂の背景・受容、及び担当者の決定
第 2 回	ガイダンス（2）	『文選』諸テキストについて
第 3 回	ガイダンス（3）	『文選』の注釈と日本語の訳注について
第 4 回	『文選』精読（1）	李陵「与蘇武三首」其の一読解
第 5 回	『文選』精読（2）	李陵「与蘇武三首」其の二読解
第 6 回	『文選』精読（3）	李陵「与蘇武三首」其の三読解
第 7 回	『文選』精読（4）	蘇武「詩四首」其の一読解
第 8 回	『文選』精読（5）	蘇武「詩四首」其の二読解
第 9 回	『文選』精読（6）	蘇武「詩四首」其の三読解
第 10 回	『文選』精読（7）	蘇武「詩四首」其の四読解
第 11 回	『文選』精読（8）	王粲「雜詩一首」読解
第 12 回	『文選』精読（9）	劉楨「雜詩一首」読解
第 13 回	『文選』精読（10）	曹丕「雜詩二首」其の一読解
第 14 回	『文選』精読（11）	曹丕「雜詩二首」其の二読解

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表担当者はその準備、その他の受講者は発表者の担当する詩について予習し、事前に内容を把握した上で、疑問点や検討を要する箇所について整理しておく。授業後には討論で得た情報と意見を自分なりにまとめる。なお、本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

テキスト（教科書）は使用しない。プリントを配布する。

【参考書】

- ・内田泉之助・網祐次・中島千秋『文選』（新釈漢文大系 14-15、79-83、93、明治書院、1963-2001 年）
- ・小尾郊一『文選』（全釈漢文大系 26-32、集英社、1974-76 年）
- ・川合康三等『文選 詩篇』（岩波文庫赤 45-1-6、2018-19 年）
- ・富永一登『文選李善注の研究』（研文出版、1999 年 2 月）
- ・岡村繁『文選の研究』（岩波書店、1999 年 4 月）
- ・清水凱夫『新文選学—『文選』の新研究』（研文出版、1999 年 10 月）

【成績評価の方法と基準】

担当者としての発表内容（70%）、討論への参加度・貢献度・積極性（30%）。

【学生の意見等からの気づき】

特になし（本年度新規担当のため）。

【その他の重要事項】

授業の進み具合によっては、事前に受講者に説明をした上で、授業内容を一部変更する可能性がある。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

中国古典文学

＜研究テーマ＞

宋代における、出版文化を背景とした文学作品の流通と受容について
＜主要研究業績＞

『南宋の文人と出版文化—王十朋と陸游をめぐる—』（著書、九州大学出版会、2016 年）

「陸游詩の自注について」（論文、『日本宋代文学学会報』6、2019 年）

【Outline (in English)】

Compiled in Liang era China, the Wen Xuan is an anthology containing poems that are classified by genre. In China, the Wen Xuan was a must-read for candidates for the imperial examinations, which were examinations for the selection of bureaucrats. The book was read widely in Japan as well and is an important text to explore the historical development of Chinese classical literature.

This course will involve reading poems included in the anthology section of Wen Xuan, vol. 29. The goals are for students to revise the main text and annotations of the book (including old abridged versions preserved in Japan and versions printed in Japan), read the Chinese text in Japanese (kundoku), and create a Japanese translation; to acquire knowledge and skills in philology, especially in textual criticism; and to develop reading comprehension in classical texts written in literary Chinese, including skills in reading Chinese texts in Japanese. A further aim is for students to develop the basic skills in writing academic articles by creating their own annotations to interpret the work and undergo training so that they can present new interpretations by building on previous annotations and translations.

ART500B2

日本文芸特講 I A（文芸と音楽）

スティーヴン・ネルソン

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本年度のテーマは「『源氏物語』と音楽」とします。これには：1)『源氏物語』の中の音楽、2)『源氏物語』と同時代（10世紀～11世紀初頭）の音楽史との関係、3)『源氏物語』が後世の音楽・芸能に及ぼした影響（源氏能、箏組歌など）の事柄が含まれます。春学期はまず『源氏物語』宇治十帖の音楽場面を研究対象とし、特に音楽関係の用語に注意を払いながら、その場面場面の内容を「正しく読む」こと、それについて「わかりやすく書く」ことを目的とします。

【到達目標】

- ・『源氏物語』の音楽場面を正しく把握し、説明できること
- ・問題点を発見し、詳しく調査した上で、自らの見解が述べられること
- ・発表が明快に行えること
- ・問題点について客観的に討論できること
- ・万葉仮名や変体仮名、及び平安時代に成立した楽譜が読めるようになること

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

導入はネルソンによる講義・解説が中心ですが、第6回以降は学生による発表・質疑応答が中心になります。なお、少人数参加の演習形式であり、学生個人個人に合せた指導をしますので、下記「授業計画」はあくまでも予定であり、実施に際して変更が当然生じてくるものと考えてください。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	自己紹介・序説	自己紹介（全員）、教員による授業の進め方の説明 紫式部と音楽、音楽場面の調査方法について
第2回	平安時代の音楽①	『源氏物語』に現れる楽器とその楽譜
第3回	平安時代の音楽②	年中行事や社寺の音楽 舞楽と国風歌舞
第4回	平安時代の音楽③	御遊び、呂律、時の調子、音楽論
第5回	平安時代の音楽④	様々な声楽 詩歌の朗誦、催馬楽、風俗歌など 教習と伝授、音楽の伝承と「血統」
第6回	「橋姫」巻について	梗概と音楽場面の紹介
	「橋姫」巻を読む①	発表と討論 第9・10段
第7回	「橋姫」巻を読む②	発表と討論 第9・10段 続き 発表と討論 第16段
第8回	「椎本」巻について	梗概と音楽場面の紹介
	「椎本」巻を読む	発表と討論 第2・4段
第9回	「総角」巻について	梗概と音楽場面の紹介
	「総角」巻を読む①	発表と討論 第1・5段
第10回	「総角」巻を読む②	発表と討論 第22・23段
第11回	「総角」巻を読む③	発表と討論 第26段
第12回	「早蕨」巻について	梗概と音楽場面の紹介
	「早蕨」巻を読む	発表と討論 第8段
第13回	個人発表会	春学期の検討内容に関する個人発表
第14回	春学期のまとめ	補遺と討論、春学期の授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

第1回 5分程度の自己紹介を用意し、授業に期待することことが述べられるように考えておくこと。

第2～5回 事前配付の資料を読んでくること。

第6回以降 グループ発表の準備とレジュメ作成。

第14回 期末レポート・楽譜課題作成。

本授業の準備・復習時間は合わせて4時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

阿部秋生他 校注・訳『源氏物語』⑤（小学館新編日本古典文学全集、全6冊のうち）。5月までに購入するように。

【参考書】

秋山虔他 編『源氏物語図典』（小学館）

小町谷照彦・倉田実 編著『王朝文学文化歴史大事典』（笠間書院）

今井源衛『源氏物語への招待』（小学館）

遠藤徹 構成『雅楽』（平凡社、別冊太陽）

【成績評価の方法と基準】

プレゼンテーション（詳しく調査した結果を明快に発表できたか）30%、平常点とディスカッション（毎回出席し、意欲的に、積極的に発言したか）30%、レポートと楽譜課題（論証のしっかりしたレポートと誤りのない楽譜課題を提出したか）40%

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉 日本音楽史学

〈研究テーマ〉日本の楽譜、初期の講式（漢文訓読体の声明の一種）と平家語りの音楽構成法、平安時代の年中行事と音楽、声歌/唱歌～越殿楽謡物～箏組歌の系譜、『源氏物語』・『平家物語』の音楽、日本古典文学の英訳など

〈主要研究業績〉『源氏物語』・『平家物語』と音楽関連のもの

①〈研究ノート〉『源氏物語』における絃楽器の曲種と調絃について—古楽譜研究者の立場から—（『日本文学誌要』92、2015年）

②『源氏物語』の音楽を読む—現実と虚構、準拠と創作—（芳賀徹企画・総監修、伊井春樹監修『源氏物語国際フォーラム集成』、源氏物語千年紀委員会、2009年）

③「平家語りの成り立ち—平家語りの音楽生成論へ向けて—」（明治学院大学教養教育センター付属研究所編『カルチュラル』3、2006年）

【Outline (in English)】

Course Outline: This is a graduate class on the music of *The Tale of Genji*. This topic includes: 1. the depiction of music in the tale; 2. its relationship to the music history of the time it depicts (10th to early 11th century); and 3. the influence of the tale and its music on later genres of performing arts, including *nō* and *sōkyoku* (music for 13-stringed zither *koto* of the early modern period). In the spring semester, introductory lectures by the instructor are followed by close reading of sections from the chapters *Hashihime* ("The Maiden of the Bridge") to *Sawarabi* ("Bracken Shoots").

Learning Objectives: Through this study of music in *The Tale of Genji*, students learn to identify research issues, undertake basic research, give effective presentations, and participate actively in critical, objective debate. They also learn to read old written Japanese of various types, and traditional music notation.

Learning Activities Outside of the Classroom: Students are expected to read materials distributed ahead of class by the instructor for the first few lessons, to prepare presentations on passages from the tale, and then to write a final paper on a topic developed in consultation with the instructor during the semester.

Grading Criteria/Policy: presentations 30%; participation in discussion 30%; final paper and music assignment (transnotation) 40%.

ART500B2

日本文芸特講 I B（文芸と音楽）

スティーヴン・ネルソン

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本年度のテーマは「『源氏物語』と音楽」とします。これには：1)『源氏物語』の中の音楽、2)『源氏物語』と同時代（10世紀～11世紀初頭）の音楽史との関係、3)『源氏物語』が後世の音楽・芸能に及ぼした影響（源氏能、箏組歌など）の事柄が含まれます。秋学期では、春学期で行った『源氏物語』宇治十帖の音楽場面の精読を続けるとともに、その影響を受けて成立した源氏能と箏組歌の例を取り上げ、影響の有り様を考察します。

【到達目標】

- ・『源氏物語』の音楽場면을正しく把握し、説明できること
- ・問題点を発見し、詳しく調査した上で、自らの見解が述べられること
- ・発表が明快に行えること
- ・問題点について客観的に討論できること
- ・万葉仮名や変体仮名、平安時代に成立した楽譜が読めるようになること

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

導入はネルソンによる講義・解説が中心ですが、第3回以降は学生による発表・質疑応答が中心になります。なお、少人数参加の演習形式であり、学生個人個人に合せた指導をしますので、下記「授業計画」はあくまでも予定であり、実施に際して変更が当然生じてくるものと考えてください。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス①	春学期レポートの講評、秋学期発表スケジュールの調整 源氏物語 音楽研究史概説
第2回	ガイダンス②	古注釈と音楽
第3回	「宿木」巻について 「宿木」巻を読む①	梗概と音楽場面の紹介 発表と討論 第36段
第4回	「宿木」巻を読む②	発表と討論 第46段
第5回	「東屋」巻について 「東屋」巻を読む①	梗概と音楽場面の紹介 発表と討論 第3・4段
第6回	「東屋」巻を読む②	発表と討論 第39・44段
第7回	「浮舟」巻について 「浮舟」巻を読む	梗概と音楽場面の紹介 発表と討論 第16段
第8回	「蜻蛉」・「手習」巻について 「手習」巻を読む①	梗概と音楽場面の紹介 発表と討論 第15段
第9回	「手習」巻を読む②	発表と討論 第16・17段
第10回	ガイダンス③	『源氏物語』の影響を受けて成立した作品に対する調査方法について
第11回	能《浮舟》①	発表と討論
第12回	能《浮舟》②	発表と討論
第13回	箏組歌《橋姫》・《浮舟》	発表と討論
第14回	秋学期のまとめ	秋学期の授業の総括 期末レポート・楽譜課題提出

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

第1、2、10回 事前配付の資料を読んでくること。

第3回以降 発表の準備とレジュメ作成。

第14回 期末レポート・楽譜課題作成。

本授業の準備・復習時間は合わせて4時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

阿部秋生他 校注・訳『源氏物語』⑤・⑥（小学館新編日本古典文学全集、全6冊のうち）。

【参考書】

秋山虔他 編『源氏物語図典』（小学館）

小町谷照彦・倉田実 編著『王朝文学文化歴史大事典』（笠間書院）

今井源衛『源氏物語への招待』（小学館）

遠藤徹 構成『雅楽』（平凡社、別冊太陽）

【成績評価の方法と基準】

プレゼンテーション（詳しく調査した結果を明快に発表できたか）30%、平常点とディスカッション（毎回出席し、意欲的に、積極的に発言したか）30%、レポートと楽譜課題（論証のしっかりしたレポートと誤りのない楽譜課題を提出したか）40%

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉 日本音楽史学

〈研究テーマ〉日本の楽譜、初期の講式（漢文訓読体の声明の一種）と平家語りの音楽構成法、平安時代の年中行事と音楽、声歌/唱歌～越殿楽謡物～箏組歌の系譜、『源氏物語』・『平家物語』の音楽、日本古典文学の英訳など

〈主要研究業績〉『源氏物語』・『平家物語』と音楽関連のもの

①〈研究ノート〉『『源氏物語』における絃楽器の曲種と調絃について—古楽譜研究者の立場から—』（『日本文学誌要』92、2015年）

②『『源氏物語』の音楽を読む—現実と虚構、準拠と創作—』（芳賀徹企画・総監修、伊井春樹監修『源氏物語国際フォーラム集成』、源氏物語千年紀委員会、2009年）

③『平家語りの成り立ち—平家語りの音楽生成論へ向けて—』（明治学院大学教養教育センター付属研究所編『カルチュラル』3、2006年）

【Outline (in English)】

Course Outline: This is a graduate class on the music of *The Tale of Genji*. This topic includes: 1. the depiction of music in the tale; 2. its relationship to the music history of the time it depicts (10th to early 11th century); and 3. the influence of the tale and its music on later genres of performing arts, including *nō* and *sōkyoku* (music for 13-stringed zither *koto* of the early modern period). In the autumn semester, introductory lectures by the instructor are followed by close reading of sections from the chapters *Yadorigi* ('The Ivy') to *Tenarai* ('Writing Practice'), analysis of the *nō* play *Ukifune*, and the *koto-kumiuta Hashihime* and *Ukifune*.

Learning Objectives: Through this study of music in *The Tale of Genji*, students learn to identify research issues, undertake basic research, give effective presentations, and participate actively in critical, objective debate. They also learn to read old written Japanese of various types, and traditional music notation.

Learning Activities Outside of the Classroom: Students are expected to read materials distributed ahead of class by the instructor for the first few lessons, to prepare their presentations on passages from the tale, the *nō* play, and/or *koto kumiuta*, and then to write a final paper on a topic developed in consultation with the instructor during the semester.

Grading Criteria/Policy: presentations 30%; participation in discussion 30%; final paper and music assignment (transnotation) 40%.

LIT500B2

日本文芸特講ⅡA（アートマネジメント研究）

中沢 けい

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本年度はコロナ禍で起きた文化的変化に着目し、活版印刷からデジタル技術への変化が文化、とりわけ文学に与える影響について考察いたします。

【到達目標】

活版印刷からデジタル技術への変化の中で起きている事象を把握し、その対応策を考察すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義と受講生による発表および質疑応答

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	なぜこの授業を設けたのか	創作（文芸）を志す人はなぜ文化を支える社会的仕組みについて学ぶ必要があるのかをお話します。
第2回	活版印刷からデジタル技術へ	2020年は従来型のメディアからデジタルメディアへの移行期が分水嶺を超えることになりました。概況をお話いたします。
第3回	現在起きていること1 理想論から現実の障害へ。	デジタル技術によるメディアの変化は文化に大きな変化をもたらしつつあります。
第4回	現在起きていること2 従来型のメディアの対象	新聞、雑誌などパッケージメディアの退潮についてお話します。
第5回	現在起きていること3 反知性主義の興隆	反知性主義と呼ばれる現象について情報を集めてみましょう。
第6回	現在起きていること4 ヘイトスピーチについて	ヘイトスピーチについて情報を集めてみましょう。
第7回	現在起きていること5 世界秩序の再編成	大航海時代以来、形成された世界秩序の再編成について考察します。
第8回	情報を集めてみましょう。	受講生各自に授業に関連した情報を集めましょう。
第9回	受講生による発表1	受講生が集めて情報を教室で発表してもらいます。
第10回	受講生による発表2	集めた情報のもとになる資料（新聞コピーなど）と発表内容のレジュメを用意してもらいます。
第11回	受講生による発表3	発表をもとに質疑応答します。発表の聞きながら質問を用意しましょう。
第12回	受講生による発表4	質問がでない場合は感想をお尋ねいたします。
第13回	受講生による発表5	個々の現象から現在起きていることについての考察を深めてもらいます。

第 14 回 秋学期の準備

受講生各自がどのような方向の興味と感心を持っているかにより、秋学期の発表のテーマを決定します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

受講生は発表がない時でもデジタル文化による社会的文化形成の変化について情報収集を行ってください。SAS の普及による変化、著作権関連の考え方の変化と事件、ヘイトスピーチと社会構造的な差別問題への対処、個人情報保護とデジタル技術などいろいろなテーマがあります。また事態は流動的なので、必ず最新情報を取得する習慣をつけてください。

【テキスト（教科書）】

授業時に配布する資料とレジュメのプリント

【参考書】

必要があれば授業時に提示します。

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的な参加と授業時の発表 50%
 期末レポート 50%

【学生の意見等からの気づき】

あまり関心を持っていなかった分野かもしれませんが、初歩的な関心からより深い関心へと意識を高めることによって、作家としてのセンスを身に付けてもらうように努力します。

【学生が準備すべき機器他】

特にありません。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞文芸創作。
 ＜研究テーマ＞小説、エッセイ、評論などの執筆＜主要研究業績＞
 主要作品に「海を感じる時」「水平線上にて」「女ともだち」「楽隊のうさぎ」はある。いずれも小説。

【Outline (in English)】

(Course outline)

The impact of the change from letterpress printing to digital technology on culture
 (Learning Objectives)
 Collecting the latest information
 (Learning activities outside of classroom)
 (Grading Criteria /Policy)
 Active participation in class 50%
 Report 50%

LIT500B2

日本文芸特講ⅡB（アートマネジメント研究）

中沢 けい

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

活版印刷からデジタル技術への変化は文化にどのような影響を与えるかを考察するうえで、現在、起きている現象を批判的に見てゆきます。

【到達目標】

現在、起きている文化的変化を包括的に考える力を養います。また流動的に事態を見極めながら文化形成の在り方について各自が考えて行く力をつけること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義と受講生による発表および質疑応答

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
 あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	春学期授業の振り返り	春学期授業内容を振り返りながら夏季休業中に気づいたことについて、受講生に話をしてもらいます。
第 2 回	各自の発表順を決定	春学期末に受講生各自に割り振ったテーマについての発表順を決定します。
第 3 回	受講生による発表 1	夏季休業中に調べたことを各自に発表してもらいます。
第 4 回	受講生による発表 2	春学期よりも問題意識を深めた質疑応答ができることを望みます。
第 5 回	受講生による発表 3	事態は現在進行形かつ流動的なので、予定外の事案が出た時は、臨機応変に対応します。
第 6 回	受講生による発表 4	SNS の利用やネットを通じた公募などの経験を踏まえた質問は大歓迎いたします。
第 7 回	受講生による発表 5	文章と動画、文章とアニメ、文章とゲームなど、これまでのジャンル融合的に表現についても考察しましょう。
第 8 回	秋学期の中間まとめ	秋学期のは発表について受講生各自の感想を述べてもらいます。
第 9 回	修士副論文提出予定者の発表と質疑応答 1	2022年度に修士論文（副論文）提出予定者に論文の進行状況に応じた発表と質疑応答をお粉します
第 10 回	修士副論文提出予定者の発表と質疑応答 2	修士副論文は各自の興味関心によってテーマが選ばれていますので、これまでの授業進行と関連はしていませんので、御注意ください。
第 11 回	修士副論文提出予定者の発表と質疑応答 3	発表を聞き、質問をし、答えるという技術を磨きましょう。
第 12 回	今後の文化形成について	デジタル技術の進歩によって文化はどう形成されていくのか論点の抽出を行います。
第 13 回	文芸および文学の変化について	文化形成の在り方の中から文芸および文学の変化について受講生相互の意見交換を行います。

第14回 創作者として考えなければならぬこと 春学期、秋学期を通じて創作者として考えなければならぬことは、どういふことがあるかを受講生各自に発表してもらいます。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

受講生は発表がない時でもデジタル文化による社会的文化形成の変化について情報収集を行ってください。SASの普及による変化、著作権関連の考え方の変化と事件、ヘイトスピーチと社会構造的な差別問題への対処、個人情報保護とデジタル技術などいろいろなテーマがあります。また事態は流動的なので、必ず最新情報を取得する習慣をつけてください。

【テキスト（教科書）】

授業時に配布される資料とプリント

【参考書】

必要があれば随時に提示します。

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的な参加と発表 50%
 期末レポート 50%

【学生の意見等からの気づき】

あまり関心を持っていなかった分野かもしれませんが、初歩的な関心からより深い関心へと意識を高めることによって、創作家としてのセンスを身に付けてもらうように努力します。

【学生が準備すべき機器他】

特にありません。

【その他の重要事項】

特にありません。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞文芸創作。
 ＜研究テーマ＞小説、エッセイ、評論などの執筆＜主要研究業績＞主要作品に「海を感じる時」「水平線上にて」「女ともだち」「楽隊のうさぎ」はある。いずれも小説。

【Outline (in English)】

(Course outline)

The impact of the change from letterpress printing to digital technology on culture

(Learning Objectives)

Collecting the latest information

(Learning activities outside of classroom)

(Grading Criteria /Policy)

Active participation in class 50%

Report 50%

LIT500B2

女性文学A

藤木 直実

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

男女を再生産する文化構造、および性差そのものの見直しなど、性の制度に対する根本的な再審の潮流は、いわゆる第二波フェミニズムを画期として世界規模で広がった。日本においても、戦後の新体制と教育環境の中で成人した女性たちが、女性としての存在、身体性、関係性などを問直す作業のなかから、男性作家主導の戦後文学の理念や方法への批評性にもとづいた新たな文学世界を拓いていった。これらの新しい表現は、男性文学を主流として前提する「女流文学」ではなく、「女性文学」として再定位されるのにふさわしい。以上の視座に立ち、現代女性作家の作品を具体的に検討することで、女性による文学表現やその基盤となった女性文化の評価、また女性文学がそなえる性差を変容し越境する志向などの論理化を、演習形式で実践する。

【到達目標】

この授業においては、現代の女性作家による文学テクストを取り上げ、精読を行う。現代日本のジェンダー規範を確認し、それらの規範と女性の文学との交渉の様相を具体的な作品に即して読み、書き手のジェンダーが作品や表現にどのような影響を及ぼすかを考える。また、近代女性文学史の流れを適宜参照し、把握に努める。これらの作業を通して、女性文学を精読するための視点と技術と方法を身につけ、実社会にもつながる課題や自身の研究への示唆を、受講者それぞれが発見し、考える、きっかけとなることを目指す。

In this class, we will take up literary texts by modern female writers and read them carefully. We will review the gender norms of modern Japan, read the aspects of negotiations between those norms and women's literature in line with concrete works, and consider how the writer's gender affects the works and expressions. In addition, we will try to understand the flow of modern women's literature by referring to it as appropriate. Through these tasks, students will acquire perspectives, techniques, and methods for perusing women's literature, and aim to be an opportunity for each student to discover, think, and think about issues that lead to the real world and suggestions for their own research.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式による。現代女性作家による1990年代以降の作品を精読する。担当者はあらかじめ対象作家作品にかかわる調査をハンドアウトまたはスライドにまとめて報告し、それにもとづいて受講生全員で討議をおこなう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
 あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
 あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス①	授業の目的、計画、方法についての概説
第2回	ガイダンス②	担当作品の決定
第3回	石沢麻依「貝に続く場所にて」	担当者による報告と受講生による討議
第4回	李琴峰「彼岸花が咲く島」	担当者による報告と受講生による討議
第5回	笹野頼子「水晶内制度」	担当者による報告と受講生による討議
第6回	多和田葉子「献灯使」	担当者による報告と受講生による討議

第 7 回	綿矢りさ「夢を与える」	担当者による報告と受講生による討議
第 8 回	金原ひとみ「マザーズ」	担当者による報告と受講生による討議
第 9 回	小林エリカ「脱皮」	担当者による報告と受講生による討議
第 10 回	深沢潮「乳房のくにで」	担当者による報告と受講生による討議
第 11 回	松田青子「持続可能な魂の利用」	担当者による報告と受講生による討議
第 12 回	村田沙耶香「消滅世界」	担当者による報告と受講生による討議
第 13 回	田中兆子「徴産制」	担当者による報告と受講生による討議
第 14 回	今期のまとめ	今期の学修内容の振り返り

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【予習】報告者は、担当の作家作品について調査と考察を行い、ハンドアウトを作成する。他の受講生は、対象作家作品を読み、必要事項を確認して、私見をまとめておく。

【復習】授業での討議や教員のコメントを踏まえて、対象作品への調査考察を深める。

【Before】The reporter investigates and considers the work of the author in charge and prepares a handout. Other students should read the works of the target author, check the necessary items, and summarize their personal opinions.

【After】Based on the discussions in the class and the comments of the teacher, deepen the research and consideration of the target work.

Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

【テキスト（教科書）】

開講時に指示する

【参考書】

岩淵宏子・北田幸恵編著『はじめて学ぶ日本女性文学史【近現代編】』（ミネルヴァ書房、2005）、岩淵宏子・北田幸恵・長谷川啓編『編年体近代現代女性文学史』（至文堂、2005）、与那覇恵子『後期 20 世紀女性文学論』（晶文社、2014）、新・フェミニズム批評の会編『昭和後期女性文学論』（翰林書房、2020）、その他授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】

期末レポート（50 %）に加えて、報告の内容と水準（30 %）、授業中の貢献度（20 %）を勘案し、総合的に判断する。

Your overall grade in the class will be decided based on the following

Term-end report : 50%、Presentation content and quality : 30%、in class contribution: 20%

【学生の意見等からの気づき】

学生の興味関心を広げるための話題提供につとめる。学生の意見を尊重し、その発想に学問的裏付けが得られるようサポートし、自由に発言しやすい環境をつくる。

【学生が準備すべき機器他】

ノートパソコンが自宅にあることが望ましい。プリンターがあれば学習効率がより高くなるとされる。オンライン会議用アプリケーションのダウンロードを求める可能性がある。

【その他の重要事項】

質問については学修支援システムとメールで対応する。メールでの質問の場合は、件名を「女性文学 学籍番号 氏名」とすること。メール宛先：fujiki@olive.ocn.ne.jp

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近代文学、フェミニズム・ジェンダー批評

<研究テーマ>森鷗外と女性、女性文学

<主要研究業績>『〈妊婦〉アート論』（共編著）、『日本文学の「女性性」』（共著）

【Outline (in English)】

We will focus our scrutiny on works of literature by contemporary female authors. After ascertaining Japan's contemporary gender norms, we will attempt to discern aspects of the interplay between these norms and women's literature in line with specific works, reflecting on how the gender of the writer has influenced their works and expressions. In addition, making references as appropriate, we shall work to apprehend the historical course of modern women's literature. Through these tasks, we seek to provide students with the opportunity to master the perspectives, techniques, and methods for critical reading of women's literature. In doing so, students will discover and think about challenges that are also relevant to today's society, as well as suggestions for their own research. By the end of the course, students should be able to do the followings:

In this class, we will take up literary texts by modern female writers and read them carefully. We will review the gender norms of modern Japan, read the aspects of negotiations between those norms and women's literature in line with concrete works, and consider how the writer's gender affects the works and expressions. In addition, we will try to understand the flow of modern women's literature by referring to it as appropriate. Through these tasks, students will acquire perspectives, techniques, and methods for perusing women's literature, and aim to be an opportunity for each student to discover, think, and think about issues that lead to the real world and suggestions for their own research.

Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

Before : The reporter investigates and considers the work of the author in charge and prepares a handout. Other students should read the works of the target author, check the necessary items, and summarize their personal opinions.

After : Based on the discussions in the class and the comments of the teacher, deepen the research and consideration of the target work.

Your overall grade in the class will be decided based on the following

Term-end report : 50%、Presentation content and quality : 30%、in class contribution: 20%

LIT500B2

女性文学B

藤木 直実

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

男女を再生産する文化構造、および性差そのものの見直しなど、性の制度に対する根本的な再審の潮流は、いわゆる第二波フェミニズムを画期として世界規模で広がった。日本においても、戦後の新体制と教育環境の中で成人した女性たちが、女性としての存在、身体性、関係性などを問い直す作業のなかから、男性作家主導の戦後文学の理念や方法への批評性にもとづいた新たな文学世界を拓いていった。これらの新しい表現は、男性文学を本流として前提する「女流文学」ではなく、「女性文学」として再定位されるのにふさわしい。以上の視座に立ち、現代女性作家の作品を具体的に検討することで、女性による文学表現やその基盤となった女性文化の評価、また女性文学がそなえる性差を変容し越境する志向などの論理化を、演習形式で実践する。

【到達目標】

この授業においては、現代の女性作家による文学テキストを取り上げ、精読を行う。現代日本のジェンダー規範を確認し、それらの規範と女性の文学との交渉の様相を具体的な作品に即して読み、書き手のジェンダーが作品や表現にどのような影響を及ぼすかを考える。また、近代女性文学史の流れを適宜参照し、把握に努める。これらの作業を通して、女性文学を精読するための視点と技術と方法を身につけ、実社会にもつながる課題や自身の研究への示唆を、受講者それぞれが発見し、考える、きっかけとなることを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式による。担当者はあらかじめ対象作家作品にかかわる調査をハンドアウトにまとめて報告し、それにもとづいて受講生全員で討議をおこなう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業の目的、計画、方法についての概説、春学期の振り返り
第 2 回	中島京子「FUTON」	担当者による報告と受講生による討議
第 3 回	柳美里「JR 上野駅公園口」	担当者による報告と受講生による討議
第 4 回	崔実「ジニのパズル」	担当者による報告と受講生による討議
第 5 回	今村夏子「こちらあみ子」	担当者による報告と受講生による討議
第 6 回	西加奈子「i」	担当者による報告と受講生による討議
第 7 回	梨木香歩「僕は、そして僕たちはどう生きるか」	担当者による報告と受講生による討議
第 8 回	桐野夏生「路上の X」	担当者による報告と受講生による討議
第 9 回	角田光代「森に眠る魚」	担当者による報告と受講生による討議
第 10 回	中脇初枝「きみはいい子」	担当者による報告と受講生による討議
第 11 回	くどうれいん「氷柱の声」	担当者による報告と受講生による討議

第 12 回	小川洋子「ミナーの行進」	担当者による報告と受講生による討議
第 13 回	今期のまとめ	秋学期の学修内容の振り返り
第 14 回	今年度のまとめ	春学期秋学期を通じた学修内容の振り返り

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【予習】報告者は、担当の作家作品について調査と考察を行い、ハンドアウトを作成する。他の受講生は、対象作家作品を読み、必要事項を確認して、私見をまとめておく。

【復習】授業での討議や教員のコメントを踏まえて、対象作品への調査考察を深める。

【テキスト（教科書）】

開講時に指示する

【参考書】

岩淵宏子・北田幸恵編著『はじめて学ぶ日本女性文学史【近現代編】』（ミネルヴァ書房、2005）、岩淵宏子・北田幸恵・長谷川啓編『編年体近代現代女性文学史』（至文堂、2005）、与那覇恵子『後期 20 世紀女性文学論』（晶文社、2014）、その他、授業時に適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

期末レポート（50 %）に加えて、報告の内容と水準（30 %）、授業中の貢献度（20 %）を勘案し、総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】

学生の興味関心を広げるための話題提供につとめる。学生の意見を尊重し、その発想に学問的裏付けが得られるようサポートし、自由に発言しやすい環境をつくる。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近代文学、フェミニズム・ジェンダー批評

<研究テーマ>森鷗外と女性、女性文学

<主要研究業績>『〈妊婦〉アート論』（共編著）、『日本文学の「女性性」』（共著）

【Outline (in English)】

We will focus our scrutiny on works of literature by contemporary female authors. After ascertaining Japan's contemporary gender norms, we will attempt to discern aspects of the interplay between these norms and women's literature in line with specific works, reflecting on how the gender of the writer has influenced their works and expressions. In addition, making references as appropriate, we shall work to apprehend the historical course of modern women's literature. Through these tasks, we seek to provide students with the opportunity to master the perspectives, techniques, and methods for critical reading of women's literature. In doing so, students will discover and think about challenges that are also relevant to today's society, as well as suggestions for their own research. By the end of the course, students should be able to do the followings:

In this class, we will take up literary texts by modern female writers and read them carefully. We will review the gender norms of modern Japan, read the aspects of negotiations between those norms and women's literature in line with concrete works, and consider how the writer's gender affects the works and expressions. In addition, we will try to understand the flow of modern women's literature by referring to it as appropriate. Through these tasks, students will acquire perspectives, techniques, and methods for perusing women's literature, and aim to be an opportunity for each student to discover, think, and think about issues that lead to the real world and suggestions for their own research.

Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

Before : The reporter investigates and considers the work of the author in charge and prepares a handout. Other students should read the works of the target author, check the necessary items, and summarize their personal opinions.

After : Based on the discussions in the class and the comments of the teacher, deepen the research and consideration of the target work.

Your overall grade in the class will be decided based on the following

Term-end report : 50%、Presentation content and quality : 30%、in class contribution: 20%

ART500B2

文芸と視聴覚芸術 A

越川 道夫

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

実際に映画を制作、監督している担当講師との対話、ディスカッション、作品の研究発表を通して、映画と文学の関係、「映画」とは「文学」とは何か、そして、それぞれの基盤となる身体との関係について各自の考えを深めていく。

【到達目標】

担当講師の作品だけでなく、様々な参考作品を鑑賞し、または関連するテーマについて書かれた文献を読み、さまざまな角度から検証し、作品の生成過程に触れ、「映画」と「文学」の比較によって、「映画」とは何か、「文学」とは何かを考え、講師とともに研究への視点を掘り下げていく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

担当講師の講義、場合によっては実際の映画製作現場の見学、参考作品を視聴し、その作品についてのディスカッションと、学生のゼミナール方式の研究発表によってすすめる。またコロナの感染状況によってオンラインの授業になった場合も毎回ごとに学生の考えを吸い上げ、それに講師が授業、または個別に回答する形で授業を進めていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業内容の概説
第 2 回	講義 1 / 現場からの報告①	毎年のことながら、映画の原理を知ることから授業を始めます。
第 3 回	講義 2 / 現場からの報告②	講師の映画制作現場での経験に則しながら、できるだけ具体的に映画の原理と身体との関係を学びます。
第 4 回	講義 3 / 現場からの報告③	実際の映画制作者が映画の現場において何を考えているかということ伝えていきます。
第 5 回	講義 4 / 現場からの報告④	必要に応じて文献を読んだり、作品を見ることを指示します。
第 6 回	講義 5 / 現場からの報告⑤	随時質問や学生の考えを吸い上げ、それに応える形で有機的に授業を進めていく予定です。
第 7 回	参考作品① / 鑑賞	鑑賞する作品は、学生の感心の持ち方を掘り上げながら可能なものの中から適宜指示します。
第 8 回	参考作品① / ディスカッション①	参考作品①についてのディスカッション
第 9 回	参考作品① / ディスカッション②	参考作品①についてのディスカッション
第 10 回	講義 6 / 現場からの報告⑥	前回までのディスカッションを受けての講義
第 11 回	参考作品② / 鑑賞	参考作品②の鑑賞
第 12 回	参考作品② / ディスカッション①	参考作品②についてのディスカッション
第 13 回	参考作品② / ディスカッション②	参考作品②についてのディスカッション
第 14 回	講義 7 / 現場からの報告⑦	講師による講義 春期授業のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
授業で指示した映画作品を必ず見ること。
またオンライン授業の場合は **YouTube** に授業動画をアップすること、
視聴後感想、質問等のメールを必ず講師に送ること。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しません。

【参考書】

柄谷行人『定本 日本近代文学の起源』（岩波現代文庫）
前田英樹『小津安二郎の家—持続と浸透』（書肆山田）
この 2 冊には通年必ず言及します。またその他の文献に関しては適宜指示します。

【成績評価の方法と基準】

研究発表、レポート (50 %)、授業参加度等 (50 %) によって、総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

昨年一昨年とオンラインでの授業となり、試行錯誤がありました。昨年の学生からの反応から本年もオンラインでの授業になった場合は、基本的に **YouTube** に限定公開します。授業を視聴後に講師のメールに必ず授業の感想、質問、授業を受けての考えを送ってください。そのメールに個別に回答、もしくは授業内でメールを紹介しつつ応答しながら臨機応変に授業を進めていきます。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞映画

＜研究テーマ＞映画

＜主要研究業績＞『アレノ』（監督・脚本／2015）

『海辺の生と死』（監督・脚本／2017）

『月子』（監督・脚本／2017）

『二十六夜待ち』（監督・脚本／2017）

『夕陽のあと』（監督／2019）など

またプロデューサーとして『海炭市叙景』『楽隊のうさぎ』『かぞくのくに』『ゲゲゲの女房』『私は猫ストーカー』『ドライブイン蒲生』『白河夜船』など多くの映画を制作する。

【Outline (in English)】

Through discussion and research, students will deepen their own ideas about the relationship between film and literature, what "film" means and what "literature" means, and the relationship between the body and the foundation of each.

ART500B2

文芸と視聴覚芸術 B

越川 道夫

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

実際に映画を制作、監督している担当講師との対話、ディスカッション、作品の研究発表を通じて、映画と文学の関係、「映画」とは「文学」とは何か、そして、それぞれの基盤となる身体との関係について各自の考えを深めていく。また秋期は特に映画表現の多様性に触れることも目的とする。

【到達目標】

主に参考映画作品を鑑賞し、その作品に関連するテーマについて書かれた文献を読み、さまざまな角度から検証し、作品の生成過程に触れ、「映画」と「文学」の比較によって、「映画」とは何か、「文学」とは何かを考え、講師とともに研究への視点を掘り下げていく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

担当講師の講義、場合によっては実際の映画製作現場の見学、参考作品を視聴し、その作品についてのディスカッションと、学生のゼミナール方式の研究発表によってすすめる。オンラインの授業になった場合も毎回ごとに学生の考えを吸い上げ、それに講師が授業、または個別に回答する形で授業を進めていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	講義 1 / 現場からの報告①	秋期の授業についてのガイダンス
第 2 回	参考作品①／鑑賞	参考作品①を鑑賞する
第 3 回	参考作品①／ディスカッション①	参考作品①についてのディスカッション
第 4 回	参考作品①／ディスカッション②	参考作品①についてのディスカッション
第 5 回	参考作品②／鑑賞	参考作品②を鑑賞する
第 6 回	参考作品②／ディスカッション①	参考作品②についてのディスカッション
第 7 回	参考作品②／ディスカッション②	参考作品②についてのディスカッション
第 8 回	講義 2 / 現場からの報告②	秋期はできるだけ多様な映画表現に触れることを目標とします。
第 9 回	参考作品③鑑賞	参考作品③を鑑賞する
第 10 回	参考作品③／ディスカッション①	参考作品③についてのディスカッション
第 11 回	参考作品③／ディスカッション②	参考作品③についてのディスカッション
第 12 回	参考作品④鑑賞	参考作品④を鑑賞する
第 13 回	参考作品④／ディスカッション①	参考作品④についてのディスカッション
第 14 回	秋学期のまとめ	秋学期の講義を概括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
授業で指示した映画作品を必ず見ること。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しません。

【参考書】

柄谷行人『定本 日本近代文学の起源』（岩波現代文庫）
前田英樹『小津安二郎の家—持続と浸透』（書肆山田）

この2冊には通年必ず言及します。またその他の文献に関しては適宜指示します。

【成績評価の方法と基準】

研究発表、レポート(50%)、授業参加度等(50%)によって、総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

昨年一昨年とオンラインでの授業となり、試行錯誤がありました。昨年の学生からの反応から本年もオンラインでの授業になった場合は、基本的にYouTubeに限定公開します。授業を視聴後に講師のメールに必ず授業の感想、質問、授業を受けての考えを送ってください。そのメールに個別に回答、もしくは授業内でメールを紹介しつつ回答しながら臨機応変に授業を進めていきます。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>映画

<研究テーマ>映画

<主要研究業績>『アレノ』（監督・脚本／2015）

『海辺の生と死』（監督・脚本／2017）

『月子』（監督・脚本／2017）

『二十六夜待ち』（監督・脚本／2017）

『夕陽のあと』（監督／2019）など

またプロデューサーとして『海炭市叙景』『楽隊のうさぎ』『かぞくのくに』『ゲゲゲの女房』『私は猫ストーカー』『ドライブイン蒲生』『白河夜船』など多くの映画を制作する。

【Outline (in English)】

Through discussions and research presentations of their works, students will deepen their own ideas about the relationship between film and literature, what "film" means and what "literature" means, the relationship between the body and the foundation of each, and the diversity of film expression.

LNG600B3

学際的文学論A（文学の境界領域、文学と宗教等）

リネベ・アンドレ

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本論（＝日本文化論）について西洋と日本の著名な英文の文献をもとに、「世界の日本論」の言説史とそれにおけるキーとなるコンセプトを検討する。そのうえで、現代の日本学の可能性を考える。春学期には、新渡戸稲造の著名な『Bushido. The Soul of Japan』（1899年）を読解しながら、明治後期から昭和前期にかけて西洋の読者に向けて書かれた文献や、英訳されて西洋で読まれた文献を検討する。注意：「世界の日本論と日本学Ⅰ」と「世界の日本論と日本学Ⅱ」はそれぞれ単独での受講が可能です。

【到達目標】

- ・世界の日本論の言説史を説明できる
- ・世界の日本論のキーとなるコンセプトを説明できる
- ・世界の日本論に関わる近年の研究傾向と方法論を説明できる
- ・日本学の可能性と、現代的意義などを説明することができる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・リアクションペーパー等における良いコメントは授業内で紹介し、さらなる討論に活かします
- ・授業内の講読（クロース・リーディングの方法による）
- ・授業内の発表（ショートプレゼンテーション、資料の紹介）
- ・討論（グループワーク、ペアワーク）
- ・課題へのフィードバック

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の概要、授業の進め方、教材についての説明がある
第2回	新渡戸稲造『武士道』第1章を読む	・文献読解 ・リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（新渡戸稲造の伝記と『武士道』の成立過程）
第3回	新渡戸稲造『武士道』第2章を読む	・文献読解 ・リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（小島毅『近代日本の陽明学』の紹介）
第4回	新渡戸稲造『武士道』第3～4章を読む	・文献読解 ・リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（佐伯真一『戦場の精神史：武士道という幻影』の紹介）
第5回	新渡戸稲造『武士道』第5～6章を読む	・文献読解 ・リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（E. ホブズボウム；T. レンジャー編『創られた伝統』の紹介）
第6回	新渡戸稲造『武士道』第7～8章を読む	・文献読解 ・リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（B.H. Chamberlain, The Invention of a New Religion の紹介）

第7回	新渡戸稲造『武士道』第9章を読む	・文献読解 リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（丸山眞男『忠誠と反逆』の紹介）
第8回	新渡戸稲造『武士道』第10章を読む	・文献読解 リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（雑誌『日本人』／『日本及日本人』の紹介）
第9回	新渡戸稲造『武士道』第11章を読む	・文献読解 リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（井上哲次郎『武士道』の紹介）
第10回	新渡戸稲造『武士道』第12～13章を読む	・文献読解 ・リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（Uchimura Kanzo, Representative Men of Japan の紹介）
第11回	新渡戸稲造『武士道』第14～15章を読む	・文献読解 ・リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（Okakura Tenshin, The Book of Tea の紹介）
第12回	新渡戸稲造『武士道』第16章を読む	・文献読解 ・リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（菅野覚明『武士道の逆襲』の紹介）
第13回	新渡戸稲造『武士道』第17章を読む	・文献読解 ・リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（宇野田『武士道論の成立』の紹介）
第14回	総括	前期の授業で修得した内容を復習し、世界の日本論についての理解を深めながら、現代の日本学の可能性を考える

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を準備とします。
- ・本授業で指示した文献を読み、歴史・思想的背景について調べる
- ・プレゼンテーションを準備する（レジュメ、資料のコメント）
- ・授業の出席前に前回の授業ノートを読み返し、復習する

【テキスト（教科書）】

教科書は指定なし。プリントを作成し、授業中に配布する予定。また、オンラインで掲載される資料へのリンクを指示する予定。

【参考書】

宇野田（1997）「武士道論の成立：西洋と東洋のあいだ」『江戸の思想』第7号、29～50頁
新渡戸稲造；矢内原忠雄訳（2018）『武士道』岩波文庫
船曳健夫（2016）『「日本人論」再考』講談社学術文庫
南博（2006）『日本人論：明治から今日まで』岩波現代文庫
Benesch, Oleg. *Inventing the Way of the Samurai. Nationalism, Internationalism, and Bushidō in Modern Japan*, Oxford University Press 2014

【成績評価の方法と基準】

平常点（20％） 授業への参加、発言などを総合的に評価する
課題、リアクション・ペーパーへの回答（20％）
発表（30％）
期末レポート（30％）

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

日本思想史（近世）

【Outline (in English)】

This course offers students an introduction into discourses about Japanese culture. It is designed to give an overview of key texts and concepts between the late Meiji-period until the end of the Pacific war in international perspective. Students can expect to come out of the course better prepared to engage in an informed discussion about international discourses about Japanese culture and the challenges for future research in the field of Japanese studies.

LNG600B3

学際的文学論 B（文学の境界領域、文学と宗教等）

リネベ・アンドレ

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本論（＝日本文化論）について西洋と日本の著名な英文の文献をもとに、「世界の日本論」の言説史とそれにおけるキーとなるコンセプトを検討する。そのうえで、現代の日本学の可能性を考える。秋学期にはアメリカの文化人類学者であるルース・ベネディクトの『The Chrysanthemum and the Sword. Patterns of Japanese Culture』（1946年）を読解しながら、昭和期から現代に至るまで西洋の読者に向けて書かれた文献や英訳されて西洋で読まれた文献を検討する。注意：「世界の日本論と日本学Ⅰ」と「世界の日本論と日本学Ⅱ」はそれぞれ単独での受講が可能です。

【到達目標】

- ・世界の日本論の言説史を説明できる
- ・世界の日本論のキーとなるコンセプトを説明できる
- ・世界の日本論に関わる近年の研究傾向と方法論を説明できる
- ・日本学の可能性と、現代的意義などを説明することができる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・リアクションペーパー等における良いコメントは授業内で紹介し、さらなる討論に活かします
- ・授業内の講読（クロス・リーディングの方法による）
- ・授業内の発表（ショートプレゼンテーション、資料の紹介）
- ・討論（グループワーク、ペアワーク）
- ・課題へのフィードバック

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の概要、授業の進め方、教材についての説明がある
第2回	ルース・ベネディクト『菊と刀』第1章を読む	・文献読解 ・リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（R. ベネディクト『文化のパターン』の紹介）
第3回	ルース・ベネディクト『菊と刀』第2章を読む	・文献読解 ・リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（中根千枝『タテ社会の力学』の紹介）
第4回	ルース・ベネディクト『菊と刀』第3～4章を読む	・文献読解 ・リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（苅部直「『象徴』はどこへゆくのか」の紹介）
第5回	ルース・ベネディクト『菊と刀』第5章を読む	・文献読解 ・リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（ハルミ・ベフ『イデオロギーとして日本文化論』）
第6回	ルース・ベネディクト『菊と刀』第6章を読む	・文献読解 ・リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（マーガレット・ミード『火薬をしめせるな：文化人類学者のアメリカ論』の紹介）

第7回	ルース・ベネディクト『菊と刀』第7章を読む	・文献読解 ・リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（丸山眞男『日本の思想』の紹介）
第8回	ルース・ベネディクト『菊と刀』第8章を読む	・文献読解 ・リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（和辻哲郎「科学的価値に対する疑問」の紹介）
第9回	ルース・ベネディクト『菊と刀』第9章を読む	・文献読解 ・リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（源了圓『義理と人情：日本的心情の一考察』の紹介）
第10回	ルース・ベネディクト『菊と刀』第10章を読む	・文献読解 ・リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（作田啓一『恥の文化再考』の紹介）
第11回	ルース・ベネディクト『菊と刀』第11章を読む	・文献読解 ・リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（C. ギアツ「われわれ対われわれでない人びと：ベネディクトの旅」の紹介）
第12回	ルース・ベネディクト『菊と刀』第12章を読む	・文献読解 ・リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（土井健郎『「甘え」の構造の紹介』）
第13回	ルース・ベネディクト『菊と刀』第13章を読む	・文献読解 ・リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（D. ルミス『内なる外国：『菊と刀』再考』の紹介）
第14回	総括	後期の授業で修得した内容を復習し、世界の日本論とその言説史の理解を深めながら、現代の日本学の可能性を考える

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を準備とします。
- ・本授業で指示した文献を読み、歴史・思想的背景について調べる
- ・プレゼンテーションを準備する（レジュメ、資料のコメント）
- ・授業の出席前に前回の授業ノートを読み返し、復習する

【テキスト（教科書）】

教科書は指定なし。プリントを作成し、授業中に配布する予定。また、オンラインで掲載される資料へのリンクを指示する予定。

【参考書】

青木保（1999）『『日本文化論』の変容：戦後日本の文化とアイデンティティ』中公文庫
 赤澤史朗（2020）『戦中・戦後文化論：転換期日本の文化統合』法律文化社
 エドワード・W・サイード『オリエンタリズム』、2巻、平凡社ライバリー
 船曳健夫（2016）『日本人論』再考 講談社学術文庫
 南博（2006）『日本人論：明治から今日まで』岩波現代文庫
 ルース・ベネディクト；長谷川松治訳（2005）『菊と刀：日本文化の型』講談社学術的文庫
 ルース・ベネディクト；米山俊直訳（2008）『文化の型』講談社学術文庫

【成績評価の方法と基準】

平常点（20%） 授業への参加、発言などを総合的に評価する
 課題、リアクション・ペーパーへの回答（20%）
 発表（30%）
 期末レポート（30%）

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

日本思想史（近世）

【Outline (in English)】

This course offers students an introduction into discourses about Japanese culture. It is designed to give an overview of key texts and concepts between the late Meiji-period until the end of the Pacific war in international perspective. Students can expect to come out of the course better prepared to engage in an informed discussion about international discourses about Japanese culture and the challenges for future research in the field of Japanese studies.

LIT500B2

文学と風土 A

庄司 達也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

近代作家の残した書簡を素材として、調査と分析の経験を培う。
直筆資料を読むとはどういうことか、その実際のあり方を探求するなかで、先入観に囚われることなく資料に向き合い、資料の持つ豊かな情報を取り上げる事の出来る力を養い、合わせて、文学研究にその成果を活かす事を目指す。

【到達目標】

資料を読むための基本的な手順に習熟し、読み解きのための基本的なスキルを身につけ、資料それぞれが有する豊かな情報を引き出し、自らの発表や論文で十分に活用できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

担当者の発表と全員での討議による演習形式。人数によっては司会とコメント担当も設ける。受講者は、講義毎にコメントペーパーを提出する。前回講義の振り返りにも使う。最初の時間に要領を説明する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	授業のコンセプトおよび進め方についての説明と、受講者それぞれの研究的関心を共有する。素材として提供する書簡資料についての説明と担当する書簡資料の決定。
第 2 回	担当教員による報告 1	直筆資料を読み解くと云う事についてのガイダンス 1
第 3 回	担当教員による報告 1	直筆資料を読み解くと云う事についてのガイダンス 1
第 4 回	受講者による報告 1	担当する資料体についての報告
第 5 回	受講者による報告 2	担当する資料体についての報告
第 6 回	受講者による報告 3	担当する資料体についての報告
第 7 回	受講者による報告 4	担当する資料体についての報告
第 8 回	受講者による報告 5	担当する資料体についての報告
第 9 回	受講者による報告 6	担当する資料体についての報告
第 10 回	受講者による報告 7	担当する資料体についての報告
第 11 回	受講者による報告 8	担当する資料体についての報告
第 12 回	受講者による報告 9	担当する資料体についての報告
第 13 回	受講者による報告 10	担当する資料体についての報告
第 14 回	総括	授業の全体を振り返って、成果と反省点を共有する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
受講者は、毎回素材となる資料についての基本情報を得ておくこと。事典等で基本知識を得、自分なりに資料に対するアプローチを考えておくことが望ましい。各自が発表者の立場になり、先行研究等も参照して講義に臨みたい。

【テキスト（教科書）】

教員により、提供される。

【参考書】

特に指定しない。適宜指示。

【成績評価の方法と基準】

コメントペーパー（Microsoft Forms により提出する事を予定。20 %）、発表（40 %）、レポート等の提出物（40 %）による総合評価。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

学外授業として、文学館への見学を予定している。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近代文学

<研究テーマ> 芥川龍之介・文学とメディア・近代作家に於ける西洋音楽の受容

<主要研究業績>

編著『芥川龍之介ハンドブック』（2015 鼎書房）・共編『改造社のメディア戦略』（2013 双文社出版）

【Outline (in English)】

In this class ,we will exercise in how to read writer's autograph from an expert's point of view,while thinking background.

LIT500B2

文学と風土 B

庄司 達也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

近代作家の残した原稿（草稿）を素材として、調査と分析の経験を培う。

直筆資料を読むとはどういうことか、その実際的なあり方を探索するなかで、先入観に囚われることなく資料に向き合い、資料の持つ豊かな情報を取り上げる事の出来る力を養い、合わせて、文学研究にその成果を活かす事を目指す。

【到達目標】

資料を読むための基本的な手順に習熟し、読み解きのための基本的なスキルを身につけ、資料それぞれが有する豊かな情報を引き出し、自らの発表や論文で充分に活用できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

担当者の発表と全員での討議による演習形式。人数によっては司会とコメント担当も設ける。受講者は、講義毎にコメントペーパーを提出する。前回講義の振り返りにも使う。最初の時間に要領を説明する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	授業のコンセプトおよび進め方についての説明と、受講者それぞれの研究的関心を共有する。素材として提供する原稿（草稿）資料についての説明と担当する原稿（草稿）資料の決定。
第 2 回	担当教員による報告 1	直筆資料を読み解くと云う事についてのガイダンス 1
第 3 回	担当教員による報告 1	直筆資料を読み解くと云う事についてのガイダンス 1
第 4 回	受講者による報告 1	担当する資料体についての報告
第 5 回	受講者による報告 2	担当する資料体についての報告
第 6 回	受講者による報告 3	担当する資料体についての報告
第 7 回	受講者による報告 4	担当する資料体についての報告
第 8 回	受講者による報告 5	担当する資料体についての報告
第 9 回	受講者による報告 6	担当する資料体についての報告
第 10 回	受講者による報告 7	担当する資料体についての報告
第 11 回	受講者による報告 8	担当する資料体についての報告
第 12 回	受講者による報告 9	担当する資料体についての報告
第 13 回	受講者による報告 10	担当する資料体についての報告
第 14 回	総括	授業の全体を振り返って、成果と反省点を共有する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

受講者は、毎回素材となる資料についての基本情報を得ておくこと。事典等で基本知識を得、自分なりに資料に対するアプローチを考えておくことが望ましい。各自が発表者の立場になり、先行研究等も参照して講義に臨みたい。

【テキスト（教科書）】

教員により、提供される。

【参考書】

特に指定しない。適宜指示。

【成績評価の方法と基準】

コメントペーパー（Microsoft Forms により提出する事を予定。20 %）、発表（40 %）、レポート等の提出物（40 %）による総合評価。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

学外授業として、文学館への見学を予定している。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近代文学

＜研究テーマ＞芥川龍之介・文学とメディア・近代作家に於ける西洋音楽の受容

＜主要研究業績＞

編著『芥川龍之介ハンドブック』（2015 鼎書房）・共編『改造社のメディア戦略』（2013 双文社出版）

【Outline (in English)】

In this class ,we will exercise in how to read writer's autograph from an expert's point of view,while thinking background.

LIT500B2

能楽作品研究 A

山中 玲子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

能は 700 年近い歴史を持つ伝統芸能で、レパートリーもほぼ固定され、演出の決まりも多いが、それでも演者・流儀によりさまざまな演出の工夫があり、すぐれた工夫はそれがまた新たな「決まり」「秘伝」となって伝えられてきた。作品の主題や主人公の人物像をどう解釈するかによって特別の演出が作られている場合もある。この授業では能の作品研究に演出についての考察を活かす方法や、演出資料の解説方法を学ぶ。

【到達目標】

- 1) 謡曲独特の表現に慣れ、テキストの内容を正しく解釈できるようになる。
- 2) 能の所作や囃子の演奏法など、演出に関する古い資料を読み解き、作品研究の材料として使えるようになる。
- 3) 伝統芸能である能にとって「演出」がどういう意味を持つかを理解する。
- 4) 小書と呼ばれる能の替演出の概要を知る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

前期は講義を主体とします。能の演出の基本的な考え方や、演出研究に必要な資料の読み方などを、具体的な作品に沿って説明し、授業参加者にも実際に古い資料を読んでもらいながら進めていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	能の概説と能楽研究所の資料紹介	能について学ぶ際の基礎資料、能楽研究所の使い方の紹介。
第 2 回	能演出のバリエーション	能の「演出」とはどういうことか。伝統芸能の決まりの中での工夫について。
第 3 回	演出研究のための資料	演出研究のための基礎文献とその使い方を学ぶ。
第 4 回	《朝長》を読む	《朝長》のテキストを読み、作品の主題や演出のポイントを知る。
第 5 回	《朝長》の小書「懺法」について	《朝長》の小書演出「懺法」の内容や成立過程を知る。
第 6 回	本来の演出が別置されてきた小書	《清経》の「音取」、《安宅》の「延年」など、本来の演出が能の類型化の中で別置されてきた小書について、概観する。
第 7 回	《采女》を読む	能《采女》のテキストを読み、主題と演出のポイントを知る。
第 8 回	《采女》の小書「美奈保之伝」について	《采女》の作品解釈と深く関わる小書「美奈保之伝」の内容と変遷を学ぶ。
第 9 回	観世元章と小書演出	観世元章により能の演出の改革について概観する。
第 10 回	作品解釈と深く関わる小書	元章による小書演出の実例を動画で鑑賞する。
第 11 回	ワークショップ：「型付」を読む①	下間少進の『童舞抄』を読んでみる。型付に共通の用語や個々の資料に特有の用語を知る。
第 12 回	ワークショップ：「型付」を読む②	『宗節仕舞付』を読んでみる。型付に共通の用語や個々の資料に特有の用語を知る。

- 第13回 ワークショップ：「囃 鼓伝書や笛伝書を読み、特有の用子伝書」を読む 語を知る。
- 第14回 まとめ 前期のまとめとしてのミニ発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

謡本の古写本や演出資料の解説などは、各自がおこなったうえで授業に参加してもらうことになるので、能楽研究所の閲覧室等での自習時間は多くなるはずです。

【テキスト（教科書）】

使わない

【参考書】

横道萬里雄『能にも演出がある 小書演出・新演出など』（2007年 檜書店）
横道萬里雄・山中玲子・松本雍『能を面白く見せる工夫 小書演出の歴史と諸相』（2009年 檜書店）

【成績評価の方法と基準】

授業内での発言や授業への貢献度（40％）、ワークショップ及びミニ発表（60％）

【学生の意見等からの気づき】

今年度の授業は、前年度から参加している学生たちの希望によって決めました。現代の能を彩る「小書」や能演出の基本を押さえ、作品研究と結びつけたいというのが彼らの希望でしたので、それに添うように組み立てていきます。できれば前期後期続けて受講していただきたいと考えています。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 中世文学 能楽研究

<研究テーマ> 能の作品研究・演出研究

<主要研究業績>

・「修羅能以前の『平家の能』—（経盛）の再検討を通して—」、『無常の鐘声 平家物語』（松尾華江編、花鳥社、2020.7）、pp.213-229
・「〈二人静〉—音阿弥の演出・元章の解釈」、『観世』 85 巻 3 号、檜書店、2018.3、pp.28-35
・「『御世話筋秘曲』の解説と復元の記録」、『能楽研究』 41、法政大学能楽研究所、2017.3、pp.91-112
・「能の「習事」と番組上の小字注記—「小書」という語の意味するところ—」、『能楽研究』 40、能楽研究所、2016.3、pp.135-160
・「能〈通小町〉遡源」、『国語と国文学』 93 巻 3 号、東京大学国語国文学会、2016.3、pp.3-16

【Outline (in English)】

In this class, you will learn how to apply the consideration of staging to the study of Noh works and how to decipher staging materials.

Learning Objectives are:

- 1) to be able to correctly interpret the content of the noh text,
- 2) to be able to use old materials on staging as material for researching the work.
- 3) to understand what "staging" means to Noh as a traditional performing art.

Each student is responsible for collating old chant manuscripts as preparatory work.

LIT500B2

能楽作品研究 B

山中 玲子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

能は 700 年近い歴史を持つ伝統芸能で、レパートリーもほぼ固定され、演出の決まりも多いが、それでも演者・流儀によりさまざまな演出の工夫があり、すぐれた工夫はそれがまた新たな「決まり」「秘伝」となって伝えられてきた。作品の主題や主人公の人物像をどう解釈するかによって特別の演出が作られている場合もある。この授業では能の作品研究に演出についての考察を活かす方法や、演出資料の解説方法を学ぶ。

【到達目標】

- 1) 謡曲独特の表現に慣れ、テキストの内容を正しく解釈できるようになる。
- 2) 能の所作や囃子の演奏法など、演出に関する古い資料を読み解き、作品研究の材料として使えるようになる。
- 3) 伝統芸能である能にとって「演出」がどういう意味を持つかを理解する。
- 4) 小書と呼ばれる能の替演出の概要を知る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

後期は学生による発表を中心にし、そこで出た問題について必要な講義を混ぜていく形にします。はじめに、小書演出を構成するユニットについていくつか説明をした後、各自の発表に移ります。能の小書演出全体をよく知るためにふさわしい曲目をこちらで指定してあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	能の小書演出概観	前期の復習
第2回	笛の盤渉調について	能の笛が通常よりも高い「盤渉」調で演奏される場合について
第3回	「クツログ」の小書について	舞のなかでの橋懸の利用やシテと囃子方との関係について
第4回	赤頭・黒頭・白頭について	後シテの仮髪の色が持つ意味と替演出について
第5回	能《邯鄲》の演出① テキストの解釈	《邯鄲》のテキストを読み、主題と演出のポイントを知る。
第6回	能《邯鄲》の演出② 小書演出の諸相	《邯鄲》に数多くある小書と作品解釈との関わりについて知る。
第7回	能《海人》の演出① テキストの解釈	《海人》のテキストを読み、主題と演出のポイントを知る。
第8回	能《海人》の演出② 小書演出の諸相	《海人》に数多くある小書と作品解釈との関わりについて知る。
第9回	能《通小町》の演出① テキストの解釈	《通小町》のテキストを読み、主題と演出のポイントを知る。
第10回	能《通小町》の演出② 小書演出の諸相	《通小町》の小書と作品解釈との関わりについて知る。
第11回	能《羽衣》の演出① テキストの解釈	《羽衣》のテキストを読み、主題と演出のポイントを知る。
第12回	能《羽衣》の演出② 小書演出の諸相	《羽衣》の小書と作品解釈との関わりについて知る。
第13回	《石橋》《乱》《道成寺》の小書	重い習いの曲に、ことさら小書演出が多いこと
第14回	新作能と小書演出のユニット	新作能の演出に用いられる技法

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

謡本の古写本や演出資料の解説などは、各自がおこなったうえで授業に参加してもらうことになるので、能楽研究所の閲覧室等での自習時間は多くなるはずです。

【テキスト（教科書）】

使わない

【参考書】

横道万里雄『能にも演出がある 小書演出・新演出など』（2007 年 檜書店）

横道万里雄・山中玲子・松本雍『能を面白く見せる工夫 小書演出の歴史と諸相』（2009 年 檜書店）

【成績評価の方法と基準】

授業内での発言や授業への貢献度（30 %）、担当曲の発表（70 %）

【学生の意見等からの気づき】

今年度の授業は、前年度から参加している学生たちの希望によって決めました。現代の能を彩る「小書」や能演出の基本を押さえ、作品研究と結びつけたいというのが彼らの希望でしたので、それに添うように組み立てていきます。できれば、前期後期併せて受講していただきたいと考えています。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>中世文学 能楽研究

<研究テーマ>能の作品研究・演出研究

<主要研究業績>

・「修羅能以前の『平家の能』—〈経盛〉の再検討を通して—」、『無常の鐘声 平家物語』（松尾葦江編、花鳥社、2020.7）、pp.213-229
・「〈二人静〉—音阿弥の演出・元章の解釈」、『観世』 85 巻 3 号、檜書店、2018.3、pp.28-35

・「『御世話筋秘曲』の解説と復元の記録」、『能楽研究』 41、法政大学能楽研究所、2017.3、pp.91-112

・「能の「習事」と番組上の小字注記—「小書」という語の意味するところ—」、『能楽研究』 40、能楽研究所、2016.3、pp.135-160

・「能〈通小町〉遡源」、『国語と国文学』 93 巻 3 号、東京大学国語国文学会、2016.3、pp.3-16

【Outline (in English)】

In this class, you will learn how to apply the consideration of staging to the study of Noh works and how to decipher staging materials.

Learning Objectives are:

- 1)to be able to correctly interpret the content of the noh text,
- 2)to be able to use old materials on staging as material for researching the work.
- 3) to understand what "staging" means to Noh as a traditional performing art.

Each student is responsible for collating old chant manuscripts as preparatory work.

LIT500B2

能楽資料研究 A

宮本 圭造

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

能楽資料を用いた基礎的研究の方法を学ぶ。

能楽研究の基礎となる資料にはどのようなものがあるか。その概説からはじめ、主に能及び狂言の実際の上演に関わる台本・演出資料の紹介、それらの資料に基づく能楽研究の方法と課題について考察する。

【到達目標】

能楽研究を進める上で最低限必要な文献学的な知識を身に着けるとともに、資料を読解する力、そこから問題点と解決を自ら導き出す力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

研究の基礎となるのは資料であり、資料をいかに集め、それをいかに読解・解釈して真実に近づくかが、研究者の腕の見せ所です。それは、能楽研究においても例外ではありません。戦後、能楽研究を大きく推進する原動力となったのは、新しい資料の発掘と、その精緻な解説作業の積み重ねでした。この授業では、能楽研究を進めていく上で必要となる、能楽資料に関する基本的な知識を身に着けるとと、資料に基づいて研究を構築する方法をそれぞれが見出すことを目的とするものです。幸い、法政大学能楽研究所は、日本でも有数の能楽資料のコレクションを所蔵することで知られています。その中には、能のテキストである謡本をはじめ、演技の習得に関する教則本、能役者の日記、手紙など、ありとあらゆる種類の資料が含まれています。これらを実際の教材として、能楽研究の諸問題について考えていきたいと思います。授業は前半を講義主体で進める予定ですが、後半では学生による発表の場を持ちたいと考えています。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	能楽資料の概要	能楽資料にはどのようなものがあるのか。その概要を紹介する。
第 2 回	能楽資料の伝来	能楽研究所には多数の能楽資料が所蔵されているが、それらがどのような伝来を経たものであるのかを紹介する。
第 3 回	能本と謡本	能のテキストである能本と謡本の関係、および製作過程について考察する。
第 4 回	謡本の諸系統	現存の謡本はいくつかの系統に分かれている。その見分け方と、そうした諸系統がどのようにして形成されてきたのかを考える。
第 5 回	謡本の写本と版本	室町時代における謡本写本の制作状況、江戸時代における謡本の出版状況とその特徴を紹介する。
第 6 回	能の型付の今昔	能の演技を文字に書き留めた型付がどのように形成されてきたか。初期の型付と江戸以降の型付とを比較して、それぞれの特徴を考える。
第 7 回	能の型付の位相	教則本としての型付がどのように作られ、伝えられたのかを考察する。

第 8 回	能の道具に関わる資料	能の面・装束・小道具に関わる資料とその問題点について考察する。
第 9 回	狂言関係資料の概要	能楽資料のうち、狂言に関わる資料の概要を紹介する。
第 10 回	狂言台本の諸問題	狂言台本の諸資料を概観するとともに、台本と実際の上演との関係を検討する。
第 11 回	間狂言台本の諸問題	狂言台本のうち、能一曲の中で演じられる間狂言に関わる台本の諸資料を概観するとともに、その問題点を検討する。
第 12 回	能楽資料を用いた能上演の再現的研究	謡本や型付などの資料を用い、どのような研究が具体的に可能かを検討する。
第 13 回	能楽資料を用いた狂言上演の再現的研究	狂言台本を用い、どのような研究が具体的に可能かを検討する。
第 14 回	総括	これまでの授業を踏まえ、能楽資料を用いた研究の可能性を総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

能楽に関する基本的な著書（岩波講座『能・狂言』など）を読んでおくことが望ましい。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しないが、毎回プリントを参考資料として配布する。

【参考書】

岩波講座『能・狂言』
平凡社『別冊太陽 能』

【成績評価の方法と基準】

出席平常点 30 パーセント、発表・レポート課題 70 パーセント
資料を分析し、自ら問題点を見出すことができているか、それを論理的に説明・文章化することができるかを評価のポイントとする。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 能楽研究 芸能史
<研究テーマ> 能楽史、能面史など
<主要研究業績>

- ①『上方能楽史の研究』（和泉書院、2005 年）
- ②『近代日本と能楽』（法政大学能楽研究所、2017 年、編著）
- ③『金春家文書の世界』（法政大学能楽研究所、2017 年、編著）

【Outline (in English)】

This course deals with the Noh-related materials dating from the Muromachi period to the Meiji period. By the end of the course, students should be able to deeply research documentary materials of Noh. Before/after each class meeting, students will be expected to have read the relevant books. Grading will be decided based on lab reports (70%), and the quality of the students' experimental performance in the lab (30%).

LIT500B2

能楽資料研究 B

宮本 圭造

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

能楽資料を用いた基礎的研究の方法を学ぶ。

能楽研究の基礎となる資料を活用してどのような研究が可能となるか。この授業では、能役者が書いた日記や能の公演に関わる資料、能を見物した人々の記録などを取り上げて、能がどのような環境の中で演じられてきたかを考察する。

【到達目標】

能楽研究を進める上で最低限必要な文献学的な知識を身に着けるとともに、資料を読解する力、そこから問題点と解決を自ら導き出す力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

研究の基礎となるのは資料であり、資料をいかに集め、それをいかに読解・解釈して真実に近づくかが、研究者の腕の見せ所です。それは、能楽研究においても例外ではありません。戦後、能楽研究を大きく推進する原動力となったのは、新しい資料の発掘と、その精緻な解読作業の積み重ねでした。この授業では、能楽研究を進めていく上で必要となる、能楽資料に関する基本的な知識を身に着けると、資料に基づいて研究を構築する方法をそれぞれが見出すことを目的とするものです。幸い、法政大学能楽研究所は、日本でも有数の能楽資料のコレクションを所蔵することで知られています。その中には、能のテキストである謡本をはじめ、演技の習得に関する教則本、能役者の日記、手紙など、ありとあらゆる種類の資料が含まれています。これらを実際の教材として、能楽研究の諸問題について考えていきたいと思います。授業は前半を講義主体で進める予定ですが、後半では学生による発表の場を持ちたいと考えています。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第一回	能楽資料の概要	能楽資料のうち、能の環境に関わる資料にはどのようなものがあるのか。その概要について解説する。
第二回	能役者が書き留めた資料	能楽資料のうち、能役者が書き留めた資料にはどのようなものがあるのかを解説する。
第三回	能伝書の成立と展開	能の演技の心構えを記した能伝書にはどのようなものがあるのかを概観する。
第四回	能伝書に見る能の世界	能伝書から何が読み取れるのか。いくつかの伝書を読み解き、そこから窺える能の世界を読み解く。
第五回	能役者の伝記	能役者の伝記に関わる資料にはどのようなものがあるのかを紹介し、その問題点を考察する。
第六回	能役者の日記—江戸時代—	能役者の日記にはどのようなものがあるのか。ここでは江戸時代の能役者の日記を取り上げて、紹介する。
第七回	能役者の日記—明治時代—	明治時代の能役者の日記を取り上げて、そこから何が読み取れるのかを考察する。

第八回	能の上演記録のさまたま	能の上演に関する記録として番組を取り上げ、その史料としての問題点を論じる。
第九回	能の興行に関する諸資料	能の興行に関する資料を取り上げ、興行形態がどのように変遷したかを考察する。
第十回	能を見た人々の記録	能楽資料の中には、数は多くないが、能を見た人の感想を記したものがいくつかある。それらを紹介して、人々がどのようなまなざしで能を見ていたのかを考察する。
第十一回	能の絵画資料	能の上演の様子を描いた絵画資料を取り上げ、そこから何が読み取れるのかを考察する。
第十二回	能を演ずる人々	能を演ずる人々について、能楽資料からどこまで明らかにできるかを考察する。
第十三回	能が演じられた場	能が演じられた場について、能楽資料からどこまで明らかにできるかを考察する。
第十四回	総括	これまでの授業を踏まえ、能楽資料を用いた研究の可能性を総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

能楽に関する基本的な著書（岩波講座『能・狂言』など）を読んでおくことが望ましい。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しないが、毎回プリントを参考資料として配布する。

【参考書】

岩波講座『能・狂言』
平凡社『別冊太陽 能』

【成績評価の方法と基準】

出席平常点30パーセント、発表・レポート課題70パーセント資料を分析し、自ら問題点を見出すことができているか、それを論理的に説明・文章化することができているかを評価のポイントとする。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 能楽研究 芸能史
＜研究テーマ＞ 能楽史、能面史など
＜主要研究業績＞

- ①『上方能楽史の研究』（和泉書院、2005年）
- ②『近代日本と能楽』（法政大学能楽研究所、2017年、編著）
- ③『金春家文書の世界』（法政大学能楽研究所、2017年、編著）

【Outline (in English)】

This course deals with the Noh-related materials dating from the Muromachi period to the Meiji period. By the end of the course, students should be able to deeply research documentary materials of Noh. Before/after each class meeting, students will be expected to have read the relevant books. Grading will be decided based on lab reports (70%), and the quality of the students' experimental performance in the lab (30%).

ART500B2

現代能楽論

山中玲子・観世鍔之丞・観世喜正・中司由起子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本が世界に誇る伝統芸能、能について基本的な知識を身につけ、その身体表現の特徴を知るとともに、現在の能をとりまく環境（新型コロナウイルス流行や少子高齢化など）の影響を通して、今を生きる能の課題と展望を考える。

【到達目標】

- 1) 能について、参考書を丸写しにした知識だけでなく、自分の言葉で説明できる。
- 2) 能の謡や所作の基本、舞台や装束の特性等を、体験によって知り、自分の言葉で伝えることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

オムニバス方式の授業である。授業日程には通常と異なる部分があるので、「授業計画」でよく確認してほしい。

1) 映像資料も用いながら能についての基礎知識を学ぶ授業と、2) 第一線で活躍中の能楽師による、「役者の身体やその基礎となる稽古」「現代における能の公演形態の問題等を考える授業」を組み合わせ、現代の能楽に関する総合的な知見を身につけていく。能楽堂における実地授業（4コマ分）もおこなう。授業の初めに、前回の授業で提出されたリアクションペーパーからいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	9月26日ガイダンス (中司・山中)	講義および実習についてのガイダンス。受講に必要な最低限の基礎知識を得る。
第2回	10月3日能の特色 (観世鍔之丞)	能楽師自身の言葉を通して、能の芸の特色を知る。
第3回	10月17日能の伝承 (観世鍔之丞)	能がどのように伝承されているのか、能楽師の修業について知る。
第4回	10月24日能の基礎知識 (中司)	次回の能楽師による実習に向けて、能の作品・能舞台・演技などの基本知識を得る。
第5回	10月31日9時30分～12時30分 実習①（観世鍔之丞・中司・山中）	青山の鍔仙会能舞台にて実習。能舞台上を歩く。能の謡・舞の体験。第6回と連続授業。
第6回	10月31日9時30分～12時30分 実習②（観世鍔之丞・中司・山中）	青山の鍔仙会能舞台にて実習。能舞台上を歩く。能の謡・舞の体験。第5回と連続授業。
第7回	11月7日能楽師の活動 (観世喜正)	家元制度や内弟子制度など、現代に生きる能楽師の暮らし（活動の実態）について学ぶ。
第8回	11月14日能の興行 (観世喜正)	能の興行がどのようにおこなわれるのか、計画の段階から当日までの流れをおさえ、新型コロナウイルス流行の影響と能界の対応を知る。
第9回	11月21日 これまでの振り返り (中司)	これまでの講義・実習の振り返りと討議をおこなう。

第10回	11月28日9時30分～12時30分 実習③（観世喜正・中司・山中）	矢来能楽堂での実習。能舞台の特徴。能の謡と所作の体験。第11回と連続授業。
第11回	11月28日9時30分～12時30分 実習④（観世喜正・中司・山中）	矢来能楽堂での実習。能装束に実際に触れ、その扱いを学ぶ。第10回と連続授業。
第12回	12月5日 能の演技（中司）	映像を視聴して、能の演技の特色を学ぶ。
第13回	12月12日 能の普及（観世喜正）	国内での普及活動と海外への発信の状況を通して、能の普及の実態と今後の展開を考える。
第14回	1月16日。レポート発表とディスカッション（山中・中司）	各自のレポートを発表し、討議をおこなう。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

受講期間中に必ず実際に能楽堂へ足を運んで能を見て、その経験をレポートに生かしてもらいたい。実際の能公演を鑑賞するのが難しい場合は、NHKの古典芸能番組やYouTube等に上がっている能の動画を必ず視聴してほしい。

【テキスト（教科書）】

テキストは用いない。適宜プリントを配布する。

【参考書】

受講前に、市販のガイドブックや宣伝チラシなど、何でも良いので自分なりに能についての情報を得ておいてほしい。「文化デジタルライブラリー」にも基本情報を載せてある。
<http://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/>

【成績評価の方法と基準】

レポート（30％）。課題「現在の社会状況において能楽を普及、活性化するにはどうしたらよいか」、2回の実習への参加（50％）、平常点（20％。講義中の発言等）を総合して決める。

【学生の意見等からの気づき】

文系・理系の学生が混ざる珍しいクラスなので、最終回に出席者が互いの意見を聞き合う機会を設けた。最終回に限らず、通常の授業中でも、ちょっとした感想、小さな疑問など、遠慮せず、積極的に発言してほしい。

【その他の重要事項】

★第一線で活躍中の能楽師を講師に招いての授業なので、授業日程が多少変則的になっています。特に2回の実習授業は、学外の施設にて、1限・2限の時間帯2コマ分を使っての授業ですが、単位取得のためには2回の実習授業出席は必須としますので、よく考えて受講計画をたててください。

★実習時には足袋が必要となります。入手方法はガイダンスの際に伝えます。

【Outline (in English)】

The aim of this class is:

- 1) to learn basic information about Noh and its body techniques
 - 2) to think about the meaning of Noh in modern society.
- Students are required to watch a Noh performance at a Noh theater during the course.

LIN500B2

日本語・日本文学の基礎A

竹林 一志

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本古典文学の言語表現は如何なるものか、それをどのように解析すればよいのか、ということを知る（本授業は、おもに留学生を対象とする）。一字一句をゆるがせにせず、古典本文を丁寧に読み解けるようになることを目指す。

【到達目標】

1. 日本古典文学の言語表現の特徴について、特定の作品の具体例を挙げつつ説明することができる。
2. 日本古典文学の言語表現を的確に解析するための方法・姿勢を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

いわゆる「古典文法」の基礎知識を確認した後、古代・中世・近世の文学作品を対象として表現解析を行う。授業は、テキストと配付プリントを用い、おもに講義形式で進める。提出物（授業内容に関するワークシート）に対するフィードバックは次の授業回において口頭で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	本授業の全体像を伝える。
第2回	古典文法	助詞・助動詞を中心に古典文法の基礎知識を確認する。
第3回	表現解析の方法	日本古典文学の表現解析法について概説する。
第4回	『古今和歌集』所収歌の読解（先行研究についての検討）	『古今和歌集』「春歌上」の和歌（特に16番歌）について先行研究の論を検討する。
第5回	『古今和歌集』所収歌の読解（新たな解釈の提示）	『古今和歌集』「春歌上」の和歌（特に16番歌）の表現を解析する。
第6回	『枕草子』冒頭部の読解（先行研究についての検討）	『枕草子』冒頭部について先行研究の論を検討する。
第7回	『枕草子』冒頭部の読解（新たな解釈の提示）	『枕草子』冒頭部の表現を解析する。
第8回	『大鏡』『平家物語』の重層表現（先行研究についての検討）	『大鏡』『平家物語』における謎の表現について先行研究の論を検討する。
第9回	『大鏡』『平家物語』の重層表現（新たな解釈の提示）	『大鏡』『平家物語』における謎の表現を解析する。
第10回	『徒然草』第89段の読解（先行研究についての検討）	『徒然草』第89段について先行研究の論を検討する。
第11回	『徒然草』第89段の読解（新たな解釈の提示）	『徒然草』第89段の表現を解析する。
第12回	松尾芭蕉の俳句の読解（先行研究についての検討）	松尾芭蕉の病中吟「旅に病んで…」について先行研究の論を検討する。
第13回	松尾芭蕉の俳句の読解（新たな解釈の提示）	松尾芭蕉の病中吟「旅に病んで…」の表現を解析する。

第14回 総括

本授業の要点をまとめつつ、受講者の理解度を確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間（計4時間）を標準とする。各回の授業までに、所定のテキスト箇所を一読しておくこと。授業後は、ノート、テキストや配付物を見直しておくこと。

【テキスト（教科書）】

『日本古典文学の表現をどう解析するか』竹林一志、笠間書院、2009年、2,200円（税別）

【参考書】

『徒然草拔書』小松英雄、講談社
『みそひと文字の抒情詩』小松英雄、笠間書院

【成績評価の方法と基準】

学期末レポート（上記の到達目標に関連する課題を出す）：60％
提出物：30％
受講姿勢：10％

【学生の意見等からの気づき】

専門的な内容を分かりやすく解説するように努めます。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞
日本語文法、日本古典文学の表現、三浦綾子文学
＜研究テーマ＞
文の本質、助詞・助動詞の意味・用法、文学表現の解析など
＜主要研究業績＞
単著：
『日本古典文学の表現をどう解析するか』笠間書院、2009年
『聖書で読み解く『氷点』『続 氷点』いのちのことば社、2014年
『文の成立と主語・述語』花鳥社、2020年

【Outline (in English)】

【Course outline】

In this class we study about the linguistic expressions of Japanese classical literature and the methods of analyzing them. The aim of the class is to improve the skills for reading Japanese classical literature. We try not to neglect any word or phrase in the texts. This class is mainly intended for overseas students.

【Learning Objectives】

The goals of this course are as follows:

1. Students can explain the characteristics found in the expressions of Japanese classical literature, drawing instances from works.
2. Students acquire the methods and attitudes for analyzing the expressions of Japanese classical literature.

【Learning activities outside of classroom】

Before each class meeting, you will be expected to have read the relevant chapter from the text. And after each class meeting, you will be expected to reread your notes, text and handouts. Your study time will be about four hours for a class.

【Grading Criteria /Policy】

Your overall grade in the class will be decided based on the following:

Term-end report: 60%, Works to be submitted: 30%, in-class contribution 10%

LIN500B2

日本語・日本文学の基礎B

竹林 一志

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

『伊勢物語』第1段～第15段を丁寧に読み解きながら、日本古典文学の言語表現と、その解析法について学ぶ（本授業は、おもに留学生を対象とする）。仮名文の性質を理解し、ディスコースの中で表現を読み解けるようになることを目指す。

【到達目標】

1. 『伊勢物語』の言語表現の特徴について、具体例を挙げつつ説明することができる。
2. 日本古典文学の言語表現を的確に解析するための方法・姿勢を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

テキストと配付プリントを用い、おもに演習形式（受講者の分担発表と出席者全員による討議）で進める。提出物（授業内容に関するワークシート）に対するフィードバックは次の授業回において口頭で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	テキスト「読者のみなさんへのよびかけ」の読解	本授業の全体像を伝えた後、テキスト「読者のみなさんへのよびかけ」を一緒に読む。発表の分担も行う。
第2回	テキスト「イントロダクション」の読解	担当教員作成のワークシートをもとに、テキスト「イントロダクション」を読み解く。
第3回	第1段「昔、をところ」～「心地まどひにけり」の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第1段「昔、をところ」～「心地まどひにけり」の表現を解析する。
第4回	第1段「をとこの着たりける」～「雅をなむしける」の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第1段「をとこの着たりける」～「雅をなむしける」の表現を解析する。
第5回	第2段・第3段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第2段・第3段の表現を解析する。
第6回	第4段・第5段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第4段・第5段の表現を解析する。
第7回	第6段～第8段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第6段～第8段の表現を解析する。
第8回	第9段「昔、をとこありけり」～「ほとびにけり」の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第9段「昔、をとこありけり」～「ほとびにけり」の表現を解析する。
第9回	第9段「行き行きて」～「しほじりのやうになむ、ありける」の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第9段「行き行きて」～「しほじりのやうになむ、ありける」の表現を解析する。

第10回	第9段「なほ行き行きて」～「こそぞりて泣きにけり」の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第9段「なほ行き行きて」～「こそぞりて泣きにけり」の表現を解析する。
第11回	第10段～第12段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第10段～第12段の表現を解析する。
第12回	第13段・第14段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第13段・第14段の表現を解析する。
第13回	第15段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第15段の表現を解析する。
第14回	総括	本授業の要点をまとめつつ、受講者の理解度を確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間（計4時間）を標準とする。
各回の授業までに、所定のテキスト箇所を一読しておくこと。
授業後は、ノートやテキスト、配付物を見直しておくこと。

【テキスト（教科書）】

『伊勢物語の表現を掘り起こす』小松英雄、笠間書院、2010年、1,900円（税別）

【参考書】

『日本古典文学の表現をどう解析するか』竹林一志、笠間書院
『みそひと文字の抒情詩』小松英雄、笠間書院

【成績評価の方法と基準】

学期末レポート（上記の到達目標に関連する課題を出す）：40％
発表：40％
提出物：10％
受講姿勢：10％

【学生の意見等からの気づき】

専門的な内容を分かりやすく解説するように努めます。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

春学期科目「日本語・日本文学の基礎A」（「日本語の歴史と現在I」）を受講していることが望ましい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本語文法、日本古典文学の表現、三浦綾子文学

<研究テーマ>

文の本質、助詞・助動詞の意味・用法、文学表現の解析など

<主要研究業績>

単著：

『日本古典文学の表現をどう解析するか』笠間書院、2009年
『聖書で読み解く『氷点』『続 氷点』』いのちのことば社、2014年
『文の成立と主語・述語』花鳥社、2020年

【Outline (in English)】

【Course outline】

In this class we carefully read 'The tale of Ise' (from chapter 1 through 15) for studying about the linguistic expressions of Japanese classical literature and the methods of analyzing them. The aim of the class is to understand the characteristics of classical texts written in *kana* and interpret the linguistic expressions precisely in the context. This class is mainly intended for overseas students.

【Learning Objectives】

The goals of this course are as follows:

1. Students can explain the characteristics found in the expressions of 'The tale of Ise', drawing instances from the work.
2. Students acquire the methods and attitudes for analyzing the expressions of Japanese classical literature.

【Learning activities outside of classroom】

Before each class meeting, you will be expected to have read the relevant chapter from the text. And after each class meeting, you will be expected to reread your notes, text and handouts. Your study time will be about four hours for a class.

【Grading Criteria /Policy】

Your overall grade in the class will be decided based on the following:

Term-end report: 40%, Presentation: 40%, Works to be submitted: 10%, in-class contribution 10%

LIT500B2

表現と社会

内藤 裕之

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

知的財産権について理解し、現実には起る事例に沿って、争点を理解することで、実生活における的確な判断が行えることを目指す。

【到達目標】

事例に対して、自身の判断ができること

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講人数によって変更するが、基本的には前半を知的財産権についての講義、後半を実際の判例に基づく各人の発表形式で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	授業概観と進め方	半期全体の進め方と手順
第 2 回	知的財産権とは何か	知的財産権について考える
第 3 回	知的財産権の判例を検討する	争点の分析、判決について現場との乖離を考える。
第 4 回	ジャンルで考える	言語、写真、建築、美術などジャンルによる権利侵害の比較。
第 5 回	メディアで考える	メディアの種類による比較。
第 6 回	実際の判例に関する解説 1	判決からみる、侵害の理由
第 7 回	実際の判例に関する解説 2	判決からみる、侵害の理由
第 8 回	受講者が関心を持った実際の判例①を検討する。	受講者による発表。補足説明とディスカッション。
第 9 回	受講者が関心を持った実際の判例②を検討する。	受講者による発表。補足説明とディスカッション。
第 10 回	受講者が関心を持った実際の判例③を検討する。	受講者による発表。補足説明とディスカッション。
第 11 回	受講者が関心を持った実際の判例④を検討する。	受講者による発表。補足説明とディスカッション。
第 12 回	受講者が関心を持った実際の判例⑤を検討する。	受講者による発表。補足説明とディスカッション。
第 13 回	受講者が関心を持った実際の判例⑥を検討する。	受講者による発表。補足説明とディスカッション。
第 14 回	総括	全体に関する締めくくりと、質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

判決の出ている知的財産権についての訴訟例を探し、自身で判決内容について検討する。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

裁判例を探して課題点を発表すること 60%、他の発表者への積極的質問、発言など 30%、平常点 10%。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

対面形式とします。

【担当教員の専門分野等】

総合出版社の講談社で、「FRIDAY」「PENTHOUSE」「群像」「小説現代」などの雑誌編集や、文庫、書き下ろし単行本の企画、編集、また文芸分野の責任者。

【Outline (in English)】

【Course outline】 By understanding intellectual property rights and understanding the issues in line with actual cases, we aim to make accurate decisions in real life.

【Learning Objectives】 At the end of the course, students are expected to have the judgment of intellectual property infringement

【Learning activities outside of classroom】 Usually you might consider how is the intellectual property.

【Grading Criteria/Policy】 Your overall grade in the class will be decided based on the following
the active consideration about judgment of intellectual property: 60%, in class contribution: 40%

LIT500B2

編集理論

仲俣 暁生

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「編集」という行為がもつ創造的機能をさまざまな現代日本の雑誌の事例をもとに理解する。

【到達目標】

「編集」という行為の価値を理解することを通して、日本における出版メディアの現代史についての基礎的な知識を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義を中心としつつも、各自が課題を設定しての研究レポートや討論をおりまぜる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	「編集」（エディターシップ）とは何か	この講義において取り扱う「編集」の範囲について確定し、全体のオリエンテーションとする。
第 2 回	編集されたメディアとしての「雑誌」	「雑誌」というメディアを編集という観点から概観する。
第 3 回	雑誌における「編集者」とはなにか	雑誌において「編集者（editor）」が担うさまざまな機能を理解する。
第 4 回	「雑誌」のケーススタディ①～文芸誌／論壇誌の場合	おもに文芸、論説などをあつかう雑誌を「編集」という観点から分析する。
第 5 回	「雑誌」のケーススタディ②～ビジュアル雑誌の場合	グラフィカルな要素をもつ雑誌を「編集」という観点から分析する。
第 6 回	「雑誌」のケーススタディ③～ジャンル雑誌の場合	特定のジャンルに根ざした雑誌を「編集」という観点から分析する。
第 7 回	「雑誌」のケーススタディ④～ミニコミ、ジンの場合	ミニコミやジンと呼ばれる「小さなメディア」を「編集」という観点から分析する。
第 8 回	「雑誌」における編集についての中間まとめと討議	ケーススタディ①から③までを受けて学生をまじえてディスカッションを行う。
第 9 回	「編集」の拡散	出版以外の世界に「編集」という行為が広がっていることを理解する。
第 10 回	デジタルメディアにおける「編集」のケーススタディ①～ワールドワイドウェブの登場	インターネット上における「編集」行為の場としての WWW のもつ意義を理解する。
第 11 回	デジタルメディアにおける「編集」のケーススタディ②～ウェブ 2.0 以後	「ウェブ 2.0」以後に起きた WWW の変質について「編集」という観点から理解する。
第 12 回	デジタルメディアにおける「編集」のケーススタディ③～ソーシャルメディア	ソーシャルメディア勃興による「編集」の危機について理解する。
第 13 回	あらたな「編集」に向けての討議	これまでの講義を受けて、現在のメディア環境のなかでどのような「編集」が可能かを討議する。

第 14 回 総まとめ

講義全体のまとめとレポートについてのガイダンスを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
講義内で培った「編集」への問題意識をもとに、身のまわりの出版物やメディア環境をとらえかえすこと。具体的な出版物（雑誌や書物、ウェブサイト）およびそれを編集している人物（編集者）や出版主体について、つねに関心を抱くことが望まれる。

【テキスト（教科書）】

必要な教材は講義の際に配布する。とくに教科書は指定しないが、参考図書には自発的に目を通すことを推奨する。

【参考書】

- ・外山滋比古『新・エディターシップ』（みすず書房、2009）
- ・佐藤卓己編『青年と雑誌の黄金時代——若者はなぜそれを読んでいたのか』（岩波書店、2015）
- ・野中モモ、ばるばら『日本の ZINE について知ってることすべて：同人誌、ミニコミ、リトルプレス—自主制作出版史 1960～2010 年代』（誠文堂新光社、2017）
- ・赤田祐一、ばるばら『20 世紀エディトリアル・オデッセイ：時代を創った雑誌たち』（誠文堂新光社、2014）
- ・仲俣暁生『再起動せよと雑誌はいう』（京阪神エルマガジン社、2011）

【成績評価の方法と基準】

講義に対する姿勢＝30%、自主課題への取り組み＝30%、最終レポート＝40%

【学生の意見等からの気づき】

昨年度はすべてオンラインでの開講となったため、事前に参考資料の配布を行った。今季は対面講義となる場合も、できるだけ事前学習が可能となるようにしたい。

【学生が準備すべき機器他】

オンライン講義となる可能性があるため、なるべく良好な通信環境とパソコンの用意を望む。

【担当教員の専門分野等】

- <専門領域>出版論、メディア論
- <研究テーマ>雑誌研究、メディア環境論、現代日本文学論
- <主要研究業績>
- ①『再起動せよと雑誌はいう』（京阪神エルマガジン社、2011）
- ②編著『「電子社会」誕生～日本語ワープロからインターネットまで』（晶文社、1998）
- ③『極西文学論』（晶文社、2004 年）

【Outline (in English)】

To understand the creative function of "editorship" through the case studies of various magazines in modern Japan.

LIT500B2

作家特殊研究 A

温 又柔

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

豊富なキャリアをもちなお第一線で活躍をつづける文芸作家が授業を担当し、学生たちはその作家の作品をとりあげ作家自身の前で研究発表を行います。それを通じて、授業の場で文芸作家と大学院による創造的な対話を行います。

【到達目標】

担当講師が創作発表した文学作品を、担当講師とともに研究することによって作品生成のプロセスを学びます。

2022 年度は、幼少期より「本を書く人」や「お話を作ること」に憧れを抱いていた担当講師・温又柔が、自分が取り組むべき創作の素材を見出し、それを一篇の「小説」に仕上げるまでの過程を追体験してもらうことで、受講生各自の「文学研究」や「創作実践」を活性化させます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

ゼミナール形式の研究発表を中心とします。必要に応じて講義形式も織り交ぜます。講義内容と関連する映画鑑賞なども検討しています。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	講義の内容について概説する
第 2 回	研究作品の決定	担当講師による自著解説と各自の今季の研究目標を定める
第 3 回	作家との対話 1	受講生の質問を通して、作家と対話する
第 4 回	作品研究 1	作品研究を発表する
第 5 回	作家との対話 2	受講生の質問を通して、作家と対話する
第 6 回	作品研究 2	作品研究を発表する
第 7 回	作家との対話 3	受講生の質問を通して、作家と対話する
第 8 回	作品研究 3	作品研究を発表する
第 9 回	作家との対話 4	受講生の質問を通して、作家と対話する
第 10 回	作品研究 4	作品研究を発表する
第 11 回	作家との対話 5	受講生の質問を通して、作家と対話する
第 12 回	作品研究 5	作品研究を発表する
第 13 回	作家との対話 6	受講生の質問を通して、作家と対話する
第 14 回	春学期のまとめ	春学期の講義を概括する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

必要に応じて授業内で指示します。

【テキスト（教科書）】

温又柔著『「国語」から旅立って』（新曜社、2019、¥1300）。また、温又柔のこれまでの作品のうち受講者が自らの「文学研究」あるいは「創作」をする上で参照にしたいと思うもの。

【参考書】

課題に合わせてその都度提示します。

【成績評価の方法と基準】

作品研究の内容及び受講態度（担当講師や受講仲間との「対話」に真摯であることを望みます）によって総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

担当講師が単年交代する授業であるため、とくにありません。

【担当教員の専門分野等】

日本語圏文学・小説。越境、移住、ディアスポラ。主な著作に、小説『魯肉飯のさえずり』（中央公論新社、2020）、『空港時光』（河出書房新社、2018）、『真ん中の子どもたち』（集英社、2017）、エッセイ『台湾生まれ 日本語育ち』（白水 U ブックス、2018）など。

【Outline (in English)】

< Course Outline > A literary creator with a rich career who is active with his/her writing in the frontline initiates this class, and the students take up the writer's works and give research presentations to the writer himself/ herself. Through this process, we will develop creative dialogues between the graduate school and the literary creator.

< Learning Objectives > Students will study the process of creating works of literature by researching the works of literature created and published by the instructor together with the instructor himself/ herself. In FY2022, the instructor, Wen Yourou, who has longed to be a "book writer" and "storyteller" since his childhood, will help the students to discover the creative material they should work on and to experience the process of turning it into a "novel," thereby stimulating their own "literary research" and "creative writing practice."

< Learning Activities Outside of Classroom > Instructions will be given in class as needed.

< Grading Criteria/ Policy > The content of the work research and the attitude of the students (sincere "dialogue" with the instructor and fellow students is desirable) will be comprehensively evaluated.

LIT500B2

作家特殊研究 B

温 又柔

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

豊富なキャリアをもちなお第一線で活躍をつづける文芸作家が授業を担当し、学生たちはその作家の作品をとりあげ作家自身の前で研究発表を行います。それを通じて、授業の場で文芸作家と大学院による創造的な対話を行います。

【到達目標】

担当講師の作品研究や人物インタビュー、授業で学んだことを生かした学生自身の創作実践などを通して、一冊の「本（冊子）」を完成させるまでの過程を体験しながら、文学作品や文芸創作者が置かれている社会的状況などへの理解を多角的に、かつ総合的に獲得することを目指します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

学生それぞれが作家研究の冊子に寄せる企画を一つ提出します。企画には作家研究、作品研究、インタビュー、書誌など読み物としての雑誌を構成する記事が含まれます。希望者はオリジナルの小説を創作することも可能です。企画は授業内で発表の上、修正して冊子にまとめます。なおインタビューと書誌作成はかならず行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	研究冊子について	作家研究の冊子作成について説明する。
第 2 回	企画提出	冊子のための企画を提出・検討する。
第 3 回	企画の修正・決定	冊子のための企画を再提出・決定する。
第 4 回	インタビュー依頼	作家へのインタビューを模擬依頼する。
第 5 回	インタビュー収録	作家へのインタビューを収録する。
第 6 回	作家研究 1	企画に応じた研究を発表する。
第 7 回	作家研究 2	企画に応じた研究を発表する。
第 8 回	作家研究 3	企画に応じた研究を発表する。
第 9 回	作家研究 4	企画に応じた研究を発表する。
第 10 回	作家研究 5	企画に応じた研究を発表する。
第 11 回	作家研究 6	企画に応じた研究を発表する。
第 12 回	冊子原稿完成・入稿	研究冊子の原稿の最終確認をする。
第 13 回	冊子著者校正	研究冊子の著者校正を行う。
第 14 回	秋学期まとめ	秋学期の講義を概括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

必要に応じて授業内で指示します。

【テキスト（教科書）】

温又柔、木村友祐著『私とあなたのあいだ いま、この国で生きるということ』（明石書店、2020、¥ 1700）。また、温又柔のこれまでの作品のうち受講者が自らの「文学研究」あるいは「創作」をする上で参照にしたいと思うもの。

【参考書】

課題に合わせてその都度提示します。

【成績評価の方法と基準】

冊子作りに向けた作品研究の内容及び受講態度（担当講師や受講仲間との「対話」に真摯であることを望みます）によって総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

担当講師が単年交代する授業であるため、とくにありません。

【担当教員の専門分野等】

日本語圏文学・小説。越境、移住、ディアスポラ。主な著作に、小説『魯肉飯のさえずり』（中央公論新社、2020）、『空港時光』（河出書房新社、2018）、『真ん中の子どもたち』（集英社、2017）、エッセイ『台湾生まれ 日本語育ち』（白水 U ブックス、2018）など。

【Outline (in English)】

< Course Outline > A literary creator with a rich career who is active with his/her writing in the frontline initiates this class, and the students take up the writer's works and give research presentations to the writer himself/herself. Through this process, we will develop creative dialogues between the graduate school and the literary creator.

< Learning Objectives > Through research on the works of the instructor, interviews with the instructor and students' own creative practices based on what they have learned in class, students will experience the process of completing a "book (pamphlet)" and gain a comprehensive and multi-dimensional understanding on the social conditions literary works and literary creators are placed.

< Learning Activities Outside of Classroom > Instructions will be given in class as needed.

< Grading Criteria/ Policy > The contents of the research for the booklet and the attitude of the students (we hope that the students are sincere in their "dialogue" with the instructor and their fellow students) will be evaluated comprehensively.

LIT500B2

文芸創作研究 A

島田 雅彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

五感と言葉の関係を構築し直し、表現能力を拡張する。創作、批評がそのまま商品となるような実践的な指導を目指す。表現手段は小説、詩、映像、漫画などさまざまな形態が考えられよう。古今東西の主要作品がどのように描かれてきたかの検証を行いつつ、より能動的に創作活動を行い、書きつつ学ぶ。

【到達目標】

春学期・秋学期一編ずつの短編もしくは通年で一本の中編を仕上げる。その作業は各自で行うが、共同で作品の映像化を試みたり、現代文学の批評を試みたりする。文芸誌の新人賞獲得を目指し、さらには書き手としての実践的ノウハウを身につける。授業内で発表した小説、学期末に完成させた小説を評価の対象とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義とワークショップを交互に行う。個々のテーマによる創作は、随時発表の機会を作る。書くことと読むことは表裏一体だが、書く技術の研究を通じ、読み巧者になる手もある。実例を挙げつつ、実作者の立場から小説の書き方 ABC を論じる。また映像化された古典や文学作品を研究し、文章表現の映像化のプロセスを検証し、実際にシナリオ化、撮影をしてみる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	文学とはどんな営みか？	日本語とはどういう言語か？ 書く動機
2	ジャンル論	ロマンスと小説の違い 漱石の試み
3	小説の構成	起承転結とストーリー
4	一人称	人称の研究 私語り。日記私小説
5	140字から始める	実践編 他者としての私
6	三人称	語り手の発明
7	神話の活用	素材と方法の組み合わせ 神話を現代化する。
8	夢の活用 1	漱石「夢十夜」の研究
9	夢の活用 2	夢を素材にショートショートを書く
10	小説のトポロジー 1	場所論 小説の舞台。上京小説。ロードノベル
11	小説のトポロジー 2	フィールドワーク 場所を描く 都内のある場所を選び、その印象、空間を描写してみる。
12	描写の手法	古今東西の優れた描写のサンプル ングとテーマを決め、描写の腕を磨くワークショップ
13	小説のテーマの研究 1	労働を描く 奇妙な仕事 エキスパートの世界
14	短編小説	各人のテーマと題材による短編執筆指導

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

指示したテキストを読み込んでくること。文芸誌の新人賞への応募。

【テキスト（教科書）】

『小説作法 ABC』島田雅彦著 新潮選書 2009

『深読み日本文学』島田雅彦著 集英社インターナショナル新書 2017

【参考書】

授業で指示する。

【成績評価の方法と基準】

出席、各回の課題の消化具合、セメスター末に提出が義務づけられている創作の出来で評価する。評価基準はレポート課題 80 %、平常点 20 %とする。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

創作 日本近代文学 日本戦後史 日欧交流史

<研究テーマ>

小説論 サブカルチャー研究

<主要研究業績>

小説作法ABC 新潮選書2008

徒然王子全2巻 朝日新聞出版2009

悪貨 講談社2010

傾国子女 文藝春秋2013

ニッチを探して 新潮社2013

往生際の悪い奴 日本経済新聞社2014

暗黒寓話集 文藝春秋2014

虚人の星 講談社2015

【Outline (in English)】

Rebuild the relationship between the senses and words and extend the expression skill. While aiming at practical guidance that creation and criticism become sellable products in various forms such as novels, poetry, images, cartoons, etc. While conducting verification on how major works have been drawn, we will activate creative abilities and learn skills while writing. Evaluate by attendance, digestion of each assignment, and creation that is required to be submitted at the end of the semester. The evaluation criteria are 80% for report assignments and 20% for normal points.

LIT500B2

文芸創作研究 B

島田 雅彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

五感と言葉の関係を構築し直し、表現能力を拡張する。創作、批評がそのまま商品となるような実践的な指導を目指す。表現手段は小説、詩、映像、漫画などさまざまな形態が考えられよう。古今東西の主要作品がどのように描かれてきたかの検証を行いつつ、より能動的に創作活動を行い、書きつつ学ぶ。

【到達目標】

春学期・秋学期一編ずつの短編もしくは通年で一本の中編を仕上げる。その作業は各自で行うが、共同である作品の映像化を試みたり、現代文学の批評を試みる。文芸誌の新人賞獲得を目指し、さらには書き手としての実践的ノウハウを身につける。授業内で発表した小説、学期末に完成させた小説を評価の対象とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義とワークショップを交互に行う。個々のテーマによる創作は、随時発表の機会を作る。書くことと読むことは表裏一体だが、書く技術の研究を通じ、読み巧者になる手もある。実例を挙げつつ、実作者の立場から小説の書き方 ABC を論じる。また映像化された古典や文学作品を研究し、文章表現の映像化のプロセスを検証し、実際にシナリオ化、撮影をしてみる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	小説の時間 1	過去とどう向き合うか 歴史上の人物、過去の出来事とどう向き合うか
2	小説の時間 2	記憶、時間軸、回想
3	小説のテーマの研究 2	愛の形 異性愛、同性愛 変態性欲
4	写生文	漱石の散文理論のリサイクル
5	キャラクター作り 1	魅力的な人物造型の実践 競作
6	キャラクター作り 2	魅力的な人物造型の実践 競作
7	小説のテーマの研究 3	死のデザイン あの世の研究 自殺 病気小説
8	小説のテーマの研究 4	交換 経済と文学 贋金づくり 詐欺というフィクション
9	創作	素材選び、プロット作り
10	創作	細部の検討、構成
11	鑑賞 1	文芸批評の実践
12	鑑賞 2	映画評、音楽評
13	創作中間発表	進行状況の報告
14	個人面談	細部のチェック

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

指示したテキストを読み込んでくること。文芸誌の新人賞への応募。ゼミ主催のウェブマガジンへの発表。

【テキスト（教科書）】

『小説作法 ABC』島田雅彦著 新潮選書 2009

『深読み日本文学』島田雅彦著 集英社インターナショナル新書 2017

【参考書】

授業で指示する。

【成績評価の方法と基準】

出席、各回の課題の消化具合、セメスター末に提出が義務づけられている創作の出来で評価する。評価基準はレポート課題 80 %、平常点 20 %とする。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

創作 日本近代文学 日本戦後史 日欧交流史

<研究テーマ>

小説論 サブカルチャー研究

<主要研究業績>

小説作法 ABC 新潮選書 2008

徒然王子全 2 巻 朝日新聞出版 2009

悪貨 講談社 2010

傾国子女 文藝春秋 2013

ニッチを探して 新潮社 2013

往生際の悪い奴 日本経済新聞社 2014

暗黒寓話集 文藝春秋 2014

【Outline (in English)】

Rebuild the relationship between the senses and words and extend the expression skill. While aiming at practical guidance that creation and criticism become sellable products in various forms such as novels, poetry, images, cartoons, etc. While conducting verification on how major works have been drawn, we will activate creative abilities and learn skills while writing. Evaluate by attendance, digestion of each assignment, and creation that is required to be submitted at the end of the semester. The evaluation criteria are 80% for report assignments and 20% for normal points.

OTR600B2

日本文芸特殊研究Ⅰ A

坂本 勝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

万葉集を講読する。

【到達目標】

上代文学作品の基本的な読解法を学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義と演習形式によって進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	上代文学研究法について説明する。	注釈書の役割について。
第 2 回	各自、万葉集の作家研究についての第 1 のテーマを選定して発表する。	資料を用意して研究発表する。
第 3 回	各自、前回選定した作家研究のテーマにそって、具体的に取り上げる作品を選定して発表する。	資料を用意して研究発表する。
第 4 回	前回選定した作品について、注釈上の問題点を確認し発表する。	資料を用意して研究発表する。
第 5 回	前回選定した作品について、研究史上の問題点を確認して発表する。	資料を用意して研究発表する。
第 6 回	前回選定した作品について、引き続き研究史上の問題点を確認して発表する。	資料を用意して研究発表する。
第 7 回	各自、万葉集の作家研究についての第 2 のテーマを選定して発表する。	資料を用意して研究発表する。
第 8 回	各自、前回選定した作家研究のテーマにそって、具体的に取り上げる作品を選定して発表する。	資料を用意して研究発表する。
第 9 回	前回選定した作品について、注釈上の問題点を確認し発表する。	資料を用意して研究発表する。
第 10 回	前回選定した作品について、研究史上の問題点を確認して発表する。	資料を用意して研究発表する。
第 11 回	前回選定した作品について、引き続き研究史上の問題点を確認して発表する。	資料を用意して研究発表する。

第 12 回 前回までの発表を踏まえて、レポート作成の方針について発表する。

第 13 回 前回までの発表を踏まえて、再度、レポート作成の方針について発表する。

第 14 回 まとめと今後の課題を 各自の発表について問題点、評価すべき点について講評する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

配布資料をよく読んでおくこと。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間（計 4 時間）を標準とする。

【テキスト（教科書）】

万葉集（原文付き）

【参考書】

必要に応じて提示する。

【成績評価の方法と基準】

学期末のレポート提出（60 %）、発表（40 %）により評価する。

【学生の意見等からの気づき】

作品を丁寧に読むことの重要性。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 上代文学

<研究テーマ> 古事記、万葉集の作品研究<主要研究業績>

【Outline (in English)】

【Course outline】 Read the Manyoshu（万葉集），
【Learning Objectives】 To understand the basic research methods of Japanese literature of the upper ages.

【Learning activities outside of classroom】 Please read the handouts carefully. The standard preparation and review time for a class is 2 hours each, (4 hours for a week).

【Grading Criteria /Policy】 Grading will be based on the term paper(60%) and the submission of several assignments and reaction papers (40%). will be based on the term paper(60%) and the submission of several assignments and reaction papers (40%). (Course outline)

(Learning Objectives)

(Learning activities outside of classroom)

(Grading Criteria /Policy)

OTR600B2

日本文芸特殊研究 I B

坂本 勝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

万葉集を精読する。

【到達目標】

注釈書の精読を通して作品解釈の問題点を検討し、万葉集読解の基本的力を養う。学生が作品論研究の抱える問題点についての的確に説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

万葉集の中から各自研究テーマ・作品を選び、注釈書の精読を通して作品解釈の問題点を発表する。最終授業で、13 回までの講義内容のまとめや復習だけでなく、授業内で行った課題に対する講評や解説も行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	授業概説	万葉集研究の歴史と問題点について概説する。
第 2 回	各自、第 1 の研究テーマを選定して発表する。	左記発表について批評、検討する。
第 3 回	前回選定したテーマについて、その妥当性を検証し発表する。	左記発表について批評、検討する。
第 4 回	各自が選定したテーマにそって、取り上げる作品番号を発表する。	左記発表について批評、検討する。
第 5 回	前回取り上げた作品について、注釈書の解釈の歴史を整理して発表する。	左記発表について批評、検討する。
第 6 回	前回取り上げた作品について、研究史を整理して発表する。	左記発表について批評、検討する。
第 7 回	各自、第 2 の研究テーマを選定して発表する。	左記発表について批評、検討する。
第 8 回	前回選定したテーマについて、その妥当性を検証し発表する。	左記発表について批評、検討する。
第 9 回	各自が選定したテーマにそって、取り上げる作品番号を発表する。	左記発表について批評、検討する。
第 10 回	前回取り上げた作品について、注釈書の解釈の歴史を整理して発表する。	左記発表について批評、検討する。
第 11 回	前回取り上げた作品について、研究史を整理して発表する。	左記発表について批評、検討する。
第 12 回	これまでの発表を踏まえて今後の研究の方向を検討する。	左記発表について批評、検討する。

第 13 回 前回までの発表を踏まえて、各自レポートの概要について発表する。

第 14 回 まとめ 万葉集研究の歴史と研究方法の問題点について確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

予習、復習、課題など、毎週 4 時間以上を必要とする。

【テキスト（教科書）】

万葉集、原文付き

【参考書】

授業の中で指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表（50 %）とレポート（50 %）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

原典を読むことの重要性。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本上代文学

<研究テーマ> 古事記、万葉集の研究

<主要研究業績>

『古事記の読み方』（岩波新書 2003 年）「亡き人に逢える島—万葉集巻一六・筑前国志賀白水郎歌を読む」（『法政大学文学部紀要』2008 年）「鴨山と石川の詩心—柿本人麻呂臨死自傷歌群について—」（『日本文学誌要』2008 年）「都市の大物主」（『日本文学誌要』2011 年）

【Outline (in English)】

【Course outline】 Read the Manyoshu（万葉集），

【Learning Objectives】 To understand the basic research methods of Japanese literature of the upper ages.

【Learning activities outside of classroom】 Please read the handouts carefully. The standard preparation and review time for a class is 2 hours each, (4 hours for a week).

【Grading Criteria /Policy】 Grading will be based on the term paper(60%) and the submission of several assignments and reaction papers (40%). will be based on the term paper(60%) and the submission of several assignments and reaction papers (40%). (Course outline)

(Learning Objectives)

(Learning activities outside of classroom)

(Grading Criteria /Policy)

OTR600B2

日本文芸特殊研究Ⅱ A

小秋元 段

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の古典文学を学ぶためには、文学史的な知識をもつだけでなく、研究対象とする作品を原文で読む力をもつことが不可欠である。この授業では主に留学生の皆さんが古文の読解に慣れるよう、基礎的な力を養う。今学期は『古今著聞集』を扱う。

【到達目標】

『古今著聞集』巻十七「怪異」、巻十八「飲食」、巻十九「草木」を読み、古典文学読解の基礎力を身につける。具体的には、中世の古典文学作品の本文に適宜注釈を施し、語義を明らかにしながら適切に現代語訳できる力を養う。その過程で、様々な同時代の文学作品、国語資料、歴史史料の存在を知り、その活用方法を習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

この授業は、『古今著聞集』をテキストとして、履修者が各種の工具書、資料を使って注釈を施し、現代語訳する形式で進める。履修者は岩波書店・日本古典文学大系本より適宜の分量を分担し、注釈・現代語訳をレジュメにまとめ、発表するものとする。どのような文献を使えば古典が深く読め、問題点を発見することができるのか、ということに力点を置いて進めたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	作品解説 1（概要）	『古今著聞集』の概要について講義する。
第 2 回	作品解説 2（研究方法）	『古今著聞集』の研究法について講義する。
第 3 回	作品講読 1「怪異の恐れ慎むべき事」ほか	p.453～p.456 の講読。
第 4 回	作品講読 2「延長八年六月右近の陣に変化の事」ほか	p.457～p.460 の講読。
第 5 回	作品講読 3「東大寺の春舞房上醍醐にして天狗に浚はるる事」ほか	p.461～p.464 の講読。
第 6 回	作品講読 4「大原の唯蓮房法験に依りて天狗の難を通る事」ほか	p.465～p.468 の講読。
第 7 回	作品講読 5「大納言泰通狐狩を催さんとするに老狐夢枕に立つ事」ほか	p.469～p.472 の講読。
第 8 回	作品講読 6「観教法印が嵯峨山庄の飼猫変化の事」ほか	p.473～p.476 の講読。
第 9 回	作品講読 7「禅林寺の僧正瓜の歌を詠む事」ほか	p.477～p.480 の講読。
第 10 回	作品講読 8「仲胤僧都法勝寺八講に遅参し籠居して詠歌の事」ほか	p.481～p.484 の講読。
第 11 回	作品講読 9「新蔵人邦時分配次第を行ふ事」ほか	p.485～p.488 の講読。

第 12 回	作品講読 10「三条中納言某大食の事」ほか	p.489～p.492 の講読。
第 13 回	作品講読 11「天曆七年十月殿上残菊合の事」ほか	p.493～p.496 の講読。
第 14 回	作品講読 12「宇治頼通四条大納言公任と春秋の花の勝劣を論ずる事」ほか	p.497～p.500 の講読。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

分担箇所の語釈・口語訳の作成。

【テキスト（教科書）】

永積安明・島田勇雄校注、日本古典文学大系『古今著聞集』（岩波書店、1966 年）

【参考書】

西尾光一・小林保治校注、新潮日本古典集成『古今著聞集』上・下（新潮社、1983・86 年）

【成績評価の方法と基準】

発表の完成度（70 %）、討論への貢献（30 %）

【学生の意見等からの気づき】

初心者にもわかりやすいように、調査・研究の方法について具体的に講義してゆきます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本中世文学、書誌学

<研究テーマ> 軍記物語、古活字版

<主要研究業績> 小秋元段『増補太平記と古活字版の時代』（新典社、2018 年）、小秋元段『太平記・梅松論の研究』（汲古書院、2005 年）

【Outline (in English)】

(Course outline) In this course, we will read Kokonchomonju.

(Learning Objectives) The goals of this course are to Learn the skills to read classical literature.

(Learning activities outside of classroom) Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

(Grading Criteria /Policy) Final grade will be calculated according to the following process Mid-term report (70%) and in-class contribution (30 %).

OTR600B2

日本文芸特殊研究ⅡB

小秋元 段

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の古典文学を学ぶためには、文学史的な知識をもつだけでなく、研究対象とする作品を原文で読む力をもつことが不可欠である。この授業では主に留学生の皆さんが古文の読解に慣れるよう、基礎的な力を養う。今学期は『平治物語』（古活字本）を扱う。

【到達目標】

『平治物語』（古活字本）を読み、古典文学読解の基礎力を身につける。具体的には、中世の古典文学作品の本文に適宜注釈を施し、語義を明らかにしながら適切に現代語訳できる力を養う。その過程で、様々な同時代の文学作品、国語資料、歴史史料の存在を知り、その活用方法を習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

この授業は、『平治物語』（古活字本）をテキストとして、履修者が各種の工具書、資料を使って注釈を施し、現代語訳する形式で進める。履修者は岩波書店・日本古典文学大系本より適宜の分量を分担し、注釈・現代語訳をレジュメにまとめ、発表するものとする。どのような文献を使えば古典が深く読め、問題点を発見することができるのか、ということに力点を置いて進めたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	作品解説1（概要）	『平治物語』の概要について講義する。
第2回	作品解説2（研究方法）	『平治物語』の研究法について講義する。
第3回	作品講読1「信頼・信西不快の事」ほか	p.403～p.404 の講読。
第4回	作品講読2「信頼信西を亡ぼさる議の事」ほか	p.405～p.406 の講読。
第5回	作品講読3「三条殿へ発向付けたる信西の宿所焼き払ふ事」ほか	p.407～p.408 の講読。
第6回	作品講読4「信西出家の由来並びに南都落ちの事付けたる最後の事」ほか	p.409～p.410 の講読。
第7回	作品講読5「唐僧来朝の事」ほか	p.411～p.412 の講読。
第8回	作品講読6「六波羅より紀州へ早馬を立てらるる事」ほか	p.413～p.414 の講読。
第9回	作品講読7「光頼卿参内の事並びに許由が事付けたる清盛六波羅上著の事」ほか	p.415～p.416 の講読。
第10回	作品講読8「信西の子息遠流に宥めらるる事」ほか	p.417～p.418 の講読。
第11回	作品講読9「主上六波羅へ行幸の事」ほか	p.419～p.420 の講読。
第12回	作品講読10「源氏勢汰への事」ほか	p.421～p.422 の講読。

第13回 作品講読11「待賢門の軍の事付けたる信頼落つる事」ほか

第14回 作品講読12「待賢門の軍の事付けたる信頼落つる事」つづき

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

分担箇所の語釈・口語訳の作成。

【テキスト（教科書）】

永積安明・島田勇雄校注、日本古典文学大系『古今著聞集』（岩波書店、1966年）

【参考書】

西尾光一・小林保治校注、新潮日本古典集成『古今著聞集』上・下（新潮社、1983・86年）

【成績評価の方法と基準】

発表の完成度（70％）、討論への貢献（30％）

【学生の意見等からの気づき】

初心者にもわかりやすいように、調査・研究の方法について具体的に講義してゆきます。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本中世文学、書誌学

＜研究テーマ＞軍記物語、古活字版

＜主要研究業績＞小秋元段『増補太平記と古活字版の時代』（新典社、2018年）、小秋元段『太平記・梅松論の研究』（汲古書院、2005年）

【Outline (in English)】

(Course outline) In this course, we will read Heiji-monogatari. (Learning Objectives) The goals of this course are to Learn the skills to read classical literature.

(Learning activities outside of classroom) Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

(Grading Criteria /Policy) Final grade will be calculated according to the following process Mid-term report (70%) and in-class contribution (30%) .

OTR600B2

日本文芸特殊研究Ⅲ A

小林 ふみ子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では研究文献を読むことを通じて通じて日本文学とその周辺各分野の研究法を学び、その要件を考える。江戸時代をおもな対象とし、とくに文学・美術関係およびその関連分野の論考を取りあげる。

【到達目標】

(1) 各分野の研究アプローチの方法や要件を知り、またそれらに共通する点について説明できるようになる。
(2) 文献から論点を探し、研究を発展させる視点を自分なりに獲得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講生の研究テーマを勘案して毎回、前の週に論文を配付する。各回の担当者は、その論文のテーマとその背景、内容、課題・問題をまとめて発表し、全員で議論する。そのなかでよい論文に求められるものについての理解を深める。
発表時にその場で講評するほか、最終レポートにはコメントを付けて返却する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	研究とは	学際研究の課題
第 2 回	授業の進め方	一文献を例に本授業の発表方法についての理解を共有する。
第 3 回	文献講読 1 A 文学	近世文学 1 韻文
第 4 回	文献講読 1 B 文学	同上
第 5 回	文献講読 2 A 文学	近世文学 2 散文
第 6 回	文献講読 2 B	同上
第 7 回	文献講読 3 A 美術	近世美術 1
第 8 回	文献講読 3 B	同上
第 9 回	文献講読 4 A 美術	近世美術 2
第 10 回	文献講読 4 B	同上
第 11 回	文献講読 5 A 関連分野	関連分野 1
第 12 回	文献講読 5 B	同上
第 13 回	文献講読 6 A 関連分野	関連分野 2
第 14 回	文献講読 6 B	同上

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
前の週に配られた文献を読んでくこと。

【テキスト（教科書）】

コピーを配布する。

【参考書】

適宜、授業内で紹介する。

【成績評価の方法と基準】

毎回の出席は当然の前提とした上で、報告 50 %、授業中の質疑などの参加態度 50 %によって総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

学生の関心に即して文献を選択するようにしたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近世文芸・日本近世文化

<研究テーマ> 大田南畝・江戸狂歌を中心とする近世中期文学・文化の研究

<近年の主要著書>

『へんちくりん江戸挿絵本』（集英社インターナショナル [インターナショナル新書] 2019）

『大田南畝 江戸に狂歌の花咲かす』（岩波書店 2014）

（共編著）

『水都としての東京とヴェネツィア』（法政大学出版局 2022）

『墨水四時雑詠』（太平書屋 2021）

『最後の文人石川淳の世界』（集英社 [集英社新書] 2021）

『好古趣味の歴史 江戸東京からたどる』（文学通信 2020）

『北斎 視覚のマジック 小布施・北斎館名品集』（平凡社 2019）

『奇と妙の江戸文学史』（文学通信 2019）

『別冊太陽 歌麿決定版』（平凡社 2016）

『日本人は日本をどうみてきたか—江戸から見る自意識の変遷』（田中優子編 笠間書院 2015）

『化物で楽しむ江戸狂歌』（江戸狂歌研究会編 共著 笠間書院 2014）

【Outline (in English)】

(Course outline) Learning difference of disciplines to approach Tokugawa period cultures by reading essays from the fields of literature, art history, and related to them.

(Learning activities outside of classroom) Before each class meeting, students will be expected to have read designated papers. Your required study time is four hours for each class meeting.

(Grading Criteria/Policy) Final grade will be calculated according to the presentations(50%) and in-class contribution(50%).

OTR600B2

日本文芸特殊研究Ⅲ B

小林 ふみ子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、受講生相互の研究分野についての発表を通じて、学際的な日本研究をいかに意義づけるかについて、多様な視点から考える。

【到達目標】

- (1) 日本近世・近代文化研究がどのような学問領域にまたがっているかを認識する。
- (2) 日本文化史研究という広い視野で自らの研究の位置づけを説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

前半は受講生が自らの研究において最重要と考える文献を紹介することを通じて、事例に則して「いい論文」とは何かを考える。後半は受講生相互の研究発表とする。発表時にその場で講評するほか、最終レポートにはコメントを付けて返却する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	研究をどう意義づけるか（講義）
第2回	文献講読 先行研究Aに学ぶ	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（1）
第3回	文献講読 先行研究Bに学ぶ	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（2）
第4回	文献講読 先行研究Cに学ぶ	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（3）
第5回	文献講読 先行研究Dに学ぶ	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（4）
第6回	文献講読 先行研究Eに学ぶ	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（5）
第7回	文献講読 先行研究Fに学ぶ	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（6）
第8回	中間まとめ 討論	「いい論文」「いい研究」とは？
第9回	研究発表 学生A	受講生相互の研究発表と討論1
第10回	研究発表 学生B	受講生相互の研究発表と討論2
第11回	研究発表 学生C	受講生相互の研究発表と討論3
第12回	研究発表 学生D	受講生相互の研究発表と討論4
第13回	研究発表 学生E	受講生相互の研究発表と討論5
第14回	まとめ	全体をふり返る

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
事前に配付された文献を読んでくるようにしましょう。

【テキスト（教科書）】

適宜配付します。

【参考書】

随時紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎回の出席は当然の前提とした上で、報告50%、授業中の質疑などの参加態度50%によって総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

学生の積極的な討論を期待します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近世文芸・文化

<研究テーマ>近世中期文学・文化の研究

<近年の論文>

「南畝の狂歌の評価軸」『近世文藝』113号 2021

「東アジアの地図を読む－19世紀大坂商人の東アジア」『東アジア文化講座3 東アジアに共有される文学圏』（文学通信）2021

「文政期前後の風景画入狂歌本の出版とその改題・再印―浮世絵風景版画流行の前史として」『浮世絵芸術』179号 2020

「狂歌に文芸性はあるのか」『古典文学の常識を疑うⅡ』（勉誠出版）2019

「書籍を模擬する遊び―「見立絵本」にかんする疑問、から―」『京都語文』26号 2018

【Outline (in English)】

(Outline) Thinking how to attach significance to your interdisciplinary study/dissertation in a field of Japanese Studies.

(Learning activities outside of classroom) Before each class meeting, students will be expected to have read designated papers. Your required study time is four hours for each class meeting.

(Grading Criteria/Policy) Final grade will be calculated according to the presentations(50%) and in-class contribution(50%).

OTR600B2

日本文芸特殊研究ⅣA

スティーヴン・ネルソン

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本研究（特に古典音楽、伝統芸能、古典文学など）の在り方と方法。具体例として、古写本、古版本、活字本などを用いて、『古今著聞集』巻第六 管絃歌舞第七を2年計画で講読する（2022-23年度）。

【到達目標】

国際日本学演習のネルソン・ゼミは、さまざまな国籍の、さまざまな研究分野に関心をもつ学生が所属するので、「日本研究」をするに当たり、どのような研究テーマを選び、どのように焦点を絞り、どのような手続きをとっていかなければならないかを、参加学生それぞれに即して、指導していく場とする。学生の学年によって到達目標は異なってくる。修士課程1年次生（や研修生）は研究課題を明確にし、先行研究を十分に調査・精読し、秋学期の中間発表等を経て論文の構想を十分に練ること。修士課程2年次生は春学期の中間発表に備え、授業や中間発表会等における指摘を受け止め、十分に練った目次案に従い、余裕を持って論文を執筆すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的に学生の研究発表を中心に、質疑応答、全員での討論、指導教員の講評等を交えて行う。以下に一応の授業計画を示してみたが、具体的な内容・スケジュールは、参加学生の人数・関心対象・学習意欲・予備知識などを鑑みて、第1回のガイダンスの際に決めたいと考えている。演習形式なので、フィードバックは授業内にて行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス 講読序説	自己紹介（全員）、教員による授業の進め方の説明 『古今著聞集』巻第六 管絃歌舞第七について
第2回	研究課題の紹介（2年次生）① 講読①	修士論文のテーマをすでに決めている学生の研究報告 説話 230（小序）
第3回	研究課題の紹介（2年次生）② 講読②	修士論文のテーマをすでに決めている学生の研究報告 説話 231・232
第4回	研究課題の紹介（2年次生）③ 講読③	修士論文のテーマをすでに決めている学生の研究報告 説話 233
第5回	関心対象の紹介（1年次生）① 講読④	関心対象について、学術研究の可能性を考える 説話 234・235
第6回	関心対象の紹介（1年次生）② 講読⑤	関心対象について、学術研究の可能性を考える 説話 236・237・238
第7回	修士課程の中間報告（2年次生）① 講読⑥	中間発表会に向けた配布資料・読み上げ原稿の準備 説話 239・240
第8回	修士課程の中間報告（2年次生）② 講読⑦	中間発表会に向けた配布資料・読み上げ原稿の準備 説話 241・242
第9回	研究動向の確認（1年次生） 講読⑧	先行研究の調査に基づいた文献目録の提示と検討 説話 243

第10回	先行研究の論旨の整理（2年次生）① 講読⑨	先行研究の状況を調査し、論旨を整理した上、各自の研究テーマの研究史上の意義を検討 説話 244
第11回	先行研究の論旨の整理（2年次生）② 講読⑩	先行研究の状況を調査し、論旨を整理した上、各自の研究テーマの研究史上の意義を検討 説話 245
第12回	先行研究の論旨の整理（1年次生）① 講読⑪	先行研究の状況を調査し、論旨を整理した上、各自の研究テーマの研究史上の意義を検討 説話 246・247
第13回	先行研究の論旨の整理（1年次生）② 講読⑫	先行研究の状況を調査し、論旨を整理した上、各自の研究テーマの研究史上の意義を検討 説話 248・249
第14回	夏期休暇中の作業計画立案 講読 まとめ	各自が行うべき作業の検討 春学期総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

第1回 5分程度の自己紹介を用意し、授業に期待することが述べられるように考えてくる。
以後 各自の研究を意欲的に進める。
本授業の準備（予習）および復習時間は、合わせて4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特になし。副読本として岩波書店日本古典文学大系（旧大系）『古今著聞集』を用いるが、入手方法については第1回講義の際に案内する。

【参考書】

必要に応じて授業内や個人指導の際に指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表・各種作成資料の内容 50%、討論への参加等の平常点 50%。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本音楽史学

<研究テーマ> 日本の楽譜、初期の講式（漢文訓読体の声明の一種）と平家語りの音楽構成法、平安時代の年中行事と音楽、声歌／唱歌～越殿楽謡物～箏組歌の系譜、『源氏物語』・『平家物語』の音楽、日本古典文学の英訳など

<主要研究業績>

- ①「唐代伝来の音楽とその再現」（『唐代音楽の研究と再現 資料集』上野学園大学日本音楽史研究所、2014年）
- ②「「秘曲尽くし」再現—『文机談』に見える秘曲を聴く—」（磯水絵編『今日は一日、方丈記』新典社、2013年）◇付録CD「「秘曲尽くし」再現」（秘曲再現監修）に次の雅楽秘曲の復元演奏を収録：筆簾《小調子》、笙《平調入調》、琵琶《大常博士楊真操》、箏《千金調子》、琵琶《石上流泉》、琵琶《上原石上流泉》、箏《由加見調子》、琵琶《啄木》、笛・筆簾・笙・太鼓（陵王）《荒序》
- ③「工尺譜の起源をめぐって—唐代の文字譜との関係—」（磯水絵編『論集 文学と音楽史—詩歌管絃の世界—』、和泉書院、2013年）

【Outline (in English)】

Course Outline: This is a postgraduate seminar in Japanese studies, mainly for students writing their master's thesis under the instructor's supervision. It is also open to students from other seminars who are interested in methodological issues involved in the study of the performing arts of Japan. The class centers on presentations given by students on their research and other related topics. In each class of the academic years 2022-23, we will also read a section or sections from the 'Kangen-kabu' ('Music, song and dance') chapter of *Kokon chomon-jū* ('A collection of notable tales old and new'), a collection of historical tales compiled by Tachibana no Narisue in 1254.

Learning Objectives: The primary objective of the class is for the students to successfully complete their theses in the stipulated timeframe, while obtaining the methodological skills to do so, as well as to continue research in the future if they so desire.

Learning Activities Outside of the Classroom: Students are expected to undertake the activities necessary for successful completion of their theses, and participate actively in our reading of the source text described above. The latter will require some hours of library work each week.

Grading Criteria/Policy: 50% for preparation of materials used in class: 50% for active participation in class discussion.

OTR600B2

日本文芸特殊研究Ⅳ B

スティーヴン・ネルソン

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本研究（特に古典音楽、伝統芸能、古典文学など）の在り方と方法。具体例として、古写本、古版本、活字本を用いて、『古今著聞集』巻第六 管絃歌舞第七 を 2 年計画で講読する（2022-23 年度）。

【到達目標】

国際日本学演習のネルソン・ゼミは、さまざまな国籍の、さまざまな研究分野に関心をもつ学生が所属するので、「日本研究」をするに当たり、どのような研究テーマを選び、どのように焦点を絞り、どのような手続きをとっていかなければならないかを、参加学生それぞれに即して、指導していく場とする。学生の学年によって到達目標は異なってくる。修士課程 1 年次生（や研修生）は研究課題を明確にし、先行研究を十分に調査・精読し、秋学期の中間発表等を経て論文の構想を十分に練ること。修士課程 2 年次生は春学期の中間発表に備え、授業や中間発表会等における指摘を受け止め、十分に練った目次案に従い、余裕を持って論文を執筆すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的に学生の研究発表を中心に、質疑応答、全員での討論、指導教員の講評等を交えて行う。以下に一応の授業計画を示してみたが、具体的な内容・スケジュールは、参加学生の人数・関心対象・学習意欲・予備知識などを鑑みて、第 1 回のガイダンスの際に決めたいと考えている。演習形式なので、フィードバックは授業内にて行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	夏期休暇の成果報告	秋学期スケジュールの確認 院生全員による夏期休暇中の研究成果報告
第 2 回	修士論文構想の報告 (2 年次生) ① 講読 ①	修士論文の構想を説明し、作成作業の進捗状況を報告 説話 250・251
第 3 回	修士論文構想の報告 (2 年次生) ② 講読 ②	修士論文の構想を説明し、作成作業の進捗状況を報告 説話 252
第 4 回	先行研究の紹介と整理 (1 年次生) ① 講読 ③	研究課題に関する先行研究を調査・精読し、学術論文の作成方法、論理展開、文体や体裁の特徴を学ぶ 説話 253
第 5 回	先行研究の紹介と整理 (1 年次生) ② 講読 ④	研究課題に関する先行研究を調査・精読し、学術論文の作成方法、論理展開、文体や体裁の特徴を学ぶ 説話 254
第 6 回	修士課程の中間報告 (1 年次生) ① 講読 ⑤	中間発表会に向けた配布資料・読み上げ原稿の準備 説話 255
第 7 回	修士課程の中間報告 (1 年次生) ② 講読 ⑥	中間発表会に向けた配布資料・読み上げ原稿の準備 説話 256
第 8 回	修士論文の中間報告 (2 年次生) ① 講読 ⑦	修士論文執筆の進捗状況に関する報告 説話 257

第 9 回	修士論文の中間報告 (2 年次生) ② 講読 ⑧	修士論文執筆の進捗状況に関する 報告 説話 258
第 10 回	修士論文の構想発表 (1 年次生) ① 講読 ⑨	学術的な論理展開に基づき、修士 論文の目次案を立て、各章の内容 について概要を記す 説話 259
第 11 回	修士論文の構想発表 (1 年次生) ② 講読 ⑩	学術的な論理展開に基づき、修士 論文の目次案を立て、各章の内容 について概要を記す 説話 260・261
第 12 回	修士論文提出前の総点 検 (2 年次生) 講読 ⑪	論文構成、要旨、英文要旨、参考 文献などについて点検を行う 説話 262・263
第 13 回	担当教員による年末講 義	担当教員自身の、本年度の研究活 動に関する講義
第 14 回	まとめ 講読 まとめ	1 年次生は春季休暇中の作業課題 に関する計画を示し、2 年次生は 提出論文について報告し、講評を 受ける

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

第 1 回 夏期休暇中の研究成果をまとめてくる。

以後 各自の研究を意欲的に進める。

本授業の準備（予習）および復習時間は、合わせて 4 時間を標準と
します。

【テキスト（教科書）】

特になし。副読本として岩波書店日本古典文学大系（旧大系）『古今
著聞集』を用いる。

【参考書】

必要に応じて授業内や個人指導の際に指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表・各種作成資料の内容 50 %、討論への参加等の平常点 50 %。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 日本音楽史学

＜研究テーマ＞ 日本の楽譜、初期の講式（漢文訓読体の声明の一
種）と平家語りの音楽構成法、平安時代の年中行事と音楽、声歌／唱
歌～越殿楽謡物～箏組歌の系譜、『源氏物語』・『平家物語』の音楽、
日本古典文学の英訳など

＜主要研究業績＞

①「唐代伝来の音楽とその再現」（『唐代音楽の研究と再現 資料集』
上野学園大学日本音楽史研究所、2014 年）

②「「秘曲尽くし」再現—『文机談』に見える秘曲を聴く—」（磯水
絵編『今日是一日、方丈記』新典社、2013 年）◇付録 CD 「秘曲
尽くし」再現（秘曲再現監修）に次の雅楽秘曲の復元演奏を収録：
箏・篳篥《小調子》、笙《平調入調》、琵琶《大常博士楊真操》、箏《千金
調子》、琵琶《石上流泉》、琵琶《上原石上流泉》、箏《由加見調子》、
琵琶《啄木》、笛・篳篥・笙・太鼓（陵王）《荒序》

③「蘇る平安の音」（神野藤昭夫・多忠輝監修『越境する雅楽文化』、
書肆フローラ、2009 年）

【Outline (in English)】

Course Outline: This is a postgraduate seminar in Japanese
studies, mainly for students writing their master's thesis under
the instructor's supervision. It is also open to students from
other seminars who are interested in methodological issues
involved in the study of the performing arts of Japan. The
class centers on presentations given by students on their
research and other related topics. In each class of the academic
years 2022-23, we will also read a section or sections from
the 'Kangen-kabu' ('Music, song and dance') chapter of *Kokon
chomon-jū* ('A collection of notable tales old and new'), a
collection of historical tales compiled by Tachibana no Narisue
in 1254.

Learning Objectives: The primary objective of the class is
for the students to successfully complete their theses in the
stipulated timeframe, while obtaining the methodological skills
to do so, as well as to continue research in the future if they so
desire.

Learning Activities Outside of the Classroom: Students
are expected to undertake the activities necessary for
successful completion of their theses, and participate actively
in our reading of the source text described above. The latter
will require some hours of library work each week.

Grading Criteria/Policy: 50% for preparation of materials
used in class: 50% for active participation in class discussion.

BSP500B2

日本文学・国際日本学基礎演習

本塚 亘

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本に関する各種の文献を読み、その内容を要約し、それに対する自分自身の見解を小論文形式の文章にまとめることで、日本研究に求められる基礎的能力を養う。

【到達目標】

1. 日本の言語・文学・歴史・文化・社会等に関する論文を読み、その内容・着眼点・意義等について理解する。
2. 文献の内容を要約する作業を通して、読解力と文章力を高める。
3. 自分自身の見解を小論文形式でまとめ、学術論文に相応しい文章を書けるようにする。
4. 修士論文執筆のための研究計画を具体的にし、文章化する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

原則として、対面形式での授業を行う予定です。ただし、新型コロナウイルスに関する大学の方針変更等の事由により、形式を変更する可能性があります。

まず日本の各分野（言語・文学・歴史・文化・社会等）に関する論文を読みます。そして、その内容を 400 字程度の文章で要約し、自分自身の見解を 800 字程度の小論文にまとめます。さらに、履修者同士で小論文を読み合い、論文の内容について討論を行います。また、履修者は修士論文執筆に向けた研究計画書の作成を行います。なお、履修者が執筆した要約・小論文・研究計画書には、担当教員がすべて添削を行い、返却します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	国際日本学とは何か	国際日本学とは何かを解説し、その研究方法について説明する。
第 2 回	研究の進め方	大学院修士課程での研究の進め方について説明する。
第 3 回	法政大学図書館のデータベースの使用法	法政大学図書館で利用できるオンラインデータベースについて説明する。
第 4 回	オンラインデータベースの活用文献検索の方法	NDL オンラインほか、各種の文献検索ツールについて説明する。
第 5 回	研究倫理について	剽窃をはじめとする研究不正の概要を説明し、正しい研究のあり方を共有する。
第 6 回	課題論文 A1（日本語）	課題論文 A を読み、要約する。
第 7 回	課題論文 A2（日本語）	課題論文 A に関する自分自身の見解を小論文形式でまとめる。
第 8 回	課題論文 B1（日本文化）	課題論文 B を読み、要約する。
第 9 回	課題論文 B2（日本文化）	課題論文 B に関する自分自身の見解を小論文形式でまとめる。
第 10 回	課題論文 C1（日本社会）	課題論文 C を読み、要約する。
第 11 回	課題論文 C2（日本社会）	課題論文 C に関する自分自身の見解を小論文形式でまとめる。
第 12 回	研究計画の検討 1	履修者による研究計画の報告と、それに関する討論を行う。
第 13 回	研究計画の検討 2	履修者による研究計画の報告と、それに関する討論を行う。

第 14 回 研究計画の発表 履修者による研究計画の発表を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。宿題として作文を課す場合があります。また、第 12 回（履修者の研究計画の検討）までに、各自で A4 用紙 3 枚以上の研究計画書を準備する必要があります。

【テキスト（教科書）】

プリント等を適宜配付します。

【参考書】

授業時に適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎回の提出物： 60 %
研究計画書の内容： 40 %

【学生の意見等からの気づき】

個々の学生の専門になるべく関連のある内容を取り扱えるよう善処します。

【その他の重要事項】

1. この科目は外国人留学生（なかでも中国 5 大学入試により入学した特別研修生）を主な対象とします。
2. 新型コロナウイルスに関する大学の方針変更等の事由により、上記の授業内容を変更する可能性があります。変更があった場合は、hoppii にて連絡いたします。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本古代歌謡 日本音楽史

<研究テーマ> 催馬楽

<主要研究業績> 「催馬楽の成立に関する研究」(博士論文、2017)、「催馬楽「同音グループ」における「替え歌」生成の原理について——歌の詞章と旋律の関係を中心に」(『日本歌謡研究』59 号、2019 年)

【Outline (in English)】

Outline: Reading various literatures on Japan, summarizing the contents, and summarizing your own opinion on it in small thesis, develop the basic abilities required for Japanese studies.

Goal: By the end of the course, students should be able to do the followings:

- To read articles on Japanese language, literature, history, culture, and society, and to understand their contents, viewpoints, and significance
- To improve reading and writing skills by summarizing the contents of literature
- To compose your own opinions and write sentences suitable for a thesis.
- To concretize a research plan for writing a master's thesis and express the results in writing.

Learning activities outside of classroom: Students are expected to spend about four hours before and after each class period on assignments and independent study.

Grading Criteria / Policies: In accordance with the above Goals, the following two will be scored.

- Assignments 60.
- Format and clarity of research plan 40.

BSP500B2

日本文学・国際日本学論文作成基礎実習

金子 広幸

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

先行研究の閲覧から自らの研究課題の明確化を行い、研究活動における手法・手順・発表などを学ぶことができる。あわせてその過程から自らの日本語の問題点についての解決策を導くことができる。

【到達目標】

1. 研究の方向性を明確化することができる。具体的には、その研究課題について、何を明らかにするかを表明できるようになる。
2. 研究の手法・手順を学び、日本語の能力向上と併せて、進めることができるようになる。
3. 自らの研究課題などを研究言語である日本語で他者に明確に伝えることができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- 9月23日（金曜日）からクラスが行われる。
教育支援システム（グーグルクラスルームやズームなど）を使用する。
1. 研究課題・計画を精緻化し明文化する作業を共同で行う。
 2. 先行研究の文献・研究手法についての模擬的な発表をする。
 3. 必要なら学期中に「ミニ調査（パイロット調査）」を行い、方向性を探る材料とする。
 4. 後半日程には、研究の進捗について成果の発表を行う。
 5. 完成した論文がどのようなものになるのか想定する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	参加者の研究の課題を確認、学期全体の進め方とスケジュールを決める。
第2回	私の研究課題1	それまでに構築した研究課題をクラスで共有・検討する
第3回	私の研究課題2	それまでに構築した研究課題をクラスで共有・検討する。 【自らの日本語の問題点を探る】 研究課題を振りかえって何が学べたかを総括する。 【発表時に必要な日本語について模索する】【参考文献の引用などの扱い方、発表レジュメの書式などを学ぶ】
第4回	私の研究課題3	研究の過程で必要な手法について学ぶ。 【研究・調査時に必要な日本語について学ぶ。連絡のメールや、調査依頼など】
第5回	研究手法1	研究の過程で必要な手法について学ぶ。
第6回	研究手法2	研究の過程で必要な手法について学ぶ。 【研究・調査時に必要な日本語について学ぶ。連絡のメールや、調査依頼など】
第7回	研究手法3	研究の過程で必要な手法について学ぶ。【ミニ調査のガイダンス】
第8回	先行研究発表1	各自が探した先行研究について発表する。 【要旨をまとめる時の日本語の使い方を学ぶ】

第9回	先行研究発表2	各自が探した先行研究について発表する。 【スライドの作り方を学ぶ】
第10回	先行研究発表3	各自が探した先行研究について発表する。 【ミニ調査の進捗状況・テーマを確認する】
第11回	先行研究発表4	各自が探した先行研究について発表する。 【調査報告書への反映】
第12回	先行研究発表5	各自が探した先行研究について発表する。 【スライドの作り方を学ぶ】
第13回	成果発表1	本調査・ミニ調査の結果発表及び本調査での進捗状況を報告する。 【研究論文の目次を作ってみる】 これは最終課題となる。
第14回	成果発表2 今後の課題を明確化する	本調査・ミニ調査の結果発表及び本調査での進捗状況を報告する。 【前週に発表が終わっているものは反映点を明らかにする】

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備・復習時間は、1回の講義に対して、以下のことを行うにあたって、各3時間を標準とします。

1. 研究の方向性を明確にするために、常に文献を探し、クラスで簡単に発表できるよう要点をまとめておくこと。
2. クラスでは問題を共有し、積極的に発言し、手法等について工夫を重ねること。
3. 日本語能力については、とくにスタイルや表現の選択を中心とした、「研究時に必要な日本語」を究明すること。
4. 発表がある場合には必ず「スライド」と「レジュメ」をその都度提出・配付すること。
5. 日本語使用者としての自覚に基づいて、クラスでの課題を作成・提出すること。
6. 発表や課題提出の時などは、必要ならクラスメート同士相互にチェックすること。

【テキスト（教科書）】

研究課題明確化が主目的なので教科書は使用しません。

【参考書】

金子広幸（2014）『初級が終わったら始めよう 新・にほんご敬語トレーニング』

<https://www.ask-books.com/978-4-87217-856-2/>

研究活動を行うにあたってはメールで依頼する、調査時の使用言語など、敬語が必要です。敬語に関する知識・練習が足りない人は自主学習として使用してください。
日本版以外に中国版・台湾版・韓国版と KINDLE 版があります。最新版であることを確認してください。

【成績評価の方法と基準】

・提出物の完成度（研究計画書 発表時のスライド・レジュメ 日本語に関する宿題、「今週の学び」 最終提出物（要旨と目次）など）15 %
・提出物の期限厳守の提出 15 %
・発表参加 20 %
・発表完成度 20 %
・日本語能力振り返り・小試験（2 回程度実施予定）10 %
・クラスでの参加態度（積極的な発言、オンラインでも顔を出しての参加など）20 %
成績評価は 100 点満点で採点。60 点以上が合格。

【学生の意見等からの気づき】

参加者の皆さんへ。
●毎回参加者の発表があり、それについての教師のコメントや参加者の参加討議でクラスが進みます。準備をお願いします。
●参加人数にもよりますが、1 学期あたり、4 回程度の発表があります。他にもスライドやレジュメの作成、先行研究を探ることなど、様々な課題があります。積極的に参加してください。
●準備してきた資料を読むだけでは、いい発表にはなりません。準備をさらに充実させて、視覚資料を使ったり、わかりやすく研究テーマを説明できるよう、教師といっしょに方法を探しましょう。もちろん自宅で発表の練習を「十分に」してください。

- 「今週の学び」を初めとして、毎回の講義には課題が出ます。時間厳守で提出してください。
- これからの学術の世界を考える時、国際学会議などでのオンライン発表は重要な鍵となります。対面クラスになっても、このオンライン発表などにぜひチャレンジしてください。

【学生が準備すべき機器他】

- ZOOM・グーグルクラスルームなどが使える機器・ネット環境の準備をお願いします。
- クラスでのお知らせ・課題の提示・提出・連絡などは全てグーグルクラスルームで行います。
- クラスにアクセスする場合は法政大学の Google アカウントが必要です。
- 海外からアクセスする場合は特にその準備をお願いします。

【その他の重要事項】

- クラスのスケジュールが決まった後、第3回目以降はクラスに新しく参加できなくなります。
- 第1回と第2回に必ず出席してください。
- 日本語能力が不十分であることを恥じることはありませんが、しっかりと挑戦してください。
- オフィスワークの時間を2020年度から多くしました。以下の時間帯から「予約をとって」ZOOM で会いましょう。
- 「火曜日の14時から15時」
- 「金曜日の16時30分から17時30分」
- 連絡はメールをお願いします。
- hiroyuki.kaneko.75@hosei.ac.jp

【担当者の研究背景】

- <専門領域>日本語教育学 社会言語学 地理学 歴史学 日本文化
 <研究テーマ>敬語など待遇表現 日本語クラス活動 地域日本語支援 留学生相談業務 日中言語比較
 <主要研究業績>
- ①『初級が終わったら始めよう にほんご敬語トレーニング』（アスク 2006年）
 - ②『初級が終わったら始めよう 新・にほんご敬語トレーニング』（アスク 2014年）
 - ③『人と人をつなぐ日本語クラスアクティビティ 50』（アスク 2005年）
 - ④「日中漢字音対照研究の成果と今後の教学応用への可能性の模索」基礎研究その1（『日中学院紀要教学』 2008年）
 - ⑤「初級日本語クラスで使用する絵の要素の分析」（桜美林大学大学院言語教育研究科日本語教育専攻修士論文 2012年）

【担当者の出演番組】

日本語教育関係のNHKの番組「しごとのにほんご」に出演・監修しています。(2023年まで以下で視聴可能)
<https://www3.nhk.or.jp/nhkworld/en/tv/easyjapaneseforwork/>

【Outline (in English)】

【授業の概要 (Course outline)】

The students of this class can clarify their own research issues by browsing previous research, and learn methods, procedures, and presentation methods in their research activities. At the same time, they can draw solutions for their Japanese language usage problems from the process.

【到達目標 (Learning Objectives)】

By the end of the course, students should be able to do the followings:

1. To clarify the direction of research. Specifically, to be able to state what they will clarify about the research subject.
2. To be able to learn research methods and procedures and proceed with improving their Japanese proficiency.
3. To be able to clearly convey research topics to others in Japanese, which is the research language.

【授業時間外の学習 (Learning activities outside of classroom)】

The standard preparation and review time for this class is 3 hours each for doing the following for each lecture.

1. In order to clarify the direction of your research, always search the literature and summarize the points so that you can easily present it in the class.
2. In the class, share the problem, speak positively, and devise methods.

3. Regarding Japanese proficiency, investigate "Japanese necessary for research", especially focusing on the selection of styles and expressions in formal situations.
4. Whenever there is a presentation, submit and distribute "slides" and "resumes" each time.

5. Create and submit assignments in the class based on your awareness as a Japanese language "user" not as a "learner".

6. When presenting or submitting assignments, check with each other in class if necessary.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria/Policy)】

- ・ Completion of submissions (slides and resumes at the time of presentation of the research plan, homework related to Japanese, "learning of the week", final submissions (summary and table of contents), etc.) 15%
- ・ Submissions that adhere to the deadline for submissions 15%
- ・ Participation in the presentation 20%
- ・ Completion of presentation 20%
- ・ Review of Japanese proficiency
- ・ Small exam (scheduled to be held about twice) 10%
- ・ Participation attitude in class (active remarks, face-to-face participation (even if it was online session), etc.) 20%

Grades are evaluated on a scale of 100 points. Passed 60 points or more.

LIT600B3

米文学特殊研究第二（小説論） A

小島 尚人

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

テーマ：

アメリカ小説と個人・地域・国家

概要と目的：

本授業は、小説（novel）の歴史を背景として、アメリカ小説の展開に大きく関わる作家の作品を読んでいくものである。春学期は、南北戦争後のリアリズム小説の一大潮流をなした「ローカル・カラー文学」を取り上げ、その歴史的・文学史的位置づけを検討するとともに、代表的諸作品を読み解く。作家や作品の個性とアメリカ小説の歴史的展開との双方を視野に入れながら作品を検討することを通じて、地域、国家、ジェンダー、人種など多様な観点からのローカル・カラー文学研究の可能性をさぐる。

【到達目標】

- ・作品の細部に目を配り、正確に意味をとって読解しようとする習慣をつける。
- ・他者の考えに耳を傾けて理解し、建設的なやり方で応答することができる。
- ・自分の考えを分かりやすく効果的に伝えることができる。
- ・自分の解釈を論理的に記述することができる。
- ・多様な批評の方法についての知識を得て、関心を持つ。
- ・小説の歴史と諸理論の概要について理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講者は毎週予習として作品または批評を読み、発言できるよう準備をした上で授業に臨む。授業は演習形式で進め、毎回発表担当者がハンドアウトを作成してプレゼンテーションをおこない、担当コメントーターによるコメント・質問、そして全体でのディスカッションをする。適宜教員による補足説明がなされる。発表担当者は、担当範囲の内容を要約したうえで、重要と思われる箇所をいくつか引用して分析し、ディスカッションのためのトピックを提示する。発表に対しては授業内で口頭によるレスポンスがなされ、レポートに対してはフィードバックのコメントをつけたファイルが返却される。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業の内容と進め方の説明、受講者の自己紹介
第 2 回	小説と近代ナショナルリズム	Benedict Anderson, <i>Imagined Communities</i>
第 3 回	地方、国家、帝国主義	Amy Kaplan, “Nation, Region, and Empire”; Jennifer Rae Greeson, <i>Our South: Geographic Fantasy and the Rise of National Literature</i>
第 4 回	ローカル・カラー文学勃興の歴史的背景	Richard Brodhead, “American Literary Field, 1860-1890”
第 5 回	地域、ジェンダー、人種	Judith Fetterley and Marjorie Pryse, <i>Writing out of Place</i> ; Walter Benn Michaels, “Local Colors”
第 6 回	代表的作品を読む——ニュー・イングランド	Sarah Orne Jewett と Mary E. Wilkins Freeman
第 7 回	代表的作品を読む——西部	Bret Harte と Mark Twain

第 8 回	代表的短篇を読む——南部①	Charles Chesnutt, <i>The Conjure Woman</i> 前半
第 9 回	代表的短篇を読む——南部②	Charles Chesnutt, <i>The Conjure Woman</i> 後半
第 10 回	批評文献の読解①	近年の代表的研究を検討
第 11 回	ローカル・カラーその後①	Edith Wharton, <i>Ethan Frome</i> 前半
第 12 回	ローカル・カラーその後②	Edith Wharton, <i>Ethan Frome</i> 後半
第 13 回	批評文献の読解②	近年の代表的研究を検討
第 14 回	学期のまとめ	期末レポートの構想を発表し、議論する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回事前に課題（作品または批評）を読んで、ディスカッションに積極的に参加できるように準備する。面白かった点、考察したい点、質問したい点、気になった表現などについてメモをとっておく。分からない用語や固有名詞はできるだけ自分で調べる。（8～10 時間）

【テキスト（教科書）】

- ① Charles W. Chesnutt, *The Conjure Woman and Other Conjure Tales* (Duke UP, 1993). ISBN: 978-0822313878.
- ② Edith Wharton, *Ethan Frome* (Norton, 1995). ISBN: 978-0393966350.

【参考書】

小説の理論と歴史

Michael McKeon, ed., *Theory of the Novel: A Historical Approach* (Johns Hopkins UP, 2000)

Dorothy J. Hale, ed., *The Novel: An Anthology of Criticism and Theory, 1900-2000* (Blackwell, 2006)

Franco Moretti, ed., *The Novel: History, Geography, and Culture* (Princeton UP, 2006)

Franco Moretti, ed., *The Novel: Forms and Themes* (Princeton UP, 2006)

Thomas G. Pavel, *The Lives of the Novel: A History* (Princeton UP, 2013)

Deidre Lynch and William B. Warner, eds. *Cultural Institutions of the Novel* (Duke UP, 1996)

Nancy Armstrong, *How Novels Think: The Limits of Individualism from 1719 – 1900* (Columbia UP, 2005)

アメリカ小説論・アメリカ小説史

Leonard Cassuto, Clare Virginia Eby, and Benjamin Reiss, eds., *The Cambridge History of the American Novel* (Cambridge UP, 2011)

Alfred Bendixen, *A Companion to the American Novel* (Blackwell, 2012)

Lawrence Buell, *The Dream of the Great American Novel* (Harvard UP, 2014)

Paul Giles, *The Global Remapping of American Literature* (Princeton UP, 2011)

Leslie A. Fiedler, *Love and Death in the American Novel* (Stain and Day, 1960; 1966)

Richard Chase, *The American Novel and Its Tradition* (Johns Hopkins UP, 1957)

平石貴樹『アメリカ文学史』（松柏社、2010 年）

【成績評価の方法と基準】

- ・授業への貢献度（ちゃんと予習ができているか、討議に積極的に参加しているか）：30 %
- ・プレゼンテーション（担当箇所の内容を正確に把握できているか、引用箇所の分析がよくできているか、討議のための主題を提示できているか）：30 %
- ・期末レポート（自分の解釈を提示し、リサーチにもとづいて、適切な箇所を引用しながらその解釈の妥当性を論証する）：40 %

【学生の意見等からの気づき】

批評については、受講者各自の研究の興味関心に応じて読む文献を調整する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>アメリカ文学

<研究テーマ>南北戦争後の小説とナショナル・アイデンティティ、小説の歴史と理論

<主要研究業績>

- ①「"My Beth"—*Little Women* におけるベスの病とジョーのキャリア」『英文學誌』（2021 年）
 ②「Transbellum とは何か、あるいは作者の不死について——アメリカ文学研究の Temporal Turn とその帰結」『英文學誌』（2020 年）
 ③「ギルバート・オズモンドはどこ出身か——*The Portrait of a Lady* と南北和解のナラティブ」『英文學誌』（2018 年）

【Outline (in English)】

This class is a seminar on American fiction. The course begins with a historical and theoretical survey of the novel genre, framing the questions of what the novel *is* and what the novel *does*, as well as what is “American” in the American novel. Through the close reading of some of major works of what is called “local color” fiction, students develop their skills to analyze literary texts in a critical way with focus both on their individuality and historicity. Most classes consist of presentations by students, class discussions, and lectures. Grades will be determined based on the following:

- 1) Participation and discussion (30%)
- 2) Presentations (30%)
- 2) Final paper (40%)

LIT600B3

米文学特殊研究第二（小説論）B

小島 尚人

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

テーマ：

アメリカ小説と個人・地域・国家

概要と目的：

本授業は、小説（novel）の歴史を背景として、アメリカ小説の展開に大きく関わる作家の作品を読んでいくものである。秋学期は、ヨーロッパとアメリカの狭間で揺れ動く人物たちの姿を緻密に描き出すことを通じて小説ジャンルの革新者となった **Henry James** に焦点を絞り、「国際テーマ」の作家として知られるジェームズの作品とローカル・カラー文学との関係をさぐる。「国際テーマ」の代表的短篇を二作品読んだのち、ボストンとニューヨークという二都市を舞台に当時の女性解放運動にかかわる人々を描いた中期の長篇 *The Bostonians* (1886) を読み解く。

【到達目標】

- ・作品の細部に目を配り、正確に意味をとって読解しようとする習慣をつける。
- ・他者の考えに耳を傾けて理解し、建設的なやり方で応答することができる。
- ・自分の考えを分かりやすく効果的に伝えることができる。
- ・自分の解釈を論理的に記述することができる。
- ・多様な批評の方法についての知識を得て、関心を持つ。
- ・小説の歴史と諸理論の概要について理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講者は毎週予習として作品または批評を読み、発言できるよう準備をした上で授業に臨む。授業は演習形式で進め、毎回発表担当者がハンドアウトを作成してプレゼンテーションをおこない、担当コメントーターによるコメント・質問、そして全体でのディスカッションをする。適宜教員による補足説明がなされる。発表担当者は、担当範囲の内容を要約したうえで、重要と思われる箇所をいくつか引用して分析し、ディスカッションのためのトピックを提示する。発表に対しては授業内で口頭によるレスポンスがなされ、レポートに対してはフィードバックのコメントをつけたファイルが返却される。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	Henry James の「国際テーマ」とローカル・カラー文学の関係
第 2 回	研究中間報告	受講者が各自の研究テーマを紹介し、研究の進捗を報告する
第 3 回	アメリカからヨーロッパへ	“Daisy Miller”(1878)
第 4 回	ヨーロッパからアメリカへ	“Pandora” (1884)
第 5 回	<i>The Bostonians</i> 読解 ①	Chapters 1-12
第 6 回	<i>The Bostonians</i> 読解 ②	Chapters 13-20
第 7 回	<i>The Bostonians</i> 読解 ③	Chapters 21-26
第 8 回	<i>The Bostonians</i> 読解 ④	Chapters 27-34
第 9 回	<i>The Bostonians</i> 読解 ⑤	Chapters 35-38

第10回 *The Bostonians* 読解 Chapters 39-42

⑥

第11回	批評文献の読解①	ジェンダーとセクシュアリティ
第12回	批評文献の読解②	南北戦争の記憶
第13回	批評文献の読解③	近年の代表的研究
第14回	学期のまとめ	期末レポートの構想を発表し、議論する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回事前に課題（作品または批評）を読んで、ディスカッションに積極的に参加できるように準備する。面白かった点、考察したい点、質問したい点、気になった表現などについてメモをとっておく。分からない用語や固有名詞はできるだけ自分で調べる。（8～10時間）

【テキスト（教科書）】

Henry James, *The Bostonians* (Penguin Classics, 2000). ISBN: 978-0140437669

【参考書】

小説の理論と歴史

Michael McKeon, ed., *Theory of the Novel: A Historical Approach* (Johns Hopkins UP, 2000)

Dorothy J. Hale, ed., *The Novel: An Anthology of Criticism and Theory, 1900-2000* (Blackwell, 2006)

Franco Moretti, ed., *The Novel: History, Geography, and Culture* (Princeton UP, 2006)

Franco Moretti, ed., *The Novel: Forms and Themes* (Princeton UP, 2006)

Thomas G. Pavel, *The Lives of the Novel: A History* (Princeton UP, 2013)

Deidre Lynch and William B. Warner, eds. *Cultural Institutions of the Novel* (Duke UP, 1996)

Nancy Armstrong, *How Novels Think: The Limits of Individualism from 1719 - 1900* (Columbia UP, 2005)

アメリカ小説論・アメリカ小説史

Leonard Cassuto, Clare Virginia Eby, and Benjamin Reiss, eds., *The Cambridge History of the American Novel* (Cambridge UP, 2011)

Alfred Bendixen, *A Companion to the American Novel* (Blackwell, 2012)

Lawrence Buell, *The Dream of the Great American Novel* (Harvard UP, 2014)

Paul Giles, *The Global Remapping of American Literature* (Princeton UP, 2011)

Leslie A. Fiedler, *Love and Death in the American Novel* (Stain and Day, 1960; 1966)

Richard Chase, *The American Novel and Its Tradition* (Johns Hopkins UP, 1957)

平石貴樹『アメリカ文学史』（松柏社、2010年）

【成績評価の方法と基準】

・授業への貢献度（ちゃんと予習ができていないか、討議に積極的に参加しているか）：30%

・プレゼンテーション（担当箇所の内容を正確に把握できているか、引用箇所の分析がよくできているか、討議のための主題を提示できているか）：30%

・期末レポート（自分の解釈を提示し、リサーチにもとづいて、適切な箇所を引用しながらその解釈の妥当性を論証する）：40%

【学生の意見等からの気づき】

批評については、受講者各自の研究の興味関心に応じて読む文献を調整する。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞アメリカ文学

＜研究テーマ＞南北戦争後の小説とナショナル・アイデンティティ、小説の歴史と理論

＜主要研究業績＞

①「"My Beth"——*Little Women* におけるベスの病とジョーのキャリア」『英文学誌』（2021年）

②「Transbellum とは何か、あるいは作者の不死について——アメリカ文学研究の Temporal Turn とその帰結」『英文学誌』（2020年）

③「ギルバート・オズモンドはどこ出身か——*The Portrait of a Lady* と南北和解のナラティブ」『英文学誌』（2018年）

【Outline (in English)】

This class is a seminar on the American novel. The course begins with a historical and theoretical survey of the novel genre, framing the questions of what the novel *is* and what the novel *does*, as well as what is “American” in the American novel. In the second half of the semester, through the close reading of Henry James’s *The Bostonians* (1886), students develop their skills to analyze literary texts in a critical way with focus both on their individuality and historicity. Most classes consist of presentations by students, class discussions, and lectures.

Grades will be determined based on the following:

1) Participation and discussion (30%)

2) Presentations (30%)

2) Final paper (40%)

LIT600B3

英米文学演習第二 (American Fiction) A

宮川 雅

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ① アーヴィングの小説技法の検討
 - ② 中間話法と語りの技法の検討
 - ③ ゴシック小説の変化と多様性を探る
 - ④ *The Sketch Book*(1819-20) から代表的短篇数篇と *Tales of a Traveller* 第一部 (1824) のテキスト精読。
- ＜講義題目＞ Washington Irving 研究

【到達目標】

- ① ゴシック小説の主題や方法についての概観的知識を得ること。
- ② ワシントン・アーヴィングの作家としての営みを概観して慨嘆すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

レポーター制によるアメリカ文学テキストの精読。
ワシントン・アーヴィング (1783-1859) の作品を、20 世紀の全集版 *Complete Wrks of Washington Irving* (U of Wisconsin P/ Twayne, 1964-88) のテキストを使って読む。
ハンドアウト・課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じてもおこなう予定。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	レポーターの担当を決められるだけ決める／辞書・レファレンス類についてのプリント配布／アーヴィングについての bibliography 配布
第 2 回	『スケッチ・ブック』①	序文の検討、「Rip Van Winkle」
第 3 回	『スケッチ・ブック』②	Donald Ringe のゴシック研究を読む
第 4 回	『スケッチ・ブック』③ "The Hollow of the Three Hills"	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 5 回	『スケッチ・ブック』④	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 6 回	『スケッチ・ブック』⑤	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 7 回	『旅人の物語』①	ポーの短篇小説論を読む
第 8 回	『旅人の物語』②	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 9 回	『旅人の物語』③	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 10 回	『旅人の物語』④	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 11 回	『旅人の物語』⑤	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 12 回	『旅人の物語』⑥	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 13 回	『旅人の物語』⑦	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 14 回	『旅人の物語』⑧	レポーターによる発表と質疑応答と議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

辞書類にあたって、読み進めること。クロス・レファレンスを意識すること。授業外学習時間は、標準として、授業前後に 2 時間ずつ以上が期待される。積極的な質問・意見も考えながら下調べ・復習をしてほしい。

【テキスト（教科書）】

配布プリントを使用。

【参考書】

全集本を専攻室に置く。アメリカのゴシック研究の古典は Donald Ringe の *American Gothic: Imagination and Reason in Nineteenth-Century Fiction* (University of Kentucky Press, 1982) [邦訳 小宮照夫ほか、松柏社、2005 年]。

アーヴィングに関する研究書（アメリカン・ゴシックの研究書書誌を含む）は初回にプリントを配布する（学習支援システムの「教材」に入れる）。

【成績評価の方法と基準】

「配分 (%)」：出席を前提とした上での授業への積極的な参加度 70 パーセント、期末レポート 30 パーセント

「評価基準」：レポーター時の発表の内容とまとめ度と努力、非レポーター時の発言による参加の積極性、期末レポートの内容、以上を数値化して合計したうえで総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート実施しておりません。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 近代アメリカ文学

＜研究テーマ＞ アメリカ文学史と宗教と神秘学、小説の語りと技法

＜主要研究業績＞ 「Ormond」におけるピクチャレスクな意匠をめぐる『英文学誌』47 号（2005 年 3 月）：27-44、「ポーの宇宙論と錬金術（十） 第五章 ポーと現代——ゴシック、ロマン主義、オカルト、近代芸術についての覚え書（その二）」『法政大学文学部紀要』50 号（2005 年 3 月）：91-110、「Re: Rip の妻はいつ死んだのか？」『法政大学文学部紀要』51 号（2005 年 9 月）：1-13、「疑似科学と科学の境」（八木敏雄・巽孝之編『エドガー・アラン・ポーの世紀』（研究社、2009）251-67.

【Outline (in English)】

[Lecture Title:] Reading Irving's Gothic Tales

Students learn to carry to a higher level the skillful analysis of language and text, by close reading of Washington Irving's gothic tales. Students also obtain knowledge about literary gothicism and about its developments.

[Learning activities outside of classroom:] Before/after each class meeting, students are expected to spend 2 hours respectively to understand the course content.

[Grading Criteria/Policies:] Overall grade in the class will be decided based on the following: in-class contribution [positive participation] (70%), final report [paper] (30%).

LIT600B3

英米文学演習第二 (American Fiction) B

宮川 雅

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ① ポーの短篇小説の検討（あわせて「象嵌」されたポー自作の詩も読む）
- ② ゴシック小説の多様性を探る
- ③ 多様な解釈の可能性の検討

＜講義題目＞ Edgar Allan Poe の短篇と詩の研究

【到達目標】

- ① ゴシック・ロマンスの主題や方法についての概観的知識を得ること。
- ② ポーの作家としての営みを概観して慨嘆すること。
- ③ アメリカ短篇小説について歴史的理解を得る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

レポーター制によるアメリカ文学テキストの精読。

自作の詩が「引用」されたポーの短篇小説を探して読む。それから詩が象嵌されていない短篇小説を読む。ポーの短篇小説論と「統一性 unity」について作品という「小宇宙」に即して考えてみる。

授業で提出されたりアクションペーパーなどにおけるコメント・質問へは、そのうちのいくつかを取り上げ、全体に対してフィードバックをおこない、議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ポーの短篇小説論	資料の提示と配布
第 2 回	"Metzengerstein"	（短篇作家の始まりを考える作品として）
第 3 回	"The Fall of the House of Usher" (1839)	（典型的な詩+物語の作品として） レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 4 回	"The Assignment" (1834)	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 5 回	"Morella" (1835)	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 6 回	"Ligeia" (1838)	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 7 回	"How to Write a Blackwood Article" (1838)	（引用とポーの創作技法を考える作品として）レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 8 回	"A Predicament" (1838)	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 9 回	"The Fall of the House of Usher" (1839); "The Haunted House" (1839)	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 10 回	"The Island of the Fay" (1841)	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 11 回	ポーの短篇小説論	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 12 回	ポーの詩論	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 13 回	ポーの創作論	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 14 回	まとめ	議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

研究書を読むことと辞書を引いて予習すること。予習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

Thomas Ollive Mabbott 編の *Collected Works of Edgar Allan Poe* をプリント等で配布する（第1巻が詩で、2・3巻が短篇）。

【参考書】

初回にリストを配布する予定。

【成績評価の方法と基準】

「配分 (%)」：出席を前提とした上での授業への積極的な参加度 70 パーセント、期末レポート 30 パーセント

「評価基準」：レポーター時の発表の内容とまとまり度と努力、非レポーター時の発言による参加の積極性、期末レポートの内容、以上を数値化して合計したうえで総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート実施せず。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 近代アメリカ文学

＜研究テーマ＞ アメリカ文学史と宗教と神秘学、小説の語りと技法

＜主要研究業績＞ 「Ormond」におけるピクチャレスクな意匠をめぐる『英文學誌』47号（2005年3月）：27-44、「ポーの宇宙論と錬金術（十）第五章 ポーと現代——ゴシック、ロマン主義、オカルト、近代芸術についての覚え書（その二）」『法政大学文学部紀要』50号（2005年3月）：91-110、「Re: Ripの妻はいつ死んだのか？」（『法政大学文学部紀要』51号（2005年9月）：1-13、「疑似科学と科学の境」（八木敏雄・巽孝之編『エドガー・アラン・ポーの世紀』（研究社、2009）251-67.

【Outline (in English)】

[Lecture Title:] Reading Poe's Gothic Fiction

Students learn to carry to a higher level the skillful analysis of language and text, by close reading of Edgar Allan Poe's gothic tales and poems. Students also obtain knowledge about literary gothicism and about its developments.

[Learning activities outside of classroom:] Before/after each class meeting, students are expected to spend 2 hours respectively to understand the course content.

[Grading Criteria/Policies:] Overall grade in the class will be decided based on the following: in-class contribution [positive participation] (70%), final report [paper] (30%).

LIT600B3

英米文学演習第三 (British Fiction) A

丹治 愛

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

＜講義題目＞フォースター『ハワーズ・エンド』を読む

E. M. フォースター『ハワーズ・エンド』を、同時代の歴史的状況と関連させながら読む。そのうえで、そのような方向で書かれた代表的批評を読む。

【到達目標】

- ・フォースターの生涯、作品、時代について、一般的かつ特定の事実を列記することができる。
- ・歴史主義的な読解の理論を理解し、方法を実践することができる。
- ・『*Howards End*』の主題的特徴について具体的に述べることができる。
- ・作品解釈について他人と議論することができる。
- ・英語批評論文を正確に読むことができる。
- ・批評論文を書くことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・演習形式でテキストを精読し、学生個人個人がその作品のなかにある主題を発見し、相互に解釈を発表しあいながら、作品への理解を深めていく。
- ・そのうえで 4000 字程度の期末レポートを書く。
- ・予習は必須。欠席の場合も、かならず毎週の課題を提出すること。良いコメントは授業内で紹介し、さらなる議論に活かす。
- ・提出されたレポートについてはルーブリックで講評する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
①	ガイダンス・イントロダクション	授業のガイダンスとフォースター文学へのイントロダクション。
②	『ハワーズ・エンド』を読む（１）	『ハワーズ・エンド』を５つの部分に分け、その第１部を読む。
③	『ハワーズ・エンド』を読む（２）	『ハワーズ・エンド』を５つの部分に分け、その第２部を読む。
④	『ハワーズ・エンド』を読む（３）	『ハワーズ・エンド』を５つの部分に分け、その第３部を読む。
⑤	『ハワーズ・エンド』を読む（４）	『ハワーズ・エンド』を５つの部分に分け、その第４部を読む。
⑥	『ハワーズ・エンド』を読む（５）	『ハワーズ・エンド』を５つの部分に分け、その第５部を読む。
⑦	中間まとめ	『ハワーズ・エンド』の歴史主義的テーマをリストアップし、それらについての理解を深める。
⑧	『ハワーズ・エンド』論を調査する	中間まとめを受けて、『ハワーズ・エンド』論を調査し、読むべき論文３本を決定する。
⑨	『ハワーズ・エンド』論を読む（１）	歴史主義的論文（１）の前半を読む。
⑩	『ハワーズ・エンド』論を読む（２）	歴史主義的論文（１）の後半を読む。
⑪	『ハワーズ・エンド』論を読む（３）	歴史主義的論文（２）の前半を読む。
⑫	『ハワーズ・エンド』論を読む（４）	歴史主義的論文（２）の後半を読む。
⑬	『ハワーズ・エンド』論を読む（５）	歴史主義的論文（３）の前半を読む。

- ⑭ 『ハワーズ・エンド』 歴史主義的論文（３）の後半を読む。
論を読む（６）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業中のディスカッションに参加できるよう、授業前に作品および作品に関する批評作品を精読し、自分の意見をまとめてくること。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

E. M. Forster, *Howards End* (Penguin Classics)

【参考書】

授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点 50%（準備をしたうえで、積極的に討議に参加すること）
4000 字程度の期末レポート 50%（作品と作品に関する批評作品を精読したうえで、自分なりの独創的解釈を創造し、その解釈の妥当性を論理的に証明すること）

【学生の意見等からの気づき】

双方向的な授業を心がける。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

イギリス文学

＜研究テーマ＞

19 世紀後半から 20 世紀前半にかけてのイギリス文学および文化

【Outline (in English)】

Lecture Title: Reading Forster's *Howards End*

We will read E. M. Forster's *Howards End* in relation to the historical context of its time. We will then read representative critical essays written in that direction.

Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

Grading Criteria/Policies: Your overall grade in the class will be decided based on the following: in-class contribution (50%), final report (50%).

LIT600B3

英米文学演習第三（British Fiction）B

丹治 愛

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

＜講義題目＞カントリー・ハウス小説を読む

3冊の戦間期のカントリー・ハウス小説を、同時代の歴史的状況と関連させながら読む。

【到達目標】

- ・カントリー・ハウス小説の歴史的展開について、一般的かつ特定の事実を列記することができる。
- ・歴史主義的な読解の理論を理解し、方法を実践することができる。
- ・代表的なカントリー・ハウス小説の主題的特徴について具体的に述べることができる。
- ・作品解釈について他人と議論することができる。
- ・英語批評論文を正確に読むことができる。
- ・批評論文を書くことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・演習形式でテキストを精読し、学生個人個人がその作品のなかにある主題を発見し、相互に解釈を発表しあいながら、作品への理解を深めていく。
- ・そのうえで 4000 字程度の期末レポートを書く。
- ・予習は必須。欠席の場合も、かならず毎週の課題を提出すること。良いコメントは授業内で紹介し、さらなる議論に活かす。
- ・提出されたレポートについてはルーブリックで講評する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス・イントロダクション	授業のガイダンスとカントリー・ハウス小説のイントロダクション。
第 2 回	カントリー・ハウス小説の概要	大石和欣『家のイングランド』をとおしてカントリー・ハウス小説の概要を理解する。
第 3 回	ヴァージニア・ウルフ『ダロウェイ夫人』（1）	全体を4つに分け、その第1部を読む。重要箇所のディスカッション。
第 4 回	ヴァージニア・ウルフ『ダロウェイ夫人』（2）	全体を4つに分け、その第2部を読む。重要箇所のディスカッション。
第 5 回	ヴァージニア・ウルフ『ダロウェイ夫人』（3）	全体を4つに分け、その第3部を読む。重要箇所のディスカッション。
第 6 回	ヴァージニア・ウルフ『ダロウェイ夫人』（4）	全体を4つに分け、その第4部を読む。重要箇所のディスカッション。
第 7 回	D・H・ロレンス『チャタレイ夫人の恋人』（1）	全体を4つに分け、その第1部を読む。重要箇所のディスカッション。
第 8 回	D・H・ロレンス『チャタレイ夫人の恋人』（2）	全体を4つに分け、その第2部を読む。重要箇所のディスカッション。
第 9 回	D・H・ロレンス『チャタレイ夫人の恋人』（3）	全体を4つに分け、その第3部を読む。重要箇所のディスカッション。

第 10 回	D・H・ロレンス『チャタレイ夫人の恋人』（4）	全体を4つに分け、その第4部を読む。重要箇所のディスカッション。
第 11 回	ダフネ・デュ・モリア『レベッカ』（1）	全体を4つに分け、その第1部を読む。重要箇所のディスカッション。
第 12 回	ダフネ・デュ・モリア『レベッカ』（2）	全体を4つに分け、その第2部を読む。重要箇所のディスカッション。
第 13 回	ダフネ・デュ・モリア『レベッカ』（3）	全体を4つに分け、その第3部を読む。重要箇所のディスカッション。
第 14 回	ダフネ・デュ・モリア『レベッカ』（4）	全体を4つに分け、その第4部を読む。重要箇所のディスカッション。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業中のディスカッションに参加できるよう、授業前に作品および作品に関する批評作品を精読し、自分の意見をまとめること。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

ヴァージニア・ウルフ『ダロウェイ夫人』（集英社文庫）
D. H. ロレンス『チャタレイ夫人の恋人』（光文社文庫）
ダフネ・デュ・モリア『レベッカ』（新潮文庫）

【参考書】

大石和欣『家のイングランド』（名古屋大学出版会）1章、2章、4章、5章

【成績評価の方法と基準】

平常点 50%（準備をしたうえで、積極的に討議に参加すること）
4000 字程度の期末レポート 50%（作品と作品に関する批評作品を精読したうえで、自分なりの独創的解釈を創造し、その解釈の妥当性を論理的に証明すること）

【学生の意見等からの気づき】

双方向的な授業を心がける。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

イギリス文学

＜研究テーマ＞

19世紀後半から20世紀前半にかけてのイギリス文学および文化

【Outline (in English)】

Lecture Title: Reading Country House Novels

We will read three inter-war country house novels in relation to the historical context of its time.

Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

Grading Criteria/Policies: Your overall grade in the class will be decided based on the following: in-class contribution (50%), final report (50%).

LIN600B3

英語学演習（英語史・言語変化理論） A

福元 広二

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

英語がどのようにして世界中で使用されるようになり、世界共通語となってきたかを解説する。また、英語の歴史を学ぶことで、現代の英語に対してさらに理解を深めることを主な目的としている。

【到達目標】

英語史における文法変化について説明できるようになる。
英語史における文献をきちんと正確に読めるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は、基本的に教科書に沿って進めていきます。教科書の中で、学生は自分に関心のある章を選び、その内容について発表していく形式です。また、英語で書かれた論文などをわかりやすく発表してもらいます。

リアクションペーパー等における良いコメントは授業内で紹介し、さらなる議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業内容の紹介
第 2 回	Chapter 1 Introductory (1)	統語論の説明と歴史的データ
第 3 回	Chapter 1 Introductory (2)	インド・ヨーロッパ祖語、ゲルマン祖語
第 4 回	Chapter 2 Old English (1)	古英語の時代背景
第 5 回	Chapter 2 Old English (2)	古英語の文法
第 6 回	Chapter 2 Old English (3)	古英語の語彙
第 7 回	Chapter 3 The Vikings in England	バイキングの影響
第 8 回	Chapter 4 The Norman Conquest (1)	フランスの影響
第 9 回	Chapter 4 The Norman Conquest (2)	フランス語借用語
第 10 回	Chapter 5 Middle English (1)	中英語の時代背景
第 11 回	Chapter 5 Middle English (2)	中英語の文法
第 12 回	プレゼンテーション (1)	論文紹介（１）
第 13 回	プレゼンテーション (2)	論文紹介（２）
第 14 回	春学期のまとめ	補足とまとめを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に教科書を読んで、予習をしてください。
本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

Charles Barber The History of English (英宝社)

【参考書】

適宜指示します。

【成績評価の方法と基準】

平常点とレポートで総合的に評価します。（平常点 60 点、レポート 40 点）

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

英語学・英語史

<研究テーマ>

初期近代英語期の文法

<主要研究業績>

「第 6 章 Shakespeare の英語」

『英語教師のための英語史』

開拓社 (2018)

【Outline (in English)】

The purpose of this course is to introduce the major changes in English grammar from Old English to Present-day English.

The goal of this course is to give students the basic knowledge necessary to understand the history of the English language.

Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.

Final grades will be calculated according to the following process:

Mid-term report (40%) and in-class contribution (60%)

LIN600B3

英語学演習（英語史・言語変化理論）B

福元 広二

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

英語がどのようにして世界中で使用されるようになり、世界共通語となってきたかを解説する。また、英語の歴史を学ぶことで、現代の英語に対してさらに理解を深めることを主な目的としている。

【到達目標】

英語史における文法変化について説明できるようになる。
英語史における文献をきちんと正確に読めるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示された
どの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針
に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は、基本的に教科書に沿って進めていきます。教科書の中で、学生は自分に興味のある章を選び、その内容について発表していく形式です。また、英語で書かれた論文などをわかりやすく発表してもらいます。

リアクションペーパー等における良いコメントは授業内で紹介し、さらなる議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業の概要説明
第 2 回	Chapter 6 Early modern English (1)	初期近代英語の時代背景
第 3 回	Chapter 6 Early modern English (2)	初期近代英語の文法
第 4 回	Chapter 6 Early modern English	初期近代英語の借用語
第 5 回	Chapter 7 English in the Scientific Age (1)	後期近代英語の時代背景
第 6 回	Chapter 7 English in the Scientific Age (2)	後期近代英語の文法
第 7 回	Chapter 7 English in the Scientific Age (3)	後期近代英語の借用語
第 8 回	Chapter 8 English as a World Language (1)	アメリカ英語
第 9 回	Chapter 8 English as a World Language (2)	標準英語
第 10 回	Chapter 9 English Today and Tomorrow (1)	英語の方言
第 11 回	Chapter 9 English Today and Tomorrow (2)	現在起きている変化
第 12 回	プレゼンテーション (1)	論文紹介（1）
第 13 回	プレゼンテーション (2)	論文紹介（2）
第 14 回	秋学期のまとめ	補足とまとめを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に教科書を読んで、予習をしてください。本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

Charles Barber (1978) The History of English 英宝社

【参考書】

適宜指示します。

【成績評価の方法と基準】

平常点とレポートで総合的に評価します。（平常点 60 点、レポート 40 点）

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

英語学・英語史

<研究テーマ>

初期近代英語期の文法

<主要研究業績>

「第 6 章 Shakespeare の英語」

『英語教師のための英語史』

開拓社 (2018)

【Outline (in English)】

The purpose of this course is to introduce the major changes in English grammar from Old English to Present-day English.

The goal of this course is to give students the basic knowledge necessary to understand the history of the English language.

Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.

Final grades will be calculated according to the following process:

Mid-term report (40%) and in-class contribution (60%)

LNG600B3

言語学演習（応用言語学）A

川崎 貴子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

音声/音韻の第二言語習得に関する論文を読み、発表することにより、言語習得の分野での問いの立て方、検証方法を確認する。様々なテーマの論文を読むことを通して、テーマの立て方、仮説検証の仕方を学び、学生それぞれが研究テーマを見つけ、研究計画を組み立てる。

【到達目標】

本授業では、特に音韻分野の第一言語習得、および第二言語習得の主な研究を紹介することにより、言語習得の理論研究がどのように進んできたのかを学ぶ。また、様々な論文で用いられている実験方法を比較し、第二言語習得の研究手法を学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

論文を読み、毎回全員で発表・議論する演習方式で行う。主に音声・音韻の第二言語習得に関する論文を読み、発表することにより、言語習得の分野での問いの立て方、検証方法を確認し、取り上げられている問題に対して、どのような実験を行っているかを学ぶ。その後、各自、1年間で実行可能な研究テーマを設定し、それぞれのテーマの先行研究を読み、研究計画を構築していく。担当者は担当箇所の核になるデータ、及びその分析方法をまとめ、批判をおりまぜながら議論する。

授業で提出されたリアクションペーパーなどにおけるコメント・質問へは、そのうちのいくつかを取り上げ、全体に対してフィードバックを行い、議論に活かす。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	Orientation	授業内容の説明
2	リサーチメソッド・授業プランの作成	課題論文リストの提示と概要の説明
3	言語習得研究	第一言語習得と第二言語習得
4	第二言語習得の理論	音韻習得理論を取り上げ、概要を紹介する
5	SLA Phonology 論文発表（1）	SLA Phonology 論文発表と分析手法について
6	SLA Phonology 論文発表（2）	分析手法について・演習（2）
7	研究計画発表1	修士2年生による研究テーマ発表
8	研究計画発表2	修士1年生による研究テーマ発表
9	エラーに関する研究	エラーのタイプについての分析
10	処理可能性理論（1）	処理可能性理論についての概要、理論の説明
11	処理可能性理論（2）	処理可能性理論に関する論文発表
12	学生による発表（1）	レビュー論文
13	学生による発表（2）	学生による論文のポスター発表（1）
14	学生による発表（3）	学生による論文のポスター発表（2）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業前に指定された範囲の論文を読むこと。そして、担当箇所については、発表の準備を十分に行うこと。本授業の準備・復習時間は、4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

授業内で必要に応じて論文を指定します。

【参考書】

授業内でその都度、指定します。

【成績評価の方法と基準】

＜修士課程学生＞

授業での議論への参加：40%

授業内発表：40%

研究計画書：20%

【学生の意見等からの気づき】

担当学生により発表資料のアップロードが遅れ、予習が間に合わないとのコメントがありました。今年度は資料や課題論文の提出の期限を厳守し、早めに準備するように学期当初から声かけをしたいと思います。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 音韻論、第二言語習得

＜研究テーマ＞ 音韻対比の音声的影響、第二言語学習者の音韻習得など

＜主要研究業績＞

川崎貴子・田中邦佳「L2英語摩擦音の知覚における高周波数帯域情報の利用」『法政大学文学部紀要』第65号 pp. 63-70. (2012)

川崎貴子「カタカナ代用による第2言語音知覚調査」『法政大学文学部紀要』第63号 pp. 29-37. (2011)

Takako Kawasaki, John Matthews, and Kuniyoshi Tanaka "Processability of Acoustic Cues in the Perception of L2 Speech." Paper presented at 12th International Symposium on Processability Approaches to Language Acquisition, Ghent University, Ghent, Belgium. (2012)

川崎貴子・マシューズジョン・田中邦佳「L2音韻カテゴリーの構築過程における音響的手がかりの利用と抑制—日本語母語話者による英語摩擦音習得—」白畑知彦・須田孝司 編『名詞句と音声・音韻の習得（第二言語習得モノグラフシリーズ）』くろしお出版.(2017)

【Outline (in English)】

Through reading SLA Phonetics/Phonology papers, students will learn how to set their research theme and test their hypotheses.

Learning Objectives: The aim of this course is to deepen the students' understanding of theories of SLA and research methodologies in the field and help them to find their own research topics.

Learning activities outside of classroom: Students are expected to read the assigned papers before class. Students are required to study about 4 hours outside of classroom.

Grading Criteria:

In-class participation: 40%

In-class presentation : 40%

Research abstract : 20%

LNG600B3

言語学演習（応用言語学）B

川崎 貴子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語話者の英語習得、および第二言語としての日本語習得の、特に音韻・音声習得の研究論文を読み、議論することを通して、自らの論文の基礎となる理論、研究法を学ぶ。

【到達目標】

一音韻論、及び SLA の音韻・語彙分野の基礎文献を読みつつ、第二言語習得・教育の分野での調査手法についての知識を身に付ける。一自らの研究計画を策定、研究を遂行し、博士論文の執筆に生かす。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

春学期に続き、指定文献を読み、毎回全員で発表・議論していく。担当者は担当箇所の核になるデータ、及びその分析方法をまとめ、批判をおりまぜながら議論すること。修士論文執筆の際に役立つよう、おもに研究法・論文の構成・データ分析などについて学ぶ。授業で提出されたリアクションペーパーなどにおけるコメント・質問へは、そのうちのいくつかを取り上げ、全体に対してフィードバックを行い、議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業内容の説明
2	修士2年生の研究発表（1）	研究の進捗状況発表（2年生）（1）
3	修士2年生の研究発表（2）	研究の進捗状況発表（2年生）（2）
4	修士1年生の研究発表（1）	研究の進捗状況の発表（1年生、および研修生）（1）
5	修士1年生の研究発表（2）	研究の進捗状況の発表（1年生、および研修生）（2）
6	論文購読ー母語音声の影響に関する論文	母語の目録の L2 への影響（解説）
7	論文購読ー母語音声の影響（研究方法）	母語の目録の L2 への影響（学生による発表）（1）
8	論文購読ー母語音声の影響（分析方法・結果記述）	母語の目録の L2 への影響（学生による発表）（2）
9	論文購読ー音韻・語彙習得	語彙の特定と音韻処理ー学生による発表（1）
10	論文購読ー音韻・語彙習得（研究手法）	語彙の特定と音韻処理ー学生による発表（2）
11	論文購読ー音韻・語彙習得（分析）	語彙の特定と音韻処理ーデータ分析演習
12	1年生による修論計画発表	1年生は研究計画・先行研究リスト・今後のプランなどを発表
13	2年生による修論発表	2年生による修士論文の概要・目的・方法・結果の発表
14	博士後期課程学生による論文発表・講評	博士後期課程学生による論文の発表・発表の講評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業前に指定された範囲の論文を読むこと。そして、担当箇所については、発表の準備を十分に行うこと。本授業の準備・復習時間は、4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特に設定しない。必要に応じて授業内で指示する。

【参考書】

必要に応じて授業内で指示する。

【成績評価の方法と基準】

＜修士課程＞

授業発表....40%

授業内での発言・議論への貢献....40%

学期末論文....20%

【学生の意見等からの気づき】

理解を細かく確かめつつ進めたことが好評であった。また、追加文献を提案しながら、それぞれの研究テーマに応じた学習を授業外で進められるように、アドバイスしたい。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 音韻論、第二言語習得

＜研究テーマ＞ 音韻対比の音声的影響、第二言語学習者の音韻習得など

＜主要研究業績＞

川崎貴子・田中邦佳「L2 英語摩擦音の知覚における高周波数帯域情報の利用」『法政大学文学部紀要』第 65 号 pp. 63-70. (2012)

川崎貴子「カタカナ代用による第2言語音知覚調査」『法政大学文学部紀要』第 63 号 pp. 29-37. (2011)

Takako Kawasaki, John Matthews, and Kuniyoshi Tanaka "Processability of Acoustic Cues in the Perception of L2 Speech." Paper presented at 12th International Symposium on Processability Approaches to Language Acquisition, Ghent University, Ghent, Belgium. (2012)

川崎貴子・マシューズジョン・田中邦佳「L2 音韻カテゴリーの構築過程における音響の手がかりの利用と抑制ー日本語母語話者による英語摩擦音習得ー」白畑知彦・須田孝司 編『名詞句と音声・音韻の習得（第二言語習得モノグラフシリーズ）』くろしお出版.(2017)

【Outline (in English)】

Through reading papers on phonological and phonetic acquisition, students will learn theories and research methods that will form the basis of their own papers.

Learning Objectives:

-To acquire knowledge of research methods in the field of second language acquisition and teaching, while reading basic literature in the field of phonology and SLA phonology and vocabulary.

-Students will be able to formulate their own research plan, conduct research, and produce a thesis.

Learning activities outside of classroom : Students are required to read assigned papers and prepare for their presentations. Students are expected to study at least 4 hours outside of classroom.

Grading Criteria:

In-Class presentations....40%

In-Class participation....40%

Term paper....20%

LIN600B3

英語学特殊研究第二（英語リーディングの科学）A

濱田 彰

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本講義では、外国語として英語を学ぶ上で、文字言語情報をより正確かつ高度に処理するプロセスやその習得過程の解明を目指していく。特に読み手の知識や経験、関心、スタイルおよび認知的な要因が「読み」にどのような影響を与えているのか、読み手の心の中に生じているプロセスの分析を試み、リーディング能力の優劣はどのような要因から決定されるのかを探り、その応用として教室における英語リーディング指導の在り方を検証する。

【到達目標】

- ・第二言語読解の知識と技能の発達過程を理解する。
- ・第二言語読解の認知プロセスを理解する。
- ・第二言語読解理論を発展させる研究を立案できる。
- ・第二言語読解理論に基づいた読解指導を立案できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

毎週レポーターが教科書の概要や研究プロポーザルを発表し、内容について全員で討議する。前回の授業で提出された発表資料および発表内容から良い点をいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックをおこなう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	Orientation	授業内容・方法の説明, Google Classroom の登録, 文献輪読の担当決め
第 2 回	Understanding L2 Reading 1	The Nature of Reading Abilities
第 3 回	Understanding L2 Reading 2	Comparing L1 and L2 Reading
第 4 回	Exploring Research in Reading 1	Key Studies in L1 Reading
第 5 回	Exploring Research in Reading 2	Key Studies in L2 Reading
第 6 回	L2 Reading Curricula and Instruction 1	Principles for L2 Reading-Curriculum Design
第 7 回	L2 Reading Curricula and Instruction 2	Teaching L2 Reading Using Evidence-Based Practices
第 8 回	Investigating Reading through Action Research 1	Reading Teachers as Action Researchers
第 9 回	Investigating Reading through Action Research 2	Action Research Projects: Set 1
第 10 回	Investigating Reading through Action Research 3	Action Research Projects: Set 2
第 11 回	Searching for Resources	Resources of Exploring L2 Reading
第 12 回	Planning Research for L2 Reading Instruction 1	Literature Review

第 13 回	Planning Research for L2 Reading Instruction 2	Teaching and Research Proposal 1
第 14 回	Planning Research for L2 Reading Instruction 3	Teaching and Research Proposal 2

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・文献の指定された箇所を事前に通読すること。
- ・読んだ文献を研究ノートとしてまとめておくこと。
- ・本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

Grabe, W., & Stoller, F. (2019). Teaching and researching reading (3rd ed.). New York, NY: Routledge.
(<https://amzn.to/38jXFI1>)

【参考書】

卯城祐司（編著）. (2009). 『英語リーディングの科学 — 「読めたつもり」の謎を解く』東京：研究社.

川崎 恵里子（編著）. (2014). 『文章理解の認知心理学: ことば・からだ・脳』東京：誠信書房.

【成績評価の方法と基準】

Research proposal (60%)
Chapter presentation (40%)

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【学生が準備すべき機器他】

本講座は Zoom によるオンライン授業の形態で行われます。授業への参加方法は学習支援システム (Hoppii) に記載しています。

This course is going to be conducted using Zoom. How to participate in the class is described in the learning support system (Hoppii).

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

第二言語語彙習得・第二言語読解・言語テストング

<研究テーマ>

適性処遇交互作用に基づく英語語彙学習の最適化

<主要研究業績>

小林雄一郎・濱田彰・水本篤. (2020). 『R による教育データ分析入門』東京: オーム社.

Hamada, A. (2020). Using meta-analysis and propensity score methods to assess treatment effects toward evidence-based practice in extensive reading. *Frontiers in Psychology*, 11(617), 1 – 14.

Hamada, A., & Takaki, S. (2019). Approximate replication of Matsuda and Gobel (2004) for psychometric validation of Foreign Language Reading Anxiety Scale. *Language Teaching*, 1 – 17.

Hamada, A. (2015). Effects of forward and backward contextual elaboration on lexical inferences: Evidence from a semantic relatedness judgment task. *Reading in a Foreign Language*, 27, 1 – 21.

【Outline (in English)】

In this course, students will learn the whole picture of teaching and researching reading in a second language (L2) and discuss how reading works and differs for L2 learners. Students are required to propose their research projects and classroom instruction toward evidence-based practice in pedagogy.

LIN600B3

英語学特殊研究第二（英語リーディングの科学）B

濱田 彰

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本講義では、外国語として英語を学ぶ上で、文字言語情報をより正確かつ高度に処理するプロセスやその習得過程の解明するための研究法を学ぶ。特に読み手の知識や経験、関心、スタイルおよび認知的な要因が「読み」にどのような影響を与えているのか、読み手の心の中に生じているプロセスの分析を試み、リーディング能力の優劣はどのような要因から決定されるのかを探り、その応用として教室における読解指導の問題を解決するためのアクションリサーチを体験する。

【到達目標】

- ・第二言語読解の知識と技能の発達過程を検証するための研究法を理解する。
- ・第二言語読解の認知プロセスを検証するための研究法を理解する。
- ・第二言語読解理論を発展させる研究を行うことができる。
- ・教室における読解指導の問題を解決するアクションリサーチを行うことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

毎週レポーターが教科書の概要や研究プロポーザルを発表し、内容について全員で討議する。前回の授業で提出された発表資料および発表内容から良い点をいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックをおこなう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	Orientation	授業内容・方法の説明, Google Classroom の登録, 文献輪読の担当決め
第 2 回	Quantitative research: Association 1	Correlational relationships between reading comprehension and reading subcomponents
第 3 回	Quantitative research: Association 2	Planning associational research in L2 reading
第 4 回	Quantitative research: Association 3	Causal relationships between reading comprehension and reading subcomponents
第 5 回	Quantitative research: Association 4	Planning causal research in L2 reading
第 6 回	Quantitative research: Experiment 1	Effects of reading instruction on reading comprehension
第 7 回	Quantitative research: Experiment 2	Research methodologies for investigating cognitive processes in L2 reading
第 8 回	Quantitative research: Experiment 3	Research methodologies for investigating online and offline reading processes
第 9 回	Quantitative research: Corpus approach 1	Analyzing linguistic variables affecting L2 reading

第 10 回	Quantitative research: Corpus approach 2	Analyzing reading textbooks
第 11 回	Action research 1	Researching research background
第 12 回	Action research 2	Researching approaches to solving classroom-based problems
第 13 回	Action research 3	Researching data collection and analysis
第 14 回	Action research 4	Researching decision-making processes in action research

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・文献の指定された箇所を事前に通読すること。
 - ・読んだ文献を研究ノートとしてまとめておくこと。
- 本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

Grabe, W., & Stoller, F. (2019). Teaching and researching reading (3rd ed.). New York, NY: Routledge.
(<https://amzn.to/38jXF11>)

【参考書】

- 市川伸一（編）. (2019). 『教育心理学の実践ベース・アプローチ—実践しつつ研究を創出する』東京大学出版会.
- 小林雄一郎・濱田彰・水本篤. (2020). 『R による教育データ分析入門』東京: オーム社.
- 南風原朝和・市川伸一・下山晴彦（編）. 『心理学研究法入門—調査・実験から実践まで』東京大学出版会.

【成績評価の方法と基準】

Research paper (40%)

Research presentation (40%)

Chapter presentation (20%)

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【学生が準備すべき機器他】

本講座は Zoom によるオンライン授業の形態で行われます。授業への参加方法は学習支援システム (Hoppii) に記載しています。
This course is going to be conducted using Zoom. How to participate in the class is described in the learning support system (Hoppii).

【その他の重要事項】

英語学特殊研究第一（英語リーディングの科学）を受講していることが望ましい。

【担当教員の専門分野等】

- ＜専門領域＞
- 第二言語語彙習得・第二言語読解・言語テストング
- ＜研究テーマ＞
- 適性処遇交互作用に基づく英語語彙学習の最適化
- ＜主要研究業績＞

小林雄一郎・濱田彰・水本篤. (2020). 『R による教育データ分析入門』東京: オーム社.

Hamada, A. (2020). Using meta-analysis and propensity score methods to assess treatment effects toward evidence-based practice in extensive reading. *Frontiers in Psychology*, 11(617), 1 – 14.

Hamada, A., & Takaki, S. (2019). Approximate replication of Matsuda and Gobel (2004) for psychometric validation of Foreign Language Reading Anxiety Scale. *Language Teaching*, 1 – 17.

Hamada, A. (2015). Effects of forward and backward contextual elaboration on lexical inferences: Evidence from a semantic relatedness judgment task. *Reading in a Foreign Language*, 27, 1 – 21.

【Outline (in English)】

In this course, students will learn the research methodologies of teaching and researching reading in a second language (L2) and examine how reading works and differs for L2 learners. Students are required to conduct their research projects toward evidence-based practice in pedagogy.

LIN600B3

言語学特殊研究（理論言語学・認知科学） A

石川 潔

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

音声知覚、特に音素の知覚手がかりを考えます。
音声知覚の研究のための知識を学ぶとともに、論文の書き方の訓練も行います。

【到達目標】

音素の知覚の手がかりに関する先行研究の知識を身につける。
先行研究の報告の仕方一般を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示された
どの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針
に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

各自の研究計画の発表、および文献の輪読を行います。
毎回、発表へのフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業内容とやり方の説明
第2回	研究計画について	各自が予定しているテーマの発表
第3回	閉鎖音の知覚1	閉鎖音であることの知覚手がかり
第4回	閉鎖音の知覚2	閉鎖音の調音点の知覚手がかり
第5回	閉鎖音の知覚3	手がかりの文脈依存性
第6回	閉鎖音の知覚4	調音点の知覚についての諸理論 (不変性の模索)
第7回	閉鎖音の知覚5	閉鎖音の有声性の知覚手がかり
第8回	摩擦音・破擦音の知覚1	摩擦音・破擦音であることの知覚 手がかり
第9回	摩擦音・破擦音の知覚2	摩擦音・破擦音の調音点の知覚手 がかり
第10回	摩擦音・破擦音の知覚3	摩擦音・破擦音の知覚の有声性の 知覚手がかり
第11回	鼻音の知覚	鼻音であること及び調音点の知覚 手がかり
第12回	半母音の知覚手がかり	半母音であること及び調音点の知 覚手がかり
第13回	母音の知覚手がかり	静的・動的手がかり
第14回	まとめ	全体のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
テーマ発表の準備をし、また、文献を事前に読んでください。

【テキスト（教科書）】

Lawrence J. Raphael. 2005. Acoustic cues to the perception of segmental phonemes. In David B. Pisoni & Robert E. Remez. eds. *The Handbook of Speech Perception*, Malden, Oxford, and Carlton: Blackwell, pp. 182–206.

【参考書】

適宜、指示。

【成績評価の方法と基準】

発表点 100 %

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

理論言語学（統語論、意味論）、心理言語学（音声知覚、文理解）

<研究テーマ>

音声知覚の単位と様式、アスペクトの実時間処理、読みにおける視覚処理と音韻処理の関係

<主要研究業績>

<http://www.i.hosei.ac.jp/~kiyoshi/research.html>などを参照。

【Outline (in English)】

(Course outline) We study perceptual cues to phonemes.

(Learning Objectives) Acquisition of the knowledge of classical past research.

(Learning activities outside of classroom) Preparation for presentations.

(Grading Criteria /Policy) Presentations (100%).

LIN600B3

言語学特殊研究（理論言語学・認知科学） B

石川 潔

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

音声知覚、特に聞いた場合の単語認識を考えます。
音声知覚の研究のための知識を学ぶとともに、論文の書き方の訓練も行います。

【到達目標】

単語認識の仕組みの解明の難しさがわかるようになる。
単語認識に関する先行研究の知識を身につける。
先行研究の報告の仕方一般を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示された
どの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針
に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

各自の研究計画の発表、および文献の輪読を行います。
毎回、発表へのフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	word segmentation 及び lexical access がなぜ問題か
第 2 回	研究計画について	各自の研究テーマの発表
第 3 回	様々なモデル（その 1）	Trace、Shortlist
第 4 回	様々なモデル（その 2）	PARSYN、Distributed cohort model
第 5 回	様々なモデル（その 3）	モデル間の比較
第 6 回	様々なモデル（その 4）	追加補足： Merge
第 7 回	経験的な知見（その 1）	activation
第 8 回	経験的な知見（その 2）	competition
第 9 回	学位論文の報告（その 1）	進捗状況の発表（その 1）
第 10 回	Variation（その 1）	個人間および個人内の発音の違いの存在
第 11 回	Variation（その 2）	個人間および個人内の発音の違いへの対応
第 12 回	Variation（その 3）	異音への対応
第 13 回	学位論文の報告（その 2）	進捗状況の発表（その 2）
第 14 回	まとめ	全体のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
テーマ発表の準備をし、また、文献を事前に読んでください。

【テキスト（教科書）】

Paul A. Luce and Coner T. McLennan. 2005. Spoken word recognition: The challenge of variation. In David B. Pisoni & Robert E. Remez. eds. *The Handbook of Speech Perception*, Malden, Oxford, and Carlton: Blackwell, pp. 591–609.

【参考書】

適宜、指示。

【成績評価の方法と基準】

発表点 100 %

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

理論言語学（統語論、意味論）、心理言語学（音声知覚、文理解）

<研究テーマ>

音声知覚の単位と様式、アスペクトの実時間処理、読みにおける視覚処理と音韻処理の関係

<主要研究業績>

<http://www.i.hosei.ac.jp/~kiyoshi/research.html>などを参照。

【Outline (in English)】

(Course outline) We study perceptual cues to phonemes.

(Learning Objectives) Acquisition of the knowledge of classical past research.

(Learning activities outside of classroom) Preparation for presentations.

(Grading Criteria /Policy) Presentations (100%).

LIN500B3

英語教育学研究 A

印南 洋

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

<講義題目> Second language acquisition and pedagogy

This course introduces some stimulating issues on second language acquisition and pedagogy. In particular, it focuses on the questions that people often have about language learning.

【到達目標】

In this course, students will learn about (1) second language acquisition and (2) its role in English-as-a-foreign/second language context. Through discussions after reading the course textbook and handouts, students will acquire a deeper understanding of these two issues. Repeating this process throughout the semester will help students develop their understanding of second language education and its application to pedagogy better, based on empirical evidence. By the end of this course, students will be able to better understand (1) second language acquisition and (2) its role in English-as-a-foreign/second language context.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

Most classes consist of lectures, group discussions, and student presentations on topics in second language acquisition and pedagogy. Students are assigned readings from the textbook chapters. リアクションペーパー等における良いコメントは授業内で紹介し、さらなる議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	Introduction	Overview of the course and presentation schedule
第 2 回	Literature search	Literature search using digital and library resources
第 3 回	Myth 1: Children learn languages quickly and easily while adults are ineffective in comparison.	Language learning and age; the Critical Period Hypothesis
第 4 回	Myth 2: A true bilingual is someone who speaks two languages perfectly.	Bilingualism
第 5 回	Interim report on in-class student presentations	Report and feedback
第 6 回	Myth 3: You can acquire a language simply through listening or reading.	Input, output, and interaction
第 7 回	Myth 4: Practice makes perfect.	Attention and noticing
第 8 回	Interim report on in-class student presentations	Report and feedback

第 9 回	Myth 5: Language students learn (and retain) what they are taught.	Explicit and implicit learning; developmental sequences; interaction
第 10 回	Myth 6: Language learners always benefit from correction.	Correction and recasts
第 11 回	Myth 7: Individual differences are a major, perhaps the major, factor in SLA.	Individual differences
第 12 回	Myth 8: Language acquisition is the individual acquisition of grammar	Social approaches: Pragmatics, emergentism, sociocultural approaches, language socialization
第 13 回	Student presentation	Presentation and feedback
第 14 回	Student presentation	Presentation and feedback

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

Before attending the class every week, students are required to read the assigned chapter of the textbook and write a reaction paper.

【テキスト（教科書）】

Steven Brown and Jenifer Larson-Hall. (2012). *Second language acquisition myths: Applying second language research to classroom teaching*. University of Michigan Press. ISBN: 978-0-472-03498-7

【参考書】

Joy Reid with Keith S. Folse, Cynthia M. Schuemann, Pat Byrd and John Bunting, Ken Hyland, Dana Ferris, Susan Conrad, Sharon Cavusgil, & Paul Kei Matsuda. (2008). *Writing myths: Applying second language research to classroom teaching*. ISBN 978-0-472-03257-0

Keith S. Folse. (2004). *Vocabulary myths: Applying second language research to classroom teaching*. ISBN 978-0-472-03029-3

望月昭彦、磐崎弘真、卯城祐司、久保田章（著）。（2010）。『新学習指導要領にもとづく英語科教育法』。大修館書店。ISBN: 978-4469245585

Patsy M. Lightbown & Nina Spada. (2013). *How languages are learned* (4th edition.). Oxford University Press.

Steven Brown. (2011). *Listening myths: Applying second language research to classroom teaching*. ISBN 978-0-472-03459-8

【成績評価の方法と基準】

Reaction paper (60%); Chapter presentation (10%); Student project (30%)

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし

Feel free to ask questions. I look forward to working with you.

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

Applied linguistics, language education, language testing, and program evaluation

<研究テーマ>

Test method effects on test performance

Construct validation study of a test/instrument/questionnaire

Meta-analytic inquiry into the variability of effects

Longitudinal measurement of change in language proficiency and program evaluation

Secondary analysis of survey and administrative datasets

Application of measurement models to language test data (especially, meta-analysis and structural equation modeling)

<主要研究業績>

In'nami, Y., & Koizumi, R. (2013). Statistics and software for test revisions. In A. Kunnan (ed.), *Companion to language assessment (Vol. II: Approaches and Development, Part 7: Assessment Development* (pp.925 - 943). New York: Wiley-Blackwell.

卯城祐司編著。『英語リーディングテストの考え方と作り方』。共著 (第 5 章 テスト得点解釈の留意点 [pp. 78-87] を担当)。平成 24 年 9 月。研究社。

竹内理・水本篤編著。『外国語教育研究ハンドブック：研究手法のより良い理解のために』。共著 (第 14 章 SEM 入門 [pp. 194-206]、第 16 章 メタ分析入門 [pp. 227-239] を担当)。平成 24 年 5 月。松柏社。

【Outline (in English)】

<講義題目> Second language acquisition and pedagogy

This course introduces some stimulating issues on second language acquisition and pedagogy. In particular, it focuses on the questions that people often have about language learning. As for the learning objectives, learning activities outside of classroom, and grading criteria and policy, see below.

LIN500B3

英語教育学研究 B

印南 洋

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

<講義題目> Language testing and assessment

This course is mainly provided for student teachers to give an insight into how to evaluate learner knowledge and performance in L2 education. The course also introduces some stimulating issues on second language testing and assessment. In particular, it focuses on the questions that people often have about language testing and assessment. The students will also examine, discuss, and create types of assessing practices in L2 situations.

【到達目標】

In this course, students will learn about (1) language testing and assessment and (2) its role in English-as-a-foreign/second language context. Through discussions after reading the course textbook and handouts, students will acquire a deeper understanding of these two issues. Repeating this process throughout the semester will help students develop their understanding of language testing and assessment and its relationship with pedagogy better, based on empirical evidence. By the end of this course, students will be able to better understand (1) language testing and assessment and (2) its role in English-as-a-foreign/second language context.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

Most classes consist of lectures, group discussions, and student presentations on topics in language testing and assessment. Students are assigned readings from the textbook chapters. リアクションペーパー等における良いコメントは授業内で紹介し、さらなる議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	Introduction; Literature search	Overview of the course and presentation schedule; Literature search using digital and library resources
第 2 回	Introduction and Myth 1: Assessment is just writing tests and using statistics.	What we should know about assessment
第 3 回	Myth 2: A comprehensive final exam is the best way to evaluate students.	Formative and summative assessments; dynamic assessment
第 4 回	Myth 3: Scores on performance assessments are preferable because of their accuracy and authenticity.	Various issues on performance (speaking and writing) assessments

第 5 回	Myth 4: Multiple choice tests are inaccurate measures of language but are easy to write.	Various issues on multiple choice items
第 6 回	Myth 5: We should test only one skill at a time.	Integrated tasks
第 7 回	Myth 6: A test's validity can be determined by looking at it.	Validity, aspects of validity, and validation
第 8 回	Myth 7: Issues of fairness are not a concern with standardized testing.	Fairness issues in standardized, high-stakes testing
第 9 回	Myth 8: Teachers should not be involved in preparing students for tests.	Learning and assessment
第 10 回	Conclusion: Conclusion and review	Conclusion and review of each chapter
第 11 回	Test development	Exercise on developing a test
第 12 回	Item analysis	Distractor analysis and scoring multiple-choice items in Excel
第 13 回	Student project presentation	Presentation and feedback
第 14 回	Student project presentation	Presentation and feedback

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

Before attending the class every week, students are required to read the assigned chapter of the textbook and write a reaction paper.

【テキスト（教科書）】

Assessment myths: Applying second language research to classroom teaching by Lia Plakans and Atta Gebriel. University of Michigan Press. 2015.

【参考書】

J. Charles Anderson, Caroline Clapham, and Dianne Wall. (2001). *Language test construction and evaluation*. Cambridge University Press. ISBN: 978-0521478298

小泉利恵、印南洋、深澤真（編著）. (2017). 『実例でわかる英語テスト作成ガイド』. 大修館書店. ISBN: 978-4469246100

望月昭彦、深澤真、印南洋、小泉利恵（編著）. (2015). 『英語 4 技能評価の理論と実践: CAN-DO・観点別評価から技能統合的活動の評価まで』. 大修館書店. ISBN: 978-4469245912

【成績評価の方法と基準】

Reaction paper (60%); Chapter presentation (10%); Student project (30%)

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし

Feel free to ask questions. I look forward to working with you.

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

Applied linguistics, language education, language testing, and program evaluation

<研究テーマ>

Test method effects on test performance

Construct validation study of a test/instrument/questionnaire

Meta-analytic inquiry into the variability of effects

Longitudinal measurement of change in language proficiency and program evaluation

Secondary analysis of survey and administrative datasets

Application of measurement models to language test data (especially, meta-analysis and structural equation modeling)

<主要研究業績>

In'nami, Y., & Koizumi, R. (2013). Statistics and software for test revisions. In A. Kunnan (ed.), *Companion to language assessment (Vol. II: Approaches and Development, Part 7: Assessment Development* (pp.925 - 943). New York: Wiley-Blackwell.

卯城祐司編著。『英語リーディングテストの考え方と作り方』。共著（第 5 章 テスト得点解釈の留意点 [pp. 78-87] を担当）。平成 24 年 9 月。研究社。

竹内理・水本篤編著。『外国語教育研究ハンドブック：研究手法のより良い理解のために』。共著（第 14 章 SEM 入門 [pp. 194-206]、第 16 章 メタ分析入門 [pp. 227-239] を担当）。平成 24 年 5 月。松柏社。

【Outline (in English)】

<講義題目> Language testing and assessment

This course is mainly provided for student teachers to give an insight into how to evaluate learner knowledge and performance in L2 education. The course also introduces some stimulating issues on second language testing and assessment. In particular, it focuses on the questions that people often have about language testing and assessment. The students will also examine, discuss, and create types of assessing practices in L2 situations. As for the learning objectives, learning activities outside of classroom, and grading criteria and policy, see below.

LIN500B3

英語発音法 A

高橋 豊美

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

個人の力量に依存する「習うより慣れる」という方法ではなく、「十分に習ってから慣れる」ことで効率良く発音・聞き取りの技能を高める方法を学ぶ。これにより、履修者自身の英語コミュニケーション・スキルの向上が期待できる。また、英語教員を志す学生には、効果的な発音・リスニングの教材を準備するための知識を得る機会にもなるはずである。

<講義題目>

英語音声の記述・分析と発音の実践的知識・技術の習得

【到達目標】

分節音の特徴を理解し、その知識を実践に反映できる技術の習得を目指す。到達目標は次のとおりである。

- (A) 分節音の体系、分布、音声変化について、理論的に説明できる。
- (B) 発話を聞いて、分節音を発音記号で正確に書き取ることができる。
- (C) 発音記号を適切な発音で読むことができる。
- (D) 与えられた英文について、音声変化を予測し、発音モデルを示すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業では、英国標準英語を主な対象とし、個々の分節音の調音的・音響的特徴、分節音の体系について学んだ上で、授業計画に示すように分節音がかかわるさまざまな音声現象の仕組みを理解する。【到達目標 (A)】

配付資料を使用して理論を学び、さらに、その理解を実際に応用できる力を身につけるために、音声教材を使用した発音・聴き取り、発音記号による発話モデルの作成などの練習などを行う。【到達目標 (B)(C)】

課題の提出及び返却には学習支援システムを用いる。この課題については、返却時にコメントを付し、また、返却後の授業で全体的なフィードバックを行う。【到達目標 (D)】

リアクションペーパーは学習支援システムで回収し、個別のフィードバックは同システムで、全体に共通するフィードバックは授業で行う。

授業は対面で実施する予定であるが、COVID-19 の感染状況が拡大している場合は、ビデオ会議システムと (Zoom) 学習支援システム (Hoppi) を併用したオンライン授業に切り替えて実施するので、授業前に学習支援システムのお知らせを確認すること。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 01 回	授業案内	授業の概要／参考文献
第 02 回	音声の基礎、母音	発声の仕組み／母音の調音的特徴／課題 1
第 03 回	子音、音素論	子音の調音的特徴／音声の分類／課題 2
第 04 回	音節の機能、構造	分節音と超分節音／リズムの基本単位／分節音現象の構造記述／課題 3
第 05 回	音節現象	音声変化／押韻／音節構造と音声分布／課題 4
第 06 回	音節とリズム	音節区分／音節子音／音節圧縮／課題 5
第 07 回	母音の変化	弱化／中和／短縮／課題 6

第 08 回 弱形

第 09 回 分節音現象

第 10 回 連結、脱落

第 11 回 交替、挿入、短縮

第 12 回 地域的な音声変化

第 13 回 総括

第 14 回 課題報告、試験

引用形と弱形／弱形の種類／課題 7

音声変化の概要／子音の分布／課題 8

語境界を挟む音のつながり／子音の連続における発音の簡略化／課題 9

語境界を挟む子音の同化／歯茎破裂音の挿入／硬音前母音短縮／課題 10

母音体系／歯茎破裂音の異音／声門音化／r の現れ方

前回までの授業内容のまとめと考察

音声現象の理論的記述と実践

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を目安とする。

資料は事前に配布されるので、授業に臨む前に内容を確認すること。また、授業を受けた後で学習内容を振り返り、知識の定着を図ること。【到達目標 (A)】

授業では、学んだ知識を実践に活かすための発音・聴き取りの練習を行う。授業を受けた後で、要点を確認しながら練習を重ねて技術の向上を目指すこと。【到達目標 (B)(C)】

この授業では、10 回の課題を予定している。この課題の目的は発音モデルの作成をととして知識の定着を図るとともに実践力を伸ばすことである。配布資料と授業内容をしっかりと復習した上で、最初は何も資料等を参照しないで取り組み、それから資料や辞書を利用しながら丁寧に直しを行うこと。その際、最初に間違えたり記入できなかったところは、赤字で訂正・加筆をすることが望ましい。(訂正・加筆箇所の多寡は評価に影響しない。) 提出された課題は担当教員がチェックと評価を行った上でコメントと共に返却される。また、返却後の授業では全体的な解説が行われる。チェックを受けた部分及び解説の要点をよく確認し、作成したモデルの発音練習を行うこと。【到達目標 (D)】

授業で学ぶ知識と技術を実践で活かすには課外の積極的な取組が不可欠である。上記課題のほかに、授業で適宜示す参考資料やウェブサイトを利用するなどして、発音・聴き取りの練習を重ねることが望ましい。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用せず、配布資料にそって授業を進める。

【参考書】

- ・ Wells, John C. (2008) *Longman Pronunciation Dictionary (third edition)*. London: Longman.
- ・ Tench, Paul (2011) *Transcribing the Sound of English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- ・ Cruttenden, Alan (2014) *Gimson's Pronunciation of English (8th edition)*. London: Routledge.
- ・ BBC Learning English: Pronunciation Tips < <http://www.bbc.co.uk/worldservice/learningenglish/grammar/pron/> >

【成績評価の方法と基準】

平常点 (35 %)、課題 (35 %)、試験 (30 %) に基づき成績を評価する。

・平常点 【到達目標 (B)(C)】

音声のしくみの知識と技術は体得する要素が多いので、平常点として、授業における発音・聴き取り練習への取り組み、授業中の発言・質問の頻度と内容を評価する。授業外の学習活動（授業に臨むための準備、授業内容の振り返り）を欠かさず、積極的な姿勢で授業に臨むこと。

・課題 【到達目標 (A)(D)】

課題では、授業で学んだ基礎を発展させて発話モデルを示す力を評価する。課題ごとに示す評価のポイントをよく確認した上で、授業内容を十分に確認しながら、また、辞書で丁寧に発音を調べながら取り組むこと。

・試験 【到達目標 (A)(B)(C)(D)】

試験（実技を含む）では、各到達目標に対応した設問により、授業で学んだ知識の定着度と技術の修練度を評価する。

【学生の意見等からの気づき】

授業改善アンケートの結果及びリアクションペーパーの回答では、総じて否定的な評価はなく、授業の難易度や進度については概ね適切であったと思われる。ただし、特に英文学専攻以外の学生にとっては理解が難しいところもあったので、復習の参考となるように、毎回の授業の要点を掲示板に記録する。理解度については、課題で毎回同じ誤りが繰り返されている場合が見られるので、課題に評価基準を掲載して注意喚起に努め、授業の最後に質疑応答、リフレクションの時間をとるようにして、理解の定着を図る。

【学生が準備すべき機器他】

資料配付、課題提出、リフレクションに学習支援システム Hoppiを使用する。

【その他の重要事項】

英文学専攻では「英語発音法B」、日本国際学専攻では「英語発音法II」とあわせて履修することが望ましい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

音声学、音韻論

<研究テーマ>

音韻理論、英語音声学・音韻論、日本語音声学・音韻論、英語教育
<主要研究業績>

・Toyomi Takahashi (2014). Identity avoidance in the onset. Nasukawa, Kuniya & Henk van Riemsdijk (eds.) *Identity Relations in Grammar*. Boston/Berlin: De Gruyter Mouton. 101-120.

Unique Path. 『音韻研究』2008 (第 11 号). 3-10.

・Toyomi Takahashi (2008). Unique Path. 『音韻研究』2008 (第 11 号). 3-10.

・高橋豊美 (2005). 『弁別素性理論』. 西原哲雄・那須川訓也 (編著) 『音韻理論ハンドブック』. 英宝社. 131-142.

・Toyomi Takahashi (1999). Constraint interaction in Aranda stress. In Hannahs, S. J. & Mike Devenport (eds.) *Issues in Phonological Structure*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins. 151-181.

【Outline (in English)】**[Course outline]**

The goal of this course is to acquire practical knowledge and skills of English pronunciation through studying the features of spoken English as well as practicing its models.

This course aims to study an effective and efficient method of improving oral/aural communication skills by well understanding the English sound system prior to practical exercises.

This course discusses segmental aspects of English pronunciation. Its topics include the articulatory features of individual sounds, their accentual variations, the syllable structure, the distribution of sounds, and connected speech phenomena (lenition, alteration and insertion). These topics are first theoretically explained and then this knowledge is put into practice by describing and analysing recorded materials and by practicing pronunciation exercises.

This course should enable students to observe and improve their own pronunciation skills. For those who aspire to be English teachers, this course should provide background knowledge useful for preparing effective materials to teach pronunciation/listening skills as well as teaching tips and techniques.

[Learning Objectives]

Students are expected to understand the segmental features and to be able to apply that knowledge to their performance. The specific objectives are as follows:

(A) to describe the theory of English phonemic inventory, distribution and alteration,

(B) to dictate spoken words and phrases in phonemic transcription,

(C) to read out given phonemic transcriptions with appropriate pronunciation,

(D) and to provide a transcription of a model pronunciation including possible alterations for a given passage.

[Learning activities outside of classroom]

Students should spare sufficient time for the following activities before/after each class (roughly four hours or more per week):

- Look over handouts provided beforehand in preparation, and go through them more carefully after class to check their understanding. [Objective (A)]

- Go over pronunciation/dictation exercises practised in class, checking their focus, and try to improve skills in question. [Objective (B)(C)]

- Complete assignments in which students are required to demonstrate their knowledge of segmental features and skills of applying that knowledge to practice through the production of model pronunciation. Students are advised to work on the assignments all by themselves first, and then to make corrections in red referring to handouts and dictionaries; this way they should learn where they tend to make mistakes. Submitted assignments are returned with marks and comments and are also discussed in class in order to help students enhance their knowledge and skills. [Objective (D)]

[Grading Criteria /Policy]

The course final grade will be calculated according to the following components and weights: in-class activities (35%), assignments (35%), and the course-final exam (30%).

- In-class activities are mostly related to skill-oriented Objectives (B) and (C). Pronunciation/dictation skills are sometimes hard to acquire through just four-month practices, depending on whether one is a quick learner or not, so this course attach importance to the effort students make in in-class activities that, if continued, will in due course help improve their skills. Students are advised to engage in in-class activities without worrying about making mistakes, not to hesitate making questions and/or comments.

- Assignments are related to Objectives (A) and (D). Students are expected to demonstrate not only the knowledge they have learnt through this course but also the ability to make use of that knowledge when planning model pronunciation.

- The exam comprises components corresponding to each Objective, and is intended to evaluate the overall learning outcomes of the course.

LIN500B3

英語発音法B

高橋 豊美

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

個人の力量に依存する「習うより慣れる」という方法ではなく、「十分に習ってから慣れる」ことで効率良く発音・聞き取りの技能を高める方法を学ぶ。これにより、履修者自身の英語コミュニケーション・スキルの向上が期待できる。また、英語教員を志す学生には、効果的な発音・リスニングの教材を準備するための知識を得る機会にもなるはずである。

<講義題目>

英語音声の記述・分析と発音の実践的知識・技術の習得

【到達目標】

韻律の特徴を理解し、その知識を実践に反映できる技術の習得を目指す。到達目標は次のとおりである。

(A) 音節の強さと発音の特徴、強勢の配置と役割、イントネーションのパターンと機能について、理論的に説明できる。

(B) 発話を聞いて、強勢とイントネーションを含めて発音記号で正確に書き取ることができる。

(C) 発音記号を適切な発音で読むことができる。

(D) 与えられた英文について、基本的なリズムとイントネーションのパターンを予測し、発音モデルを示すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業では、英国標準英語（Received Pronunciation）を主な対象とし、日本語との比較を適宜行いながら、リズムが形成される仕組みと、イントネーションの形式と機能を学び、韻律を含めた基本的な発話モデルの組み立てや、談話分析の方法を理解する。【到達目標 (A)】

配付資料を使用して理論を学び、さらに、その理解を実際に応用できる力を身につけるために、音声教材を使用した発音・聴き取りの練習、発音記号で発話モデルを提示したり発話を書き取ったりする練習などを行う。【到達目標 (B)(C)】

課題の提出及び返却には学習支援システムを用いる。この課題については、返却時にコメントを付し、また、返却後の授業で全体的なフィードバックを行う。【到達目標 (D)】

リアクションペーパーは学習支援システムで回収し、個別のフィードバックは同システムで、全体に共通するフィードバックは授業で行う。

授業は対面で実施する予定であるが、COVID-19 の感染状況が拡大している場合は、ビデオ会議システムと（Zoom）学習支援システム（Hoppi）を併用したオンライン授業に切り替えて実施するので、授業前に学習支援システムのお知らせを確認すること。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	授業案内／語・句強勢	授業概要／参考文献／強勢の音声的特徴／複合語と句の強勢／課題 1
第 2 回	文強勢（理論）	強勢移動／文強勢の配置／韻脚／課題 2
第 3 回	文強勢（実践）	文強勢モデルの記述と実践／課題 3
第 4 回	イントネーション概説	イントネーションの形式と機能／音調アクセント／課題 4
第 5 回	イントネーション理論	イントネーション句の構成／核声調／課題 5

第 6 回	イントネーション理論	イントネーション句の機能／課題 (2)：調性 6
第 7 回	イントネーション理論	イントネーション句の焦点／核配置と焦点領域／課題 7 (3)：核配置
第 8 回	イントネーション理論	イントネーション句の頭部と核声調の組合せ／課題 8 (4)：音調曲線
第 9 回	イントネーションの意味	下降声調の表す意味と用法／課題 1 (1)：下降声調 9
第 10 回	イントネーションの意味	非下降声調の表す意味と用法／課題 2 (2)：非下降声調 10
第 11 回	イントネーションの定型	複文・重文の音調曲線型 (1)
第 12 回	イントネーションの定型	対照的な要素を含む文の音調曲線型 (2)
第 13 回	イントネーションの定型	慣習的な音調曲線型 (3)
第 14 回	課題報告、試験	音声現象の理論的記述と実践

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を目安とする。

資料は事前に配布されるので、授業に臨む前に内容を確認すること。また、授業を受けた後で学習内容を振り返り、知識の定着を図ること。【到達目標 (A)】

授業では、学んだ知識を実践に活かすための発音・聴き取りの練習を行う。授業を受けた後で、要点を確認しながら練習を重ねて技術の向上を目指すこと。【到達目標 (B)(C)】

この授業では、10 回の課題を予定している。この課題の目的は発音モデルの作成をとおして知識の定着を図るとともに実践力を伸ばすことである。配布資料と授業内容をしっかりと復習した上で、最初は何も資料等を参照しないで取り組み、それから資料や辞書を利用しながら丁寧に見直しを行うこと。その際、最初に間違えたり記入できなかったところは、赤字で訂正・加筆をすることが望ましい。（訂正・加筆箇所の多寡は評価に影響しない。）提出された課題は担当教員がチェックと評価を行った上でコメントと共に返却される。また、返却後の授業では全体的な解説が行われる。チェックを受けた部分及び解説の要点をよく確認し、作成したモデルの発音練習を行うこと。【到達目標 (D)】

授業で学ぶ知識と技術を実践で活かすには課外の積極的な取組が不可欠である。上記課題のほかに、授業で適宜示す参考資料やウェブサイトを利用するなどして、発音・聴き取りの練習を重ねることが望ましい。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用せず、配布資料にそって授業を進める。

【参考書】

- ・Wells, John C. (2006) *English Intonation: An Introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- ・Tench, Paul (2011) *Transcribing the Sound of English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- ・Wells, John C. (2008) *Longman Pronunciation Dictionary (third edition)*. London: Longman.
- ・Cruttenden, Alan (2014) *Gimson's Pronunciation of English (8th edition)*. London: Routledge.

【成績評価の方法と基準】

平常点 (35 %)、課題 (35 %)、試験 (30 %) に基づき成績を評価する。

・平常点 【到達目標 (B)(C)】

音声のしくみの知識と技術は体得する要素が多いので、平常点として、授業における発音・聴き取り練習への取り組み、授業中の発言・質問の頻度と内容を評価する。授業外の学習活動（授業に臨むための準備、授業内容の振り返り）を欠かさず、積極的な姿勢で授業に臨むこと。

・課題 【到達目標 (A)(D)】

課題では、授業で学んだ基礎を発展させて発話モデルを示す力を評価する。課題ごとに示す評価のポイントをよく確認した上で、授業内容を十分に確認しながら、また、辞書で丁寧に発音を調べながら取り組むこと。

・試験 【到達目標 (A)(B)(C)(D)】

試験（実技を含む）では、各到達目標に対応した設問により、授業で学んだ知識の定着度と技術の修練度を評価する。

【学生の意見等からの気づき】

授業改善アンケートの結果及びリアクションペーパーの回答では、総じて否定的な評価はなく、授業の難易度や進度については概ね適切であったと思われる。理解度については、課題で毎回同じ誤りが繰り返されている場合が見られるので、課題に評価基準を掲載して注意喚起に努め、授業の最後に質疑応答、リフレクションの時間をとるようにして、理解の定着を図る。

【学生が準備すべき機器他】

資料配付、課題提出、リフレクションに学習支援システム Hoppi を使用する。

【その他の重要事項】

この授業は英文学専攻では「英語発音法A」、日本国際学専攻では「英語発音法I」の内容を前提としている。「英語発音法A」・「英語発音法I」を履修していない場合は、履修登録の前に担当教員まで連絡すること。また、授業が始まるまでに、参考書に挙げた Tench (2011) の Part 1 をよく読んで理解しておくこと。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

音声学、音韻論

<研究テーマ>

音韻理論、英語音声学・音韻論、日本語音声学・音韻論、英語教育
<主要研究業績>

・Toyomi Takahashi (2014). *Identity avoidance in the onset*. Nasukawa, Kuniya & Henk van Riemsdijk (eds.) *Identity Relations in Grammar*. Boston/Berlin: De Gruyter Mouton. 101-120.

・Toyomi Takahashi (2008). *Unique Path*. 『音韻研究』2008 (第11号). 3-10.

・高橋豊美 (2005). 弁別素性理論. 西原哲雄・那須川訓也 (編著) 音韻理論ハンドブック. 英宝社. 131-142.

・Toyomi Takahashi (1999). Constraint interaction in Aranda stress. In Hannahs, S. J. & Mike Devenport (eds.) *Issues in Phonological Structure*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins. 151-181.

【Outline (in English)】

[Course outline]

The goal of this course is to acquire practical knowledge and skills of English pronunciation through studying the features of spoken English as well as practicing its models.

This course aims to study an effective and efficient method of improving oral/aural communication skills by well understanding the English sound system prior to practical exercises.

This course discusses prosodic aspects of English pronunciation. Its topics include the location and interpretation of stress in different domains (word/phrase/sentence), the components of intonational phrase and their pitch patterns, the location of nuclear accents and their focusing function, and the types and usage/meaning of tunes. These topics are first theoretically explained and then this knowledge is put into practice by describing and analysing recorded materials and by practicing pronunciation exercises.

This course should enable students to observe and improve their own pronunciation skills. For those who aspire to be English teachers, this course should provide background knowledge useful for preparing effective materials to teach pronunciation/listening skills as well as teaching tips and techniques.

[Learning Objectives]

Students are expected to understand the prosodic features and to be able to apply that knowledge to their performance. The specific objectives are as follows:

(A) to describe the theory of English syllable structure and prominence, stress system, and the inventory of intonational contours and their functions,

(B) to dictate spoken words and phrases in phonemic transcription including prosodic features,

(C) to read out given phonemic transcriptions with appropriate pronunciation, rhythm and intonation,

(D) and to provide a transcription of a model pronunciation including relevant rhythmic stress and intonation for a given passage.

[Learning activities outside of classroom]

Students should spare sufficient time for the following activities before/after each class (roughly four hours or more per week):

- Look over handouts provided beforehand in preparation, and go through them more carefully after class to check their understanding. [Objective (A)]

- Go over pronunciation/dictation exercises practised in class, checking their focus, and try to improve skills in question. [Objective (B)(C)]

- Complete assignments in which students are required to demonstrate their knowledge of segmental features and skills of applying that knowledge to practice through the production of model pronunciation. Students are advised to work on the assignments all by themselves first, and then to make corrections in red referring to handouts and dictionaries; this way they should learn where they tend to make mistakes. Submitted assignments are returned with marks and comments and are also discussed in class in order to help students enhance their knowledge and skills. [Objective (D)]

[Grading Criteria /Policy]

The course final grade will be calculated according to the following components and weights: in-class activities (35%), assignments (35%), and the course-final exam (30%).

- In-class activities are mostly related to skill-oriented Objectives (B) and (C). Pronunciation/dictation skills are sometimes hard to acquire through just four-month practices, depending on whether one is a quick learner or not, so this course attach importance to the effort students make in in-class activities that, if continued, will in due course help improve their skills. Students are advised to engage in in-class activities without worrying about making mistakes, not to hesitate making questions and/or comments.

- Assignments are related to Objectives (A) and (D). Students are expected to demonstrate not only the knowledge they have learnt through this course but also the ability to make use of that knowledge when planning model pronunciation.

- The exam comprises components corresponding to each Objective, and is intended to evaluate the overall learning outcomes of the course.

BSP500B3

英語表現演習 A

ニアル・ムルター

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

Development of writing skills in English

【到達目標】

Students will learn to write clear and grammatically correct English with a high level of competency.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

Using non-fiction articles, students will learn how to express ideas and opinions. Each week students will read and discuss a topic in class and then write a short report or essay outlining their reactions. Individual feedback will be given on each report or essay.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	Introduction	Course outline
第 2 回	Text book outline	Background to text book content and author
第 3 回	Text book themes for academic writing	Reading of text book passages
第 4 回	Text book themes for literary writing	Summarizing text book passages
第 5 回	Developing ideas	Linking ideas from stories to experience
第 6 回	Thinking about your readers	The message you wish to convey
第 7 回	Organizing ideas	Sequencing of topics
第 8 回	Advanced topics	Writing style
第 9 回	Complex topics	Structure of essays
第 10 回	Academic subjects	Avoiding redundancy
第 11 回	News topics	Clarity and consistency
第 12 回	Essay topic selection	Generic or specific theme
第 13 回	Evaluation criteria	Impact and effect of writing
第 14 回	Conclusion	Summary of course

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

Students will write short essays to be reviewed in class each week. Students are required to study 4 hours outside of class.

【テキスト（教科書）】

Articles will be provided in class.

【参考書】

Internet dictionary: <https://www.alc.co.jp/>

The Elements of Style, William Strunk, Jr., 50th Anniversary Edition, Pearson Longman, 2009

【成績評価の方法と基準】

Grades will be based on written essays to be submitted each week (100%).

Course credits will not be given where a student is absent three or more times in a semester without submitting a reason.

【学生の意見等からの気づき】

Techniques for minimizing errors in written English will be explained. Discussions and student opinions are encouraged.

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

Ontologies and knowledge representation.

<研究テーマ>

Translation memory tools.

<主要研究業績>

Artificial Intelligence in Japan, Centre for AI Research, Oxford (UK), 1997.

【Outline (in English)】

(Course outline)

Development of writing skills in English

(Learning Objectives)

Students will learn to write clear and grammatically correct English with a high level of competency.

(Learning activities outside of classroom)

Students will write short essays to be reviewed in class each week.

(Grading Criteria /Policy)

Grades will be based on written essays to be submitted each week.

Course credits will not be given where a student is absent three or more times in a semester without submitting a reason.

BSP500B3

英語表現演習 B

ニアル・マルチー

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

Development of writing skills in English

【到達目標】

Students will learn to write clear and grammatically correct English with a high level of competency.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示された
どの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針
に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

Using non-fiction articles, students will learn how to express ideas and opinions. Each week students will read and discuss a topic in class and then write a short report or essay outlining their reactions. Individual feedback will be given on each report or essay.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	Introduction	Course outline
第 2 回	Foundations of writing: structure	Introduction to selected writing
第 3 回	Foundations of writing: themes	Reading of selected writing
第 4 回	Foundations of writing: impact	Summarizing of selected writing
第 5 回	Developing ideas	Linking ideas from stories to experience
第 6 回	Thinking about your readers	Expectation fulfillment
第 7 回	Flow of narrative	Connecting paragraphs
第 8 回	Stylistic conventions	Keywords and phrases
第 9 回	Domains of discourse	Essay requirements
第 10 回	Application to general writing themes	Impact of essay
第 11 回	Application to academic writing themes	Constraints of academia
第 12 回	Application to novel writing themes	Free writing
第 13 回	Student essay	Evaluation: comparison with other writing
第 14 回	Conclusions	Ideas for future study

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

Students will write short descriptions to be reviewed in class each week.

Students are required to study 4 hours outside of class.

【テキスト（教科書）】

Articles will be provided in class.

【参考書】

Internet dictionary: <https://www.alc.co.jp>

The Elements of Style, William Strunk, Jr., 50th Anniversary Edition, Pearson Longman, 2009

【成績評価の方法と基準】

Grades will be based on written essays (100%). Course credits will not be given where a student is absent three or more times in a semester without submitting a reason.

【学生の意見等からの気づき】

Techniques for minimizing errors in written English will be explained. Discussions and student opinions are encouraged.

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

Ontologies and knowledge representation.

＜研究テーマ＞

Translation memory tools.

＜主要研究業績＞

Artificial Intelligence in Japan, Centre for AI Research, Oxford (UK), 1997.

Configuration Design Tool as a Customizable Web Service, *International Journal of Knowledge-based Systems*, (Elsevier), Vol. 8, No. 3, 2004.

【Outline (in English)】

(Course outline)

Development of writing skills in English

(Learning Objectives)

Students will learn to write clear and grammatically correct English with a high level of competency.

(Learning activities outside of classroom)

Students will write short essays to be reviewed in class each week.

(Grading Criteria /Policy)

Grades will be based on written essays to be submitted each week.

Course credits will not be given where a student is absent three or more times in a semester without submitting a reason.

LIT500B3

文学方法論 A

宮川 雅

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

リサーチのツールの知識を得るとともに、批評理論について歴史的に概観する。具体的な英米の文学テキストを素材として、どのようなアプローチが可能であるか、実践例を研究し、意見を交換しながら、意義と限界を検討する。

【到達目標】

英文学テキストへの多様なアプローチを理解し、自身の研究テーマへの応用を試みられる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

プリントを使用して批評理論について学ぶ。3ないし4つの異なるジャンルの英米文学作品の原文テキストを各自用意して読み進めるとともに、批評理論を作品に応用したプリントを読む。各自の研究テーマを応用し、意見交換する。

中心的な「教科書」として、W・L・ゲーリン『文学批評入門』。青木健・日下洋右 訳。彩流社、1986を原書と比べながら読む。参考としてその後の原書の改訂版も眺める（いずれも教員が準備する）。

上記の研究書（訳書）は、それなりに評価のあったものだが（原著は版を改訂して—— 6th ed., 2010 ——映像を含む古典テキスト以外への目配りを見せた）、半世紀近く前の批評の状況を、その後の「ポストモダン」な批評意識と比べるべく、ピーター・バリー『文学理論講義——新しいスタンダード』。高橋和久監訳、ミネルヴァ書房、2014を時々参照する。翻訳を吟味することで、日本人がどのように文学理論を受容してきたかも考える。

授業で提出されたりアクションペーパーなどにおけるコメント・質問へは、そのうちのいくつかを取り上げ、全体に対してフィードバックをおこない、議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション：	いかにテキストにむかうか “Armed Vision” (S. Hyman)
第2回	テキストとは何か	テキスト概念の変容
第3回	テクスチュアル・クリティシズム	本文校訂または批評以前の批評
第4回	印象批評とは何か	作家・作品・読者の三角形
第5回	印象批評の実践	レポーターによる発表と討論
第6回	フォルマリズム	形式主義的批評とテキスト分
第7回	フォルマリズム批評の実践	レポーターによる発表と討論
第8回	文化人類学と文学	神話批評
第9回	神話批評の実践	レポーターによる発表と討論
第10回	文学と心理分析	フロイト、ユング、その後
第11回	精神分析批評の実践	レポーターによる発表と討論
第12回	注釈	釈義学から解釈学へ
第13回	その実践	レポーターによる発表と討論
第14回	ディコンストラクションからニューヒストリシズムへ	前期のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

批評の対象となる作品テキストを読み進めること。自身の研究を進めて、批評理論の応用を考えること。予習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

Nathaniel Hawthorne, “Young Goodman Brown”

Samuel Clemens, *Adventures of Huckleberry Finn*

Shakespeare, *Hamlet*

Andrew Marvell, “To His Coy Mistress”

W・L・ゲーリン『文学批評入門』。青木健・日下洋右 訳。彩流社、1986ならびにその後の原書の改訂版プリント

David Lodge, *The Art of Fiction*, rev. ed. Penguin Books, 1992

【参考書】

テリー・イーグルトン、大橋洋一訳『文学とは何か——現代批評理論への招待』（岩波書店、1985）

フレドリック・ジェイムソン、大橋洋一ほか訳『政治的無意識——社会的象徴行為としての物語』（平凡社、1989）

筒井康隆『文学部唯野教授』（岩波書店、1990）

ラマル・セルデン、鈴木良平訳『現代の文学批評——理論と実践』（彩流社、1994）

大橋洋一『新文学入門』（岩波書店、1995）

丹治愛はか『知の教科書 批評理論』（講談社選書メチエ、2003）

【成績評価の方法と基準】

授業への参加度 60 パーセント、レポート 40 パーセントで総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

学習支援システムの「教材」に（あとからも）参照可能なかたちで資料ファイルを整理して蓄積する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 近代アメリカ文学

<研究テーマ> アメリカ文学史と宗教と神秘学、小説の語りと技法

<主要研究業績> 「Ormond におけるピクチャレスクな意匠をめぐって」『英文学誌』47号（2005年3月）：27-44、「ポーの宇宙論と錬金術（十） 第五章 ポーと現代——ゴシック、ロマン主義、オカルト、近代芸術についての覚え書（その二）」『法政大学文学部紀要』50号（2005年3月）：91-110、「Re: Rip の妻はいつ死んだのか？」（『法政大学文学部紀要』51号（2005年9月）：1-13、「疑似科学と科学の境」（八木敏雄・巽孝之編『エドガー・アラン・ポーの世紀』（研究社、2009）251-67.

【Outline (in English)】

【Learning Objectives】

Students learn various approaches to literary text. We will read a short story, a novel, and a drama, and read various critical approaches applied to them.

[Learning activities outside of classroom:] Before/after each class meeting, students are expected to spend 2 hours respectively to understand the course content.

[Grading Criteria/Policies:] Overall grade in the class will be decided based on the following: in-class contribution [positive participation] (70%), final report [paper] (30%).

LIT500B3

文学方法論 B

宮川 雅

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

リサーチのツールの知識を得るとともに、批評理論について歴史的に概観する。具体的な英米の文学テキストを素材として、どのようなアプローチが可能であるか、実践例を研究し、意見を交換しながら、意義と限界を検討する。B の過半は学生自身の実践的発表と質疑が主となる予定だが、春学期からの「教科書」として、W・L・ゲーリン『文学批評入門』・青木健・日下洋右 訳・彩流社、1986 を参照・検討する。また、ピーター・バリー『文学理論講義』・高橋和久監訳、ミネルヴァ書房、2014 で、1980 年代には見られなかった理論について学ぶ。

【到達目標】

英文学テキストへの多様なアプローチを理解し、自身の研究テーマへの応用を試みる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

プリントを使用して批評理論を学ぶ。作品の原文テキストを読むとともに、批評理論を作品に応用したプリントを読む。各自の研究テーマを応用し、意見交換する。

授業で提出されたリアクションペーパーなどにおけるコメント・質問へは、そのうちのいくつかを取り上げ、全体に対してフィードバックをおこない、議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	分析と解釈の実践（1）	イメージ、シンボル、アレゴリー
第 2 回	分析と解釈の実践（2）	比喩と脱比喩
第 3 回	分析と解釈の実践（3）	プロットの構築
第 4 回	分析と解釈の実践（4）	キャラクター分析
第 5 回	中間まとめ	中間報告の反省
第 6 回	ニューヒストリズムからカルチュラル・スタディーズへ	1980 年代からの流れ
第 7 回	ポストコロニアリズム	プリント講読
第 8 回	フェミニズム批評	プリント講読
第 9 回	ジェンダー理論	プリント講読
第 10 回	ナラトロジー理論	プリント講読
第 11 回	分析と解釈の実践（5）	視点と声
第 12 回	分析と解釈の実践（6）	ナラトロジー
第 13 回	分析と解釈の実践（7）	ソース・スタディー
第 14 回	総まとめ	まとめの議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。テキストの下調べ。自身の研究テーマの探求。

【テキスト（教科書）】

Nathaniel Hawthorne, “Young Goodman Brown”
Samuel Clemens, *Adventures of Huckleberry Finn*

Shakespeare, *Hamlet*

W・L・ゲーリン『文学批評入門』・青木健・日下洋右 訳・彩流社、1986 ならびにその後の原書の改訂版プリント

David Lodge, *The Art of Fiction*, rev. ed. Penguin Books, 1992

【参考書】

ウェイン・ブース、米本弘一ほか訳『フィクションの修辞学』（水声社、1991）

デイヴィッド・ロッジ、柴田元幸・斎藤兆史訳『小説の技巧』（白水社、1997）

テリー・イーグルトン、大橋洋一訳『文学とは何か——現代批評理論への招待』（岩波書店、1985）

フレドリック・ジェイムソン、大橋洋一ほか訳『政治的無意識——社会的象徴行為としての物語』（平凡社、1989）

筒井康隆『文学部唯野教授』（岩波書店、1990）

ラマール・セルデン、鈴木良平訳『現代の文学批評——理論と実践』（彩流社、1994）

大橋洋一『新文学入門』（岩波書店、1995）

丹治愛ほか『知の教科書 批評理論』（講談社選書メチエ、2003）

【成績評価の方法と基準】

授業への参加度 30 パーセント、レポート 40 パーセント、試験 30 パーセントで総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

学生の積極的な参加を促せるようにつとめたい。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 近代アメリカ文学

＜研究テーマ＞ アメリカ文学史と宗教と神秘学、小説の語りと技法

＜主要研究業績＞ 「疑似科学と科学の境」（八木敏雄・巽孝之編『エドガー・アラン・ポーの世紀』（研究社、2009）251-67. 「Cacotype——言葉の影、または引用について」（『英文学誌』58、2016）35-60.

「Wot's the hods so long as you're 'appy ——いいじゃないの幸せならば、または Web の効用について」（『英文学誌』59、2017）33-48.

【Outline (in English)】

【Learning Objectives】

Students learn various approaches to literary text. We will read a short story, a novel, and a drama, and read various critical approaches applied to them.

[Learning activities outside of classroom:] Before/after each class meeting, students are expected to spend 2 hours respectively to understand the course content.

[Grading Criteria/Policies:] Overall grade in the class will be decided based on the following: in-class contribution [positive participation] (70%), final report [paper] (30%).

LIN600B3

理論言語学・認知科学 A

ブライアン・ウィスナー

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

This course examines key concepts in second language (L2) acquisition theory, research, and pedagogy. Students examine and classify theories of L2 learning and apply the findings to the development of principled approaches to L2 pedagogy.

<講義題目>

第二言語習得 Second Language Acquisition

【到達目標】

Upon successful completion of this course, students are expected to be able to do the following:

1. Explain the core issues in L2 acquisition research
2. Examine the connection between L2 research and pedagogy

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

Most classes will consist of group discussions, presentations, and lectures on topics in L2 acquisition and pedagogy. Students then apply this knowledge by conducting research, presenting findings, and discussing these topics. Feedback will be given after each presentation.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	Introduction to the course	Presentation of key concepts in second language acquisition and teaching
第 2 回	First language acquisition	How do people learn an L1?
第 3 回	Second language acquisition	How do adults learn an L2?
第 4 回	Age and L2 acquisition	How does age affect L2 acquisition?
第 5 回	Interaction in L2 classrooms	Does interaction lead to L2 acquisition?
第 6 回	Focus on form	Attending to meaning and form in L2 learning
第 7 回	Acquisition of L2 grammar	How is L2 grammar acquired?
第 8 回	Acquisition of L2 vocabulary	Issues related to L2 vocabulary acquisition
第 9 回	Contexts of instructed second language acquisition	In what ways does the linguistic environment influence L2 acquisition?
第 10 回	Foreign language aptitude	Does language aptitude influence L2 learning?
第 11 回	Motivation	To what extent does motivation affect L2 learning?
第 12 回	Affect and other individual differences	What other variables play a role in L2 learning?
第 13 回	Research presentations	Research project presentations
第 14 回	Feedback on research presentations and final exam	Discussion of and feedback on students' research projects and final exam

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

Students should complete reading assignments before the class in which they are discussed. Presentations should be prepared outside of class—this entails meeting and coordinating with your group members.

【テキスト（教科書）】

There is no required textbook for this course.

【参考書】

Patsy M. Lightbown, and Nina Spada. (2013). *How languages are learned*. Oxford University Press.

Shawn Loewen. (2015). *Introduction to instructed second language acquisition*. Routledge.

Lourdes Ortega. (2009). *Understanding second language acquisition*. Hodder Education.

Rod Ellis. (2008). *The study of second language acquisition* (2nd edition). Oxford University Press.

H. Douglas Brown. (2007). *Teaching by principles: An interactive approach to language pedagogy* (3rd edition). Longman.

H. Douglas Brown. (2006). *Principles of language learning and teaching* (5th edition). Longman.

Publication Manual of the American Psychological Association (APA Manual)

【成績評価の方法と基準】

In-class presentations: 50%

Written report: 25%

Final exam: 25%

Students will be evaluated based on in-class presentations related to the content covered in class and their performance on writing assignments and a final exam. Highly evaluated presentations and reports demonstrate synthesis of the course content and follow academic presentation and writing conventions. Details will be given in class. Students are expected to attend every class. A grade of "E" will be given for missing an assignment (i.e., presentation, report, or test) or for being absent from four or more classes.

【学生の意見等からの気づき】

Not applicable.

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 第二言語習得・英語教育学

<研究テーマ> 第二言語習得におけるメタ言語的知識の役割、言語テストの妥当性

<主要研究業績>

・『MY WAY: English Communication I』 共著 2013 年 3 月 三省堂

・『MY WAY: English Expression I』 共著 2013 年 3 月 三省堂

・『英語教育学の実証的研究法入門』 共著 2012 年 8 月 研究社

【Outline (in English)】

This course examines key concepts in second language (L2) acquisition theory, research, and pedagogy.

Upon successful completion of this course, students are expected to be able to do the following:

1. Explain the core issues in L2 acquisition research
2. Examine the connection between L2 research and pedagogy

Students should complete reading assignments before the class in which they are discussed. Presentations should be prepared outside of class—this entails meeting and coordinating with your group members.

Final grades will be calculated based on the following:

In-class presentations: 50%

Written report: 25%

Final exam: 25%

LIN500B3

応用言語学・理論研究 A

熊澤 孝昭

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本科目の到達目標は、応用言語学で用いられている研究手法を理論の概観および実践をもとに基礎的な理解を深めることとする。まず、「研究とはなにか」からはじまり、応用言語学の主流分野の一つである英語教育学での研究を行うための研究テーマの決め方、先行研究の探し方、研究課題の決め方、データ収集方法および分析方法などを実践に基づき理解を深める。主に、質的データ収集法としては面接・観察・記録・日誌、量的データ収集法としてはアンケート等の特徴を学ぶ。さらに、量的データ収集法でもっとも一般的に用いられているテストについて理解を深める。

【到達目標】

授業目標は次の 4 点である：研究とはの理解を深める、質的研究法の理解を深める、量的研究法の理解を深める、テスト理論の理解を深める

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業では毎回、教科書の内容の理解を深めるためのレジュメを配布するので、それをもとに講義形式で進めるが、議論等も行ふ。授業形式については、リアルタイム・オンラインで行う予定である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	導入と応用言語学とは	シラバス説明および講義
第 2 回	研究とはなにか	研究とはなにかについて講義および討論を行う
第 3 回	研究テーマの決め方	研究テーマの決め方について講義および討論を行う
第 4 回	研究課題とデータ	研究課題とデータについて講義および討論を行う
第 5 回	質的研究の進め方	質的研究の進め方について講義および討論を行う
第 6 回	量的研究の進め方	量的研究の進め方について講義および討論を行う
第 7 回	復習（中間テスト）	前半の講義内容について復習をする
第 8 回	アンケート調査の進め方	アンケート調査の進め方について講義および討論を行う
第 9 回	テストの実施目的と種類	テストの実施目的と種類について講義および討論を行う
第 10 回	テスト項目について	テスト項目について講義および討論を行う
第 11 回	相対評価および絶対評価の項目分析	相対評価および絶対評価の項目分析について講義および討論を行う
第 12 回	テスト得点の信頼性および信頼度	テスト得点の信頼性および信頼度について講義および討論を行う
第 13 回	テスト得点解釈の妥当性	テスト得点解釈の妥当性について講義および討論を行う
第 14 回	まとめ（期末テスト）	後半の講義内容について復習をする

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に指定教科書および論文を読むこと。本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

Brown, J. D. 著, 和田稔訳 (1998) 「言語テストの基礎知識」『大修館』
浦野研他 (2016) 「はじめての英語教育研究」『研究社』

【参考書】

適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

50 %（平常点・発表）、50 %（定期テスト）

【学生の意見等からの気づき】

履修生にとってためになる授業を提供できればと思う。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

応用言語学、英語教育学、言語テスト、第二言語習得

<研究テーマ>

応用言語学の分野でも特に英語教育学を専門とする。特に、第二言語習得の観点からみた動機付けや信条などの教育心理、教授法、および言語テストに興味がある。

<主要研究業績>

(2016). Factors affecting multiple-choice cloze test score variance: A perspective from generalizability theory. *International Journal of Language Studies*, 10.

(2013). 「英語教育学の量的研究で用いられる統計について」. 『コンピュータ&エデュケーション』, 34.

(2013). 「学内開発ブレイスメントテスト得点解釈と使用の妥当性の評価について」. *JALT Journal*, 35.

(2011). Systematic criterion-referenced test development in an English-language program. (Doctoral Dissertation).

(2010). 「多肢選択式項目の項目形式が文法テストパフォーマンスに与える影響について」. *JALT Journal*, 32.

(2009). Revision of a criterion-referenced vocabulary test using generalizability theory. *JALT Journal*, 31.

【研究テーマ】

応用言語学の分野でも特に英語教育学を専門とする。特に、第二言語習得の観点からみた動機付けや信条などの教育心理、教授法、および言語テストに興味がある。

【主要研究業績】

(2016). Factors affecting multiple-choice cloze test score variance: A perspective from generalizability theory. *International Journal of Language Studies*, 10.

(2013). 「英語教育学の量的研究で用いられる統計について」. 『コンピュータ&エデュケーション』, 34.

(2013). 「学内開発ブレイスメントテスト得点解釈と使用の妥当性の評価について」. *JALT Journal*, 35.

(2011). Systematic criterion-referenced test development in an English-language program. (Doctoral Dissertation).

(2010). 「多肢選択式項目の項目形式が文法テストパフォーマンスに与える影響について」. *JALT Journal*, 32.

(2009). Revision of a criterion-referenced vocabulary test using generalizability theory. *JALT Journal*, 31.

【Outline (in English)】

The objectives are to deepen understanding of research methods, both quantitative and qualitative methods, and language testing theory.

LIN500B3

応用言語学・理論研究B

熊澤 孝昭

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本科目の到達目標は、研究とはなにかについてさらに理解を深める。よって、応用言語学で用いられている混合研究法を理論の概観および実践をもとに基礎的な理解を深めることとする。主たる内容としては方法論的思想、デザイン、サンプリングなどを扱う

【到達目標】

授業目標は混合研究法の理解を深めることとする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業では毎回、教科書の内容の理解を深めるためのレジュメを配布するので、それをもとに講義形式で進めるが、議論等も行う。授業形式については、リアルタイム・オンラインで行う予定である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	導入と応用言語学とは	シラバス説明および講義
第2回	混合研究法の基礎	混合研究法の基礎について講義および討論を行う
第3回	方法論的思想	方法論的思想について講義および討論を行う
第4回	方法論の変遷	方法論の変遷について講義および討論を行う
第5回	パラダイム問題	パラダイム問題について講義および討論を行う
第6回	問いの創出	問いの創出について講義および討論を行う
第7回	復習（中間テスト）	前半の講義内容について復習をすすめる
第8回	デザイン	デザインについて講義および討論を行う
第9回	サンプリング	サンプリングについて講義および討論を行う
第10回	データ収集前の検討事項	データ収集前の検討事項について講義および討論を行う
第11回	データ収集	データ収集について講義および討論を行う
第12回	データ分析	データ分析について講義および討論を行う
第13回	推論プロセス	推論プロセスについて講義および討論を行う
第14回	まとめ（期末テスト）	後半の講義内容について復習をすすめる

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に指定教科書および論文を読むこと。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

チャールズ・テッドリー、アッバス・タシャコリ著 土屋敦他監訳「混合研究法の基礎：社会・行動科学の量的・質的アプローチの統合」『西村書店』

【参考書】

適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

50 %（平常点・発表）、50 %（定期テスト）

【学生の意見等からの気づき】

履修生にとってためになる授業を提供できればと思う。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

応用言語学、英語教育学、言語テスト、第二言語習得

＜研究テーマ＞

応用言語学の分野でも特に英語教育学を専門とする。特に、第二言語習得の観点からみた動機付けや信条などの教育心理、教授法、および言語テストに興味がある。

＜主要研究業績＞

(2016). Factors affecting multiple-choice cloze test score variance: A perspective from generalizability theory. *International Journal of Language Studies*, 10.

(2013). 「英語教育学の量的研究で用いられる統計について」.『コンピュータ&エデュケーション』, 34.

(2013).「学内開発ブレイスメントテスト得点解釈と使用の妥当性の評価について」. *JALT Journal*, 35.

(2011). Systematic criterion-referenced test development in an English-language program. (Doctoral Dissertation).

(2010).「多肢選択式項目の項目形式が文法テストパフォーマンスに与える影響について」. *JALT Journal*, 32.

(2009). Revision of a criterion-referenced vocabulary test using generalizability theory. *JALT Journal*, 31.

【研究テーマ】

応用言語学の分野でも特に英語教育学を専門とする。特に、第二言語習得の観点からみた動機付けや信条などの教育心理、教授法、および言語テストに興味がある。

【主要研究業績】

(2016). Factors affecting multiple-choice cloze test score variance: A perspective from generalizability theory. *International Journal of Language Studies*, 10.

(2013). 「英語教育学の量的研究で用いられる統計について」.『コンピュータ&エデュケーション』, 34.

(2013).「学内開発ブレイスメントテスト得点解釈と使用の妥当性の評価について」. *JALT Journal*, 35.

(2011). Systematic criterion-referenced test development in an English-language program. (Doctoral Dissertation).

(2010).「多肢選択式項目の項目形式が文法テストパフォーマンスに与える影響について」. *JALT Journal*, 32.

(2009). Revision of a criterion-referenced vocabulary test using generalizability theory. *JALT Journal*, 31.

【Outline (in English)】

the objective is to acquire basic understanding of mixed research methods.

LIN500B3

言語科学方法論 A

石川 潔

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

言語研究の方法論としての以下の2つの入門的な把握を目指す。

- ・物理学と同じ意味における理論の科学的構築法および評価法
- ・実験設計およびデータの統計処理

<講義題目>言語科学の研究に必要な方法論の修得

【到達目標】

自分の疑問を「科学」として追及可能な形にし、可能な複数の答え（仮説）を、初歩的な実験および統計学的な検定と比較できるようにすること

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義およびパソコン実習。

試験には各人ごとに採点コメントを返します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	科学って何？	仮説、予測
第2回	経験科学で「証明」があり得ない理由	「仮説通りのデータ」は何を意味しないか
第3回	因果関係の主張の方法	科学的基準として要求されること、注目していない要因の効果の除去
第4回	論文執筆の基本	構成、引用の方法
第5回	統計学的検定の基本1	帰無仮説および対立仮説、有意性
第6回	統計ツール	Excel、ANOVA4、SPSS、R、JASP、etc.
第7回	統計学的検定の基本2	帰無仮説、有意性
第8回	記述統計	代表値、分散・標準偏差、など
第9回	実験計画の基本	被験者内要因と被験者間要因
第10回	t 検定（その1）	被験者間要因の場合
第11回	t 検定（その2）	1 サンプルの t 検定
第12回	t 検定（その3）	被験者内要因
第13回	その他の検定法	初歩的な他の検定法の概観
第14回	fixed vs. random factor	subject/participant analysis & item analysis

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

パソコンの基本的な操作法の知識は事前に得ておくことが望ましい。
わからない箇所は教員や周囲に質問すること。

また、身の回りの事柄（新聞やニュースなどで出てきた話も含む）を、授業内容を参照しつつ、見つめなおしていただくこと。

【テキスト（教科書）】

学習支援システムでハンドアウトおよびデータ・セットを配布。

【参考書】

A. F. Chalmers. (1976/1999). *What is this thing called Science?* (3rd ed.) Hackett.

大村 平. (1984). 実験計画と分散分析のはなし. 日科技連.

Howell, D. C. (2006). *Statistical Methods for Psychology*. (6th ed.) Wadsworth.

Field, A. (2005). *Discovering Statistics Using SPSS*. Sage.

Baayen, R. H. (2008). *Analyzing Linguistic Data*. Cambridge University Press.

その他、適宜指示。

【成績評価の方法と基準】

学期末試験 100 %

【学生の意見等からの気づき】

全員の理解度をもっと上げたいです。

【その他の重要事項】

この授業は原則、英文学専攻の言語系の院生全員が履修すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

理論言語学（統語論、意味論）、心理言語学（音声知覚、文理解）

<研究テーマ>

音声知覚の単位と様式、アスペクトの実時間処理、読みにおける視覚処理と音韻処理の関係

<主要研究業績>

<http://www.i.hosei.ac.jp/~kiyoshi/research.html> などを参照。

【Outline (in English)】

[Course outline]

An introduction to research methodology in linguistic sciences

[Learning Objectives]

- Scientific construction and evaluation of theories
- Experimental design and statistical data analysis
- Realization of the (in)validities of the above

[Learning activities outside of classroom]

Practice of PC skills, applications of the methods to various issues encountered outside of the classroom

[Grading Criteria/Policy]

Final 100%

LIN500B3

言語科学方法論 B

ブライアン・ウィスナー

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

This course examines the role of research methods and statistics in the linguistic sciences.

<講義題目>

言語科学の研究に必要な方法論の修得 Research Methods in the Linguistic Sciences

【到達目標】

Upon successful completion of this course, students are expected to be able to do the following: (a) define and describe quantitative research methods commonly used in the linguistic sciences; (b) perform statistical analyses using Excel, JASP, and R; (c) input data and apply an appropriate method of analysis; and (d) report the results of statistical analyses in APA format.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

Most classes will consist of group discussions and lectures on research methods and statistical analyses. Time will be allotted for students to perform statistical analyses. The course content and examples presented in class will focus on general topics and second language research. This course is conducted in English. Feedback will be given after each presentation.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	Research methods in the linguistic sciences	Introduction to why research is conducted and the concepts covered in this course
第 2 回	Variables & levels of measurement	Classification and measurement of variables
第 3 回	Visual descriptive statistics	Creating graphs and plots
第 4 回	Statistical assumptions	Methods of addressing statistical assumptions
第 5 回	Correlation	Background and calculation of Pearson's correlation coefficient
第 6 回	Other methods of correlation	Calculation of Spearman's correlation coefficient
第 7 回	Linear regression	Background and calculation of linear regression
第 8 回	Multiple regression	Calculating and interpreting multiple regression
第 9 回	T-tests and research design	Background of t-tests and calculation of a paired-samples t-test and an independent samples t-test
第 10 回	ANOVA, planned comparisons, and post-hoc tests	Background and calculation of ANOVA
第 11 回	Factorial ANOVA	Background and calculation of factorial ANOVA
第 12 回	Repeated-measures ANOVA	Background and calculation of repeated-measures ANOVA
第 13 回	Factor analysis	Background of factor analysis
第 14 回	Applying factor analysis	Factor analyzing data

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

Reading assignments will be given for each class. Students should complete the reading assignments before each class and be prepared to discuss the content of the readings.

【テキスト（教科書）】

There is no required textbook for this course.

【参考書】

Jenifer Larson-Hall. (2016). *A guide to doing statistics in second language research using SPSS and R* (2nd ed.). Routledge.
Andy Field. (2013). *Discovering statistics using SPSS* (4th ed.). Sage.

Fred L. Perry, Jr. (2011). *Research in applied linguistics: Becoming a discerning consumer*. Routledge.

Publication Manual of the American Psychological Association (APA Manual)

【成績評価の方法と基準】

Presentations: 50%; Final Data Analysis Assignment: 50%

Students will be evaluated based on in-class presentations related to the content covered in class and their performance on a data analysis assignment. A highly evaluated presentation shows synthesis and clear explanation of the relevant material. The data analysis assignment will be assessed on the accuracy and thoroughness of the statistical results and the format in which they are presented. Details will be given in class.

【学生の意見等からの気づき】

Not applicable.

【その他の重要事項】

Students should have already taken 言語科学方法論 A or an equivalent course.

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 第二言語習得・英語教育学

<研究テーマ> 第二言語習得におけるメタ言語的知識の役割、言語テストの妥当性

<主要研究業績>

・『MY WAY: English Communication I』共著 2013 年 3 月 三省堂

・『MY WAY: English Expression I』共著 2013 年 3 月 三省堂

・『英語教育学の実証的研究法入門』共著 2012 年 8 月 研究社

【Outline (in English)】

This course examines the role of research methods and statistics in the linguistic sciences.

Upon successful completion of this course, students are expected to be able to do the following: (a) define and describe quantitative research methods commonly used in the linguistic sciences; (b) perform statistical analyses using Excel, JASP, and R; (c) input data and apply an appropriate method of analysis; and (d) report the results of statistical analyses in APA format.

Students should complete the reading assignments before each class and be prepared to discuss the content of the readings.

Final grades will be calculated based on the following:

Presentations: 50%; Final Data Analysis Assignment: 50%

LIT500B3

比較文学研究 A

日中 鎮朗

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

理想的な社会の追求は人類の歴史の中の根源的なテーマである。現代においても、あらゆる国家はそれを目指して考え続け、努力しているといっても過言ではない。

そのために理想社会、あるいはユートピアについて、とりわけ思想、文学、映画、芸術においてどのように考えられ、受容され、作用してきたのかを Gregory Claey's の『Searching for Utopia. The History of an Idea』を講読しながら、考える。

とりわけ、＜現在＞という時点からのアクチュアルな問題提起として、近代から現代の文学・芸術を分析対象とし、さまざまな作品を読み解きながら、文学や芸術がその時代の社会に対してどう取り組んだかを考察する。

＜講義題目＞

近現代のユートピア像の歴史と受容

【到達目標】

近現代以降のユートピアの歴史を理解することが目標である。

また、その際に Gregory Claey's の『Searching for Utopia. The History of an Idea』やこの講義で挙げられた小説や作品を読み、論じるので、その小説や作品をユートピアという視点から批判的に分析できるようになることも目標である。

そうした討議の際に、自分の意見を明確に表現し、伝えられるようになることも目標である。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

ユートピアの歴史的な概説として Gregory Claey's の『Searching for Utopia. The History of an Idea.』を読んでゆく。

また同時に、各回の授業計画で挙げられるユートピア関連の文学を中心に、思想、芸術などの諸分野においてどのように扱われ、表現されているかを見る。

その際に、テキストの担当部分を決めて、それをまとめ、プレゼンしてもらう。独自の観点でいいので、議論・検討を加えていきたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	ユートピア概念の共通理解を検討する。 授業の進め方等についての説明。
第 2 回	Gregory Claey's 『Searching for Utopia. The History of an Idea』 Chapter12 の読解①	The Emergence of Science Fiction 訳読と議論（1）
第 3 回	Gregory Claey's 『Searching for Utopia. The History of an Idea』 Chapter12 の読解②	科学技術とヒューマニティ 訳読と議論（2）
第 4 回	人工と人造の生命 Chapter12 の応用①	『フランケンシュタイン』 （1818/1831）あるいは、怪物たち（ゴーレム、ヴァンパイア）
第 5 回	機械・人間・ユート ピア Chapter12 の応用②	『フランケンシュタイン』の読解 と動物（フランツ・カフカ）

第 6 回	Gregory Claey's 『Searching for Utopia. The History of an Idea』 Chapter11 の読解①	Inventing Progress: Rationalism, Technology and Modernity as Utopia 訳読と議論（1）
第 7 回	Gregory Claey's 『Searching for Utopia. The History of an Idea』 Chapter11 の読解②	エドワード・ベラミー『顧みれば』（1888）を中心に
第 8 回	経済・科学・社会 主義－ 近代性への異議申し立 てとユートピア Chapter11 の応用	ウィリアム・モリス『ユートピア 便り』（1890）、サミュエル・バト ラー『エレホン』（1872）と反近代
第 9 回	ウィリアム・モリスか ら 20 世紀ヘーモリス の時代・芸術	世紀末芸術とアーツ・アンド・ク ラフト
第 10 回	Gregory Claey's 『Searching for Utopia. The History of an Idea』 Chapter8 の読解①	Ideal Cities: Medieval to Modern 訳読と議論（1）
第 11 回	Gregory Claey's 『Searching for Utopia. The History of an Idea』 Chapter8 の読解②	災害の後： 多和田葉子『献灯使』 綿矢りさ『大地のゲーム』
第 12 回	近代の理想都市 田園都市（ガーデン・ シティ）運動とその 構想 Chapter8 の応用	エベニーザー・ハワード 『明日の田園都市』——ル・コル ビュジェと建築におけるモダニズ ム
第 13 回	ユートピアと近代社 会・近代科学	レポート発表・討議
第 14 回	ユートピアをめぐる問 題に関する考察－まと め	レポート発表・総評とまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、1 回につき 4 時間以上を標準とする。全体を通して基本文献である Claey's のテキストの精読をおこなってくる。

また、その都度のテーマについての文献を読んできて、内容について考えていくことが授業への関心を高め、また積極的に討議に参加できる土台となるので、それをおこなうこと。

【テキスト（教科書）】

Gregory Claey's
『Searching for Utopia. The History of an Idea』
Thames and Hudson
New York
ISBN-978-0-500-25174-4

が全体を通しての基本文献である。これはコピーにて配布する。
また、その他の文献については、文庫本などで手に入るものが多いので、手に入れるか、図書館を利用。そうでない場合はコピー資料にて配布する。

【参考書】

上記の各回で取り上げるさまざまな文献に関するものが参考書であるが、各回でテーマとして取り扱うものに関連したものを積極的に読んでおくこと。

【成績評価の方法と基準】

平常点（レジュメ・プレゼン・議論）70 %
レポート課題（最終回での各人の独自の発表）30 %

【学生の意見等からの気づき】

活発な議論ができる環境を作る。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞
比較文学、比較芸術、現代ドイツ文学
＜研究テーマ＞

①比較文学という手法を通して文学と現実＝社会との関わりを軸に、文学の意味や意義を考える。②文学以外の諸芸術におけるテーマの扱われ方③ユートピアニズム、科学と文学

＜主要研究業績＞①『英語文化研究』（2021 年 春風社、共著）②「監視というオブセッション」（2021 年 成城大学経済学会、『木下直也名誉教授退任記念論文集』）③「文学・科学・知の相互浸透—イシグロ、ダウドナ、ソーカルと学問分野の越境」（2020 年 法政大学 言語・文化センター編『言語と文化』第 17 号）④「知の獲得と語りのあて先— Kazuo Ishiguro の Never Let Me Go におけるその手続き—」（2019 年 日本英語文化学会編『異文化の諸相』第 39 号）

⑤翻訳 W. イーザー『虚構と想像力』2007 年、法政大学出版局

【Outline (in English)】

【Outline and objectives】 The main aims of this course are to deepen knowledge and understanding of the concept of utopianism and to review the history of utopianism in the world based on Gregory Claeys'《Searching for Utopia. The History of an Idea》.

We will focus on the theoretical foundations and the conceptual framework of utopianism through the different types of works including modern literature and art to provide graduate students with opportunities to treat American, English, German, French and Japanese literature/artworks from the perspective of comparative literature and culture.

Graduate Students are required to do a close reading of the textbooks.

【Goal】:By the end of the course, students should be able to:

- understand the history of utopianism.
- conduct a critical analysis of the works mentioned in Gregory Claeys'《Searching for Utopia. The History of an Idea.》 from the perspective of utopianism.
- express your own point of view clearly in discussion.

【Work to be done outside of class】: Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter(s) from the text. Students are required to study at least 4 hours outside of classroom.

【Grading criteria】: Your overall grade in the class will be decided based on the following

Term-end presentation: 30%, an assignment and in-class contribution: 70%

LIT500B3

比較文学研究 B

日中 鎮朗

実務教員:

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

秋学期のこの授業では、春学期のテキストである『ユートピアの歴史』の 2 つの章を読んだ後に、比較文学研究の総括として、比較文学/世界文学の考え方、問題意識、意義、手法、適用などをテキストを読みながら、学びます。

後半で使用するテキストはデヴィッド・ダムロッシュ『世界文学とは何か?』（David Damrosch の《What is World Literature》とフランコ・モレッティの『遠読—＜世界文学システム＞への挑戦』（Franco Moretti, 《Distant Reading》です。

これらのテキストには様々な国の様々な文学作品が現れるが、それらがどういう視点で、またどういう意味において結びつき、反映しあうのかを知ることによって、文学そのものについて考える思考を形成します。

また、テキストに現れる文学作品のこうした視点からの分析も学びます。

最後に、現実社会と文学作品のかかわり方についても意識形成することを目的とします。

＜講義題目＞比較文学・世界文学とは何か？

【到達目標】

Gregory Claeys, David Damrosch および Franco Moretti のテキストに沿って、西欧文学・比較文学・世界文学に関する歴史的俯瞰と意味付けを理解することが目標です。

比較文学、世界文学の全体としての意味や定義、またそうした視点に立つての文学作品への研究・分析また取り組み手法を学ぶことができます。

またその際に、これらのテキストで挙げられた作品を論じることになるので、そうした作品を理解し、批判的に分析できます。

討議の際に自分の意見をわかりやすく表現し、伝え、また他者の意見を理解し、議論できます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

Gregory Claeys の《Searching For Utopia》、David Damrosch の《What is World Literature?》および、Franco Moretti,《Distant Reading》を比較文学、世界文学の視点に立って、読みすすめていきます。

また、関連する作品についても考察していきます。

各回の授業では、担当者が内容をレポートし、それについて討議していきます。

独自の観点でいいので、議論・検討に積極的に加わってください。従って、自由にまた関連に討論できるような場を形成したいと思います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	比較文学の共通理解を検討する。授業の進め方等についての説明。
第 2 回	『ユートピアの歴史』第 6 章 The Age of Defoe and Swift	『ガリバー旅行記』をめぐる問題について
第 3 回	『ユートピアの歴史』第 6 章 ウォーラーステインと 18 世紀	『ロビンソン・クルーソー』をめぐる問題について

第4回	『ユートピアの歴史』 第4章 A Genre Defined	共同体と千年王国思想 石川淳『至福千年』 桐野夏生『ポリティコン』
第5回	『ユートピアの歴史』 第4章	「ユートピア」をめぐる問題について のまとめと展望：トマス・モアのユートピア
第6回	ダムロッシュ『世界文学とは何か?』 序章について	ゲーテ、新語を造る
第7回	ダムロッシュ『世界文学とは何か?』 第3章について	旧世界から全世界へ
第8回	ダムロッシュ『世界文学とは何か?』 第6章と第3章について	「カフカ、故郷へ帰る」「ありあまるほどの世界と時間」をめぐる問題について
第9回	モレッティ『遠読』 第1章	「近代ヨーロッパ文学——その地理的素描」をめぐる問題について
第10回	モレッティ『遠読』 第2章と第3章	「世界文学への試論」 「文学の屠場」
第11回	モレッティ『遠読』 第8章と第9章	「小説——理論と歴史」 「スタイル株式会社——18世紀から19世紀の英国小説」
第12回	モレッティ『遠読』 第10章	ネットワーク理論、プロット分析
第13回	ユートピアと比較文学 について（まとめ）	レポート発表と討議・考察
第14回	世界文学とデジタル・ ヒューマニティーズ （まとめ）	レポート発表・総評とまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、1回につき4時間以上を標準とする。全体を通して基本文献である Claeys のテキストの精読をおこなってくる。

また、その都度のテーマについての文献を読んできて、内容について考えてくることが授業への関心を高め、また積極的に討議に参加できる土台となるので、それをおこなうこと。

【テキスト（教科書）】

テキストは基本的にコピーにて配布する。

グレゴリー・クレイス『ユートピアの歴史』（東洋書林）

Gregory Claeys の『Searching For Utopia』(London; Thames and Hudson, 2011)

ダムロッシュ『世界文学とは何か?』（国書刊行会）

David Damrosch, 『What is World Literature』(Princeton University Press, Princeton and Oxford, 2003).

フランコ・モレッティ『遠読』

Franco Moretti, 『Distant Reading』(Verso, 2013)

が全体を通しての基本文献である。

言及されるその他の文献については、図書館を利用するなどする。

【参考書】

上記の各回で取り上げるさまざまな文献が参考書であるが、各回でテーマとして取り扱うものに関連したものを積極的に読んでおくこと。

【成績評価の方法と基準】

平常点（レジュメ・プレゼンテーション・議論）70 %

最終回での各人のレポート発表 30 %

【学生の意見等からの気づき】

議論の時間を十分に確保し、活発な議論を促す。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

比較文学、比較芸術、現代ドイツ文学

＜研究テーマ＞

①比較文学という手法を通して文学と現実＝社会との関わりを軸に、文学の意味や意義を考える。②文学以外の諸芸術におけるテーマの扱われ方③ユートピアニズム、科学と文学

＜主要研究業績＞①『英語文化研究』（2021年 春風社、共著）②「監視というオブセッション」（2021年 成城大学経済学会、『木下直也名誉教授退任記念論文集』）③「文学・科学・知の相互浸透—イシグロ、ダウドナ、ソーカルと学問分野の越境」（2020年 法政大学 言語・文化センター編『言語と文化』第17号）④「知の獲得と語りのあて先— Kazuo Ishiguro の Never Let Me Go におけるその手続き—」（2019年 日本英語文化学会編『異文化の諸相』第39号）

⑤翻訳 W. イーザー『虚構と想像力』2007年、法政大学出版局

【Outline (in English)】

【Outline and objectives】 The main aims of this course are to deepen knowledge and understanding of the concept of utopianism and to review the history of utopianism in the world based on Gregory Claeys'『Searching for Utopia. The History of an Idea』and of world literature based on David Damrosch'『What is World Literature』and Franco Moretti's『Distant Reading』.

We will focus on the theoretical foundations and the conceptual framework of utopianism and world literature through the different types of works to provide graduate students with opportunities to treat various types of literature/artworks from the perspective of comparative literature and culture.

Graduate Students are required to do a close reading of the textbook.

【Goal】:By the end of the course, students should be able to :

- understand the history of utopianism and the method and concept of world literature studies.
- conduct a critical analysis of the works mentioned in the textbooks.
- express your own point of view clearly in discussion.

【Work to be done outside of class】: Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter(s) from the text. Students are required to study at least 4 hours outside of classroom.

【Grading criteria】: Your overall grade in the class will be decided based on the following

Term-end presentation: 30%, an assignment and in-class contribution: 70%

LIN500B3

Academic English (Effective Writing) A

安部 義治

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

様々なトピックについて書かれた読み物を読み、そのトピックに関する背景知識や問題意識を持ったうえで、自分なりの考えを文章にして、それを下地に簡単なプレゼンテーションを行う。

【到達目標】

英米圏の大学で必要とされる英語レベルでエッセーが書けるようになることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は原則として対面で行うものとする。ユニット前半の授業ではテキスト中の英文を読み、問題演習を行う。宿題として、指定されたトピックについてのエッセーを書いてもらう。ユニット後半の授業では宿題で書いてきたエッセーを教員と共に推敲し、出来上がった原稿をもとにプレゼンテーションを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	Skills and Strategies(7): Collocations	問題演習
第 2 回	Population Trends: Reading	問題演習
第 3 回	Population Trends: Discussion	エッセー、プレゼンテーション
第 4 回	Global Migration: Reading	問題演習
第 5 回	Global Migration: Discussion	エッセー、プレゼンテーション
第 6 回	Skills and Strategies(8): Scanning for Specific Information	問題演習
第 7 回	The Growth of Cities: Reading	問題演習
第 8 回	The Growth of Cities: Discussion	エッセー、プレゼンテーション
第 9 回	Challenges Facing the World's Cities: Reading	問題演習
第 10 回	Challenges Facing the World's Cities: Discussion	エッセー、プレゼンテーション
第 11 回	Skills and Strategies(9): Vocabulary Study	問題演習
第 12 回	The Design of Everyday Objects: Reading	問題演習
第 13 回	The Design of Everyday Objects: Discussion	エッセー、プレゼンテーション
第 14 回	Making Connections	問題演習

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。指定されたトピックに関するエッセーを各ユニット毎に書くことが必要となる。

【テキスト（教科書）】

McEntire, Jo, et al. *Making Connections 2*. CUP, 2013.

【参考書】

特になし

【成績評価の方法と基準】

偶数回の授業で行うプレゼンテーション (50%) と授業での貢献度 (50%) で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

読解力をもう少し身につけたいという受講者が意外に多いので、その点に配慮する。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞第二言語習得、TESOL

＜研究テーマ＞第二言語学習者による項構造の習得

＜主要研究業績＞日本人英語学習者による英語の所格動詞の習得について－有標性と転移の問題に関する考察－. 2010 年 12 月 *Second Language*. vol.9, pp.19-48.

【Outline (in English)】

【Course Outline】

Students are expected to read texts written on a wide variety of topics. It is also expected that they are to express their own opinions through a short essay and presentation.

【Learning Objectives】

By the end of the course, students should be able to write cogent English essays.

【Learning activities outside of classroom】

Students are expected to read the relevant part of the textbook before the class. Writing specified essays is compulsory.

【Grading Criteria /Policy】

Grading will be decided based on presentation (50%) and class participation (50%).

LIN500B3

Academic English (Effective Writing) B

安部 義治

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

様々なトピックについて書かれた読み物を読み、そのトピックに関する背景知識や問題意識を持ったうえで、自分なりの考えを文章にして、それを下地に簡単なプレゼンテーションを行う。

【到達目標】

英米圏の大学で必要とされる英語レベルでエッセーが書けるようになることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は原則として対面で行うものとする。ユニット前半の授業ではテキスト中の英文を読み、問題演習を行う。宿題として、指定されたトピックについてのエッセーを書いてもらう。ユニット後半の授業では宿題で書いてきたエッセーを教員と共に推敲し、出来上がった原稿をもとにプレゼンテーションを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	Skills and Strategies(10): Taking Notes from a Reading	問題演習
第 2 回	The Design of Living Spaces: Reading	問題演習
第 3 回	The Design of Living Spaces: Discussion	エッセー、プレゼンテーション
第 4 回	Fashion: Reading	問題演習
第 5 回	Fashion: Discussion	エッセー、プレゼンテーション
第 6 回	Skills and Strategies(11): Collocations	問題演習
第 7 回	Brain Development and Function: Reading	問題演習
第 8 回	Brain Development and Function: Discussion	エッセー、プレゼンテーション
第 9 回	The Teenage Brain: Reading	問題演習
第 10 回	The Teenage Brain: Discussion	エッセー、プレゼンテーション
第 11 回	Skills and Strategies(12): Preparing for a Reading Test	問題演習
第 12 回	The Male and Female Brain: Reading	問題演習
第 13 回	The Male and Female Brain: Discussion	エッセー、プレゼンテーション
第 14 回	Making Connections	問題演習

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。指定されたトピックに関するエッセーを各ユニット毎に書くことが必要となる。

【テキスト（教科書）】

McEntire, Jo, et al. *Making Connections 2*. CUP, 2013.

【参考書】

特になし

【成績評価の方法と基準】

偶数回の授業で行うプレゼンテーション (50%) と授業での貢献度 (50%) で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

読解力をもう少し身につけたいという受講者が意外に多いので、その点に配慮する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>第二言語習得、TESOL

<研究テーマ>第二言語学習者による項構造の習得

<主要研究業績>日本人英語学習者による英語の所格動詞の習得について－有標性と転移の問題に関する考察－. 2010 年 12 月 *Second Language*. vol.9, pp.19-48.

【Outline (in English)】

【Course Outline】

Students are expected to read texts written on a wide variety of topics. It is also expected that they are to express their own opinions through a short essay and presentation.

【Learning Objectives】

By the end of the course, students should be able to write cogent English essays.

【Learning activities outside of classroom】

Students are expected to read the relevant part of the textbook before the class. Writing specified essays is compulsory.

【Grading Criteria /Policy】

Grading will be decided based on presentation (50%) and class participation (50%).

LIN500B3

Academic English (Oral Presentation) A

安部 義治

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

様々なトピックについて書かれた読み物を読み、そのトピックに関する背景知識や問題意識を持ったうえで、自分なりの考えを文章にして、それを下地に簡単なプレゼンテーションを行う。

【到達目標】

英米圏の大学で必要とされる英語レベルでエッセーが書けるようになることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は原則として対面で行うものとする。ユニット前半の授業ではテキスト中の英文を読み、問題演習を行う。宿題として、指定されたトピックについてのエッセーを書いてもらう。ユニット後半の授業では宿題で書いてきたエッセーを教員と共に推敲し、出来上がった原稿をもとにプレゼンテーションを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	Skills and Strategies(1): Understanding Vocabulary in Context	問題演習
第 2 回	The News Media in the Past: Reading	問題演習
第 3 回	The News Media in the Past: Discussion	エッセー、プレゼンテーション
第 4 回	The History of Electronic Media: Reading	問題演習
第 5 回	The History of Electronic Media: Discussion	エッセー、プレゼンテーション
第 6 回	Skills and Strategies(2): Finding Main Ideas	問題演習
第 7 回	Citizen Journalism: Reading	問題演習
第 8 回	Citizen Journalism: Discussion	エッセー、プレゼンテーション
第 9 回	Ethical Reporting: Reading	問題演習
第 10 回	Ethical Reporting: Discussion	エッセー、プレゼンテーション
第 11 回	Skills and Strategies(3): Using the Dictionary	問題演習
第 12 回	Education Around the World: Reading	問題演習
第 13 回	Education Around the World: Discussion	エッセー、プレゼンテーション
第 14 回	Making Connections	問題演習

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。指定されたトピックに関するエッセーを各ユニット毎に書くことが必要となる。

【テキスト（教科書）】

McEntire, Jo, et al. *Making Connections* 2. CUP, 2013.

【参考書】

特になし

【成績評価の方法と基準】

偶数回の授業で行うプレゼンテーション (50%) と授業での貢献度 (50%) で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

読解力をもう少し身につけたいという受講者が意外に多いので、その点に配慮する。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞第二言語習得、TESOL

＜研究テーマ＞第二言語学習者による項構造の習得

＜主要研究業績＞日本人英語学習者による英語の所格動詞の習得について－有標性と転移の問題に関する考察－. 2010 年 12 月 *Second Language*. vol.9, pp.19-48.

【Outline (in English)】

【Course Outline】

Students are expected to read texts written on a wide variety of topics. It is also expected that they are to express their own opinions through a short essay and presentation.

【Learning Objectives】

By the end of the course, students should be able to do a decent presentation.

【Learning activities outside of classroom】

Students are expected to read the relevant part of the textbook before the class. Writing specified essays is compulsory.

【Grading Criteria /Policy】

Grading will be decided based on presentation (50%) and class participation (50%).

LIN500B3

Academic English (Oral Presentation) B

安部 義治

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

様々なトピックについて書かれた読み物を読み、そのトピックに関する背景知識や問題意識を持ったうえで、自分なりの考えを文章にして、それを下地に簡単なプレゼンテーションを行う。

【到達目標】

英米圏の大学で必要とされる英語レベルでエッセーが書けるようになることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は原則として対面で行うものとする。ユニット前半の授業ではテキスト中の英文を読み、問題演習を行う。宿題として、指定されたトピックについてのエッセーを書いてもらう。ユニット後半の授業では宿題で書いてきたエッセーを教員と共に推敲し、出来上がった原稿をもとにプレゼンテーションを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	Skills and Strategies(4): Finding Supporting Details	問題演習
第 2 回	Alternative Education: Reading	問題演習
第 3 回	Alternative Education: Discussion	エッセー、プレゼンテーション
第 4 回	Skills for the Twenty-First Century: Reading	問題演習
第 5 回	Skills for the Twenty-First Century: Discussion	エッセー、プレゼンテーション
第 6 回	Skills and Strategies(5): The Vocabulary for Numbers	問題演習
第 7 回	Supply and Demand in the Global Economy: Reading	問題演習
第 8 回	Supply and Demand in the Global Economy: Discussion	エッセー、プレゼンテーション
第 9 回	The Workforce of the Twenty-First Century: Reading	問題演習
第 10 回	The Workforce of the Twenty-First Century: Discussion	エッセー、プレゼンテーション
第 11 回	Skills and Strategies(6): Information in Graphs and Charts	問題演習

第 12 回 Communication Technology in Business: Reading 問題演習

第 13 回 Communication Technology in Business: Discussion エッセー、プレゼンテーション

第 14 回 Making Connections 問題演習

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。指定されたトピックに関するエッセーを各ユニット毎に書くことが必要となる。

【テキスト（教科書）】

McEntire, Jo, et al. *Making Connections* 2. CUP, 2013.

【参考書】

特になし

【成績評価の方法と基準】

偶数回の授業で行うプレゼンテーション (50%) と授業での貢献度 (50%) で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

読解力をもう少し身につけたいという受講者が意外に多いので、その点に配慮する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>第二言語習得、TESOL

<研究テーマ>第二言語学習者による項構造の習得

<主要研究業績>日本人英語学習者による英語の所格動詞の習得について－有標性と転移の問題に関する考察－. 2010 年 12 月

Second Language. vol.9, pp.19-48.

【Outline (in English)】

【Course Outline】

Students are expected to read texts written on a wide variety of topics. It is also expected that they are to express their own opinions through a short essay and presentation.

【Learning Objectives】

By the end of the course, students should be able to do a decent presentation.

【Learning activities outside of classroom】

Students are expected to read the relevant part of the textbook before the class. Writing specified essays is compulsory.

【Grading Criteria /Policy】

Grading will be decided based on presentation (50%) and class participation (50%).

LNG700B3

言語学特殊演習 I A

ブライアン・ウィスナー

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

This course examines advanced concepts in second language (L2) acquisition theory, research, and pedagogy. Students examine and summarize L2-related research findings and consider principled approaches to L2 pedagogy.

<講義題目>

第二言語習得 Second Language Acquisition

【到達目標】

Upon successful completion of this course, students are expected to be able to do the following:

1. Conduct literature searches on L2-related topics
2. Summarize research findings on L2-related topics
3. Present summaries and proposals for L2-related research projects

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

Most classes will consist of group discussions, presentations, and lectures on topics in L2 acquisition and pedagogy. Students then apply this knowledge by conducting research, presenting findings, and discussing these topics. Feedback will be given after each presentation.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	Introduction to the course	Presentation of core and advanced concepts in second language acquisition and teaching
第 2 回	Literature searches	Conducting a literature search
第 3 回	Summarizing studies	Outlining and summarizing previous studies
第 4 回	Declarative and procedural knowledge	Examining types of L2 knowledge
第 5 回	Measuring declarative and procedural knowledge	How can L2 knowledge be assessed?
第 6 回	Acquisition of L2 grammar	How is L2 grammar acquired?
第 7 回	Acquisition of L2 vocabulary	Issues related to L2 vocabulary acquisition
第 8 回	Individual differences	To what extent do individual differences affect L2 learning?
第 9 回	Contexts of instructed second language acquisition	In what ways does the linguistic environment influence L2 acquisition?
第 10 回	Focus on form	Attending to meaning and form in L2 learning
第 11 回	Feedback	What is the role of feedback in L2 learning?
第 12 回	Developing language courses	Core components of L2 programs and courses
第 13 回	Research presentations	Research project presentations
第 14 回	Feedback on research presentations	Discussion of and feedback on students' presentations

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

Students should complete reading assignments before the class in which they are discussed. Presentations should be prepared outside of class.

【テキスト（教科書）】

There is no required textbook for this course.

【参考書】

Shawn Loewen. (2015). *Introduction to instructed second language acquisition*. Routledge.

Lourdes Ortega. (2009). *Understanding second language acquisition*. Hodder Education.

Rod Ellis. (2008). *The study of second language acquisition* (2nd edition). Oxford University Press.

H. Douglas Brown. (2007). *Teaching by principles: An interactive approach to language pedagogy* (3rd edition). Longman.

H. Douglas Brown. (2006). *Principles of language learning and teaching* (5th edition). Longman.

Publication Manual of the American Psychological Association (APA Manual)

【成績評価の方法と基準】

Presentations: 50%

Written report: 50%

Students will be evaluated based on in-class presentations related to the content covered in class and their performance on writing assignments. Highly evaluated presentations and reports demonstrate synthesis of the course content with outside information and follow academic presentation and writing conventions. Details will be given in class.

【学生の意見等からの気づき】

Not applicable.

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 第二言語習得・英語教育学

<研究テーマ> 第二言語習得におけるメタ言語的知識の役割、言語テストの妥当性

<主要研究業績>

・『MY WAY: English Communication I』 共著 2013 年 3 月 三省堂

・『MY WAY: English Expression I』 共著 2013 年 3 月 三省堂

・『英語教育学の実証的研究法入門』 共著 2012 年 8 月 研究社

【Outline (in English)】

This course examines advanced concepts in second language (L2) acquisition theory, research, and pedagogy.

Upon successful completion of this course, students are expected to be able to do the following:

1. Conduct literature searches on L2-related topics
2. Summarize research findings on L2-related topics
3. Present summaries and proposals for L2-related research projects

Students should complete reading assignments before the class in which they are discussed. Presentations should be prepared outside of class.

Final grades will be calculated based on the following: Presentations: 50%; Written report: 50%.

LNG700B3

言語学特殊演習 I B

ブライアン・ウィスナー

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

This course examines the role of advanced research methods and statistics in applied linguistics.

<講義題目>

応用言語学の研究に必要な方法論の修得 Research Methods in Applied Linguistics

【到達目標】

Upon successful completion of this course, students are expected to be able to do the following: (a) define and describe quantitative research methods commonly used in applied linguistics; (b) perform statistical analyses using Excel, SPSS, JASP, R, Winsteps, and Facets; (c) input data and apply an appropriate method of analysis; and (d) report the results of statistical analyses in APA format.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

Most classes will consist of group discussions and lectures on research methods and statistical analyses. Time will be allotted for students to perform statistical analyses in the computer lab. The course content and examples presented in class will focus on general topics and second language research. Feedback will be given after each presentation.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	Research methods in applied linguistics	Introduction to research methods and the concepts covered in this course
第 2 回	Fundamental measurement	Principles of measuring constructs
第 3 回	Construct modeling	Construct definition and instrument development
第 4 回	Data screening	Screening data prior to conducting analyses
第 5 回	Rasch analyses	Analyzing dichotomous data
第 6 回	Rasch rating scale analyses	Analyzing rating scale data
第 7 回	Multifaceted Rasch measurement	Conducting and interpreting multifaceted Rasch analyses
第 8 回	Correlation and univariate analyses	Conducting and interpreting correlation and univariate analyses
第 9 回	Multiple regression	Conducting and interpreting multiple regression
第 10 回	Multivariate analysis of variance and covariance	Conducting and interpreting multivariate analyses
第 11 回	Principal components and factor analysis	Background of principal components and factor analysis
第 12 回	Applying factor analysis	Factor analyzing data
第 13 回	Structural equation modeling	Background of structural equation modeling
第 14 回	Applying structural equation modeling	Conducting and interpreting structural equation modeling

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

Reading assignments will be given for each class. Students should complete the reading assignments before each class and be prepared to discuss the content of the readings.

【テキスト（教科書）】

There is no required textbook for this course.

【参考書】

Jenifer Larson-Hall. (2016). *A guide to doing statistics in second language research using SPSS and R* (2nd ed.). Routledge.
 Andy Field. (2013). *Discovering statistics using SPSS* (4th ed.). Sage.
 Andy Field et al. (2012). *Discovering statistics using R*. Sage.
 Tabachnick, B. G., & Fidell, L. S. (2013). *Using multivariate statistics* (6th edition). Pearson.

Fred L. Perry, Jr. (2011). *Research in applied linguistics: Becoming a discerning consumer*. Routledge.

Publication Manual of the American Psychological Association (APA Manual)

【成績評価の方法と基準】

Presentations: 50%

Data Analysis Assignment: 50%

Students will be evaluated based on in-class presentations related to the content covered in class and their performance on a data analysis assignment. A highly evaluated presentation shows synthesis and clear explanation of the relevant material. The data analysis assignment will be assessed on the accuracy and thoroughness of the statistical results and the format in which they are presented. Details will be given in class.

【学生の意見等からの気づき】

Not applicable.

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 第二言語習得・英語教育学

<研究テーマ> 第二言語習得におけるメタ言語的知識の役割、言語テストの妥当性

<主要研究業績>

・『MY WAY: English Communication I』 共著 2013 年 3 月 三省堂

・『MY WAY: English Expression I』 共著 2013 年 3 月 三省堂

・『英語教育学の実証的研究法入門』 共著 2012 年 8 月 研究社

【Outline (in English)】

This course examines the role of advanced research methods and statistics in applied linguistics.

Upon successful completion of this course, students are expected to be able to do the following: (a) define and describe quantitative research methods commonly used in applied linguistics; (b) perform statistical analyses using Excel, SPSS, JASP, R, Winsteps, and Facets; (c) input data and apply an appropriate method of analysis; and (d) report the results of statistical analyses in APA format.

Reading assignments will be given for each class. Students should complete the reading assignments before each class and be prepared to discuss the content of the readings.

Final grades will be calculated based on the following:

Presentations: 50%

Data Analysis Assignment: 50%

LIT500B3

文学方法論特講 A

宮川 雅

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

リサーチのツールの知識を得るとともに、批評理論について歴史的に概観する。具体的な英米の文学テキストを素材として、どのようなアプローチが可能であるか、実践例を研究し、意見を交換しながら、意義と限界を検討する。

【到達目標】

英文学テキストへの多様なアプローチを理解し、自身の研究テーマへの応用を試みられる。具体的に批評アプローチを意識した論文をまとめられるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

プリントを使用して批評理論について学ぶ。3ないし4つの異なるジャンルの英米文学作品の原文テキストを各自用意して読み進めるとともに、批評理論を作品に応用したプリントを読む。各自の研究テーマを応用し、意見交換する。

中心的な「教科書」として、W・L・ゲーリン『文学批評入門』。青木健・日下洋右 訳、彩流社、1986を原書と比べながら読む。参考にしてその後の原書の改訂版も眺める（いずれも教員が準備する）。

上記の研究書（訳書）は、それなりに評価のあったものだが（原著は版を改訂して—— 6th ed., 2010 ——映像を含む古典テキスト以外への目配りを見せた）、半世紀近く前の批評の状況を、その後の「ポストモダン」な批評意識と比べるべく、ピーター・バリー『文学理論講義——新しいスタンダード』。高橋和久監訳、ミネルヴァ書房、2014を時々参照する。翻訳を吟味することで、日本人がどのように文学理論を受容してきたかも考える。

授業で提出されたりアクションペーパーなどにおけるコメント・質問へは、そのうちのいくつかを取り上げ、全体に対してフィードバックをおこない、議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション：	いかにテキストにむかうか “Armed Vision” (S. Hyman)
第2回	テキストとは何か	テキスト概念の変容
第3回	テクスチュアル・クリティシズム	本文校訂または批評以前の批評
第4回	印象批評とは何か	作家・作品・読者の三角形
第5回	印象批評の実践	レポーターによる発表と討論
第6回	フォルマリズム	形式主義的批評とテキスト分
第7回	フォルマリズム批評の実践	レポーターによる発表と討論
第8回	文化人類学と文学	神話批評
第9回	神話批評の実践	レポーターによる発表と討論
第10回	文学と心理分析	フロイト、ユング、その後
第11回	精神分析批評の実践	レポーターによる発表と討論
第12回	注釈	釈義学から解釈学へ
第13回	その実践	レポーターによる発表と討論
第14回	ディコンストラクションからニューヒストリシズムへ	前期のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

批評の対象となる作品テキストを読み進めること。自身の研究を進めて、批評理論の応用を考えること。

【テキスト（教科書）】

Nathaniel Hawthorne, “Young Goodman Brown”

Samuel Clemens, *Adventures of Huckleberry Finn*

Shakespeare, *Hamlet*

Andrew Marvell, “To His Coy Mistress”

W・L・ゲーリン『文学批評入門』。青木健・日下洋右 訳、彩流社、1986ならびにその後の原書の改訂版プリント

ピーター・バリー『文学理論講義——新しいスタンダード』。高橋和久監訳、ミネルヴァ書房、2014

David Lodge, *The Art of Fiction*, rev. ed. Penguin Books, 1992

【参考書】

ウェイン・ブース、米本弘一ほか訳『フィクションの修辞学』（水声社、1991）

デイヴィッド・ロッジ、柴田元幸・斎藤兆史訳『小説の技巧』（白水社、1997）

テリー・イーグルトン、大橋洋一訳『文学とは何か——現代批評理論への招待』（岩波書店、1985）

フレドリック・ジェイムソン、大橋洋一ほか訳『政治的無意識——社会的象徴行為としての物語』（平凡社、1989）

筒井康隆『文学部唯野教授』（岩波書店、1990）

ラマル・セルデン、鈴木良平訳『現代の文学批評——理論と実践』（彩流社、1994）

大橋洋一『新文学入門』（岩波書店、1995）

丹治愛ほか『知の教科書 批評理論』（講談社選書メチエ、2003）

【成績評価の方法と基準】

授業への参加度 70 パーセント、レポート 30 パーセントで総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

作品を多く読ませる工夫をした。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 近代アメリカ文学

<研究テーマ> アメリカ文学史と宗教と神秘学、小説の語りと技法

<主要研究業績> 「Ormond におけるピクチャレスクな意匠をめぐる」『英文学誌』47号（2005年3月）：27-44、「ポーの宇宙論と錬金術（十） 第五章 ポーと現代——ゴシック、ロマン主義、オカルト、近代芸術についての覚え書（その二）」『法政大学文学部紀要』50号（2005年3月）：91-110、「Re: Rip の妻はいつ死んだのか？」『法政大学文学部紀要』51号（2005年9月）：1-13、「疑似科学と科学の境」（八木敏雄・巽孝之編『エドガー・アラン・ポーの世紀』（研究社、2009）251-67.

【Outline (in English)】

【Learning Objectives】

Students learn various approaches to literary text. We will read a short story, a novel, and a drama, and read various critical approaches applied to them.

[Learning activities outside of classroom:] Before/after each class meeting, students are expected to spend 2 hours respectively to understand the course content.

[Grading Criteria/Policies:] Overall grade in the class will be decided based on the following: in-class contribution [positive participation] (70%), final report [paper] (30%).

LIT500B3

文学方法論特講 B

宮川 雅

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

リサーチのツールの知識を得るとともに、批評理論について歴史的に概観する。具体的な英米の文学テキストを素材として、どのようなアプローチが可能であるか、実践例を研究し、意見を交換しながら、意義と限界を検討する。Bの過半において、学生は実践的発表と質疑をおこなう。

【到達目標】

英文学テキストへの多様なアプローチを理解し、自身の研究テーマへの応用を試みる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

プリントを使用して批評理論について学ぶ。3ないし4つの異なるジャンルの英米文学作品の原文テキストを各自用意して読み進めるとともに、批評理論を作品に応用したプリントを読む。各自の研究テーマを応用し、意見交換する。

中心的な「教科書」として、W・L・ゲーリン『文学批評入門』。青木健・日下洋右 訳、彩流社、1986を原書と比べながら読む。参考としてその後の原書の改訂版も眺める（いずれも教員が準備する）。

上記の研究書（訳書）は、それなりに評価のあったものだが（原著は版を改訂して—— 6th ed., 2010 ——映像を含む古典テキスト以外への目配りを見せた）、半世紀近く前の批評の状況を、その後の「ポストモダン」な批評意識と比べるべく、ピーター・バリ―『文学理論講義——新しいスタンダード』。高橋和久監訳、ミネルヴァ書房、2014を時々参照する。翻訳を吟味することで、日本人がどのように文学理論を受容してきたかも考える。

授業で提出されたリアクションペーパーなどにおけるコメント・質問へは、そのうちのいくつかを取り上げ、全体に対してフィードバックをおこない、議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	分析と解釈の実践（1）	イメージ、シンボル、アレゴリー
第2回	分析と解釈の実践（2）	比喩と脱比喩
第3回	分析と解釈の実践（3）	プロットの構築
第4回	分析と解釈の実践（4）	キャラクター分析
第5回	中間まとめ	中間報告の反省
第6回	ニューヒストリズムからカルチュラル・スタディーズへ	1980年代からの流れ
第7回	ポストコロニアリズム	プリント講読
第8回	フェミニズム批評	プリント講読
第9回	ジェンダー理論	プリント講読
第10回	ナラトロジー理論	プリント講読
第11回	分析と解釈の実践（5）	視点と声
第12回	分析と解釈の実践（6）	ナラトロジー
第13回	分析と解釈の実践（7）	ソース・スタディー
第14回	総まとめ	まとめの議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。テキストの下調べ。自身の研究テーマの探求。

【テキスト（教科書）】

Nathaniel Hawthorne, "Young Goodman Brown"
Samuel Clemens, *Adventures of Huckleberry Finn*
Shakespeare, *Hamlet*

Andrew Marvell, "To His Coy Mistress"

W・L・ゲーリン『文学批評入門』。青木健・日下洋右 訳、彩流社、1986ならびにその後の原書の改訂版プリント

David Lodge, *The Art of Fiction*, rev. ed. Penguin Books, 1992

【参考書】

テリー・イーグルトン、大橋洋一訳『文学とは何か——現代批評理論への招待』（岩波書店、1985）

フレドリック・ジェイムソン、大橋洋一ほか訳『政治的無意識——社会的象徴行為としての物語』（平凡社、1989）

筒井康隆『文学部唯野教授』（岩波書店、1990）

ラマル・セルデン、鈴木良平訳『現代の文学批評——理論と実践』（彩流社、1994）

大橋洋一『新文学入門』（岩波書店、1995）

丹治愛ほか『知の教科書 批評理論』（講談社選書メチエ、2003）

【成績評価の方法と基準】

授業への参加度 70 パーセント、レポート 30 パーセントで総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

学生の積極的な参加を促せるようにつとめたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 近代アメリカ文学

<研究テーマ> アメリカ文学史と宗教と神秘学、小説の語りと技法

<主要研究業績> 「疑似科学と科学の境」（八木敏雄・巽孝之編『エドガー・アラン・ポーの世紀』（研究社、2009）251-67. 「Cacotype——言葉の影、または引用について」（『英文学誌』58、2016）35-60.

「Wot's the hodds so long as you're 'appy ——いいじゃないの幸せならば、または Web の効用について」（『英文学誌』59、2017）33-48.

【Outline (in English)】

【Learning Objectives】

Students learn various approaches to literary text. We will read a short story, a novel, and a drama, and read various critical approaches applied to them.

[Learning activities outside of classroom:] Before/after each class meeting, students are expected to spend 2 hours respectively to understand the course content.

[Grading Criteria/Policies:] Overall grade in the class will be decided based on the following: in-class contribution [positive participation] (70%), final report [paper] (30%).

LNG500B3

言語科学方法論特講 A

石川 潔

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

言語研究の方法論としての以下の2つの入門的な把握を目指す。

- ・物理学と同じ意味における理論の科学的構築法および評価法
- ・実験設計およびデータの統計処理

【到達目標】

自分の疑問を「科学」として追及可能な形にし、可能な複数の答え（仮説）を、初歩的な実験および統計学的な検定で比較できるようにすること。

そして、「科学」の必要性和限界、そして個々の検定法がどういう意味で有効／無効かを認識できるようになること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義およびパソコン実習。

試験には各人ごとに採点コメントを返します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	科学って何？	仮説、予測、不純な要因と minimal pair
第2回	経験科学で「証明」があり得ない理由	「仮説通りのデータ」は何を意味しないか
第3回	因果関係の主張の方法	科学的基準として要求されること
第4回	統計学の必要性	注目していない要因の効果の除去
第5回	統計学的検定の基本1	要因・水準、従属変数
第6回	統計ツール	Excel、ANOVA4、SPSS、R、JASP、etc.
第7回	統計学的検定の基本2	帰無仮説および対立仮説、有意性
第8回	記述統計	代表値、分散・標準偏差、など
第9回	実験計画の基本	被験者内要因と被験者間要因
第10回	t 検定1	被験者間要因の場合
第11回	t 検定2	1 サンプルの t 検定
第12回	t 検定3	被験者内要因
第13回	その他の検定法	初歩的な他の検定法の概観
第14回	fixed vs. random factor	subject/participant analysis & item analysis

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

パソコンの基本的な操作法の知識は事前に得ておくことが望ましい。
わからない箇所は教員や周囲に質問すること。

また、身の回りの事柄（新聞やニュースなどで出てきた話も含む）を、授業内容を参照しつつ、見つめなおして見ること。

【テキスト（教科書）】

学習支援システムでハンドアウトおよびデータセットを配布。

【参考書】

A. F. Chalmers. (1976/1999). *What is this thing called Science?* (3rd ed.) Hackett.

大村 平. (1984). 実験計画と分散分析のはなし. 日科技連.

Howell, D. C. (2006). *Statistical Methods for Psychology*. (6th ed.) Wadsworth.

Field, A. (2005). *Discovering Statistics Using SPSS*. Sage.

Baayen, R. H. (2008). *Analyzing Linguistic Data*. Cambridge University Press.

その他、適宜指示。

【成績評価の方法と基準】

学期末試験 100 %

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【その他の重要事項】

この授業は原則、英文学専攻の言語系の院生全員が履修すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

理論言語学（統語論、意味論、音声学）、心理言語学（音声知覚、文理解）

<研究テーマ>

音声知覚の単位と様式、アスペクトの実時間処理、読みにおける視覚処理と音韻処理の関係

<主要研究業績>

<http://www.i.hosei.ac.jp/~kiyoshi/research.html> などを参照。

【Outline (in English)】

[Course outline]

An introduction to research methodology in linguistic sciences

[Learning Objectives]

- Scientific construction and evaluation of theories
- Experimental design and statistical data analysis
- Realization of the (in)validities of the above

[Learning activities outside of classroom]

Practice of PC skills, applications of the methods to various issues encountered outside of the classroom

[Grading Criteria/Policy]

Final 100%

LNG500B3

言語科学方法論特講 B

ブライアン・ウィスナー

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

This course examines the role of research methods and statistics in the linguistic sciences.

<講義題目>

言語科学の研究に必要な方法論の修得 Research Methods in the Linguistic Sciences

【到達目標】

Upon successful completion of this course, students are expected to be able to do the following: (a) define and describe quantitative research methods commonly used in the linguistic sciences; (b) perform statistical analyses using Excel, JASP, and R; (c) input data and apply an appropriate method of analysis; (d) report the results of statistical analyses in APA format; and (e) design a research study, collect data, and report the results of statistical analyses.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

Most classes will consist of group discussions and lectures on research methods and statistical analyses. Time will be allotted for students to perform statistical analyses in the computer lab. The course content and examples presented in class will focus on general topics and second language research. This course is conducted in English. Feedback will be given after each presentation.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	Research methods in the linguistic sciences	Introduction to why research is conducted and the concepts covered in this course
第 2 回	Variables & levels of measurement	Classification and measurement of variables
第 3 回	Visual descriptive statistics	Creating graphs and plots
第 4 回	Statistical assumptions	Methods of addressing statistical assumptions
第 5 回	Correlation	Background and calculation of Pearson's correlation coefficient
第 6 回	Other methods of correlation	Calculation of Spearman's correlation coefficient
第 7 回	Linear regression	Background and calculation of linear regression
第 8 回	Multiple regression	Calculating and interpreting multiple regression
第 9 回	T-tests and research design	Background of t-tests and calculation of a paired-samples t-test and an independent samples t-test
第 10 回	ANOVA, planned comparisons, and post-hoc tests	Background and calculation of ANOVA
第 11 回	Factorial ANOVA	Background and calculation of factorial ANOVA
第 12 回	Repeated-measures ANOVA	Background and calculation of repeated-measures ANOVA
第 13 回	Factor analysis	Background of factor analysis
第 14 回	Applying factor analysis	Factor analyzing data

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

Reading assignments will be given for each class. Students should complete the reading assignments before each class and be prepared to discuss the content of the readings.

【テキスト（教科書）】

There is no required textbook for this course.

【参考書】

Jenifer Larson-Hall. (2016). *A guide to doing statistics in second language research using SPSS and R* (2nd ed.). Routledge.

Andy Field. (2013). *Discovering statistics using SPSS* (4th ed.). Sage.

Fred L. Perry, Jr. (2011). *Research in applied linguistics: Becoming a discerning consumer*. Routledge.

Publication Manual of the American Psychological Association (APA Manual)

【成績評価の方法と基準】

Presentations: 25%; Research Report: 25%; Final Data Analysis Assignment: 50%

Students will be evaluated based on in-class presentations related to the content covered in class and their performance on a report and a data analysis assignment. A highly evaluated presentation shows synthesis and clear explanation of the relevant material. The data analysis assignment will be assessed on the accuracy and thoroughness of the statistical results and the format in which they are presented. Details will be given in class.

【学生の意見等からの気づき】

Not applicable.

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 第二言語習得・英語教育学

<研究テーマ> 第二言語習得におけるメタ言語的知識の役割、言語テストの妥当性

<主要研究業績>

・『MY WAY: English Communication I』 共著 2013 年 3 月 三省堂

・『MY WAY: English Expression I』 共著 2013 年 3 月 三省堂

・『英語教育学の実証的研究法入門』 共著 2012 年 8 月 研究社

【Outline (in English)】

This course examines the role of research methods and statistics in the linguistic sciences.

Upon successful completion of this course, students are expected to be able to do the following: (a) define and describe quantitative research methods commonly used in the linguistic sciences; (b) perform statistical analyses using Excel, JASP, and R; (c) input data and apply an appropriate method of analysis; (d) report the results of statistical analyses in APA format; and (e) design a research study, collect data, and report the results of statistical analyses.

Students should complete the reading assignments before each class and be prepared to discuss the content of the readings.

Final grades will be calculated based on the following:

Presentations: 25%; Research Report: 25%; Final Data Analysis Assignment: 50%

LIT500B3

英米文学特講Ⅱ A

丹治 愛

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

＜講義題目＞フォースター『ハワーズ・エンド』を読む

E. M. フォースター『ハワーズ・エンド』を、同時代の歴史的状況と関連させながら読む。そのうえで、そのような方向で書かれた代表的批評を読む。

【到達目標】

- ・フォースターの生涯、作品、時代について、一般的かつ特定の事実を列記することができる。
- ・歴史主義的な読解の理論を理解し、方法を実践することができる。
- ・『*Howards End*』の主題的特徴について具体的に述べることができる。
- ・作品解釈について他人と議論することができる。
- ・英語批評論文を正確に読むことができる。
- ・批評論文を書くことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・演習形式でテキストを精読し、学生個人個人がその作品のなかにある主題を発見し、相互に解釈を発表しあいながら、作品への理解を深めていく。
- ・そのうえで 4000 字程度の期末レポートを書く。
- ・予習は必須。欠席の場合も、かならず毎週の課題を提出すること。良いコメントは授業内で紹介し、さらなる議論に活かす。
- ・提出されたレポートについてはルーブリックで講評する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス・イントロダクション	授業のガイダンスとフォースター文学へのイントロダクション。
第 2 回	『ハワーズ・エンド』を読む（1）	『ハワーズ・エンド』を5つの部分に分け、その第1部を読む。
第 3 回	『ハワーズ・エンド』を読む（2）	『ハワーズ・エンド』を5つの部分に分け、その第2部を読む。
第 4 回	『ハワーズ・エンド』を読む（3）	『ハワーズ・エンド』を5つの部分に分け、その第3部を読む。
第 5 回	『ハワーズ・エンド』を読む（4）	『ハワーズ・エンド』を5つの部分に分け、その第4部を読む。
第 6 回	『ハワーズ・エンド』を読む（5）	『ハワーズ・エンド』を5つの部分に分け、その第5部を読む。
第 7 回	中間まとめ	『ハワーズ・エンド』の歴史主義的テーマをリストアップし、それらについての理解を深める。
第 8 回	『ハワーズ・エンド』論を調査する	中間まとめを受けて、『ハワーズ・エンド』論を調査し、読むべき論文3本を決定する。
第 9 回	『ハワーズ・エンド』論を読む（1）	歴史主義的論文（1）の前半を読む。
第 10 回	『ハワーズ・エンド』論を読む（2）	歴史主義的論文（1）の後半を読む。
第 11 回	『ハワーズ・エンド』論を読む（3）	歴史主義的論文（2）の前半を読む。
第 12 回	『ハワーズ・エンド』論を読む（4）	歴史主義的論文（2）の後半を読む。
第 13 回	『ハワーズ・エンド』論を読む（5）	歴史主義的論文（3）の前半を読む。

第 14 回 『ハワーズ・エンド』 歴史主義的論文（3）の後半を読む。
論を読む（6）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業中のディスカッションに参加できるよう、授業前に作品および作品に関する批評作品を精読し、自分の意見をまとめてくること。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

E. M. Forster, *Howards End* (Penguin Classics)

【参考書】

授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点 50%（準備をしたうえで、積極的に討議に参加すること）
4000 字程度の期末レポート 50%（作品と作品に関する批評作品を精読したうえで、自分なりの独創的解釈を創造し、その解釈の妥当性を論理的に証明すること）

【学生の意見等からの気づき】

双方向的な授業を心がける。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

イギリス文学

＜研究テーマ＞

19 世紀後半から 20 世紀前半にかけてのイギリス文学および文

【Outline (in English)】

Lecture Title: Reading Forster's *Howards End*

We will read E. M. Forster's *Howards End* in relation to the historical context of its time. We will then read representative critical essays written in that direction.

Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

Grading Criteria/Policies: Your overall grade in the class will be decided based on the following: in-class contribution (50%), final report (50%).

LIT500B3

英米文学特講Ⅱ B

丹治 愛

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

<講義題目>カントリー・ハウス小説を読む

3冊の戦間期のカントリー・ハウス小説を、同時代の歴史的状況と関連させながら読む。

【到達目標】

- ・カントリー・ハウス小説の歴史的展開について、一般的かつ特定の事実を列記することができる。
- ・歴史主義的な読解の理論を理解し、方法を実践することができる。
- ・代表的なカントリー・ハウス小説の主題的特徴について具体的に述べることができる。
- ・作品解釈について他人と議論することができる。
- ・英語批評論文を正確に読むことができる。
- ・批評論文を書くことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・演習形式でテキストを精読し、学生個人個人がその作品のなかにある主題を発見し、相互に解釈を発表しあいながら、作品への理解を深めていく。
- ・そのうえで 4000 字程度の期末レポートを書く。
- ・予習は必須。欠席の場合も、かならず毎週の課題を提出すること。良いコメントは授業内で紹介し、さらなる議論に活かす。
- ・提出されたレポートについてはルーブリックで講評する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
①	ガイダンス・イントロダクション	授業のガイダンスとカントリー・ハウス小説へのイントロダクション。
②	カントリー・ハウス小説の概要	大石和欣『家のイングランド』をとおしてカントリー・ハウス小説の概要を理解する。
③	ヴァージニア・ウルフ『ダロウェイ夫人』（1）	全体を4つに分け、その第1部を読む。重要箇所のディスカッション。
④	ヴァージニア・ウルフ『ダロウェイ夫人』（2）	全体を4つに分け、その第2部を読む。重要箇所のディスカッション。
⑤	ヴァージニア・ウルフ『ダロウェイ夫人』（3）	全体を4つに分け、その第3部を読む。重要箇所のディスカッション。
⑥	ヴァージニア・ウルフ『ダロウェイ夫人』（4）	全体を4つに分け、その第4部を読む。重要箇所のディスカッション。
⑦	D・H・ロレンス『チャタレイ夫人の恋人』（1）	全体を4つに分け、その第1部を読む。重要箇所のディスカッション。
⑧	D・H・ロレンス『チャタレイ夫人の恋人』（2）	全体を4つに分け、その第2部を読む。重要箇所のディスカッション。
⑨	D・H・ロレンス『チャタレイ夫人の恋人』（3）	全体を4つに分け、その第3部を読む。重要箇所のディスカッション。

⑩	D・H・ロレンス『チャタレイ夫人の恋人』（4）	全体を4つに分け、その第4部を読む。重要箇所のディスカッション。
⑪	ダフネ・デュ・モーリア『レベッカ』（1）	全体を4つに分け、その第1部を読む。重要箇所のディスカッション。
⑫	ダフネ・デュ・モーリア『レベッカ』（2）	全体を4つに分け、その第2部を読む。重要箇所のディスカッション。
⑬	ダフネ・デュ・モーリア『レベッカ』（3）	全体を4つに分け、その第3部を読む。重要箇所のディスカッション。
⑭	ダフネ・デュ・モーリア『レベッカ』（4）	全体を4つに分け、その第4部を読む。重要箇所のディスカッション。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業中のディスカッションに参加できるよう、授業前に作品および作品に関する批評作品を精読し、自分の意見をまとめてくること。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

ヴァージニア・ウルフ『ダロウェイ夫人』（集英社文庫）
D. H. ロレンス『チャタレイ夫人の恋人』（光文社文庫）
ダフネ・デュ・モーリア『レベッカ』（新潮文庫）

【参考書】

大石和欣『家のイングランド』（名古屋大学出版会）1章、2章、4章、5章

【成績評価の方法と基準】

平常点 50%（準備をしたうえで、積極的にディスカッションに参加すること）

4000 字程度の期末レポート 50%（作品と作品に関する批評作品を精読したうえで、自分なりの独創的解釈を創造し、その解釈の妥当性を論理的に証明すること）

【学生の意見等からの気づき】

双方向的な授業を心がける。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

イギリス文学

<研究テーマ>

19世紀後半から20世紀前半にかけてのイギリス文学および文化

【Outline (in English)】

Lecture Title: Reading Country House Novels

We will read three inter-war country house novels in relation to the historical context of its time.

Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

Grading Criteria/Policies: Your overall grade in the class will be decided based on the following: in-class contribution (50%), final report (50%).

LIT500B3

英米文学特講Ⅳ A

宮川 雅

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ① アーヴィングの小説技法の検討
- ② 中間話法と語りの技法の検討
- ③ ゴシック小説の変化と多様性を探る
- ④ *The Sketch Book*(1819-20) から代表的短篇数篇と *Tales of a Traveller* 第一部 (1824) のテキスト精読。
＜講義題目＞ Washington Irving 研究

【到達目標】

- ① ゴシック小説の主題や方法についての概観的知識を得ること。
- ② ワシントン・アーヴィングの作家としての営みを概観して慨嘆すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

レポーター制によるアメリカ文学テキストの精読。
ワシントン・アーヴィング (1783-1859) の作品を、20 世紀の全集版 *Complete Wrks of Washington Irving* (U of Wisconsin P/ Twayne, 1964-88) のテキストを使って読む。
ハンドアウト・課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じてもおこなう予定。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	レポーターの担当を決められるだけ決める／辞書・レファレンス類についてのプリント配布／アーヴィングについての bibliography 配布
第 2 回	『スケッチ・ブック』①	序文の検討、「Rip Van Winkle」
第 3 回	『スケッチ・ブック』②	Donald Ringe のゴシック研究を読む
第 4 回	『スケッチ・ブック』③ "The Hollow of the Three Hills"	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 5 回	『スケッチ・ブック』④	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 6 回	『スケッチ・ブック』⑤	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 7 回	『旅人の物語』①	ポーの短篇小説論を読む
第 8 回	『旅人の物語』②	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 9 回	『旅人の物語』③	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 10 回	『旅人の物語』④	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 11 回	『旅人の物語』⑤	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 12 回	『旅人の物語』⑥	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 13 回	『旅人の物語』⑦	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 14 回	『旅人の物語』⑧	レポーターによる発表と質疑応答と議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

辞書類にあたって、読み進めること。クロス・レファレンスを意識すること。予習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。授業内での積極的な質問・意見を考えながら学習してほしい

【テキスト（教科書）】

配布プリントを使用。

【参考書】

全集本を専攻室に置く。アメリカのゴシック研究の古典は Donald Ringe の *American Gothic: Imagination and Reason in Nineteenth-Century Fiction* (University of Kentucky Press, 1982) [邦訳 小宮照夫ほか、松柏社、2005 年]。

アーヴィングに関する研究書（アメリカン・ゴシックの研究書誌を含む）は初回にプリントを配布する（学習支援システムの「教材」に入れる）。

【成績評価の方法と基準】

「配分 (%)」：出席を前提とした上での授業への積極的な参加度 70 パーセント、期末レポート 30 パーセント

「評価基準」：レポーター時の発表の内容とまとめ度と努力、非レポーター時の発言による参加の積極性、期末レポートの内容、以上を数値化して合計したうえで総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート実施しておりません。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 近代アメリカ文学

＜研究テーマ＞ アメリカ文学史と宗教と神秘学、小説の語りと技法

＜主要研究業績＞ 「Ormond におけるピクチャレスクな意匠をめぐって」『英文學誌』47 号 (2005 年 3 月) : 27-44、「ポーの宇宙論と錬金術 (十) 第五章 ポーと現代——ゴシック、ロマン主義、オカルト、近代芸術についての覚え書 (その二)」『法政大学文学部紀要』50 号 (2005 年 3 月) : 91-110、「Re: Rip の妻はいつ死んだのか?」(『法政大学文学部紀要』51 号 (2005 年 9 月) : 1-13、「疑似科学と科学の境」(八木敏雄・巽孝之編『エドガー・アラン・ポーの世紀』(研究社、2009) 251-67.

【Outline (in English)】

[Lecture Title:] Reading Irving's Gothic Tales

Students learn to carry to a higher level the skillful analysis of language and text, by close reading of Washington Irving's gothic tales and poems. Students also obtain knowledge about literary gothicism and about its developments.

[Learning activities outside of classroom:] Before/after each class meeting, students are expected to spend 2 hours respectively to understand the course content.

[Grading Criteria/Policies:] Overall grade in the class will be decided based on the following: in-class contribution [positive participation] (70%), final report [paper] (30%).

LIT500B3

英米文学特講Ⅳ B

宮川 雅

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ① ポーの短篇小説の検討（あわせて「象嵌」されたポー自作の詩も読む）
- ② ゴシック小説の多様性を探る
- ③ 多様な解釈の可能性の検討

<講義題目> Edgar Allan Poe の短篇と詩の研究

【到達目標】

- ① ゴシック・ロマンスの主題や方法についての概観的知識を得ること。
- ② ポーの作家としての営みを概観して慨嘆すること。
- ③ アメリカ短篇小説について歴史的な理解を得る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

レポーター制によるアメリカ文学テキストの精読。

自作の詩が「引用」されたポーの短篇小説を探して読む。それから詩が象嵌されていない短篇小説を読む。ポーの短篇小説論と「統一性 unity」について作品という「小宇宙」に即して考えてみる。

授業で提出されたりアクションペーパーなどにおけるコメント・質問へは、そのうちのいくつかを取り上げ、全体に対してフィードバックをおこない、議論に活かせます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ポーの短篇小説論	資料の提示と配布
第 2 回	"Metzengerstein"	（短篇作家の始まりを考える作品として）
第 3 回	"The Fall of the House of Usher" (1839)	（典型的な詩+物語の作品として） レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 4 回	"The Assignment" (1834)	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 5 回	"Morella" (1835)	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 6 回	"Ligeia" (1838)	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 7 回	"How to Write a Blackwood Article" (1838)	（引用とポーの創作技法を考える作品として）レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 8 回	"A Predicament" (1838)	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 9 回	"The Fall of the House of Usher" (1839); "The Haunted House" (1839)	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 10 回	"The Island of the Fay" (1841)	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 11 回	ポーの短篇小説論	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 12 回	ポーの詩論	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 13 回	ポーの創作論	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 14 回	まとめ	議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

研究書を読むことと辞書を引いて予習すること。予習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

Thomas Ollive Mabbott 編の *Collected Works of Edgar Allan Poe* をプリントで配布する。

【参考書】

A 参照

【成績評価の方法と基準】

「配分 (%)」：出席を前提とした上での授業への積極的な参加度 70 パーセント、期末レポート 30 パーセント

「評価基準」：レポーター時の発表の内容とまとまり度と努力、非レポーター時の発言による参加の積極性、期末レポートの内容、以上を数値化して合計したうえで総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート実施せず。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 近代アメリカ文学

<研究テーマ> アメリカ文学史と宗教と神秘学、小説の語りと技法

<主要研究業績> 「Ormond」におけるピクチャレスクな意匠をめぐる『英文學誌』47 号（2005 年 3 月）：27-44、「ポーの宇宙論と錬金術（十） 第五章 ポーと現代——ゴシック、ロマン主義、オカルト、近代芸術についての覚え書（その二）」『法政大学文学部紀要』50 号（2005 年 3 月）：91-110、「Re: Rip の妻はいつ死んだのか？」（『法政大学文学部紀要』51 号（2005 年 9 月）：1-13、「疑似科学と科学の境」（八木敏雄・巽孝之編『エドガー・アラン・ポーの世紀』（研究社、2009）251-67.

【Outline (in English)】

[Lecture Title:] Reading Poe's Gothic Fiction

Students learn to carry to a higher level the skillful analysis of language and text, by close reading of Edgar Allan Poe's gothic tales and poems. Students also obtain knowledge about literary gothicism and about its developments.

[Learning activities outside of classroom:] Before/after each class meeting, students are expected to spend 2 hours respectively to understand the course content.

[Grading Criteria/Policies:] Overall grade in the class will be decided based on the following: in-class contribution [positive participation] (70%), final report [paper] (30%).

LIT500B3

英米文学特講Ⅴ A

日中 鎮朗

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

理想的な社会の追求は人類の歴史の中の根源的なテーマである。現代においても、あらゆる国家はそれを目指して考え続け、努力しているといっても過言ではない。

そのために理想社会、あるいはユートピアについて、とりわけ思想、文学、映画、芸術においてどのように考えられ、受容され、作用してきたのかを Gregory Claey's の『Searching for Utopia. The History of an Idea』を講読しながら、考える。

とりわけ、＜現在＞という時点からのアクチュアルな問題提起として、近代から現代の文学・芸術を分析対象とし、さまざまな作品を読み解きながら、文学や芸術がその時代の社会に対してどう取り組んだかを考察する。

＜講義題目＞

近現代のユートピア像の歴史と受容

【到達目標】

近現代以降のユートピアの歴史を理解することが目標である。

また、その際に Gregory Claey's の『Searching for Utopia. The History of an Idea』《やこの講義で挙げられた小説や作品をユートピアという視点から批判的に分析し、かつ独自の視点で論じることができるようになること。

討議の際に、自分の意見を論理的かつ明確に表現し、伝えられるようになること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

ユートピアの歴史的な概説として Gregory Claey's の『Searching for Utopia. The History of an Idea.』《を読んでゆく。

また同時に、各回の授業計画で挙げられるユートピア関連の文学を中心に、思想、芸術などの諸分野においてどのように扱われ、表現されているかを見る。

その際に、テキストの担当部分を決めて、それをまとめ、プレゼンしてもらう。独自の観点でいいので、議論・検討を加えていきたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	ユートピア概念の共通理解を検討する。 授業の進め方等についての説明。
第 2 回	Gregory Claey's 『Searching for Utopia. The History of an Idea』 Chapter12 の読解①	The Emergence of Science Fiction 訳読と議論（1）
第 3 回	Gregory Claey's 『Searching for Utopia. The History of an Idea』 Chapter12 の読解②	科学技術とヒューマニティ ジュール・ヴェルヌと日本の冒険 小説 訳読と議論（2）
第 4 回	人工と人造の生命 Chapter12 の応用①	『フランケンシュタイン』 （1818/1831）あるいは、怪物たち （ゴーレム、ヴァンパイア）
第 5 回	機械・人間・ユート ピア Chapter12 の応用②	『フランケンシュタイン』の読解 と動物（フランツ・カフカ）

第 6 回	Gregory Claey's 『Searching for Utopia. The History of an Idea』 Chapter11 の読解①	Inventing Progress: Rationalism, Technology and Modernity as Utopia 訳読と議論（1）
第 7 回	Gregory Claey's 『Searching for Utopia. The History of an Idea』 Chapter11 の読解②	エドワード・ベラミー『顧みれば』（1888）を中心に
第 8 回	経済・科学・社会 主義－ 近代性への異議申し立てとユートピア Chapter11 の応用	ウィリアム・モリス『ユートピア 便り』（1890）、サミュエル・バト ラー『エレホン』（1872）と反近代
第 9 回	ウィリアム・モリスから 20 世紀ヘーモリス の時代・芸術	世紀末芸術とアーツ・アンド・クラフト
第 10 回	Gregory Claey's 『Searching for Utopia. The History of an Idea』 Chapter8 の読解①	Ideal Cities: Medieval to Modern 訳読と議論（1）
第 11 回	Gregory Claey's 『Searching for Utopia. The History of an Idea』 Chapter8 の読解②	災害の後： 多和田葉子『献灯使』 綿矢りさ『大地のゲーム』
第 12 回	近代の理想都市 田園都市（ガーデン・シティ）運動とその 構想 Chapter8 の応用	エベニーザー・ハワード 『明日の田園都市』——ル・コル ビュジェと建築におけるモダニズム
第 13 回	ユートピアと近代社会・近代科学	レポート発表・討議
第 14 回	ユートピアをめぐる問題に関する考察－まとめ	レポート発表・総評とまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、1 回につき 4 時間以上を標準とする。全体を通して基本文献である Claey's のテキストの精読をおこなってくる。

また、その都度のテーマについての文献を読んできて、内容について考えていくことが授業への関心を高め、また積極的に討議に参加できる土台となるので、それをおこなうこと。

【テキスト（教科書）】

Gregory Claey's
『Searching for Utopia. The History of an Idea』
Thames and Hudson
New York
ISBN-978-0-500-25174-4

が全体を通しての基本文献である。これはコピーにて配布する。

また、その他の文献については、文庫本などで手に入るものが多いので、手に入れるか、図書館を利用。そうでない場合はコピー資料にて配布する。

【参考書】

上記の各回で取り上げるさまざまな文献に関するものが参考書であるが、各回でテーマとして取り扱うものに関連したものを積極的に読んでおくこと。

【成績評価の方法と基準】

平常点（レジュメ・プレゼン・議論）70 %
レポート課題（最終回での各人の独自の発表）30 %

【学生の意見等からの気づき】

活発な議論ができる環境を作る。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞
比較文学、比較芸術、現代ドイツ文学
＜研究テーマ＞

①比較文学という手法を通して文学と現実＝社会との関わりを軸に、文学の意味や意義を考える。②文学以外の諸芸術におけるテーマの扱われ方③ユートピアニズム、科学と文学

＜主要研究業績＞①『英語文化研究』（2021年 春風社、共著）②「監視というオブセッション」（2021年 成城大学経済学会、『木下直也名誉教授退任記念論文集』）③「文学・科学・知の相互浸透—イシグロ、ダウドナ、ソーカルと学問分野の越境」（2020年 法政大学 言語・文化センター編『言語と文化』第17号）④「知の獲得と語りのあて先—Kazuo IshiguroのNever Let Me Goにおけるその手続き—」（2019年 日本英語文化学会編『異文化の諸相』第39号）

⑤翻訳 W. イーザー『虚構と想像力』2007年、法政大学出版局

【Outline (in English)】

【Outline and objectives】 The main aims of this course are to deepen knowledge and understanding of the concept of utopianism and to review the history of utopianism in the world based on Gregory Claeys'《Searching for Utopia. The History of an Idea》.

We will focus on the theoretical foundations and the conceptual framework of utopianism through the different types of works including modern literature and art to provide graduate students with opportunities to treat American, English, German, French and Japanese literature/artworks from the perspective of comparative literature and culture.

Graduate Students are required to do a close reading of the textbooks.

【Goal】 :By the end of the course, students should be able to :

- understand the history of utopianism.
- conduct a critical analysis of the works mentioned in Gregory Claeys'《Searching for Utopia. The History of an Idea.》 from the perspective of utopianism.
- express your own point of view clearly in discussion.

【Work to be done outside of class】 : Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter(s) from the text. Students are required to study at least 4 hours outside of classroom.

【Grading criteria】 : Your overall grade in the class will be decided based on the following

Term-end presentation: 30%, an assignment and in-class contribution: 70%

LIT500B3

英米文学特講 V B

日中 鎮朗

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

秋学期のこの授業では、春学期のテキストである『ユートピアの歴史』の2つの章を読んだ後に、比較文学研究の総括として、比較文学/世界文学の考え方、問題意識、意義、手法、適用などをテキストを読みながら、学びます。

後半で使用するテキストはデヴィッド・ダムロッシュ『世界文学とは何か？』（David Damrosch の《What is World Literature》）とフランコ・モレッティの『遠読—＜世界文学システム＞への挑戦』（Franco Moretti, 《Distant Reading》）です。

これらのテキストには様々な国の様々な文学作品が現れるが、それらがどういう視点で、またどういう意味において結びつき、反映しあうのかを知ることによって、文学そのものについて考える思考を形成します。

また、テキストに現れる文学作品のこうした視点からの分析も学びます。

最後に、現実社会と文学作品のかかわり方についても意識形成することを目的とします。

＜講義題目＞比較文学・世界文学とは何か？

【到達目標】

Gregory Claeys, David Damrosch および Franco Moretti のテキストに沿って、西欧文学・比較文学・世界文学に関する歴史的俯瞰と意味付けを理解することが目標です。

比較文学、世界文学の全体としての意味や定義、またそうした視点に立つての文学作品への研究・分析また取り組み手法を学ぶことができる。

またその際に、これらのテキストで挙げられた作品を論じることになるので、小説や作品をユートピアという視点から批判的に分析し、かつ独自の視点で論じることができる。

討議の際に、他者の意見を理解し、自分の意見を論理的かつ明確に表現し、伝えられるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

Gregory Claeys の《Searching For Utopia》、David Damrosch の《What is World Literature?》および、Franco Moretti,《Distant Reading》を比較文学、世界文学の視点に立つて、読みすすめていきます。

また、関連する作品についても考察していきます。

各回の授業では、担当者が内容をレポートし、それについて討議していきます。

独自の観点でいいので、議論・検討に積極的に加わってください。従って、自由にまた関連に討論できるような場を形成したいと思います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	比較文学の共通理解を検討する。 授業の進め方等についての説明。
第2回	『ユートピアの歴史』第6章 The Age of Defoe and Swift	『ガリバー旅行記』をめぐる問題について

第3回	『ユートピアの歴史』第6章 ウォーラステインと18世紀	『ロビンソン・クルーソー』をめぐる問題について
第4回	『ユートピアの歴史』第4章 A Genre Defined	共同体と千年王国思想 石川淳『至福千年』 桐野夏生『ポリティコン』
第5回	『ユートピアの歴史』第4章 ユートピアの始原	「ユートピア」をめぐる問題についてのまとめと展望：トマス・モアのユートピア
第6回	ダムロッシュ『世界文学とは何か？』序章について	ゲーテ、新語を造る
第7回	ダムロッシュ『世界文学とは何か？』第3章について	旧世界から全世界へ
第8回	ダムロッシュ『世界文学とは何か？』第6章と終章について	「カフカ、故郷へ帰る」「ありあまるほどの世界と時間」をめぐる問題について
第9回	モレッティ『遠読』第1章	「近代ヨーロッパ文学——その地理的素描」をめぐる問題について
第10回	モレッティ『遠読』第2章と第3章	「世界文学への試論」 「文学の屠場」
第11回	モレッティ『遠読』第8章と第9章	「小説——理論と歴史」 「スタイル株式会社——18世紀から19世紀の英国小説」
第12回	モレッティ『遠読』第10章	ネットワーク理論、プロット分析
第13回	ユートピアと比較文学について（まとめ）	レポート発表と討議・考察
第14回	世界文学とデジタル・ヒューマニティーズ（まとめ）	レポート発表・総評とまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、1回につき4時間以上を標準とする。全体を通して基本文献である **Claeys** のテキストの精読をおこなってこること。
また、その都度のテーマについての文献を読んできて、内容について考えてくることが授業への関心を高め、また積極的に討議に参加できる土台となるので、それをおこなうこと。

【テキスト（教科書）】

テキストは基本的にコピーにて配布する。
グレゴリー・クレイズ『ユートピアの歴史』（東洋書林）
Gregory Claeys の『Searching For Utopia』（London; Thames and Hudson, 2011）
ダムロッシュ『世界文学とは何か？』（国書刊行会）
David Damrosch, 『What is World Literature』（Princeton University Press, Princeton and Oxford, 2003）
フランコ・モレッティ『遠読』
Franco Moretti, 『Distant Reading』（Verso, 2013）
が全体を通しての基本文献である。
言及されるその他の文献については、図書館を利用するなどする。

【参考書】

上記の各回で取り上げるさまざまな文献が参考書であるが、各回でテーマとして取り扱うものに関連したものを積極的に読んでおくこと。

【成績評価の方法と基準】

平常点（レジュメ・プレゼンテーション・議論）70 %
最終回での各人のレポート発表 30 %

【学生の意見等からの気づき】

議論の時間を十分に確保し、活発な議論を促す。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

比較文学、比較芸術、現代ドイツ文学

＜研究テーマ＞

①比較文学という手法を通して文学と現実＝社会との関わりを軸に、文学の意味や意義を考える。②文学以外の諸芸術におけるテーマの扱われ方③ユートピアニズム、科学と文学

＜主要研究業績＞①『英語文化研究』（2021年 春風社、共著）②「監視というオブセッション」（2021年 成城大学経済学会、『木下直也名誉教授退任記念論文集』）③「文学・科学・知の相互浸透——イシグロ、ダウドナ、ソーカルと学問分野の越境」（2020年 法政大学 言語・文化センター編『言語と文化』第17号）④「知の獲得と語りのあて先— Kazuo Ishiguro の Never Let Me Go におけるその手続き—」（2019年 日本英語文化学会編『異文化の諸相』第39号）
⑤翻訳 W. イーザー『虚構と想像力』2007年、法政大学出版局

【Outline (in English)】

【Outline and objectives】 The main aims of this course are to deepen knowledge and understanding of the concept of utopianism and to review the history of utopianism in the world based on Gregory Claeys'『Searching for Utopia. The History of an Idea』and of world literature based on David Damrosch'『What is World Literature』and Franco Moretti's『Distant Reading』.

We will focus on the theoretical foundations and the conceptual framework of utopianism and world literature through the different types of works to provide graduate students with opportunities to treat various types of literature/artworks from the perspective of comparative literature and culture. Graduate Students are required to do a close reading of the textbook.

【Goal】:By the end of the course, students should be able to :

- understand the history of utopianism and the method and concept of world literature studies.
- conduct a critical analysis of the works mentioned in the textbooks.
- express your own point of view clearly in discussion.

【Work to be done outside of class】: Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter(s) from the text. Students are required to study at least 4 hours outside of classroom.

【Grading criteria】: Your overall grade in the class will be decided based on the following

Term-end presentation: 30%、an assignment and in-class contribution: 70%

LNG500B3

言語科学特講Ⅰ A

椎名 美智

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

自分の研究テーマに関連したテキストを正確に読み、かつ批判的読解をし、自分の論文を書きあげることを目指します。

【到達目標】

語用論の基本的な知識を身につけて、自分で分析に使えるようになります。研究論文が執筆できるようになることを到達目標とします。

The goal of this class is to acquire research skills to write a thesis.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的には対面の予定ですが、授業の形態（対面・リモート）に変更がある場合は、毎回 Hoppii で連絡しますので、必ず毎週チェックしてください。テキストを章ごとに読み、ディスカッションしながら、学生のニーズに合わせた内容と速度で進めていきます。リアクションペーパーは毎時間、提出していただきます。授業の初めに、前回の授業に提出されたリアクションペーパーからいくつか取り上げて、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	教員による授業の解説、受講生の研究テーマの発表により今後の発表分担の決定
第 2 回	第一章：イントロダクション	文脈における意味、英語の語用論
第 3 回	第二章：指示語用論（１）： 定表現、ダイクシス	定表現、ダイクシス、前方照応、相互行為における指示表現の使用と理解：担当の受講生による発表とディスカッション
第 4 回	第二章：指示語用論（２）： 前方照応	定表現、ダイクシス、前方照応、相互行為における指示表現の使用と理解：担当の受講生による発表とディスカッション
第 5 回	第二章：指示語用論（３）： 相互行為における指示表現の使用と理解	定表現、ダイクシス、前方照応、相互行為における指示表現の使用と理解：担当の受講生による発表とディスカッション
第 6 回	第三章：情報語用論（１）： 情報語用論、情報基盤	情報語用論、情報基盤、情報的背景、相互好意的側面：担当の受講生による発表とディスカッション
第 7 回	第三章：情報語用論（２）：情報的背景	情報語用論、情報基盤、情報的背景、相互好意的側面：担当の受講生による発表とディスカッション
第 8 回	第三章：情報語用論（３）： 相互好意的側面	情報語用論、情報基盤、情報的背景、相互好意的側面：担当の受講生による発表とディスカッション
第 9 回	第四章：語用論の意味Ⅰ（１）：「言われたこと」以上の意味	「言われたこと」以上の意味、「言われたこと」対「推意とされたこと」、「言われたこと」と「推意とされたこと」：担当の受講生による発表とディスカッション

第 10 回	第四章：語用論の意味Ⅰ（２）：「言われたこと」対「推意とされたこと」	「言われたこと」以上の意味、「言われたこと」対「推意とされたこと」、「言われたこと」と「推意とされたこと」：担当の受講生による発表とディスカッション
第 11 回	第四章：語用論の意味Ⅰ（３）：「言われたこと」と「推意とされたこと」	「言われたこと」以上の意味、「言われたこと」対「推意とされたこと」と「推意とされたこと」：担当の受講生による発表とディスカッション
第 12 回	第五章：語用論の意味Ⅱ（１）：語用論の意味の分析	語用論の意味の分析、誰の意味なのか、意味を理解すること、相互行為の文脈における意味：担当の受講生による発表とディスカッション
第 13 回	第五章：語用論の意味Ⅱ（２）：誰の意味なのか、意味を理解すること、	語用論の意味の分析、誰の意味なのか、意味を理解すること、相互行為の文脈における意味：担当の受講生による発表とディスカッション
第 14 回	第五章：語用論の意味Ⅱ（３）：相互行為の文脈における意味	語用論の意味の分析、誰の意味なのか、意味を理解すること、相互行為の文脈における意味：担当の受講生による発表とディスカッション、これまでの授業のまとめに加え、レポート等、課題に対する講評や解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

セメスターを通じて、以下に留意して授業に臨んでください。

- 1：各自の過去の学術論文、研究のまとめと今後の研究計画を立てる。
- 2：自分の担当した箇所をきちんと読み、プレゼンテーションができるように予習・準備をする。
- 3：自分に必要な参考文献を集めて、読む。
- 4：各自、自分の研究テーマについて中間発表を繰り返しながら、論文完成を目指す。

Students need to read the chapter before and after the class.

【テキスト（教科書）】

ジョナサン・カルペパー、マイケル・ホー（共著）椎名美智監訳『新しい語用論の世界：英語からのアプローチ』研究社

【参考書】

上記以外の文献は、必要に応じて紹介します。

【成績評価の方法と基準】

授業での発表とディスカッションへの参加状況（20%）、提出されたレポート（80%）によって評価します。

The grading includes attendance (20%) and term paper (80%).

【学生の意見等からの気づき】

自分の研究について発表してみんなからフィードバックをもらうことが論文執筆に重要なステップだと認識しているようなので、引き続きこの方法を続けます。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン

【その他の重要事項】

日本語用論学会などの学会への参加をお勧めします。

オフィスアワーは火曜日4限ですが、水曜日の授業後の時間も可能です。論文指導の場合は、事前に原稿を教員に渡しておいてもらえると、効率的なコンサルテーションになると思います。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 語用論、文体論、社会言語学

<研究テーマ> 近代英語の歴史語用論的研究

<主要研究業績>

『「させていただく」の語用論—人はなぜ使いたくなるのか?—』ひつじ書房（2021）

『「させていただく」の使い方—日本語と敬語のゆくえ—』（角川新書）（2022）

【Outline (in English)】

This course deals with pragmatics. Students are expected to find their topics for their theses.

LNG500B3

言語科学特講 I B

椎名 美智

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

自分の論文のテーマに関連したテキストを正確に読み、かつ批判的読解をしながら、自分の論文を完成させることを目標にします。

【到達目標】

語用論の基本的な知識を身につけて、自分で分析に使えるようになります。学期の終わりに研究論文が執筆できる分析力と考察力を身につけます。

The goal is to acquire research skills to write a thesis.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

一章ずつのテキストの講読、論文指導、面談で、論文の執筆を指導していきます。授業の形態（対面。リモート）は HOPPII でお知らせしますので、毎週必ず HOPPII を確認してください。リアクションペーパーは毎時間、提出していただきます。授業の初めに、前回の授業に提出されたリアクションペーパーからいくつか取り上げて、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	担当箇所の決定、論文執筆指導など
2	『「させていただく」の使い方』第一章：新しい敬語表現：街中の言語学的観察	担当の受講生による発表とディスカッション
3	『「させていただく」の使い方』第二章：ブームの到来：「させていただく」の勢力図	担当の受講生による発表とディスカッション
4	『「させていただく」の使い方』第三章：違和感の正体：700 人の意識調査	担当の受講生による発表とディスカッション
5	『「させていただく」の使い方』第四章：拡がる守備範囲	担当の受講生による発表とディスカッション
6	『「させていただく」の使い方』第五章：日本語コミュニケーションのゆくえ	担当の受講生による発表とディスカッション
7	『日本語の大疑問』第一章：どうも気になる最近の日本語	担当の受講生による発表とディスカッション
8	『日本語の大疑問』第二章：過剰が無礼か？敬語と接客言語の謎	担当の受講生による発表とディスカッション
9	『日本語の大疑問』第三章：世界のことばと日本のことば	担当の受講生による発表とディスカッション
10	『日本語の大疑問』第四章：どちらを選ぶ？迷う日本語	担当の受講生による発表とディスカッション

11	『日本語の大疑問』第五章：便利で奇妙な外来語	担当の受講生による発表とディスカッション
12	『日本語の大疑問』第六章：歴史で読み解く日本語のフシギ	担当の受講生による発表とディスカッション
13	修論発表会（1、2 年 生）	担当の受講生による研究論文発表とディスカッション
14	研究発表会と総括	担当の受講生による研究発表とディスカッション、および総括、これまでの授業のまとめに加え、レポート等、課題に対する講評や解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

セメスターを通じて、以下に留意して授業に臨んでください。

- 1：各自の過去の学術論文、研究のまとめと今後の研究計画を立てる。
- 2：自分の担当した箇所をきちんと読み、プレゼンテーションができるように予習・準備をする。
- 3：自分に必要な参考文献を集めて、読む。
- 4：自分の研究テーマについて中間発表を繰り返ししながら、論文完成を目指す。

Students need to read the chapter before and after the class.

【テキスト（教科書）】

ジョナサン・カルペパー、マイケル・ホー（共著）椎名美智監訳『新しい語用論の世界：英語からのアプローチ』研究社の予定

【参考書】

上記以外の文献は、必要に応じて紹介します。

【成績評価の方法と基準】

授業での発表とディスカッションへの参加状況（50 %）、提出されたレポート（50 %）によって評価します。

The grading includes presentation and attendance (50%) and term paper (50%).

【学生の意見等からの気づき】

引き続き、きめ細かい論文指導、面談指導を行います。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン

【その他の重要事項】

日本語用論学会などの学会への参加をお勧めします。オフィスアワーは火曜日 4 限ですが、水曜日の授業後の時間も可能です。論文指導の場合は、事前に原稿を教員に渡しておいてもらえると、効率的なコンサルテーションになると思います。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 語用論、文体論、社会言語学

<研究テーマ> 近代英語の歴史語用論的研究

<主要研究業績>

『「させていただく」の語用論—人はなぜ使いたくなるのか』ひつじ書房、2021 年

『「させていただく」の使い方—日本語と敬語のゆくえ』角川新書、2022 年

【Outline (in English)】

This course deals with pragmatics. Students are expected to find their topics for their theses.

LNG500B3

言語科学特講Ⅲ A

石川 潔

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

音声知覚、特に音素の知覚手がかりを考えます。
音声知覚の研究のための知識を学ぶとともに、論文の書き方の訓練も行います。

【到達目標】

音素の知覚の手がかりに関する先行研究の知識を身につける。
先行研究の報告の仕方一般を身につける。
音素の知覚の手がかりに関して未解決の問題を認識する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示された
どの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針
に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

各自の研究計画の発表、および文献の輪読を行います。
毎回、発表へのフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	授業内容とやり方の説明
第 2 回	研究計画について	各自が予定しているテーマの発表
第 3 回	閉鎖音の知覚 1	閉鎖音であることの知覚手がかり
第 4 回	閉鎖音の知覚 2	閉鎖音の調音点の知覚手がかり
第 5 回	閉鎖音の知覚 3	手がかりの文脈依存性
第 6 回	閉鎖音の知覚 4	調音点の知覚についての諸理論 (不変性の模索)
第 7 回	閉鎖音の知覚 5	閉鎖音の有声性の知覚手がかり
第 8 回	摩擦音・破擦音の知覚 1	摩擦音・破擦音であることの知覚 手がかり
第 9 回	摩擦音・破擦音の知覚 2	摩擦音・破擦音の調音点の知覚手 がかり
第 10 回	摩擦音・破擦音の知覚 3	摩擦音・破擦音の知覚の有声性の 知覚手がかり
第 11 回	鼻音の知覚	鼻音であること及び調音点の知覚 手がかり
第 12 回	半母音の知覚手がかり	半母音であること及び調音点の知 覚手がかり
第 13 回	母音の知覚手がかり	静的・動的手がかり
第 14 回	まとめ	全体のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
テーマ発表の準備をし、また、文献を事前に読んでください。

【テキスト（教科書）】

Lawrence J. Raphael. 2005. Acoustic cues to the perception of segmental phonemes. In David B. Pisoni & Robert E. Remez. eds. *The Handbook of Speech Perception*, Malden, Oxford, and Carlton: Blackwell, pp. 182–206.

【参考書】

適宜、指示。

【成績評価の方法と基準】

参加点 100 %

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

理論言語学（統語論、意味論）、心理言語学（音声知覚、文理解）

<研究テーマ>

音声知覚の単位と様式、アスペクトの実時間処理、読みにおける視覚処理と音韻処理の関係

<主要研究業績>

<http://www.i.hosei.ac.jp/~kiyoshi/research.html>などを参照。

【Outline (in English)】

(Course outline) We study perceptual cues to phonemes.

(Learning Objectives) Acquisition of the knowledge of classical past research and unsolved issues.

(Learning activities outside of classroom) Preparation for presentations.

(Grading Criteria / Policy) Participation (100%).

LNG500B3

言語科学特講Ⅲ B

石川 潔

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

音声知覚、特に聞いた場合の単語認識を考えます。
音声知覚の研究のための知識を学ぶとともに、論文の書き方の訓練も行います。

【到達目標】

単語認識の仕組みの解明の難しさがわかるようになる。
単語認識に関する先行研究の知識を身につける。
先行研究の報告の仕方一般を身につける。
単語認識に関して未解決の問題を認識する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

各自の研究計画の発表、および文献の輪読を行います。
毎回、発表へのフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	word segmentation 及び lexical access がなぜ問題か
第 2 回	研究計画について	各自の研究テーマの発表
第 3 回	様々なモデル（その 1）	Trace、Shortlist
第 4 回	様々なモデル（その 2）	PARSYN、Distributed cohort model
第 5 回	様々なモデル（その 3）	モデル間の比較
第 6 回	様々なモデル（その 4）	追加補足： Merge
第 7 回	経験的な知見（その 1）	activation
第 8 回	経験的な知見（その 2）	competition
第 9 回	学位論文の報告（その 1）	進捗状況の発表（その 1）
第 10 回	Variation（その 1）	個人間および個人内の発音の違いの存在
第 11 回	Variation（その 2）	個人間および個人内の発音の違いへの対応
第 12 回	Variation（その 3）	異音への対応
第 13 回	学位論文の報告（その 2）	進捗状況の発表（その 2）
第 14 回	まとめ	全体のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
テーマ発表の準備をし、また、文献を事前に読んでください。

【テキスト（教科書）】

Paul A. Luce and Coner T. McLennan. 2005. Spoken word recognition: The challenge of variation. In David B. Pisoni & Robert E. Remez. eds. *The Handbook of Speech Perception*, Malden, Oxford, and Carlton: Blackwell, pp. 591–609.

【参考書】

適宜、指示。

【成績評価の方法と基準】

発表点 100 %

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

理論言語学（統語論、意味論）、心理言語学（音声知覚、文理解）

<研究テーマ>

音声知覚の単位と様式、アスペクトの実時間処理、読みにおける視覚処理と音韻処理の関係

<主要研究業績>

<http://www.i.hosei.ac.jp/~kiyoshi/research.html> などを参照。

【Outline (in English)】

(Course outline) We will study how words in spoken language are recognized.

(Learning Objectives) To understand why spoken word recognition is an issue and to acquire knowledge of past research and unsolved issues.

(Learning activities outside of classroom) Preparation for presentations.

(Grading Criteria /Policy) Participation (100%)

LNG500B3

言語科学特講Ⅴ A

ブライアン・ウィスナー

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

This course examines key concepts in second language (L2) acquisition theory, research, and pedagogy. Students examine and classify theories of L2 learning and apply the findings to the development of principled approaches to L2 pedagogy.

<講義題目>

第二言語習得 Second Language Acquisition

【到達目標】

Upon successful completion of this course, students are expected to be able to do the following:

1. Explain the core issues in L2 acquisition research
2. Examine the connection between L2 research and pedagogy
3. Conduct research on instructed L2 learning, and relate the findings to L2 learning and teaching in Japan

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

Most classes will consist of group discussions, presentations, and lectures on topics in L2 acquisition and pedagogy. Students then apply this knowledge by conducting research, presenting findings, and discussing these topics. Feedback will be given after each presentation.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	Introduction to the course	Presentation of key concepts in second language acquisition and teaching
第 2 回	First language acquisition	How do people learn an L1?
第 3 回	Second language acquisition	How do adults learn an L2?
第 4 回	Age and L2 acquisition	How does age affect L2 acquisition?
第 5 回	Interaction in L2 classrooms	Does interaction lead to L2 acquisition?
第 6 回	Focus on form	Attending to meaning and form in L2 learning
第 7 回	Acquisition of L2 grammar	How is L2 grammar acquired?
第 8 回	Acquisition of L2 vocabulary	Issues related to L2 vocabulary acquisition
第 9 回	Contexts of instructed second language acquisition	In what ways does the linguistic environment influence L2 acquisition?
第 10 回	Foreign language aptitude	Does language aptitude influence L2 learning?
第 11 回	Motivation	To what extent does motivation affect L2 learning?
第 12 回	Affect and other individual differences	What other variables play a role in L2 learning?
第 13 回	Research presentations	Research project presentations
第 14 回	Feedback on research presentations and final exam	Discussion of and feedback on students' research projects and final exam

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

Students should complete reading assignments before the class in which they are discussed. Presentations should be prepared outside of class—this entails meeting and coordinating with your group members.

【テキスト（教科書）】

There is no required textbook for this course.

【参考書】

Patsy M. Lightbown, and Nina Spada. (2013). *How languages are learned*. Oxford University Press.
 Shawn Loewen. (2015). *Introduction to instructed second language acquisition*. Routledge.
 Lourdes Ortega. (2009). *Understanding second language acquisition*. Hodder Education.

Rod Ellis. (2008). *The study of second language acquisition* (2nd edition). Oxford University Press.

H. Douglas Brown. (2007). *Teaching by principles: An interactive approach to language pedagogy* (3rd edition). Longman.

H. Douglas Brown. (2006). *Principles of language learning and teaching* (5th edition). Longman.

Publication Manual of the American Psychological Association (APA Manual)

【成績評価の方法と基準】

In-class presentations: 25%

Written report: 25%

Research proposal: 25%

Final Exam: 25%

Students will be evaluated based on in-class presentations related to the content covered in class and their performance on writing assignments and a final exam. Highly evaluated presentations and reports demonstrate synthesis of the course content and follow academic presentation and writing conventions. Details will be given in class. Students are expected to attend every class. A grade of "E" will be given for missing an assignment (i.e., presentation, report, or test) or for being absent from four or more classes.

【学生の意見等からの気づき】

Not applicable.

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 第二言語習得・英語教育学

<研究テーマ> 第二言語習得におけるメタ言語的知識の役割、言語テストの妥当性

<主要研究業績>

・『MY WAY: English Communication I』 共著 2013 年 3 月 三省堂

・『MY WAY: English Expression I』 共著 2013 年 3 月 三省堂

・『英語教育学の実証的研究法入門』 共著 2012 年 8 月 研究社

【Outline (in English)】

This course examines key concepts in second language (L2) acquisition theory, research, and pedagogy.

Upon successful completion of this course, students are expected to be able to do the following:

1. Explain the core issues in L2 acquisition research
2. Examine the connection between L2 research and pedagogy
3. Conduct research on instructed L2 learning, and relate the findings to L2 learning and teaching in Japan

Students should complete reading assignments before the class in which they are discussed. Presentations should be prepared outside of class—this entails meeting and coordinating with your group members.

Final grades will be calculated based on the following:

In-class presentations: 25%

Written report: 25%

Research proposal: 25%

Final exam: 25%

LIN600B3

英語学特殊研究第一（英文法・文体論・語用論）A

椎名 美智

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

英語学特殊研究で学ぶのは、基本的には書かれたテキスト分析の方法です。書かれた言葉であれ、話された言葉であれ、それを一つのテキストとみなし、そのスタイルを、英文法、文体論、語用論の観点から分析する訓練をします。春学期は談話分析の領域を概観します。それを出発点として、狭い意味での言語的構築物のみならず、広い意味での言語活動、コミュニケーション全体を射程に入れて、一つのテキスト分析の方法を確認していきます。

【到達目標】

この授業は英語学の諸分野の内、テキスト分析に関わる基本的なトピックを扱った論文を読み、英語学の研究方法を身につけるとともに、自分が扱う言語学の課題を検討し、論文を執筆する応用力をつけることを目的とします。学生は、英語学の課題、問いの立て方、それを追求していく視点を獲得します。

The goal of this class is to read the chapter before and after the class.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業の形態は HOPPII で連絡します。担当を決めるので、履修予定の学生は、必ず初回に出席してください。状況によって zoom と対面授業をします。HOPPII の「教材」のところで連絡をしますので、毎週必ず見てください。

テキストは担当者を決めて、発表してもらいます。その後で、みんなでコメントを交換し、ディスカッションをします。リアクションペーパーは毎時間、提出していただきます。授業の初めに、前回の授業に提出されたリアクションペーパーからいくつか取り上げて、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	「語用論」とは何か？
第 2 回	序：談話分析のアプローチ	文脈における意味、英語の語用論：担当学生のプレゼンテーションと議論
第 3 回	第 1 章：意味の表現と理解の原理 (1): 1 節：意図表現と解釈	担当学生のプレゼンテーションと議論
第 4 回	第 1 章：意味の表現と理解の原理 (2): 2 節：分野区情報と意味	担当学生のプレゼンテーションと議論
第 5 回	第二章：会話における言語使用のメカニズム 1 節：会話の構造	担当学生のプレゼンテーションと議論
第 6 回	第二章：会話における言語使用のメカニズム 2 節：会話のストラテジー	担当学生のプレゼンテーションと議論
第 7 回	第三章：言語形式の機能 1 節：テキストと情報	担当学生のプレゼンテーションと議論
第 8 回	第三章：言語形式の機能 1 節：言語機能と文法	担当学生のプレゼンテーションと議論

第 9 回	第四章：言語使用の社会・文化的側面 1 節：言語と文化	担当学生のプレゼンテーションと議論
第 10 回	第四章：言語使用の社会・文化的側面 2 節：相互行為の理論	担当学生のプレゼンテーションと議論
第 11 回	第四章：言語使用の社会・文化的側面 3 節：相互行為の分析	担当学生のプレゼンテーションと議論
第 12 回	第四章：言語使用の社会・文化的側面 4 節：相互行為と社会的真理	担当学生のプレゼンテーションと議論
第 13 回	第四章：言語使用の社会・文化的側面 5 節：言語と社会的権力	担当学生のプレゼンテーションと議論
第 14 回	談話分析のアプローチのまとめ	総括とまとめ、論文執筆の指導など

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

予習・復習については各 2 時間を標準とします。担当者でなくても、かならずテキストを読んで予習をしてきてください。

【テキスト（教科書）】

林卓男編著 (2008)『談話分析のアプローチ：理論と実践』（研究社）

【参考書】

適宜、指示します。

【成績評価の方法と基準】

レポート (50 %) に加え、授業中の参加の度合、貢献度 (50 %) を考慮し、総合的に判断します。

Grading includes attendance and presentation (50%) and term paper (50%).

【学生の意見等からの気づき】

面談が評判がよいので、指導は授業と面談とのコンビネーションで進めていきます。

【学生が準備すべき機器他】

特にありません。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>語用論、文体論、コミュニケーション論

<研究テーマ>英語の呼称について、日本語のベネファクティブとポライトネスについて

<主要研究業績> 『「させていただく」の語用論』 2021, ひつじ書房、『「させていただく」の使い方』 2022, 角川新書、KADOKAWA.

【Outline (in English)】

The purpose of this course is to gain an overview of pragmatics and discourse analysis so that students can apply the methodologies and theories that are needed in their own research.

LIN600B3

英語学特殊研究第一（英文法・文体論・語用論）B

椎名 美智

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

英語学特殊研究で学ぶのは、基本的には書かれたテキスト分析の方法である。書かれた言葉であれ、話された言葉であれ、それの一つのテキストとみなし、その語用論の意味を、英文法、文体論、語用論の観点から分析する訓練をします。狭い意味での言語的構築物のみならず、広い意味での言語活動、コミュニケーション全体を射程に入れて、一つ一つのテキスト分析の方法を確認していきます。

【到達目標】

この授業は英語学の諸分野の内、テキスト分析に関わる基本的なトピックを扱った論文を読み、英語学の研究方法を身につけるとともに、自分が扱う英語学の課題を検討し、論文を執筆する応用力をつけることを目的とします。学生には、英語学の課題、問いの立て方、それを追求していく視点を獲得してもらうことをめざします。

The goal of this class is to acquire the research methodology for one's own research.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

コロナ禍の状況により授業の形態は変わるので、毎回 HOPPII でお知らせしますので、毎週必ずチェックしてください。担当者がテキストについて発表し、その後、みんなでコメントを交わしてディスカッションをします。秋セメスターは基本的にリモート授業ですが、コロナの感染状況によって大学の基準が変更する場合は、授業形式も変更になります。その場合は、HOPPII でお知らせします。大学の HP も定期的に見ておいて下さい。

リアクションペーパーは毎時間、提出していただきます。授業の初めに、前回の授業に提出されたリアクションペーパーからいくつか取り上げて、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	担当箇所の決定、論文執筆指導など
第 2 回	『「させていただく」の使い方』第一章：新しい敬語表現：街中の言語学的観察	担当学生の発表とディスカッション
第 3 回	『「させていただく」の使い方』第二章：ブームの到来：「させていただく」の勢力図	担当学生の発表とディスカッション
第 4 回	『「させていただく」の使い方』第三章：違和感の正体：700人の意識調査	担当学生の発表とディスカッション
第 5 回	『「させていただく」の使い方』第四章：拡がる守備範囲	担当学生の発表とディスカッション
第 6 回	『「させていただく」の使い方』第五章：日本語コミュニケーションのゆくえ	担当学生の発表とディスカッション

第 7 回	『日本語の大疑問』第一章：どうも気になる最近の日本語	担当学生の発表とディスカッション
第 8 回	『日本語の大疑問』第二章：過剰か無礼か？敬語と接客言葉の謎	担当学生の発表とディスカッション
第 9 回	『日本語の大疑問』第三章：世界のことばと日本のことば	担当学生の発表とディスカッション
第 10 回	『日本語の大疑問』第四章：どちらを選ぶ？迷う日本語	担当学生の発表とディスカッション
第 11 回	『日本語の大疑問』第五章：便利で奇妙な外来語	担当学生の発表とディスカッション
第 12 回	『日本語の大疑問』第六章：歴史で読み解く日本語のフシギ	担当学生の発表とディスカッション
第 13 回	修論発表会（2年生）	学生の修論発表会とディスカッション
第 14 回	修論の執筆計画（1年生）と総括	学生の修論発表会とディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

予習・復習については各 2 時間を標準とします。担当者もそれ以外の人も、全員、テキストを読んで予習をして来てください。

【テキスト（教科書）】

椎名美智（2022）『「させていただく」の使い方—日本語と敬語のゆくえ』（角川新書）KADOKAWA, 国立国語研究所（編）（2021）『日本語の大疑問—眠れなくなるほど面白いことばの世界』（幻冬舎新書）幻冬舎

【参考書】

適宜指示します。

【成績評価の方法と基準】

レポート（50％）に加え、授業中の参加の度合、貢献度（50％）を考慮し、総合的に判断します。

The grading includes presentation and attendance (50%) and term paper (50%).

【学生の意見等からの気づき】

面談が指導に有効で良かったと言われているので、授業に並行して、定期的に面談を行い、一人一人の論文作成を進めていきます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>語用論、文体論、コミュニケーション論

<研究テーマ>英語の呼称問題、日本語のベネファクティブとポラリティネス

<主要研究業績> 『「させていただく」の語用論』2021, ひつじ書房, 『「させていただく」の使い方』2022, 角川新書, KADOKAWA.

【Outline (in English)】

The purpose of this course is to gain an overview of pragmatics and discourse analysis so that students can apply the methodologies and theories that are needed in their own research.

LIN500B3

言語科学特講Ⅱ A

福元 広二

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

英語がどのようにして世界中で使用されるようになり、世界共通語となってきたかを解説する。また、英語の歴史を学ぶことで、現代の英語に対してさらに理解を深めることを主な目的としている。

【到達目標】

古英語から現代英語までの文法変化について説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は、基本的に教科書に沿って進めていきます。教科書の中で、学生は自分に関心のある章を選び、その内容について発表していく形式です。また、英語で書かれた論文などをわかりやすく発表してもらいます。

リアクションペーパー等における良いコメントは授業内で紹介し、さらなる議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業内容の紹介
第 2 回	Chapter 1 Introductory	統語論の説明と歴史的データ
第 3 回	Chapter 1 Introductory (1)	インド・ヨーロッパ祖語、ゲルマン祖語
第 4 回	Chapter 2 Old English (1)	古英語の時代背景
第 5 回	Chapter 2 Old English (2)	古英語の文法
第 6 回	Chapter 2 Old English (3)	古英語の語彙
第 7 回	Chapter 3 The Vikings in England	バイキングの影響
第 8 回	Chapter 4 The Norman Conquest (1)	フランスの影響
第 9 回	Chapter 4 The Norman Conquest (2)	フランス語借用語
第 10 回	Chapter 5 Middle English (1)	中英語の時代背景
第 11 回	Chapter 5 Middle English (2)	中英語の文法
第 12 回	プレゼンテーション (1)	論文紹介 (1)
第 13 回	プレゼンテーション (2)	論文紹介 (2)
第 14 回	春学期のまとめ	補足とまとめを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に教科書を読んで、予習をしてください。
本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

Charles Barber The History of English (英宝社)

【参考書】

適宜指示します。

【成績評価の方法と基準】

平常点とレポートで総合的に評価します。(平常点 30 点、レポート 70 点)

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

英語学・英語史

＜研究テーマ＞

初期近代英語期の文法

＜主要研究業績＞

「第 6 章 Shakespeare の英語」

『英語教師のための英語史』

開拓社 (2018)

【Outline (in English)】

The purpose of this course is to introduce the major changes in English grammar from Old English to Present-day English.

The goal of this course is to give students the basic knowledge necessary to understand the history of the English language.

Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.

Final grades will be calculated according to the following process:

Mid-term report (70%) and in-class contribution (30%)

LIN500B3

言語科学特講Ⅱ B

福元 広二

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

英語がどのようにして世界中で使用されるようになり、世界共通語となってきたかを解説する。また、英語の歴史を学ぶことで、現代の英語に対してさらに理解を深めることを主な目的としている。

【到達目標】

古英語から現代英語における文法変化について説明できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は、基本的に教科書に沿って進めていきます。教科書の中で、学生は自分に興味のある章を選び、その内容について発表していく形式です。また、英語で書かれた論文などをわかりやすく発表してもらいます。

リアクションペーパー等における良いコメントは授業内で紹介し、さらなる議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業の概要説明
第 2 回	Chapter 6 Early modern English (1)	初期近代英語の時代背景
第 3 回	Chapter 6 Early modern English (2)	初期近代英語の文法
第 4 回	Chapter 6 Early modern English (3)	初期近代英語の借用語
第 5 回	Chapter 7 English in the Scientific Age (1)	後期近代英語の時代背景
第 6 回	Chapter 7 English in the Scientific Age (2)	後期近代英語の文法
第 7 回	Chapter 7 English in the Scientific Age (3)	後期近代英語の借用語
第 8 回	Chapter 8 English as a World Language (1)	アメリカ英語
第 9 回	Chapter 8 English as a World Language (2)	標準英語
第 10 回	Chapter 9 English Today and Tomorrow (1)	英語の方言
第 11 回	Chapter 9 English Today and Tomorrow (2)	現在起きている変化
第 12 回	プレゼンテーション (1)	論文紹介 (1)
第 13 回	プレゼンテーション (2)	論文紹介 (2)
第 14 回	秋学期のまとめ	補足とまとめを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に教科書を読んで、予習をしてください。本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

Charles Barber (1978) The History of English 英宝社

【参考書】

適宜指示します。

【成績評価の方法と基準】

平常点とレポートで総合的に評価します。（平常点 30 点、レポート 70 点）

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

英語学・英語史

<研究テーマ>

初期近代英語期の文法

<主要研究業績>

「第 6 章 Shakespeare の英語」

『英語教師のための英語史』

開拓社 (2018)

【Outline (in English)】

The purpose of this course is to introduce the major changes in English grammar from Old English to Present-day English.

The goal of this course is to give students the basic knowledge necessary to understand the history of the English language.

Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.

Final grades will be calculated according to the following process:

Mid-term report (70%) and in-class contribution (30%)

LIT500B3

英米文学特講 I A

小島 尚人

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

テーマ：

アメリカ小説と個人・地域・国家

概要と目的：

本授業は、小説（novel）の歴史を背景として、アメリカ小説の展開に大きく関わる作家の作品を読んでいくものである。春学期は、南北戦争後のリアリズム小説の一大潮流をなした「ローカル・カラー文学」を取り上げ、その歴史的・文学史的位置づけを検討するとともに、代表的諸作品を読み解く。作家や作品の個性とアメリカ小説の歴史的展開との双方を視野に入れながら作品を検討することを通じて、地域、国家、ジェンダー、人種など多様な観点からのローカル・カラー文学研究の可能性をさぐる。

【到達目標】

- ・作品の細部に目を配り、正確に意味をとって読解しようとする習慣をつける。
- ・他者の考えに耳を傾けて理解し、建設的なやり方で応答することができる。
- ・自分の考えを分かりやすく効果的に伝えることができる。
- ・自分の解釈を論理的に記述することができる。
- ・多様な批評の方法についての知識を得て、関心を持つ。
- ・小説の歴史と諸理論の概要について理解する。
- ・修士課程の学生に対して指導的な役割を演じられる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講者は毎週予習として作品または批評を読み、発言できるよう準備をした上で授業に臨む。授業は演習形式で進め、毎回発表担当者がハンドアウトを作成してプレゼンテーションをおこない、担当コメンテーターによるコメント・質問、そして全体でのディスカッションをする。適宜教員による補足説明がなされる。発表担当者は、担当範囲の内容を要約したうえで、重要と思われる箇所をいくつか引用して分析し、ディスカッションのためのトピックを提示する。発表に対しては授業内で口頭によるレスポンスがなされ、レポートに対してはフィードバックのコメントをつけたファイルが返却される。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業の内容と進め方の説明、受講者の自己紹介
第 2 回	小説と近代ナショナルイズム	Benedict Anderson, <i>Imagined Communities</i>
第 3 回	地方、国家、帝国主義	Amy Kaplan, "Nation, Region, and Empire"; Jennifer Rae Greeson, <i>Our South: Geographic Fantasy and the Rise of National Literature</i>
第 4 回	ローカル・カラー文学勃興の歴史的背景	Richard Brodhead, "American Literary Field, 1860-1890"
第 5 回	地域、ジェンダー、人種	Judith Fetterley and Marjorie Pryse, <i>Writing out of Place</i> ; Walter Benn Michaels, "Local Colors"
第 6 回	代表的作品を読む——ニュー・イングランド	Sarah Orne Jewett と Mary E. Wilkins Freeman

第 7 回	代表的作品を読む——西部	Bret Harte と Mark Twain
第 8 回	代表的短篇を読む——南部①	Charles Chesnutt, <i>The Conjure Woman</i> 前半
第 9 回	代表的短篇を読む——南部②	Charles Chesnutt, <i>The Conjure Woman</i> 後半
第 10 回	批評文献の読解①	近年の代表的研究を検討
第 11 回	ローカル・カラーその後①	Edith Wharton, <i>Ethan Frome</i> 前半
第 12 回	ローカル・カラーその後②	Edith Wharton, <i>Ethan Frome</i> 後半
第 13 回	批評文献の読解②	近年の代表的研究を検討
第 14 回	学期のまとめ	期末レポートの構想を発表し、議論する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回事前に課題（作品または批評）を読んで、ディスカッションに積極的に参加できるように準備する。面白かった点、考察したい点、質問したい点、気になった表現などについてメモをとっておく。分からない用語や固有名詞はできるだけ自分で調べる。（8～10 時間）

【テキスト（教科書）】

- ① Charles W. Chesnutt, *The Conjure Woman and Other Conjure Tales* (Duke UP, 1993). ISBN: 978-0822313878.
- ② Edith Wharton, *Ethan Frome* (Norton, 1995). ISBN: 978-0393966350.

【参考書】

小説の理論と歴史

Michael McKeon, ed., *Theory of the Novel: A Historical Approach* (Johns Hopkins UP, 2000)

Dorothy J. Hale, ed., *The Novel: An Anthology of Criticism and Theory, 1900-2000* (Blackwell, 2006)

Franco Moretti, ed., *The Novel: History, Geography, and Culture* (Princeton UP, 2006)

Franco Moretti, ed., *The Novel: Forms and Themes* (Princeton UP, 2006)

Thomas G. Pavel, *The Lives of the Novel: A History* (Princeton UP, 2013)

Deidre Lynch and William B. Warner, eds. *Cultural Institutions of the Novel* (Duke UP, 1996)

Nancy Armstrong, *How Novels Think: The Limits of Individualism from 1719 - 1900* (Columbia UP, 2005)

アメリカ小説論・アメリカ小説史

Leonard Cassuto, Clare Virginia Eby, and Benjamin Reiss, eds., *The Cambridge History of the American Novel* (Cambridge UP, 2011)

Alfred Bendixen, *A Companion to the American Novel* (Blackwell, 2012)

Lawrence Buell, *The Dream of the Great American Novel* (Harvard UP, 2014)

Paul Giles, *The Global Remapping of American Literature* (Princeton UP, 2011)

Leslie A. Fiedler, *Love and Death in the American Novel* (Stain and Day, 1960; 1966)

Richard Chase, *The American Novel and Its Tradition* (Johns Hopkins UP, 1957)

平石貴樹『アメリカ文学史』（松柏社、2010 年）

【成績評価の方法と基準】

- ・授業への貢献度（ちゃんと予習ができていないか、討議に積極的に参加しているか）：30 %
- ・プレゼンテーション（担当箇所の内容を正確に把握できているか、引用箇所の分析がよくできているか、討議のための主題を提示できているか）：30 %
- ・期末レポート（自分の解釈を提示し、リサーチにもとづいて、適切な箇所を引用しながらその解釈の妥当性を論証する）：40 %

【学生の意見等からの気づき】

批評については、受講者各自の研究の興味関心に応じて読む文献を調整する。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞アメリカ文学

＜研究テーマ＞南北戦争後の小説とナショナル・アイデンティティ、小説の歴史と理論

＜主要研究業績＞

- ①「"My Beth"—— *Little Women* におけるベスの病とジョーのキャリア」『英文學誌』（2021 年）
- ②「Transbellum とは何か、あるいは作者の不死について——アメリカ文学研究の Temporal Turn とその帰結」『英文學誌』（2020 年）
- ③「ギルバート・オズモンドはどこ出身か—— *The Portrait of a Lady* と南北和解のナラティブ」『英文學誌』（2018 年）

【Outline (in English)】

This class is a seminar on American fiction. The course begins with a historical and theoretical survey of the novel genre, framing the questions of what the novel *is* and what the novel *does*, as well as what is “American” in the American novel. Through the close reading of some of major works of what is called “local color” fiction, students develop their skills to analyze literary texts in a critical way with focus both on their individuality and historicity. Most classes consist of presentations by students, class discussions, and lectures.

Grades will be determined based on the following:

- 1) Participation and discussion (30%)
- 2) Presentations (30%)
- 2) Final paper (40%)

LIT500B3

英米文学特講 I B

小島 尚人

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

テーマ：

アメリカ小説と個人・地域・国家

概要と目的：

本授業は、小説（novel）の歴史を背景として、アメリカ小説の展開に大きく関わる作家の作品を読んでいくものである。秋学期は、ヨーロッパとアメリカの狭間で揺れ動く人物たちの姿を緻密に描き出すことを通じて小説ジャンルの革新者となった Henry James に焦点を絞り、「国際テーマ」の作家として知られるジェイムズの作品とローカル・カラー文学との関係をさぐる。「国際テーマ」の代表的短篇を二作品読んだのち、ボストンとニューヨークという二都市を舞台に当時の女性解放運動にかかわる人々を描いた中期の長篇 *The Bostonians* (1886) を読み解く。

【到達目標】

- ・作品の細部に目を配り、正確に意味をとって読解しようとする習慣をつける。
- ・他者の考えに耳を傾けて理解し、建設的なやり方で応答することができる。
- ・自分の考えを分かりやすく効果的に伝えることができる。
- ・自分の解釈を論理的に記述することができる。
- ・多様な批評の方法についての知識を得て、関心を持つ。
- ・小説の歴史と諸理論の概要について理解する。
- ・修士課程の学生に対して指導的な役割を演じられる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講者は毎週予習として作品または批評を読み、発言できるよう準備をした上で授業に臨む。授業は演習形式で進め、毎回発表担当者がハンドアウトを作成してプレゼンテーションをおこない、担当コメンテーターによるコメント・質問、そして全体でのディスカッションをする。適宜教員による補足説明がなされる。発表担当者は、担当範囲の内容を要約したうえで、重要と思われる箇所をいくつか引用して分析し、ディスカッションのためのトピックを提示する。発表に対しては授業内で口頭によるレスポンスがなされ、レポートに対してはフィードバックのコメントをつけたファイルが返却される。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	Henry James の「国際テーマ」とローカル・カラー文学の関係
第 2 回	研究中間報告	受講者が各自の研究テーマを紹介し、研究の進捗を報告する
第 3 回	アメリカからヨーロッパへ	“Daisy Miller”(1878)
第 4 回	ヨーロッパからアメリカへ	“Pandora”(1884)
第 5 回	<i>The Bostonians</i> 読解 ①	Chapters 1-12
第 6 回	<i>The Bostonians</i> 読解 ②	Chapters 13-20
第 7 回	<i>The Bostonians</i> 読解 ③	Chapters 21-26
第 8 回	<i>The Bostonians</i> 読解 ④	Chapters 27-34

第9回 *The Bostonians* 読解 Chapters 35-38

⑤

第10回 *The Bostonians* 読解 Chapters 39-42

⑥

第11回 批評文献の読解① ジェンダーとセクシュアリティ

第12回 批評文献の読解② 南北戦争の記憶

第13回 批評文献の読解③ 近年の代表的研究

第14回 学期のまとめ 期末レポートの構想を発表し、議論する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回事前に課題（作品または批評）を読んで、ディスカッションに積極的に参加できるように準備する。面白かった点、考察したい点、質問したい点、気になった表現などについてメモをとっておく。分からない用語や固有名詞はできるだけ自分で調べる。（8～10 時間）

【テキスト（教科書）】

Henry James, *The Bostonians* (Penguin Classics, 2000). ISBN: 978-0140437669

【参考書】

小説の理論と歴史

Michael McKeon, ed., *Theory of the Novel: A Historical Approach* (Johns Hopkins UP, 2000)

Dorothy J. Hale, ed., *The Novel: An Anthology of Criticism and Theory, 1900-2000* (Blackwell, 2006)

Franco Moretti, ed., *The Novel: History, Geography, and Culture* (Princeton UP, 2006)

Franco Moretti, ed., *The Novel: Forms and Themes* (Princeton UP, 2006)

Thomas G. Pavel, *The Lives of the Novel: A History* (Princeton UP, 2013)

Deidre Lynch and William B. Warner, eds. *Cultural Institutions of the Novel* (Duke UP, 1996)

Nancy Armstrong, *How Novels Think: The Limits of Individualism from 1719 - 1900* (Columbia UP, 2005)

アメリカ小説論・アメリカ小説史

Leonard Cassuto, Clare Virginia Eby, and Benjamin Reiss, eds., *The Cambridge History of the American Novel* (Cambridge UP, 2011)

Alfred Bendixen, *A Companion to the American Novel* (Blackwell, 2012)

Lawrence Buell, *The Dream of the Great American Novel* (Harvard UP, 2014)

Paul Giles, *The Global Remapping of American Literature* (Princeton UP, 2011)

Leslie A. Fiedler, *Love and Death in the American Novel* (Stain and Day, 1960; 1966)

Richard Chase, *The American Novel and Its Tradition* (Johns Hopkins UP, 1957)

平石貴樹『アメリカ文学史』（松柏社、2010 年）

【成績評価の方法と基準】

・授業への貢献度（ちゃんと予習ができているか、討議に積極的に参加しているか）：30 %

・プレゼンテーション（担当箇所の内容を正確に把握できているか、引用箇所の分析がよくできているか、討議のための主題を提示できているか）：30 %

・期末レポート（自分の解釈を提示し、リサーチにもとづいて、適切な箇所を引用しながらその解釈の妥当性を論証する）：40 %

【学生の意見等からの気づき】

批評については、受講者各自の研究の興味関心に応じて読む文献を調整する。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞アメリカ文学

＜研究テーマ＞南北戦争後の小説とナショナル・アイデンティティ、小説の歴史と理論

＜主要研究業績＞

①「"My Beth"—*Little Women* におけるベスの病とジョーのキャリア」『英文学誌』（2021 年）

②「Transbellum とは何か、あるいは作者の不死について——アメリカ文学研究の Temporal Turn とその帰結」『英文学誌』（2020 年）

③「ギルバート・オズモンドはどこ出身か——*The Portrait of a Lady* と南北和解のナラティブ」『英文学誌』（2018 年）

【Outline (in English)】

This class is a seminar on the American novel. The course begins with a historical and theoretical survey of the novel genre, framing the questions of what the novel *is* and what the novel *does*, as well as what is “American” in the American novel. In the second half of the semester, through the close reading of Henry James’s *The Bostonians* (1886), students develop their skills to analyze literary texts in a critical way with focus both on their individuality and historicity. Most classes consist of presentations by students, class discussions, and lectures.

Grades will be determined based on the following:

1) Participation and discussion (30%)

2) Presentations (30%)

2) Final paper (40%)

LIT700B3

英米文学特殊演習 I A

丹治 愛

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業の目的は、博士論文の執筆のために必要な知識とスキルを獲得することである。

【到達目標】

- ①博士論文の完成に向けて研究テーマや執筆計画を明確にする。
- ②関連する文献を批判的に読み、自分なりの（独創的な）解釈を発見する。
- ③その解釈の妥当性を論理的に証明するスキルと文章力を習得する。
- ④他人の研究発表や論文について建設的な論評をする力を習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・演習形式でテキストを精読し、学生個人個人がその作品のなかにある主題を発見し、相互に解釈を発表しあいながら、作品への理解を深めていく。
- ・そのうえで 4000 字程度の期末レポートを書く。
- ・予習は必須。欠席の場合も、かならず毎週の課題を提出すること。良いコメントは授業内で紹介し、さらなる議論に活かす。
- ・提出されたレポートについてはルーブリックで講評する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	本年度の研究計画、主題を決定	博士論文の構想を明らかにし、本年度の主題を決定する。
第 2 回	論文執筆にむけた作品の読解（1）	主題と関連する作品の第一部を精読し、その重要箇所についてディスカッション
第 3 回	論文執筆にむけた作品の読解（2）	主題と関連する作品の第二部を精読し、その重要箇所についてディスカッション
第 4 回	論文執筆にむけた作品の読解（3）	主題と関連する作品の第三部を精読し、その重要箇所についてディスカッション
第 5 回	論文執筆にむけた作品の読解（4）	主題と関連する作品の第四部を精読し、その重要箇所についてディスカッション
第 6 回	論文執筆にむけた作品の読解（5）	主題と関連する作品の第五部を精読し、その重要箇所についてディスカッション
第 7 回	論文執筆にむけたリサーチ（1）	主題と関連する先行研究（作家関連）についてリサーチし、その結果についてディスカッション
第 8 回	論文執筆にむけたリサーチ（2）	主題と関連する先行研究（歴史関連）についてリサーチし、その結果についてディスカッション
第 9 回	論文執筆にむけたリサーチ（3）	主題と関連する先行研究（作品関連）についてリサーチし、その結果についてディスカッション
第 10 回	論文執筆にむけたリサーチ（4）	主題と関連する先行研究（思想関連）についてリサーチし、その結果についてディスカッション
第 11 回	論文第一ドラフトの執筆と検討	作品研究の第一段階ドラフトを読みあわせ、問題点を指摘する。文章については教員が個人指導。

第 12 回	論文第二ドラフトの執筆と検討	第二段階ドラフトを読みあわせ、問題点を指摘する。文章についても指導。
第 13 回	論文の執筆と修正 1	前回までの指摘を踏まえて修正・加筆された原稿を読みあわせ、論評する。
第 14 回	論文の完成にむけての調整	論文に修正を加え完成させる。最終的なチェックは教員による個人指導。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

必要な文献を読み、発表の準備を計画的に進める。
論文のドラフトを書けるところまで書く。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

Evelyn Waugh, *Brideshead Revisited* (Penguin Modern Classics)

【参考書】

なし。先行研究等、読むべき文献は授業中に紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（プレゼンテーションとディスカッション） 50 %
期末レポート 50 %

【学生の意見等からの気づき】

双方向的な授業を心がける。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

イギリス文学

<研究テーマ>

19 世紀後半から 20 世紀前半にかけてのイギリス文学および文化

【Outline (in English)】

The aim of this class is to acquire various knowledge and skills necessary to write a dissertation.

Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

Grading Criteria/Policies: Your overall grade in the class will be decided based on the following: in-class contribution (50%), final report (50%).

LIT700B3

英米文学特殊演習 I B

丹治 愛

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業の目的は、博士論文の執筆のために必要な知識とスキルを獲得することである。

【到達目標】

- ①博士論文の完成に向けて研究テーマや執筆計画を明確にする。
- ②関連する文献を批判的に読み、自分なりの（独創的な）解釈を発見する。
- ③その解釈の妥当性を論理的に証明するスキルと文章力を習得する。
- ④他人の研究発表や論文について建設的な論評をする力を習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・演習形式でテキストを精読し、学生個人個人がその作品のなかにある主題を発見し、相互に解釈を発表しあいながら、作品への理解を深めていく。
- ・そのうえで 4000 字程度の期末レポートを書く。
- ・予習は必須。欠席の場合も、かならず毎週の課題を提出すること。良いコメントは授業内で紹介し、さらなる議論に活かす。
- ・提出されたレポートについてはルーブリックで講評する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	本年度秋学期の研究計画、主題を確認	夏期休暇中の研究の進捗状況を報告し、後期の具体的な研究計画を確認する。
第 2 回	論文執筆にむけた作品の読解（1）	主題と関連する作品の第一部を精読し、その重要箇所についてディスカッション
第 3 回	論文執筆にむけた作品の読解（2）	主題と関連する作品の第二部を精読し、その重要箇所についてディスカッション
第 4 回	論文執筆にむけた作品の読解（3）	主題と関連する作品の第三部を精読し、その重要箇所についてディスカッション
第 5 回	論文執筆にむけた作品の読解（4）	主題と関連する作品の第四部を精読し、その重要箇所についてディスカッション
第 6 回	論文執筆にむけた作品の読解（5）	主題と関連する作品の第五部を精読し、その重要箇所についてディスカッション
第 7 回	論文執筆にむけたりサーチ（1）	主題と関連する先行研究（作家関連）についてリサーチし、その結果についてディスカッション
第 8 回	論文執筆にむけたりサーチ（2）	主題と関連する先行研究（歴史関連）についてリサーチし、その結果についてディスカッション
第 9 回	論文執筆にむけたりサーチ（3）	主題と関連する先行研究（作品関連）についてリサーチし、その結果についてディスカッション
第 10 回	論文執筆にむけたりサーチ（4）	主題と関連する先行研究（思想関連）についてリサーチし、その結果についてディスカッション
第 11 回	論文第一ドラフトの執筆と検討	作品研究の第一段階ドラフトを読みあわせ、問題点を指摘する。文章については教員が個人指導。

第 12 回	論文第二ドラフトの執筆と検討	第二段階ドラフトを読みあわせ、問題点を指摘する。文章についても指導。
第 13 回	論文の執筆と修正 1	前回までの指摘を踏まえて修正・加筆された原稿を読みあわせ、論評する。
第 14 回	論文の完成にむけての調整	論文に修正を加え完成させる。最終的なチェックは教員による個人指導。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

必要な文献を読み、発表の準備を計画的に進める。
論文のドラフトを書けるところまで書く。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

D. H. Lawrence, *The White Peacock, Sons and Lovers and England, My England* in D. H. Lawrence
Tony Pinkney, "Englishness and Realism: *The White Peacock, Sons and Lovers and England, My England* in D. H. Lawrence

【参考書】

先行研究等、読むべき文献は授業中に紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（プレゼンテーションとディスカッション） 50 %
期末レポート 50 %

【学生の意見等からの気づき】

双方向的な授業を心がける。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
イギリス文学
<研究テーマ>
19 世紀後半から 20 世紀前半にかけてのイギリス文学および文化

【Outline (in English)】

The aim of this class is to acquire various knowledge and skills necessary to write a dissertation.

Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

Grading Criteria/Policies: Your overall grade in the class will be decided based on the following: in-class contribution (50%), final report (50%).

LIT600B3

英文学特殊研究第一 (British Fiction) A

田中 裕希

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

第一次世界大戦にまつわる作品を読み、大戦文学の特徴を考える。
第一次世界大戦の体験が当時の文学にどのように反映されているか。
大戦特有の歴史観、帝国 観とは何か。ヴァージニア・ウルフの小説 *To the Lighthouse* を中心に据え、大戦以前、大戦中、また大戦後の作品と比較していく。

<講義題目>

第一次世界大戦とイギリス文学

【到達目標】

Students will develop the ability to read texts closely, with an eye to their historical contexts.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

The class revolves around students' presentations and discussions. There will be some lectures, but most of the class time will be devoted to students' active participation. Students will receive feedback on their work in class, via Hoppii, and during office hours. The format of this class in a given week could change, depending on the Covid situation.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	Introduction	What is war literature?
第2回	Thomas Hardy	1890s and apocalypse
第3回	War Poets	First World War
第4回	T. S. Eliot, <i>The Waste Land</i>	"Burial of the Dead"
第5回	<i>The Waste Land</i>	"A Game of Chess"
第6回	<i>The Waste Land</i>	"The Fire Sermon"
第7回	<i>The Waste Land</i>	"Death by Water," "What the Thunder Said"
第8回	Virginia Woolf, <i>To the Lighthouse</i>	Woolf and WWI
第9回	<i>To the Lighthouse</i>	Part 1
第10回	<i>To the Lighthouse</i>	Part 2
第11回	<i>To the Lighthouse</i>	Part 3
第12回	W. H. Auden, "September 1, 1939"	Second World War
第13回	Geoffrey Hill, "September Song"	Continued
第14回	Conclusion	Final discussion

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

Students are expected to spend at least four hours preparing for each class.

【テキスト（教科書）】

Handouts will be distributed in class.

【参考書】

To be announced in class.

【成績評価の方法と基準】

Attendance, Participation, Homework: 30%

Presentation: 30%

Final Paper: 40%

More than three absences will result in an "E."

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

モダニズム文学、英米詩

【Outline (in English)】

This course focuses on the literature of the First World War. What are the main characteristics of WWI literature? We will answer this question by comparing WWI literature to texts written before and after the war.

LIT600B3

英文学特殊研究第一 (British Fiction) B

田中 裕希

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ヴァージニア・ウルフの小説 *The Waves* を読み、ウルフが試みた詩と小説の融合について考える。*The Waves* はそれまでのウルフ作品とどう違うのか。なぜ新しい小説の形態を模索したのか。ウルフが好んだ詩人の作品も読むことで、*The Waves* における詩の影響、また詩と小説の違いについて議論していく。

<講義題目>

ヴァージニア・ウルフと詩

【到達目標】

Students will develop the ability to read texts closely, with an eye to their historical contexts.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

The class revolves around students' presentations and discussions. There will be some lectures, but most of the class time will be devoted to students' active participation. Students will receive feedback on their work in class, via Hoppii, and during office hours. The format of this class in a given week could change, depending on the Covid situation.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	Introduction	Woolf and poetry
第2回	Shakespeare	Soliloquies, songs, sonnets
第3回	Romantics (1)	Wordsworth, Coleridge
第4回	Romantics (2)	Byron, Shelley, Keats
第5回	Victorians (1)	Tennyson, the Brownings
第6回	Victorians (2)	The Rosettis, Swinburne
第7回	Virginia Woolf, <i>The Waves</i>	Introduction
第8回	<i>The Waves</i>	The structure of the novel
第9回	<i>The Waves</i>	Pure present
第10回	<i>The Waves</i>	The role of soliloquies
第11回	<i>The Waves</i>	In light of Woolf's essays on prose vs. poetry
第12回	<i>The Waves</i>	Conclusion
第13回	Presentations	Final paper presentation
第14回	Conclusion	Final discussion

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

Students are expected to spend at least four hours preparing for each class meeting.

【テキスト（教科書）】

To be announced in class.

【参考書】

To be announced in class.

【成績評価の方法と基準】

Attendance, Participation, Homework: 30%

Presentation: 30%

Final Paper: 40%

More than three absences will result in an "E."

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

モダニズム文学、英米詩

【Outline (in English)】

In this class, we will read Virginia Woolf's poetic novel *The Waves*. Before diving into this main text, we will read poets Woolf read and loved, including Shakespeare, the Romantics, and Victorian poets.

LIN500B3

言語科学特講Ⅳ A

川崎 貴子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

音声/音韻の第二言語習得に関する論文を読み、発表することにより、言語習得の分野での問いの立て方、検証方法を確認する。様々なテーマの論文を読むことを通して、テーマの立て方、仮説検証の仕方を学び、学生それぞれが研究テーマを見つけ、研究計画を組み立てる。

【到達目標】

本授業では、特に音韻分野の第一言語習得、および第二言語習得の主な研究を紹介することにより、言語習得の理論研究がどのように進んできたのかを学ぶ。また、様々な論文で用いられている実験方法を比較し、第二言語習得の研究手法を学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

論文を読み、毎回全員で発表・議論する演習方式で行う。主に音声・音韻の第二言語習得に関する論文を読み、発表することにより、言語習得の分野での問いの立て方、検証方法を確認し、取り上げられている問題に対して、どのような実験を行っているかを学ぶ。その後、各自、1年間で実行可能な研究テーマを設定し、それぞれのテーマの先行研究を読み、研究計画を構築していく。担当者は担当箇所の核になるデータ、及びその分析方法をまとめ、批判をおりまぜながら議論する。

授業で提出されたリアクションペーパーなどにおけるコメント・質問へは、そのうちのいくつかを取り上げ、全体に対してフィードバックを行い、議論に活かす。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	Orientation	授業内容の説明
2	リサーチメソッド・授業プランの作成	課題論文リストの提示と概要の説明
3	言語習得研究	第一言語習得と第二言語習得
4	第二言語習得の理論	音韻習得理論を取り上げ、概要を紹介する
5	SLA Phonology 論文発表（1）	SLA Phonology 論文発表と分析手法について
6	SLA Phonology 論文発表（2）	分析手法について・演習（2）
7	研究計画発表1	修士2年生による研究テーマ発表
8	研究計画発表2	修士1年生による研究テーマ発表
9	エラーに関する研究	エラーのタイプについての分析
10	処理可能性理論（1）	処理可能性理論についての概要、理論の説明
11	処理可能性理論（2）	処理可能性理論に関する論文発表
12	学生による発表（1）	レビュー論文
13	学生による発表（2）	学生による論文のポスター発表（1）
14	学生による発表（3）	学生による論文のポスター発表（2）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業前に指定された範囲の論文を読むこと。そして、担当箇所については、発表の準備を十分に行うこと。本授業の準備・復習時間は、4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

授業内で必要に応じて論文を指定します。

【参考書】

授業内でその都度、指定します。

【成績評価の方法と基準】

授業での議論への参加：40%

授業内発表：40%

研究計画書：20%

【学生の意見等からの気づき】

担当学生により発表資料のアップロードが遅れ、予習が間に合わないとのコメントがありました。今年度は資料や課題論文の提出の期限を厳守し、早めに準備するように学期当初から声かけをしたいと思います。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 音韻論、第二言語習得

<研究テーマ> 音韻対比の音声的影響、第二言語学習者の音韻習得など

<主要研究業績>

川崎貴子・田中邦佳「L2英語摩擦音の知覚における高周波数帯域情報の利用」『法政大学文学部紀要』第65号 pp. 63-70. (2012)

川崎貴子「カタカナ代用による第2言語音知覚調査」『法政大学文学部紀要』第63号 pp. 29-37. (2011)

Takako Kawasaki, John Matthews, and Kuniyoshi Tanaka "Processability of Acoustic Cues in the Perception of L2 Speech." Paper presented at 12th International Symposium on Processability Approaches to Language Acquisition, Ghent University, Ghent, Belgium. (2012)

川崎貴子・マシューズジョン・田中邦佳「L2音韻カテゴリーの構築過程における音響的手がかりの利用と抑制—日本語母語話者による英語摩擦音習得—」白畑知彦・須田孝司 編『名詞句と音声・音韻の習得（第二言語習得モノグラフシリーズ）』くろしお出版.(2017)

【Outline (in English)】

Through reading SLA Phonetics/Phonology papers, students will learn how to set their research theme and test their hypotheses.

Learning Objectives: The aim of this course is to deepen the students' understanding of theories of SLA and research methodologies in the field and help them to find their own research topics.

Learning activities outside of classroom: Students are expected to read the assigned papers before class. Students are required to study about 4 hours outside of classroom.

Grading Criteria:

In-class participation: 40%

In-class presentation : 40%

Research abstract : 20%

LIN500B3

言語科学特講Ⅳ B

川崎 貴子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語話者の英語習得、および第二言語としての日本語習得の、特に音韻・音声習得の研究論文を読み、議論することを通して、自らの論文の基礎となる理論、研究法を学ぶ。

【到達目標】

一音韻論、及び SLA の音韻・語彙分野の基礎文献を読みつつ、第二言語習得・教育の分野での調査手法についての知識を身に付ける。一自らの研究計画を策定、研究を遂行し、博士論文の執筆に生かす。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

春学期に続き、指定文献を読み、毎回全員で発表・議論していく。担当者は担当箇所の核になるデータ、及びその分析方法をまとめ、批判をおりまぜながら議論すること。修士論文執筆の際に役立つよう、おもに研究法・論文の構成・データ分析などについて学ぶ。授業で提出されたリアクションペーパーなどにおけるコメント・質問へは、そのうちのいくつかを取り上げ、全体に対してフィードバックを行い、議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業内容の説明
2	修士2年生の研究発表（1）	研究の進捗状況発表（2年生）（1）
3	修士2年生の研究発表（2）	研究の進捗状況発表（2年生）（2）
4	修士1年生の研究発表（1）	研究の進捗状況の発表（1年生、および研修生）（1）
5	修士1年生の研究発表（2）	研究の進捗状況の発表（1年生、および研修生）（2）
6	論文購読ー母語音声の影響に関する論文	母語の目録の L2 への影響（解説）
7	論文購読ー母語音声の影響（研究方法）	母語の目録の L2 への影響（学生による発表）（1）
8	論文購読ー母語音声の影響（分析方法・結果記述）	母語の目録の L2 への影響（学生による発表）（2）
9	論文購読ー音韻・語彙習得	語彙の特定と音韻処理ー学生による発表（1）
10	論文購読ー音韻・語彙習得（研究手法）	語彙の特定と音韻処理ー学生による発表（2）
11	論文購読ー音韻・語彙習得（分析）	語彙の特定と音韻処理ーデータ分析演習
12	1年生による修論計画発表	1年生は研究計画・先行研究リスト・今後のプランなどを発表
13	2年生による修論発表	2年生による修士論文の概要・目的・方法・結果の発表
14	博士後期課程学生による論文発表・講評	博士後期課程学生による論文の発表・発表の講評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業前に指定された範囲の論文を読むこと。そして、担当箇所については、発表の準備を十分に行うこと。本授業の準備・復習時間は、4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特に設定しない。必要に応じて授業内で指示する。

【参考書】

必要に応じて授業内で指示する。

【成績評価の方法と基準】

＜修士課程＞

授業発表....40%

授業内での発言・議論への貢献....40%

学期末論文....20%

【学生の意見等からの気づき】

理解を細かく確かめつつ進めたことが好評であった。また、追加文献を提案しながら、それぞれの研究テーマに応じた学習を授業外で進められるように、アドバイスしたい。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 音韻論、第二言語習得

＜研究テーマ＞ 音韻対比の音声的影響、第二言語学習者の音韻習得など

＜主要研究業績＞

川崎貴子・田中邦佳「L2 英語摩擦音の知覚における高周波数帯域情報の利用」『法政大学文学部紀要』第 65 号 pp. 63-70. (2012)

川崎貴子「カタカナ代用による第2言語音知覚調査」『法政大学文学部紀要』第 63 号 pp. 29-37. (2011)

Takako Kawasaki, John Matthews, and Kuniyoshi Tanaka "Processability of Acoustic Cues in the Perception of L2 Speech." Paper presented at 12th International Symposium on Processability Approaches to Language Acquisition, Ghent University, Ghent, Belgium. (2012)

川崎貴子・マシューズジョン・田中邦佳「L2 音韻カテゴリーの構築過程における音響の手がかりの利用と抑制ー日本語母語話者による英語摩擦音習得ー」白畑知彦・須田孝司 編『名詞句と音声・音韻の習得 (第二言語習得モノグラフシリーズ)』くろしお出版.(2017)

【Outline (in English)】

Through reading papers on phonological and phonetic acquisition, students will learn theories and research methods that will form the basis of their own papers.

Learning Objectives:

-To acquire knowledge of research methods in the field of second language acquisition and teaching, while reading basic literature in the field of phonology and SLA phonology and vocabulary.

-Students will be able to formulate their own research plan, conduct research, and produce a thesis.

Learning activities outside of classroom : Students are required to read assigned papers and prepare for their presentations. Students are expected to study at least 4 hours outside of classroom.

Grading Criteria:

In-Class presentations....40%

In-Class participation....40%

Term paper....20%

LIT500B3

米文学特殊研究第一（文学史） A

利根川 真紀

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

< 講義題目> 「アメリカ女性文学の系譜」

この授業では、19 世紀末から 20 世紀末にかけてのアメリカ女性作家たちの短編作品を読み、各作家作品について理解を深めていきます。アメリカ社会における女性のあり方がいかに変化したのか、女性作家たちが互いにどのように意識・影響しあいつながら作品を書いていたのか、また彼女たちの作品には、男性作家とは異なる作風やテーマが見い出されるのか、という点についても検討します。

【到達目標】

- 1 アメリカ女性作家による作品を読み、それぞれの作家・作品について理解を深める。
- 2 アメリカ女性文学史の流れの中に、各作品を位置づける。
- 3 効果的なプレゼンテーションのしかた、ペーパーの書き方を身に付ける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

アメリカ女性作家たちによる短編小説を文学史的コンテキストを補いつつ担当者を決めて読みます。あらかじめ指名された院生による発表、参加者全体によるディスカッション、教員による補足説明という形で進めていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業内容と進め方の説明、アメリカ女性文学史
第 2 回	1880 年代	Sarah Orne Jewett など、ローカル・カラーの文学
第 3 回	1890 年代	Charlotte Perkins Gilman など、ニュー・ウーマンの時代の文学
第 4 回	1900 年代	Susan Glaspell など、モダニズムとフェミニズムの文学
第 5 回	1910 年代	Willa Cather など、ジェンダーを超える文学
第 6 回	1920 年代・1930 年代	Zora Neale Hurston など、ハーレム・ルネサンスの文学
第 7 回	1940 年代	Hisaye Yamamoto など、第二次大戦と文学
第 8 回	1950 年代・1960 年代	Flannery O'Connor など、公民権運動と文学
第 9 回	批評・研究論文	フェミニズム文学批評について & ペーパー計画書
第 10 回	1970 年代	Toni Morrison など、キャンノンを問い直す文学
第 11 回	1980 年代	Jayne Anne Phillips など、母と娘の文学
第 12 回	1990 年代	Sandra Cisneros など、越境と文学 & ペーパーの提出
第 13 回	プレゼンテーション	ペーパーに基づく口頭発表とディスカッション
第 14 回	まとめ	ペーパーおよび口頭発表へのフィードバック

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

あらかじめ課題を読んで授業に臨むようにしてください。発表担当者はハンドアウトを作成し、事前に「学習支援システム」に提出してください。

【テキスト（教科書）】

初回の授業時に指示します。

【参考書】

Elaine Showalter. *A Jury of Her Peers: Celebrating American Women Writers from Anne Bradstreet to Annie Proulx*. Vintage, 2010.

【成績評価の方法と基準】

平常点（40 %）、発表（30 %）、4000 字程度のペーパー（30 %）を総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

受講者の研究テーマとのつながりを意識していきます。

【担当教員の専門分野等】

< 専門領域> アメリカ文学

< 研究テーマ> 南部文学、女性文学

< 主要研究業績>

- ①「ウェルティの『黄金の林檎』におけるマクレイン屋敷の設定——短編から連作短編集へ」『言語と文化』19 号（2022）
- ②「Capote の *Breakfast at Tiffany's* における南部表象——映画を補助線として」『言語と文化』18 号（2021）
- ③「"The Little girl looking for her mother"——トニ・モリスンの「レシタティブ」と『神よ、あの子を守りたまえ』における娘たちの友情」『言語と文化』17 号（2020）

【Outline (in English)】

The aim of this course is to understand the literary history of American women writers. We will read their short stories chronologically from the late nineteenth century through the late twentieth century. While paying special attention to women's changing roles in society as well as women writers' mutual interactions with each other, we will also consider specific themes and strategies unique to American women writers. The course also enhances students' skills in close reading of texts and in effective oral presentations and academic papers. Students' required study time for each class meeting is at least four hours. Grading will be based on in-class contribution (40 %), presentations (30 %), and papers (30 %).

LIT500B3

米文学特殊研究第一（文学史）B

利根川 真紀

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

< 講義題目> キャザーの『マイ・アントニア』とアメリカ女性文学史

この授業では、春学期に扱ったアメリカ女性文学史の流れを意識しつつ、ウィラ・キャザーの長編小説『マイ・アントニア』（1918）およびそれについて書かれた批評論文を読んでいきます。本作は中西部の開拓移民を描いた作品として有名ですが、そこにキャザーの生まれ故郷であるアメリカ南部が影響している可能性、またキャザーの思春期の男装や 40 年来のパートナーであるイーディス・ルイスとの共同生活が告げるように、時代のジェンダー意識やセクシュアリティへの作者の閉塞感が反映している可能性などが、つとに指摘されてきています。キャザーのほか作品も視野に入れつつ、様々な観点から検討します。

【到達目標】

- 1 小説『マイ・アントニア』を精読し、作品・作家について理解する。
- 2 アメリカ女性文学史の流れの中に、作品を位置づける。
- 3 効果的なプレゼンテーションのしかた、ペーパーの書き方を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

小説『マイ・アントニア』および関連する研究論文を担当者を決めて読みます。あらかじめ指名された院生による発表、参加者全体によるディスカッション、教員による補足説明という形で進めていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業内容と進め方の説明、作家作品の時代背景
第 2 回	<i>My Ántonia</i> 読解 (1)	Introduction と Book I. The Shimerdas (I 章からⅦ章) について検討
第 3 回	<i>My Ántonia</i> 読解 (2)	Book I (Ⅶ章からⅩⅢ章) について検討
第 4 回	<i>My Ántonia</i> 読解 (3)	Book I (ⅩⅣ章からⅩⅩ章) について検討
第 5 回	<i>My Ántonia</i> 読解 (4)	Book II. The Hired Girls (I 章からⅧ章) について検討
第 6 回	<i>My Ántonia</i> 読解 (5)	Book II (Ⅸ章からⅩⅤ章) について検討
第 7 回	<i>My Ántonia</i> 読解 (6)	Book III. Lena Lingard と Book IV. The Pioneer Woman's Story について検討
第 8 回	<i>My Ántonia</i> 読解 (7)	Book V. Cuzak's Boys について検討
第 9 回	批評文献の読解 (1)	枠物語・視点人物・作品構成について検討
第 10 回	批評文献の読解 (2)	ジェンダー・セクシュアリティについて検討
第 11 回	批評文献の読解 (3)	中西部・南部・西部・東部について検討
第 12 回	批評文献の読解 (4)	移民・ヨーロッパ・アメリカについて検討

第 13 回 プレゼンテーション ペーパーに基づくプレゼンとディスカッション
第 14 回 まとめ ペーパーへのフィードバック

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
あらかじめ課題を読んで授業に臨むようにしてください。発表担当者はハンドアウトを作成し、事前に「学習支援システム」に提出してください。

【テキスト（教科書）】

Norton Critical Edition を使用します。

Willa Cather. *My Ántonia: Authoritative Text, Contexts and Backgrounds, Criticism*. Ed. Sharon O'Brien. Norton, 2015. ISBN 978-0-393-96790-6 (pbk.)

【参考書】

Holly Blackford, editor. *Something Complete and Great: The Centennial Study of My Ántonia*. Fairleigh Dickinson UP, 2018.
Sharon O'Brien, editor. *New Essays on My Ántonia*. Cambridge UP, 1999.

【成績評価の方法と基準】

平常点 (40 %)、発表 (30 %)、4000 字程度のペーパー (30 %) を総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

受講者の研究テーマとのつながりを意識していきます。

【担当教員の専門分野等】

< 専門領域> アメリカ文学
< 研究テーマ> 南部文学、女性文学
< 主要研究業績>

- ①「ウェルティの『黄金の林檎』におけるマクレイン屋敷の設定——短編から連作短編集へ」『言語と文化』19 号 (2022)
- ②「Capote の *Breakfast at Tiffany's* における南部表象——映画を補助線として」『言語と文化』18 号 (2021)
- ③「『トウの茂みのそば、水車場の近くに』——キャザー『サフィラと奴隷娘』の子守唄」『言語と文化』6 号 (2009)

【Outline (in English)】

The aim of this course is to understand Willa Cather's *My Ántonia* (1918) with special attention to its place in the literary history of American women writers. By reading closely the novel itself as well as various kinds of literary criticism written on it, we will examine how her childhood experiences in the South influenced her description of immigrant pioneers in the Middle West, and how her gender consciousness and sexuality are reflected on her use of a male point of view character. The course also enhances students' skills in close reading of texts and in effective oral presentations and academic papers. Students' required study time for each class meeting is at least four hours. Grading will be based on in-class contribution (40 %), presentations (30 %), and papers (30 %).

LIT500B3

英米文学特講Ⅲ A

利根川 真紀

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

< 講義題目> 「アメリカ女性文学の系譜」

この授業では、19 世紀末から 20 世紀末にかけてのアメリカ女性作家たちの短編作品を読み、各作家作品について理解を深めていきます。アメリカ社会における女性のあり方がいかに変化したのか、女性作家たちが互いにどのように意識・影響しあいながら作品を書いていたのか、また彼女たちの作品には、男性作家とは異なる作風やテーマが見い出されるのか、という点についても検討します。

【到達目標】

- 1 アメリカ女性作家による作品を読み、それぞれの作家・作品について理解を深める。
- 2 アメリカ女性文学史の流れの中に、各作品を位置づける。
- 3 効果的なプレゼンテーションのしかた、ペーパーの書き方を身につける。
- 4 オリジナリティのある解釈を提示できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

アメリカ女性作家たちによる短編小説を文学史的コンテキストを補いつつ担当を決めて読みます。あらかじめ指名された院生による発表、参加者全体によるディスカッション、教員による補足説明という形で進めていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業内容と進め方の説明、アメリカ女性文学史
第 2 回	1880 年代	Sarah Orne Jewett など、ローカル・カラーの文学
第 3 回	1890 年代	Charlotte Perkins Gilman など、ニュー・ウーマンの時代の文学
第 4 回	1900 年代	Susan Glaspell など、モダニズムとフェミニズムの文学
第 5 回	1910 年代	Willa Cather など、ジェンダーを超える文学
第 6 回	1920 年代・1930 年代	Zora Neale Hurston など、ハーレム・ルネサンスの文学
第 7 回	1940 年代	Hisaye Yamamoto など、第二次大戦と文学
第 8 回	1950 年代・1960 年代	Flannery O'Connor など、公民権運動と文学
第 9 回	批評・研究論文	フェミニズム文学批評について & ペーパー計画書
第 10 回	1970 年代	Toni Morrison など、キャンノンを問い直す文学
第 11 回	1980 年代	Jayne Anne Phillips など、母と娘の文学
第 12 回	1990 年代	Sandra Cisneros など、越境と文学 & ペーパーの提出
第 13 回	プレゼンテーション	ペーパーに基づく口頭発表とディスカッション
第 14 回	まとめ	ペーパーおよび口頭発表へのフィードバック

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

あらかじめ課題を読んで授業に臨むようにしてください。発表担当者はハンドアウトを作成し、事前に「学習支援システム」に提出してください。

【テキスト（教科書）】

初回の授業時に指示します。

【参考書】

Elaine Showalter. *A Jury of Her Peers: Celebrating American Women Writers from Anne Bradstreet to Annie Proulx*. Vintage, 2010.

【成績評価の方法と基準】

平常点 (40 %)、発表 (30 %)、6000 字程度のペーパー (30 %) を総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

受講者の研究テーマとのつながりを意識していきます。

【担当教員の専門分野等】

< 専門領域> アメリカ文学

< 研究テーマ> 南部文学、女性文学

< 主要研究業績>

- ① 「ウェルティの『黄金の林檎』におけるマクレイン屋敷の設定——短編から連作短編集へ」『言語と文化』19 号 (2022)
- ② 「Capote の *Breakfast at Tiffany's* における南部表象——映画を補助線として」『言語と文化』18 号 (2021)
- ③ 「"The Little girl looking for her mother"——トニ・モリスンの「レシタティブ」と『神よ、あの子を守りたまえ』における娘たちの友情」『言語と文化』17 号 (2020)

【Outline (in English)】

The aim of this course is to understand the literary history of American women writers. We will read their short stories chronologically from the late nineteenth century through the late twentieth century. While paying special attention to women's changing roles in society as well as women writers' mutual interactions with each other, we will also consider specific themes and strategies unique to American women writers. The course also enhances students' skills in close reading of texts and in effective oral presentations and academic papers. Students' required study time for each class meeting is at least four hours. Grading will be based on in-class contribution (40 %), presentations (30 %), and papers (30 %).

LIT500B3

英米文学特講Ⅲ B

利根川 真紀

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

< 講義題目> キャザーの『マイ・アントニア』とアメリカ女性文学史

この授業では、春学期に扱ったアメリカ女性文学史の流れを意識しつつ、ウィラ・キャザーの長編小説『マイ・アントニア』（1918）およびそれについて書かれた批評論文を読んでいきます。本作は中西部の開拓移民を描いた作品として有名ですが、そこにキャザーの生まれ故郷であるアメリカ南部が影響している可能性、またキャザーの思春期の男装や 40 年来のパートナーであるイーディス・ルイスとの共同生活が告げるように、時代のジェンダー意識やセクシュアリティへの作者の閉塞感が反映している可能性などが、つとに指摘されてきています。キャザーのほか作品も視野に入れつつ、様々な観点から検討します。

【到達目標】

- 1 小説『マイ・アントニア』を精読し、作品・作家について理解する。
- 2 アメリカ女性文学史の流れの中に、作品を位置づける。
- 3 効果的なプレゼンテーションのしかた、ペーパーの書き方を身に付ける。
- 4 オリジナリティのある解釈を提示できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

小説『マイ・アントニア』および関連する研究論文を担当者を決めて読みます。あらかじめ指名された院生による発表、参加者全体によるディスカッション、教員による補足説明という形で進めていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業内容と進め方の説明、作家作品の時代背景
第 2 回	<i>My Ántonia</i> 読解 (1)	Introduction と Book I. The Shimerdas (I 章からⅦ章) について検討
第 3 回	<i>My Ántonia</i> 読解 (2)	Book I (Ⅶ章からⅩⅢ章) について検討
第 4 回	<i>My Ántonia</i> 読解 (3)	Book I (ⅩⅣ章からⅩⅨ章) について検討
第 5 回	<i>My Ántonia</i> 読解 (4)	Book II. The Hired Girls (I 章からⅧ章) について検討
第 6 回	<i>My Ántonia</i> 読解 (5)	Book II (Ⅸ章からⅩⅤ章) について検討
第 7 回	<i>My Ántonia</i> 読解 (6)	Book III. Lena Lingard と Book IV. The Pioneer Woman's Story について検討
第 8 回	<i>My Ántonia</i> 読解 (7)	Book V. Cuzak's Boys について検討
第 9 回	批評文献の読解 (1)	枠物語・視点人物・作品構成について検討
第 10 回	批評文献の読解 (2)	ジェンダー・セクシュアリティについて検討
第 11 回	批評文献の読解 (3)	中西部・南部・西部・東部について検討
第 12 回	批評文献の読解 (4)	移民・ヨーロッパ・アメリカについて検討

第 13 回 プレゼンテーション ペーパーに基づくプレゼンとディスカッション

第 14 回 まとめ ペーパーへのフィードバック

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。あらかじめ課題を読んで授業に臨むようにしてください。発表担当者はハンドアウトを作成し、事前に「学習支援システム」に提出してください。

【テキスト（教科書）】

Norton Critical Edition を使用します。

Willa Cather. *My Ántonia: Authoritative Text, Contexts and Backgrounds, Criticism*. Ed. Sharon O'Brien. Norton, 2015. ISBN 978-0-393-96790-6 (pbk.)

【参考書】

Holly Blackford, editor. *Something Complete and Great: The Centennial Study of My Ántonia*. Fairleigh Dickinson UP, 2018. Sharon O'Brien, editor. *New Essays on My Ántonia*. Cambridge UP, 1999.

【成績評価の方法と基準】

平常点 (40 %)、発表 (30 %)、6000 字程度のペーパー (30 %) を総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

受講者の研究テーマとのつながりを意識していきます。

【担当教員の専門分野等】

< 専門領域> アメリカ文学

< 研究テーマ> 南部文学、女性文学

< 主要研究業績>

- ①「ウェルティの『黄金の林檎』におけるマクレイン屋敷の設定——短編から連作短編集へ」『言語と文化』19 号 (2022)
- ②「Capote の *Breakfast at Tiffany's* における南部表象——映画を補助線として」『言語と文化』18 号 (2021)
- ③「『トウの茂みのそば、水車場の近くに』——キャザー『サフィーラと奴隷娘』の子守唄」『言語と文化』6 号 (2009)

【Outline (in English)】

The aim of this course is to understand Willa Cather's *My Ántonia* (1918) with special attention to its place in the literary history of American women writers. By reading closely the novel itself as well as various kinds of literary criticism written on it, we will examine how her childhood experiences in the South influenced her description of immigrant pioneers in the Middle West, and how her gender consciousness and sexuality are reflected on her use of a male point of view character. The course also enhances students' skills in close reading of texts and in effective oral presentations and academic papers. Students' required study time for each class meeting is at least four hours. Grading will be based on in-class contribution (40 %), presentations (30 %), and papers (30 %).

LIT500B3

英米文学特講Ⅵ A

田中 裕希

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

第一次世界大戦にまつわる作品を読み、大戦文学の特徴を考える。
第一次世界大戦の体験が当時の文学にどのように反映されているか。
大戦特有の歴史観、帝国 観とは何か。ヴァージニア・ウルフの小説 *To the Lighthouse* を中心に据え、大戦以前、大戦中、また大戦後の作品と比較していく。

<講義題目>

第一次世界大戦とイギリス文学

【到達目標】

Students will develop the ability to read texts closely, with an eye to their historical contexts.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

The class revolves around students' presentations and discussions. There will be some lectures, but most of the class time will be devoted to students' active participation. Students will receive feedback on their work in class, via Hoppii, and during office hours. The format of this class in a given week could change, depending on the Covid situation.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	Introduction	What is war literature?
第2回	Thomas Hardy	1890s and apocalypse
第3回	War Poets	First World War
第4回	T. S. Eliot, <i>The Waste Land</i>	"Burial of the Dead"
第5回	<i>The Waste Land</i>	"A Game of Chess"
第6回	<i>The Waste Land</i>	"The Fire Sermon"
第7回	<i>The Waste Land</i>	"Death by Water," "What the Thunder Said"
第8回	Virginia Woolf, <i>To the Lighthouse</i>	Woolf and WWI
第9回	<i>To the Lighthouse</i>	Part 1
第10回	<i>To the Lighthouse</i>	Part 2
第11回	<i>To the Lighthouse</i>	Part 3
第12回	W. H. Auden, "September 1, 1939"	Second World War
第13回	Geoffrey Hill, "September Song"	Continued
第14回	Conclusion	Final discussion

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

Students are expected to spend at least four hours preparing for each class.

【テキスト（教科書）】

Handouts will be distributed in class.

【参考書】

To be announced in class.

【成績評価の方法と基準】

Attendance, Participation, Homework: 30%

Presentation: 30%

Final Paper: 40%

More than three absences will result in an "E."

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

モダニズム文学、英米詩

【Outline (in English)】

This course focuses on the literature of the First World War. What are the main characteristics of WWI literature? We will answer this question by comparing WWI literature to texts written before and after the war.

LIT500B3

英米文学特講Ⅵ B

田中 裕希

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ヴァージニア・ウルフの小説 *The Waves* を読み、ウルフが試みた詩と小説の融合について考える。*The Waves* はそれまでのウルフ作品とどう違うのか。なぜ新しい小説の形態を模索したのか。ウルフが好んだ詩人の作品も読むことで、*The Waves* における詩の影響、また詩と小説の違いについて議論していく。

＜講義題目＞

ヴァージニア・ウルフと詩

【到達目標】

Students will develop the ability to read texts closely, with an eye to their historical contexts.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

The class revolves around students' presentations and discussions. There will be some lectures, but most of the class time will be devoted to students' active participation. Students will receive feedback on their work in class, via Hoppii, and during office hours. The format of this class in a given week could change, depending on the Covid situation.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	Introduction	Woolf and poetry
第2回	Shakespeare	Soliloquies, songs, sonnets
第3回	Romantics (1)	Wordsworth, Coleridge
第4回	Romantics (2)	Byron, Shelley, Keats
第5回	Victorians (1)	Tennyson, the Brownings
第6回	Victorians (2)	The Rossettis, Swinburne
第7回	Virginia Woolf, <i>The Waves</i>	Introduction
第8回	<i>The Waves</i>	The structure of the novel
第9回	<i>The Waves</i>	Pure present
第10回	<i>The Waves</i>	The role of soliloquies
第11回	<i>The Waves</i>	In light of Woolf's essays on prose vs. poetry
第12回	<i>The Waves</i>	Conclusion
第13回	Presentations	Final paper presentation
第14回	Conclusion	Final discussion

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

Students are expected to spend at least four hours preparing for each class meeting.

【テキスト（教科書）】

To be announced in class.

【参考書】

To be announced in class.

【成績評価の方法と基準】

Attendance, Participation, Homework: 30%

Presentation: 30%

Final Paper: 40%

More than three absences will result in an "E."

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

モダニズム文学、英米詩

【Outline (in English)】

In this class, we will read Virginia Woolf's poetic novel *The Waves*. Before diving into this main text, we will read poets Woolf read and loved, including Shakespeare, the Romantics, and Victorian poets.

HIS500B4

日本史学研究Ⅰ

小倉 慈司

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

『類聚三代格』から検討する日本古代史。『類聚三代格』を題材に古代法制史料を独力で読解できるようにし、大学院生にふさわしい研究能力・論文執筆能力を身につける。

【到達目標】

古代法制史料を独力で読解できるようにする。文字の異同も含めた本文検討ができるようにする。史料をもとに先行研究を把握し、自ら課題を発掘して研究を進めることができるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

古代史の基本的な法制史料である『類聚三代格』を一点ずつ取り上げ、読解を行ない当該史料の歴史的意義や先行研究、問題点について報告する。課題や発表に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。なお、授業は原則、対面授業でおこなう予定であるが、状況に応じ、参加者と相談の上、オンライン授業に切り替えることがある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	『類聚三代格』の研究	ガイダンス
第 2 回	『類聚三代格』巻 15(12 巻本巻 9) 弘仁 11 年 12 月 26 日太政官符	左記史料の検討
第 3 回	『類聚三代格』巻 15(12 巻本巻 9) 仁寿 3 年 5 月 25 日太政官符	左記史料の検討
第 4 回	『類聚三代格』巻 15(12 巻本巻 9) 貞観 4 年 6 月 5 日太政官符	左記史料の検討
第 5 回	『類聚三代格』巻 15(12 巻本巻 9) 承和元年 2 月 3 日太政官符	左記史料の検討
第 6 回	『類聚三代格』巻 15(12 巻本巻 9) 延喜 2 年 3 月 13 日太政官符	左記史料の検討
第 7 回	『類聚三代格』巻 15(12 巻本巻 9) 大同 4 年 9 月 16 日太政官符	左記史料の検討
第 8 回	『類聚三代格』巻 15(12 巻本巻 9) 元慶 3 年 12 月 4 日太政官符	左記史料の検討
第 9 回	『類聚三代格』巻 15(12 巻本巻 9) 天長 6 年 6 月 22 日太政官符	左記史料の検討

第 10 回	『類聚三代格』巻 15(12 巻本巻 9) 霊亀 3 年 5 月 11 日太政官符	左記史料の検討
第 11 回	『類聚三代格』巻 15(12 巻本巻 9) 弘仁 7 年 11 月 4 日太政官符	左記史料の検討
第 12 回	『類聚三代格』巻 15(12 巻本巻 9) 慶雲 3 年 9 月 20 日勅	左記史料の検討
第 13 回	『類聚三代格』巻 15(12 巻本巻 9) 天長 2 年 10 月 20 日太政官符	左記史料の検討
第 14 回	『類聚三代格』巻 15(12 巻本巻 9) 延喜 2 年 3 月 13 日太政官符	左記史料の検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回、次回の授業範囲を予習する。特に発表担当者は担当史料の読解や問題点を調べ、レジュメを作成する。本授業の準備時間は平均して毎回 4 時間以上を標準とし、復習時間は毎回 1 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

新訂増補国史大系『類聚三代格』後篇（吉川弘文館）

【参考書】

尊経閣善本影印集成『類聚三代格』1～3（八木書店 2005 年）
米田雄介編『類聚三代格総索引』（高科書店 1991 年）
（神道大系『類聚三代格』（神道大系編纂会 1993 年））
（関見監修『狩野文庫本類聚三代格』（吉川弘文館 1989 年））
ジャパンナレッジ等の活用は必須。
大修館『大漢和辞典』も参照することが望ましい。
他、参考文献は適宜授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】

配分：平常点（50 %）および発表内容（50 %）
評価基準：授業参加と発表における取り組み、史料の理解度

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本古代史、史料学
<研究テーマ> 古代神祇祭祀制度、延喜式、禁裏公家文庫研究など
<主要研究業績>
『古代律令国家と神祇行政』（同成社 2021 年）
『事典 日本の年号』（吉川弘文館 2019 年）
（共著）天皇の歴史 9『天皇と宗教』講談社学術文庫 2018 年）

【Outline (in English)】

This course aims to help students acquire the necessary skills and knowledge needed to conduct studies on the ancient history of Japan. We will study "Ruiju-sandaikyaku". The goals of this course are to acquire research and writing skills appropriate for graduate students in classical Japanese history.

Before each class meeting, students will be expected to spend four hours understanding the course content, and after each class meeting, will be expected to spend one hour reviewing. Your overall grade in the class will be decided based on the following

Report contents: 50%、in class contribution: 50%

HIS500B4

日本史学研究Ⅱ

及川 亘

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の 16 世紀末～17 世紀初頭は城郭建設の時代である。当該期の城郭建設に関する大名間もしくは大名と家臣の間で取り交わされた書状を中心に読解し、当時の政治・社会の在り方について考える。

【到達目標】

16～17 世紀の日本史を研究するうえで、書状の読解は重要な要素であるが、難しい点の一つは、書状には基本的に日付のみで年次が記されないことにある。書状の年次を確定することは、その内容を正確に把握するうえで必要不可欠であり、一方で書状の年次を確定するためには、その内容を正確に把握しなければならない。本授業では城郭建設に関する書状の読解を通じて、16～17 世紀史料の取り扱いの基礎的技術を獲得することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

細川家（豊前小倉・肥後熊本）、鍋島家（肥前佐賀）、毛利家（長門萩）、浅野家（安芸広島）など、主に西国大名の史料を用いる。最初の数回は教員側で史料読解の方法を例示する。その後は担当者を決めて、担当史料の内容解釈・解説をしてもらい、参加者全員で討論する。教員側からは関連史料などを提示し解説する。課題や発表に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。
なお、授業は ZOOM を用いて行う。新型コロナウイルス感染症の状況が改善した場合は対面授業に戻す。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業方法と使用テキストに関する説明。
第 2 回	名古屋城建設に関する史料を読む ①	教員による史料読解の例示
第 3 回	名古屋城建設に関する史料を読む ②	教員による史料読解の例示
第 4 回	名古屋城建設に関する史料を読む ③	担当者による報告と討論
第 5 回	名古屋城建設に関する史料を読む ④	担当者による報告と討論
第 6 回	駿府城建設に関する史料を読む ①	担当者による報告と討論
第 7 回	駿府城建設に関する史料を読む ②	担当者による報告と討論
第 8 回	駿府城建設に関する史料を読む ③	担当者による報告と討論
第 9 回	駿府城建設に関する史料を読む ④	担当者による報告と討論
第 10 回	江戸城建設に関する史料を読む ①	担当者による報告と討論
第 11 回	江戸城建設に関する史料を読む ②	担当者による報告と討論
第 12 回	江戸城建設に関する史料を読む ③	担当者による報告と討論
第 13 回	江戸城建設に関する史料を読む ④	担当者による報告と討論
第 14 回	まとめ—書状から読み解く時代性	第 13 回までの全体の内容について討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
報告担当者は、担当史料を読解し、その年次・内容について十分に調査検討することが求められる。もちろん担当者以外も予習することが求められる。

【テキスト（教科書）】

教科書は用いず、テキストはプリントを配布する。

【参考書】

『大日本史料』第十二編之一～六十二
『佐賀県史料集成』一～三〇
『佐賀県近世史料』第一編・第二編
『大日本近世史料』細川家史料
『松井家文庫所蔵古文書調査報告書』一～二十
『出水叢書 綿考輯録』一～四
など

【成績評価の方法と基準】

平常点（授業内での担当箇所の報告と授業への参加度）により評価する。（100%）

【学生の意見等からの気づき】

関連史料なども使いながら、中近世の政治・社会が具体的にイメージできるようにしたい。また実践を通じて史料読解の方法が身に着くようにしたい。

【学生が準備すべき機器他】

ZOOM を利用できるインターネット環境。

【その他の重要事項】

新型コロナウイルス感染症流行の状況により、ZOOM を用いて実施する。

URL は学習支援システムの当該授業のページで通知する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
日本中・近世史
<研究テーマ>
中世・近世の都市・流通史研究、中近世移行期の社会経済変動の研究
<主要研究業績>
論文「現場監督する大名—多久家文書にみる公儀普請—」小宮木代良編『近世前期の公儀軍役負担と大名家—佐賀藩多久家文書を読みなおす—』（岩田書院、2019 年）
論文「旅行者と通行証—関所通過のメカニズム—」高橋慎一郎・千葉敏之編『移動者の中世—史料の機能、日本とヨーロッパ—』（東京大学出版会、2017 年）
編著『薬師寺の中世文書』東京大学史料編纂所研究成果報告 2015-3、2016 年
論文「中世の戦争と商人」（高橋典幸編『生活と文化の歴史学 5 戦争と平和』竹林舎、2014 年）
論文「町の経済—算用帳にみる京都の人的結合—」（高橋慎一郎・千葉敏之編『中世の都市—史料の魅力、日本とヨーロッパ—』東京大学出版会、2009 年）
論文「戦国期の薬師寺と唐招提寺」（勝俣鎮夫編『寺院・検断・徳政—戦国時代の寺院史料を読む—』山川出版社、2004 年）

【Outline (in English)】

From the end of the 16th century to the beginning of the 17th century, Japan entered the era of castle construction. Read mainly the letters regarding the construction of the castle during that period, and think about the state of politics and society at that time.

【Goal】

Reading comprehension of letters is an important factor in studying Japanese history in the 16th and 17th centuries, but one of the difficulties is that the letters are basically dated only and do not include the year. Determining the year of a letter is indispensable for accurately grasping its contents, while in order to determine the year of a letter, it is necessary to accurately grasp its contents. The goal of this class is to acquire the basic skills of handling historical materials from the 16th to 17th centuries through reading comprehension of letters on castle construction.

【Work to be done outside of class (preparation, etc.)】

The standard preparatory study / review time for this class is 2 hours each.

The reporter is required to read the historical materials in charge and thoroughly investigate and examine the year and contents. Of course, it is required to prepare for others.

【Grading Criteria】

Evaluate based on normal points (report of the part in charge in the class and degree of participation in the class). (100%)

HIS500B4

日本史学原典研究 I

大塚 紀弘

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

鎌倉時代後期に編纂された公家の歴史書である『百練抄』を講読する。中世史料の日本漢文を訓読し、内容を深く理解する力を養成する。『百練抄』のうち、平安時代末期から鎌倉時代前期の部分を取り上げ、本文を訓読・現代語訳し、内容を理解する。その際、同時代の公家日記である『玉葉』『吉記』『明月記』、鎌倉幕府の『吾妻鏡』さらには『平家物語』などの史料や先行研究を参照し、当該記事に関する史実について議論する。また、日本中世史に関係する論文批評や研究発表の機会を設ける。

【到達目標】

講読・研究発表や議論、レポート執筆を通じて、中世の国家・政治や社会について研究する方法、研究成果を公表する方法を習得することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式で進める。担当者が担当範囲についてのレジュメを用意して発表した後、その内容に基づいて全員で議論する。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」または「メール」を通じて行なう予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	『百練抄』とは	履修のガイダンス
第 2 回	『百練抄』講読（1）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第 3 回	『百練抄』講読（2）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第 4 回	論文批評（1）	報告と議論
第 5 回	『百練抄』講読（3）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第 6 回	『百練抄』講読（4）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第 7 回	研究発表（1）	報告と議論
第 8 回	『百練抄』講読（5）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第 9 回	『百練抄』講読（6）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第 10 回	論文批評（1）	報告と議論
第 11 回	『百練抄』講読（7）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第 12 回	『百練抄』講読（8）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第 13 回	研究発表（2）	報告と議論
第 14 回	『百練抄』と公家の日記	講読内容の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講読する記事について予習しておく。担当者は担当範囲を読解し、関係する史料や研究論文を収集する。また、発表レジュメを用意し、「学習支援システム」の「掲示板」を通じて全員にファイルを配布する。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

『新訂増補国史大系 日本紀略（後篇）百練抄』（吉川弘文館、2007 年）

「学習支援システム」の「教材」から、講読する部分のコピー（PDF ファイル）を配布する。

【参考書】

授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点50%、学期末レポート点50%の合計で評価する予定である。

【学生の意見等からの気づき】

議論が活発になるように努める。

【学生が準備すべき機器他】

「学習支援システム」を利用し、事前に「教材」から配布プリントをダウンロードすること。また、「掲示場」に発表レジュメ等を掲示したり、ダウンロードしたりすること。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本中世史

＜研究テーマ＞日中関係史・日本仏教史

【Outline (in English)】

The aim of this course is to help students read the medieval Chinese texts. The goals of this course are to train the ability to understand the contents deeply. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Your overall grade in the class will be decided based on the following. Short reports : 50%, in class contribution: 50%.

HIS500B4

日本史学原典研究Ⅱ

大塚 紀弘

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

鎌倉時代後期に編纂された公家の歴史書である『百練抄』を講読する。中世史料の日本漢文を訓読し、内容を深く理解する力を養成する。『百練抄』のうち、平安時代末期から鎌倉時代前期の部分を取り上げ、本文を訓読・現代語訳し、内容を理解する。その際、同時代の公家日記である『玉葉』『吉記』『明月記』、鎌倉幕府の『吾妻鏡』さらには『平家物語』などの史料や先行研究を参照し、当該記事に関する史実について議論する。また、日本中世史に関係する論文批評や研究発表の機会を設ける。

【到達目標】

講読・研究発表や議論、レポート執筆を通じて、中世の国家・政治や社会について研究する方法、研究成果を公表する方法を習得することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式で進める。担当者が担当範囲についてのレジュメを用意して発表した後、その内容に基づいて全員で議論する。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」または「メール」を通じて行なう予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	『百練抄』とは	履修のガイダンス
第2回	『百練抄』講読（1）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第3回	『百練抄』講読（2）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第4回	論文批評（1）	報告と議論
第5回	『百練抄』講読（3）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第6回	『百練抄』講読（4）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第7回	研究発表（1）	報告と議論
第8回	『百練抄』講読（5）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第9回	『百練抄』講読（6）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第10回	論文批評（1）	報告と議論
第11回	『百練抄』講読（7）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第12回	『百練抄』講読（8）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第13回	研究発表（2）	報告と議論
第14回	『百練抄』と公家の日記	講読内容の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講読する記事について予習しておく。担当者は担当範囲を読解し、関係する史料や研究論文を収集する。また、発表レジュメを用意し、「学習支援システム」の「掲示板」を通じて全員にファイルを配布する。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

『新訂増補国史大系 日本紀略（後篇）百練抄』（吉川弘文館、2007年）

「学習支援システム」の「教材」から、講読する部分のコピー（PDF ファイル）を配布する。

【参考書】

授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点50%、学期末レポート点50%の合計で評価する予定である。

【学生の意見等からの気づき】

議論が活発になるように努める。

【学生が準備すべき機器他】

「学習支援システム」を利用し、事前に「教材」から配布プリントをダウンロードすること。また、「掲示場」に発表レジュメ等を掲示したり、ダウンロードしたりすること。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本中世史

＜研究テーマ＞日中関係史・日本仏教史

【Outline (in English)】

The aim of this course is to help students read the medieval Chinese texts. The goals of this course are to train the ability to understand the contents deeply. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Your overall grade in the class will be decided based on the following. Short reports : 50%, in class contribution: 50%.

HIS500B4

日本古代史特殊研究Ⅰ

山口 英男

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

テーマ「平安時代の政務・儀式関係史料の研究」

平安時代の政治・社会・文化を明らかにする上で有力な手掛かりとなる政務・儀式関係史料への理解を深めることを目的とします。

【到達目標】

平安時代史研究の展開の中で、政治・社会・文化を明らかにするための有力な手掛かりとして注目されるのが政務・儀式関係史料です。その読解と検討のための基礎作業を学び、身に付けること、それを通じて政務・儀式への具体的な理解を深めることが目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

儀式書・法制史料・古記録・編年史料などを中心に、平安時代の個別の政務・儀式ごとに関係史料を精確に読解し、政務・儀式の内容・構造と時代的変遷について把握を進めることで、平安時代の国家体制の特徴や、政治史・政策史・文化史・社会史に関する知見を抽出していきます。演習形式（対面授業）により、報告についてその都度フィードバックしながら進めます。取り上げる政務・儀式や、授業で扱う史料については、受講者の希望も踏まえて選択します。それに応じて授業計画を組みなおす場合があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の進め方について説明します。
第2回	平安時代史研究と政務・儀式関係史料	平安時代史の理解にとって、政務・儀式関係史料が持つ意義を解説します。
第3回	平安時代政務・儀式史料概説	平安時代の政務関係史料、儀式関係史料について概説します。
第4回	行政実務関係史料の検討（儀式書・法制史料）	行政実務に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第5回	行政実務関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第6回	行政実務関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第7回	行政実務関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第8回	文芸関係史料の検討（儀式書・法制史料）	文芸に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第9回	文芸関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第10回	文芸関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第11回	文芸関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第12回	武芸関係史料の検討（儀式書・法制史料）	武芸に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。

- 第13回 武芸関係史料の検討（古記録・編年史料） 同様に古記録・編年史料から検討します。
- 第14回 武芸関係史料の検討（儀式・政務次第の整理） それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。
報告担当以外の場合も授業で取り扱う史料には必ず事前に目を通して出席してください。

【テキスト（教科書）】

事前に印刷物を配布します（「延喜式」「儀式」「内裏式」「西宮記」「北山抄」、『大日本古記録』など）。

【参考書】

『大日本史料』第1・2・3編
『訳注延喜式』上・中・下
「駒牽関係史料」（『山梨県史 資料編3』山梨県、2001年、山口英男編集担当）
「駒牽と相撲」（『山梨県史 通史編1』2004年、山口英男執筆担当）

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的参加、報告の発表内容、作成資料、討議への関与、レポートの内容などから総合的に判定します（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

授業で扱う史料については、受講者の希望も踏まえて選択します。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞
日本古代史（奈良・平安時代史）
＜研究テーマ＞
古代史料学（正倉院文書の〈書類学〉）
古代の社会と行政機構
牧と駒牽をめぐる諸問題
＜主要研究業績＞
『日本古代の地域社会と行政機構』吉川弘文館、2019年
「貢馬をめぐる牧の諸相」（佐々木虔一他編『馬と古代社会』八木書店 2021年）
「装潢小治田人公口状とその背景」（古瀬奈津子編『古代日本の政治と制度』同成社 2021）
「正倉院文書に見える「口状」について」（佐藤信編『史料・史跡と古代社会』吉川弘文館、2018年）

【Outline (in English)】

To acquire the ability to read and understand historical materials on the imperial court ritual of the Heian period.

HIS500B4

日本古代史特殊研究Ⅱ

山口 英男

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

テーマ「平安時代の政務・儀式関係史料の研究」
平安時代の政治・社会・文化を明らかにする上で有力な手掛かりとなる政務・儀式関係史料への理解を深めることを目的とします。

【到達目標】

平安時代史研究の展開の中で、政治・社会・文化を明らかにするための有力な手掛かりとして注目されるのが政務・儀式関係史料です。その読解と検討のための基礎作業を学び、身に付けること、それを通じて政務・儀式への具体的な理解を深めることが目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

儀式書・法制史料・古記録・編年史料などを中心に、平安時代の個別の政務・儀式ごとに関係史料を精確に読解し、政務・儀式の内容・構造と時代的変遷について把握を進めることで、平安時代の国家体制の特徴や、政治史・政策史・文化史・社会史に関する知見を抽出していきます。演習形式（対面授業）により、報告についてその都度フィードバックしながら進めます。取り上げる政務・儀式や、授業で扱う史料については、受講者の希望も踏まえて選択します。それに応じて授業計画を組みなおす場合があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の進め方について説明します。
第2回	仏事関係史料の検討（儀式書・法制史料）	仏事に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第3回	仏事関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第4回	仏事関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第5回	仏事関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第6回	神事関係史料の検討（儀式書・法制史料）	神事に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します
第7回	神事関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第8回	神事関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第9回	神事関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第10回	朝廷儀礼関係史料の検討（儀式書・法制史料）	朝廷儀礼に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第11回	朝廷儀礼関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第12回	朝廷儀礼関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。

- 第13回 朝廷儀礼関係儀式・政務の歴史的位置付け それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
- 第14回 平安時代の政務・儀式の展開と特質 平安時代政務・儀式の展開と特質について、得られた成果を総括します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
報告担当以外の場合も授業で取り扱う史料には必ず事前に目を通して出席してください。

【テキスト（教科書）】

担当教員が作成した印刷物を配布します（「延喜式」「儀式」「内裏式」「西宮記」「北山抄」、『大日本古記録』など）。

【参考書】

『大日本史料』第1・2・3編
『訃注延喜式』上・中・下
「駒牽関係史料」（『山梨県史 資料編3』山梨県、2001年、山口英男編集担当）
「駒牽と相撲」（『山梨県史 通史編1』2004年、山口英男執筆担当）

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的参加、報告の発表内容、作成資料、討議への関与、レポートの内容などから総合的に判定します（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

授業で扱う史料については、受講者の希望も踏まえて選択します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
日本古代史（奈良・平安時代史）
<研究テーマ>
古代史料学（正倉院文書の〈書類学〉）
古代の社会と行政機構
牧と駒牽をめぐる諸問題
<主要研究業績>
『日本古代の地域社会と行政機構』吉川弘文館、2019年
「貢馬をめぐる牧の諸相」（佐々木虔一他編『馬と古代社会』八木書店 2021年）
「装潢小治田人公口状とその背景」（古瀬奈津子編『古代日本の政治と制度』同成社 2021年）
「正倉院文書に見える「口状」について」（佐藤信編『史料・史跡と古代社会』吉川弘文館、2018年）

【Outline (in English)】

To acquire the ability to read and understand historical materials on the imperial court ritual of the Heian period.

HIS500B4

日本中世史特殊研究Ⅰ

末柄 豊

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

室町時代の日記を読む

【到達目標】

室町時代の日記の読解法を習得するとともに、室町時代の政治・社会・文化・宗教等について理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

室町時代中後期の貴族甘露寺親長の日記『親長卿記』文明4年（1472）条を講読する（ただし、テキストについては、受講者との相談により変更することもありうる）。演習形式でおこなう。対面授業またはオンライン授業による。報告に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	概要の説明、分担箇所の決定
第2回	輪読1	担当者の報告、質疑応答、解説
第3回	輪読2	担当者の報告、質疑応答、解説
第4回	輪読3	担当者の報告、質疑応答、解説
第5回	輪読4	担当者の報告、質疑応答、解説
第6回	輪読5	担当者の報告、質疑応答、解説
第7回	輪読6	担当者の報告、質疑応答、解説
第8回	輪読7	担当者の報告、質疑応答、解説
第9回	輪読8	担当者の報告、質疑応答、解説
第10回	輪読9	担当者の報告、質疑応答、解説
第11回	輪読10	担当者の報告、質疑応答、解説
第12回	輪読11	担当者の報告、質疑応答、解説
第13回	輪読12	担当者の報告、質疑応答、解説
第14回	輪読13	担当者の報告、質疑応答、解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
報告担当者は、担当日条について詳細に調査検討するのはもちろん、関連する史料・先行研究を渉猟し、十全な報告を目指す。担当者以外も、当該日条について予習することが求められる。

【テキスト（教科書）】

『親長卿記』（史料大成または史料集纂）

【参考書】

元木泰雄・松蘭斉編『日記で読む日本中世史』（ミネルヴァ書房、2011年）の12章「親長卿記」（末柄執筆）ならびに同章末尾の参考文献

【成績評価の方法と基準】

報告内容および討論への参加（100 %）

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本中世史
<研究テーマ>室町時代の政治史・文化史・史料論
<主要研究業績>
『戦国時代の天皇（日本史リブレット82）』（山川出版社、2018年）
「応仁・文明の乱」（『岩波講座日本歴史』8・中世3、2014年）
「禁裏文書にみる室町幕府と朝廷」（『ヒストリア』230号、2012年）

【Outline (in English)】
Diary of the Muromachi period

HIS500B4

日本中世史特殊研究Ⅱ

末柄 豊

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

室町時代の日記を読む

【到達目標】

室町時代の日記の読解法を習得するとともに、室町時代の政治・社会・文化・宗教等について理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

室町時代中後期の貴族甘露寺親長の日記『親長卿記』文明4年（1472）条を講読する（ただし、テキストについては、受講者との相談により変更することもありうる）。演習形式でおこなう。対面授業またはオンライン授業による。報告に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	輪読1	担当者の報告、質疑応答、解説
第2回	輪読2	担当者の報告、質疑応答、解説
第3回	輪読3	担当者の報告、質疑応答、解説
第4回	輪読4	担当者の報告、質疑応答、解説
第5回	輪読5	担当者の報告、質疑応答、解説
第6回	輪読6	担当者の報告、質疑応答、解説
第7回	輪読7	担当者の報告、質疑応答、解説
第8回	輪読8	担当者の報告、質疑応答、解説
第9回	輪読9	担当者の報告、質疑応答、解説
第10回	輪読10	担当者の報告、質疑応答、解説
第11回	輪読11	担当者の報告、質疑応答、解説
第12回	輪読12	担当者の報告、質疑応答、解説
第13回	輪読13	担当者の報告、質疑応答、解説
第14回	輪読14	担当者の報告、質疑応答、解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
報告担当者は、担当日条について詳細に調査検討するのはもちろん、関連する史料・先行研究を渉猟し、十全な報告を目指す。担当者以外も、当該日条について予習することが求められる。

【テキスト（教科書）】

『親長卿記』（史料大成または史料纂集）

【参考書】

元木泰雄・松岡斉編『日記で読む日本中世史』（ミネルヴァ書房、2011年）の12章「親長卿記」（末柄執筆）ならびに同章末尾の参考文献

【成績評価の方法と基準】

報告内容および討論への参加（100 %）

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本中世史

＜研究テーマ＞室町時代の政治史・文化史・史料論

＜主要研究業績＞

『戦国時代の天皇（日本史リブレット82）』（山川出版社、2018年）

「応仁・文明の乱」（『岩波講座日本歴史』8・中世3、2014年）

「禁裏文書にみる室町幕府と朝廷」（『ヒストリア』230号、2012年）

【Outline (in English)】
Diary of the Muromachi period

HIS500B4

日本中世史特殊研究Ⅲ

仁平 義孝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

西園寺公衡の日記『公衡公記』を講読し、鎌倉時代後期の政治や社会について考察する。

【到達目標】

中世記録史料の読解力や、鎌倉時代の政治・社会、とくに公家社会に関する研究に必要な方法論を習得することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は受講生による輪番報告を中心に進め、報告に対する質疑・討論を通して条文の理解を深めていきたい。今年度は正和4年(1315)5月17日条から講読する。

報告者は、担当条文から読み取った事柄について詳細に報告し、その報告内容に関して参加者全員で討論する。報告者はレジュメを作成して、報告前に学習支援システムを通じて提出すること。提出方法などの詳細は、初回授業時に指示する。提出されたレジュメに対するフィードバックは、報告時に行う。

また、受講生の個人研究発表の機会を設ける。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業方法の説明、分担の決定
第2回	史料講読1	担当者の報告、質疑・討論
第3回	史料講読2	担当者の報告、質疑・討論
第4回	史料講読3	担当者の報告、質疑・討論
第5回	史料講読4	担当者の報告、質疑・討論
第6回	研究発表1	個人研究の発表
第7回	史料講読5	担当者の報告、質疑・討論
第8回	史料講読6	担当者の報告、質疑・討論
第9回	史料講読7	担当者の報告、質疑・討論
第10回	研究発表2	個人研究の発表
第11回	史料講読8	担当者の報告、質疑・討論
第12回	史料講読9	担当者の報告、質疑・討論
第13回	史料講読10	担当者の報告、質疑・討論
第14回	まとめ	春学期のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
担当条文について詳細に調べ、関連史料や先行研究などを精査して十分な準備をする。

【テキスト（教科書）】

『公衡公記』（史料纂集）

【参考書】

授業時に適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点。

【学生の意見等からの気づき】

とくになし

【学生が準備すべき機器他】

Zoomにて受講できる環境を整える。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本中世史

<研究テーマ>鎌倉時代政治史

＜主要研究業績＞「執権政治期の幕政運営について」（『国立歴史民俗博物館研究報告』45 集、1992 年）
「鎌倉幕府発給文書にみえる年号裏書について」（中野栄夫編『日本中世の政治と社会』吉川弘文館、2003 年）
「執権時頼・長時期の幕政運営について」（『法政史学』79 号、2013 年）

【Outline (in English)】

(Course Outline)

This course studies society of the last part of Kamakura era.

(Learning Objectives)

The goals of this course are to acquisition of the study method of the Kamakura era.

(Learning activities outside of classroom)

Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

(Grading Criteria/Policies)

Your overall grade in the class will be decided based on the following

in class contribution:100%

HIS500B4

日本中世史特殊研究Ⅳ

仁平 義孝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

西園寺公衡の日記『公衡公記』を講読し、鎌倉時代後期の政治や社会について考察する。

【到達目標】

中世記録史料の読解力や、鎌倉時代の政治・社会、とくに公家社会に関する研究に必要な方法論を習得することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は受講生による輪番報告を中心に進め、報告に対する質疑・討論を通して条文の理解を深めていきたい。春学期に講読した条文に続けて読み進めていく。

報告者は、担当条文から読み取った事柄について詳細に報告し、その報告内容に関して参加者全員で討論する。報告者はレジュメを作成して、報告前に学習支援システムを通じて提出すること。提出方法などの詳細は、初回授業時に指示する。提出されたレジュメに対するフィードバックは、報告時に行う。

また、受講生の個人研究発表の機会を設ける。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	史料講読 1	担当者の報告、質疑・討論
第 2 回	史料講読 2	担当者の報告、質疑・討論
第 3 回	史料講読 3	担当者の報告、質疑・討論
第 4 回	史料講読 4	担当者の報告、質疑・討論
第 5 回	研究発表 1	個人研究の発表
第 6 回	史料講読 5	担当者の報告、質疑・討論
第 7 回	史料講読 6	担当者の報告、質疑・討論
第 8 回	史料講読 7	担当者の報告、質疑・討論
第 9 回	史料講読 8	担当者の報告、質疑・討論
第 10 回	研究発表 2	個人研究の発表
第 11 回	史料講読 9	担当者の報告、質疑・討論
第 12 回	史料講読 10	担当者の報告、質疑・討論
第 13 回	史料講読 11	担当者の報告、質疑・討論
第 14 回	まとめ	一年間のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
担当条文について詳細に調べ、関連史料や先行研究などを精査して十全な準備をする。

【テキスト（教科書）】

『公衡公記』（史料纂集）

【参考書】

授業時に適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点。

【学生の意見等からの気づき】

とくになし

【学生が準備すべき機器他】

Zoom にて受講できる環境を整える。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本中世史

＜研究テーマ＞鎌倉時代政治史

＜主要研究業績＞「執権政治期の幕政運営について」（『国立歴史民俗博物館研究報告』45 集、1992 年）
 「鎌倉幕府発給文書にみえる年号裏書について」（中野栄夫編『日本中世の政治と社会』吉川弘文館、2003 年）
 「執権時頼・長時期の幕政運営について」（『法政史学』79 号、2013 年）

【Outline (in English)】

(Course Outline)

This course studies society of the last part of Kamakura era.

(Learning Objectives)

The goals of this course are to acquisition of the study method of the Kamakura era.

(Learning activities outside of classroom)

Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

(Grading Criteria/Policies)

Your overall grade in the class will be decided based on the following

in class contribution:100%

HIS500B4

日本近世史特殊研究Ⅰ

落合 功

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

近世史研究の諸問題。各人の研究テーマ、関心に即しながら、近世史の問題点を摘出し検討する。

受講生は、自分の関心から何を明らかにすべきかを考え、その学問的意味を理解することを目指す。

【到達目標】

各人の研究で何をやりたいかを明らかにする。報告を期待するが、難しい場合、論文購読を行うようにする。

受講生は、批判的に論文が読めるようになること、また、自身の研究が如何なる研究史に位置づけられるかを明確にしたい。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義は基本的に報告とそれに対する議論とする。可能であれば合宿も考えたいが、それは、受講生と相談の上、決める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	テーマの紹介	Introduction of a theme
第 2 回	中近世移行期を考える。	Time during the modernized world medieval
第 3 回	徳川政権	Tokugawa political power
第 4 回	近世前期論	The early modern period first term is considered.
第 5 回	新井白石の政治	Arai Hakuseki's politics
第 6 回	享保改革	Tokugawa Yoshimune's politics
第 7 回	田沼時代	Tanuma's politics
第 8 回	寛政改革	Matudaira Sadanobu's politics
第 9 回	天保改革	Mizuno Tadakuni's politics
第 10 回	近世後期の社会	Society in the modern period latter period
第 11 回	幕末社会論	Society in the early modern period last years
第 12 回	明治維新期	Meiji restoration period
第 13 回	近世社会論	I think about the early modern period.
第 14 回	まとめ	Summary

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

報告は事前に当てるので、その準備を行う。もちろん、論文を読んだり、史料を読んだうえでのぞまなければならない。報告担当者でない場合でも、当該テーマについて、事前に予習しておくこと。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

必要に応じてその都度指示する。

【参考書】

必要に応じてその都度指示する。

【成績評価の方法と基準】

各回に課せられた報告内容と議論の質（100 %）

【学生の意見等からの気づき】

単位を目的とするのであれば、履修しないで欲しい。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【日本社会経済史】

「近世後期、広島藩の経済政策思想」『日本経済思想史研究』17、2017 年

【日本金融史】

「戦後直後の中小企業金融論議」(『青山経済論叢』68 - 4、2017 年)

【近世社会論】

「二か領用水の展開と水争い」中央大学人文科学研究所編『地域史研究の今日的課題』(中央大学出版会、2018 年 3 月)

【日本経済思想史】

『国益思想の源流』(同成社、2016 年)

【Outline (in English)】

Outline and objectives

Miscellaneous problems of early modern history study.It's based on each person's research subject and interest.The problem of a modern history study is made clear on it.A member of a class thinks what to do clearly from the interest.And I aim to understand its scientific point.

Goal

What you'd like to do by a study is made clear.I'll can read a thesis critically.

Method

Report and argument. When it's possible, a training camp is considered.

Work to be done outside of class

A thesis is read beforehand.

Textbooks

It's directed as the need arises.

required

It's directed as the need arises.

Grading criteria

The quality of the report contents and the argument

Changes following student comments

Only I don't give a grade in a destination.

HIS500B4

日本近世史特殊研究Ⅱ

落合 功

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

近世史研究の諸問題。各人の研究テーマ、関心に即しながら、近世史の問題点を摘出し検討する。

受講生は、自分の関心から何を明らかにすべきかを考え、その学問的意味を理解することを目指す。

【到達目標】

各人の研究で何をやりたいかを明らかにする。報告を期待するが、難しい場合、論文購読を行うようにする。

受講生は、批判的に論文が読めるようになること、また、自身の研究が如何なる研究史に位置づけられるかを明確にしたい。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業形式はブレンド型で行う。1 回目は対面で実施するので、その時に計画を報告する。

講義は基本的に報告とそれに対する議論とする。可能であれば合宿も考えたいが、それは、受講生と相談の上、決める。

課題や発表に対するフィードバックは授業内で講評として実施する

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	テーマの紹介	Introduction of a theme
第 2 回	兵農分離	The dissociation of the soldier and the farmer
第 3 回	鎖国と海禁	National isolation and sea prohibition
第 4 回	飢饉	Famine
第 5 回	国益	National interests
第 6 回	徳川政権論	Tokugawa political power
第 7 回	貨幣と紙幣	Money and bill
第 8 回	実学	Practical science
第 9 回	砂糖業史	Sugar industry history
第 10 回	塩業史	Salt industry history
第 11 回	都市打毀し	House destruction
第 12 回	農兵	Farmer's soldier
第 13 回	大久保利通	Okubo Tshimiti
第 14 回	まとめ	Summary

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

報告は事前に当てるので、その準備を行う。もちろん、論文を読んだり、史料を読んだうえでのぞまなければならない。報告担当者でない場合でも、当該テーマについて、事前に予習しておくこと。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

必要に応じてその都度指示する。

【参考書】

必要に応じてその都度指示する。

【成績評価の方法と基準】

各回に課せられた報告内容と議論の質（100 %）

【学生の意見等からの気づき】

単位を目的とするのであれば、履修しないで欲しい。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【日本社会経済史】

「近世後期、広島藩の経済政策思想」『日本経済思想史研究』17、2017 年

【日本金融史】

「戦後直後の中小企業金融論議」(『青山経済論叢』68 - 4、2017 年)

【近世社会論】

「二か領用水の展開と水争い」中央大学人文科学研究科編『地域史研究の今日的課題』(中央大学出版会、2018 年 3 月)

【日本経済思想史】

『国益思想の源流』(同成社、2016 年)

【Outline (in English)】

Outline and objectives

Miscellaneous problems of early modern history study. It's based on each person's research subject and interest. The problem of a modern history study is made clear on it. A member of a class thinks what to do clearly from the interest. And I aim to understand its scientific point.

Goal

What you'd like to do by a study is made clear. I'll can read a thesis critically.

Method

Report and argument. When it's possible, a training camp is considered.

Work to be done outside of class

A thesis is read beforehand.

Textbooks

It's directed as the need arises.

References

It's directed as the need arises.

Grading criteria

The quality of the report contents and the argument

Changes following student comment

Only I don't give a grade in a destination.

HIS500B4

日本近世史特殊研究Ⅲ

西沢 淳男

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

江戸幕府の地方行政官である郡代の日記を講読します。個人の日記を通して、支配所であった飛騨一國（越前・美濃も含む）の地誌・風俗・民俗・物価・気象・動植物や、民政・行政、家族、山村・漁村生活を知る。また、地方行政の立案・実行過程についても具体的に知ることを目的とする。

【到達目標】

日本近世史社会の諸様相を史料を通して学びながら、生きた地方の町や農・山村社会の具体相を知り、各自の問題関心を高め、個々の研究テーマに対する研究能力を高めていきます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

江戸幕府郡代であった豊田友直の日記を講読します。飛騨高山在勤の地方官であった友直を通して、江戸時代の社会・文化を読み解いて行きます。史料で読み解く史実の広がり、各自の研究を進める上でも役立つでしょう。発表は輪読・発表・討議形式で進めます。授業はオンライン授業で行います。課題や発表に対するフィードバックは基本的に授業内で行い、場合により資料等を配信し共有化を図ります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	自己紹介、授業方法の説明、史料講読の範囲と発表順序の決定、その他
第 2 回	豊田友直と在勤日記について	教員による代官制度と豊田友直及び日記についての概要講義
第 3 回	「豊田友直日記」(1)	日記の講読と質疑・応答
第 4 回	「豊田友直日記」(2)	日記の講読と質疑・応答
第 5 回	「豊田友直日記」(3)	日記の講読と質疑・応答
第 6 回	「豊田友直日記」(4)	日記の講読と質疑・応答
第 7 回	「豊田友直日記」(5)	日記の講読と質疑・応答
第 8 回	「豊田友直日記」(6)	日記の講読と質疑・応答
第 9 回	「豊田友直日記」(7)	日記の講読と質疑・応答
第 10 回	「豊田友直日記」(8)	日記の講読と質疑・応答
第 11 回	「豊田友直日記」(9)	日記の講読と質疑・応答
第 12 回	「豊田友直日記」(10)	日記の講読と質疑・応答
第 13 回	「豊田友直日記」(11)	日記の講読と質疑・応答
第 14 回	「豊田友直日記」(12)	日記の講読と質疑・応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。日記の講読は、各々の分担について、①日記上の人物・事項の解説、②史料解釈、③関連研究の紹介、④史料内容の発展ですので、十分準備すると共に、担当以外の部分も各自読み込んでおくこと。また、既出事項についても十分に復読し理解しておくこと。

【テキスト（教科書）】

西沢淳男『飛騨郡代豊田友直在勤日記』1 (岩田書院、2019 年)7,000 円。必要に応じて教員がコピーを配付します。購入希望の場合は、教員より 3 割引で購入できます。

【参考書】

西沢淳男『代官の日常生活』(角川ソフィア文庫、2015 年)920 円。その他は、授業時に紹介します。

【成績評価の方法と基準】

各自の発表と討論参加 (70 %)、平常点 (30 %)

【学生の意見等からの気づき】

より日記の内容が理解できるように、図版等も積極的に提示していきたい。

【担当教員の専門分野等】

https://www.tcue.ac.jp/professor/nishizawa_atsuo.html

【Outline (in English)】

(Course outline)

This class, you will read the diary of a local official of the Edo Shogunate.

(Learning Objectives)

The goals of this course are to understand the local life and culture of the Edo period.

(Learning activities outside of classroom)

Students will be expected to read and review the historical materials thoroughly. Your study time will be more than four hours for a class.

(Grading Criteria /Policies)

Your overall grade in the class will be decided based on the following.

Presentation and discussion participation : 70%, normal score:30%

HIS500B4

日本近世史特殊研究Ⅳ

西沢 淳男

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

江戸幕府の地方行政官である郡代の日記を講読します。個人の日記を通して、支配所であった飛騨一國（越前・美濃も含む）の地誌・風俗・民俗・物産・気象・動植物や、民政・行政、家族、山村・漁村生活を知る。また、地方行政の立案・実行過程についても具体的に知ることを目的とする。

【到達目標】

日本近世史社会の諸様相を史料を通して学びながら、生きた地方の町や農・山村社会の具体相を知り、各自の問題関心を高め、個々の研究テーマに対する研究能力を高めていきます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

江戸幕府郡代であった豊田友直の日記を講読します。飛騨高山在勤の地方官であった友直を通して、江戸時代の社会・文化を読み解いて行きます。史料で読み解く史実の広がり、各自の研究を進める上でも役立つでしょう。発表は輪読・発表・討議形式で進めます。授業はオンライン授業で行います。フィードバックは基本的に授業内で行い、場合により資料等を配信し共有化を図ります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	自己紹介、授業方法の説明、史料講読の範囲と発表順序の決定、その他
第 2 回	豊田友直と在勤日記について	教員による代官制度と豊田友直及び日記についての概要講義 新規受講者がいない場合は講読とします。
第 3 回	「豊田友直日記」1	日記の講読と質疑・応答
第 4 回	「豊田友直日記」2	日記の講読と質疑・応答
第 5 回	「豊田友直日記」3	日記の講読と質疑・応答
第 6 回	「豊田友直日記」4	日記の講読と質疑・応答
第 7 回	「豊田友直日記」5	日記の講読と質疑・応答
第 8 回	「豊田友直日記」6	日記の講読と質疑・応答
第 9 回	「豊田友直日記」7	日記の講読と質疑・応答
第 10 回	「豊田友直日記」8	日記の講読と質疑・応答
第 11 回	「豊田友直日記」9	日記の講読と質疑・応答
第 12 回	「豊田友直日記」10	日記の講読と質疑・応答
第 13 回	「豊田友直日記」11	日記の講読と質疑・応答
第 14 回	「豊田友直日記」12	日記の講読と質疑・応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。日記の講読は、各々の分担について、①日記上の人物・事項の解説、②史料解釈、③関連研究の紹介、④史料内容の発展ですので、十分準備すると共に、担当以外の部分も各自読み込んでおくこと。また、既出事項についても十分に復読し理解しておくこと。

【テキスト（教科書）】

西沢淳男『飛騨郡代豊田友直在勤日記』1（岩田書院、2019 年）7,000 円。必要に応じて教員がコピーを配付します。購入希望の場合は、教員より 3 割引で購入できます。

【参考書】

西沢淳男『代官の日常生活』（角川ソフィア文庫、2015 年）920 円。その他は、授業時に紹介します。

【成績評価の方法と基準】

各自の発表と討論参加 (70 %)、平常点 (30 %)

【学生の意見等からの気づき】

より日記の内容が理解できるように、図版等も積極的に提示していきたい。

【担当教員の専門分野等】

https://www.tcue.ac.jp/professor/nishizawa_atsuo.html

【Outline (in English)】

(Course outline)

This class, you will read the diary of a local official of the Edo Shogunate.

(Learning Objectives)

The goals of this course are to understand the local life and culture of the Edo period.

(Learning activities outside of classroom)

Students will be expected to read and review the historical materials thoroughly. Your study time will be more than four hours for a class.

(Grading Criteria /Policies)

Your overall grade in the class will be decided based on the following.

Presentation and discussion participation : 70%, normal score:30%

HIS500B4

日本近代史特殊研究 I

内藤 一成

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本近現代史では、新たな史料が発掘、公開されることにより、研究水準が引き上げられ、新たな議論が展開されることが珍しくない。授業では、最新の史料をテキストに、内容を分析しながら議論を深めていく。新史料を場として最先端の研究に取り組むスキルを身につけることをめざす。

【到達目標】

新たに発掘、公開された史料を場として、①歴史学的に有効な事実や問題を見出せるようになる、②従来の研究を再確認し、適切な批判ができるようになる、③独創的な研究テーマを考案できるようにする、ことを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義と演習、両方式を折衷させる。テキストをもとに個人またはグループにより発表を行い、引き続き教員・学生によるディスカッションを行う。各回の司会は発表者・教員以外の1名が担当する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	講義に関する全体の説明、注意点など
第2回	昭和天皇研究に関する解説	教員による解説
第3回	田島道治と宮内府（宮内庁）に関する解説	教員による解説
第4回	発表（昭和24年その1）	テキストに関する発表とディスカッション1
第5回	発表（昭和24年その2）	テキストに関する発表とディスカッション2
第6回	発表（昭和24年その3）	テキストに関する発表とディスカッション3
第7回	発表（昭和24年その4）	テキストに関する発表とディスカッション4
第8回	発表（昭和24年その5）	テキストに関する発表とディスカッション5
第9回	発表（昭和25年その1）	テキストに関する発表とディスカッション6
第10回	発表（昭和25年その2）	テキストに関する発表とディスカッション7
第11回	発表（昭和25年その3）	テキストに関する発表とディスカッション8
第12回	発表（昭和25年その4）	テキストに関する発表とディスカッション9
第13回	発表（昭和25年その5）	テキストに関する発表とディスカッション10
第14回	まとめ	全体総括と質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストの予習・復習は平素よりコンスタントに進めておく。発表では発表者以外の学生も積極的な議論が行えるようレジュメの内容を予習しておく。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

『昭和天皇拝謁記』1（岩波書店、2021年）定価3,300円

【参考書】

宮内庁編『昭和天皇実録』全 19 巻（東京書籍、2015～19 年）

【成績評価の方法と基準】

発表内容、授業時の積極性などを総合し、これを平常点（100 %）として評価する。

【学生の意見等からの気づき】

現時点ではないが、授業が活発な議論の場となるよう努める。

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムの利用が可能な IT 機器

【その他の重要事項】

- ・「日本近代史特殊研究」Ⅱ（秋学期）との継続履修を推奨する。
- ・やむを得ない事情により授業を欠席する場合（介護体験実習、教育実習など）には、その事情を証明する文書を提出すること。新型コロナウイルス感染防止策として教室での対面授業を行わない場合には、授業内容を変更することがある。
- ・授業に関連する連絡は、学習支援システムの「お知らせ」サイトや、「授業内掲示板」サイトを利用して行うので、見落とさないようにすること。
- ・担当教員への直接連絡にはメールを利用すること。担当教員のメールアドレスは、学習支援システムに掲示する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本近現代史

<研究テーマ>

近現代の政治と文化

<主要研究業績>

『河井弥八日記（戦後篇）』全 5 巻（信山社出版）、『戦後における国土保全論の勃興と国民啓蒙』（『土木史研究. 講演集』Vol.39）

【Outline (in English)】

(Course outline)

In this course, students will use the latest historical materials to analyze the contents and hold discussions to improve their research abilities. You will work on the latest themes with the goal of being able to do creative research.

(Learning Objectives)

By the end of the course, students should be able to do the followings:

- A.Be able to notice historical facts and problems of academic significance.
- B.Acquire the ability to critique previous research.
- C.Be able to create an original research theme.

(Learning activities outside of classroom)

Students should read the materials distributed in advance.Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

(Grading Criteria/Policy)

Final grades are calculated according to the process of presentation, discussion and in-class contribution.Combine all elements to make 100%

HIS500B4

日本近代史特殊研究Ⅱ

内藤 一成

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本近現代史では、新たな史料が発掘、公開されることにより、研究水準が引き上げられ、新たな議論が展開されることが珍しくない。授業では、最新の公開史料をテキストに、内容を分析しながら議論を深めていく。新史料を場として最先端の研究に取り組むスキルを身につけることをめざす。

【到達目標】

新たに発掘、公開された史料を場として、①歴史的に有効な事実や問題を見出せるようになる、②従来の研究を再確認し、適切な批判ができるようになる、③独創的な研究テーマを考案できるようにする、ことを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義と演習、両方を折衷させる。テキストをもとに個人またはグループにより発表を行い、引き続き教員・学生によるディスカッションを行う。各回の司会は発表者・教員以外の 1 名が担当する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	講義に関する全体の説明、注意点など
第 2 回	昭和天皇と周辺人物に関する解説	教員による解説
第 3 回	発表（昭和 25 年その 1）	テキストに関する発表とディスカッション 1
第 4 回	発表（昭和 25 年その 2）	テキストに関する発表とディスカッション 2
第 5 回	発表（昭和 25 年その 3）	テキストに関する発表とディスカッション 3
第 6 回	発表（昭和 25 年その 4）	テキストに関する発表とディスカッション 4
第 7 回	発表（昭和 25 年その 5）	テキストに関する発表とディスカッション 5
第 8 回	発表（昭和 26 年その 1）	テキストに関する発表とディスカッション 6
第 9 回	発表（昭和 26 年その 2）	テキストに関する発表とディスカッション 7
第 10 回	発表（昭和 26 年その 3）	テキストに関する発表とディスカッション 8
第 11 回	発表（昭和 26 年その 4）	テキストに関する発表とディスカッション 9
第 12 回	発表（昭和 26 年その 5）	テキストに関する発表とディスカッション 10
第 13 回	発表（昭和 26 年その 6）	テキストに関する発表とディスカッション 11
第 14 回	まとめ	全体総括と質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストの予習・復習は平素よりコンスタントに進めておく。発表では発表者以外の学生も積極的な議論が行えるようレジュメの内容を予習しておく。本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

『昭和天皇拝謁記』2（岩波書店、2022 年）定価 3,300 円

【参考書】

宮内庁編『昭和天皇実録』全 19 巻（東京書籍、2015～19 年）

【成績評価の方法と基準】

発表内容、授業時の積極性などを総合化し、これを平常点（100 %）として評価する。

【学生の意見等からの気づき】

現時点ではないが、授業が活発な議論の場となるよう努める。

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムが利用できる IT 機器

【その他の重要事項】

・「日本近代史特殊研究」A I（春学期）との継続履修を推奨する。
 ・やむを得ない事情により授業を欠席する場合（介護体験実習、教育実習など）には、その事情を証明する文書を提出すること。新型コロナウイルス感染防止策として教室での対面授業を行わない場合には、授業内容を変更することがある。
 ・授業に関連する連絡は、学習支援システムの「お知らせ」サイトや、「授業内掲示板」サイトを利用して行うので、見落とさないようにすること。
 ・担当教員への直接連絡にはメールを利用すること。担当教員のメールアドレスは、学習支援システムに掲示する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本近現代史

<研究テーマ>

近現代の政治と文化

<主要研究業績>

『河井弥八日記（戦後篇）』全 5 巻（信山社出版）、『戦後における国土保全論の勃興と国民啓蒙』（『土木史研究. 講演集』Vol.39）

【Outline (in English)】

(Course outline)

In this course, students will use the latest historical materials to analyze the contents and hold discussions to improve their research abilities. You will work on the latest themes with the goal of being able to do creative research.

(Learning Objectives)

By the end of the course, students should be able to do the followings:

- A.Be able to notice historical facts and problems of academic significance.
- B.Acquire the ability to critique previous research.
- C.Be able to create an original research theme.

(Learning activities outside of classroom)

Students should read the materials distributed in advance.Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. (Grading Criteria /Policy)

Final grades are calculated according to the process of presentation, discussion and in-class contribution.Combine all elements to make 100%

HIS500B4

日本近代史特殊研究Ⅲ

森田 貴子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

明治期の日本について、法律・経済・社会・教育など、多角的な制度変革の観点から、近代社会の形成について、史料から論点を構成し、検討する。「法規分類大全」等を基本史料とする。

【到達目標】

近代日本の諸制度について、①関連する文献を読み、研究史を理解する能力、②史料を自力で収集し、史料批判を行う技術、を習得することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

テーマと史料は、第 1 回目に提示する。受講者は関心のあるテーマを選び、第 3 回目以降、各自、担当したテーマについて、研究課題を設定し、文献・史料を調査し、研究史上における意味、問題点を提示し、論点を発展させて報告する。

受講者の人数により、適宜、各自の研究テーマに関する研究発表を行う。

発表に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業について。報告担当者の決定など。
第 2 回	史料読解と研究発表	近代天皇制（1）
第 3 回	史料読解と研究発表	近代天皇制（2）
第 4 回	史料読解と研究発表	官僚制（1）
第 5 回	史料読解と研究発表	官僚制（2）
第 6 回	史料読解と研究発表	軍隊（1）
第 7 回	史料読解と研究発表	軍隊（2）
第 8 回	史料読解と研究発表	教育（1）
第 9 回	史料読解と研究発表	教育（2）
第 10 回	史料読解と研究発表	教育（3）
第 11 回	史料読解と研究発表	経済（1）
第 12 回	史料読解と研究発表	経済（2）
第 13 回	史料読解と研究発表	経済（3）
第 14 回	史料読解と研究発表	経済（4）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回の授業で取り上げる基本史料について、各自あらかじめ読み、論点を考えてくる。

本授業の準備・復習時間は各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

適宜プリントを配布する。

【参考書】

適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

報告内容（70 %）、コメント等の授業への参加度（30 %）。

【学生の意見等からの気づき】

2021 年度とテーマを変更しています。

【学生が準備すべき機器他】

資料配布・Zoom 接続が可能なメールアドレス・パソコンを準備して下さい。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近現代史

＜研究テーマ＞土地制度、近現代経済史、近代都市史

＜主要研究業績＞

森田貴子『近代土地制度と不動産経営』（塙書房、2007 年）

森田貴子『三野村利左衛門と益田孝——三井財閥の礎を築いた人びと』（山川出版社、2011 年）

森田貴子「華族資本の形成と家政改革——岡山池田家の場合」（高村直助編『明治前期の日本経済——資本主義への道』日本経済評論社、2004 年）

森田貴子「不動産——岡山藩池田家大崎下屋敷の変容」（伊藤毅・吉田伸之編『伝統都市 3 インフラ』東京大学出版会、2010 年）

【Outline (in English)】

This course aims for students to study Japan of the Meiji era from diverse perspectives, including laws, economy, society, education, and to discuss various issues. The goals of this course are to acquire the ability to organize research history and the technique of criticizing historical materials. Students will be expected to have completed the required assignments before/after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class. Your overall grade in the class will be decided based on the following; Research presentation: 70%, in class contribution: 30%.

HIS500B4

日本近代史特殊研究Ⅳ

森田 貴子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

明治期の日本について、法律・経済・社会・教育など、多角的な制度変革の観点から、近代社会の形成について、史料から論点を構成し、検討する。「法規分類大全」等を基本史料とする。

【到達目標】

近代日本の諸制度について、①関連する文献を読み、研究史を理解する能力、②史料を自力で収集し、史料批判を行う技術、を習得することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

テーマと史料は、第 1 回目に提示する。受講者は関心のあるテーマを選び、第 2 回目以降、各自、担当したテーマについて、研究課題を設定し、文献・史料を調査し、研究史上における意味、問題点を提示し、論点を発展させて報告する。

受講者の人数により、適宜、各自の研究テーマに関する研究発表を行う。

発表に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業について。報告担当者の決定など。
第 2 回	史料読解と研究発表	近代天皇制（1）
第 3 回	史料読解と研究発表	近代天皇制（2）
第 4 回	史料読解と研究発表	官僚制（1）
第 5 回	史料読解と研究発表	官僚制（2）
第 6 回	史料読解と研究発表	軍隊（1）
第 7 回	史料読解と研究発表	軍隊（2）
第 8 回	史料読解と研究発表	教育（1）
第 9 回	史料読解と研究発表	教育（2）
第 10 回	史料読解と研究発表	教育（3）
第 11 回	史料読解と研究発表	経済（1）
第 12 回	史料読解と研究発表	経済（2）
第 13 回	史料読解と研究発表	経済（3）
第 14 回	史料読解と研究発表	経済（4）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回の授業で取り上げる基本史料について、各自あらかじめ読み、論点を考えてくる。

本授業の準備・復習時間は各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

適宜プリントを配布する。

【参考書】

適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

報告内容（70 %）、コメント等の授業への参加度（30 %）。

【学生の意見等からの気づき】

2021 年度とテーマを変更しています。

【学生が準備すべき機器他】

オンライン回のために、資料配布・Zoom 接続が可能なメールアドレス・パソコンを準備して下さい。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近現代史

＜研究テーマ＞土地制度、近現代経済史、近代都市史

＜主要研究業績＞

森田貴子『近代土地制度と不動産経営』（塙書房、2007 年）

森田貴子『三野村利左衛門と益田孝——三井財閥の礎を築いた人びと』（山川出版社、2011 年）

森田貴子「華族資本の形成と家政改革——岡山池田家の場合」（高村直助編『明治前期の日本経済——資本主義への道』日本経済評論社、2004 年）

森田貴子「不動産——岡山藩池田家大崎下屋敷の変容」（伊藤毅・吉田伸之編『伝統都市 3 インフラ』東京大学出版会、2010 年）

【Outline (in English)】

This course aims for students to study Japan of the Meiji era from diverse perspectives, including laws, economy, society, education, and to discuss various issues. The goals of this course are to acquire the ability to organize research history and the technique of criticizing historical materials. Students will be expected to have completed the required assignments before/after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class. Your overall grade in the class will be decided based on the following; Research presentation: 70%, in class contribution: 30%.

HIS500B4

日本考古学特殊研究Ⅰ

阿部 朝衛

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

考古学の基礎である編年研究の方法を修得することを目的とする。

【到達目標】

編年研究の基礎的方法を修得し、それを各自が保有する資料へ適用することによってその理解を深める。この過程で、考古学の課題・問題点の把握能力を高める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

テキストの型式学、層位学、編年に関する課題を日本語訳し、実践例を検討して、各自の保有する資料にそれらの方法を適用する。修士 2 年の場合は、状況に応じ、課題の順番を入れ替える。

対面授業の演習形式とし、議論しながら課題内容の理解を深める。また、課題によって講義時間を設ける。講義形式であっても常時、質問を受け付け、議論の発展させ、課題の理解を深める。発表に対するフィードバックは授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	授業方針と基礎的方法論の説明
第 2 回	編年研究の基礎 1	型式学的前提、属性の抽出と操作方法
第 3 回	編年研究の基礎 2	地層累重・地層同定の法則を利用した遺構・遺物の時間軸上での配列
第 4 回	編年研究の基礎 3	型式学、層位学、絶対年代測定値を基にした地域編年
第 5 回	実践的研究の検討 1	モンテリウスの研究 1
第 6 回	実践的研究の検討 2	モンテリウスの研究 2
第 7 回	実践的研究の検討 3	セリエーション 1
第 8 回	実践的研究の検討 4	セリエーション 2
第 9 回	論文の検討 1	旧石器時代論文
第 10 回	論文の検討 2	縄文時代論文
第 11 回	論文の検討 3	弥生時代・他論文
第 12 回	資料の検討 1	旧石器時代資料
第 13 回	資料の検討 2	縄文時代資料
第 14 回	資料の検討 3	弥生時代資料

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

テキストの熟読、課題に関連する論文・各自の保有する資料の検討を求める。

【テキスト（教科書）】

Patterson, T. C. 1994 The Theory and Practice of Archaeology. Prentice Hall, Englewood Cliffs, New Jersey.

上記テキストは複写して配布する。

【参考書】

Renfrew, C. and Barn, P. 1991 Archaeology: Theories, Methods, and Practice. Thames and Hudson, London.

【成績評価の方法と基準】

発表（50 %）とレポート（50 %）をもとに評価。

【学生の意見等からの気づき】

日本語訳を基にした検討は、若干、早めに行う。院生の理解度に応じ、細かな課題を設定する。すでに履修した大学院生の場合、最初の授業で、授業の進め方の検討を行う。

【その他の重要事項】

資料の検討では、各自が保有する資料に主眼をおいて検討する。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

日本旧石器時代、縄文時代

＜研究テーマ＞

先史時代における技術伝承と社会化、子ども考古学、先史時代における石材利用形態

＜主要研究業績＞

「旧石器時代人の利き手の研究法」『日本考古学』23号 2007年
 「道具の原材料と組織化」『考古学ジャーナル』560号 2007年
 「石器のメンテナンス」『縄文時代の考古学』6 2007年 同成社
 「石器製作の技能」『芹沢長介先生追悼考古・民族・歴史学論叢』2008年 六一書房
 「遺跡形成における子供の役割」『新潟県の考古学』Ⅱ 2009年 新潟県考古学会
 「新潟県南部における石器材料資源環境」『帝京史学』25号 2010年
 「子ども考古学の誕生」上下 『考古学雑誌』97-1・2 2012・2013年
 「原人の子どもをめぐる社会」『法政考古学』44 2018年
 「ネアンデルタールの子どもの社会」『法政考古学』46 2020年

【Outline (in English)】

Course outline

The purpose of this study is to learn the method of chronological study, which is the basis of archaeology.

Learning objectives

Students will acquire basic methods of chronological research, apply their abilities to their own archaeological materials, and deepen their understanding.

Learning activities outside of classroom

Preparation and review time for this class is 2 hours each. Students are asked to read through texts and related papers, and to examine their own archaeological materials.

Grading criteria/policy

Grades are judged based on the presentation (50%) and the report (50%).

HIS500B4

日本考古学特殊研究Ⅱ

阿部 朝衛

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

春学期で検討した各課題・方法に関連した資料の検討によって、課題・方法の有効性・援用方法を深く理解することを目的とする。春期パターンソンのテキストを継続して使う。

【到達目標】

春学期の課題における基礎的原理・方法の理解を深め、それを各自が保有する資料に適用することによって実践的な能力の修得を目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

各自の保有する考古学資料に対して、春学期の課題・方法を適用して検討する。あるいは春学期の課題・方法をもとに論文書評を行う。その結果を従来の成果と比較し、課題・方法の意義を討議して考察する。

最初の数回の授業は、パターンソンのテキストの読解を行う。修士2年の場合、状況に応じて課題の順番を入れ替える。

対面授業の演習形式とし、議論しながら課題内容の理解を深める。また課題によって講義時間を設ける。講義形式であっても常時、質問を受け付け、議論を発展させ、課題内容の理解を深める。発表に対するフィードバックは授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	春学期の課題・方法の整理
第2回	資料・論文の検討 1	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 1
第3回	資料・論文の検討 2	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 2
第4回	資料・論文の検討 3	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 3
第5回	資料・論文の検討 4	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 4
第6回	資料・論文の検討 5	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 5
第7回	資料・論文の検討 6	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 6
第8回	資料・論文の検討 7	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 7
第9回	資料・論文の検討 8	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 8
第10回	資料・論文の検討 9	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 9
第11回	資料・論文の検討 10	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 10
第12回	資料・論文の検討 11	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 11
第13回	資料・論文の検討 12	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 12
第14回	資料・論文の検討 13	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 13

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。上記の課題・方法に関する資料を収集し、検討を加える。

【テキスト（教科書）】

春学期のテキストと同じ。

【参考書】

春学期の参考書と同じ。

【成績評価の方法と基準】

討議（50％）とレポート（50％）を基に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

各課題の原理・方法を大学院生の資料をもとにより集中的に討議する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本旧石器時代、縄文時代

<研究テーマ>

先史時代における技術伝承と社会化、子ども考古学、先史時代における石材利用形態

<主要研究業績>

「旧石器時代人の利き手の研究法」『日本考古学』23号 2007年
「道具の原材料と組織化」『考古学ジャーナル』560号 2007年
「石器のメンテナンス」『縄文時代の考古学』6 2007年 同成社
「石器製作の技能」『芹沢長介先生追悼考古・民族・歴史学論叢』2008年 六一書房

「遺跡形成における子供の役割」『新潟県の考古学』II 2009年 新潟県考古学会

「新潟県南部における石器材料資源環境」『帝京史学』25号 2010年
「子ども考古学の誕生」上下 『考古学雑誌』97-1・2 2012・2013年
「原人の子どもをめぐる社会」『法政考古学』44 2018年
「ネアンデルタールの子どもの社会」『法政考古学』46 2020年

【Outline (in English)】

Course outline

The purpose of this class is to learn the observation viewpoints and methods of relics, which are the basic materials of archaeology. In the second half, stone tools will be used as teaching materials.

Learning objectives

Students analyze materials related to each assignment and method examined in the spring semester. The purpose of this study is to gain a deeper understanding of the effectiveness of research methods.

Learning activities outside of classroom

Preparation and review time for this class is 2 hours each. Students are asked to read through texts and related papers, and to examine their own archaeological materials.

Grading criteria/policy

Grades are judged based on the presentation (50%) and the report (50%).

HIS500B4

日本考古学特殊研究Ⅲ

小倉 淳一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

考古学資料を扱って研究を行うための理論と方法について実践的に学び身につけることを目標とする。実物資料から情報を引き出すこと、その情報から考古学的知見をいかに引き出すかがテーマとなる。

【到達目標】

物質文化に表象される人間集団を検討する際に、多面的な見方によって説明できるようになる。

実際の遺跡から出土した資料から必要な情報を引き出し、論文ならびに発掘調査報告書に必要な水準で記録することができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

近年における考古学資料の増加と検討の進行によって、原始・古代の全体像は大きく変わりつつある。物質文化によって復原される当時の社会を認識するためには、資料に対する見方や検討方法を一層整備することが求められる。また、研究論文を作成するためには、資料を表現する技術を高める必要がある。本講義では考古学資料から情報を引き出すための方法論について、資料調査（整理・修復）・講読と発表を通じて実践・検討する。各テーマにおける受講者の実習・発表・討論を基礎とする。

1）考古学資料の整理・修復等の方法に関する実践・検討

2）考古学の方法論に関する論文・書籍の講読

授業形式は対面授業を基本とする。

レポート等のフィードバックについては授業内に行くかオフィス・アワー（月曜5限）で対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	授業概要	概要紹介・授業計画の提示
第2回	実習資料の概要把握	対象資料の選定と資料整理に関わる予備調査
第3回	資料整理の実践（1）	土器の拓本
第4回	資料整理の実践（2）	土器の断面実測
第5回	資料整理の実践（3）	写真撮影
第6回	資料整理の実践（4）	事実記載
第7回	考古学方法論に関する文献講読（1）	『考古学の方法』（第1章）講読（1）
第8回	考古学方法論に関する文献講読（2）	『考古学の方法』（第1章）講読（2）
第9回	考古学方法論に関する文献講読（3）	『考古学の方法』（第2章）講読（1）
第10回	考古学方法論に関する文献講読（4）	『考古学の方法』（第2章）講読（2）
第11回	考古学方法論に関する文献講読（5）	『考古学の方法』（第3章）講読（1）
第12回	考古学方法論に関する文献講読（6）	『考古学の方法』（第3章）講読（2）
第13回	考古学資料の見学	博物館等での考古学資料の見学と解説
第14回	成果（レポート）提出と講評	実習成果レポートの提出、授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

第1回 自己の実習計画の立案

第2回 選定した考古学資料に関する学習と整理方針のまとめ

第3回～第6回 実習内容の復習 用具・用材の特性の理解
 第7回～第12回 テキスト指定箇所の精読と発表資料の作成
 第13回 見学対象資料についての事前学習
 第14回 成果リポートの執筆・作成

【テキスト（教科書）】

V.G. チャイルド／近藤義郎訳（1981）『考古学の方法』河出書房新社

【参考書】

コリン・レンフルー、ポール・バーン／池田裕ほか訳（2007）『考古学 理論・方法・実践』東洋書林

ブルース・G・トリッガー／下垣仁志訳（2015）『考古学的思考の歴史』同成社

その他、授業内で適宜指示する。関連文献を渉猟する能力も求める。

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的な貢献 20 %（実習・講読への積極的な参加・平常点）
 個別発表の水準 30 %（発表資料の完成度、発表態度、文献要約の精度、問題点の指摘、総合的な理解）
 討論の成果 20 %（指摘した問題点や読解にもとづく議論の展開、新たな視点・論点の提示、議論全体の総括）

期末リポート（成果報告） 30 %（資料整理技術の精度、資料解釈と関連資料の適切な位置づけ、報告文の完成度）

【学生の意見等からの気づき】

前年度実績なし（本科目では授業改善アンケートを実施しなかった）。

【その他の重要事項】

※受講人数や到達度によっては授業内容を変更することもあるので注意すること。

※担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても検討・解説する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

日本考古学

〈研究テーマ〉

東日本弥生文化の研究

〈主要研究業績〉

「小シーボルトと日本考古学の黎明期」『小シーボルトと日本の考古・民族学の黎明』（同成社 2011 年）

「印旛沼周辺地域の宮ノ台式土器出土遺跡の変遷—壺形土器を中心として—」『法政考古学』第 40 集記念論文集（法政考古学会 2014 年）

「関東地方における弥生時代の溝」『論集 環濠集落の諸問題 2015』（環濠（壕）論集刊行会 2015 年）

「弥生時代中期の南関東地方における環濠の造営時期」『法政考古学』第 43 集（法政考古学会 2017 年）

「早瀬川流域における弥生時代中期環濠集落の形成時期—権田原遺跡の検討を中心として—」『法政考古学』第 45 集（法政考古学会 2019 年）

「東日本の環濠集落からみた午王山遺跡」『埼玉県和光市 午王山遺跡総括報告書』（和光市教育委員会 2019 年）

【Outline (in English)】

The aim of this course is to provide the students with knowledge on the theory of studies and the methods of archaeology.

Students will be able to examine and explain archaeological materials from multiple perspectives. Students will be able to write papers based on archaeological materials to the required standard.

The standard preparation and review time by students is 2 hours each.

The final grade will be calculated based on the following factors: normal score (20%), results of the research presentation (30%), participation in the discussion (20%), and the final report (30%).

HIS500B4

日本考古学特殊研究Ⅳ

小倉 淳一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

考古学資料を扱って研究を行うための理論と方法について実践的に学び身につけることを目標とする。実物資料から情報を引き出すこと、その情報から考古学的知見をいかに引き出すかがテーマとなる。

【到達目標】

物質文化に表象される人間集団を検討する際に、多面的な見方によって説明できるようになる。

実際の遺跡から出土した資料から必要な情報を引き出し、論文ならびに発掘調査報告書に必要な水準で記録することができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

近年における考古学資料の増加と検討の進行によって、原始・古代の全体像は大きく変わりつつある。物質文化によって復原される当時の社会を認識するためには、資料に対する見方や検討方法を一層整備することが求められる。また、研究論文を作成するためには、資料を表現する技術も高める必要がある。本講義では考古学資料から得られる情報を表現するための方法について、資料実測・文献講読と発表等を通じて実践・検討する。各テーマにおける受講者の実習・発表・討論を基礎とする。

1）考古学資料の整理・作図の方法に関する実践・検討

2）考古学の方法論に関する論文・書籍の講読

授業形式は対面授業を基本とする。

レポート等のフィードバックについては授業内に行うかオフィス・アワー（月曜 5 限）で対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	授業概要	概要紹介・授業計画の提示
第 2 回	実習資料の検討	対象資料の概要把握と整理方法の検討
第 3 回	資料整理の実践（1）	土器の実測
第 4 回	資料整理の実践（2）	石器の実測
第 5 回	資料整理の実践（3）	資料のトレース
第 6 回	資料整理の実践（4）	デジタルトレースの概要と実技
第 7 回	資料整理の実践（5）	挿図・図版の構成
第 8 回	考古学方法論に関する文献講読（1）	『考古学の方法』（第 4 章）講読（1）
第 9 回	考古学方法論に関する文献講読（2）	『考古学の方法』（第 4 章）講読（2）
第 10 回	考古学方法論に関する文献講読（3）	『考古学の方法』（第 5 章）講読（1）
第 11 回	考古学方法論に関する文献講読（4）	『考古学の方法』（第 5 章）講読（2）
第 12 回	考古学方法論に関する文献講読（5）	『考古学の方法』（第 6 章）講読（1）
第 13 回	考古学方法論に関する文献講読（6）	『考古学の方法』（第 6 章）講読（2）
第 14 回	成果（レポート）提出と講評	実習成果レポートの提出、授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

第 1 回 自己の実習計画の立案

第 2 回 発掘調査報告書等からみる報告計画のまとめ

第 3 回～第 4 回 実習内容の復習

第5回～第7回 トレースの復習と図化の完了
 第8回～第13回 テキスト指定箇所の精読と発表資料の作成
 第14回 成果リポートの執筆・作成

【テキスト（教科書）】

V.G. チャイルド／近藤義郎訳（1981）『考古学の方法』河出書房新社

【参考書】

コリン・レンフルー、ポール・バーン／池田裕ほか訳（2007）『考古学 理論・方法・実践』東洋書林

ブルース・G・トリッガー／下垣仁志訳（2015）『考古学的思考の歴史』同成社

その他、授業内で適宜指示する。関連文献を渉猟する能力も求める。

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的な貢献 20 %（実習・講読への積極的な参加・平常点）
 個別発表の水準 30 %（発表資料の完成度、発表態度、文献要約の精度、問題点の指摘、総合的な理解）

討論の成果 20 %（指摘した問題点や読解にもとづく議論の展開、新たな視点・論点の提示、議論全体の総括）

期末リポート（成果報告） 30 %（資料整理技術の精度、資料解釈と関連資料の適切な位置づけ、報告文の完成度）

【学生の意見等からの気づき】

前年度実績なし（本科目では授業改善アンケートを実施しなかった）。

【その他の重要事項】

※受講人数や到達度によっては授業内容を変更することもあるので注意すること。

※担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても検討・解説する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

日本考古学

〈研究テーマ〉

東日本弥生文化の研究

〈主要研究業績〉

「小シーボルトと日本考古学の黎明期」『小シーボルトと日本の考古・民族学の黎明』（同成社 2011 年）

「印旛沼周辺地域の宮ノ台式土器出土遺跡—壺形土器を中心として—」『法政考古学』第 40 集記念論文集（法政考古学会 2014 年）

「関東地方における弥生時代の溝」『論集 環濠集落の諸問題 2015』（環濠（壕）論集刊行会 2015 年）

「弥生時代中期の南関東地方における環濠の造営時期」『法政考古学』第 43 集（法政考古学会 2017 年）

「早瀬川流域における弥生時代中期環濠集落の形成時期—権田原遺跡の検討を中心として—」『法政考古学』第 45 集（法政考古学会 2019 年）

「東日本の環濠集落からみた午王山遺跡」『埼玉県和光市 午王山遺跡総括報告書』（和光市教育委員会 2019 年）

【Outline (in English)】

The aim of this course is to provide the students with knowledge on the theory of studies and the methods of archaeology.

Students will be able to examine and explain archaeological materials from multiple perspectives. Students will be able to write papers based on archaeological materials to the required standard.

The standard preparation and review time by students is 2 hours each.

The final grade will be calculated based on the following factors: normal score (20%), results of the research presentation (30%), participation in the discussion (20%), and the final report (30%).

HIS600B4

日本古代史演習Ⅰ

小口 雅史

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

東アジア古代世界では、社会の分析に際して、租税制度とならんで土地制度の分析が非常に重要な位置を占める。基本史料としては土地法である田令について、その注釈書の集大成である、「田令集解」を、順次、条文配列に従って読み解いていく。その際に、六国史などの正史や他の法制史料（律や類聚三代格）、あるいは関連古文書などからわかる事例についても、おりにふれて考えていく。

【到達目標】

日本古代史の基本史料の一つである『令集解』を自力で読解し、研究に十分に活用できる能力を養うとともに、法制史料から社会の実態を読み取る方法を取得したり、中国の社会の実態と比較する方法を取得することを目的とします。単に発表者の報告を聞くだけではなく、常に報告者とは違った見方を試みて討論に持ち込む習慣を身につけます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業形式は対面授業を原則とする。春学期は第 22 条より開始する。あらかじめ条文ごとに担当を指定するので、上記の目標をふまえて事前に十分予習してから本研究に臨むことを期待する。事前に取り組んでおく研究内容としては、対象条文の諸写本間の校合、書き下し、現代語訳、語句註、大宝令文の復原、対象条文に基づく論点整理、先行研究の紹介、自分なりの意見などである。発表へのフィードバックについては、次の授業の初めに、前回の授業で提出資料からいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整、概説
第 2 回	田令集解第 31 条在外諸司職分田条講読 (1)	田令集解第 31 条在外諸司職分田条 A 部分の論理展開 1
第 3 回	田令集解第 31 条在外諸司職分田条講読 (2)	田令集解第 31 条在外諸司職分田条 A 部分の論理展開 2
第 4 回	田令集解第 31 条在外諸司職分田条講読 (3)	古記による大宝田令第 31 条在外諸司職分田条の復原
第 5 回	田令集解第 31 条在外諸司職分田条講読 (4)	田令集解第 31 条在外諸司職分田条の論理展開
第 6 回	田令集解第 31 条在外諸司職分田条講読 (5)	中央官職田と地方の在外職分田の比較
第 7 回	田令集解第 32 条郡司職分田条講読 (1)	田令集解第 32 条郡司職分田条 A 部分の論理展開
第 8 回	田令集解第 32 条郡司職分田条講読 (2)	田令集解第 32 条郡司職分田条 B 部分の論理展開
第 9 回	田令集解第 32 条郡司職分田条講読 (3)	古記による大宝田令第 32 条郡司職分田条の復原
第 10 回	田令集解第 32 条郡司職分田条講読 (4)	郡司職分田の特性
第 11 回	田令集解第 32 条郡司職分田条講読 (5)	地方官としての郡司の特性
第 12 回	田令集解第 33 条駅田条講読 (1)	田令集解第 33 条駅田条 A 部分の論理展開
第 13 回	田令集解第 33 条駅田条講読 (2)	田令集解第 33 条駅田条 B 部分の論理展開

第 14 回 職分田（職田）の特性 半年間の講読を踏まえて職分田とは何かについて意見交換を行う。
修論執筆に資する内容にする。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストはかなり難解なので、発表者はいうまでもないが、他の参加者も事前に必ず担当テキストを熟読しておくこと。発表者の準備学習は標準的に 2 時間程度、聴講者の準備学習は標準的に 1 時間程度を要する。復習はそれぞれ 1 時間程度。発表者は、発表終了後に再構成した発表レジュメをアップロードしてもらうが、それに別途 1 時間程度。

【テキスト（教科書）】

『新訂増補国史大系 令集解』（吉川弘文館）
鷹司本令集解マイクロフィルム紙焼

【参考書】

『日本思想大系 律令』（岩波書店）、国立歴史民俗博物館 蔵 貴重典籍叢書〈歴史篇〉第一巻～第六巻『令集解』。
その他、条文内容に応じて随時指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表が中心となるが、難解な田令集解を構成する諸法家の説を正しく理解できたか、諸法家の間の論点の違いを明確に示せたか、それにもとづいて田制についての論理を正しく構築できたかを重視する（75 % 相当）。また討論においては自主的な発言の内容を重視する（25 % 相当）。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし

【学生が準備すべき機器他】

とくになし

【その他の重要事項】

ゼミでの成果を何らかの形で活字化し学界へ公開することを検討しているので頑張ってください。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉
日本古代史・法制史・北方史・国際日本学
〈研究テーマ〉
日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史
〈主要研究業績〉
2010 年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』
2008 年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院
2008 年、「近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって」『古文書研究』66
2007 年、『「在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録」のその後－FileMaker による Database の Web 公開の一例として』『漢字文献情報処理研究』8

【Outline (in English)】

Course outline : In the ancient East Asia, when analyzing the society, analysis of the land system occupies a very important position.

Learning Objectives : We will study the fundamental historical code "Deryo" and its annotation "Denryo-Shuge" in turn.

Learning activities outside of classroom : Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting . Your study time will be more than five hours for a class.

Grading Criteria /Policies : Grading will be decided based on lab reports (85 %) , and the quality of the students' experimental performance in the lab (15 %). code "Deryo" and its annotation "Denryo-Shuge" in turn.

HIS600B4

日本古代史演習Ⅱ

小口 雅史

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

東アジア古代世界では、社会の分析に際して、租税制度とならんで土地制度の分析が非常に重要な位置を占める。基本史料としては土地法である田令について、その注釈書の集大成である、「田令集解」を、順次、条文配列に従って読み解いていく。その際に、六国史などの正史や他の法制史料（律や類聚三代格）、あるいは関連古文書などからわかる事例についても、おりにふれて考えていく。

【到達目標】

日本古代史の基本史料の一つである『令集解』を自力で読解し、研究に十分に活用できる能力を養うとともに、法制史料から社会の実態を読み取る方法を取得したり、中国の社会の実態と比較する方法を取得することを目的とします。単に発表者の報告を聞くだけではなく、常に報告者とは違った見方を試みて討論に持ち込む習慣を身につけてもらいます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業形式は対面授業を原則とする。秋学期は第 25 条より開始する。あらかじめ条文ごとに担当を指定するので、上記の目標をふまえて事前に十分予習してから本研究に臨むことを期待する。事前に取り組んでおく研究内容としては、対象条文の諸写本間の校合、書き下し、現代語訳、語句註、大宝令文の復原、対象条文に基づく論点整理、先行研究の紹介、自分なりの意見などである。発表へのフィードバックについては、次の授業の初めに、前回の授業で提出資料からいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整、概説
第 2 回	田令集解第 33 条駅田条講読 (3)	古記による大宝田令第 33 条駅田条の復原
第 3 回	田令集解第 33 条駅田条講読 (4)	田令集解第 33 条駅田条の論理展開
第 4 回	田令集解第 33 条駅田条講読 (5)	駅田と駅家の関係
第 5 回	田令集解第 34 条在外諸司条講読 (1)	田令集解第 34 条在外諸司条 A 部分の論理展開
第 6 回	田令集解第 34 条在外諸司条講読 (2)	田令集解第 34 条在外諸司条 B 部分の論理展開
第 7 回	田令集解第 34 条在外諸司条講読 (3)	古記による大宝田令第 34 条在外諸司条の復原
第 8 回	田令集解第 34 条在外諸司条講読 (4)	古記による大宝田令第 34 条在外諸司条の復原
第 9 回	田令集解第 34 条在外諸司条講読 (5)	早川庄八による大宝令制分析批判
第 10 回	田令集解第 35 条外官新至条講読 (1)	田令集解第 35 条外官新至条 A 部分の論理展開 1
第 11 回	田令集解第 35 条外官新至条講読 (2)	田令集解第 35 条外官新至条 A 部分の論理展開 2
第 12 回	田令集解第 35 条外官新至条講読 (3)	古記による大宝田令第 35 条外官新至条の復原
第 13 回	田令集解第 35 条外官新至条講読 (4)	新任者の田地耕営の問題

第14回 地方に置かれた公田の 半年間の講読を踏まえて班田制の
分析 地方における特性について意見交
換を行う。修論執筆に資する内容
にする。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストはかなり難解なので、発表者はいうまでもないが、他の参加者も事前に必ず担当テキストを熟読しておくこと。発表者の準備学習は標準的に2時間程度、聴講者の準備学習は標準的に1時間程度を要する。復習はそれぞれ1時間程度。発表者は、発表終了後に再構成した発表レジュメをアップロードしてもらうが、それに別途1時間程度。

【テキスト（教科書）】

『新訂増補国史大系 令集解』（吉川弘文館）
鷹司本令集解マイクロフィルム紙焼

【参考書】

『日本思想大系 律令』（岩波書店）、国立歴史民俗博物館蔵貴重典籍叢書〈歴史篇〉第一巻～第六巻『令集解』。
その他、条文内容に応じて随時指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表が中心となるが、難解な田令集解を構成する諸法家の説を正しく理解できたか、諸法家の間の論点の違いを明確に示せたか、それにもとづいて田制についての論理を正しく構築できたかを重視する（75%相当）。また討論においては自主的な発言の内容を重視する（25%相当）。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし

【学生が準備すべき機器他】

とくになし

【その他の重要事項】

ゼミでの成果を何らかの形で活字化し学界へ公開することを検討しているので頑張ってください。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉
日本古代史・法制史・北方史・国際日本学
〈研究テーマ〉
日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史
〈主要研究業績〉
2010年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』
2008年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院
2008年、「近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって」『古文書研究』66
2007年、「『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後－FileMakerによるDatabaseのWeb公開の一例として」『漢字文献情報処理研究』8

【Outline (in English)】

Course outline : In the ancient East Asia, when analyzing the society, analysis of the land system occupies a very important position.

Learning Objectives : We will study the fundamental historical code "Deryo" and its annotation "Denryo-Shuge" in turn.

Learning activities outside of classroom : Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting . Your study time will be more than five hours for a class.

Grading Criteria /Policies : Grading will be decided based on lab reports (85 %), and the quality of the students' experimental performance in the lab (15 %).

HIS600B4

日本古代史演習Ⅲ

小口 雅史

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

東アジア古代世界では、社会の分析に際して、租税制度とならんで土地制度の分析が非常に重要な位置を占める。日本古代史研究においては、さらにそのモデルとなった唐の諸制度のとの比較が必須である。そこでこの演習では、日本の土地制度の直接の母法となった唐田令を、近年発見されて公開された天聖令に基づいて比較研究することとする。今年度も併行して講読している田令集解に対応する天聖令部分を引き続き検討する。

【到達目標】

日本の田令は中国の田令を母法として作成されているので、どこが丸写しでどこが日本的なのかを、両者を比較史ながら識別する能力を身につける。
単に報告者の発表を聞くだけではなく積極的に自分の意見を述べるディベート能力を身につける。
海外史料を自力で読み解く技術を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業形式は対面授業を原則とする。本年度は田令集解第22条に対応する天聖令より開始する。あらかじめ条文ごとに担当を指定するので、上記の目標をふまえて事前に十分予習してから本研究に臨むことを期待する。
発表へのフィードバックについては、次の授業の初めに、前回の授業で提出資料からいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整、概説
第2回	天聖田令（日本令第31条相当）講読（1）	日本田令第31条相当条文の比定と配列
第3回	天聖田令（日本令第31条相当）講読（2）	日本田令第31条相当条文前半部分の読解
第4回	天聖田令（日本令第31条相当）講読（3）	日本田令第31条相当条文後半部分の読解
第5回	天聖田令（日本令第31条相当）講読（4）	日本田令第31条相当条文前半部分と武徳令・開元7年令との比較。
第6回	天聖田令（日本令第31条相当）講読（5）	日本田令第31条相当条文後半部分と武徳令・開元7年令との比較。修論テーマについての報告会を兼ねます。
第7回	天聖田令（日本令第32条相当）講読（1）	日本田令第32条相当条文の比定と配列
第8回	天聖田令（日本令第32条相当）講読（2）	日本田令第32条相当条文前半部分の読解
第9回	天聖田令（日本令第32条相当）講読（3）	日本田令第232条相当条文後半部分の読解
第10回	天聖田令（日本令第32条相当）講読（4）	日本田令第32条相当条文前半部分と武徳令・開元7年令との比較。

第 11 回	天聖田令（日本令第 32 条相当）講読（5）	日本田令第 32 条相当条文後半部分と武徳令・開元 7 年令との比較。修論テーマについての報告会を兼ねます。
第 12 回	天聖田令（日本令第 33 条相当）講読（1）	日本田令第 33 条相当条文の比定と配列
第 13 回	天聖田令（日本令第 33 条相当）講読（2）	日本田令第 33 条相当条文前半部分の読解
第 14 回	秋学期の総括	唐代の官人支給田田種と吐魯番文書にみえる田制実例との比較を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に取り組んでおく研究内容としては、発表者は対象条文の復原根拠となった関連史料間の異同の確認、書き下し、現代語訳、語句註、日本令との比較、唐令拾遺の成果との比較、対象条文に基づく論点整理、先行研究の紹介、自分なりの意見のまとめなどが要求される。標準的に 2 時間以上を要する。受講者もそれに準じるが標準的に 1 時間以上を要する。復習はそれぞれ 1 時間程度。発表者は、発表終了後に再構成した発表レジュメをアップロードしてもらうが、それに別途 1 時間程度。

【テキスト（教科書）】

天一閣博物館・中国社会科学院歴史研究所天聖令整理課題組校證『天一閣藏明鈔本天聖令校證 附 唐令復原研究』上・下（中華書局、2006 年 10 月）

【参考書】

唐令拾遺（仁井田陞著、東京大学出版会）
唐令拾遺補（池田温編、東京大学出版会）
その他、条文内容に応じて随時指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表が中心となるが、海外史料である天聖令の正確な理解ができたか、日本令との違いを明確に示せたか、それにもとづいて土地制度についての唐代の論理を日本古代と比較しながら正しく構築できたかを重視する（発表 70 %）。また討論においては自主的な発言の内容を重視する（討論への参加 30 %）。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし

【学生が準備すべき機器他】

とくになし

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉
日本古代史・法制史・北方史・国際日本学
〈研究テーマ〉
日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史
〈主要研究業績〉
2010 年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』
2008 年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院
2008 年、『近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって』『古文書研究』66
2007 年、『『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後－FileMaker による Database の Web 公開の一例として』『漢字文献情報処理研究』8

【Outline (in English)】

Course outline : In the ancient East Asia, when analyzing the society, analysis of the land system occupies a very important position.

Learning Objectives : We will study the fundamental historical code "Deryo", while complying with the corresponding Old Chinese code "Tensei-Denrei".

Learning activities outside of classroom : Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting . Your study time will be more than five hours for a class.

Grading Criteria /Policies : Grading will be decided based on lab reports (85 %)(%), and the quality of the students' experimental performance in the lab (15 %).

HIS600B4

日本古代史演習Ⅳ

小口 雅史

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

東アジア古代世界では、社会の分析に際して、租税制度とならんで土地制度の分析が非常に重要な位置を占める。日本古代史研究においては、さらにそのモデルとなった唐の諸制度のとの比較が必須である。そこでこの演習では、日本の土地制度の直接の母法となった唐田令を、近年発見されて公開された天聖令に基づいて比較研究することとする。今年度も併行して講読している田令集解に対応する天聖令部分を引き続き検討する。

【到達目標】

日本の田令は中国の田令を母法として作成されているので、どこが丸写しでどこが日本的なのかを、両者を比較しながら識別する能力を身につける。

単に報告者の発表を聞くだけではなく積極的に自分の意見を述べるディベート能力を身につける。

海外史料を自力で読み解く技術を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業形式は対面授業を原則とする。秋学期は田令集解第 25 条に対応する天聖令より開始する。あらかじめ条文ごとに担当を指定するので、上記の目標をふまえて事前に十分予習してから本研究に臨むことを期待する。

発表へのフィードバックについては、次の授業の初めに、前回の授業で提出資料からいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整、概説
第 2 回	天聖田令（日本令第 33 条相当）講読（3）	日本田令第 33 条相当条文後半部分の読解
第 3 回	天聖田令（日本令第 33 条相当）講読（4）	日本田令第 33 条相当条文前半部分と武徳令・開元 7 年令との比較
第 4 回	天聖田令（日本令第 33 条相当）講読（5）	日本田令第 33 条相当条文後半部分と武徳令・開元 7 年令との比較。修論テーマについての報告会を兼ねます。
第 5 回	天聖田令（日本令第 34 条相当）講読（1）	日本田令第 34 条相当条文の比定と配列
第 6 回	天聖田令（日本令第 34 条相当）講読（2）	日本田令第 34 条相当条文前半部分の読解
第 7 回	天聖田令（日本令第 34 条相当）講読（3）	日本田令第 34 条相当条文後半部分の読解
第 8 回	天聖田令（日本令第 34 条相当）講読（4）	日本田令第 34 条相当条文前半部分と武徳令・開元 7 年令との比較
第 9 回	天聖田令（日本令第 34 条相当）講読（5）	日本田令第 34 条相当条文後半部分と武徳令・開元 7 年令との比較。修論テーマについての報告会を兼ねます。
第 10 回	天聖田令（日本令第 35 条相当）講読（1）	日本田令第 35 条相当条文の比定と配列
第 11 回	天聖田令（日本令第 35 条相当）講読（2）	日本田令第 35 条相当条文前半部分の読解

第12回	天聖田令（日本令第35条相当）講読（3）	日本田令第35条相当条文後半部分の読解
第13回	天聖田令（日本令第35条相当）講読（4）	日本田令第35条相当条文と武徳令・開元7年令との比較。修論テーマについての報告会を兼ねます。
第14回	秋学期の総括	日唐の官人田の違いについて比較史的に総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に取り組んでおく研究内容としては、発表者は対象条文の復原根拠となった関連史料間の異同の確認、書き下し、現代語訳、語句註、日本令との比較、唐令拾遺の成果との比較、対象条文に基づく論点整理、先行研究の紹介、自分なりの意見のまとめなどが要求される。標準的に2時間以上を要する。受講者もそれに準じるが標準的に1時間以上を要する。復習はそれぞれ1時間程度。発表者は、発表終了後に再構成した発表レジュメをアップロードしてもらうが、それに別途1時間程度。

【テキスト（教科書）】

天一閣博物館・中国社会科学院歴史研究所天聖令整理課題組校證『天一閣藏明鈔本天聖令校證 附 唐令復原研究』上・下（中華書局、2006年10月）

【参考書】

唐令拾遺（仁井田陞著、東京大学出版会）
唐令拾遺補（池田温編、東京大学出版会）
その他、条文内容に応じて随時指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表が中心となるが、海外史料である天聖令の正確な理解ができたか、日本令との違いを明確に示せたか、それにもとづいて土地制度についての唐代の論理を日本古代と比較しながら正しく構築できたかを重視する（発表70%）。また討論においては自主的な発言の内容を重視する（討論への参加30%）。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし

【学生が準備すべき機器他】

とくになし

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉
日本古代史・法制史・北方史・国際日本学
〈研究テーマ〉
日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史
〈主要研究業績〉
2010年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』
2008年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院
2008年、「近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開をめぐる」『古文書研究』66
2007年、「『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後－FileMakerによるDatabaseのWeb公開の一例として」『漢字文献情報処理研究』8

【Outline (in English)】

Course outline : In the ancient East Asia, when analyzing the society, analysis of the land system occupies a very important position.

Learning Objectives : We will study the fundamental historical code "Deryo", while complying with the corresponding Old Chinese code "Tensei-Denrei".

Learning activities outside of classroom : Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting . Your study time will be more than five hours for a class.

Grading Criteria /Policies : Grading will be decided based on lab reports (85 %%), and the quality of the students' experimental performance in the lab (15 %).

HIS600B4

日本中世史演習Ⅰ

大塚 紀弘

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

三条西実隆の日記『実隆公記』の講読を中心とし、担当者の読解・考察についての報告を基に全員で議論する。中世の日記を読解する力を養成するとともに、中世の国家・社会・文化等について批判的に研究する方法を習得することを目的とする。また、日本中世史に関係する論文批評や研究発表の機会を設ける。

【到達目標】

中世史料の日本漢文を正しく訓読した上で、語句を調べ、内容を正確に理解し、現代語訳することができる。所定の事項を満たしたレジュメを作成し、発表することができる。関連史料や先行研究を収集・読解・整理し、自分なりの論点を提示することができる。戦国時代を中心に、日本中世史に関する事柄について、自身の見解を提示あるいは発言することができる。所定の条件を満たしたレポートを書くことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式で進める。担当者が担当範囲についてのレジュメを用意して発表した後、その内容に基づいて全員で議論する。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」または「メール」を通じて行なう予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	『実隆公記』とは	履修のガイダンス
第2回	『実隆公記』講読（1）	読解・考察の報告と議論
第3回	『実隆公記』講読（2）	読解・考察の報告と議論
第4回	論文批評（1）	報告と議論
第5回	『実隆公記』講読（3）	読解・考察の報告と議論
第6回	『実隆公記』講読（4）	読解・考察の報告と議論
第7回	研究発表（1）	報告と議論
第8回	『実隆公記』講読（5）	読解・考察の報告と議論
第9回	『実隆公記』講読（6）	読解・考察の報告と議論
第10回	論文批評（2）	報告と議論
第11回	『実隆公記』講読（7）	読解・考察の報告と議論
第12回	『実隆公記』講読（8）	読解・考察の報告と議論
第13回	研究報告（2）	報告と議論
第14回	戦国時代の貴族と京都	講読内容の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

全員が事前に講読する部分の訓読文を作成する。担当者は担当部分を読解し、関係する論文や史料を収集・読解・整理し、発表レジュメを用意し、「学習支援システム」の「掲示板」を通じて全員に配布する。発表後、レジュメを修正し、「学習支援システム」の「掲示板」を通じて全員に配布する。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

『実隆公記』（史料纂集）
「学習支援システム」の「教材」から、講読する部分のコピー（PDFファイル）を配布する。

【参考書】

授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点50%、学期末レポート点50%の合計で評価する予定である。

【学生の意見等からの気づき】

議論が活発になるように努める。

【学生が準備すべき機器他】

「学習支援システム」を利用し、事前に「教材」から配布プリントをダウンロードすること。また、「掲示場」に発表レジュメ等を掲示したり、ダウンロードしたりすること。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本中世史

＜研究テーマ＞日中関係史・日本仏教史

【Outline (in English)】

The aim of this course is to help students read the medieval Chinese texts. The goals of this course are to train the ability to understand the contents deeply. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Your overall grade in the class will be decided based on the following. Short reports : 50%, in class contribution: 50%.

HIS600B4

日本中世史演習Ⅱ

大塚 紀弘

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

中世文書の講読を中心とし、担当者の読解・考察についての報告を基に全員で議論する。古文書を読解する力を養成するとともに、中世の国家・社会・文化等について批判的に研究する方法を習得することを目的とする。また、日本中世史に関係する論文批評や研究発表の機会を設ける。

【到達目標】

中世史料の日本漢文を正しく訓読した上で、語句を調べ、内容を正確に理解し、現代語訳することができる。所定の事項を満たしたレジュメを作成し、発表することができる。関連史料や先行研究を収集・読解・整理し、自分なりの論点を提示することができる。戦国時代を中心に、日本中世史に関する事柄について、自身の見解を提示あるいは発言することができる。所定の条件を満たしたレポートを書くことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式で進める。担当者が担当範囲についてのレジュメを用意して発表した後、その内容に基づいて全員で議論する。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」または「メール」を通じて行なう予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	中世の古文書	履修のガイダンス
第2回	古文書の講読（1）	読解・考察の報告と議論
第3回	古文書の講読（2）	読解・考察の報告と議論
第4回	論文批評（1）	報告と議論
第5回	古文書の講読（3）	読解・考察の報告と議論
第6回	古文書の講読（4）	読解・考察の報告と議論
第7回	研究発表（1）	報告と議論
第8回	古文書の講読（5）	読解・考察の報告と議論
第9回	古文書の講読（6）	読解・考察の報告と議論
第10回	論文批評（2）	報告と議論
第11回	古文書の講読（7）	読解・考察の報告と議論
第12回	古文書の講読（8）	読解・考察の報告と議論
第13回	研究発表（2）	報告と議論
第14回	中世社会と古文書	講読内容の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

全員が事前に講読する部分の訓読文を作成する。担当者は担当部分を読解し、関係する論文や史料を収集・読解・整理し、発表レジュメを用意する。発表後、レジュメを修正して全員に配布する。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

「学習支援システム」の「教材」から、講読する部分のコピー（PDFファイル）を配布する。

【参考書】

授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点50%、学期末レポート点50%の合計で評価する予定である。

【学生の意見等からの気づき】

議論が活発になるように努める。

【学生が準備すべき機器他】

「学習支援システム」を利用し、事前に「教材」から配布プリントをダウンロードすること。また、「掲示場」に発表レジュメ等を掲示したり、ダウンロードしたりすること。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本中世史

＜研究テーマ＞日中関係史・日本仏教史

【Outline (in English)】

The aim of this course is to help students read the medieval Chinese texts. The goals of this course are to train the ability to understand the contents deeply. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Your overall grade in the class will be decided based on the following. Short reports : 50%, in class contribution: 50%.

HIS600B4

日本近世史演習Ⅰ

松本 剣志郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、受講生が日本近世史についての研究能力を高め、個々が有する研究テーマを深めていくことを目的とする。

【到達目標】

- ①研究論文の位置を理解することができる。
- ②史料から議論を立ち上げることができる。
- ③学会発表ができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

個人による研究発表をおこなう。発表者は各自の研究テーマについてレジュメを作成し、発表する。全員参加の質疑応答で発表に対するフィードバックする。論文講読は、事前に割り当てを決め、担当者が発表し、これを全員で批評するかたちをとる。対面授業である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業概要の説明、発表順の決定
第2回	研究発表（1）	研究テーマの学術上の位置づけ
第3回	研究発表（2）	研究テーマの史料論的分析
第4回	研究発表（3）	研究テーマの可能性
第5回	研究発表（4）	研究テーマのひろがり
第6回	研究発表（5）	学会発表をめざして
第7回	論文講読（1）	研究史上の位置づけ
第8回	論文講読（2）	論文構成の方法
第9回	論文講読（3）	史料批判
第10回	論文講読（4）	論理展開の仕方
第11回	論文講読（5）	研究視野の拡大
第12回	研究計画発表（1）	今後の方針
第13回	研究計画発表（2）	史料探訪にむけて
第14回	まとめ	研究者の姿勢

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。論文講読にあたっては、事前にその論文を読んでおくこと。また、その著者の他の論文も目を通すと良い。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

『岩波講座日本歴史』ほか

【成績評価の方法と基準】

発表内容、授業への参加度等をみて、平常点100%で成績評価する。

【学生の意見等からの気づき】

教室について配慮したいと思います。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近世史

＜研究テーマ＞都市論、記憶論

＜主要研究業績＞『江戸の都市化と公共空間』（塙書房、2019年）

【Outline (in English)】

This course deals with the early modern history of Japan. It also enhances the development of student's skill in making oral presentation. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Grading will be decided based on students presentation.

HIS600B4

日本近世史演習Ⅱ

松本 剣志郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、受講生が日本近世史についての研究能力を高め、個々が有する研究テーマを深めていくことを目的とする。

【到達目標】

論文を執筆することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

個人による研究発表をおこなう。発表者は各自の研究テーマについてレジュメを作成し、発表する。全員参加の質疑応答で発表に対するフィードバックとする。論文講読は、事前に割り当てを決め、担当者が発表し、これを全員で批評するかたちをとる。対面授業である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業概要の説明、発表順の決定
第2回	研究発表（1）	研究史との格闘
第3回	研究発表（2）	論理展開の仕方
第4回	研究発表（3）	史料の読みの深さ
第5回	研究発表（4）	表の効果的使用
第6回	研究発表（5）	他流試合のなかで
第7回	論文講読（1）	分野の選定
第8回	論文講読（2）	表現力の問題
第9回	論文講読（3）	史料引用の恣意性
第10回	論文講読（4）	先行研究の曲解
第11回	論文講読（5）	結論の妥当性
第12回	研究計画発表（1）	今後の進め方
第13回	研究計画発表（2）	史料収集のすすめ
第14回	まとめ	つぎのステージへむけて

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
論文講読においては、事前に当該論文を読んでおくこと。各自で研究を進めること。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

『岩波講座日本歴史』ほか

【成績評価の方法と基準】

発表内容、授業への参加度等をみて、平常点100%で成績評価する。

【学生の意見等からの気づき】

教室について配慮したいと思います。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近世史

＜研究テーマ＞都市論、記憶論

＜主要研究業績＞『江戸の都市化と公共空間』（塙書房、2019年）

【Outline (in English)】

This course deals with the early modern history of Japan. It also enhances the development of student's skill in making oral presentation. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Grading will be decided based on students presentation.

HIS600B4

日本近代史演習 I

内藤 一成

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本近現代史の研究能力を高めるためのトレーニングを行う。最終的には修士論文を完成させるための能力を身につける。

【到達目標】

本授業では以下の点を目標とする。①日本近現代史に関する最新の研究動向を把握し、高いレベルで理解する、②独創的な研究テーマを深める、③高い実証に基づく説得力をもった自論を展開させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式をとる。発表者は独自の研究関心やテーマに基づき、積極的に各種の発表に取り組む。他の参加者は積極的にディスカッションを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	講義に関する全体の説明、注意点など
第 2 回	書評 1	最新の研究書・論文に関する書評と質疑応答
第 3 回	史料紹介 1	発表者が取り組んでいる研究テーマに関わる史料の紹介と質疑応答
第 4 回	調査報告 1	発表者が取り組んでいる研究テーマに関する調査の報告と質疑応答
第 5 回	自由発表 1	発表者が取り組んでいる研究テーマに関する発表と質疑応答
第 6 回	書評 2	最新の研究書・論文に関する書評と質疑応答
第 7 回	史料紹介 2	発表者が取り組んでいる研究テーマに関わる史料の紹介と質疑応答
第 8 回	調査報告 2	発表者が取り組んでいる研究テーマに関する調査の報告と質疑応答
第 9 回	自由発表 2	発表者が取り組んでいる研究テーマに関する発表と質疑応答
第 10 回	書評 3	最新の研究書・論文に関する書評と質疑応答
第 11 回	史料紹介 3	発表者が取り組んでいる研究テーマに関わる史料の紹介と質疑応答
第 12 回	調査報告 3	発表者が取り組んでいる研究テーマに関する調査の報告と質疑応答
第 13 回	自由発表 3	発表者が取り組んでいる研究テーマに関する発表と質疑応答
第 14 回	まとめ	全体総括と質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

平素より論文の作成を進め、研究発表後にはその内容をフィードバックさせておく。学術論文評に際しては、該当する論文を事前に熟読しておく。本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

特に用いない。※授業の進度等によっては、一次史料の解説を取り入れる場合もある。

【参考書】

『岩波講座 日本歴史 近現代』全 5 巻、『日本の歴史』20～24（講談社学術文庫）、『日本の近代』1～8（中公文庫）

【成績評価の方法と基準】

発表内容、授業への参加度などに、執筆論文の完成度を加味して総合化し、これを平常点（100 %）として評価する。

【学生の意見等からの気づき】

現時点ではないが、授業が活発な議論の場となるよう努める。

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムの利用が可能な IT 機器

【その他の重要事項】

・「日本近代史演習」Ⅱ（秋学期）との継続履修を推奨する。
・やむを得ない事情により授業を欠席する場合（介護体験実習、教育実習など）には、その事情を証明する文書を提出すること。新型コロナウイルス感染防止策として教室での対面授業を行わない場合には、授業内容を変更することがある。
・授業に関連する連絡は、学習支援システムの「お知らせ」サイトや、「授業内掲示板」サイトを利用して行うので、見落とさないようにすること。
・担当教員への直接連絡にはメールを利用すること。担当教員のメールアドレスは、学習支援システムに掲載する。
・発表者（個人・グループ）は、事前に、配布レジュメ等を学習支援システムの「一般ディスカッション」サイトに添付ファイル形式で掲示しておく。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本近現代史

<研究テーマ>

近現代の政治と文化

<主要研究業績>

『貴族院と立憲政治』（思文閣出版）、『貴族院』（同成社）、『華族令嬢たちの大正・昭和』（吉川弘文館）、『三条実美』（中公新書）、『新編旧話会速記』（芙蓉書房出版）、『四條男爵家関係文書』（同成社）、『田健治郎日記』第 3・7 巻（芙蓉書房出版）、『河井弥八日記（戦後篇）』全 5 巻（信山社出版）

【Outline (in English)】

(Course outline)

This course aims to improve the research ability of modern Japanese history. You will make presentations and hold discussions based on their own research interests and themes. You will eventually acquire the abilities needed to complete your master's thesis.

(Learning Objectives)

By the end of the course, students should be able to do the followings:

- A.Understanding the latest research trends related to modern Japanese history.
- B.Create an original research theme.
- C.Complete a high-level dissertation.

(Learning activities outside of classroom)

Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

(Grading Criteria /Policy)

Final grades are calculated according to the process of presentation, discussion and in-class contribution.Combine all elements to make 100%

HIS600B4

日本近代史演習Ⅱ

内藤 一成

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本近現代史の研究能力を高めるためのトレーニングを行う。最終的には修士論文を完成させるための能力を身につける。

【到達目標】

本授業では以下の点を目標とする。①日本近現代史に関する最新の研究動向を把握し、高いレベルで理解する、②独創的な研究テーマを深める、③高い実証に基づく説得力をもった自論を展開させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式をとる。発表者は独自の研究関心やテーマに基づき、積極的に各種の発表に取り組む。他の参加者は積極的にディスカッションを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	講義に関する全体の説明、注意点など
第2回	書評1	最新の研究書・論文に関する書評と質疑応答
第3回	史料紹介1	発表者が取り組んでいる研究テーマに関わる史料の紹介と質疑応答
第4回	調査報告1	発表者が取り組んでいる研究テーマに関する調査の報告と質疑応答
第5回	自由発表1	発表者が取り組んでいる研究テーマに関する発表と質疑応答
第6回	書評2	最新の研究書・論文に関する書評と質疑応答
第7回	史料紹介2	発表者が取り組んでいる研究テーマに関わる史料の紹介と質疑応答
第8回	調査報告2	発表者が取り組んでいる研究テーマに関する調査の報告と質疑応答
第9回	自由発表3	発表者が取り組んでいる研究テーマに関する発表と質疑応答
第10回	書評3	最新の研究書・論文に関する書評と質疑応答
第11回	史料紹介3	発表者が取り組んでいる研究テーマに関わる史料の紹介と質疑応答
第12回	調査報告3	発表者が取り組んでいる研究テーマに関する調査の報告と質疑応答
第13回	自由発表3	発表者が取り組んでいる研究テーマに関する発表と質疑応答
第14回	まとめ	全体総括と質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

平素より論文の作成を進め、研究発表後にはその内容をフィードバックさせておく。学術論文評に際しては、該当する論文を事前に熟読しておく。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

特に用いない。※授業の進度等によっては、一次史料の解説を取り入れる場合もある。

【参考書】

『岩波講座 日本歴史 近現代』全5巻、『日本の歴史』20～24（講談社学術文庫）、『日本の近代』1～8（中公文庫）

【成績評価の方法と基準】

発表内容、授業への参加度などに、執筆論文の完成度を加味して総合化し、これを平常点（100 %）として評価する。

【学生の意見等からの気づき】

現時点ではないが、授業が活発な議論の場となるよう努める。

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムの利用が可能な IT 機器

【その他の重要事項】

- ・「日本近代史演習」Ⅰ（春学期）との継続履修を推奨する。
- ・やむを得ない事情により授業を欠席する場合（介護体験実習、教育実習など）には、その事情を証明する文書を提出すること。新型コロナウイルス感染防止策として教室での対面授業を行わない場合には、授業内容を変更することがある。
- ・授業に関連する連絡は、学習支援システムの「お知らせ」サイトや、「授業内掲示板」サイトを利用して行うので、見落とさないようにすること。
- ・担当教員への直接連絡にはメールを利用すること。担当教員のメールアドレスは、学習支援システムに掲載する。
- ・発表者（個人・グループ）は、事前に、配布レジュメ等を学習支援システムの「一般ディスカッション」サイトに添付ファイル形式で掲示しておく。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本近現代史

<研究テーマ>

近現代の政治と文化

<主要研究業績>

『貴族院と立憲政治』（思文閣出版）、『貴族院』（同成社）、『華族令嬢たちの大正・昭和』（吉川弘文館）、『三条実美』（中公新書）、『新編旧話会速記』（芙蓉書房出版）、『四條男爵家関係文書』（同成社）、『田健治郎日記 第3・7巻』（芙蓉書房出版）、『河井弥八日記〈戦後篇〉』全5巻（信山社出版）

【Outline (in English)】

(Course outline)

This course aims to improve the research ability of modern Japanese history. You will make presentations and hold discussions based on their own research interests and themes. You will eventually acquire the abilities needed to complete your master's thesis.

(Learning Objectives)

By the end of the course, students should be able to do the followings:

- A.Understanding the latest research trends related to modern Japanese history.
- B.Create an original research theme.
- C.Complete a high-level dissertation.

(Learning activities outside of classroom)

Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

(Grading Criteria /Policy)

Final grades are calculated according to the process of presentation, discussion and in-class contribution.Combine all elements to make 100%

HIS600B4

日本考古学演習 I

小倉 淳一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本考古学分野においてより専門的な論文を執筆する能力を身につけることを目標とする。実践的な研究発表を行い、なおかつ専門的な論文の内容について理解し検討することがテーマとなる。考古学研究を実践的に行うことで、受講者の目指す論文の作成につながる視点と方法を涵養する。

【到達目標】

受講者の実践研究の発表の機会を通じて、修士論文の水準を理解するとともに、その執筆のために十分な方法上の実力が備わる。先行研究を実践的に検討することで、研究方法や成果の提示方法を習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

考古学資料を用いた実践研究の成果を受講者各々が発表し、内容について検討する。受講者は研究論文の体裁と形式をふまえたうえで、具体的な考古学資料を提示するとともに考古学の方法にもとづいて発表内容を作成する。実際の発表においてはレジュメをまとめ、研究の詳細を報告するものとする。次いで全員での討論に移り、発表者の研究目的と問題の所在がいかなる点にあり、設定された問題が適切であるかどうかを検討し、さらに取り扱う資料群の全体が議論にふさわしいものであるのか、提示された方法が適切であるか、考察および結論が正しいか等についても検討する。

また、本授業では各自の研究に関連する課題論文の講読も合わせて行うこととする。受講者は研究論文を読解してレジュメをまとめ、報告する。論文の主題、研究史、展開、資料操作、考察、結論などについて批判的かつ建設的な議論を展開することとする。

これらの後に、自らの論文の構想発表指導を行う。

上記のように各回を演習形式で行うので、発表者の扱う主題や内容については事前に予告するとともに受講者全員の予習を求め、活発な議論の展開を望む。扱う資料は考古学資料であり、各自が資料に語らせるための準備を充分に行うことを期待する。

授業形式は対面授業を基本とする。

レポート等のフィードバックについては授業内に行うかオフィス・アワー（月曜 5 限）で対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	授業概要	概要紹介・授業計画の提示
第 2 回	研究実践発表（1）	受講者による実践研究の発表と討議（1）
第 3 回	研究実践発表（2）	受講者による実践研究の発表と討議（2）
第 4 回	研究実践発表（3）	受講者による実践研究の発表と討議（3）
第 5 回	研究実践発表（4）	受講者による実践研究の発表と討議（4）
第 6 回	論文講読発表（1）	受講者による論文講読の成果発表と討議（1）
第 7 回	論文講読発表（2）	受講者による論文講読の成果発表と討議（2）
第 8 回	論文講読発表（3）	受講者による論文講読の成果発表と討議（3）
第 9 回	論文講読発表（4）	受講者による論文講読の成果発表と討議（4）

第 10 回	論文構想発表（1）	受講者による論文構想の発表と討議（1）
第 11 回	論文構想発表（2）	受講者による論文構想の発表と討議（2）
第 12 回	論文構想発表（3）	受講者による論文構想の発表と討議（3）
第 13 回	論文構想発表（4）	受講者による論文構想の発表と討議（4）
第 14 回	成果提出と講評	期末レポートの提出と授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

第 1 回 自己の学習計画の立案

第 2 回～第 5 回 発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は関連分野の事前学習

第 6 回～第 9 回 発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は指定文献の精読と関連分野の事前学習

第 10 回～第 13 回 発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は関連分野の事前学習

第 14 回 成果レポートの執筆・作成

【テキスト（教科書）】

発表形式の授業のため、特に指定しない。

【参考書】

コリン・レンフルー、ポール・バーン／池田裕ほか訳（2007）『考古学 理論・方法・実践』東洋書林

ブルース・G・トリッガー／下垣仁志訳（2015）『考古学的思考の歴史』同成社

その他、授業内で適宜指示する。関連文献を渉猟する能力は必須である。

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的な貢献 20 %（平常点）

個別発表の水準 30 %（発表資料の完成度、発表態度、個別研究の完成度、文献要約の精度、問題点の指摘、総合的な理解・考察の程度）
討論の成果 20 %（指摘した問題点や読解にもとづく議論の展開、新たな視点・論点の提示、議論全体の総括）

期末レポート（成果報告）30 %（問題設定の妥当性、研究史の扱い、資料解釈と関連資料の適切な位置づけ、考察の水準、学術文献としての完成度）

【学生の意見等からの気づき】

前年度実績なし（本科目では授業改善アンケートを実施しなかった）。

【その他の重要事項】

※受講人数や到達度によっては授業内容を変更することもあるので注意すること。

※担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても実践的に解説・指導する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

日本考古学

〈研究テーマ〉

東日本弥生文化の研究

〈主要研究業績〉

「小シーボルトと日本考古学の黎明期」『小シーボルトと日本の考古・民族学の黎明』（同成社 2011 年）

「印旛沼周辺地域の宮ノ台式土器出土遺跡の変遷—壺形土器を中心として—」『法政考古学』第 40 集記念論文集（法政考古学会 2014 年）

「関東地方における弥生時代の溝」『論集 環濠集落の諸問題 2015』（環濠（壕）論集刊行会 2015 年）

「弥生時代中期の南関東地方における環濠の造営時期」『法政考古学』第 43 集（法政考古学会 2017 年）

「早瀬川流域における弥生時代中期環濠集落の形成時期—樫田原遺跡の検討を中心として—」『法政考古学』第 45 集（法政考古学会 2019 年）

「東日本の環濠集落からみた午玉山遺跡」『埼玉県和光市 午玉山遺跡総括報告書』（和光市教育委員会 2019 年）

【Outline (in English)】

The aim of this course is to acquire the ability to write a master's thesis by students doing research presentations on Japanese archeology.

Students will understand the academic standards of a master's thesis and cultivate their competence.
The standard preparation and review time by students is 2 hours each.
The final grade will be calculated based on the following factors: normal score (20%), results of the research presentation (30%), participation in the discussion (20%), and the final report (30%).

HIS600B4

日本考古学演習Ⅱ

小倉 淳一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本考古学分野においてより専門的な論文を執筆する能力を身につけることを目標とする。実践的な研究発表を行い、なおかつ専門的な論文の内容について理解し検討することがテーマとなる。考古学研究を実践的に行うことで、受講者の目指す論文の作成につながる視点と方法を涵養する。

【到達目標】

受講者の実践研究の発表の機会を通じて、修士論文の水準を理解するとともに、その執筆のために十分な方法上の実力が備わる。先行研究を実践的に検討することで、研究方法や成果の提示方法を習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

考古学の分野で自らの論文を執筆する受講者に対して、論文構想の提示、研究上の最重要文献の講読、実践研究の報告などを行う。まず、自らの論文構想を提示し、具体的な資料検討状況についても報告し、それにもとづいた討議を行う。

次いで、今後の研究の核となる先行研究の成果について論文をもとに報告し、研究論文を読解してレジュメをまとめ、報告する。論文の主題、研究史、展開、資料操作、考察、結論などについて批判的かつ建設的な議論を展開することとする。

さらに、受講者それぞれの研究状況を具体的に報告し、討議を行う。上記のように各回を演習形式で行うので、発表者の扱う主題や内容については事前に予告するとともに受講者全員の予習を求め、活発な議論の展開を望む。扱う資料は考古学資料であり、各自が資料に語らせるための準備を充分に行うことを期待する。

授業形式は対面授業を基本とする。

レポート等のフィードバックについては授業内に行うかオフィス・アワー（月曜 5 限）で対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	授業概要	概要紹介・授業計画の提示
第 2 回	論文構想発表（1）	受講者による論文構想の発表と討議（1）
第 3 回	論文構想発表（2）	受講者による論文構想の発表と討議（2）
第 4 回	論文構想発表（3）	受講者による論文構想の発表と討議（3）
第 5 回	論文構想発表（4）	受講者による論文構想の発表と討議（4）
第 6 回	論文講読発表（1）	受講者による論文講読の成果発表と討議（1）
第 7 回	論文講読発表（2）	受講者による論文講読の成果発表と討議（2）
第 8 回	論文講読発表（3）	受講者による論文講読の成果発表と討議（3）
第 9 回	論文講読発表（4）	受講者による論文講読の成果発表と討議（4）
第 10 回	研究実践発表（1）	受講者による実践研究の発表と討議（1）
第 11 回	研究実践発表（2）	受講者による実践研究の発表と討議（2）

- 第12回 研究実践発表（3） 受講者による実践研究の発表と討議（3）
 第13回 研究実践発表（4） 受講者による実践研究の発表と討議（4）
 第14回 成果提出と講評 期末レポートの提出と授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

第1回 自己の学習計画の立案

第2回～第5回 発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は関連分野の事前学習

第6回～第9回 発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は指定文献の精読と関連分野の事前学習

第10回～第13回 発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は関連分野の事前学習

第14回 成果レポートの執筆・作成

【テキスト（教科書）】

発表形式の授業のため、特に指定しない。

【参考書】

コリン・レンフルー、ポール・バーン／池田裕ほか訳（2007）『考古学 理論・方法・実践』東洋書林

ブルース・G・トリッガー／下垣仁志訳（2015）『考古学的思考の歴史』同成社

その他、授業内で適宜指示する。関連文献を渉猟する能力は必須である。

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的な貢献 20 %（平常点）

個別発表の水準 30 %（発表資料の完成度、発表態度、個別研究の完成度、文献要約の精度、問題点の指摘、総合的な理解・考察の程度）
 討論の成果 20 %（指摘した問題点や読解にもとづく議論の展開、新たな視点・論点の提示、議論全体の総括）

期末レポート（成果報告） 30 %（問題設定の妥当性、研究史の扱い、資料解釈と関連資料の適切な位置づけ、考察の水準、学術文献としての完成度）

【学生の意見等からの気づき】

前年度実績なし（本科目では授業改善アンケートを実施しなかった）。

【その他の重要事項】

※受講人数や到達度によっては授業内容を変更することもあるので注意すること。

※担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても実践的に解説・指導する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

日本考古学

〈研究テーマ〉

東日本弥生文化の研究

〈主要研究業績〉

「小シーボルトと日本考古学の黎明期」『小シーボルトと日本の考古・民族学の黎明』（同成社 2011 年）

「印旛沼周辺地域の宮ノ台式土器出土遺跡の変遷—壺形土器を中心として—」『法政考古学』第40集記念論文集（法政考古学会 2014 年）

「関東地方における弥生時代の溝」『論集 環濠集落の諸問題 2015』（環濠（壕）論集刊行会 2015 年）

「弥生時代中期の南関東地方における環濠の造営時期」『法政考古学』第43集（法政考古学会 2017 年）

「早瀬川流域における弥生時代中期環濠集落の形成時期—権田原遺跡の検討を中心として—」『法政考古学』第45集（法政考古学会 2019 年）

「東日本の環濠集落からみた午王山遺跡」『埼玉県和光市 午王山遺跡総括報告書』（和光市教育委員会 2019 年）

【Outline (in English)】

The aim of this course is to acquire the ability to write a master's thesis by students doing research presentations on Japanese archeology.

Students will understand the academic standards of a master's thesis and cultivate their competence.

The standard preparation and review time by students is 2 hours each.

The final grade will be calculated based on the following factors: normal score (20%), results of the research presentation (30%), participation in the discussion (20%), and the final report (30%).

HIS500B4

日本古文書学研究Ⅰ

大塚 紀弘

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「日本古文書学Ⅰ」から継続し、教科書を基に日本古文書学を体系的に学ぶとともに、古文書読解の基礎的な能力を身につける。日本中世（平安時代から室町時代）に成立した代表的な古文書の様式・機能について理解し、日本漢文を読解する力を養成することを目的とする。

【到達目標】

公家様文書および公家様文書から派生した武家様文書の機能と様式について理解することができる。教科書に取り上げられた古文書や関連する古文書の日本漢文を正確に訓読し、内容の概要を読み取ることができる。また、簡単な崩し字を解読することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

教科書の内容に沿って、配布プリントを基に講義を進める。古文書について解説した後、参加者に訓読してもらう。また、古文書写真のプリントを配布し、参加者に翻刻してもらう機会を設ける。配布プリント（PDFファイル）は、事前に各章毎に「学習支援システム」にアップロードする（印刷プリントは配布しない）。日本古代史または日本中世史で卒論を書く予定の学生を主な対象とする。漢文訓読の基礎知識を有することを前提に進める。春学期に「日本古文書学Ⅰ」を履修することを必須とする。授業の初めに、前回の授業で訓読した古文書をいくつか取り上げ、フィードバックを行なう予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	古文書学とは	履修のガイダンス
第2回	公家様文書 国司序宣	様式・機能の解説と訓読
第3回	公家様文書 綸旨	様式・機能の解説と訓読
第4回	公家様文書 院宣	様式・機能の解説と訓読
第5回	公家様文書 御教書	様式・機能の解説と訓読
第6回	武家様文書 下文	様式・機能の解説と訓読 (1)
第7回	武家様文書 下文	様式・機能の解説と訓読 (2)
第8回	武家様文書 下知状	様式・機能の解説と訓読 (1)
第9回	武家様文書 下知状	様式・機能の解説と訓読 (2)
第10回	武家様文書 鎌倉幕府の御教書	様式・機能の解説と訓読
第11回	武家様文書 室町幕府の奉書	様式・機能の解説と訓読
第12回	武家様文書 室町幕府の直状	様式・機能の解説と訓読
第13回	起請文・売券・譲状	様式・機能の解説と訓読
第14回	公家様文書と武家様文書	授業内容の総括（試験）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

教科書を用いて予習し、教科書と配布プリントを用いて復習する。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

佐藤進一『新版 古文書学入門』（法政大学出版局、2003年）

【参考書】

日本歴史学会編『概説古文書学 古代・中世編』（吉川弘文館、1983年）
久留島典子・五味文彦編『史料を読み解く1 中世文書の流れ』（山川出版社、2006年）
苅米一志『日本史を学ぶための古文書・古記録読法』（吉川弘文館、2015年）

【成績評価の方法と基準】

学期末試験の点数100%で判定する予定である。

【学生の意見等からの気づき】

次回取り上げる文書を予告する。

【学生が準備すべき機器他】

「学習支援システム」を利用し、事前に「教材」から配布プリントをダウンロードしておくこと。

【Outline (in English)】

The aim of this course is to help students learn Japanese archaeological studies systematically. The goals of this course are to acquire the basic ability of reading old documents. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Your overall grade in the class will be decided based on the following. term-end examination : 100%.

HIS500B4

日本古文書学研究Ⅱ

大塚 紀弘

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「日本古文書学Ⅰ」から継続し、教科書を基に日本古文書学を体系的に学ぶとともに、古文書読解の基礎的な能力を身につける。日本中世（平安時代から室町時代）に成立した代表的な古文書の様式・機能について理解し、日本漢文を読解する力を養成することを目的とする。

【到達目標】

公家様文書および公家様文書から派生した武家様文書の機能と様式について理解することができる。教科書に取り上げられた古文書や関連する古文書の日本漢文を正確に訓読し、内容の概要を読み取ることができる。また、簡単な崩し字を解説することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

教科書の内容に沿って、配布プリントを基に講義を進める。古文書について解説した後、参加者に訓読してもらう。また、古文書写真のプリントを配布し、参加者に翻刻してもらう機会を設ける。配布プリント（PDFファイル）は、事前に各章毎に「学習支援システム」にアップロードする（印刷プリントは配布しない）。日本古代史または日本中世史で卒論を書く予定の学生を主な対象とする。漢文訓読の基礎知識を有することを前提に進める。春学期に「日本古文書学Ⅰ」を履修することを必須とする。授業の初めに、前回の授業で訓読した古文書をいくつか取り上げ、フィードバックを行なう予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	古文書学とは	履修のガイダンス
第2回	公家様文書 国司序宣	様式・機能の解説と訓読
第3回	公家様文書 綸旨	様式・機能の解説と訓読
第4回	公家様文書 院宣	様式・機能の解説と訓読
第5回	公家様文書 御教書	様式・機能の解説と訓読
第6回	武家様文書 下文	様式・機能の解説と訓読 (1)
第7回	武家様文書 下文	様式・機能の解説と訓読 (2)
第8回	武家様文書 下知状	様式・機能の解説と訓読 (1)
第9回	武家様文書 下知状	様式・機能の解説と訓読 (2)
第10回	武家様文書 鎌倉幕府の御教書	様式・機能の解説と訓読
第11回	武家様文書 室町幕府の奉書	様式・機能の解説と訓読
第12回	武家様文書 室町幕府の直状	様式・機能の解説と訓読
第13回	起請文・売券・譲状	様式・機能の解説と訓読
第14回	公家様文書と武家様文書	授業内容の総括（試験）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

教科書を用いて予習し、教科書と配布プリントを用いて復習する。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

佐藤進一『新版 古文書学入門』（法政大学出版局、2003年）

【参考書】

日本歴史学会編『概説古文書学 古代・中世編』（吉川弘文館、1983年）
久留島典子・五味文彦編『史料を読み解く1 中世文書の流れ』（山川出版社、2006年）
苅米一志『日本史を学ぶための古文書・古記録読法』（吉川弘文館、2015年）

【成績評価の方法と基準】

学期末試験の点数100%で判定する予定である。

【学生の意見等からの気づき】

次回取り上げる文書を予告する。

【学生が準備すべき機器他】

「学習支援システム」を利用し、事前に「教材」から配布プリントをダウンロードしておくこと。

【Outline (in English)】

The aim of this course is to help students learn Japanese archaeological studies systematically. The goals of this course are to acquire the basic ability of reading old documents. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Your overall grade in the class will be decided based on the following. term-end examination : 100%.

HIS500B4

日本古代史研究 I

春名 宏昭

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「平安時代と貴族社会」と題して講義します。平安前期の改革の時代の国家・政治のあり方、貴族たちのあり方を理解するようつとめます。

【到達目標】

平安時代の貴族社会のあり方の把握を目指します。基礎的な知識を得て、その上でそれぞれの事象に興味を持ってアプローチし、国家・政治の本質を理解できる能力を身につけることができます。平安時代の官僚のあり方は現代の日本にも通じるオンタイムの問題ですから、現代の政治が抱える問題点も理解できるようになります。そのような視点から課題レポートにも取り組んで下さい。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

平安前期の改革によって国家・政治のあり方がどのように変わっていったのか、この変化が平安中期の王朝貴族の時代に帰結していったのかを検証していきます。この授業では、一般啓蒙書に書かれることのない天皇や貴族たちのあり方を見ていきます。講義ですが、聴いているだけでは話が耳を通り抜けていきますから、問題意識をもって授業に取り組むことが必要です。授業を聴いて問題意識をもった後、参考書等をあらためて読み直すと新しい理解が見えてきます。就職活動や教育実習等あるでしょうが、十分な聴講（もちろん遅刻は含まず）が最低限の必須条件です。心して下さい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業の内容の説明
第 2 回	〈時代〉の変化	ワンランク上の国家を目指して
第 3 回	官人たちの変化	良吏政治のスタート＝大同元年勅
第 4 回	天皇の性格変化	桓武天皇と平城天皇
第 5 回	良吏政治の展開	嵯峨朝への政策継承
第 6 回	良吏政治の実践	弘仁三年勅から天長元年官符へ
第 7 回	承和の変の前奏	淳和朝・仁明朝の政治状況
第 8 回	承和の変	母橘嘉智子と娘正子内親王
第 9 回	貴族の時代へ	文徳朝・清和朝の様相
第 10 回	応天門の変	安定の時代、摂関政治へ
第 11 回	源氏と藤原氏	源氏の左大臣と藤原氏の右大臣
第 12 回	藤原基経の国政運営	清和天皇の悲嘆と陽成天皇の廃位
第 13 回	阿衡の紛議	昌泰の変へ
第 14 回	平安前期という時代	平安時代史概観

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

平安時代に関して問題意識を持つには、その前提として平安前期・中期の知識が必要ですし、奈良時代から平安時代への推移についても概括的な理解は必要です。それらを得るために、どれでも参考書（該当巻）を読んでみて下さい。ただし、著者の理解・興味関心によって内容はずいぶん違います。

この講義では、通説的理解がいかに不十分（言葉足らず）かということ述べます。それを確認するためにも参考書（該当巻）を読んで下さい。また、平城天皇の事績をより詳しく知るには私の『平城天皇』（吉川弘文館人物叢書）を、延喜年間以降については『岩波講座日本歴史』第5巻の「摂関時代と政治構造」を読んで下さい。この講義の準備・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

春名宏昭『〈謀反〉の古代史 平安朝の政治改革』（吉川弘文館）

授業に必要な史料はプリントして配布します。

【参考書】

中央公論社（文庫）・小学館（文庫）・集英社・講談社（文庫）から出版された『日本の歴史』や、吉川弘文館の『日本の時代史』・『日本古代の歴史』、東京大学出版会の『日本史講座』、岩波書店の『シリーズ日本の古代史』（新書）、『岩波講座日本歴史』の該当巻。

【成績評価の方法と基準】

基準は平常点 30 %、レポート 70 %です。レポートで取り上げる範囲は平安時代に限りますが、テーマは学生各人で選んでよいことにしています。ただ、どのようなテーマを選んでも、授業の理解の度合いはおのずとレポートの内容にあらわれます。

【学生の意見等からの気づき】

板書は教師の書いたものをただ写すだけでは身につけません。人物名・事象名・年号や学術用語などのキーワードを書きますから、それらも含めて、自分で工夫して自分なりのノートを作って下さい。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本古代政治史

〈研究テーマ〉日本古代の皇権と官制

〈主要研究業績〉

『律令国家官制の研究』（吉川弘文館）

『平城天皇』（吉川弘文館）

『皇位継承 歴史をふりかえり変化を見定める』（共著、山川出版社）

『〈謀反〉の古代史 平安朝の政治改革』（吉川弘文館）

【Outline (in English)】

This lecture is attended under the heading of “The Heian period and the aristocracy”. This course introduces how should be the nation and aristocrats in the former term of the Heian period to students taking this course. By the end of the course, students should be able to understand the essence of the nation and politics. Before/after each class meetings, students will be expected to spend four hours to read the textbook and one of reference books introduced. Grading will be decided based on term-end report(70%) and usual contribution(30%).

HIS500B4

日本古代史研究Ⅱ

春名 宏昭

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「続日本紀の史料学」と題して講義を行ないます。八世紀の日本は、当時先進の文化を誇った中国のような国家建設を目標に掲げて邁進していました。『続日本紀』を題材に史料への取り組み方を学び、日本古代史における歴史の流れ、あり方の把握を目指します。

【到達目標】

続日本紀の記事を数点取り上げ、史料へのアプローチの仕方を知得することができます。この授業を通して、奈良時代の基礎的な理解を身につけ、他の史料に対してもつねに興味を持って臨めるようになり、それを論理的に解析し正しい理解に到達できる技能が身につきます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

取り上げた記事を糸口に、その背後にある問題点を探り出し検証していきます。講義ですが、聴いているだけでは話が耳を通り抜けていきますから、問題意識をもって授業に取り組む必要があります。授業を聴いて問題意識をもった後、参考書等をあらためて読み直すと新しい理解が見えてきます。就職活動や教育実習等あるでしょうが、十分な聴講（もちろん遅刻は含まず）が最低限の必須条件です。心して下さい。

課題を課した場合は、次の授業でコメントします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	続日本紀とはどのような史料か？
第2回	左右京尹の設置（1）	天平宝字五年二月丙辰朔条の紹介
第3回	左右京尹の設置（2）	左右京尹に対するわたしの理解
第4回	左右京尹の設置（3）	左右京尹の新たな性格分析
第5回	紫微内相と兵権（1）	天平宝字元年五月丁卯条の紹介
第6回	紫微内相と兵権（2）	紫微内相の性格分析
第7回	奈良から平安へ	藤原仲麻呂政権の評価
第8回	天平二年の太政官奏（1）	天平二年六月甲寅朔条の紹介
第9回	天平二年の太政官奏（2）	続日本紀の3つのテキスト
第10回	天平二年の太政官奏（3）	わずか 31 文字の史料の“奥行”
第11回	慶雲元年の公廩銀（1）	慶雲元年七月庚子条の紹介
第12回	慶雲元年の公廩銀（2）	公廩銀から見えてくるもの
第13回	税司主鑑（1）	大宝二年二月乙丑条の紹介
第14回	税司主鑑（2）	大宝令施行直後の地方政治

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

取り上げた記事が含む意味を理解するためには、それぞれの記事に現れた事象の時代背景を知る必要があります。そのためには、どれでもいいですから参考書（奈良時代該当巻）を読んでみて下さい。著者の理解・興味関心によって内容はずいぶん違います。この講義では、現在の通説的理解がいかに不十分（言葉足らず）かということを述べていきます。それを確認するためにも参考書（該当巻）を読んでおいて下さい。この講義の準備・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特に定めません。授業に必要な史料はプリントして配布します。

【参考書】

岩波書店・新日本古典文学大系『続日本紀』が基本です。他に一般啓蒙書として、中央公論社（文庫）・小学館（文庫）・集英社・講談社（文庫）から出版された『日本の歴史』や、吉川弘文館の『日本の時代史』・『日本古代の歴史』、東京大学出版会の『日本史講座』、岩波新書『シリーズ日本の古代史』、『岩波講座日本歴史』の該当巻があります。

【成績評価の方法と基準】

基準は平常点 30 %、レポート 70 %です。レポートで取り上げるテーマは学生各人で選んでよいことにしていますが、どのようなテーマを選んでも授業の理解の度合いはおのずとレポートの内容にあらわれます。

【学生の意見等からの気づき】

板書は教師の書いたものをただ写すだけでは身につけません。人物名・事象名・年号や学術用語などのキーワードを書きますから、それらも含めて、自分で工夫して自分なりのノートを作ってください。”自分で考える”がキーワードです。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本古代政治史

〈研究テーマ〉日本古代の皇権と官制

〈主要研究業績〉

『律令国家官制の研究』（吉川弘文館）

『平城天皇』（吉川弘文館）

『皇位継承 歴史をふりかえり変化を見定める』（共著、山川出版社）

『〈謀反〉の古代史 平安朝の政治改革』（吉川弘文館）

【Outline (in English)】

This lecture is attended under the heading of “The world of Shokunihongi”. This course introduces “shokunihongi” and the way of wrestle Japanese history to students taking this course. By the end of the course, students should be able to understand how to make a new approach to problems. Before/after each class meetings, students will be expected to spend four hours to read one of reference books introduced to tell the difference between it and my lecture. Grading will be decided based on term-end report(70%) and usual contribution(30%).

HIS500B4

日本古代史料研究

新井 重行

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この講義では、日本古代史の研究において使用される史料のうち、特に出土文字資料に焦点をあてて、その特色や歴史研究に活用するうえでの扱い方・考え方を学びます。

【到達目標】

木簡・漆紙文書・墨書土器などの出土文字資料は、古代社会の実像を生々しく伝えてくれるものですが、そこに記された文字を読むだけでなく、形状の観察や出土した遺跡の性格などと併せて検討することによって、古代社会の制度や地域的特色をより深く理解することができます。文書・典籍などとも比較しながら、出土文字資料に基づいて正しく情報を引き出す考え方を習得することを目指します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義形式で行います。必要に応じて、講義内容の理解度を問う小課題を課します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業の目標と進め方、高校地歴教科書における古代史料の解説のあり方と課題
第 2 回	古代史の史料（1）	一次史料と二次史料
第 3 回	古代史の史料（2）	古代史研究に使用される主要な史料
第 4 回	古代史の史料（3）	写本の扱い方について
第 5 回	木簡（1）	木簡とは
第 6 回	木簡（2）	荷札・付札の特徴と使用法
第 7 回	木簡（3）	帳簿木簡の特徴と使用法
第 8 回	木簡（4）	文書木簡の特徴と使用法
第 9 回	木簡（5）	削屑・習書木簡の特徴とその意義
第 10 回	木簡（6）	その他の使用法の木簡
第 11 回	漆紙文書（1）	漆紙文書の概要と特色
第 12 回	漆紙文書（2）	さまざまな漆紙文書を読む
第 13 回	墨書土器・金石文	土器に墨書された資料、石や金属に刻まれた文字資料
第 14 回	まとめ	講義のまとめと試験について

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講義で扱う内容は、高校教科書程度の知識を前提としています。講義内容をよりよく理解するために、日本古代史に関する概説書などに目を通しておくことを望みます。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間程度を標準とします。

【テキスト（教科書）】

講義時に担当教員が作成した資料を配布します。

【参考書】

坂上康俊『平城京の時代』（岩波書店、2011年）
大津透『律令国家と隋唐文明』（岩波書店、2020年）
木簡学会編『木簡から古代がみえる』（岩波書店、2010年）
渡辺晃宏『平城京と木簡の世紀』（講談社、2001年）
平川南・沖森卓也・栄原永遠男・山中章 編『文字と古代日本』1～5（吉川弘文館、2004～2006年）

【成績評価の方法と基準】

成績評価は、授業への積極的な貢献度（40%）および小課題・試験（60%）によって行います。

【学生の意見等からの気づき】

図版やスライドを用いて例示を行い、より分かりやすい解説となるよう工夫する。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞＜研究テーマ＞＜主要研究業績＞

【Outline (in English)】

【Course outline】 This course introduces historical sources of Japanese ancient history to students taking this course.

【Learning Objectives】 At the end of the course, students are expected to understand these historical sources correctly.

【Learning activities outside of classroom】 Students will be expected to spend four hours to understand the course content.

【Grading Criteria /Policy】 Grading will be decided on reports and examination(60%),and in-class contribution(40%).

HIS500B4

日本中世史研究

及川 亘

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代人の生活はしばしば「都市的」と形容される。生活の都市化によって、われわれは都市を基軸とする社会的分業がもたらす様々な日常の便利さや快適さを享受するとともに、都市ならではの問題にも直面する。日本列島で初めてそれらを民衆レベルまで含めて体験することになったのは、中世の人々であると言ってよいだろう。本授業では、16世紀前半から17世紀前半の京都を描いた「洛中洛外図屏風」を素材として、そこに描かれるものを一つ一つ読み解きながら、中世から近世に至る都市景観の変化や、都市に住む人々の生活のあり方について考える。

【到達目標】

「洛中洛外図屏風」の読解を通じて、画像史料読解の基礎を学ぶとともに、都市に関連するトピックを中心として、日本中世・近世史の基礎的な概念や考え方を学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

最初に「洛中洛外図屏風」に描かれている場面の読み方や調べ方を例示し、その後は担当者（受講人数によってはグループ）を決めて、担当箇所について何がどのように描かれているか、調べて分かったこと、考えたことを発表してもらい、参加者全員で討論する。併せて教員側からは関連資料を提示しながら解説（フィードバック）する。新型コロナウイルス感染症の流行が収束しない場合は、授業はZOOMを利用して行う。昨年度は最古の「洛中洛外図屏風」である歴博甲本を扱ったが、今年度はそれ以後に製作された上杉本と林原本を中心に扱う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	「洛中洛外図屏風」について	ガイダンス 授業の進め方と利用史料について
第2回	「洛中洛外図屏風」歴博甲本を読む ①	右隻を読む
第3回	「洛中洛外図屏風」歴博甲本を読む ②	左隻を読む
第4回	「洛中洛外図屏風」上杉本を読む ①	右隻第一～三扇を読む
第5回	「洛中洛外図屏風」上杉本を読む ②	右隻第四～六扇を読む
第6回	「洛中洛外図屏風」上杉本を読む ③	左隻第一～三扇を読む
第7回	「洛中洛外図屏風」上杉本を読む ④	左隻第四～六扇を読む
第8回	小括 I	戦国期の京都の都市景観
第9回	「洛中洛外図屏風」林原本を読む ①	右隻第一～三扇を読む
第10回	「洛中洛外図屏風」林原本を読む ②	右隻第四～六扇を読む
第11回	「洛中洛外図屏風」林原本を読む ③	左隻第一～三扇を読む
第12回	「洛中洛外図屏風」林原本を読む ④	左隻第四～六扇を読む
第13回	小括 II	近世初期の京都の都市景観
第14回	まとめ	京都の変貌 中世から近世へ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。報告担当者は、担当箇所について何が描かれているか、そして描かれているものに関する語彙や背景知識を十分に調査検討し、史料を読み込むことが求められる。もちろん担当者以外も予習することが求められる。

【テキスト（教科書）】

「洛中洛外図屏風」歴博甲本については、国立歴史民俗博物館のウェブサイトで公開されている画像（https://www.rekihaku.ac.jp/education_research/gallery/webgallery/rakuchu_kou/rakuchu_kou_1.html https://www.rekihaku.ac.jp/education_research/gallery/webgallery/rakuchu_kou/rakuchu_kou_r.html）を利用し、「洛中洛外図屏風」上杉本・林原本については配布プリントを利用する。また適宜プリントを利用する。

【参考書】

石田尚豊監修ほか『洛中洛外図大観』小学館
京都国立博物館編『洛中洛外図 都の形像』淡交社
高橋康夫・吉田伸之ほか編『図集 日本都市史』東京大学出版会
高橋慎一郎・千葉敏之編『中世の都市 史料の魅力、日本とヨーロッパ』東京大学出版会
笠松宏至ほか編『日本思想体系 22 中世政治社会思想 下』岩波書店
『日本都市史・建築史事典』丸善出版

【成績評価の方法と基準】

平常点60%、期末試験（またはレポート）40%で評価する。積極的な授業参加を期待する。

【学生の意見等からの気づき】

歴史学では必ずしも一つの答えが見つかるわけではないが、史料読解や論理展開にいくつかの可能性がある場合も、それらになるべく分かりやすく整理して解説したい。

【その他の重要事項】

対面での授業を想定しているが、新型コロナウイルス感染症の流行状況によってはオンライン（ZOOM利用）に切り替える。

【Outline (in English)】

The life of modern people is often described as "urban". Through the urbanization of life, we enjoy the various conveniences and comforts of everyday, and also face the problems unique to the city. It can be said that it was the medieval people who first experienced them in the Japanese archipelago, including at the people's level. In this class, using "Rakuchu Rakugai Zu Byobu", which depicts Kyoto from the first half of the 16th century to the first half of the 17th century, as a material, while reading each one drawn there, changes in the cityscape from the Middle Ages to the early modern period, Think about the way people live in the city.

【Goal】

Through reading comprehension of "Rakuchu Rakugai Zu Byobu", you will learn the basics of reading comprehension of image historical materials, and also learn the basic concepts and ideas of Japanese medieval and modern history, focusing on topics related to cities.

【Work to be done outside of class (preparation, etc.)】

The standard preparatory study / review time for this class is 2 hours each.

The reporter is required to thoroughly research and examine what is drawn about the part in charge, and the vocabulary and background knowledge about what is drawn, and read the historical materials. Of course, it is required to prepare for other than the person in charge.

【Grading criteria】

Evaluate with a normal score of 60% and a final exam (or report) of 40%.

We expect active participation in the class.

HIS500B4

日本近世史料科学研究Ⅰ

松本 剣志郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

近世史研究において、くずし字の読解能力を身につけていることは、研究の幅を大きく広げると同時に、学問をより深めるものとなる。本授業は、基礎的な読解能力を養成することを目的とする。あわせて基本的な近世文書の種類を覚えていってもらいたい。

【到達目標】

- ①くずし字の読解能力を身につける。
- ②基本的な近世文書の種類を覚える。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義と演習を併用するかたちをとる。古文書のコピー Hoppii にアップするので、まずは自力で読解に取り組む（教室でプリントは配布しない）。授業時に割り当てるので、学生はこれを板書し、答え合わせをする。教師は当該古文書について解説する（課題に対するフィードバック）。対面授業である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	くずし字の辞典について
第2回	古文書解読入門	近世史料学講義
第3回	検地帳読解（1）	数字を覚えよう
第4回	検地帳読解（2）	単位を覚えよう
第5回	武家屋敷組合名簿読解（1）	名前を覚えよう
第6回	武家屋敷組合名簿読解（2）	通称を覚えよう
第7回	領地宛行状読解	大名家領の安堵
第8回	年貢割付状読解	年貢請求書
第9回	年貢皆済目録読解	年貢領収書
第10回	宗門人別改帳読解	江戸時代の家族
第11回	五人組帳前書読解	百姓への規制
第12回	変体仮名読解	俳句をよむ
第13回	金子借用証文読解	年貢滞納
第14回	試験とまとめ	解説とも

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に、配布された古文書のコピーを辞書を引きながら予習すること。事後には、読めなかった字を必ず復習すること。とにかく古文書をながめる時間をたくさんとること。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

『新編古文書解読字典』（柏書房）
『くずし字用例辞典』（東京堂出版）など
辞書は必須。毎回持参のこと。

【成績評価の方法と基準】

期末試験（90％）、平常点（10％）

【学生の意見等からの気づき】

まずは自分で辞書をひきながら読むことが大事です。

【その他の重要事項】

学部合同科目である。本授業担当者は学芸員の実務経験を有しており、古文書を中心とした史料の整理や活用に関する実践経験をもつ。このことを活かして実際の古文書の取り扱いや保存管理等についての情報も織り交ぜながら授業を展開する。

【Outline (in English)】

This course deals with the historical documents of early modern Japan. It also enhances the development of student's skill in decipherment of cursive-style writing. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Your overall grade in the class will be decided based on the following Term-end examination: 90%, in class contribution: 10%.

HIS500B4

日本近世史料科学研究Ⅱ

松本 剣志郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

多様な近世史料の読解能力を養うことを目的とする。さまざまなくずし字を解読すると同時に、読解した史料の意味を理解することが重要となる。

【到達目標】

- ①くずし字を解読することができる。
- ②読解した史料の意味を理解することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業は日本近世史料学Ⅰを履修済みであることを前提として授業を進める。Hoppii に古文書のコピーをアップするので、これにまずは自力で読解に取り組む。授業時に答え合わせし、教師は当該古文書について解説する（課題に対するフィードバック）。古文書読解の中級編として、近世の行政文書のほか、書状や発句など書体の異なる史料も対象とする。なお、近世ゼミの夏合宿で撮影した古文書をテキストとすることがある。また、現物古文書の整理作業を体験することもある。対面授業である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	発句読解	変体仮名
第2回	離縁状読解	三行半
第3回	触書読解（1）	ペリー来航
第4回	触書読解（2）	株仲間再興
第5回	武家文書読解（1）	御堀の管理
第6回	武家文書読解（2）	橋梁の管理
第7回	武家文書読解（3）	三方領地替（前半）
第8回	武家文書読解（4）	三方領知替（後半）
第9回	漢詩読解	七言絶句
第10回	書状読解（1）	松平容保書簡（前半）
第11回	書状読解（2）	松平容保書簡（後半）
第12回	日記読解（1）	自家年譜（前半）
第13回	日記読解（2）	自家年譜（後半）
第14回	試験とまとめ	解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に配布された古文書のコピーを、辞書を使って自力で読むこと。事後には、必ず復習すること。多くの古文書に触れることが重要である。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

『新編古文書解読字典』（柏書房）
『くずし字用例辞典』（東京堂出版）
辞書は必須。毎回持参のこと。

【成績評価の方法と基準】

期末試験（90 %）、平常点（10 %）

【学生の意見等からの気づき】

筆の動きをみることで、古文書読解能力向上のためのポイントです。

【その他の重要事項】

学部合同科目である。本授業担当者は学芸員の実務経験を有しており、古文書を中心とした史料の整理や活用に関する実践経験をもつ。このことを活かして実際の古文書の取り扱いや保存管理等についての情報も織り交ぜながら授業を展開する。

【Outline (in English)】

This course deals with the historical documents of early modern Japan. It also enhances the development of student's skill in decipherment of cursive-style writing. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Your overall grade in the class will be decided based on the following Term-end examination: 90%, in class contribution: 10%.

HIS500B4

日本近代史研究 I

内藤 一成

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本近代史を、政治史を中心に天皇の観点から読み解く。その際、明治・大正・昭和、三代の天皇についての人間像や歴史的な役割を重視する。近年、天皇個人に関する歴史的解明が進んだことから、君主制の各国比較など議論が活発である。授業を通じて、実証研究の蓄積が学問領域に新たな地平を開くことを明らかにしていく。

【到達目標】

①日本近代史と立憲君主制について歴史的に理解する。②制度と人間、双方に注目しながら歴史を再考する。③歴史の連続性について考える手がかりを得る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義形式とし、板書とパワーポイントを併用させる。適宜史料のコピー等を配布し、史料を音読したり、内容を検討することもある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	講義に関する全体の説明、注意点など
第 2 回	近世の朝廷と幕府	近世の天皇・朝廷と幕府について最新の研究動向をもとに論じる
第 3 回	明治天皇 1 明治維新と天皇	幕末維新の政治を孝明天皇・明治天皇の観点から再考する
第 4 回	明治天皇 2 天皇と日本の近代化	明治日本の近代化について天皇の観点から見直す
第 5 回	明治天皇 3 天皇と立憲政治	憲法制定と立憲政治の歩みを天皇の観点から見直す
第 6 回	明治天皇 4 天皇と戦争	西南戦争・日清戦争・日露戦争、明治国家が経験した大きな戦争を天皇との関わりから論じる
第 7 回	明治天皇 5 天皇のまなざしと支配	近代天皇の支配原理とは何か。「臨・覧・聴」という天皇の行為から読み解く
第 8 回	大正天皇 1 大帝の相統者	明治の終焉と大正新政、大日本帝国はいかに引き継がれたのかを大正天皇の観点から見直す
第 9 回	大正天皇 2 デモクラシーと天皇（1）	第一次大戦後の世界的なデモクラシーの潮流のなか、日本の政党政治はいかに成立したのか。天皇の観点から見直す
第 10 回	昭和天皇 1 デモクラシーと天皇（2）	昭和初期、政党政治と天皇はどう向き合ったのかをみていく
第 11 回	昭和天皇 2 デモクラシーと天皇（3）	政党政治の危機と終焉に、天皇はどう向き合ったのかをみていく
第 12 回	昭和天皇 3 天皇と軍事	昭和期の軍部の台頭に、天皇はどう向き合ったのかをみていく
第 13 回	昭和天皇 4 昭和の大戦と天皇	天皇は対米開戦をいかにして受け入れ、終戦を決断したのか、最新の研究動向をもとにみていく
第 14 回	まとめ 総括と質疑応答	講義全体のまとめ、質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に配布する資料には必ず目を通しておく。授業後には内容をよく確認し、指示のあった文献や資料に目を通しておく。平素より参考文献を読んでおくことが望ましい。本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

刊本のテキストは用いない。参照が必要な文献等がある場合には、講義の際、指示する。

【参考書】

『明治天皇紀』全 13 巻、『大正天皇実録 補訂版』第 1～6 巻、『昭和天皇実録』全 19 巻、伊藤之雄『明治天皇』（ミネルヴァ書房）、同『昭和天皇伝』（文芸春秋）、古川隆久『大正天皇』（吉川弘文館）、同『昭和天皇』（中公新書）、『天皇の歴史』全 10 巻（講談社学術文庫）、吉田孝『歴史のなかの天皇』（岩波新書）

【成績評価の方法と基準】

平常点（40 %）、期末試験（60 %）をもとに総合的に評価する。期末試験はノート持ち込み可。なお、特別の事情がなく、授業への参加度が不良と判断された場合、あるいは期末試験を受けない場合には不合格の評価とする。

【学生の意見等からの気づき】

現時点ではないが、クエスチョンタイムに相当する時間を適宜設けるなどして、授業理解が得られるよう努める。

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムが利用可能な IT 機器

【その他の重要事項】

・「日本近代史科学」（秋学期・学部合同科目・大学院科目「日本近代史研究」Ⅱ）との継続履修を推奨する。
・学部合同科目（「日本近代史」）である。
・やむを得ない事情により授業を欠席する場合（介護体験実習、教育実習など）には、その事情を証明する文書を提出すること。新型コロナウイルス感染防止策として教室での対面授業を行わない場合には、授業内容を変更することがある。
・授業に関連する連絡は、学習支援システムの「お知らせ」サイトや、「授業内掲示板」サイトを利用して行うので、見落とさないようにすること。
・担当教員への直接連絡にはメールを利用すること。担当教員のメールアドレスは、学習支援システムに掲載する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本近現代史

<研究テーマ>

近現代の政治と文化

<主要研究業績>

『貴族院と立憲政治』（思文閣出版）、『貴族院』（同成社）、『華族令嬢たちの大正・昭和』（吉川弘文館）、『三条実美』（中公新書）、『新編旧話会速記』（芙蓉書房出版）、『四條男爵家関係文書』（同成社）、『田健治郎日記』第 3・7 巻（芙蓉書房出版）、『河井弥八日記〈戦後篇〉』全 5 巻（信山社出版）

【Outline (in English)】

(Course outline)

This course examines the modern era of Japan, focusing on political history. I will explain while paying attention to the personalities and historical roles of the three emperors, namely Emperor Meiji(1852-1912), Emperor Taisho(1879-1926), and Emperor Showa(1901-1989). A particular emphasis in this course is a correct and historical understanding of modern Japanese history and the constitutional monarchy.

(Learning Objectives)

By the end of the course, students should be able to do the followings:

- A. Historical understanding of modern Japan and constitutional monarchy.
 - B. Rethinking history while paying attention to both institutions and humans.
 - C. Get clues to think about the continuity of history.
- (Learning activities outside of classroom)

Students should read the materials distributed in advance. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. (Grading Criteria /Policy)

Your overall grade in the class will be decided based on the following

Term-end examination: 60%, in class contribution: 40%

HIS500B4

日本近代史研究Ⅱ

内藤 一成

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本近代史研究では、数多くの、かつさまざまな史（資）料を駆使して議論を組み立てることが珍しくない。本授業では各種の史（資）料を取り上げ、それぞれの特色や限界を明らかにしていく。さらに自ら史料発掘やオーラルヒストリーに取り組むときの手順についても学ぶことで、実践的なスキルを磨く。これらの内容を通じて、日本の歴史史（資）料の特色の一端を窺うことができるようになる。

【到達目標】

①一次・二次史料の違いとそれぞれの特色を理解する。②公文書・私文書の違いとそれぞれの特色を理解する。③文字・非文字資料の違いと、それぞれの特色を理解する。①～③を総合し、近代史（資）料について基礎的な理解をはかる。また独自に史（資）料調査を行う際に必要となる知識を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義形式をとる。板書とパワーポイントを併用する。授業で使用する史（資）料は、学習支援システムを利用して配布する。史（資）料は授業時に音読したり、内容の検証を行う。状況が許せば学外で行う講義もある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	講義に関する全体の説明、注意点など
第2回	書簡研究（1）	近代の書簡の形態・書式等について
第3回	書簡研究（2）	近代の書簡の内容について（政治家の書簡を読む）
第4回	書簡研究（3）	近代の書簡の内容について（文化人の書簡を読む）
第5回	日記研究（1）	近代の日記の形態・書式等について
第6回	日記研究（2）	近代の日記の内容について（政治家の日記を読む）
第7回	日記研究（3）	近代の日記の内容について（文化人の日記を読む）
第8回	公文書研究	さまざまな公文書の特色について
第9回	新聞、雑誌、書籍の世界	新聞、雑誌や各種書籍といった活字資料の特色と歴史研究での活用方法について学ぶ
第10回	史料調査の世界	史料調査の手順や注意点について学ぶ
第11回	オーラルヒストリーの世界	オーラルヒストリーとは何か、調査の手順、注意点について学ぶ
第12回	金石文の世界	金石文の特色について、フィールドワークとともに学ぶ
第13回	編纂史料の世界	翻刻された史料や伝記などの編纂物の特色について
第14回	まとめ 総括と質疑応答	講義全体のまとめ、質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に配布する史（資）料には必ず目を通しておく。その際、読みや意味のわからない文字を調べ、さらに記された内容や、作成した人物についても予習しておく。授業後には内容を再確認することで、知識の定着をはかる。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

テキストに使用する史（資）料は、学習支援システムにより事前に配布する。

【参考書】

五味文彦・杉森哲也編『日本史史料論』（放送大学教育振興会）、中村隆英・伊藤隆編『近代日本研究入門〔増補版〕』（東京大学出版会）、佐々木隆『近代文書と政治史研究』（『日本の時代史 30 歴史と素材』吉川弘文館）、御厨貴編著『近現代日本を史料で読む』（中公新書）、『日記に読む近代日本』全5巻（吉川弘文館）、御厨貴編『オーラル・ヒストリーに何ができるか』（岩波書店）

【成績評価の方法と基準】

平常点（40 %）、期末試験（60 %）をもとに総合的に評価する。期末試験はノート持ち込み可。なお、特別の事情がなく、授業への参加度が不良と判断された場合、あるいは期末試験を受けない場合には不合格の評価とする。

【学生の意見等からの気づき】

現時点ではないが、クエスチョンタイムに相当する時間を適宜設けるなどして、授業理解が得られるよう努める。

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムが利用可能な IT 機器

【その他の重要事項】

- ・「日本近代史」（春学期・学部合同科目・大学院科目「日本近代史研究」Ⅰ）との継続履修を推奨する。
- ・学部合同科目（「日本近代史科学」）である。
- ・やむを得ない事情により授業を欠席する場合（介護体験実習、教育実習など）には、その事情を証明する文書を提出すること。新型コロナウイルス感染防止策として教室での対面授業を行わない場合には、授業内容を変更することがある。
- ・授業に関連する連絡は、学習支援システムの「お知らせ」サイトや、「授業内掲示板」サイトを利用して行うので、見落とさないようにすること。
- ・担当教員への直接連絡にはメールを利用すること。担当教員のメールアドレスは、学習支援システムに掲示する。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

日本近現代史

＜研究テーマ＞

近現代の政治と文化

＜主要研究業績＞

『貴族院と立憲政治』（思文閣出版）、『貴族院』（同成社）、『華族令嬢たちの大正・昭和』（吉川弘文館）、『三条実美』（中公新書）、『新編旧話会速記』（芙蓉書房出版）、『四條男爵家関係文書』（同成社）、『田健治郎日記』第3・7巻（芙蓉書房出版）、『河井弥八日記〈戦後篇〉』全5巻（信山社出版）

【Outline (in English)】

(Course outline)

In this course, I will explain the characteristics and limitations of each of the various modern Japanese historical materials while analyzing them in detail. I will also teach you the steps to discover historical sources and conduct oral history research yourself. Through the lessons, you will gain basic knowledge and understanding of historical materials.

(Learning Objectives)

The goal of this course is to recognize the characteristics of various historical materials and to acquire the professional abilities necessary for documentary research.

(Learning activities outside of classroom)

Students should read the materials distributed in advance. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. (Grading Criteria /Policy)

Your overall grade in the class will be decided based on the following

Term-end examination: 60%, in class contribution: 40%

CUA500B4

沖縄学入門Ⅰ

大里 知子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は「沖縄学」の入門として、主に沖縄の近現代史について学ぶことを目的としている。
「沖縄学」とは何か、という問いを立てることによって、近代から現代へかけて取り組まれてきた沖縄研究の成果が持つ意味とその時代背景について探っていく。

【到達目標】

琉球・沖縄の歴史と文化について基礎的な知識を身につけたうえで、沖縄の近現代史のなかで問われてきた諸事象を、東アジアにおける近代化や国際情勢という視点から考察し、そこで得られた問題意識を自己の研究に生かす。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

テキスト及び関連文献を読みながら講義と報告、議論を交えて進めていきたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の概略、進め方についての説明
第2回	琉球・沖縄史概説	時代区分論、基礎資料・文献、研究動向など
第3回	欧米船の来航	19世紀以降の欧米のアジア進出と琉球への欧米船来航
第4回	「琉球処分」琉球国併合	琉球藩設置以降の琉球国併合過程、「分島・改約」交渉
第5回	初期県政	沖縄県設置後の初期県政における「旧慣温存」政策と県内の状況
第6回	沖縄における民権運動	宮古島における人頭税廃止運動、謝花昇と沖縄倶楽部
第7回	「旧慣」の改革	土地整理事業、沖縄県及島嶼町村制、徴兵制の実施
第8回	日清戦争後の文化、教育	沖縄学と日琉同祖論、尋常中学校ストライキ事件、河上肇舌禍事件
第9回	「ソテツ地獄」と沖縄振興計画	沖縄における恐慌、救済論と振興計画
第10回	海外移民と出稼ぎ	海外への移民、本土への出稼ぎ、大東島の開拓
第11回	沖縄における労働問題	西表炭鉱、沖縄青年同盟と労働運動
第12回	近代沖縄の文化	新聞の発刊、文学、美術、音楽、近代演劇
第13回	第1次世界大戦前後の沖縄	台湾における霧社事件と沖縄出身者、満州開拓移民
第14回	戦時下の沖縄	標準語の励行、改姓改名運動と日本民芸協会・柳宗悦らとの「方言論争」

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。事前に指示したテキストの該当箇所や関連文献を読み、自分なりの問題意識を持って授業に臨む。

【テキスト（教科書）】

前田勇樹・古波蔵契・秋山道宏編『つながる沖縄近現代史』（2021）
ボーダーインク

【参考書】

・新城俊昭『教養講座 琉球・沖縄史』（2014）東洋企画
・沖縄県教育委員会編『沖縄県史 各論編第5巻 近代』（2011）東洋企画
・金城正篤・高良倉吉『「沖縄学」の父 伊波普猷 [新訂版]』（2017）清水書院

【成績評価の方法と基準】

平常点80%、レポート20% 毎回の授業への参加態度に、授業に取り組む姿勢や意欲が顕れるものと考えている。

【学生の意見等からの気づき】

「入門」という科目のため、基本的な内容をベースにしているが、より専門的なディスカッションを求める学生に対して個別に対応する工夫が必要となる。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

<研究テーマ>

<主要研究業績>

<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/105/0010447/profile.html>

【Outline (in English)】

In this class, you will learn about modern history of Okinawa as an introduction to “Okinawan studies”.

It also the purpose of this course is to study “Okinawan studies” from the perspective of modernization and international affairs in East Asia.

CUA500B4

沖縄学入門Ⅱ

大里 知子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は「沖縄学」の入門として、主に沖縄の近現代史について学ぶことを目的としている。
「沖縄学」とは何か、という問いを立てることによって、近代から現代へかけて取り組まれてきた沖縄研究の成果が持つ意味とその時代背景について探っていく。

【到達目標】

琉球・沖縄の歴史と文化について基礎的な知識を身につけたうえで、沖縄の近現代史のなかで問われてきた諸事象を、東アジアにおける近代化や国際情勢という視点から考察し、そこで得られた問題意識を自己の研究に生かす。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

テキスト及び関連文献を読みながら講義と報告、議論を交えて進めていきたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業の概略、進め方についての説明
第 2 回	伊波普猷と「沖縄学」	伊波普猷と沖縄学
第 3 回	伊波普猷と「日琉同祖論」	伊波普猷の歴史思想
第 4 回	沖縄戦の実相	学童疎開と空襲、地上戦「鉄の暴風」、集団死、宮古・八重山での戦争マラリア
第 5 回	収容所からはじまった戦後	米軍支配の始まりと住民の暮らし
第 6 回	土地の強制収用と基地の成り立ち	米軍による接収だけではない基地の成り立ち
第 7 回	沖縄戦体験の語りと記録	語りなおされる沖縄戦、沖縄戦像と記憶、記述
第 8 回	アメリカ世の沖縄	アメリカのアジア戦略と核兵器配備
第 9 回	島ぐるみ闘争	基地の拡大と「島ぐるみ闘争」、「命どう宝」の訴え
第 10 回	日本への「復帰運動」	「復帰運動」が生んだ亀裂
第 11 回	戦後移民	移民政策と沖縄経済、「世界のウチナーンチュ」
第 12 回	「復帰」後の沖縄	「日本復帰」と「沖縄イメージ」
第 13 回	沖縄ブームと基地問題	終わらない基地問題、共同体の解体
第 14 回	近現代沖縄の歴史	これまでのまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。事前に指示したテキストの該当箇所や関連文献を読み、自分なりの問題意識を持って授業に臨む。

【テキスト（教科書）】

前田勇樹・古波蔵契・秋山道宏編『つながる沖縄近現代史』（2021）ボーダーインク

【参考書】

・新城俊昭『教養講座 琉球・沖縄史』（2014）東洋企画

・沖縄県教育委員会編『沖縄県史 各論編第 5 巻 近代』（2011）東洋企画
・金城正篤・高良倉吉『「沖縄学」の父 伊波普猷 [新訂版]』（2017）清水書院

【成績評価の方法と基準】

平常点 80 %、レポート 20 % 毎回の授業への参加態度に、授業に取り組む姿勢や意欲が顕れるものと考えている。

【学生の意見等からの気づき】

「入門」という科目のため、基本的な内容をベースにしているが、より専門的なディスカッションを求める学生に対して個別に対応する工夫が必要となる。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
<研究テーマ>
<主要研究業績>

<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/105/0010447/profile.html>

【Outline (in English)】

In this class, you will learn about modern history of Okinawa as an introduction to “Okinawan studies”.

It also the purpose of this course is to study “Okinawan studies” from the perspective of modernization and international affairs in East Asia.

HIS600B4

東洋史学特殊研究Ⅰ

塩沢 裕仁

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

中国考古学資料の解説

【到達目標】

近年膨大な資料が提示されている中国考古学の現状を理解するとともに研究資料としての中国考古学報告を読み進めるための力を養成することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

東アジア文化の発達やその変遷を探索しようとするならば必然的にその淵源たる中国古代文化を研究する必要がある。その方法としては第一に文献を理解することが求められるが、宗教・思想や社会状態の推移を探究するためには物質・環境考証というアプローチもまた不可欠な手法である。古代中国文化の中心地といえば河南洛陽である。本講座では洛陽地域における考古学報告を用い、その読解を通して中国物質文化への理解を深めていきたいと思う。具体的には春学期は洛陽市文物管理局が編纂した『古都洛陽』を読み進めていく。春学期は三代といわれる夏・殷（商）・周を中心に報告資料の講読と考古資料の検討を行いたい。

課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定。

授業形式（対面）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	中国考古学の状況と考古学報告活用の意味
第2回	夏代の洛陽Ⅰ	夏都の変遷と二里頭宮殿遺址
第3回	夏代の洛陽Ⅱ	夏代の奴隸制国家機構
第4回	夏代の洛陽Ⅲ	夏代洛陽地区の経済と科学技術
第5回	商代早期の都城—西亳Ⅰ	商湯の討夏と偃師商城遺址の発見
第6回	商代早期の都城—西亳Ⅱ	商代の奴隸制国家
第7回	商代早期の都城—西亳Ⅲ	商代洛陽地区の経済と科学技術
第8回	西周の洛陽Ⅰ	洛邑成周の造営
第9回	西周の洛陽Ⅱ	成周の所在、規模、位置付け
第10回	西周の洛陽Ⅲ	西周墓葬と車馬坑
第11回	西周の洛陽Ⅳ	成周の農業と手工業
第12回	東周の洛陽Ⅰ	東周の成立と周王室の衰退
第13回	東周の洛陽Ⅱ	東周国都の王城と成周城の建設規模
第14回	東周の洛陽Ⅲ	東周の貴族墓葬、陪葬坑、車馬坑

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

資料は中国語であるが、読解という点からみれば辞書を活用することで中国語を学んだことがなくとも十分に対応できよう。積極的な予習を期待する。また、資料の読解と内容への理解を深めるため、博物館や展示会には頻繁に出掛け自分の目で遺物を観察してもらいたい。

【テキスト（教科書）】

授業中に使用する資料は随時配布する。

【参考書】

塩沢裕仁『千年帝都洛陽—その遺跡と人文・自然環境—』雄山閣、2010年

【成績評価の方法と基準】

【評価配分（％）】 発表内容：50、討論への参加姿勢：50

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞中国考古学・中国古代歴史地理

＜研究テーマ＞漢より唐にいたる古代都城遺跡とそれを取り巻く地域の生態環境。

＜主要研究業績＞

『千年帝都洛陽—その遺跡と人文・自然環境—』雄山閣、2010年

「漢魏洛陽城の都市空間」『史潮』新67号、2010年

『関野貞大陸調査と現在Ⅰ・Ⅱ』東京大学東洋文化研究所、2012年、2014年

「漢魏洛陽城穀水水文考」『東洋史研究』71-2、2012年

『後漢魏晉南北朝都城境域研究』雄山閣、2013年

「函谷関遺跡考証—四つの函谷関遺跡について」『東京大学東洋文化研究所紀要』169冊、2016年

「城壁・烽火台遺構よりみた潼関城址」『国際シンポジウム・前近代中国における交通路と関津に関する環境史的研究』2017年

【Outline (in English)】

【Course outline and Learning Objectives】On reading the Chinese archaeological reports, we will be able to understand the study situation of Chinese Archaeology and cultivate our ability to research on the Chinese archaeological data.

【Learning activities outside of classroom】Need two hours in a day.

【Grading Criteria /Policy】Based on class performance 100 percent.

HIS600B4

東洋史学特殊研究Ⅱ

塩沢 裕仁

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

中国考古学資料の解説

【到達目標】

近年膨大な資料が提示されている中国考古学の現状を理解するとともに研究資料としての中国考古学報告を読み進めるための力を養成することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

東アジア文化の発達やその変遷を探索しようとするならば必然的にその淵源たる中国古代文化を研究する必要がある。その方法としては第一に文献を理解することが求められるが、宗教・思想や社会状態の推移を探究するためには物質・環境考証というアプローチもまた不可欠な手法である。古代中国文化の中心地といえは河南洛陽である。本講座では洛陽地域における考古学報告を用い、その読解を通して中国物質文化への理解を深めていきたいと思う。具体的には秋学期は洛陽市文物管理局が編纂した『古都洛陽』を読み進めていく。秋学期は後漢・魏晉・北魏という日本古代とも関連の深い時代の報告資料の講読と考古資料の検討を行いたい。

課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定。

授業形式（対面）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	後漢の洛陽Ⅰ	後漢洛陽の規模と宮殿・苑囿
第2回	後漢の洛陽Ⅱ	後漢帝陵と洛陽刑徒墓
第3回	後漢の洛陽Ⅲ	後漢洛陽の商業・経済・対外交渉
第4回	後漢の洛陽Ⅳ	後漢洛陽の科学文化
第5回	後漢の洛陽Ⅴ	高山の漢闕
第6回	後漢の洛陽Ⅵ	中国最古の仏教古刹白馬寺
第7回	魏晉北魏の洛陽Ⅰ	魏晉北魏の洛陽城
第8回	魏晉北魏の洛陽Ⅱ	魏晉北魏の帝陵
第9回	魏晉北魏の洛陽Ⅲ	魏晉北魏の重要墓葬
第10回	魏晉北魏の洛陽Ⅳ	洛陽の北魏石窟
第11回	隋唐の洛陽Ⅰ	隋唐洛陽城の発掘Ⅰ
第12回	隋唐の洛陽Ⅱ	隋唐洛陽城の発掘Ⅱ
第13回	隋唐の洛陽Ⅲ	隋唐洛陽城関連遺跡
第14回	隋唐の洛陽Ⅳ	隋唐の龍門石窟

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

資料は中国語であるが、読解という点からみれば辞書を活用することで中国語を学んだことがなくとも十分に対応ができよう。積極的な予習を期待する。また、資料の読解と内容への理解を深めるため、博物館や展示会には頻繁に出掛け自分の目で遺物を観察してもらいたい。

【テキスト（教科書）】

授業中に使用する資料は随時配布する。

【参考書】

塩沢裕仁『千年帝都洛陽—その遺跡と人文・自然環境—』雄山閣、2010年

【成績評価の方法と基準】

【評価配分（％）】 発表内容：50、討論への参加姿勢：50

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞中国考古学・中国古代歴史地理

＜研究テーマ＞漢より唐にいたる古代都城遺跡とそれを取り巻く地域の生態環境。

＜主要研究業績＞

『千年帝都洛陽—その遺跡と人文・自然環境—』雄山閣、2010年

「漢魏洛陽城の都市空間」『史潮』新67号、2010年

『関野貞大陸調査と現在Ⅰ・Ⅱ』東京大学東洋文化研究所、2012年、2014年

「漢魏洛陽城穀水水文考」『東洋史研究』71-2、2012年

『後漢魏晉南北朝都城境域研究』雄山閣、2013年

「函谷関遺跡考証—四つの函谷関遺跡について」『東京大学東洋文化研究所紀要』169冊、2016年

「城壁・烽火台遺構よりみた潼関城址」『国際シンポジウム・前近代中国における交通路と関津に関する環境史学的研究』2017年

【Outline (in English)】

【Course outline and Learning Objectives】 On reading the Chinese archaeological reports, we will be able to understand the study situation of Chinese Archaeology and cultivate our ability to research on the Chinese archaeological data.

【Learning activities outside of classroom】 Need two hours in a day.

【Grading Criteria /Policy】 Based on class performance 100 percent.

HIS500B4

東洋史学特殊研究Ⅲ

大島 誠二

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この講座では、古代中国における都市について考察する。都市の変遷は、政治、経済の発展と深いつながりがあり、国家の性格を示す指標でもある。新発見が相次いでいる考古学資料を用いて、中国古代の中核都市の発展経過をたどり、中国の都市の特質について考察する。テキストとして劉慶柱主編『中国古代都城考古発現與研究』上巻を用いる。前期は、「東周都城」を輪読する。どのように東周時代の諸国の都城が構成され成立したのか、その過程を追い、比較することで「都市の発展と古代国家の成立」の問題を考えてみたい。

【到達目標】

考古学資料による分析方法を身につける。

中国古代社会の成立過程を理解する。

中国古代における都市の形態と役割、発展について理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式。受講者の発表によって進行する。

対面授業で実施予定。状況が悪化すればオンライン授業【リアルタイム配信型】に移行する。

課題や発表に対するフィードバックは、基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	西周時代の都城と東周時代の都城	西周時代と東周時代の都城の在り方を比較検討する。
第 2 回	侯馬晋国故城①	「侯馬晋国故城」の「城址概況」を読み、侯馬晋国故城の全体像を把握する。
第 3 回	侯馬晋国故城②	「侯馬晋国故城」の「宮殿建築基址」を読み、宮殿区の配置と構造について理解する。
第 4 回	侯馬晋国故城③	「侯馬晋国故城」の「祭祀遺址」を読み、祭祀の在り方について理解する。
第 5 回	侯馬晋国故城④	「侯馬晋国故城」の「手工業遺址」を読み、当時の手工業について理解する。
第 6 回	侯馬晋国故城⑤	「侯馬晋国故城」の「墓葬分布区」を読み、墓葬の在り方について理解する。
第 7 回	侯馬晋国故城⑥	「侯馬晋国故城」の遺跡分布を確認し、その特徴を考察する。
第 8 回	鄭韓故城①	「鄭韓故城」の「城址概況」を読み、鄭韓故城の全体像を把握する。
第 9 回	鄭韓故城②	「鄭韓故城」の「宮殿建築基址」を読み、宮殿区の配置と構造について理解する。
第 10 回	鄭韓故城③	「鄭韓故城」の「手工業遺址」を読み、当時の手工業について理解する。
第 11 回	鄭韓故城④	「鄭韓故城」の「祭祀及倉儲遺址」を読み、祭祀と倉儲遺址について理解する。

第 12 回	鄭韓故城⑤	「鄭韓故城」の「墓葬分布区」を読み、墓葬の在り方について理解する。
第 13 回	陽翟故城	「陽翟故城」を読み、一時、韓の都が置かれた陽翟故城について検討する。
第 14 回	侯馬晋国故城と鄭韓故城の比較検討	侯馬晋国故城と鄭韓故城の遺跡を比較検討し、東周時代の都城の立地と都市構造について考察する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

発表担当者は、参加者の理解のために、レジュメを作成してほしい。博物館、美術館に足を運び、実際に考古学的資料を見る目を養ってほしい。

【テキスト（教科書）】

劉慶柱主編『中国古代都城考古発現與研究』上巻 社会科学文献出版社 2016 年 1 月
最初の時間に、詳細を説明します。

【参考書】

中国社会科学院考古研究所『中国考古学 夏商卷』中国社会科学出版社 2003 年（2011 年重印）
中国社会科学院考古研究所『中国考古学 两周卷』中国社会科学出版社 2004 年（2011 年重印）

【成績評価の方法と基準】

発表 50 %、レポート作成 50 %

【学生の意見等からの気づき】

画像資料なども利用し、できるだけわかりやすく進めたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>中国古代史、中国考古学

<研究テーマ>秦国を中心とした、春秋戦国時代から秦漢帝国成立までの社会研究

<主要研究業績>

「秦の東進と陝東社会」『アジア史における制度と社会』 刀水書房 1996 年

「侯馬喬村墓地の変遷について」『アジア史における社会と国家』中央大学出版社 2005 年

「咸陽周辺の住民に関する一考察－周辺墓葬の分析から－」『池田雄一教授古稀記念アジア史論叢』白東史学会発行 2008 年

【Outline (in English)】

【Course outline】

Using archaeological data, we will follow the development process of an ancient Chinese city and consider the characteristics of Chinese cities.

As the text, we used Liu Qingzhu, the editor-in-chief, "The Archaeological Discovery and Research of Ancient Chinese Capital" first volume. In this term, we read the part of "Eastern Zhou period city". We would also like to follow the formation process of the city, and consider the problems regarding the "Development of the city and the formation of an ancient state".

【Learning Objectives】

By the end of the course, students should be able to do the followings:

A. Learn how to analyze archaeological data.

B. Understand the formation process of ancient Chinese society.

C. Understand the morphology, function and development of ancient Chinese cities.

【Learning activities outside of classroom】

Before after each class meeting, students will be expected to spend two hours to understand the course content

【Grading Criteria/Policies】

Final grade will be calculated according to the following process
Mid-term report 50 % , and in-class contribution 50%

HIS500B4

東洋史学特殊研究Ⅳ

大島 誠二

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この講座では、古代中国における都市について考察する。都市の変遷は、政治、経済の発展と深いつながりがあり、国家の性格を示す指標でもある。新発見が相次いでいる考古学資料を用いて、中国古代の中核都市の発展経過をたどり、中国の都市の特質について考察する。テキストとして劉慶柱主編『中国古代都城考古發現与研究』上巻を用いる。後期は、「東周都城」を輪読する。東周時代の各国の都城を比較検討し、「都市の発展と古代国家の成立」の問題を考えてみたい。

【到達目標】

考古学資料による分析方法を身につける。
中国古代社会の成立過程を理解する。
中国古代における都市の形態と役割、発展について理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式。受講者の発表によって進行する。
対面授業で実施予定。状況が悪化すればオンライン授業【リアルタイム配信型】に移行する。
課題や発表に対するフィードバックは、基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	西周時代と東周時代の都城	西周時代と比較し、東周時代の都城の役割について考える
第 2 回	趙国邯鄲故城①	「趙国邯鄲故城」の「城址概況」を読み、立地や使用年代を確認する。
第 3 回	趙国邯鄲故城②	「趙国邯鄲故城」の「城址概況」を読み、調査の経緯と遺跡の分布状況を確認する。
第 4 回	趙国邯鄲故城③	「趙国邯鄲故城」の「宮殿建築基址」を読み、宮殿建築の分布状況を把握する。
第 5 回	趙国邯鄲故城④	「趙国邯鄲故城」の「居住区及手工業作坊遺址」を読み、居住区と工房の立地を把握する。
第 6 回	趙国邯鄲故城⑤	「趙国邯鄲故城」の「墓葬区」を読み、墓葬分布状況を把握する。
第 7 回	趙国邯鄲故城⑥	「趙国邯鄲故城」の遺跡分布状況を分析し、その特色を考察する。
第 8 回	魏国都城安邑故城①	「魏国都城安邑故城」の「城址概況」を読み、立地や使用年代を把握する。
第 9 回	魏国都城安邑故城②	「魏国都城安邑故城」の「城址概況」を読み、調査の経緯と遺跡の分布状況を確認する
第 10 回	魏国都城安邑故城③	「魏国都城安邑故城」の「宮殿建築基址」を読み、大型建築遺跡の分布状況を理解し、その機能を考察する。
第 11 回	魏国都城安邑故城④	「魏国都城安邑故城」の「手工業作坊遺址」を読み、遺跡の状況を把握する。

第 12 回	魏国都城安邑故城⑤	「魏国都城安邑故城」の遺跡の分布状況を考察し、その特色を考える。
第 13 回	東周都城の考察	「侯馬晋国故城」「鄭韓故城」「趙国邯鄲故城」「魏国都城安邑故城」を比較検討し、東周時代の都城の構造を把握する。
第 14 回	西周時期と東周時期の都城形態	西周時期と東周時期の都城形態の変化を踏まえながら、背後にある社会状況の変化を考察する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
発表担当者は、他の参加者の理解のためにレジュメを作成してほしい。
また博物館、美術館に足を運び、実際に考古学的資料を見る目を養ってもらいたい。

【テキスト（教科書）】

劉慶柱主編『中国古代都城考古發現与研究』上巻 社会科学文献出版社 2016 年 1 月
最初の時間に、詳細を説明します。

【参考書】

中国社会科学院考古研究所『中国考古学 夏商卷』中国社会科学出版社 2003 年（2011 年重印）
中国社会科学院考古研究所『中国考古学 两周卷』中国社会科学出版社 2004 年（2011 年重印）

【成績評価の方法と基準】

発表 50 %、レポート作成 50 %

【学生の意見等からの気づき】

画像資料なども利用し、できるだけわかりやすく進めたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 中国古代史、中国考古学
<研究テーマ> 秦国を中心とした、春秋戦国時代から秦漢帝国成立までの社会研究
<主要研究業績>
「秦の東進と陝東社会」『アジア史における制度と社会』 刀水書房 1996 年
「侯馬喬村墓地の変遷について」『アジア史における社会と国家』中央大学出版部 2005 年
「咸陽周辺の住民に関する一考察－周辺墓葬の分析から－」『池田雄一教授古稀記念アジア史論叢』白東史学会発行 2008 年

【Outline (in English)】

【Course outline】

Using archaeological data, we will follow the development process of an ancient Chinese city and consider the characteristics of Chinese cities.

As the text, we used Liu Qingzhu, the editor-in-chief, "The Archaeological Discovery and Research of Ancient Chinese Capital" first volume. In this term, we read the part of "Eastern Zhou period city". We would also like to follow the formation process of the city, and consider the problems regarding the "Development of the city and the formation of an ancient state".

【Learning Objectives】

By the end of the course, students should be able to do the followings:

- Learn how to analyze archaeological data.
- Understand the formation process of ancient Chinese society.
- Understand the morphology, function and development of ancient Chinese cities.

【Learning activities outside of classroom】

Before after each class meeting, students will be expected to spend two hours to understand the course content

【Grading Criteria/Policies】

Final grade will be calculated according to the following process
Mid-term report 50 % , and in-class contribution 50%

HIS600B4

東洋史学演習 I

齋藤 勝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

中国古代史研究の展開
自分の研究をより良いものにするために、文献史料・先行研究と向き合う。

【到達目標】

中国の古代の歴史がいかに記述され、論じられてきたかについて理解を深める。研究の背景にある時代性を認識する。自分と自分の研究の関係について考えていく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

毎回、課題となる漢文史料や中国古代史に関する研究論文（日本語・中国語）についての講読、整理発表を行い、それをもとに議論を行っていく。課題に対してのフィードバックは、講読、整理発表の中で適宜行っていく。原則として授業は対面で行っていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	概論	授業の趣旨と進め方
第 2 回	漢文史料を読む	講読 『三国志』
第 3 回	前回の史料についての検討	『三国志』の成書と内容について
第 4 回	漢文史料を読む	講読 『晋書』
第 5 回	前回の史料についての検討	『晋書』の成書と内容について
第 6 回	漢文史料を読む	講読 『世説新語』
第 7 回	前回の史料についての検討	『世説新語』の成書と内容について
第 8 回	歴史評論を読む	講読 『日知録』
第 9 回	『日知録』を理解するために	顧炎武とその時代について
第 10 回	『日知録』を読むために	典故について
第 11 回	『日知録』を考える	講読 『日知録』についての諸研究
第 12 回	これまでの整理	これまで読んできたものについての比較検討
第 13 回	参加者各自の問題意識と先行研究	講読 参加者任意の文献
第 14 回	参加者各自のテーマに基づく問題意識の深化	参加者各自による研究発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
参加者には各回とも指示した文献の講読もしくは要点整理をしてもらいます。

【テキスト（教科書）】

授業計画参照。適宜、配布します。
扱う内容は受講者や授業の進展に応じて変更します。

【参考書】

随時、紹介します。

【成績評価の方法と基準】

平常点 100 %

課題の達成度によって評価します。適切な読解・整理が出来ているかが評価基準となります。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【その他の重要事項】

万が一オンライン実施に変更となった場合、Zoom や学習支援システムにより授業を行う予定です。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 中国古代史

<研究テーマ> 唐代を中心とした中国世界・文化の形成と変容

<主要研究業績>

「唐・回鹘絹馬交易再考」『史学雑誌』108-10、1999 年

「9・10 世紀敦煌の牧羊代行業について」『歴史学研究』796、2004 年

「唐代内附異民族への賦役規定と辺境社会」『史学雑誌』117-3、2008 年

【Outline (in English)】

Course outline: The aim of this course is to help students improve skills and critical minds to study the history of ancient China.

Learning objectives: At the end of the course, students are expected to promote their understanding of the way to describe the history in ancient China.

Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

Grading criteria/policy: In class contribution(100%)

HIS600B4

東洋史学演習Ⅱ

齋藤 勝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

中国古代史研究の展開

自分の研究をより良いものにするために、文献史料・先行研究と向き合う。

【到達目標】

中国の古代の歴史がいかに記述され、論じられてきたかについて理解を深める。研究の背景にある時代性を認識する。自分と自分の研究の関係について考えていく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

毎回、課題となる漢文史料や中国古代史に関する研究論文（日本語・中国語）についての講読、整理発表を行い、それをもとに議論を行っていく。課題に対してのフィードバックは、講読、整理発表の中で適宜行っていく。原則として授業は対面で行っていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	概論	授業の趣旨と進め方
第 2 回	漢文史料を読む	講読 『資治通鑑』
第 3 回	前回の史料についての検討	『資治通鑑』の成書と内容について
第 4 回	研究文献を読む	講読 陳垣『通鑑胡注表微』
第 5 回	前回の文献についての検討	陳垣とその時代について
第 6 回	前回の文献に関する補足	胡三省とその時代について
第 7 回	研究文献を読む	講読 桑原隲蔵の諸論文
第 8 回	前回の文献についての検討	桑原隲蔵とその時代について
第 9 回	研究文献を読む	講読 陳垣の諸論文
第 10 回	研究の比較	桑原隲蔵と陳垣の比較検討
第 11 回	研究文献を読む	講読 陳寅恪の諸論文
第 12 回	研究の比較	陳寅恪と陳垣の比較検討
第 13 回	参加者各自の問題意識の提示	講読 参加者任意の文献
第 14 回	参加者各自のテーマに基づく問題意識の深化	参加者各自による研究発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

参加者には各回とも指示した文献の講読もしくは要点整理をしてもらいます。

【テキスト（教科書）】

授業計画参照。適宜、配布します。

扱う内容は受講者や授業の進展に応じて変更します。

【参考書】

随時、紹介します。

【成績評価の方法と基準】

平常点 100 %

発表内容によって評価します。適切な読解・整理が出来ているかが評価基準となります。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【その他の重要事項】

万が一オンライン実施に変更となった場合、Zoom や学習支援システムにより授業を行う予定です。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 中国古代史

＜研究テーマ＞ 唐代を中心とした中国世界・文化の形成と変容

＜主要研究業績＞

「唐・回鹘絹馬交易再考」『史学雑誌』108-10、1999 年

「9・10 世紀敦煌の牧羊代行業について」『歴史学研究』796、2004 年

「唐代内附異民族への賦役規定と辺境社会」『史学雑誌』117-3、2008 年

【Outline (in English)】

Course outline: The aim of this course is to help students improve skills and critical minds to study the history of ancient China.

Learning objectives: At the end of the course, students are expected to promote their understanding of the way to describe the history in ancient China.

Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

Grading criteria/policy: In class contribution(100%)

HIS500B4

東洋史学演習Ⅲ

水上 和則

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ・中国陶瓷史と関連する東アジア交易について学ぶ。
- ・陶磁器の美しさを感じる能力を養う。

【到達目標】

古代よりわが国への貿易陶磁の中心は、中国であった。唐から元代にかけて、中国陶磁の名品を生み出した諸窯について学び、陶磁器の鑑賞能力を獲得する。また、わが国で“茶の湯”文化が生まれることで、新たに発注が行われた例など、中国陶磁が東アジアに向けて広く交易されていた事を理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・毎回対面授業を基本として行う。
- ・教員の講義の後に、テーマごとに各自課題の発表を行う。
- ・実技理解の為に学外見学を行う。
- ・疑問点は、授業時間内で解決し、予習・復習時の質問は学内メールにて受ける。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	中国陶磁史と東アジア交易入門
第 2 回	日本における中国陶磁研究	わが国においては室町時代末の茶文化と共に、中国陶磁研究の著書がみられる。江戸時代末から研究も盛んとなる。ここでは研究の流れを理解する。
第 3 回	欧州および中国における陶磁研究	清朝末期より欧州および中国においても、中国陶磁研究が盛んとなる。個々の研究者に焦点を当て、研究成果を学んで行く。
第 4 回	越州窯 1	青瓷の発展と甌窯・越窯。浙江省青瓷生産の中心地としての甌窯と越窯を、出土品から両窯の違いを学ぶ。
第 5 回	越州窯 2	越州窯の青瓷生産と秘色瓷。唐代秘色瓷と宋代秘色瓷を、両者の違いを文献から推察し、各地出土品から検証してゆく。
第 6 回	越州窯 3	諸外国への技法伝搬と周辺諸窯。朝鮮や日本、ベトナムに貿易された越窯製品は、現地に陶磁文化を開花させる。
第 7 回	長沙窯 1	湖南省長沙窯は、内陸にあるにも関わらず、唐代には大量の瓷器を生産し、国内のみならず海外にも貿易した。古窯址から実態を探る。
第 8 回	長沙窯 2	長沙窯とイスラム文化系諸国との関係は、唐代から密接なものが見いだせる。ここでは文様を中心に調べてゆく。
第 9 回	学外見学	東京国立博物館・東京藝術大学陶芸科など、学習にかかわる施設の見学を行う。

第 10 回 耀州窯 1

華北の青瓷生産と耀州窯。職人移動が確認できる唯一の窯としての耀州窯を学び、技法伝搬の具体的な姿を学ぶ。

第 11 回 耀州窯 2

石炭燃料使用と徳応侯碑。窯神廟と徳応侯碑について学び、当時の生産組織を共に考え推察してゆく。

第 12 回 定窯 1

定窯窯址の発見について。小山富士夫によって発見された定窯窯址の最新発掘成果を紹介し、理解を深める。

第 13 回 定窯 2

定窯白瓷の装飾技法。陶磁の装飾法について理解し、その発展を装飾法の伝搬から学んでゆく。

第 14 回 定窯 3

定窯白瓷と遼の白瓷
遼の白瓷生産は未だ謎のままである。ここでは流通経路から、その謎を追ってゆく。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
予め講義資料の配布を行うので関係する箇所を読み、関係論文を調査し予習しておくことを求める。テキスト中の専門用語を抜き出し、出来る限りその意味を調べる。

【テキスト（教科書）】

プリント配布

【参考書】

基礎参考書
佐藤雅彦『中国陶磁史』平凡社、昭和 53 年
江口渥『陶芸入門』文研出版、1973 年
越窯関係
『上林湖越窯』
定窯関係
小山富士夫『定窯窯址の発見について』
詳細は、授業の進行に沿って随時伝える。

【成績評価の方法と基準】

平常の学習意欲を 予習報告等で評価 (60%) し、あわせて期末学修レポート (40%) の合計で成績評価を行う。

【学生の意見等からの気づき】

今後順次対応してゆく。

【その他の重要事項】

東京国立博物館および東京藝術大学への陶芸実技見学を予定する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
中国陶磁史
<研究テーマ>
唐宋時代の陶磁技法の研究
<主要研究業績>

- (1)「中国釉下彩瓷釉の研究」『東洋陶磁 Vol.31』2002 年
- (2)「宋代景德鎮窯における素地土配合の研究」『亜州古陶磁研究 IV』2009 年
- (3)「青花瓷生産黎明期の景德鎮窯業」『専修人文論集 97 号』2015 年
- (4)「景德鎮調合原料の成形性不良と胴継ぎ技法の始まり」『中近世陶磁器の考古学 第八巻』株式会社 雄山閣・2018 年
- (5)「曜変天目再現研究の調査報告」『法政史学 第 90 号』法政大学史学会・2018 年
- (6)「宋代建窯黒褐釉熔剤原料についての考察」『中近世陶磁器の考古学 第十三巻』株式会社 雄山閣・2021 年

【Outline (in English)】

History of Chinese ceramics. In addition, related East Asia trade.

The ability to feel beauty of the chinaware is improved.

It's understood that Chinese ceramics was traded in widely for East Asia.

Learning of preparations and review time of this class make 2 hours for each the standard.

The language in the text is picked out and its meaning is checked as much as possible.

Your question is accepted by a mail on campus.
I make estimate a desire to learn by preparation(60%), and
gives a grade in total on a final report (40%).

HIS500B4

東洋史学演習Ⅳ

水上 和則

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本年度は、12 世紀初期より 15 世紀末期をまでの青花瓷生産について学ぶ。

景德鎮窯が窯業生産技術をリードする立場にあったことを理解する。加えて各地から出土する青花瓷から、世界に向けて広く交易されていた事を理解する。

【到達目標】

唐から元代にかけて、中国陶瓷の名品を生み出した諸窯について学び、諸窯における生産品の特徴を区別して理解する。合わせて陶磁器の鑑賞能力を獲得する。

わが国で“茶の湯”文化が生まれることで、新たに発注が行われた例など、中国陶瓷が東アジアに向けて広く交易されていた事を学び、茶器を含む陶磁生産が中国からもたらされた技術であることを理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・毎回対面授業を基本として行う。
- ・教員の講義の後に、テーマごとに各自課題の発表を行う。
- ・実技理解の為に学外見学を行う。
- ・疑問点は、授業時間内で解決し、予習・復習時の質問は学内メールにて受ける。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	景德鎮窯の技法研究 (1)	『景德鎮陶録』（清・嘉慶二十年）を読む
第 2 回	景德鎮窯の技法研究 (2)	『景德鎮陶録』の輪読 (2)
第 3 回	景德鎮窯の技法研究 (3)	『景德鎮陶録』の輪読 (3)
第 4 回	青花瓷の出土品 (中国内 1)	報告書『四川遂寧金魚村南宋窖藏』を読む
第 5 回	青花瓷の出土品 (中国内 2)	高安市第 2 電気廠窖藏出土品
第 6 回	青花瓷の出土品 (中国内 3)	保定市永華路南小学校窖藏出土品
第 7 回	青花瓷の出土品 (中国内 4)	集寧路窖藏出土の釉裏紅瓷を考える
第 8 回	景德鎮窯の技法研究 (3)	『中国陶瓷見聞録』から釉裏紅瓷の生産法について
第 9 回	貿易陶瓷 (1)	新安沈船と海交史博物館
第 10 回	貿易陶瓷 (2)	『カラコルム遺跡出土の元青花瓷』の報告書を読む
第 11 回	貿易陶瓷 (3)	トブカプサライ収蔵の青花瓷 (1) 三上次男の著書から
第 12 回	貿易陶瓷 (4)	トブカプサライ収蔵の青花瓷 (2) 三上次男の著書から
第 13 回	日本国内出土の元青花瓷 (1)	沖縄出土の元青花瓷 報告書から《首里城出土品》
第 14 回	日本国内出土の元青花瓷 (2)	沖縄出土の元青花瓷 報告書から《グスク出土品》

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

予め講義資料の配布を行うので、関係する箇所を読んでおくことを求める。
テキスト中の専門用語を抜き出し、出来る限りその意味を調べておくこと。

【テキスト（教科書）】

プリント配布

『中国陶器見聞録』（清・康熙六十一年）平凡社、東洋文庫（363）、ISBN-13: 978-4582803631

『景德鎮陶録 1・2』（清・嘉慶二十年）平凡社、東洋文庫（464・465）、ISBN-13: 978-4582804645 ISBN-13: 978-4582804652

【参考書】

北村弥一郎『清国窯業視察報告』農商務省・

『東洋陶磁』vol. 12・13

その他授業の進行に沿って随時紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常の学習意欲を提出物等で評価（60%）し、あわせて期末レポート課題（40%）の合計で成績評価を行う。

【学生の意見等からの気づき】

今後順次対応してゆく。

【その他の重要事項】

博物館・美術館への中国陶器見学を予定する。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

中国陶磁史

＜研究テーマ＞

唐宋時代の陶磁技法の研究

＜主要研究業績＞

(1)「中国釉下彩瓷釉の研究」『東洋陶磁 Vol.31』2002 年

(2)「宋元代景德鎮窯業における素地土配合の研究」『亜州古陶磁研究 IV』2009 年

(3)「青花瓷生産黎明期の景德鎮窯業」『専修人文論集 97 号』2015 年

(4)「景德鎮調査原料の成形性不良と胴継ぎ技法の始まり」『中近世陶磁器の考古学 第八巻』株式会社 雄山閣・2018 年

(5)「曜変天目再現研究の調査報告」『法政史学 第 90 号』法政大学史学会・2018 年

(6)「宋代建窯黒褐釉煤熔剤原料についての考察」『中近世陶磁器の考古学 第十三巻』株式会社 雄山閣・2021 年

【Outline (in English)】

History of Chinese ceramics. In addition, related East Asia trade.

It's understood that Jing-de-zhen kiln led a ceramic industry manufacturing technique.

Learning of preparations and review time of this class make 2 hours for each the standard.

The language in the text is picked out and its meaning is checked as much as possible.

Your question is accepted by a mail on campus.

I make estimate a desire to learn by preparation(60%), and gives a grade in total on a final report (40%).

HIS500B4

東洋史学演習Ⅴ

久野 美樹

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

北魏仏教美術史

北魏の物質文化、思想を理解することができます。

【到達目標】

北魏の仏教美術史と物質文化研究の方法を習得します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

仏教と仏教美術史は一般に高校、大学で学ぶことはないため、まず仏教、仏教美術史の基本を学んだ後。講義と『魏書』『釈老志』の内容に基づいた授業を組み合わせ、スライド画像を見ながら能動的な学習をします。

『魏書』『釈老志』については、口語訳のついた書籍『魏書釈老志の研究』を当該授業 1 週間前にコピーして配布するので、当該授業時間までに予習して授業にのぞみ、授業内で意見等を交換します。

タイミングが合えば、学生さんに修論の中間報告をしていただき、授業時間内に討論をしたり、教員がアドバイスをするなどを考えています。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	授業の主旨と進め方、美術史学の方法
第 2 回	仏教と仏教美術の基本	釈迦の生涯、上座部仏教と大乘仏教、その美術
第 3 回	五胡十六国時代美術	石窟美術の始まり
第 4 回	『魏書釈老志の研究』	敦煌莫高窟初期窟
第 5 回	『魏書釈老志の研究』	北魏建国から涼州の仏教
第 6 回	北魏の敦煌莫高窟	濱田瑞美「莫高窟初期窟の図像と窟内構想」
第 7 回	『魏書釈老志の研究』	廃仏から雲岡石窟造営
第 8 回	雲岡石窟	北魏の漢化と雲岡石窟概説
第 9 回	雲岡石窟曇曜五窟論	雲岡石窟の大仏像について
第 10 回	漢民族様式と北方民族様式	南朝の絵画と北魏の絵画
第 11 回	『魏書釈老志の研究』	洛陽遷都と龍門石窟造営
第 12 回	龍門石窟北魏窟	久野「龍門石窟北魏窟」
第 13 回	龍門石窟と最初期の西方浄土図	久野「鴻慶寺石窟第一窟について」
第 14 回	修士論文の中間報告	修士論文の中間報告

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
新型コロナウイルスなおさまった折には、東京国立博物館などを見学しましょう。

【テキスト（教科書）】

学習する書籍、論文は事前にプリント配布します。

【参考書】

授業内で随時紹介。

【成績評価の方法と基準】

授業内に意見を述べ、積極的に授業に参加しているかをみます、100 %。

【学生の意見等からの気づき】

仏教美術の基本が理解できるよう丁寧な指導を心がけます。

【学生が準備すべき機器他】

なし。

【その他の重要事項】

学生は事前配布する資料を当該授業までに読み、コメント、質問、質疑応答の準備をします。

学生は教員に対しどのようなことでも質問や意見を出してほしいと考えます。教員へのメールも歓迎します。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞アジア仏教美術史、石窟美術研究

＜研究テーマ＞ 5c. 頃から 8c. 頃の石窟美術にみられる浄土観、仏身観

＜主要研究業績＞「龍門石窟北魏窟」『アジア仏教美術論集 東アジアⅠ 後漢・三国・南北朝』中央公論美術出版 2017 年、「鴻慶寺石窟第一窟について」『法政史学』第 84 号 2015 年、『唐代龍門石窟の研究』中央公論美術出版 2011 年

【Outline (in English)】

(Course outline) Buddhist Art History of Northern Wei Dynasty.

(Learning Objectives) By the end of course, students should be able to do the followings: understanding Asian Material Culture and Asian Thought.

(Learning activities outside of classroom) Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than two hours for a class.

(Grading Criteria /Policy) Your overall grade in the class will be decided based on the following in class contribution:100%

HIS500B4

東洋史学演習Ⅵ

久野 美樹

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

唐代仏教美術史

【到達目標】

物質文化研究の方法及び唐を中心とした仏教美術を理解します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

スライド画像を使用した講義形式を主としますが、授業内容に対して積極的に意見を述べ、討論に参加してください。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	中国人の昇天思想	馬王堆墓出土物
第 2 回	莫高窟西魏窟	莫高窟第 285 窟
第 3 回	龍門石窟	中国伝統文化からみた龍門
第 4 回	世俗王権と仏教美術	肥田「一州一寺制と皇帝等身像」
第 5 回	唐代龍門の大仏像	大仏像の尊格
第 6 回	唐代龍門奉先寺洞像	東大寺大仏像の思想的淵源、龍門奉先寺洞大仏像
第 7 回	日本への唐文化の影響	奈良の造形
第 8 回	世俗王権と仏教美術	優填王像の流行と意義
第 9 回	唐代龍門の一仏多菩薩像	久野「一仏多菩薩像」
第 10 回	敦煌莫高窟の絵画史	画卷形式から大画面形式へ
第 11 回	敦煌大画面形式の造形	観音経変、阿弥陀浄土変
第 12 回	釈迦であり阿弥陀である仏像	初盛唐期の造形
第 13 回	密教美術	中期密教と曼荼羅
第 14 回	修士論文の中間発表	修士論文の中間発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
コロナの流行がおさまった後、美術館・博物館に行き実物を見学してください。

【テキスト（教科書）】

学習する資料は事前にプリント配布します。

【参考書】

授業内で随時紹介。

【成績評価の方法と基準】

各授業内容に対するコメント、質問、教員との質疑応答 100 %、物質資料についての正確な理解と研究者としての論理の構築ができているかをみます。

【学生の意見等からの気づき】

仏教美術の基本が理解できるよう丁寧な指導を心がけます。

【学生が準備すべき機器他】

なし。

【その他の重要事項】

学生は事前配布する資料を当該授業までに読み、議論の準備をします。
学生は教員に対しどのようなことでも質問や意見を出してほしいと考えます。教員へのメールも歓迎します。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞アジア仏教美術史、石窟美術研究

＜研究テーマ＞ 5c. 頃から 8c. 頃の石窟美術にみられる浄土観、仏身観

＜主要研究業績＞「唐代龍門石窟」『アジア仏教美術論集Ⅱ 隋・唐』中央公論美術出版、2019 年、「釈迦であり阿弥陀である仏像―初盛唐期法華経関連の造形を中心として―」『法政史学』第 91 号、2019 年、『唐代龍門石窟の研究』中央公論美術出版、2011 年

【Outline (in English)】

(Course outline) Buddhist Art History of Tang Dynasty.

(Learning Objectives) By the end of the course, students should be able to do the followings: understanding Asian Material Culture and Asian Thought.

(Learning activities outside of classroom) Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than two hours for a class.

(Grading Criteria /Policy) Your overall grade in the class will be decided based on the following in class contribution:100%.

HIS500B4

東洋古代史研究Ⅰ

齋藤 勝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

中国古代史の基礎史料の講読

中国古代史研究に必要な漢文史料の読解力を高める。

【到達目標】

中国古代史研究に用いる漢文史料を多読し、自力で研究を進めていくために必要な漢文読解力を向上させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

毎回、課題となる漢文史料についての講読を行う。課題に対してのフィードバックは、講読の中で適宜行っていく。原則として授業は対面で行っていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	儒家の文献を読む	講読 『論語』
第 2 回	儒家の文献を読む	講読 『孟子』
第 3 回	儒家の文献を読む	講読 『荀子』
第 4 回	儒家の文献を読む	講読 『春秋左氏伝』
第 5 回	儒家の文献を読む	講読 『春秋公羊伝』
第 6 回	墨家の文献を読む	講読 『墨子』
第 7 回	道家の文献を読む	講読 『老子』
第 8 回	道家の文献を読む	講読 『莊子』
第 9 回	法家の文献を読む	講読 『管子』
第 10 回	法家の文献を読む	講読 『商君書』
第 11 回	法家の文献を読む	講読 『韓非子』
第 12 回	史書を読む	講読 『史記』
第 13 回	史書を読む	講読 『漢書』
第 14 回	史書を読む	講読 『資治通鑑』

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
参加者には各回とも指示した文献の講読をしてもらいます。

【テキスト（教科書）】

授業計画参照。適宜、配布します。

扱う内容は受講者や授業の進展に応じて変更します。

【参考書】

随時、紹介します。

【成績評価の方法と基準】

平常点 100 %

課題の達成度によって評価します。適切な読解・整理が出来ているかが評価基準となります。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【その他の重要事項】

例年、授業内容、特に漢文訓読に関心の無い方が履修されることが多いのですが、関心を持っている履修者の学習の妨げになりうるので、よく授業内容を理解した上で履修してください。

万一オンライン実施に変更となった場合、Zoom や学習支援システムにより授業を行う予定です。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 中国古代史

＜研究テーマ＞ 唐代を中心とした中国世界・文化の形成と変容

＜主要研究業績＞

「唐・回鹘絹馬交易再考」『史学雑誌』108-10、1999 年

「9・10 世紀敦煌の牧羊代行業について」『歴史学研究』796、2004 年

「唐代内附異民族への賦役規定と辺境社会」『史学雑誌』117-3、2008 年

【Outline (in English)】

Course outline: The aim of this course is to help students improve skills to read texts of the history of ancient China.

Learning objectives: At the end of the course, students are expected to acquire skills to read texts of the history of ancient China in order to study for themselves.

Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

Grading criteria/policy: In class contribution(100%)

HIS500B4

東洋古代史研究Ⅱ

齋藤 勝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

中国古代史の基礎史料の講読

中国古代史研究に必要な漢文史料の読解力を高める。

【到達目標】

中国古代史研究に用いる漢文史料を多読し、自力で研究を進めていくために必要な漢文読解力を向上させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

毎回、課題となる漢文史料についての講読を行う。課題に対してのフィードバックは、講読の中で適宜行っていく。原則として授業は対面で行っていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	漢文の文献を読む	講読 『塩鉄論』本議
第 2 回	漢代の文献を読む	講読 『塩鉄論』力耕
第 3 回	漢代の文献を読む	講読 『塩鉄論』通有
第 4 回	漢代の文献を読む	講読 『塩鉄論』錯幣
第 5 回	漢代の文献を読む	講読 『塩鉄論』禁耕
第 6 回	漢代の文献を読む	講読 『塩鉄論』復古
第 7 回	漢代の文献を読む	講読 『塩鉄論』非鞅
第 8 回	漢代の文献を読む	講読 『塩鉄論』晁錯
第 9 回	漢代の文献を読む	講読 『塩鉄論』刺権
第 10 回	漢代の文献を読む	講読 『塩鉄論』刺復
第 11 回	漢代の文献を読む	講読 『塩鉄論』論儒
第 12 回	漢代の文献を読む	講読 『塩鉄論』憂辺
第 13 回	漢代の文献を読む	講読 『塩鉄論』園池
第 14 回	漢代の文献を読む	講読 『塩鉄論』輕重

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。参加者には各回とも指示した文献の講読をしてもらいます。

【テキスト（教科書）】

授業計画参照。適宜、配布します。

扱う内容は、受講者や授業の進展に応じて変更します。

【参考書】

随時、紹介します。

【成績評価の方法と基準】

平常点 100 %

発表内容によって評価します。適切な読解・整理が出来ているかが評価基準となります。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【その他の重要事項】

例年、授業内容、特に漢文訓読に関心の無い方が履修されることが多いのですが、関心を持っている履修者の学習の妨げになりうるので、よく授業内容を理解した上で履修してください。

万一オンライン実施に変更となった場合、Zoom や学習支援システムにより授業を行う予定です。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 中国古代史

＜研究テーマ＞ 唐代を中心とした中国世界・文化の形成と変容

＜主要研究業績＞

「唐・回鹘絹馬交易再考」『史学雑誌』108-10、1999 年

「9・10 世紀敦煌の牧羊代行業について」『歴史学研究』796、2004 年

「唐代内附異民族への賦役規定と辺境社会」『史学雑誌』117-3、2008 年

【Outline (in English)】

Course outline: The aim of this course is to help students improve skills to read texts of the history of ancient China.

Learning objectives: At the end of the course, students are expected to acquire skills to read texts of the history of ancient China in order to study for themselves.

Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

Grading criteria/policy: In class contribution(100%)

HIS500B4

東洋中世史研究 I

宇都宮 美生

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

近年注目されているグローバル・ヒストリー研究の研究動向を紹介し、グローバルな観点から中国を中心としたユーラシア大陸東部の広域経済圏を見ていく。それにより、従来の各国の歴史ではなく、世界史の大きな流れをつかむことを学習のねらいとする。

【到達目標】

多くの図表を読み解く力をつけ、視覚的に歴史の流れが把握できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

初回に分担をするので、各自調べて発表し、それについて討論する。発表の担当がない受講生も予習をしておく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	グローバル・ヒストリーの理論と方法
第 2 回	交通の役割	農牧境界地帯から沿岸地帯への移行
第 3 回	政権の拠点地	境界都市の形成
第 4 回	環境と歴史の構造	ユーラシア大陸東部の世界システム
第 5 回	農牧境界地帯	牧畜と遊牧
第 6 回	アフロ・ユーラシア大陸の歴史空間	世界システムの変化
第 7 回	中国大陸の歴史空間	大中国と小中国
第 8 回	時間区分	時代に基づく時期空間
第 9 回	世界史の三段階	形成と進展
第 10 回	初期国家 1	研究動向
第 11 回	初期国家 2	国家のはじまり
第 12 回	古典国家 1	遊牧国家の形成と農業国家の再編
第 13 回	古典国家 2	秦漢と匈奴
第 14 回	学習のまとめ	東アジアにおけるグローバル・ヒストリー

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業の前にテキストの地図や図表を分析する。関連する論文を読んで知識を深める。予習・復習あわせて各回 4 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

妹尾達彦『グローバル・ヒストリー』中央大学出版部、2021 年、¥3,000 + 税。この本を使うので各自 1 冊用意すること。

【参考書】

適時指示をする。

【成績評価の方法と基準】

授業態度（発表と討論）50 %、期末レポート 50 %

【学生の意見等からの気づき】

わかりやすい授業を心掛ける。

【学生が準備すべき機器他】

色のついた筆記用具

【その他の重要事項】

「文書館管理研究 I」「文書館管理研究 II」を合わせて履修することが望ましい。

【担当教員の専門分野等】

中国都城史・水利史・交流史

【Outline (in English)】

Outline and objectives: This course introduces an understanding of Chinese history in respect to international relations with other areas. The aim of this course is to help students acquire historical changes in politics, economy, organization, military affairs, agriculture, culture and diplomacy.

Learning Objectives: The goal of this course is to understand the flow of Chinese history, the factors and backgrounds that created the historical facts, their influence and development, and the mutual influence and international relations with the surrounding areas.

Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

Grading Criteria/Policies: Your overall grad in the class will be decided based on assignments at each class meeting (50%) and term-end report (50%).

HIS500B4

東洋中世史研究Ⅱ

宇都宮 美生

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

近年注目されているグローバル・ヒストリー研究の研究動向を紹介し、グローバルな観点から中国を中心としたユーラシア大陸東部の広域経済圏を見ていく。それにより、従来の各国の歴史ではなく、世界史の大きな流れをつかむことを学習のねらいとする。

【到達目標】

多くの図表を読み解く力をつけ、視覚的に歴史の流れが把握できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

初回に分担をするので、各自調べて発表し、それについて討論する。発表の担当がない受講生も予習をしておく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の進め方と春学期のおさらい
第2回	農牧複合国家 1	人間の移動
第3回	農牧複合国家 2	漢から唐へ
第4回	世界宗教圏 1	中国大陸と世界宗教
第5回	世界宗教圏 2	宗教と個人
第6回	都城時代 1	東アジアの都城時代
第7回	都城時代 2	日本の王権理論
第8回	商業帝国 1	ソグド商人
第9回	商業帝国 2	イスラーム商人
第10回	ユーラシア大陸のルネサンス 1	8～14世紀の古典文化復興運動
第11回	ユーラシア大陸のルネサンス 2	複数の古典文化復興運動
第12回	西欧の勃興とグローバル・ヒストリー 1	世界システム論の現在
第13回	西欧の勃興とグローバル・ヒストリー 2	近代港湾都市網の形成
第14回	学習のまとめ	グローバル・ヒストリーとしての現在と未来

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業の前にテキストの地図や図表を分析する。関連する論文を読んで知識を深める。予習・復習あわせて各回 4 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

妹尾達彦『グローバル・ヒストリー』中央大学出版部、2021 年、¥3,000 + 税。この本を使うので各自 1 冊用意すること。

【参考書】

随時指示をする。

【成績評価の方法と基準】

授業態度（発表と討論）50 %、期末レポート 50 %

【学生の意見等からの気づき】

わかりやすい授業を心掛ける。

【学生が準備すべき機器他】

色のついた筆記用具

【その他の重要事項】

「文書館管理研究Ⅰ」「文書館管理研究Ⅱ」を合わせて履修することが望ましい。

【担当教員の専門分野等】

中国都城史・水利史・交流史

【Outline (in English)】

Outline and objectives: This course introduces an understanding of Chinese history in respect to international relations with other areas. The aim of this course is to help students acquire historical changes in politics, economy, organization, military affairs, agriculture, culture and diplomacy.

Learning Objectives: The goal of this course is to understand the flow of Chinese history, the factors and backgrounds that created the historical facts, their influence and development, and the mutual influence and international relations with the surrounding areas.

Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

Grading Criteria/Policies: Your overall grad in the class will be decided based on assignments at each class meeting (50%) and term-end report (50%).

HIS500B4

東洋近代史研究 I

芦沢 知絵

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は「中国近現代史のなかの政治と社会・文化」をテーマとする。

現在の中国は、自他ともに認める「グローバル大国」である。しかし、近現代の中国の歴史は、常に激しい政治変動に揺さぶられてきた。その過程で、中国の社会や人々の生活も大きく変化し、それはまた、思想、文学、教育、メディア、日常生活様式など、様々な側面での新しい文化潮流を生み出した。本授業では、こうした中国近現代史における政治変動と、それにともなう社会・文化の変遷を追いながら、現在の中国がどのように形成されてきたのかを概観する。同時に、現代中国にみられる政治と社会・文化の関係性や、そこから見出される様々な諸問題について、歴史的な視点から共に考えていきたい。

【到達目標】

近現代中国における政治変動と社会・文化の歴史的変遷をたどり、中国近現代史に関する知識や理解を深めるとともに、現在の中国が形成された過程、及び現代中国の政治と社会・文化の関係性や諸問題について、主体的に考察する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

原則として対面授業を実施する。基本的に講義形式をとり、毎回授業後にリアクションペーパーを提出する。提出されたリアクションペーパーは、次回授業時に一部を公開・回答し、フィードバックを行う。また、授業内で文献・史料の読解を行うため、ある程度の予習が必要となる場合もある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	中国近現代史入門	中国近現代史を学ぶ意義・方法
第 2 回	中国の近代	アヘン戦争と「西洋近代」との遭遇
第 3 回	清朝の危機	洋務から変法への思想展開
第 4 回	中華民国の成立	辛亥革命の構想と社会的影響
第 5 回	軍閥割拠の時代	五四期の新文化運動とナショナリズム
第 6 回	南京国民政府の成立	国家建設と都市大衆文化の発展
第 7 回	満州事変の勃発	抗日運動とプロパガンダ
第 8 回	日中戦争への突入	戦時下の民衆と知識人
第 9 回	中華人民共和国の成立	国共内戦前後の中国共産党と農村社会
第 10 回	社会主義体制の確立	統制される人民の労働と生活
第 11 回	文化大革命の展開	毛沢東主義と社会混乱
第 12 回	改革開放の始動	経済成長と変わりゆく社会
第 13 回	現代中国の行方	「グローバル大国」を生きる人々
第 14 回	中国近現代史の課題と展望	中国近現代史をめぐる諸問題

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業内で紹介した参考文献や配布プリントをもとに知識と理解を深める。また、中国に関するニュースや新聞・雑誌記事にも自主的に目を通し、問題意識を高める。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

特になし

【参考書】

主な概説書は以下。その他は授業内で紹介する。
 久保亨・土田哲夫・高田幸男・井上久士・中村元哉『現代中国の歴史——兩岸三地 100 年の歩み（第 2 版）』東京大学出版会、2019 年。
 吉澤誠一郎他『中国近現代史①～⑥』岩波書店（岩波新書）、2010～17 年。
 坂元ひろ子『中国近代の思想文化史』岩波書店（岩波新書）、2016 年。

【成績評価の方法と基準】

- ① 平常点 30 %
 毎回授業後に提出するリアクションペーパーを評価対象とする。
 ② 期末試験 70 %
 授業内容に関する論述問題を出題する。

【学生の意見等からの気づき】

初学者にも理解しやすい講義を心がけ、写真や映像などの視覚的な資料も多く用いる。また、毎回リアクションペーパーへのフィードバックを行う。

【学生が準備すべき機器他】

授業連絡・資料配布等のために学習支援システムを利用する。

【Outline (in English)】

This course introduces the history of modern China focusing on political, social and cultural changes from the Opium War to the present time. The goal of this course is to understand the historical nation-building process and various problems of modern China.

After each class meeting, students will be expected to spend 2 hours to understand the course content.

Final grade will be decided based on term-end examination(70%) and in-class contribution(30%).

HIS500B4

東洋近代史研究Ⅱ

芦沢 知絵

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は「近現代の中国経済史」をテーマとする。

中国の経済発展は今や目覚ましい。一方、中国がなぜこれほど急速な発展を遂げたのか、また中国経済の実態や構造はどのようなものなのか、疑問を持つ人も多いであろう。そもそも歴史を振り返ってみれば、近代以前の中国は、政治的にも経済的にもアジアの中心であった。しかし、近代以降は列強の進出や戦争の影響により、中国経済は「停滞」したとされる。もっとも、近年の研究では、上海などの沿海都市部における、近代産業の発展的側面も明らかにされつつある。

本授業では、こうした最新の研究成果や諸資料をもとに、中国がどのような過程を経て今日の経済発展に至ったのか概観する。その上で、現在にも通じる中国経済の特質・問題点とは何か、歴史的な視点から共に考えていきたい。

【到達目標】

近現代における中国経済の変遷をたどり、中国近現代史及び中国経済史に関する知識や理解を深めるとともに、歴史的視点からみた中国経済の特質・問題点について、主体的に考察する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

原則として対面授業を実施する。基本的に講義形式をとり、毎回授業後にリアクションペーパーを提出する。提出されたりアクションペーパーは、次回授業時に一部を公開・回答し、フィードバックを行う。また、授業内で文献・史料の読解を行うため、ある程度の予習が必要となる場合もある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	中国経済史入門	中国経済史を学ぶ意義・方法
第 2 回	前近代の中国経済	伝統的商業秩序の形成
第 3 回	清末の近代化①	開港と外国資本
第 4 回	清末の近代化②	洋務運動と殖産興業
第 5 回	民国期の産業勃興①	新興資本家の出現
第 6 回	民国期の産業勃興②	軍閥と地方財政
第 7 回	国民政府の経済政策①	中央集権化と幣制改革
第 8 回	国民政府の経済政策②	戦時下の動員・統制
第 9 回	戦後の香港・台湾経済	冷戦期の華人資本
第 10 回	社会主義計画経済①	集団化と国有化
第 11 回	社会主義計画経済②	政治運動と混乱・停滞
第 12 回	改革開放と経済成長①	市場経済への移行
第 13 回	改革開放と経済成長②	WTO 加盟とグローバル化
第 14 回	現在の中国経済	発展と社会矛盾

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業内で紹介した参考文献や配布プリントをもとに知識と理解を深める。また、中国経済に関するニュースや新聞・雑誌記事にも自主的に目を通し、問題意識を高める。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

特になし

【参考書】

主な概説書は以下。その他は授業内で紹介する。

岡本隆司編『中国経済史』名古屋大学出版会、2013 年。（第 4・5 章）
久保亨・加島潤・木越義則『統計でみる中国近現代経済史』東京大学出版会、2016 年。
丸川知雄『現代中国経済』有斐閣、2013 年。

【成績評価の方法と基準】

① 平常点 30 %

毎回授業後に提出するリアクションペーパーを評価対象とする。

② 期末レポート 70 %

授業内容に関するテーマをもとにレポートを執筆し提出する。

【学生の意見等からの気づき】

初学者にも理解しやすい講義を心がけ、写真や映像などの視覚的な資料も多く用いる。また、毎回リアクションペーパーへのフィードバックを行う。

【学生が準備すべき機器他】

授業連絡・資料配布・課題提出等のために学習支援システムを利用する。

【Outline (in English)】

This course introduces the history of the modern Chinese economy. The goal of this course is to understand the historical process and problems of China's economic growth.

After each class meeting, students will be expected to spend 2 hours to understand the course content.
Final grade will be decided based on term-end report(70%) and in-class contribution(30%).

HIS500B4

西洋史学特殊研究 I

松原 俊文

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

古代ローマ史に関する英文文献の講読を通じて、英語で書かれた西洋史関連の研究文献の精読力と速読力を身につける。

【到達目標】

本授業は、以下を到達目標とします。

- ・ 英文学術文献を正確かつ速く読むことができる。
- ・ 文章と文章のつながりを読み取り、論旨と文脈を正確に捉えることができる。
- ・ 古代ローマ史上の問題とそれに関する近年の研究動向を把握する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

1. 古代ローマの政治・社会・文化に関する英文文献を講読します。テキストは通史や特定の問題に絞った論文ではなく、政治制度や属州経営といったテーマを包括的に扱った文献から、受講者の希望も加味した上で決定します。
2. 授業は任意の受講者にテキストを和訳してもらい、適宜解説を行う形で進めます。また内容や英文に関して全受講者に質問を行い、正しく把握しているか確認します。したがって全員が前もって英文テキストを下読みし、内容を把握しておく必要があります。
3. フィードバックは、授業時間内に講評と解説の機会をもうける形で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	テキスト決定・予習方法の説明
第 2 回	文献講読 1	問題の背景説明・イントロダクション講読
第 3 回	文献講読 2	イントロダクションの解説と質疑
第 4 回	文献講読 3	第一節講読
第 5 回	文献講読 4	第一節の解説と質疑
第 6 回	文献講読 5	第二節講読
第 7 回	文献講読 6	第二節の解説と質疑
第 8 回	文献講読 7	第三節講読
第 9 回	文献講読 8	第三節の解説と質疑
第 10 回	文献講読 9	第四節講読
第 11 回	文献講読 10	第四節の解説と質疑
第 12 回	文献講読 11	第五節講読
第 13 回	文献講読 12	第五節の解説と質疑
第 14 回	春学期の総括	文献の論点整理と討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。事前に指定された英文テキストの箇所を充分に下読みしておくの言うまでもなく、固有名詞・事項・専門用語などで不明なものについてもできる限り調べておくこと。授業後は、誤読していた箇所を重点的に読み直して、論旨を再確認すること。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しません。Blackwell Companions to the Ancient World シリーズから、古代ローマ史を扱ったテキストを配信します。

【参考書】

- ・ Hornblower, S., Spawforth, A. (eds.), *Oxford Classical Dictionary* (4th ed.), Oxford, 2012.
- ・ Bagnall, R. S., et al. (eds.), *The Encyclopedia of Ancient History*, Malden, MA, 2012.

- ・ Cancik, H., Schneider, H. (eds.), Salazar, C. F. (Eng. ed.), *Brill's New Pauly*, Leiden, 2002-2010.
- ・ バウダー編、小田謙爾他訳『古代ローマ人名事典』原書房、1994 年
- ・ 松原國師『西洋古典学事典』京都大学学術出版会、2010 年

【成績評価の方法と基準】

平常点 100%（予習を前提とした授業参加度 50%、英文読解の精度と内容理解度 50 %）で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし。

【その他の重要事項】

毎回授業に英和辞書を持ってくる。辞書の指定はありませんが、収録語句 20 万語以上の辞書（リーダーズ英和辞典、ジーニアス英和大辞典、研究社新英和大辞典等）、もしくはそれに相当する電子辞書が望ましい。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

古代ローマ史

＜研究テーマ＞

ギリシア・ローマの歴史叙述

＜主要研究業績＞

1. ‘Out of Many, One? An Aspect of the Public Rôle of Roman Historiography’, *Kodai: Journal of Ancient History* 16, Editorial Board of Kodai, 2015.
2. 「伝記と歴史の境界を越えて－英雄伝というジャンルの誕生」、小池登、佐藤麻、木原志乃編『『英雄伝』の挑戦 新たなブルタルコス像に迫る』、京都大学学術出版会、2019 年
3. 「記憶（メモリア）と政治－ローマの政治文化における歴史の役割－」、『西洋史研究』新輯第 48 号、西洋史研究会、2019 年

【Outline (in English)】

(Course outline)

The course offers tutorials on reading ancient Roman history in English. It is primarily designed for students specialised in Western history who wish to improve their reading fluency and efficiency of academic English.

(Learning Objectives)

The course aims to:

- improve the students' ability to read academic English quickly and accurately.

- enable them to grasp important aspects as well as problems of ancient Roman history.

(Learning activities outside of classroom)

Lecture/Exercise (two-credits)

Students are expected:

- thoroughly to read the designated section of the English text before each class.

- to revise the text and their translations, in particular corrected points, after each class.

(Grading Criteria /Policy)

Grading is based on in-class contribution (100%).

HIS500B4

西洋史学特殊研究Ⅱ

松原 俊文

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

古代ローマ史に関する英文文献の講読を通じて、英語で書かれた西洋史関連の研究文献の精読力と速読力を身につける。

【到達目標】

本授業は、以下を到達目標とします。

- ・ 英文学術文献を正確かつ速く読むことができる。
- ・ 文章と文章のつながりを読み取り、論旨と文脈を正確に捉えることができる。
- ・ 古代ローマ史上の問題とそれに関する近年の研究動向を把握する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

1. 古代ローマの政治・社会・文化に関する英文文献を講読します。テキストは通史や特定の問題に絞った論文ではなく、政治制度や属州経営といったテーマを包括的に扱った文献から、受講者の希望も加味した上で決定します。
2. 授業は任意の受講者にテキストを和訳してもらい、適宜解説を行う形で進めます。また内容や英文に関して全受講者に質問を行い、正しく把握しているか確認します。したがって全員が前もって英文テキストを下読みし、内容を把握しておく必要があります。
3. フィードバックは、授業時間内に講評と解説の機会をもうける形で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	テキスト決定・予習方法の説明
第 2 回	文献講読 1	問題の背景説明・イントロダクション講読
第 3 回	文献講読 2	イントロダクションの解説と質疑
第 4 回	文献講読 3	第一節講読
第 5 回	文献講読 4	第一節の解説と質疑
第 6 回	文献講読 5	第二節講読
第 7 回	文献講読 6	第二節の解説と質疑
第 8 回	文献講読 7	第三節講読
第 9 回	文献講読 8	第三節の解説と質疑
第 10 回	文献講読 9	第四節講読
第 11 回	文献講読 10	第四節の解説と質疑
第 12 回	文献講読 11	第五節講読
第 13 回	文献講読 12	第五節の解説と質疑
第 14 回	秋学期の総括	文献の論点整理と討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。事前に指定された英文テキストの箇所を十分に下読みしておくの言うまでもなく、固有名詞・事項・専門用語などで不明なものについてもできる限り調べておくこと。授業後は、誤読していた箇所を重点的に読み直して、論旨を再確認すること。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しません。Blackwell Companions to the Ancient World シリーズから、古代ローマ史を扱ったテキストを配信します。

【参考書】

- ・ Hornblower, S., Spawforth, A. (eds.), *Oxford Classical Dictionary* (4th ed.), Oxford, 2012.
- ・ Bagnall, R. S., et al. (eds.), *The Encyclopedia of Ancient History*, Malden, MA, 2012.

- ・ Cancik, H., Schneider, H. (eds.), Salazar, C. F. (Eng. ed.), *Brill's New Pauly*, Leiden, 2002-2010.
- ・ バウダー編、小田謙爾他訳『古代ローマ人名事典』原書房、1994 年
- ・ 松原國師『西洋古典学事典』京都大学学術出版会、2010 年

【成績評価の方法と基準】

平常点 100%（予習を前提とした授業参加度 50%、英文読解の精度と内容理解度 50 %）で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし。

【その他の重要事項】

毎回授業に英和辞書を持ってくる。辞書の指定はありませんが、収録語句 20 万語以上の辞書（リーダーズ英和辞典、ジーニアス英和大辞典、研究社新英和大辞典等）、もしくはそれに相当する電子辞書が望ましい。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

古代ローマ史

＜研究テーマ＞

ギリシア・ローマの歴史叙述

＜主要研究業績＞

1. 'Out of Many, One? An Aspect of the Public Rôle of Roman Historiography', *Kodai: Journal of Ancient History* 16, Editorial Board of Kodai, 2015.
2. 「伝記と歴史の境界を越えて - 英雄伝というジャンルの誕生」、小池登、佐藤麻、木原志乃編『『英雄伝』の挑戦 新たなブルタルコス像に迫る』、京都大学学術出版会、2019 年
3. 「記憶（メモリア）と政治 - ローマの政治文化における歴史の役割 -」、『西洋史研究』新輯第 48 号、西洋史研究会、2019 年

【Outline (in English)】

(Course outline)

The course offers tutorials on reading ancient Roman history in English. It is primarily designed for students specialised in Western history who wish to improve their reading fluency and efficiency of academic English.

(Learning Objectives)

The course aims to:

- improve the students' ability to read academic English quickly and accurately.
- enable them to grasp important aspects as well as problems of ancient Roman history.

(Learning activities outside of classroom)

Lecture/Exercise (two-credits)

Students are expected:

- thoroughly to read the designated section of the English text before each class.
- to revise the text and their translations, in particular corrected points, after each class.

(Grading Criteria /Policy)

Grading is based on in-class contribution (100%).

HIS500B4

西洋史学特殊研究Ⅲ

篠原 琢

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

18 世紀末から第一次世界大戦期までの「長い 19 世紀史」におけるハプスブルク君主国の歴史を概観しながら、「国民形成」、ナショナリズム、市民社会、帝國的秩序といったより一般的な歴史的テーマについて再検討を加える。ハプスブルク帝国史研究の現段階を理解するだけでなく、目的論的なヨーロッパ近代史の概念への批判的なアプローチを獲得することが授業の目標である。それを通して、現代世界の問題について、新たな歴史的視点を得ることを目指そう。

ハプスブルク帝国の領域は、ハプスブルク帝室が戦争と婚姻によって相続した雑多な諸王国・諸地域の複合的な集積でしかなく、そもそも近代国家を構成する凝集力に欠けており、帝国末期には、国民主義が浸透し、言語紛争が絶えなかった。長い 19 世紀は、そもそも帝国が必然的に衰退する過程であった……。この種の議論は、集権的で同質的な「国民国家」Nation State を近代国家の理念型として想定し、ハプスブルク帝国を近代ヨーロッパの発展から逸脱した「非正常」とみなす視点を暗黙のうちに持っている。帝国の継承諸国では、社会主義体制下も含めて、それぞれの国家の「民族的」性格が強調されたため、この種の歴史観は、当然の前提とみなされることが多かった。

果たして帝国の 19 世紀史をそのように捉えることは妥当だろうか。授業では最初に若干の理論的・史学史的考察を行った後、帝国史のトピックを順に検討し、帝国史の再検討を行う。

【到達目標】

受講者はハプスブルク帝国の歴史についての最新の研究動向を主に英語論文を講読することによって理解する。その作業を通じて、ネイション形成・ナショナリズム論について、批判的な視点を獲得し、それぞれの研究領域でその方法論を生かす能力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義と、英語論文の輪読、各回のテーマについてのグループディスカッションを組み合わせる。

授業はオンライン・同時配信で行います。フィードバックは、Hoppii 上でコメント・質問を集め、そこで対応するか、授業時に取り上げます。参加人数が少ないことが予想されるので、授業時に積極的に発言してください。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ハプスブルク帝国とは何か：その遺産とイメージ 1.	ハプスブルク帝国とはどのような帝国だったのか、概説的に解説する。
第 2 回	ハプスブルク帝国とは何か：その遺産とイメージ 2.	ハプスブルク帝国崩壊後、帝国にどのようなイメージが存在したのか、代表的な流れを考える。
第 3 回	ハプスブルク帝国史研究の歴史 1.	ハプスブルク帝国後継諸国の歴史認識を問う。
第 4 回	ハプスブルク帝国史研究の歴史 2.	帝国解体は必然だったのか？
第 5 回	ハプスブルク帝国史研究の歴史 3.	時代錯誤の帝国？

第 5 回	ハプスブルク帝国史研究の歴史 3. 帝国の長い解体過程	Alan Sked, The Fall and Decline of the Habsburg Monarchy
第 6 回	ハプスブルク帝国史研究の歴史 4. 帝国解体は必然ではない！	Pieter Judson, Habsburg Empire. New History
第 7 回	国民形成・ナショナリズム研究と帝国史 1. 諸国民社会の形成	Miroslav Hroch, Social Preconditions of National Revival in Europe
第 8 回	国民形成・ナショナリズム研究と帝国史 2. できごととしてのネーション	Rogers Brubaker, Nation without Groups
第 9 回	国民形成・ナショナリズム研究と帝国史 3. National Indifference	Tara Zahra, "Imagined Non-communities"
第 10 回	国民形成・ナショナリズム研究と帝国史 4. 国民化する帝国	Alexei Miller, Nationalizing Empires
第 11 回	植民地帝国としてのハプスブルク帝国 1. ガリツィア・ブコヴィナ	Larry Wolff, The Idea of Galicia
第 12 回	植民地帝国としてのハプスブルク帝国 2. 文明化の使命	Larry Wolff, The Idea of Galicia
第 13 回	ハンナ・アーレント『全体主義の起原』から帝国を考える	ハンナ・アーレント、『全体主義の起原』のうち、第二巻「帝国主義」を扱う。
第 14 回	まとめ	講義・演習の成果を振り返る

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業時に扱うテキストは PDF で配布するので、当日、議論に参加できるように必ず準備してくる。本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

授業予定にあげたもののうち、Pieter Judson, Habsburg Empire. New History を教科書とする。

【参考書】

授業予定を参照。

【成績評価の方法と基準】

演習への貢献度、演習時の報告を 40%、学期末のレポートを 60% として評価する。

【学生の意見等からの気づき】

昨年度は受講者がいなかったため、該当しない。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞中央ヨーロッパ近現代史

＜研究テーマ＞中央ヨーロッパにおける国民形成とナショナリズム、第二次世界大戦の記憶、文化遺産保存の思想と運動

【Outline (in English)】

Learning objectives

We will survey basic historical development of Habsburg Monarchy in the "long Nineteenth century" from the time of French Revolution to the First World War to analyze more general notions such as nation-building, nationalism, civil society etc. The purpose of the course is not only to understand the most recent trends of historiography on the Monarchy, but also to get critical approach to the teleological concept of modern history of Europe.

Habsburg Monarchy was a mere amalgam of different territories acquired and inherited by the house of Habsburgs through marriages and wars. Therefore it was anachronistic existence by itself, lacking a potentiality to develop to an integrated modern state. The Long Nineteenth century was for it a process of decay leading to an inevitable dissolution, a process driven by nationalism, nationality conflicts... Such an argument is based on a view which presupposes a centralized homogeneous nation-state as a normality of modern state, and depicts history the Habsburg monarchy as an anomaly deviated from the "normal" development of European modernity. As its succeeding states in Central and Eastern Europe legitimates their existing by stressing their "national" characters, such vision of history often constructed basic pattern of historical narrative. Can we still understand history of the Monarchy in such a way? In this lecture, after summarizing historiography of Habsburg monarchy and more important theoretical problems, we will investigate some of the most essential topics of history of the Monarchy.

Learning activities outside of classroom:

Critical reading of academic essays on the topic in advance.

Grading Criteria:

Comments and discussion in the class: 40%

Final report: 60%

HIS500B4

西洋史学特殊研究Ⅳ

篠原 琢

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

18 世紀末から第一次世界大戦期までの「長い 19 世紀史」におけるハプスブルク君主国の歴史を概観しながら、「国民形成」、ナショナリズム、市民社会、帝國的秩序といったより一般的な歴史的テーマについて再検討を加える。ハプスブルク帝国史研究の現段階を理解するだけでなく、目的論的なヨーロッパ近代史の概念への批判的なアプローチを獲得することが授業の目標である。それを通して、現代世界の問題について、新たな歴史的視点を得ることを目指そう。

ハプスブルク帝国の領域は、ハプスブルク帝室が戦争と婚姻によって相続した雑多な諸王国・諸地域の複合的な集積でしかなく、そもそも近代国家を構成する凝集力に欠けており、帝国末期には、国民主義が浸透し、言語紛争が絶えなかった。長い 19 世紀は、そもそも帝国が必然的に衰退する過程であった……。この種の議論は、集権的で同質的な「国民国家」Nation State を近代国家の理念型として想定し、ハプスブルク帝国を近代ヨーロッパの発展から逸脱した「非正常」とみなす視点を暗黙のうちに持っている。帝国の継承諸国では、社会主義体制下も含めて、それぞれの国家の「民族的」性格が強調されたため、この種の歴史観は、当然の前提とみなされることが多かった。

果たして帝国の 19 世紀史をそのように捉えることは妥当だろうか。授業では最初に若干の理論的・史学史的考察を行った後、帝国史のトピックを順に検討し、帝国史の再検討を行う。前期は帝国史について、方法論を主に検討したが、後期は帝国の諸地域を具体的に検討する。

【到達目標】

受講者はハプスブルク帝国の歴史についての最新の研究動向を主に英語論文を講読することによって理解する。その作業を通じて、ネイション形成・ナショナリズム論について、批判的な視点を獲得し、それぞれの研究領域でその方法論を生かす能力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義と、英語論文の輪読、各回のテーマについてのグループディスカッションを組み合わせる。授業はオンライン・同時配信で行います。フィードバックは、Hoppii 上でコメント・質問を集め、そこで対応するか、授業時に取り上げます。参加人数が少ないことが予想されるので、授業時に積極的に発言してください。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ボヘミア（パーメン）史 1.	「国民再生」概念について概説する。
第 2 回	ボヘミア（パーメン）史 2.	チェコ「国民再生」の思想と運動 1. Vladimír Macura を読む
第 3 回	ボヘミア（パーメン）史 3.	チェコ「国民再生」の思想と運動 2. 「フランクフルトへの手紙」を考
第 4 回	ボヘミア（パーメン）史 4.	1848 年革命 1. える
		1848 年革命 2. える

第 5 回	ボヘミア（パーメン）史 5.	チェコ・ナショナリズムと「ボヘミア王国の歴史的権利」
	19 世紀後半のチェコ社会	
第 6 回	ボヘミア（パーメン）史 6.	19 世紀のハプスブルク帝国の「ナショナリズム」問題について、「言語闘争」は典型的だと考えられてきた。その問題について批判的に検討を加える。
	「言語闘争」	
第 7 回	ボヘミア（パーメン）史 7.	第一次世界大戦中の「帝国愛国主義」とチェコスロヴァキア独立論について検討する。
	第一次世界大戦とチェコ社会	
第 8 回	チェコにおけるユダヤ人社会	ボヘミア・モラヴィアにおける「ユダヤ人社会」、その同化とユダヤ・ナショナリズムを考える。
第 9 回	ガリツィア史 1.	1846 年のガリツィア蜂起、およびそれに伴って起こった「ガリツィアの虐殺」をナショナリズムの観点から考える。
	「ガリツィアの虐殺」	
第 10 回	ガリツィア史 2.	ポーランド分割後のポーランド貴族の政治的影響力について考える。
	ポーランド貴族とポーランド王国の正統性	
第 11 回	ガリツィア史 4.	19 世紀後半のポーランドの国民形成過程を農民を中心に考える。
	農民ナショナリズムの進展	
第 12 回	ガリツィア史 5.	ポーランド貴族の政治的・文化的ヘゲモニーに抗して進展したウクライナ・ナショナリズムをリヴィウを中心に考える。
	ウクライナのピエモンテ？	
第 13 回	ガリツィア史 6.	ガリツィアにおけるシオニズム、ユダヤ自治主義、同化主義の問題を考える。
	ガリツィアにおけるユダヤ人社会	
第 14 回	まとめ	講義・演習の成果を振り返る

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業時に扱うテキストは PDF で配布するので、当日、議論に参加できるように必ず準備しておくこと。本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

授業予定にあげたもののうち、Pieter Judson, Habsburg Empire. New History を教科書とする。

【参考書】

授業予定を参照。

【成績評価の方法と基準】

演習への貢献度、演習時の報告を 40%、学期末のレポートを 60%として評価する。

【学生の意見等からの気づき】

受講人数が少ないことが見込まれるので、参加者の研究内容に寄せながら授業を組み立てる。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 中央ヨーロッパ近現代史

<研究テーマ> 中央ヨーロッパにおける国民形成とナショナリズム、第二次世界大戦の記憶、文化遺産保存の思想と運動

【Outline (in English)】

Learning objectives

We will survey basic historical development of Habsburg Monarchy in the "long Nineteenth century" from the time of French Revolution to the First World War to analyze more general notions such as nation-building, nationalism, civil society etc. The purpose of the course is not only to understand the most recent trends of historiography on the Monarchy, but also to get critical approach to the teleological concept of modern history of Europe.

Habsburg Monarchy was a mere amalgam of different territories acquired and inherited by the house of Habsburgs through marriages and wars. Therefore it was anachronistic existence by itself, lacking a potentiality to develop to an integrated modern state. The Long Nineteenth century was for it a process of decay leading to an inevitable dissolution, a process driven by nationalism, nationality conflicts... Such an argument is based on a view which presupposes a centralized homogeneous nation-state as a normality of modern state, and depicts history the Habsburg monarchy as an anomaly deviated from the "normal" development of European modernity. As its succeeding states in Central and Eastern Europe legitimates their existing by stressing their "national" characters, such vision of history often constructed basic pattern of historical narrative. Can we still understand history of the Monarchy in such a way? In this lecture, after summarizing historiography of Habsburg monarchy and more important theoretical problems, we will investigate some of the most essential topics of history of the Monarchy.

Learning activities outside of classroom:

Critical reading of academic essays on the topic in advance.

Grading Criteria:

Comments and discussion in the class: 40%

Final report: 60%

HIS500B4

西洋史学特殊研究 V

稲垣 春樹

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

テキストの講読とグループディスカッションにより近現代ヨーロッパ史研究の基本的な方法を身につける。各自の学位論文の課題に沿った文献講読と研究報告とする。ただし受講者が多い場合には共通テキストとして感情史に関する日本語文献を読む。

【到達目標】

学生は、近現代ヨーロッパ史に関する研究を具体的に進めていく方法を身につけることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業の進め方について案内する。
第 2 回	研究報告 1	受講者各自の研究について簡単に報告する。次週以降に読む文献を持ち寄る。
第 3 回	文献講読 1	受講生の選んだ文献 1 の講読
第 4 回	文献講読 2	受講生の選んだ文献 2 の講読
第 5 回	文献講読 3	受講生の選んだ文献 3 の講読
第 6 回	文献講読 4	受講生の選んだ文献 4 の講読
第 7 回	研究報告 2	受講生各自の研究の進捗状況について報告する。
第 8 回	文献講読 5	受講生の選んだ文献 5 の講読
第 9 回	文献講読 6	受講生の選んだ文献 6 の講読
第 10 回	文献講読 7	受講生の選んだ文献 7 の講読
第 11 回	文献講読 8	受講生の選んだ文献 8 の講読
第 12 回	研究報告 3	受講生各自の研究の進捗状況について報告する。
第 13 回	文献講読 9	受講生の選んだ文献 9 の講読
第 14 回	文献講読 10、まとめ	受講生の選んだ文献 10 の講読

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備時間は 4 時間を標準とする。授業前に文献講読あるいは研究報告の準備をし、授業後は授業の内容を自身の研究に反映させること。

【テキスト（教科書）】

各自の選んだ論文や研究書をテキストとして使用する。受講者が多い場合には感情史の日本語テキストを読む。まずは以下の参考書から始める。

【参考書】

ヤン・プランパー『感情史の始まり』みすず書房、2020 年
バーバラ・H・ローゼンワイン、リッカルド・クリスティアーニ『感情史とは何か』岩波書店、2021 年

【成績評価の方法と基準】

平常点 100 %。毎回の事前準備（論点コメントの作成）と授業中のディスカッションへの参加により判断する。

【学生の意見等からの気づき】

受講生の研究関心に基づく授業内容にすることで、学習効果が高まることがわかったので、今年度も学生主体の授業にする。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>イギリス帝国史

＜研究テーマ＞植民地における政治と法、インド、ジャマイカ
 ＜主要研究業績＞「専制と法の支配—1820年代ボンベイにおける政府と裁判所の対立—」『史学雑誌』127編1号（2018年1月）1～34頁。

【Outline (in English)】

Course Outline:

The class will read books and discuss various topics on modern European history.

Learning Objectives:

The goal of this class is to cultivate skills of critical reading and writing relevant for historical research.

Learning activities outside of classroom:

Students are expected to read course materials in advance of the class (2 hours). After the class, they need to spend 2 hours to upgrade their own research based on the discussion in the class.

Grading Criteria/Policy:

Grading will be decided based on their performance in the class (preparation for and contribution to the discussion: 100%).

HIS500B4

西洋史学特殊研究Ⅵ

稲垣 春樹

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

テキストの講読とグループディスカッションにより近現代ヨーロッパ史研究の基本的な方法を身につける。各自の学位論文の課題に沿った文献講読と研究報告とする。ただし受講者が多い場合には共通テキストとして史学史に関する英語文献を読む。

【到達目標】

学生は、近現代ヨーロッパ史に関する研究を具体的に進めていく方法を身につけることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の進め方について案内する。
第2回	研究報告1	受講者各自の研究について簡単に報告する。次週以降に読む文献を持ち寄る。
第3回	文献講読1	受講生の選んだ文献1の講読
第4回	文献講読2	受講生の選んだ文献2の講読
第5回	文献講読3	受講生の選んだ文献3の講読
第6回	文献講読4	受講生の選んだ文献4の講読
第7回	研究報告2	受講生各自の研究の進捗状況について報告する。
第8回	文献講読5	受講生の選んだ文献5の講読
第9回	文献講読6	受講生の選んだ文献6の講読
第10回	文献講読7	受講生の選んだ文献7の講読
第11回	文献講読8	受講生の選んだ文献8の講読
第12回	研究報告3	受講生各自の研究の進捗状況について報告する。
第13回	文献講読9	受講生の選んだ文献9の講読
第14回	文献講読10、まとめ	受講生の選んだ文献10の講読

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備時間は4時間を標準とする。授業前に文献講読あるいは研究報告の準備をし、授業後は授業の内容を自身の研究に反映させること。

【テキスト（教科書）】

各自の選んだ論文や研究書をテキストとして使用する。受講者が多い場合には史学史に関する英語テキストを読む。まずは以下の参考書から始める。

【参考書】

John Tosh, The Pursuit of History: Aims, methods and new directions in the study of history, 7th edition (Routledge, 2021).

【成績評価の方法と基準】

平常点100%。毎回の事前準備（論点コメントの作成）と授業中のディスカッションへの参加により判断する。

【学生の意見等からの気づき】

受講生の研究関心に基づく授業内容にすることで、学習効果が高まることがわかったので、今年度も学生主体の授業にする。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞イギリス帝国史

＜研究テーマ＞植民地における政治と法、インド、ジャマイカ

＜主要研究業績＞「専制と法の支配― 1820 年代ボンベイにおける政府と裁判所の対立―」『史学雑誌』 127 編 1 号（2018 年 1 月）1～34 頁。

【Outline (in English)】

Course Outline:

The class will read books and discuss various topics on modern European history.

Learning Objectives:

The goal of this class is to cultivate skills of critical reading and writing relevant for historical research.

Learning activities outside of classroom:

Students are expected to read course materials in advance of the class (2 hours). After the class, they need to spend 2 hours to upgrade their own research based on the discussion in the class.

Grading Criteria/Policy:

Grading will be decided based on their performance in the class (preparation for and contribution to the discussion: 100%).

HIS600B4

西洋史学演習 I

後藤 篤子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

西洋古代・中世史の修士論文を書くうえで必須となるラテン語史料の読解能力を身につけ向上させるために、ローマ帝政期のラテン語史料を精読する。

【到達目標】

(1) ラテン語の文法と Oxford Latin Dictionary の用例の見方に慣れ、大羅英辞典を独力で使いこなせるようになる。

(2) ラテン語辞典や文法書を参照しつつ、ラテン語史料を「直訳」できるようになる。

以上の2点を目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

帝政前期のローマ社会や属州統治を考える上で貴重な史料である小プリニウスの書簡集（全 10 巻）から選んだ書簡を、英訳・独訳や邦訳、Sherwin-White のコメンタリー（英語）も参照しつつ、ラテン語で精読する。予め邦訳担当者を決めることはせず、指名された受講生が読解できない箇所については、他の受講生に読解を求めるので、受講生全員が十分な予習を毎回してくることが必要となる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	予習の仕方と、小プリニウスのラテン語の特徴に関する説明
2	ローマ名士の国葬の様子を知る	小プリニウス『書簡集』第 2 巻第 1 書簡の講読と解説 (1)
3	小プリニウスの死生観を考える	同第 2 巻第 1 書簡の講読と解説 (2)
4	小プリニウスによる「晩餐会」批判について考える	同第 2 巻第 6 書簡の講読と解説
5	属州民による属州総督告発の仕組みを知る	同第 2 巻第 11 書簡の講読と解説 (1)
6	元老院における審議の実例を見る	同第 2 巻第 11 書簡の講読と解説 (2)
7	元老院裁判での原告・被告双方の弁護人の活動を見る	同第 2 巻第 11 書簡の講読と解説 (3)
8	元老院裁判における裁決の実例を見る	同第 2 巻第 11 書簡の講読と解説 (4)
9	ローマの相続法を知る	同第 2 巻第 20 書簡の講読と解説 (1)
10	「遺産狙い」－ローマ社会の実相を見る	同第 2 巻第 20 書簡の講読と解説 (2)
11	ローマ社会におけるパトロネジの一例を見る	同第 3 巻第 2 書簡の講読と解説
12	小プリニウスの叔父である大プリニウスの著作を知る	同第 3 巻第 5 書簡の講読と解説 (1)
13	大プリニウスの生活習慣を見る	同第 3 巻第 5 書簡の講読と解説 (2)
14	叔父に対する小プリニウスの評価と敬愛の念を見る	同第 3 巻第 5 書簡の講読と解説 (3)

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回、ラテン語の辞書・文法書、さらに Sherwin-White のコメントリーも参照しつつ、ラテン語史料読解の予習を十分にしておくこと。予習段階の不明箇所を中心に、授業での解説を踏まえて授業後に必ず復習すること。本授業の授業外学習の時間は、ラテン語の習熟度にもよるが、準備・復習合わせて計5時間前後を要するだろう。

【テキスト（教科書）】

A. N. Sherwin-White (ed.), *Fifty Letters of Pliny*, Oxford, 2nd ed. 2000.

【参考書】

国原古之助訳『プリニウス書簡集—ローマ帝国一貴紳の生活と信条』講談社学術文庫、1999 年。

【成績評価の方法と基準】

平常点のみ（ラテン語の予習度 40 %、ラテン語史料読解の精度 40 %、質問など授業への積極的取組み 20 %）で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 古代ローマ史

<研究テーマ> 帝政後期ローマの歴史と社会、ローマ帝国の「キリスト教化」の問題

<主要研究業績>

① The 'conversion' of Constantine the Great: his religious legStudia Patristica in the *Theodosian Code*, XCI (2017).

② (共訳) エドワード・ギボン『図説ローマ帝国衰亡史』東京書籍、2004 年。

③ シドニウス・アポリナリスにおける「ローマニズム」、『史学雑誌』91 編 10 号 (1982 年 10 月)。

【Outline (in English)】

< **Course Outline** > The aim of this course is to help students acquire and improve the ability to read and comprehend the historical sources written in Latin.

< **Learning Objectives** > At the end of the course, students are expected to become familiar with Latin grammar and to be able to make a literal translation of the Latin text into Japanese.

< **Learning activities outside of classroom** > Students are required to make a literal translation of the assigned Latin text before each class meeting, and after the class meeting to review one's own translation. Their study time will be more than five hours for a class.

< **Grading Policy** > Grading will be decided based on the preparation for each class meeting (40%), the reading comprehension of Latin texts indicated in class meetings (40%), and in-class contribution (20%).

HIS600B4

西洋史学演習Ⅱ

後藤 篤子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

西洋古代・中世史の修士論文を書くうえで必須となるラテン語史料の読解力を向上させるとともに、自分の研究成果を公表する能力を習得する。

【到達目標】

ラテン語辞典や文法書を参照しつつ、ラテン語史料を正確に逐語訳できるようになる。各自のプレゼンテーション能力を向上させる。以上の2点を目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

帝政前期のローマ社会や属州統治を考える上で貴重な史料である小プリニウスの書簡集（全 10 巻）から選んだ書簡を、英訳・独訳や邦訳、Sherwin-White のコメントリー（英語）も参照しつつ、ラテン語で精読する。予め邦訳担当者を決めることはせず、指名された受講生が読解できない箇所については、他の受講生に読解を求めるので、受講生全員が十分な予習を毎回してくることが必要となる。また、修士論文作成に向けて、最後の授業時に受講生各自の研究の1年間の進捗状況を報告してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ローマ元老院議員層の「夫婦愛」の一例を見る	小プリニウス『書簡集』第3巻第16書簡の講読と解説（1）
2	「夫婦愛」に関するプリニウスの理想像を考える	同第3巻第16書簡の講読と解説（2）
3	小プリニウスの資産および経済活動について知る	同第3巻第19書簡の講読と解説（1）
4	帝政前期の農業労働力について考える	同第3巻第19書簡の講読と解説（2）
5	小プリニウスと詩人マルティアリスの交友関係を知る	同第3巻第21書簡の講読と解説
6	帝政前期の地方都市における教育のありようを知る	同第4巻第13書簡の講読と解説（1）
7	ローマ社会におけるエヴェルジェティズム（恩恵施与慣行）の実例を見る	同第4巻第13書簡の講読と解説（2）
8	小プリニウス自身の「夫婦愛」を見る	同第4巻第19書簡の講読と解説
9	皇帝と元老院議員の関係について考える	同第4巻第22書簡の講読と解説
10	古代における自然現象理解の一端を見る	同第4巻第30書簡の講読と解説
11	小プリニウスの文学活動の動機について考える	同第5巻第8書簡の講読と解説（1）
12	法廷弁論に関する小プリニウスの考え方を見る	同第5巻第8書簡の講読と解説（2）

- 13 歴史書に関する小ブリ 同第5巻第8書簡の講読と解説
ニュースの考え方を見る (3)
- 14 レジュメ作成と口頭発表 受講生による研究発表と質疑応答
表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回、ラテン語の辞書・文法書、さらに Sherwin-White のコメント
リーも参照しつつ、ラテン語史料読解の予習を十分にしてくる。こ
予習段階の不明箇所を中心に、授業での解説を踏まえて授業後に必
ず復習すること。合わせて、各自の研究内容の口頭発表に向けて準
備を進めること。以上が求められるので、本授業の授業外学習の時
間は毎回、準備・復習合わせて計5時間前後を要するだろう。加え
て、口頭発表の準備時間必要となる。

【テキスト（教科書）】

A. N. Sherwin-White (ed.), *Fifty Letters of Pliny*, Oxford, 2nd
ed. 2000.

【参考書】

国原吉之助訳『プリニウス書簡集—ローマ帝国一貴紳の生活と信条』
講談社学術文庫、1999 年。

【成績評価の方法と基準】

平常点のみ（ラテン語の予習度 40 %、ラテン語史料読解の精度 40 %、
質問など授業への積極的取組み 20 %）で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 古代ローマ史

<研究テーマ> 帝政後期ローマの歴史と社会、ローマ帝国の「キリ
スト教化」の問題

<主要研究業績>

① The 'conversion' of Constantine the Great: his religious
legStudia Patristica in the *Theodosian Code*, , XCIII
(2017).

② (共訳) エドワード・ギボン『図説ローマ帝国衰亡史』東京書籍、
2004 年。

③ シドニウス・アポリナリスにおける「ローマニズム」、『史学雑
誌』91 編 10 号 (1982 年 10 月)。

【Outline (in English)】

< **Course Outline** > The aim of this course is to help students
improve the ability to read and comprehend the historical
sources written in Latin. Students are also required to make a
presentation concerning their own research.

< **Learning Objectives** > At the end of the course, students
are expected to be able to make a literal translation of the Latin
text into Japanese, and to improve their presentation ability.

< **Learning activities outside of classroom** > Students
are required to make a literal translation of the assigned Latin
text before each class meeting, and after the class meeting to
review their own translation. They are also required to prepare
for the presentation of their their own research. Their study
time will be more than five hours for a class.

< **Grading Policy** > Grading will be decided based on
the preparation for each class meeting (40%), the reading
comprehension of Latin texts indicated in class meetings (40%),
and in-class contribution (20%).

HIS600B4

西洋史学演習Ⅲ

高澤 紀恵

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

西洋近現代史に関する英語テキストを丁寧に読み、内容について議
論する。西洋史を学ぶ上で必須である外国語文献の読解力を養うと
ともに、報告を行うことでプレゼンテーション能力を高め、議論す
る力を培う。

【到達目標】

- ・外国語を読解し、日本語で表現し、考察する力を持つようにする。
- ・歴史、特に西洋近現代に関わる外国語文献を読むことで歴史を比
較する力を養うことができる。
- ・報告することでプレゼンテーション力をつけることができる。
- ・議論することで他者と双方向で思考することができるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示され
たどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針
に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

外国語文献の和訳を分担して担当し、各自がレジュメを作成して報
告する。これに対して参加者の意見を受けて正確な訳と理解に努め
る。演習形態である。単に和訳を作成するだけでなく、内容につい
て歴史研究においてどう考えるかを議論するようにする。

2022 年度は、2021 年度に引きつづき『コモンセンス』を読む。
授業は、原則としてオンラインで行う。ただし、オフィスアワーを
使って、フィードバックや質問などを行う際には、可能な限り対面
とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	趣旨説明。使用文献の決定、配 布。各回担当者の決定。
第 2 回	報告、発表、議論 (1)	順番に従い、作成されたレジュメ をもとに発表し、内容について議 論する。
第 3 回	報告、発表、議論 (2)	順番に従い、作成されたレジュメ をもとに発表し、内容について議 論する。
第 4 回	報告、発表、議論 (3)	順番に従い、作成されたレジュメ をもとに発表し、内容について議 論する。
第 5 回	報告、発表、議論 (4)	順番に従い、作成されたレジュメ をもとに発表し、内容について議 論する。
第 6 回	報告、発表、議論 (5)	順番に従い、作成されたレジュメ をもとに発表し、内容について議 論する。
第 7 回	小括 (1)	これまでの内容を振り返り、内容 を確認する。
第 8 回	報告、発表、議論 (6)	順番に従い、作成されたレジュメ をもとに発表し、内容について議 論する。
第 9 回	報告、発表、議論 (7)	順番に従い、作成されたレジュメ をもとに発表し、内容について議 論する。
第 10 回	報告、発表、議論 (8)	順番に従い、作成されたレジュメ をもとに発表し、内容について議 論する。

- 第11回 報告、発表、議論（9） 順番に従い、作成されたレジュメをもとに発表し、内容について議論する。
- 第12回 報告、発表、議論（10） 順番に従い、作成されたレジュメをもとに発表し、内容について議論する。
- 第13回 報告、発表、議論（11） 順番に従い、作成されたレジュメをもとに発表し、内容について議論する。
- 第14回 小括（2） これまでの内容を振り返り、内容を確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
担当分以外の部分も、全員辞書を丹念にひいて自分で和訳する。

【テキスト（教科書）】

トマス・ペイン（小松春雄訳）『コモン・センス』岩波文庫、1976年。

【参考書】

その都度参考になる文献を指示する。

【成績評価の方法と基準】

報告のレベルと討論への参加の熱心さによる（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

オンラインでの授業でしたが、進め方などは受講生と相談しつつ進めることで、実質的なトレーニングは行えたと思います。

【Outline (in English)】

((Course Outline and Learning Objectives))

This course aims to improve the reading ability of English articles on European modern history. Attendants are expected to read assignments in advance and participate in the discussion.

(Learning activities outside of the classroom)

I expect students to have completed the required assignment before the seminar. Your study time will be more than four hours for a workshop at least.

(Grading Criteria)

Grading will be decided based on the students' presentation and the quality of the performance in the seminar.

HIS600B4

西洋史学演習Ⅳ

高澤 紀恵

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

西洋近現代に関わる外国語文献を読み、現代世界の諸問題の歴史的な理解を深める。また研究者としての素養を深めると共に各専門分野に関わる外国語文献・史料の読解能力を高める。
秋学期も引きつづき「コモン・センス」を精読する。

【到達目標】

大学院生として自分の問題関心を明確に言葉に表し、自立的に研究活動を行えるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

外国語文献・史料の読解能力を高めること、研究者としての基礎能力の向上を目指すことを主眼とする。同時に現代世界と歴史的研究の関わりを認識を深めることを目指す。文献については最初の授業で受講者の希望を聞いて決定したい。各人の研究発表を適宜行う。授業はオンラインで行うが、フィードバックは基本的にオフィスアワーにおいて対面で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	希望によるテキスト選定、割当	受講者の希望を聞く
第2回	テキスト講読①	質疑、講読
第3回	テキスト講読②	質疑、講読
第4回	テキスト講読③	質疑、講読
第5回	研究発表①	各受講者の研究発表
第6回	研究発表②	各受講者の研究発表
第7回	テキスト講読④	質疑、講読
第8回	討論	質疑、講読
第9回	テキスト講読⑤	質疑、講読
第10回	テキスト講読⑥	質疑、講読
第11回	テキスト講読⑦	質疑、講読
第12回	テキスト講読⑧	質疑、講読
第13回	研究発表③	各受講者の研究発表
第14回	研究発表④	各受講者の研究発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
各人の専門分野について広く文献を渉猟すること。外国語運用能力を身につけること。
原典を精読する能力を高めましょう。

【テキスト（教科書）】

配布する。

【参考書】

特に定めない。

【成績評価の方法と基準】

各回の課題の遂行と発表、平常点による（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

2021年度はオンラインで行いましたが、研究発表のレジュメを前日までに共有するなど、学生と一緒に工夫することで、実質的なトレーニングはできたように思います。また、学生の希望に応じて、事前相談などは対面で行いましたが、大変に有益でした。

【Outline (in English)】

(Course Outline and Learning Objectives)

This course aims to improve the reading ability of English articles on European modern history. Attendants are expected to read assignments in advance and participate in the discussion.

(Learning activities outside of the classroom)

I expect students to have completed the required assignment before the seminar. Your study time will be more than four hours for a workshop at least.

(Grading Criteria)

Grading will be decided based on the students' presentation and the quality of the performance in the seminar.

HIS600B4

西洋史学演習Ⅴ

大澤 広晃

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

西洋近現代史における帝国・植民地支配という問題に焦点をあて、関連する外国語文献を講読し、議論する。また、修士論文の執筆に向けて、中間報告を行う。

【到達目標】

- ・研究動向に照らしながら外国語文献を正確かつ批判的に読解する能力を身につける。
- ・自分の研究内容を簡潔かつ説得的に発表する力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

この授業は演習形式で行う。授業では、課題文献の内容についてみなで吟味し、議論する。また、受講生が自身の研究を定期的に報告する機会を設ける。課題や質問に対するフィードバック・コメントは、授業時間内に行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の概要と進め方を説明し、役割分担を決める。
第2回	文献講読と議論（1）	課題文献を講読し、内容を議論する。
第3回	文献講読と議論（2）	課題文献を講読し、内容を議論する。
第4回	文献講読と議論（3）	課題文献を講読し、内容を議論する。
第5回	文献講読と議論（4）	課題文献を講読し、内容を議論する。
第6回	文献講読と議論（5）	課題文献を講読し、内容を議論する。
第7回	研究の中間報告	受講生が研究内容を報告し、みなで議論する。
第8回	文献講読と議論（6）	課題文献を講読し、内容を議論する。
第9回	文献講読と議論（7）	課題文献を講読し、内容を議論する。
第10回	文献講読と議論（8）	課題文献を講読し、内容を議論する。
第11回	文献講読と議論（9）	課題文献を講読し、内容を議論する。
第12回	文献講読と議論（10）	課題文献を講読し、内容を議論する。
第13回	研究の中間報告	受講生が研究内容を報告し、みなで議論する。
第14回	まとめ	授業の内容を総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。事前に課題文献や報告レジュメを精読し、質問や議論したい点などをあらかじめ準備して授業にのぞむこと。また、授業後には、議論で出た論点や自身の理解を再確認し、さらなる学びを主体的に進めること。

【テキスト（教科書）】

Nettelbeck, Amanda. Indigenous Rights and Colonial Subjecthood: Protection and Reform in the Nineteenth-Century British Empire. Cambridge: Cambridge U. P., 2019.

【参考書】

授業のなかで、その都度提示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（授業参加度、課題への取り組み、研究報告の質）：100 %

【学生の意見等からの気づき】

昨年度は受講者がいなかったためアンケートを実施していません。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 近現代イギリス史・イギリス帝国史

<研究テーマ> 南部アフリカの植民地支配、宣教と帝国、フィランソロピー

<主要研究業績>

・『帝国主義を歴史する』清水書院、2019 年

・「キリスト教宣教がつなぐ世界」、永原陽子編『人々がつなぐ世界史』（MINERVA 世界史叢書第 4 巻）ミネルヴァ書房、2019 年、113-135 頁

・'Wesleyan Methodists, Humanitarianism and the Zulu Question, 1878 - 87', Journal of Imperial and Commonwealth History, 43:3, 2015, 418-437.

【Outline (in English)】

< Course outline >

This course examines issues surrounding imperialism and colonialism in modern and contemporary western history. Students are expected to participate actively in discussion on relevant literature and give presentation about their own research projects on regular basis.

< Learning objectives >

1) Students are able to read academic books and articles with precision and criticism in view of developing historiography.

2) Students are able to present their arguments articulately.

< Learning activities outside of classroom >

Students are required to take on every assignment - reading assigned part of textbook, preparing oral presentation, writing academic essay - seriously. After the class, they have to review what they have learned in the class and continue their independent research.

< Grading policy >

Grade is given based on class participation and quality of assignments presented/submitted.

HIS600B4

西洋史学演習Ⅵ

大澤 広晃

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

西洋近現代史における帝国・植民地支配という問題を、史資料を用いて考察する。また、修士論文の執筆に向けて、中間報告を行う。

【到達目標】

・研究動向を意識しながら外国語の史資料を批判的に読解する力を身につける。

・史資料から得た知見に独自の考察を加え、それを口頭と文章で効果的に発表する力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

この授業は演習形式で行う。授業では、課題文献と関連する史料の内容をみなで吟味し、議論する。また、受講生が自身の研究を定期的に報告する機会を設ける。課題や質問に対するフィードバック・コメントは、授業時間内に行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業の概要と進め方を説明し、役割分担を決める。
第 2 回	文献および関連史料の講読と議論 (1)	課題文献と関連史料（同時代の新聞など）を講読し、内容を議論する。
第 3 回	文献および関連史料の講読と議論 (2)	課題文献と関連史料（同時代の新聞など）を講読し、内容を議論する。
第 4 回	文献および関連史料の講読と議論 (3)	課題文献と関連史料（同時代の新聞など）を講読し、内容を議論する。
第 5 回	文献および関連史料の講読と議論 (4)	課題文献と関連史料（同時代の新聞など）を講読し、内容を議論する。
第 6 回	文献および関連史料の講読と議論 (5)	課題文献と関連史料（同時代の新聞など）を講読し、内容を議論する。
第 7 回	研究の中間報告	受講生が研究内容を報告し、みなで議論する。
第 8 回	文献および関連史料の講読と議論 (6)	課題文献と関連史料（同時代の新聞など）を講読し、内容を議論する。
第 9 回	文献および関連史料の講読と議論 (7)	課題文献と関連史料（同時代の新聞など）を講読し、内容を議論する。
第 10 回	文献および関連史料の講読と議論 (8)	課題文献と関連史料（同時代の新聞など）を講読し、内容を議論する。
第 11 回	文献および関連史料の講読と議論 (9)	課題文献と関連史料（同時代の新聞など）を講読し、内容を議論する。
第 12 回	研究の中間報告	受講生が研究内容を報告し、みなで議論する。
第 13 回	研究の中間報告	受講生が研究内容を報告し、みなで議論する。
第 14 回	まとめ	授業の内容を総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。事前に課題文献や報告レジュメを精読し、質問や議論したい点などをあらかじめ準備して授業にのぞむこと。授業後には、議論で出た論点や自身の理解を再確認し、さらなる学びを主体的に進めること。また、授業の内容や自分の研究に関連する史料を幅広く集めつつ、その批判的な読解につとめ、自らの知見を発表する準備を進めること。

【テキスト（教科書）】

Paisley, Fiona and Pamela Scully. Writing Transnational History. London; New York: Bloomsbury Academic, 2019.

*法政大学が契約している The Times Digital Archive や New York Times などのデータベースから得られる史料も活用する。

【参考書】

授業のなかで、その都度提示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（授業参加度、課題への取り組み、研究報告の質）：100 %

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 近現代イギリス史・イギリス帝国史

<研究テーマ>南部アフリカの植民地支配、宣教と帝国、フィランソロピー

<主要研究業績>

・『帝国主義を歴史する』清水書院、2019 年

・「キリスト教宣教がつなぐ世界」、永原陽子編『人々がつなぐ世界史』（MINERVA 世界史叢書第 4 巻）ミネルヴァ書房、2019 年、113-135 頁

・'Wesleyan Methodists, Humanitarianism and the Zulu Question, 1878 - 87', Journal of Imperial and Commonwealth History, 43:3, 2015, 418-437.

【Outline (in English)】

< Course outline >

This course examines issues surrounding imperialism and colonialism in modern and contemporary western history using primary and secondary sources. Students are expected to participate actively in discussion on relevant literature and give presentation about their own research projects in preparation for writing MA dissertations.

< Learning objectives >

1) Students are able to read academic books and articles with precision and criticism in view of developing historiography.

2) Students are able to critically assess historical sources and present their arguments articulately based on their findings.

< Learning activities outside of classroom >

Students are required to take on every assignment - reading assigned part of textbook, preparing oral presentation, writing academic essay - seriously. After the class, they have to review what they have learned in the class and continue to advance their research projects for MA dissertations.

< Grading policy >

Grade is given based on class participation and quality of assignments presented/submitted.

HIS500B4

西洋古代史研究 I

後藤 篤子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

古代ケルト人の歴史と文化、および彼らがローマの支配下に組み込まれる過程について学び、「外国支配」への抵抗と同化、異文化接触による社会と文化の変容など、現代世界にも通じる諸問題について考えます。

【到達目標】

- ・古代ケルト人の社会と文化についての歴史的知識を習得する。
 - ・ガリアのケルト社会がローマの支配下に組み込まれていく歴史的過程を説明できる。
 - ・ガリアの社会と文化がローマとの接触によりどのように変容したかを考察できる。
- 以上を到達目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたなどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義形式で進めますが、毎回、質疑応答の時間を設けます。講義の概要と関連史料・図版等を記載したレジュメは、各回の授業の数日前には学習支援システムを通じて配布します。学期中に数回、講義内容の区切りのよい所でリアクションペーパーを提出してもらい、次回授業時で全体講評と質疑応答、場合によっては討議を行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	「ケルト人」とは
第 2 回	古代ケルト人の起源	ハルシュタット文化について
第 3 回	古代ケルト人の移動	古代ケルト人の移動とそのインパクト
第 4 回	ラ・テーヌ期のケルト人	ラ・テーヌ文化の形成と発展
第 5 回	古代ケルト人の宗教 (1)	古代ギリシア・ローマの文献史料から
第 6 回	古代ケルト人の宗教 (2)	考古学的知見から
第 7 回	ローマとの接触	ローマ属州「プロウインキア」成立前後の状況
第 8 回	ローマによる征服	カエサルによるガリア・コマタ征服と『ガリア戦記』が描くガリア社会
第 9 回	ローマ支配の確立	アウグストゥスによるガリア諸属州の組織化
第 10 回	ローマ支配への同化と抵抗	1 世紀のガリア史概観
第 11 回	ガロ=ローマ文化の出現 (1)	都市景観に見る「ローマ化」の進展とガリア的特徴
第 12 回	ガロ=ローマ文化の出現 (2)	農村地帯の状況
第 13 回	ガロ=ローマ文化の出現 (3)	ローマ支配下ガリアの宗教世界
第 14 回	春学期のまとめ	到達度の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

教室授業に臨む前に学習支援システムを通じて事前配布される講義レジュメに必ず目を通し、知らない人名や事項については『世界史辞典』（角川書店）等の参考図書類からレジュメ記載の参考文献等を利用して、まず自分で調べてみる。授業後は、講義内容で理解が不十分と思われる点や、新たに出てきた疑問等について、講義ノートや参考文献を利用して自分で調べ、考えてみる。それでも凝る疑問点については、次回授業の質疑応答時間等で解決を図る。本授業の事前学習・復習は、計4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しません。講義概要と関連史料・図版等を記載したレジュメを毎回、学習支援システムを通じて事前に配布します。

【参考書】

バリー・カンリフ『図説ケルト文化誌』、蔵持不三也訳、原書房、1998年。
木村正俊『ケルトの歴史と文化（上）・（下）』、中公文庫、2018年（増補新版）。
後藤篤子「ローマ属州ガリア」、『世界歴史大系・フランス史1』（山川出版社、1995年）第2章。
その他の参考文献は、講義レジュメで紹介しています。

【成績評価の方法と基準】

期末に行う筆記試験 80%、平常点（リアクションペーパーや質問等、授業への積極的取り組み）20%で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

2021年度の「授業改善アンケート」は、回答率が極めて低く、講義内容も変わりますので、あまり参考にできませんでしたが、2021年度は講義レジュメを学習支援システムにアップするのが遅れがちだったことが最大の反省点で、今年度は受講生に十分な予習時間を取ってもらえるよう、余裕をもってアップすべく努めます。

【Outline (in English)】

Course Outline : This course deals with the history of the ancient Celts and the influence of ancient Rome on them.

Learning Objectives : By the end of the course, students are expected to acquire historical knowledges concerning the ancient Celts and to be able to consider the problem of acculturation.

Learning Activities outside of Classroom : Before/ after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

Grading Criteria : Grading will be decided based on term-end examination (80%) and in-class contribution (20%).

HIS500B4

西洋古代史研究Ⅱ

後藤 篤子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

古代ローマ帝国の歴史と社会に関し学界で議論されている諸問題について、ガリアを事例として学び、帝政後期における「キリスト教化」、「ローマ」と「ゲルマン」の関係、ローマ支配の後退に対する種々の対応等の問題について考察します。

【到達目標】

3～5世紀のガリアが置かれた歴史的状況を説明できる。
「バガウダエ」や「ゲルマン大侵入」の実態等、ローマ帝政後期のガリアに関する学界での論争点について、諸家の見解を対比して自らの考察を述べることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義形式で進めますが、毎回、質疑応答の時間を設けます。講義の概要と関連史料・図版等を記載したレジュメは、各回の授業の数日前には学習支援システムを通じて配布します。学期中に数回、講義内容の区切りのよい所でリアクションペーパーを提出してもらい、次回授業時で全体講評と質疑応答、場合によっては討議を行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	「バクス・ロマーナ」期のガリア社会概観
第2回	「3世紀の危機」とガリア	「ガリア帝国」をめぐって
第3回	ローマ帝政後期の体制	「大きな政府」の出現
第4回	4世紀のガリア	政治史概観
第5回	「移動宮廷」の影響	4世紀ガリアにおける社会的流動性とガリア=セナトール貴族層の形成
第6回	ローマ帝国の「キリスト教化」の影響	ガリアへのキリスト教の浸透
第7回	5世紀のガリア	政治史概観
第8回	「ゲルマン大侵入」をめぐって	同時代史料に見る「蛮族大侵入」と、その実態をめぐる諸説の検討
第9回	ローマ帝国における「民衆運動」？	「バガウダエ」をめぐって
第10回	ローマ帝国の「衰退」への対応 (1)	シドニウス・アポリナリスの書簡から
第11回	ローマ帝国の「衰退」への対応 (2)	シドニウス・アポリナリスの場合
第12回	「西ローマ帝国の滅亡」	ローマ支配の終焉とガリア=セナトール貴族層の動向
第13回	ローマ支配終焉後のガリア	ゲルマン諸王国と司教たちのネットワーク
第14回	秋学期のまとめ	到達度の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

教室授業に臨む前に学習支援システムを通じて事前配布される講義レジュメに必ず目を通し、知らない人名や事項については『世界史辞典』（角川書店）等の参考図書類らレジュメ記載の参考文献等を利用して、まず自分で調べてみる。授業後は、講義内容で理解が不十分と思われる点や、新たに出てきた疑問等について、講義ノートや参考文献を利用して自分で調べ、考えてみる。それでも凝る疑問点については、次回授業の質疑応答時間等で解決を図る。本授業の事前学習・復習は、計4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しません。講義概要と関連史料・図版等を記載したレジュメを毎回、学習支援システムを通じて事前に配布します。

【参考書】

後藤篤子「古代末期のガリア社会」、『岩波講座・世界歴史7』（岩波書店、1997年）所収。その他の参考文献は、授業の進行に合わせて随時紹介します。

【成績評価の方法と基準】

期末に行う筆記試験 80 %、平常点（リアクションペーパーや質問等、授業への積極的取り組み）20 %で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

2021年度の「授業改善アンケート」は回答率が極めて低く、講義内容や授業方法（2021年度はグループ別発表を実施）も変わりますので、あまり参考にできませんでした。

ただ、講義レジュメの事前配布が遅れがちだったことは反省していますので、今年度は受講生が十分な予習時間を取れるように、早目のアップに努めます。

【Outline (in English)】

Course Outline : This course deals with the issues of imperial Rome, such as the so-called third-century crisis, social mobility in the fourth century, Christianization, and various reactions to declining Roman rule, focusing on Gaul.

Learning Objectives : By the end of the course, students are expected to acquire historical knowledge of the late Roman Gaul and to be able to consider the issues described in Course Outline.

Learning Activities outside of Classroom : Before/ after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

Grading Criteria : Grading will be decided based on term-end examination (80%) and in-class contribution (20%).

HIS500B4

西洋中世史研究Ⅰ

大貫 俊夫

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

中世ヨーロッパと聞いてどのようなイメージを持つだろうか。勇壮な騎士、ユーモラスなロマネスク美術から魅力的な時代だと思ふ人もいれば、暴力にあふれ不潔でキリスト教を盲信する時代だと思ふ人もいよう。本講義では、史料を読み解きながら中世ヨーロッパにまつわるファクトとフィクションの関係を見定め、過去を知ることの意味を一緒に考える。

【到達目標】

1. 中世ヨーロッパ史に関する基礎的知識を習得できる。
2. 中世ヨーロッパ史に関する歴史観が構築されるプロセスを理解できる。
3. ファクトとフィクションを成り立たせる上で史料が果たす役割を理解できる。
4. 史資料の読解力を身につけることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的には講義形式だが、一部自分で資料を読解する作業も行ふ。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	本講義の目的と概要について説明します。
第2回	中世は暗黒時代だった①	中世は本当に暗黒時代だったのか説明します。
第3回	中世は暗黒時代だった②	中世は本当に暗黒時代だったのか説明します。
第4回	中世の人々は地球は平らだと思っていた	中世における世界認識について説明します。
第5回	農民は風呂に入ったことがなく、腐った肉を食べていた	中世における衛生観について説明します。
第6回	人々は紀元千年を恐れていた	中世における終末観について説明します。
第7回	中世の戦争は馬に乗った騎士が戦っていた	中世における戦争の実態について説明します。
第8回	中世の教会は科学を抑圧していた	中世における宗教と科学の関係について説明します。
第9回	1212年、何千人もの子どもたちが十字軍遠征に出立し、そして死んだ	中世の十字軍について説明します。
第10回	ヨハンナという名の女教皇がいた	中世におけるジェンダー観について説明します。
第11回	中世の医学は迷信に過ぎなかった	中世における医学について説明します。
第12回	中世の人々は魔女を信じ、火あぶりにした	魔女について説明します。
第13回	ベスト医師のマスクと「バラのまわりを輪になって」は黒死病から生まれた	中世に起こったベストについて説明します。
第14回	修道士は黙々と祈りの生活を送っていた	中世の修道士の生活について説明します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

準備学習：事前に教科書の指定された箇所を読んでくる。

復習：授業内容を振り返り小レポートを執筆する。

本授業の準備・復習時間は1回あたり4時間とする。

【テキスト（教科書）】

ウィンストン・ブラック著／大貫俊夫監訳『中世ヨーロッパのファクトとフィクション』（平凡社、2021年）

【参考書】

特になし

【成績評価の方法と基準】

各回の小レポート（80％）

期末レポート（20％）

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【Outline (in English)】

Course outline:

What do you think of medieval Europe? For some, it was a fascinating time of brave knights and humorous Romanesque art; for others, it was a time of violence, filth and blind faith in Christianity. In this lecture, we will look at the relationship between fact and fiction in medieval Europe, reading historical documents and considering together the meaning of knowing the past.

Learning Objectives:

The goals of this course are to acquire a basic knowledge of medieval European history, understand the process by which historical perspectives on medieval European history are developed, and understand the role of historical sources in the construction of fact and fiction.

Learning activities outside of classroom:

Students are expected to read the assigned sections of the textbook before class and write a short report after class.
Grading Criteria/Policy:

Short reports: 20%, Term-end report: 80%

HIS500B4

西洋中世史研究Ⅱ

大貫 俊夫

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本講義では、中世盛期（11世紀末～13世紀）に広まった宗教的心性を踏まえて、当時新たに展開した修道制について論じる。特に修道士が世俗社会といかに交流していたのかを詳述する。

【到達目標】

1. キリスト教修道制について理解できる。
2. 修道制を通して盛期中世社会における宗教的心性を理解できる。
3. 修道制と世俗の社会生活との相互関係について考察できる。
4. 史料の読解力を身につけ、それを他の分野に応用できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

事前学習は特に求めないが、授業で扱った内容はその都度プリントを見返し、参考文献を読むことで理解を定着させること。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	本講義の目的と概要について説明します。
第2回	古代～初期中世の西欧修道制の展開	キリスト教修道制の起こりを説明します。
第3回	ベネディクトゥスの『戒律』	中世ヨーロッパの修道制の基礎といえるベネディクトゥスの『戒律』について説明します。
第4回	盛期中世の宗教的心性①	盛期中世における新しい宗教的心性の特徴を説明します。
第5回	盛期中世の宗教的心性②	盛期中世における新しい宗教的心性の特徴を説明します。
第6回	盛期中世における修道制の多様性	盛期中世に誕生した新しい修道制の類型について説明します。
第7回	シトー会の成立と組織的特徴	盛期中世を代表するシトー会について、その成立と組織的特徴に絞って説明します。
第8回	シトー会と農村社会の関わり	シトー会と農村社会の関わりについて説明します。
第9回	シトー会と都市社会の関わり	シトー会と都市社会の関わりについて説明します。
第10回	プレモントレ会とカルトゥジオ会	シトー会以外の修道会としてプレモントレ会とカルトゥジオ会について説明します。
第11回	異端運動の展開	修道制の情勢と表裏一体の存在として誕生した異端運動について説明します。
第12回	托鉢修道会の成立とその役割	13世紀に成立した托鉢修道会について説明します。
第13回	托鉢修道会と大学	托鉢修道会と大学教育について説明します。
第14回	修道院神学とスコラ学	シトー会、托鉢修道会が貢献した神学の新しい動向について説明します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

復習：授業内容を振り返り小レポートを執筆する。

本授業の復習時間は1回あたり4時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用せず、授業でプリントを配布する。

【参考書】

杉崎泰一郎『修道院の歴史』（創元社、2015 年）

K. S. フランク『修道院の歴史』（教文館、2002 年）

G. コンスタブル『十二世紀宗教改革－修道制の刷新と西洋中世社会』（慶應義塾大学出版会、2014 年）

【成績評価の方法と基準】

各回の小レポート (20 %)

期末レポート (80 %)

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【Outline (in English)】

Course outline:

This lecture will discuss the newly developed monasticism of the High Middle Ages (late 11th-13th centuries) in the light of the prevailing religious mentality of the period. In particular, we will discuss how the monks interacted with secular society. Learning Objectives:

The goals of this course are to understand Christian monasticism, understand religious spirituality in medieval society through monasticism, and consider the interrelationship between monasticism and secular social life.

Learning activities outside of classroom:

Students should consolidate their understanding of the course content by reviewing the handouts and reading the bibliography.

Grading Criteria/Policy:

Short reports: 20%, Term-end report: 80%

POL500B4

ヨーロッパ近現代政治史研究 I

高澤 紀恵

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

近世ヨーロッパ社会の基底で起こった変化を、「生存の条件」「社会的結合関係」「文化変容」「緊張と排除」という 4 つの視角から検討する。対象とする時期は 16 世紀から 18 世紀とする。あらかじめ配布した資料をもちいて小グループでディスカッションする機会をもうけるなど、学生の主体的参加を求める。

【到達目標】

近世ヨーロッパ社会史をテーマとするこの授業は、2 つの到達目標をもつ。ひとつは、16 世紀以降のヨーロッパの歴史を基底でゆっくり変化する人々の生活・宗教・意識の変化から追ひ、近代ヨーロッパの理解を深めることである。二つ目は、日常性に着目する社会史の方法と成果を学ぶことを通して、私たちの生きる時代と社会を相対化し、その歴史的特質を理解することである。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義、学生による報告、ディスカッションを組み合わせたクラスである。

リアクション・ペーパーは毎回提出を求める。次回授業の冒頭で、学生のリアクションへのフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	社会史とはなにか
第 2 回	映画『帰ってきたマルタン・ゲール』	次回、感想文を提出のこと
第 3 回	生存の条件	他者としての過去との出会い
第 4 回	社会的結合関係（1）	血縁的な結合
第 5 回	ディスカッション（1）	婚姻と家をめぐって
第 6 回	社会的結合関係（2）	宗教的結合と地縁的結合
第 7 回	文化変容（1）	宗教改革とカトリック改革
第 8 回	文化変容（2）	民衆文化と時間・空間意識
第 9 回	文化変容（3）	文字文化の浸透
第 10 回	緊張と排除（1）	魔女
第 11 回	緊張と排除（2）	放浪者・貧民
第 12 回	緊張と排除（3）	ユダヤ人
第 13 回	ディスカッション（2）	近代と排除
第 14 回	まとめ	啓蒙のゆくえ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

受講学生は、テーマの一つを選び、報告（30 分）を準備すること。ディスカッションに際しては、事前に配布された資料について課題に対する自分の考えを A 4 一枚程度のレポートにまとめて持参すること。レポートはディスカッション終了後に提出すること。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

とくに定めず

【参考書】

ナタリー・ゼーモン・デーヴィス『帰ってきたマルタン・ゲール——16 世紀フランスの偽亭主事件』平凡社ライブラリー、1993 年ほか。参考文献表を最初の授業で配布する。

【成績評価の方法と基準】

報告への評価（40％）

ディスカッションへの参加・提出物などによる平常点（20％）

エッセイ形式の期末試験（40％）

【学生の意見等からの気づき】

二〇一九年度は分厚い参考文献表を最初の授業に配布しましたが、受講生はあまり活用していないことに気がつきました。今年はリストを短くして必読文献に絞るほうが有益かと思えます。

【Outline (in English)】

(Course Outline and Learning Objectives)

Social history is not a simple branch of history but a critical history in its own right. By grasping the society as a whole on the level of everyday experience, it illuminates every aspect of social life considered meaningful to each historian. In this course, participants are expected to make a presentation on a topic provided in advance, and engage in discussion.

(Learning activities outside of the classroom)

Your study time will be more than four hours for a class.

(Grading Criteria)

Grading will be decided based on the students' presentation (40%),

participation to the discussion (20%), and the final report (40%).

POL500B4

ヨーロッパ近現代政治史研究Ⅱ

高澤 紀恵

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

都市は、政治・社会・経済・宗教の変動の最先端にあり、新たな統治技術が生まれる場でもあった。2021年度においては、パリという具体的な都市の歴史に即して、空間、建物、信仰の三点から中・近世における変化を分析する。あらかじめ配布した資料をもちいて小グループでディスカッションする機会をもうけるなど、学生の主体的参加を求める。

【到達目標】

中・近世都市の歴史をテーマとするこの授業は、三つの到達目標をもつ。ひとつは、「市民」、「公共性」、「代表」、「救済」といった概念が、どのような歴史的現実の中で生まれ、変容してきたかを理解することである。二つ目は、都市史研究の成果と方法を学び、自分の生活空間を学問的に検討する力を養うことである。三つめは、自分の課題意識に応じたレポート作成の技術を高めることである。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

このコースは、講義を中心とするが、グループ・ディスカッションも行う。

その場合は、事前に配布された資料をよく読み、A4一枚程度に考えをまとめてレポートを作成すること。このレポートをディスカッションに持参し、提出のこと。レポートならびにディスカッションへのフィードバックは、授業内で行う。また学生のリアクションへのフィードバックは、次回の授業冒頭でまとめて行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	福澤諭吉から考える都市
第2回	空間を読む（1）	パリの三つの顔
第3回	空間を読む（2）	シテ島の中心性
第4回	空間を読む（3）	右岸と市民
第5回	空間を読む（4）	左岸と大学
第6回	ディスカッション	都市と大学をめぐって
第7回	建物を読む（1）	ノートル・ダムを読む
第8回	建物を読む（2）	サン・ポールを読む
第9回	ディスカッション	残るもの、失うもの
第10回	見えないものを読む（1）	教区と街区
第11回	見えないものを読む（2）	教区教会の役割
第12回	見えないものを読む（3）	教区における闘い
第13回	見えないものを読む（4）	都市と信仰、都市の信仰
第14回	まとめ	都市を考える、都市から考える

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講義中心のクラスであるが、ディスカッションに際しては事前に配布された資料を熟読の上、課題に答えるA4一枚程度のレポートを用意し、これを基にディスカッションを行う。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

とくになし

【参考書】

吉田伸之、伊藤毅（編）『伝統都市 全四巻』東京大学出版会、2010年。

高澤紀恵『近世パリに生きる——ソシアビリテと秩序』岩波書店、2008 年。

高澤紀恵、アラン・ティレ、吉田伸之編『パリと江戸—— 伝統都市の比較史へ』山川出版社、2009 年。

【成績評価の方法と基準】

ディスカッションへの参加・提出物などによる平常点（40 %）、エッセイ形式の期末試験（60 %）

【学生の意見等からの気づき】

021 年度は、ほぼ対面で授業を行い、学生の希望を聞いて「市ヶ谷を歩く」という特別セッションを行いました。

【学生が準備すべき機器他】

課題提出などは学習支援システムを活用しますので、パソコンを使える環境がのぞましい。

【その他の重要事項】

関心のある方は必ず仮登録をしてください。
ネット環境が整わない方は、メールで相談してください。

【Outline (in English)】

(Course Outline and Learning Objectives)

This course aims to help students understand the social and spatial transformation in early modern Paris, focusing on the following four topics: topography, architecture, and religion. This course consists of lectures and discussions. Students are expected to read assignments in advance.

(Learning activities outside of the classroom)

Your study time will be more than four hours for a class.

(Grading Criteria)

I will decide your overall grade in the class based on the following:

・Final report (60%), and short essays and in-class contributions (40%)

CUM500B4

アーカイブズ学 I

宮間 純一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

アーカイブズ学の概要と基本理念を理解する。また、記録管理のあり方をその背景にある人間社会の営みと関連付けて考える思考力を身につける。

アーカイブズとは、①組織や個人の活動のなかで蓄積された記録（とくに、永久保存される文書）、②記録を管理・公開する組織や施設のことを意味する用語であり、アーカイブズ学とはアーカイブズを支える学問分野である。

【到達目標】

アーカイブズ学の諸分野について具体的に探求するとともに、自己の研究領域とアーカイブズとの関係を認識し、具体的な研究課題を発見・設定することができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義を中心とするが一部演習形式で実施する。第1回から10回は講義とし、第11回から13回は演習形式で論文講読を行う。論文講読は、受講生が分担して担当・発表したのち、教員が解説を加え、ディベートを実施する。第14回は、総括討論を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	アーカイブズ学の概要と学ぶ意義に関する講義
第2回	アーカイブズ学総論	アーカイブズの歴史と基本理念に関する講義
第3回	アーカイブズと周縁の学問領域	アーカイブズと歴史学・博物館学・図書館学などに関する講義
第4回	前近代のアーカイブズ	前近代のアーカイブズに関する講義
第5回	近代日本の官僚組織と記録管理	近代日本の官僚組織と記録管理に関する講義
第6回	戦争と記録	戦争と記録に関する講義
第7回	アーカイブズと現代社会	アーカイブズと現代社会に関する講義
第8回	オーラル・ヒストリー	オーラル・ヒストリーに関する講義
第9回	近世「家」文書の構造	近世日本の文書群の構造分析に関する講義
第10回	近現代行政文書の構造	近現代の行政組織と公文書の構造に関する講義
第11回	近現代の企業記録	近代の企業記録に関する文献を講読する
第12回	評価選別論	アーカイブズの評価選別論に関する文献を講読する
第13回	アーカイブズの編成と記述	アーカイブズの編成と記述に関する論文を講読する
第14回	まとめ	ふり返りと総括討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回に指示する論文および関連する文献を各自が事前に目を通してくる。

本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

国文学研究資料館史料館編『アーカイブズの科学』上・下（柏書房、2003 年）

【参考書】

安澤秀一『史料館・文書館学への道-記録・文書をどう残すか-』（吉川弘文館、1985 年）

大藤修・安藤正人『史料保存と文書館学』（吉川弘文館、1986 年）

鈴江英一『近現代史料の管理と史料認識』（北海道大学図書刊行会、2002 年）

他は授業中に適宜紹介する

【成績評価の方法と基準】

平常点（100%）。特に発表と討論での発言を重視する。

【学生の意見等からの気づき】

ディベートをより有意義にするために、関連する論考を事前に配布するようにした。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

以下のアーカイブズ機関での実践・研究をふまえた授業を行う

2016 年 4 月 - 2018 年 3 月国文学研究資料館研究部 准教授

2011 年 4 月 - 2016 年 3 月宮内庁書陵部宮内公文書館 内閣府事務官

2007 年 4 月 - 2011 年 3 月千葉県文書館県史・古文書課 嘱託職員

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近世史・近代史およびアーカイブズ学

<研究テーマ>政治史、地域史、記録管理

<主要研究業績>

「公文書管理法前後の自治体アーカイブズアンケート調査の結果から」（『日本歴史学協会年報』（34）、2019 年）／『天皇陵と近代－地域の中の天友皇子伝説－』（平凡社、2018 年）／『国葬の成立－明治国家と「功臣」の死－』（勉誠出版、2015 年）／『戊辰内乱期の社会－佐幕と勤王のあいだ－』（思文閣出版、2015 年）

【Outline (in English)】

(Course outline) This course introduces overview and philosophy of archival science to students taking this course.

(Learning Objectives) The goals of this course are to master the basics of archival science.

(Learning activities outside of classroom) Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.

(Grading Criteria /Policy) Your overall grade in the class will be decided based on the following

in class contribution: 100%

CUM500B4

アーカイブズ学Ⅱ

宮間 純一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

アーカイブズ学におけるアーカイブズ資源研究の基本的な理念・手法を理解し、具体的な文書群の構造分析を行うことができるようになる。

アーカイブズ資源研究とは、記録管理に関わる研究、記録の伝来をめぐる研究、アーカイブズの構造分析などからなる分野である。

【到達目標】

アーカイブズ学資源研究の理念・手法を踏まえて、自己の研究において利活用している（あるいはこれから利活用することが予定されている）文書群を対象としたアーカイブズ学的分析を具体的にを行い、その成果・課題を適切に示すことができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義および演習。第1回から10回は講義とし、第11回から13回は演習形式で、受講生が具体的な文書群に関わる研究発表を行う（文書群や研究テーマは各自が設定する、授業計画に示したのは例）。発表ののちディベートを実施する。第14回は、総括討論を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	アーカイブズ学の理念・概要に関する講義
第2回	アーカイブズ資源研究の方法論	アーカイブズ資源研究の研究史・方法論に関する講義
第3回	古代朝廷の文書管理	古代朝廷の文書管理に関する講義
第4回	戦国大名の文書管理	戦国大名の文書管理に関する講義
第5回	徳川幕府の文書管理	徳川幕府の官僚組織と文書管理に関する講義
第6回	前近代の「家」と文書管理	前近代の「家」における文書管理に関する講義
第7回	近代官僚組織と文書管理	近代官僚組織の成立・展開と文書管理に関する講義
第8回	軍隊と文書管理	軍隊と文書管理に関する講義
第9回	政治家と文書管理	政治家と文書管理に関する講義
第10回	企業と文書管理	企業と文書管理に関する講義
第11回	寺院と文書管理	寺院と文書管理に関する研究報告
第12回	神社と文書管理	神社と文書管理に関する研究報告
第13回	天皇と文書管理	天皇と文書管理に関する研究報告
第14回	まとめ	ふり返りと総括討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回の発表担当者は関連する史料・文献を熟読し、報告の準備をする。それ以外の受講生は、発表担当者から事前に紹介された参考文献に目を通してくる。

本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

国文学研究資料館史料館編『アーカイブズの科学』上・下（柏書房、2003 年）

【参考書】

安澤秀一『史料館・文書館学への道-記録・文書をどう残すか-』（吉川弘文館、1985 年）

大藤修・安藤正人『史料保存と文書館学』（吉川弘文館、1986 年）

鈴江英一『近現代史料の管理と史料認識』（北海道大学図書刊行会、2002 年）

国文学研究資料館編『近世大名のアーカイブズ資源研究』（思文閣出版、2016 年）

他は授業中に適宜紹介する

【成績評価の方法と基準】

平常点（100%）。特に発表と討論での発言を重視する。

【学生の意見等からの気づき】

ディベートをより有意義にするために、関連する論考を事前に配布するようにした。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

以下のアーカイブズ機関での実践・研究をふまえた授業を行う

2016 年 4 月-2018 年 3 月国文学研究資料館 研究部准教授

2011 年 4 月-2016 年 3 月宮内庁書陵部宮内公文書館 内閣府事務官

2007 年 4 月-2011 年 3 月千葉県文書館県史・古文書課 嘱託職員

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近代史およびアーカイブズ学

<研究テーマ>政治史、地域史、記録管理

<主要研究業績>「公文書管理法前後の自治体アーカイブズアンケート調査の結果から」（『日本歴史学協会年報』（34）、2019 年）／『天皇陵と近代－地域の中の天友皇子伝説－』（平凡社、2018 年）／『国葬の成立－明治国家と「功臣」の死－』（勉誠出版、2015 年）／『戊辰内乱期の社会－佐幕と勤王のあいだ－』（思文閣出版、2015 年）

【Outline (in English)】

(Course outline) This course introduces the archival study of resources to students taking this course.

(Learning Objectives) The goals of this course are to master the basics of archival study of resources.

(Learning activities outside of classroom) Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.

(Grading Criteria /Policy) Your overall grade in the class will be decided based on the following in class contribution: 100%

CUM500B4

文書館管理研究Ⅰ

宇都宮美生・青木直己・葦名ふみ・新井浩文・富塚一彦・白石烈

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

授業の概要：日本および各国のアーカイブズ（記録と文書館）とアーキビストの歴史と現在について、また、その実務について学ぶ。

目的：アーキビストとしての識見・能力を高め、その基本技能を身につける。

なお、この授業は、文書館管理研究Ⅱ（秋学期）と連続して受講することを必須とする。

【到達目標】

到達目標：１）アーカイブズ（記録と文書館）について深く理解し、その意義を自覚すると共に説明することができる。２）アーキビストとしての技能を身に着け、実践することができる。３）アーカイブズ及びアーキビストについてグローバルな視点から考え、論じることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業の進め方：オムニバス形式で教員が講義する。

方法：初回のみオンライン授業とする。２回目より対面授業とする。その具体的方法については、学習支援システムで通知する。教員が講義を行い、その中で受講生との質疑応答およびフィードバックを行う。それによって、受講生の理解度及び理解の定着度を確認しつつ、自主的・発展的学習への動機付けを図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション (04/13 宇都宮美生)	授業の計画と心構え
第 2 回	とらや文庫 1 (04/20 青木直己)	企業アーカイブズの歴史
第 3 回	とらや文庫 2 (04/27 青木直己)	企業における記録史料の収集と管理
第 4 回	とらや文庫 3 (05/11 青木直己)	企業アーカイブズの利用
第 5 回	外務省外交史料館 1 (05/18 富塚一彦)	外交史料館所蔵記録の概要と記録公開の現状
第 6 回	外務省外交史料館 2 (05/25 富塚一彦)	外務省記録および日本外交文書の歴史学的利用
第 7 回	国立国会図書館憲政資料室 1 (06/1 葦名ふみ)	憲政資料室の収集活動（歴史と現状）
第 8 回	国立国会図書館憲政資料室 2 (06/08 葦名ふみ)	憲政資料室における利用提供と実務
第 9 回	宮内庁書陵部 1 (06/15 白石烈)	「皇室アーカイブズ」の概要
第 10 回	宮内庁書陵部 2 (06/22 白石烈)	宮内公文書館所蔵資料の構造
第 11 回	宮内庁書陵部 3 (06/29 白石烈)	図書寮文庫の資料保存
第 12 回	埼玉県立文書館 1 (07/06 新井浩文)	概論：公立文書館の歴史と運営
第 13 回	埼玉県立文書館 2 (07/13 新井浩文)	公文書等の保存と運営
第 14 回	埼玉県立文書館 3 (07/20 新井浩文)	公文書等の公開と活用

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

準備学習：参考書を読むこと。各回のテーマに関わるウェブサイトの公開情報を読んでおくこと。

復習：参考書や関連文献を読み、理解を深めること。各国アーカイブズのウェブサイトを利用して識見を広げること。

本授業の準備・復習時間は、各2時間以上を標準とする。

【テキスト（教科書）】

刊本としてのテキストは使用しない。授業内容をまとめたプリントを配布する。

【参考書】

安澤秀一『史料館・文書館学への道』（吉川弘文館、1985年）

高野修『日本の文書館』（岩田書院、1997年）

安藤正人『記録史料学と現代』（吉川弘文館、1998年）

青山英幸『アーカイブズとアーカイバル・サイエンス』（岩田書院、2004年）

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 %、期末試験（レポート形式） 50 %。なお、特別の事情がなく、授業への参加度が不良と判断された場合には、不合格の評価とする。

【学生の意見等からの気づき】

担当教員間の内容重複、関連する他の授業との内容重複に留意し、受講生との授業内コミュニケーションを密にする。

【担当教員の専門分野等】

〈現職〉

青木直己・元とらや文庫研究主幹

葦名ふみ・国立国会図書館利用者サービス部政治史料課主査

新井浩文・埼玉県立文書館首席学芸主幹

白石烈・宮内庁書陵部編修課主任研究官

富塚一彦・外務省外交史料館外交公文書編纂官

【Outline (in English)】

Course outline: Students of this class can get practical and basic knowledge and skills as to four points below.(1)What's an archives? (2)What's an archivist? (3) What's the mission of an archives and an archivist? (4)What's the skills of an archivist working for an archives? Student's questions, comments and discussion on the contents of this class are welcomed by professors.

Learning Objectives: The goal of this course is to understand practical and basic knowledge and skills as an archivist.

Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

Grading Criteria/Policies: Your overall grade in the class will be decided based on assignments at each class meeting (50%) and term-end Examination (50%)

CUM500B4

文書館管理研究Ⅱ

宇都宮美生・青木睦・赤松道子・長谷部圭彦・山田太造・渡辺浩一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

授業の概要：日本および各国のアーカイブズ（記録と文書館）とアーキビストの歴史と現在について、また、その実務について学ぶ。

目的：アーキビストとしての識見・能力を高め、その基本技能を身につける。

【到達目標】

到達目標：1) アーカイブズ（記録と文書館）について深く理解し、その意義を自覚すると共に説明することができる。2) アーキビストとしての技能を身につけ、実践することが出来る。3) アーカイブズ及びアーキビストについてグローバルな視点から考え、論じることが出来る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業の進め方：オムニバス形式で教員が講義する。

方法：対面授業とする。その具体的方法については、学習支援システムで通知する。教員が講義を行い、その中で受講生との質疑応答およびフィードバックを行う。それによって、受講生の理解度及び理解の定着度を確認しつつ、自主的・発展的学習への動機付けを図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション (09/21 宇都宮美生)	授業全体の概要説明と受講上の注意。
第2回	東京大学史料編纂所1 (09/28 山田太造)	史料編纂所とコンピューターシステム～総論～
第3回	東京大学史料編纂所2 (10/05 山田太造)	史料編纂所のDB～テキスト系DBとメタデータ～
第4回	東京大学史料編纂所3 (10/12 山田太造)	史料編纂所のDB～複製史料の画像系DB～
第5回	アーカイブズ記述編成の方法 (10/19 渡辺浩一)	ISAD (G)「記録史料記述の国際標準」を学ぶ
第6回	アーカイブズ記述編成の実際 (10/26 渡辺浩一)	日本近世の文書を対象にISAD (G)を実際に使ってみる
第7回	ロシアの文書館1 (11/09 赤松道子)	ロシアの文書と文書管理システムの歴史
第8回	ロシアの文書館2 (11/16 赤松道子)	ロシアの文書と亡命
第9回	ロシアの文書館3 (11/23 赤松道子)	ロシアの文書館の特徴：ロシア国立文書館など
第10回	トルコの文書館1 (11/30 長谷部圭彦)	大統領府オスマン文書館の沿革と所蔵史料
第11回	トルコの文書館2 (12/07 長谷部圭彦)	オスマン語文書史料を用いた研究の実例
第12回	国文学研究資料館1 (12/14 青木睦)	戦後の史料保存運動と史料保存の原則
第13回	国文学研究資料館2 (12/21 青木睦)	史料のための保存環境と劣化の予防
第14回	国文学研究資料館3 (01/11 青木睦)	アーカイブズ建築・設備と災害対策

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

準備学習：参考書を読むこと。各回のテーマに関わるウェブサイトの公開情報を読んでおくこと。

復習：参考書や関連文献を読み、理解を深めること。各国アーカイブズのウェブサイトを利用して識見を広げること。
本授業の準備・復習時間は、各2時間以上を標準とする。

【テキスト（教科書）】

刊本としてのテキストは使用しない。授業内容をまとめたプリントを配布する。

【参考書】

青山英幸『アーカイブズとアーカイバル・サイエンス』岩田書院、2004 年
安藤正人『記録史科学と現代』吉川弘文館、1998 年
今村文彦『災害記録を未来に活かす』勉誠出版、2019 年
加藤諭『大学アーカイブズの成立と展開』吉川弘文館、2019 年
国文学研究資料館編『アーカイブズの構造認識と編成記述』思文閣出版、2014 年
高埜利彦『近世史研究とアーカイブズ学』青史出版、2018 年
壺阪龍哉『文書と記録』樹村房、2018 年

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 %、期末試験（レポート形式）50 %。なお、特別の事情がなく、授業への参加度が不良と判断された場合には、不合格の評価とする。

【学生の意見等からの気づき】

担当教員間の内容重複、関連する他の授業との内容重複に留意し、受講生との授業内コミュニケーションを密にする。

【その他の重要事項】

「文書館管理研究Ⅰ」（春学期）との継続履修を強く推奨する。

【担当教員の専門分野等】

<現職>

青木 陸・国文学研究資料館准教授
赤松（梶）道子・法政大学大学院兼任講師
長谷部圭彦・東京大学東洋文化研究所特任研究員
山田太造・東京大学史料編纂所准教授
渡辺浩一・国文学研究資料館教授

【Outline (in English)】

Course outline: Students of this class can get practical and basic knowledge and skills as to four points below.(1)What's an archives? (2)What's an archivist? (3) What's the mission of an archives and an archivist? (4)What's the skills of an archivist working for an archives? Student's questions, comments and discussion on the contents of this class are welcomed by professors.

Learning Objectives: The goal of this course is to understand practical and basic knowledge and skills as an archivist.

Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

Grading Criteria/Policies: Your overall grade in the class will be decided based on assignments at each class meeting (50%) and term-end Examination (50%)

CUM500B4

記録史料学研究Ⅰ

小宮山 敏和

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

前近代の記録史料（古文書・古記録）についての理解を深めるため、アーカイブズ学等の理論と方法について学ぶ。

【到達目標】

前近代の幕府や朝廷等の政治組織、村・町・寺社等の組織構造をまず理解することが求められる。その上で、前近代の組織にとって、記録を作成し残すことの意味や記録管理システム等の特質を探究するとともに、アーカイブズ学と前近代の記録史料の関係等について理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義と演習形式で授業を進める。各テーマに沿って講義を行うが、参加者が順番に関連論文について報告し討論を行うことも重視する。よって、参加人数等によっては講義内容の組み替え等を行う場合がある。担当論文、順番等については参加者の人数や属性を考慮しガイダンスの際に決定するが、その後も調整等行う。課題や発表に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。Zoom を用いたオンライン授業を想定しているが、状況により対面授業等に変更する可能性もある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	目的 計画 報告者の調整 etc
第2回	記録史料とアーカイブズ学	古文書学、記録史科学、アーカイブズ学などの整理、日本の前近代文書の特徴等
第3回	前近代の組織とアーカイブズ	前近代の組織の構造や特質等
第4回	記録史料の特性 (1)	中世の武家における記録・文書の管理
第5回	記録史料の特性 (2)	江戸幕府における記録・文書の管理Ⅰ
第6回	記録史料の特性 (3)	江戸幕府における記録・文書の管理Ⅱ
第7回	記録史料の特性 (4)	藩における記録・文書の管理
第8回	記録史料の特性 (5)	中世の朝廷・公家における記録・文書の管理
第9回	記録史料の特性 (6)	朝廷における記録・文書の管理
第10回	記録史料の特性 (7)	公家における記録・文書の管理
第11回	記録史料の特性 (8)	村方における記録・文書の管理
第12回	記録史料の特性 (9)	町方における記録・文書の管理
第13回	記録史料の特性 (10)	寺社その他における記録・文書の管理
第14回	まとめ	ふり返りと総括討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。報告担当者は報告準備を行う。報告担当者以外も報告対象となる論文を精読して不明な点などをまとめておく。

安藤正人『記録史科学と現代——アーカイブズの科学をめざして——』（吉川弘文館、1998 年）は共通の認識を得るための貴重な成果であるので、これをあらかじめ読んでおくこと。

【テキスト（教科書）】

特定のテキストは使用しない。

【参考書】

安藤正人『記録史料学と現代』（吉川弘文館）
 日本歴史学会編『概説古文書学』近世編（吉川弘文館）
 国文学研究資料館編『アーカイブズの科学』（柏書房）。

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 %／研究発表 50 %

【学生の意見等からの気づき】

特になし（本年度授業担当者変更のため）

【その他の重要事項】

本授業担当者は認証アーキビストとしてアーカイブズ機関での実務経験を有しており、アーカイブズ機関における資料の整理や活用に関する実践経験をもつ。このことを活かして、アーカイブズ機関の観点からの情報も織り交ぜながら授業を展開する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本近世史、アーカイブズ学
 〈研究テーマ〉幕藩関係論、幕府制度論等
 〈研究業績〉『譜代大名の創出と幕藩体制』（吉川弘文館、2015 年）、
 「江戸幕府の行政運用における申合の機能」（幕藩研究会編『論集 近世国家と幕府・藩』、岩田書院、2019 年）「農林水産省の文書管理と移管文書の特徴」（『北の丸』44 号、2012 年）等

【Outline (in English)】

This course deals with the basic concepts and principles of premodern Japanese archives. It also enhances the development of student's skill in decipherment of cursive-style writing.

The goals of this course are to understand the premodern organizational structure of shogunate and the imperial court, villages and towns. In addition, we will explore the characteristics of record management systems for pre-modern organizations.

Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

Final grade will be calculated according to the following process report (50%) and in-class contribution(50%).

CUM500B4

記録史料学演習Ⅰ

小宮山 敏和

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

江戸時代の記録史料（古文書・古記録）調査の理論と方法について学ぶ。

【到達目標】

記録史料学研究Ⅰの内容を踏まえ、より深く江戸時代の文書の保存・調査（整理）・管理について実践的に習得することを到達目標とする。実際の記録史料群をいかに構造的に理解し、有効な検索システムを構築するか。そのためには個々の史料を理解し、それを史料群全体に位置づけるという作業が必要となる。このとき史料群を生み出した人ないし組織への理解が必要不可欠となる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

実際の史料群の整理作業を行う実習を基本としつつ、基礎的な知識に関する講義、また参加者による関係論文の報告及び報告をもとにしたディスカッションも平行して行う。参加者の人数や属性を考慮し、授業内容は調整等することがある。課題等に対するフィードバックは授業の中でおこなう。対面授業である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	目的 計画 報告者の調整 etc
第 2 回	記録史料の調査（1）	史料調査論 史料 1
第 3 回	記録史料の調査（2）	史料 2
第 4 回	記録史料の調査（3）	史料 3
第 5 回	記録史料の調査（4）	史料 4
第 6 回	史料群構造の理解（1）	目録論等 史料群 1
第 7 回	史料群構造の理解（2）	史料群 2
第 8 回	史料群構造の理解（3）	史料群 3
第 9 回	記録史料の取扱い（1）	様式論、料紙その他 古文書 1
第 10 回	記録史料の取扱い（2）	古文書 2
第 11 回	記録史料の取扱い（3）	古文書 3
第 12 回	記録史料の取扱い（4）	古文書 4
第 13 回	利用提供	利用閲覧、展示論
第 14 回	まとめ	ふり返りと総括討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。報告担当者は報告準備を行う。報告担当者以外も報告対象となる論文を精読して不明な点などをまとめておく。

安藤正人『記録史料学と現代——アーカイブズの科学をめざして——』（吉川弘文館、1998 年）は共通の認識を得るための貴重な成果であるので、これをあらかじめ読んでおくこと。

【テキスト（教科書）】

文学部史学科所蔵の古文書。

【参考書】

安藤正人『記録史料学と現代』（吉川弘文館）

日本歴史学会編『概説古文書学』近世編(吉川弘文館)
国文学研究資料館編『アーカイブズの科学』(柏書房)
児玉幸多編『くずし字解説辞典』(東京堂出版)
児玉幸多編『くずし字用例辞典』(東京堂出版)

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 %／発表 50 %

【学生の意見等からの気づき】

特になし(本年度授業担当者変更のため)

【その他の重要事項】

本授業担当者は認証アーキビストとしてアーカイブズ機関での実務経験を有しており、アーカイブズ機関における資料の整理や活用に一定の実践経験をもつ。このことを活かして、アーカイブズ機関の観点からの情報も織り交ぜながら授業を展開する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本近世史、アーカイブズ学

〈研究テーマ〉幕藩関係論、幕府制度論等

〈研究業績〉『譜代大名の創出と幕藩体制』(吉川弘文館、2015 年)、『江戸幕府の行政運用における申合の機能』(幕藩研究会編『論集 近世国家と幕府・藩』、岩田書院、2019 年)『農林水産省の文書管理と移管文書の特徴』(『北の丸』44 号、2012 年)等

【Outline (in English)】

This course deals with the basic concepts and principles of investigation such as early modern Japanese archives. It also enhances the development of student's skill in decipherment of cursive-style writing.

The goals of this course are to understand more deeply about the preservation, investigation, and management of documents from the Edo period.

Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

Final grade will be calculated according to the following process report (50%) and in-class contribution(50%).

CUM500B4

記録史料学研究Ⅱ

浅井 良亮

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

近代の記録史料について理解を深めるため、記録管理と史料編纂の歴史を学ぶ。

【到達目標】

記録史料について、その内容情報だけでなく、史料そのものをメタ的に捉えるための知識と技能の習得を目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

オンライン方式による講義を予定している。ただし、受講生からの希望があれば、ハイフレックス方式への切替を検討する。

授業は講義形式で行う。ただし、まとめの回には、質疑応答・ディスカッションを取り交えて授業を進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	本授業の概要
第 2 回	太政官期の記録管理と史料編纂 (1)	太政官の記録管理制度
第 3 回	太政官期の記録管理と史料編纂 (2)	内務省の記録管理制度
第 4 回	太政官期の記録管理と史料編纂 (3)	太政官による史料編纂
第 5 回	太政官期の記録管理と史料編纂 (4)	外務省による史料編纂
第 6 回	太政官期の記録管理と史料編纂 (5)	災害と太政官記録
第 7 回	太政官期の記録管理と史料編纂 (6)	太政官期の記録・史料のあり方
第 8 回	内閣期の記録管理と史料編纂 (1)	内閣の記録管理制度
第 9 回	内閣期の記録管理と史料編纂 (2)	地方行政の記録管理制度
第 10 回	内閣期の記録管理と史料編纂 (3)	帝国大学による史料編纂
第 11 回	内閣期の記録管理と史料編纂 (4)	文部省による史料編纂
第 12 回	内閣期の記録管理と史料編纂 (5)	災害と内閣記録
第 13 回	内閣期の記録管理と史料編纂 (6)	内閣期の記録・史料のあり方
第 14 回	まとめ	質疑応答・ディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

準備（2 時間を標準）：各講義に関連する文献を随時紹介するので、事前にそれらを読んで授業に臨むこと。

復習（2 時間を標準）：授業を通じて得た知見が自身の研究にどのように活かすことができるのか、について整理・確認しておくこと。

【テキスト（教科書）】

特定のテキストは使用しない。

【参考書】

・佐藤雄基編『明治が歴史になったとき』勉誠出版、2020 年
・松沢裕作編『近代日本のヒストリオグラフィー』山川出版社、2015 年

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 % ・ レポート 50 %

【学生の意見等からの気づき】

アナウンスやディスカッション・事後質問などを行うにあたって、学習支援システムの活用を進めることとしたい。

【学生が準備すべき機器他】

オンライン授業に対応できる情報機器を各自準備すること。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

- ・ 日本近世近代史
- ・ 史料学

＜研究テーマ＞

- ・ 近世近代移行期の政治と社会
- ・ 歴史の編纂と叙述

＜関連業績＞

- ・ 「関東大震災と維新史料編纂事務局」（『法政史学』97号、2022年）
- ・ 「金原明善伝記編纂における史料と叙述」（『静岡県地域史研究』10号、2020年）
- ・ 「明治を編む」（『北の丸』50号、2018年）

【Outline (in English)】

Learn the history of record management and historical compilation in Modern Japan through lectures. The goal is to acquire knowledge and skills related to the Archive Materials. Read the references introduced before class. Grades are evaluated by 50% of participation in class and 50% of reports.

CUM500B4

記録史料学演習Ⅱ

浅井 良亮

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

近代の記録史料について理解を深めるため、アーカイブズ学や史料学・書誌学の方法論を学ぶ。

【到達目標】

記録史料学研究Ⅱで学んだ知識を、近代史料の調査研究やアーカイブ実務（史料整理・保存管理等）に応用することのできる実践的能力の習得を目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

オンライン方式による演習を予定している。ただし、受講生からの希望があれば、ハイフレックス方式への切替を検討する。授業は演習形式で行う。発表・質疑応答・ディスカッションを取り交えて授業を進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	本授業の概要
第2回	発表（1）	担当受講生による発表・質疑応答
第3回	講評（1）	教員による講評およびディスカッション
第4回	発表（2）	担当受講生による発表・質疑応答
第5回	講評（2）	教員による講評およびディスカッション
第6回	発表（3）	担当受講生による発表・質疑応答
第7回	講評（3）	教員による講評およびディスカッション
第8回	発表（4）	担当受講生による発表・質疑応答
第9回	講評（4）	教員による講評およびディスカッション
第10回	発表（5）	担当受講生による発表・質疑応答
第11回	講評（5）	教員による講評およびディスカッション
第12回	発表（6）	担当受講生による発表・質疑応答
第13回	講評（6）	教員による講評およびディスカッション
第14回	まとめ	授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

準備（2時間を標準）：各発表に関連する文献を随時紹介するので、事前にそれらを読解・理解して授業に臨むこと。
復習（2時間を標準）：授業を通じて得た知見が自身の研究にどのように活かすことができるのか、について整理・確認しておくこと。

【テキスト（教科書）】

特定のテキストは使用しない。

【参考書】

- ・ 佐藤雄基編『明治が歴史になったとき』 勉誠出版、2020年
- ・ 松沢裕作編『近代日本のヒストリオグラフィ』 山川出版社、2015年

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 % ・ 発表 50 %

【学生の意見等からの気づき】

アナウンスやディスカッション・事後質問などを行うにあたって、学習支援システムの活用を進めることとしたい。

【学生が準備すべき機器他】

オンライン授業に対応できる情報機器を各自準備すること。

【その他の重要事項】

記録史料学研究Ⅱで学んだ知識を基礎として授業を進めるため、同科目と合わせて受講することを推奨する。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

- ・日本近世近代史
- ・史料学

＜研究テーマ＞

- ・近世近代移行期の政治と社会
- ・歴史の編纂と叙述

＜関連業績＞

- ・「関東大震災と維新史料編纂事務局」（『法政史学』97号、2022年）
- ・「金原明善伝記編纂における史料と叙述」（『静岡県地域史研究』10号、2020年）
- ・「明治を編む」（『北の丸』50号、2018年）

【Outline (in English)】

Learn various archival methodologies through presentations and discussions. The goal is to acquire knowledge and skills related to the Archive Materials. Read the references introduced before class. Grades are evaluated by 50% of participation in class and 50% of presentations.

GEO500B5

地形学研究Ⅰ

前杵 英明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

地形・地質学的方法による活動的な地殻変動の解明

【到達目標】

地震、火山噴火、曲隆・曲降など活動的な地球変動のメカニズムについて、地形・地質学的方法によりアプローチした研究論文を読解できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

専門書や研究論文を読み、プレゼンテーションと議論を行う形式を中心とする。課題（質問事項）等を課した場合は学習支援システムにて回答する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	地球規模からみた世界の変動帯
第2回	活動的な地殻変動 (1)	アメリカ西海岸の活構造
第3回	活動的な地殻変動 (2)	造陸運動とプレート内部の活動
第4回	活動的な地殻変動 (3)	活断層評価と災害
第5回	活動的な地殻変動 (4)	褶曲に関連する活断層
第6回	活動的な地殻変動 (5)	活構造と河川の沖積作用
第7回	活動的な地殻変動 (6)	海岸の変動地形
第8回	活動的な地殻変動 (7)	山麓での変動地形
第9回	活動的な地殻変動 (8)	活構造の研究法と地球表層プロセス
第10回	活動的な地殻変動 (9)	古地震研究と活構造
第11回	活動的な地殻変動 (10)	活構造プロセスの測地学的研究
第12回	活動的な地殻変動 (11)	年代測定法
第13回	活動的な地殻変動 (12)	地震災害に関する地質学的研究
第14回	活動的な地殻変動 (13)	火山災害とアセスメント

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
プレゼンテーション準備、レジュメ作成を行う際に、参考書やネットで公開されている情報を幅広く検索し、担当するテーマそのものだけでなく、関連する分野の知識も同時に身に付けることが望ましい。

【テキスト（教科書）】

特に指定しない。

【参考書】

Active Tectonics, National Academy Press, 1986

Tsunamiites, Elsevier, 2008

The Geology of Earthquakes, Oxford University Press, 1997

【成績評価の方法と基準】

プレゼンテーション 50 %、討論 40 %、態度・意欲 10 %

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象科目ではないため該当しない。

【学生が準備すべき機器他】

プロジェクター、パソコン、スクリーン

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

自然地理学、(変動) 地形学、第四紀学

<研究テーマ>

プレート沈み込み帯における地震性地殻変動に関する地形・地質学的研究、新生代氷床変動に関する地形・地質学的研究、環境変化と人間社会に関する自然地理学的研究

<主要研究業績>

前杵英明ほか(2005)：沈み込み帯沿岸の地殻変動を記録する古潮位計としての完新世暖帯石灰岩に関する予察的研究. 地理科学, vol.60-3, pp.136-142.

Maemoku, H. et.al. (1997) : Stratigraphy of the Late Quaternary raised beach deposits in the northern part of Langhovde, Lutzow-Holm Bay, East Antarctica. The Proceedings of NIPR Symposium Antarctic Geoscience, 10, 178-186.

Maemoku, H. et.al. (2012) Geomorphological constraints on the Ghaggar River regime during the Mature Harappan period, in Climates, Landscapes, and Civilizations, Geophys. Monogr. Ser., vol. 198, edited by L. Giosan et al., 97 - 106, AGU, Washington, D. C.

【Outline (in English)】

This course introduces Tectonic geomorphology, Tectonic geology and Tectonic movements to students taking this course. At the end of the course, students are expected to understand academic papers on Earthquakes, Volcanoes, Tectonic movements approaching from geomorphology or geology.

Before/after each class meeting, students will be expected to spend two hours each to understand the course content.

Your overall grade in the class will be decided based on the following

Presentation: 50%, Discussion : 40%, in class contribution: 10%

GEO500B5

地形学研究Ⅱ

前杵 英明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

地形・地質学的方法による活動的な地殻変動の解明

【到達目標】

地震、火山噴火、曲隆・曲降、活断層など活動的な地球変動のメカニズムについて、地形・地質学的方法による新たな研究テーマを設定できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

専門書や研究論文を読み、プレゼンテーションと議論を行う形式を中心とする。課題（質問事項）等を課した場合は学習支援システムにて回答する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	変動地形および地殻変動研究の動向
第2回	活断層研究 (1)	日本の活断層研究 (1)
第3回	活断層研究 (2)	日本の活断層研究 (2)
第4回	活断層研究 (3)	世界の活断層研究 (1)
第5回	活断層研究 (4)	世界の活断層研究 (2)
第6回	活断層研究 (5)	世界の活断層研究 (3)
第7回	津波研究 (1)	津波の海洋学的研究
第8回	津波研究 (2)	津波堆積物研究 (1)
第9回	津波研究 (3)	津波堆積物研究 (2)
第10回	津波研究 (4)	津波巨礫研究
第11回	広域的地殻変動研究 (1)	日本の海成段丘研究
第12回	広域的地殻変動研究 (2)	世界の海成段丘研究
第13回	広域的地殻変動研究 (3)	造山運動研究
第14回	広域的地殻変動研究 (4)	造盆地運動研究

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
プレゼンテーション準備、レジュメ作成を行う際に、参考書やネットで公開されている情報を幅広く検索し、担当するテーマそのものだけでなく、関連する分野の知識も同時に身に付けることが望ましい。

【テキスト（教科書）】

学術雑誌または論文集の研究論文を使用する

【参考書】

Active Tectonics, National Academy Press, 1986

Tsunamiites, Elsevier, 2008

The Geology of Earthquakes, Oxford University Press, 1997

【成績評価の方法と基準】

プレゼンテーション 50 %、討論 40 %、態度・意欲 10 %

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象科目ではないため該当しない。

【学生が準備すべき機器他】

プロジェクター、パソコン、スクリーン

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

自然地理学、(変動) 地形学、第四紀学

＜研究テーマ＞

プレート沈み込み帯における地震性地殻変動に関する地形・地質学的研究、新生代氷床変動に関する地形・地質学的研究、環境変化と人間社会に関する自然地理学的研究

＜主要研究業績＞

前杵英明ほか(2005)：沈み込み帯沿岸の地殻変動を記録する古潮位計としての完新世暖帯石灰岩に関する予察的研究. 地理科学, vol.60-3, pp.136-142.

Maemoku, H. et.al. (1997)：Stratigraphy of the Late Quaternary raised beach deposits in the northern part of Langhovde, Lutzow-Holm Bay, East Antarctica. The Proceedings of NIPR Symposium Antarctic Geoscience, 10, 178-186.

Maemoku, H. et.al. (2012)Geomorphological constraints on the Ghaggar River regime during the Mature Harappan period, in Climates, Landscapes, and Civilizations, Geophys. Monogr. Ser., vol. 198, edited by L. Giosan et al., 97 - 106, AGU, Washington, D. C.

【Outline (in English)】

This course introduces Tectonic geomorphology, Tectonic geology and Tectonic movements to students taking this course. At the end of the course, students are expected to understand academic papers on Earthquakes, Volcanoes, Tectonic movements approaching from geomorphology or geology.

Before/after each class meeting, students will be expected to spend two hours each to understand the course content.

Your overall grade in the class will be decided based on the following

Presentation: 50%、Discussion：40%、in class contribution: 10%

GEO600B5

地形学演習 I

前杵 英明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

地形学や第四紀学に関わる修士論文作成のための研究指導

【到達目標】

修士論文の研究テーマに沿って、既存の研究論文を熟読し、さらなる科学としての課題を抽出する。その上で、受講学生が調査・分析した研究成果を発表し、議論を重ねることによって、修士論文を熟成させることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

研究課題に関連する既存の研究論文の読み込みと、そこから抽出した新たな課題について発表する。また自分の研究テーマに関する調査・分析結果について発表し、参加者全体で議論を行う。課題（質問事項）等を課した場合は学習支援システムにて回答する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス授業	本演習の趣旨の説明
第 2 回	研究テーマの設定 1	受講生の研究テーマの開陳と研究内容への意見交換 1
第 3 回	研究テーマの設定 2	受講生の研究テーマの開陳と研究内容への意見交換 2
第 4 回	研究内容の紹介 1	研究テーマに関連する既存研究論文のプレゼンテーション 1
第 5 回	研究内容の紹介 2	研究テーマに関連する既存研究論文のプレゼンテーション 2
第 6 回	研究内容の紹介 3	研究テーマに関連する既存研究論文のプレゼンテーション 3
第 7 回	研究内容の紹介 4	研究テーマに関連する既存研究論文のプレゼンテーション 4
第 8 回	受講生の研究内容 1	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論 1
第 9 回	受講生の研究内容 2	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論 2
第 10 回	受講生の研究内容 3	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論 3
第 11 回	受講生の研究内容 4	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論 4
第 12 回	修士論文の課題と方向性についての議論と指導 1	受講生の修士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導 1
第 13 回	修士論文の課題と方向性についての議論と指導 2	受講生の修士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導 2
第 14 回	修士論文の課題と方向性についての議論と指導 3	受講生の修士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導 3

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
つねに図書館などで関連する内外の文献に目を通しておくこと。

【テキスト（教科書）】

とくに指定しない。自然地理学に関連ある内外の文献を使用する。

【参考書】

「日本の地形1-7」東京大学出版会

「建設技術者のための地形読図入門1-4」古今書院

【成績評価の方法と基準】

プレゼンテーションの内容(50%)や議論への積極的な参加など(50%)を評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【学生が準備すべき機器他】

PowerPoint

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

自然地理学、(変動)地形学、第四紀学

<研究テーマ>

プレート沈み込み帯における地震性地殻変動に関する地形・地質学的研究、新生代氷床変動に関する地形・地質学的研究、環境変化と人間社会に関する自然地理学的研究

<主要研究業績>

前杵英明ほか(2005)：沈み込み帯沿岸の地殻変動を記録する古潮位計としての完新世暖温帯石灰岩に関する予察的研究。地理科学, vol.60-3, pp.136-142.

Maemoku, H. et.al. (1997)：Stratigraphy of the Late Quaternary raised beach deposits in the northern part of Langhovde, Lutzow-Holm Bay, East Antarctica. The Proceedings of NIPR Symposium Antarctic Geoscience, 10, 178-186.

Maemoku, H. et.al. (2012)Geomorphological constraints on the Ghaggar River regime during the Mature Harappan period, in Climates, Landscapes, and Civilizations, Geophys. Monogr. Ser., vol. 198, edited by L. Giosan et al., 97 - 106, AGU, Washington, D. C.

【Outline (in English)】

Research instruction for master thesis on Geomorphology or Quaternary Science

At the end of the course, students are expected to understand academic papers on Tectonic geomorphology or geology and complete master thesis on the discipline.

Before/after each class meeting, students will be expected to spend two hours each to understand the course content.

Your overall grade in the class will be decided based on the following

Presentation: 50%, in class contribution: 50%

GEO600B5

地形学演習Ⅱ

前杵 英明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

地形学や第四紀学に関わる修士論文作成のための研究指導

【到達目標】

修士論文の研究テーマに沿って、既存の研究論文を熟読し、さらなる科学としての課題を抽出する。その上で、受講学生が調査・分析した研究成果を発表し、議論を重ねることによって、修士論文を熟成・完成させることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

研究課題に関連する既存の研究論文の読み込みと、そこから抽出した新たな課題について発表する。また自分の研究テーマに関する調査・分析結果について発表し、参加者全体で議論を行う。課題（質問事項）等を課した場合は学習支援システムにて回答する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス授業	本演習の趣旨の説明
第2回	受講生の研究内容1	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論1
第3回	受講生の研究内容2	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論2
第4回	受講生の研究内容3	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論3
第5回	受講生の研究内容4	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論4
第6回	受講生の研究内容5	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論5
第7回	受講生の研究内容6	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論6
第8回	受講生の研究内容7	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論7
第9回	受講生の研究内容8	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論8
第10回	受講生の研究内容9	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論9
第11回	受講生の研究内容10	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論10
第12回	受講生の研究内容11	受講生の修士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導11
第13回	受講生の研究内容12	受講生の修士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導12

第14回 受講生の研究内容13 受講生の修士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導13

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
つねに図書館などで関連する内外の文献に目を通しておくこと。

【テキスト（教科書）】

とくに指定しない。自然地理学に関連ある内外の文献を使用する。

【参考書】

「日本の地形1-7」東京大学出版会
「建設技術者のための地形読図入門1-4」古今書院

【成績評価の方法と基準】

プレゼンテーションの内容(50%)や議論への積極的な参加など(50%)を評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

PowerPoint

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

自然地理学、(変動)地形学、第四紀学

＜研究テーマ＞

プレート沈み込み帯における地震性地殻変動に関する地形・地質学的研究、新生代氷床変動に関する地形・地質学的研究、環境変化と人間社会に関する自然地理学的研究

＜主要研究業績＞

前空英明ほか(2005)：沈み込み帯沿岸の地殻変動を記録する古潮位計としての完新世暖温帯石灰岩に関する予察的研究。地理科学, vol.60-3, pp.136-142.

Maemoku, H. et.al. (1997)：Stratigraphy of the Late Quaternary raised beach deposits in the northern part of Langhovde, Lutzow-Holm Bay, East Antarctica. The Proceedings of NIPR Symposium Antarctic Geoscience, 10, 178-186.

Maemoku, H. et.al. (2012)Geomorphological constraints on the Ghaggar River regime during the Mature Harappan period, in Climates, Landscapes, and Civilizations, Geophys. Monogr. Ser., vol. 198, edited by L. Giosan et al., 97 - 106, AGU, Washington, D. C.

【Outline (in English)】

Research instruction for master thesis on Geomorphology or Quaternary Science

At the end of the course, students are expected to understand academic papers on Tectonic geomorphology or geology and complete master thesis on the discipline.

Before/after each class meeting, students will be expected to spend two hours each to understand the course content.

Your overall grade in the class will be decided based on the following

Presentation: 50%, in class contribution: 50%

GEO500B5

気候学研究 I

山口 隆子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

気候学・生気象学を研究していくうえで必要となる環境気候学を学びます。

【到達目標】

環境と気候のとらえかたを学び、気候学に関する研究テーマを設定できるようになります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

専門書や研究論文を読み、プレゼンテーションと議論を行う形式を中心とします。

作成したレジュメに対してのフィードバックは、講義内で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	受講生との講義内容に関する意見交換
第2回	気候認識・気候概念の変遷と確立①	古代における「気候」概念
第3回	気候認識・気候概念の変遷と確立②	中世における「気候」概念
第4回	気候認識・気候概念の変遷と確立③	近世における気候学の発展
第5回	気候認識・気候概念の変遷と確立④	19世紀の気候学
第6回	気候認識・気候概念の変遷と確立⑤	20世紀前半の気候学・風土論
第7回	気候認識・気候概念の変遷と確立⑥	20世紀後半の気候学の展開
第8回	気候学発達の背景①	日本国内
第9回	気候学発達の背景②	国際共同研究・国際会議・国際協力
第10回	方法別発達史①	統計気候学
第11回	方法別発達史②	気候区分・気候分類・気候誌
第12回	方法別発達史③	総観気候学と天候気候学
第13回	方法別発達史④	物理気候・熱収支・水収支の気候学
第14回	春学期のまとめ	春学期の振り返りを行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
プレゼンテーション準備、レジュメ作成に際し、周辺分野についても幅広く取り扱うようにすること。

【テキスト（教科書）】

吉野正敏(2007)：『気候学の歴史』. 古今書院, 437p.

【参考書】

講義内でその都度紹介する。

【成績評価の方法と基準】

到達目標欄に記載した各目的の達成度を評価基準とし、次の要素分で評価を行う。

発表：50%、討論：50%

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン

【その他の重要事項】

地方公務員（技術職）として、環境施策の立案・実施の経験を活かし、気候変動等の取組について講義していきます。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

自然地理学・気候学・生気象学

＜研究テーマ＞

ヒートアイランド現象と都市緑化（公園緑地・屋上緑化・壁面緑化）を中心とした緩和対策、生気象学的観点からアプローチする地球温暖化影響

＜主要研究業績＞

山口隆子（2009）：『ヒートアイランドと都市緑化』，成山堂書店，pp. 1 - 128.

山口隆子（2013）：ヒートアイランド対策．日本生気象学会雑誌，Vol.50,71-75.

山口隆子（2018）：日本における気象観測—東京都檜原村を事例として．日本生気象学会雑誌，Vol.54, 101 - 109.

【Outline (in English)】

Learn the environmental climatology that is necessary for studying climatology and biometeorology. The goals of this course are to understand the environment and climate, and will be able to develop a research theme related to climatology. The standard preparation and review time for this class is 2 hours each. When preparing presentations and resumes, be sure to cover a wide range of peripheral fields. Final grade will be calculated according to the following process presentation(50%), and discussion(50%).

GEO500B5

気候学研究Ⅱ

山口 隆子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

気候学・生気象学を研究していくうえで必要となる環境気候学を学びます。

【到達目標】

人間環境と気候及び気候利用について学び、気候学に関する研究テーマを設定できるようになります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

専門書や研究論文を読み、プレゼンテーションと議論を行う形式を中心とします。作成したレジュメに対してのフィードバックは、講義内で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	講義内容に関する意見交換
第2回	対象別発達史①	気候変動・古気候
第3回	対象別発達史②	大気大循環
第4回	対象別発達史③	都市気候とヒートアイランド・大気汚染
第5回	対象別発達史④	山地の気候
第6回	対象別発達史⑤	小気候・微気候
第7回	人間活動・動植物と気候①	産業と気候
第8回	人間活動・動植物と気候②	気候資源・気候災害
第9回	人間活動・動植物と気候③	動植物気候
第10回	人間活動・動植物と気候④	気候と環境
第11回	人間活動・動植物と気候⑤	医学・衛生、環境と気候
第12回	人間活動・動植物と気候⑥	建築物と気候
第13回	秋学期のまとめ	秋学期の振り返りを行う
第14回	まとめ	気候学の歴史を踏まえて、自分の研究の位置づけを確認する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。プレゼンテーション準備、レジュメ作成に際し、周辺分野についても幅広く取り扱うようにすること。

【テキスト（教科書）】

吉野正敏（2007）：『気候学の歴史』．古今書院,437p.

【参考書】

講義内でその都度紹介する。

【成績評価の方法と基準】

到達目標欄に記載した各目的の達成度を評価基準とし、次の要素配分で評価を行う。

発表：50 %、討論：50 %

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン

【その他の重要事項】

地方公務員（技術職）として、環境施策の立案・実施の経験を活かし、気候変動等の取組について講義していきます。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

自然地理学・気候学・生気象学

＜研究テーマ＞

ヒートアイランド現象と都市緑化（公園緑地・屋上緑化・壁面緑化）を中心とした緩和対策、生気象学的観点からアプローチする地球温暖化影響

＜主要研究業績＞

山口隆子（2009）：『ヒートアイランドと都市緑化』，成山堂書店，pp. 1 - 128.

山口隆子（2013）：ヒートアイランド対策．日本生気象学会雑誌，Vol.50,71-75.

山口隆子（2018）：日本における気象観測—東京都檜原村を事例として．日本生気象学会雑誌，Vol.54, 101 - 109.

【Outline (in English)】

Learn the environmental climatology that is necessary for studying climatology and biometeorology. The goals of this course are to understand the environment and climate, and will be able to develop a research theme related to climatology. The standard preparation and review time for this class is 2 hours each. When preparing presentations and resumes, be sure to cover a wide range of peripheral fields. Final grade will be calculated according to the following process presentation(50%), and discussion(50%).

GEO600B5

気候学演習 I

山口 隆子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

気候学に関わる修士論文作成のための研究指導。

【到達目標】

研究テーマ設定、既存研究論文紹介、研究手法について発表し、議論を重ねることによって、修士論文を仕上げていきます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

各自の研究テーマに関する手法・解析結果について発表し、参加者全体で議論を行います。提出されたレジュメに対し、授業内に講評、フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	本演習の進め方について
第 2 回	研究テーマの設定（1）	研究テーマに関する意見交換（1）研究目的
第 3 回	研究テーマの設定（2）	研究テーマに関する意見交換（2）研究計画
第 4 回	研究内容の紹介（1）	研究テーマにかかわる既存研究論文の紹介（1）気候学（国内）
第 5 回	研究内容の紹介（2）	研究テーマにかかわる既存研究論文の紹介（2）気象学（国内）
第 6 回	研究内容の紹介（3）	研究テーマにかかわる既存研究論文の紹介（3）気候学（海外）
第 7 回	研究内容の紹介（4）	研究テーマにかかわる既存研究論文の紹介（4）気象学（海外）
第 8 回	研究手法の検討（1）	研究手法の報告、議論（1）対象地域
第 9 回	研究手法の検討（2）	研究手法の報告、議論（2）対象期間
第 10 回	研究手法の検討（3）	研究手法の報告、議論（3）対象データ
第 11 回	研究手法の検討（4）	研究手法の報告、議論（4）解析手法
第 12 回	研究の方向性（1）	研究の方向性に関する議論
第 13 回	研究の方向性（2）	研究の方向性に関する指導
第 14 回	まとめ	修士論文の中間発表及び今後の課題

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。研究テーマに関連する内外の文献に目を通しておくこと。

【テキスト（教科書）】

特に指定しない。

【参考書】

泉岳樹・松山洋（2017）：『卒論・修論のための自然地理学フィールド調査』，古今書院，120 p.

【成績評価の方法と基準】

到達目標欄に記載した各目的の達成度を評価基準とし、次の要素配分で評価を行う。発表：50 %、討論：50 %

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン

【その他の重要事項】

地方公務員（技術職）として、環境施策の立案・実施の経験を活かし、自然環境全般の実践的な課題への取り組み方を指導していきます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

自然地理学・気候学・生気象学

<研究テーマ>

ヒートアイランド現象と都市緑化（公園緑地・屋上緑化・壁面緑化）を中心とした緩和対策、生気象学的観点からアプローチする地球温暖化影響

<主要研究業績>

山口隆子（2009）：『ヒートアイランドと都市緑化』，成山堂書店，pp. 1 - 128.

山口隆子（2013）：ヒートアイランド対策，日本生気象学会雑誌，Vol.50,71-75.

山口隆子（2018）：日本における気象観測—東京都檜原村を事例として，日本生気象学会雑誌，Vol.54, 101 - 109.

【Outline (in English)】

Research guidance for preparing master's thesis related to climatology. Students will complete their master's thesis by setting a research theme, introducing existing research papers, presenting and discussing their research methods. The standard preparation and review time for this class is 2 hours each. Students are expected to read through domestic and foreign literature related to their research topics. Final grade will be calculated according to the following process presentation(50%), and discussion(50%).

GEO600B5

気候学演習Ⅱ

山口 隆子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

気候学に関わる修士論文作成のための研究指導。

【到達目標】

観測・解析した研究成果を発表し、議論を重ねることによって、修士論文を仕上げていきます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

各自の研究テーマに関する手法・解析結果について発表し、参加者全体で議論を行います。提出されたレジュメに対し、講義内で講評、フィードバックを行います。対面での講義が実施できない場合、ZOOMによるオンライン授業になります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	本演習の進め方
第2回	研究内容の報告（1）	研究の進捗状況報告（研究目的）
第3回	研究内容の報告（2）	研究の進捗状況議論（研究目的）
第4回	研究内容の報告（3）	研究の進捗状況報告（研究手法）
第5回	研究内容の報告（4）	研究の進捗状況議論（研究手法）
第6回	研究内容の報告（5）	研究の進捗状況報告（対象地域）
第7回	研究内容の報告（6）	研究の進捗状況議論（対象地域）
第8回	研究内容の報告（7）	研究の進捗状況報告（対象期間）
第9回	研究内容の報告（8）	研究の進捗状況議論（対象期間）
第10回	研究内容の報告（9）	研究の進捗状況報告（対象データ）
第11回	研究内容の報告（10）	研究の進捗状況議論（対象データ）
第12回	研究内容の報告（11）	研究の進捗状況報告（解析結果）
第13回	研究内容の報告（12）	研究の進捗状況議論（解析結果）
第14回	まとめ	修士論文の最終発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
研究テーマに関連する内外の文献に目を通しておくこと。

【テキスト（教科書）】

特に指定しない。

【参考書】

泉岳樹・松山洋（2017）：『卒論・修論のための自然地理学フィールド調査』，古今書院，120 p.

【成績評価の方法と基準】

到達目標欄に記載した各目的の達成度を評価基準とし、次の要素配分で評価を行う。発表：50 %、討論：50 %

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン

【その他の重要事項】

地方公務員（技術職）として、環境施策の立案・実施の経験を活かし、自然環境全般の実践的な課題への取り組み方を指導していきます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

自然地理学・気候学・生気象学

<研究テーマ>

ヒートアイランド現象と都市緑化（公園緑地・屋上緑化・壁面緑化）を中心とした緩和対策、生気象学的観点からアプローチする地球温暖化影響

<主要研究業績>

山口隆子（2009）：『ヒートアイランドと都市緑化』，成山堂書店，pp. 1 - 128.

山口隆子（2013）：ヒートアイランド対策．日本生気象学会雑誌，Vol.50,71-75.

山口隆子（2018）：日本における気象観測—東京都檜原村を事例として．日本生気象学会雑誌，Vol.54, 101 - 109.

【Outline (in English)】

Research guidance for preparing master's thesis related to climatology. Students will complete their master's thesis by setting a research theme, introducing existing research papers, presenting and discussing their research methods. The standard preparation and review time for this class is 2 hours each. Students are expected to read through domestic and foreign literature related to their research topics. Final grade will be calculated according to the following process presentation(50%), and discussion(50%).

GEO500B5

水文学研究 I

小寺 浩二

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

・授業概要：水循環の定量的評価と水資源の持続可能な利用と GIS を用いた地域空間解析

・授業の目的・意義：水文学の根幹を成す水循環を定量的に評価する手法について理解し，水資源の持続可能な利用への応用を学ぶ。また、水文学以外の分野を専門とする学生を中心に、GIS を用いた地域空間解析の手法の基礎について学ぶ。

【到達目標】

環境および資源として人間生活と密接な関わりを持つ陸水について，存在量と循環速度を評価することができるようにする。

異なる時空間尺度における水温・水質の分布特性について，水循環の過程におけるあり方を理解することができるようにする。

水文学・陸水学分野において修士論文を書く学生に対しては、テーマ設定から研究・調査方法・分析手法・解析手法・論文執筆について基本的な能力を養成する。

他の分野を主とする学生に対しても、GIS を用いた地域空間情報解析を行った上での基本的な研究能力の育成を図る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講生の研究課題に結びつくテーマを中心に，論文講読，受講生による発表，討議を中心に進めることにより，受講生自身の研究の向上に資するよう心がける。

毎回の授業では、出席簿に授業の要約や質問等を記述して提出させ、次回授業でその内容についてコメントする。

また、小レポートと最終レポートを提出させ、それぞれ評価した上で、模範解答を基に、理想的なレポートについて解説する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	1. 地球上の水の量と循環 2. 地域空間情報解析とは	1. 資源としての水の再検証 2. 地域空間情報解析の基礎概念の理解
第 2 回	1. 水収支要素の算出手法 2. 様々な地域空間情報	1. 水の地域配分の決定事項 2. 地域空間情報にどのようなものがあるか理解する
第 3 回	1. 水収支の変化と要因 2. ラスタデータとベクタデータ	1. 降水量と蒸発散量の評価 2. 様々なタイプのデータについて理解する
第 4 回	1. 降雨－流出過程 2. 国土数値情報	1. 降雨に伴う河川の応答 2. 様々な国土数値情報の特性と活用法について理解する
第 5 回	1. 直接流出と基底流出 2. 統計 GIS	1. ハイドログラフの解析 2. 統計 GIS のデータの特性と活用法について理解する
第 6 回	1. 地下水と河川水の交流 2. 一般図	1. 流域における水の挙動 2. 一般図として活用できる電子地図について理解する
第 7 回	1. 閉塞湖の地下水漏出 2. 主題図	1. 湧水涵養源としての湖水 2. 主題図の基本について理解する

第 8 回	1. 課題発表と討論 2. ジオリファレンス	1. プレゼンテーション実施 2. ジオリファレンスの基礎について学ぶ
第 9 回	1. 陸水の水温特性 2. 土地利用変化解析	1. 水の熱的特性と水温構造 2. 土地利用変化解析の基礎について学ぶ
第 10 回	1. 水質形成の自然的要因 2. 国勢調査データ解析	1. 溶存成分の起源・由来 2. 国勢調査データ解析の基礎を学ぶ
第 11 回	1. 水質形成の人為的要因 2. バッファリング	1. 水質と人間活動 2. バッファリングの基礎について学ぶ
第 12 回	1. 水質の変動機構 2. ネットワーク解析	1. 水域の富栄養化 2. ネットワーク解析の基礎について学ぶ
第 13 回	1. 水質汚染の解明手法 2. 総合実習①	1. 水質の時系列変化 2. 個別テーマでの総合実習
第 14 回	1. 水循環の定量的評価 2. 総合実習②	1. 滞留時間の算定 2. 個別テーマでの総合実習

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
各回のテーマと内容に則した論文を事前に検索し、研究対象地域の水文特性、調査研究手法、および結果と考察に関する要約を簡潔に文書化する。論文講読による準備学習の成果を授業中の質疑応答と討議の際の重要な素材とするので、事前の学習活動と主体的に取り組むこと。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用せず、関連する文献を教材として授業中に配布する。

【参考書】

森 和紀・佐藤芳徳（2015）：「図説 日本の湖」，朝倉書店。
市川正巳〔編〕（1990）：「水文学－総観地理学講座 8－」，朝倉書店。

【成績評価の方法と基準】

発表 30 %，討議参加 20 %，レポート 50 %。

【学生の意見等からの気づき】

受講生の研究分野、興味の対象に応じ、毎回の質疑応答の結果を見ながら、適宜講義内容を修正する。

【学生が準備すべき機器他】

基本的に、GIS を用いた解析が前提になっているので、必要なハードウェアとソフトウェアの準備が必要。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞水文学・陸水学・自然地理学
＜研究テーマ＞人間活動に伴う水文環境の変化

【Outline (in English)】

The basic ability is trained about a research work, investigation method, an analytical method, an analysis method and thesis writing from theme setting to the student who writes a master thesis in hydrology and the land water science field.

The case which is the hydrology field to the student who makes the other fields the center, too, and, I plan for upbringing of basic research capability.

In addition, students who specialize in fields other than hydrology will learn the basics of regional spatial analysis using GIS.

To be able to evaluate the abundance and circulation speed of inland water, which is closely related to human life as an environment and resources.

To be able to understand the process of water circulation regarding the distribution characteristics of water temperature and water quality on different spatiotemporal scales.

For students who write master's thesis in the fields of hydrology and limnology, we will develop basic abilities in research, research method, analysis method, analysis method, and dissertation writing from theme setting.

For students mainly in other fields, we will develop basic research ability after performing regional spatial information analysis using GIS.

We will try to contribute to the improvement of the students' own research by focusing on the themes related to the students' research themes, reading the dissertation, making presentations by the students, and discussing.

In each lesson, write a summary of the lesson, questions, etc. in the attendance book and submit it, and comment on the contents in the next lesson.

In addition, we will ask you to submit a small report and a final report, evaluate each, and explain the ideal report based on the model answer.

GEO500B5

水文学研究Ⅱ

小寺 浩二

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

・授業概要：水環境の保全と水資源の統合管理・GISを用いた地域空間情報解析
 ・授業の目的・意義：水環境保全の解決手法を理解し、今日的課題としての水資源の統合管理について学ぶ。また、水文学を主専攻としない学生は、GISを用いた地域空間情報解析の応用について主に学ぶ。

【到達目標】

・陸水の理化学的特性とその変動機構、水文環境と気候変動との因果関係について評価することができる。
 ・水圏・大気圏・岩石圏の複合領域において存在する地球上の水のあり方、流域単位の水管理について理解することができる。
 ・様々な地域空間情報に関して、GISを用いた解析とその結果を用いた主題図などの作成ができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講生の研究課題に結びつくテーマを可能な限り取り上げることにより、水をキーワードとする自然地理学の研究法を議論し、受講生自身の研究の向上に資するよう心がける。論文講読、受講生による発表、および全員での討議を中心に進める。水文学以外を主専攻とする学生に関しても、専門に応じて同様に授業を進める。

毎回の授業では、出席簿に授業の要約や質問等を記述して提出させ、次回授業でその内容についてコメントする。

また、小レポートと最終レポートを提出させ、それぞれ評価した上で、模範解答を基に、理想的なレポートについて解説する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	1. 水温による水の追跡 2. 地域空間情報解析の応用	1. 温度が語る水の履歴 2. 地域空間情報解析の応用について学ぶ
第2回	1. 放射性同位体の応用 2. 様々な地域空間情報	1. トリチウム 2. 国内外の様々な地域空間情報について
第3回	1. 安定同位体の応用 2. 国土数値情報の活用	1. 酸素 18, デューテリウム 2. 国土数値情報を活用する応用面について学ぶ
第4回	1. 気候変動と水賦存量 2. 統計 GIS の活用	1. 水温上昇が与える影響 2. 統計 GIS データの活用に関する応用面について学ぶ
第5回	1. 地球温暖化と水環境 2. 投影法の変更	1. 貧酸素層の形成 2. 目的に応じた投影法の変更について学ぶ
第6回	1. 都市の水文環境 2. 測地系の変更	1. 地下水環境の変化 2. 測地系の変更について学ぶ
第7回	1. 水資源の持続可能性 2. ラスタデータの幾何補正①	1. 水資源の開発と適正利用 2. 様々なラスタデータの幾何補正について学ぶ①
第8回	1. 課題発表と討議 2. ラスタデータの幾何補正②	1. プレゼンテーション実施 2. 様々なラスタデータの幾何補正について学ぶ②

第9回	1. 親水環境の創造 2. 複数レイヤ解析	1. 親水環境の創造 2. 複数のレイヤを用いた地域空間情報解析について学ぶ
第10回	1. 総合治水と流域管理 2. 複合解析①	1. 治水と治山 2. 複数の解析を組み合わせた地域空間情報解析について学ぶ①
第11回	1. 日本の水利用と課題 2. 複合解析②	1. 地下水の人工涵養 2. 複数の解析を組み合わせた地域空間情報解析について学ぶ②
第12回	1. 国際社会の水資源問題 2. 総合実習①	1. 途上国の水資源と水環境 2. 具体的なテーマに対して総合実習を行う①
第13回	1. 水文環境の保全 2. 総合実習①	1. 「名水」の提唱と保存 2. 具体的なテーマに対する総合実習の結果を発表する
第14回	1. 風土としての水 2. まとめ	1. 自然地理学からみた水 2. 総合実習の結果などについて講評する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

各回のテーマと内容に則した論文を事前に検索し、研究対象地域の水文特性、調査研究手法、および結果と考察に関する要約を簡潔に文書化する。論文講読による準備学習の成果を授業中の質疑応答と討議の際の重要な素材とするので、事前の学習活動と主体的に取り組むこと。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用せず、関連する文献を教材として授業中に配布する。

【参考書】

新井 正（2004）：「地域分析のための熱・水収支水文学」、古今書院。

山本莊毅・高橋 裕（1988）：「図説 水文学－水文学講座 2－」、共立出版。

【成績評価の方法と基準】

総合的に判断する。

発表 30 %，討議参加 20 %，レポート 50 %。

【学生の意見等からの気づき】

受講生の研究分野、興味の対象に応じ、毎回の講義に対する学生の反応を基に、修正を加えながら授業を進める。

【学生が準備すべき機器他】

基本的に、GISを用いた地域空間情報解析を中心とするので、ハードウェアとソフトウェアの事前準備が必要である。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞水文学・陸水学・自然地理学

＜研究テーマ＞人間活動に伴う水文環境の変

【Outline (in English)】

The basic ability is trained about a research work, investigation method, an analytical method, an analysis method and thesis writing from theme setting to the student who writes a master thesis in hydrology and the land water science field.

The case which is the hydrology field to the student who makes the other fields the center, too, and, I plan for upbringing of basic research capability.

Students who do not major in hydrology mainly learn about the application of regional spatial information analysis using GIS.

・ It is possible to evaluate the physicochemical characteristics of inland water and its fluctuation mechanism, and the causal relationship between the hydrological environment and climate change.

・ Understand the nature of water on the earth that exists in the complex area of the hydrosphere, atmosphere, and lithosphere, and water management in each basin.

・ For various regional spatial information, it is possible to analyze using GIS and create thematic maps using the results.

By picking up themes related to the students' research themes as much as possible, we will discuss the research methods of physical geography with water as the keyword and try to contribute to the improvement of the students' own research. Focus on reading thesis, making presentations by students, and discussing with all. For students whose majors are other than hydrology, classes will be conducted in the same way according to their specialty.

In each lesson, write a summary of the lesson, questions, etc. in the attendance book and submit it, and comment on the contents in the next lesson.

In addition, we will ask you to submit a small report and a final report, evaluate each, and explain the ideal report based on the model answer.

GEO600B5

水文学演習 I

小寺 浩二

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

水文学の根幹を成す水循環を定量的に評価する手法について理解し、水資源の持続可能な利用への応用を学ぶ。

環境および資源として人間生活と密接な関わりを持つ陸水について、存在量と循環速度を評価することができるようにする。異なる時空間尺度における水温・水質の分布特性について、水循環の過程におけるあり方を理解することができるようにする。

水文学・陸水学分野において修士論文を書く学生に対しては、テーマ設定から研究・調査方法・分析手法・解析手法・論文執筆について基本的な能力を養成する。他の分野を主とする学生に対しても、水文学分野の事例をもとに、基本的な研究能力の育成を図る。

【到達目標】

受講生は、研究課題に結びつくテーマを中心に、現地調査方法、調査結果の分析・解析方法、まとめ方などについて、発表、討議を中心に進め、研究結果を論文としてまとめる基礎的能力の育成を図る。

同時に、GISを用いて時空間解析を行い、様々な主題図として提示する能力も身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

初年時の学生は、卒論について発表し、受講生全員で議論しながら、修論への展開について指針を示す。2年次以降の学生は修論に関わる調査結果を発表し、主にデータ解析について受講生全員で議論する。

毎回の授業では、出席簿に授業の要約や質問等を記述して提出させ、次回授業でその内容についてコメントする。

また、小レポートと最終レポートを提出させ、それぞれ評価した上で、模範解答を基に、理想的なレポートについて解説する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	卒論結果・修論構想発表①	テーマ・キーワード・研究目的について
第2回	卒論結果・修論構想発表②	研究方法・地域概略について
第3回	卒論結果・修論構想発表③	結果・考察について
第4回	卒論結果・修論構想発表④	まとめ・文献・要旨について
第5回	文献検索法	国内外の文献について
第6回	研究法・調査法	研究理論と現地調査方法
第7回	水質分析法①	一般水質
第8回	水質分析法②	安定同位体・環境同位体
第9回	データ解析法①	一般解析（相関・重回帰など）
第10回	データ解析法②	GIS解析（小流域原単位法・SWATモデルなど）
第11回	データ解析法③	様々な解析法（クラスター・主成分など）
第12回	主題図作成法①	水文誌
第13回	主題図作成法②	統計地図・水質分布図
第14回	まとめ	総合的な考察

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

各回のテーマと内容に則し、ほぼ毎回、受講生の研究テーマに沿った発表を求めるので、事前に準備して望むこと。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用せず、関連する文献を指示する。

【参考書】

森 和紀・佐藤芳徳（2015）：「図説 日本の湖」，朝倉書店。
市川正巳〔編〕（1990）：「水文学－総観地理学講座 8－」，朝倉書店。

【成績評価の方法と基準】

授業内での発表、討議を踏まえて、提出論文をもとに、総合的に評価する。

発表 30 %，討議参加 20 %，レポート 50 %。

【学生の意見等からの気づき】

毎回の講義に対する学生の反応をもとに適宜修正しながら授業を進める。

【学生が準備すべき機器他】

毎回、プレゼンテーションが必要であるため、必ずノートパソコンを用意すること。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞自然地理学・水文学・陸水学

＜研究テーマ＞

- 1) 水循環に伴う物質循環
- 2) 人間活動に伴う水環境変化と保全
- 3) GIS を用いた流域水・物質循環解析と環境マネジメント

【Outline (in English)】

A member of a class plans for upbringing of the basic ability to gather a research result as a thesis by an analysis of field survey method and survey result and the thing from which an announcement by a member of a class and discussion are advanced to the center about an analysis method and how to gather focusing on the theme related to a research task of a member of a class.

Students will focus on presentations and discussions on field survey methods, analysis / analysis methods of survey results, and summarization methods, focusing on themes related to research themes, and develop basic abilities to summarize research results as a dissertation. Plan.

At the same time, acquire the ability to perform spatio-temporal analysis using GIS and present it as various thematic maps.

Students in the first year will present their graduation thesis, and while discussing with all the students, give guidelines on the development of the master's thesis. Students from the second year onward will announce the survey results related to the master's thesis, and all the students will mainly discuss data analysis.

In each lesson, write a summary of the lesson, questions, etc. in the attendance book and submit it, and comment on the contents in the next lesson.

In addition, we will ask you to submit a small report and a final report, evaluate each, and explain the ideal report based on the model answer.

GEO600B5

水文学演習Ⅱ

小寺 浩二

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

水環境保全の解決手法を理解し、今日的課題としての水資源の統合管理について学ぶ。

陸水の理化学的特性とその変動機構、水文環境と気候変動との因果関係について評価することができるようにする。水圏・大気圏・岩石圏の複合領域において存在する地球上の水のあり方、流域単位の水管理についても理解することができるようにする。

受講生が、それぞれのテーマにしたがって、実際に論文が執筆できる能力の育成を図る。

【到達目標】

受講生は、研究課題に結びつくテーマを可能な限り取り上げることにより、水をキーワードとする自然地理学の研究法を議論し、受講生自身の研究の向上に資するよう心がける。

また、GIS を用いて時空間解析を行い、様々な主題図として示す能力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

初年次の学生は、「水文学演習Ⅰ」の結果をもとに修論の構想を発表し、予備調査の結果について報告する。2 年次以降の学生は、仮の論文を提出し発表して、受講生全員で内容の吟味を行う。

毎回の授業では、出席簿に授業の要約や質問等を記述して提出させ、次回授業でその内容についてコメントする。

また、小レポートと最終レポートを提出させ、それぞれ評価した上で、模範解答を基に、理想的なレポートについて解説する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	研究の構成	先行研究・目的・研究法など
第 2 回	調査計画	対象地域選定・観測頻度など
第 3 回	現地調査法①	利用機材・設置方法など
第 4 回	現地調査法②	現地との連携・許可申請など
第 5 回	論文の構成①	形式について
第 6 回	論文の構成②	図表の配置について
第 7 回	論文の構成③	文献・要旨など
第 8 回	論文の推敲①	文章の長さ
第 9 回	論文の推敲②	文章表現
第 10 回	論文の推敲③	文章のバランス
第 11 回	投稿先選定	学会誌毎の特徴
第 12 回	編集委員とのやりとり	投稿規定など
第 13 回	査読者とのやりとり	修正要求への返答法
第 14 回	まとめ	実際に論文を完成させ、投稿

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

各自の具体的なテーマに応じて、実際に論文を作成し、学会誌に投稿する段階まで指導するので、事前に調査結果などを精査し、解析しておくこと。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用せず、関連する文献を教材として利用する。

【参考書】

新井 正（2004）：「地域分析のための熱・水収支水文学」，古今書院。

山本莊毅・高橋 裕（1988）：「図説 水文学－水文学講座 2－」，共立出版。

【成績評価の方法と基準】

総合的に判断する。

発表 30 %、討議参加 20 %、レポート 50 %。

【学生の意見等からの気づき】

毎回の講義に対する学生の反応を基に、修正を加えながら授業を進める。

【学生が準備すべき機器他】

毎回、必ずプレゼンテーションが必要なので、ノートパソコンを持参すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>自然地理学・水文学・陸水学

<研究テーマ>

- 1) 水循環に伴う物質循環
- 2) 人間活動に伴う水環境変化と保全
- 3) GIS を用いた流域水・物質循環解析と環境マネジメント

【Outline (in English)】

Solution methodology of water environment protection is understood and it's learned about integrated management of water resources as a present-day problem.

I make sure that it'll be possible to estimate about the physics and chemistry-like special quality of the land water, the fluctuation organization and causality with hydrological environment and variation in climate. I make sure that it'll be also possible to understand about water management of the state of the water and the basin unit on the earth which exists in compound territory in hydrosphere, atmosphere and a lithosphere.

A member of a class plans for upbringing of the ability with which a thesis can be written actually with the respective themes.

Students will discuss the research methods of physical geography with water as the keyword and try to contribute to the improvement of their own research by picking up themes related to the research subject as much as possible.

Also, acquire the ability to perform spatio-temporal analysis using GIS and show it as various thematic maps.

Students in the first year will present their master's thesis concept based on the results of "Hydrology Exercise I" and report on the results of the preliminary survey. Students in the second year and beyond will submit and publish a tentative dissertation, and all students will examine the content.

In each lesson, write a summary of the lesson, questions, etc. in the attendance book and submit it, and comment on the contents in the next lesson.

In addition, we will ask you to submit a small report and a final report, evaluate each, and explain the ideal report based on the model answer.

GEO500B5

第四紀学研究 I

藁谷 哲也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

人類の進化と現在の自然環境の成立にとって、極めて関連の深い第四紀の自然環境とその変動について講義する。学生は、第四紀の自然環境のうち、気候変化、地形・地質、雪氷などの知識を修得する。そして、自然環境の構成要素が相互に関連しあっていることを認識し、地学現象の解明には統合的視点が重要であることを理解する。

【到達目標】

学生は気候変化、氷河の発達、および近年の気候危機に伴う自然災害などに関する知識を獲得し、自らこれらを説明することができる。また、地形図判読の課題を通じて、地形・地質の理解に不可欠の地形図による地形判読のスキルを身につけることができる。そして、自然をシステムという観点からとらえ、統合的な見方・考え方を獲得することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は、大学が定義する対面授業により、講義形式で実施する。すなわち、授業計画のテーマに従って対面による教材解説、既往文献・資料のレビュー、学生による発表・討論、およびそれらのフィードバックなどの授業を基本とするが、オンラインによる授業も併用する。授業に関わる連絡や予習、復習に関連する参考資料・ウェブサイト等については、学習支援システムを利用するので確認すること。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	地球システムの見方・考え方	地球をシステムとして捉えて自然環境を観察することの重要性を講義する。
2	第四紀の定義と環境	第四紀の定義および地形・地質環境に関する基本的な事項を講義する。
3	気候変化の仕組み	ミランコビッチサイクルなど、気候変化の原因について講義する。
4	第四紀の気候と海水準の変動	氷期サイクルとそれが地形形成に与える効果について講義する。
5	第四紀の地形と地質（1）	完新統からなる地形について解説するとともにその地形判読をおこなう。
6	第四紀の地形と地質（2）	更新統以降の地質からなる地形について解説するとともにその地形判読をおこなう。
7	第四紀の気候と植生・土壌	第四紀の気候、植生、土壌環境に関する基本的な事項を講義する。
8	アントロポセン（人新世）における気候システムの变化	産業革命以降の気候システムの变化について講義する。
9	大陸氷床・山岳氷河の形成と分布	氷床、氷河などの分布やそれらの形成過程を講義する。
10	氷河の作用と氷河地形	氷河の作用と山岳氷河がつくりあげる地形について講義する。
11	周氷河プロセスと周氷河地形	周氷河作用と周氷河地形について講義する。
12	氷河湖の形成と決壊洪水	近年の気候変化に伴う氷河湖の拡大と氷河湖決壊洪水について講義する。

13	巨大崩壊による堰止湖の形成とその影響	カラコラム山脈における巨大崩壊を事例にして、河道閉塞に伴う堰止湖の形成過程を講義する。
14	まとめと解説	講義内容を総括し、レポート等により受講生の到達度をチェックする。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、1 回につき 4 時間以上を標準とします。

参考書にあげた専門書や担当教員の論文等を事前に読み、関連知識を深めてください。また、講義後には関連研究やインターネットなどを通じて理解しにくかった基礎的部分を解消するように努めてください。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しないが、担当教員が作成した資料を配布。

【参考書】

遠藤邦彦・山川修治・藁谷哲也編著『極圏・雪氷圏と地球環境』二宮書店、2010 年

大塚友美編著、藁谷哲也 [ほか] 著『人類の歩み（21 世紀の分岐点）』文真堂、2017 年

貝塚爽平『発達史地形学』東京大学出版会、1998 年

鈴木隆介『建設技術者のための地形図読図入門－第 1 ～ 4 巻－』古今書院、1997 年

岩田修二『氷河地形学』東京大学出版会、2011 年

岩田修二『統合自然地理学』東京大学出版会、2018 年

松倉公憲『地形学』二宮書店、2021 年

その他、講義の際に紹介する。

【成績評価の方法と基準】

レポートに加え、意見や質問などの授業参画度、理解度を考慮し総合的に評価する：討論参加 20%、発表 30%、レポート 50%

【学生の意見等からの気づき】

大学院は、学問のすそ野や視野を広げるところでもあります。自分の専門にこだわらず、様々な知識を獲得して自身の研究に活かすようにしてください。

【学生が準備すべき機器他】

予習・復習に関わる参考ウェブサイトの提示や、課題提出等のために学習支援システム等を利用する。

対面授業では、プロジェクターを利用するため、貸与パソコンを教室に準備する。

【その他の重要事項】

質疑応答には学習支援システムの掲示板やメールも利用しますが、すぐに返事ができない場合もありますのでご了承ください。

【担当教員の専門領域】

地形学、岩石風化

【研究テーマ】

1. 岩石の風化と風化プロセスに関する研究
2. カンボジア・アンコール遺跡を構成する石材の風化特性に関する研究
3. パキスタン・カラコラム山脈に発達する氷河の変動に関する研究

【主要研究業績】

1. 衛星画像及び DEM を用いたカラコラム山脈フンザ川流域の氷河台帳と氷河分布図. (2013) 地図, Vol. 51(3), p.1 - 16.
2. 遠藤邦彦・山川修治・藁谷哲也編著「極圏・雪氷圏と地球環境」朝倉書店. (2010)
3. 2010 年 1 月にパキスタン北部・アタバードで発生した巨大崩壊と堰止湖の拡大. (2011) 地学雑誌, 120, 993-1002

【Outline (in English)】

Course outline: This course introduces the Quaternary environment and its changes that are extremely relevant to human evolution and the formation of natural environment. Students recognize that the components of the natural environment are interconnected, and understand that an integrated perspective is important for understanding geological phenomena.

Learning Objectives: By the end of the course, students should be able to gain knowledge of the natural environment, such as climate change, landforms, geology, and glaciers.

Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

Grading Criteria /Policy: Final grade will be calculated according to the following process; presentations of the research project (30 %), term-end report (50 %), and in-class contribution (20 %).

GE0500B5

第四紀学研究Ⅱ

藁谷 哲也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現在みられる自然環境は、人類が第四紀に進化、拡散しながら自然改変を進めてきた結果である。この講義では、第四紀における人類の進化と拡散を俯瞰し、乾燥帯や熱帯など日本とは異なる自然地域における環境の重層的関係を学ぶ。学生は、第四紀における自然環境の成立を人間との関係から理解する。

【到達目標】

学生は異なる自然地域における自然条件の重層的関係、および人間活動の自然環境に与える連鎖的影響などを包括的に知ることができる。とりわけ、乾燥地域と熱帯地域の地形、地質、気候、植生、土壌などの知識を獲得するとともに、自ら説明することができる。また、人間活動がこれらの地域に与える様々な影響について理解し、人間と自然との関係性を重視する自然地理学的視点を獲得、解説することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は、大学が定義する対面授業により、講義形式で実施する。すなわち、授業計画のテーマに従って対面による教材解説、既作文献・資料のレビュー、学生による発表・討論、およびそれらのフィードバックなどの授業を基本とするが、オンラインによる授業も併用する。授業に関わる連絡や予習、復習に関連する参考資料・ウェブサイト等については、学習支援システムを利用するので確認すること。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	第四紀における人類の進化と拡散	化石や遺伝的近縁関係などから、人類の進化と拡散を俯瞰する。
2	乾燥帯の気候とそこに分布する地形、地形発達	乾燥気候の特徴とそこに発達する地形、地形発達について講義する。
3	オーストラリア大陸の多様な自然環境	白亜紀以降孤立してきたオーストラリア大陸の自然環境の構成要素に関する概要を講義する。
4	オーストラリア大陸の乾燥地に発達する地形と先住民の痕跡	長期にわたって風化、侵食作用を被ってきたオーストラリア大陸に見られる地形の特徴を講義する。
5	オーストラリア大陸の河川と自然改変	オーストラリア大陸東部の主要河川の特徴や人為的な自然環境改変に伴う影響について講義する。
6	ブッシュファイヤーとオーストラリア先住民	ブッシュファイヤーの発生とその影響、および自然環境と共生する先住民の暮らしについて講義する。
7	熱帯の気候とそこに分布する地形、地形発達	熱帯気候の特徴とそこに発達する地形や地形発達について講義する。
8	インドシナ半島の自然環境	モンスーンの影響を強く受ける湿潤なインドシナ半島の自然環境について講義する。
9	インドシナ半島沿岸の三角州と酸性硫酸塩土壌の形成	マングローブ、三角州の人工改変、酸性硫酸塩土壌の発生などについて講義する。

10	インドシナ半島における熱帯林の消滅	商業伐採や農地転用などによって減少する熱帯林の現状について講義する。
11	カンボジア・アンコール遺跡の成立とその後の環境変化	世界遺産に指定されたアンコール遺跡の周辺に暮らす人々と遺跡との関わりを講義する。
12	アンコール遺跡に見られる風化と風化速度	アンコール遺跡を事例に、熱帯気候下の風化プロセスについて講義する。
13	アンコール遺跡の保全とその影響	熱帯気候下における石造文化財の劣化と保存・修復活動を講義する。
14	まとめ	講義内容を総括し、レポート等により受講生の到達度をチェックする。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、1回につき4時間以上を標準とします。参考書にあげた専門書や担当教員の論文に事前に目を通し、自然環境に関する知識を深めてください。また、講義後には関連研究やインターネットなどを通じて理解しにくかった基礎的部分を解消するように努めてください。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しないが、担当教員が作成した教材をもとに学習する。

【参考書】

岩田修二『統合自然地理学』東京大学出版会、2018年
 岩田修二編『実践 統合自然地理学：あたらしい地域自然のとりえ方』古今書院、2018年
 大塚友美編著、藁谷哲也[ほか]著『人類の歩み（21世紀の分岐点）』文真堂、2017年
 藁谷哲也編『カンボジア研究』文真堂、2019年
 松岡 憲知、泉山茂之、植本正明、松本潔編『山岳科学』古今書院、2020
 松倉公憲『地形学』二宮書店、2021年
 その他、講義の際に紹介する。

【成績評価の方法と基準】

レポートに加え、意見や質問などの授業参画度、理解度を考慮し総合的に評価する：討論参加 20%、発表 30%、レポート 50%

【学生の意見等からの気づき】

大学院は学問のすそ野や視野を広げるところでもあります。自分の専門にこだわらず、様々な知識を獲得して自身の研究に生かすようにしてください。

【学生が準備すべき機器他】

予習・復習に関わる参考ウェブサイトの提示や、課題提出等のために学習支援システム等を利用する。
 対面授業では、プロジェクターを利用するため、貸与パソコンを教室に準備する。

【その他の重要事項】

質疑応答には学習支援システムの掲示板やメールも利用しますが、すぐに返事ができない場合もありますのでご了承ください。

【担当教員の専門領域】

地形学、岩石風化

【研究テーマ】

1. 岩石の風化と風化プロセスに関する研究
2. カンボジア・アンコール遺跡を構成する石材の風化特性に関する研究
3. パキスタン・カラコラム山脈に発達する氷河の変動に関する研究

【主要研究業績】

1. アンコール・ワットを構成する砂岩およびラテライトの風化環境と風化プロセス、(2005) 地形、26(3)、239-257.
2. The effect of rock strength on weathering rates of sandstone used for Angkor temples in Cambodia. (2016) Engineering Geology, 207, 24-35.
3. Waragai T., Hiki Y. (2019) Influence of microclimate on the directional dependence of sandstone pillar weathering in Angkor Wat temple, Cambodia. Earth and Planetary Science. 6:10. <https://doi.org/10.1186/s40645-019-0254-5>

【Outline (in English)】

Course outline: This course introduces that the present natural environment is the result of the evolution and spread of humans in the Quaternary, while promoting natural modification. In this lecture, we look at the evolution and spread of humans in the Quaternary, and learn the multilayered relationship of the environment in different natural areas such as the arid zone and the tropics.

Learning Objectives: By the end of the course, students understand the formation of the natural environment in the Quaternary from the relationship with humans.

Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

Grading Criteria /Policy: Final grade will be calculated according to the following process; presentations of the research project (30 %), term-end report (50 %), and in-class contribution (20 %).

GEO500B5

自然地理学文献講読 I

前々 英明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

自然地理学関連の欧文の文献を精読し、当該研究分野の国際的動向を探るとともに、専門分野の欧文文献を読みこなす語学力を養成する。

【到達目標】

自然地理学のうち、年度によって水文・地形・気候分野の文献を講読し、外国語（英語）の読解力を高め、国際的に評価が高い外国文献から広く情報収集できる能力を身に付けることを目標とする。

また、外国語（英語）による論文執筆の基礎についても学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

自然地理関係の欧文文献の内容を正確に読み取れるように、受講者が精読した上で内容に関する討議を踏まえて講義を進める。年度によって、水文・地形・気候学の一般論を扱った洋書を精読する予定である。ただし、課題図書を精読するうちに、受講者が特に関心を持った文献が見つかった場合は、途中でその文献を優先させて紹介させる可能性もありうる。

また、各自の卒論・修論を英訳し、英語論文執筆の基礎的能力を育成する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	導入・授業概略	本講義の扱う内容や進め方に関して説明し、質疑応答を行う。 その上で、用意した欧文図書の中から、受講生と相談の上で、対象図書を選定する。
第 2 回	欧文図書輪読（1） 文献検索法（1）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 J-Stage を用いた検索法について学ぶ。
第 3 回	欧文図書輪読（2） 文献検索法（2）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 CiNii を用いた検索法について学ぶ。
第 4 回	欧文図書輪読（3） 文献検索法（3）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 その他の検索法について学ぶ。
第 5 回	欧文図書輪読（4） 文献講読法（1）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 「タイトル」を中心に質疑応答。
第 6 回	欧文図書輪読（5） 文献講読法（2）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 キーワードを中心に質疑応答。
第 7 回	欧文図書輪読（6） 文献講読法（3）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 「要旨」を中心に質疑応答。
第 8 回	欧文図書輪読（7） 文献講読法（4）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 「文献リスト」を中心に質疑応答。

第9回	欧文図書輪読（8） 文献講読法（5）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 「文献引用法」を中心に質疑応答。
第10回	欧文図書輪読（9） 英文論文執筆の基礎（1）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 英文論文のレビューを行う。
第11回	欧文図書輪読（10） 英文論文執筆の基礎（2）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 英文論文のタイトルとキーワードについて議論する。
第12回	欧文図書輪読（11） 英文論文執筆の基礎（3）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 英文論文の Abstract について議論する。
第13回	欧文図書輪読（12） 英文論文執筆の基礎（4）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 英文論文の Introduction について議論する。
第14回	欧文図書輪読（13） 英文論文執筆の基礎（5）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 英文論文の Conclusion について議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

適宜、図書館に配架している洋雑誌を閲覧して、欧文の文献に関心を払って欲しい。予習復習に各2時間を要する。

【テキスト（教科書）】

自然地理分野の欧文論文を扱う予定。その分野とは主に、気候・地形・水文の各分野である。詳細は第一回目の導入時に受講者と相談のうえで決定したい。

【参考書】

その他適宜授業で紹介する。

【成績評価の方法と基準】

発表：50%、討論：50%

発表担当以外も、必ず事前に読み込んでくること。

【学生の意見等からの気づき】

毎回、受講生の状況を見て判断し、次回以降の内容を修正する。

【学生が準備すべき機器他】

電子辞書

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

自然地理学、(変動) 地形学、第四紀学

＜研究テーマ＞

プレート沈み込み帯における地震性地殻変動に関する地形・地質学的研究、新生代氷床変動に関する地形・地質学的研究、環境変化と人間社会に関する自然地理学的研究

＜主要研究業績＞

前杵英明ほか(2005)：沈み込み帯沿岸の地殻変動を記録する古潮位計としての完新世暖温帯石灰岩に関する予察的研究。地理科学, vol.60-3, pp.136-142.

Maemoku, H. et.al. (1997)：Stratigraphy of the Late Quaternary raised beach deposits in the northern part of Langhovde, Lutzow-Holm Bay, East Antarctica. The Proceedings of NIPR Symposium Antarctic Geoscience, 10, 178-186.

Maemoku, H. et.al. (2012) Geomorphological constraints on the Ghaggar River regime during the Mature Harappan period, in Climates, Landscapes, and Civilizations, Geophys. Monogr. Ser., vol. 198, edited by L. Giosan et al., 97 - 106, AGU, Washington, D. C.

【Outline (in English)】

This course aims to brush up for reading skill of text book or journal written in English.

At the end of the course, students are expected to understand academic papers written in English on Earthquakes, Volcanoes, Tectonic movements approaching from geomorphology or geology.

Before/after each class meeting, students will be expected to spend two hours each to understand the course content.

Your overall grade in the class will be decided based on the following

Presentation: 50%, in class contribution: 50%

GEO500B5

自然地理学文献講読Ⅱ

前杵 英明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

自然地理学関連の欧文の文献を精読し、当該研究分野の国際的動向を探るとともに、専門分野の欧文文献を読みこなす語学力を養成する。

【到達目標】

自然地理学のうち、受講者それぞれの研究対象分野に応じた文献を精読し、外国語（英語）の読解力を高め、国際的に評価が高い外国文献から広く情報収集できる能力を身に付けることを目標とする。また、外国語（英語）による論文の執筆法についても学び、具体的な論文を執筆する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

自然地理関係の欧文文献の内容を正確に読み取れるように、受講者が精読した上で内容に関する討議を踏まえて講義を進める。年度によって、水文・地形・気候学の一般論を扱った洋書を精読する一方、受講者が関心に応じた文献を選定し、レビューし発表する中で、内容について討議する。

また、各自の卒論・修論等を英訳した上で、英語論文として仕上げる方法についても学ぶ。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入・授業概略	レビューの方法、授業の進め方について説明する。
第2回	文献検索法（1）	文献目録集や国内の検索サイトを用いた検索について
第3回	文献検索法（2）	文献目録集や海外の検索サイトを用いた検索について
第4回	文献講読法（1）	タイトル・キーワードを中心に
第5回	文献講読法（2）	Abstract をを中心に
第6回	文献講読法（3）	文献引用法を中心に
第7回	英語論文執筆法（1）	邦文の英訳
第8回	英語論文執筆法（2）	対訳による検証
第9回	英語論文執筆法（3）	英語論文としての修正
第10回	英語論文執筆（1）	レビュー
第11回	英語論文執筆（2）	タイトルとキーワード
第12回	英語論文執筆（3）	Abstract
第13回	英語論文執筆（4）	Introduction
第14回	英語論文執筆（5）	Conclusion

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

適宜、図書館に配架している洋雑誌を閲覧して、欧文の文献に関心を払って欲しい。予習復習に各2時間を要する。

【テキスト（教科書）】

自然地理分野の欧文図書・論文を扱う予定。その分野とは主に、気候・地形・水文の各分野である。ただし、詳細は第一回目の導入時に受講者と相談のうえで決定したい。

【参考書】

その他適宜授業で紹介する。

【成績評価の方法と基準】

発表：50%、討論：50%

発表担当以外も、必ず事前に読み込んでくること。

【学生の意見等からの気づき】

毎回、学生の状況を見て次回以降の内容を修正する。

【学生が準備すべき機器他】

電子辞書

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

自然地理学、(変動) 地形学、第四紀学

＜研究テーマ＞

プレート沈み込み帯における地震性地殻変動に関する地形・地質学的研究、新生代氷床変動に関する地形・地質学的研究、環境変化と人間社会に関する自然地理学的研究

＜主要研究業績＞

前空英明ほか(2005)：沈み込み帯沿岸の地殻変動を記録する古潮位計としての完新世暖温帯石灰岩に関する予察的研究. 地理科学, vol.60-3, pp.136-142.

Maemoku, H. et.al. (1997)：Stratigraphy of the Late Quaternary raised beach deposits in the northern part of Langhovde, Lutzow-Holm Bay, East Antarctica. The Proceedings of NIPR Symposium Antarctic Geoscience, 10, 178-186.

Maemoku, H. et.al. (2012)Geomorphological constraints on the Ghaggar River regime during the Mature Harappan period, in Climates, Landscapes, and Civilizations, Geophys. Monogr. Ser., vol. 198, edited by L. Giosan et al., 97 - 106, AGU, Washington, D. C.

【Outline (in English)】

This course aims to brush up for reading skill of text book or journal written in English.

At the end of the course, students are expected to understand academic papers written in English on Earthquakes, Volcanoes, Tectonic movements approaching from geomorphology or geology.

Before/after each class meeting, students will be expected to spend two hours each to understand the course content.

Your overall grade in the class will be decided based on the following

Presentation: 50%、in class contribution: 50%

GEO500B5

自然地理学特殊講義 I

荻谷 愛彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

【授業概要】寒冷地域（高標高山岳地域や高緯度地域）の自然環境のうち、主として地形に着目し、様々な地形種の形成作用や発達史の基礎を解説します。題材は日本を中心とする予定ですが、典型的な例が国内にない場合は海外の事例も積極的にとりあげます。授業は集中形式で行いますが、開講日のうち1日はフィールド・ワークに充てる予定です（後述）。

【授業目的・意義】寒冷地域に特徴的な地形の種類と、それらの形成過程・形成作用、第四紀地球環境変動との関連について理解できるようになることを第一の目標とします。そのうえで、地球温暖化に対して脆弱な寒冷地域の自然環境の成り立ちと特性を正しく理解し、その保護・保全に役立てることができるようになることを第二の目標とします。

【到達目標】

- ・寒冷地域の自然環境の特性と分布が理解できるようになる。
- ・寒冷地域に特有な主な地形種について、地形の重要な属性である形態、物質、作用、年代のそれぞれが適切に理解できるようになる。
- ・寒冷地域に特有な自然地理学的景観要素（地形、植生、土壌、微気候等）の相互作用や自然史について理解できるようになる。
- ・寒冷地域の自然景観を解説し、地形はもちろんのこと、その全体的成り立ちについても科学的に推理できるようになる。
- ・山岳地におけるフィールドワークの技法や着眼点が修得できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・講義及び日帰り実習（1日）
- ・必要に応じて授業内での簡単なプレゼンテーション（現在受講者が取り組んでいる研究の紹介等）を指示します。
- ・現地日帰り実習についてはレポートの提出を指示し、評価対象の一部とします。その評価（フィードバック）については電子メール等を用いて受講者に伝達する予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	寒冷地域の定義	寒冷地域や周氷河地域はどのような自然環境的特性によって定義されるのかを、地形学、気候学、植生学などの広範な観点から探ります。寒冷地域の分布も確認します。
第2回	更新世環境変動（1）	第四紀地球環境変動の基礎を解説します。主に、地球軌道要素の変化や海面変動、古海況などに言及します。
第3回	更新世環境変動（2）	第四紀地球環境変動の基礎を解説します。主に、氷河・氷床変動、陸上の古気候、地形変化、植生変化などに言及します。

第 4 回	地形の属性	地形の重要な属性である「形態」、「物質」、「作用」、「年代」とは何かについて、受講者の基礎知識を確認しつつ、日本の寒冷地域の諸例を中心にとりあげながら解説します。地形のスケール区分にも言及します。
第 5 回	寒冷地域の地形 (1) ：氷河地形	氷河作用や氷河の地形システムに着目し、氷河侵食地形と氷河堆積地形とに分けて、日本及び海外の諸例を解説します。氷河地形と紛らわしいマスマーブメント地形も紹介します。
第 6 回	寒冷地域の地形 (2) ：周氷河地形 A	周氷河（凍結融解）作用に着目し、特に永久凍土が主体的に関与する様々な地形について、日本及び海外の諸例を解説します。化石永久凍土地形にも言及します。
第 7 回	寒冷地域の地形 (3) ：周氷河地形 B	周氷河（凍結融解）作用に着目し、特に季節凍土が主体的に関与する様々な地形について、日本及び海外の諸例を解説します。季節凍土性の化石周氷河地形も紹介します。
第 8 回	寒冷地域の地形 (4) ：周氷河地形 C	周氷河（凍結融解）作用に着目し、特に残雪の直接的・間接的作用が主体的に関与する様々な地形について、日本及び海外の諸例を解説します。
第 9 回	寒冷地域の地形 (5) ：周氷河地形 D 及び ふりかえり	第 6～8 回目で取り上げたもの以外の様々な寒冷地域の地形（風食地形やマスマーブメント地形等）について、日本及び海外の諸例を解説します。また、ここまでの講義の内容に関して概括的に整理し、理解度を確認します。
第 10 回	野外実習 (1)	日帰り実習地の自然環境のあらましを、地形・地質、植生、小気候等にわけて現地で解説します。またそれらの相互作用についても考えます。
第 11 回	野外実習 (2)	調査地の地形のうち、斜面崩壊（マスマーブメントの一種）を中心的に観察し、地形の属性を明らかにします。また地質や地形条件との関係や、崩壊の誘因についても議論します。
第 12 回	野外実習 (3)	調査地の地形のうち、土石流（マスマーブメントの一種）を中心的に観察し、地形の属性を明らかにします。また地質や地形条件との関係や、土石流の誘因についても議論します。
第 13 回	野外実習 (4)	調査地の地形のうち、岩塊集積地形（岩塊斜面）を中心的に観察し、地形の属性を明らかにします。また地質や地形条件との関係や、地形の起源（周氷河性/非周氷河性）について議論します。
第 14 回	野外実習 (5)	実習内容を整理し、オンサイトで質疑を行います。レポートのまとめ方についても解説します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・指示された文献や参考書を事前によく読み授業に臨んでください。
- ・質問や議論を予めメモしておき、授業時間中に教員と受講者同士で共有できるようにしてください。
- ・本授業の準備及び復習時間は 1 回につき各 4 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しません。

【参考書】

- 1) French, H. M. 2018 The Periglacial Environment 4th ed.
 - 2) Lowe and Walker 2015 Reconstructing Quaternary Environments. 3rd ed.
 - 3) 貝塚ほか編 日本の地形（東京大学出版会） 各編
 - 4) 地すべりに関する地形地質用語委員会（日本地すべり学会）編 2004 地すべり＝地形地質的認識と用語
 - 5) 岩田修二 2011 氷河地形学
- その他については、授業時間中に適宜指示する予定です。

【成績評価の方法と基準】

- ・複数のレポートを課し、それらを総合評価します（合計 90 %）
- ・授業中（日帰り実習を含む）に担当教員と受講者間で交わされる質疑やディスカッション等の内容と貢献度を評価します（10 %）

【学生の意見等からの気づき】

- ・地理学を扱う授業のため、本年度も各種の主題図（地図）や景観写真を多用した説得力と臨場感のある授業を展開します。
- ・新型コロナウイルス感染症拡大予防のため万全な対策を講じ、野外実習が予定通り実施できるよう注意します。また受講者のみなさんの協力をお願いします。

【学生が準備すべき機器他】

- ・講義においてはインターネットに接続可能なノートパソコンまたは大型タブレットまたはスマートフォン（地理地図情報等の参照を想定）
- ・日帰り実習においては関東地方の標高 1500m 程度の夏季山岳に適した登山用具・衣類（ザック、雨具、登山靴またはトレッキングシューズ、化学繊維を中心とした速乾性肌着や衣類等）。地図アプリをインストールしたスマートフォン。

【その他の重要事項】

- ・日帰り実習は奥多摩地域（例：三頭山 都民の森）を想定しています。登山道沿いに 4～6 時間徒歩移動します。登山道はよく整備されています。都心に比べて冷涼ですが、夏季のため高温多湿な森林内の移動となります。担当教員として危険の予見には十分注意しますが、場所柄と季節柄、夕立や落雷が予想されます。
- ・三頭山周辺で実施する場合、JR 五日市線武蔵五日市駅に午前 7 時 45 分頃までに到着し、バスに乗り換える必要があります。移動時間等を検討してください。詳細は講義初日に説明します。
- ・上記の準備すべき登山用具についても確認してください。
- ・日帰り実習への出席を単位認定要件の 1 つとするため、上記諸条件のほか、自己の体力や基礎疾患等を客観視し、履修登録は慎重に行うようにしてください。
- ・オフィスアワーについては担当教員が非常勤のため授業時間内または前後とします。授業開始前に担当教員と連絡（質問）をとる必要がある場合は、文学部地理学科の受け入れ担当教員にコンタクトしてください。

【自然地理学】

< 専門領域 > 地形学・第四紀学

< 研究テーマ > 山岳地域の斜面変化。とくに大規模崩壊現象とその誘因について地形学・地質学・第四紀年代学の観点で探求しています。

< 主要研究業績 > ◆ Kariya 2002 Permafrost and Periglacial Processes ◆ Kariya 2005 CATENA ◆ Kariya et al. 2011 Geomorphology ◆ 荻谷ほか 2012 地学雑誌 ◆ 荻谷ほか 2014 地理学評論 ◆ 荻谷ほか 2016 第四紀研究 ◆ 荻谷・西井 2017 地理学評論 ◆ 荻谷 2019 第四紀研究 ◆ 山田ほか 2021 砂防学会誌

【Outline (in English)】

< Course outline > Among the natural environments in cold regions (i.e., high altitude mountainous regions, high latitude regions), we will focus on various landforms and understand their historical development and morphogenetic processes. The subject matter is mainly referred from Japan, but if there are no typical examples in Japan, we will also take up overseas cases. One day trip to the Okutama Area west of central Tokyo will be planned as fieldwork.

< Learning Objectives > By taking this lecture, you will be able to understand the variety of landforms in cold regions, their formation processes, as well as their relationships with global environmental changes in the Quaternary period.

< Learning activities outside of classroom > Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.

< Grading Criteria /Policies > Grading will be decided based on classroom and fieldwork reports (90%), and the quality of the students' experimental performance in both the lab and the fieldwork (10%).

GEO500B5

自然地理学特殊講義Ⅱ

町田 功

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

水文地質学の講義です。学生が我が国の地下水資源を定量的な視点から考えることができることを目的とします。前半は地下水と我々の社会の関係について、後半はダルシー式を元にした計算方法を学びます。

【到達目標】

学生は、前半では水循環を構成する地下水のあり方や一般的性質、社会とのかかわりを学びます。学生は水資源としての地下水のあり方を理解できるようになります。後半ではダルシー式を差分プログラムで解くことにより、数式の意味と解の意味を理解できるようになります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

前半は講義と小テストです。講義前半はオンラインとしますが、講義後半のエクセルマクロを用いた実習では、対面とします。後半はパソコンを用います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	地下水をとりまく環境	講義目的 地下水とは 水循環 水文地質学を学ぶ理由
第 2 回	水収支と緑のダム	不飽和帯～地下水面 山地流域の調査 緑のダム
第 3 回	地理学の視点	山地流域の水収支 地下水の水収支 現場調査
第 4 回	地下水面図と地下水障害	地下水面、地盤沈下、塩水化など
第 5 回	水循環基本法	日本の地下水管理とドイツの地下水管理
第 6 回	ダルシーの式	ダルシーの式 フラックス 透水係数
第 7 回	動水勾配	動水勾配とダルシーの式
第 8 回	地下水流動系	現場の視点と地下水資源
第 9 回	タンクモデル	河川流量予測法 エクセルマクロの練習
第 10 回	支配方程式	1 次元の地下水流動式
第 11 回	差分法（その 1）	導関数について 定常 1 次元地下水流動計算 エクセルマクロの練習
第 12 回	差分法（その 2）	続き
第 13 回	差分法（その 3）	定常 2 次元地下水流動計算
第 14 回	試験	試験

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講義の終わりに宿題を出します（毎日 1 時間程度）。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用せず、配布資料に沿って講義を行います。配布資料は pdf ファイルを web 上に置くので各自ダウンロードして使用してください。

【参考書】

新版 地下水調査法 山本莊毅 古今書院

【成績評価の方法と基準】

小テスト＋最終試験（80％）、平常点（20％）

【学生の意見等からの気づき】

講義中の質疑応答などを考慮して、講義スピードを調整します。

【学生が準備すべき機器他】

後半はエクセルマクロを用います。

【担当教員の専門分野等】

専門領域：水文地質学

【Outline (in English)】

Hydrogeology. The goals of this course is to understand groundwater resources quantitatively. The first half of this lecture is to have students gain the general aspect of groundwater resource and its relationship to our society. In the second half, the students learn how to code simple groundwater flow on the basis of theoretical aspect of Darcy's law. Students will be expected to have completed the homework after the lecture. Grading will be decided based on mini-exam and final exam (80%), and the quality of the students performance in the lecture (20%).

HUG500B5

人文地理学研究Ⅰ

伊藤 達也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

経済地理学の基本的な方法論、研究分野の書かれたテキストを読み、発表することによって、経済地理学的方法についての深い理解を目指します。具体的には経済地理学の目標、理論、方法論、研究アプローチを取得し、自らの研究遂行時にそれらを使うことができるようにします。

【到達目標】

経済地理学に関する知識の蓄積、思考力、解決能力のアップを目指します。具体的にはテキストの内容を適切に理解すること、テキストの内容を適切にまとめること、テキストの内容を適切に発表すること、その上でテキストを通じてより広く経済地理学の専門内容を理解すること、そして、自らの研究テーマに関わらせて、それをより深めることをテーマとします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は受講生による報告と討議、教員の解説等を中心に行います。さらに受講生の関心領域、研究テーマと関係した論文や著書の紹介等を通じて、授業内容の深化に努めます。フィードバックについては、できる限り授業中のコミュニケーションで対応しますが、足りない場合は次の授業において継続して議論します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロ	授業方針の決定
第2回	テキスト「序章」	「序章 環境・空間と経済社会」の報告と討論
第3回	テキスト「第1章」	「第1章 経済立地の理論」の報告と討論
第4回	テキスト「第2章」	「第2章 地域経済の発展のメカニズム」の報告と討論
第5回	テキスト「第3章」	「第3章 サービス経済化と広がる地域間格差」の報告と討論
第6回	テキスト「第4章」	「第4章 人々のキャリアと経済空間」の報告と討論
第7回	テキスト「第5章」	「第5章 経済のグローバル化と産業立地・地域経済」の報告と討論
第8回	テキスト「第6章」	「第6章 サプライチェーンと南北問題」の報告と討論
第9回	テキスト「第7章」	「第7章 経済を左右する地域の制度と文化」の報告と討論
第10回	テキスト「第8章」	「第8章 都市の発展が生むインナーシティ問題」の報告と討論
第11回	テキスト「第9章」	「第9章 グローバル化時代の都市と都市ネットワーク」の報告と討論
第12回	テキスト「第10章」	「第10章 地域のなかでのものづくり」の報告と討論
第13回	テキスト「第11章」	「第11章 工業で変わる新興国」の報告と討論
第14回	まとめ	まとめ 授業において得たもの、得られなかったものの確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

授業前、テキストの該当箇所を読んでくることはもちろん、該当箇所のテーマに沿った論文や本を読み、理解をより深める努力をします。

授業後、関連文献を読むことによって、自らの知識を高めます。

【テキスト（教科書）】

伊藤・小田・加藤編著（2020）『経済地理学への招待』ミネルヴァ書房

【参考書】

山崎 朗ほか著（2016）『地域政策』中央経済社

【成績評価の方法と基準】

発表：50％、討論：50％

十分な準備が大前提となります。問題、論点の明確化された発表の評価が高く、討論は、単純な質問、意見に対する疑問の提示、反論を丁寧に分けて行うことが望ましいです。

【学生の意見等からの気づき】

丁寧な議論に努めます。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 経済地理学、地域経済論、水資源研究、資源環境論
＜研究テーマ＞ 木曾川水系の水資源問題、地域資源の持続可能な利用、地域経済

＜主要研究業績＞

1. 「熊本県五木村における村民意識調査の分析結果と地域再生」法政大学文学部紀要 82 2021
2. 「ダムと環境問題について考えるー川辺川ダム問題を事例にー」都市問題 112-8 2021
3. 「熊本県五木村における観光客の意識調査の分析結果と地域再生」法政大学文学部紀要 83 2021
4. 伊藤達也・小田宏信・加藤幸治編『経済地理学への招待』ミネルヴァ書房 2020
5. 「河童による水辺環境保全運動と地域振興効果ー福岡県久留米市田主丸町を事例にー」水資源・環境研究 32 - 1 2019
6. 「長良川河口堰最適運用方法の模索」法政大学文学部紀要 78 2019
7. 「国土利用」（岡橋秀典・伊藤達也共著）（経済地理学会編『キーワードで読む経済地理学』原書房 2018）
8. 「環境問題への地理学のかかわり」（竹中克行編『人

【Outline (in English)】

(Course outline) I aim at deep understanding about economic geography by reading and releasing the text on which basic methodology and research field of economic geography are written.

(Learning Objectives) A target, theory, methodology and research approach of economic geography are acquired and makes sure that it'll be possible to use those at the time of the study execution.

(Learning activities outside of classroom) Preparatory study and review time for this class is standard for 2 hours each. In addition to reading the relevant parts of the text before class, we will make efforts to deepen our understanding by reading papers and books according to the theme of the relevant part. After class, students improve their knowledge by reading related literature.

(Grading Criteria /Policy) Presentation: 50%, Debate: 50%

Sufficient preparation is a major prerequisite. The question and the clarification of the issues are highly evaluated, and it is desirable to carefully separate simple questions, questions about opinions, and rebuttals.

HUG500B5

人文地理学研究Ⅱ

伊藤 達也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

授業の最初に調査テーマ、調査項目、調査方法等を決定し、アンケート票を作成します。その後、具体的にアンケート調査を実施し、授業の後半では調査結果を集計し、分析し、報告書を作成します。今年度は「地方都市の地域活性化」をテーマに行います。人文地理学に関する調査能力のアップを目指します。

【到達目標】

人文地理学に関する調査能力のアップを目指します。授業の最初に調査テーマ、調査項目、調査方法等を決定し、アンケート票を作成します。その後、具体的にアンケート調査を実施し、授業の後半では調査結果を集計し、分析し、報告書を作成します。こうした作業を通じて、自らの調査能力のスキルアップを目指し、修士論文作成時の分析能力の向上を到達目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業の最初に調査テーマ、調査項目、調査方法等を決定し、アンケート票を作成します。アンケート票の作成は学生が行います。その後、具体的にアンケート調査を実施します。調査地域は学生が相談の上決定します。現地へ出向き、調査を共同で実施し、より多くの調査票の回収を目指します。授業の後半では、回収された調査票を集計し、その後、単純集計、クロス集計の分析を行います。最後に各自で報告書を作成します。フィードバックについては、できる限り授業中のコミュニケーションで対応しますが、足りない場合は次の授業において継続して議論します。レポートなどについては、コメントをつけて返却します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロ	調査目的と調査方針の決定
第2回	社会調査の基本の説明	社会調査の基本の説明
第3回	アンケート票作成時のルール (1)	フェイスシートの作成
第4回	アンケート票作成時のルール (2)	質問項目の作成
第5回	アンケート票作成時のルール (3)	回答項目の作成
第6回	現地調査のマナーの説明	現地調査のマナーの説明
第7回	アンケート票の作成 (1)	アンケート票の形式の作成
第8回	アンケート票の作成 (2)	質問項目の選定
第9回	アンケート票の作成 (3)	アンケート票の完成
第10回	アンケート票の分析 (1)	データ打ち込み
第11回	アンケート票の分析 (2)	単純集計
第12回	アンケート票の分析 (3)	クロス集計
第13回	報告書の作成 (1)	作成手順の説明
第14回	報告書の作成 (2)	完成書の提出

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
授業時間内に十分な説明を行い、作業時間の確保に努めますが、作業は授業外でも行うことになります。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

別途、授業内で提示します。

【成績評価の方法と基準】

作業：50 %、報告書：50 %

【学生の意見等からの気づき】

授業時間内に十分な説明を行い、作業時間の確保に努めます。

【学生が準備すべき機器他】

授業では必ずパソコンを使用します。

【担当教員の専門分野等】

- ＜専門領域＞ 水資源研究、資源環境論、地域経済論
 ＜研究テーマ＞ 木曾川水系の水資源問題、地域資源の持続可能な利用、地域経済
 ＜主要研究業績＞
 1. 「熊本県五木村における村民意識調査の分析結果と地域再生」法政大学文学部紀要 82 2021
 2. 「ダムと環境問題について考える－川辺川ダム問題を事例に－」都市問題 112-8 2021
 3. 「熊本県五木村における観光客の意識調査の分析結果と地域再生」法政大学文学部紀要 83 2021
 4. 伊藤達也・小田宏信・加藤幸治編『経済地理学への招待』ミネルヴァ書房 2020
 5. 「河童による水辺環境保全運動と地域振興効果－福岡県久留米市田主丸町を事例に－」水資源・環境研究 32－1 2019
 6. 「長良川河口堰最適運用方法の模索」法政大学文学部紀要 78 2019
 7. 「国土利用」（岡橋秀典・伊藤達也共著）（経済地理学会編『キーワードで読む経済地理学』原書房 2018）
 8. 「環境問題への地理学のかかわり」（竹中克行編『人文地理学への招待』ミネルヴァ書房 2015

【Outline (in English)】

(Course outline) (Learning Objectives) At the beginning of the class, we will determine the survey theme, survey items, survey method, etc., and prepare a questionnaire. After that, we will conduct a questionnaire survey specifically, and in the second half of the class, we will aggregate, analyze, and prepare a report. This year, we will do so under the theme of "regional revitalization of local cities". We aim to improve our research capabilities in human geography. Through these tasks, we aim to improve our own research skills and aim to improve our analytical skills when writing a master's thesis.

(Learning activities outside of classroom) Preparatory study and review time for this class is standard for 2 hours each.

We will try to secure working hours by explaining sufficiently during class hours, but the work will be carried out outside of class.

(Grading Criteria /Policy) Work: 50%, Report: 50%

HUG600B5

人文地理学演習Ⅰ

伊藤 達也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

受講生は修士論文の作成経過を報告し、討論をすることによって、修士論文の完成を目指します。同時に論文作成に必要な諸項目を学びます。他の受講生は発表に対して、質問、意見を提出することによって、発表の内容を高めることを目指し、同時に自らの修士論文作成の学びとします。

【到達目標】

適切な修士論文の完成を目指します。具体的には、修士論文を作成するための適切な知識の獲得、適切な説明論理の獲得、適切なオリジナリティを有した修士論文の作成が授業のテーマとなります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的に学生の発表を中心に行います。教員は論文の作成方法を説明します。フィードバックについては、できる限り授業中のコミュニケーションで対応しますが、足りない場合は次の授業において継続して議論します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ゼミガイダンス	春学期のゼミ概要の説明とゼミ方針の決定
第 2 回	論文の作成技法	論文の作成技法の講義
第 3 回	文献検索方法	文献検索方法の講義
第 4 回	修士 2 年生の発表、発表レジュメ	修士 2 年生の研究テーマ発表と発表レジュメの解説
第 5 回	修士 1 年生の発表、日本語の文法	修士 1 年生の研究テーマ発表と日本語の文法の説明
第 6 回	修士 1 年生の発表、引用文献の表示	修士 1 年生の研究テーマ発表と引用文献の表示方法の説明
第 7 回	修士 1 年生の発表、参考文献の表示	修士 1 年生の研究テーマ発表と参考文献の表示方法の説明
第 8 回	修士 1 年生の発表、注の付け方	修士 1 年生の研究テーマ発表と注の付け方の説明
第 9 回	構成表の作り方	構成表の作り方の説明
第 10 回	修士 2 年生二度目の発表、理論の考え方	修士 2 年生二度目の研究テーマ発表と理論の考え方の説明
第 11 回	方法論の選択	方法論の選択の説明
第 12 回	説明順序	説明順序の説明
第 13 回	夏季休暇のフィールドワーク準備 (1)－調査マナー－	調査マナーの説明
第 14 回	夏季休暇のフィールドワーク準備 (2)－調査方法－	調査方法の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

修士論文は授業以外での努力が圧倒的に求められます。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しません。

【参考書】

別途、授業内で提示します。

【成績評価の方法と基準】

発表：50％、討論：50％

十分な準備が大前提となります。問題、論点の明確化された発表の評価が高く、討論は、単純な質問、意見に対する疑問の提示、反論を丁寧に分けて行うことが望ましいです。

【学生の意見等からの気づき】

丁寧な説明に心がけます。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 水資源研究、資源環境論、地域経済論

＜研究テーマ＞ 木曾川水系の水資源問題、地域資源の持続可能な利用、地域経済

＜主要研究業績＞

1. 「熊本県五木村における村民意識調査の分析結果と地域再生」法政大学文学部紀要 82 2021
2. 「ダムと環境問題について考えるー川辺川ダム問題を事例にー」都市問題 112-8 2021
3. 「熊本県五木村における観光客の意識調査の分析結果と地域再生」法政大学文学部紀要 83 2021
4. 伊藤達也・小田宏信・加藤幸治編『経済地理学への招待』ミネルヴァ書房 2020
5. 「河童による水辺環境保全運動と地域振興効果ー福岡県久留米市田主丸町を事例にー」水資源・環境研究 32 - 1 2019
6. 「長良川河口堰最適運用方法の模索」法政大学文学部紀要 78 2019
7. 「国土利用」（岡橋秀典・伊藤達也共著）（経済地理学会編『キーワードで読む経済地理学』原書房 2018）
8. 「環境問題への地理学のかかわり」（竹中克行編『人文地理学への招待』ミネルヴァ書房 2015

【Outline (in English)】

(Course outline) (Learning Objectives) Students aim to complete their master's thesis by reporting and discussing the progress of the master's thesis. At the same time, students will learn the various items necessary for writing a paper. Other students aim to enhance the content of the presentation by submitting questions and opinions to the presentation, and at the same time learn to write their own master's thesis. (Learning activities outside of classroom) Master's thesis requires overwhelming effort outside of class. Preparatory study and review time for this class is standard for 2 hours each.

(Grading Criteria /Policy) Presentation: 50%, Debate: 50%

Sufficient preparation is a major prerequisite. The question and the clarification of the issues are highly evaluated, and it is desirable to carefully separate simple questions, questions about opinions, and rebuttals.

HUG600B5

人文地理学演習Ⅱ

伊藤 達也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

受講生は修士論文の作成経過を報告し、討論をすることによって、修士論文の完成を目指します。同時に論文作成に必要な諸項目を学びます。他の受講生は発表に対して、質問、意見を提出することによって、発表の内容を高めることを目指し、同時に自らの修士論文作成の学びとします。

【到達目標】

適切な修士論文の完成を目指します。具体的には、修士論文を作成するための適切な知識の獲得、適切な説明論理の獲得、適切なオリジナリティを有した修士論文の作成が授業のテーマとなります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的に学生の発表を中心に行います。教員は論文の作成方法を説明します。フィードバックについては、できる限り授業中のコミュニケーションで対応しますが、足りない場合は次の授業において継続して議論します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	秋学期のゼミ概要の説明とゼミ方針の決定をします
第2回	修士2年生の発表と研究題名	修士2年生の研究テーマ発表と「疑問文で成り立つ題名」の説明をします
第3回	修士1年生の発表と研究目的	修士1年生の研究テーマ発表と研究目的における「オリジナリティの必要性」について説明します
第4回	修士1年生の発表と方法論(1)	修士1年生の研究テーマ発表と経済地理学の方法論について説明します
第5回	修士1年生の発表と方法論(2)	修士1年生の研究テーマ発表と方法論「地域事例の理論」について説明します
第6回	修士1年生の発表と先行研究(1)	修士1年生の研究テーマ発表と理論をたどる先行研究の重要性について説明します
第7回	修士2年生の二度目の発表と先行研究(2)	修士2年生の二度目の研究テーマ発表と先行研究の類型化の重要性について説明します
第8回	修士1年生の二度目の発表と説明順序の説明(1)	修士1年生の二度目の研究テーマ発表と説明順序「単純ストーリー」の重要性について説明します
第9回	修士1年生の二度目の発表と説明順序の説明(2)	修士1年生の二度目の研究テーマ発表と説明順序「クロスストーリー」の重要性について説明します
第10回	修士1年生の二度目の発表と構成表の説明(1)	修士1年生の二度目の研究テーマ発表と構成表による「全説明事項の見える化」の重要性について説明します

第11回	修士1年生の二度目の発表と構成表の説明(2)	修士1年生の二度目の研究テーマ発表と構成表による「ボリュームの見える化」の重要性について説明します
第12回	日本語の説明	論文を支える日本語の文法の重要性について説明します
第13回	結論の説明	結論の中の「提案と願望」について説明します
第14回	論文を支える問題意識の説明	研究を支える「熱い心と冷静な頭」の重要性について説明します

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

修士論文は授業以外での努力が圧倒的に求められます。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しません。

【参考書】

別途、授業内で提示します。

【成績評価の方法と基準】

発表：50%、討論：50%

十分な準備が大前提となります。問題、論点の明確化された発表の評価が高く、討論は、単純な質問、意見に対する疑問の提示、反論を丁寧に分けて行うことが望ましいです。

【学生の意見等からの気づき】

丁寧な説明に心がけます。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 経済地理学、地域経済論、水資源研究、資源環境論
 ＜研究テーマ＞ 木曾川水系の水資源問題、地域資源の持続可能な利用、地域経済
 ＜主要研究業績＞

1. 「熊本県五木村における村民意識調査の分析結果と地域再生」法政大学文学部紀要 82 2021
2. 「ダムと環境問題について考えるー川辺川ダム問題を事例にー」都市問題 112-8 2021
3. 「熊本県五木村における観光客の意識調査の分析結果と地域再生」法政大学文学部紀要 83 2021
4. 伊藤達也・小田宏信・加藤幸治編『経済地理学への招待』ミネルヴァ書房 2020
5. 「河童による水辺環境保全運動と地域振興効果ー福岡県久留米市田主丸町を事例にー」水資源・環境研究 32-1 2019
6. 「長良川河口堰最適運用方法の模索」法政大学文学部紀要 78 2019
7. 「国土利用」（岡橋秀典・伊藤達也共著）（経済地理学会編『キーワードで読む経済地理学』原書房 2018）
8. 「環境問題への地理学のかかわり」（竹中克行編『人文地理学への招待』ミネルヴァ書房 2015）

【Outline (in English)】

(Course outline) (Learning Objectives) Students aim to complete their master's thesis by reporting and discussing the progress of the master's thesis. At the same time, students will learn the various items necessary for writing a paper. Other students aim to enhance the content of the presentation by submitting questions and opinions to the presentation, and at the same time learn to write their own master's thesis. (Learning activities outside of classroom) Master's thesis requires overwhelming effort outside of class. Preparatory study and review time for this class is standard for 2 hours each.

(Grading Criteria /Policy) Presentation: 50%, Debate: 50%

Sufficient preparation is a major prerequisite. The question and the clarification of the issues are highly evaluated, and it is desirable to carefully separate simple questions, questions about opinions, and rebuttals.

HUG500B5

社会経済地理学研究Ⅰ

小原 文明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、都市に関する様々な理論・概念について学ぶものです。また、それら都市に関する理論や概念に対する理解を通じて、地理学の立場から都市の特徴や機能、役割などについて学びます。本年春学期の授業では、主として都市の経済や産業に関わる都市の理論や概念、実践について考えていきます。

【到達目標】

都市に関する基礎的な知識を修得するとともに、都市に関する理論や概念に対する理解を深め、都市の特徴や機能、役割などについて考える力を身に付けることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業では授業テーマに関する概念整理など基礎的な事項についての講義を踏まえた後、都市の理論や概念に関する文献講読の発表およびディスカッションを中心に授業を展開します。各回のテーマに合わせて、あらかじめ文献を読み、関連する内容について理解しておくことが求められます。

また、課題等のフィードバックは次回以降の授業等で適宜行います。なお、今年度、本授業は基本的に対面形式で行う予定ですが、場合によっては、Zoomによるリアルタイムオンライン形式やハイフレックス形式で行う授業回がある可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	都市に関する理論・概念の概観（1）	都市に関する理論・概念についての整理
第2回	都市に関する理論・概念の概観（2）	都市に関する理論・概念についての関係性
第3回	都市の経済・産業からみた都市の理論・概念（1）	都市の経済・産業からの理論・概念に関する講読（1）
第4回	都市の経済・産業からみた都市の理論・概念（2）	都市の経済・産業からの理論・概念に関する講読（2）
第5回	都市の経済・産業からみた都市の理論・概念（3）	都市の経済・産業からの理論・概念に関する議論（1）
第6回	都市の経済・産業からみた都市の理論・概念（4）	都市の経済・産業からの理論・概念に関する講読（3）
第7回	都市の経済・産業からみた都市の理論・概念（5）	都市の経済・産業からの理論・概念に関する講読（4）
第8回	都市の経済・産業からみた都市の理論・概念（6）	都市の経済・産業からの理論・概念に関する議論（2）
第9回	都市の経済・産業に関する都市への実践例（1）	都市の経済・産業に関する実践例についての講読（1）
第10回	都市の経済・産業に関する都市への実践例（2）	都市の経済・産業に関する実践例についての講読（2）

- 第11回 都市の経済・産業に関する実践例
都市への実践例 についての議論 (1)
(3)
- 第12回 都市の経済・産業に関する実践例
都市への実践例 についての講読 (3)
(4)
- 第13回 都市の経済・産業に関する実践例
都市への実践例 についての講読 (4)
(5)
- 第14回 都市の経済・産業に関する実践例
都市への実践例 についての議論 (2)
(6)

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
本授業では文献講読の発表、およびそれに基づくディスカッションを中心に展開することから、あらかじめ各回のテーマに関する文献を読むとともに、関連する内容について理解を深め、自身の意見・見解を整理しておくことが求められます。

【テキスト（教科書）】

概説ならびに発表・討論で使用する文献・資料は授業内にて決定します。

【参考書】

授業の中で、適宜関連する文献を紹介します。

【成績評価の方法と基準】

プレゼンテーション：50%、ディスカッション：50%で評価します。具体的には、文献講読におけるプレゼンテーションの内容や方法、それぞれのディスカッションにおける討論内容・姿勢によって総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

ディスカッションが深まるように心掛けます。

【その他の重要事項】

秋学期開講の「社会経済地理学研究Ⅱ」（地理学専攻科目）・「日本の産業風土Ⅱ」（国際日本学インスティテュート科目）も併せて受講することを推奨します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

人文地理学（都市地理学、経済地理学、社会地理学）、都市開発論
<研究テーマ>

都市開発、都市形成、土地利用、土地所有

【Outline (in English)】

This course introduces various urban theories and concepts to students taking this course. Especially, this course deals with the urban theories, concepts and practices about urban economy and industries.

The goals of this course are to be able to understand the urban theories and to acquire the ability to consider characteristics, functions and roles of urban area.

Before / after each class meeting, students will be expected to spend each 2 hours to understand the course content.

Final grade will be calculated according to the following process: making a presentation (50%) and in-class contribution (50%).

HUG500B5

社会経済地理学研究Ⅱ

小原 文明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、都市に関する様々な理論・概念について学ぶものです。また、それら都市に関する理論や概念、実践に対する理解を通じて、地理学の立場から都市の特徴や機能、役割などについて学びます。本年秋学期の授業では、主として都市計画や都市開発に関わる都市の理論や概念について考えていきます。

【到達目標】

都市に関する基礎的な知識を修得するとともに、都市に関する理論や概念に対する理解を深め、都市の特徴や機能、役割などについて考える力を身に付けることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業では授業テーマに関する概念整理など基礎的な事項についての講義を踏まえた後、都市の理論や概念に関する文献講読の発表およびディスカッションを中心に授業を展開します。各回のテーマに合わせて、あらかじめ文献を読み、関連する内容について理解しておくことが求められます。

また、課題等のフィードバックは次回以降の授業等で適宜行います。

なお、今年度、本授業は基本的に対面形式で行う予定ですが、場合によっては、Zoomによるリアルタイムオンライン形式やハイフレックス形式で行う授業回がある可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	都市に関する理論・概念の概観 (1)	都市に関する理論・概念についての整理
第2回	都市に関する理論・概念の概観 (2)	都市に関する理論・概念の関係性
第3回	都市計画・都市開発からみた都市の理論・概念 (1)	都市計画・都市開発からの理論・概念に関する講読 (1)
第4回	都市計画・都市開発からみた都市の理論・概念 (2)	都市計画・都市開発からの理論・概念に関する講読 (2)
第5回	都市計画・都市開発からみた都市の理論・概念 (3)	都市計画・都市開発からの理論・概念に関する議論 (1)
第6回	都市計画・都市開発からみた都市の理論・概念 (4)	都市計画・都市開発からの理論・概念に関する講読 (3)
第7回	都市計画・都市開発からみた都市の理論・概念 (5)	都市計画・都市開発からの理論・概念に関する講読 (4)
第8回	都市計画・都市開発からみた都市の理論・概念 (6)	都市計画・都市開発からの理論・概念に関する議論 (2)
第9回	都市計画・都市開発に関する都市への実践 (1)	都市計画・都市開発の実践に関する講読 (1)
第10回	都市計画・都市開発に関する都市への実践 (2)	都市計画・都市開発の実践に関する講読 (2)

- 第11回 都市計画・都市開発に関する都市への実践 都市計画・都市開発の実践に関する議論 (1)(3)
- 第12回 都市計画・都市開発に関する都市への実践 都市計画・都市開発の実践に関する講読 (3)(4)
- 第13回 都市計画・都市開発に関する都市への実践 都市計画・都市開発の実践に関する講読 (4)(5)
- 第14回 都市計画・都市開発に関する都市への実践 都市計画・都市開発の実践に関する議論 (2)(6)

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

本授業では文献講読の発表、およびそれに基づくディスカッションを中心に展開することから、あらかじめ各回のテーマに関する文献を読むとともに、関連する内容について理解を深め、自身の意見・見解を整理しておくことが求められます。

【テキスト（教科書）】

概説ならびに発表・討論で使用する文献・資料は授業内にて決定します。

【参考書】

授業の中で、適宜関連する文献を紹介します。

【成績評価の方法と基準】

プレゼンテーション：50 %、ディスカッション：50 %で評価します。具体的には、文献講読におけるプレゼンテーションの内容や方法、それぞれのディスカッションにおける討論内容・姿勢によって総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

ディスカッションが深まるように心掛けます。

【その他の重要事項】

春学期開講の「社会経済地理学研究Ⅰ」（地理学専攻科目）・「日本の産業風土Ⅰ」（国際日本学インスティテュート科目）も併せて受講することを推奨します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

人文地理学（都市地理学、経済地理学、社会地理学）、都市開発論
<研究テーマ>

都市開発、都市形成、土地利用、土地所有

【Outline (in English)】

This course introduces various urban theories and concepts to students taking this course. Especially, this course deals with the urban theories, concepts and practices about urban planning and urban development.

The goals of this course are to be able to understand the urban theories and to acquire the ability to consider characteristics, functions and roles of urban area.

Before / after each class meeting, students will be expected to spend each 2 hours to understand the course content.

Final grade will be calculated according to the following process: making a presentation (50 %) and in-class contribution (50 %).

HUG600B5

社会経済地理学演習Ⅰ

小原 文明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業では、受講生が各自の修士論文の研究内容について報告し、それら報告に基づいて討論をすることで、各自の研究を進捗させていくことを授業の目的とします。また、受講生自身の研究を進めるだけでなく、他者の報告を聞き、討論を行うことを通じて、社会経済地理学的な考え方やモノの見方を修得することを目指します。

【到達目標】

本授業を通じて、受講生が適切な修士論文を完成すべく各自が研究を進捗させるとともに、社会経済地理学的な思考・観点を修得できるようになることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業は受講生の発表とそれに基づく討論を中心に展開していきます。また、適宜、各受講生の発表テーマに関連する分野についての課題を設定し、その課題について検討を行います。

また、本授業は演習（ゼミナール）形式ですので、課題等のフィードバックは適宜行います。

なお、今年度、本授業は対面形式で行いますが、場合によってはZoomによるリアルタイムオンライン形式やハイフレックス形式で行う授業回がある可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ゼミガイダンス	ゼミ概要の説明／方針の決定
第2回	研究テーマの発表	全受講生による発表
第3回	研究内容の報告 (1)	担当者の発表と質疑応答
第4回	研究内容の報告 (2)	担当者の発表と質疑応答
第5回	研究内容の報告 (3)	担当者の発表と質疑応答
第6回	研究内容の報告 (4)	担当者の発表と質疑応答
第7回	研究テーマに関する課題の検討 (1)	関連分野についての説明と討論
第8回	研究テーマに関する課題の検討 (2)	関連分野についての説明と討論
第9回	研究テーマに関する課題の検討 (3)	関連分野についての説明と討論
第10回	研究テーマに関する課題の検討 (4)	関連分野についての説明と討論
第11回	研究内容の報告 (5)	担当者の発表と質疑応答
第12回	研究内容の報告 (6)	担当者の発表と質疑応答
第13回	研究内容の報告 (7)	担当者の発表と質疑応答
第14回	研究内容の報告 (8)	担当者の発表と質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

しかし、自らの研究課題に対しての発表準備をしっかりと行うことが求められ、また、適宜、授業内容（発表内容）に関連する事項の課題について取り組むことが求められるので、授業外学習の時間は上記の限りではありません。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しません。

【参考書】

各担当者の発表や討論に関連する文献については、適宜、授業内で提示します。

【成績評価の方法と基準】

発表内容：50%，討論内容（発言等）：50％で評価します。発表については十分な準備が大前提となり、問題の所在・背景や論点を明確にした発表を高く評価します。また、討論については、疑問点・問題点を整理しつつ、論拠を提示した上で自身の考えを表明する発言を高く評価します。

【学生の意見等からの気づき】

討論が活発になるように授業を進めることを心掛けます。

【その他の重要事項】

秋学期開講の「社会経済地理学演習Ⅱ」／「国際日本学演習Ⅱ」（小原担当）も必ず併せて受講してください。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

人文地理学（都市地理学，経済地理学，社会地理学），都市開発論
＜研究テーマ＞

都市開発，都市形成，土地利用，土地所有

【Outline (in English)】

The aims of this course are to help students make progress each master theses and acquire the ability to consider various phenomena geographically. The students taking this course need to make a presentation and discuss each researches in this course in order to achieve these aims.

Before / after each class meeting, students will be expected to spend each 2 hours to understand the course content.

Final grade will be calculated according to the following process: making a presentation (50 %) and in-class contribution (50 %).

HUG600B5

社会経済地理学演習Ⅱ

小原 文明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業では、受講生が各自の修士論文の研究内容について報告し、それら報告に基づいて討論をすることで、各自の研究を進捗させていくことを授業の目的とします。また、受講生自身の研究を進めるだけでなく、他者の報告を聞き、討論を行うことを通じて、社会経済地理学的な考え方やモノの見方を修得することを目指します。

【到達目標】

本授業を通じて、受講生が適切な修士論文を完成すべく各自が研究を進捗させるとともに、社会経済地理学的な思考・観点を修得できるようになることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業は受講生の発表とそれに基づく討論を中心に展開していきます。また、適宜、各受講生の発表テーマに関連する分野についての課題を設定し、その課題について検討を行います。

また、本授業は演習（ゼミナール）形式ですので、課題等のフィードバックは適宜行います。

なお、今年度、本授業は基本的には対面形式で行いますが、場合によっては、Zoomによるリアルタイムオンライン形式やハイフレックス形式で行う授業回がある可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	研究テーマの発表	全受講生による研究の進捗状況の報告
第2回	研究内容の報告(1)	担当者の発表と質疑応答
第3回	研究内容の報告(2)	担当者の発表と質疑応答
第4回	研究内容の報告(3)	担当者の発表と質疑応答
第5回	研究内容の報告(4)	担当者の発表と質疑応答
第6回	研究テーマに関する課題の検討(1)	関連分野についての説明と討論
第7回	研究テーマに関する課題の検討(2)	関連分野についての説明と討論
第8回	研究テーマに関する課題の検討(3)	関連分野についての説明と討論
第9回	研究テーマに関する課題の検討(4)	関連分野についての説明と討論
第10回	研究内容の報告(5)	担当者の発表と質疑応答
第11回	研究内容の報告(6)	担当者の発表と質疑応答
第12回	研究内容の報告(7)	担当者の発表と質疑応答
第13回	研究内容の報告(8)	担当者の発表と質疑応答
第14回	総合討論	まとめ／包括的な討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

しかし、自らの研究課題に対しての発表準備をしっかりと行うことが求められ、また、適宜、授業内容（発表内容）に関連する事項の課題について取り組むことが求められるので、授業外学習の時間は上記の限りではありません。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しません。

【参考書】

各担当者の発表や討論に関連する文献については、適宜、授業内で提示します。

【成績評価の方法と基準】

発表内容：50%，討論内容（発言等）：50％で評価します。発表については十分な準備が大前提となり、問題の所在・背景や論点を明確にした発表を高く評価します。また、討論については、疑問点・問題点を整理しつつ、論拠を提示した上で自身の考えを表明する発言を高く評価します。

【学生の意見等からの気づき】

討論が活発になるように授業を進めることを心掛けます。

【その他の重要事項】

春学期開講の「社会経済地理学演習Ⅰ」／「国際日本学演習Ⅰ」（小原担当）も必ず併せて受講してください。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

人文地理学（都市地理学，経済地理学，社会地理学），都市開発論
＜研究テーマ＞

都市開発，都市形成，土地利用，土地所有

【Outline (in English)】

The aims of this course are to help students make progress each master theses and acquire the ability to consider various phenomena geographically. The students taking this course need to make a presentation and discuss each researches in this course in order to achieve these aims.

Before / after each class meeting, students will be expected to spend each 2 hours to understand the course content.

Final grade will be calculated according to the following process: making a presentation (50 %) and in-class contribution (50 %).

HUG500B5

文化地理学研究Ⅰ

中俣 均

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代の文化地理学の概要について学ぶ。基本的には、指示するテキストの講読という形で、1980年代以降大きな変貌を遂げた「新しい」文化地理学の内容を知り、その批判的受容につとめることを目的とする。

【到達目標】

古典的（＝平板！）なイメージをもたれがちな文化地理学が、近年どのように装いを新たにしているかを概観し、そこから自分なりの問題意識をもってテーマを立てられるようになることを目指したい。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

下記に指示するテキストを精読する。学生があらかじめ担当部分を読み、授業でそれを口頭発表し、担当者がそれに適宜解説を加えながら、議論していく。なお、テキストについては、受講者と相談のうえで変更することもあり得るので、初回授業時に用意しなくてもよい。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行なう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	テキストの各章をみて、あらましを把握する
第2回	テキスト第1章を読む①	「文化地理学から新しい文化地理学へ」その①
第3回	テキスト第1章を読む②	「文化地理学から新しい文化地理学へ」その②
第4回	テキスト第2章を読む①	「認識としての文化」その①
第5回	テキスト第2章を読む②	「認識としての文化」その②
第6回	テキスト第3章を読む①	「認識としての文化」その①
第7回	テキスト第3章を読む②	「認識としての文化」その②
第8回	テキスト第4章を読む①	「現代メディア空間と地理学」その①
第9回	テキスト第4章を読む②	「現代メディア空間と地理学」その②
第10回	テキスト第5章を読む①	「空間の政治学に向けて」その①
第11回	テキスト第5章を読む②	「空間の政治学に向けて」その②
第12回	テキスト第6章を読む①	「変わりゆく文化・人間概念と人文地理学」その①
第13回	テキスト第6章を読む②	「変わりゆく文化・人間概念と人文地理学」その②
第14回	テキスト第7章を読む①	「民俗文化のゆくえ」その①

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。事前にテキストの担当部分を詳しく読んで、自分の疑問点や問題点を析出しておくこと。

【テキスト（教科書）】

中俣均編(2011)：『空間の文化地理—シリーズ・人文地理学7』（朝倉書店）を用いる。このシリーズは人文地理学を学ぶ大学院生用のテキストを提供することを目的の一つとしているものだが、中身はなかなか難解なものである。個人的に取り組むのもよいが、一緒に議論しながら読んでいくことで、その難解な内容がいくらかでも理解しやすくなるであろう。

なお、テキストについては、受講者と相談のうえで変更することもあり得るので、初回授業時に用意しなくてもよい。

【参考書】

上記テキスト各章末にあげられている参考文献を適宜利用する。

【成績評価の方法と基準】

口頭の発表時の準備状況と問題設定（50%）、授業時の議論の内容（50%）を斟酌して判断・評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞文化地理学、島嶼地理学、沖縄地域研究など

＜研究テーマ＞日本および東アジアの島嶼における文化景観の形成と保全

＜主要研究業績＞

中俣均(2014):『渡名喜島—地割制と歴史的集落景観の保全—』(古今書院)

中俣均編著(2011):『空間の文化地理』シリーズ・人文地理学7.(朝倉書店)

中俣均編著:『国土空間と地域社会』シリーズ・人文地理学9.(朝倉書店)

中俣均訳(2018)『S. ロイル 島の地理学』(法政大学出版局)

【Outline (in English)】

In this course we are going to study how we should “do Cultural Geography”, using some texts . The aims and goals of this course is to comprehend these texts, and apply them to her/his own master thesis.

Grading will be decided based on the contents on discussion about the text.

HUG500B5

文化地理学研究Ⅱ

中俣 均

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代の文化地理学の概要について学ぶ。基本的には、指示するテキスト（英語文献）の講読という形で、1980年代以降大きな変貌を遂げた「新しい」文化地理学の内容を知り、その批判的受容につとめることを目的とする。

【到達目標】

世界の島嶼についての知識を得るとともに、それを基軸にして地球大の人間の生活空間を認識する視点を獲得することを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

下記に指示するテキストを精読する。学生があらかじめ担当部分を読み、授業でそれを口頭発表し、担当者がそれに適宜解説を加えながら、議論していく。今年度はテキストの後半5章分を読んでいく。なお、テキストについては、受講者と相談のうえで変更することもあり得るので、初回授業時に用意しなくてもよい。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行なう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	テキスト前半部分の復習
第2回	テキスト第5章①	読解と発表, 議論①
第3回	テキスト第5章②	読解と発表, 議論②
第4回	テキスト第6章①	読解と発表, 議論③
第5回	テキスト第6章②	読解と発表, 議論④
第6回	テキスト第6章③	読解と発表, 議論⑤
第7回	テキスト第7章①	読解と発表, 議論⑥
第8回	テキスト第7章②	読解と発表, 議論⑦
第9回	テキスト第8章①	読解と発表, 議論⑧
第10回	テキスト第8章②	読解と発表, 議論⑨
第11回	テキスト第9章①	読解と発表, 議論⑩
第12回	テキスト第9章②	読解と発表, 議論⑪
第13回	テキスト第10章①	読解と発表, 議論⑫
第14回	テキスト第10章②	読解と発表, 議論⑬

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。事前の文献読み込みが必須である。それをもとに授業で不明な個所などを読み解き理解してゆく。

【テキスト（教科書）】

Stephen Royle(2001)"A Geography of Islands : small island insularity." (Routledge). 著者は北アイルランド・Queens University の名誉教授。英語で書かれた島嶼の地理学の概説書であり、理解しやすい。原著は地理学科図書室に配架あり。

なお、テキストについては、受講者と相談のうえで変更することもあり得るので、初回授業時に用意しなくてもよい。

【参考書】

特に指定はしない。

【成績評価の方法と基準】

口頭の発表時の準備状況と問題設定（50%）、授業時の議論の内容（50%）を斟酌して判断・評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞文化地理学，島嶼地理学，沖縄地域研究など

＜研究テーマ＞日本および東アジアの島嶼における文化景観の形成と保全

＜主要研究業績＞

中俣均 (2014):『渡名喜島一地割制と歴史的集落景観の保全ー』(古今書院)

中俣均編著 (2011):『空間の文化地理』シリーズ・人文地理学 7. (朝倉書店)

中俣均編著:『国土空間と地域社会』シリーズ・人文地理学 9. (朝倉書店)

中俣均訳 (2018)『S. ロイル 島の地理学』(法政大学出版局)

【Outline (in English)】

In this course we are going to study how we should “do Cultural Geography”, by using some texts. The aims and goals of this course is to comprehend these texts, and apply them to her/his own master thesis.

Grading will be decided based on the contents on discussion about the text.

HUG600B5

文化地理学演習 I

中俣 均

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、文化地理学に包含される論題を用意した受講生が、修士論文を完成させるための、①テーマの設定とそれを練り上げる作業、②練り上げたテーマに沿った調査研究の実施状況を報告し、他の受講生と議論を交わす中間発表、③最終的な論文完成に向かった論点の整理、といった過程を進めるためのものである。

【到達目標】

春学期に行なわれるこの授業では、上記概要の①および②を中心に進め、執筆する修士論文の概略を固めることを到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

論題を抱えた受講生の発表と、それに対する討論を中心にして、授業を進めてゆく。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行なう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業方針の説明と各受講生の修士論文作成スケジュールの確認
第 2 回	論題の表明	全受講生による方針の発表
第 3 回	論題の確立	受講生相互で議論し、論題を確定させる
第 4 回	研究内容の報告①	各受講生の発表と質疑応答①
第 5 回	研究内容の報告②	各受講生の発表と質疑応答②
第 6 回	研究内容の報告③	各受講生の発表と質疑応答③
第 7 回	研究内容の報告④	各受講生の発表と質疑応答④
第 8 回	研究内容の報告⑤	各受講生の発表と質疑応答⑤
第 9 回	研究内容の報告⑥	各受講生の発表と質疑応答⑥
第 10 回	研究内容の報告⑦	各受講生の発表と質疑応答⑦
第 11 回	研究内容の報告⑧	各受講生の発表と質疑応答⑧
第 12 回	研究内容の報告⑨	各受講生の発表と質疑応答⑨
第 13 回	研究内容の報告⑩	各受講生の発表と質疑応答⑩
第 14 回	全体的整理	全体的整理

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

各自の発表時に与えられた指摘やコメントに対して、誠実かつ主体的に対処し、次回の発表に備えること。

【テキスト（教科書）】

使用しない。

【参考書】

さまざまな「論文の書き方」についてのマニュアルなどを適宜活用してほしい。

【成績評価の方法と基準】

口頭の発表時の準備状況と問題設定 (50%)、授業時の議論の内容 (50%) を斟酌して判断・評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞文化地理学・島嶼地理学・沖縄地域研究など

＜研究テーマ＞日本および東アジアの島嶼における文化景観の形成と保全

＜主要研究業績＞ 中俣均 (2014)『渡名喜島－地割制と歴史的集落景観の保全－』（古今書院）

中俣均編著 (2011)『空間の文化地理』シリーズ・人文地理学 7.（朝倉書店）

中俣均編著 (2004)『国土空間と地域社会』シリーズ・人文地理学 9.（朝倉書店）

中俣均訳 (2018)『S. ロイル 島の地理学』（法政大学出版局）

【Outline (in English)】

The aim of this course is to help student acquire some fundamental bases for his/hers master's thesis. So, the real goal must be the completion of master's thesis, but in this course discussion is greatly important.

Grading will be decided on term-end reports(100%).

HUG600B5

文化地理学演習Ⅱ

中俣 均

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、文化地理学に包含される論題を用意した受講生が、修士論文を完成させるための、①テーマの設定とそれを練り上げる作業、②練り上げたテーマに沿った調査研究の実施状況を報告し、他の受講生と議論を交わす中間発表、③最終的な論文完成に向かった論点の整理、といった過程を進めるためのものである。

【到達目標】

秋学期に行なわれるこの授業では、上記概要の②および③を中心に進め、執筆する修士論文の概略を固めることを到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

論題を抱えた受講生の発表と、それに対する討論を中心にして、授業を進めてゆく。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行なう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業内容の説明と各受講生の論文作成スケジュールの確認
第 2 回	研究内容の報告①	受講生の発表と質疑①
第 3 回	研究内容の報告②	受講生の発表と質疑②
第 4 回	研究内容の報告③	受講生の発表と質疑③
第 5 回	研究内容の報告④	受講生の発表と質疑④
第 6 回	研究内容の報告⑤	受講生の発表と質疑⑤
第 7 回	研究内容の報告⑥	受講生の発表と質疑⑥
第 8 回	研究内容の報告⑦	受講生の発表と質疑⑦
第 9 回	研究内容の報告⑧	受講生の発表と質疑⑧
第 10 回	研究内容の報告⑨	受講生の発表と質疑⑨
第 11 回	研究内容の報告⑩	受講生の発表と質疑⑩
第 12 回	研究内容の報告⑪	受講生の発表と質疑⑪
第 13 回	最終執筆指導①	論文内容の相互チェックと形式的整理－全体的検討
第 14 回	最終執筆指導②	論文内容の相互チェックと形式的整理－最終的整理

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
各自の発表時に与えられた指摘やコメントに対して、誠実かつ主体的に対処し、次の発表に備えること。

【テキスト（教科書）】

使用しない。

【参考書】

さまざまな「論文作成のためのマニュアル」類を適宜活用してほしい。ただし、マニュアルはそれをなぞるためではなく、精神をくみ取ることが大切である。

【成績評価の方法と基準】

発表のしかたとその内容 (50%) および質疑応答への内容 (50%) とを評価対象とする。自分の関心を他者に的確に説明し、その学問的意義を主張できることが重要である。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞文化地理学・島嶼地理学・沖縄地域研究など

＜研究テーマ＞日本および東アジアの島嶼における文化景観の形成と保全

＜主要研究業績＞ 中俣均 (2014)『渡名喜島－地割制と歴史的集落景観の保全－』（古今書院）

中俣均編著 (2011)『空間の文化地理』シリーズ・人文地理学 7.（朝倉書店）

中俣均編著 (2004)『国土空間と地域社会』シリーズ・人文地理学 9.（朝倉書店）

中俣均訳 (2018)『S. ロイル 島の地理学』（法政大学出版局）

【Outline (in English)】

The aim of this course is to help student acquire some fundamental bases for his/hers master's thesis. So, the real goal must be the completion of master's thesis, but in this course discussion is greatly important. Grading will be decided on term-end reports(100%).

HUG500B5

空間構成論研究 I

小田 宏信

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

地理学で生み出された知識というのは、個々の研究テーマ毎に断片化しがちです。多くの研究者が生み出した知的資産をどのように総合していったらよいのでしょうか。

経済地理学に立脚した統合的世界地誌の一アプローチとして、経済発展という縦糸を軸に据えて、**経済発展と地理空間**をテーマに講述します。

【到達目標】

- ・経済発展を分析する際の経済地理学的重要性を理解できる。
- ・経済地理学の主要概念を説明しそれを応用することができる。
- ・経済活動の決定要因として、歴史・環境・文化といった要因の役割を説明できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

配布資料をもとに講述し、意見・感想を求めます。学期の最後の方では、受講者から話題提供を求めます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	はじめに：経済発展と地理空間	本科目の方向性と視点を提示します。
2	地域が育んだ産業社会	アルフレッド・マーシャルが描いた 19 世紀欧州の産業世界について考えます。
3	ヘンリー・フォードが作った社会と国土	アメリカン・システムからフォード・システムへの合衆国の工業の展開。それが、地理学的にどのような含意を持ったのか考えます。
4	消費の場としての大都市郊外	大都市郊外というのは 20 世紀における歴史的産物です。快適な郊外を手に入れるための思想がどのように生まれ、どのように実践されたのか考えます。そして、サバービア（郊外居住者）の存在は大量生産大量消費の社会に不可分に結びついたものでした。
5	スノーベルトとサンベルト：合衆国の空間構造	経済的中軸地帯がいかに生み出され、そして、その後の周辺地帯の発展がいかになされたのか、合衆国の経済的空間構造の形成過程を概観します。
6	ブルーバナナとユーロ・サンベルト：欧州の空間構造	欧州の経済的空間構造の形成過程を概観します。
7	経済のグローバル化と多国籍企業	国境を越えた直接投資の活発化という意味で、「グローバル化」がいかに進化したのか、そのプロセスを検討します。
8	中国・ASEAN の工業化	1990 年代に工業化が急進した時の状況を振り返ります。

9	ブロック経済の形成と地域経済の適応	北米自由貿易協定やマーストリヒト条約の発効にともなって、北米や EU の地域経済はどのような再編の途上にあるだろうか。仏独国境地域や米墨国境地域を事例に考えてみます。
10	グローバル vs ローカル：世界都市と新しい産業空間	グローバリゼーションは人・モノ・資金の空間的流動性の拡大の一方で、新たな局地集中化＝ローカライゼーションの動きを伴っているのも事実です。こうした論調と実態分析を概観します。
11	世界都市の諸相：東京とバリ	多国籍企業の中枢管理機能の集積地としての世界都市の諸問題について、事例をもとに考えます。
12	履修者 A からの報告	授業で扱った Topic に関連した研究報告を求めます。
13	履修者 B からの報告	授業で扱った Topic に関連した研究報告を求めます
14	履修者 C からの報告	授業で扱った Topic に関連した研究報告を求めます

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備・復習時間は、各 4 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

使用しません。

【参考書】

伊藤喜栄（2006）：『教養としての地歴史—歴史のなかの地域』日本評論社。
上野 登（1967）：『経済地理学への道標』大明堂。
貝沼恵美ほか（2009）：『変動するフィリピン』二宮書店。
熊谷圭知・西川大二郎編（2000）：『第三世界を描く地誌—ローカルからグローバルへ』古今書院。
経済地理学会編（2010）：『経済地理学の成果と課題・第 7 集』日本経済評論社。
小林浩二・呉羽正昭編（2007）：『EU 拡大と新しいヨーロッパ』原書房。
手塚 章・呉羽正昭編（2008）：『ヨーロッパ統合時代のアルザスとロレーヌ』二宮書店。
生田真人（2011）：『東南アジアの大都市圏：拡大する地域統合』古今書院。
松原 宏編（2003）：『先進国経済の地域構造』東京大学出版会。
Knox, P., Agnew, J. and McCarthy, L. (2014): "The Geography of the World Economy < 6th Edition > ", Routledge.
その他、別途指示します。

【成績評価の方法と基準】

「配分 (%)」：平常点（出席状況を含む）60%、最終課題 40%。

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【学生が準備すべき機器他】

プロジェクター使用。

【その他の重要事項】

履修人数等により、本シラバスの内容は大幅に変更になる可能性があります。あらかじめご了承ください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>産業経済地理学
<研究テーマ>日本、欧州、東南アジアなどを対象にした産業集積システムの動態的研究、経済地誌、地域政策論
<主要研究業績>
『現代日本の機械工業集積』古今書院
『変動するフィリピン』二宮書店（共著）
『日本経済地理読本（第 9 版）』東洋経済新報社（共編著）
『経済地理学への招待』（共編著）
『世界地誌シリーズ 東南アジア・オセアニア』朝倉書店（共編著）
『経済地理学キーコンセプト』古今書院（共訳）
『キーワードで読む経済地理学』原書房（分担執筆）
『空間の経済地理』朝倉書店（分担執筆）
『ヨーロッパ統合時代のアルザスとロレーヌ』二宮書店（分担執筆）
『ヨーロッパ』朝倉書店（分担執筆）

『グローバリゼーション』朝倉書店（分担執筆）

【Outline (in English)】

This course provides basic concepts to economic and industrial geography. Topic areas include economic globalization, multinational corporations, regional economic development. By the end of the course, students should be able to do the followings:

- Evaluate the applicability and importance of economic geography in analyzing economic development;
- Explain, synthesize, and apply key concepts in economic geography;
- Explain the role of historical, environmental, cultural, and other factors in determining economic activities.

After each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

Grading will be decided based on term-end presentation (40%), and in-class contribution (60%).

HUG500B5

空間構成論研究Ⅱ

小田 宏信

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

空間構成論研究Ⅰの問題意識を引き継ぎ、秋学期はその日本篇としての位置付けです。日本の経済発展と地理空間をテーマに開講します。

1980年代までの日本の経済発展を可能にしたのはいかなる地理的条件か、日本の国土運営にとっての「20世紀システム」とは何であったのか——、一国の経済発展の歩みとその国の経済地理的な状況（すなわち、産業活動や人口の地域的配置、地域的分業体系）とは分かち難く結び付いています。経済発展の結果が地理的状况を生み出す場合もありますし、逆に特定の地理的状况が経済発展の基礎になる場合もあります。両者の関係を理論・実証の両面から解明していくのが経済地理学の課題です。

そして、経済のグローバル化に直面した今日、いかに地域の競争力を育んでいくべきか——、今日、地域経済の活性化策をめぐるさまざまな議論がなされていますが、ある地域の活性化を論じる際にも、その地域がマクロな地理空間のなかで置かれた状況、また、その時々で置かれた経済的状况を考慮にいれなければ議論ができません。

本科目では、1930年代以降の日本経済の歩みを縦糸にして、各時代にいかなる地理的状况があったのか、また、いかなる産業立地政策や地域政策が講じられたかを考えていきます。また、各トピックに関連した経済地理学の主要なフレームワークを紹介していきます。

【到達目標】

- ・経済発展を分析する際の経済地理学的重要性を理解できる。
- ・経済地理学の主要概念を説明しそれを応用することができる。
- ・経済活動の決定要因として、歴史・環境・文化といった要因の役割を説明できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

配布資料をもとに講述し、意見・感想を求めます。学期の最後の方では、受講者から話題提供を求めます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	はじめに：日本の経済発展と地理空間	本科目の方向性と視点を提示します。
2	戦前期までの国土形成と国土計画の始動	日本の国土運営にとっての「1940年体制」とはいかなるものであったのか、考えます。ドイツおよびアメリカからの影響を強く受けて、日本の国土計画の基点が形成されました。 【キー概念】ニューディールとTVA
3	太平洋ベルト構想と一全総	高度経済成長期の産業立地政策の論理について考えます。「国民経済の均衡ある発展」が唱われながらも、太平洋ベルトが形成されたのはなぜでしょうか。 【分析枠組み】成長の極理論

4	列島改造論と新全総・工配法	田中角栄が目指した経済社会とは、フォーディズムの日本的具現にほかならなかったのではないかという問題意識から、当時の立地政策・国土政策について検討します。 【分析枠組み】フォーディズム論
5	大都市郊外と日本の高度経済成長	日本におけるフォーディズムの形成を需要サイドから支えたのは、大都市の郊外居住者達です。東京圏を取り上げて、郊外の形成について考えます。 【分析枠組み】田園都市論と近隣住区論、バージェスモデル
6	日本の都市群システムと支所配置	内需を中心とした経済発展のなかで、財やサービスをいかに効率よく国土の隅々まで分配し、各地の支店・代理店網をいかに統括するかということは重要な課題でありました。とくに、製造業の販売網の形成に考えます。 【分析枠組み】都市システム論と地域構造論
7	日本の経済発展と地域産業集積 (1)	日本の経済発展を供給サイドから成功に導いたのは、中小企業がありなす産業集積地の存在です。まず、大都市圏の産業集積について考えます。 【分析枠組み】産業の局地化と外部経済、連関費用と産業集積
8	日本の経済発展と地域産業集積 (2)	続いて、地方圏の産業集積に目を向けます。 【分析枠組み】産業地域社会と基盤的産業技術
9	工業の地方分散と企業内地域間分業	1980年代までの日本の製造業の地方分散の論理について考えます。 【分析枠組み】プロダクトサイクル論
10	バブル経済期の国土政策と東京問題	四全総の取り組みと、その下での東京問題について考えます。 【分析枠組み】世界都市論
11	グローバル化と立地調整、地域経済	グローバル経済下における日本企業の立地調整と日本の地域経済の状況について、実証研究例を紹介しつつ、概説します。 【分析枠組み】立地調整の諸モデル
12	履修者Aのプレゼンテーション	授業で扱った Topic に関連した研究報告を求めます。
13	履修者Bのプレゼンテーション	授業で扱った Topic に関連した研究報告を求めます。
14	履修者Cのプレゼンテーション	授業で扱った Topic に関連した研究報告を求めます。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備・復習時間は、各4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

使用しません。

【参考書】

別途提示します。

【成績評価の方法と基準】

「配分 (%)」：平常点（出席状況を含む）60%、課題 40%

「評価基準」：平常点、課題とも、意欲的な取り組みと、理解度・論理性を評価基準にします。

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【学生が準備すべき機器他】

プロジェクター使用。

【その他の重要事項】

履修人数等により、本シラバスの内容は大幅に変更になる可能性があります。ありますが、あらかじめご了承ください。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞産業経済地理学

＜研究テーマ＞日本、欧州、東南アジアなどを対象にした産業集積システムの動態的研究、経済地誌、地域政策論

＜主要研究業績＞

『現代日本の機械工業集積』古今書院

『変動するフィリピン』二宮書店（共著）

『日本経済地理読本（第9版）』東洋経済新報社（共編著）

『経済地理学への招待』（共編著）

『世界地誌シリーズ 東南アジア・オセアニア』朝倉書店（共編著）

『経済地理学キーワード』古今書院（共訳）

『キーワードで読む経済地理学』原書房（分担執筆）

『空間の経済地理』朝倉書店（分担執筆）

『ヨーロッパ統合時代のアルザスとロレーヌ』二宮書店（分担執筆）

『ヨーロッパ』朝倉書店（分担執筆）

『グローバリゼーション』朝倉書店（分担執筆）

【Outline (in English)】

This course provides basic concepts to economic and industrial geography. Topic areas include locational and regional policy, spatial structure and national economic development in Japan. By the end of the course, students should be able to do the followings:

- Evaluate the applicability and importance of economic geography in analyzing economic development;
- Explain, synthesize, and apply key concepts in economic geography;
- Explain the role of historical, environmental, cultural, and other factors in determining economic activities.

After each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

Grading will be decided based on term-end presentation (40%), and in-class contribution (60%).

HUG500B5

歴史地理学研究Ⅰ

米家 志乃布

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

江戸東京を学び、江戸東京アトラスを作成しよう！～東京の史蹟/史跡マップから古代～近代の江戸東京の地域史を考える（1）

【到達目標】

様々な史料を読み、データを収集し、自ら地図作成（マッピング）することから、江戸東京を歴史的・空間的に把握し、その時代性・地域性を自分の頭で考え、論じることができるようになることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

大学の方針により、本年は対面授業を基本としますが、受講学生と相談しながら進めます。Google ドライブ上でデータを共有し、そこで作業をします。紙の配布・紙での作業は極力控えます。Google ドライブで作業したデータは教員がチェックをしてコメントします。オンラインの方が学習効率が上がる場合は、オンライン授業（Zoom）も取り入れます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	授業内容の説明、データの管理と注意事項、研究発表の方法、履修者・出席者の確認。
2	古代の遺跡・史蹟	古墳、武蔵国府や国分寺、古道など古代由来の遺跡・史蹟について学ぶ
3	中世の史蹟	寺院・神社など信仰に関わる史蹟、江戸以前の様々な史蹟を学ぶ
4	江戸史蹟	江戸史蹟の特徴について、先行研究をもとに学ぶ
5	明治以降、近代の史蹟	天皇聖蹟など近代以降の史蹟について、関連文献を読んで学ぶ
6	江戸東京の史蹟データの収集①	地図化するために、どのようなデータがあるのか、東京都 35 区および地域別に検討する。
7	江戸東京の史蹟データの収集②	麹町区・神田区のデータを収集する。
8	江戸東京の史蹟データの収集③	日本橋区・京橋区のデータを収集してまとめる。
9	江戸東京の史蹟データの収集④	その他の東京都区部におけるデータをまとめる。
10	東京の地図上にマッピングする①	史蹟の分布を地図上に示した地図をみながら考察する。
11	東京の地図上にマッピングする②	東京の史蹟の分布の特徴を考察し、その検討事項をまとめる。
12	東京の地図上にマッピングする③	東京の史蹟の分布の意味を分析する。
13	江戸東京における史蹟の分布を考察する	それぞれの分布について、その特徴を分析・考察し、議論する。
14	まとめ	作成した地図をもとに、江戸東京の空間的な多様性および歴史的な地域性についてまとめる

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

東京都内の博物館・資料館の常設展および様々な企画展をこまめにチェックし、機会をつくって足を運んでいただくことをおすすめします。

【テキスト（教科書）】

分析史料は主に東京都『東京都史蹟名勝天然記念物-旧市域内』（1943）を使います。その他、戸川残花『江戸史蹟』（1912）・同『東京史蹟写真帖』（1914）、東京府『東京府史蹟』も使います。すべて国会図書館デジタルコレクションを利用します。Google ドライブに配布します。

【参考書】

Google ドライブに適宜、関連文献を紹介します。

参考文献：米家志乃布（2021）：「戦前期東京都における史蹟の分布とその特徴-『東京都史蹟名勝天然記念物旧市域内』（1943）の分析」『法政大学地理学会 70 周年記念論文集』法政大学地理学会 70 周年記念事業

齋藤智志（2015）：『近代日本の史蹟保存事業とアカデミズム』法政大学出版局

岩淵令治（2009）：『江戸史蹟』の誕生-旧幕臣戸川残花の軌跡から-」（久留島浩ほか『文人世界の光芒と古都奈良』思文閣出版）

【成績評価の方法と基準】

「配分（%）」：参加 50 %、発表・作業 50%

「評価基準」：平常点

【学生の意見等からの気づき】

史料からデータを収集して地図を作成する作業、それに基づいて議論することは、とても面白い！と受講生の皆さんから感想をいただきました。江戸東京の歴史と地理に詳しくなります。地理学専攻以外の大学院生も大歓迎です。

【学生が準備すべき機器他】

地図上の位置を探すために Google マップが必要です。スマートフォンや PC、iPad などの機器類を持参してください。

【その他の重要事項】

年間を通して作業しますので、春学期・秋学期合わせての受講を推奨いたします。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>歴史地理学 地図史研究

<研究テーマ>日本北方の歴史地理学、日本・ロシアの地図史研究 江戸東京の名所研究

<主要研究業績>

「人びとにとっての近世日本のかたち」（田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか』、笠間書院、2015 年）

「近世日本図の北辺・『蝦夷地』表象」『文学』、2015 年「近代の名所図会にみる江戸イメージ」『法政地理』51 号、2020 年予定など

【Outline (in English)】

(Course outline) This course deals with mapping historical sites and studying historical geography of Edo Tokyo.

(Learning Objectives) The goals of this course is to enable students to understand Edo-Tokyo historically and spatially, and to be able to think and discuss its historical and regional characteristics.

(Learning activities outside of classroom) Your study time will be more than four hours for a class.

(Grading Criteria /Policy) Grading will be decided based on lab reports(

50%), and the quality of the students experimental performance in the lab(50%).

HUG500B5

歴史地理学研究Ⅱ

米家 志乃布

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

江戸東京を学び、江戸東京アトラスを作成しよう！～東京の史蹟/史跡マップから古代～近代の江戸東京の地域史を考える（2）

【到達目標】

様々な史料を読み、データを収集し、自ら地図作成（マッピング）することから、江戸東京を歴史的・空間的に把握し、その時代性・地域性を自分の頭で考え、論じることができるようになることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

大学の方針により、本年は対面授業を基本としますが、受講生と相談しながら進めます。Google ドライブ上で作業をし、紙の配布・紙での作業は極力控えます。Google ドライブで作業したデータは教員がチェックをしてコメントします。オンラインの方が学習効率が高まる場合は、オンライン授業（Zoom）も取り入れます。毎年 10 月頃に法政大学江戸東京研究センターの研究発表会に参加を予定しています。受講者同士、お互いに協力して、成果をまとめていただきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業内容の説明、データの管理と注意事項、研究発表の方法、履修者・出席者の確認。
第 2 回	研究発表会の準備①	春学期授業Ⅰの内容を振り返り、さらにどの点に課題があるのか、議論する。
第 3 回	研究発表会の準備②	補足の資料を収集し、分析をする
第 4 回	研究発表会の準備③	研究発表できそうな論点を整理する
第 5 回	研究発表会の準備④	研究発表の内容を決定する
第 6 回	研究発表会の準備⑤	研究発表用のパワーポイントを共同して作成する
第 7 回	研究発表会のリハーサル	研究発表会にむけてリハーサルをして、発表内容をブラッシュアップする
第 8 回	研究発表会の振り返り	今後の課題を議論する
第 9 回	地図のブラッシュアップ作業にむけて	補足データを収集する
第 10 回	地図上にマッピングする①	収集したデータを重ね合わせて、地図にのせる。
第 11 回	地図上にマッピングする②	収集したデータを地図上に表現して考察する。
第 12 回	地図上にマッピングする③	各要素の分布の意味を分析する。
第 13 回	地図上にマッピングする④	分布を考察し、江戸東京の地域的特徴を考察する。
第 14 回	まとめ	地図から見える江戸東京の歴史地理的特性を考察し、まとめる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。江戸東京の地形や水系、交通網や土地開発を把握するために、各自でフィールドにでて、実際に歩いてみることをおすすめします。

【テキスト（教科書）】

分析史料は主に東京都『東京都史蹟名勝天然記念物- 旧市域内』（1943）を使います。その他、戸川残花『江戸史蹟』（1912）・同『東京史蹟写真帖』（1914）、東京府『東京府史蹟』も使います。すべて国会図書館デジタルコレクションを利用します。Google ドライブに配布します。

【参考書】

Google ドライブに適宜、関連文献を紹介します。

参考文献：米家志乃布（2021）：「戦前期東京都における史蹟の分布とその特徴- 『東京都史蹟名勝天然記念物旧市域内』（1943）の分析」『法政大学地理学会 70 周年記念論文集』法政大学地理学会 70 周年記念事業
齋藤智志（2015）：『近代日本の史蹟保存事業とアカデミズム』法政大学出版局
岩淵令治（2009）：『江戸史蹟』の誕生- 旧幕臣戸川残花の軌跡から - 」（久留島浩ほか『文人世界の光芒と古都奈良』思文閣出版）

【成績評価の方法と基準】

「配分（%）」：参加 50 %、発表・作業 50 %

「評価基準」：平常点

【学生の意見等からの気づき】

実際に東京を歩いてみたいという意見もいただきました。秋～冬は気候も温暖で歩きやすいので、ぜひ外にでてみたいと思います。史料からデータを収集して地図を作成する作業、それに基づいて議論し発表することは、とても面白い！と受講生の皆さんから感想をいただきました。江戸東京の歴史と地理に詳しくなります。地理学専攻以外の大学院生も大歓迎です。

【学生が準備すべき機器他】

地図上の位置を探すために Google マップが必要です。スマートフォンや PC、iPad などの機器類を持参してください。

【その他の重要事項】

春学期・秋学期を通して作業を行います。年間の履修を推奨いたします。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>歴史地理学 地図史研究

<研究テーマ>日本北方の歴史地理学 日本・ロシアの地図史研究 江戸東京の名所研究

<主要研究業績>

『近世蝦夷地の地域情報- 日本北方地図史再考』法政大学出版局
「人びとにとっての近世日本のかたち」（田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか』、笠間書院、2015 年）
「近世日本図の北辺・蝦夷地」表象『文学』、2015 年「近代の名所図会にみる江戸イメージ」『法政地理』51 号、2020 年予定など

【Outline (in English)】

(Course outline) This course deals with mapping historical sites and studying historical geography of Edo Tokyo.

(Learning Objectives) The goals of this course is to enable students to understand Edo-Tokyo historically and spatially, and to be able to think and discuss its historical and regional characteristics.

(Learning activities outside of classroom) Your study time will be more than four hours for a class.

(Grading Criteria /Policy) Grading will be decided based on lab reports(

50%), and the quality of the students experimental performance in the lab(50%).

HUG600B5

歴史地理学演習 I

米家 志乃布

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

歴史地理学の論文の作成方法を学ぶ（1）

【到達目標】

歴史地理学の論文を作成するための先行研究の読み方やデータの収集方法・分析方法について把握することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

1. 歴史地理学の論文を読み、筆者の主張や学史における位置づけを読みとる訓練を行う。
 2. 歴史地理学的研究を行ううえでの史料収集の方法や史料読解の技術を身につけるため、実際の史料を読む練習を行い、該当分野のテキストを読んで学習する。
 3. 歴史地理学の論文内でのデータの利用方法や処理の仕方を学習する。
 4. 具体的な史料やデータを用いて、歴史地理学的な論理構成を考える訓練を行う。
- 大学の方針により、本年は対面授業を基本とします。発表レジュメや PPT などの資料類はすべて Google クラウドにアップするようにします。紙での配布は行いません。提出されたレジュメにコメントをつけて返送し、疑問点などをやりとりします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	出席者の確認、授業の概要について説明する。発表の順番を決める。
2	歴史地理学の論文の収集方法	テキストを読みながら、歴史地理学的テーマとは何かを把握し、それらに関連する論文の収集方法について学ぶ。
3	歴史地理学の論文の読み方①	論文の著者の主張について十分に理解する。
4	歴史地理学の論文の読み方②	論文中で図表の効果的な扱い方について、先行研究をもとに学ぶ。
5	歴史地理学の論文の読み方③	統計資料や行政の報告書類を用いた研究方法について、先行研究をもとに議論する。
6	史料の収集方法①	図書館における史料収集の方法を学ぶ。
7	史料の収集方法②	地方の文書館や博物館における史料収集の方法を学ぶ。
8	史料の読解練習①	古地図の読解方法について学ぶ。
9	史料の読解練習②	文書史料の読解方法について学ぶ。
10	データの処理方法①	史料をもとに、どのようなデータが論文作成に必要なか学ぶ。
11	データの処理方法②	歴史地理学的な研究テーマに即した効果的なグラフや表を作成する。
12	データの処理と論文構成①	先行研究をもとに、収集・処理したデータと論文構成の関係について分析する。

- 13 データの処理と論文構成② 先行研究をもとに、データと論旨の関係について把握する。
- 14 データの処理と論文構成③ 自分の研究テーマに即したデータの処理方法と構成について議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。自分の発表前には、図書館における事前の文献調査は十分に行うようにしてください。また、テキストなどのわからない（読めない）専門用語などは事前に各自で調べてから授業に参加してください。

【テキスト（教科書）】

特にありません。適宜授業内で指示します。

【参考書】

授業内において適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】

発表 50 %、平常点 30 %、討論への参加 20 %
評価基準：平常点

【学生の意見等からの気づき】

オリジナリティの高い論文が作成できるように、一人ずつ丁寧に指導するようにします。

【その他の重要事項】

歴史地理学分野で修士論文（学術論文）を作成する受講生向きの演習です。大学院および学部的人文地理学・歴史地理学分野の関連科目（講義等）は事前に履修するか、合わせて履修するなど、基礎的な知識や方法は学んでおいてください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 歴史地理学 地図史研究
<研究テーマ> 日本北方の歴史地理学、日本・ロシアの地図史研究
江戸東京の名所研究
<主要研究業績>
『近世蝦夷地の地域情報- 日本北方地図史再考』法政大学出版局
「人びとにとっての近世日本のかたち」（田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか』笠間書院、2015 年）
「近世日本図の北辺・『蝦夷地』表象」『文学』2015 年
「近代の名所図会にみる江戸イメージ」『法政地理』51 号 2020 年予定など

【Outline (in English)】

(Course outline) This course is to learn how write a paper on historical geography
(Learning Objectives) The course aims to give students an understanding of how to read previous research and how to collect and analyse data in order to prepare a paper on historical geography
(Learning activities outside of classroom) Your study time will be 4 hours for a class
(Grading Criteria /Policy) Grading will be decided based on lab reports(50%), and the quality of the students experimental performance in the lab (50%)

HUG600B5

歴史地理学演習Ⅱ

米家 志乃布

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

歴史地理学の論文の作成方法を学ぶ（2）

【到達目標】

歴史地理学の論文を作成するための先行研究の読み方やデータの収集方法、分析方法について、自分の関心あるテーマを選んで、発表し、論文作成の手順について学ぶことを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

1. 春学期の歴史地理学演習Ⅰの授業内容を踏まえ、各自の関心にもとづいて、歴史地理学的研究テーマを選ぶ。
 2. 受講者が先行研究の紹介、史料収集、データ処理と分析を行い、それを発表し、授業内で議論する。
- 大学の方針に従って、本年は対面授業を基本とします。資料はすべて Google クラウドにアップするようにします。紙での配布はいたしません。提出されたレジュメにコメントをつけて返送し、疑問点などをやりとりします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	受講者を確認し、発表の順番を決める。
2	先行研究の紹介①	受講者による研究テーマにもとづいた先行研究の紹介およびそれについての議論を行う（発表グループ①）。
3	先行研究の紹介②	受講者による研究テーマにもとづいた先行研究の紹介およびそれについての議論を行う（発表グループ②）。
4	先行研究の紹介③	受講者による研究テーマにもとづいた先行研究の紹介およびそれについての議論を行う（発表グループ③）。
5	先行研究の紹介④	受講者による研究テーマにもとづいた先行研究の紹介およびそれについての議論を行う（発表グループ④）。
6	史料紹介①	受講者が、各自で収集した史料の面白さや研究上の重要性などを紹介する（発表グループ①）。
7	史料紹介②	受講者が、各自で収集した史料の面白さや研究上の重要性などを紹介する（発表グループ②）。
8	史料紹介③	受講者が、各自で収集した史料の面白さや研究上の重要性などを紹介する（は発表グループ③）。
9	史料紹介④	受講者が、各自で収集した史料の面白さや研究上の重要性などを紹介する（発表グループ④）。
10	研究報告①	受講者各自が研究報告を行い、それにもとづいて議論する（発表グループ①）。

11	研究報告②	受講者各自が研究報告を行い、それにもとづいて議論する（発表グループ②）。
12	研究報告③	受講者各自が研究報告を行い、それにもとづいて議論する（発表グループ③）。
13	研究報告④	受講者各自が研究報告を行い、それにもとづいて議論する（発表グループ④）。
14	まとめ	受講者による研究報告を踏まえて、歴史地理学の研究の今後の展開について議論を行う（受講者全員）。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。各自の発表の前には、その内容を十分に準備してください。

【テキスト（教科書）】

特にありません。適宜授業内で指示します。

【参考書】

各自のテーマに即して、適宜、授業内で紹介します。

【成績評価の方法と基準】

発表 50 %、平常点 50 %

評価基準：平常点

【学生の意見等からの気づき】

先行研究の読み込みや論文の書き方など、一人ずつ丁寧に指導いたします。

【その他の重要事項】

歴史地理学分野で修士論文（学術論文）を作成する受講生向けの演習です。大学院および学部的人文地理学・歴史地理学分野の関連科目（講義等）は事前に履修するか、合わせて履修するなど、基礎的な知識や方法は学んでおいてください。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞歴史地理学 地図史研究

＜研究テーマ＞日本北方の歴史地理学、日本・ロシアの地図史研究 江戸東京の名所研究

＜主要研究業績＞

『近世蝦夷地の地域情報- 日本北方地図史再考』法政大学出版局「人びとにとっての近世日本のかたち」（田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか』笠間書院、2015 年）

「近世日本図の北辺・『蝦夷地』表象」『文学』2015 年

「近代の名所図会にみる江戸イメージ」『法政地理』51 号 2020 年予定など

【Outline (in English)】

(Course outline) This course is to learn how write a paper on historical geography

(Learning Objectives) The course aims to give students an understanding of how to read previous research and how to collect and analyse data in order to prepare a paper on historical geography

(Learning activities outside of classroom) Your study time will be 4 hours for a class

(Grading Criteria /Policy) Grading will be decided based on lab reports(50%), and the quality of the students experimental performance in the lab (50%)

HUG500B5

人文地理学文献講読 I

米家 志乃布

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業では、「日本」研究の英文学術書を読み、日本をフィールドとした学術研究の国際的発信の方法を学びます。

【到達目標】

1. 日本を対象とした英語文献を読むことにより、「日本」研究を国際的に発信する重要性を理解することを目指します。
2. 日本、特に「東京」の様々な地理的事象をどのように英語で説明するのか、あるいは学術用語をどのように日本語に翻訳するのか、英文を読みながら、その語彙を学習します。
3. また、日本語で書かれた文章をどのように英語に翻訳するのか、日本語の参考文献も読みながら、双方向で学習します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は、テキストの各章の訳を受講生で分担し、訳の担当者が翻訳し、それについて解説を行うことによって進めていきます。本授業は、発表・翻訳 → 解説のやりとりのため、より学習効果的な方法として、すべてオンライン授業（Zoom + オンデマンド）で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロ	担当の決定、講義方針の決定
第 2 回	TOKYO を読む①	Preface を読む 各受講生による発表
第 3 回	TOKYO を読む②	Introduction 前半を読む 各受講生による発表
第 4 回	TOKYO を読む③	Introduction 後半を読む 各受講生による発表
第 5 回	TOKYO を読む④	1. The High City Reading City を読む 各受講生による発表
第 6 回	TOKYO を読む⑤	1. The High City Topography, Roadways, and Land Use を読む 各受講生による発表
第 7 回	TOKYO を読む⑥	1.The High City The Logic of Place を読む 各受講生による発表
第 8 回	TOKYO を読む⑦	1. The High City The Lot as a keyword を読む 各受講生による発表
第 9 回	TOKYO を読む⑧	1. The High City Daimyo Establishment を読む 各受講生による発表
第 10 回	TOKYO を読む⑨	1. The High City Hatamoto Residences を読む 各受講生による発表
第 11 回	TOKYO を読む⑩	1. Ths High City Warrior Group Residences を読む 各受講生による発表

- 第12回 TOKYO を読む① 1. The High City
The Commoner Districts in the
Valleys を読む
各受講生による発表
- 第13回 TOKYO を読む② 1. The High City
Conclusion を読む
各受講生による発表
- 第14回 TOKYO を読む③ 東京の山の手 (High City of
Tokyo) の歴史と現代について議
論する
読んだ部分のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

日本語で出版された参考文献等は、各自読んで、事前に基礎的知識を学んでくることを前提とします。その上で担当者の翻訳内容の確認、理解に努めましょう。

【テキスト（教科書）】

Hiddenobu Jinnai1995. TOKYO : A Spatial Anthropology, California.

担当部分の PDF ファイルを配布いたします。

【参考書】

陣内秀信（2021）：『水都東京- 地形と歴史で読みとく下町・山の手・郊外』ちくま新書，同（1985）：『東京の空間人類学』筑摩書房（ちくま学芸文庫）。

池亨・櫻井良樹・陣内秀信・西木浩一・吉田伸之編（2019～2021）：『東京の歴史』全10巻（通史編全3巻・地帯編全7巻），吉川弘文館。

【成績評価の方法と基準】

発表：50%，レポート：50%

十分な準備が前提となります。発表時だけの準備ではなく、参加時の準備も評価の大きな対象となります。

【学生の意見等からの気づき】

新規担当科目のため、該当はありません。

【学生が準備すべき機器他】

Google クラウドームを開設し、そこで発表資料やコメントのやりとりをします。PC などの機器を準備してください。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞歴史地理学 地図史研究

＜研究テーマ＞蝦夷地・北海道の歴史地理学、日本・ロシアの地図史研究

＜主要研究業績＞

『近世蝦夷地の地域情報- 日本北方地図史再考』法政大学出版局
「人びとにとっての近世日本のかたち」（田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか』、笠間書院、2015年）

「近世日本図の北辺・『蝦夷地』表象」『文学』、2015年など

【Outline (in English)】

(Course outline) In this course, students will read English-language academic books on "Japanese" studies and learn how to disseminate academic research on Japan to the international community.

(Learning Objectives) 1. The aim of this course is to help students understand the importance of disseminating "Japan" studies internationally by reading English literature on Japan. 2. Students will learn how to explain various geographical events in Japan, especially "Tokyo", in English, or how to translate academic terms into Japanese, by reading English texts and learning their vocabulary.

3. Students will also learn how to translate Japanese texts into English, reading Japanese references in both directions. (Learning activities outside of classroom) Your study times will be 4 hours for a class.

(Grading Criteria /Policy) Grading will be decided based on lab reports(50%), and the quality of the students experimental performance in the lab (50%).

HUG500B5

人文地理学文献講読Ⅱ

米家 志乃布

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業では、「日本」研究の英文学術書を読み、日本をフィールドとした学術研究の国際的発信の方法を学びます。

【到達目標】

1. 日本を対象とした英語文献を読むことにより、「日本」研究を国際的に発信する重要性を理解することを目標とします。
2. 日本、特に「東京」の様々な地理的事象をどのように英語で説明するのか、あるいは学術用語をどのように日本語に翻訳するのか、英文を読みながら、その語彙を学習します。
3. また、日本語で書かれた文章をどのように英語に翻訳するのか、日本語の参考文献も読みながら、双方向で学習します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は、テキストの各章の訳を受講生で分担し、訳の担当者が翻訳し、それについて解説を行うことによって進めていきます。本授業は、発表・翻訳 → 解説のやりとりのため、より学習効果的な方法として、すべてオンライン授業（Zoom + オンデマンド）で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	イントロ	担当の決定、学習方法のガイダンス スケジュール決定
第2回	TOKYO を読む①	2. The Cosmology of a City of Water Introduction を読む 各受講生による発表
第3回	TOKYO を読む②	2. The Cosmology of a City of Water Edo Water System を読む 各受講生による発表
第4回	TOKYO を読む③	2. The Cosmology of a City of Water Canals as a Means of Transportation を読む 各受講生による発表
第5回	TOKYO を読む④	2. The Cosmology of a City of Water Waterfronts and Markets を読む 各受講生による発表
第6回	TOKYO を読む⑤	2. The Cosmology of a City of Water Landmarks along the Water を読む 各受講生による発表
第7回	TOKYO を読む⑥	2. The Cosmology of a City of Water Amusements Centers along the Avenues を読む 各受講生による発表

- 第 8 回 TOKYO を読む⑦ 2. The Cosmology of a City of Water Urban Theatrical Spaces を読む
各受講生による発表
- 第 9 回 TOKYO を読む⑧ 2. The Cosmology of a City of Water Water Side Space along the Sumida River を読む
各受講生による発表
- 第 10 回 TOKYO を読む⑨ 2. The Cosmology of a City of Water Water Front Space in Modern Times を読む
各受講生による発表
- 第 11 回 TOKYO を読む⑩ 2. The Cosmology of a City of Water Conclusion を読む
各受講生による発表
- 第 12 回 「東京」研究を考える ① High City (山の手) と Waterfront (下町) の研究をまとめる
各受講生による議論
- 第 13 回 「東京」研究を考える ② 山の手・下町・郊外の東京研究を論じる
各受講生による議論
- 第 14 回 国際的な視点から「日本」研究の意義を問う 東京研究とは、日本研究とは、国際的にどのような意義があるのか、議論する。
本授業のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各章に関わる参考文献等は、各自読んで、事前に基礎的知識を学んでくることを前提とします。その上で担当者の翻訳内容の確認、理解に努めましょう。

【テキスト（教科書）】

Hiddenobu Jinnai1995. TOKYO : A Spatial Anthropology, California.

担当部分の PDF ファイルを配布いたします。

【参考書】

陣内秀信（2021）：『水都東京- 地形と歴史で読みとく下町・山の手・郊外』ちくま新書、同（1985）：『東京の空間人類学』筑摩書房（ちくま学芸文庫）。

池亨・櫻井良樹・陣内秀信・西木浩一・吉田伸之編（2019～2021）：『東京の歴史』全 10 巻（通史編全 3 巻・地帯編全 7 巻）、吉川弘文館

【成績評価の方法と基準】

発表：50 %、レポート：50 %

十分な準備が前提となります。発表時だけの準備ではなく、参加時の準備も評価の大きな対象となります。

【学生の意見等からの気づき】

新規担当科目のため、該当はありません。

【学生が準備すべき機器他】

Google クラスルームを開設し、そこで発表資料やコメントのやりとりをします。PC などの機器を準備してください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 歴史地理学 地図史研究

<研究テーマ> 蝦夷地・北海道の歴史地理学、日本・ロシアの地図史研究

<主要研究業績>

『近世蝦夷地の地域情報- 日本北方地図史再考』法政大学出版局

「人びとにとっての近世日本のかたち」（田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか』、笠間書院、2015 年）

「近世日本図の北辺・『蝦夷地』表象」『文学』、2015 年など

【Outline (in English)】

(Course outline) In this course, students will read English-language academic books on "Japanese" studies and learn how to disseminate academic research on Japan to the international community.

(Learning Objectives) 1. The aim of this course is to help students understand the importance of disseminating "Japan" studies internationally by reading English literature on Japan.
2. Students will learn how to explain various geographical events in Japan, especially "Tokyo", in English, or how to translate academic terms into Japanese, by reading English texts and learning their vocabulary.
3. Students will also learn how to translate Japanese texts into English, reading Japanese references in both directions.
(Learning activities outside of classroom) Your study times will be 4 hours for a class.
(Grading Criteria /Policy) Grading will be decided based on lab reports(50%), and the quality of the students experimental performance in the lab (50%).

GEO500B5

地理情報システム研究 I

中山 大地

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

数値標高モデルの処理方法について述べられた英語文献を輪読しながら、内容に基づいて Python によるプログラミングを行う。その結果に機械学習の一種である決定木を適用して土砂災害判別モデルならびに土砂災害予測モデルを作成し、ハザードマップを作成する。

【到達目標】

- (1) ラスタ型の代表的なデータである数値地形モデルの処理方法について、原理を理解するとともに原理に基づいた数値計算ができる。
- (2) 判別モデルの性能について定量的に評価できる。
- (3) 土砂災害判別モデルに基づいたハザードマップが作成できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義ならびに実習型とする。授業内での発表を含む。分析結果についてのグループディスカッションを行う。
提出されたリアクションペーパーや課題については授業内で解説を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	空間データの取得	数値標高モデルのダウンロードとモザイク、投影変換
第 2 回	文献輪読と数値計算（その 1）	Python による傾斜量の計算
第 3 回	文献輪読と数値計算（その 2）	Python による曲率の計算
第 4 回	文献輪読と数値計算（その 3）	Python による接峰面の計算
第 5 回	文献輪読と数値計算（その 4）	Python による流路網処理
第 6 回	文献輪読と数値計算（その 5）	Python による Sediment Transport Index と Wetness Index の計算
第 7 回	ラスタ型データの集計処理	第 2 回から第 6 回で計算した地形量と土砂災害の有無をポリゴンごとに集計する。
第 8 回	機械学習を用いた土砂災害判別モデルの作成	第 7 回で集計した地形量を説明変数、土砂災害の有無を目的変数として、決定木を用いた判別モデルを作成する。
第 9 回	土砂災害判別モデルの評価	第 8 回で作成した判別モデルについて、判定効率率・正解率・カッパ係数・ROC 曲線に基づいた評価を行う。
第 10 回	土砂災害判別モデルの地図化	第 9 回で作成した判別モデルを、GIS を用いて地図化する。
第 11 回	土砂災害予測モデルの作成	第 8 回から第 10 回にかけて作成した土砂災害判別モデルをトレーニングデータとした土砂災害予測モデルを作成する。
第 12 回	土砂災害予測モデルの評価	第 11 回で作成した予測モデルの性能評価を行う。
第 13 回	土砂災害予測モデルの地図化	土砂災害予測モデルを図化し、ハザードマップを作成する。

第 14 回 修士論文研究に関する 修士論文研究での GIS 応用に関するプレゼンテーション するプレゼンテーション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

週あたりおよそ 2 時間の事前学習（特に文献講読・プログラミングなど）が必要となる。
前後期ともに GIS を用いた実習を含む。実習は授業内では終わらないので、授業外での復習（目安として週あたり 2 時間以上）が必要になる。

【テキスト（教科書）】

Burrough, P. A. and McDonnell, Rachael (1998) Principles of Geographical Information Systems (Spatial Information Systems), Oxford Univ. Press, pp. 333, ISBN-10: 9780198233657. (受講生に貸与する)

【参考書】

特に指定しない

【成績評価の方法と基準】

(1) 成績評価方法

平常点およびプレゼンテーション

(2) 成績評価基準・評価の配分等

平常点として授業への貢献度 (20 %) ならびに講義内容の理解度 (40 %) とする。これに加えてプレゼンテーション (40 %) で総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

ノート PC を持参すること。フリーのデスクトップ GIS である QGIS をインストールしておくこと。Google のアカウントを作成しておくこと。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

自然地理学、地理情報科学、災害シミュレーション

<研究テーマ>

自然災害のシミュレーション、避難行動シミュレーション、地形の定量的分析

<主要研究業績>

<https://researchmap.jp/read0196218>

【Outline (in English)】

Course outline;

We will read the textbook in English that describes how to process digital elevation models. Programming in Python will be conducted based on the content of the textbook. Then, we apply decision trees, a type of machine learning, to the results to create a landslide discrimination model and a landslide prediction model, and produce a hazard map.

Learning objectives;

- (1) Understand the principles of processing digital elevation models, which are representative of raster-type data, and be able to perform numerical calculations based on the principles.
- (2) To be able to quantitatively evaluate the performance of discriminant models.
- (3) To be able to create a hazard map based on a landslide discrimination model.

Learning activities outside of classroom;

Approximately 2 hours of prior study per week is required,

especially for literature reading and programming.

Both the first and second semesters include practical training using GIS. Reviewing outside the class (at least 2 hours per week) is necessary because the practical training is not completed in the class.

Grading criteria/policy

(1) Grading method

Ordinary points and presentations

(2) Grading criteria

Students will be evaluated based on their contribution to the class (20%) and their understanding of the lecture (40%). In addition to this, presentations (40%) will be used for overall evaluation.

GEO500B5

地理情報システム研究Ⅱ

中山 大地

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

道路データを用いたネットワーク分析を行う。ネットワーク分析には到達圏解析、最近隣施設探索、OD コストマトリクスの計算など含まれるが、これらの機能の基本的な考え方を理解した上で、実社会への応用として避難所の到達圏解析を行い、ハザードマップを作成する。

【到達目標】

- (1) ベクタ型の代表的なデータである道路データを用いてネットワーク分析を行い、施設の到達圏に基づいた人口集計ができる。
- (2) 避難行動シミュレーションに基づいたハザードマップが作成できる。
- (3) 自身の修士論文研究に GIS を応用する具体的な方策を立てることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義ならびに実習型とする。授業内での発表を含む。分析結果についてのグループディスカッションを行う。
提出されたリアクションペーパーや課題については授業内で解説を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	空間データの取得	基盤地図情報ベクタデータならびに国土数値情報の入手と投影変換を行う。
第 2 回	面積按分による人口推定（その 1）	建物データと小地域データを用いて建物ごとの人口推定を行う。
第 3 回	空間結合による人口推定（その 2）	第 2 回の結果を用いて土砂災害危険地域の人口推定を行う。
第 4 回	ネットワーク分析の基礎	ネットワーク分析に関する基本的な考え方、応用例などを理解し、必要なデータについての検討を行う。
第 5 回	道路ネットワークセットの作成	国土基本情報を用いて道路ネットワークデータセットを作成する。
第 6 回	避難所データの作成	避難所のポイントデータを作成する。
第 7 回	避難所における到達圏解析	ネットワーク解析に基づいて避難所ごとの到達圏（時間距離）を計算する。
第 8 回	避難所到達圏内の人口推定	第 2 回・第 7 回の結果を用いて避難所からの到達圏内の人口を推定する。
第 9 回	避難所到達圏の地図化	第 6 回から第 8 回の結果を用いて避難所到達圏の地図を作成する。
第 10 回	通行不可領域がある場合の避難シミュレーション（その 1）	通行不可能領域（バリア）を設定して避難所の到達圏解析を行う。
第 11 回	通行不可領域がある場合の避難シミュレーション（その 2）	第 10 回の結果を用いて地図を作成し検討する。

- 第 12 回 立ち寄り地がある場合の避難シミュレーション（その 1） 立ち寄り地がある場合（二段階避難）の避難シミュレーションとして、OD 行列を用いた最短経路検索を行う。
- 第 13 回 立ち寄り地がある場合の避難シミュレーション（その 2） 第 12 回の結果を用いて地図を作成し検討する。
- 第 14 回 修士論文研究に関するプレゼンテーション 修士論文研究での GIS 応用に関するプレゼンテーション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

前後期ともに GIS を用いた実習を含む。実習は週あたりおよそ 2 時間の事前学習と、授業外での復習（目安として週あたり 2 時間以上）が必要になる。

【テキスト（教科書）】

特に指定しない。必要なプリント類を配付する。

【参考書】

特に指定しない。

【成績評価の方法と基準】

- (1) 成績評価方法
平常点およびプレゼンテーション
- (2) 成績評価基準・評価の配分等
平常点として授業への貢献度（20 %）ならびに講義内容の理解度（40 %）とする。これに加えてプレゼンテーション（40 %）で総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

ノート PC を持参すること。フリーのデスクトップ GIS である QGIS をインストールしておくこと。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

自然地理学、地理情報科学、災害シミュレーション

<研究テーマ>

自然災害のシミュレーション、避難行動シミュレーション、地形の定量的分析

<主要研究業績>

<https://researchmap.jp/read0196218>

【Outline (in English)】

Course outline;

Perform network analysis using road data. Network analysis includes service area analysis, nearest facility search, OD cost matrix calculation, etc. After understanding the basic concept of these functions, we perform service area analysis of evacuation centers as an application to the real world. Create a hazard map.

Learning objectives;

(1) To be able to perform network analysis using road data, which is typical data of vector type, and to aggregate population based on the reach of facilities.

(2) To be able to create hazard maps based on evacuation behavior simulation.

(3) To be able to formulate concrete measures to apply GIS to one's own master's thesis research.

Learning activities outside of classroom;

Both the first and second semesters include practical training using GIS. The practical training requires about 2 hours of prior study per week and review outside the class (at least 2 hours per week as a rule).

Grading criteria/Policy

(1) Grading method

Ordinary points and presentations

(2) Grading criteria

Students will be evaluated based on their contribution to the class (20%) and their understanding of the lecture (40%). In addition to this, presentations (40%) will be used for overall evaluation.

GEO600B5

地理学現地研究 I**専任教員が担当**

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

教室内での講義内容を踏まえた上で、実際に現地に赴いて多くの地理学的事象を直接、観察・観測し、適切に理解することを目標にする。

【到達目標】

現地に赴いて、地理学的事象を目にした際、的確に自分の「眼（マナコ）」で理解可能な力の養成をすることに、この科目の主目標を据えている。本科目の履修を通して、地域における地理学的事象を客観的に把握できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

地理学専攻修士課程においては必修科目であり、修了までに地理学現地研究 I（1 単位＝2 泊 3 日以上）、および地理学現地研究 II（1 単位＝2 泊 3 日以上）の合計 2 単位の取得が必要です。履修する場合は、各年次の初めに必ず履修登録して下さい。個々の現地研究の実施などに関しては実施の都度、実施教員を通じて伝達する予定です。なお、現地研究を実施する担当教員やそのテーマによっては、海外で行う場合もあるので、その点に関して予め断っておきます。

基本的に地理学現地研究 I は修士 1 年次に、地理学現地研究 II は修士 2 年次に履修するのが望ましいでしょう。

なお、課題等に関してはオフィス・アワーでフィードバックする予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	本科目の概要説明	年度はじめに実施予定の担当教員とテーマを公表する予定である。
2 以降	集中的に実施する	現地での調査研究手法を学び、修士論文につなげる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、あわせて 1 時間を標準とします。ただし、集中講義形式であるので、その限りではありません。現地（フィールド）での学びだけでなく、事前学習や事後学習も十分に行う必要があります。

日頃から、年度の実施予定内容を念頭に置き、その事象が現場ではどのような状況にあるのかを考慮しながら、関連文献に目を通してください。

【テキスト（教科書）】

個々の教員が、その都度、適切な文献の紹介や地理学的事象への補足的な説明をする。

【参考書】

各実施教員が、その都度、適切な文献を紹介する。

【成績評価の方法と基準】

各教員が個々に実施した現地研究への参加学生に対して、その理解度などを中心に評価を行う。目安として参加に伴う平常点 60 %、レポート 40 %。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> <研究テーマ> <主要研究業績>

【Outline (in English)】

The aim of this course (fieldwork ,excursion) is to enable each student to conduct field survey independently by training in survey technics. By taking this course, students will be able to objectively understand geographic events in the region. The standard preparation and review time for this class is one hour in total. However, this is not limited to the intensive lecture format. Students who participate in the field research conducted by each teacher will be evaluated based on their understanding of the field research. As a rule of thumb, 60% of the evaluation will be based on normal points and 40% on reports.

GEO600B5

地理学現地研究Ⅱ

専任教員が担当

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

教室内での講義内容を踏まえた上で、実際に現地に赴いて多くの地理学的事象を直接、観察・観測し、適切に理解することを目標にする。

【到達目標】

現地に赴いて、地理学的事象を目にした際、的確に自分の「眼（マナコ）」で理解可能な力の養成をすることに、この科目の主目標を据えている。本科目の履修を通して、地域における地理学的事象を客観的に把握できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

地理学専攻修士課程においては必修科目であり、修了までに地理学現地研究Ⅰ（1単位＝2泊3日以上）、および地理学現地研究Ⅱ（1単位＝2泊3日以上）の合計2単位の取得が必要です。履修する場合は、各年次の初めに必ず履修登録して下さい。個々の現地研究の実施などに関しては実施の都度、実施教員を通じて伝達する予定です。なお、現地研究を実施する担当教員やそのテーマによっては、海外で行う場合もあるので、その点に関して予め断っておきます。

基本的に地理学現地研究Ⅰは修士1年次に、地理学現地研究Ⅱは修士2年次に履修するのが望ましいでしょう。

なお、課題等に関してはオフィス・アワーでフィードバックする予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	本科目の概要説明	年度はじめに実施予定の担当教員とテーマを公表する予定である。
2以降	集中的に実施する	現地での調査研究手法を学び、修士論文につなげる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、あわせて1時間を標準とします。ただし、集中講義形式であるので、その限りではありません。現地（フィールド）での学びだけでなく、事前学習や事後学習も十分に行う必要があります。

日頃から、年度の実施予定内容を念頭に置き、その事象が現場ではどのような状況にあるのかを考慮しながら、関連文献に目を通してください。

【テキスト（教科書）】

個々の教員が、その都度、適切な文献の紹介や地理学的事象への補足的な説明をする。

【参考書】

各実施教員が、その都度、適切な文献を紹介する。

【成績評価の方法と基準】

各教員が個々に実施した現地研究への参加学生に対して、その理解度などを中心に評価を行う。目安として参加に伴う平常点60%、レポート40%。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> <研究テーマ> <主要研究業績>

【Outline (in English)】

The aim of this course (fieldwork ,excursion) is to enable each student to conduct field survey independently by training in survey technics. By taking this course, students will be able to objectively understand geographic events in the region. The standard preparation and review time for this class is one hour in total. However, this is not limited to the intensive lecture format. Students who participate in the field research conducted by each teacher will be evaluated based on their understanding of the field research. As a rule of thumb, 60% of the evaluation will be based on normal points and 40% on reports.

HUG700B5

地理学特別演習 I

前卒 英明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

地形学や第四紀学に関わる博士論文作成のための研究指導

【到達目標】

博士論文の研究テーマに沿って、既存の研究論文を熟読し、さらなる科学としての課題を抽出する。その上で、受講学生が調査・分析した研究成果を発表し、議論を重ねることによって、博士論文を熟成させることを目標とする。またその過程において、まとまった研究課題ごとに、学術雑誌等に投稿する準備をすることも本授業の目標の一つとする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

研究課題に関連する既存の研究論文の読み込みと、そこから抽出した新たな課題について発表する。また自分の研究テーマに関する調査・分析結果について発表し、参加者全体で議論を行う。課題（質問事項）等を課した場合は学習支援システムにて回答する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス授業	本演習の趣旨の説明
第 2 回	研究テーマの設定 1	受講生の研究テーマの開陳と研究内容への意見交換 1
第 3 回	研究テーマの設定 2	受講生の研究テーマの開陳と研究内容への意見交換 2
第 4 回	研究内容の紹介 1	研究テーマに関連する既存研究論文のプレゼンテーション 1
第 5 回	研究内容の紹介 2	研究テーマに関連する既存研究論文のプレゼンテーション 2
第 6 回	研究内容の紹介 3	研究テーマに関連する既存研究論文のプレゼンテーション 3
第 7 回	研究内容の紹介 4	研究テーマに関連する既存研究論文のプレゼンテーション 4
第 8 回	受講生の研究内容 1	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論 1
第 9 回	受講生の研究内容 2	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論 2
第 10 回	受講生の研究内容 3	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論 3
第 11 回	受講生の研究内容 4	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論 4
第 12 回	博士論文の課題と方向性についての議論と指導 1	受講生の修士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導 1
第 13 回	博士論文の課題と方向性についての議論と指導 2	受講生の博士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導 2
第 14 回	博士論文の課題と方向性についての議論と指導 3	受講生の博士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導 3

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

つねに図書館などで関連する内外の文献に目を通しておくこと。準備・復習時間は 1 回につきそれぞれ 2 時間以上とする。

【テキスト（教科書）】

特に指定しない。自然地理学に関連する内外の文献。

【参考書】

「日本の地形 1-7」 東京大学出版会

「建設技術者のための地形読図入門 1-4」 古今書院

【成績評価の方法と基準】

プレゼンテーションの内容 (50%) や議論への積極的な参加など (50%) を評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

PowerPoint

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

自然地理学、(変動) 地形学、第四紀学

＜研究テーマ＞

プレート沈み込み帯における地震性地殻変動に関する地形・地質学的研究、新生代氷床変動に関する地形・地質学的研究、環境変化と人間社会に関する自然地理学的研究

＜主要研究業績＞

前卒英明ほか (2005) : 沈み込み帯沿岸の地殻変動を記録する古潮位計としての完新世暖温帯石灰岩に関する予察的研究. 地理科学, vol.60-3, pp.136-142.

Maemoku, H. et.al. (1997) : Stratigraphy of the Late Quaternary raised beach deposits in the northern part of Langhovde, Lutzow-Holm Bay, East Antarctica. The Proceedings of NIPR Symposium Antarctic Geoscience, 10, 178-186.

Maemoku, H. et.al. (2012) Geomorphological constraints on the Ghaggar River regime during the Mature Harappan period, in Climates, Landscapes, and Civilizations, Geophys. Monogr. Ser., vol. 198, edited by L. Giosan et al., 97 - 106, AGU, Washington, D. C.

【Outline (in English)】

This course deals with the research instruction to complete doctor thesis on Geomorphology and Quaternary sciences.

The goal of this course is to complete doctor thesis.

Before/after each class meeting, students will be expected to spend two hours to understand the course content.

Your overall grade in this class will be decided based on the following; Presentation 50%, in course contribution 50%.

HUG700B5

地理学特別演習Ⅱ

前卒 英明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

地形学や第四紀学に関わる博士論文作成のための研究指導

【到達目標】

博士論文の研究テーマに沿って、既存の研究論文を熟読し、さらなる科学としての課題を抽出する。その上で、受講学生が調査・分析した研究成果を発表し、議論を重ねることによって、博士論文を熟成・完成させることを目標とする。またその過程において、まとまった研究課題ごとに、学術雑誌等に投稿する準備をすることも本授業の目標の一つとする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

研究課題に関連する既存の研究論文の読み込みと、そこから抽出した新たな課題について発表する。また自分の研究テーマに関する調査・分析結果について発表し、参加者全体で議論を行う。課題（質問事項）等を課した場合は学習支援システムにて回答する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス授業	本演習の趣旨の説明
第 2 回	受講生の研究内容 1	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論 1
第 3 回	受講生の研究内容 2	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論 2
第 4 回	受講生の研究内容 3	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論 3
第 5 回	受講生の研究内容 4	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論 4
第 6 回	受講生の研究内容 5	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論 5
第 7 回	受講生の研究内容 6	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論 6
第 8 回	受講生の研究内容 7	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論 7
第 9 回	受講生の研究内容 8	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論 8
第 10 回	受講生の研究内容 9	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論 9
第 11 回	受講生の研究内容 1 0	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論 1 0
第 12 回	受講生の研究内容 1 1	受講生の博士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導 1 1

第 13 回 受講生の研究内容 1 2 受講生の博士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導 1 2

第 14 回 受講生の研究内容 1 3 受講生の博士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導 1 3

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

つねに図書館などで関連する内外の文献に目を通しておくこと。予習復習に 2 時間以上かけること。準備・復習時間は 1 回につきそれぞれ 2 時間以上とする。

【テキスト（教科書）】

とくに指定しない。自然地理学に関連ある内外の文献。

【参考書】

「日本の地形 1-7」 東京大学出版会

「建設技術者のための地形読図入門 1-4」 古今書院

【成績評価の方法と基準】

プレゼンテーションの内容 (50%) や議論への積極的な参加など (50%) を評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

PowerPoint

【その他の重要事項】

今年度は特殊事情のため、専攻生以外の受講はできないこととする。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

自然地理学、(変動) 地形学、第四紀学

<研究テーマ>

プレート沈み込み帯における地震性地殻変動に関する地形・地質学的研究、新生代氷床変動に関する地形・地質学的研究、環境変化と人間社会に関する自然地理学的研究

<主要研究業績>

前卒英明ほか（2005）：沈み込み帯沿岸の地殻変動を記録する古潮位計としての完新世暖温帯石灰岩に関する予察的研究。地理科学, vol.60-3, pp.136-142.

Maemoku, H. et.al. (1997) : Stratigraphy of the Late Quaternary raised beach deposits in the northern part of Langhovde, Lutzow-Holm Bay, East Antarctica. The Proceedings of NIPR Symposium Antarctic Geoscience, 10, 178-186.

Maemoku, H. et.al. (2012) Geomorphological constraints on the Ghaggar River regime during the Mature Harappan period, in Climates, Landscapes, and Civilizations, Geophys. Monogr. Ser., vol. 198, edited by L. Giosan et al., 97 - 106, AGU, Washington, D. C.

【Outline (in English)】

This course deals with the research instruction to complete doctor thesis on Geomorphology and Quaternary sciences.

The goal of this course is to complete doctor thesis.

Before/after each class meeting, students will be expected to spend two hours to understand the course content.

Your overall grade in this class will be decided based on the following; Presentation 50%, in course contribution 50%.

HUG700B5

地理学特別演習Ⅰ

小原 文明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本科目は、受講生が博士論文を執筆することを念頭に置いた授業です。具体的には、受講生が自らの研究内容に関する報告を行い、それに対する議論を通じて研究の進捗状況を確認するとともに、受講生の博士論文の研究に関連する研究動向や研究手法を広げ、高めることを目的とします。

【到達目標】

本授業を通じて、受講生が自らの研究を進展させることを目標とします。具体的には、研究内容のプレゼンテーションおよびディスカッションを通じて受講生が各自の研究を向上させ、そして、自らの研究の成果を学会発表や学術誌への投稿という形で公表できるようにすることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業は演習科目であることから、主として、受講生による研究内容のプレゼンテーションと、それに関するディスカッションによって授業を展開します。

また、本授業は演習（ゼミナール）形式ですので、課題等のフィードバックは適宜行います。

なお、今年度、本授業は基本的には対面形式で行いますが、場合によっては、オンライン形式や対面（ハイフレックス）形式で行う可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業内容・進め方・目標についての説明・確認／具体的な授業計画の調整・確認
第2回	研究内容および研究計画の紹介①	受講生による研究内容の概要および研究計画の紹介と意見交換①
第3回	研究内容および研究計画の紹介②	受講生による研究内容の概要および研究計画の紹介と意見交換②
第4回	研究内容の報告①	受講生による研究の中間報告および議論①
第5回	研究内容の報告②	受講生による研究の中間報告および議論②
第6回	研究分野のレビュー①	受講生の研究関連分野の動向に関する整理および議論①
第7回	研究分野のレビュー②	受講生の研究関連分野の動向に関する整理および議論②
第8回	研究内容の報告③	受講生による研究の中間報告および議論③
第9回	研究内容の報告④	受講生による研究の中間報告および議論④
第10回	研究手法の確認・検討①	受講生の研究に関わる研究手法（調査方法、分析方法など）の確認および議論①
第11回	研究手法の確認・検討②	受講生の研究に関わる研究手法（調査方法、分析方法など）の確認および議論②
第12回	研究内容の報告⑤	受講生による研究の中間報告および議論⑤
第13回	研究内容の報告⑥	受講生による研究の中間報告および議論⑥

第14回 課題の提示および方向性の確認 春学期を通じての受講生の研究の取り組みに対する課題の提示／今後の方向性の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備・復習時間は各2時間を標準とするが、研究を進め、論文を作成するには多くの時間が必要であるため、その限りではありません。

また、受講生が自らの研究を進展させておくことと共に、常に関連分野の研究動向を把握するよう努めることが求められます。

【テキスト（教科書）】

特定のテキストは使用しません。

【参考書】

特定の参考書は設定しませんが、受講生の研究内容に関わる文献すべてが参考書との扱いになります。

【成績評価の方法と基準】

受講生による各種プレゼンテーション：50％、ディスカッション：50％で成績評価します。

【学生の意見等からの気づき】

基本的には受講生の研究を進捗させることを第一の目的とする授業ですが、視野を広げ、関連分野の知識・方法論を修得することも視野に入れて授業を行います。

【その他の重要事項】

秋学期開講の「地理学特別演習Ⅱ」（小原担当）も必ず併せて受講してください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

人文地理学（都市地理学、経済地理学、社会地理学）、都市開発論

<研究テーマ>

都市開発、都市形成、土地利用、土地所有

【Outline (in English)】

The aims of this course are to help students make progress each doctoral dissertation and acquire the ability to consider various phenomena geographically. The students taking this course need to make presentations and discuss each researches in this course in order to achieve these aims.

Before / after each class meeting, students will be expected to spend each 2 hours to understand the course content.

Final grade will be calculated according to the following process: making a presentation (50 %) and in-class contribution (50 %).

HUG700B5

地理学特別演習Ⅱ

小原 文明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本科目は、受講生が博士論文を執筆することを念頭に置いた授業です。具体的には、受講生が自らの研究内容に関する報告を行い、それに対する議論を通じて研究の進捗状況を確認するとともに、受講生の博士論文の研究に関連する研究動向や研究手法を広げ、高めることを目的とします。

【到達目標】

本授業を通じて、受講生が自らの研究を進展させることを目標とします。具体的には、研究内容のプレゼンテーションおよびディスカッションを通じて受講生が各自の研究を向上させ、そして、自らの研究の成果を学会発表や学術誌への投稿という形で公表できるようにすることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業は演習科目であることから、主として、受講生による研究内容のプレゼンテーションと、それに関するディスカッションによって授業を展開します。

また、本授業は演習（ゼミナール）形式ですので、課題等のフィードバックは適宜行います。

なお、今年度、本授業は基本的には対面形式で行いますが、場合によっては、オンライン形式や対面（ハイフレックス）形式で行う可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業内容・進め方・目標についての説明・確認／具体的な授業計画の調整・確認
第 2 回	研究内容の報告①	受講生による研究の中間報告および議論①
第 3 回	研究内容の報告②	受講生による研究の中間報告および議論②
第 4 回	研究内容の報告③	受講生による研究の中間報告および議論③
第 5 回	研究内容の報告④	受講生による研究の中間報告および議論④
第 6 回	研究内容の報告⑤	受講生による研究の中間報告および議論⑤
第 7 回	研究内容の報告⑥	受講生による研究の中間報告および議論⑥
第 8 回	研究内容の報告⑦	受講生による研究の中間報告および議論⑦
第 9 回	研究内容の報告⑧	受講生による研究の中間報告および議論⑧
第 10 回	研究内容の報告⑨	受講生による研究の中間報告および議論⑨
第 11 回	研究内容の報告⑩	受講生による研究の中間報告および議論⑩
第 12 回	研究内容の報告⑪	受講生による研究の中間報告および議論⑪
第 13 回	研究内容の報告⑫	受講生による研究の中間報告および議論⑫

第 14 回 課題の提示および方向性の確認 秋学期を通じての受講生の研究の取り組みに対する課題の提示／今後の方向性の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備・復習時間は各 2 時間を標準とするが、研究を進め、論文を作成するには多くの時間が必要であるため、その限りではありません。

また、受講生が自らの研究を進展させておくことと共に、常に関連分野の研究動向を把握するよう努めることが求められます。

【テキスト（教科書）】

特定のテキストは使用しません。

【参考書】

特定の参考書は設定しませんが、受講生の研究内容に関わる文献すべてが参考書との扱いになります。

【成績評価の方法と基準】

受講生による各種プレゼンテーション：50 %、ディスカッション：50 %で成績評価します。

【学生の意見等からの気づき】

基本的には受講生の研究を進捗させることを第一の目的とする授業ですが、視野を広げ、関連分野の知識・方法論を修得することも視野に入れて授業を行います。

【その他の重要事項】

春学期開講の「地理学特別演習Ⅰ」（小原担当）も必ず併せて受講してください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

人文地理学（都市地理学、経済地理学、社会地理学）、都市開発論

<研究テーマ>

都市開発、都市形成、土地利用、土地所有

【Outline (in English)】

The aims of this course are to help students make progress each doctoral dissertation and acquire the ability to consider various phenomena geographically. The students taking this course need to make presentations and discuss each researches in this course in order to achieve these aims.

Before / after each class meeting, students will be expected to spend each 2 hours to understand the course content.

Final grade will be calculated according to the following process: making a presentation (50 %) and in-class contribution (50 %).

HUG700B5

地理学特別演習 I

伊藤 達也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

受講生の博士論文テーマを報告し、討論をすることによって、博士論文の完成を目指す。受講生は基本的に授業内で博士論文の構想、準備状況を発表する。同時に共同調査を実施する。

【到達目標】

適切な博士論文が作成できるようになる。具体的には、博士論文を作成するための適切な知識、適切な説明論理、適切な説明能力を獲得し、適切なオリジナリティを有した博士論文の作成ができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は受講生の発表と共同調査を行う。研究内容の報告については、授業内のやりとりで対応する。共同調査については、最後に提出してもらったレポートの評価を行い、受講生に返却する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	ゼミの運営についての議論を行う。
第2回	研究内容の報告（1）	受講生の発表と論文の作成技法について説明を行う。
第3回	研究内容の報告（2）	受講生の発表と文献検索方法について説明を行う。
第4回	研究内容の報告（3）	受講生の発表と発表レジュメについて説明を行う。
第5回	研究内容の報告（4）	受講生の発表と日本語の文法について説明を行う。
第6回	共同調査（1）－アンケート調査（1）－	フィールドワークを行う。アンケート調査の実施（1）
第7回	共同調査（2）－アンケート調査（2）－	フィールドワークを行う。アンケート調査の実施（2）
第8回	共同調査（3）－公的機関への訪問（1）－	フィールドワークを行う。関係公的機関への訪問（1）
第9回	共同調査（4）－公的機関への訪問（2）－	フィールドワークを行う。関係公的機関への訪問（2）
第10回	共同調査（5）－アンケート調査のとりまとめ－	フィールドワークを行う。アンケート調査のとりまとめを行う。
第11回	共同調査（6）－公的機関での聞き取り調査のとりまとめ－	フィールドワークを行う。公的機関での聞き取り調査のとりまとめを行う。
第12回	研究内容の報告（5）	受講生の発表と説明順序「単純ストーリー」の重要性について説明を行う。
第13回	研究内容の報告（6）	受講生の発表と説明順序「クロスストーリー」の重要性について説明を行う。
第14回	研究内容の報告（7）	受講生の発表と結論の中の「提案と願望」について説明を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。自らの研究課題に対する準備をしっかりと行うこと。具体的には、先行研究の読破、説明論理の獲得、分析手段の獲得、調査の実施、調査結果のとりまとめと分析などである。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しない。

【参考書】

別途、授業内で提示する。

【成績評価の方法と基準】

発表：50 % 討論：50 % 十分な準備が大前提となる。問題、論点の明確化された発表の評価が高い。討論は、単純な質問、意見に対する疑問の提示、反論を丁寧に分けて行われることが望ましい。

【学生の意見等からの気づき】

十分な議論の時間の確保に努めます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 水資源研究、資源環境論、地域経済論

<研究テーマ> 木曽川水系の水資源問題、地域資源の持続可能な利用、地域経済

<主要研究業績>

1. 「熊本県五木村における村民意識調査の分析結果と地域再生」法政大学文学部紀要 82 2021
2. 「ダムと環境問題について考える－川辺川ダム問題を事例に－」都市問題 112-8 2021
3. 「熊本県五木村における観光客の意識調査の分析結果と地域再生」法政大学文学部紀要 83 2021
4. 伊藤達也・小田宏信・加藤幸治編『経済地理学への招待』ミネルヴァ書房 2020
5. 「河童による水辺環境保全運動と地域振興効果－福岡県久留米市田主丸町を事例に－」水資源・環境研究 32 - 1 2019
6. 「長良川河口堰最適運用方法の模索」法政大学文学部紀要 78 2019
7. 「国土利用」（岡橋秀典・伊藤達也共著）（経済地理学会編『キーワードで読む経済地理学』原書房 2018）
8. 「環境問題への地理学のかかわり」（竹中克行編『人文地理学への招待』ミネルヴァ書房 2015）

【Outline (in English)】

(Course outline) (Learning Objectives) We aim to complete the doctoral dissertation by reporting and discussing the doctoral thesis theme of the students. Students basically present the concept and preparation status of their doctoral dissertations in class. Conduct joint surveys at the same time. Be able to create appropriate doctoral dissertations. Specifically, students will acquire appropriate knowledge, appropriate explanatory logic, and appropriate explanatory skills to write doctoral dissertations, and will be able to write doctoral dissertations with appropriate originality.

(Learning activities outside of classroom) The preparation study and review time for this class is 2 hours each as the standard. Be prepared for your research projects. Concretely, students read the preceding research, acquire the explanation logic, acquire the analysis means, execute the investigation, and summarize and analyze the investigation result, etc.

(Grading Criteria /Policy) Presentation: 50% Discussion: 50%

Well prepared is a major prerequisite. The evaluation of the presentation with the clarification of the problem and the issue is high. It is desirable that discussions be conducted in a carefully divided manner: simple questions, questions about opinions, and rebuttals.

HUG700B5

地理学特別演習Ⅱ

伊藤 達也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

受講生の博士論文テーマを報告し、討論をすることによって、博士論文の完成を目指す。受講生は基本的に授業内で博士論文の構想、準備状況を発表する。同時に共同調査を実施する。

【到達目標】

適切な博士論文が作成できるようになる。具体的には、博士論文を作成するための適切な知識、適切な説明論理、適切な説明能力を獲得し、適切なオリジナリティを有した博士論文の作成ができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は受講生の発表と共同調査を行う。研究内容の報告については、授業内のやりとりで対応する。共同調査については、最後に提出してもらったレポートの評価を行い、受講生に返却する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	ゼミの運営についての議論
第2回	研究内容の報告（1）と研究題名	受講生の発表と研究題名について説明する。
第3回	研究内容の報告（2）と研究目的	受講生の発表と研究目的における「オリジナリティの重要性」について説明する。
第4回	研究内容の報告（3）と方法論	受講生の発表と経済地理学の方法論、地域事例の理論について説明する。
第5回	研究内容の報告（4）と先行研究	受講生の発表と理論をたどる先行研究の重要性、類型化について説明する。
第6回	共同調査（1）－アンケート調査（1）－	フィールドワークを行う。アンケート調査の実施（1）
第7回	共同調査（2）－アンケート調査（2）－	フィールドワークを行う。アンケート調査の実施（2）
第8回	共同調査（3）－公的機関への訪問（1）－	フィールドワークを行う。関係公的機関への訪問（1）
第9回	共同調査（4）－公的機関への訪問（2）－	フィールドワークを行う。関係公的機関への訪問（2）
第10回	共同調査（5）－アンケート調査の取りまとめ－	フィールドワークを行う。アンケート調査の取りまとめを行う。
第11回	共同調査（6）－公的機関での聞き取り調査の取りまとめ－	フィールドワークを行う。公的機関での聞き取り調査の取りまとめを行う。
第12回	研究内容の報告（5）と引用文献の表示方法	受講生の発表と引用文献の表示方法について説明する。
第13回	研究内容の報告（6）と注の付け方	受講生の発表と注の付け方について説明する。
第14回	研究内容の報告（7）と構成表	受講生の発表と構成表について説明する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。自らの研究課題に対しての準備をしっかりと行うこと。具体的には、先行研究の読破、説明論理の獲得、分析手段の獲得、調査の実施、調査結果のとりまとめと分析などである。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しない。

【参考書】

別途、授業内で提示する。

【成績評価の方法と基準】

発表：50％ 討論：50％ 十分な準備が大前提となる。問題、論点の明確化された発表の評価が高い。討論は、単純な質問、意見に対する疑問の提示、反論を丁寧に分けて行われることが望ましい。

【学生の意見等からの気づき】

十分な議論の時間の確保に努めます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 水資源研究、資源環境論、地域経済論

<研究テーマ> 木曾川水系の水資源問題、地域資源の持続可能な利用、地域経済

<主要研究業績>

1. 「熊本県五木村における村民意識調査の分析結果と地域再生」法政大学文学部紀要 82 2021
2. 「ダムと環境問題について考える－川辺川ダム問題を事例に－」都市問題 112-8 2021
3. 「熊本県五木村における観光客の意識調査の分析結果と地域再生」法政大学文学部紀要 83 2021
4. 伊藤達也・小田宏信・加藤幸治編『経済地理学への招待』ミネルヴァ書房 2020
5. 「河童による水辺環境保全運動と地域振興効果－福岡県久留米市田主丸町を事例に－」水資源・環境研究 32－1 2019
6. 「長良川河口堰最適運用方法の模索」法政大学文学部紀要 78 2019
7. 「国土利用」（岡橋秀典・伊藤達也共著）（経済地理学会編『キーワードで読む経済地理学』原書房 2018）
8. 「環境問題への地理学のかかわり」（竹中克行編『人文地理学への招待』ミネルヴァ書房 2015）

【Outline (in English)】

(Course outline) (Learning Objectives) We aim to complete the doctoral dissertation by reporting and discussing the doctoral thesis theme of the students. Students basically present the concept and preparation status of their doctoral dissertations in class. Conduct joint surveys at the same time. Be able to create appropriate doctoral dissertations. Specifically, students will acquire appropriate knowledge, appropriate explanatory logic, and appropriate explanatory skills to write doctoral dissertations, and will be able to write doctoral dissertations with appropriate originality.

(Learning activities outside of classroom) The preparation study and review time for this class is 2 hours each as the standard. Be prepared for your research projects. Concretely, students read the preceding research, acquire the explanation logic, acquire the analysis means, execute the investigation, and summarize and analyze the investigation result, etc.

(Grading Criteria /Policy) Presentation: 50% Discussion: 50% Well prepared is a major prerequisite. The evaluation of the presentation with the clarification of the problem and the issue is high. It is desirable that discussions be conducted in a carefully divided manner: simple questions, questions about opinions, and rebuttals.

HUG500B5

人文地理学特殊講義 I

増淵 敏之

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

授業の概要としては、文化観光の一形態であるコンテンツツーリズムを軸に、その発展の過程、現状を視野に入れて論じていきます。またコンテンツツーリズムの資源であるコンテンツそのものを生産する産業のありかたにも言及していきます。授業の目的は観光行動、観光を取り巻く周辺環境の変化を読み込みつつ、コンテンツツーリズムの一般化の要因についてを明らかにすることです。意義は日本の産業振興、地域振興のためにコンテンツツーリズムの活用の方法を学ぶことで、グローバル社会のなかでの競争優位を考える一助になる点にあります。

【到達目標】

- ・学生がコンテンツツーリズムの定義、これまでの経緯を理解することで、観光そのものの本質を把握できます。
- ・学生がコンテンツツーリズムの資源となるコンテンツ産業振興政策及び企業のイノベーションを理解することができます。
- ・学生がグローバル社会の中でのコンテンツツーリズムの果たす役割、コンテンツ産業の比較優位確保の重要性を理解できます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義を中心に進めます。適宜、授業内での議論も行い、また授業の性格上、映像資料を効果的に使っていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス/guidance	授業の概要/Class outline
第 2 回	取り巻く環境の変化/Changes in the surrounding environment	コンテンツを取り巻く経済、社会状況の変化についての説明/Explanation of changes in economic and social conditions surrounding content
第 3 回	コンテンツツーリズムの定義と研究の系譜/Definition of content tourism and genealogy of research	コンテンツツーリズムの定義とこれまでの研究の流れについての説明/Explanation of the definition of content tourism and the flow of research so far
第 4 回	アニメツーリズムと地域振興/Anime tourism and regional promotion	アニメを活用した集客による地域振興についての説明/Explanation about regional promotion by attracting customers using animation
第 5 回	インバウンド観光客の増加/Increase in inbound tourists	インバウンド観光客の増加の要因についての説明/Explanation of the factors behind the increase in inbound tourists
第 6 回	コンテンツツーリズムと拡張現実/Content tourism and augmented reality	バーチャルにシフトする観光の変化/Explanation of changes in tourism that shift virtually
第 7 回	プロダクトプレイスメント/Product placement	コンテンツ作品を活用したプロモーションについての説明/Explanation of promotion utilizing content works

第 8 回	コンテンツ産業の東京集中と地域分散/Concentration of content industry in Tokyo and regional decentralization	コンテンツ産業のこれまでと今後について no 説明/About the past and future of the content industry no Explanation
第 9 回	クールジャパン/Cool Japan	政府のクールジャパン政策の評価/Evaluation of the government's cool Japan policy
第 10 回	韓国のコンテンツ産業振興政策/Korea's content industry promotion policy	韓国のコンテンツ産業政策の評価/Evaluation of Korean content industry policy
第 11 回	ローカルコンテンツ/Local content	ローカルでのコンテンツ産業創出/Creating a local content industry
第 12 回	メディアの変化/Media changes	メディアの多様化/Media diversification
第 13 回	体験的具体例の紹介/Introduction of experiential concrete examples	札幌、岩見沢、南魚沼、宇都宮などの事例/Cases of Sapporo, Iwamizawa, Minami Uonuma, Utsunomiya, etc.
第 14 回	議論（日本のコンテンツの未来）/Discussion (Future of Japanese content)	日本のコンテンツは比較優位をどう取ればいいのか？ /How should Japanese content take a comparative advantage?

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

復習をしてきてください。本授業の準備学習・復習時間は各 1 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特にありません。PP（授業資料）を配布します。

【参考書】

増淵敏之（2010）『物語を旅するひとびと—コンテンツツーリズムとは何か？』彩流社
 増淵敏之（2018）『ローカルコンテンツと地域再生 観光創出から産業振興へ』水曜社

【成績評価の方法と基準】

平常点 30 %、レポート 70 %

【学生の意見等からの気づき】

本年度新規科目につきアンケートを実施していません。

【学生が準備すべき機器他】

特にありません。

【その他の重要事項】

- ・オフィスアワー月曜日 16 - 18 時
- ・実務経験者として、さまざまな地域振興に関わっていますので、携わった事例も授業内で紹介します。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞＜研究テーマ＞＜主要研究業績＞

【文化地理学】

・『路地裏が文化を生む!：細街路とその界隈の変容』青弓社

【観光地理学】

・増淵敏之（2010）『物語を旅するひとびと—コンテンツツーリズムとは何か？』彩流社

【地域振興】

・増淵敏之（2018）『ローカルコンテンツと地域再生 観光創出から産業振興へ』水曜社

【経済地理学】

・増淵敏之（2010）『欲望の音楽』法政大学出版局

【Outline (in English)】

(Course outline)

As an outline of the class, we will discuss the process of development and the current situation, focusing on content tourism, which is a form of cultural tourism. It also mentions the ideal way of the industry that produces the content itself, which is a resource of content tourism.

(Learning Objectives)

The goal of students is to understand the overall tourism behavior of content tourism.

(Learning activities outside of classroom)

The purpose of the lesson is to clarify the factors of generalization of content tourism while reading the tourism behavior and changes in the surrounding environment.

(Grading Criteria /Policy)

The significance is that it helps students to think about their competitive advantage in the global society by learning how to utilize content tourism for the promotion of Japanese industry and regional development.

HUG500B5

人文地理学特殊講義 II

梶田 真

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

【授業概要】東京の100年

【授業の目的意義】本講義では東京の100年間（最初の国勢調査が1920年に行われてから2020年でちょうど100年になります）の動態について、主として住民特性の変化と地方行財政の観点から検討することで、現代の先進国大都市の内部構造の動態と東京の特徴の双方を理解することを目的としています。

【到達目標】

- 1) 現代の先進国大都市の内部構造の動態について理解し、その上で東京の特徴を位置づけられるようにする。
- 2) 小地域統計、地方財政資料をはじめとした本講義に関連した資料・統計の所在と利用法を習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

統計データのPC作業を交えた講義を中心にを行い、状況が許せばフィールドワークを実施します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	この授業の概要を説明します。
第2回	東京の人口の100年	国勢調査データを用いて東京の100年間の人口変化をみていきます。
第3回	東京の社会地図	利用可能な統計資料を用いて、住民の年齢構成・職業等の側面から東京の内部構造変化をみていきます。
第4回	東京はどのように改造されてきたのか	第3回の内容を踏まえて、東京の空間構造に大きな影響を与えた出来事や都市改造について見ていきます。
第5回	特別区の財政調整	東京都は最も豊かな自治体の1つですが、特別区毎の性格は大きく異なります。東京都と特別区の関係について説明した上で特別区の間でどのような財政調整を行っているのかを説明します。
第6回	特別区の役割分担	特別区のいくつかの区を取り上げて行財政の面における特徴を見ていくことで特別区の役割分担について考えて行きます。
第7回	人口の都心回帰現象の再考	1990年代末期以降の人口の都心回帰現象について、地域スケールを小さくして検討していくことにより、その特徴・性格について考察します。
第8回	都心におけるにおける住居用不動産開発	人口の都心回帰現象の背後で不動産資本がどのような住宅開発を行ったのかを考えて行きます。
第9回	総務省統計図書館の統計資料	総務省統計図書館が所蔵している各種の統計資料について説明します。

第 10 回	総務省統計図書館の地図資料	総務省統計図書館が所蔵している各種の地図資料について説明します
第 11 回	COVID-19 と東京の人口	COVID-19 の感染拡大によって東京の人口の動きは大きく変化しています。この点について 1 ヶ月単位の小地域人口統計を用いて考えて行きます。
第 12 回	東京の地形と社会構造（フィールドワーク）	第 3 回・第 4 回の内容について、現地で説明を行います。
第 13 回	人口の都心回帰現象と住居用不動産開発（フィールドワーク）	第 7 回・第 8 回の内容について、現地で説明を行います。
第 14 回	期末小レポート	13 回の講義内容を踏まえて小レポートを作成し、講義全体に関する意見交換の場を設けます。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

特にありません。

【テキスト（教科書）】

特にありません。

【参考書】

授業中に指示します。

【成績評価の方法と基準】

授業への貢献：75%，最終の小レポート：25%

【学生の意見等からの気づき】

授業の最後で授業内容についてのコメント・質問を出してもらい、翌日に回答します。

【学生が準備すべき機器他】

ノート PC を用意しておいてください（ウインドウズでも Mac でも構いません）

【その他の重要事項】

特にありません。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞地方行政の地理学、地域開発論、小地域統計論
 ＜研究テーマ＞公共投資と地域経済、地域間所得再分配、地域開発と地域の社会動態、東京の都市内部構造変化
 ＜主要研究業績＞

梶田 真 2018. 第二次世界大戦期周辺に提起されたアメリカ合衆国の都市内部構造モデルとその背景。地理学評論 91: 79-96.

梶田 真 2018. 1965 年から 1980 年の間における東京都心部居住者の社会-空間パターン変化：国勢調査・調査区別集計の地図化を通じて。人文地理 69: 467-484.

梶田 真 2019. 関東大震災、空襲と町丁別にみた東京中心部の社会-空間パターン変化（1920～1965）。地学雑誌 128: 855-878.

【Outline (in English)】

(Course outline) One hundred years of spatial dynamics in Tokyo

(Learning Objectives) The goals of this course are to understand spatial dynamics in Tokyo mainly from viewpoints of inhabitants' characteristics, and public administration and finance, and to acquire skills for using relevant materials and statistics. I hope that this lecture deepen your understandings both of dynamics in modern metropolitan areas of developed nations and of uniqueness of Tokyo.

(Learning activities outside of classroom) After each class meeting, students will be expected to have read the suggested materials suggested in the class.

(Grading Criteria /Policy) Your overall grade in the class will be decided based on the following

Short reports : 25%, in class contribution: 75%

GEO500B5

自然地理学特別講義 I

中山 大地

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

数値標高モデルの処理方法について述べられた英語文献を輪読しながら、内容に基づいて Python によるプログラミングを行う。その結果に機械学習の一種である決定木を適用して土砂災害判別モデルならびに土砂災害予測モデルを作成し、ハザードマップを作成する。

【到達目標】

- (1) ラスタ型の代表的なデータである数値地形モデルの処理方法について、原理を理解するとともに原理に基づいた数値計算ができる。
- (2) 混同行列から求まる各種指標を用いて、判別モデルの性能を定量的に評価できる。
- (3) 土砂災害判別モデルに基づいたハザードマップが作成できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義ならびに実習型式とする。授業内での発表を含む。分析結果についてのグループディスカッションを行う。提出されたリアクションペーパーや課題については授業内で解説を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	空間データの取得	数値標高モデルのダウンロードとモザイク、投影変換
第 2 回	文献輪読と数値計算（その 1）	Python による傾斜量の計算
第 3 回	文献輪読と数値計算（その 2）	Python による曲率の計算
第 4 回	文献輪読と数値計算（その 3）	Python による接峰面の計算
第 5 回	文献輪読と数値計算（その 4）	Python による流路網処理
第 6 回	文献輪読と数値計算（その 5）	Python による Sediment Transport Index と Wetness Index の計算
第 7 回	ラスタ型データの集計処理	第 2 回から第 6 回で計算した地形量と土砂災害の有無をポリゴンごとに集計する。
第 8 回	機械学習を用いた土砂災害判別モデルの作成	第 7 回で集計した地形量を説明変数、土砂災害の有無を目的変数として、決定木を用いた判別モデルを作成する。
第 9 回	土砂災害判別モデルの評価	第 8 回で作成した判別モデルについて、判定効率表・正解率・カッパ係数・ROC 曲線に基づいた評価を行う。
第 10 回	土砂災害判別モデルの地図化	第 9 回で作成した判別モデルを、GIS を用いて地図化する。
第 11 回	土砂災害予測モデルの作成	第 8 回から第 10 回にかけて作成した土砂災害判別モデルをトレーニングデータとした土砂災害予測モデルを作成する。
第 12 回	土砂災害予測モデルの評価	第 11 回で作成した予測モデルの性能評価を行う。
第 13 回	土砂災害予測モデルの地図化	土砂災害予測モデルを図化し、ハザードマップを作成する。

第 14 回 博士論文研究に関する 博士論文研究での GIS 応用に関
プレゼンテーション するプレゼンテーション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

週あたりおよそ 2 時間の事前学習（特に文献講読・プログラミング
など）が必要となる。

前後期ともに GIS を用いた実習を含む。実習は授業内では終わらな
いので、授業外での復習（目安として週あたり 2 時間以上）が必要
になる。

【テキスト（教科書）】

Burrough, P. A. and McDonnell, Rachael (1998) Principles of
Geographical Information Systems (Spatial Information Sys-
tems), Oxford Univ. Press, pp. 333, ISBN-10: 9780198233657.
(受講生に貸与する)

【参考書】

特に指定しない

【成績評価の方法と基準】

(1) 成績評価方法

平常点およびプレゼンテーション

(2) 成績評価基準・評価の配分等

授業内容の自身の研究課題への具体的な応用度 (40 %) ならびに講
義内容の理解度 (40 %) とする。これに加えてプレゼンテーション
(20 %) で総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

ノート PC を持参すること。フリーのデスクトップ GIS である QGIS
をインストールしておくこと。Google のアカウントを作成しておく
こと。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

自然地理学、地理情報科学、災害シミュレーション

<研究テーマ>

自然災害のシミュレーション、避難行動シミュレーション、地形の
定量的分析

<主要研究業績>

<https://researchmap.jp/read0196218>

【Outline (in English)】

Course outline;

We will read the textbook in English that describes how to
process digital elevation models. Programming in Python will
be conducted based on the content of the textbook. Then, we
apply decision trees, a type of machine learning, to the results
to create a landslide discrimination model and a landslide
prediction model, and produce a hazard map.

Learning objectives;

(1) Understand the principles of processing digital elevation
models, which are representative of raster-type data, and be
able to perform numerical calculations based on the principles.

(2) To be able to quantitatively evaluate the performance of the
discrimination model using various indices obtained from the
confusion matrix.

(3) To be able to create a hazard map based on a landslide
discrimination model.

Learning activities outside of classroom;

Approximately 2 hours of prior study per week is required,
especially for literature reading and programming.

Both the first and second semesters include practical training
using GIS. Reviewing outside the class (at least 2 hours
per week) is necessary because the practical training is not
completed in the class.

Grading criteria/policy

(1) Grading method

Ordinary points and presentations

(2) Grading criteria

The degree of application of the course content to your own
research project (40%) and the degree of understanding of the
lecture content (40%) will be considered. In addition to this,
the presentation (20%) will be evaluated comprehensively.

GEO500B5

自然地理学特別講義 II

中山 大地

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

道路データを用いたネットワーク分析を行う。ネットワーク分析に
は到達圏解析、最近隣施設探索、OD コストマトリクスの計算など
含まれるが、これらの機能の基本的な考え方を理解した上で、実社
会への応用として避難所の到達圏解析を行い、ハザードマップを作
成する。

【到達目標】

(1) ベクタ型の代表的なデータである道路データを用いてネットワ
ーク分析を行い、施設の到達圏に基づいた人口集計ができる。

(2) 避難行動シミュレーションに基づいたハザードマップが作成で
きる。

(3) 自身の博士論文研究に GIS を応用する具体的な方策を立てるこ
とができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示され
た能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針
に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義ならびに実習型とする。授業内での発表を含む。分析結果に
ついてのグループディスカッションを行う。
提出されたリアクションペーパーや課題については授業内で解説を
行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	空間データの取得	基盤地図情報ベクタデータならび に国土数値情報の入手と投影変換 を行う。
第 2 回	面積按分による人口推 定（その 1）	建物データと小地域データを用い て建物ごとの人口推定を行う。
第 3 回	空間結合による人口推 定（その 2）	第 2 回の結果を用いて土砂災害 危険地域の人口推定を行う。
第 4 回	ネットワーク分析の基 礎	ネットワーク分析に関する基本 的な考え方、応用例などを理解し、 必要なデータについての検討を行 う。
第 5 回	道路ネットワークセッ トの作成	国土基本情報を用いて道路ネット ワークデータセットを作成する。
第 6 回	避難所データの作成	避難所のポイントデータを作成す る。
第 7 回	避難所における到達圏 解析	ネットワーク解析に基づいて避難 所ごとの到達圏（時間距離）を計 算する。
第 8 回	避難所到達圏内の人口 推定	第 2 回・第 7 回の結果を用いて 避難所からの到達圏内の人口を推 定する。
第 9 回	避難所到達圏の地図化	第 6 回から第 8 回の結果を用い て避難所到達圏の地図を作成す る。
第 10 回	通行不可領域がある場 合の避難シミュレー ション（その 1）	通行不可能領域（バリア）を設定 して避難所の到達圏解析を行う。
第 11 回	通行不可領域がある場 合の避難シミュレー ション（その 2）	第 10 回の結果を用いて地図を作 成し検討する。

- 第12回 立ち寄り地がある場合 立ち寄り地がある場合（二段階避
の避難シミュレーション（その1） 難）の避難シミュレーションとし
て、OD行列を用いた最短経路検
索を行う。
- 第13回 立ち寄り地がある場合 第12回の結果を用いて地図を作
の避難シミュレーション（その2） 成し検討する。
- 第14回 博士論文研究に関する プレゼンテーション 博士論文研究でのGIS応用に関
するプレゼンテーション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

前後期ともにGISを用いた実習を含む。実習は週あたりおよそ2時間の事前学習と、授業外での復習（目安として週あたり2時間以上）が必要になる。

【テキスト（教科書）】

特に指定しない。必要なプリント類を配付する。

【参考書】

特に指定しない。

【成績評価の方法と基準】

（1）成績評価方法

平常点およびプレゼンテーション

（2）成績評価基準・評価の配分等

授業内容の自身の研究課題への具体的な応用度（40%）ならびに講義内容の理解度（40%）とする。これに加えてプレゼンテーション（20%）で総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

ノートPCを持参すること。フリーのデスクトップGISであるQGISをインストールしておくこと。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

自然地理学、地理情報科学、災害シミュレーション

<研究テーマ>

自然災害のシミュレーション、避難行動シミュレーション、地形の定量的分析

<主要研究業績>

<https://researchmap.jp/read0196218>

【Outline (in English)】

Course outline;

Perform network analysis using road data. Network analysis includes service area analysis, nearest facility search, OD cost matrix calculation, etc. After understanding the basic concept of these functions, we perform service area analysis of evacuation centers as an application to the real world. Create a hazard map.

Learning objectives;

(1) To be able to perform network analysis using road data, which is typical data of vector type, and to aggregate population based on the reach of facilities.

(2) To be able to create hazard maps based on evacuation behavior simulation.

(3) To be able to formulate concrete measures to apply GIS to one's own doctor's thesis research.

Learning activities outside of classroom;

Both the first and second semesters include practical training using GIS. The practical training requires about 2 hours of prior study per week and review outside the class (at least 2 hours per week as a rule).

Grading criteria/policy

(1) Grading method

Ordinary points and presentations

(2) Grading criteria

The degree of application of the course content to your own research project (40%) and the degree of understanding of the lecture content (40%) will be considered. In addition to this, the presentation (20%) will be evaluated comprehensively.

HUG500B5

地域社会論研究Ⅰ

佐々木 達

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本農業の構造問題を、多面的に学習します。農産物市場、労働市場、農地市場の3つの枠組みから農業地域を分析するフレームワークを学習します。

【到達目標】

日本農業をめぐる現状は、農産物純輸入額世界第1位、労働力不足と高齢化、農地面積の絶対的減少と課題が山積しています。さらに、これらの現象が一律一様に進んでいるのではなく、複雑な地域性を伴っています。この授業では、最新のテキストを取り上げて、日本農業が抱えている構造的問題を把握するとともに、各自の研究課題を設定できるように学習していきます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

テキストを読み、それを踏まえて受講生による報告と討議を中心に授業を進めていきます。また、授業開始時には、「週刊経済報告」と題して、一週間の新聞記事から議論したい記事をピックアップして報告します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	自己紹介、文献紹介、担当者の決定
第2回	日本農業の構造問題①	食料自給率について
第3回	日本農業の構造問題②	主産地形成論について
第4回	日本農業の構造問題③	農産物市場論について
第5回	日本農業の構造問題④	フードシステム論について
第6回	日本農業の構造問題⑤	アグリビジネスについて
第7回	各自の研究テーマの報告	自分が取り上げたい農業・農村問題のテーマ報告
第8回	日本農業の構造問題⑥	地域労働市場論について
第9回	日本農業の構造問題⑦	兼業農家について
第10回	日本農業の構造問題⑧	労働力の過剰と不足
第11回	日本農業の構造問題⑨	地代論について
第12回	日本農業の構造問題⑩	農地の所有と利用について
第13回	各自の研究テーマの報告	修士論文の構想発表
第14回	まとめ	まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。読むべき文献を事前に配布もしくは指示します。それを各自が読むことを前提にして発表、討論していきます。授業の冒頭10分間を利用した「週刊経済報告」のために、日本経済新聞を毎日読んでおくこと。

【テキスト（教科書）】

取り上げるテキストを事前に指示します。

【参考書】

伊藤達也・小田宏信・加藤幸治編著（2020）『経済地理学への招待』、ミネルヴァ書房

【成績評価の方法と基準】

発表50%、討論50%で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

特にありませんでした。

【学生が準備すべき機器他】

学修支援システムを利用する予定です。

【その他の重要事項】

対面授業を想定しておりますが、コロナウイルス感染症の状況次第によってオンラインになる場合があります。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

経済地理学、農業地理学

＜研究テーマ＞

日本経済と農業問題の地理学

＜主要研究業績＞

佐々木達ほか（2020）「生産調整以降における稲作農業の地域性」

佐々木達ほか（2021）「東北地方における農家の世代交代と労働力利用の再編成」

【Outline (in English)】

【Course outline】 In this lecture, we will study the structural problems of Japanese agriculture from multiple perspectives.

【Learning Objectives】 Understand the structural problems of Japanese agriculture, and learn so that you can set your own research themes.

【Learning activities outside of classroom】

Your study time will be more than four hours for a class.

【Grading Criteria /Policy】： Your overall grade in the class will be decided based on the following Presentation and Discussion: 50%, in class contribution: 50%

HUG500B5

地域社会論研究Ⅱ

佐々木 達

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本経済が変化する中で、農業・農村はどのような変貌を遂げてきたのかを振り返りながら、現代的課題について取り上げることで、批判的思考を獲得することを狙いとします。

【到達目標】

- ①日本農業・農村が日本経済の展開において果たし役割を捉えることができる
- ②農業・農村の現代的課題について取り上げることができる
- ③世界経済の中で日本農業が進む方向性を見通すことができる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

テキストを読み、それを踏まえて受講生による報告と討議を中心にして授業を進めていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	テキスト紹介、自己紹介、報告者の決定
第2回	戦前期の日本経済	米と繭の経済構造
第3回	戦後復興期の日本経済	農地改革
第4回	高度経済成長期①	農業基本法農政
第5回	高度経済成長期②	農業構造の変貌
第6回	高度経済成長期③	減反政策とその影響
第7回	高度経済成長期④	農村社会・生活の変貌
第8回	安定成長期	兼業農家と出稼ぎ
第9回	低成長期①	コメ流通の多様化
第10回	低成長期②	食料消費構造の多様化
第11回	低成長期③	農家の世代交代と労働力利用
第12回	国際化と日本経済	地方消滅論
第13回	国際化と日本経済	食料供給体制の見直し
第14回	まとめ	まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
授業の冒頭10分間を利用した「週刊経済報告」のために、日本経済新聞を毎日読んでおくこと。

【テキスト（教科書）】

テキストは決まり次第、事前に指示します。

【参考書】

授業中に適宜指示します。

【成績評価の方法と基準】

発表50%，討論50%で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

特にありませんでした。

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムを利用する予定です。

【その他の重要事項】

授業は対面での実施を予定していますが、状況によってはオンラインに変更する場合があります。その際には、事前に連絡します。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

経済地理学、農業地理学

<研究テーマ>

東北農業論，日本経済の地域構造

<主要研究業績>

佐々木達ほか（2020）「生産調整以降における稲作農業の地域性」
 佐々木達ほか（2021）「東北地方における農家の世代交代と労働力利用の再編成」

【Outline (in English)】

【Course outline】 In this lecture, we will learn about the impact of structural changes in the Japanese economy on agriculture and rural areas.

【Learning Objectives】 The aim is to acquire critical thinking while analyzing how agriculture and rural areas have undergone changes as the Japanese economy changes.

【Learning activities outside of classroom】 Your study time will be more than four hours for a class.

【Grading Criteria /Policy】 Your overall grade in the class will be decided based on the following Presentation and discussion: 50%, in class contribution: 50%

HUG600B5

地域社会論演習Ⅰ

佐々木 達

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士論文の作成をめざします。

【到達目標】

修士論文作成の作業段階を踏まえて、完成をめざします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講生の修士論文テーマについて、発表と討論を中心に授業を進めていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の進め方
第2回	修士論文のテーマ (1)	テーマの検討と参考文献の紹介
第3回	修士論文のテーマ (2)	テーマの設定と研究の位置づけ
第4回	研究目的	修士論文研究目的の検討
第5回	修士論文文章構成 (1)	章構成と関連文献の提示
第6回	修士論文文章構成 (2)	章・節・項の設定
第7回	実態調査 (1)	調査内容の検討
第8回	実態調査 (2)	調査計画の検討
第9回	統計資料 (1)	統計資料の分析
第10回	統計資料 (2)	統計資料の整理
第11回	図表の作成	図表の作成計画
第12回	研究構想の再検討	研究構想の再検討、修正
第13回	中間報告	中間報告
第14回	まとめ	まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テーマの設定や問題意識に醸成は、広く深く文献を読むことから始まります。その研究は社会にとってどんな役に立つのか？という問いかけを持ってください。そして、統計や資料の整理は、コツコツとやるのが肝心です。少なくとも準備・復習時間は演習（2単位）では1回につき4時間以上が必要となります。

【テキスト（教科書）】

特になし

【参考書】

荒木一視ほか編（2021）『食と農のフィールドワーク入門』，昭和堂

【成績評価の方法と基準】

発表・討論 50%，修正論文の完成 50%で成績評価します。

【学生の意見等からの気づき】

特にありませんでした。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

経済地理学，農業地理学，地域経済論

<研究テーマ>

東北地方における水田農業の構造再編

日本経済の再生産構造と地域問題

【Outline (in English)】

【Course outline】 We aim to create a master's thesis based on your research interests.

【Learning Objectives】 Completion and submission of master's thesis

【Learning activities outside of classroom】 Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.

【Grading Criteria /Policy】： Final grade will be calculated according to the following process Report and Discussion (50%), submission of master's thesis(50%)

HUG600B5

地域社会論演習Ⅱ

佐々木 達

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士論文の執筆・完成を目指すために、研究内容を徹底的に鍛え上げます。

【到達目標】

修士論文作成の作業段階を踏まえて、完成をめざします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講生の修士論文テーマについて、発表と討論を中心に授業を進めていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の進め方
第2回	調査結果報告	夏季休暇時の調査結果報告
第3回	調査結果の吟味	調査結果から論点を洗い出す
第4回	研究目的	研究目的の再確認
第5回	章構成の再検討	章構成から論理展開を考える
第6回	統計資料	統計分析の結果報告
第7回	補足調査	補足調査の必要性の再確認
第8回	章構成の最終決定	章構成の確定
第9回	図表の完成	完成図表の確認
第10回	参考・引用文献	参考・引用文献の最終確認
第11回	完成原稿の予定枚数	完成原稿予定枚数の確認
第12回	結論と要約	論文の結論の発表
第13回	最終報告	最終報告
第14回	まとめ	まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自分の論文は何を明らかにするのか、どのような順序だてや組み立てから説明するのか、結論として何を主張できるのかを意識して作成にあたってください。

【テキスト（教科書）】

特になし

【参考書】

荒木一視ほか編著（2021）『食と農のフィールドワーク入門』，昭和堂

【成績評価の方法と基準】

発表と議論（50 %）、修士論文の提出（50 %）で成績評価します。

【学生の意見等からの気づき】

特にありませんでした。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞
経済地理学
＜研究テーマ＞
日本農業の地域構造
東北地方における水田農業の構造再編

【Outline (in English)】

【Course outline】 The goals of this seminar is completion of master's thesis

【Learning Objectives】 Completing a high-level master's thesis

【Learning activities outside of classroom】 Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.

【Grading Criteria /Policy】 Final grade will be calculated according to the following process Report and Discussion (50%), submission of master's thesis(50%)

PSY600B6

心理学研究法演習 I

竹島 康博

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

知覚心理学および認知心理学領域での研究について、関連の書籍の輪読と受講者が選んだ文献の輪読を行います。本年度は、Sathian & Ramachandran (ed) の *Multisensory Perception* を中心に行う予定です。輪読を通して当該分野の研究についての知識を深め、自身の研究計画の立案のトレーニングを行うことが本講義の目的です。

【到達目標】

受講者が関心を持つ知覚心理学および認知心理学領域での研究テーマに関連する知見を広げ、論理の通った研究計画の立案が行えることになることを目標にします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は演習形式で行い、前半は書籍の指定した節の内容について受講者が発表、教員および受講者同士で議論を行います。後半は、当該書籍で未輪読の節について、受講者が興味を持った説の内容を発表、全員で議論を行います。毎週の課題の提出およびフィードバックは、授業中ないし授業支援システムを通して行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	授業の進め方の説明 輪読する節の割当
第 2 回	専門書の輪読 (1)	第 1 節の輪読
第 3 回	専門書の輪読 (2)	第 2 節の輪読
第 4 回	専門書の輪読 (3)	第 3 節の輪読
第 5 回	専門書の輪読 (4)	第 4 節の輪読
第 6 回	専門書の輪読 (5)	第 5 節の輪読
第 7 回	専門書の輪読 (6)	第 6 節の輪読
第 8 回	専門書の輪読 (7)	第 7 節の輪読
第 9 回	文献の輪読 (1)	受講者が選んだ文献の輪読
第 10 回	文献の輪読 (2)	受講者が選んだ文献の輪読
第 11 回	文献の輪読 (3)	受講者が選んだ文献の輪読
第 12 回	研究計画の立案 (1)	輪読内容を踏まえて研究計画の立案
第 13 回	研究計画の立案 (2)	立案した研究計画について議論
第 14 回	研究計画の立案 (3)	議論の内容を踏まえて研究計画の修正

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

文献の読み込みや発表資料の作成といった授業準備は、事前に授業時間外に行います。また、授業後には各回で扱った内容について関連した文献を自分で検索し、さらに知識を深めるために読み込みを行います。第 12 回以降の研究計画立案も、計画の素案を授業前に立案していただき、授業内では議論を通じたブラッシュアップを中心に行います。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しません

【参考書】

必要に応じて教員が研究テーマに関連した文献を紹介します。

【成績評価の方法と基準】

平常点 70%と、授業での検討結果を受けての成果 30%で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【学生が準備すべき機器他】

必要に応じて自分のノート PC 等の情報機器を持参してください。

【その他の重要事項】

重複履修が可能です。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

知覚心理学, 認知心理学

＜研究テーマ＞

異種感覚間相互作用の生起に影響する諸要因の研究, 視聴覚刺激間の時間処理過程に関する研究

＜主要研究業績＞

Takeshima, Y. (2021). Visual field differences in temporal synchrony processing for audio-visual stimuli. PLoS ONE, 16(12), e0261129.

Takeshima, Y. (2020). Emotional information affects fission illusion induced by audio-visual interactions. Scientific Reports, 10, 1-10.

Takeshima, Y., & Gyoba, J. (2015). Spatial frequency modulates the degree of illusory second flash perception. Multisensory Research, 28, 1-10.

【Outline (in English)】

[Course outline]

This course introduces performing experimental study in the field of psychology of perception and cognition to students taking this course.

[Learning activities]

The goals of this course are to conduct empirical research.

[Learning activities outside of classroom]

Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting.

[Grading Criteria /Policy]

Grading will be decided based on class contribution (70%) and class presentation (30%).

PSY600B6

心理学研究法演習Ⅱ

竹島 康博

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

知覚心理学および認知心理学領域における研究を遂行する方法を学びます。春学期に立案した研究計画を土台に、実施から解析、考察までを体系的に進めます。

【到達目標】

受講者の興味のある研究テーマの実験について、データ収集、解析、考察した上で次の研究につなげる一連の過程を体系的に実施できるようにすることを到達目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講者が計画した実証的研究を実施する工程を、本授業を通して支援します。受講者が進捗について報告をし、教員および受講者同士で議論しながら、次回までの課題を確認していきます。毎週の課題の提出およびフィードバックは、授業中ないし授業支援システムを通して行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	春学期の研究成果の振り返り	春学期に立案した研究計画について確認する
第 2 回	研究実施準備 (1)	研究に必要な材料や文書を準備する
第 3 回	研究実施準備 (2)	研究に必要な材料や文書を準備する
第 4 回	研究実施準備 (3)	研究に必要な材料や文書を準備する
第 5 回	研究の実施とデータ入力 (1)	研究を実施し、収集したデータを分析に適した形で入力
第 6 回	研究の実施とデータ入力 (2)	研究を実施し、収集したデータを分析に適した形で入力
第 7 回	研究の実施とデータ入力 (3)	研究を実施し、収集したデータを分析に適した形で入力
第 8 回	データ分析 (1)	データの分析を行うための解析コードを作成
第 9 回	データ分析 (2)	データの分析を行うための解析コードを作成
第 10 回	データ分析 (3)	データの分析を行うための解析コードを作成
第 11 回	研究成果の確認 (1)	教員および受講者同士で研究成果を確認
第 12 回	研究成果の確認 (2)	教員および受講者同士で研究成果を確認
第 13 回	研究成果のまとめ (1)	得られた研究の成果から次の研究に繋がる点を確認
第 14 回	研究成果のまとめ (2)	得られた研究の成果から次の研究に繋がる点を確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

研究テーマの設定や文献収集および読み込み、実験プログラムの作成など研究実施に向けての各工程は、基本的に授業時間外に進めます。授業時間内では、これらの作業を進める上で検討が必要なポイントについての議論し、方向性を決めることを中心に活動します。「

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しません。

【参考書】

必要に応じて教員が研究テーマに関連した文献を紹介します。

【成績評価の方法と基準】

平常点 50%と、授業での検討結果を受けての成果 50%で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【学生が準備すべき機器他】

必要に応じて自分のノート PC 等の情報機器を持参してください。

【その他の重要事項】

重複履修が可能です。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

知覚心理学、認知心理学

<研究テーマ>

異種感覚間相互作用の生起に影響する諸要因の研究、視聴覚刺激間の時間処理過程に関する研究

<主要研究業績>

Takeshima, Y. (2021). Visual field differences in temporal synchrony processing for audio-visual stimuli. PLoS ONE, 16(12), e0261129.

Takeshima, Y. (2020). Emotional information affects fission illusion induced by audio-visual interactions. Scientific Reports, 10, 1-10.

Takeshima, Y., & Gyoba, J. (2015). Spatial frequency modulates the degree of illusory second flash perception. Multisensory Research, 28, 1-10.

【Outline (in English)】

[Course outline]

This course introduces performing experimental study in the field of psychology of perception and cognition to students taking this course.

[Learning objectives]

The goals of this course are to conduct empirical research.

[Learning activities outside of classroom]

Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting.

[Grading Criteria /Policy]

Grading will be decided based on class contribution (50%) and the quality of the students' experimental performance in the lab (50%).

PSY600B6

心理学研究法演習 I

高橋 敏治

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、修士論文作成に必要な知識やスキルをゼミ形式で議論します。

【到達目標】

1. 論文作成のための実験計画法を自分で作成できるようにします。
2. 生理心理学の実験を計画・遂行・分析が自分でできるようにします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

生理心理学の実験論文を抄読し、その論文のレジメを発表していきます。付随する生理心理学の実験手法（脳波、脳波の周波数解析、心電図からの自律神経活動、虚偽検出など）について、実習形式で学びます。授業時間内に、必ず質疑応答の時間を設け、生じた疑問や問題を議論します。発表後には、振り返りレポートを提出してもらい、疑問点などを授業内でフィードバックします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	テーマや内容について希望を聞きます。
第 2 回	演習での進め方例示	発表の方法やレジメの書き方や議論の方法を検討し、順番を決めます。
第 3 回	抄読会 1	参考論文の発表、生理指標と心理的指標の設定の仕方
第 4 回	抄読会 2	参考論文のレジメ発表、生理心理学指標（脳波）
第 5 回	抄読会 3	参考論文のレジメ発表、生理心理学指標（脳波の周波数分析）
第 6 回	実験計画法とスキルの習得 1	実験機器ポリメイトやテレメーターの使用の仕方
第 7 回	抄読会 4	参考論文のレジメ発表、生理心理学指標（眼電図・心電図）
第 8 回	抄読会 5	参考論文のレジメ発表、生理心理学指標（心電図周波数解析）
第 9 回	抄読会 6	参考論文のレジメ発表、生理心理学指標（自律神経解析）
第 10 回	実験計画法とスキルの習得 2	心電図の周波数解析ソフトの操作や解析の仕方
第 11 回	抄読会 7	参考論文のレジメ発表、生理心理学指標（虚偽検出の原理）
第 12 回	抄読会 8	参考論文のレジメ発表、生理心理学指標（虚偽検出の応用）
第 13 回	抄読会 9	参考論文のレジメ発表、生理心理学指標（虚偽検出のデータ分析の仕方）
第 14 回	総括まとめ	課題レポートの検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 1 回目：自己紹介と自分の希望をレポートで提出
- 2 回目：生理心理学の雑誌から論文を選択
- 3 回目～5 回目：脳波発表レジメの作成
- 6 回目：脳波発表レジメ修正版の作成（方法・分析・結果部分）
- 7 回目～9 回目：心電図発表レジメの作成
- 10 回目：心電図発表レジメ修正版の作成（方法・分析・結果部分）

11 回目～13 回目：虚偽検出発表レジュメの作成

14 回目：課題レポートの作成

【テキスト（教科書）】

特に用いません。

【参考書】

堀忠雄（2008）. 生理心理学—人間の行動を生理指標で測る. 培風館, 東京.

堀忠雄, 他（2017）. 生理心理学と精神生理学第Ⅰ巻 基礎. 北大路書房, 京都.

堀忠雄, 他（2017）. 生理心理学と精神生理学第Ⅱ巻 応用. 北大路書房, 京都.

【成績評価の方法と基準】

平常点（授業態度, 授業内での活発な議論など）50 %, 発表 30 %, レポート課題 20 %とします。

【学生の意見等からの気づき】

新型コロナ肺炎流行のため, 2020 年度は実施しませんでした。

【学生が準備すべき機器他】

脳波室で実験機器を用いることがあります。

【その他の重要事項】

新型コロナ肺炎に関する状況を考えて授業形態をオンライン授業などに変更する場合があります。初回の授業には必ず出席して下さい。学会の要旨・発表原稿・論文の作成などは適宜抄読する論文に代えて順序を入れ替えて実施します。また, 課題は虚偽検出, P300, 睡眠ポリグラフ検査などから受講生の要望に応じて適宜変更します。

【オフィスアワー】履修の手引きの教員紹介に記載してあります。担当教員は, 厚生労働省精神保健指定医, 日本精神学会精神科専門医および日本睡眠学会専門医として 30 年以上精神科の臨床に携わっています。この経験を生かし, この授業を進めます。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞精神生理学, 精神保健学

＜研究テーマ＞眠気, 睡眠, うつ, ストレス

＜主要研究業績＞

高橋敏治（2020）時差障害（時差ばけ）. 診療所で診るトラベルメディスン（大越裕文 編著）. 日本医事新報社, 東京, p 64-73.

高橋敏治（2019）残業による睡眠不足が引き起こす過剰な日中の眠気. 睡眠の診かた—睡眠障害気づくための 50 症例—（千葉茂 編著）. 新興医学出版社, 東京, p 62-63.

高橋敏治（2019）繰り返しの時差フライトが引き起こす睡眠障害. 睡眠の診かた—睡眠障害気づくための 50 症例—（千葉茂 編著）. （株）新興医学出版社, 東京, p 76-77.

高橋敏治（2017）. 時差ばけと光環境 睡眠医療, 11, 525-530.

【Outline (in English)】

In this class, we will discuss the knowledge and skills necessary for master thesis preparation in seminar form.

The goals of this course are to create your own design of experiments and to plan, carry out, and analyze physiological psychology experiments.

It takes 2hours to prepare and 2hours to review for each lesson.

Final grade will be calculated according to the following process; in-class contribution(50 %), presentation(30%) , reports(20%).

PSY600B6

心理学研究法演習Ⅱ

高橋 敏治

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では, 修士論文作成に必要な知識やスキルをゼミ形式で議論します。

【到達目標】

1. 論文作成のための実験計画法を自分で作成できるようにします。
2. 生理心理学の実験を計画・遂行・分析ができるようにします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

生理心理学の実験論文から, その論文のレジュメを発表してもらいます。付随する生理心理学の実験手法（脳波, P300, 脳波の周波数解析, 心電図からの自律神経活動, 虚偽検出など）について, 検討します。授業時間内に, 必ず質疑応答の時間を設け, 生じた疑問や問題を議論します。発表後には, 振り返りレポートを提出してもらい, 疑問点などを授業内でフィードバックします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	テーマや内容について希望を聞きます。
第 2 回	演習での進め方例示	発表の方法や議論の方法を検討します。発表の振り返りレポートの必要性や順番を決めます。
第 3 回	実験計画の発表 1	自分の春学期レポートの発表 1
第 4 回	実験計画の発表 2	自分の春学期レポートの発表 2
第 5 回	実験計画の発表 3	自分の春学期レポートの発表 3
第 6 回	実験計画法のまとめ	問題点や修正点の議論
第 7 回	生理指標のデータ取得（脳波）1	脳波記録のデータ取得と周波数解析の実際
第 8 回	生理指標のデータ取得（脳波）2	脳波結果の表示・論文の作成
第 9 回	生理指標のデータ取得（心電図・血圧）1	心電図データから自律神経データの解析の実際
第 10 回	生理指標のデータ取得（心電図・血圧）2	自律神経データの結果の表示・論文の作成
第 11 回	生理指標のデータ取得（虚偽検出の分析の仕方）1	虚偽検出の分析の仕方
第 12 回	生理指標のデータ取得（虚偽検出の分析の仕方）2	虚偽検出の結果の表示・論文の作成
第 13 回	論文作成の注意点	論文での生理指標の方法・分析の注意点
第 14 回	総括まとめ	課題レポート作成と検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

1 回目：自己紹介と自分の希望をレポートで提出

2 回目～5 回目：レポート発表の作成

6 回目：発表後の修正版の作成

7 回目～8 回目：脳波データの課題レポート

9 回目～10 回目：心電図データの課題レポート

11 回目～12 回目：虚偽検出データの課題レポート

13 回目～14 回目：課題レポートの作成

【テキスト（教科書）】

特に指定しません。

【参考書】

堀忠雄（2008）. 生理心理学—人間の行動を生理指標で測る. 培風館, 東京.
 堀忠雄, 他（2017）. 生理心理学と精神生理学第Ⅰ巻 基礎. 北大路書房, 京都.
 堀忠雄, 他（2017）. 生理心理学と精神生理学第Ⅱ巻 応用. 北大路書房, 京都.

【成績評価の方法と基準】

平常点（授業態度、授業内での活発な議論など）50％、発表 30％、レポート課題 20％で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

2021 年度は開講せず、気づきはありません。

【学生が準備すべき機器他】

脳波室で実験機器を用いることがあります。内容については、受講生の希望や興味のある領域に合わせて、虚偽検出、P300、睡眠ポリグラフ検査などから適宜変更します。受講生の希望や興味のある領域について調査しますので、最初の授業には必ず出席して下さい。

【その他の重要事項】

新型コロナウイルスに関する状況を考えて授業形態をオンライン授業などに変更する場合があります。初回の授業には必ず出席して下さい。学会の要旨・発表原稿・論文の作成などは適宜抄読する論文に代えて順序を入れ替えて実施します。また、課題は虚偽検出、P300、睡眠ポリグラフ検査などから受講生の要望に応じて適宜変更します。
 【オフィスアワー】履修の手引きの教員紹介に記載してあります。担当教員は、厚生労働省精神保健指定医、日本精神学会精神科専門医および日本睡眠学会専門医として 30 年以上精神科の臨床に携わっています。この経験を生かし、この授業を進めます。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞精神生理学、精神保健学
 ＜研究テーマ＞眠気、睡眠、うつ、ストレス
 ＜主要研究業績＞
 高橋敏治（2020）時差障害（時差ぼけ）. 診療所で診るトラベルメディスン（大越裕文 編著）. 日本医事新報社, 東京, p 64-73.
 高橋敏治（2019）残業による睡眠不足が引き起こす過剰な日中の眠気. 睡眠の診かた—睡眠障害気づくための 50 症例—（千葉茂 編著）. 新興医学出版社, 東京, p 62-63.
 高橋敏治（2019）繰り返しの時差フライトが引き起こす睡眠障害. 睡眠の診かた—睡眠障害気づくための 50 症例—（千葉茂 編著）. （株）新興医学出版社, 東京, p 76-77.
 高橋敏治（2017）. 時差ぼけと光環境 睡眠医療, 11, 525-530.

【Outline (in English)】

In this class, we will discuss the knowledge and skills necessary for master thesis preparation in seminar form. The goals of this course are to create your own design of experiments in order to write articles and to plan, carry out, and analyze physiological psychology experiments. It takes 2 hours to prepare and 2 hours to review for each lesson. The final grade will be calculated according to the following process; in-class contribution (50 %), presentation (30%), reports (20%).

PSY600B6

心理学研究法演習Ⅰ

渡辺 弥生

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

発達心理学研究に関連した課題をもとに、実践につながる演習を行う。乳児期から高齢期までを含めて生涯発達の視点に立って、これまでの研究の流れを理解するとともに、まだ明らかにされていないリサーチクエストを各自追求していく。先行研究で明らかにされていることから応用できることや、フィールドで求められている専門性など双方向からの研究態度を身につけ、社会に貢献できることをめざす。

【到達目標】

- （1）発達心理学研究におけるテーマと研究の特徴及び背景について理解する。
- （2）発達心理学研究の研究論文を批判的に読む力を養う。
- （3）先行研究を批判し改善策を練った具体的な研究計画を行い実行できる力を育む。
- （4）研究計画、研究内容、その成果を発表する技術を習得する。
- （5）社会に貢献できる展望をもつ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

発達心理学領域における理論や特徴を体系的に理解したうえで、具体的な研究論文を読み、理解し、自身で研究を計画できるスキルを獲得する。具体的な方法としては、そのトピックの流れを支えてきた主要な研究をリストアップする。その際、批判に値する点を考え、改善するにはどのような研究を積み重ねる必要があるかについて考える。そのうえで、発達研究の方法論を駆使して具体的に実行する計画を立てる。可能であれば並行して実践する。課題などの提出についてのフィードバックは、学習支援システムや Google Classroom を通じて行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業のテーマ、到達目標、進め方を説明する。
2	研究の体系（マクロ）と各研究論文（ミクロ）を考える	適当なトピックをもとに、各研究者の論文と各トピックの研究の体系との関係について考える。
3	展望論文をもとに読む（和文）（1）	読解の力を養う。発達研究を展望する。
4	展望論文をもとに読む（和文）（2）	読解の力を養う。発達研究を展望する。
5	論文をもとに発表と討議	先行研究の流れを理解し、さらにはどのような研究が積み重ねられるべきかを考える。
6	共通論文をもとに発表と討議 問題意識に焦点を当てる	レビュー論文の書き方や、留意点について学ぶ。
7	自分の興味のある領域の文献リストをつくる（1）	各院生が興味のある領域について、文献のリストをつくり、研究の流れをまとめる。
8	自分の興味のある領域の文献リストをつくる（2）	文献リストをつくるとともに、年代別、あるいは内容別の観点から、研究の流れをつかみ、批判する。

9	論文をもとに発表と 討議 理解（１）	各院生が自分の研究につながる論文を選び、研究の内容を理解する。
10	論文をもとに発表と 討議 理解（２） 優れたところに言及するとともに批判する	選んできた論文の優れたところと批判点を明らかにし、レジュメをつくり、発表する。
11	研究計画を立てる （１）	選んできた論文の批判点をもとに、改善点を考え、新しい研究を考える。
12	研究計画を立てる （２）	考えた研究が実行可能であるか目的や方法論の視点から再考する。
13	研究計画を立てる （３）	結果が得られた場合の、分析方法について予測する。
14	研究計画を立てる （４）	結果が得られた場合の分析方法を予測し、その方法論を習得しているか確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

演習であることから、目的をよく理解し、文献研究の収集やリストアップ。論文を読み、理解し、まとめることの積み重ねを求める。各研究の問題と目的、方法、分析結果、考察を自身で追試できるレベルでの理解が求められる。そのうえで、批判できるところ、それを改善するにはどのような研究を積み重ねる必要があるかについて考え、プレゼンを実施するための準備をする。後半は、特に、発達心理学領域における方法論についての理解が深まるように、研究目的を検討するためにどのようなスキルが必要かについて考える。和文および英文の最先端の研究にチャレンジする。最終的に、各自研究計画を立てるスキルを獲得する。予習復習にはそれぞれ2時間はとるようにする。

【テキスト（教科書）】

こちらで準備する。授業時に紹介。
査読付き雑誌のレビュー論文を用いる。

【参考書】

発達の研究領域についておおざっぱに理解しておくため、渡辺弥生編著『発達心理学』（北大路書房）『子どもの「10歳の壁」とは何か？』（光文社）『感情の正体』（Zoom）といった基礎的な発達心理学や教育心理学、発達臨床心理学系の本を読んでおくことを求める。

【成績評価の方法と基準】

毎回課されている課題をこなすことを前提として、報告書の提出（100%）とする。

【学生の意見等からの気づき】

活発な演習ができていたが、そこで得た課題や気づきをもとに、実行していくことがさらに求められる。具体的に各自の作業が進行しているかを Dropbox やペーパーの形で確認し、実行力の強化につとめる。

【学生が準備すべき機器他】

パワーポイントと DVD を用いることもある。授業支援システムが用いることもあるので、随時チェックすることを習慣づけてほしい。パソコンを用いることが多くなる。

【その他の重要事項】

文献検索などは自身で活発に行うことが前提。課題提出の時間厳守。新型コロナウイルス感染状況によって対面かオンラインか変更する場合あり。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 発達心理学、発達臨床心理学、学校心理学
＜研究テーマ＞ 社会情緒的コンピテンスの発達といじめなどの予防教育の展開、ソーシャルエモショナルラーニング
＜主要研究業績＞

HP 参照

<https://sites.google.com/site/emywata/>

(1) 感情の正体 2019 筑摩書房

(2) 世界の学校予防教育 2013 金子書房

(3) 子どもの10歳の壁とは何か？ 乗り越えられる発達心理学 2011 光文社

(4) 子どもの感情表現ワークブック 2011 明石書店など多数

(4) 10代を育てるソーシャルスキル教育 2009 北樹出版

【Outline (in English)】

・Based on issues related to developmental psychological research, we will conduct a practicum connected with actual practice. From the viewpoint of lifelong development, including from infancy to elderly, the aims of this course are to understand the flow of research to date and pursue research questions that have not been previously clarified, and to contribute to society by acquiring bidirectional research attitudes from both what can be applied from what has been clarified in the previous research and expertise required in the field.

・Students are expected to take at least two hours each for preparation and review.

・Students will be required to submit a report (100%) based on the assumption that they will complete the assignments in each class.

PSY600B6

心理学研究法演習Ⅱ

渡辺 弥生

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

発達心理学研究に関連した課題をもとに、実践につながる演習を行う。乳児期から高齢期までを含めて生涯発達の視点に立って、これまでの研究の流れを理解するとともに、まだ明らかにされていないリサーチクエスションを各自追求していく。さらに、この問題提起をもとに研究を実行し、さらに論文を投稿できるように書くことに焦点を当てる。

【到達目標】

- (1) 発達心理学研究におけるテーマと研究の特徴及び背景について理解する。
- (2) 先行研究を批判し改善策を練った具体的な研究計画を実行できる力を育む。
- (3) 投稿論文を書く力を養う。
- (4) 論文の投稿を実行する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

発達心理学領域における理論や特徴を体系的に理解したうえで、具体的な研究論文を読み、理解し、自身で研究を計画できるスキルを獲得する。具体的な方法としては、そのトピックの流れを支えてきた主要な研究をリストアップする。その際、批判に値する点を考え、改善するにはどのような研究を積み重ねる必要があるかについて考える。そのうえで、発達研究の方法論を駆使して具体的に実行する計画を立てる。可能であれば並行して実践する。さらに、それを投稿できるような論文を書くことにチャレンジする。課題などの提出のフィードバックは、学習支援システムや Google classroom などを通じて行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業のテーマ、到達目標、進め方を説明する。
2	研究の体系（マクロ）と各研究論文（ミクロ）をメタ的に考え、実行する研究の意義を考える	適当なトピックをもとに、各研究者の論文と各トピックの研究の体系との関係について考える。
3	問題と目的を書く (1) 構造を考える a	パラグラフの構造を考え、プランニングする。
4	問題と目的を書く (2) 構造を考える b	パラグラフの構造を考え、プランニングする。
5	問題と目的を書く (1) 肉付けをする a	引用文献の必要性を意識し、フルに書いていく。
6	問題と目的を書く (2) 肉付けをする b	引用文献の必要性を意識し、フルに書いていく。
7	グループワーク (1) 全体で各自の問題の流れを互いに評価しあう a	グループワーク 全体で各自の問題の流れを互いに評価しあう。
8	グループワーク (2) 全体で各自の問題の流れを互いに評価しあう b	グループワーク 全体で各自の問題の流れを互いに評価しあう。
9	適切な方法論を考え、書く (1)	具体的な方法についての書き方を修得し、実際に書く。

- 10 適切な方法論を考え、具体的な方法についての書き方を書く (2) 修得し、実際に書く。
- 11 モデル論文の結果と考察を材料に、書き方を学ぶ。
- 12 モデル論文の結果と考察を材料に、書き方を学ぶ。
- 13 投稿論文の形式やエントリー方法を学ぶ (1) 投稿論文の形式やエントリー方法を学ぶ。投稿論文の形式を各自調べ、発表する。
- 14 投稿論文の形式やエントリー方法を学ぶ (2) 投稿論文の形式やエントリー方法を学ぶ。投稿論文の形式を各自調べ、発表する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

演習であることから、目的をよく理解し、文献研究の収集やリストアップ。論文を読み、理解し、まとめることの積み重ねを求める。各研究の問題と目的、方法、分析結果、考察を自身で追試できるレベルでの理解が求められる。そのうえで、批判できるところ、それを改善するにはどのような研究を積み重ねる必要があるかについて考え、準備をする。後半は和文および英文の最先端の研究をモデルに、「書く」イメージをもち、実際にチャレンジする。予習復習には各2時間はかける。

【テキスト（教科書）】

こちらで準備する。授業時に紹介。

【参考書】

日本発達心理学会 編 岩立志津夫・西野泰広 責任編集『発達科学ハンドブック 2 研究法と尺度』など。発達科学ハンドブック、児童心理学の進歩などレビュー雑誌を読んでおく。英語によるメールの書き方などの本を読んでおく。

【成績評価の方法と基準】

毎回の課題を基にした最終レポート（100%）をもって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

時間を引き延ばすエクスキューズがないように、立てた計画をつねに実行していくようにする。

【学生が準備すべき機器他】

パソコンを使用することが多い。授業支援システムに入る。

【その他の重要事項】

文献検索などは自身で活発に行うことが前提。学会に参加したり、研究者にメールを出したり、実際の研究活動を体験していく。新型コロナウイルス感染状況によってオンラインに変更する可能性あり。

【担当教員の専門分野等】

HP 参照

<https://sites.google.com/site/emywata/>

<専門領域> 発達心理学、発達臨床心理学、学校心理学

<研究テーマ> 社会情緒的能力の発達といじめなどの予防教育の展開、ソーシャルエモショナルラーニング

<主要研究業績>

(1) 感情の正体 2019 筑摩書房

(2) 世界の学校予防教育 2013 金子書房

(3) 子どもの10歳の壁とは何か？ 乗り越えられる発達心理学 2011 光文社

(4) 子どもの感情表現ワークブック 2011 明石書店

(5) 10代を育てるソーシャルスキル教育 2009 北樹出版

【Outline (in English)】

・ We will conduct a practicum connected with actual practice, based on issues related to developmental psychological research. From the viewpoint of lifelong development, including from infancy to elderly, the aims of this course are to understand the flow of research to date and pursue research questions that have not been previously clarified, and to contribute to society by acquiring bidirectional research attitudes from both what can be applied from what has been clarified in the previous research and expertise required in the field.

・ Students are expected to take at least two hours each for preparation and review.

・ Students will be required to submit a report (100%) based on the assumption that they will complete the assignments in each class.

PSY600B6

心理学研究法演習 I

福田 由紀

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

自分の研究テーマに関して、その先行研究群を批判的に概観して、展望論文を作成する。

【到達目標】

- ①自分の興味にあったテーマに関連する先行研究群を柔軟に検索できる。
- ②当該の先行研究群を批判的に読み、問題点や改善点を指摘できる。
- ③②を受けて、新しい提案ができる。
- ④当該のテーマに関連した展望論文を作成する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業の最初に展望論文の作成の仕方について、討議を行う。それを受けて、前半の授業では、自分の興味に合ったテーマに関連する先行論文群を精読し、発表する。そして、論文を作成し、ピアレビューを通して完成度の高い展望論文を完成させる。また、提出された課題のフィードバックは、授業中ないしは授業支援システムを通して行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	授業の目的と方法の確認。
第 2 回	展望論文の概説	展望論文の特性について理解を深める。
第 3 回	種論文の発表 1	自分のテーマにあった、核となる論文を各自発表する。
第 4 回	種論文の発表 2	自分のテーマにあった、核となる論文を各自発表する。
第 5 回	種論文から派生した論文の発表 1	種論文から派生した論文の発表をする。
第 6 回	種論文から派生した論文の発表 2	種論文から派生した論文の発表をする。
第 7 回	種論文から派生した論文の発表 3	種論文から派生した論文の発表をする。
第 8 回	先行研究群の問題点・改善点の発表 1	先行研究群の問題点・改善点の発表をする。
第 9 回	先行研究群の問題点・改善点の発表 2	先行研究群の問題点・改善点の発表をする。
第 10 回	展望論文の骨子に関する発表 1	展望論文の骨子に関する発表をする。
第 11 回	展望論文の骨子に関する発表 2	展望論文の骨子に関する発表をする。
第 12 回	展望論文の発表 1	作成された展望論文をピアレビューする。
第 13 回	展望論文の発表 2	作成された展望論文をピアレビューする。
第 14 回	修正展望論文の講評	修正された展望論文を講評し、全体で討議する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

第 1 回 モデルとなる展望論文を精読し、その特性に関してレジュメを作成する。

第 2・3 回 自分にあったテーマの種論文を精読し、発表の準備を行う。

第 4～6 回 種論文から検索できる先行研究群を精読し、発表の準備を行う。

第7・8回 先行研究群の問題点・改善点についてレジュメにまとめ、発表の準備を行う。
 第9・10回 展望論文作成のための骨子をレジュメにまとめ、発表の準備を行う。
 第11・12回 展望論文を作成する。
 第13回 第11・12回におけるピアレビューを受け、展望論文を修正する。
 本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特になし。適宜、紹介する。

【参考書】

福田由紀（編）（2012）. 言語心理学入門 培風館
 日本読書学会（編）（2019）. 読書教育の未来 ひつじ書房
 石黒圭 （2020）. 段落論 光文社新書

【成績評価の方法と基準】

発表 20%、発表への質問・コメント 20%、討論への積極的な参加 20%、展望論文の提出 40%などを総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

水曜日朝一の授業ですが、とても楽しいですね。研究の醍醐味が味わえたようで、やりがいがあります。

【その他の重要事項】

受講希望者は初回の授業に必ず出席をしてください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 言語心理学
 <研究テーマ> 読みと感情、コミュニケーションにおける言語活動の役割
 <主要研究業績>

①福田由紀（2019）. 読みと感情 日本読書学会（編） 読書教育の未来 Pp.144-154.

②福田由紀・蘆原遥・菊池理紗（2018）. 言語心理学で何を学べるか？一言語学との学問イメージ比較—法政大学文学部紀要, 76,115-127.

③福田由紀・佐藤志保（2017）. ポジティブな文章を読むと気分が良くなるのか？ 読書科学, 59,161-171.

<HP>

「ことばのこころ研究室」<http://www.zc.em-net.ne.jp/~psy-language/>

【Outline (in English)】

Course outline : The purpose of this course is to learn how to write a review paper.

Learning Objectives : By the end of the course, students should be able to do the following:

- A. search for information on previous studies interested to oneself
- B. read them critically and point out problems and a refinement
- C. propose new suggestion
- D. write a review report

Learning activities outside of classroom : Before/after each class meeting, students will be expected to have completed the required assignments. Your study time will be four hours for a class.

Grading Criteria : Your overall grade in the class will be determined based on the following: presentation: 20%, comment for the presentation of other people: 20%, review report: 40%, in-class contribution: 20%.

PSY600B6

心理学研究法演習Ⅱ

福田 由紀

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

自分の興味にあった心理学的なテーマに関して、実験・調査の計画・実施・発表・論文の作成を通して、心理学の研究のプロセスを実践的に学ぶ。

【到達目標】

- ①自分の興味にあったテーマに関して、適切な実験・調査計画を立てることができる。
- ②自分の計画を実際に行うことができる。
- ③実験・調査結果を適切に分析・考察できる。
- ④分析・考察したことを的確に他者に伝達できる。
- ⑤論文を作成できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

自分の興味にあったテーマに関して研究計画を立て、授業で発表をする。ピアレビューを通して、仮説の設定、変数の決定、統制の仕方、材料の収集、分析手法を洗練していく。その研究計画にそった実験・調査を実施する。その結果を発表し、完成度の高い実証的な論文を完成させる。提出された課題のフィードバックは、授業中ないしは授業支援システムを通して行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の目的と方法の確認。
第2回	研究テーマの設定	研究テーマを発表する。
第3回	実験・調査立案における注意1	仮説、変数、統制の仕方、材料の収集の仕方を発表し、全員で討議する。
第4回	実験・調査立案における注意2	具体的な分析方法を発表し、全員で討議する。
第5回	研究計画申請書の発表	法政大学文学部心理学科・心理学専攻倫理委員会宛の書式にそった研究計画申請書を発表し、全員で討議する。
第6回	実験・調査の実施1	実験・調査を遂行し、その進捗状況を発表し、全員で討議する。
第7回	実験・調査の実施2	実験・調査を遂行し、その進捗状況を発表し、全員で討議する。
第8回	データの分析	分析結果を発表し、全員で討議する。
第9回	考察	結果と先行研究の知見を利用して論理的に考えられる考察を発表し、全員で討議する。
第10回	要旨の作成	学会発表で求められる要旨を作成し、ピアレビューをする。
第11回	論文の作成	学術論文の書き方について確認する。
第12回	成果発表1	与えられた時間内に効果的に発表し、全員で討議する。
第13回	成果発表2	与えられた時間内に効果的に発表し、全員で討議する。
第14回	論文の提出と総括	実証的な方法を使って学術論文を作成し、提出し、そのプロセスに関して振り返る。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 第 1 回 自らの研究テーマの発表の準備を行う。
 第 2・3 回 自分の目的にあった実験・調査計画を立て、発表の準備を行う。
 第 4 回 研究計画申請書を作成し、発表の準備を行う。
 第 5～6 回 実験・調査を実施する。
 第 7 回 データを分析し、発表の準備を行う。
 第 8 回 分析結果をもとに考察を行い、発表の準備を行う。
 第 9 回 要旨を作成し、発表の準備を行う。
 第 10 回 論文を作成する。
 第 11・12 回 成果発表の準備を行う。
 第 13 回 提出する論文の作成・見直しをする。
 本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特になし。適宜、紹介する。

【参考書】

福田由紀（編）（2012）. 言語心理学入門 培風館
 日本読書学会（編）（2019）. 読書教育の未来 ひつじ書房
 石黒圭（2020）. 段落論 光文社新書

【成績評価の方法と基準】

発表 20%、発表への質問・コメント 20%、討論への積極的な参加 20%、論文の提出 40%などを総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

ディスカッションを通じて、他者視点と取り入れることにより、より良い論文ができそうですね。

【その他の重要事項】

受講希望者は初回の授業に必ず出席をしてください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>言語心理学
 <研究テーマ>読みと感情、コミュニケーションにおける言語活動の役割
 <主要研究業績>
 ①福田由紀（2019）. 読みと感情 日本読書学会（編） 読書教育の未来 Pp.144-154.
 ②福田由紀・穂原遥・菊池理紗（2018）. 言語心理学で何を学べるか？一言語学との学問イメージ比較—法政大学文学部紀要, 76,115-127.
 ③福田由紀・佐藤志保（2017）. ポジティブな文章を読むと気分が良くなるのか？ 読書科学, 59,161-171.
 <HP>
 「ことばのこころ研究室」<http://www.zc.em-net.ne.jp/~psy-language/>

【Outline (in English)】

Course outline : The purpose of this course is to learn how to conduct psychological research.

Learning Objectives : By the end of the course, students should be able to do the following:

- A. make one's experiment/survey plan
- B. carry it out
- C. analyze it appropriately
- D. present it effectively
- E. make a paper of one's research

Learning activities outside of classroom : Before/after each class meeting, students will be expected to have completed the required assignments. Your study time will be four hours for a class.

Grading Criteria : Your overall grade in the class will be determined based on the following: presentation: 20%, comment for the presentation of other people: 20%, lab report: 40%, in-class contribution: 20%.

PSY600B6

心理学研究法演習 I

島宗 理

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

社会的・個人的に重要な行動問題の解決策を科学的に発見、開発する方法論として、行動分析学の研究法を学びます。受講生は、それぞれ自分の問題意識から研究テーマを選び、標的となる行動を決め、その制御変数を実験によって見つけながら、この方法論を習得します。修士論文を書き上げ、発表するまでを支援しますが、その過程で、修了後、就職する人も博士課程に進学する人も、それぞれ仕事に役立つ技術を習得することを目指します。

【到達目標】

この授業で主に目指すのは以下の知識や技術の習得です：標的行動を具体化し、測定方法を決めること、標的行動の制御変数に関する先行研究を調べること、制御変数の候補を複数推定し、その中から実験で検討する変数を選び、実験計画を立案すること、実験計画書を作成し、発表すること、実験装置や測定システムなどを準備し、予備実験からそれを改善すること、本実験を実施し、データを分析し、まとめて図表や文章、口頭発表などでコミュニケーションすること。

これらはすべて研究にとって必要な技能や知識ですが、修了後に就職してからも皆さんの職場で必ず役に立つものです。修論のための研究法ではなく、この機会に、一生使える心理学の専門性を習得してください。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

毎週、課題を出します。授業はゼミ形式で、課題の発表と討論を中心に進めます。M1 次には修論の準備として予備的な研究に取組みます。M2 次には修論の本実験を題材に課題を進めます。ゼミの時間の大半を発表や討論の練習に使いますので積極的に参加して下さい。課題へのフィードバックは授業および掲示板で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	全員：授業内容と方法、約束事を説明します。実験計画のプレゼン方法、注意すべきこと、研究倫理（倫理委員会に提出する書類など）について解説します。
第 2 回	実験計画の発表 1	全員：独立変数と従属変数、変数の統制、実験計画法、行動の観察と記録、仮説の立案や変数の探索などを学びます。 M1 次生：自分の研究テーマについて討論し、予備実験の準備を進めます。 M2 次生：各自、実験計画を発表し、討論します。GO サインがでたら予備実験に移れるように、実験計画は「概要」ではなく、刺激や記録用紙なども用意してプレゼンして下さい。
第 3 回	実験計画の発表 2	同上
第 4 回	実験計画の発表 3	同上

第 5 回 予備実験の報告 1	全員： データの分析、視覚化、傾向や変動の判断、データに基づいた改善（本実験の計画）などを学びます。 M1 次生も M2 次生も、予備実験の結果を分析し、発表して、討論します。データの分析から「わかったこと」「わからなかったこと」をまとめて、伝えて、話し合う練習をします。
第 6 回 予備実験の報告 2	同上
第 7 回 予備実験の報告 3	同上
第 8 回 先行研究をまとめる 1	全員： 先行研究や参考書、統計資料などを読み、現在の研究の流れや社会のニーズの中に自分の実験を位置づけます。研究のストーリーをまとめあげる方法について解説します。
第 9 回 先行研究をまとめる 2	同上
第 10 回 先行研究をまとめる 3	同上
第 11 回 本実験の報告 1	全員： データの分析、視覚化、傾向や変動の判断、データに基づいた改善（継続実験の計画）などをさらに学びます。 M1 次生も M2 次生も、本実験の結果を分析し、発表して、討論します。データの分析から「わかったこと」「わからなかったこと」をまとめて、伝えて、話し合う練習をします。
第 12 回 本実験の報告 2	同上
第 13 回 本実験の報告 3	同上
第 14 回 まとめ	全員： 全課題を振り返り、討論します。 各自、自分の研究のセールスポイントを抜き出し、これを伝える題目を考えて発表します。修論のストーリーを端的に伝える練習をします。 M1 次生は予備実験、M2 次生は本実験のレポートを提出します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎週、課題をだしますので、各自取り組み、提出して下さい。以下、いくつかの課題を例示します。

- 興味がある実験について標的行動（従属変数）、介入方法（独立変数）、実験計画法の 3 つを考え、提案するための資料を作成する。
- 実験計画について予測する結果を作図する。
- 5 つ以上の先行研究を表にまとめる。
- 本授業の準備・復習時間は、それぞれ平均 4 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

島宗 理 (2019). ワードマップ 応用行動分析学 新曜社

【参考書】

研究テーマや課題に応じて、適宜、資料を配付し、参考文献などを紹介します。

【成績評価の方法と基準】

○授業参加（40%）および授業課題の遂行度（60 %）から成績を評価します。

【学生の意見等からの気づき】

(2021 年度は未開講でした)

【その他の重要事項】

この科目は M1 次生と M2 次生の合同授業となります。重複履修を原則としていますので、M1 次と M2 次には同じ教員の授業を受講してください。

☆研究テーマは受講生の興味を最優先して決めます。行動分析学は研究対象を限定しません。基本的に何でも研究できると考えて下さい。ただし、大学院生活のほとんどをかけて取り組む研究ですから、自分の得意なこと、興味があること、これだけは人に負けないぞと自信があること、そういう自信をつけたいことなどを選んで下さい。こんなことでも実験できるのだろうか？ と思いとどまらず、ぜひ一度相談して下さい。修論ですから、大がかりな実験はできませんが、世界に二つとない実験を共につくりましょう。

オフィスアワーは春学期は金曜日の 4 限、秋学期は火曜日の 2 限、場所は研究室（富士見坂校舎 6F9 号室）です。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 行動分析学

<研究テーマ>

組織行動マネジメント、広告・消費者行動、教材開発

<主要研究業績>

① 島宗 理 (2019). ワードマップ 応用行動分析学 新曜社

② 島宗 理 (2015). リーダーのための行動分析学入門 日本実業出版社

③ 島宗 理・若松克則 (2016). 会計事務所働くパート従業員を対象とした参加型マネジメント 行動分析学研究, 31, 2-14.

【Outline (in English)】

【Course outline】

The purpose of this course is to learn and master research methods in behavior analysis, including functional analyses of behavior, systematic observation and recording procedures, single-case designs, and visual inspection of time series data to evaluate effectiveness of an intervention. Students will select their own research topic, conduct a literature review, develop a research proposal, and run experiments.

【Learning Objectives】

At the end of the course, students should be able to do the following:

- 1) identify behavioral objectives, 2) design and conduct experiments, 3) analyze data, and 4) present research outcomes.

【Learning activities outside of classroom】

Students are expected to complete weekly assignments on research projects (average of 3 hours).

【Grading Criteria /Policy】

Final grade in this class will be decided based on the following: Class participation (40%) and task completion (60%).

PSY600B6

心理学研究法演習Ⅱ

島宗 理

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

社会的・個人的に重要な行動問題の解決策を科学的に発見、開発する方法論として、行動分析学の研究法を学びます。この授業では、**M1** 次生は予備実験の報告書と修士論文の実験計画書、**M2** 次生は修士論文を書き上げ、発表するまでを支援しますが、その過程で、論理的な文章作成や根拠に基づいた提案、プレゼン、討論の練習をしていきます。

【到達目標】

この授業で主に目指すのは以下の知識や技術の習得です：自分の実験を社会的、学術的な文脈に位置づけること、実験から得られたデータを分析し、わかったこと、わからなかったことを整理し、わからなかったことはどうすればわかるようになるかを提案すること。わかったことを数量化し、図表にまとめ、読み手や聞き手にわかりやすいように発表すること、論理的に一貫した、読みやすい文章を書くこと。詳細な規定にきめ細かく対応した校正を行うこと。締切から逆算して計画をたて、遂行すること。自分では解決できない問題について仲間や指導教員から助言をもらうこと、助言すること。

これらはすべて研究にとって必要な技能や知識ですが、修了後に就職してからも皆さんの職場で必ず役に立つものです。修論のためだけの研究法ではなく、この機会に、一生使える心理学の専門性を習得してください。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

毎週、課題を出します。授業はゼミ形式で、課題の発表と討論を中心に進めます。**M1** 次には心理学研究法演習Ⅰで行った予備実験と次年度に行う修論実験を題材に課題に取り組みます。**M2** 次には各自の修論研究を題材に課題を進めます。ゼミの時間の大半を発表や討論の練習に使いますので積極的に参加して下さい。課題へのフィードバックは授業および掲示板で行います。

【重要】新型コロナ感染拡大防止のために、この授業は感染状況に応じてオンラインと対面を適宜組み合わせで行います。学習支援システムのこの授業科目のトップページで、対応状況やそれに伴うシラバスからの変更点について案内しますのでご確認ください。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	全員：授業内容と方法、約束事を説明します。 M1 次生は予備実験、 M2 次生は修論実験の内容を 1 分間でプレゼンする練習をします。
第 2 回	論文を書く： アウトラインを書く	全員：アウトラインを書いてから本文を書く方法を解説します。「方法」の章を使って練習をします。日本心理学会「執筆・投稿の手引き」の参照方法も解説します。 M1 次生は予備実験のレポートを執筆します。 M2 次生は修論実験を論文にしていきます。

第 3 回 論文を書く：
データの視覚的な提示

全員：実験の中心的なデータを選び、それを視覚的に伝える図を描きます。独立変数と従属変数の関係性がわかりやすく提示できているかどうか、「手引き」やゼミの「チェックリスト」にそっているかどうかを確認します。

第 4 回 論文を書く：
推敲する (1)

全員：方法の章の完成版を提出し、チェックリストに基づいて推敲します。方法の章で最も重要なのは読み手がその実験を追試できるように書かれているかどうかです。読み手の立場から自分の論文を読み直して推敲する練習をします。

第 5 回 論文を書く：
事実を書く

全員：アウトラインから書く方法を結果の章を使って練習します。読み手に自分の研究のセールスポイントをわかりやすく伝えるために、順序や論理展開を工夫する練習です。

第 6 回 論文を書く：
先行研究をまとめる

全員：先行研究をまとめて表にし、「手引き」に即した作表方法を学びます。先行研究を紹介する段落を書き、文献引用の作法を練習します。

第 7 回 論文を書く：
研究を位置づけるアウトラインを書く

全員：第 6 回でまとめた先行研究の展望を活かし、また前期に作成したストーリーを振り返り、序論のアウトラインを作成します。パラグラフ・ライティング法（段落をトピック文とサポート文で構成する手法）を解説し、練習します。

第 8 回 論文を書く：
推敲する (2)

全員：第 5 回で作成したアウトラインに肉付けをして結果の章をまとめます。データの分析や統計が適切に、かつ充分に行われているかどうかを確認します。

第 9 回 論文を書く：
推敲する (3)

全員：パラグラフ・ライティング法を使って序論を完成させます。日本語の作文技術について確認し、推敲の練習をします。さらに、チェックリストを使って、「執筆・投稿の手引き」にそうように推敲します。

第 10 回 論文を書く：
執筆ルールに基づいて校正する

全員：引用文献一覧を作成します。「執筆・投稿の手引き」にそうように推敲します。また、本文と合わせて、引用の方法が適切かどうかを確認します。

第 11 回 論文を書く：
推敲する (4)

全員：小実験レポート、修論のゼミ内提出の前の最終確認とチェックリストを使った推敲の練習をします。また、自分で書いた文章を自分で推敲するのは困難であることを自覚するために、他の受講生の修論を校正する練習もします。校正に使う一般的な記号を習得しましょう。

第 12 回 研究計画 (1)	M1 次生： 次年度に行う修論の実験計画を 発表し、討論します。 M2 次生： 修論を推敲し、提出します。
第 13 回 研究計画 (2)	M1 次生： 次年度に行う修論の実験計画を 発表し、討論します。 M2 次生： 修論の要旨を作成して提出しま す。要旨は修論のストーリーをわ かりやすく伝える文章です。セー ルスポイントの抽出と伝達、文字 数が限られている場合の推敲方法 について解説し、練習します。
第 14 回 まとめと研究計画 (3)	全員： 授業全体を振り返り、討論し ます。 M1 次生： 次年度に行う修論の実験計画を 発表し、討論します。 M2 次生： 修論発表会に備え、修論研究の発 表練習をします。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎週、課題をだしますので、各自取り組み、提出して下さい。以下、いくつかの課題を例示します。

- 春学期に実施した実験の発表資料を作成し、練習をする。
- 自分の研究の社会的意義を示す資料を収集し、発表資料としてまとめる。
- 日本心理学会の「執筆・投稿の手びき」およびゼミの論文推敲チェックリストを用いて、「結果」の章を推敲し、提出する。
- 本授業の準備・復習時間は、それぞれ平均 4 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

○鳥宗 理 (2019). ワードマップ 応用行動分析学 ―ヒューマンサービスを改善する行動科学― 新曜社

【参考書】

倉島保美 (2012) 論理が伝わる世界標準の「書く技術」 講談社

【成績評価の方法と基準】

○授業への参加 (40 %)、課題遂行 (40 %)、レポート提出 (20 %) から成績を評価します。

○欠席が 5 回以上になると自動的に E 評価になります。

【学生の意見等からの気づき】

(2021 年度は未開講でした)

【その他の重要事項】

この科目は M1 次生と M2 次生の合同授業となります。重複履修を原則としていきますので、M1 次と M2 次には同じ教員の授業を受講してください。

オフィスアワーは春学期は金曜日の 4 限、秋学期は火曜日の 2 限、場所は研究室（富士見坂校舎 6F9 号室）です。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 行動分析学

＜研究テーマ＞

組織行動マネジメント、広告・消費者行動、教材開発

＜主要研究業績＞

① 鳥宗 理 (2019). ワードマップ 応用行動分析学 新曜社

② 鳥宗 理 (2015). リーダーのための行動分析学入門 日本実業出版社

③ 鳥宗 理・若松克則 (2016). 会計事務所で働くパート従業員を対象とした参加型マネジメント 行動分析学研究, 31, 2-14.

【Outline (in English)】

【Course outline】

The purpose of this course is to learn and master research methods in behavior analysis, including evaluation of single-case design data with visual inspection, and interpretation of functional relationship between dependent and independent variables. Student will also aim to master how to write a research paper, by learning about paragraph writing, Japanese Psychological Association's publication manual, and other miscellaneous rules in academic writing.

【Learning Objectives】

At the end of the course, students should be able to do the followings:

1) prepare figures and tables, 2) cite research papers, and 3) write logical sentences, and 4) complete their own research paper.

【Learning activities outside of classroom】

Students are expected to complete weekly assignments on research projects (average of 3 hours).

【Grading Criteria /Policy】

Final grade in this class will be decided based on the following: Class participation (40%) and task completion (60%).

PSY600B6

心理学研究法演習 I

越智 啓太

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

授業概要

主に犯罪心理学を専攻する大学院生への研究指導

【到達目標】

自分の研究テーマに従い実験を行い、結果を分析し、まとめて、学会発表を行うとともに、論文にまとめる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業はゼミ形式で、各自の研究報告と全員でのディスカッション、研究指導を中心に行う。毎回各自の研究の進展状況について、レジュメとパワーポイントで説明する。学会前には、学会発表演習を行う。論文投稿に際しては読み合わせを行う。リアクションペーパーや授業内の意見については毎回授業の初めに説明するとともに個別に解説してフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	春学期の研究計画について具体化する。
第 2 回	研究報告と討論（おもに文献収集）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 3 回	研究報告と討論（おもに文献の読解 1）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 4 回	研究報告と討論（おもに文献の読解 2）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 5 回	研究報告と討論（おもに文献文の読解 3）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 6 回	研究報告と討論（おもに文献の読解 4）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 7 回	研究報告と討論（おもに文献の読解のまとめと整理統合 1）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 8 回	研究報告と討論（主に文献の読解のまとめと整理統合 2）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 9 回	研究報告と討論（おもに先行研究のメタ分析）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 10 回	研究報告と討論（主に研究計画の立案 1）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 11 回	研究報告と討論（おもに研究計画の立案 2）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 12 回	研究報告と討論（おもに研究計画のプレゼンテーション）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 13 回	研究報告と討論（おもに研究計画の評価と討論 1）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 14 回	研究報告と討論（おもに研究計画の評価と討論 2）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自で自分の計画に従って、研究のレビュー、実験計画、実験の実施、分析、学会発表、論文執筆を行う。毎回 4 時間程度の予習と 1 時間程度の復習が必要である。

【テキスト（教科書）】

使用しない。その都度文献を紹介する。

【参考書】

使用しない。

【成績評価の方法と基準】

自分の研究計画に沿って研究を進できたか（40％）。
他人の研究について適切なコメントができたか（60％）。
授業中に自発的に有益な発言がないといくら学術的に有益な研究を行っていたとしても、単位は与えられないので注意すること。

【学生の意見等からの気づき】

学会発表のためのサポートを充実させるとともに統計手法についてのコメントをより詳細なものにします。

【学生が準備すべき機器他】

各自、自分が使用しているパソコンを持参して、授業に臨むこと。

【その他の重要事項】

毎回、すべての報告が終わるまで時間を延長する。学会発表前には、授業期間外にも補講を行う。この授業をとるものは、この授業の参加をほかのすべての行事よりも優先すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 犯罪心理学

<研究テーマ> 犯罪捜査への心理学の応用

<主要研究業績> 「犯罪捜査の心理学」（新曜社）、「ケースで学ぶ犯罪心理学」（北大路書房）

【Outline (in English)】

【Course outline】

In this class, empirical experimental research on forensic and criminal psychology and presentation training will be conducted.

【Learning Objectives】

You will be able to study psychology yourself. Specifically, the following points.

Research theme selection

Searching and organizing prior literature

Design of experiments

Analysis of experimental results

Creating reports and dissertations

Oral and poster presentation

【Learning activities outside of classroom】

Each lesson requires 4 hours of preparation and 1 hour of review.

【Grading Criteria /Policy】

Your overall grade in the class will be decided based on the following

Report on research progress(40%) + class contribution (60%)

PSY600B6

心理学研究法演習Ⅱ

越智 啓太

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

授業概要

主に犯罪心理学を専攻する大学院生への研究指導

【到達目標】

自分の研究テーマに従い実験を行い、結果を分析し、まとめて、学会発表を行うとともに、論文にまとめる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業はゼミ形式で、各自の研究報告と全員でのディスカッション、研究指導を中心に行う。毎回各自の研究の進捗状況について、レジュメとパワーポイントで説明する。学会前には、学会発表演習を行う。論文投稿に際しては読み合わせを行う。リアクションペーパーや授業内の意見については毎回授業の初めに説明するとともに個別に解説してフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	秋学期の研究計画について具体化する。
第 2 回	研究報告と討論（おもに実験結果の報告）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 3 回	研究報告と討論（おもに実験結果の報告のプレゼンテーション）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 4 回	研究報告と討論（おもに実験結果の報告の図表表示）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 5 回	研究報告と討論（おもに実験結果の報告の論文記述）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 6 回	研究報告と討論（おもに結果の分析手法）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 7 回	研究報告と討論（おもに結果の分析の問題点）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 8 回	研究報告と討論（主に結果の分析の論文記載）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 9 回	研究報告と討論（おもに理論的な問題点の吟味）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 10 回	研究報告と討論（おもに考察）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 11 回	研究報告と討論（おもに研究のリミテーションとその記述）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 12 回	研究報告と討論（おもに投稿準備）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 13 回	研究報告と討論（おもに論文のフォーマット）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 14 回	研究報告と討論（まとめ 3）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自で自分の計画に従って、研究のレビュー、実験計画、実験の実施、分析、学会発表、論文執筆を行う。特に毎回のテーマ（おもに～と記載されている部分）について重点的に準備してくる。毎回 4 時間程度の予習と 1 時間程度の復習が必要である。

【テキスト（教科書）】

使用しない。その都度文献を紹介する。

【参考書】

使用しない。

【成績評価の方法と基準】

自分の研究計画に沿って研究を進んできたか（40％）。他人の研究について適切なコメントができたか（60％）。授業中に自発的に有益な発言がないといくら学術的に有益な研究を行っていたとしても、単位は与えられないので注意すること。

【学生の意見等からの気づき】

修士論文指導に関しては、論文の読み合わせ、口頭発表のシミュレーションなどを充実させます。

【学生が準備すべき機器他】

各自、自分が使用しているパソコンを持参して、授業に臨むこと。

【その他の重要事項】

毎回、すべての報告が終わるまで時間を延長する。学会発表前には、授業期間外にも補講を行う。この授業受講者は他のすべての行事よりもこの授業への参加を優先すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 犯罪心理学

<研究テーマ> 犯罪捜査への心理学の応用

<主要研究業績> 「犯罪捜査の心理学」（化学同人）

【Outline (in English)】

【Course outline】

In this class, empirical experimental research on forensic and criminal psychology and presentation training will be conducted.

【Learning Objectives】

You will be able to study psychology yourself. Specifically, the following points.

Research theme selection

Searching and organizing prior literature

Design of experiments

Analysis of experimental results

Creating reports and dissertations

Oral and poster presentation

【Learning activities outside of classroom】

Each lesson requires 4 hours of preparation and 1 hour of review.

【Grading Criteria /Policy】

Your overall grade in the class will be decided based on the following

Report on research progress(40%) + class contribution (60%)

PSY600B6

心理学研究法演習 I

藤田 哲也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

記憶を中心とした認知心理学および、主に学習過程に焦点を当てた教育心理学に関連する先行研究を批判的に読み、研究目的とそれを達成する方法論および分析法について議論をすることを通じて、自分の研究計画の基礎とする。

【到達目標】

半期の授業が終了した時点で、以下の各要素を身につけていることが、授業の具体的な到達目標となる。

1. 個々の先行研究の方法上の問題点・改善点もしくは優れている点を挙げることができる。
2. 個々の先行研究の分析および結果の解釈に関する問題点・改善点もしくは優れている点を挙げることができる。
3. 上記1, 2の内容をふまえて、より適切な研究計画を提案することができる。
4. 上記1, 2, 3の内容を、適切でわかりやすい方法で他者に伝達できる。
5. 他者の発表に対して、的確なコメントをすることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

先行研究について正確に理解した上で、その研究方法・分析方法・論理の首尾一貫性について口頭で説明することを具体的な作業課題として設定した演習である。

研究論文の構成について教員が解説した上で、受講生自身が実際に発表し、全員で討論を行う。

具体的な授業の進め方は次の通りである。毎回の授業の前半で、一人の受講生が自分の興味ある研究領域の論文を読んでレジюмеを作成し、その内容を説明する。その際には単に論文に沿って紹介するだけでなく、批判的な目を持って、問題点や改善点を指摘することに重点を置く。もし問題点・改善点に気づかない場合には、その研究方法の優れている点を指摘することとする。毎回の授業の後半では、発表された内容について受講生全員で討論を行い、その議論を踏まえて、発表した研究と同じテーマで、より適切な研究を行うための研究計画を各自が提案する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	この授業の概要と到達目標、評価方法の説明
第2回	論文の構成とは	論文を読む際に留意すべきポイントを担当教員が説明する
第3回	議論の進め方	担当教員が発表の例示をし、議論の進め方について説明する
第4回	論文発表1	一人目の発表者が論文の内容を紹介し、全員で討論
第5回	論文発表2	二人目の発表者が論文の内容を紹介し、全員で討論
第6回	論文発表3	三人目の発表者が論文の内容を紹介し、全員で討論
第7回	論文発表4	四人目の発表者が論文の内容を紹介し、全員で討論
第8回	論文発表5	五人目の発表者が論文の内容を紹介し、全員で討論
第9回	論文発表6	六人目の発表者が論文の内容を紹介し、全員で討論

第10回 論文発表7

第11回 論文発表8

第12回 論文発表9

第13回 論文発表10

第14回 総括

七人目の発表者が論文の内容を紹介し、全員で討論
八人目の発表者が論文の内容を紹介し、全員で討論
九人目の発表者が論文の内容を紹介し、全員で討論
十人目の発表者が論文の内容を紹介し、全員で討論
授業の到達目標の確認、授業で習得できたことの振り返り、成績評価について、今後の課題

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備・学習時間は、各2時間を標準とする。詳細は下記の通り。

第1回 自分の興味ある研究テーマを明確にして、文献検索のためのキーワードを準備する

第2回 自分の興味ある研究テーマの文献を収集する

第3回 先行研究の熟読、レジюмеによる発表の準備

第4回～第13回 各自が、よりよい研究計画を考案して、学習支援システムの掲示板に掲載する

第14回 この授業で学んだことを振り返り、研究計画上の留意点を集約する

【テキスト（教科書）】

教科書は指定しない。授業は配付プリントに沿って行う。

【参考書】

藤田哲也(編)(2006). 大学基礎講座 改増版－充実した大学生活をおくるために－ 北大路書房

そのほか、各回の授業内容に関連した書籍や論文を授業内で紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 %…授業へ参加し、他者の発表へコメントすることを評価対象とする。

論文発表 30 %…発表の内容、発表資料の質、問題点・改善点等の指摘を評価対象とする。

改善計画の提案 20 %…毎回の発表に関連した、改善された研究計画案を評価対象とする。

【学生の意見等からの気づき】

前年に授業担当がなかったので最新の2019年度分を載せます：3人中2人から「履修してよかった」で5をもらえましたが、残り1人は何が不足だったのか自由記述からは読み取れませんでした。「もっとこうしてほしい」という要望・意見があったら遠慮無く伝えてください。授業外学習の時間は3人とも3時間以上で、昨年より向上しています。今後も自分でベースを作り、自分にとって有意義な学びを積み上げてください。

【その他の重要事項】

授業の運営方針や教育目標について説明を行うとともに、発表の割り当てを行うので、受講希望者は初回の授業に必ず出席すること。心理学専攻以外の所属で受講を希望する者は、必ず事前に相談すること。

この授業は、複数年度にわたって重複履修することが可能である。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

認知心理学、教育心理学

<研究テーマ>

単なる経験則に終わらない、研究技能の獲得と研究成果の伝達を目指す。

<主要研究業績>

藤田哲也(編)(2006). 大学基礎講座 改増版－充実した大学生活をおくるために－ 北大路書房

藤田哲也(2006). 心理学を活かした教育実践のために 井上智義(編) 視聴覚メディアと教育方法 ver.2 認知心理学とコンピュータ科学の応用実践のために 8章 北大路書房, pp.135-155.

藤田哲也(2010). 記憶過程と学習 三宮真智子(編) 教育心理学 2章 学文社, pp.22-37.

【Outline (in English)】

[Course outline]

In this class, students critically read papers of cognitive psychology focusing on memory and papers of educational psychology focusing on learning process. Through discussing the research goal, the methodology, and analytical method, students acquire the fundamental skills to develop their research plans.

[Learning Objectives]

By the end of the course, students should be able to do the following:

1. Students can list problems / improvements or advantages in the method of individual previous research.
2. Students can list problems / improvements or advantages regarding the analysis of individual previous studies and the interpretation of results.
3. Students can propose a more appropriate research plan based on the contents of 1 and 2 above.
4. Students can present the contents of 1, 2 and 3 above to others in an appropriate and easy-to-understand manner.
5. Students can make accurate comments on the presentations of others.

[Learning activities outside of classroom]

The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.

[Grading Criteria /Policy]

The overall grade of the class is determined based on the following.

In-class contribution 50%, presentation about the paper 30%, proposal for improvement plan 20%.

PSY600B6

心理学研究法演習Ⅱ

藤田 哲也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

記憶を中心とした認知心理学および、主に学習過程に焦点を当てた教育心理学に関連する特定分野の複数の先行研究を批判的に読み、オリジナリティのある研究目的を達成するための適切な研究計画を考案します。修士課程 2 年生はその計画に沿って研究を実施した上で、結果を分析し考察します。

【到達目標】

半期の授業が終了した時点で、以下の各要素を身につけていることが、授業の具体的な到達目標となる。

< 修士課程 2 年生 >

1. 自分の関心ある研究領域について、検討すべき理論上あるいは方法上の問題点・改善点もしくは優れている点を挙げるができる。
2. 上記 1 の内容をふまえて、独自性のある新たな研究計画を立て、研究を実施することができる。
3. 得たデータに適した正しい分析を行うことができる。
4. 上記 1, 2, 3 の内容を、適切でわかりやすい方法で他者に伝達できる。
5. 他者の発表に対して、的確なコメントをすることができる。

それ以外の受講生：

1. 自分の関心ある研究領域について、方法上の問題点・改善点もしくは優れている点を挙げるができる。
2. 自分の関心ある研究領域について、蓄積された知見や提唱された理論に関する問題点・改善点もしくは優れている点を挙げることができる。
3. 上記 1, 2 の内容をふまえて、独自性のある新たな研究計画を提案することができる。
4. 上記 1, 2, 3 の内容を、適切でわかりやすい方法で他者に伝達できる。
5. 他者の発表に対して、的確なコメントをすることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

心理学の特定の領域に関連した一連の先行研究を概観した上で、一般的に用いられているパラダイムを吟味し、自分自身の研究計画に反映させることを具体的な作業課題として設定した演習である。

研究論文の構成について教員が解説した上で、受講生自身が実際に 2 回発表し、全員で討論を行う。

具体的な授業の進め方は次の通りである。

受講生は、自分の興味ある研究領域の複数の論文をレビューし、新たな問題提起を行い、自分自身の研究計画を 2 回発表する。毎回の授業で、発表された研究計画について受講生全員で討論を行い、より適切な研究を行うための方法論上のアドバイスを各自が行う。

それに加えて、修士課程 2 年生は、修論研究の中間発表と最終発表の 2 回を通して、研究計画から結果の分析及び解釈まで、自分自身の研究について論旨の一貫性を向上させる。修士課程 1 年生は、1 回の修論計画発表を通して、自分自身の研究を行う意義・目的と対応した方法論について理解を深める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	この授業の概要と到達目標、評価方法の説明
第 2 回	研究計画上の留意点	研究計画を立てる上で留意すべきポイントを担当教員が説明する

第 3 回	発表の準備	各自がレジュメとパワーポイントを用いた発表準備を行う
第 4 回	修論中間発表	M2 の受講生が研究の分析結果を発表し、全員で討論
第 5 回	研究計画発表 1	一人目と二人目の受講生が研究計画を発表し、全員で討論
第 6 回	研究計画発表 2	三人目と四人目の受講生が研究計画を発表し、全員で討論
第 7 回	研究計画発表 3	五人目と六人目の受講生が研究計画を発表し、全員で討論
第 8 回	研究計画発表 4	七人目と八人目の受講生が研究計画を発表し、全員で討論
第 9 回	修論最終発表	M2 の受講生が研究全体の構成を発表し、全員で討論
第 10 回	研究計画発表 5	一人目と二人目の受講生が 2 回目の研究計画を発表し、全員で討論
第 11 回	研究計画発表 6	三人目と四人目の受講生が 2 回目の研究計画を発表し、全員で討論
第 12 回	研究計画発表 7	五人目と六人目の受講生が 2 回目の研究計画を発表し、全員で討論
第 13 回	修論計画発表	M1 の受講生が修論研究計画を発表し、全員で討論
第 14 回	総括	授業の到達目標の確認、授業で修得できたことの振り返り、成績評価について、今後の課題

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。授業前の準備学習の詳細は下記の通り。

第 1 回 自分の興味ある研究領域の複数の論文をレビューする

第 2 回 複数の論文をレビューし、新たな問題設定を行う

第 3 回～第 13 回 レジュメおよびパワーポイントのスライド作成

授業後に行う学習として、第 4 回以降の各発表者の修論研究や研究計画を改善するためのアドバイスを学習支援システムの掲示板に記載する。また、第 14 回にはこの授業で学んだことを振り返り、研究実施の際の留意点を集約する。

【テキスト（教科書）】

教科書は指定しない。授業は配付プリントに沿って行う。

【参考書】

藤田哲也（編）(2006). 大学基礎講座 改増版－充実した大学生活をおくるために－ 北大路書房

そのほか、各回の授業内容に関連した書籍や論文を授業内で紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 %…授業へ参加し、他者の発表へコメントすることを評価対象とする。

研究計画発表 30 %…研究目的の設定、研究方法・分析方法の適切さ、発表資料およびスライドの質を評価対象とする。

研究計画改善の提案 20 %…毎回の計画発表に対して行われた、改善のためのアドバイスを評価対象とする。

【学生の意見等からの気づき】

前年に授業担当がなかったので最新の 2020 年度分を載せます：全員、「履修して大変よかった」と回答してくれ、うち全員が毎週 2 時間以上の授業外学習時間を当てて発表および他者の発表へのコメント作成に取り組んでいたことがうかがえます。毎年書いていますが、授業を離れても、自主的に院生相互で意見交換するような学習環境を作ってくれることを期待しています。2019 年度からは、評価対象外ではあるものの、修論のペースメーカーとなるような発表課題を設定しました。特に否定的意見はなかったので継続します。

【その他の重要事項】

授業の運営方針や教育目標について説明を行うとともに、発表の割り当てを行うので、受講希望者は初回の授業に必ず出席すること。心理学専攻以外の所属で受講を希望する者は、必ず事前に相談すること。

この授業は、複数年度にわたって重複履修することが可能である。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

認知心理学、教育心理学

＜研究テーマ＞

単なる経験則に終わらない、研究技能の獲得と研究成果の伝達を目指す。

＜主要研究業績＞

藤田哲也（編）(2006). 大学基礎講座 改増版－充実した大学生活をおくるために－ 北大路書房

藤田哲也（2006）. 心理学を活かした教育実践のために 井上智義（編）視聴覚メディアと教育方法 ver.2 認知心理学とコンピュータ科学の応用実践のために 8 章 北大路書房, pp.135-155.

藤田哲也（2010）. 記憶過程と学習 三宮真智子（編）教育心理学 2 章 学文社, pp.22-37.

【Outline (in English)】

[Course outline]

In this class, students will critically read several prior studies in the fields of cognitive psychology focusing on memory and educational psychology focusing on learning process. Reflecting that, students will propose appropriate research plans to achieve original research objectives. The master's course second grader conducts research according to the plan and analyzes and discusses the results.

[Learning Objectives]

By the end of the course, students should be able to do the following:

- 1.Students can list method problems / improvements or advantages in the research area of their interest.
- 2.Students can list problems / improvements or advantages regarding the accumulated knowledge and proposed theories regarding the research area of their interest.
- 3.Students can propose a new research plan with their own uniqueness based on the contents of 1 and 2 above.
- 4.Students can present the contents of 1, 2 and 3 above to others in an appropriate and easy-to-understand manner.
- 5.Students can make accurate comments on the presentations of others.

[Learning activities outside of classroom]

The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.

[Grading Criteria /Policy]

The overall grade of the class is determined based on the following.

In-class contribution 50%, presentation of research plan 30%, proposal for improvement of research plan 20%.

PSY600B6

心理学研究法演習 I

荒井 弘和

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

スポーツ心理学、または、スポーツ心理学と他の心理学分野との関連性に焦点を当てます。そして、研究課題を明確にして、研究計画を立てることをテーマとします。

【到達目標】

授業の到達目標は、以下の3点です。(1) 先行研究を概観して、研究の課題を整理することができる。(2) 研究の課題を解決するための研究計画を立てることができる。(3) 以上2点について、他の受講生と論理的な意見交換を行うことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

(1) 研究論文を読んで発表したり、(2) 意見交換をしたりして、研究課題や研究計画を具体化できるようになることを目指します。授業中に行うことは、(1) 発表と意見交換、(2) グループワークです。課題に対するフィードバックは、(1) 次の回の授業の序盤に受講生全体に対して、(2) メーリングリストを利用して受講生全体に対して、(3) 個人的に、のいずれかの方法で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	自分の関心を洗い出す(1)	関心のあるテーマを出し合う。その内容について、意見交換を行う。
第2回	自分の関心を洗い出す(2)	関心のあるテーマを出し合う。その内容について、意見交換を行う。
第3回	先行研究を読み、内容をまとめる(1)	関心のあるテーマに関連する研究論文を読み、資料を作成して発表する。その内容について、意見交換を行う。
第4回	先行研究を読み、内容をまとめる(2)	関心のあるテーマに関連する研究論文を読み、資料を作成して発表する。その内容について、意見交換を行う。
第5回	先行研究を読み、内容をまとめる(3)	関心のあるテーマに関連する研究論文を読み、資料を作成して発表する。その内容について、意見交換を行う。
第6回	先行研究を読み、内容をまとめる(4)	関心のあるテーマに関連する研究論文を読み、資料を作成して発表する。その内容について、意見交換を行う。
第7回	先行研究を読み、内容をまとめる(5)	関心のあるテーマに関連する研究論文を読み、資料を作成して発表する。その内容について、意見交換を行う。

第8回	先行研究を読み、内容をまとめる(6)	関心のあるテーマに関連する研究論文を読み、資料を作成して発表する。その内容について、意見交換を行う。
第9回	先行研究を読み、内容をまとめる(7)	関心のあるテーマに関連する研究論文を読み、資料を作成して発表する。その内容について、意見交換を行う。
第10回	先行研究を読み、内容をまとめる(8)	関心のあるテーマに関連する研究論文を読み、資料を作成して発表する。その内容について、意見交換を行う。
第11回	研究計画を立てる(1)	研究計画を作成し、発表する。その内容について、意見交換を行う。研究計画を立て直し、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
第12回	研究計画を立てる(2)	研究計画を作成し、発表する。その内容について、意見交換を行う。研究計画を立て直し、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
第13回	研究計画を立てる(3)	研究計画を作成し、発表する。その内容について、意見交換を行う。研究計画を立て直し、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
第14回	研究計画を立てる(4)	研究計画を作成し、発表する。その内容について、意見交換を行う。研究計画を立て直し、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回、(1) 文献検索、(2) 授業中に提示された課題、(3) 発表資料の作成に取り組みます。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

テキスト・参考書は用いません。必要に応じて、資料の配付・書籍や文献の紹介を行います。

【参考書】

必要・希望に応じて紹介します。

【成績評価の方法と基準】

(1) 作成したレポートや発表の内容が60%、(2) 意見交換やグループワークへの参加状況が40%です。欠席・遅刻をした場合は評価が下がります。

【学生の意見等からの気づき】

受講生の意見に鑑みて、スポーツ心理学だけに特化することなく、受講生の関心に沿って授業を展開します。

【その他の重要事項】

今後の予定を立てるためにも、初回の授業には必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

スポーツ心理学

<研究テーマ>

アスリート・コーチのメンタルサポート

<主要研究業績>

荒井弘和(編著)(2020). アスリートのメンタルは強いのか? — スポーツ心理学の最先端から考える — 晶文社

Arai, H. (2017). The effect of romantic relationships on collegiate athletes' lives with special attention to gender differences. *European Journal of Physical Education and Sport Science*, 3(7), 38-50.

Arai, H., Suzuki, F., & Akiba, S. (2016). Perception of Japanese collegiate athletes about the factors related to mentoring support. *Journal of Physical Education Research*, 3(4), 12-24.

Arai, H. (2015). Outcome expectancies for collective psychological performance among collegiate athletes. *Journal of Physical Education and Sport*, 15, 64-69.

【Outline (in English)】

(Course outline)

The theme of this class is to focus on sport psychology or the relationship between sport psychology and other psychology fields. Students will then identify a research question and develop a research plan.

(Learning Objectives)

The following are the three objectives of the class. (1) To be able to review previous research and organize research issues. (2) To be able to formulate a research plan to solve the research problem. (3) To be able to logically discuss with other students on the above two points.

(Learning activities outside of classroom)

In each class, students will work on (1) literature search, (2) assignments given in class, and (3) preparation of presentation materials.

The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.

(Grading Criteria /Policy)

(1) 60% of the grade will be based on the content of the reports and presentations you make, and (2) 40% of the grade will be based on your participation in opinion exchange and group work. If you are absent or late, your evaluation will be lowered.

PSY600B6

心理学研究法演習Ⅱ

荒井 弘和

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

スポーツ心理学、または、スポーツ心理学と他の心理学分野との関連性に焦点を当てます。そして、研究を実践し、その結果を研究論文として執筆することをテーマとします。

【到達目標】

授業の到達目標は、以下の3点です。(1) 研究計画に沿って研究を実践することができる。(2) その結果を研究論文として執筆することができる。(3) 以上2点について、他の受講生と論理的な意見交換を行うことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

(1) データ分析の結果を報告したり、(2) その解釈について意見交換をしたりして、論文を執筆することができるようになることを目指します。授業中に行うことは、(1) 発表と意見交換、(2) グループワークです。

課題に対するフィードバックは、(1) 次の回の授業の序盤に受講生全体に対して、(2) メーリングリストを利用して受講生全体に対して、(3) 個人的に、のいずれかの方法で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	研究計画の実施経過を報告する	実施経過を報告し、その内容について、意見交換を行う。
第2回	データを分析する(1)	集めたデータを分析し、発表する。その内容について、意見交換を行う。 データを再分析して、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
第3回	データを分析する(2)	集めたデータを分析し、発表する。その内容について、意見交換を行う。 データを再分析して、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
第4回	データを分析する(3)	集めたデータを分析し、発表する。その内容について、意見交換を行う。 データを再分析して、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
第5回	データを分析する(4)	集めたデータを分析し、発表する。その内容について、意見交換を行う。 データを再分析して、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
第6回	データを分析する(5)	集めたデータを分析し、発表する。その内容について、意見交換を行う。 データを再分析して、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。

第 7 回	研究論文を完成させる (1)	研究論文を執筆し、発表する。その内容について、意見交換を行う。 研究論文を書き直し、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
第 8 回	研究論文を完成させる (2)	研究論文を執筆し、発表する。その内容について、意見交換を行う。 研究論文を書き直し、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
第 9 回	研究論文を完成させる (3)	研究論文を執筆し、発表する。その内容について、意見交換を行う。 研究論文を書き直し、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
第 10 回	研究論文を完成させる (4)	研究論文を執筆し、発表する。その内容について、意見交換を行う。 研究論文を書き直し、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
第 11 回	研究論文を完成させる (5)	研究論文を執筆し、発表する。その内容について、意見交換を行う。 研究論文を書き直し、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
第 12 回	研究論文を完成させる (6)	研究論文を執筆し、発表する。その内容について、意見交換を行う。 研究論文を書き直し、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
第 13 回	研究論文を完成させる (7)	研究論文を執筆し、発表する。その内容について、意見交換を行う。 研究論文を書き直し、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
第 14 回	研究内容を口頭発表する	研究論文を元に発表資料を作成し、口頭発表を行う。 その後、質疑応答を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回、(1) 研究の実施（データ収集やデータの分析も含む）、(2) 授業中に提示された課題、(3) 発表資料の作成に取り組みます。
本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

テキスト・参考書は用いません。必要に応じて、資料の配付・書籍や文献の紹介を行います。

【参考書】

必要・希望に応じて紹介します。

【成績評価の方法と基準】

(1) 作成したレポートや発表の内容が 60%、(2) 意見交換やグループワークへの参加状況が 40%です。欠席・遅刻をした場合は評価が下がります。

【学生の意見等からの気づき】

受講生の意見に鑑みて、スポーツ心理学だけに特化することなく、受講生の関心に沿って授業を展開します。

【その他の重要事項】

今後の予定を立てるためにも、初回の授業には必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

スポーツ心理学

<研究テーマ>

アスリート・コーチのメンタルサポート

<主要研究業績>

荒井弘和（編著）(2020). アスリートのメンタルは強いのか？ — スポーツ心理学の最先端から考える — 晶文社

Arai, H. (2017). The effect of romantic relationships on collegiate athletes' lives with special attention to gender differences. *European Journal of Physical Education and Sport Science*, 3(7), 38-50.

Arai, H., Suzuki, F., & Akiba, S. (2016). Perception of Japanese collegiate athletes about the factors related to mentoring support. *Journal of Physical Education Research*, 3(4), 12-24.

Arai, H. (2015). Outcome expectancies for collective psychological performance among collegiate athletes. *Journal of Physical Education and Sport*, 15, 64-69.

【Outline (in English)】

(Course outline)

The theme of this class is to focus on sport psychology or the relationship between sport psychology and other psychology fields. The students will then practice their research and write a research paper on their findings.

(Learning Objectives)

The following are the three objectives of the class. (1) To be able to carry out research according to the research plan. (2) To be able to write a research paper on the results. (3) To be able to logically discuss with other students on the above two points.

(Learning activities outside of classroom)

In each class, students will work on (1) conducting research (including data collection and data analysis), (2) assignments presented in class, and (3) preparing presentation materials.

The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.

(Grading Criteria /Policy)

(1) 60% of the grade will be based on the content of the reports and presentations you make, and (2) 40% of the grade will be based on your participation in opinion exchange and group work. If you are absent or late, your evaluation will be lowered.

PSY600B6

心理学研究法演習 I

林 容市

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

健康心理学，生理心理学に関連した事項を中心に，実践に繋がる課題の解決を通じて研究の実践方法を学ぶ。

【到達目標】

1. 先行研究の知見の集積から，健康心理学，生理心理学に関する検討課題を指摘できる。
2. 上記 1 の検討課題を解決するための様々な指標について，その測定方法を理解し，結果を適切に解釈できる。
3. 上記 1 の検討課題について，具体的な手法を踏まえて研究計画（解決方法）を設定できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業の到達目標を踏まえて，受講生が興味を有する健康心理，生理心理をテーマとする研究を調べ，現在までの研究の状況を確認して課題を明らかにし，プレゼンテーションを行う。次に特に代謝，骨格筋活動に関する測定機器を実際に使用してデータを測定し，その結果について論議した上で判読・解釈法について学ぶ。また，これらの生理的指標の変化と心理的状態（感覚，努力度など）との関係を学ぶ。

また，前回の授業で実施した内容や提出された課題に対しては，授業内で全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	健康心理学，生理心理学の概要の理解
第 2 回	研究例の紹介	身体活動に関連した健康心理学，生理心理学の研究事例の紹介
第 3 回	文献研究およびプレゼンテーションの方法	文献レビューとプレゼンテーション方法の理解
第 4 回	文献研究結果の発表 1	受講者選定のテーマに関する文献研究の結果発表
第 5 回	文献研究結果の発表 2	受講者選定のテーマに関する文献研究に基づく討論
第 6 回	エネルギー代謝測定の実際 1	代謝量測定に関する基本的理論の学習および健康心理学，生理心理学の研究における具体的な使用法の理解
第 7 回	エネルギー代謝測定の実際 2	呼気ガス分析器の使用法の学習および様々な身体状態・活動状況における代謝量（kcal）の実測
第 8 回	エネルギー代謝測定の実際 3	3 軸加速度センサによる活動量計の使用法の学習および活動量と心理指標（主観的努力感など）の実測
第 9 回	エネルギー代謝測定の実際 4	複数の方法で測定されたエネルギー代謝量の解釈・理解
第 10 回	骨格筋活動測定の実際 1	骨格筋活動測定に関する基本的理論の学習および健康心理学，生理心理学の研究における具体的な使用法の理解

第 11 回	骨格筋活動測定の実際 2	筋電図の測定機器の使用法の学習および様々な身体活動時における筋電図と心理指標（主観的努力感など）の実測
第 12 回	骨格筋活動測定の実際 3	簡便な手法を用いた筋力の調整力と心理指標（主観的努力感など）の実測
第 13 回	生理的指標と生理指標との対応	各生理指標の測定結果と心理指標との対応関係の理解
第 14 回	研究計画の検討	様々な指標を用いた研究計画の発表と実現可能性についての討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

1 回：本授業において主として習得を希望する手法についてレポートの作成。2-5 回：個人で設定したテーマに関連した文献を検索，精読し，発表準備を行う。6-13 回：事前に配布された資料を精読し，機器の操作法，測定方法，分析方法について予習する。14 回：研究計画を立案し，プレゼンテーションの準備を行う。これらの授業時間外の学習時間は，各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特に指定しません。必要に応じて授業中に資料を配布します。

【参考書】

田中喜代次，大蔵 倫博（編），健康運動の支援と実践，金芳堂。

【成績評価の方法と基準】

授業への参画（出席ではない）状況：50%，プレゼンテーションおよびディスカッション内容：30%，研究計画内容：20%

【学生の意見等からの気づき】

前年度休講のため，特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 生理心理学，応用健康科学，健康心理学

＜研究テーマ＞ 運動中の生理・心理変化の対応関係を分析し，健康維持，減量などに効果的な身体活動を検討する

＜主要研究業績＞ 林容市 他，就学段階ごとの運動経験が大学生における把握の調整力に及ぼす影響，体育測定評価研究：18, 35-46, 2019；林容市 他，個人の性格特性と減量後の体重維持に関連したセルフエフィカシーとの関係，体力科学 57：197-206, 2008 ほか

【Outline (in English)】

【Course outline】The purpose of this class is to learn and master research methods through the resolution of practice tasks related to Health Psychology and Physiological Psychology.

【Learning Objectives】By the end of the course, students should be able to:

1. Point out issues to be considered in health psychology and physiological psychology based on the accumulation of findings from previous studies.
2. Understand the measurement methods of various indices to solve the issues and interpret the results appropriately.
3. Set up a research plan and solution method based on specific methods for the issues discussed.

【Learning activities outside of the classroom】In the first session, students will write a report on the methods they wish to learn in this class. Students will search for and carefully read literature related to the themes they have set and prepare for presentations in the second to fifth sessions. In the sixth to thirteenth sessions, students read the materials distributed by the instructor in advance and prepare for the operation of equipment, measurement methods, and analysis methods. In the 14th lecture, students will plan their research plan and prepare for the presentation. Students are expected to have 2 hours of study time outside of class time in this course.

【Grading Criteria/Policy】Grading will be decided based on the class participation (not attendance) (50%), the presentation and discussion(30%), and the research proposal(20%).

PSY600B6

心理学研究法演習Ⅱ

林 容市

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

健康心理学、生理心理学に関連した事項を中心に、現在の研究の進展状況を確認し、新たな課題を設定した上で、それを解決しうる研究計画を立案する。

【到達目標】

1. 先行研究の知見の集積から、健康心理学、生理心理学に関する具体的な検討課題を選定できる。
2. 上記 1 の検討課題について、具体的な手法を踏まえて研究計画（解決方法）を立案できる。
3. 必要な指標を用いて研究を実践し、適切にデータを分析した上で、ミニ論文を作成できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講生が興味を有する健康心理、生理心理をテーマとする先行研究を調べ、検討課題を明らかにした上で、プレゼンテーションを行う。その内容について論議を進め、具体的な研究計画を立案し、生理指標と心理状態（感覚、努力度など）を用いた実験・測定を通じてミニ論文を作成する。

また、前回の授業で実施した内容や提出された課題に対しては、授業内で全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業概要と到達目標の説明
第 2 回	研究テーマの検討 1	研究テーマの発表と実現可能性を考慮した論議
第 3 回	研究テーマの検討 2	研究テーマの確定と具体的な手続きの検討
第 4 回	関連研究のまとめ 1	テーマに関連した先行研究のまとめと発表
第 5 回	関連研究のまとめ 2	テーマに関連した先行研究のまとめと課題の決定
第 6 回	研究計画の立案 1	具体的な研究計画の発表
第 7 回	研究計画の立案 2	発表された研究計画に対する受講者内での論議
第 8 回	研究計画の実践 1	研究の実践に向けた研究計画の確定
第 9 回	研究計画の実践 2	研究計画に沿った実験の実践：心理・生理指標の測定
第 10 回	研究計画の実践 3	研究計画に沿った実験の実践：心理・生理指標の結果の解釈
第 11 回	測定データの検討 1	測定されたデータの整理と分析
第 12 回	測定データの検討 2	整理・分析したデータを発表と受講者内での論議
第 13 回	研究結果の報告 1	ミニ論文の作成
第 14 回	研究結果の報告 2	ミニ論文の作成と発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

1 回：本授業において主として習得を希望する手法についてレポートの作成。2, 3 回：個人で設定したテーマに関連した文献を検索、精読し、発表準備を行う。4, 5 回：関連する複数の先行研究を読んだまとめ、発表準備を行う。6, 7 回：研究計画を立案し、発表準備を行う。8-10 回：研究計画に沿ったデータ測定に向け、事前に配布された資料を精読して機器の操作法、測定方法、分析方法について予習する。11, 12 回：測定したデータを分析し、発表準備を行う。13, 14 回：ミニ論文を作成し、資料を作成する。これらの授業時間外の学習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特に指定しません。必要に応じて授業中に資料を配布します。

【参考書】

田中喜代次、大蔵 倫博（編）、健康運動の支援と実践、金芳堂。

【成績評価の方法と基準】

授業への参画（出席ではない）状況：50%、プレゼンテーションおよびディスカッションの内容：30%、ミニ論文の内容：20%

【学生の意見等からの気づき】

前年度休講のため、特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 生理心理学、応用健康科学、健康心理学

＜研究テーマ＞ 運動中の生理・心理変化の対応関係を分析し、健康維持、減量などに効果的な身体活動を検討する

＜主要研究業績＞ 林容市 他、就学段階ごとの運動経験が大学生における把握の調整力に及ぼす影響、体育測定評価研究：18, 35-46, 2019；林容市 他、個人の性格特性と減量後の体重維持に関連したセルフエフィカシーとの関係、体力科学 57：197-206, 2008 ほか

【Outline (in English)】

【Course outline】The purpose of this class is to examine the progress of current research on health psychology and physiological psychology and to be able to formulate research proposals to solve problems after setting up a new research problem independently.

【Learning Objectives】By the end of the course, students should be able to:

1. Select specific issues to be studied in health psychology and physiological psychology based on the accumulation of findings from previous studies.
2. Formulate a research plan (solution method) based on specific methods for the research question.
3. Conduct research using the necessary indicators, analyze data appropriately, and write a mini-thesis.

【Learning activities outside of the classroom】In the first session, students will write a report on the methods they wish to learn in this class, search for and carefully read literature related to their set theme, and prepare for presentations in the second and third sessions. Students will read and summarize several related previous studies in the fourth and fifth sessions and prepare for the presentation, develop a research plan and prepare for the presentation in the 6th and seventh sessions. In the 8th to 10th sessions, students read the materials distributed in advance and learn how to operate the instruments, measurement methods, and analysis methods for data measurement according to the research plan. Students will analyze the measured data in the 11th and 12th sessions and prepare for the presentation, and in the 13th and 14th sessions, students will write a mini paper and prepare materials. The standard study time outside of these class hours is 2 hours each.

【Grading Criteria/Policy】Grading will be decided based on the class participation (not attendance) (50%), the presentation and discussion (30%), and the research proposal (20%).

PSY500B3

学習心理特論

藤田 哲也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

人間の学習活動を支えている「記憶」について、主に記憶の測定法という観点から捉える。これまでの記憶研究の主要な成果を、単なる知識として獲得するだけでなく、それぞれの知見が導かれた研究の過程についても理解し、自分自身の研究計画をより洗練させるのに役立たせる。

【到達目標】

半期の授業が終了した時点で、以下の各要素を身につけていることが、授業の具体的な到達目標となる。

1. 人間の記憶を測定する方法（実験のパラダイム）について、説明ができる程度に理解する。
2. その測定法上の工夫や留意点を、記憶以外の心理学領域に一般化できる。
3. 上記1, 2をふまえて、自分自身の興味・関心のある領域で、実験・調査・観察等の研究計画を立てることができる。
4. 研究計画を、第三者にも正確に伝えることができるような、客観的で適切な文章で記述できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

短期記憶および作動記憶の性質を検討する上での二重課題法、意味記憶の構造を明らかにするための間接プライミング、エピソード記憶の伝統的な測度である再生・再認について、理論的な背景と実験手続との関連から、実際に使用する際の注意点を説明する。さらに、無意識的であるが故に測定が困難であった潜在記憶の測度である直接プライミングをはじめとした、近年の記憶研究の動向にも触れる予定である。測定法が妥当であるかどうかについて判断を下すためには、理論との整合性が重要であることから、様々な種類の記憶のモデルについても理解を深めることになる。とりわけ長期記憶においては、符号化と検索の過程の一致度が重要であることを強調する。

半期の前半の授業では、主に講義形式によって、上記の内容について解説を行う。後半の授業では、授業で得た知識を活用して、各自が研究計画を立て、それを発表し、教員と受講生全員で討論を行うという形式をとる。

最終的には、学術論文執筆を念頭に置き、研究方法を適切な文章で記述したものをレポートとして作成し、提出することになる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	この授業の概要と到達目標、評価方法を担当者が説明する
2	記憶の分類	短期記憶 vs. 長期記憶、手続記憶 vs. 宣言記憶、意味記憶 vs. エピソード記憶について担当者が説明する
3	作動記憶の測定法	作動記憶のモデルおよび、そのモデルの根拠となっている研究の詳細を担当者が説明する
4	反応時間からわかること	反応時間とモデルによる解釈、意味記憶研究における間接プライミング効果を担当者が説明する
5	再生と再認	再生と再認の実施法、再生と再認の違いを担当者が説明する

6	再生と再認の理論	自由再生の二段階説、符号化特定性原理、再認の二過程説を担当者が説明する
7	潜在記憶の定義・測定法	潜在記憶とは何か、潜在記憶が我々の認知に及ぼす影響を担当者が説明する
8	記憶法則の一般性	記銘材料と記憶法則の関係、記憶テストと記憶法則の関係、実験手続の違いと記憶成績の関係を担当者が説明する
9	この授業での課題	「模擬実験計画」のポイント、レポートのポイントを担当者が説明する
10	模擬実験計画：発表1	受講生が発表を行い、その内容に、これまでの授業内容が反映されているか全員で討論する
11	模擬実験計画：発表2	受講生が発表し、発表された実験計画の内容を、より適切なものにするように全員で討論する
12	模擬実験計画：発表3	受講生が発表し、その研究方法が、研究目的から見て妥当かどうかを全員で討論する
13	総括＋レポート作成	記憶分野の知識の復習と整理を行い、研究法として学んだことの復習と確認、発表の総括をする
14	レポート提出	成績評価基準の説明を担当者が行い、各自で確認し、授業内容の応用に向けてのアドバイスを担当者が行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とする。詳細は下記の通り。

- 第1回 以前に学んだことのある「記憶」研究について復習
- 第2回 それぞれの記憶が、日常生活のどのような場面で活用されているのかを考え、理解を深める
- 第3回 作動記憶の測定法を、自分の研究分野や自分自身の認知活動・学習活動に当てはめて考える
- 第4回 反応時間を指標にする際の注意点をまとめ、具体的な研究計画に活かす
- 第5回 自分の研究で再生あるいは再認を用いる場合の、得られる結果の違いについて考える
- 第6回 自分の研究に、再生と再認のいずれを用いるべきかを理論的に説明できるよう考える
- 第7回 潜在記憶が自分の日常生活のどのような現象に関わっているのかを考える
- 第8回 これまでの授業内容を総括的に復習し、疑問点を整理する
- 第9回 自分なりの問題設定と発表準備
- 第10回 自分の発表の振り返り、他者の発表に対するコメント整理、発表の準備
- 第11回 自分の発表の振り返り、他者の発表に対するコメント整理、発表の準備
- 第12回 自分の発表の振り返り、他者の発表に対するコメント整理、発表の準備
- 第13回 レポート作成
- 第14回 レポートの見直しと修正

【テキスト（教科書）】

教科書は指定しない。授業は配付プリントに沿って行う。

【参考書】

藤田哲也（1999）. 潜在記憶の測定法 心理学評論, 42, 107-125.
 藤田哲也（2001）. 潜在記憶と行為の記憶に関する研究 風間書房
 藤田哲也（2006）. 「無意識」に踊らされるあなた－日常記憶としての潜在記憶研究 太田信夫（編）記憶の心理学と現代社会 有斐閣
 その他、各回の授業内容に関連した書籍や論文を授業内で紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点 40 %…授業へ参加し、他者の発表へコメントすることを評価対象とする。
 授業内での発表 30 %…発表の内容、発表資料における記述のしかた、発表のしかたを評価対象とする。

レポート 30 %…レポートの内容、学術論文としての体裁（書式）を評価対象とする。

【学生の意見等からの気づき】

前年に授業担当がなかったので最新の 2019 年度分を載せます：「履修してよかった」は 4.80 と高水準でした。「理解度」は 4.60 で、4 点の人が 8 名中 2 名いました。自由記述には特に不満や要改善点などは書かれていなかったのですが、もっと知識面の定着を図れるよう働きかけをしたいと感じました。この授業で学んだことを、今後は自主的に自分の研究に反映させてもらえたらと思います。

【その他の重要事項】

授業の運営方針や教育目標について説明を行うとともに、発表の割り当てを行うので、受講希望者は初回の授業に必ず出席すること。心理学専攻以外の所属で受講を希望する者は、必ず事前に相談すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

記憶

<研究テーマ>

様々な記憶の測定法と、その理論

<主要研究業績>

藤田哲也（1999）. 潜在記憶の測定法 心理学評論, 42, 107-125.

藤田哲也（2001）. 潜在記憶と行為の記憶に関する研究 風間書房

藤田哲也（2006）. 「無意識」に踊らされるあなた－日常記憶としての潜在記憶研究 太田信夫（編） 記憶の心理学と現代社会 有斐閣

【Outline (in English)】

[Course outline]

In this class, students understand "memory" that supports human learning activities mainly from the viewpoint of measurement method of memory.

[Learning Objectives]

By the end of the course, students should be able to do the following:

- 1.Students will understand how to measure human memory (experimental paradigm) to the extent that they can explain it.
- 2.Students can generalize their measurement method ideas and precautions to psychological fields other than memory.
- 3.Based on the above 1 and 2, students can make research plans such as experiments, surveys, and observations in their own areas of interest.
- 4.Students can describe their research plans in objective and appropriate sentences that can be accurately communicated to others.

[Learning activities outside of classroom]

The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.

[Grading Criteria /Policy]

The overall grade of the class is determined based on the following.

In-class contribution 40%, presentation 30%, report 30%.

PSY500B6

社会心理特論

越智 啓太

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

授業概要：

テーマ 社会問題とその解決について：心理学の観点から

心理学の専門家として、社会問題についての従来の研究とエビデンスを効果的に収集し、決められた時間内に効果的にプレゼンテーションを行う演習である。受講にあたっては、心理学の基本的知識、データ収集の知識、数値的なデータの分析・解析技術、パワーポイントの使用、心理学の外国語文献の読解能力が必要である。

授業の意義：

この講義を受講することによって以下のことを達成できるようにする。

- ①社会問題について心理学の専門家の立場から適切に分析できる
- ②社会問題について心理学の専門家の立場から適切にコメントできる
- ③社会問題について心理学の専門家の立場から議論できる
- ④社会問題について心理学の専門家の立場から自分の主張をプレゼンテーションできる

【到達目標】

- (1) 主張したい問題についての分析
- (2) エビデンスの収集
- (3) エビデンスの比較と分析
- (4) 自分の意見の構成
- (5) 自分の意見の主張の構成
- (6) 効果的なプレゼンテーション
- (7) 他人のプレゼンテーションへの批判・質問スキル
- (8) 他人のプレゼンテーションの評価ができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は各自があらかじめ、選択したテーマについて 60 分間でプレゼンテーションを行い、それについて受講者全員でディスカッションする形式で行う。発表内容についての知識を深めるだけでなく、プレゼンテーションの方法や、質問に対する答え方、プレゼン時の動作などについても訓練を行う。リアクションペーパーや授業内の意見については毎回授業の初めに説明するとともに個別に解説してフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	授業についての説明
第 2 回	発表と討論（1）発表形式に重点を置く	受講生の発表と討論、それについてのコメント
第 3 回	発表と討論（2）発表時の振る舞いに重点を置く	受講生の発表と討論、それについてのコメント
第 4 回	発表と討論（3）パワーポイントの内容に重点を置く	受講生の発表と討論、それについてのコメント
第 5 回	発表と討論（4）議論の進め方に重点を置く	受講生の発表と討論、それについてのコメント
第 6 回	発表と討論（5）質問に重点を置く	受講生の発表と討論、それについてのコメント
第 7 回	発表と討論（6）質問対応に重点を置く	受講生の発表と討論、それについてのコメント

- 第8回 発表と討論（7）反論 受講生の発表と討論、それについて重点を置く でのコメント
- 第9回 発表と討論（8）反論 受講生の発表と討論、それについてのエビデンス提示に重点を置く でのコメント
- 第10回 発表と討論（9）反論 受講生の発表と討論、それについて対応に重点を置く でのコメント
- 第11回 発表と討論（10）まとめに重点を置く でのコメント
- 第12回 発表と討論（11）発表の進め方に重点を置く でのコメント
- 第13回 発表と討論（12） 受講生の発表と討論、それについて総合評価（1） でのコメント
- 第14回 発表と討論（13）総合評価（2） でのコメント

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

自分の発表に際しては、事前調査と発表の準備（50時間程度）

他人の発表に際してはその予習（数時間程度）が必要。

【テキスト（教科書）】

使用しない

【参考書】

発表者が指定する

【成績評価の方法と基準】

評価基準 授業におけるプレゼンテーション 50%、授業における討論の質と量 50%

自分の発表時でなくても積極的に発言しないと、後者の50%の加点は得られない。たとえば、自分の発表がパーフェクトでも授業中の自発的な発言があり、かつそれが有益なものでない限り単位は得られない。すべての回に出席しても貢献度が少ないと単位は得られない。

【学生の意見等からの気づき】

例年、プレゼン能力や質問能力がついたというポジティブな評価をいただいています。

【学生が準備すべき機器他】

各自、自分が使用しているパソコンを授業時に持参すること。

授業中にインターネットなどを参照しながら授業に参加すること

【担当教員の専門分野等】

専門領域 犯罪心理学、社会心理学

研究テーマ 犯罪捜査への心理学的手法の応用

主要研究業績 越智啓太 2015 ワードマップ 犯罪捜査の心理学；越智啓太 2015 恋愛の科学 実務教育出版；越智啓太 2014 ケースで学ぶ犯罪心理学 北大路書房；越智啓太 2008 犯罪捜査の心理学 化学同人；越智啓太ほか 2008 自伝的記憶の心理学 北大路書房

【Outline (in English)】

【Course outline】

Theme: Social problems and their solutions from a psychological point of view.

As a psychology expert, effectively collect previous research and evidence on social issues and make effective presentations.

【Learning Objectives】

By the end of the course, students should be able to do the followings:

- (1) Analysis of the problem you want to assert
- (2) Collection of evidence
- (3) Evidence comparison and analysis
- (4) Composition of one's opinion
- (5) Composition of assertions of one's opinion
- (6) Effective presentation
- (7) Critique / question skills for other people's presentations
- (8) Evaluation of presentations by others

【Learning activities outside of classroom】

Each lesson requires 2 hours of preparation and 2 hours of review.

【Grading Criteria /Policy】

Your overall grade in the class will be decided based on the following

Oral presentation (50%) + Quality and quantity of comments, questions in class (50%)

PSY500B6

読書心理特論

平山 祐一郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本という媒体を使って行われる心理的活動が「読書」である。その「読書」という行為はどのような心理的過程を通じて行われるのか、そして「読書」という行為の結果、人間の心理的活動がどのような影響を受けるのかについて考察する。また、教育現場では「読書離れ」が問題視され、様々な対応がなされている。そもそも「読書離れ」とはどのような現象なのか、そして、その読書離れへの有効な対応策にはどのようなものが考えられるのかについて具体的に議論する。さらに、近年、電子書籍が登場し、従来の「読書」という心理的活動が変貌することが予想されている。電子書籍が人間にどのような影響を与えるのか、その長所・短所について予測する。受講者は以上の課題に対して、適切な議論や考察、予測ができるようになることを目的とする。

【到達目標】

この授業では、講義と議論により、心理学的観点から「読書」について理解を深める。この授業に積極的に参加することにより、受講者には以下の力がつく可能性が高まる。

- ①読書という活動やその作用について、心理学的に説明できる。
- ②読書離れの原因と対策について、心理学的観点から言及できる。
- ③電子書籍の影響について、心理学的に予測できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

毎回、発表者を決め、授業計画に沿ったテーマで発表を行う。この発表に対し、出席者全員が議論する。その中で【到達目標】の3点の達成を目指す。具体的には【成績評価の方法と基準】を参照すること。オンライン授業（リアルタイム配信型）の実施を予定している。また、提出物等でよいコメント等があった場合は、授業内で紹介し、議論に活かしていく予定である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	オリエンテーションとして、授業の目的・方法・成績評価・注意事項を詳しく説明する。発表担当者を決定する。イントロダクションとして、読書に関する小講義を行う。
第2回	「ネット時代の読書論」1～12 ※平山が配付。	発表者の説明後、全員で議論を行う。
第3回	「ネット時代の読書論」13～24 ※平山が配付。	発表者の説明後、全員で議論を行う。
第4回	教科書「ネット・バカ」1章・2章	発表者の説明後、全員で議論を行う。
第5回	「ネット・バカ」3章・4章	発表者の説明後、全員で議論を行う。
第6回	「ネット・バカ」5章・6章	発表者の説明後、全員で議論を行う。
第7回	「ネット・バカ」7章・8章	発表者の説明後、全員で議論を行う。
第8回	「ネット・バカ」9章・10章	発表者の説明後、全員で議論を行う。
第9回	「ネット・バカ」総合考察	第4回～第8回までの内容について総合的に考察・議論する。
第10回	教科書「スマホ脳」前半部	発表者の説明後、全員で議論を行う。
第11回	「スマホ脳」後半部	発表者の説明後、全員で議論を行う。
第12回	「ネット・バカ」「スマホ脳」の関連文献の検討①	第4回～第11回までの授業内容に関連した書籍・論文・記事等を集め、議論を深める。主に和文。

第13回	「ネット・バカ」「スマホ脳」の関連文献の検討②	第4回～第11回までの授業内容に関連した書籍・論文・記事等を集め、議論を深める。主に英文。
第14回	授業のまとめ	授業全体に関して、受講者からの質問をもとに議論する。まとめとしての小講義も行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。準備学習として、文献の読み込みなどの予習を毎回指示する。※所要時間2時間。復習として、①授業内容を要約する、②授業内で生じた「問い」へ解答する、などのミニ・レポートを毎回提出する。※所要時間2時間。

【テキスト（教科書）】

- ①「ネット・バカ インターネットがわたしたちの脳にしていること」ニコラス・G・カー（著）青土社 2010年 2420円
 - ②「スマホ脳」アンデシュ・ハンセン（著）新潮新書 2020年 1078円
- 《注意》ただし、変更する可能性もある。指示があるまで購入しない。

【参考書】

必要に応じて、参考となる書籍を紹介する。

【成績評価の方法と基準】

上記【到達目標】の①～③の達成をめざすため、以下の要素（観点）と配分（%）により、成績評価を行う。[1] 発表 50 % ①質の高いレジュメを作成し、わかりやすく、簡潔な発表をしたか。②議論を呼び起こす発表をしたか。[2] 議論 30 % ①積極的に議論に参加したか。②適切な質問をしたか。③斬新な問いを立てられたか。④建設的な意見表明をしたか。⑤発見的な考察ができたか。[3] 提出物 20 % ①要約が適切か。②問いに的確に答えているか。※【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】を参照。

【学生の意見等からの気づき】

毎年の授業アンケートや受講者の感想から、議論を多く取り入れた授業であることが好評であることがわかった。今季も議論の中から、大小いくつもの発見があるような授業を運営したい。ただし、議論は白熱すると本題から離れる場合があるので、その舵取りを工夫したい。

【学生が準備すべき機器他】

オンライン授業（リアルタイム配信型）の実施を予定しているため、その準備をしておいてください。

【その他の重要事項】

シラバスは状況に応じて変更する。授業やメールなどで連絡・説明する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉教育心理学

〈研究テーマ〉読書心理、作文・表現の心理、学習指導と評価

〈主要研究業績〉①平山祐一郎 2008 大学生の読書状況に関する教育心理学的考察 野間教育研究所 ②平山祐一郎 2015 大学生の読書の変化-2006 年調査と 2012 年調査の比較より- 読書科学,56,55-64. ③平山祐一郎 2020 大学生の読書をどうするか IDE 現代の高等教育,621,26-30.

【Outline (in English)】

[Course Outline]

The purpose of this course is to provide participants with some points of view about effects or impacts of reading books in the psychological context. Main topics are as follows: what kind of psychological process is necessary for reading books or what kind of effect happens by electronic books. In addition to these, we will consider the cause of increase in the number of non-readers.

[Learning Objectives]

At the end of the course, participants are expected

- 1.to explain the significance of book reading psychologically.
- 2.to point out the causes of phenomenon of decreasing book readers and to take measures to it psychologically
- 3.to anticipate the influences of digital books psychologically.

[Learning activities outside of classroom]

After each class meeting, participants will be expected

- 1.to read some papers related on the theme of the class of the day.
- 2.to make a summary on contents of the class of the day.

[Grading Criteria / Policy]

Grading will be decided based on research presentation (50 %), academic discussion (30 %), submission of assignments (20 %).

PSY500B6		
教育心理特論		
平山 祐一郎		
実務教員：		
【授業の概要と目的（何を学ぶか）】		
教育心理学には少なくとも2つの目的がある。①教育という活動に心理学の光を当て、深く理解すること。②心理学の知見を教育活動に反映させ、質の向上をはかること。この授業では、受講者はそれらに加えて、学校心理士という資格とその活動から見えてくる教育にも知識を深める。		
【到達目標】		
この授業に積極的に参加することにより、受講者には以下の力がつく可能性が高まる。①国内外的教育課題を多面的に把握し、心理学的に説明できる。②教育課題に関して、証拠に基づいた原因分析と対策立案ができる。③学校心理士という資格とその活動について述べることができる。		
【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】		
【授業の進め方と方法】		
毎回、発表者を決める。発表に対して出席者全員が議論する。具体的には、【テキスト（教科書）】欄に記載されている教科書を用いて、【授業計画】欄の内容に沿って授業を進める。発表者は各回のテーマに関して、①教科書の内容を深めること、②教科書の資料や考え方を最新のものにすること、③具体例を集めること、に留意しレジュメを作成する。毎回の発表と議論を通じて、【到達目標】の3点の達成を目指す。具体的には【成績評価の方法と基準】を参照すること。※月刊「教育と医学」（慶應義塾大学出版会）から論文を選択し、その発表を行う。		
オンライン授業（リアルタイム配信型）の実施を予定している。		
また、提出物等でよいコメント等があった場合は、授業内で紹介し、議論に活かしていく予定である。		
【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes		
【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No		
【授業計画】 授業形態：オンライン/online		
回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション（教育心理学の目的と課題）	授業の目的・方法を提示する。イントロダクションとして、教育心理学の歴史と今後の課題について、学校心理学と関連づけて講義する。
第2回	心理教育的援助サービスのモデル①&「教育と医学」から発表	「4種類のヘルパー論」について概略を講義した上で、「ボランティア的ヘルパー」「役割的ヘルパー」について検討・議論する。
第3回	心理教育的援助サービスのモデル②&「教育と医学」から発表	「4種類のヘルパー論」について、「複合的ヘルパー」「専門的ヘルパー」「被援助志向性」について検討・議論する。
第4回	心理教育的援助サービスのモデル③&「教育と医学」から発表	「三段階の心理教育的援助サービス」の「1次的援助サービス」について現代的課題を含め、多面的に検討・議論する。
第5回	心理教育的援助サービスのモデル④&「教育と医学」から発表	「三段階の心理教育的援助サービス」の「2次的援助サービス」について多面的に検討・議論する。
第6回	心理教育的援助サービスのモデル⑤&「教育と医学」から発表	「三段階の心理教育的援助サービス」の「3次的援助サービス」について最新の資料を収集しつつ、検討・議論する。
第7回	学校生活の質を高め、子どもの発達を促進するために①&「教育と医学」から発表	子どもの抱える問題を捉えるために各種資料を収集し、援助案の作成等を行うための「アセスメント」について学ぶ。
第8回	学校生活の質を高め、子どもの発達を促進するために②&「教育と医学」から発表	子どもの発達を促進するために、子どもや保護者へ直接的に行われる援助サービスが「カウンセリング」である。その方法と注意点を学ぶ。
第9回	学校生活の質を高め、子どもの発達を促進するために③&「教育と医学」から発表	子どもの発達を促進するために間接的に行われる「コンサルテーション」について、「問題解決型」「研修型」「システム介入型」の3つを理解する。
第10回	学校生活の質を高め、子どもの発達を促進するために④&「教育と医学」から発表	援助の必要性が高い子どもに、学校内の援助資源（養護教諭等）を用いたり、学校外の資源（相談機関等）と連携したりすることを「コーディネーション」という。その実例検討等を行う。
第11回	子どもの問題状況を解消に導くチーム援助の在り方①&「教育と医学」から発表	チーム援助とは複数のメンバーにより子どもを多面的に捉え、共通方針を持ち役割分担し、相補関係を築きながら援助を行うことである。そのバリエーションを知る。

第12回	子どもの問題状況を解消に導くチーム援助の在り方②&「教育と医学」から発表	チーム援助の主たる構成メンバーである教師や保護者へのコンサルテーションを意識し、成功事例・失敗事例等を分析的に検討する。
第13回	教育心理学と倫理①&「教育と医学」から発表	教育心理学の研究者・実践家、学校心理士が研究や調査を行う際の配慮事項や成果の公開方法について、人権の尊重や秘密保持の厳守等の観点から、具体例を扱いつつ検討を行う。
第14回	教育心理学と倫理②&まとめ	教育心理学の実践家や学校心理士がその活動において配慮すべき人権尊重や秘密厳守、責任保持について具体例を交えて議論する。また、研修や自己研鑽の必要性について考える。最後に授業全体をまとめる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。準備学習として、文献の読み込みなどの予習を毎回指示する。※所要時間2時間。復習として、①授業内容を要約する、②授業内で生じた「問い」へ解答する、などのミニ・レポートを毎回提出する。※所要時間2時間。

【テキスト（教科書）】

①「よくわかる学校心理学」（水野治久・石隈利紀・田村節子・田村修一・飯田順子編著、ミネルヴァ書房、2400円＋税）を使用予定。《注意》ただし、変更する可能性もある。指示があるまで購入しない。②月刊「教育と医学」（慶應義塾大学出版会）の論文をもとにした発表を求める。《注意》法政大学図書館で閲覧できるため、購入する必要はない。

【参考書】

参考になる書籍等は必要に応じて、授業内で紹介する予定である。

【成績評価の方法と基準】

【到達目標】に従い、以下の要素（観点）と配分（％）により、成績評価を行う。[1] 発表 50％ ①質の高いレジュメを作成し、わかりやすく、簡潔な発表をしたか。②議論を呼び起こす発表をしたか。[2] 議論 30％ ①積極的に議論に参加したか。②適切な質問をしたか。③斬新な問いを立てられたか。④建設的な意見表明をしたか。⑤発見的な考察ができたか。[3] 提出物 20％ ①要約が適切か。②問いに的確に答えているか。※【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】を参照。

【学生の意見等からの気づき】

毎年の授業アンケートや受講者の感想から、議論を多く取り入れた授業であることが好評であることがわかった。今季も議論の中から、大小いくつもの発見があるような授業を運営したい。ただし、議論は白熱すると本題から離れる場合があるので、その舵取りを工夫したい。

【学生が準備すべき機器他】

オンライン授業（リアルタイム配信型）の実施を予定しているため、その準備をしておいてください。

【その他の重要事項】

シラバスは状況に応じて変更する。授業やメールなどで連絡・説明する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉教育心理学
〈研究テーマ〉①読書の心理 ②作文・表現の心理 ③学習指導と評価
〈主要研究業績〉①平山祐一郎 2008 大学生の読書状況に関する教育心理学的考察 野間教育研究所 ②平山祐一郎 大学生の読書の変化-2006 年調査と 2012 年調査の比較より- 読書科学,56,55-64. ③平山祐一郎 2020 大学生の読書をどうするか IDE 現代の高等教育,621,26-30.

【Outline (in English)】

【Course Outline】

The goal of this course is to give participants the basic knowledge and the practical skills of educational psychology. It is especially important to develop psychological ways to deal with the matters that concern to education and to know the application of psychological findings to educational activities for the improvement of those qualities.

【Learning Objectives】

At the end of the course, participants are expected

- 1.to explain educational issues at home and abroad psychologically.
- 2.to point out the causes of educational issues and to take measures to them based on evidences.
- 3.to explain the qualification and the work contents of the school psychologist.

【Learning activities outside of classroom】

After each class meeting,participants will be expected

- 1.to read some papers related on the theme of the class of the day.
- 2.to make a summary on contents of the class of the day.

【Grading Criteria / Policy】

Grading will be decided based on research presentation (50％)、academic discussion (30％)、submission of assignments (20％) .

PSY500B6

犯罪心理特論

越智 啓太

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

授業の目的：

この授業では、犯罪心理学の計量的な研究（とくにプロファイリングに関する論文）を集中して読解し、現在の研究水準を理解する。本年度はとくに大量殺人とスクールシューティングの論文を読解する。授業の概要：

本講義では、高度な多変量解析技法を用いた犯罪心理学研究を中心として、最先端の研究論文を集中して読解する。なるべくたくさんの論文を読むことを目的とするため、英語（犯罪心理学の英語専門論文を読解する能力）、数学（多重応答分析などの MDS 系手法、ロジスティック回帰分析）、心理学、犯罪者プロファイリングに関する基礎的な知識については習得済みであるという前提で授業を進める。心理学以外の専攻の方の受講もその専攻が許せば可能であるが、とくに他専攻であることは考慮しないで授業を進行するので、実質的に単位取得は極めて困難であることを了解して受講されたし。

【到達目標】

- (1) 大量殺人についての専門論文（英文）を 20 本以上程度読解して、時間内に効果的に発表する経験をする。
- (2) 大量殺人に関する最先端の研究の現在の到達水準について理解し、説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

海外の専門論文を各自が 1 論文 30 分程度で要約して説明し、ディスカッションを 10 分程度行う。毎回、2～5 論文を読解し、合計 50 論文を読むことを目的とする。ひとつの論文は、10～40 ページ程度の英文である。リアクションペーパーや授業内の意見については毎回授業の初めに説明するとともに個別に解説してフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション、犯罪捜査への心理学の応用	オリエンテーション、プロファイリング研究の現状についての講義
2	大量殺人：大量殺人についてのレビュー論文 1	論文の読解と議論
3	大量殺人：大量殺人についてのレビュー論文 2	論文の読解と議論
4	大量殺人：大量殺人の動機についての研究論文 1	論文の読解と議論
5	大量殺人：大量殺人の動機についての研究論文 2	論文の読解と議論
6	大量殺人：大量殺人犯の行動パターンについての研究 1	論文の読解と議論
7	大量殺人：大量殺人犯の行動パターンについての研究 2	論文の読解と議論

- 8 大量殺人：大量殺人犯の行動パターンについての MDS 研究 1
- 9 大量殺人：大量殺人犯の行動パターンについての MDS 研究 2
- 10 学会参加とその内容についてのレポート
- 11 大量殺人：ロジスティック回帰分析などを用いた行動予測研究 1
- 12 大量殺人：ロジスティック回帰分析などを用いた行動予測研究
- 13 大量殺人：マルチレベル分析を用いた行動予測研究
- 14 大量殺人：年間読解論文のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。毎週 2～5 本の英語論文を読んでいく。受講者の人数によるが、基本的に毎週 1 本程度の論文を読解し、レジュメを作成することが必要となる。毎週、上記のテーマにしたがった論文を探して準備し、十分に精読してレジュメを作成してくること。

【テキスト（教科書）】

すべて専門雑誌論文を使用する。基本的に各分野の基盤ジャーナルを中心として論文を選択する。

【参考書】

犯罪心理学についての専門雑誌論文を参照する。具体的には授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】

- (1) 授業での発表
論文を正確に読み解き、要点をまとめて適切にレジュメ化し、手際よく発表する能力について、それぞれ評価する（25%）
- (2) 発表論文の選択
多数の論文の中から、興味深い論文を選択できたかどうか評価する（20%）
- (3) 授業の参加
授業時における質疑、応答の量と質を評価する（15%）。自発的な発言がないと点数を与えない。
- (4) レポート
授業期間内に自分の読んだ（授業内外）論文のレジュメを提出するその量と質で評価（40%）

【学生の意見等からの気づき】

プロファイリングについての最新の知識を習得できるのは日本の大学ではこの授業が唯一であり、受講者の意欲と満足度は非常に高い。

【その他の重要事項】

警視庁科学捜査研究所等における実務経験があるので、その経験なども含めて指導する。

【担当教員の専門分野等】

専門領域 犯罪心理学、社会心理学
研究テーマ 犯罪捜査への心理学的手法の応用
主要研究業績 越智啓太 2015 ワードマップ 犯罪捜査の心理学；越智啓太 2015 恋愛の科学 実務教育出版；越智啓太 2014 ケースで学ぶ犯罪心理学 北大路書房；越智啓太 2008 犯罪捜査の心理学 化学同人；越智啓太ほか 2008 自伝的記憶の心理学 北大路書房

【Outline (in English)】

【Course outline】

Theme: offender profiling of mass murderers using mathematical methods.

Read specialized English dissertations.

【Learning Objectives】

By the end of the course, students should be able to explain the current level of research achievements in mass murder.

【Learning activities outside of classroom】

Each lesson requires 2 hours of preparation and 2 hours of review.

【Grading Criteria /Policy】

Your overall grade in the class will be decided based on the following

(1) Presentation in class

Evaluate the ability to accurately read the dissertation, summarize the points, appropriately resume, and presentation efficiently (25%).

(2) Selection of published papers

Evaluate whether you could select an interesting paper from a large number of papers (20%)

(3) Participation in class

Evaluate the quantity and quality of questions and responses during class (15%). No points will be given without voluntary remarks.

(4) Report

Submit a resume of the dissertation you read . Evaluated by the quantity and quality (40%)

PSY500B6

知覚研究論演習

竹島 康博

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

知覚心理学や認知心理学の分野でよく用いられる研究方法を中心に解説を行います。フリーのソフトウェアを使い、これらの研究方法を使った実験についても作成してもらいながら授業を進めます。その他、再現可能な実験を進めていく方法についても説明していきます。

【到達目標】

知覚心理学や認知心理学の分野でよく用いられる研究方法を、実際に実験課題を作成しながら学ぶことにより、自身の研究の幅を柔軟に広げられる思考力、応用力を身に付けることを到達目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

知覚心理学や認知心理学の分野でよく用いられる研究方法や、再現可能性を高める研究の進め方について、教員が解説を行います。加えて、ソフトウェアを使ってこれらの研究方法を使った実験課題の作成も行います。異なる実験課題を2週ずつ学習し、最後の数回では受講者が興味を持った研究について、研究方法を中心に自身が興味深いと感じた点や今後の課題についても含めて発表・解説をしてもらいます。

課題については次週の授業内で確認し、そこでコメントやアドバイス等のフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	はじめに	授業全体の概要説明 ソフトウェアの基本的な使い方の解説
第2回	反応時間 (1)	反応時間についての解説、実験課題の作成を行う
第3回	反応時間 (2)	反応時間についての解説、実験課題の作成を行う
第4回	心理物理測定 (1)	心理物理測定についての解説、実験課題の作成を行う
第5回	心理物理測定 (2)	心理物理測定についての解説、実験課題の作成を行う
第6回	信号検出理論 (1)	信号検出理論についての解説、実験課題の作成を行う
第7回	信号検出理論 (2)	信号検出理論についての解説、実験課題の作成を行う
第8回	変化検出課題 (1)	変化検出課題についての解説、実験課題の作成を行う
第9回	変化検出課題 (2)	変化検出課題についての解説、実験課題の作成を行う
第10回	再現可能な研究の進め方 (1)	再現可能な研究を進めるための解析コードの作成、マテリアルの共有について議論する
第11回	再現可能な研究の進め方 (2)	再現可能性に関する近年の動向について議論する
第12回	受講者による発表 (1)	受講者が興味を持った研究について考察を含めた紹介を行う
第13回	受講者による発表 (2)	受講者が興味を持った研究について考察を含めた紹介を行う
第14回	まとめ	授業の総括と受講者の発表内容についての討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
 各回で作成した実験課題について、自分が使うことを想定して受講者自身でアレンジしてみてください。また、12 回目以降に行う発表・解説に向け、授業で取り上げた実験課題を自らが活用できる可能性について検討する作業を毎回の授業時間外学習とします。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しません。

【参考書】

授業で取り上げる研究法を使った論文を授業時に配布します。

【成績評価の方法と基準】

平常点 50%と、「受講者による発表」の内容 50%で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【学生が準備すべき機器他】

実験課題の作成を行いますので、可能であれば自分のノート PC をご持参ください。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

知覚心理学、認知心理学

＜研究テーマ＞

異種感覚間相互作用の生起に影響する諸要因の研究、視聴覚刺激間の時間処理過程に関する研究

＜主要研究業績＞

Takeshima, Y. (2021). Visual field differences in temporal synchrony processing for audio-visual stimuli. PLoS ONE, 16(12), e0261129.

Takeshima, Y. (2020). Emotional information affects fission illusion induced by audio-visual interactions. Scientific Reports, 10, 1-10.

Takeshima, Y., & Gyoba, J. (2015). Spatial frequency modulates the degree of illusory second flash perception. Multisensory Research, 28, 1-10.

【Outline (in English)】**[Course outline]**

This course deals with perceptual and cognitive studies and the aim of this course is to help students perform their own study.

[Learning objectives]

The goals of this course are to understand the methods of experimental psychology.

[Learning activities outside of classroom]

Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

[Grading Criteria /Policy]

Grading will be decided based on class contribution (50%) and class presentation (50%).

PSY500B6

学習指導特論

藤田 哲也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

学校教育場面はもちろんのこと、現代社会の様々な場面における、情報・知識・技術の他者への伝達を念頭に置き、適切に学習指導を進める際に有益となる学習心理学に関する諸理論について理解を深める。

【到達目標】

半期の授業が終了した時点で、以下の各要素を身につけていることが、この授業の具体的な到達目標である。

1. 記憶・認知に関する理論を理解した上で、実践的な学習指導の計画を立てることができる。
2. 動機づけに関する理論をふまえた上で、実践的な学習指導の計画を立てることができる。
3. 協同学習の考え方を取り入れた、実践的な学習指導の計画を立てることができる。
4. 適切な教育評価の方法を反映させた、学習指導の計画を立てることができる。
5. 上記 1～4 の要素をふまえた学習指導の計画に沿って、効果的に学習指導を行うことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

前半の授業は主として講義形式であり、取り上げる理論は記憶・認知や動機づけ、協同学習に関するものが中心となるが、ただ理論について概説するというよりも、諸理論を実践的に応用する観点について強調する予定である。それと同時に、学習指導を行う上での、適切な教育評価情報の取り扱いなどの実際的な技術や留意点について修得し、「教えること」と「学ぶこと」を多面的かつ客観的に捉えるために必要な知識や考え方について解説する。

後半の授業で中心となるのは、具体的な学習場面として、高等教育（大学・短期大学）・中等教育（高校・中学）における授業を題材にした模擬授業を行うことである。行う模擬授業の学校の種別や教科は受講生の興味に合わせて比較的自由に選択可能とする予定である。ただし、学習指導特論の授業の教育目標に照らして、単に教科に関する知識を増やすような準備の仕方をするのではなくて、授業の方法上の工夫を凝らすことに焦点を当てて準備をすることを求める。

毎回の模擬授業の直後に授業検討会を行い、受講生全員で、当該の模擬授業のよかった点や改善すべき点などを心理学的な視点から討論することでフィードバックを行う。これらによって、各自の教育現場での実践に活かせるような観点を養う。

受講生一人につき、一回の模擬授業を行う予定だが、受講生数が多い場合には変更する可能性もある。

模擬授業の実施に先立ち、どのような授業をするつもりなのか、各自が作成した授業案を用いた構想発表の機会を設ける。構想発表の授業内では、発表直後に要修正点について討論を行う形でフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション：教授・学習心理学をふまえた授業作り	教授・学習心理学の視点から授業を構成することの意義を中心に、この授業の概要と到達目標、評価方法について、担当者が説明する
2	授業計画・指導案について	多様な学習方法を導入し、個人差に配慮した授業計画・授業案作りについて担当者が説明する

3	学習指導のポイント：記憶・認知編	記憶・認知の理論に基づいた教授法の考え方について担当者が説明する
4	学習指導のポイント：動機づけ編	動機づけ理論を応用した授業運営の実践例について担当者が説明する
5	学習指導のポイント：集団作り編	協同学習の考え方に基づいたグループ学習法について担当者が説明する
6	構想発表 1	受講生の構想発表に対して、教科内容と教育目標との整合性についての討論を全員で行う
7	構想発表 2	受講生の構想発表に対して、教材および課題を心理学の理論から見直し、改善の可能性を全員で討論する
8	構想発表 3	受講生の構想発表に対して、学習者の達成度を把握し授業計画を修正するための評価の方法についての討論を全員で行う
9	模擬授業 1	受講生が実際に模擬授業を行い、教育目標が明確に伝わったか、教育目標は適切だったかを全員で討論する
10	模擬授業 2	受講生が実際に模擬授業を行い、個別の指導上の工夫について、理論的な視点から改善策を全員で討論する
11	模擬授業 3	受講生が実際に模擬授業を行い、授業者と学習者の双方の視点から授業のよい点・要改善点を全員で討論する
12	模擬授業 4	受講生が実際に模擬授業を行い、教育目標が明確に伝わったか、教育目標は適切だったかを全員で討論する
13	模擬授業 5	受講生が実際に模擬授業を行い、個別の指導上の工夫について、理論的な視点から改善策を全員で討論する
14	総括	この授業全体および各回の教育目標の到達度の確認を行い、この授業の評価について担当者が説明する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備時間は 3 時間、復習時間は 1 時間を標準とする。各回の準備学習の詳細は下記の通りだが、効果的に学習を進めるためにも、以前の授業内容の復習も随時行うこと。

- 第 1 回 自分の行う模擬授業についての構想案を作成
- 第 2 回 自分の行う模擬授業に関連した、通年・学期を通した授業計画を作成
- 第 3 回 本時の内容を、自分自身の模擬授業の計画に反映させるための構想を練る
- 第 4 回 動機づけに関連した具体的な授業上の工夫を、自分自身の模擬授業のために考案する
- 第 5 回 模擬授業のための構想発表の準備
- 第 6 回 模擬授業を行う教科に関する知識・情報の収集、教育目標の見直し
- 第 7 回 模擬授業内で用いる教材と課題の改善
- 第 8 回 模擬授業の教育目標と対応した、具体的な評価方法の考案
- 第 9 回 既発表者は指導案の見直し、修正。未発表者は模擬授業の準備と改善
- 第 10 回 既発表者は指導案の見直し、修正。未発表者は模擬授業の準備と改善
- 第 11 回 既発表者は指導案の見直し、修正。未発表者は模擬授業の準備と改善
- 第 12 回 既発表者は指導案の見直し、修正。未発表者は模擬授業の準備と改善
- 第 13 回 自分の行った模擬授業の振り返りと、他者の模擬授業からの気づきを整理

第 14 回 今後の多様な教育活動に、この授業で学んだことを活用できるよう、習得したことを振り返る

【テキスト（教科書）】

教科書は指定しない。授業は配付プリントに沿って行う。

【参考書】

藤田哲也（2005）. 動機づけ理論をふまえた授業運営－京都光華女子大学における導入教育－
溝上慎一・藤田哲也（編） 心理学者、大学教育への挑戦 第 3 章 ナカニシヤ出版, pp.79-114.
藤田哲也（2006）. 心理学を活かした教育実践のために 井上智義（編）視聴覚メディアと教育方法 ver.2 北大路書房
藤田哲也（編）（2021）. 絶対役立つ教育心理学〔第 2 版〕－実践の理論、理論を実践－ ミネルヴァ書房
その他、各回の授業内容に関連した書籍や論文を授業内で紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点 60 %…授業へ参加し、他者の構想発表・模擬授業に対してコメントすることを評価対象とする。
構想発表 10 %…発表の内容、発表後の質疑応答を評価対象とする。
模擬授業 30 %…授業自体の質、指導案の内容、授業検討会での質疑応答を評価対象とする。

【学生の意見等からの気づき】

前年に授業担当がなかったので最新の 2019 年度分を載せます：2019 年度の授業への参加者は 4 名でしたが、授業終了時点での正規履修者は 3 名でした。全員から「履修してよかった」「理解できた」等、高い評価を得ました。心理学の理論を枠組みとして模擬授業をし、授業検討会に参加することで、「教える」ことを単に経験則のみで語らないという視点が獲得できたと思います。今後も各自の文脈で、この授業で学んだことの実践を重ねてください。

【その他の重要事項】

授業の運営方針や教育目標について説明を行うとともに、発表の割り当てを行うので、受講希望者は初回の授業に必ず出席すること。心理学専攻以外の所属で受講を希望する者は、必ず事前に相談すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
学習指導、教育評価
<研究テーマ>
高等・中等教育における学習指導の在り方について
<主要研究業績>

藤田哲也（2005）. 動機づけ理論をふまえた授業運営－京都光華女子大学における導入教育－
溝上慎一・藤田哲也（編） 心理学者、大学教育への挑戦 第 3 章 ナカニシヤ出版, pp.79-114.
藤田哲也（2006）. 心理学を活かした教育実践のために 井上智義（編）視聴覚メディアと教育方法 ver.2 北大路書房
藤田哲也（編）（2021）. 絶対役立つ教育心理学〔第 2 版〕－実践の理論、理論を実践－ ミネルヴァ書房

【Outline (in English)】

【Course outline】

In this class, students understand various theories concerning learning psychology, which is useful in promoting appropriate teaching with the communication of information, knowledge and technology to others.

【Learning Objectives】

By the end of the course, students should be able to do the following:

- 1.Students can plan practical curriculum guidelines after understanding the theory of memory and cognition.
- 2.Students can plan practical curriculum guidelines based on motivational theories.
- 3.Students can plan practical curriculum guidelines that incorporate the concept of collaborative learning.
- 4.Students can develop a curriculum plan that reflects appropriate educational evaluation methods.
- 5.Students can effectively provide learning guidance according to the learning guidance plan based on the above factors 1 to 4.

[Learning activities outside of classroom]

The standard preparation time for this class is 3 hours, and the standard review time is 1 hour.

[Grading Criteria /Policy]

The overall grade of the class is determined based on the following.

In-class contribution 60%, presentation of class concept 10%, simulated lesson 30%.

PSY500B6

精神生理特論

高橋 敏治

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、生理心理学の基礎と、研究論文作成過程で用いられるさまざまな生理指標について、実習も入れて学びます。

【到達目標】

各生理指標が反映する心理状態と、生理指標を心理学で用いることのメリットについての知識を身に付け、生理指標を実際に測定することができるようになること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

生理心理学の基本的なアプローチである、電気生理機器の構造や方法を学びます。実際に機器を使用して、心理状態による各生理指標の変化を体験・確認してもらいます。また講義では、生理指標の応用方法や、各指標の発生機序についても説明します。授業時間内に、必ず質疑応答の時間を設け、生じた疑問や問題を討論します。発表後には、振り返りレポートを提出してもらい、疑問点などを授業内でフィードバックします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	生理心理学の基礎と授業の概要についての説明
第 2 回	機器説明	多用途脳波計（ポリメイト）の説明
第 3 回	心理生理的測定法	心理生理的測定指標の基礎的説明
第 4 回	脳波	脳波についての基礎的説明、脳波の電極の付け方（国際 10-20 法）と測定法
第 5 回	脳波測定 1	脳波の測定、脳波パターンと行動の関連についての検討 1
第 6 回	脳波測定 2	脳波の測定、脳波パターンと行動の関連についての検討 2
第 7 回	脳波測定（周波数解析）	脳波の周波数と意識レベルの関連についての検討
第 8 回	眼球運動図の測定	眼電位法を用いた目の動きの測定
第 9 回	心電図の測定	心電図から心拍数などの測定
第 10 回	心電図から自律神経の解析 1	心電図の R-R 間隔からパワースペクトラム解析の考え方
第 11 回	心電図から自律神経の解析 1	心電図の R-R 間隔からパワースペクトラム解析の実際
第 12 回	虚偽検出の測定 1	ポリグラフ検査の理論
第 13 回	虚偽検出の測定 2	ポリグラフ検査の実際
第 14 回	総括まとめ	課題レポートの作成

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。脳波、周波数解析、眼電図、事象関連電位 P300 に関するレポートを課します。各回の授業後には、配布した資料に再度眼を通すとともに、紹介した文献を参考にして、各指標に関する理解を深めて下さい。また、理解できなかった点に関しては、質問できるようにしておいて下さい。

【テキスト（教科書）】

教科書は特に指定しません。授業時に必要に応じてプリントを配布します。また、課題に必要な文献はその都度、配布します。

【参考書】

堀忠雄（2008）. 生理心理学—人間の行動を生理指標で測る. 培風館, 東京.
堀忠雄, 他（2017）. 生理心理学と精神生理学第Ⅰ巻 基礎. 北大路書房, 京都.
堀忠雄, 他（2017）. 生理心理学と精神生理学第Ⅱ巻 応用. 北大路書房, 京都.

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 %, 発表・レポート課題 50 %により評価します。

【学生の意見等からの気づき】

4名の受講者中4名から回答を頂きました。4-5の段階が、授業の工夫では100%, 理解できたかで75%, 履修してよかったかは100%の評価でした。授業外学習では、2時間以上が50%, 2時間未満が50%と発表の課題をこなす時間が多くて比較的大変だったようです。自由記述では、「コロナ禍であっても、複数回実習ができてよかった」「それぞれの生理指標が生まれるメカニズムなどを詳しく学べた」「実験ができないのは残念でしたが、今年は自律神経系の活動を測定する生理指標の基礎知識を専門的に・重点的に・着実に学ぶことができた」など実習が限られた回数でも、対面でできた点がよかったようです。今後も実験実習は継続していく必要を実感しました。

【学生が準備すべき機器他】

脳波室で授業を開催することが多いので注意して下さい（BT1113）。

【その他の重要事項】

新型コロナウイルスに関する状況を考えて、一部の授業形態をオンライン授業などに変更する場合があります。初回の授業には必ず出席して下さい。

実施の順序については変更することがあるため、学習支援システムや授業の中で案内しますので、注意してください。

【オフィスアワー】シラバスの教員紹介に記載してあります。厚生労働省精神保健指定医、日本精神学会精神科専門医および日本睡眠学会専門医として30年以上精神科の臨床に携わって実務面の仕事をしています。この経験を生かして、一緒に考えて行きます。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞精神生理学, 精神保健学

＜研究テーマ＞眠気, 睡眠, うつ, ストレス

＜主要研究業績＞

高橋敏治（2020）時差障害（時差ぼけ）. 診療所で診るトラベルメディスン（大越裕文 編著）. 日本医事新報社, 東京, p 64-73.

高橋敏治（2019）残業による睡眠不足が引き起こす過剰な日中の眠気. 睡眠の診かた—睡眠障害気づくための50症例—（千葉茂 編著）. 新興医学出版社, 東京, p 62-63.

高橋敏治（2019）繰り返しの時差フライトが引き起こす睡眠障害. 睡眠の診かた—睡眠障害気づくための50症例—（千葉茂 編著）. （株）新興医学出版社, 東京, p 76-77.

高橋敏治（2017）. 時差ぼけと光環境 睡眠医療, 11, 525-530.

【Outline (in English)】

In this lesson, we will learn about the fundamentals of physiological psychology and various physiological indicators used in the process of preparing research papers, with practical training.

The goals of this course are to understand each 2 hours psychological state indicated by physiological indicators, and to actually measure physiological indicators.

It takes 2 hours to prepare and 2 hours to review for each lesson.

Final grade will be calculated according to the following process; in-class contribution (50 %), presentation and reports (50%).

PSY500B6

臨床心理特論

中村 玲子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

概要：主な臨床心理学のアプローチについて、報告・質疑応答形式で講義を行う。また具体的な事例を通して、心理・教育的支援について検討を行う。さらに学校との協働や他機関との連携をふまえ、校内支援チームの構築やケアマネジメントについても理解を深める。
目的：臨床心理学の知識や技術を用いた児童・生徒に対する支援について、具体的な事例をもとに検討することにより、学校現場における心理・教育的支援の方法を習得する。

【到達目標】

目標：臨床心理学を用いた児童生徒・保護者の支援、教員や専門機関との連携について学習する。

①臨床心理学の知識や技術を活用した児童生徒・保護者の支援について考えることができる。

②臨床心理学の知識や技術を活用し、支援に必要な教員との協働について考えることができる。

③上記2点について、考察したことを表現し、記述することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義及び授業内の発表を通して学習する。理解を深めるための演習も適宜とり入れていく。演習後にはリアクションペーパーの記述を求める。提出課題のフィードバックは、翌週の授業の冒頭で行う予定である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	臨床心理学の定義、必要性について学ぶ。
第2回	臨床心理学とは 臨床心理学の倫理・学校現場における臨床心理学	臨床心理学の実践における倫理について学ぶ。
第3回	学童期・思春期の心と行動	児童・生徒が抱えやすい学童期・思春期の問題とについて報告・質疑応答形式で理解を深める。また、事例を提示し、その適用法についても考察する。
第5回	ロジャーズ学派	来談者中心のアプローチについて報告・質疑応答形式で理解を深める。傾聴技法について学ぶ。
第6回	行動理論	行動理論について報告・質疑応答形式や事例を通して理解を深める。
第7回	認知行動療法	認知行動療法について報告・質疑応答形式で理解を深める。また、認知的再体制化のプロセスについて事例を通して学ぶ。
第8回	交流分析理論	交流分析理論について報告・質疑応答形式で理解を深める。
第9回	アセスメントの方法	アセスメントの目的・内容・方法と検査倫理について学ぶ。
第10回	ケアマネジメントと校内チーム支援	学校現場におけるチームアプローチについて、事例を通して理解する。

- 第11回 児童生徒に対する支援 学校現場における支援の実際について、事例を通して学ぶ。
事例
- 第12回 他機関との連携ー児童 学校と他機関との連携の必要性に虐待の事例 ついて、事例を通して学ぶ。
- 第13回 コミュニケーション・ 学校現場で有用な心理教育的アプスキルの習得・いじめ ローチについて、事例を通して学ぶ。
プログラムの実践
- 第14回 まとめ 授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

○配布された資料を事前に読む
○発表担当の際は、文献を読み発表資料を作成する。
○演習を行った際はミニレポートを提出する。
本授業の準備・復習時間は、各1時間（発表担当の際はそれ以上）を標準とします。

【テキスト（教科書）】

教場で資料を配布する。

【参考書】

氏原寛・成田善弘（1999）. 臨床心理学①カウンセリングと精神療法 培風館
乾吉佑・亀口憲治・東山紘久・氏原寛（編）（2005）. 心理療法ハンドブック 創元社
鐘幹八郎・名島潤慈（2010）. 心理臨床家の手引き 誠信書房

【成績評価の方法と基準】

- ①臨床心理学の知識や技術を活用した児童生徒・保護者の支援について考えることができる
 - ②臨床心理学の知識や技術を活用し、支援に必要な教員との協働について考えることができる。
 - ③上記2点について、考察したことを表現し、記述することができる。
- 3つの到達目標に対する成績評価は主に以下とする。
- ①②平常点・グループ討議への参加態度（40%）、文献報告の内容と作成資料（30%）
 - ③ミニレポート課題（30%）

【学生の意見等からの気づき】

事例や自己理解を通し、できるだけわかりやすい授業を心がけたい。また積極的な質問や疑問の提示を期待する。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>教育心理学
<研究テーマ>中学校における心理教育的プログラムの開発・実施
<主要研究業績>
○中学校におけるいじめ抑止を目的とした心理教育的プログラムの開発とその効果の検討/教育心理学研究 62-2/日本教育心理学会/共著/2014
○「傍観」に着目したいじめ介入プログラムの開発とその効果の検討/早稲田大学/単著/2017.01

【Outline (in English)】

< Course outline >

The aim of this course is to help students acquire an understanding of the clinical psychology. Students should be able to recognize and recall major terms and concepts in clinical psychology.

< Learning Objectives >

Students learn about support for children and parents using clinical psychology, and collaboration with teachers and specialized institutions.

< Learning activities outside of classroom >

Students read the literature and prepare presentation materials.

< Grading Criteria >

Attitude to participate in group discussions (40%)

Contents of prepared materials (30%)

Short report (30%)

PSY500B6

発達心理特論

渡辺 弥生

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

心理学研究において発達の視点をもつことにどのような意義があるかについて理解する。そのために、これまでの発達心理学研究の体系的な流れを捉える。特に、乳幼児期、児童期、青年期に焦点を当てるとともに、学校心理士の資格に必要な基盤としての発達心理学および、認知・思考、自己意識、社会性の発達を重点的に理解する。その上で、各自の今後の研究へのリサーチクエストを考える。

【到達目標】

- 上記の授業テーマの枠組を意識した上で、
- ①発達心理学研究史に残る著名な理論を理解し説明することができる。
 - ②身につけた知識をもとに発展的な課題について討議することができる。
 - ③知識や理解をもとに自分の研究に応用できるよう計画することができる。
- を到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

従来の先行研究で取り上げられてきた主要テーマのもとに、著名な理論を理解していく。さまざまな理論がどのような研究者によって、こういった方法で提唱されるに至ったのかを詳しく理解することが求められる。本講義では、発達心理学の中でも特に人間の行動の発達に関する理論と研究に焦点を当てる。毎回、ある研究者に焦点を当て、研究の経緯、方法など背景となる点を紹介する。発表担当者は、参考文献や自身で調べた内容を取り入れ、その研究者の研究を他の受講者に説明する。全受講者が自身の研究や経験を重ねながらいくつかのトピックで討議する。これにより、各自が研究知識を広げ、研究態度を学び具体的な研究計画が立てられる力を獲得する。課題などのフィードバックは、学習支援システムで回答したりアドバイスを。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業のテーマ、到達目標、進め方を説明する。 自己や対人関係のあり方については、各時間で言及する。
2	認知の発達 Cognitive Facets	Piaget & Inhelder(1969) : Crain(2011) の6章をもとに認知発達の理論を理解し、討論する。
3	初期の対人関係 Early Relationships	Bowlby(1982) : Crain(2011) の3章をもとに、乳幼児期の愛着理論を理解し、討論する。
4	成熟に関する理論 Maturation	Gesell(1952) : Crain(2011) の2章をもとに、子どもを育てることと成熟の関係を理解し、討論する。
5	発達と教育との関係 Early Education in the Home	Montessori(1949):Crain(2011) の4章をもとに、モンテッソーリ教育をもとに教育との関係を考える。

6	学習理論 Learning Theory	Pavlov(1928), Watson(1936), Skinner(1953) Crain(2011) の8章をもとに人間の行動のメカニズムを考える。
7	道徳性の発達 Moral Development	Kohlberg(1958): Crain(2011) の7章をもとに、道徳性の判断や行動の発達について討論する。
8	社会的学習理論の理解 Social Learning Theory	Bandura(1962):Crain(2011) の9章をもとに、どのように攻撃性や向社会的行動が獲得されるか理解する。
9	記憶、言語、遊びの発達 Social-Historical Theory	Vygotsky(1930): Crain(2011) の10章をもとに、心理学的な道具と行動の関係について学ぶ。言語の役割について考える。
10	精神分析理論と発達 Psychoanalytic Theory	Freud(1910):Crain(2011) の11章をもとに、精神分析理論における発達理論を学ぶ。
11	ライフサイクル The Eight Stage of Life	Erikson(1968):Crain(2011) の12章をもとに、生涯発達の視点から人間の一生を考える。
12	分離と固体化 Separation / Individuation	Mahler(1968) :Crain(2011) の13章をもとに、母親からの分離について考え、討論する。
13	友だち関係と友情 Friendships and Peers	Hartup(1998): プリントをもとに、友情の発達や友だち関係の形成について考える。
14	親密な関係の形成 Close Relationship	Collins & Sroufe(1999): プリントをもとに、人間の性の発達や親密な関係について考える。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

1. プレゼンテーションの準備：必ず上記理論提唱者についてプレゼンができるよう準備する。必要な内容は、a. 理論やアイデア、b. 個人の生き方と研究の関係、c. 各理論が反映された最近の研究紹介、d. 学問の応用について、e. 発達についての個人の考え（キーとなるポイント）。事前に、担当教員にメールで提出しておく。当日の発表の要約（A4 2枚以内）。ただし、昨年と同じ発表方法にせず、今年は新しいスタイルを考える。
2. 担当していない週では、その週のトピックに関する討論に参加できるようテキストや論文を読んでおく。また、最終的に提出するレポート課題を適宜準備しておく。

【テキスト（教科書）】

Crain, W. (2011). Theories of Development: Concepts and Applications およびプリント。受講者の人数や専門によって選ばれる発達理論は異なる。他の研究者の自伝を活用する可能性はある。

【参考書】

渡辺弥生監修 (2019). 『まんがでわかる発達心理学』 講談社
二宮克美・渡辺弥生（編）(2017) 『発達心理学』 北大路書房
渡辺弥生 (2019) 『感情の正体』 筑摩書房

【成績評価の方法と基準】

担当した部分の発表を基に提出された課題（100%）で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

評価も高く時間外の勉強を動機づけることができたと考えられるが、発表内容の厚みについて個人差が見られた。また、発表者が集団で討論できるようなリサーチエスションを見つけれられていない場合があることから、単に調べたことを発表するというのではなく、批判的な視点や発展的な意識をもち、討論できるような水準で発表できるよう支援していきたい。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。毎回機器を授業に間に合うよう準備することを徹底したい。

【その他の重要事項】

シラバスを変更することもあると理解してください。新型コロナウイルス感染状況によってオンラインに変更する可能性あり。

【担当教員の専門分野等】

HP を参考 <https://sites.google.com/site/emywata/>

<専門領域> 発達心理学、発達臨床心理学、学校心理学

<研究テーマ> 社会情緒的スキルの発達といじめなどの予防教育の展開、ソーシャルエモーショナルラーニング

<主要研究業績>

(1) 感情の正体 2019 筑摩書房

(2) 世界の学校予防教育 2013 金子書房

(3) 子どもの10歳の壁とは何か？ 乗り越えられる発達心理学 2011 光文社

(4) 子どもの感情表現ワークブック 2011 明石書店

(4) 10代を育てるソーシャルスキル教育 2009 北樹出版

(5) 幼児・児童における分配の公正さに関する研究 1992 風間書房、など。

【Outline (in English)】

< Course Outline > The aim of this course is to understand the significance of having a developmental perspective in psychological research. Therefore, we will attempt to understand the systematic flow of developmental psychology research to date.

< Learning Objectives > In particular, we will focus on infancy, childhood and adolescence, and emphasize developmental psychology and development of cognition/thinking, self-consciousness, and social competence as the basis necessary for the qualification of school psychologist. Based on this, students will consider research questions related to their future research.

< Learning activities outside of classroom > Students are expected to take at least two hours each for preparation and review.

< Grading of classroom > The final report (100%) based on each assignment will be used for evaluation.

PSY500B6

障害児心理特論

奥田 健次

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

人間は、対人的なかかわりを通して、人間らしい社会的関係を生み出し、社会でよりよく生きるために調整する力が育てられる。しかし、自閉症スペクトラムなどの障害のある子どもは、適切な対人関係をもつことに大きな問題をかかえることが多い。障害のある子どもをもつ家族に対する支援や指導、学校に対する支援やコンサルテーションなど、当事者と当事者を取り巻く人々に対する包括的な支援について考える。

【到達目標】

障害のある子どもの知的発達、社会性の発達、行動情緒の問題について、実践的な視点から具体的に論じることができる。
アセスメントの方法、実際の支援の方法について、具体的事例を通じて実践的な方法を討議し、いくつかのケース課題のワークショップを通して心理学的援助の方法を検討し、発表する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

「障害がある」とはどういうことか。逆に「障害がない」とはどういう状態のことをいうのか。これだけでも、大きなテーマであるといえる。しかし、哲学的な考察を深めるような授業ではなく、現実的な課題となっている「専門的支援」について、実践的に役立つ知識と技能を具体的な事例を通して学ぶ。そのために、基本的には講義形式で進められるが、グループワークや発表、討論の機会を設けて、受講者に能動的な学習ができるようはたらきかける。グループワークや発表へのフィードバックは授業中に行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	障害の概念と特別な教育ニーズおよび合理的配慮	「障害」とは何か、国際障害分類の定義について説明する。また、特別な教育ニーズについて具体例を挙げながら説明する。「合理的配慮」について具体事例を挙げて検討する。
第 2 回	知的障害児の発達と心理	知能の定義、知的障害について説明し、教育や発達の支援について説明する。また、支援方法についてのワークを行う。
第 3 回	視覚障害・聴覚障害児の発達と心理	視覚障害および聴覚障害について、発達的な特徴と教育方法を説明する。支援の具体的な方法や課題についてのワークを行う。
第 4 回	肢体不自由・病虚弱児の発達と心理	肢体不自由・病虚弱について、発達的な特徴と教育方法を説明する。また、特別支援や家族支援上の課題について説明する。
第 5 回	自閉症児の発達と心理	自閉症について、発達的な特徴と教育方法の変遷について説明する。支援の具体的な方法や課題についてのワークを行う。
第 6 回	発達障害者の青年期・成人期での支援	発達障害者の青年期問題や成人期の課題、就業支援、余暇支援について説明する。

第 7 回	LD・ADHD 児の発達と心理	LD・ADHDについて、発達的な特徴と教育方法を説明する。学校教育上の教育支援や家族支援上の課題について説明する。
第 8 回	特別支援教育とは	特別支援教育について、従来の特殊教育からの変遷や目的・特徴の差違について説明する。また、ガイドラインのねらいについて説明する。
第 9 回	実態把握と相談支援	特別支援教育において行われる実態把握と相談支援の具体的方法について説明する。支援システムの構築の実例について発表する。
第 10 回	個別の指導計画と個別の教育支援計画	個別の指導計画と個別の教育支援計画について実際の計画案から説明する。また、問題のある計画の改善についてのワークを行う。
第 11 回	校内委員会と支援体制	校内委員会と支援体制について、機能的な組織の在り方について説明する。また、学校と家庭の連携・協働における課題について説明する。
第 12 回	特別支援教育（児童期の支援事例）	小学校における特別支援教育の支援事例を説明し、仮想事例から支援計画を検討して発表する。
第 13 回	特別支援教育（青年期の支援事例）	中学校における特別支援教育の支援事例を説明する。また、高等学校における特別な教育ニーズのある生徒への支援課題について説明する。
第 14 回	学校コンサルテーション、まとめ	特別支援教育で専門的な支援者に求められる学校コンサルテーションについて説明する。また、これまでの講義のまとめと講評を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
日常生活上の「障害」について、具体的な事例を考えておく。知的障害、聴覚障害、視覚障害、肢体不自由・病虚弱の教育支援方法について調べておく。自閉症についての発達的な特徴について調べておく。学校で求められる合理的配慮の実例を考えておく。文部科学省「特別支援教育」ガイドラインの目次部分を、各自で準備し、調べておく。個別の指導計画と個別の教育支援計画の見本を、教科書や専門サイトなどから、各自で準備し、調べておく。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。

【参考書】

奥田健次（編著）教師と学校が変わる学校コンサルテーション、金子書房、2018 年。

【成績評価の方法と基準】

集中講義であるため出席基準（4/5 以上の出席）を満たしていることを前提に、授業参加 40 %、グループ発表 30 %、テーマ毎に実施するミニクイズ 30 %

【学生の意見等からの気づき】

授業改善のための意見を聞かせて下さい。

【学生が準備すべき機器他】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

応用行動分析学、特別支援教育、行動療法

<研究テーマ>

自閉症児への応用行動分析学による指導、自閉症児の「心の理論」、特別支援教育と学校コンサルテーション、家族支援とペアレントトレーニング、行動コーチング

<主要研究業績>

奥田健次編著（2018）教師と学校が変わる学校コンサルテーション、金子書房。

仁藤二郎・奥田健次（2016）痙攣性発声障害と診断された男性の日常生活における行動アセスメント. 行動分析学研究, 31(1), 40-47.
仁藤二郎・奥田健次（2013）嘔吐不安を訴えるひきこもり男性の食事行動への介入：エクスポージャーにおける行動アセスメントと介入の評価. 行動分析学研究, 27(2), 80-91.

奥田健次（2012）メリットの法則－行動分析学・実践編. 集英社.
奥田健次・小林重雄（2009）自閉症児のための明るい療育相談室－親と教師のための楽しいABA講座. 学苑社.

奥田健次（2006）症例研究の方法. 河合伊六（監修）, 辻下守弘・小林和彦（編）, リハビリテーションのための行動分析学入門（pp.37-49）. 医歯薬出版株式会社.

奥田健次（2005）不登校を示した高機能広汎性発達障害児への登校支援のための行動コンサルテーションの効果－トークン・エコノミー法と強化基準変更法を使った登校支援プログラム－. 行動分析学研究, 20(1), 2-12.

奥田健次（2001）認知発達と言語行動：「心の理論」研究から. 日本行動分析学会（編）, 浅野俊夫・山本淳一（編）, ことばと行動：言語の基礎から臨床まで（pp. 189-210）. プレゼン出版.

【Outline (in English)】

Children with disabilities such as Autism Spectrum Disorder (ASD) often have serious problems in human interpersonal relationships. Think about support for people surrounding the parties, such as support for families with children with disabilities, support and consultation to schools, and so on.

PSY500B6

人格心理特論

大森 美香

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

人格（パーソナリティ）は、行動にみられる個人差を説明する概念であり、パーソナリティ理解は、教育・産業・臨床など生活のあらゆる場面での個人理解に必要不可欠である。本授業の目的は、以下の2点にある。1）人間の心理・行動の個人差およびそのメカニズムに関するアプローチを理解する、2）パーソナリティ特性と個人の行動、自己形成、また精神的健康の関連について最新の知見に触れ考察する。この目的に到達するため、古典的なパーソナリティ理論に加え、パーソナリティに関する最新の人間科学、社会科学、自然科学のアプローチについても学習する。授業は、学生によるプレゼンテーションの形式を中心に講義および討論を行いながら進める予定である。パーソナリティについてさまざまな角度からアプローチしながら、人間行動に関する関心、個人の尊厳、現代において個人がよりよく生きるとはどのようなことかについての考察を深めていただきたい。

【到達目標】

授業の主要な到達目標は、以下の2点である。1）代表的なパーソナリティ理論およびアプローチを理解すること、2）パーソナリティや人間行動に関する広い視野を獲得し考察すること、3）授業を通して、プレゼンテーションや討論において、自分の考えをわかりやすく伝える技術を獲得すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

学生による発表と討論を中心に、講義を交えながら、授業を進める。発表の課題、期末レポートのフィードバックは、授業中ないし授業支援システムを通して行います。前期前半はオンラインを予定していますが、後半については社会情勢を考慮しながら進めていきたいと思っています。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業概要説明；パーソナリティとパーソナリティ理論の概観
第2回	パーソナリティ心理学：人間科学、自然科学、社会科学的アプローチ	パーソナリティについての、心理生物社会的アプローチについて理解する
第3回	パーソナリティ理論(1)：心理療法への応用	パーソナリティの3大理論の心理療法にどのように応用されているのかレビューする。
第4回	パーソナリティ理論(2)：類型論と特性論	類型論と特性論の差異；パーソナリティ理論の歴史的展開
第5回	パーソナリティを「測る」	心理学的測定法、心理検査法（質問紙法、投影法）
第6回	パーソナリティの物語的把握	ナラティブアプローチによるパーソナリティ理解
第7回	生命現象としてのパーソナリティ	パーソナリティに関する生物学的規定因
第8回	パーソナリティの発達的变化	パーソナリティの発達的变化に関する最新の知見をレビューする
第9回	パーソナリティの相互作用論	パーソナリティに関する遺伝と環境の要因の相互作用

- 第10回 認知・感情・動機と 感情および認知的特徴に及ぼす
パーソナリティ(1)： パーソナリティの影響
認知・感情とパーソナ
リティ
- 第11回 認知・感情・動機と 動機づけに及ぼすパーソナリティ
パーソナリティ(2)： の影響
動機とパーソナリティ
- 第12回 文化・社会とパーソナ 社会文化的要因がパーソナリティ
リティ に及ぼす影響
- 第13回 さまざまな生活領域 各受講生の研究関心領域とパーソ
(家庭、学校、職場)や ナリティの関連についての学生の
健康とパーソナリティ 発表
- 第14回 まとめ 進捗調整および統括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

授業該当箇所のテキストの講読、課題への対応、発表準備。

The estimated time for preparation and review of the course is 2 hours for each. The task include reading course materials, working on assignments, and preparation for the presentation.

【テキスト（教科書）】

『パーソナリティ心理学』 榎本博明・安藤寿康・堀毛一也 [著] 有斐閣

【参考書】

『ヒルガードの心理学』（金剛出版（16版が最新ですが、図書館などで入手可能な版で結構です）

【成績評価の方法と基準】

平常点 30%、発表 40%、期末レポート 30%

the participation in in-class activities 30%

presentation(s) 40%

final reflection paper 30%

【学生の意見等からの気づき】

これまでの授業で、毎回の授業で扱う範囲が多いとの意見がありました。大学院では、既存の知識や理論のインプットにとどまらず、批評的にとらえ考察を深化することが求められ、そのため授業の事前準備は必須と考えています。大学院での少人数での演習形式の授業では、知識理解はもちろんのこと、討論や発表スキルを確実に高めることが期待できます。

【学生が準備すべき機器他】

発表時の配布資料

【その他の重要事項】

*受講においては、学部の概論レベルの心理学の授業を受講済みであることを前提としています。

*授業計画は、受講者数、バックグラウンド、理解度により調整します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>健康心理学

<研究テーマ>健康行動、ボディイメージ、食行動

<主要研究業績>

Rodgers, R. F., Lombardo, C., Cerolini, S., Franko, D. L., Omori, M., Fuller-Tyszkiewicz, M., Linardon, J., Courtet, P., & Guillaume, S. (2020 jun). The Impact of the COVID-19 Pandemic on Eating Disorder Risk and Symptoms. *International Journal of Eating Disorders*. <https://doi.org/10.1002/eat.23318>

Takamura, A., Yamazaki, Y., & Omori, M. (2019). Developmental changes in fat talk to avoid peer rejection in Japanese girls and young women. *Health Psychology Open*. <https://doi.org/10.1177/2055102919854170>

Omori, M., Yamazaki, Y., Aizawa, N., de Zoysa, P. (2016). Thin-ideal internalization and body dissatisfaction in Sri Lankan adolescents. *Journal of Health Psychology*. Online First.

Omori, M., Yamawaki, N., & McKyer, E.L. (2015). A Comparative study of smoking in American and Japanese adolescents: Self, social influences, and health beliefs. *International Journal of Adolescent Mental Health and Addiction*.13, 345-360.

【Outline (in English)】

Personality pertains to individual difference in human behaviors. In order to understand individuals in academic, industrial, and clinical setting, it is inevitable to understand personality. Objectives of this course are twofold: 1) to understand fundamental theories on individual differences underlying psychological processes and behaviors; 2) to learn and discuss most updated findings on associations between personality and self perception, behaviors, and mental health. In order to accomplish these objectives, this course covers recent theories and findings of personality from biopsychosocial perspectives as well as traditional theories. Classroom activities involves both students' presentations and lectures.

PSY500B6

言語心理特論

福田 由紀

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

読解力とは何か？それを伸ばすために何をしたらよいか？について、心理学的な観点から検討することが本授業のテーマである。具体的には、まず、日本やそれ以外の国で行われている指導法について、模擬授業を通して体感する。次に、文章読解のプロセスやそれに影響する要因について学習をする。それらをもとに読解力を高めるためにどのようにしたらよいかを考える。

【到達目標】

- ①日本とそれ以外の国で行われている読解力向上の指導法を理解し、説明できる。
- ②文章読解に影響する要因に関する文献を探すことができる。
- ③文章読解に影響する要因とプロセスについて理解し、説明できる。
- ④読解力向上のための指導法を提案する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業の前半は日本とUKで使用されている学習指導方法にそって、模擬授業を行う。その後、読解のプロセスや読解力の定義、読解力に影響を与える要因に関する文献を講読し、発表を行う。授業の最終段階では、各自が考える読解力の定義とそれを向上させるための指導方法を発表する。また、提出された課題のフィードバックは、授業中ないしは授業支援システムを通して行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし/No

【授業計画】授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の目的と方法の確認。グループ分け。
第2回	日本式模擬授業1	指導本にしたがって、模擬授業を行う。最後に、読解力のどの側面を伸ばす意図があるのかを発表する。
第3回	日本式模擬授業2	指導本にしたがって、模擬授業を行う。最後に、読解力のどの側面を伸ばす意図があるのかを発表する。
第4回	UK式模擬授業1	指導本にしたがって、模擬授業を行う。最後に、読解力のどの側面を伸ばす意図があるのかを発表する。
第5回	UK式模擬授業2	指導本にしたがって、模擬授業を行う。最後に、読解力のどの側面を伸ばす意図があるのかを発表する。
第6回	読解力を伸ばすための指導法の日英比較の発表	模擬授業を通して実感したUKと日本の目指している読解力の相違点と共通点を比較検討した結果を発表する。
第7回	読解力に影響する要因に関して考える1：読解力の発達の様相	読み書きの発達の様相に関する論文を全員が読み、担当者が説明する。

第8回	読解力に影響する要因に関して考える2：語彙量、ワーキングメモリ	読解力に影響を与える要因として語彙量とワーキングメモリを取り上げる。具体的には、それらの要因がどのように読解力に影響を与えるかの概略を担当者が説明する。
第9回	読解力に影響する要因に関して考える3：認知・思考の発達	読解力に影響を与える要因として認知・思考力を取り上げる。具体的には、文章理解時にどのような推論をしているのか、発達的な観点に関して概略を担当者が説明する。
第10回	読解力に影響する要因に関して考える4：文書の理解	読解力に影響を与える要因として非連続型テキストである文書の理解を取り上げる。具体的には、文書の理解と文章の理解の相違や共通点に関して概略を担当者が説明する。
第11回	読解力に影響する要因に関して考える5：PISAの読解力	PISAが提案している読解力と、日本の教育で目指している読解力の相違や共通点に関して概略を担当者が説明する。
第12回	私が考える読解力の定義とその伸ばし方についての発表1	読解力の定義を明確にし、それを伸ばすための方法を発表する。その際、対象はだれか、具体的な方法を発表する。
第13回	私が考える読解力の定義とその伸ばし方についての発表2	読解力の定義を明確にし、それを伸ばすための方法を発表する。その際、対象はだれか、具体的な方法を発表する。
第14回	講評会	12回と13回で行った発表に関して全員で講評する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
 第1回～第4回 模擬授業を行うための準備を行う。
 第5回 指導法の日英比較発表の準備を行う。
 第6回～第10回 発表者は論文の発表準備を行う。それ以外の院生は、発表予定の論文を読み込んでくる。
 第11回・第12回 次週の発表の準備を行う。
 第13回 授業での発表や議論を振り返り、講評を作成する。

【テキスト（教科書）】

教科書は特に指定しない。毎授業時にプリントを配付する。また、課題に必要な文献はその都度伝える。

【参考書】

福田由紀（編）（2012）. 言語心理学入門 培風館
 大村彰道（監修）（2001）. 文章理解の心理学 北大路書房

【成績評価の方法と基準】

発表 40%、発表への質問・コメント 30%、討論への参加 30%などを総合的に評価する。特に、討論への積極な参加姿勢を重視する。

【学生の意見等からの気づき】

読解力の定義とそれを伸ばすためには？という目標に向けた授業構成になっています。その目的を皆さんは深く理解し、コメントでも言語心理学だけではなく自身の研究活動につながったというコメントに、授業をして良かったなあと思いました。

【その他の重要事項】

グループ分けや発表論文の割り当てをするので、受講希望者は初回の授業に必ず出席してください。

なお、心理学専攻の大学院生は、この授業の履修単位を学会連合資格「学校心理士/補」の受験資格として申請できます（領域：「3. 発達心理学の領域」）。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>言語心理学
 <研究テーマ>読みと感情、コミュニケーションにおける言語活動の役割
 <主要研究業績>
 ①福田由紀（2019）. 読みと感情 日本読書学会（編）読書教育の未来 Pp.144-154.

②福田由紀・菰原遥・菊池理紗 (2018). 言語心理学で何を学べるか？一言語学との学問イメージ比較— 法政大学文学部紀要, 76,115-127.
 ③福田由紀・佐藤志保 (2017). ポジティブな文章を読むと気分が良くなるのか？ 読書科学, 59,161-171.
 <HP>
 「ことばのこころ研究室」<http://www.zc.em-net.ne.jp/~psy-language/>

【Outline (in English)】

Course outline : The purpose of this course is to learn the text comprehension from a psychological point of view.

Learning Objectives : By the end of the course, students should be able to do the following:

- A. understand teaching method for text comprehension at Japan and UK
- B. search for information on previous studies about text comprehension
- C. understand factors about text comprehension and its process
- D. propose a more efficient teaching method for text comprehension

Learning activities outside of classroom : Before/after each class meeting, students will be expected to have completed the required assignments. Your study time will be four hours for a class.

Grading Criteria : Your overall grade in the class will be determined based on the following: presentation: 40%, comment for the presentation of other people: 30%, in-class contribution: 30%.

PSY500B6

精神保健特論

高橋 敏治

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

1. 学校精神保健に必要なそして基本的な基礎知識を習得します。
2. 学校現場で生じる具体的なケースを通じたメンタルな問題の見分け方やアプローチの仕方を学びます。精神科医として 30 年以上活動している臨床現場での経験をもとに、学生が知っておくべき臨床の知識、対処法や予防法を取り上げます。

【到達目標】

1. ライフサイクルと学校精神保健の関係を説明し、学校精神保健と関連する法律や関係機関との連携機関の仕方を具体的に述べるができるようにすること。
2. 臨床場面でもっとも使用頻度の高い DSM-5 を各障害について調べて、その診断基準を使用し、運用方法について具体例を通しながら実際に示すことができるようにすること。
3. 学校心理士の実践的な活用に向けた精神保健学の知識や技能を習得し、具体例に即して対策や解決策を提示できるようにすること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

学校保健学や精神保健学での基本問題を、具体的な症例などを交えながら、障がいの理解と同時に関連機関との連携の仕方を学びます。特に学童期に顕在化しやすい不安障害、パニック障害、強迫障害、摂食障害、解離性障害、そして青年期後期以降の統合失調症、気分（うつ病）障害、人格障害、ストレス関連障害などをライフサイクルの観点から取り上げます。自殺、不登校、いじめ、児童虐待、引きこもりなどのトピックスについても理解を深め、具体例を通しながら実際の運用に触れながら学びます。その過程で学校精神保健の現場でのケース、実際の場面での困難事例など、実践に即した対策や解決策を個人、あるいはグループで考えていきます。授業時間内に、必ず質疑応答の時間を設け、生じた疑問や問題を討論します。発表後には、振り返りレポートを提出してもらい、疑問点などを授業内でフィードバックします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーションと学校精神保健の基礎	授業の目的と方法の確認します。精神保健学の歴史・基礎知識・現状や問題点を、担当者が説明します。
第 2 回	学校教育の基盤としての精神保健学的なアセスメントと援助について	心理面・行動面の問題で学校生活の困難をもつ児童生徒が、良質の学校生活を送れるように、アセスメントの仕方と援助の方法の概要を、担当者が説明します。
第 3 回	精神保健学の症候とその見かた—表情・行動・思考—	実際にここらと行動の問題がどのように分類・整理されるかを DSM-5 を用いながら表情・行動・思考などの面を分担と決めて発表し、全員で検討します。
第 4 回	精神保健学の症候とその見かた—感情・記憶・意識—	実際にここらと行動の問題がどのように分類・整理されるかを DSM-5 を用いながら感情・記憶・意識などの面を分担と決めて発表し、全員で検討します。

第 5 回	学校における児童生徒の問題—家庭内暴力・虐待—	学校現場で児童生徒の問題としてよくみられる家庭内暴力・虐待の問題について、分担と決めて発表し、全員で検討します。
第 6 回	学校における児童生徒の問題—不登校、いじめ、非行—	学校現場で児童生徒の問題としてよくみられる不登校、いじめ、非行の問題について、分担と決めて発表し、全員で検討します。
第 7 回	学校における精神保健の実際の問題点—発達障害・注意欠陥障害—	DSM-5 のテキストとケースを基に、学校でみられる発達障害・注意欠陥障害を分担と決めて発表し、全員で検討します。
第 8 回	学校における精神保健の実際の問題点—不安障害・適応障害—	DSM-5 のテキストとケースを基に、学校でよくみられる不安障害・身体表現性障害・適応障害を分担と決めて発表し、全員で検討します。
第 9 回	学校における精神保健の実際の問題点—素行障害・人格障害—	DSM-5 のテキストとケースを基に、学校でみられる素行症や人格障害を分担と決めて発表し、全員で検討します。
第 10 回	学校における精神保健の実際の問題点—統合失調症・気分障害—	DSM-5 のテキストとケースを基に、学校でみられる統合失調症・気分障害を分担と決めて発表し、全員で検討します。
第 11 回	多様な臨床心理学的アプローチ精神分析的（力動的）アプローチ、来談者中心的（パーソンセンタード）アプローチなど	主な心理療法の枠組みをきちんと理解し、児童生徒の学校生活での困難の要因の理解と援助の枠組みを検討します。今回の対象は精神分析的（力動的）アプローチ、来談者中心的（パーソンセンタード）アプローチなどであり、グループ発表を行ない、全員で検討します。
第 12 回	多様な臨床心理学的アプローチ認知行動論的アプローチ、システム論的アプローチ、マインドフルネスなど	前回に引き続き、主な心理療法の枠組みをきちんと理解し、児童生徒の学校生活での困難の要因の理解と援助の枠組みを検討します。今回の対象は認知行動論的アプローチ、システム論的アプローチ、マインドフルネスなどであり、グループ発表を行ない、全員で検討します。
第 13 回	学校・家庭・地域における精神保健活動の連携—学校・家庭・地域における精神保健活動の実際・連携の仕方	学校・家庭・地域における精神保健活動の実際・連携の仕方を担当者から説明し、その際に生じる問題点などを検討します。
第 14 回	実際の学校現場のケースを基に問題点のアセスメント・症状のとりえ方・専門機関の連携の仕方、まとめ	実際の学校現場のケースを基に問題点のアセスメント・症状のとりえ方・専門機関の連携の仕方をグループを決めて発表し、全体で検討します。授業を振り返ってのまとめの議論をします。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

1. 精神保健についての基礎知識、今後の学びたいことについてレポート課題を実施し、それを参考に今後の授業を内容を決めます。
2. 実際の症例問題で DSM-V に関するレポート課題を行ないます。
- 3～7. 授業内容に関する所見を実際の症例を学習しながら要点をレポートとしてまとめます。
- 8～11. 授業内容に関する実際の症例から診断やケア上の問題点をレポート提出します。
- 12～13. 授業内容に関する臨床心理学的アプローチをグループ学習し授業内で発表とともにレポートにまとめます。
14. レポート課題の際には、問題点のアセスメント・症状のとりえ方・専門機関の連携の仕方を必ず自分の学習した視点で記述し、提出します。

【テキスト（教科書）】

教科書は特に指定しません。毎授業時に適宜プリントを配付します。

【参考書】

米国精神医学会（編） 日本精神神経学会（監修）（2014 年）. DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル, 医学書院, 東京.
高橋 三郎（著）（2015 年）. DSM-V ケースファイル, 医学書院, 東京.

【成績評価の方法と基準】

平常点 40 %, 個人及び集団課題発表と報告および発表への質問やコメントなど討論への参加姿勢 30 %, 期末レポート（内容評価）30 % などを総合的に評価します。特に、討論への積極的な参加姿勢を重視します。

【学生の意見等からの気づき】

4 人の受講者のうち 2 名から回答を頂きました。自由記述では、「他者に分かりやすく説明する準備をする中で、自分自身の理解を深めることが出来た。」「補足説明が、最新のトピックや発表にはなかったものの重要な理解すべき点などを含んでいて、学びが多い有意義な時間だった。」「事例など実際にどのような症状等がみられるのかという具体例が大変勉強になった。」など、演習形式の発表、そして発表に加えるべき説明が理解を深めるのに役立っていることが確認できたため、継続して実施していきたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】

特にありません。必要に応じパワーポイントを使用します。

【その他の重要事項】

新型コロナウイルスに関する状況を考えて授業形態をオンライン授業などに変更する場合があります。初回の授業には必ず出席して下さい。
【オフィスアワー】履修の手引きの教員紹介に記載してあります。担当教員は、厚生労働省精神保健指定医、日本精神学会精神科専門医および日本睡眠学会専門医として 30 年以上精神科の臨床に携わっています。この経験を生かし、この授業を進めます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>精神生理学, 精神保健学

<研究テーマ>眠気, 睡眠, うつ, ストレス

<主要研究業績>

高橋敏治（2020）時差障害（時差ぼけ）. 診療所で診るトラベルメデイスン（大越裕文 編著）. 日本医事新報社, 東京, p 64-73.

高橋敏治（2019）残業による睡眠不足が引き起こす過剰な日中の眠気. 睡眠の診かた—睡眠障害気づくための 50 症例—（千葉茂 編著）. 新興医学出版社, 東京, p 62-63.

高橋敏治（2019）繰り返しの時差フライトが引き起こす睡眠障害. 睡眠の診かた—睡眠障害気づくための 50 症例—（千葉茂 編著）. （株）新興医学出版社, 東京, p 76-77.

高橋敏治（2017）. 時差ぼけと光環境 睡眠医療, 11, 525-530.

【Outline (in English)】

1. We will learn the basic knowledge necessary for school mental health.

2. We will learn how to identify mental problems and how to approach through concrete cases occurring at the school site.

The goals of this course are to acquire knowledge and skills of mental health science to utilize it practically, and to present countermeasures and solutions according to specific examples. It takes 2 hours to prepare and 2 hours to review for each lesson.

Final grade will be calculated according to the following process: in-class contribution (40%), presentation and attitude to participate in the debate (30%), several reports (30%).

PSY500B6

学校カウンセリング演習

渡辺 弥生

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「学校」における生徒理解と対応としてのカウンセリングのあり方について理解するとともに実際に実施できる力量を獲得する。さらに、学校心理士の資格に必要な学校カウンセリング・コンサルテーション基礎実習を履修する。具体的には、かかわりづくりに関するグループでの実習や、基本的な傾聴技法を身につけるほか、カウンセリングのプロセスを理解し、コンサルテーション、コーディネーションを含む幅広い活動能力を学ぶ。

【到達目標】

- (1) 学校内で生じる児童生徒の問題や原因について理解する。
- (2) 学校心理学や学校にかかわる基礎知識を獲得する。
- (3) 個別、小集団、スクールワイドという3段階に対応する知識と対応方法を学ぶ。
- (4) こうした知識や理解をもとに具体的な実践を行い、実際のフィールドに出られるコンピテンスを獲得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

今年度は、集中授業とする。学校現場で生じる問題は年代とともに変化しているが、さまざまである。それらの現状を理解するとともに、なぜそのような問題が生じるのか背景を理解する。そのうえで、どういった対応が求められているか、また、具体的にどのように対応すればよいのか、について実習を通して実践的な能力を獲得する。アクティブラーニングを基本とする。授業で出した課題のフィードバックは学習支援システムなどで行ったり、授業内でコメントする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業のテーマ、到達目標、進め方を説明する。
2	カウンセリングに必要な自己分析など基本的な実習	カウンセリングの難しさ自己理解のための実習する。
3	カウンセリングに必要な態度および技法の理解	生徒とラポールを形成するためにどのようにかかわっていけばよいのか、「傾聴」をキーワードに理解する。
4	カウンセリングの基本的な態度や技法の理解と実習1	傾聴のための技法の理解ペアワーク1
5	カウンセリングの基本的な態度や技法の理解と実習2	傾聴のための技法の理解ペアワーク2
6	カウンセリングの基本的な態度や技法の理解と実習3	実際の場面を想定したロールプレイング（グループワーク）
7	かかわりづくりに必要なサイコエデュケーションの理解	構成的グループエンカウンター、ストレスマネジメント、ソーシャルスキルトレーニングなどの理解
8	かかわりづくりに必要なサイコエデュケーションの個別の理解と実習1ーつなぐー	構成的グループエンカウンターの理論と実際1

9	かかわりづくりに必要なサイコエデュケーションの個別の理解と実習2ーつなぐー	構成的グループエンカウンターの理論と実際2
10	かかわりづくりに必要なサイコエデュケーションの個別の理解と実習3ー知るー	ストレスマネジメントの理論と実際
11	かかわりづくりに必要なサイコエデュケーションの個別の理解と実習ー獲得するー	ソーシャルスキルトレーニングの理論と実践1
12	かかわりづくりに必要なサイコエデュケーションの個別の理解と実習1ー獲得するー	ソーシャルスキルトレーニングの理論と実践2 指導案の作成
13	かかわりづくりに必要なサイコエデュケーションの個別の理解と実習2ー獲得するー	ソーシャルスキルトレーニングの理論と実践3 実際の応用
14	学校危機予防の現状と対応について考える コンサルテーションとコーディネーションの実習1	自然災害、自殺、いじめ、犯罪など学校現場で生じる学校危機予防対策について考える。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。実習が多いため、実習に取り組むことができる予備知識やポイントを事前におさえておく必要がある。実習の目標、必要なもの、どのような動きが求められるか等予習復習が求められる。範囲が広いことから、各自、カウンセリングの基本的な知識やグループワーク、ソーシャルスキルトレーニング、構成的グループエンカウンター、ピアサポートなどの支援方法について学習しておく。集中授業であるため、文献を事前に読んでおく。

【テキスト（教科書）】

「必修 生徒指導と教育相談」渡辺弥生・西山久子 編著 北樹出版

【参考書】

「子どもの感情表現ワークブック」 明石書店
「小学生のためのソーシャルスキルトレーニング」 明治図書
「中学生・高校生のためのソーシャルスキルトレーニング」 明治図書

【成績評価の方法と基準】

平常点（単に出席という意味ではなく、積極的な授業態度や実習内でのプレゼンテーションを基準とする）100%。特にトレーニング要素が強いため、出席重視。

【学生の意見等からの気づき】

各自グループカウンセリングを学校で実施する授業案をつくり、実際に模擬授業を実施し、基本的なスキルやテクニックを獲得しているが、さらに社会貢献ができる実践力を身につけるよう改善していく。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

具体的な実習資料は、適宜配布する。フィールドに出る機会に恵まれば学外に行く可能性あり。新型コロナウイルス感染状況によってオンラインに変更する可能性あり。

【担当教員の専門分野等】

<https://sites.google.com/site/emywata/>
＜専門領域＞ 発達心理学、発達臨床心理学、学校心理学
＜研究テーマ＞ 社会情緒スキルの発達といじめなどの予防教育の展開、ソーシャルエモショナルラーニング
＜主要研究業績＞
(1) 感情の正体 2019 筑摩書房
(2) 世界の学校予防教育 2013 金子書房
(3) 子どもの10歳の壁とは何か？ 乗り越えられる発達心理学 2011 光文社
(4) 子どもの感情表現ワークブック 2011 明石書店
(4) 10代を育てるソーシャルスキル教育 2009 北樹出版
(5) 感情の正体 2019 筑摩書房

【Outline (in English)】

We will learn about student understanding in "school" and counseling as a response as well as acquire the capabilities to put learned skills into actual practice. In addition, the fundamental school counseling and consultation practical training necessary for the qualification of school psychologist will be implemented. Specifically, in addition to acquiring practical training in groups on the creation of relationships, the aim is to study basic learning techniques, understand the counseling process, learn a wide range of activity ability including consultation and coordination, etc.

・ Students are expected to take at least two hours each for preparation and review.

・ Ordinary points (not just attendance, but based on positive class attitude and presentation in the practical training) 100%. Emphasis on attendance, especially because of the strong training component.

PSY500B6

発達行動特論

島宗 理

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

社会の問題や個人の悩みは、よくよく考えてみると何らかの行動の問題であることが多いものです。心理学は行動の科学として“行動の予測と制御”に関わる法則を見いだしてきました。こうした法則をうまく適用すれば、社会の問題を解決し、個人の悩みを解消することも可能です。この授業では、社会的・個人的に重要な課題を行動問題としてとらえ、個人攻撃の罠に陥らず、環境を整備しながら問題を解決していく行動分析学の考え方を学びます。

【到達目標】

行動分析学の基礎的な概念を理解し、人や動物の発達や認知に関する様々な現象を、強化や弱化的随伴性を分析することで解釈できるように学びます。基礎的な概念を説明できるようになり、それらの概念を応用して、社会や学校、家庭における行動問題の解決方法を立案できるようになること、そうした解決方法を基礎的な概念を使ったコミュニケーションを介して討議し、協調すること、さらに、課題分析や ABC 分析、行動の観察・記録法を実施できるようにすることを目指します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

毎週、教科書の指定された章を読んで、関連する課題を行い、それについて授業中に討議したり、演習します。課題へのフィードバックは授業中の討議を介して行います。

学習目標や参考図書などの教材は下記の URL を参照してください。
<https://docs.google.com/document/d/1XqZ7yScRRs24S2HJX8g1DLKW7CDnLTwm6FvUotXHZT8/edit?usp=sharing>

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	行動分析学の概説、教科書の紹介、プロジェクトについての話し合いなど。
2	好子、嫌子とは	好子、嫌子、行動随伴性の定義や具体例について学ぶ（教科書、第 1-2 章）：行動の定義、死人テスト、医学モデル、説明のレベル、循環論。
3	強化と弱化	基本的な 4 つの随伴性について学ぶ（教科書 3-5 章）： PTSD や汚言症の治療における強化、社会的悪循環、科学における節約性、自閉症の療育における代替行動の分化強化、社会的妥当性、学級経営のための集団随伴性、反応コストとタイムアウト。
4	消去と復帰、分化強化と分化弱化	消去と復帰、分化強化と分化弱化について学ぶ（教科書 6-7 章）：精神科病棟での問題行動修正、夜泣きの消去、バーストと自発的回復、自閉症児の自己刺激行動、消去と忘却の区別、スポーツのコーチング、課題分析、カウンセラーによる無意識の条件づけ、創造性。

5	シェイピング、強化スケジュール	シェイピングと強化スケジュールについて学ぶ（教科書 8-9 章）：失語症の行動療法、部分強化と連続強化、累積記録、FI、FR、VI、VR、消去抵抗、強化スケジュールによって生じる反応パターン。
6	生得性好子、生得性嫌子、特殊な確立操作、習得性好子、習得性嫌子	行動分析学における「動機づけ」について学ぶ（教科書 10-12 章）：遮断化と飽和化、確立操作、行動内在的随伴性と付加的随伴性、プリマックの原理、多飲症、攻撃行動と攻撃性好子、依存性好子、妄想を減らす行動療法、価値変容の原理、トークンエコノミーシステム。
7	刺激弁別、刺激般化、概念形成、模倣	弁別学習や概念学習、模倣による学習について学ぶ（教科書 13-15 章）：弁別刺激、概念の行動的定義、読字指導、刺激性制御、学習障害、機械利用型指導法、直感、プロンプトとフェイディング、遅延誘導手続き、リダクション、模倣と般化模倣。
8	阻止による強化、阻止による弱化、並立随伴性	回避行動、選択行動について学ぶ（教科書 16-18 章）：姿勢の矯正プログラム、自閉症における視線合わせ、警告刺激、ADHD、非両立行動の分化強化、対応法則。
9	刺激反応連鎖と反応率随伴性、レスポナント条件づけ	複雑な行動の学習、レスポナント条件づけについて学ぶ（教科書 19-20 章）：逆行連鎖化、順行連鎖化、総課題提示法、トイレトレーニング、自立訓練、早食いの抑制、恐怖症とその治療、高次条件づけ、系統的脱感作法。
10	言語行動	言語行動論について学ぶ（教科書 21 章）：マンド、タクト、イントラバーバル、エコーイック、テクスチャル、書き取り、聞き取り、書き写し、オートクリティック、私的刺激。
11	強化モドキ、ルール支配行動	直接効果的随伴性、間接効果的随伴性について学ぶ（教科書 22-23 章）：拒食症の治療、随伴性形成行動、ルール支配行動、コミュニティ心理学、イメージトレーニング、パフォーマンス・マネジメント、自己管理。
12	ベイ・フォー・パフォーマンス、道徳と法による行動の制御	ルール支配行動によるマネジメントについて学ぶ（教科書 24-25 章）：作文指導、就労支援プログラム、銀行におけるベイ・フォー・パフォーマンス、法律と道徳（倫理）、宗教、性同一性障害。
13	行動の維持、行動の転移	学習した行動を維持させ、転移させる要因について学ぶ（教科書 26-27 章）：行動の畏、般化を促進させる要因、自己教示。
14	研究法	行動分析学における研究法、特にシングルケースデザインについて学ぶ（教科書 28 章）：社会的妥当性、観察法、観察の信頼性、反転法、多層ベースライン法、基準変化法、条件交替法、内的妥当性、外的妥当性。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

○本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

○毎回、次の週の授業で討論する具体的なテーマに関する予習課題を提示するので、受講生は関連する教科書の章を読み、予習課題に取り組み、討論の準備をすること。

○本授業の準備・復習時間は、それぞれ平均 3 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

『行動分析学入門』（杉山・島宗・佐藤・マロット・マロット、産業図書、1998）

【参考書】

『ワードマップ：応用行動分析学』（島宗、2019）他。適宜、紹介します。

【成績評価の方法と基準】

○授業参加点 40%、課題点 60%で成績を評価します。

○授業を欠席したときには授業内課題を補完するレポートを書いて提出してください。学期内 6 回まではこのレポートの得点で授業内の課題得点を補完できるものとします。授業参加点は補填されません。

【学生の意見等からの気づき】

大学院に入る前の行動分析学の習得水準がばらばらなところにも苦勞する授業ですが、みなさんそれぞれよく考えて課題に取り組んでくれました。面白い議論をたくさん楽しめました。

【その他の重要事項】

オフィスアワーは春学期は金曜日の 4 限、秋学期は火曜日の 2 限、場所は研究室（富士見坂校舎 6F9 号室）です。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 行動分析学

<研究テーマ>

組織行動マネジメント、広告・消費者行動、教材開発

<主要研究業績>

① 島宗 理 (2019). ワードマップ 応用行動分析学 新曜社

② 島宗 理 (2015). リーダーのための行動分析学入門 日本実業出版社

③ 島宗 理・若松克則 (2016). 会計事務所で働くパート従業員を対象とした参加型マネジメント 行動分析学研究, 31, 2-14.

【Outline (in English)】

【Course outline】

The purpose of this course is to master basic principles, procedures, and research methods pertaining to applying behavior analysis in schools or in other educational or therapeutic settings. Focus will be placed on knowledge and skills in applying basic concepts of learning to interpret behavioral phenomena in real-world educational or societal settings.

【Learning Objectives】

At the end of the course, students should be able to do the followings:

1) focus on behaviors, 2) conduct ABC/AB analyses, and 3) measure target behaviors, and 4) explain about single-case research design.

【Learning activities outside of classroom】

Students are expected to complete weekly assignments on research projects (average of 3 hours).

【Grading Criteria /Policy】

Final grade in this class will be decided based on the following: Class participation (40%) and task completion (60%).

PSY500B6

生徒指導特論

小澤 真

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

生活指導、教育相談、キャリア教育、発達障害への対応など、生徒指導に関わる様々な局面で、それらが有効に機能するために教師に求められる役割とは何かについて考察する。あわせて、そうした役割を果たしていくための教師自身の自己理解、自己成長についても論及する。これにより学生は、生徒指導の意義について理解し、教師としてどのように機能すべきかを考察できる。

【到達目標】

- ①生徒指導の意義と役割について基本的な概念を説明できること。
- ②教育相談やキャリア教育、生活指導等の活動を通じて果たすべき教師の役割とその方策について理解し、独自の考えを具体的に述べられること。
- ③生徒理解の方法について理解を深め、自分なりの工夫やアイデアを提案できること。
- ④青年の自己の確立とは何かについて、教育相談やキャリア教育、生活指導との関連で記述するとともに、自己理解や自己成長にも応用できること。
- ⑤広汎性発達障害、ADHD等の発達障害についてその概要を説明し、その対応策を案出できること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

生徒指導の意義を理解し、教師の役割と効果的な方策を学習することが本科目の主たる目的である。各回のテーマについての理論的な概説や事例の提供を小澤による講義、または課題についての発表により行った後、全員で討論することにより、生徒指導に関わるさまざまな場面において、その本質を踏まえて、教師としていかにして効果的に対応するかを検討し、理解を深める。その際には、心理的な動きを中心とした生徒の内面の理解ばかりでなく、受講院生自身の教師としての自己理解を深めることも大切である。また折に触れて教師と生徒の効果的なコミュニケーションについて交流分析の視点からの理論的な検討も加える。これにより、生徒指導のための具体的な方法を指導者として考える力が養われるとともに、受講院生の自己成長がはかられることが期待される。

・授業形式：対面授業を予定している。ただし、新型コロナウイルスの感染症の拡大状況によってはオンライン授業（リアルタイム配信型）に移行する。

・フィードバック方法：各回の授業の終わりにその回の発表、討議に対して講評や解説を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション／生徒指導とは	授業の目的と方法の確認。生徒指導の概念、意義と方法についての概説を担当者が行う。
2	生徒指導の体制と諸問題	生徒指導の学校分掌上の位置づけ、学校内外との連携、およびそこで生じる諸問題について担当者が説明し、全員で討論する。
3	生徒理解と生徒指導	青年期の発達課題の理解を踏まえて、生徒指導における生徒理解の意義について担当者が説明する。

4	生徒指導における教師と生徒とのコミュニケーション	前回の内容をさらに展開し、生徒とのコミュニケーション把握および改善するための方法、教師の自己理解と成長について担当者が説明する。
5	教育相談の意義	他の領域の臨床心理学的援助との異同を踏まえながら、学校教育相談の意義と特質について担当者が説明する。
6	教育相談の体制と構造	教育相談の学校分掌上の位置づけ、ハード、ソフト両面の構造、校外諸機関との連携等について担当者が説明する。
7	教育相談の具体的な展開 (1) 社会的ひきこもりの理解と対応	担当者が社会的ひきこもりについての概説を行った後、具体的な事例を提示し、全員でその対応について話し合う。
8	教育相談の具体的な展開 (2) 反社会的問題への対応	担当者が反社会的問題についての概説を行った後、具体的な事例を提示し、全員でその対応について話し合う。
9	教育相談の具体的な展開 (3) 心身症の理解と対応	担当者が心身症についての概説を行った後、具体的な事例を提示し、全員でその対応について話し合う。
10	生徒の心のケアと学校の役割	学校内外で緊急事態が発生した際の生徒の心のケアについて、担当者が具体的な事例を提示し、教師の役割について全員で話し合う。
11	発達障害の基本理解	広汎性発達障害、ADHD等の発達障害について発表を行い、担当者が説明する。
12	発達障害への対応	広汎性発達障害、ADHD等の発達障害を持つ生徒に対する教師としての対応について全員で話し合う。
13	キャリア教育の意義と内容／具体的な展開	青年期の発達課題の理解を踏まえて、キャリア教育の具体的な方法を発表し、全員で討論する。
14	まとめ／生徒指導とは	これまでの学習を踏まえて、生徒指導の意義や教師の役割について全員で討論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、計 4 時間を標準とします。

第 1 回 教育基本法、学習指導要領を調べ、生徒指導の位置づけについてレポートする。

第 2 回 自らが生徒として生徒指導を受けた体験をもとに、そこから生じる諸問題についてレポートする。

第 3 回 エリクソンの発達課題を中心に、青年期の発達課題についてレポートする。

第 4 回 自らが陥りやすい、適応的でないコミュニケーションパターンを振り返りレポートする。

第 5 回 他の領域の臨床心理学的援助と学校教育相談との異同についてレポートする。

第 6 回 各自が学校内の相談室の理想的な構造を考え、レポートする。

第 7 回 社会的ひきこもりの問題に対して教育相談の立場からどのように対応するかについて方策を考え、レポートする。

第 8 回 生徒の反社会的問題に対して教育相談の立場からどのように対応するかについて方策を考え、レポートする。

第 9 回 生徒の心身症に対して教育相談の立場からどのように対応するかについて方策を考え、レポートする。

第 10 回 PTSD についてレポートする。

第 11 回 発達障害についてレポートする。

第 12 回 発達障害に対する対応例についてレポートする。

第 13 回 キャリア教育の具体例をレポートする。

第 14 回 なし

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。授業で使用する文献・資料はその都度配布する。

【参考書】

佐々木雄二・笠井仁（編）（2010）. 図で理解する生徒指導・教育相談 福村出版.
 稲垣應顕・犬塚文雄（編）（2004）. わかりやすい生徒指導論改訂版 文化書房博文社.
 石隈利紀（1999）. 学校心理学―教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス 誠信書房

【成績評価の方法と基準】

討論参加 20 % 発表 40 % レポート 40 %。

【学生の意見等からの気づき】

受講者数が少数であったため授業改善アンケートは実施していないが、受講生の積極的な参加によってディスカッションが活発になされ、受講生、担当教員双方にとって良い刺激となとなっている。その状況をさらに促進するため、それぞれの受講生の研究テーマを生かせるような授業展開を心がけている。

【学生が準備すべき機器他】

なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>臨床心理学

<研究テーマ>交流分析理論の実証的な研究

<主要研究業績>

*小澤 真（2010）. 対人関係にアプローチする―交流分析― 佐々木雄二・笠井仁（編） 図で理解する生徒指導・教育相談 第15章. 福村出版.

*小澤 真（2000）. 生徒理解のための交流分析の活用―高校生の学校ストレス認知とエゴグラム― 交流分析研究,25(2),117-123.

*小澤 真（2000）. 学校も家もつまらない―不応の心理 古川聡（編） 教職に活かす教育心理―子どもと学校の今― 第12章. 福村出版.

*小澤 真・西森優実子（2016） 交流分析と自律訓練法の効果的な利用法を探る. 交流分析研究, Vol.41(1), Pp.11～20.

【Outline (in English)】

(Course outline) In this class, we consider the role of teachers to work effectively in the various aspects involved in student guidance for life coaching, counseling, career education, developmental disabilities, or else. On the other hand, to fulfill such a role, we mention on teachers' self-understanding and self-growth. (Learning Objectives) (1) to explain basic concepts about the significance and role of student guidance, (2) to understand the role of teachers and their strategies to be played through activities such as school counseling, career education, and life guidance, and to express their own ideas in concrete terms, (3) to deepen understanding of how to understand students and propose their own ingenuity and ideas, (4) to describe what the establishment of adolescents' self is in relation to school counseling, career education, and life guidance, and to apply it to self-understanding and self-growth, (5) to outline developmental disorders such as ASD and ADHD, and devise countermeasures for such developmental disorders.

(Learning activities outside of classroom) Students will be expected to prepare to report or to discuss about the theme of each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class. (Grading Criteria /Policy) Your overall grade in the class will be decided based on the following. In class contribution: 20%, Presentation 40%, Short reports: 40%.

PSY500B6

言語心理演習

福田 由紀

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本年度は、「読む・書く」といった言語行動に明示的におよび、暗示的に影響を与えている「自己」を中心に取り上げる。例えば「昨日、新宿に行った」と書かれた日記の文章は「私」が新宿に行ったことを暗示している。また、文章を読む際には、自分の体験をうまく利用することによりコストを低減できる。このような「自己」の影響を検討する。

【到達目標】

本授業の到達目標は、以下の通りである。自ら問題発見をし、それを仮説に定義し直し、発表できるようにする。

①言語活動に関わる自己の影響に関する今までの知見を学ぶ。

②知見に基づき、「読む・書く」といった言語行動における自己について、自ら仮説を設定し、研究計画を立てる。

③研究計画について発表を行う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業の目的は、「読む・書く」といった言語活動に影響をあたえる「自己」の心理的実在を自ら実証することである。そのために、授業の前半では目的に関連した先行研究を精読し、発表をする。次に、実証できる仮説を設定し、実際に研究を行う。その際、実証研究のためのスキルを確認し、よりよい方法を模索し、実行する。その結果に関して、効果的なプレゼンテーションを行う。授業は受講生による発表で主に進めていく。それを受けて全員でディスカッションを行う。また、提出された課題のフィードバックは、授業中ないしは授業支援システムを通して行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	読み・書きに対する自己の影響に関する文献の説明
第2回	読みに対する自己の影響の発表1	読みに対する自己の影響の発表と討論1
第3回	読みに対する自己の影響の発表2	読みに対する自己の影響の発表と討論2
第4回	書きに対する自己の影響の発表1	書きに対する自己の影響の発表と討論1
第5回	書きに対する自己の影響の発表2	書きに対する自己の影響の発表と討論2
第6回	実験・調査の注意点の確認	言葉を扱う研究実施における注意点の確認をする
第7回	実験・調査の立案	実験・調査の素案に関する討論
第8回	研究計画の発表	実施計画の発表と討論
第9回	研究計画の修正発表	修正した実施計画の発表と討論
第10回	ポスター発表の仕方	自分の実験・調査の効果的なポスター発表と討論
第11回	口頭発表の仕方	自分の実験・調査の効果的な口頭発表と討論
第12回	読み書きに対する自己の影響の発表1	読み書きに対する自己の影響の発表と討論1
第13回	読み書きに対する自己の影響の発表2	読み書きに対する自己の影響の発表と討論2
第14回	講評会	発表に対する全員で講評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

第 1 回～第 4 回 次週の発表の準備

第 6 回 先行研究における様々な方法の収集

第 7 回～第 12 回 次週の発表の準備

第 13 回 講評の準備

【テキスト（教科書）】

特になし。適時、周知する。

【参考書】

福田由紀 (2012). 言語心理学入門 培風館

郡司隆男・坂本勉 (1999). 言語学の方法 岩波書店

【成績評価の方法と基準】

発表 40%, 発表への質問・コメント 30%, 討論への参加 30%などを総合的に評価する。特に、討論への積極的な参加姿勢を重視する。

【学生の意見等からの気づき】

2021 年度は開講されませんでした。そのため、以前のアンケートからの気づきを紹介しました。

「論文作成にあたって有益な授業でした。」というコメントをもらいました。私もいろいろと考えさせられ、自らの論文作成に有益でした。ありがとうございました。その中でも文章作成にとって、論の展開がとても重要ですね。それを忘れずに、今後ともがんばっていきましょう！

【その他の重要事項】

受講希望者は初回の授業に必ず出席をしてください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 言語心理学

<研究テーマ> 読みと感情、コミュニケーションにおける言語活動の役割

<主要研究業績>

①福田由紀・菰原遥・菊池理紗 (2018). 言語心理学で何を学べるか？一言語学との学問イメージ比較—法政大学文学部紀要, 76,115-127.

②福田由紀・佐藤志保 (2017). ポジティブな文章を読むと気分が良くなるのか？読書科学, 59,161-171.

③福田由紀・土清水咲葉・荒井弘和 (2016). 状況モデルの更新回数は物語の面白さを促進するのか？法政大学文学部紀要, 73,99-108. <HP>

「ことばのこころ研究室」<http://www.zc.em-net.ne.jp/~psy-language/>

【Outline (in English)】

Course outline : The purpose of this course is to learn the effect of “self” on language activities.

Learning Objectives : By the end of the course, students should be able to do the following:

– A. understand information on previous studies about the effect of self on language activities

– B. make one’s research plan about the effect of self on language activities

– C. present one’s research plan

Learning activities outside of classroom : Before/after each class meeting, students will be expected to have completed the required assignments. Your study time will be four hours for a class.

Grading Criteria : Your overall grade in the class will be determined based on the following: presentation: 40%, comment for the presentation of other people: 30%, in-class contribution: 30%.

PSY500B6

認知学習過程演習

藤田 哲也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

記憶を中心とした認知心理学および、主に学習過程に焦点を当てた教育心理学の知見を活かして、的確な先行研究の概観と批判的な読み方を学び、効果的にプレゼンテーションを行う。

【到達目標】

半期の授業が終了した時点で、以下の各要素を身につけていることが、授業の具体的な到達目標となる。

1. 多数の先行研究を読んだ上で、その分野における研究課題を明確に指摘できる。

2. 個々の先行研究を批判的に読むことで、問題点・改善点を挙げることができる。

3. 上記 1, 2 の内容を、適切でわかりやすい方法で他者に伝達できる。

4. 他者の発表に対して、即応的に的確な評価を行うことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

自分自身および先行研究における研究成果を、学術論文として発表することと、口頭でプレゼンテーションすることを具体的な作業課題として設定した演習である。

質の高い研究を行うために必要な、先行研究の批判的な読み方、研究課題の設定のしかたについて教員が解説した上で、受講生自身が実際に発表し、全員で討論を行う。

具体的な授業の進め方は次の通りである。まず最初の 5 回の授業で、文献の探し方や発表のしかたについて教員が説明を行う。次に、受講生各自が興味を持っている研究領域の論文を複数読んだ上で、その領域のレビューを行い、発表を行う。その際には単に論文紹介するだけでなく、批判的な目を持って、自分自身の視点でレビューすることが求められる。発表後の質疑応答の時間に、論文の読み方、レビューを行う上での注意点、発表のしかたなどの技能的な面についても教員から随時アドバイスを兼ねてフィードバックを行うが、受講生相互で活発にコメントし合うことも期待している。最終的に、各自がレビュー発表によって明確になった研究課題を修士論文の構想として発展させ、それを発表する。修論構想発表後も、受講生全員でコメントをシェアするとともに、今後の要改善点についてフィードバックを行う。

評価対象となっている発表については評価基準表（ループリック）を公表するとともに、授業支援システムにて評価結果をフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	この授業の概要と到達目標、評価方法の説明
2	文献の探し方（図書館ガイダンス）	法政大学図書館における蔵書検索と、書庫の活用方法について
3	発表のしかた：レジュメ篇	認知心理学の知見をふまえたレジュメの作り方について
4	発表のしかた：プレゼン篇	発表のしかた、パワーポイントの使い方、発表に対する自己評価、現時点での構想発表
5	レビュー発表に求めること	レビュー発表のポイント、批判的思考、発表の準備
6	発表準備	評価用紙を用いた評価の方法、発表の準備

7	レビュー発表1	レビュー発表，発表に対する質疑応答，発表に対する評価・コメント
8	レビュー発表2	レビュー発表，発表に対する質疑応答，発表に対する評価・コメント
9	レビュー発表3	レビュー発表，発表に対する質疑応答，発表に対する評価・コメント
10	レビュー発表4	レビュー発表，発表に対する質疑応答，発表に対する評価・コメント
11	修論構想発表1	修論構想発表，発表に対する質疑応答，発表に対する評価・コメント
12	修論構想発表2	修論構想発表，発表に対する質疑応答，発表に対する評価・コメント
13	修論構想発表3	修論構想発表，発表に対する質疑応答，発表に対する評価・コメント
14	総括	授業の到達目標の確認，授業で修得できたことの振り返り，成績評価について，今後の課題

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自分の研究および発表のために準備を行うことはもちろんだが，他の受講生の発表に対して，学習支援システムの掲示板上で質問やアドバイスなどのコメントを書き込むこと。また，発表者は自分の発表に対して書き込まれたコメントに対して返信を行うこと。以上のことから，本授業の準備・復習時間は各2時間を標準とする。準備学習の詳細は下記の通り。

- 第1回 自分の興味ある研究テーマを明確にして，文献検索のためのキーワードを準備する
- 第2回 自分の興味ある研究テーマの文献を収集する
- 第3回 先行研究の熟読，レジュメの構想を練る
- 第4回 先行研究の熟読，レジュメとパワーポイントによる発表の準備
- 第5回 発表の構想の見直し・確認，発表準備
- 第6回 自分の発表に対する事前の自己評価，発表準備
- 第7回 既発表者は発表の振り返りおよび修論構想発表の準備，未発表者はレビュー発表の準備
- 第8回 既発表者は発表の振り返りおよび修論構想発表の準備，未発表者はレビュー発表の準備
- 第9回 既発表者は発表の振り返りおよび修論構想発表の準備，未発表者はレビュー発表の準備
- 第10回 レビュー発表の振り返り，修論構想発表の準備
- 第11回 既発表者は発表の振り返りと修論構想の修正，未発表者は修論構想発表の準備
- 第12回 既発表者は発表の振り返りと修論構想の修正，未発表者は修論構想発表の準備
- 第13回 既発表者は発表の振り返りと修論構想の修正，未発表者は修論構想発表の準備
- 第14回 発表全体の振り返りと修論構想の修正

【テキスト（教科書）】

教科書は指定しない。授業は配付プリントに沿って行う。

【参考書】

藤田哲也（編）(2006). 大学基礎講座 改増版－充実した大学生活をおくるために－ 北大路書房
そのほか，各回の授業内容に関連した書籍や論文を授業内で紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 %…授業に参加した上で，他者の発表にコメントしたり，掲示板に書き込むことを評価対象とする。
レビュー発表と修論構想発表 30 %…発表の内容，発表資料の質，発表のしかた，発表後の質疑応答を評価対象とする。
他者の発表への評価 20 %…他者の発表に対して批判的に・的確に評価できているかどうかを評価対象とする。

【学生の意見等からの気づき】

前年に授業担当がなかったので最新の2019年度分を載せます：例年は「履修してよかった」「授業の工夫」「理解度」いずれも5.00満点なのですが，2019年度は7名中1名のみ満点で，それ以外は4点でした。そのこと自体はもちろん事実として受け止めるのですが，どこが不足していたのか，自由記述などでわかるように書いてもらえると助かります。なんとなく4点にしたという感じなのでしょう。か？ 授業外学習時間も全員が2時間以上，2名は3時間以上でした。

【その他の重要事項】

授業の運営方針や教育目標について説明を行うとともに，発表の割り当てを行うので，受講希望者は初回の授業に必ず出席すること。心理学専攻以外の所属で受講を希望する者は，必ず事前に相談すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

認知心理学，教育心理学

<研究テーマ>

単なる経験則に終わらない，研究技能の獲得と研究成果の伝達を目指す。

<主要研究業績>

藤田哲也（編）(2006). 大学基礎講座 改増版－充実した大学生活をおくるために－ 北大路書房

藤田哲也（2006）. 心理学を活かした教育実践のために 井上智義（編）視聴覚メディアと教育方法 ver.2 認知心理学とコンピュータ科学の応用実践のために 8章 北大路書房，pp.135-155.

藤田哲也（2010）. 記憶過程と学習 三宮真智子（編）教育心理学 2章 学文社，pp.22-37.

【Outline (in English)】

[Course outline]

In this class, students critically review and review prior research by applying cognitive psychology focusing on memory and knowledge of educational psychology focusing mainly on learning process. Also, students will learn how to make effective presentations.

[Learning Objectives]

By the end of the course, students should be able to do the following:

- 1.Students can clearly point out research issues in the field after reading a large number of previous studies.
- 2.Students can point out problems and improvements by critically reading each previous study.
- 3.Students can present the contents of 1 and 2 above to others in an appropriate and easy-to-understand manner.
- 4.Students can promptly and accurately evaluate the presentations of others.

[Learning activities outside of classroom]

The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.

[Grading Criteria /Policy]

The overall grade of the class is determined based on the following.

In-class contribution 50%, review presentation and master's thesis concept presentation 30%, evaluation of others' presentation 20%

PSY500B6

心理教育アセスメント特論

杉山 崇

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

心理学的測定の原理・原則、および心理・教育的アセスメントの方法、効果的な活用と施行倫理を学ぶ

【到達目標】

- (1) 心理測定の原理・原則とその活用スキルを身につける。
- (2) 心理アセスメント（心理査定）と教育評価の方法と使い方を身につける。
- (3) アセスメントの結果に基づいた本人および教師・父兄へのコンサルテーションを学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本演習では、個人のパーソナリティおよびストレス反応のアセスメント、教育評価、学級・学校のアセスメントなど、心理職が活躍する現場における心理アセスメントの手法を学ぶ。

授業計画にあるように、個人のアセスメントから学校・学級という組織・集団のアセスメントまで、学校現場で行われている心理学的なアセスメント法の理論と実際を学び、学校現場で機能できるようにコンサルテーションを想定した報告書作成の実習を行う。

なお、提出した課題および授業中の発表などへのフィードバックは、原則として口頭でその授業内で行うが、場合によっては次回の授業でフィードバックを行う場合もある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
1	心理教育的アセスメントの概要	学校で求められている心理教育アセスメントの特徴を理解する。
2	学校と心理測定	学校で心理測定がどのように活用され、どのように受容されてきたか理解する。
3	心理教育的アセスメントの倫理	事例から学校における心理測定のメリットとデメリットを理解し、倫理的配慮の必要性を学ぶ。
4	心理検査学概論	心理検査はどのようなグランドデザインで構成されて、どのような方法へと分化したか学ぶ。
5	絵画法①	学校で良く用いられる、バウム法、HTP を学ぶ。
6	絵画法②	風景構成法の施行法と実際に体験的に学ぶ。
7	質問紙法①	質問紙で実施できる心理尺度の作成方法、実施方法、結果の活用方法を学ぶ
8	投影法①	人間関係や社会的な問題が浮上すると言われている絵画統覚検査（TAT）を体験的に学ぶ。
9	投影法②	P-F スタディを体験し、実施における留意点を学ぶ。
10	知能検査	学校における知能検査データの使い方の配慮について検討する。
11	学級アセスメント	学校風土に基づいた学級アセスメントの理論と技法を学ぶ。
12	学校アセスメント	学校アセスメントの理論と実際に学ぶ。

13	教育評価	教育評価の技法と心理学的教育評価の実際を学ぶ。
14	教師へのコンサルテーション	アセスメント結果の報告書の作成とコンサルテーションの実際を学ぶ。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
- 第 1 回 学校を見学するなど、学校を体験することが望ましい。
 - 第 2 回 心理測定の基本的考え方の資料を読んでくる。
 - 第 3 回 臨床心理学の倫理規定を読んでくる。
 - 第 4 回 教材論文を読んでくる。
 - 第 5 回 事前に 2 人一組で相互にバウムテストを試行し合う。
 - 第 6 回 当該技法に関する教材論文をレポートする。
 - 第 7 回 当該技法に関する教材論文をレポートする。
 - 第 8 回 当該技法に関する教材論文をレポートする。
 - 第 9 回 当該技法を事前に実施し、スコアリングを行う。
 - 第 10 回 当該技法に関する教材論文をレポートする。
 - 第 11 回 当該技法に関する教材論文をレポートする。
 - 第 12 回 当該技法に関する教材論文をレポートする。
 - 第 13 回 当該技法に関する教材論文をレポートする。
 - 第 14 回 当該技法に関する教材論文をレポートする。

【テキスト（教科書）】

教科書は特に指定しない。毎授業時に資料や課題を指示する。また、課題に必要な文献はその都度伝える。

【参考書】

『必携 臨床心理アセスメント』金剛出版

【成績評価の方法と基準】

発表 40%、出席・発表への質問・コメント 30%、討論への参加 30%などを総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

自己理解、他者理解を通じた査定法の習得が有益であることがわかったので、この機会を増やす方向を検討している。

【学生が準備すべき機器他】

PC、課題資料

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>臨床心理学。精神医療施設、中学校、高等学校、公立教育相談室、などで、25 年、心理アセスメント・心理カウンセリングを担当する心理職に就き、また、特別支援学校などで教師へのコンサルテーションの活動を行っている。

公式 WebPage：<http://www.sugys-lab.com/>

＜研究テーマ＞

- 1) 心理臨床実務における活用性の高い心理尺度の作成・改訂
- 2) アセスメントを活用した教育臨床、病院臨床、産業臨床

＜主要研究業績＞

杉山崇・前田泰宏・坂本真士（2007）『これからの心理臨床』ナカニシヤ出版

坂本真士・杉山崇・伊藤絵美（2010）『臨床に活かす基礎心理学』東京大学出版会

伊藤絵美・杉山崇・坂本真士（2011）『事例でわかる心理学のうまい活かし方』金剛出版

山崎圭輔・杉山崇（2012）『カウンセリングと援助の実際』北樹出版

杉山崇（2015）『入門！ 産業社会心理学』北樹出版

SUGIYAMA.T., (2008) 'Assessments of Depressive-Process and Personality for Cognitive Behavior Therapy: Theory and Practice of Client Centered Cognitive Behavior Therapy', 1st Asian Conference of CBT Papers. Asian Conference of CBT.

杉山崇（2007）『抑うつ心理臨床に向けたロールシャッハ法、TAT、SCT と各種質問紙法の実施法および臨床的利点：投影法、質問紙法の臨床活用とテストバッテリーに向けた一考察』山梨英和大学紀要

【Outline (in English)】

Learn the principles of psychological measurements and the methods of psychological assessment about education, the effective application methods, the enforcement ethics

PSY500B6

心理教育アセスメント演習

熊 仁美

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

検査を通じて対象児の特性を的確に把握し、支援計画の策定に役立つよう解釈しとめる知識と技術の習得を目的とする。心理検査の概要や発達障害の基礎知識を学んだあと、療育支援の現場に校外学習にでむき、個別心理検査の実習を行う。検査を実施し、結果を解釈し、結果に基づいて指導案を作成する。今年度は、ウェクスラー式知能検査WISC-IVを使用する予定である。

【到達目標】

- (1) WISC-IVを実施できるようになる
- (2) WISC-IVの検査結果を解釈できるようになる
- (3) WISC-IVの検査結果に基づいて、指導案を作成できるようになる。
- (4) 発達に遅れや偏りのある児童に分かりやすい関わり方の基礎を習得する

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

前半は、大学にて検査の概要に関する講義とロールプレイによる実技演習を行います。発達障害や応用行動分析学に基づくかわり方の基礎も学んでいただきます。後半は、福祉施設に校外実習に出向きます。発達障害のある小学校低学年のお子さんにご協力を頂いて実際に検査をとる練習をします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	事前演習	検査の実施に関する説明と諸注意。発達障害支援における活用概要なども解説する。
第2回	事前演習	教室内で受講者同士がペアとなり、模擬的に検査を実施する。
第3回	事前演習	教室内で受講者同士がペアとなり、模擬的に検査を実施する。
第4回	事前演習2	模擬検査について結果を算出し、検査のプロフィールを合わせて解釈し、それに対するフィードバックを受ける。
第5回	事前演習2	模擬検査について結果を算出し、検査のプロフィールを合わせて解釈し、それに対するフィードバックを受ける。
第6回	事前演習2	模擬検査について結果を算出し、検査のプロフィールを合わせて解釈し、それに対するフィードバックを受ける。
第7回	事前演習3	模擬検査に基づき、個別の指導計画などに組み込める具体的な指導案を作成し、フィードバックを受ける。
第8回	事前演習3	模擬検査に基づき、個別の指導計画などに組み込める具体的な指導案を作成し、フィードバックを受ける。
第9回	実習	校外にて発達支援の現場見学を行い、検査に必要なラポール形成のスキルを学ぶ。

第10回	実習	校外にて子どもを対象に検査を実施しその結果を解釈する。
第11回	実習	校外にて子どもを対象に検査を実施しその結果を解釈する。
第12回	実習	校外にて子どもを対象に検査を実施しその結果を解釈する。
第13回	実習	校外にて子どもを対象に検査を実施しその結果を解釈する。
第14回	総括	上記の検査で得られた結果を解釈し、指導案を作成してレポートとして提出する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。集中講義開始前までにテキストを読んでおくこと（心理学準備室に用意してあります）。履修者が決定したら、授業支援システムを使ってレポートの分担を送ります。割り振られた分担箇所について、各自レポートにまとめてもらい、授業当日に発表をして頂きます。

【テキスト（教科書）】

日本版 WISC-IV 刊行委員会 訳編著 2010 年 日本文化科学社
・WISC-IV実施・採点マニュアル
・WISC-IV理論・解釈マニュアル

【参考書】

日本版 WISC-IV による発達障害のアセスメント - 代表的な指標パターンの解釈と事例紹介- 上野一彦 松田 修 小林 玄 木下智子 著 2015 年 日本文化科学社

https://www.amazon.co.jp/dp/4821063719/ref=cm_sw_r_li_dp_U_a8GrEb322RD5E

【成績評価の方法と基準】

実習のため、全セッションへの出席と参加が評価の前提となる。成績はレポートを100点満点で採点し、評価する。

【学生の意見等からの気づき】

・実習前に対象児童のプロフィールや生活の見通しをより詳しく伝達することで、検査実施の意味や結果の活用についての考察を深めることができる。
・学生間のディスカッションや協働を積極的にもうけることで、自発的・自律的な学びを重視する。

【学生が準備すべき機器他】

プロジェクタ・スクリーンが使える状態にしておくこと。検査器具を部屋に運んでおくこと。

【その他の重要事項】

動きやすい服装で参加してください。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞発達心理学・応用行動分析学＜研究テーマ＞大学における研究やNPO法人における臨床活動を通して、自閉症スペクトラム障害児に対する早期療育支援やペアレントトレーニング、セラピスト養成や共同注意などの前言語コミュニケーションに関する研修に取り組んできた。

＜主要研究業績＞

熊仁美・竹内弓乃・原由子・直井望・山本淳一・高橋介介・飯島啓太・齊藤宇閑・渡邊倫・服巻繁・ボンディ アンディ (2010). 自閉症とコミュニケーション（公開講座：わが国における最新の研究と実践）, 行動分析学研究, 24(1), 85-105.

熊仁美・直井望・山本淳一 (2010). 自閉症児の共同注意とコミュニケーション：発達初期コミュニケーション尺度を用いた分析 ― 人間と社会の探求：慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要, 69, 131-144.

熊仁美・山本淳一 (2014). 自閉症児の要求音声言語の獲得と拡張に及ぼす PECS の効果, 特殊教育学研究, 51(5), 407-419.

熊仁美 (2016) 自閉症スペクトラム障害における共同注意と社会的参照行動. 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士論文（未公開）

■取得研究費

熊仁美 (2016) 「エビデンスに基づいて保護者とともに取り組む発達障害児の早期療育モデルの実装」 国立研究開発法人科学技術振興機構 28 年度戦略的創

造研究推進事業 研究
開発成果実装支援プログラム

【Outline (in English)】

The purpose of the "Psychoeducation Assessment Exercise" is to interpret the test results and accurately grasp the characteristics of the target child, and to acquire the skills to formulate a support plan based on the test results. After learning the outline of psychological tests and basic knowledge of developmental disabilities, they will go to a developmental support facility and practice the tests with the cooperation of their children. Interpret the results and create a teaching plan that suits the child. We plan to use WISC-IV this year.

PSY500B6

スポーツ心理特論

江田 香織

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

授業のテーマは、スポーツ心理学のテーマ（スポーツ・運動・身体活動への心理学的アプローチ）を実践的に学習することです。

【到達目標】

- (1) スポーツ心理学の研究や知見を理解することによって、「こころの仕組み」に関する理解を深め、身体活動・運動・スポーツ場面において心理学的な支援を実践できるようになることを目標とします。
- (2) 各受講生の専門領域と、スポーツ心理学との関連に着目し、それらと(1)の両者の発展可能性を明確にすることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

この授業では、運動学習や運動の習慣化に関連する理論モデルから、メンタルトレーニングやアスリートにおける心理的問題とその予防・改善方法まで、幅広い内容を扱います。さらに、欧米で注目されている最新のトピックや、実際のスポーツ場面で生じた事例についても触れます。

以上のことによって、現代社会においてスポーツ心理学が果たす役割について具体的に考え、心理学的な支援を実践できるようになることを目指します。

また、受講生それぞれの専門分野とスポーツ心理学とのつながりを検討し、両者の発展可能性について検討していきます。

そのため、この授業では、講義だけでなく、講義内容に基づくワークを行います。授業の後半では、受講生による発表・意見交換を行うこともあります。

課題に対するフィードバックは、(1) 次の回の授業の序盤に受講生全体に対して、(2) メーリングリストなどを利用して受講生全体に対して、(3) 個人的に、のいずれかの方法で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーションおよびスポーツ心理学について	受講の注意点および授業の進め方。体育スポーツにおける心理学とその歴史について。
第2回	スポーツにおける心身相関	スポーツにおける心身相関、スポーツ障害の見方など。
第3回	スポーツにおける動機付け	動機づけの種類、動機づけの水準、自己決定理論、競技場面で見られる動機づけへの工夫をグループで議論する。
第4回	運動・スポーツとメンタルヘルス	運動、スポーツ実践におけるメンタルヘルスの問題について。
第5回	スポーツとパーソナリティ	パーソナリティとは。スポーツ経験によるパーソナリティ変容について。
第6回	運動学習	スポーツにおける技術習得、スランプ、プラトー、フィードバック等について。
第7回	コーチングの心理学	指導者の心理的発達、フィードバックの方法、バーンアウト。言語・視覚・筋運動感覚的な指導について。
第8回	スポーツと集団	運動部集団の特徴、チームワーク、チームビルディング、チームサポート実践例の紹介。

第9回	スポーツメンタルトレーニングの方法（メンタルトレーニング総論）	メンタルトレーニングとは、メンタルトレーニングのポイント、心から体へ、アセスメントなど。
第10回	スポーツカウンセリング総論	スポーツカウンセリング総論と実際のサポート事例について。
第11回	スポーツ障害に対するスポーツ心理学的理解	スポーツ障害の理解の仕方について。
第12回	ジュニア期のスポーツと心理的発達	思春期の心理的発達、タレント発掘、ジュニア期に必要な体験。ジュニア期の心理サポート事例の紹介。
第13回	自分の研究分野とスポーツ心理学との関連を考える（1）	各受講生の研究分野とスポーツ心理学との関連性について、担当者が発表を行い、意見交換を行う。
第14回	自分の研究分野とスポーツ心理学との関連を考える（2）	各受講生の研究分野とスポーツ心理学との関連性について、担当者が発表を行い、意見交換を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

すでに実施した授業内容を含む課題を毎回授業中に提示します。このレポート課題に取り組めるよう、それまでの授業内容を復習してから授業に参加してください（30-60分）。

【テキスト（教科書）】

テキストは設定しません。必要に応じて、資料配付・文献紹介を行います。

【参考書】

必要・希望に応じて紹介します。

【成績評価の方法と基準】

- 1) 授業の到達目標と対応した期末レポートが 60%
 - 2) 授業中に実施する課題、プレゼンテーション、グループワーク、意見交換への参加状況が 40%です。
- 欠席・遅刻をした場合は評価が低下します。

【学生の意見等からの気づき】

受講生の意見に鑑みて、受講生の専門領域にスポーツ心理学の知見を活かす方法を提供します。

【学生が準備すべき機器他】

授業内容によって、PC や発表用資料が必要となります。その際は、事前にアナウンスします。

【その他の重要事項】

今後の予定を立てるためにも、初回の授業には必ず出席してください。グループワークを行いますので、協力的な姿勢で授業に参加することを期待します。

【Outline (in English)】

【Course outline】

The aims in this class are to learn the theory and application of sports psychology (psychological approach to sports, exercise, physical activity).

【Learning Objectives】

By the end of the course, students should be able to the followings:

-A. to deepen your understanding of the "mechanism of mind" and to be able to practice psychological support in physical activity, exercise and sport.

-B. clarifying the potential for expansion between A. and your field.

【Learning activities outside of classroom】

Before each class meeting, students will be expected to previous chapter(s) (30-60min/1class).

【Grading Criteria /Policy】

Your overall grade in the class will be decided based on the following

Term-end report: 60%、Short reports、in class contribution: 40%

If you are absent or late for this class, your evaluation will be lowered.

PSY500B6

健康心理特論

林 容市

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

様々な事象、対象について、健康心理的視点から捉え、該当分野における研究の現状を理解する。

【到達目標】

個人の健康観に関する諸要因について理解する。
特に身体活動と関連する心理的要因、および生理的要因と感覚との関係を理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業では、個人や社会における健康に関する基礎的理論・概念を理解した上で、最新の研究結果を踏まえて健康に関する心理的要因を論議する。毎回、主たるテーマを設け、基礎的な情報の提供を受け、それらを踏まえて参考文献を読み、受講者全体で討論した上で、複数回の発表を行う。これらを通じ、研究の視点および方法について視野を広げ、研究活動に資する知識・技術を獲得する。
また、前回の授業で実施した内容や提出された課題に対しては、授業内で全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	オリエンテーション、健康に関する研究の現状の紹介
第2回	健康に対する意識と主観 (1)	健康度評価に関する研究の展開
第3回	健康に対する意識と主観 (2)	クオリティ・オブ・ライフの意味するもの
第4回	健康に対する意識と主観 (3)	健康観や健康行動におけるパラダイムシフト
第5回	様々な対象における健康と心理 (1)	生活習慣病や障害と満足度研究と実際の応用
第6回	様々な対象における健康と心理 (2)	高齢者のサクセスフルエイジングと健康
第7回	様々な対象における健康と心理 (3)	医療者・患者間コミュニケーション、インフォームドコンセント
第8回	様々な対象における健康と心理 (4)	女性における健康と心理
第9回	社会環境の側面からの健康 (1)	地域・ネットワーキングと保健・医療の新しい展開
第10回	社会環境の側面からの健康 (2)	コミュニティにおけるヘルスプロモーションの展開
第11回	健康行動としての身体活動と心理的背景 (1)	心理行動的要因と様々な行動変容モデル
第12回	健康行動としての身体活動と心理的背景 (2)	身体活動時の感覚と生理的狀態
第13回	健康行動としての身体活動と心理的背景 (3)	主観的努力観と身体活動・スポーツ
第14回	健康行動としての身体活動と心理的背景 (4)	運動習慣・健康行動と自己効力感

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業ごとに指示された調査および論文を事前に読む予習を行う。また、プレゼンテーションの担当となった場合には、スライドや発表資料の作成も求める。さらに、毎回の授業内容についてとりまとめ、次回以降の授業内でのディスカッションに備えること。なお、これらの各回の授業に対する準備および復習等の時間は、それぞれ2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

学術雑誌に掲載されている論文を使用し、必要に応じて指示する。その他の資料は適宜授業中に配布する。

【参考書】

田中喜代次、大蔵 倫博（編）、健康運動の支援と実践、金芳堂。

【成績評価の方法と基準】

授業への参画（出席ではない）状況：50%、プレゼンテーション（資料等の評価も含む）：50%

【学生の意見等からの気づき】

2021年度はオンラインでの回が多かったが、履修者が少数であったため充実したディスカッションが実施できたと判断しています。授業の内容としては、知識提供型と成らざるをえませんが、授業のやり方によっては、十分なディスカッションができることが分かりましたので、次年度はうまくフィードバックを加えながら充実した授業にしていきたいと考えています。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 生理心理学、応用健康科学、健康心理学

<研究テーマ> 運動中の生理・心理変化の対応関係を分析し、健康維持、減量などに効果的な身体活動を検討する

<主要研究業績> 林谷市 他、個人の性格特性と減量後の体重維持に関連したセルフエフィカシーとの関係、体力科学 57：197-206, 2008 ほか

【Outline (in English)】

【Course outline】The purpose of this class is to understand the current state of research into account various events and subjects concerned from a health-psychological perspective.

【Learning Objectives】By the end of the course, students should understand various factors related to the individual's view of health. In particular, students will understand the relationship between psychological and physiological factors related to physical activity.

【Learning activities outside of the classroom】Students are required to read the research and papers assigned for each class in advance. Those in charge of presentations must also prepare slides and presentation materials. In addition, students expect to summarize the contents of each class and prepare for discussions in the subsequent classes. The standard time for preparation and review for each of these classes is two hours each.

【Grading Criteria/Policy】Grading will be decided based on the class participation (not attendance) (50%) and the Presentation, including evaluation of materials (50%).

PSY500B6

心理研究法特論

竹島 康博

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

心理学の研究の中で用いられる研究法について、受講者同士で発表し合うことで改めて学び直します。自身の研究分野に縛られず幅広い研究法を学ぶことにより、研究の発想の幅を広げることを目的とします。

【到達目標】

心理学の研究領域でよく用いられる研究法について、受講者自身の研究分野に縛られず幅広く学び直すことにより、自身の研究の幅を柔軟に広げられる思考力、応用力を身に付けることを到達目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

教科書の輪読を行います。毎週、受講者が割り当てられた章について内容をまとめて発表し、それについて全員で議論します。なるべく自分が用いたことのない研究法について発表するようにし、積極的に議論へ参加することを求めます。なお、受講人数等によって授業の内容を一部変更する場合があります。毎週の課題の提出およびフィードバックは、授業中ないし授業支援システムを通して行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業全体の概要説明 受講者の研究テーマや主要な研究法についての発表
第2回	教科書の輪読(1)	第1章（科学と実証）の輪読
第3回	教科書の輪読(2)	第2章（実験と観察）・第3章（実証の手続き）の輪読
第4回	教科書の輪読(3)	第4章（独立変数の操作）の輪読
第5回	教科書の輪読(4)	第5章（従属変数の測定）の輪読
第6回	教科書の輪読(5)	第6章（剰余変数の統制）の輪読
第7回	教科書の輪読(6)	第7章（さまざまな実験法）の輪読
第8回	教科書の輪読(7)	第9章（心理学に特有の問題）の輪読
第9回	教科書の輪読(8)	第10章（調査法）の輪読
第10回	教科書の輪読(9)	第11章（観察法）の輪読
第11回	教科書の輪読(10)	第12章（検査法）の輪読
第12回	教科書の輪読(11)	第13章（面接法）の輪読
第13回	研究法に関する議論	受講者がこれまでの輪読を通して得た気づきについて発表し、全員で議論する
第14回	まとめ	授業の総括と受講者の発表内容についての討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。教科書の割り当てられた箇所の読み込みや資料の作成といった発表の準備を行います。また、授業後は取り上げた研究法について、事項者自身の研究に活用できる可能性を検討する作業を行います。

【テキスト（教科書）】

高野陽太郎・岡隆（編）『心理学研究法[補訂版]』2017 有斐閣アルマ 2,200 円+税

【参考書】

三浦麻子（監著）『なるほど！ 心理学研究法』 2017 北大路書房
 佐藤暢哉・小川洋和 『なるほど！ 心理学実験法』 2017 北大路書房

大竹恵子（編著）『なるほど！ 心理学調査法』 2017 北大路書房
 佐藤寛（編著）『なるほど！ 心理学観察法』 2018 北大路書房
 米山直樹・佐藤寛（編著）『なるほど！ 心理学面接法』 2018 北大路書房

【成績評価の方法と基準】

平常点 50%と、「受講者による発表」の内容 50%で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

知覚心理学, 認知心理学

＜研究テーマ＞

異種感覚間相互作用の生起に影響する諸要因の研究, 視聴覚刺激間の時間処理過程に関する研究

＜主要研究業績＞

Takeshima, Y. (2021). Visual field differences in temporal synchrony processing for audio-visual stimuli. PLoS ONE, 16(12), e0261129.

Takeshima, Y. (2020). Emotional information affects fission illusion induced by audio-visual interactions. Scientific Reports, 10, 1-10.

Takeshima, Y., & Gyoba, J. (2015). Spatial frequency modulates the degree of illusory second flash perception. Multisensory Research, 28, 1-10.

【Outline (in English)】

[Course outline]

This course deals with some topics using various kinds of psychological methods that the instructor use so far.

[Learning objectives]

The goals of this course are to understand the methods of empirical research.

[Learning activities outside of classroom]

Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

[Grading Criteria /Policy]

Grading will be decided based on class contribution (50%) and class presentation (50%).

PSY500B6

応用心理統計Ⅰ

山際 勇一郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本講義は心理統計の理論を学習し、また実践的使用を可能にするスキルを学ぶことを重くとする。すなわち、①多変量解析などの応用的解析方法につながる理論的な基礎事項を再確認する。②jamovi および R を用いてさまざまな解析方法を実習し習得する。

【到達目標】

研究に心理統計が使用できるようになること。

使用できるというのは、①研究計画時に適切な方法を選択しながら、計画を立てることができること、②収集したデータを適切に分析処理できること、③結果を論文に記載できること、④他の研究論文を適切に読めること、の4点をいう。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

心理統計解析の基礎理論の再確認および応用的実践的手法を R を用いて実習する。

一般的な進め方：各テーマについて数理的な視点からの解説を行う。次に、受講生が R を用いて、その内容について実践的な統計処理などを解説する。講義＋解析実習である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	基本的な統計的検定	基礎知識の確認 どの知識の確認
第2回	統計解析の基礎①	ベクトル, 行列, 行列式, 固有値 問題など
第3回	統計解析の基礎②	jamovi と R の基本操作
第4回	統計解析の基礎③	最大, 最小問題と微分方程式
第5回	統計解析の基礎④	統計関数と分布
第6回	平均の比較①	分散分析
第7回	平均の比較②	多重比較と事後検定
第8回	平均の比較③	3 要因以上の分散分析
第9回	回帰分析	回帰分析と重回帰分析
第10回	カテゴリカルデータの解析①	カイ二乗検定など基礎的な検定方法
第11回	カテゴリカルデータの解析②	対数線形モデル
第12回	カテゴリカルデータの解析③	二項ロジスティック回帰分析
第13回	カテゴリカルデータの解析④	多項ロジスティック回帰分析
第14回	最新のトピックについて	マルチラベル分析, 階層的回帰分析など

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
 シラバスを確認し、各回の統計解析に関する基礎的な知識を確認しておくこと。

【テキスト（教科書）】

なし

【参考書】

読んでわかる心理統計法 服部・山際 サイエンス社 2019 年
 その他については、各テーマごとに紹介する。
 ただし、基礎数学（線形代数）に関しては各自が理解しやすいと思う参考書等を補助資料として用意すること。

【成績評価の方法と基準】

「配分 (%)」：授業での発表と課題 (50 %)、授業への取り組み (50%)
「評価基準」：基本的な知識が習得されていること、jamovi や R を用いてデータを適切に解析できること

【学生の意見等からの気づき】

改善アンケートからの参考になる記述は特になし。
授業において各テーマの終了後ではなく短い間隔で発表を行う。
学生の自主的な学習に期待できないので、課題を多くする必要がある。

【学生が準備すべき機器他】

個人用パソコンを用意すること

【その他の重要事項】

発表用のレジメとシミュレーションデータは前日までに提出し、また受講生全員に配布すること

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>社会心理学
<研究テーマ>社会的行動に影響を及ぼす人間関係と文化の影響
<主要研究業績>
服部環・山際勇一郎 2019 心理統計法 サイエンス社 pp.1-299.
Yamagiwa, Y., Roh, Y-J, & Hyun, J-H. 2019 The relationship between Ambivalent Sexism and Attitudes toward Close Relationships: Cross-cultural Comparison in Korean and Japanese Students. 2019 Annual Conference of the Korean Psychological Association. Seoul, South Korea. JPA131.
服部環・山際勇一郎 2019 カイ 2 乗検定および事前検定を伴う分散分析の棄却率 日本応用心理学会第 86 回大会発表論文集 64
山際勇一郎 2018 父親の養育不安についてーテキスト型データの解析からー 首都大学東京人文学報 514-4,11-16.
山際勇一郎・小湊真衣・高向山・梅崎高・玄正煥 2017 保護者と保育者による子どもの発達評定の差異に関する文化比較 日本教育心理学会第 59 回総会 (PA01-83)
Yamagiwa, Y., Roh, Y-J, & Hyun, J-H. 2018 Cross-cultural study on ambivalent sexism between Korean and Japanese university students. 2018 Annual Conference of the Korean Psychological Association. Seoul, South Korea.

【Outline (in English)】

This course will help you to acquire the advanced data-analysis skill for psychological research by using jamovi and R.
Specifically, (1) it is possible to make a plan while selecting an appropriate method at the time of research planning, (2) it is possible to analyze and process the collected data appropriately, and (3) it is possible to describe the results in a dissertation,(4)Appropriate reading of research papers.
The standard preparatory study and review time for this class is 2 hours each.
Check the syllabus and confirm the basic knowledge about each statistical analysis.
"Distribution (%)": Presentations and assignments in class (50%), Initiatives in class (50%)
"Evaluation criteria": Basic knowledge is acquired, and data can be analyzed appropriately using jamovi and R.

PSY500B6

応用心理統計Ⅱ

山際 勇一郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本講義は心理統計の理論を学習し、また実践的使用を可能にするスキルを学ぶことを重くとする。すなわち①多変量解析などの応用的解析方法を学ぶ。
② jamovi および R を用いてさまざまな解析方法を実習し習得する。

【到達目標】

研究に心理統計が使用できるようになること。
使用できるというのは、①研究計画時に適切な方法を選択しながら、計画を立てることができること、②収集したデータを適切に分析処理できること、③結果を論文に記載できること、④他の研究論文を適切に読めること、の4点をいう。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

心理統計解析の基礎理論の再確認および応用的実践的手法を R を用いて実習する。
一般的な進め方：各テーマについて数理的な視点からの解説を行う。次に、受講生が R を用いて、その内容などを解説する。課題のフィードバックは、学習支援システムなどを用いて行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	量的尺度の関連と構造	①主成分分析の分析
第 2 回	量的尺度の関連と構造	②因子分析の分析
第 3 回	量的尺度の関連と構造	③判別分析の分析
第 4 回	量的尺度の関連と構造	④クラスター分析の分析
第 5 回	量的尺度の関連と構造	⑤多次元尺度構成法の分析
第 6 回	名義尺度の関連と構造	⑥単純コレスポネンス分析の分析
第 7 回	名義尺度の関連と構造	⑦多重コレスポネンス分析の分析
第 8 回	共分散構造分析	①理論的基礎
第 9 回	共分散構造分析	②確認的因子分析
第 10 回	共分散構造分析	③パス解析
第 11 回	共分散構造分析	④多母集団因子分析
第 12 回	共分散構造分析	⑤平均共分散構造分析
第 13 回	その他の解析法	最新のトピックの紹介
第 14 回	その他の解析法	最新のトピックの紹介

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
春学期の学習内容の再確認を行っておくこと。
また、各回の内容の復習は必ず行うこと。

【テキスト（教科書）】

なし。各テーマごとに発表者がレジメを配布する。

【参考書】

R による多変量解析入門 川端一光他 オーム社
R による教育データ分析入門 小林雄一郎他 オーム社など

【成績評価の方法と基準】

「配分 (%)」：授業での発表と課題 (50 %), 授業への取り組み (50%)
「評価基準」：基本的な知識が習得されていること, jamovi や R を用いてデータを適切に解析できること

【学生の意見等からの気づき】

改善アンケートからの参考になる記述は特になし。
授業において各テーマの終了後ではなく短い間隔で発表を行う。
学生の自主的な学習に期待できないので、課題を多くするなどが必要である。

【学生が準備すべき機器他】

個人用パソコンを用意すること。

【その他の重要事項】

発表用のレジメとシミュレーションデータは前日までに提出し、受講者全員に配布すること

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>社会心理学
<研究テーマ>社会的行動に影響を及ぼす人間関係と文化の影響

【Outline (in English)】

This course will help you to acquire the advanced data-analysis skill for psychological research by using jamovi & R. Specifically, (1) it is possible to make a plan while selecting an appropriate method at the time of research planning, (2) it is possible to analyze and process the collected data appropriately, and (3) it is possible to describe the results in a dissertation,(4)Appropriate reading of research papers. The standard preparatory study and review time for this class is 2 hours each. Check the syllabus and confirm the basic knowledge about each statistical analysis.
"Distribution (%)": Presentations and assignments in class (50%), Initiatives in class (50%)
"Evaluation criteria": Basic knowledge is acquired, and data can be analyzed appropriately using jamovi and R.

PSY700B6

心理学特殊研究 I

島宗 理

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

社会的・個人的に重要な行動問題の解決策を科学的に発見、開発する方法論として、行動分析学の研究法を学びます。受講生は、それぞれ自分の問題意識から研究テーマを選び、標的となる行動を決め、その制御変数を実験によって見つけながら、この方法論を習得します。博士論文を書き上げ、発表するまでを支援しますが、その過程で、修了後、それぞれの仕事に役立つ技術を習得することを目指します。

【到達目標】

この授業で主に目指すのは以下の知識や技術の習得です。

- (1) 標的行動を具体化し、測定方法を決めること、
- (2) 標的行動の制御変数に関する先行研究を調べること、
- (3) 制御変数の候補を複数推定し、その中から実験で検討する変数を選び、実験計画を立案すること、
- (4) 実験計画書を作成し、発表すること、
- (5) 実験装置や測定システムなどを準備し、予備実験からそれを改善すること、
- (6) 本実験を実施し、データを分析すること、
- (7) 実験結果をまとめて図表や文章、口頭発表などでコミュニケーションすること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講生各自の博論の進捗にあわせ、毎週、課題を出します。授業はゼミ形式で、課題の発表と討論を中心に進めます。課題へのフィードバックは授業および掲示板で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	授業内容と方法、約束事を説明します。実験計画のプレゼン方法、注意すべきこと、研究倫理（倫理委員会に提出する書類など）について解説します。
第 2 回	実験計画の発表 1	独立変数と従属変数、変数の統制、実験計画法、行動の観察と記録、仮説の立案や変数の探索などについて、博論実験の計画をしながら討論します。
第 3 回	実験計画の発表 2	博論の研究テーマについて討論し、予備実験の準備を進め、報告します。
第 4 回	実験計画の発表 3	博論の予備実験の準備を進めます。刺激や装置、教示や記録用紙など、具体的な材料を持ち寄り、確認と質疑応答をします。
第 5 回	予備実験の報告 1	予備実験の結果を報告し、データ視覚化と分析、傾向や変動の判断、データに基づいた改善（本実験の計画）などについて討論します。

- 第 6 回 予備実験の報告 2 予備実験の結果をまとめ、プレゼンします。データから「わかったこと」「わからなかったこと」をわかりやすく、見て伝わる資料を作成できているか、相手にわかるように話しているかどうかを評価し、フィードバックします。
- 第 7 回 予備実験の報告 3 次の予備実験あるいは本実験の実験計画についてプレゼンし、話し合います。
- 第 8 回 先行研究をまとめる 1 先行研究や参考書、統計資料などを読み、現在の研究の流れや社会のニーズの中に自分の実験を位置づけします。
- 第 9 回 先行研究をまとめる 2 先行研究の中に本実験をどのように位置づけるかを話し合い、討論します。
- 第 10 回 本実験の準備 本実験の準備を進め、予備実験から改訂した刺激や装置、教示や記録用紙など、具体的な材料を持ち寄り、確認と質疑応答をします。
- 第 11 回 本実験の報告 1 本実験の結果を報告し、データ視覚化と分析、傾向や変動の判断、データに基づいた改善（次の実験計画）などについて討論します。
- 第 12 回 本実験の報告 2 本実験の結果をまとめ、プレゼンします。データから「わかったこと」「わからなかったこと」をわかりやすく、見て伝わる資料を作成できているか、相手にわかるように話しているかどうかを評価し、フィードバックします。
- 第 13 回 次の実験の計画 次の実験計画についてプレゼンし、話し合います。
- 第 14 回 まとめ 自分の研究のセールスポイントを抜き出し、これを伝える題目を考えて発表します。
博論のストーリーを端的に伝える練習をします。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎週、課題をだしますので、各自取り組み、提出して下さい（以下に一例）。

○興味がある実験について標的行動（従属変数）、介入方法（独立変数）、実験計画法の3つを考え、提案する資料を作成する。

○本授業の準備・復習時間は、それぞれ平均4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

島宗 理 (2019). ワードマップ 応用行動分析学 新曜社

【参考書】

以下、シングルケースデザイン法に関する参考書です。

○ Barlow, D. H., & Hersen, M. (1984). Single case experimental designs: Strategies for studying behavior change. Pergamon. (バーロー, D. H.・ハーセン, M. 高木俊一郎・佐久間徹 (監訳) 一事例の実験デザイン ―ケーススタディの基本と応用― 二瓶社)

○ Cooper, J. C., Heron, T. E., & Heward, W. L. (2007). Applied Behavior Analysis. Pearson Education. (クーパー, J. C., ヘロン, T. E., & ヒューワード, W. L. 中野良顯 (訳) (2013) 応用行動分析学 明石書店)

【成績評価の方法と基準】

○学期初めに受講生が計画し、承認した研究計画 to-do リスト上の達成率（最大 100%）にもとづいて成績を評価します。

○欠席が5回以上になると自動的にE評価になります。

【学生の意見等からの気づき】

(2021 年度は未開講でした)

【その他の重要事項】

オフィスアワーは春学期は金曜日の4限、秋学期は火曜日の2限、場所は研究室（富士見坂校舎 6F9 号室）です。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 行動分析学

＜研究テーマ＞

組織行動マネジメント、広告・消費者行動、教材開発

＜主要研究業績＞

① 島宗 理 (2019). ワードマップ 応用行動分析学 新曜社

② 島宗 理 (2015). リーダーのための行動分析学入門 日本実業出版社

③ 島宗 理・若松克則 (2016). 会計事務所で働くパート従業員を対象とした参加型マネジメント 行動分析学研究, 31, 2-14.

【Outline (in English)】

【Course outline】

The purpose of this course is to learn and master research methods in behavior analysis, including functional analyses of behavior, systematic observation and recording procedures, single-case designs, and visual inspection of time series data to evaluate effectiveness of an intervention. Students will select their own research topic, conduct a literature review, develop a research proposal, and run experiments.

【Learning Objectives】

At the end of the course, students should be able to do the followings:

1) identify behavioral objectives, 2) design and conduct experiments, 3) analyze data, and 4) present research outcomes.

【Learning activities outside of classroom】

Students are expected to complete weekly assignments on research projects (average of 4 hours).

【Grading Criteria /Policy】

Final grade in this class will be decided based on task completion (100%).

PSY700B6

心理学特殊研究Ⅱ

島宗 理

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

社会的・個人的に重要な行動問題の解決策を科学的に発見、開発する方法論として、行動分析学の研究法を学びます。この授業では、博士論文の実験計画書や研究論文を書き上げ、発表するまでを支援しますが、その過程で、論理的な文章作成や根拠に基づいた提案、プレゼン、討論の練習をしていきます。

【到達目標】

この授業で主に目指すのは以下の知識や技術の習得です。

- 1) 自分の実験を社会的、学術的な文脈に位置づけること、
- 2) 実験から得られたデータを分析し、わかったこと、
- 3) わからなかったことを整理し、わからなかったことはどうすればわかるようになるかを実験計画として提案すること、
- 4) わかったことを数量化し、図表にまとめ、読み手や聞き手にわかりやすいように発表すること、
- 5) 論理的に一貫した、読みやすい文章を書くこと。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

毎週、受講生各自の博論研究の進捗にあわせた課題を出します。授業はゼミ形式で、課題の発表と討論を中心に進めます。課題へのフィードバックは授業および掲示板で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	授業内容と方法、約束事を説明します。 博論実験の内容を 1 時間でプレゼンする練習をします。
第 2 回	論文を書く： アウトラインを書く	アウトラインを書いてから本文を書く方法を解説します。「方法」の章を使って練習をします。
第 3 回	論文を書く： データの視覚的な提示	実験の中心的なデータを選び、それを視覚的に伝える図を描きます。独立変数と従属変数の関係性がわかりやすく提示できているかどうか、「手引き」やゼミの「チェックリスト」にそっているかどうかを確認します。
第 4 回	論文を書く： 推敲する (1)	方法の章の完成版を提出し、チェックリストに基づいて推敲できるように書かれているかどうか、読み手の立場から自分の論文を読み直して推敲する練習をします。
第 5 回	論文を書く： 事実を書く	アウトラインから書く方法を結果の章を使って練習します。読み手に自分の研究のセールスポイントをわかりやすく伝えるために、順序や論理展開を工夫する練習です。

第 6 回 論文を書く：
先行研究をまとめる
先行研究をまとめて表にし、「手引き」に即した作表方法を学びます。先行研究を紹介する段落を書き、文献引用の作法を練習します。

第 7 回 論文を書く：
研究を位置づけるア
ウトラインを書く
第 6 回でまとめた先行研究の展望を活かし、また春学期に作成したストーリーを振り返り、序論のアウトラインを作成します。パラグラフ・ライティング法を解説し、練習します。

第 8 回 論文を書く：
推敲する (2)
第 5 回で作成したアウトラインに肉付けをして結果の章をまとめます。データの分析や統計が適切に、かつ充分に行われているかどうかを確認します。

第 9 回 論文を書く：
推敲する (3)
パラグラフ・ライティング法を使って序論を完成させます。チェックリストを使って推敲する練習を続けます。

第 10 回 論文を書く：
執筆ルールに基づい
て校正する
引用文献一覧を作成します。本文と見合わせて、引用の方法が適切かどうかを確認します。

第 11 回 論文を書く：
推敲する (4)
研究論文の初稿を用い、推敲の練習をします。また、自分で書いた文章を自分で推敲するのは困難であることを自覚するために、他の受講生の論文を校正する練習もします。

第 12 回 論文を投稿する：
学術雑誌への投稿手
順
論文を学術雑誌へ投稿する手順やその後のやりとりについて解説します。

第 13 回 研究計画 (1)
次年度に行う実験の計画を発表し、討論します。

第 14 回 研究計画 (2)
次年度に行う実験の計画を発表し、討論します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎週、課題をだしますので、各自取り組み、提出して下さい（以下に一例）。

○日本心理学会の『執筆・投稿の手引き』およびゼミの『論文執筆チェックリスト』を用いて「結果」の章を推敲し、提出する。
○本授業の準備・復習時間は、それぞれ平均 4 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

テキストはありませんが、研究テーマや課題に応じて、適宜、資料を配付し、参考文献などを紹介します。

【参考書】

以下、パラグラフライティング法に関する参考書です。
○倉島保美 論理が伝わる世界標準の「書く技術」ブルーバックス
○野田直人 小論文・レポートの書き方—パラグラフ・ライティングとアウトラインを鍛える演習帳— 有限会社人の森

【成績評価の方法と基準】

○学期初めに受講生が計画し、承認した研究計画 to-do リスト上の達成率（最大 100%）にもとづいて成績を評価します。
○欠席が 5 回以上になると自動的に E 評価になります。

【学生の意見等からの気づき】

（2021 年度は未開講でした）

【その他の重要事項】

オフィスアワーは春学期は金曜日の 4 限、秋学期は火曜日の 2 限、場所は研究室（富士見坂校舎 6F9 号室）です。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 行動分析学

<研究テーマ>

組織行動マネジメント、広告・消費者行動、教材開発

<主要研究業績>

① 島宗 理 (2019). ワードマップ 応用行動分析学
新曜社

② 島宗 理 (2015). リーダーのための行動分析学入門 日本実業出版社

③ 鳥宗 理・若松克則 (2016). 会計事務所で働くパート従業員を対象とした参加型マネジメント 行動分析学研究, 31, 2-14.

【Outline (in English)】

【Course outline】

The purpose of this course is to master basic principles, procedures, and research methods pertaining to applying behavior analysis in schools or in other educational or therapeutic settings. Focus will be placed on knowledge and skills in applying basic concepts of learning to interpret behavioral phenomena in real-world educational or societal settings.

【Learning Objectives】

At the end of the course, students should be able to do the followings:

1) identify behavioral objectives, 2) design and conduct experiments, 3) analyze data, and 4) present research outcomes.

【Learning activities outside of classroom】

Students are expected to complete weekly assignments on research projects (average of 4 hours).

【Grading Criteria /Policy】

Final grade in this class will be decided based on task completion (100%).

PSY700B6

心理学特殊研究 I

藤田 哲也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

主として博士後期課程の院生が、各自で研究を遂行できるようになるために必要な諸々の力を向上させることが授業の目的である。そのために必要な研究活動を自分自身で計画し、実行し、成果を自己評価して、次の計画に活かすという PDCA サイクルを体得する。

【到達目標】

半期の授業が終了した時点で、以下の各要素を身につけていることが、授業の具体的な到達目標となる。

- 的確に自分自身の研究能力を現状分析できる。
- 博士後期課程全体の目標、各年度での中期目標、セメスター単位での小目標を合理的に立案できる。
- 上記 a, b の内容をふまえて、具体的な行動計画および達成指標を考案できる。
- 上記 a, b, c の内容をふまえて、実際に行動する。
- 上記 a, b, c, d の内容をふまえて、セメスター単位での到達度を適正に自己評価できる。
- 上記 e の自己評価を、次の目標設定に活かすことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

まず最初に、博士後期課程を通じての自分自身の目標を、複数の観点から立てる。次に、その全体目標を達成するための中目標として、当該学年での目標を立てる。さらに、小目標として当該学期（セメスター）での目標を立てる。何をどのようにすれば各レベルの目標が達成できるのかを考えること自体が課題である。

発表は 3 種類の趣旨のものになる。1. 現状分析と目標設定、2. 目標を達成するために各自が設定した課題（2 回）、3. 目標達成度に対する自己評価と今後の改善策。

授業ではそれぞれの発表に対して全員で意見交換をして、自己評価基準の適正化を図る。

各課題に対する評価は、学習支援システムを通じてフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業の概要および各自課題の説明
第 2 回	目標設定の発表	学位論文作成に向け、現状分析を踏まえた春学期の各自の目標
第 3 回	各自課題 1 - 1	春学期の目標達成に向けて各自が設定した課題に関する発表の 1 巡目の第 1 回
第 4 回	各自課題 1 - 2	春学期の目標達成に向けて各自が設定した課題に関する発表の 1 巡目の第 2 回
第 5 回	各自課題 1 - 3	春学期の目標達成に向けて各自が設定した課題に関する発表の 1 巡目の第 3 回
第 6 回	中間振り返り 1	春学期の目標達成に向けて各自が設定した 1 巡目の課題に関する振り返り
第 7 回	各自課題 2 - 1	春学期の目標達成に向けて各自が設定した課題に関する発表の 2 巡目の第 1 回

第 8 回	各自課題 2 - 2	春学期の目標達成に向けて各自が設定した課題に関する発表の 2 巡目の第 2 回
第 9 回	各自課題 2 - 3	春学期の目標達成に向けて各自が設定した課題に関する発表の 2 巡目の第 3 回
第 10 回	中間振り返り 2	春学期の目標達成に向けて各自が設定した 2 巡目の課題に関する振り返り
第 11 回	各自課題 3 - 1	春学期の目標達成に向けて各自が設定した課題に関する発表の 3 巡目の第 1 回
第 12 回	各自課題 3 - 2	春学期の目標達成に向けて各自が設定した課題に関する発表の 3 巡目の第 2 回
第 13 回	各自課題 3 - 3	春学期の目標達成に向けて各自が設定した課題に関する発表の 3 巡目の第 3 回
第 14 回	目標達成度の自己評価	達成指標に基づいた目標達成度の自己評価と改善案の発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とする。より具体的には、3 種類の発表について以下の通りに授業前の準備と授業後の復習をすることを求める。

「現状分析と目標設定」については、発表後に授業時間内の議論を踏まえて修正を加え、提出する。

「各自課題」は、各自が目標を達成するために発表課題を設定し、発表の準備をするとともに、発表後に課題の修正を行う。

「目標達成度に対する自己評価と今後の改善策」は事前の発表準備に加え、授業後に修正版を作成し提出する。

【テキスト（教科書）】

教科書は指定しない。授業は配付プリントに沿って行う。

【参考書】

藤田哲也（編）（2006）. 大学基礎講座 改増版－充実した大学生活をおくるために－ 北大路書房

そのほか、各回の授業内容に関連した書籍や論文を授業内で紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点 40 %…授業へ出席し、討論に参加していること自体を評価対象とする。

各自課題 30 %…発表の仕方（プレゼン技術）、発表の内容、発表資料の質を評価対象とする。

目標設定発表 20 %…発表の仕方、目標設定の水準および適切さ、目標の実現可能性、現状分析の適切さを評価対象とする。

自己評価発表 10 %…発表の仕方、期末の自己評価の妥当性を評価対象とする。

【学生の意見等からの気づき】

博士後期課程向け授業のため、アンケートは未実施でした。

【その他の重要事項】

授業の運営方針や教育目標について説明を行うとともに、発表の割り当てを行うので、受講希望者は初回の授業に必ず出席すること。心理学専攻以外の所属で受講を希望する者は、必ず事前に相談すること。

この授業は、複数年度にわたって重複履修することが可能である。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

認知心理学、教育心理学

<研究テーマ>

単なる経験則に終わらない、研究技能の獲得と研究成果の伝達を目指す。

<主要研究業績>

藤田哲也（編）（2006）. 大学基礎講座 改増版－充実した大学生活をおくるために－ 北大路書房

藤田哲也（2006）. 心理学を活かした教育実践のために 井上智義（編）視聴覚メディアと教育方法 ver.2 認知心理学とコンピュータ科学の応用実践のために 8 章 北大路書房, pp.135-155.

藤田哲也（2010）. 記憶過程と学習 三宮真智子（編）教育心理学 2 章 学文社, pp.22-37

【Outline (in English)】

[Course outline]

The goal of this class is to improve the various powers necessary for graduate students of Doctoral Course to be able to carry out their own research. For that purpose, students will acquire the PDCA cycle to plan and execute research activities, self-evaluate results, and make use of it in the next plan.

[Learning Objectives]

By the end of the course, students should be able to do the following:

a.Students can accurately analyze their own research abilities.

b.Students can reasonably formulate goals for the entire doctoral course, mid-term goals for each year, and small goals for each semester.

c.Students can devise concrete action plans and achievement indicators based on the contents of a and b above.

d.Students actually act based on the contents of a, b, and c above.

e.Students can properly self-evaluate their achievement in semester units based on the contents of a, b, c, and d above.

f.Students can utilize the self-evaluation of e above to set the next goal.

[Learning activities outside of classroom]

The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.

[Grading Criteria /Policy]

The overall grade of the class is determined based on the following.

In-class contribution 40%, tasks set by each student 30%, presentation about goal setting 20%, presentation about self-evaluation 10%.

PSY700B6

心理学特殊研究Ⅱ

藤田 哲也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

主として博士後期課程の院生が、各自で研究を遂行できるようにするために必要な諸々の力を向上させることが授業の目的である。年度当初（春学期）に立てた各年度の中期目標を達成するために、秋学期の小目標を立て、具体的な研究活動を計画、実行し、成果を自己評価して、次の年度の計画に活かすという PDCA サイクルを体得する。なお、自分の研究領域の先行研究と自分自身の研究の関係を明確にするために、レビューを行うことを課題に含める。

【到達目標】

春学期に引き続き、秋学期の授業が終了した時点で、以下の各要素を身に付けていることが、授業の具体的な到達目標となる。

- 的確に自分自身の研究能力を現状分析できる。
- 博士後期課程全体の目標、各年度での中期目標、セメスター単位での小目標を合理的に立案できる。
- 上記 a、b の内容をふまえて、具体的な行動計画および達成指標を考案できる。
- 上記 a、b、c の内容をふまえて、実際に行動する。
- 上記 a、b、c、d の内容をふまえて、自分の研究を先行研究の中に適切に位置づけることができる。
- 上記 a、b、c、d、e の内容をふまえて、セメスター単位での到達度を適正に自己評価できる。
- 上記 f の自己評価を、次の目標設定に活かすことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

春学期の「心理学特殊研究Ⅰ」において、博士後期課程を通じての自分自身の目標を、複数の観点から立てた。次にその全体目標を達成するための中目標として、当該学年での目標を立てた。春学期の成果をふまえて、新たな小目標として当該学期（セメスター）での目標を立てる。何をどのようにすれば各レベルの目標が達成できるのかを考えること自体が課題である。

発表は 4 種類の趣旨のものになる。1. 現状分析と目標設定、2. 目標を達成するために各自が設定した課題、3. 自分の研究領域における先行研究の概観（レビュー）、4. 目標達成度に対する自己評価と今後の改善策。

授業ではそれぞれの発表に対して全員で意見交換をして、自己評価基準の適正化を図る。

各課題に対する評価は、学習支援システムを通じてフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業の概要および各自課題、レビュー発表の説明
第 2 回	目標設定の発表	学位論文作成に向け、現状分析を踏まえた秋学期の各自の目標
第 3 回	各自課題 1 - 1	秋学期の目標達成に向けて各自が設定した課題に関する発表の 1 巡目の第 1 回
第 4 回	各自課題 1 - 2	秋学期の目標達成に向けて各自が設定した課題に関する発表の 1 巡目の第 2 回
第 5 回	各自課題 1 - 3	秋学期の目標達成に向けて各自が設定した課題に関する発表の 1 巡目の第 3 回

第 6 回	中間振り返り 1	秋学期の目標達成に向けて各自が設定した 1 巡目の課題に関する振り返り
第 7 回	各自課題 2 - 1	秋学期の目標達成に向けて各自が設定した課題に関する発表の 2 巡目の第 1 回
第 8 回	各自課題 2 - 2	秋学期の目標達成に向けて各自が設定した課題に関する発表の 2 巡目の第 2 回
第 9 回	各自課題 2 - 3	秋学期の目標達成に向けて各自が設定した課題に関する発表の 2 巡目の第 3 回
第 10 回	中間振り返り 2	秋学期の目標達成に向けて各自が設定した 2 巡目の課題に関する振り返り
第 11 回	レビュー発表 1	各自の研究領域に関するレビュー発表の第 1 回
第 12 回	レビュー発表 2	各自の研究領域に関するレビュー発表の第 2 回
第 13 回	レビュー発表 3	各自の研究領域に関するレビュー発表の第 3 回
第 14 回	目標達成度の自己評価	達成指標に基づいた目標達成度の自己評価と改善案の発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とする。より具体的には、4 種類の発表について以下の通りに授業前の準備と授業後の復習をすることを求める。

「現状分析と目標設定」については、発表後に授業時間内の議論を踏まえて修正を加え、提出する。

「各自課題（1、2）」は、各自が目標を達成するために発表課題を設定し、発表の準備をするとともに、発表後に課題の修正を行う。

「レビュー発表」では、先行研究論文を多数読み、独自の視点から問題意識を構築し、発表の準備をするとともに、発表後にレビューの修正を行う。

「目標達成度に対する自己評価と今後の改善策」は事前の発表準備に加え、授業後に修正版を作成し提出する。

【テキスト（教科書）】

教科書は指定しない。授業は配付プリントに沿って行う。

【参考書】

藤田哲也(編)(2006). 大学基礎講座 改増版－充実した大学生活をおくために－ 北大路書房

そのほか、各回の授業内容に関連した書籍や論文を授業内で紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点 40 %…授業へ出席し、討論に参加していること自体を評価対象とする。

各自課題とレビュー発表 30 %…発表の仕方（プレゼン技術）、発表の内容、発表資料の質を評価対象とする。

目標設定発表 20 %…発表の仕方、目標設定の水準および適切さ、目標の実現可能性、現状分析の適切さを評価対象とする。

自己評価発表 10 %…発表の仕方、期末の自己評価の妥当性を評価対象とする。

【学生の意見等からの気づき】

博士後期課程向け授業のため、アンケートは未実施でした。

【その他の重要事項】

授業の運営方針や教育目標について説明を行うとともに、発表の割り当てを行うので、受講希望者は初回の授業に必ず出席すること。心理学専攻以外の所属で受講を希望する者は、必ず事前に相談すること。

この授業は、複数年度にわたって重複履修することが可能である。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

認知心理学、教育心理学

<研究テーマ>

単なる経験則に終わらない、研究技能の獲得と研究成果の伝達を目指す。

<主要研究業績>

藤田哲也（編）（2006）. 大学基礎講座 改増版－充実した大学生活をおくるために－ 北大路書房
 藤田哲也（2006）. 心理学を活かした教育実践のために 井上智義（編）視聴覚メディアと教育方法 ver.2 認知心理学とコンピュータ科学の応用実践のために 8章 北大路書房, pp.135-155.
 藤田哲也（2010）. 記憶過程と学習 三宮真智子（編）教育心理学 2章 学文社, pp.22-37

【Outline (in English)】

【Course outline】

The objective of this class is to improve the various abilities necessary for graduate students of Doctoral Course to be able to carry out research. In order to achieve the middle-term goals of each fiscal year established at the beginning of the spring semester, students set small goals for the fall semester and acquire the PDCA cycle on research activities. In order to clarify the relationship between the previous research and the student's own research, students review the preceding research.

【Learning Objectives】

By the end of the course, students should be able to do the following:

- Students can accurately analyze their own research abilities.
- Students can reasonably formulate overall goals for the doctoral program, mid-term goals for each year, and small goals for each semester.
- Students can devise concrete action plans and achievement indicators based on the contents of a and b above.
- Students actually act based on the contents of a, b, and c above.
- Students can appropriately position their research in the previous research based on the contents of a, b, c, and d above.
- Students can properly self-evaluate their achievement in semester units based on the contents of a, b, c, d, and e above.
- Students can utilize the self-evaluation of f above for the next goal setting.

【Learning activities outside of classroom】

The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.

【Grading Criteria /Policy】

The overall grade of the class is determined based on the following.

In-class contribution 40%, review presentation and tasks set by each student 30%, presentation about goal setting 20%, presentation about self-evaluation 10%.

PSY700B6

心理学特殊研究 I

高橋 敏治

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

生理心理学の関連論文の抄読と、それをもとに自分の研究成果の学会発表・論文作成の方法を学び、その過程を繰り返しながら博士論文の成果としてまとめます。特に生理心理学の手技・操作に精通し、必要なデータを採取し、解析ができるようにします。

【到達目標】

1. 生理心理学手法を駆使し、適切なデータ解析・図表の説明・考察などを通して関係する学会への発表、および論文投稿を行います。
2. 特に学会発表の場合は、エントリーから実際の発表までの過程やスケジュールの調整などを学びます。
3. 論文作成の場合は、投稿誌の選び方、投稿雑誌へ調整、査読への返し方などを学びます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習のため、発表を繰り返し行い、発表時のコメントなどについて自ら調べ、リアクションペーパーとしてまとめ、提出してもらいます。授業時間内に、必ず質疑応答の時間を設け、質疑応答や提出されたリアクションペーパーから生じた良いコメントは授業内で紹介し、さらなる議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	生理心理学手法の習熟程度の把握や授業内容や範囲の希望をすり合わせます。
第2回	春学期の学会発表の検討	発表可能な学会の検索、学会スケジュール、準備すべきものを確認します。
第3回	先行研究の抄読会（1） 日本語論文を中心に	自分の研究に関係の深い論文・成書の抄読します。 パワーポイントで発表原稿を作成します。 先行研究の「問題点提起」に焦点を当てまとめます。
第4回	先行研究の抄読会（2） 日本語論文を中心に	自分の研究に関わり合いの深い論文・成書を抄読します。 前回の抄読で得た成果をどのように取り入れるかを検討します。 パワーポイントで発表原稿を作成します。 先行研究の「対象・方法」に焦点を当てまとめます。
第5回	先行研究の抄読会（3） 日本語論文を中心に	自分の研究に関係の深い論文・成書を抄読します。 前回の抄読で得た成果をどのように取り入れるかを検討します。 パワーポイントで発表原稿を作成します。 先行研究の「分析」に焦点を当てまとめます。

- 第 6 回 先行研究の抄読会（4） 学会発表研究に関係の深い論文・日本語論文を中心に
成書を抄読します。
前回の抄読で得た成果をどのように取り入れるかを検討します。
パワーポイントで発表原稿を作成します。
先行研究の「図」「表」に焦点を当てまとめます。
- 第 7 回 先行研究の抄読会（5） 学会発表研究に関係の深い論文・日本語論文を中心に
成書を抄読します。
前回の抄読で得た成果をどのように取り入れるかを検討します。
パワーポイントで発表原稿を作成します。
先行研究の「図」「表」に焦点を当てまとめます。
- 第 8 回 先行研究の抄読会（6） 学会発表研究に関係の深い論文・日本語論文を中心に
成書を抄読します。
疑問点や問題点を検討します。
パワーポイントで発表原稿を作成します。
先行研究の「文献」の書き方に焦点を当てまとめます。
- 第 9 回 学会発表の準備（1） 日本語での発表を中心に
学会発表への準備をします。
抄録の作成のためのデータ解析を行います。
抄録のエントリー時に必要な情報の確認します。
学会発表研究に関係の深い論文・成書のまとめ、発表原稿をパワーポイントを用い作成します。
- 第 10 回 学会発表の準備（2） 学会発表研究に関係の深い論文・日本語での発表を中心に
成書のまとめ、発表原稿をパワーポイントを用い作成します。
- 第 11 回 学会発表の準備（3） 学会発表研究に関係の深い論文・日本語での発表を中心に
成書のまとめ、発表原稿をパワーポイントを用い作成します。
発表時間や発表の仕方に合わせて練習します。発表がポスターの場合は、ポスター作製の操作や手順を習います。
- 第 12 回 論文の作成（1） 日本語論文を中心に
今までの抄読会や学会発表の成果を通して論文にまとめます。
投稿する論文を言語、難易度などを考慮し雑誌を選定します。
雑誌の投稿要領を検討します。
- 第 13 回 論文の作成（2） 日本語論文を中心に
投稿論文に関係の深い論文・成書を抄読します。投稿原稿を作成する上での疑問点や問題点を検討します。先行研究の「文献」に焦点を当てまとめます。
- 第 14 回 統括・まとめ
レポート課題の作成し精査します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 第 1 回：レポート課題として文献を英文・日本語論文としてリスト化
第 2 回：レポート課題として生理心理学・睡眠関係の学会をリスト化
文献を抄読しパワーポイントにまとめ、発表原稿準備
第 3 回～7 回：文献を抄読しパワーポイントにまとめ、発表原稿準備
（それぞれ「対象・方法」「図」「表」「考察」「文献」次回の授業で焦点を当てる項目を綿密に準備）
第 8 回～10 回：文献を抄読しパワーポイントにまとめ、発表原稿準備
第 11 回～14 回：論文原稿準備、繰り返し推敲
第 14 回：論文を完成させレポートとして提出（雑誌の投稿要領に合わせ内容を精査）
本授業の準備・復習時間は、各 2 時間計 4 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特に指定しません。適宜プリントなどを配布します。

【参考書】

堀忠雄（2008）. 生理心理学—人間の行動を生理指標で測る. 培風館, 東京.
堀忠雄, 他（2017）. 生理心理学と精神生理学第 I 巻 基礎. 北大路書房, 京都.
堀忠雄, 他（2017）. 生理心理学と精神生理学第 II 巻 応用. 北大路書房, 京都.

【成績評価の方法と基準】

平常点（授業態度、授業内での活発な議論など）30 %, 発表（学会も含む）30 %, 事前の課題（論文も含む）40 % で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

2021 年度は 1 名の受講者でした。繰り返し論文作成の進捗状況を確認し、最新の論文の抄読を行った。必ず話し合ったことのメモを残すことにしたため、議論の論点や継続性をスムーズに確認できた点はよかった。

【学生が準備すべき機器他】

脳波室で実験機器を用いることがあります。事前に案内しますが、実施場所については注意してください。

【その他の重要事項】

新型コロナ肺炎に関する状況を考えて授業形態をオンライン授業などに変更する場合があります。初回の授業には必ず出席して下さい。学会の要旨・発表原稿・論文の作成などは適宜抄読する論文に代えて順序を入れ替えて実施します。

【オフィスアワー】履修の手引きの教員紹介に記載してあります。担当教員は、厚生労働省精神保健指定医、日本精神学会精神科専門医および日本睡眠学会専門医として 30 年以上精神科の臨床に携わっています。この経験を生かし、この授業を進めます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 生理心理学, 精神保健学

<研究テーマ> 眠気, 睡眠, うつ, ストレス

<主要研究業績>

高橋敏治（2020）時差障害（時差ぼけ）. 診療所で診るトラベルメデイスン（大越裕文 編著）. 日本医事新報社, 東京, p 64-73.

高橋敏治（2019）残業による睡眠不足が引き起こす過剰な日中の眠気. 睡眠の診かた—睡眠障害気づくための 50 症例—（千葉茂 編著）. 新興医学出版社, 東京, p 62-63.

高橋敏治（2019）繰り返しの時差フライトが引き起こす睡眠障害. 睡眠の診かた—睡眠障害気づくための 50 症例—（千葉茂 編著）. （株）新興医学出版社, 東京, p 76-77.

高橋敏治（2017）. 時差ぼけと光環境 睡眠医療, 11, 525-530.

【Outline (in English)】

We will learn how to read papers related to physiological psychology and how to prepare academic presentations/papers of their own research results. We will summarize the results of the doctoral dissertation by repeating the process.

The goals of this course are to make full use of the method of psychophysiological methods, practice appropriate data analysis, and write charts and considerations. Then, you will be able to make presentations at academic conferences and submit articles.

Perform appropriate data analysis, and consider charts. After that, you should aim to make a presentation at an academic conference and submit papers.

It takes 2 hours to prepare and 2 hours to review for each lesson.

The final grade will be calculated according to the following process; in-class contribution (30 %), presentation (30%), reports (40%).

PSY700B6

心理学特殊研究Ⅱ

高橋 敏治

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

生理心理学の関連論文の抄読と、それをもとに自分の研究成果の学会発表・論文作成の方法を学び、その過程を繰り返しながら博士論文の成果としてまとめます。

特に生理心理学の手技・操作に精通し、必要なデータを採取し、解析ができるようにします。それらの成果を英文で発表できるようにします。

【到達目標】

1. 生理心理学手法を駆使し、適切なデータ解析・図表の説明・考察などを通して関係する学会への発表、および論文投稿を英語で行います。
2. 特に学会発表の場合は、海外での発表を意識し、エントリから実際の発表までの過程やスケジュールの調整などを学びます。
3. 英語論文で、投稿誌の選び方、査読への返し方などを学びます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習のため、発表を繰り返し行い、発表時のコメントなどについて自ら調べ、アクションペーパーとしてまとめ、提出してもらいます。授業時間内に、必ず質疑応答の時間を設け、質疑応答や提出されたリアクションペーパーから生じた良いコメントは授業内で紹介し、さらなる議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	生理心理学手法の習熟程度の把握や授業内容や範囲の希望をすり合わせます。
第 2 回	秋学期の学会発表の検討	海外での発表可能な学会の検索、学会スケジュール、準備すべきものを確認します。
第 3 回	先行研究の抄読会（1） 英語論文を中心に	自分の研究に関係の深い英語論文・英語成書を抄読します。 パワーポイントで発表原稿を作成します。
第 4 回	先行研究の抄読会（2） 英語論文を中心に	先行研究の「問題点提起」に焦点を当てまとめます。 自分の研究に関わり合いの深い英語論文・英語成書の抄読します。 前回の抄読で得た成果をどのように取り入れるかを検討します。 パワーポイントで発表原稿を作成します。
第 5 回	先行研究の抄読会（3） 英語論文を中心に	先行研究の「対象・方法」に焦点を当てまとめます。 自分の研究に関係の深い英語論文・英語成書を抄読します。前回の抄読で得た成果をどのように取り入れるかを検討します。 パワーポイントで発表原稿を作成します。
第 6 回	先行研究の抄読会（4） 英語論文を中心に	先行研究の「分析」に焦点を当てまとめます。

第 6 回	先行研究の抄読会（4） 英語論文を中心に	学会発表研究に関係の深い英語論文・英語成書を抄読します。 前回の抄読で得た成果をどのように取り入れるかを検討します。 パワーポイントで発表原稿を作成します。 先行研究の「図」「表」に焦点を当てまとめます。
第 7 回	先行研究の抄読会（5） 英語論文を中心に	学会発表研究に関係の深い英語論文・英語成書を抄読します。 前回の抄読で得た成果をどのように取り入れるかを検討します。 パワーポイントで発表原稿を作成します。 先行研究の「考察」に焦点を当てまとめます。
第 8 回	先行研究の抄読会（6） 英語論文を中心に	学会発表研究に関係の深い英語論文・英語成書を抄読します。 疑問点や問題点を検討します。 パワーポイントで発表原稿を作成します。 先行研究の「文献」の書き方に焦点を当てまとめます。
第 9 回	学会発表の準備（1） 英語での発表を中心に	海外での学会発表への準備をします。 抄録の作成のためデータ解析を行います。 抄録のエントリ時に必要な情報を確認します。 学会発表研究に関係の深い英語論文・英語成書のまとめ、発表原稿をパワーポイントを用い発表原稿を英語で作成します。
第 10 回	学会発表の準備（2） 英語での発表を中心に	海外での学会発表研究に関係の深い英語論文・英語成書のまとめ、発表原稿をパワーポイントを用い英語で作成します。 英語論文の校閲の受け方を学びます。
第 11 回	学会発表の準備（3） 英語での発表を中心に	海外での学会発表研究に関係の深い論文・成書のまとめ、発表原稿をパワーポイントを用い英語で作成します。発表時間や発表の仕方に合わせて練習します。 発表がポスターの場合は、ポスター作製の操作や手順を習います。
第 12 回	論文の作成（1）英語 での発表を中心に	今までの抄読会や学会発表の成果を通して英語論文にまとめます。 投稿する論文を言語、難易度などを考慮し雑誌を選定します。 雑誌の投稿要領を検討します。
第 13 回	論文の作成（2）英語 での発表を中心に	投稿論文に関係の深い英語論文・英語成書を抄読します。 投稿原稿を作成する上での疑問点や問題点を検討します。 先行研究の「文献」に焦点を当てまとめます。
第 14 回	論文の作成（3）英語 での発表を中心に	今までの抄読会や学会発表の成果を通して英語で論文にまとめます。 投稿する英語論文を推敲します。 雑誌の投稿要領に合わせ内容を精査します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 第 1 回：レポート課題として文献を英文・日本語論文としてリスト化
第 2 回：レポート課題として生理心理学・睡眠関係の海外での学会をリスト化
文献を抄読しパワーポイントにまとめ、発表原稿準備
第 2 回は「問題点提起」に焦点を当てまとめます。

第3回～7回：文献を抄読しパワーポイントにまとめ、発表英語原稿準備

(それぞれ次回の授業で焦点を当てる項目を綿密に準備)

第3回は「対象・方法」に焦点を当てまとめます。

第4回は「分析」「結果」に焦点を当てまとめます。

第5回は「図」「表」に焦点を当てまとめます。

第6回は「考察」に焦点を当てまとめます。

第7回は「文献」の示し方に焦点を当てまとめます。

第8回～10回：文献を抄読しパワーポイントにまとめ、英語原稿を準備

第11回～14回：英語論文原稿準備、繰り返し推敲

第14回：英語論文を完成させレポートとして提出（雑誌の投稿要領に合わせ内容を精査）

本授業の準備・復習時間は、各2時間計4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特に指定しません。適宜プリントなどを配布します。

【参考書】

堀忠雄（2008）. 生理心理学—人間の行動を生理指標で測る. 培風館, 東京.

堀忠雄, 他（2017）. 生理心理学と精神生理学第Ⅰ巻 基礎. 北大路書房, 京都.

堀忠雄, 他（2017）. 生理心理学と精神生理学第Ⅱ巻 応用. 北大路書房, 京都.

【成績評価の方法と基準】

平常点（授業態度、授業内での活発な議論など）30%, 発表（学会も含む）30%, 事前の課題（論文も含む）40%で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

2021年度は1名の受講者でした。繰り返し論文作成の進捗状況を確認し、最新の論文の抄読を行った。必ず話し合ったことのメモを残すことにしたため、議論の論点や継続性をスムーズに確認できた点はよかった。

【学生が準備すべき機器他】

脳波室で実験機器を用いることがあります。事前に案内しますが、実施場所については注意してください。

【その他の重要事項】

新型コロナウイルスに関する状況を考えて授業形態をオンライン授業などに変更する場合があります。初回の授業には必ず出席して下さい。学会の要旨・発表原稿・論文の作成などは適宜抄読する論文に代えて順序を入れ替えて実施します。

【オフィスアワー】履修の手引きの教員紹介に記載してあります。担当教員は、厚生労働省精神保健指定医、日本精神学会精神科専門医および日本睡眠学会専門医として30年以上精神科の臨床に携わっています。この経験を生かし、この授業を進めます。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞精神生理学, 精神保健学

＜研究テーマ＞眠気, 睡眠, うつ, ストレス

＜主要研究業績＞

高橋敏治（2020）時差障害（時差ぼけ）. 診療所で診るトラベルメデイスン（大越裕文 編著）. 日本医事新報社, 東京, p 64-73.

高橋敏治（2019）残業による睡眠不足が引き起こす過剰な日中の眠気. 睡眠の診かた—睡眠障害気づくための50症例—（千葉茂 編著）. 新興医学出版社, 東京, p 62-63.

高橋敏治（2019）繰り返しの時差フライトが引き起こす睡眠障害. 睡眠の診かた—睡眠障害気づくための50症例—（千葉茂 編著）. （株）新興医学出版社, 東京, p 76-77.

高橋敏治（2017）. 時差ぼけと光環境 睡眠医療, 11, 525-530.

【Outline (in English)】

We will learn how to read papers related to physiological psychology and how to prepare academic presentations/papers of their own research results. We will summarize the results of the doctoral dissertation by repeating the process.

The goals of this course are to make full use of the method of psychophysiological methods, practice appropriate data analysis, and write charts and considerations. Then, you will be able to make presentations at academic conferences and submit articles.

Perform appropriate data analysis, and consider charts. After that, you should aim to make a presentation at an academic conference and submit papers.

It takes 2 hours to prepare and 2 hours to review for each lesson.

The final grade will be calculated according to the following process; in-class contribution (30 %), presentation (30%), reports (40%).

PSY700B6

心理学特殊研究 I

越智 啓太

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

授業概要

主に犯罪心理学を専攻する大学院生への研究指導

【到達目標】

自分の研究テーマに従い実験を行い、結果を分析し、まとめて、学会発表を行うとともに、論文にまとめる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業はゼミ形式で、各自の研究報告と全員でのディスカッション、研究指導を中心に行う。毎回各自の研究の進捗状況について、レジュメとパワーポイントで説明する。学会前には、学会発表演習を行う。論文投稿に際しては読み合わせを行う。リアクションペーパーや授業内の意見については毎回授業の初めに説明するとともに個別に解説してフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	春学期の研究計画について具体化する。
第 2 回	研究報告と討論（おもに文献検討）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 3 回	研究報告と討論（おもに内容）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 4 回	研究報告と討論（おもに分析）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 5 回	研究報告と討論（おもに論理展開）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 6 回	研究報告と討論（おもに理論）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 7 回	研究報告と討論（おもに全体構成）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 8 回	研究報告と討論（おもに論文フォーマット）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 9 回	研究報告と討論（まとめ 1）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 10 回	研究報告と討論（おもに実験計画）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 11 回	研究報告と討論（おもに実験の実施法）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 12 回	研究報告と討論（おもに実験手続き）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 13 回	研究報告と討論（おもに実験実施上の問題点）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 14 回	研究報告と討論（まとめ 2）おもに	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回、各自で自分の計画に従って、研究のレビュー、実験計画、実験の実施、分析、学会発表、論文執筆を行う。各回のテーマ（おもに～と記載されているもの）をとくに重視してまとめること。

毎回 4 時間程度の予習と 1 時間程度の復習が必要である。

【テキスト（教科書）】

使用しない。その都度文献を紹介する。

【参考書】

使用しない。

【成績評価の方法と基準】

自分の研究計画に沿って研究を進行できたか（40％）。
他人の研究について適切なコメントができたか（60％）。
授業中に自発的に有益な発言がないといくら学術的に有益な研究を行っていたとしても、単位は与えられないので注意すること。

【学生の意見等からの気づき】

学会発表のためのサポートを充実させるとともに統計手法についてのコメントをより詳細なものにします。

【学生が準備すべき機器他】

各自、自分が使用しているパソコンを持参して、授業に臨むこと。

【その他の重要事項】

毎回、すべての報告が終わるまで時間を延長する。学会発表前には、授業期間外にも補講を行う。この授業をとるものは、この授業の参加をほかのすべての行事よりも優先すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 犯罪心理学

<研究テーマ> 犯罪捜査への心理学の応用

<主要研究業績> 「犯罪捜査の心理学」（化学同人）

【Outline (in English)】

【Course outline】

In this class, empirical experimental research on forensic and criminal psychology and presentation training will be conducted.

【Learning Objectives】

You will be able to study psychology yourself. Specifically, the following points.

Research theme selection

Searching and organizing prior literature

Design of experiments

Analysis of experimental results

Creating reports and dissertations

Oral and poster presentation

【Learning activities outside of classroom】

Each lesson requires 4 hours of preparation and 1 hour of review.

【Grading Criteria /Policy】

Your overall grade in the class will be decided based on the following

Report on research progress(40%) + class contribution (60%)

PSY700B6

心理学特殊研究Ⅱ

越智 啓太

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

授業概要

主に犯罪心理学を専攻する大学院生への研究指導

【到達目標】

自分の研究テーマに従い実験を行い、結果を分析し、まとめて、学会発表を行うとともに、論文にまとめる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業はゼミ形式で、各自の研究報告と全員でのディスカッション、研究指導を中心に行う。毎回各自の研究の進捗状況について、レジュメとパワーポイントで説明する。学会前には、学会発表演習を行う。論文投稿に際しては読み合わせを行う。リアクションペーパーや授業内の意見については毎回授業の初めに説明するとともに個別に解説してフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	秋学期の研究計画について具体化する。
第 2 回	研究報告と討論（おもにデータ分析の実習 1）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 3 回	研究報告と討論（おもにデータ分析の実習 2）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 4 回	研究報告と討論（おもにデータ分析の実習 3）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 5 回	研究報告と討論（おもにデータ分析についての討論、実習、問題点の修正 1）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 6 回	研究報告と討論（おもにデータ分析についての討論、実習、問題点の修正 2）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 7 回	研究報告と討論（おもにプレゼンテーションの準備 1）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 8 回	研究報告と討論（おもにプレゼンテーションの準備 2）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 9 回	研究報告と討論（おもに研究のプレゼンテーションとその相互評価 1）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 10 回	研究報告と討論（おもに研究のプレゼンテーションとその相互評価 2）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 11 回	研究報告と討論（おもに研究プレゼンテーションの修正と実習）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。

- 第 12 回 研究報告と討論（おもに学会発表の準備、実習） 各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
- 第 13 回 研究報告と討論（おもに論文執筆の準備） 各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
- 第 14 回 研究報告と討論（年間研究業績の発表と討論） 各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回、各自で自分の計画に従って、研究のレビュー、実験計画、実験の実施、分析、学会発表、論文執筆を行う。毎回 4 時間程度の予習と 1 時間程度の復習が必要である。

【テキスト（教科書）】

使用しない。その都度文献を紹介する。

【参考書】

使用しない。

【成績評価の方法と基準】

自分の研究計画に沿って研究を進捗できたか（40％）。他人の研究について適切なコメントができたか（60％）。授業中に自発的に有益な発言がないといくら学術的に有益な研究を行っていたとしても、単位は与えられないので注意すること。

【学生の意見等からの気づき】

論文指導に関しては、論文の読み合わせ、口頭発表のシミュレーションなどを充実させます。

【学生が準備すべき機器他】

各自、自分が使用しているパソコンを持参して、授業に臨むこと。

【その他の重要事項】

毎回、すべての報告が終わるまで時間を延長する。学会発表前には、授業期間外にも補講を行う。この授業受講者は他のすべての行事よりもこの授業への参加を優先すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 犯罪心理学
<研究テーマ> 犯罪捜査への心理学の応用
<主要研究業績> 「犯罪捜査の心理学」（化学同人）

【Outline (in English)】

【Course outline】

In this class, empirical experimental research on forensic and criminal psychology and presentation training will be conducted.

【Learning Objectives】

You will be able to study psychology yourself. Specifically, the following points.

Research theme selection

Searching and organizing prior literature

Design of experiments

Analysis of experimental results

Creating reports and dissertations

Oral and poster presentation

【Learning activities outside of classroom】

Each lesson requires 4 hours of preparation and 1 hour of review.

【Grading Criteria /Policy】

Your overall grade in the class will be decided based on the following

Report on research progress(40%) + class contribution (60%)

PSY700B6

心理学特殊研究 I

荒井 弘和

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士後期課程の大学院生が、主体的に研究を行い、論文を作成して投稿し、その論文が受理されるまでの一連の過程を実践できるようになることを目的とします。

【到達目標】

- (1) 研究テーマに関連する先行研究のシステマティックレビューを行うことができる。
- (2) 研究計画申請書を作成することができる。
- (3) 研究を実施してデータを収集することができる。
- (4) 論文を作成して、投稿することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

毎回の授業では、各受講生の研究に関する発表と、それに対する意見交換を行います。受講生が将来、自立した研究者として活動することができるよう、主体的な活動を求めます。

課題に対するフィードバックは、(1) 次の回の授業の序盤に受講生全体に対して、(2) メーリングリストなどを利用して受講生全体に対して、(3) 個人的に、のいずれかの方法で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	各自の目標設定	この授業の受講を終えたとき、どのような成果を得ていたいかが明確にする。
第 2 回	先行研究のシステマティックレビュー (1)	先行研究のシステマティックレビューを行い、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第 3 回	先行研究のシステマティックレビュー (2)	先行研究のシステマティックレビューを行い、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第 4 回	先行研究のシステマティックレビュー (3)	先行研究のシステマティックレビューを行い、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第 5 回	先行研究のシステマティックレビュー (4)	先行研究のシステマティックレビューを行い、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第 6 回	研究計画申請書の作成 (1)	研究計画申請書を作成し、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第 7 回	研究計画申請書の作成 (2)	研究計画申請書を作成し、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第 8 回	研究の実施状況の報告 (1)	研究の実施報告を行い、意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第 9 回	研究の実施状況の報告 (2)	研究の実施報告を行い、意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。

第 10 回	研究の実施状況の報告 (3)	研究の実施報告を行い、意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第 11 回	研究の実施状況の報告 (4)	研究の実施報告を行い、意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第 12 回	研究の実施状況の報告 (5)	研究の実施報告を行い、意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第 13 回	投稿論文の作成	投稿論文を作成して発表し、意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第 14 回	目標の振り返り	授業開始時の目標を振り返り、今後の自らの研究活動を展望する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回、(1) 授業中に提示された課題、(2) 発表資料の作成に取り組みます。
本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

テキスト・参考書は用いません。必要に応じて、資料の配付・書籍や文献の紹介を行います。

【参考書】

必要・希望に応じて紹介します。

【成績評価の方法と基準】

(1) 発表の内容が 60%、(2) 意見交換への参加状況が 40%です。欠席・遅刻をした場合は評価が下がります。

【学生の意見等からの気づき】

受講生の要望にしたがい、受講生の研究業績に直接的につながるような授業を行えるよう工夫します。

【その他の重要事項】

今後の予定を立てるためにも、初回の授業には必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
スポーツ心理学
<研究テーマ>
アスリート・コーチのメンタルサポート
<主要研究業績>

荒井弘和（編著）(2020). アスリートのメンタルは強いのか？ — スポーツ心理学の最先端から考える — 晶文社

Arai, H. (2017). The effect of romantic relationships on collegiate athletes' lives with special attention to gender differences. *European Journal of Physical Education and Sport Science*, 3(7), 38-50.

Arai, H., Suzuki, F., & Akiba, S. (2016). Perception of Japanese collegiate athletes about the factors related to mentoring support. *Journal of Physical Education Research*, 3(4), 12-24.

Arai, H. (2015). Outcome expectancies for collective psychological performance among collegiate athletes. *Journal of Physical Education and Sport*, 15, 64-69.

【Outline (in English)】

(Course outline)

The purpose of this course is to enable doctoral students to independently conduct research, prepare and submit a paper, and practice the series of processes until the paper is accepted.

(Learning Objectives)

- (1) To be able to conduct a systematic review of previous studies related to the research topic.
- (2) To be able to prepare a research plan application.
- (3) To be able to conduct research and collect data.
- (4) To be able to prepare and submit a paper.

(Learning activities outside of classroom)

In each class, students will work on (1) assignments presented during the class, and (2) preparation of presentation materials. The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.

(Grading Criteria /Policy)

(1) 60% of the grade will be based on the content of the reports and presentations you make, and (2) 40% of the grade will be based on your participation in opinion exchange and group work. If you are absent or late, your evaluation will be lowered.

PSY700B6

心理学特殊研究Ⅱ

荒井 弘和

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士後期課程の大学院生が、主体的に研究を行い、論文を作成して投稿し、その論文が受理されるまでの一連の過程を実践できるようになることを目的とします。

【到達目標】

- (1) 論文を作成して、投稿することができる。
- (2) 査読に対して回答し、論文を受理してもらうことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

毎回の授業では、各受講生の研究に関する発表と、それに対する意見交換を行います。受講生が将来、自立した研究者として活動することができるよう、主体的な活動を求めます。

課題に対するフィードバックは、(1) 次の回の授業の序盤に受講生全体に対して、(2) メーリングリストなどを利用して受講生全体に対して、(3) 個人的に、のいずれかの方法で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	各自の目標設定	この授業の受講を終えたとき、どのような成果を得たいか明確にする。
第2回	投稿論文の作成（1）	先行研究のシステムティックレビューを行い、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第3回	投稿論文の作成（2）	先行研究のシステムティックレビューを行い、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第4回	投稿論文の作成（3）	先行研究のシステムティックレビューを行い、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第5回	投稿論文の作成（4）	先行研究のシステムティックレビューを行い、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第6回	投稿論文の作成（5）	研究計画申請書を作成し、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第7回	投稿論文の作成（6）	研究計画申請書を作成し、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第8回	査読に対する回答（1）	査読結果を吟味し、それに対する回答を検討する。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第9回	査読に対する回答（2）	査読結果を吟味し、それに対する回答を検討する。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第10回	査読に対する回答（3）	査読結果を吟味し、それに対する回答を検討する。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。

- 第11回 査読に対する回答 (4) 査読結果を吟味し、それに対する回答を検討する。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
- 第12回 査読に対する回答 (5) 査読結果を吟味し、それに対する回答を検討する。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
- 第13回 査読に対する回答 (6) 査読結果を吟味し、それに対する回答を検討する。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
- 第14回 目標の振り返り 授業開始時の目標を振り返り、今後の自らの研究活動を展望する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回、(1) 授業中に提示された課題、(2) 発表資料の作成に取り組みます。

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

テキスト・参考書は用いません。必要に応じて、資料の配付・書籍や文献の紹介を行います。

【参考書】

必要・希望に応じて紹介します。

【成績評価の方法と基準】

(1) 発表の内容が60%、(2) 意見交換の参加状況が40%です。欠席・遅刻をした場合は評価が下がります。

【学生の意見等からの気づき】

受講生の要望にしたがい、受講生の研究業績に直接的につながるような授業を行えるよう工夫します。

【その他の重要事項】

今後の予定を立てるためにも、初回の授業には必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

スポーツ心理学

<研究テーマ>

アスリート・コーチのメンタルサポート

<主要研究業績>

荒井弘和（編著）(2020). アスリートのメンタルは強いのか？—スポーツ心理学の最先端から考える— 晶文社

Arai, H. (2017). The effect of romantic relationships on collegiate athletes' lives with special attention to gender differences. *European Journal of Physical Education and Sport Science*, 3(7), 38-50.

Arai, H., Suzuki, F., & Akiba, S. (2016). Perception of Japanese collegiate athletes about the factors related to mentoring support. *Journal of Physical Education Research*, 3(4), 12-24.

Arai, H. (2015). Outcome expectancies for collective psychological performance among collegiate athletes. *Journal of Physical Education and Sport*, 15, 64-69.

【Outline (in English)】

(Course outline)

The purpose of this course is to enable doctoral students to independently conduct research, prepare and submit a paper, and practice the series of processes until the paper is accepted. (Learning Objectives)

(1) To be able to prepare and submit a paper.

(2) To be able to respond to peer review and have the paper accepted.

(Learning activities outside of classroom)

In each class, students will work on (1) assignments presented during the class, and (2) preparation of presentation materials. The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.

(Grading Criteria /Policy)

(1) 60% of the grade will be based on the content of the reports and presentations you make, and (2) 40% of the grade will be based on your participation in opinion exchange and group work. If you are absent or late, your evaluation will be lowered.

PSY700B6

心理学特殊研究 I

渡辺 弥生

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

人間の発達の多様性や可変性を心理学研究の視点から捉え理解し、人間の発達のメカニズムを学び、発達心理学に深く関連する教育や臨床に貢献できる研究方法を学ぶ。

【到達目標】

人間の発達の多様性や可変性などマクロな視点から理解する。つぎに、心理学研究が着目してきた研究の流れを把握した上で、どういった研究テーマがあるかを理解する。そのうえで、自分の研究テーマを決定し、独自の研究方法を考案し、データの取りかたや、予測できる分析のしかたを学ぶとともに、分析した結果の考察の重要性を理解する。前期のなかで研究者としての研究行動（学会発表、論文投稿、研究費の獲得など）についても理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業はゼミ形式とする。各自が積極的に研究を報告しディスカッションする。前期は、特に自分の研究テーマが発達心理学研究のどのような立ち位置にあり、どういった研究の貢献が可能であるか俯瞰できるようにする。毎回、レジュメとパワーポイントで説明できるようにする。課題のフィードバックは、学習支援システムなどで行う予定。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	春学期の本授業の目標と具体的な予定について理解する。
第2回	発達心理学および発達臨床心理学、学校心理学などの体系について理解する。	ハンドブックなどをもとに、研究をマクロな視点から理解する。
第3回	マクロな視点から自分の興味あるテーマを考える。	自分の興味が、これまでの研究の流れのなかでどのような位置にあるかを理解する。
第4回	自分の興味あるテーマに関する文献のリストアップ	キーワードを駆使して、自分の興味ある研究テーマの論文をリストアップし、可能な論文は入手する。
第5回	研究テーマに関する興味ある論文を発表する	自分の興味のある論文を発表し、全員でディスカッションを行う。(1)。
第6回	研究テーマに関する興味ある論文を発表する	自分の興味のある論文を発表し、全員でディスカッションを行う。(2)。
第7回	研究テーマに伴うさまざまな意見をまとめる	同じテーマでも対立する考えを見出し、まとめてみる。(1)。
第8回	研究テーマに伴うさまざまな意見をまとめる	同じテーマでも対立する考えを見出し、まとめてみる。(2)。
第9回	貢献できるフィールドを考えて見学する。	自分の研究テーマがによって将来貢献できるフィールドを考える。発表する。
第10回	貢献できるフィールドを考えて見学する。	自分の研究テーマがによって将来貢献できるフィールドを考えて、訪問する。できれば発表する。

- 第11回 大枠でリサーチクエス 各自の進捗状態を報告し、全員で
チョンを考え、研究計 デイスカッションを行う。
画を練る (1)。
- 第12回 大枠でリサーチクエス 各自進捗状態を報告し、全員で
チョンを考え、研究計 デイスカッションを行う。
画を練る (2)。
- 第13回 研究構想を発表と討論 研究構想を発表し合い、ディス
(1) カッションする。
- 第14回 緩急構想の発表と討論 継続して、研究構想を発表し、
(2) デイスカッションする。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
レビューとなる研究論文や書籍を読破するとともに、常に最新の研
究論文をチェックし、問題と目的を明確にし、研究計画をたて実施
し、分析し、考察することをデフォルトにできるようにする。また、
長期的な展望のなか学会発表や論文の投稿を計画し毎回自主的に実
施していく。

【テキスト（教科書）】

使用しない。その都度文献を紹介する。

【参考書】

使用しない。ただし、4月までに良書が紹介できたら、授業の開始
時に伝える。

【成績評価の方法と基準】

毎回の研究活動を基にしたリサーチレポートの提出 (100%)。

【学生の意見等からの気づき】

授業では全体指導であるが、それに関連する個別のサポートを明確
にし、互いに連動できるようにする。

【学生が準備すべき機器他】

つねに、何が必要かどうかすれば研究が進むかをメタ認知し、必要な
機器を準備する。

【その他の重要事項】

この授業の参加を優先すること。自分からやりたいことを提案でき
るようにモチベーションを高くもてるようレジリエントになること。
新型コロナウイルス感染状況によってオンラインに変更する可能性
あり。

【担当教員の専門分野等】

<https://sites.google.com/site/emywata/Home> <専門領域>発達心
理学、発達臨床心理学、学校心理学
<研究テーマ>社会性、道徳性、感情のメカニズムの解明と社会や
学校での危機問題の予防
Homepage 参考

【関連論文1】

児童の感情リテラシーは教育しうるか—発達のアウトラインと支援
のありかた— エモーション・スタディーズ
第2巻 第1号 pp. 16—24 2016年

【関連論文2】

健全な学校風土をめざすユニヴァーサルな学校予防教育—免疫力を
高めるソーシャル・スキル・トレーニングとソー
シャル・エモショナル・ラーニング 教育心理学年報 Vol.54,126-
141. 2015年8月25日

【関連論文3】

「学校予防教育に必要な『道徳性・向社会的行動』の育成」発達心理
学研究 2014年12月20日第25巻,第4号,422-431.

【関連論文4】

School psychology research and practice in East Asia:
Perspectives on the past,present,and future directions
of the field. School Psychology International,1-26. doi:
10.1177/014034316671354.
(with Brown,J.A.,Lee,D.H.,& McIntosh ,K.)

【Outline (in English)】

< Course outline > The aim of this course is to understand
the diversity and variability of human development from the
viewpoint of psychological research.

< Learning Objectives > The purposes of this course are to
study the mechanisms of human development, and to learn
about research methods that can contribute to educational and
clinical research deeply related to developmental psychology.

< Learning activities outside of classroom > Students are
expected to take at least two hours each for preparation and
review.

< Grading Criteria > Students will be required to submit a
report (100%)) based on the assumption that they will
complete the assignments in each class.

PSY700B6

心理学特殊研究Ⅱ

渡辺 弥生

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

人間の発達の多様性や可変性を心理学研究の視点から捉え理解し、人間の発達のメカニズムを学び、発達心理学に深く関連する教育や臨床に貢献できる研究方法を学ぶ。

【到達目標】

心理学特殊研究Ⅰをさらに発展させ、具体的な研究目標のもとに研究を発表し、研究論文を執筆することを目標とする。研究論文の多様性や求められていること（研究分野、執筆要項の特徴、研究評価の観点など）を明確に理解し、発表のスキルと執筆スキルを獲得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業はゼミ形式とする。各自が積極的に研究を報告しディスカッションする。後期は自分の研究テーマが発達心理学研究のどのような立ち位置にあり、どういった研究の貢献が可能であるかを明確にし、毎回アウトプットできるようにする。課題のフィードバックは、学習支援システムで行う予定。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	秋学期の本授業の目標と具体的な予定について理解する。
第 2 回	学術研究論文の特徴と執筆要項を学ぶ	関連する学術雑誌の特徴と執筆要項について理解し、発表する。
第 3 回	注目している和文の文献をレポートする（1）。	各自注目している和文の文献をまとめレポートし、全員でディスカッションする。
第 4 回	注目している和文の文献をレポートする（2）。	各自注目している和文の文献をまとめレポートし、全員でディスカッションする。
第 5 回	注目している英文の文献をレポートする（1）。	各自注目している英文の文献をまとめレポートし、全員でディスカッションする。
第 6 回	注目している英文の文献をレポートする（2）。	各自注目している英文の文献をまとめレポートし、全員でディスカッションする。
第 7 回	研究を発表する（学会発表スキル）（1）	学会発表をするための具体的な行動を学ぶ。
第 8 回	研究を発表する（学会発表スキル）（2）	学会発表をするための具体的な行動を学ぶ。
第 9 回	研究論文を執筆する（1）。	自分の研究したいことをまとめられるようにスキルを考える。
第 10 回	研究論文を執筆する（2）。	自分の研究したいことをまとめられるようにスキルをアップする方法を考える。
第 11 回	研究論文を執筆する（3）。	先行研究の技術を発見する。
第 12 回	研究論文を執筆する（4）。	実際に執筆してみる。
第 13 回	互いに査読しあう（1）。	どのようなことが研究するに必要なかを体感できるようにする。
第 14 回	互いに査読しあう（2）。	さらにチャレンジできるように総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

レビューとなる研究論文や書籍を読破するとともに、常に最新の研究論文をチェックし、問題と目的を明確にし、研究計画をたて実施し、分析し、考察することをデフォルトにできるようにする。また、長期的な展望のなか学会発表や論文の投稿を計画し毎回自主的に実施していく。

【テキスト（教科書）】

使用しない。その都度文献を紹介する。

【参考書】

使用しない。

【成績評価の方法と基準】

毎回の活動目的を遂行した上でのリサーチレポートの提出（100 %）。

【学生の意見等からの気づき】

授業では全体指導であるが、それに関連する個別のサポートを明確にし、互いに連動できるようにする。

【学生が準備すべき機器他】

つねに、何が必要かどうすれば研究が進むかをメタ認知し、必要な機器を準備する。

【その他の重要事項】

この授業の参加を優先すること。自分からやりたいことを提案できるようにモチベーションを高くもてるようレジリエントになること。英語論文の書き方、また海外の学会参加及び発表の仕方も伝える。新型コロナウイルス感染状況によって、オンラインに変更する可能性あり。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>発達心理学、発達臨床心理学、学校心理学

<研究テーマ>社会性、道徳性、感情のメカニズムの解明と社会や学校での危機問題の予防、ソーシャルエモーショナルラーニング

Homepage 参考

<https://sites.google.com/site/emywata/>

【関連論文 1】

児童の感情リテラシーは教育しうるか—発達のアウトラインと支援のありかた— エモーション・スタディーズ

第 2 巻 第 1 号 pp. 16 — 24 2016 年

【関連論文 2】

健全な学校風土をめざすユニバーサルな学校予防教育—免疫力を高めるソーシャル・スキル・トレーニングとソー

シャル・エモーショナル・ラーニング 教育心理学年報 Vol.54,126-141. 2015 年 8 月 25 日

【関連論文 3】

「学校予防教育に必要な『道徳性・向社会的行動』の育成」発達心理学研究 2014 年 12 月 20 日第 25 巻, 第 4 号,422-431.

【関連論文 4】

School psychology research and practice in East Asia: Perspectives on the past,present,and future directions of the field. School Psychology International,1-26. doi: 10.1177/014034316671354.

(with Brown,J.A.,Lee,D.H.,& McIntosh ,K.)

【Outline (in English)】

・The aim of this course is to understand the diversity and variability of human development from the viewpoint of psychological research, study the mechanisms of human development.

・Students will be expected to learn about research methods that can contribute to educational and clinical research deeply related to developmental psychology.

・Students are expected to take at least two hours each for preparation and review.

・Students will be required to submit a report (100%) based on the assumption that they will complete the assignments in each class.

PSY500B6

大学教員心理学基礎講座

藤田 哲也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士後期課程の院生が、将来大学教員になったときに知っておくべき知識や、身につけておくべきスキルを獲得することが授業の目的である。具体的には、授業担当以外に行うべき「大学教員の職務」について理解すること、関連して現在の大学および大学教員が求められていることを示した「大学設置基準」の読み解き方や、大学教育の在り方に大きく影響を及ぼす「中央教育審議会の答申等」の概要把握を踏まえた適切な「シラバス」の書き方、公募において自分自身の研究・教育上の展望・特長を魅力的に伝えるための「自己PR」「模擬授業」を修得することなどを含む。大学教員になった後に行うFD（ファカルティ・ディベロップメント）の大学院生版であり、大学教員となった際に不適応に陥らないための職能開発を行う。

【到達目標】

半期の授業が終了した時点で、以下の各要素を身につけていることが、授業の具体的な到達目標となる。

- 現在の大学および大学教員が職務を遂行する上で知っておくべき諸概念を自分の研究・教育活動の中で説明できる。
- 半期の授業計画を適切に立てることができる。
- 高い教育効果を見込める方法を取り入れた授業を行うことができる。
- 目標に対する到達度について、受講生相互に的確な評価を行うことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的な授業の進め方は、各回のテーマについて事前に予習をし、自分で理解したことをふまえて授業内で出される課題に取り組み、発表や討論を行うというものである。すなわち、受動的に知識を獲得するのではなく、自主的な理解と他者への説明活動を通じたアクティブ・ラーニングが授業の中核をなす。

具体的に取り組む課題としては、複数種類の「シラバスの作成」、公募での自己PRを想定した「大学教員としての抱負の文章化」および「履歴書・研究業績表の作成」の、また、人事選考面接を想定した「15分間の模擬授業の実施」を予定している。授業ではそれぞれの発表に対して、全員で評価者の視点からの討論を行い、改善への方向性を明確にする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の概要および各課題の説明
第2回	大学教員の基礎知識 1	大学設置基準～FD、三つのポリシー、自己点検・評価活動、キャリア教育
第3回	大学教員の基礎知識 2	中教審の答申～学士課程教育、初年次教育、アクティブ・ラーニング
第4回	シラバス作成 1	内容に関する留意点、書式・表現上の留意点
第5回	シラバス作成 2	「心理学概論」シラバス相互チェック
第6回	シラバス作成 3	「専門の講義」シラバス相互チェック
第7回	公募書類作成 1	「履歴書・業績表」作成上の留意点、「自己PR・就職後の抱負」ですべきこと

第8回	公募書類作成 2	公募書類相互評価
第9回	公募書類作成 3	修正版公募書類相互評価
第10回	模擬授業 1	模擬授業に反映させるべきこと、技術的な留意点
第11回	模擬授業 2	模擬授業実施と相互評価 1
第12回	模擬授業 3	模擬授業実施と相互評価 2
第13回	模擬授業 4	模擬授業実施と相互評価 3
第14回	総括	授業の振り返りと各自の今後の課題の明確化

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備時間は3時間、復習時間は1時間を標準とする。各回の内容は関連があるので、以前の授業内容を復習した上で授業に参加すること。準備学習についての詳細は下記の通り。

心理学概論および、各自の専門領域の講義科目を想定した「シラバス」を作成すること、他の受講生の作成したシラバスに対して改善点等を指摘すること。

公募での自己PRを想定した「大学教員としての抱負」を文章化し、「履歴書・研究業績表」を作成すること、それらの書類について、他の受講生に対して改善のアドバイスをを行うこと。

人事選考面接を想定した「15分間の模擬授業」の準備をすること。

【テキスト（教科書）】

教科書は指定しない。授業は配付プリントに沿って行う。

【参考書】

藤田哲也（編）（2006）. 大学基礎講座 改増版－充実した大学生活をおくために－ 北大路書房

そのほか、各回の授業内容に関連した書籍や論文を授業内で紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点 40 %…授業へ出席し、討論に参加していること自体を評価対象とする。

専門の講義のシラバス 20 %…「授業の概要と目的」「到達目標」「授業の進め方と方法」「授業計画と授業時間外学習」「成績評価の方法と基準」の記載内容を評価対象とする。

公募書類 15 %…「自己PR および着任後の抱負」の体裁と記載内容を評価対象とする。

模擬授業 25 %…「授業の概要と目的及び本時の到達目標」「授業の進め方と方法」「授業内容の明示」「授業内容の水準の適切さ」「時間配分」を評価対象とする。

【学生の意見等からの気づき】

対象となる回答がなかったため記載はありません。

【その他の重要事項】

授業の運営方針や教育目標について説明を行うとともに、発表の割り当てを行うので、受講希望者は初回の授業に必ず出席すること。心理学専攻以外の所属で受講を希望する者は、必ず事前に相談すること。

この授業は、複数年度にわたって重複履修することが可能である。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

認知心理学、教育心理学

<研究テーマ>

単なる経験則に終わらない、研究技能の獲得と研究成果の伝達を目指す。

<主要研究業績>

藤田哲也（編）（2006）. 大学基礎講座 改増版－充実した大学生活をおくために－ 北大路書房

藤田哲也（2006）. 心理学を活かした教育実践のために 井上智義（編）視聴覚メディアと教育方法 ver.2 認知心理学とコンピュータ科学の応用実践のために 8章 北大路書房, pp.135-155.

藤田哲也（2010）. 記憶過程と学習 三宮真智子（編）教育心理学 2章 学文社, pp.22-37

【Outline (in English)】

[Course outline]

In this class, graduate students of Doctoral Course acquire knowledge to know and skill to be acquired when becoming a university faculty member. The content of this lesson is a graduate edition of FD (Faculty Development).

[Learning Objectives]

By the end of the course, students should be able to do the following:

- a.Students can explain in their research and educational activities the concepts that current universities and faculty members should know in performing their duties.
- b.Students can properly plan their half-year class.
- c.Students can give class that incorporate methods that can be expected to have a high educational effect.
- d.Students can accurately evaluate each other's achievement of goals.

[Learning activities outside of classroom]

The standard preparation time for this class is 3 hours, and the standard review time is 1 hour.

[Grading Criteria /Policy]

The overall grade of the class is determined based on the following.

In-class contribution 40%, Syllabus of the course of the student's own research specialty 20%, application documents for open call for participants 15%, simulated lesson 25%.

PSY500B6

発達心理学特殊講義

渡辺 弥生

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

発達心理学において重要なトピックからいくつか選び出し、その研究の背景と課題、方法論について理解する。その上で、現在の社会問題に貢献するためにどのような研究が必要かを検討し、具体的に計画するとともに発表する。

【到達目標】

- （１）学術的に子どもにかかわる事実や現象をマクロに認識する。
- （２）子どもの発達を学んでいくための発達心理学の役割について認識を深める。
- （３）子どもを通して人間や社会のいろいろな問題に気づき、深めていくことができることを、それぞれの領域における研究事例から学ぶ。
- （４）授業者としても発達心理学を教えられるスキルを学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

最初の時間に、この講義の進め方を説明する。発達心理学の学問体系を理解し、大学の授業を実施するにあたって必要な知識およびスキルを習得する。選んだトピックについての基本と最新の知見をリサーチし、大学生に伝える必要のある内容をまとめ、課題の設定や、説明の仕方などの体験をするため、授業のシミュレーションを実施する。課題などのフィードバックは学習支援システムまた Google Classroom を活用する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	生涯発達心理学という学問が目指すものと体系の理解、発達という概念、方法論など。
第 2 回	生涯発達についての著名な理論にはどのようなものがあるか？ また方法論は？	Freud,Erickson, Piaget,Kohlberg, など。縦断的研究、横断的研究、観察、調査、実験、コホートなど。
第 3 回	どのような研究がなされてきたのか。	胎児期、乳児期、幼児期、児童期、青年期、成人期、老年期
第 4 回	発達研究の選択	様々な研究分野の中から、この授業で発表するトピックスを選ぶ。テキスト参考。
第 5 回	リサーチ 1	先行研究の問題意識の流れを知る。
第 6 回	リサーチ 2	先行研究の問題意識の流れを知る。
第 7 回	ノートづくり 1	教えるための知見をまとめる。誰に、どのくらいの質と量の知見を伝えるか考える。
第 8 回	ノートづくり 2	教えるための知見をまとめる。誰に、どのくらいの質と量の知見を伝えるか考える。
第 9 回	今後の課題	この分野の研究課題をまとめる。
第 10 回	新しい研究の検討	どのような研究が重ねられる必要があるか、具体的に考える。
第 11 回	授業シミュレーション	大学での発達心理学の講義をシミュレーションした形でプレゼンをする。

- 第12回 授業シミュレーション 大学での発達心理学の講義をシミュレーションした形でプレゼンをする。
- 第13回 授業シミュレーション 大学での発達心理学の講義をシミュレーションした形でプレゼンをする。
- 第14回 総括 全体の反省と今後の課題

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

いずれの回も課題を明確にして、次の授業につなげられるよう、予習と復習2時間ずつ期待する。

【テキスト（教科書）】

授業において適宜紹介する。

【参考書】

渡辺弥生・西野泰代編著（2020）ひと目でわかる発達 誕生から高齢期までの生涯発達心理学 福村出版

【成績評価の方法と基準】

プレゼンテーション（50%）と課題の提出（50%）で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

昨年講義がなかったため、特に無し。

【学生が準備すべき機器他】

授業時に説明する。

【その他の重要事項】

新型コロナウイルス感染状況によって、オンラインになる可能性あり。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>発達心理学、発達臨床心理学、学校心理学
<研究テーマ>社会性と感情の発達および、学校危機予防教育
<主要研究業績>
<https://sites.google.com/site/emywata/> 参照。

【Outline (in English)】

< Course outline > We will select several important topics in developmental psychology. The aim is to understand the background, challenges, and methodology of related research.
< Learning Objectives > Based on this understanding, students will be expected to examine what kind of research is necessary to contribute to current social problems, formulate concrete plans, and present them.
< Learning activities outside of classroom > Students are expected to take at least two hours each for preparation and review.
・Students will be required to submit a report (100%) based on the assumption that they will complete the assignments in each class.
< Grading Criteria > Evaluation will be based on presentations (50%) and submission of assignments (50%).

PSY500B6

犯罪心理学特殊講義

越智 啓太

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

少年法についての心理学的問題：心理学の専門家として、少年法についての情報をリサーチし、自分の意見を作り、それをプレゼンテーションして、質疑応答に答えられるようにする

【到達目標】

限られた時間での専門的情報収集について経験を積む
限られた時間でのプレゼンテーション作成についての経験を積む
自分の意見についての質疑応答についての経験を積む。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

オリエンテーションを行ったあと、各自、リサーチとプレゼンテーション準備を行う。各自のプレゼンテーション（や質問、意見等）については授業中と授業後に個別に詳細にフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の目的と方法の確認
第2回	リサーチ	リサーチ方法のレクチャー
第3回	リサーチ	リサーチをおこなう（1）論文リサーチと法律リサーチ
第4回	リサーチ	リサーチをおこなう（2）データ等
第5回	リサーチ	リサーチをおこなう（3）論理的推論
第6回	プレゼン作成	プレゼンを作成する（1）設計
第7回	プレゼン作成	プレゼンを作成する（2）レイアウト
第8回	プレゼン作成	プレゼンを作成する（3）練習
第9回	プレゼン作成	プレゼンを作成する（5）質疑応答の練習とプランニング
第10回	プレゼンと質疑応答	プレゼンと質疑応答を行う（1）第1回目
第11回	プレゼンと質疑応答	プレゼンと質疑応答を行う（2）第2回目
第12回	プレゼンと質疑応答	プレゼンと質疑応答を行う（3）第3回目
第13回	プレゼンと質疑応答	プレゼンと質疑応答を行う（4）講評とプレゼンの修正、質問方法についてのレクチャー
第14回	総括	全体を総括する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業時間外もリサーチ、プレゼンの作成をある程度の時間をとってすることが必要である。毎回2～5時間程度の予習、プレゼン練習と1時間程度の復習が必要

【テキスト（教科書）】

なし

【参考書】

なし

【成績評価の方法と基準】

リサーチの適切さ、網羅性（25%）、プレゼンの内容と質、論理構成、論理展開（25%）、プレゼン自体の表現力（25%）、質疑応答（25%）

【学生の意見等からの気づき】

前回開講時については、プレゼンについて体系的に学ぶことができたという意見が中心で概ね好評でした。

【学生が準備すべき機器他】

なし

【その他の重要事項】

なし

【担当教員の専門分野等】

犯罪心理学

【Outline (in English)】

【Course outline】

Theme: Psychological problems of Japanese juvenile acts

As a psychology expert, effectively collect information and evidence on psychological issues of Japanese juvenile act and make effective presentations.

【Learning Objectives】

By the end of the course, students should be able to do the followings:

- (1) Analysis of the problem you want to assert
- (2) Collection of information and evidence
- (3) Evidence comparison and analysis
- (4) Composition of one's opinion
- (5) Composition of assertions of one's opinion
- (6) Effective presentation
- (7) Critique / question skills for other people's presentations
- (8) Evaluation of presentations by others

【Learning activities outside of classroom】

Each lesson requires 2~5 hours of preparation and 1 hour of review.

【Grading Criteria /Policy】

Your overall grade in the class will be decided based on the following

Appropriateness and completeness of research (25%), content and quality of presentation, logical composition, logical development (25%), expressiveness of presentation (25%), appropriateness of questions and answers (25%)

LIT700B2

日本文学特殊演習 A

加藤 昌嘉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

『源氏物語』の写本を読みます。本年度は、河内本の「若紫」巻を解説してゆきます。

【到達目標】

以下の2点を身に付けることが目標です。

- ◎古文を翻訳する能力
- ◎語法を調査する能力

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

発表者は、『源氏物語』の写本を元に、整定本文と正確な現代語訳を作ります。それを元に、参加者全員で議論します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	『源氏物語』概説
2	「若紫」	わらは病
3	「若紫」	僧都
4	「若紫」	明石
5	「若紫」	竜王
6	「若紫」	尼
7	「若紫」	少女
8	「若紫」	僧都の坊
9	「若紫」	少女の出自
10	「若紫」	相談
11	「若紫」	和歌
12	「若紫」	聖
13	「若紫」	和歌
14	「若紫」	玉

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

「桐壺」巻と「若紫」巻を読み進めること。予習復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

『尾州家河内本源氏物語 第一巻』（八木書店）を用います。授業時に説明をします。

【参考書】

以下のいずれかを座右に置いてください。

- ◎柳井滋ほか校注『源氏物語』1（岩波文庫）
- ◎石田穰二ほか校注『新潮日本古典集成 源氏物語』1（新潮社）
- ◎伊藤博編集『源氏物語の鑑賞と基礎知識 若紫』（至文堂）
- ◎林望『謹訳源氏物語 改訂新修』1（祥伝社文庫）
- ◎大塚ひかり全訳『源氏物語』1（ちくま文庫）

【成績評価の方法と基準】

発表の出来50%、議論参加度50%。

【学生の意見等からの気づき】

議論しやすい雰囲気作りを心がけます。

【担当教員の専門分野等】

- ◆専門領域：日本古典文学
- ◆研究テーマ：平安時代の物語
- ◆主要研究業績：著書『『源氏物語』前後左右』（勉誠出版）

【Outline (in English)】

▼ 【Course outline】

This course deals with the manuscript of "The Tale of Genji". This year, we will decode "Kawachi-bon", "Wakamurasaki" chapter.

▼【Learning Objectives】

By the end of this course, students are expected to acquire A and B.

-A.The ability to translate ancient texts.

-B.The ability to investigate grammar.

▼【Learning activities outside of classroom】

Before each class meeting, students will be expected to have read "Kiritsubo" and "Wakamurasaki" chapter. Your study time will be more than four hours for a class.

▼【Grading Criteria /Policy】

Grading will be determined by the X and Y.

-X.Quality of the presentation. 50%

-Y.Participation in the discussion. 50%

LIT700B2

日本文学特殊演習 B

加藤 昌嘉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

『源氏物語』の写本を読みます。本年度は、河内本の「若紫」巻を解読してゆきます。

【到達目標】

以下の2点を身に付けることが目標です。

◎古文を翻訳する能力

◎語法を調査する能力

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

発表者は、『源氏物語』の写本を元に、整定本文と正確な現代語訳を作ります。それを元に、参加者全員で議論します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	『源氏物語』概説
2	「若紫」	管絃
3	「若紫」	左大臣邸
4	「若紫」	葵の上
5	「若紫」	手紙
6	「若紫」	惟光
7	「若紫」	藤壺
8	「若紫」	和歌
9	「若紫」	妊娠
10	「若紫」	夢
11	「若紫」	尼の家
12	「若紫」	遺言
13	「若紫」	若草
14	「若紫」	尼の死

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

「桐壺」巻と「若紫」巻を読み進めること。予習復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

『尾州家河内本源氏物語 第一巻』（八木書店）を用います。授業時に説明をします。

【参考書】

以下のいずれかを座右に置いてください。

◎柳井滋ほか校注『源氏物語』1（岩波文庫）

◎石田穰二ほか校注『新潮日本古典集成 源氏物語』1（新潮社）

◎伊藤博編集『源氏物語の鑑賞と基礎知識 若紫』（至文堂）

◎林望『謹訳源氏物語 改訂新修』1（祥伝社文庫）

◎大塚ひかり全訳『源氏物語』1（ちくま文庫）

【成績評価の方法と基準】

発表の出来50%、議論参加度50%。

【学生の意見等からの気づき】

絵や写真なども使い、理解を深めます。

【担当教員の専門分野等】

◆専門領域：日本古典文学

◆研究テーマ：平安時代の物語

◆主要研究業績：著書『揺れ動く『源氏物語』』（勉誠出版）

【Outline (in English)】

▼【Course outline】

This course deals with the manuscript of "The Tale of Genji". This year, we will decode "Kawachi-bon", "Wakamurasaki" chapter.

▼【Learning Objectives】

By the end of this course, students are expected to acquire A and B.

-A.The ability to translate ancient texts.

-B.The ability to investigate grammar.

▼【Learning activities outside of classroom】

Before each class meeting, students will be expected to have read "Kiritsubo" and "Wakamurasaki" chapter. Your study time will be more than four hours for a class.

▼【Grading Criteria /Policy】

Grading will be determined by the X and Y.

-X.Quality of the presentation. 50%

-Y.Participation in the discussion. 50%

LIT700B2

日本文学特殊演習 A

伊海 孝充

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本講義では、世阿弥の伝書を通して鬼の物真似・演技について考えていく。世阿弥は鬼の芸について、否定的な見解を述べる一方で、その演技の効果についても述べている。伝書を通してその演技を分析するとともに、能や狂言の作品も読んでいく。また、受講者の興味に関わらせて、能以前の鬼の芸能や、能以降の鬼の描き方についても取り上げたい。

【到達目標】

本講義では、世阿弥の伝書と能・狂言の作品の精読を通して、能や狂言、その他の芸能の基本的知識と研究手法を正確に理解することを目指す。自分自身の研究を進めるためには、論文で論じるための問題点を見つけ方、それを掘り下げるための手法を身につける必要がある。本講義ではこの二点を意識して、当該資料を分析していく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式によって進める。参加者は当該資料から興味のある曲を選択し、資料分析とともに作品解釈を行なっていく。また発表者は自分自身の問題意識を提示してもらい、参加者で討論していく。専門外の者は、別な方法での発表も考える。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	受講生の自己紹介と半期の計画を相談。
第 2 回	鬼と芸能①	日本芸能史と鬼
第 3 回	鬼と芸能②	追儺について
第 4 回	世阿弥について	世阿弥の生涯
第 5 回	世阿弥の伝書	世阿弥伝書の概略
第 6 回	『花伝』第二物学条々①	諸本比較と注釈
第 7 回	『花伝』第二物学条々②	諸本比較と注釈
第 8 回	その他の世阿弥伝書①	諸本比較と注釈
第 9 回	その他の世阿弥伝書②	諸本比較と注釈
第 10 回	鬼能①	受講者の報告
第 11 回	鬼能②	受講者の報告
第 12 回	鬼狂言	受講者の報告
第 13 回	鬼狂言	受講者の報告
第 14 回	まとめ	本講義内容の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自主的に舞台鑑賞に行くことを勧める。能・狂言だけでなく、歌舞伎・人形浄瑠璃にも観劇に行ってほしい。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

授業内に指示する。

【参考書】

授業内に指示する。

【成績評価の方法と基準】

講義での発表 70%

講義での発言 30%

【学生の意見等からの気づき】

専門外の学生にも配慮してすすめる。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本中世文学

＜研究テーマ＞能楽

＜主要研究業績＞『切合能の研究』（檜書店、2011 年）「舞う身体としての曾我兄弟：幸若舞曲との比較から」（『能と狂言』19 号、2021 年 11 月）

【Outline (in English)】

In this lecture, we will study the mimicry and performance of Oni based on Zeami's biography. We will read Oni Noh and Oni Kyogen, and we will also cover Oni in other performing arts. The purpose of this lecture is to gain knowledge of classical performing arts and to learn how to study literature and performing arts. Grades will be based on presentations (70%) and remarks in class (30%).

LIT700B2

日本文学特殊演習 B

伊海 孝充

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

春学期同様、能・狂言における鬼の物真似・演技について考えていく。まず春学期に行った世阿弥伝書の鬼の演技についての記述や鬼能・鬼狂言をもとに、他のジャンルの鬼の描写と比較していく。

【到達目標】

本講義では、世阿弥の伝書と能・狂言の作品の精読を通して、能や狂言、その他の芸能の基本的知識と研究手法を正確に理解することを目標とする。さらにその知識や方法を別の研究にも応用できるようにする。本講義ではこの二点を意識して、当該資料を分析していく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式によって進める。参加者は当該資料から興味のある曲を選択し、資料分析とともに作品解釈を行なっていく。また発表者は自分自身の問題意識を提示してもらい、参加者で討論していく。専門外の者は、別な方法での発表も考える。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	春学期発表分の振り返り。秋学期からの参加者への概要説明。
第 2 回	世阿弥伝書における鬼の演技	春学期の復習
第 3 回	鬼能・鬼狂言	春学期の復習
第 4 回	説話文学の鬼と能楽の鬼①	受講者の発表
第 5 回	説話文学の鬼と能楽の鬼②	受講者の発表
第 6 回	説話文学の鬼と能楽の鬼③	受講者の発表
第 7 回	御伽草子の鬼と能楽の鬼①	受講者の発表
第 8 回	御伽草子の鬼と能楽の鬼②	受講者の発表
第 9 回	近世文学の鬼と能楽の鬼①	受講者の発表
第 10 回	近世文学の鬼と能楽の鬼②	受講者の発表
第 11 回	民俗芸能の鬼と能楽の鬼①	受講者の発表
第 12 回	民俗芸能の鬼と能楽の鬼②	受講者の発表
第 13 回	民俗芸能の鬼と能楽の鬼③	受講者の発表
第 14 回	総括	能・狂言の鬼のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自主的に舞台鑑賞に行くことを勧める。能・狂言だけでなく、歌舞伎・人形浄瑠璃にも観劇に行ってほしい。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

授業内に指示する。

【参考書】

授業内に指示する。

【成績評価の方法と基準】

講義での発表 70%

講義での発言 30%

【学生の意見等からの気づき】

専門外の学生にも配慮する。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本中世文学

＜研究テーマ＞能楽

＜主要研究業績＞『切合能の研究』（檜書店、2011年）「舞う身体としての曾我兄弟：幸若舞曲との比較から」（『能と狂言』19号、2021年11月）

【Outline (in English)】

As in the spring semester, we will study the mimicry and performance of Oni in Noh and Kyogen. In this semester, we will compare and analyze Oni in Noh, Kyogen and other genres. The purpose of this lecture is to absorb knowledge of classical arts and to apply that knowledge to other research. Grades will be based on presentations (70%) and remarks in class (30%).

LIT700B2

日本文学特殊演習 A

スティーヴン・ネルソン

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本研究（特に古典音楽、伝統芸能、古典文学など）の在り方と方法。具体例として、古写本、古版本、活字本などを用いて、『古今著聞集』巻第六 管絃歌舞第七 を2年計画で講読する（2022-23年度）。

【到達目標】

ネルソン・ゼミは、さまざまな国籍の、さまざまな研究分野に関心をもつ学生が所属するので、「日本研究」をするに当たり、どのような研究テーマを選び、どのように焦点を絞り、どのような手続きをとっていかなければならないかを、参加学生それぞれに即して、指導していく場とする。学生の学年によって到達目標は異なってくる。博士後期課程1年次生は研究課題を明確にし、先行研究を十分に調査・精読し、秋学期の中間発表等を経て論文の構想を十分に練ること。博士後期課程2・3年次はそれぞれ秋学期と春学期の中間発表に備え、授業や中間発表会等における指摘を受け止め、十分に練った目次案に従い、余裕を持って論文を執筆すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的に学生の研究発表を中心に、質疑応答、全員での討論、指導教員の講評等を交えて行う。以下に一応の授業計画を示してみたが、具体的な内容・スケジュールは、参加学生の人数・関心対象・学習意欲・予備知識などを鑑みて、第1回のガイダンスの際に決めたいと考えている。演習形式なので、フィードバックは授業内にて行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス 講読序説	自己紹介（全員）、教員による授業の進め方の説明 『古今著聞集』巻第六 管絃歌舞第七 について
第2回	研究課題の紹介（2・3年次生）① 講読①	博士論文のテーマをすでに決めている学生の研究報告 説話 230（小序）
第3回	研究課題の紹介（2・3年次生）② 講読②	博士論文のテーマをすでに決めている学生の研究報告 説話 231・232
第4回	研究課題の紹介（2・3年次生）③ 講読③	博士論文のテーマをすでに決めている学生の研究報告 説話 233
第5回	関心対象の紹介（1年次生）① 講読④	関心対象について、学術研究の可能性を考える 説話 234・235
第6回	関心対象の紹介（1年次生）② 講読⑤	関心対象について、学術研究の可能性を考える 説話 236・237・238
第7回	博士後期課程の中間報告（2・3年次生）① 講読⑥	中間発表会に向けた配布資料・読み上げ原稿の準備 説話 239・240
第8回	修士課程の中間報告（2・3年次生）② 講読⑦	中間発表会に向けた配布資料・読み上げ原稿の準備 説話 241・242
第9回	研究動向の確認（1年次生） 講読⑧	先行研究の調査に基づいた文献目録の提示と検討 説話 243

第10回	先行研究の論旨の整理 (2・3 年次生) ① 講読 ⑨	先行研究の状況を調査し、論旨を 整理した上、各自の研究テーマの 研究史上の意義を検討 説話 244
第11回	先行研究の論旨の整理 (2・3 年次生) ② 講読 ⑩	先行研究の状況を調査し、論旨を 整理した上、各自の研究テーマの 研究史上の意義を検討 説話 245
第12回	先行研究の論旨の整理 (1 年次生) ① 講読 ⑪	先行研究の状況を調査し、論旨を 整理した上、各自の研究テーマの 研究史上の意義を検討 説話 246・247
第13回	先行研究の論旨の整理 (1 年次生) ② 講読 ⑫	先行研究の状況を調査し、論旨を 整理した上、各自の研究テーマの 研究史上の意義を検討 説話 248・249
第14回	夏期休暇中の作業計画 立案 講読 まとめ	各自が行うべき作業の検討 春学期総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

第1回 5分程度の自己紹介を用意し、授業に期待することが述べられるように考えてくる。
以後 各自の研究を意欲的に進める。
本授業の準備（予習）および復習時間は、合わせて4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特になし。副読本として岩波書店日本古典文学大系（旧大系）『古今著聞集』を用いるが、入手の仕方に関しては第1回講義の際に案内する。

【参考書】

必要に応じて授業内や個人指導の際に指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表・各種作成資料の内容 50 %、討論への参加等の平常点 50 %。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 日本音楽史学
＜研究テーマ＞ 日本の楽譜、初期の講式（漢文訓読体の声明の一種）と平家語りの音楽構成法、平安時代の年中行事と音楽、声歌／唱歌～越殿楽謡物～箏組歌の系譜、『源氏物語』・『平家物語』の音楽、日本古典文学の英訳など
＜主要研究業績＞
①「唐代伝来の音楽とその再現」（『唐代音楽の研究と再現 資料集』上野学園大学日本音楽史研究所、2014 年）
②「『秘曲尽くし』再現—『文机談』に見える秘曲を聴く—」（磯水絵編『今日は一日、方丈記』新典社、2013 年）◇付録 CD 「『秘曲尽くし』再現」（秘曲再現監修）に次の雅楽秘曲の復元演奏を収録：箏・篳篥《小調子》、笙《平調入調》、琵琶《大常博士楊真操》、箏《千金調子》、琵琶《石上流泉》、琵琶《上原石上流泉》、箏《由加見調子》、琵琶《啄木》、笛・篳篥・笙・太鼓（陵王）《荒序》
③「工尺譜の起源をめぐって —唐代の文字譜との関係—」（磯水絵編『論集 文学と音楽史 —詩歌管絃の世界—』、和泉書院、2013 年）

【Outline (in English)】

Course Outline: This is a postgraduate seminar in Japanese studies, mainly for students writing their doctoral dissertation under the instructor's supervision. It is also open to students from other seminars who are interested in methodological issues involved in the study of the performing arts of Japan. The class centers on presentations given by students on their research and other related topics. In each class of the academic years 2022-23, we will also read a section or sections from the 'Kangen-kabu' ('Music, Song and Dance') chapter of *Kokon chomon-jū* ('A collection of notable tales old and new'), a collection of historical tales compiled by Tachibana no Narisue in 1254.

Learning Objectives: The primary objective of the class is for the students to successfully complete their dissertations in the stipulated timeframe, while obtaining the methodological skills to do so, as well as to continue research in the future if they so desire.

Learning Activities Outside of the Classroom: Students are expected to undertake the activities necessary for successful completion of their dissertations, and participate actively in our reading of the source text described above. The latter will require some hours of library work each week.

Grading Criteria/Policy: 50% for preparation of materials used in class; 50% for active participation in class discussion.

LIT700B2

日本文学特殊演習 B

スティーヴン・ネルソン

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本研究（特に古典音楽、伝統芸能、古典文学など）の在り方と方法。具体例として、古写本、古版本、活字本を用いて、『古今著聞集』巻第六 管絃歌舞第七を2年計画で講読する（2022-23年度）。

【到達目標】

ネルソン・ゼミは、さまざまな国籍の、さまざまな研究分野に関心をもつ学生が所属するので、「日本研究」をするに当たり、どのような研究テーマを選び、どのように焦点を絞り、どのような手続きをとっていかなければならないかを、参加学生それぞれに即して、指導していく場とする。学生の学年によって到達目標は異なってくる。博士後期課程1年次生は研究課題を明確にし、先行研究を十分に調査・精読し、秋学期の中間発表等を経て論文の構想を十分に練ること。博士後期課程2・3年次生はそれぞれ秋学期、春学期の中間発表に備え、授業や中間発表会等における指摘を受け止め、十分に練った目次案に従い、余裕を持って論文を執筆すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的に学生の研究発表を中心に、質疑応答、全員での討論、指導教員の講評等を交えて行う。以下に一応の授業計画を示してみたが、具体的な内容・スケジュールは、参加学生の人数・関心対象・学習意欲・予備知識などを鑑みて、第1回のガイダンスの際に決めたいと考えている。演習形式なので、フィードバックは授業内にて行なう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	夏期休暇の成果報告	秋学期スケジュールの確認 院生全員による夏期休暇中の研究成果報告
第2回	博士論文構想の報告（2・3年次生）① 講読①	博士論文の構想を説明し、作成作業の進捗状況を報告 説話 250・251
第3回	博士論文構想の報告（2・3年次生）② 講読②	博士論文の構想を説明し、作成作業の進捗状況を報告 説話 252
第4回	博士論文構想の報告（2・3年次生）③ 講読③	博士論文の構想を説明し、作成作業の進捗状況を報告 説話 253
第5回	先行研究の紹介と整理（1年次生）① 講読④	研究課題に関する先行研究を調査・精読し、学術論文の作成方法、論理展開、文体や体裁の特徴を学ぶ 説話 254
第6回	先行研究の紹介と整理（1年次生）② 講読⑤	研究課題に関する先行研究を調査・精読し、学術論文の作成方法、論理展開、文体や体裁の特徴を学ぶ 説話 255
第7回	博士後期課程の中間報告（1・2年次生）① 講読⑥	中間発表会に向けた配布資料・読み上げ原稿の準備 説話 256
第8回	博士後期課程の中間報告（1・2年次生）② 講読⑦	中間発表会に向けた配布資料・読み上げ原稿の準備 説話 257

第9回	博士論文の中間報告（2年次生）① 講読⑧	博士論文執筆の進捗状況に関する報告 説話 258
第10回	博士論文の中間報告（2年次生）② 講読⑨	博士論文執筆の進捗状況に関する報告 説話 259
第11回	博士論文の構想発表（1年次生）① 講読⑩	学術的な論理展開に基づき、博士論文の目次案を立て、各章の内容について概要を記す 説話 260・261
第12回	博士論文の構想発表（1年次生）② 講読⑪	学術的な論理展開に基づき、博士論文の目次案を立て、各章の内容について概要を記す 説話 262・263
第13回	担当教員による年末講義	担当教員自身の、本年度の研究活動に関する講義
第14回	まとめ 講読 まとめ	春季休暇中の作業課題に関する計画を示す

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

第1回 夏期休暇中の研究成果をまとめてくる。
以後 各自の研究を意欲的に進める。
本授業の準備（予習）および復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特になし。副読本として岩波書店日本古典文学大系（旧大系）『古今著聞集』を用いる。

【参考書】

必要に応じて授業内や個人指導の際に指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表・各種作成資料の内容 50 %、討論への参加等の平常点 50 %。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本音楽史学

<研究テーマ> 日本の楽譜、初期の講式（漢文訓読体の声明の一種）と平家語りの音楽構成法、平安時代の年中行事と音楽、声歌／唱歌～越殿楽謡物～箏組歌の系譜、『源氏物語』・『平家物語』の音楽、日本古典文学の英訳など

<主要研究業績>

①「唐代伝来の音楽とその再現」（『唐代音楽の研究と再現 資料集』上野学園大学日本音楽史研究所、2014年）

②「『秘曲尽くし』再現—『文机談』に見える秘曲を聴く—」（磯水絵編『今日は一日、方丈記』新典社、2013年）◇付録CD「『秘曲尽くし』再現」（秘曲再現監修）に次の雅楽秘曲の復元演奏を収録：筆築《小調子》、笙《平調入調》、琵琶《大常博士楊真操》、箏《千金調子》、琵琶《石上流泉》、琵琶《上原石上流泉》、箏《由加見調子》、琵琶《啄木》、笛・筆築・笙・太鼓（陵王）《荒序》

③「蘇る平安の音」（神野藤昭夫・多忠輝監修『越境する雅楽文化』、書肆フローラ、2009年）

【Outline (in English)】

Course Outline: This is a postgraduate seminar in Japanese studies, mainly for students writing their doctoral dissertation under the instructor's supervision. It is also open to students from other seminars who are interested in methodological issues involved in the study of the performing arts of Japan. The class centers on presentations given by students on their research and other related topics. In each class of the academic years 2022-23, we will also read a section or sections from the 'Kangen-kabu' ('Music, song and dance') chapter of *Kokon chomon-jū* ('A collection of notable tales old and new'), a collection of historical tales compiled by Tachibana no Narisue in 1254.

Learning Objectives: The primary objective of the class is for the students to successfully complete their dissertations in the stipulated timeframe, while obtaining the methodological skills to do so, as well as to continue research in the future if they so desire.

Learning Activities Outside of the Classroom: Students are expected to undertake the activities necessary for successful completion of their dissertations, and participate actively in our reading of the source text described above. The latter will require some hours of library work each week.

Grading Criteria/Policy: 50% for preparation of materials used in class: 50% for active participation in class discussion.

LIT700B2

日本文学特殊演習 A

中丸 宣明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ①受講生各自の研究する作家・作品に関する注釈・分析・立論・評価の能力の養成。
- ②日本近・現代文学の文学史的展開のあり方を把握すること。①と関連して、各自の研究する対象の位置が明確になるように努める。
- ③受講生各自の研究する作家・作品に近接する仕事をした作家・作品に関する認識の養成。これにより幅広い知見を獲得する。
- ④上記の研究を推進しながら、博士論文作成へと連続させていくこと。
- ⑤日本文学の研究指導能力の涵養。

【到達目標】

受講者各人が、具体的な作品・テキストに向き合い、立論・注釈・解釈・先行文献の調査などのさまざまな方法を学びつつ、論文作成の実際を学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

日本の一九世紀及び二〇世紀前半の任意の作品・テキストを取り上げ、各自の研究計画に基づいて授業で発表・討議する。自己の研究を深めていくと同時に、他の受講生からの批判、助言、異なった観点や見解等を汲み上げながら、文学認識を高度化していく。それらにより、目標とする優れた博士論文作成へと繋げていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1 回	オリエンテーション	本授業（演習）の目的と運営概説。 春学期の成果との関連性の確認。
2 回	研究史を踏まえた方法論の諸問題 1	近代文学研究史をどう自分のものにするか。
3 回	研究史を踏まえた方法論の諸問題 2	近代文学研究史をどう自分のものにするか。
4 回	各発表者が各発表テーマにしたがって各方法論に従って、発表の後討議	各人のテーマに基づく研究発表・討議。
5 回	各発表者が各発表テーマにしたがって各方法論に従って、発表の後討議	各人のテーマに基づく研究発表・討議。
6 回	各発表者が各発表テーマにしたがって各方法論に従って、発表の後討議	各人のテーマに基づく研究発表・討議。
7 回	各発表者が各発表テーマにしたがって各方法論に従って、発表の後討議	各人のテーマに基づく研究発表・討議。
8 回	各発表者が各発表テーマにしたがって各方法論に従って、発表の後討議	各人のテーマに基づく研究発表・討議。
9 回	各発表者が各発表テーマにしたがって各方法論に従って、発表の後討議	各人のテーマに基づく研究発表・討議。

10 回	各発表者が各発表テーマにしたがって各方法論に従って、発表の後討議	各人のテーマに基づく研究発表・討議。
11 回	各発表者が各発表テーマにしたがって各方法論に従って、発表の後討議	各人のテーマに基づく研究発表・討議。
12 回	各発表者が各発表テーマにしたがって各方法論に従って、発表の後討議	各人のテーマに基づく研究発表・討議。
13 回	各発表者が各発表テーマにしたがって各方法論に従って、発表の後討議	各人のテーマに基づく研究発表・討議。
14 回	総括	それぞれの反省と今後の展望。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表者は担当作品に関する調査・研究を発表する。必要時間は無限。他の受講者は当該作品についての視点・論点の感想文を提出する。本授業の準備学習・復習時間は、各 24 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

受講者の便宜・要請に従って、決定する。発表者は当該作品のテキストを決定し、ゼミ員に指示すること。

【参考書】

各自の発表の中で、発表者の示すものに加えて指示。

【成績評価の方法と基準】

発表（40 %）および討論への参加（40 %）、期末レポート（20%）。

【学生の意見等からの気づき】

討議の中で聴取。

【担当教員の専門分野等】

< 専門領域 >

日本近代文学

< 研究テーマ >

近代文学の成立期の研究 - 19 世紀文学論

自然主義文学の形成と構造

< 主要研究業績 >

・「紀久八狂乱-広津柳浪『乱菊物語』と小栗風葉『髪下地』」「国語と国文学」（東京大学国語国文学会）2010. 5

・「草紙のゆくえ-雑誌「人情世界」の位置」「文学」（岩波書店）2009. 11・12

・「『東京絵入新聞』の図像学-『金之助の話説』の成立まで」「日本近代文学」（日本近代文学会）2008. 5

【Outline (in English)】

< Course outline > See Japanese notation. Those who do not understand the Japanese language are not eligible. Because it is an academic lecture on Japanese literature, it requires more Japanese ability than daily conversation.

< Learning Objectives > Acquire the basics of literary research. See "outline and objectives"

< Learning activities outside of classroom > Research presenters prepare for infinite time. Other students will be expected to spend 24 hours to understand the course content. See "outline and objectives"

< Grading Criteria/Policy > Completeness of research presentation (40 %), quality of discussion (40 %), year-end report (20%)

LIT700B2

日本文学特殊演習 B

中丸 宣明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ①受講生各自の研究する作家・作品に関する注釈・分析・立論・評価の能力の養成。
- ②日本近・現代文学の文学史的展開のあり方を把握すること。①と関連して、各自の研究する対象の位置が明確になるように努める。
- ③受講生各自の研究する作家・作品に近接する仕事をした作家・作品に関する認識の養成。これにより幅広い知見を獲得する。
- ④上記の研究を推進しながら、博士論文作成へと連続させていくこと。
- ⑤研究指導能力の涵養。

Acquire the basics of literary research. See "outline and objectives"

【到達目標】

受講者各人が、具体的な作品・テキストに向き合い、立論・注釈・解釈・先行文献の調査などのさまざまな方法を学びつつ、論文作成の実際を学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

各回の担当者は、各自任意の作品を選び、調査・研究・発表する。受講者はその日に取り上げる作品についての感想レポートを提出し、司会者は全体の進捗に当たる。リアクションペーパーや課題等に対するフィードバックは、結果の集計ないし代表的な応答をプリント等で共有し、議論のテーマとする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1 回	オリエンテーション	本授業（演習）の目的と運営概説。春学期の成果との関連性の確認。
2 回	春学期のでの成果を踏まえたうえでの課題の整理	各自の論の反省的省察。
3 回	受講者各自による各テーマの各方法論に従い発表及び討議	各人のテーマに基づく研究発表・討議。
4 回	受講者各自による各テーマの各方法論に従い発表及び討議	各人のテーマに基づく研究発表・討議。
5 回	受講者各自による各テーマの各方法論に従い発表及び討議	各人のテーマに基づく研究発表・討議。
6 回	受講者各自による各テーマの各方法論に従い発表及び討議	各人のテーマに基づく研究発表・討議。
7 回	受講者各自による各テーマの各方法論に従い発表及び討議	各人のテーマに基づく研究発表・討議。
8 回	受講者各自による各テーマの各方法論に従い発表及び討議	各人のテーマに基づく研究発表・討議。
9 回	受講者各自による各テーマの各方法論に従い発表及び討議	各人のテーマに基づく研究発表・討議。

10 回	受講者各自による各 テーマの各方法論に従 い発表及び討議	各人のテーマに基づく研究発表・ 討議。
11 回	受講者各自による各 テーマの各方法論に従 い発表及び討議	各人のテーマに基づく研究発表・ 討議。
12 回	受講者各自による各 テーマの各方法論に従 い発表及び討議	各人のテーマに基づく研究発表・ 討議。
13 回	受講者各自による各 テーマの各方法論に従 い発表及び討議	各人のテーマに基づく研究発表・ 討議。
14 回	総括	それぞれの反省と今後の展望。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表者は担当作品に関する調査・研究を発表する。必要時間は無限。他の受講者は当該作品についての視点・論点の感想文を提出する。本授業の準備学習・復習時間は、各 24 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

受講者の便宜・要請に従って、決定する。発表者は当該作品のテキストを決定し、ゼミ員に指示すること。

【参考書】

各自の発表の中で、発表者の示すものに加えて指示。

【成績評価の方法と基準】

発表（40 %）および討議への参加（40 %）、期末レポート（20%）。

【学生の意見等からの気づき】

討議の中で聴取。In discussion in the seminar.

【担当教員の専門分野等】

< 専門領域 >

日本近代文学

< 研究テーマ >

近代文学の成立期の研究－19 世紀文学論

自然主義文学の形成と構造

< 主要研究業績 >

・「紀久八狂乱－広津柳浪『乱菊物語』と小栗風葉『髪下地』」「国語と国文学」（東京大学国語国文学会）2010. 5

・「草双紙のゆくえ－雑誌「人情世界」の位置」「文学」（岩波書店）2009. 11・12

・「『東京絵入新聞』の図像学－『金之助の話し』の成立まで」「日本近代文学」（日本近代文学会）2008. 5

【Outline (in English)】

< Course outline > See Japanese notation. Those who do not understand the Japanese language are not eligible. Because it is an academic lecture on Japanese literature, it requires more Japanese ability than daily conversation.

< Learning Objectives > Acquire the basics of literary research. See "outline and objectives"

< Learning activities outside of classroom > Research presenters prepare for infinite time. Other students will be expected to spend 24 hours to understand the course content. See "outline and objectives"

< Grading Criteria/Policy > Completeness of research presentation (40 %), quality of discussion (40 %), year-end report (20%)

LIT700B2

日本文学特殊演習 A

藤村 耕治

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

1. 日本近・現代文学の文芸作品（小説・評論・詩等）についての分析・検討をテーマとする。特に昭和期以降現在に至るまでの作家・作品を中心に扱う。
2. 受講者は自身の研究テーマに即して、研究報告を発表用資料として論文形式で作成し、それを基に発表を行い、他の受講者との討議を通じて、より深く厳密な理解・分析・解釈・評価の力を身につける。
3. 博士論文執筆のための高度な文章力・論理構成力を身につける。

【到達目標】

1. 受講者が選択した作家・作品について、従来の研究成果を十分に踏まえつつ、新しい、独自の観点から分析・検討を行い、博士論文の一部を構成する論文を執筆すること。
2. 発表用資料の作成・相互討議などを通じて自身の学問的な方法論を獲得するとともに、学会発表などに耐えうる客観的で高度な研究の力を身につけること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

各回の発表担当者が、自身のテーマとする作家・作品について論文形式の発表用資料を作成して発表し、他の受講者を交えて討議する形で行う。発表者は討議内容を踏まえて、自身の発表における不備や再考を要する点などを十分に検討し、精度を高めていき、最終的には学会誌等に投稿可能な論文に練り上げる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	近現代文学研究についての概説	近現代の文学研究に関する概説及び受講者各自の研究テーマと現時点での展望について聞く。
第 2 回	担当者 1 による発表・報告①	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第 3 回	担当者 1 による発表・報告②	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
第 4 回	担当者 1 による発表・報告③	結論と今後の課題についての報告。
第 5 回	担当者 2 による発表・報告①	第 2 回に同じ。
第 6 回	担当者 2 による発表・報告②	第 3 回に同じ。
第 7 回	担当者 2 による発表・報告③	第 4 回に同じ。
第 8 回	担当者 3 による発表・報告①	第 2 回に同じ。
第 9 回	担当者 3 による発表・報告②	第 3 回に同じ。
第 10 回	担当者 3 による発表・報告③	第 4 回に同じ。
第 11 回	担当者 4 による発表・報告①	第 2 回に同じ。
第 12 回	担当者 4 による発表・報告②	第 3 回に同じ。
第 13 回	担当者 4 による発表・報告③	第 4 回に同じ。

第14回 総括①

各自の発表・討議に基づいた研究の総括的報告。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表担当者は、選択した作家・作品について、自身の研究テーマに即した形での問題提起を行うとともに、毎回 2000 字から 4000 字程度の発表用資料を作成する。したがって、発表担当者は準備に 5 ～10 時間程度を要することになります。

担当者以外の受講者も、当該作家・作品について各自の問題意識に沿って分析・検討を行ってこよう。担当者と互角に討議し、的確な批評が可能となるように十分な準備をしてこよう必要がある。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

各自の研究テーマによって選択された作品。

【参考書】

必要に応じて、適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

1. 発表・報告時におけるレジュメ（論文形式）とプレゼンテーションの内容（80 %）
2. 討議の場における積極的な参加態度及び発言（20 %）

【学生の意見等からの気づき】

各人の博士論文の一部を構成しうような論文を年間に少なくとも一本は完成させることを目指して指導に当たる。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近・現代文学

＜研究テーマ＞特に第二次大戦後の戦後派文学およびその継承者たちの作品。

＜近年の主要研究業績＞

- ①「笠原淳論序説」（日本文学誌要 93 号、2016）
- ②「高橋和巳 未完の可能性」（『高橋和巳の文学と思想』コールサック社、2018）
- ③「高橋和巳と三島由紀夫覚書」（『新世紀日本文学論究』第 6 号、2022）

【Outline (in English)】

Outline

1.The theme is the analysis and study of modern and contemporary Japanese literature.

2.Students present their research results according to their own themes.

Through discussions with other learners, you will acquire deeper and more rigorous analysis, interpretation and evaluation skills.

3.To acquire advanced writing and logical composition skills for writing doctoral dissertations.

Learning Objectives

1.Learners will acquire a broad literary perspective and knowledge through the presentation of the person in charge.

2.Learners will acquire the ability finish academic papers based on the resumes they have created.

Learning activities outside of classroom

Presenters spend 5 to 10 hours preparing resumes, and other students spend 2 hours preparing to participate in the discussion.

Grading Criteria/policy

Evaluate by 40% of the presentation, 30% of the content of the report, 10% of the content of the sub-report, and 20% attendance attitude.

LIT700B2

日本文学特殊演習 B

藤村 耕治

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

1. 日本近・現代文学の文芸作品（小説・評論・詩等）についての分析・検討をテーマとする。特に昭和期以降現在に至るまでの作家・作品を中心に扱う。
2. 受講者は自身の研究テーマに即して、研究報告を発表用資料として論文形式で作成し、それを基に発表を行い、他の受講者との討議を通じて、より深く厳密な理解・分析・解釈・評価の力を身につける。
3. 博士論文執筆のための高度な文章力・論理構成力を身につける。

【到達目標】

1. 受講者が選択した作家・作品について、従来の研究成果を十分に踏まえつつ、新しい、独自の観点から分析・検討を行い、博士論文の一部を構成する論文を執筆すること。
2. 発表用資料の作成・相互討議などを通じて自身の学問的な方法論を獲得するとともに、学会発表などに耐えうる客観的で高度な研究の力を身につけること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

各回の発表担当者が、自身のテーマとする作家・作品について論文形式の発表用資料を作成して発表し、他の受講者を交えて討議する形で行う。発表者は討議内容を踏まえて、自身の発表における不備や再考を要する点などを十分に検討し、精度を高めていき、最終的には学会誌等に投稿可能な論文に練り上げる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	近現代文学研究についての概説	近現代の文学研究に関する概説及び受講者各自の研究テーマと現時点での展望について聞く。
第 2 回	担当者 1 による発表・報告①	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第 3 回	担当者 1 による発表・報告②	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
第 4 回	担当者 1 による発表・報告③	結論と今後の課題についての報告。
第 5 回	担当者 2 による発表・報告①	第 2 回に同じ。
第 6 回	担当者 2 による発表・報告②	第 3 回に同じ。
第 7 回	担当者 2 による発表・報告③	第 4 回に同じ。
第 8 回	担当者 3 による発表・報告①	第 2 回に同じ。
第 9 回	担当者 3 による発表・報告②	第 3 回に同じ。
第 10 回	担当者 3 による発表・報告③	第 4 回に同じ。
第 11 回	担当者 4 による発表・報告①	第 2 回に同じ。
第 12 回	担当者 4 による発表・報告②	第 3 回に同じ。
第 13 回	担当者 4 による発表・報告③	第 4 回に同じ。

第14回 総括①

各自の発表・討議に基づいた研究の総括的報告。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表担当者は、選択した作家・作品について、自身の研究テーマに即した形での問題提起を行うとともに、毎回 2000 字から 4000 字程度の発表用資料を作成する。したがって、発表担当者は準備に 5 ～10 時間程度を要することになります。

担当者以外の受講者も、当該作家・作品について各自の問題意識に沿って分析・検討を行ってこよう。担当者とは互角に討議し、的確な批評が可能となるように十分な準備をしてこよう必要がある。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

各自の研究テーマによって選択された作品。

【参考書】

必要に応じて、適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

1. 発表・報告時におけるレジュメ（論文形式）とプレゼンテーションの内容（80 %）
2. 討議の場における積極的な参加態度及び発言（20 %）

【学生の意見等からの気づき】

各人の博士論文の一部を構成しうよう論文を年間に少なくとも一本は完成させることを目指して指導に当たる。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近・現代文学

<研究テーマ> 特に第二次大戦後の戦後派文学およびその継承者たちの作品。

<近年の主要研究業績>

- ①「笠原淳論序説」（日本文学誌要 93 号、2016 年）
- ②「高橋和巳 未完の可能性」（『高橋和巳の文学と思想』コールサック社、2018）
- ③「高橋和巳と三島由紀夫覚書」（『新世紀日本文学論集』第六号、2022）

【Outline (in English)】

1.The theme is the analysis and study of modern and contemporary Japanese literature.

2.Students present their research results according to their own themes. Through discussions with other learners, you will acquire deeper and more rigorous analysis, interpretation and evaluation skills.

3.To acquire advanced writing and logical composition skills for writing a doctoral dissertation.

Learning Objectives

1.Learners will acquire a broad literary perspective and knowledge through the presentation of the person in charge.

2.Learners will acquire the ability finish academic papers based on the resumes they have created.

Learning activities outside of classroom

Presenters spend 5 to 10 hours preparing resumes, and other students spend 2 hours preparing to participate in the discussion.

Grading Criteria/policy

Evaluate by 40% of the presentation, 30% of the content of the report, 10% of the content of the sub-report, and 20% attendance attitude.

LIT700B2

日本文学特殊演習 A

山中 玲子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

能楽に関する博士論文の執筆に向けて、必要な先行研究の整理や要約、自分のアイディアを論理的な文章にすること等を、実地を通して学ぶ。

【到達目標】

- ①博士論文の完成に向けて研究テーマや執筆計画を明確にする。
- ②先行研究を十分に把握する。
- ③自分の発見やアイディアを論文としてまとめる技術を習得する。
- ④他人の研究発表や論文について建設的な論評ができるようになる。
- ⑤留学生の場合、論文を書くための正確な日本語を磨く。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

研究内容についての発表、先行論文の精読、個人指導による論文添削等を組み合わせていく。能楽に関する論文を執筆しようとしている学生を対象とした演習である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	研究計画の確認	博士論文の構想を明らかにし、本年度の研究計画を立てる。
第2回	先行研究の把握と問題点の抽出（1）リスト作成	博士論文の一章を構成する作品に関し、先行研究リストを作成する。
第3回	先行研究の把握と問題点の抽出（2）先行文献の論評	先行研究リスト中で特に重要な先行文献を読み論評する。
第4回	先行研究の把握と問題点の抽出（3）関連論文の論評	先行研究の中で触れられている関連論文にまで目を配り読み込んでいく。
第5回	論文執筆にむけた謡曲本文読解（1）	論文で扱う謡曲の本文を正確に読む。
第6回	論文執筆にむけた謡曲本文読解（2）	論文で扱う謡曲の本文を正確に読む。
第7回	論文執筆にむけた研究発表と討議（1）素材の検討	謡曲の素材となったと考えられる古典・巷説等を集めて比較検討する。
第8回	論文執筆にむけた研究発表と討議（2）素材と謡曲の比較	謡曲の素材となった古典・巷説等の比較検討の続き。
第9回	論文の執筆に向けての準備	何をどのような順で明らかにしていくか検討。
第10回	論文第1ドラフト（一部）の執筆と検討	第1段階ドラフト（一部）を読み合わせ、問題点を指摘する。文章についても指導。
第11回	前回の書き直しと次の章の書き足し（第2ドラフト）執筆と検討	第2ドラフトの読み合わせ、問題点の指摘。文章についても指導。
第12回	第3ドラフトの執筆と検討	第3ドラフトの読み合わせ、問題点の指摘。文章についても指導。
第13回	論文の執筆と修正1	前回までの指摘を踏まえて修正・加筆された原稿を読み、論評する。
第14回	論文の完成にむけての調整	論文に修正を加え完成させる。教員による個人指導。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

必要な文献を読み、発表の準備を計画的に進める。
論文のドラフトを書けるところまで書く。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

なし。先行研究等、読むべき文献は授業中に紹介する。

【参考書】

なし。先行研究等、読むべき文献は授業中に紹介する。

【成績評価の方法と基準】

持参する論文ドラフトの内容および持参頻度（50 %）、論文の達成度（50 %）を総合して判断する。

【学生の意見等からの気づき】

学生が論文をある程度書き上げるまで待つのではなく、一行も書けなければ本演習にてそれを報告し授業中に一行でも書き進むための場とする。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 能楽研究
＜研究テーマ＞ 能の作品研究・演出研究
＜主要研究業績＞

★「修羅能以前の「平家の能」―〈経盛〉の再検討を通して―」
軍記物語講座第二巻『無常の鐘声 平家物語』（松尾葦江編 花鳥社 2020 年）

★「能〈通小町〉遡源」『国語と国文学』93 巻 3 号・2016 年 3 月
★「〈檀風〉「孝養」の習事―死者を悼む演技をめぐって―」『文学』16 巻 2 号・2015 年 3 月

★「「天女舞」応用の一形態―神と遊女が舞った菩薩の舞―」『中世文学と隣接諸学 7』（竹林舎 2012 年）

【Outline (in English)】

The aim of this class is to acquire various knowledge and skills necessary to write a dissertation

LIT700B2

日本文学特殊演習 B

山中 玲子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

能楽に関する博士論文の執筆に向けて、必要な先行研究の整理や要約、自分のアイディアを論理的な文章にすること等を、実地を通して学ぶ。

【到達目標】

- ①博士論文の完成に向けて研究テーマや執筆計画を明確にする。
- ②先行研究を十分に把握する。
- ③自分の発見やアイディアを論文としてまとめる技術を習得する。
- ④他人の研究発表や論文について建設的な論評ができるようになる。
- ⑤留学生の場合、論文を書くための正確な日本語を磨く。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講生の研究内容についての発表、先行論文の輪読、個人指導による論文添削等を組み合わせていく。能楽に関する論文を執筆しようとしている学生を対象とした演習である。実際には現在在籍中の留学生の指導を念頭に置いている。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	後期の研究計画の確認	夏期休暇中の研究の進捗状況を報告し、後期の具体的な研究計画を確認する。
第 2 回	先行研究の把握と問題点の抽出（1）リスト作成	春学期とは別の作品またはテーマに関し、先行研究リストを作成する。
第 3 回	先行研究の把握と問題点の抽出（2）先行文献の論評	先行研究リスト中で特に重要な先行文献を読み論評する。
第 4 回	先行研究の把握と問題点の抽出（3）論文テーマの決定	先行研究を踏まえてそこに自分が何を付け加えるべきかを明らかにする。
第 5 回	論文執筆にむけた作品の精読（1）校訂本文の作成	論文で取り上げる作品のうち、信頼できる活字がない曲の校訂本文を作成する。
第 6 回	論文執筆にむけた作品の精読（2）小段構成の確認	作成した校訂本文の小段わけを行い、小段成・段構成を確定する。
第 7 回	論文執筆にむけた作品の精読（3）内容の理解	修辞の特徴などにも目を配りつつ作品の内容を読み取る。
第 8 回	論文執筆にむけた作品の精読（4）他作品との比較	同ジャンルの他作品とも比較しながら作品の特徴を考える。
第 9 回	論文の構成と材料の検討	ここまでの作業で確認できた内容を確認し、論文の構成を考える。
第 10 回	論文執筆にむけたドラフトの作成、添削	書きやすい部分からドラフト執筆を始め、それについて討議。日本語チェック。
第 11 回	論文執筆にむけたドラフトの書き継ぎと添削・修正（1）	前回修正部分のチェックと再修正。書き足した部分の論理整合性などの確認。日本語チェック。
第 12 回	論文執筆にむけたドラフトの書き継ぎと添削・修正（2）	前回修正部分のチェックと再修正。書き足した部分の論理整合性などの確認。日本語チェック。

- 第13回 論文執筆にむけたドラフトの書き継ぎと添削・修正（3） ドラフトがある程度まとまってきところで、一本の論文としての構成をもう一度考える。
- 第14回 まとめ 論文完成へ向けて 前回までの修正を踏まえ、論文完成にむけての確認をおこなう。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

必要な文献を読み、発表の準備を計画的に進める。
論文のドラフトを書けるところまで書く。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

なし。先行研究等、読むべき文献は授業中に紹介する。

【参考書】

なし。先行研究等、読むべき文献は授業中に紹介する。

【成績評価の方法と基準】

持参する論文ドラフトの内容および持参頻度（50％）、論文の達成度（20％）を総合して判断する。

【学生の意見等からの気づき】

学生が論文をある程度書き上げるまで待つのではなく、一行も書けなければ本演習にてそれを報告し授業中に一行でも書き進むための場とする。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 能楽研究
＜研究テーマ＞ 能の作品研究・演出研究
＜主要研究業績＞

★「修羅能以前の「平家の能」―〈経盛〉の再検討を通して―」
軍記物語講座第二巻『無常の鐘声 平家物語』（松尾葦江編 花鳥社 2020年）

★「能〈通小町〉遡源」『国語と国文学』93巻3号・2016年3月
★「〈檀風〉「孝養」の習事―死者を悼む演技をめぐる―」『文学』16巻2号・2015年3月
★「「天女舞」応用の一形態―神と遊女が舞った菩薩の舞―」『中世文学と隣接諸学7』（竹林舎 2012年）

【Outline (in English)】

The aim of this class is to acquire various knowledge and skills necessary to write a dissertation.

LIT700B2

日本文学特殊演習 A

小林 ふみ子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

受講生の関連分野の研究動向を分析しながら、博士論文の完成に至るまでの各自の研究の意義と進捗を確認する。

【到達目標】

受講生各自が自身の研究の意義を考えつつ、博士論文完成に向けて発表を重ねて研究を進め、学期に少なくとも1論文をしあげる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的に各自、成果を2～4週に1度程度報告します。オンラインか対面か、状況によって相談しましょう。演習時にコメントするほか、執筆した原稿を添削して返却します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	現状の確認	各自が現状と今年度の論文執筆目標を報告しあう。
第2回	学生の報告1	研究の現状と課題を報告し、助言しあう
第3回	学生の報告2	同上2
第4回	学生の報告3	同上3
第5回	学生の報告4	同上4
第6回	学生の報告5	同上5
第7回	学生の報告6	同上6
第8回	学生の報告7	同上7
第9回	学生の報告8	同上8
第10回	学生の報告9	同上9
第11回	学生の報告10	同上10
第12回	学生の報告11	同上11
第13回	学生の報告12	同上12
第14回	学生の報告13	同上13

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
ひたすら論文執筆と学会報告準備を！

【テキスト（教科書）】

適宜助言する。

【参考書】

適宜助言する。

【成績評価の方法と基準】

論文執筆状況で評価する（100％）。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。互いに率直に意見しあうのは大歓迎です。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近世文芸、文化
＜研究テーマ＞戯作と挿絵、絵本、江戸東京
＜2020-21年の主要業績＞
「南畝の狂歌の評価軸」『近世文芸』113号 2020年（査読付）
「四方赤良こと大田南畝判『狂歌角力草』稿本解題・翻刻」『法政大学文学部紀要』81号
「文政期前後の風景画入狂歌本の出版とその改題・再印―浮世絵風景版画流行の前史として」『浮世絵芸術』179号 2020（査読付）
共編・執筆『水都としての東京とヴェネツィア』（2022 法政大学出版局）

『墨水四時雑詠』（2021 太平書屋）
 『最後の文人 石川淳の世界』（2021 集英社・集英社新書）
 『趣味の歴史 江戸東京からたどる』（2020 文学通信）
 みなさんもがんばって書きましょう！

【Outline (in English)】

Reporting and discussing each student's academic activities

LIT700B2

日本文学特殊演習 B

小林 ふみ子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

受講生の関連分野の研究動向を分析しながら、各自の研究の意義と進捗を確認する。

【到達目標】

受講生各自が自身の研究の意義を考えつつ、博士論文に向けて発表を重ねて研究を進める。学期に少なくとも 1 論文を書くことを目標とする。演習での発表にコメントし、執筆した論文は添削して返却する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

学生の報告と議論で進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	現状の確認	各自が現状と今年度の論文執筆目標を報告しあう。
第 2 回	学生の報告 1	研究の現状と課題を報告し、助言しあう
第 3 回	学生の報告 2	同上
第 4 回	学生の報告 3	同上
第 5 回	学生の報告 4	同上
第 6 回	学生の報告 5	同上
第 7 回	学生の報告 6	同上
第 8 回	学生の報告 7	同上
第 9 回	学生の報告 8	同上
第 10 回	学生の報告 9	同上
第 11 回	学生の報告 10	同上
第 12 回	学生の報告 11	同上
第 13 回	学生の報告 12	同上
第 14 回	学生の報告 13	同上

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
 ひたすら論文執筆と学会報告準備を！

【テキスト（教科書）】

適宜助言する。

【参考書】

適宜助言する。

【成績評価の方法と基準】

論文執筆状況で評価する（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。互いに率直に意見しあうのは大歓迎です。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近世文芸、文化
 ＜研究テーマ＞最近は、プロジェクトの関係で
 江戸東京の地理や地誌をやっています。

【Outline (in English)】

Reporting and discussing each student's academic activities

LIT700B2

日本文学特殊演習 A

宮本 圭造

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文の作成に向けて、江戸期以来の新作能の文化的背景について学ぶ。

【到達目標】

博士論文の作成をめざし、資料の収集、読解、および問題を設定して、それにふさわしい構成と文体の論文を執筆できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は主に受講生の発表によって行われる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	近世の新作能の概要	近世の新作能の全体像をつかむ。
第 2 回	武家が関わった新作能	武家が関わって新作能を概観する。
第 3 回	武家の新作能の文化的背景	武家の新作能がどのような文化的背景の中で生まれたのかを学ぶ。
第 4 回	武家の新作能と政治状況とのかわり	武家の新作能とそれを生み出した政治的背景とのかわりについて学ぶ。
第 5 回	武家の新作能の上演	武家の新作能がどのような場で上演されたのかを学ぶ。
第 6 回	武家の新作能の受容	武家の新作能が当時の人々にどのように受容されていたのかを学ぶ。
第 7 回	御当地物としての新作能	近世に多く作られた御当地能について概観する。
第 8 回	御当地能の制作背景	御当地能がどのような人々によって作られたのかを学ぶ。
第 9 回	御当地能と寺社縁起	御当地能に寺社縁起の素材がどのように取り込まれているのかを学ぶ。
第 10 回	御当地能の影響	御当地能が文芸に与えた影響について学ぶ。
第 11 回	御当地能の上演状況	御当地能がどのような場で上演されたのかを学ぶ。
第 12 回	新作能の謡本	新作能の謡本の出版状況を学ぶ。
第 13 回	新作能の謡本の書誌	新作能の謡本がどのような版元によって出版されたのかを学ぶ。
第 14 回	御当地能の復活	近年における御当地能の復曲について学ぶ。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業のテーマに沿った関連の参考文献を読むことが望ましい。

【テキスト（教科書）】

教科書は特に使用しない。

【参考書】

岩波講座『能・狂言』第一巻能楽の歴史

【成績評価の方法と基準】

平常点 30 パーセント、発表・レポート 70 点。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞中世文学・芸能史

＜研究テーマ＞能楽

＜主要研究業績＞『上方能楽史の研究』（2005 年、和泉書院）

【Outline (in English)】

This course deals with the Shinsaku nō from Edo-period onwards. By the end of the course, students should be able to deeply research documentary materials of Noh. Before/after each class meeting, students will be expected to have read the relevant books. Grading will be decided based on lab reports (70%), and the quality of the students' experimental performance in the lab (30%).

LIT700B2

日本文学特殊演習 B

宮本 圭造

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

江戸期以降の新作能の制作背景と文化史的意義について学ぶ。

【到達目標】

博士論文の作成をめざし、資料の収集、読解、および問題を設定して、それにふさわしい構成と文体の論文を執筆できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】**【授業の進め方と方法】**

授業は受講生の発表によって進められる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	近世の新作能の思想的背景	近世の新作能と宗教・学問とのかわりについて学ぶ。
第 2 回	真宗関係の新作能	信州関係の新作能について概観する。
第 3 回	真宗関係の新作能の作者	真宗関係の新作能がどのような人々によって作られたのかを考察する。
第 4 回	真宗関係の新作能の受容	真宗関係の新作能がどのような場で受容されたのかを学ぶ。
第 5 回	石門心学と謡曲	石門心学と謡曲とのかわりについて学ぶ。
第 6 回	心学関係の新作能	心学関係の新作能について概観する。
第 7 回	心学関係の新作能の作者	心学関係の新作能がどのような人々によって作られたのかを学ぶ。
第 8 回	心学関係の新作能の受容	心学関係の新作能の出版状況、受容の諸相について学ぶ。
第 9 回	近世文芸と新作能	戯作本と新作能とのかわりについて学ぶ。
第 10 回	歌舞伎関係の新作能	歌舞伎と素材を共有する新作能について学ぶ。
第 11 回	浄瑠璃関係の新作能	浄瑠璃と素材を共有する新作能について学ぶ。
第 12 回	新作能と俳諧	新作能と俳諧関係者とのかわりについて学ぶ。
第 13 回	新作能と徒然講釈	新作能と徒然講釈との関係について学ぶ。
第 14 回	新作能と神道講釈	新作能と神道講釈の関係について学ぶ。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

参考文献を事前・事後に読むことが望ましい。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。

【参考書】

岩波講座『能・狂言』

【成績評価の方法と基準】

平常点 30%、発表・レポート 70%

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 能楽研究

<研究テーマ> 能楽史

<主要研究業績> 『上方能楽史の研究』

【Outline (in English)】

This course deals with the Shinsaku nō from Edo-period onwards. By the end of the course, students should be able to deeply research documentary materials of Noh. Before/after each class meeting, students will be expected to have read the relevant books. Grading will be decided based on lab reports (70%), and the quality of the students' experimental performance in the lab (30%).

LIT700B2

日本文学特殊演習 A

田中 和生

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の近代以降の文学作品について、専門的な知見を駆使して精読を行い、博士論文を書くために必要となる能力を身につけます。

【到達目標】

受講者が選択したテーマ、作家、作品について、先行する研究成果を踏まえてオリジナリティのある問題意識から、博士論文の一部となりうる内容について発表し、批判的検討を加えて論文執筆に結びつけます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講者自身の発表を中心とし、参加者全員で討議を行います。フィードバックは発表ごとに口頭で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	文学研究の方法（1）	文学研究の方法について概説し、受講者が採用する方法を検討します。
第 2 回	受講者 1 による発表 a	受講者が選択したテーマについて、オリジナリティのある問題提起を行います。
第 3 回	受講者 1 による発表 b	自らの問題提起に批判的検討を加え、テーマについての考察を深めます
第 4 回	受講者 1 による発表 c	考察できたことと今後の課題を整理し、研究の展望を提示します
第 5 回	受講者 2 による発表 a	第 2 回と同じ
第 6 回	受講者 2 による発表 b	第 3 回と同じ
第 7 回	受講者 2 による発表 c	第 4 回と同じ
第 8 回	文学研究の方法（2）	受講者の発表を踏まえ、文学研究の方法について考察します
第 9 回	受講者 3 による発表 a	第 2 回と同じ
第 10 回	受講者 3 による発表 b	第 3 回と同じ
第 11 回	受講者 3 による発表 c	第 4 回と同じ
第 12 回	受講者 4 による発表 a	第 2 回と同じ
第 13 回	受講者 4 による発表 b	第 3 回と同じ
第 14 回	受講者 4 による発表 c	第 4 回と同じ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
受講者は、自らが選択したテーマ、作家、作品について、発表が可能となるような研究を行います。また他の受講者のテーマ、作家、作品についても理解を深めることで、文学研究者としての専門的な知見を身につけます。

【テキスト（教科書）】

受講者のテーマに応じた文学作品を選びます。

【参考書】

必要に応じて授業で指示します。

【成績評価の方法と基準】

成績は平常点 4 割、発表 6 割で総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

発表の内容を受講生の研究テーマに応じて修正します。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近・現代文学、文芸評論

＜研究テーマ＞

現在の主な関心は、日本の近代文学の特質を明らかにすること、そこから現代文学の条件を考えること、同時に詩・物語・批評といった言葉の機能から文学について論じる方法を探ることである。具体的には戦後文学史の検証、北村透谷・小林秀雄についての研究、新しい近代文学史の切り口を準備している。

＜主要研究業績＞

- 『江藤淳』（慶應義塾大学出版会）2001 年
- 『あの戦場を越えてー日本現代文学論』（講談社）2005 年
- 『新約太宰治』（講談社）2006 年
- 『吉本隆明』（アーツアンドクラフツ）2014 年
- 『震災後の日本で戦争を引きうける』（現代書館）2017 年

【Outline (in English)】

< Course outline > Obtain the necessary skills to write a doctoral thesis through reading of Japanese modern literature, using specialized knowledges.

< Learning Objectives > Students will make a presentation on a theme, author, or work of their choice, based on their original awareness of the issues based on previous research results, which could be part of their doctoral dissertation, and critically examine it to write their dissertation.

< Learning activities outside of classroom > The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.

Students will conduct research on a theme, author, or work of their own choosing that will enable them to present their work. Students will also deepen their understanding of other students' themes, authors, and works, and acquire specialized knowledge as literary researchers.

< Grading Criteria/Policy > Grades will be based on an overall evaluation of 40% of normal points and 60% of presentations.

LIT700B2

日本文学特殊演習 B

田中 和生

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の近代以降の文学作品について、専門的な知見を駆使して精読を行い、博士論文を書くために必要となる能力を身につけます。

【到達目標】

受講者が選択したテーマ、作家、作品について、先行する研究成果を踏まえてオリジナリティのある問題意識から、博士論文の一部となりうる内容について発表し、批判的検討を加えて論文執筆に結びつけます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講者自身の発表を中心とし、参加者全員で討議を行います。フィードバックは発表ごとに口頭で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	文学研究の方法（1）	文学研究の方法について概説し、受講者が採用する方法を検討します。
第 2 回	受講者 1 による発表 a	受講者が選択したテーマについて、オリジナリティのある問題提起を行います。
第 3 回	受講者 1 による発表 b	自らの問題提起に批判的検討を加え、テーマについての考察を深めます
第 4 回	受講者 1 による発表 c	考察できたことと今後の課題を整理し、研究の展望を提示します
第 5 回	受講者 2 による発表 a	第 2 回と同じ
第 6 回	受講者 2 による発表 b	第 3 回と同じ
第 7 回	受講者 2 による発表 c	第 4 回と同じ
第 8 回	文学研究の方法（2）	受講者の発表を踏まえ、文学研究の方法について考察します
第 9 回	受講者 3 による発表 a	第 2 回と同じ
第 10 回	受講者 3 による発表 b	第 3 回と同じ
第 11 回	受講者 3 による発表 c	第 4 回と同じ
第 12 回	受講者 4 による発表 a	第 2 回と同じ
第 13 回	受講者 4 による発表 b	第 3 回と同じ
第 14 回	受講者 4 による発表 c	第 4 回と同じ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
 受講者は、自らが選択したテーマ、作家、作品について、発表が可能となるような研究を行います。また他の受講者のテーマ、作家、作品についても理解を深めることで、文学研究者としての専門的な知見を身につけます。

【テキスト（教科書）】

受講者のテーマに応じた文学作品を選びます。

【参考書】

必要に応じて授業で指示します。

【成績評価の方法と基準】

成績は平常点 4 割、発表 6 割で総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

発表の内容を受講生の研究テーマに応じて修正します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近・現代文学、文芸評論

<研究テーマ>

現在の主な関心は、日本の近代文学の特質を明らかにすること、そこから現代文学の条件を考えること、同時に詩・物語・批評といった言葉の機能から文学について論じる方法を探ることである。具体的には戦後文学史の検証、北村透谷・小林秀雄についての研究、新しい近代文学史の切り口を準備している。

<主要研究業績>

- 1、『江藤淳』（慶應義塾大学出版会）2001 年
- 2、『あの戦場を越えてー日本現代文学論』（講談社）2005 年
- 3、『新約太宰治』（講談社）2006 年
- 4、『吉本隆明』（アーツアンドクラフツ）2014 年
- 5、『震災後の日本で戦争を引きうける』（現代書館）2017 年

【Outline (in English)】

< Course outline > Obtain the necessary skills to write a doctoral thesis through reading of Japanese modern literature, using specialized knowledges.

< Learning Objectives > Students will make a presentation on a theme, author, or work of their choice, based on their original awareness of the issues based on previous research results, which could be part of their doctoral dissertation, and critically examine it to write their dissertation.

< Learning activities outside of classroom > The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.

Students will conduct research on a theme, author, or work of their own choosing that will enable them to present their work. Students will also deepen their understanding of other students' themes, authors, and works, and acquire specialized knowledge as literary researchers.

< Grading Criteria/Policy > Grades will be based on an overall evaluation of 40% of normal points and 60% of presentations.

LIT700B2

日本文学特殊演習 A

尾谷 昌則

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代日本語研究で博士論文を書くための知識および研究方法を学ぶ

【到達目標】

(1) 意味論・語用論・統語論の基礎概念を理解し、適切な具体例を用いて説明できるようになる。(2) それらの分野における様々な研究・分析・論証の方法を理解し、自身でも実践できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

学会誌などに掲載された学術論文を精読し、言語学における基礎概念や分析方法について学ぶ。

▼必要に応じて、ZOOMを用いたオンライン授業を行う。その場合は、学習支援システムの「お知らせ」で URL や事前課題などを連絡する。チャット機能を利用した双方向授業になるため、通信環境を整えておくこと。

▼課題やリアクションペーパー等における良いコメント・質問は授業内で紹介・フィードバックして、さらなる議論に活かす。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	論文について	論文の構成について
第 2 回	論文レポート 1	名詞 受講生による発表・討論の意味拡張
第 3 回	論文レポート 2	動詞 受講生による発表・討論の意味拡張
第 4 回	論文レポート 3	形容 受講生による発表・討論の意味拡張
第 5 回	論文レポート 4	接続 受講生による発表・討論の意味拡張
第 6 回	論文レポート 5	語用 受講生による発表・討論と意味論
第 7 回	論文レポート 6	語用 受講生による発表・討論推論
第 8 回	論文レポート 7	ボラ 受講生による発表・討論イトネス
第 9 回	論文レポート 8	イン 受講生による発表・討論ボライトネス
第 10 回	論文レポート 9	対人 受講生による発表・討論的モダリティ
第 11 回	論文レポート 10	対 受講生による発表・討論事的モダリティ
第 12 回	論文レポート 11	若 受講生による発表・討論者ことば
第 13 回	論文レポート 12	文 受講生による発表・討論末表現
第 14 回	論文レポート 13	受講生による発表・討論ネットスラング

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回課題となる学術論文を読み、分からない概念・専門用語について事前に調べておくこと（2時間程度）。論文の根幹である問題提起・主張・根拠が分かるように、要約を A4 用紙一枚に書くこと（1時間程度）。当日の授業で質問できるように、論文への反論・疑義・その他不備と思われる点をまとめておく（1時間程度）。

【テキスト（教科書）】

読む論文のリストは初回授業で配布する。

【参考書】

『新編 認知言語学キーワード事典』（辻幸夫、研究社）
『ことばの認知科学事典』（辻幸夫編集、大修館書店）
『日本語学キーワード事典』（小池清治ほか編著、朝倉書店）
『言語学大辞典』（三省堂）
『日本語文法大辞典』（山口明穂・秋本守英編著、明治書院）
『日本語学研究事典』（飛田良文ほか編著、明治書院）
『語用論キーターム事典』（今井邦彦監訳、開拓者）

【成績評価の方法と基準】

宿題 40 % 発言等受講態度 30 % 期末レポート 30 %

【学生の意見等からの気づき】

博士論文のテーマだけに絞らず、言語学全般についての理解・知識が深められるコースワークになるよう、幅広い内容の研究論文を取り上げるよう心がけている。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

現代日本語における意味論、文法論、語用論、認知言語学

＜研究テーマ＞

認知言語学からみた意味拡張、文法化、構文ネットワーク

＜主要研究業績＞

「アマルガム構文としての『全然』+肯定」に関する語用論的分析」（『言葉と認知のメカニズム』 pp.103-115. ひつじ書房、2008 年）

「構文文法の歴史的背景と今後の展望」（『人間情報学研究』第 11 巻、pp.25-43. 2006 年）

「接続詞ケドの手続き的意味」（『語用論研究』第 7 号、pp.17-30. 2005 年）

『構文ネットワークと文法 ―認知文法論のアプローチ』（共著、研究社、2011 年）

【Outline (in English)】

We will read the academic papers on (cognitive) linguistics, semantics and pragmatics.

The objectives of this class are as follows. (1) To understand the outline of the paper and make a summary of it. (2) To understand how to use the linguistic concepts or theory for the linguistic analysis.

Students will be expected to have completed the required assignments before each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.

Grading will be decided based on assignments (40%), the quality of the students' experimental performance in the lab (30%), and the final report (30%).

LIT700B2

日本文学特殊演習 B

尾谷 昌則

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代日本語の意味を分析するための手法を学ぶ

【到達目標】

(1) 意味論の専門用語・諸概念について理解し、説明できる。(2) 意味を研究するための様々な分析手法を理解し、実践できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

学会誌などに掲載された学術論文を精読し、意味研究における基礎概念や分析方法について学ぶ。

▼必要に応じて、ZOOMを用いたオンライン授業を行う。その場合は、学習支援システムの「お知らせ」で URL や事前課題などを連絡する。チャット機能を利用した双方向授業になるため、通信環境を整えておくこと。

▼課題やリアクションペーパー等における良いコメント・質問は授業内で紹介・フィードバックして、さらなる議論に活かす。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	はじめに	意味を分析する上での諸注意
第2回	論文レポート1 多義	受講生による発表・討論
第3回	論文レポート2 メタファー	受講生による発表・討論
第4回	論文レポート3 ニミ	受講生による発表・討論
第5回	論文レポート4 キーマとプロトタイプ	受講生による発表・討論
第6回	論文レポート5 ネットワーク	受講生による発表・討論
第7回	論文レポート6 拡張と動的用法基盤モデル	受講生による発表・討論
第8回	論文レポート7 文法化と意味変化	受講生による発表・討論
第9回	論文レポート8 主体化と文法化	受講生による発表・討論
第10回	論文レポート9 語用論的強化と文法化	受講生による発表・討論
第11回	論文レポート10 接続詞と文法化	受講生による発表・討論
第12回	論文レポート11 尾辞と文法化	受講生による発表・討論
第13回	論文レポート12 否定表現の拡張	受講生による発表・討論
第14回	論文レポート13 コーパスと定量的分析	受講生による発表・討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回課題となる学術論文を読み、分からない概念・専門用語について事前に調べておくこと（2時間程度）。論文の根幹である問題提起・主張・根拠が分かるように、要約を A4 用紙一枚に書くこと（1時間程度）。当日の授業で質問できるように、論文への反論・疑義・その他不備と思われる点をまとめておく（1時間程度）。

【テキスト（教科書）】

読む論文のリストは初回授業で配布する。

【参考書】

『認知言語学研究の方法 ― 内省・コーパス・実験』（辻幸夫監修、ひつじ書房）
『日本語教育のためのコーパス調査入門』（李在鎬・石川慎一郎・砂川有里子著、くろしお出版）
『新編 認知言語学キーワード事典』（辻幸夫、研究社）
『ことばの認知科学事典』（辻幸夫編集、大修館書店）
『日本語学キーワード事典』（小池清治ほか編著、朝倉書店）
『言語学大辞典』（三省堂）
『日本語文法大辞典』（山口明穂・秋本守英編著、明治書院）
『日本語学研究事典』（飛田良文ほか編著、明治書院）
『語用論キータム事典』（今井邦彦監訳、開拓者）

【成績評価の方法と基準】

宿題 40 % 発言等受講態度 30 % 期末レポート 30 %

【学生の意見等からの気づき】

論文の具体的な書き方が理解できるよう、また博士課程らしい専門性が身につけられるよう、言語（意味）変化について深く理解するための研究論文を取り上げるよう心がけた。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現代日本語における意味論、文法論、語用論、認知言語学

<研究テーマ>

認知言語学からみた意味拡張、文法化、構文ネットワーク

<主要研究業績>

「アマルガム構文としての『全然』+肯定」に関する語用論的分析」（『言葉と認知のメカニズム』pp.103-115. ひつじ書房、2008 年）
「構文文法の歴史的背景と今後の展望」（『人間情報学研究』第 11 巻、pp.25-43. 2006 年）

「接続詞ケドの接続的意味」（『語用論研究』第 7 号、pp.17-30. 2005 年）

『構文ネットワークと文法 ― 認知文法論のアプローチ』（共著、研究社、2011 年）

【Outline (in English)】

We will read the academic papers on (cognitive) linguistics, semantics and pragmatics.

The objectives of this class are as follows. (1) To understand the outline of the paper and make a summary of it. (2) To understand how to use the linguistic concepts or theory for the linguistic analysis.

Students will be expected to have completed the required assignments before each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.

Grading will be decided based on assignments (40%), the quality of the students' experimental performance in the lab (30%), and the final report (30%).

LIT700B2

日本文芸学特殊研究 A

一柳 廣孝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

テーマを「怪異の日本近代文学」とする。日本の近代文学は自然主義リアリズムを基調として発展してきた。そのため怪異を描くことは、常に何らかの屈折を強いられた。本授業では怪異を扱う文学テキストを取り上げ、テキストに内在する新たな読みの可能性を探ることを目的とする。怪異を軸としたテキストの分析手法を理解することが目標となる。授業時間外には、分析対象のテキストを精読しておくこと。成績評価は、個別発表の内容と質疑応答による。

【到達目標】

「怪異」という視点を理解したうえで、近現代にあつて怪異を表現するテキストの戦略を適切、かつ魅力的に分析して可視化すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式。授業内での発表を中心とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	授業概要の説明	今後の授業の流れ、スケジュールについて説明する。
第 2 回	怪異とは何か	怪異をめぐる昨今の研究状況について概説する。
第 3 回	文学テキストの解析	具体的にテキストを設定し、分析を試みる。
第 4 回	発表（幸田露伴）	幸田露伴「対髑髏」
第 5 回	発表（泉鏡花）	泉鏡花「龍潭譚」
第 6 回	発表（夏目漱石）	夏目漱石「夢十夜」
第 7 回	発表（森鴎外）	森鴎外「鼠坂」
第 8 回	発表（芥川龍之介）	芥川龍之介「妖婆」
第 9 回	発表（内田百閒）	内田百閒「冥途」
第 10 回	発表（岡本綺堂）	岡本綺堂「蟹」
第 11 回	発表（川端康成）	川端康成「抒情歌」
第 12 回	発表（吉屋信子）	吉屋信子「鬼火」
第 13 回	発表（三島由紀夫）	三島由紀夫「英霊の声」
第 14 回	総括	授業のまとめを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表とその発表にもとづく議論を中心とする。よって発表者は発表の準備をおこなう。また聴講する側は、発表の前提となるテキストを読み込んでおく。なお大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は 1 回につき 4 時間以上が標準となる。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

紀田順一郎・東雅夫編『日本怪奇小説傑作集』全 3 巻（創元推理文庫）
東雅夫編『文豪怪談傑作選』全 18 巻（ちくま文庫）
東雅夫編『文豪怪異小品集』シリーズ（平凡社ライブラリー）など。

【成績評価の方法と基準】

発表の内容（70 %）、質疑応答の内容（30 %）

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更により、フィードバックできません。

【学生が準備すべき機器他】

発表用のレジメ。

【その他の重要事項】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

日本近現代文学・文化史

【日本近現代文学】

近代日本におけるフロイト精神分析の受容と「無意識」概念の文学における反映状況の研究など。『無意識という物語』（名古屋大学出版会）、『催眠術の日本近代』（青弓社）、『コレクションモダン都市文化 11 浅草の見世物・宗教性・エロス』（編著、ゆまに書房）など。

【日本近現代文化史】

近現代日本における「怪異」の文化表象、および文学的表現に関する研究。『怪異の表象空間』（国書刊行会）、『＜こっくりさん＞と＜千里眼＞・増補版』（青弓社）、『「学校の怪談」はささやく』（編著、青弓社）、『オカルトの帝国』（編著、青弓社）、『怪異の時空』全 3 巻（監修、青弓社）など。

【サブカルチャー研究】

ライトノベルなどの研究。『ライトノベル研究序説』『ライトノベル・スタディーズ』（ともに共編著、青弓社）、『小説の生存戦略』（共著、青弓社）、『もう一度読みたい日本の古典文学』（共著、勉誠出版）など。

【None.】

None.

【Outline (in English)】

The theme is "Mysterious Japanese Modern Literature". Modern Japanese literature has evolved on the basis of naturalistic realism. Therefore, drawing a mystery was always forced to have some kind of refraction. The purpose of this class is to take up literary texts dealing with mysteries and explore new reading possibilities inherent in the texts. The goal is to understand the text analysis method centered on mystery. Carefully read the text to be analyzed outside of class hours. Grades will be evaluated based on the content of individual presentations and questions and answers.

LIT700B2

日本文学特殊研究 B

一柳 廣孝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

テーマを「怪異の日本現代文学」とする。戦後から現代に至るまで、秘境、妖怪、怪獣、幻想文学、オカルト、精神世界などのブームを経て、新たなフレームのもとで怪異は魅力的な文学のテーマとなった。本授業では現代における怪異の文学に注目し、テキストの読みの可能性について考察する。怪異を軸としたテキストの分析手法を理解することが目標となる。授業時間外には、分析対象のテキストを精読しておくこと。成績評価は、個別発表の内容と質疑応答による。

【到達目標】

「怪異」という視点を理解したうえで、現代において怪異を表現するテキストの戦略を適切、かつ魅力的に分析して可視化すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式。授業内での発表を中心とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	授業概要の説明	今後の授業の流れ、スケジュールについて説明する。
第 2 回	怪異とは何か	怪異をめぐる昨今の研究状況について概説する。
第 3 回	文学テキストの解析	具体的にテキストを設定し、分析を試みる。
第 4 回	発表（半村良）	半村良「筆筒」
第 5 回	発表（吉田健一）	吉田健一「幽霊」
第 6 回	発表（澁澤龍彦）	澁澤龍彦「ぼろんじ」
第 7 回	発表（吉本ばなな）	吉本ばなな「ある体験」
第 8 回	発表（坂東眞砂子）	坂東眞砂子「正月女」
第 9 回	発表（北村薫）	北村薫「百物語」
第 10 回	発表（川上弘美）	川上弘美「海馬」
第 11 回	発表（森見登美彦）	森見登美彦「水神」
第 12 回	発表（澤村伊智）	澤村伊智「鬼のうみたりければ」
第 13 回	発表（小野不由美）	小野不由美「ゴーストハント」
第 14 回	総括	授業のまとめを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表とその発表にもとづく議論を中心とする。発表者は発表の準備をおこない、発表する。聴講する側は、発表の前提となるテキストを読み込んでおく。なお大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は 1 回につき 4 時間以上が標準となる。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

紀田順一郎・東雅夫編『日本怪奇小説傑作集』全 3 巻（創元推理文庫）
東雅夫編『平成怪奇小説傑作集』全 3 巻（創元推理文庫）
東雅夫編『文豪怪談傑作選』全 18 巻（ちくま文庫）
東雅夫編『文豪怪異小品集』シリーズ（平凡社ライブラリー）
東雅夫編『文豪妖怪名作選』（創元推理文庫）など。

【成績評価の方法と基準】

発表の内容（70 %）、質疑応答の内容（30 %）

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更により、フィードバックできません。

【学生が準備すべき機器他】

発表用のレジメ。

【その他の重要事項】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

日本近現代文学・文化史

【日本近現代文学】

近代日本におけるフロイト精神分析の受容と「無意識」概念の文学における反映状況の研究など。『無意識という物語』（名古屋大学出版会）、『催眠術の日本近代』（青弓社）、『コレクションモダン都市文化 11 浅草の見世物・宗教性・エロス』（編著、ゆまに書房）など。

【日本近現代文化史】

近現代日本における「怪異」の文化表象、および文学的表現に関する研究。『怪異の表象空間』（国書刊行会）、『<こっくりさん>と千里眼>増補版』（青弓社）、『心霊写真は語る』『学校の怪談』はささやく』『オカルトの帝国』（ともに編著、青弓社）、『怪異の時空』全 3 巻（監修、青弓社）など。

【サブカルチャー研究】

ライトノベルなどの研究。『ライトノベル研究序説』『ライトノベル・スタディーズ』（ともに共編著、青弓社）、『小説の生存戦略』（共著、青弓社）、『もう一度読みたい日本の古典文学』（共著、勉誠出版）など。

【None.】

None.

【Outline (in English)】

The theme is "Mysterious Japanese Contemporary Literature". From the postwar period to the present day, through the boom of unexplored regions, youkai, monsters, fantasy literature, occultism, and the spiritual world, ghosts have become a fascinating literary theme under a new frame. In this class, we will focus on the mysterious literature of modern times and consider the possibility of reading texts. The goal is to understand the text analysis method centered on mystery. Carefully read the text to be analyzed outside of class hours. Grades will be evaluated based on the content of individual presentations and questions and answers.

LIT500B2

日本文芸批評史特殊研究 A

田中 和生

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の近代文学における文芸批評の歴史を、個々の文芸評論家の文章と批評自体の流れから概観します。

【到達目標】

まず近代文学における批評の役割を理解すること、次に日本の近代文学史を相対化する視点を手に入れることが目標になります。理想としては、文芸評論家の文章を要約・分析・模倣することを通じ、自らのうちに一つの批評眼を確立したいと思います。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義と発表を組み合わせて進めます。

まず講義では、具体的な評論文を読みながら批評自体の流れについて解説します。次に発表では、個々の文芸評論家の文章について、内容と文体の両面から紹介・解説・考察を加えてもらいます。

また個々の文芸評論家について理解が深まったところで、レポート提出を求めることがあります。レポートでは、文芸評論家の文章を模倣して自ら文芸批評を実践することによって、批評というものの内的な理解を目指します。

授業では、できるだけ学生からの発言と発表についての質疑を引き出すようにしますが、必要に応じて教員からのフィードバックを行い、授業内容についての理解を深めます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	日本の近代文学について	近代ヨーロッパと近代日本を比較して、近代文学全体について概説します。
第 2 回	森鷗外と北村透谷	森鷗外「早稲田文学の没理想」と北村透谷「人生に相渉るとは何の謂ぞ」を読み、その意義を理解します。
第 3 回	正岡子規と作家夏目漱石の誕生	正岡子規「歌よみに与ふる書」を読み、写生文の意義と夏目漱石の文学について解説します。
第 4 回	坪内逍遙『小説神髓』を読む	日本の近代文学の出発点として、坪内逍遙『小説神髓』について発表してもらいます。
第 5 回	自然主義と 1910 年	田山花袋「露骨なる描写」を読み、日本の近代文学史における自然主義の隆盛と 1910 年の状況を理解します。
第 6 回	正宗白鳥の評論文を読む	印象批評の例として、正宗白鳥の評論文について発表してもらいます。
第 7 回	佐藤春夫と永井荷風	佐藤春夫「創作月旦」と永井荷風「花火」を読み、その意義を理解します。
第 8 回	小林秀雄の登場	日本の文芸評論の誕生を告げる、小林秀雄の前期の評論文について発表してもらいます。
第 9 回	私小説から心境小説へ	広津和郎「散文芸術の位置」と久米正雄「『私』小説と『心境』小説」を読み、その意義を理解します。

第 10 回	保田與重郎の批評	戦前における文芸評論の到達点の一つである、保田與重郎の評論文について発表してもらいます。
第 11 回	プロレタリア文学と芥川龍之介の死	蔵原惟人「プロレタリア・レアリズムへの道」と宮本顕治「『敗北』の文学」を読み、その意義を理解します。
第 12 回	中村光夫の再出発	戦後文学の空間をかたちづくる、中村光夫の評論文について発表してもらいます。
第 13 回	河上徹太郎と平野謙	河上徹太郎「配給された『自由』」と平野謙「ひとつの反指定」を読み、その意義を理解します。
第 14 回	江藤淳の登場	戦後文学を問い直す視点を提示しつつつけた、江藤淳の評論文について発表してもらいます。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

日本の近代文学史についての基礎的な知識を確認して授業を受けてください。また授業で取りあげられる作家や評論家の代表作に目を通してから授業に臨むことが望まれます。発表の対象となる文章は、ぜひ全員が読んで参加することで活発な議論が起きることを期待します。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

千葉俊二／坪内祐三編『日本近代文学評論選』[明治・大正篇]および[昭和篇]（岩波文庫）

【参考書】

必要に応じて授業で指示します。

【成績評価の方法と基準】

成績は平常点 4 割、発表およびレポート 6 割で総合的に評価します。

まず平常点では、きちんと出席しているか、授業内容に積極的に取り組んでいるか、授業外の学習ができていないか、を授業態度から判断します。

また発表では、発表対象の評論文についてしっかり理解できているか、発表の仕方とレジュメの内容は適切か、ただの解説にとどまらず分析から考察まで行おうとしているか、を発表内容から判断します。加えてレポートでは、積極的に取り組んでいるかどうかを判断します。

【学生の意見等からの気づき】

発表の内容を受講生の研究テーマに応じて修正しました。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本近・現代文学、文芸評論
〈研究テーマ〉

現在の主な関心は、日本の近代文学の特質を明らかにすること、そこから現代文学の条件を考えること、同時に詩・物語・批評といった言葉の機能から文学について論じる方法を探ることである。具体的には戦後文学史の検証、北村透谷・小林秀雄についての研究、新しい近代文学史の切り口を準備している。

〈主要研究業績〉

- 1、『江藤淳』（慶應義塾大学出版会）2001 年
- 2、『あの戦場を越えて——日本現代文学論』（講談社）2005 年
- 3、『新約太宰治』（講談社）2006 年
- 4、『吉本隆明』（アーツアンドクラフツ）2014 年
- 5、『震災後の日本で戦争を引きうける』（現代書館）2017 年

【Outline (in English)】

< Course outline > Acquire an overview of the history of literary criticism in the Japanese modern literature through the writings of each critic and the stream of criticism.

< Learning Objectives > The first goal is to understand the role of criticism in modern literature, and the second is to gain a relative perspective on the history of modern Japanese literature. Ideally, through summarizing, analyzing, and imitating the writings of literary critics, I would like to establish a critical eye within myself.

< Learning activities outside of classroom > Please come to class with a basic knowledge of the history of modern Japanese literature. It is also recommended that you read the representative works of the writers and critics discussed in the class before coming to class. All students are expected to read and participate in the texts to be presented, so that lively discussions can take place. The standard preparation and review time for this class is two hours each.

< Grading Criteria/Policy > Grades will be based on an overall evaluation of 40% of normal points and 60% of presentations and reports. In terms of the normal score, I will judge whether the student attends class properly, actively engages in the class content, and studies outside of class. In the presentation, we will judge whether you have a clear understanding of the critique you are presenting, whether your presentation style and resume are appropriate, and whether you have attempted to go beyond mere explanation to analysis and consideration. In addition, we will judge whether or not you are actively working on the report.

LIT500B2

日本文芸批評史特殊研究 B

田中 和生

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の戦後文学における文芸批評の歴史を、個々の文芸評論家の文章と批評自体の流れから概観します。

【到達目標】

まず戦後文学における批評の役割を理解すること、次に日本の戦後文学史を相対化する視点を手に入れることが目標になります。理想としては、文芸評論家の文章を要約・分析・模倣することを通じ、自らのうちに一つの批評眼を確立したいと思います。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義と発表を組み合わせて進めます。

まず講義では、具体的な評論文を読みながら批評自体の流れについて解説します。次に発表では、個々の文芸評論家の文章について、内容と文体の両面から紹介・解説・考察を加えてもらいます。

また個々の文芸評論家について理解が深まったところで、レポート提出を求めることがあります。レポートでは、文芸評論家の文章を模倣して自ら文芸批評を実践することによって、批評というものの内的な理解を目指します。

授業では、できるだけ学生からの発言と発表についての質疑を引き出すようにしますが、必要に応じて教員からのフィードバックを行い、授業内容についての理解を深めます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	日本の戦後文学について	欧米と日本を比較して、現在までつづく戦後文学の空間について概説する
第 2 回	中野重治と高見順	中野重治「閏二月二九日」と高見順「描写のうしろに寝てゐられない」を読み、その意義を理解します。
第 3 回	1945 年と無頼派の誕生	日本の敗戦の年である 1945 年前後の文学における変化に注意しながら、坂口安吾「墮落論」を読みます。
第 4 回	吉本隆明の出發	戦後文学の空間を超える普遍的な視点を提供しようとしてつづけた、吉本隆明の評論文について発表してもらいます。
第 5 回	戦前批判と戦後文学のはじまり	宮本百合子「歌声よ おこれ」と小野十三郎「詩論」を読み、その意義を理解します。
第 6 回	奥野健男の批評	戦後文学の代表的な文芸評論家である、奥野健男の評論文について発表してもらいます。
第 7 回	武田泰淳と竹内好	武田泰淳「滅亡について」と竹内好「近代主義と民族の問題」を読み、その意義を理解します。
第 8 回	磯田光一の批評	戦後文学の代表的な文芸評論家である、磯田光一の評論文について発表してもらいます。

- 第9回 福田恒存と国語の問題 福田恒存「私の国語教室」を読み、その意義を理解するとともに大岡昇平の新字新かなに対する態度について考察します。
- 第10回 蓮実重彦の登場 ポストモダン派の代表的な文芸評論家である、蓮実重彦の評論文について発表してもらいます。
- 第11回 言語論と吉本隆明 20世紀以降の言語論の意義について考察した上で吉本隆明の評論文を読み、その意義を理解します。
- 第12回 加藤典洋の出発 ポストモダン派と戦後文学を架橋する視点を提供した、加藤典洋の評論文について発表してもらいます。
- 第13回 ポストモダン文学論 1970年代以降の日本のポストモダン派の評論文について考察を加え、その意義を理解します。
- 第14回 斉藤美奈子の批評 フェミニズム批評の代表的な評論家である、斉藤美奈子の評論文について発表してもらいます。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

日本の戦後文学史についての基礎的な知識を確認して授業を受けてください。また授業で取り上げられる作家や評論家の代表作に目を通してから授業に臨むことが望まれます。発表の対象となる文章は、ぜひ全員が読んで参加することで活発な議論が起きることを期待します。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

千葉俊二／坪内祐三編『日本近代文学評論選』[昭和篇]（岩波文庫）

【参考書】

必要に応じて授業で指示します。

【成績評価の方法と基準】

成績は平常点4割、発表およびレポート6割で総合的に評価します。

まず平常点では、きちんと出席しているか、授業内容に積極的に取り組んでいるか、授業外の学習ができているか、を授業態度から判断します。

また発表では、発表対象の評論文についてしっかり理解できているか、発表の仕方とレジュメの内容は適切か、ただの解説にとどまらず分析から考察まで行おうとしているか、を発表内容から判断します。加えてレポートでは、積極的に取り組んでいるかどうかを判断します。

【学生の意見等からの気づき】

発表の内容を受講生の研究テーマに応じて修正しました。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本近・現代文学、文芸評論

〈研究テーマ〉

現在の主な関心は、日本の近代文学の特質を明らかにすること、そこから現代文学の条件を考えること、同時に詩・物語・批評といった言葉の機能から文学について論じる方法を探ることである。具体的には戦後文学史の検証、北村透谷・小林秀雄についての研究、新しい近代文学史の切り口を準備している。

〈主要研究業績〉

- 1、『江藤淳』（慶應義塾大学出版会）2001年
- 2、『あの戦場を越えて——日本現代文学論』（講談社）2005年
- 3、『新約太宰治』（講談社）2006年
- 4、『吉本隆明』（アーツアンドクラフツ）2014年
- 5、『敗戦後の日本で戦争を引きうける』（現代書館）2017年

【Outline (in English)】

< Course outline > Acquire an overview of the history of literary criticism in the Japanese postwar literature through the writings of each critic and the stream of criticism.

< Learning Objectives > The first goal is to understand the role of criticism in postwar literature, and the second is to obtain a perspective that relativizes the history of postwar literature in Japan. Ideally, through summarizing, analyzing, and imitating the writings of literary critics, I would like to establish a critical eye within myself.

< Learning activities outside of classroom > Please come to class with a basic knowledge of the history of Japanese postwar literature. It is also recommended that you read the representative works of the writers and critics to be discussed in the class before coming to class. All students are expected to read and participate in the texts to be presented, so that lively discussions can take place. The standard preparation and review time for this class is two hours each.

< Grading Criteria/Policy > Grades will be based on an overall evaluation of 40% of normal points and 60% of presentations and reports. In terms of the normal score, I will judge whether the student attends class properly, actively engages in the class content, and studies outside of class. In the presentation, we will judge whether you have a clear understanding of the critique you are presenting, whether your presentation style and resume are appropriate, and whether you have attempted to go beyond mere explanation to analysis and consideration. In addition, we will judge whether or not you are actively working on the report.

LIT500B2

日本古代文芸特殊研究 A

坂本 勝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

万葉集を講読する。

【到達目標】

万葉集を読み進める。その中から各自が最も関心のある作品を取り上げ、注釈的な読解を中心に発表する。それにより、上代文献の基礎的な読解法、研究法を学ぶ。その成果を博士論文作成に反映させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

発表と問題点の確認、博士論文作成の経過確認を行う。最終授業で、13 回までの講義内容のまとめや復習だけでなく、授業内で行った課題に対する講評や解説も行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	講義概説	万葉集と柿本人麻呂について概説する。
第 2 回	近江荒都歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 3 回	吉野讃歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 4 回	留京三首	左記のテーマについて批評、検討する。
第 5 回	安騎野歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 6 回	石見相聞歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 7 回	日並皇子挽歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 8 回	河嶋皇子挽歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 9 回	明日香皇女挽歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 10 回	高市皇子挽歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 11 回	泣血哀慟哭歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 12 回	吉備津采女挽歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 13 回	狭岑島死人歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 14 回	臨死歌 まとめ	左記のテーマについて批評、検討する。 各自、春学期の研究テーマを総括し、新たな発展の方法を確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、毎週 4 時間以上を必要とする。

【テキスト（教科書）】

万葉集、原文のついているもの。

【参考書】

必要に応じて教室で指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表（50 %）とレポート（50 %）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

原典を読む基本的知識の重要性。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 上代文学

<研究テーマ> 古事記・万葉集を中心とする上代文学研究

<主要研究業績>

『古事記の読み方』（岩波新書 2003 年）「亡き人に逢える島一万葉集巻一六・筑前国志賀白水郎歌を読む」（『法政大学文学部紀要』2008 年）「鴨山と石川の詩心－柿本人麻呂臨死自傷歌群について－」（『日本文学誌要』2008 年）「都市の大物主」（『日本文学誌要』2011 年）

【Outline (in English)】

【Course outline】 Read the Manyoshu（万葉集），

【Learning Objectives】 To understand the basic research methods of Japanese literature of the upper ages.

【Learning activities outside of classroom】 Please read the handouts carefully. The standard preparation and review time for a class is 2 hours each, (4 hours for a week).

【Grading Criteria /Policy】 Grading will be based on the term paper(60%) and the submission of several assignments and reaction papers (40%). will be based on the term paper(60%) and the submission of several assignments and reaction papers (40%). (Course outline)

LIT500B2

日本古代文芸特殊研究 B

坂本 勝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

万葉集を読む。

【到達目標】

上代文献の基礎的な読解法、研究法を学ぶ。各自、万葉集の中から学問的興味を持つ歌人、作品などを選定し、その作品について演習形式で読解を進める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

各自選定したテーマや作品を中心に、注釈的な読解を行う。最終授業で、13 回までの講義内容のまとめや復習だけでなく、授業内で行った課題に対する講評や解説も行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	授業概説	万葉集研究の方法について概説する。
第 2 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 3 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 4 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 5 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 6 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 7 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 8 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 9 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 10 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 11 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 12 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 13 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 14 回	まとめ	万葉集研究の方法と問題点を確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

予習、復習、課題など、毎週 4 時間以上の学習を必要とする。

【テキスト（教科書）】

万葉集、原文付き

【参考書】

授業の中で指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表（40 %）とレポート（60 %）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

原典を読むことの重要性。

【担当教員の専門分野等】

<<専門領域>> 日本上代文学

<研究テーマ> 古事記、万葉集の研究

<主要研究業績>

『古事記の読み方』（岩波新書 2003 年）「亡き人に逢える鳥一万葉集巻一六・筑前国志賀白水郎歌を読む」（『法政大学文学部紀要』2008 年）「鴨山と石川の詩心－柿本人麻呂臨死自傷歌群について－」（『日本文学誌要』2008 年）「都市の大物主」（『日本文学誌要』2011 年）

【Outline (in English)】

【Course outline】 Read the Manyoshu（万葉集），

【Learning Objectives】 To understand the basic research methods of Japanese literature of the upper ages.

【Learning activities outside of classroom】 Please read the handouts carefully. The standard preparation and review time for a class is 2 hours each, (4 hours for a week).

【Grading Criteria /Polic】 Grading will be based on the term paper(60%) and the submission of several assignments and reaction papers (40%). will be based on the term paper(60%) and the submission of several assignments and reaction papers (40%).

LIT500B2

日本中世文芸特殊研究 A

阿部 真弓

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業は、中世の文芸作品を緻密に読み解き、理解を深めることを目的とします。中世文芸の基礎的な研究方法を学ぶとともに、プレゼンテーション能力・ディスカッション能力を身につけ、他者との討論から新たな研究課題を見出すことを目指します。

今年度は、『百人一首』の古注釈である『百人一首 宗祇抄』を取り上げます。影印本を翻刻し、的確かつ詳細に注釈を施して現代語に訳していきます。また他の古注釈も参照し、『百人一首』が中世・近世でどのように解釈されていたかを確認し、『宗祇抄』の位置づけについても考察を試みます。

【到達目標】

- ①適切に文献を調査し、歌語や修辞等の和歌表現、また歌人についての的確かつ精緻な注釈を施し、和歌を読み解く能力を身につける。
- ②中世において『百人一首』がどのように解釈されてきたか、考察できる。
- ③くずし字を読むことができる。
- ④プレゼンテーション能力を身につける。
- ⑤ディスカッション能力を身につけ、他者との討論から新たな研究課題を見出すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

古活字本の影印をテキストとし、受講生の発表・討論と教員の講義を取り混ぜながら、『百人一首 宗祇抄』を精読します。なお、授業のはじめに、リアクションペーパーに書かれた受講生からの質問や意見を取り上げてフィードバックし、前回授業の振り返りを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	授業の概要の説明
2	『百人一首』の概要について	『百人一首』に関する問題を整理し、説明する。
3	宗祇について	宗祇の事績等の説明。。
4	『百人一首』研究史について	中世から現代に至るまでの研究史を概観する。
5	発表の方法について	発表にあたって調査すべき文献、注釈項目を説明する。
6	変体仮名について	変体仮名の解説・解読練習。
7	『百人一首 宗祇抄』読解	受講生 A による発表と討論
8	『百人一首 宗祇抄』読解	受講生 B による発表と討論
9	『百人一首 宗祇抄』読解	受講生 C による発表と討論
10	『百人一首 宗祇抄』読解	受講生 D による発表と討論
11	『百人一首 宗祇抄』読解	受講生 E による発表と討論
12	『百人一首 宗祇抄』読解	受講生 F による発表と討論
13	『百人一首 宗祇抄』読解	受講生 G による発表と討論
14	まとめ	春学期の内容に関する総括を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業前には参考書等を読み、『百人一首』に関する基礎的な知識を身につけておいて下さい。

発表にあたっては、担当者はわかりやすく、不備のない資料を作り、要を得た説明ができるよう、綿密に準備を行ってください。それ以外の受講者はテキスト、また注釈書等を確認し、どのような問題点のある和歌なのか予習をした上で、授業にのぞんでください。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

『影印百人一首抄（宗祇抄）』（吉田幸一編、笠間書院、1969 年）

【参考書】

- ・講談社学術文庫『百人一首』（有吉保、講談社、1983 年）
- ・角川ソフィア文庫『新版 百人一首』（島津忠夫、KADOKAWA、1999 年）

【成績評価の方法と基準】

【授業の到達目標】①～⑤に照らし、発表内容またはレポート 70 %（①～⑤）、討論への参加度 30 %（⑤）という配分で、総合的に判断します。

【学生の意見等からの気づき】

一度に複数の和歌を担当・発表する形ではなく、一首ずつ丁寧に読み進めます。また、受講者のレベルに合ったプリント教材を適宜配布し、随時、くずし字を読む練習も行います。

【その他の重要事項】

基本的に対面式授業ですが、第 1 回・第 2 回授業はオンライン式の授業です。第 1 回授業日までに、学習支援システム上の当科目「お知らせ」をよく確認し、受講してください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本中世文学

<研究テーマ> 日記文学、和歌

<主要研究業績> 「『とはすがたり』の恋一物語る二条」（『文学』8 巻 5 号、2007 年 9 月）、「『弁内侍日記』論一糾える言葉の連鎖―」（『日本古典文学研究の新展開』2011 年、笠間書院）、「『嵯峨のかよひち』考―藤原為家の涙―」（『日本文学誌要』89 号、2014 年 3 月）

【Outline (in English)】

This course deals with *Hyakunin isshu So`gi sho`*.

The aim of this course is to help graduate students acquire an understanding of the characteristics of the Medieval Japanese Literature and the fundamentals of the study of waka poetry. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

Your overall grade in the class will be decided based on the following

Oral presentation or Term-end report : 70%, in class contribution : 30%.

LIT500B2

日本中世文芸特殊研究 B

阿部 真弓

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業は、中世の文芸作品を緻密に読み解き、理解を深めることを目的とします。中世文芸の基礎的な研究方法を学ぶとともに、プレゼンテーション能力・ディスカッション能力を身につけ、他者との討論から新たな研究課題を見出すことを目指します。

今年度は、『百人一首』の古注釈である『百人一首 宗祇抄』を取り上げます。影印本を翻刻し、的確かつ詳細に注釈を施して現代語に訳していきます。また他の古注釈も参照し、『百人一首』が中世・近世でどのように解釈されていたかを確認し、『宗祇抄』の位置づけについても考察を試みます。

【到達目標】

- ①適切に文献を調査し、歌語や修辞等の和歌表現、また歌人についての的確かつ精緻な注釈を施し、和歌を読み解く能力を身につける。
- ②中世において『百人一首』がどのように解釈されてきたか、考察できる。
- ③くずし字を読むことができる。
- ④プレゼンテーション能力を身につける。
- ⑤ディスカッション能力を身につけ、他者との討論から新たな研究課題を見出すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

古活字本の影印をテキストとし、受講生の発表・討論と教員の講義を取り混ぜながら、『百人一首 宗祇抄』を精読します。なお、授業のはじめに、リアクションペーパーに書かれた受講生からの質問や意見を取り上げてフィードバックし、前回授業の振り返りを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	授業の概要の説明
2	春学期授業のふりかえり	春学期授業で浮かび上がった問題点・課題について整理を行う。
3	異種百人一首について	近世の異種百人一首について解説する。
4	百人一首かるたについて	百人一首と歌仙絵について考察する。
5	変体仮名について	古筆に関する解説。
6	変体仮名解説練習	変体仮名解説練習
7	『百人一首 宗祇抄』読解	受講生 A による発表と討論
8	『百人一首 宗祇抄』読解	受講生 B による発表と討論
9	『百人一首 宗祇抄』読解	受講生 C による発表と討論
10	『百人一首 宗祇抄』読解	受講生 D による発表と討論
11	『百人一首 宗祇抄』読解	受講生 E による発表と討論
12	『百人一首 宗祇抄』読解	受講生 F による発表と討論
13	『百人一首 宗祇抄』読解	受講生 G による発表と討論
14	まとめ	春学期の内容に関する総括を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業前には参考書等を読み、『百人一首』に関する基礎的な知識を身につけておいて下さい。

発表にあたっては、担当者はわかりやすく、不備のない資料を作り、要を得た説明ができるよう、綿密に準備を行ってください。それ以外の受講者はテキスト、また注釈書等を確認し、どのような問題点のある和歌なのか予習をした上で、授業にのぞんでください。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

『影印百人一首抄（宗祇抄）』（吉田幸一編、笠間書院、1969 年）

【参考書】

- ・講談社学術文庫『百人一首』（有吉保、講談社、1983 年）
- ・角川ソフィア文庫『新版 百人一首』（島津忠夫、KADOKAWA、1999 年）

【成績評価の方法と基準】

【授業の到達目標】①～⑤に照らし、発表内容またはレポート 70 %（①～⑤）、討論への参加度 30 %（⑤）という配分で、総合的に判断します。

【学生の意見等からの気づき】

一度に複数の和歌を担当・発表する形ではなく、一首ずつ丁寧に読み進めます。また、受講者のレベルに合ったプリント教材を適宜配布し、随時、くずし字を読む練習も行います。

【その他の重要事項】

基本的に対面式授業ですが、第 1 回・第 2 回授業はオンライン式の授業です。第 1 回授業日までに、学習支援システム上の当科目「お知らせ」をよく確認し、受講してください。

なお、秋学期科目のみの履修も可能ですが、理解を深めるために春学期科目 A の受講をおすすめします。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本中世文学

＜研究テーマ＞日記文学、和歌

＜主要研究業績＞「『とはすがたり』の恋一物語る二条」（『文学』8 巻 5 号、2007 年 9 月）、「『弁内侍日記』論—糾える言葉の連鎖—」（『日本古典文学研究の新展開』2011 年、笠間書院）、「『嵯峨のかよひち』考—藤原為家の涙—」（『日本文学誌要』89 号、2014 年 3 月）

【Outline (in English)】

This course deals with *Hyakunin isshu So-gi sho*.

The aim of this course is to help graduate students acquire an understanding of the characteristics of the Medieval Japanese Literature and the fundamentals of the study of waka poetry. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

Your overall grade in the class will be decided based on the following

Oral presentation or Term-end report : 70%, in class contribution : 30%.

LIT500B2

日本近世文芸特殊研究 A

小林 ふみ子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

春学期は 18 世紀後半～19 世紀前半における江戸狂歌の流行を背景とした狂歌摺物のうち、和漢の古典籍をテーマとして制作された作品を講解する。当時の和漢の学芸の流行をふまえて設定されたテーマを題として詠まれた狂歌と、それに取り合わされた北斎やその門人魚屋北溪、岳亭定岡など、北斎派の絵師、北尾派の窪俊満等の挿絵は、どのような関係にあるのか。いまだ定説を見ないこの謎に挑んでみましょう！

【到達目標】

(1) 作品を翻刻し、みずから注釈を施しながら読む力をつける。
(2) 近世における基本的な知識、情報を調査するための文献に習熟する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

背景についての概説のあと、まずは作品を割り当ててテキストを翻刻し、相互に確認しましょう。
その後、それぞれの図像の分析とテキストとの関係について発表してもらいます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	講義 1	江戸狂歌の流行と摺物制作について
第 2 回	講義 2	浮世絵の歴史のなかの摺物・作品選定
第 3 回	講義 3	絵師の紹介
第 4 回	翻刻をしてみよう 1	くずし字の基本
第 5 回	翻刻をしてみよう 2	各自の担当作品の翻刻確認
第 6 回	学生の発表 1	作品 1
第 7 回	学生の発表 2	作品 2
第 8 回	学生の発表 3	作品 3
第 9 回	学生の発表 4	作品 4
第 10 回	学生の発表 5	作品 5
第 11 回	学生の発表 6	作品 6
第 12 回	学生の発表 7	作品 7
第 13 回	学生の発表 8	作品 8
第 14 回	まとめ	作品を評価する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
毎週、次の場面を確認してきましょう。
発表担当者は作品解釈の発表を用意してください。

【テキスト（教科書）】

とくになし。

【参考書】

江戸狂歌の基本については江戸狂歌研究会編『化物で楽しむ江戸狂歌』（笠間書院 2014）参照。

【成績評価の方法と基準】

毎回の出席は当然の前提とした上で、報告 70 %、授業中の質疑などの参加態度 30 %によって総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

翻刻の確認を通じて、おもに仮名のくずし字が読解できるようになるようにします。

各分野の参考文献を紹介することで、江戸の事物を調べるための基本的な知識が得られるようにします。

【その他の重要事項】

授業の実施形態は受講生の様子を見てみんなで相談して決めましょう。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近世文芸・日本近世文化

＜研究テーマ＞大田南畝・江戸狂歌・戯作

＜著書＞

【単著】

『へんちくりん江戸挿絵本』インターナショナル新書（集英社インターナショナル、2019）

『大田南畝 江戸に狂歌の花咲かす』（岩波書店 2014）

『天明狂歌研究』（汲古書院 2009）

【共編著】

『水都としての東京とヴェネツィア』（法政大学出版局 2022）

『最後の文人 石川淳の世界』集英社新書（集英社 2021）

『東アジア文化講座 3 東アジアに共有される文学圏』（文学通信 2021）

『好古趣味の歴史 江戸東京からたどる』（文学通信 2020）

『北斎 視覚のマジック 小布施・北斎館名品集』（平凡社 2019）

『〈奇〉と〈妙〉の江戸文学史』（文学通信 2019）

『別冊太陽 歌麿決定版』（平凡社 2016）

『日本人は日本をどうみてきたか—江戸から見る自意識の変遷』（田中優子編、笠間書院 2015）

『化物で楽しむ江戸狂歌』（笠間書院 2014）

『別冊太陽 北斎決定版』（平凡社 2010）

【Outline (in English)】

(Outline) Reading surimono, or privately published prints with verses produced in 18-19th century Edo to analyze relationship between texts and images.

(Learning activities outside of classroom) Before each class meeting, students will be expected to have read a designated part of the text. Your required study time is four hours for each class meeting.

(Grading Criteria / Policy) Final grade will be calculated according to the presentations(50%) and in-class contribution(50%).

LIT500B2

日本近世文芸特殊研究 B

小林 ふみ子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

江戸時代の絵入の作品を、挿絵と合わせて読解する。秋学期は、春学期の受講生と相談して作品を決定する。

【到達目標】

- (1) 作品を翻刻し、注釈を施しながら読む力をつける。
- (2) 近世における基本的な知識、情報を調査するための文献に習熟する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式で学生の分担によって進行する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	概説	作者と画工、時代状況についての概説
第 2 回	学生の発表	上巻 1
第 3 回	学生の発表	上巻 2
第 4 回	学生の発表	上巻 3
第 5 回	学生の発表	上巻 4
第 6 回	学生の発表	中巻 1
第 7 回	学生の発表	中巻 2
第 8 回	学生の発表	中巻 3
第 9 回	学生の発表	中巻 4
第 10 回	学生の発表	下巻 1
第 11 回	学生の発表	下巻 2
第 12 回	学生の発表	下巻 3
第 13 回	学生の発表	下巻 4
第 14 回	まとめ	作品を評価する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
毎週、次回のテキストを読んでくる。
発表担当者は語釈・解釈の発表を用意する。

【テキスト（教科書）】

なし

【参考書】

小林ふみ子『へんちくりん江戸挿絵本』（集英社インターナショナル・インターナショナル新書 2019）。その他、適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎回の出席は当然の前提とした上で、報告 70 %、授業中の質疑などの参加態度 30 %によって総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

翻刻を通じて、おもに仮名のくずし字が読解できるようになるようにします。
各分野の参考文献を紹介することで、江戸の事物を調べるための基本的な知識が得られるようにします。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近世文芸・日本近世文化
＜研究テーマ＞大田南畝・江戸狂歌・戯作
＜近年の論文・その他書き物＞

【論文】

「南畝の狂歌の評価軸」『近世文藝』113 号 2021（査読付）

「文政期前後の風景画入狂歌本の出版とその改題・再印—浮世絵風景版画流行の前史として」『浮世絵芸術』179 号 2020（査読付）
「狂歌に文芸性はあるのか」『古典文学の常識を疑うⅡ』（単行本）勉誠出版 2019

「書籍を模擬する遊び—「見立絵本」にかんする疑問、から—」『京都語文』26 号 2018

「山東京伝の地方読者へのまなざし」『文学（隔月刊）』17 巻 4 号 2016

【一般誌】「江戸の名所は、都市の発達と行楽文化の成熟とともに変化した」『歴史 REAL 大江戸の都市力』洋泉社 MOOK 2018

「歌麿が描いた江戸、描かなかった江戸」『別冊太陽 歌麿決定版』2016

「国芳時代の絵師ビジネス」『芸術新潮』2016 年 4 月号

【Outline (in English)】

(Outline) Reading illustrated works to learn how to deeply read those kind of works from 18-19th century Edo.

(Learning activities outside of classroom) Before each class meeting, students will be expected to have read a designated part of the text. Your required study time is four hours for each class meeting.

(Grading Criteria/Policy) Final grade will be calculated according to the presentations(50%) and in-class contribution(50%).

LIT500B2

日本近代文芸特殊研究 A

中丸 宣明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ①受講生各自の研究する作家・作品に関する注釈・分析・立論・評価の能力の養成。
- ②日本近・現代文学の文学史的展開のあり方を把握すること。①と関連して、各自の研究する対象の位置が明確になるように努める。
- ③「文学」を広く文化学的視野でとらえられるように幅広い知見を身につける。
- ④上記の研究を推進しながら、博士論文作成へと連続させていくこと。
- ⑤研究指導能力の涵養

【到達目標】

上記「授業のテーマ」で設定されていることが、受講者各自の研究テーマに即して実現されること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ①各自の研究テーマにそって研究発表をする。
- ②近代文学の研究史上エポックをなした（と思われる）研究書を取り上げ、その研究史上の意味と現在の研究に資する方法論を語る。
- ①②とも発表と討論によって構成される。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	本授業（演習）の目的・運営など。
2	各自のテーマに即した研究発表	受講者各自のテーマによる研究発表
3	各自のテーマに即した研究発表	受講者各自のテーマによる研究発表
4	研究書精読	文学研究の方法探求
5	各自のテーマに即した研究発表	受講者各自のテーマによる研究発表
6	各自のテーマに即した研究発表	受講者各自のテーマによる研究発表
7	研究書精読	文学研究の方法探求
8	各自のテーマに即した研究発表	受講者各自のテーマによる研究発表
9	各自のテーマに即した研究発表	受講者各自のテーマによる研究発表
10	研究書精読	文学研究の方法探求
11	各自のテーマに即した研究発表	受講者各自のテーマによる研究発表
12	各自のテーマに即した研究発表	受講者各自のテーマによる研究発表
13	研究書精読	文学研究の方法探求
14	前期のまとめ	前期のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表者は担当作品に関する調査・研究を発表する。必要時間は無限。他の受講者は当該作品についての視点・論点の感想文を提出する。本授業の準備学習・復習時間は、各 24 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

受講者の便宜・要請に従って、決定する。発表者は当該作品のテキストを決め、ゼミ員に指示すること。

【参考書】

各自の発表の中で、発表者の示すものに加えて指示。

【成績評価の方法と基準】

各自の発表内容（40 %）と討議参加内容（40 %）期末レポート（20 %）

【学生の意見等からの気づき】

去年度、非開講のためアンケートなし。
学生との対話を大切にする。

【担当教員の専門分野等】

< 専門領域 >

日本近代文学

< 研究テーマ >

近代文学の成立期の研究－ 19 世紀文学論

自然主義文学の形成と構造

< 主要研究業績 >

・「紀久八狂乱－広津柳浪『乱菊物語』と小栗風葉『鬘下地』」「国語と国文学」（東京大学国語国文学会）2010. 5

・「草双紙のゆくえ－雑誌「人情世界」の位置」「文学」（岩波書店）2009. 11・12

・「『東京絵入新聞』の図像学－『金之助の話説』の成立まで」「日本近代文学」（日本近代文学会）2008. 5

【Outline (in English)】

< Course outline > See Japanese notation. Those who do not understand the Japanese language are not eligible. Because it is an academic lecture on Japanese literature, it requires more Japanese ability than daily conversation.

< Learning Objectives > Acquire the advanced and professional literary research. See "outline and objectives."

< Learning activities outside of classroom > Research presentations prepare for infinite time. Other students will be expected to spend 24 hours to understand the course content. See "outline and objectives."

< Grading Criteria/Policy > Completeness of research presentation (40 %), Quality of discussion.

LIT500B2

日本近代文芸特殊研究 B

中丸 宣明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ①受講生各自の研究する作家・作品に関する注釈・分析・立論・評価の能力の養成。
- ②日本近・現代文学の文学史的展開のあり方を把握すること。①と関連して、各自の研究する対象の位置が明確になるように努める。
- ③「文学」を広く文化学的視野でとらえられるように幅広い知見を身につける。
- ④上記の研究を推進しながら、修士論文作成へと連続させていくこと。

【到達目標】

上記「授業のテーマ」で設定されていることが、受講者各自の研究テーマに即して実現されること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ①各自の研究テーマにそって研究発表をする。
- ②近代文学の研究史上エポックをなした（と思われる）研究書を取り上げ、その研究史上の意味と現在の研究に資する方法論を探る。
- ①②とも発表と討論によって構成される。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1 回	（前期からの継続）	受 各人のテーマに基づく研究発表。 講者各自による発表及び討議
2 回		受講者各自による発表 各人のテーマに基づく研究発表。 及び討議
3 回	研究書精読	文学研究の方法論探求
4 回	受講者各自による発表	それぞれの反省と今後の展望。 及び討議
5 回	受講者各自による発表	それぞれの反省と今後の展望。 及び討議
6 回	研究書精読	文学研究の方法論探求
7 回	受講者各自による発表	それぞれの反省と今後の展望。 及び討議
8 回	受講者各自による発表	それぞれの反省と今後の展望。 及び討議
9 回	研究書精読	文学研究の方法論探求
10 回	受講者各自による発表	それぞれの反省と今後の展望。 及び討議
11 回	受講者各自による発表	それぞれの反省と今後の展望。 及び討議
12 回	研究書精読	文学研究の方法論探求
13 回	一年間のまとめ	論文執筆にむけて
14 回	一年間のまとめ	論文執筆にむけて

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表者は担当作品に関する調査・研究を発表する。必要時間は無限。
他の受
講者は当該作品についての視点・論点の感想文を提出する。本授業の準備学
習・復習時間は、各 24 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

受講者の便宜・要請に従って、決定する。発表者は当該作品のテキストを決
定し、ゼミ員に指示すること。

【参考書】

各自の発表の中で、発表者の示すものに加えて指示。

【成績評価の方法と基準】

発表（40 %）および討論への参加（40 %）、期末レポート（20%）。

【学生の意見等からの気づき】

討議の中で聴取。In discussion in the seminar.

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

< 専門領域 >

日本近代文学

< 研究テーマ >

近代文学の成立期の研究 - 19 世紀文学論

自然主義文学の形成と構造

< 主要研究業績 >

・「紀久八狂乱-広津柳浪『乱菊物語』と小栗風葉『鬘下地』」「国語と国文学」（東京大学国語国文学会）2010. 5

・「草双紙のゆくえ-雑誌「人情世界」の位置」「文学」（岩波書店）2009. 11・12

・「『東京絵入新聞』の図像学-『金之助の話説』の成立まで」「日本近代文学」（日本近代文学会）2008. 5

【Outline (in English)】

< Course outline > See Japanese notation. Those who do not understand the Japanese language are not eligible. Because it is an academic lecture on Japanese literature, it requires more Japanese ability than daily conversation.

< Learning Objectives > Acquire the advanced and professional literary research. See "outline and objectives."

< Learning activities outside of classroom > Research presenters prepare for infinite time. Other students will be expected to spend 24 hours to understand the course content. See "outline and objectives."

< Grading Criteria/Policy > Completeness of research presentation (40 %), quality of discussion (40 %), year-end report (20%)

LIN500B2

日本語学特殊研究 A

間宮 厚司

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語学の方法について学びます。この授業では、上代・中古・中世における文学作品について言語学的に考え、正しく解釈する方法を学ぶことを目的にします。

【到達目標】

日本語研究に関する調査・分析・考察を学び、プリントを作成して発表する。時代を問わず、様々な視点から自分なりの論を立てられるようになることを目的にした授業です。博士論文の作成に役立つ知識やスキルを身につけることが到達目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講生による研究発表を中心に行います。発表者はプリントを人数分準備、配布して発表し、発表後に質疑応答や助言などを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業内容・受講の仕方・成績評価等についての説明
第 2 回	上代文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第 3 回	上代文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第 4 回	上代文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第 5 回	上代文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説
第 6 回	中古文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第 7 回	中古文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第 8 回	中古文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第 9 回	中古文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説
第 10 回	中世文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第 11 回	中世文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第 12 回	中世文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第 13 回	中世文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説と大レポートの説明
第 14 回	まとめ	大レポート提出と総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
図書館を大いに活用し、必要に応じて、研究相談に来て下さい。

【テキスト（教科書）】

プリントを配布し、テキストは指定しません。

【参考書】

参考書は研究テーマにそって、そのつど提示します。

【成績評価の方法と基準】

発表の内容（30％）・質疑応答の発言（30％）・レポート（40％）を勘案して、総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

博士課程の受講生が履修している場合には、修士の受講生との違いを考慮するようにしたい。

【担当教員の専門分野等】

日本古典語学・日本語史

<研究テーマ>

『万葉集』や『おもしろさうし』等の言語研究

<主要研究業績>

『おもしろさうしの言語』（笠間書院、2005 年）

『沖縄古語の深層 [増補版]』（森話社、2014 年）

『万葉異説 [増補版]』（森話社、2021 年）

【Outline (in English)】

This course will be an interactive lecture. In this course, you are going to have a presentation about what we learn in the class related to Japanese Language and a question and answer session.

Learning objectives of this class:

Students learn investigation, analysis, and consideration regarding Japanese language studies, and students prepare documents to have presentations.

Focus on theorizing your thoughts about Japanese language studies from different perspective and era.

Acquire the necessary skill and knowledge for writing doctoral thesis.

Learning activities outside of classroom:

As preparation and review of the class, students will be expected to spend about 2 hours.

Use the library for study and students can come to the laboratory for consultation if needed.

Grading Criteria/Policies:

Your overall grade in the class will be decided based on the following:

Contents of Presentation (30%), In-class contribution (30%), Report (40%).

LIN500B2

日本語学特殊研究 B

間宮 厚司

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語学の方法について学びます。この授業では、近世・近代・現代における文学作品について言語学的に考え、正しく解釈する方法を学ぶことを目的にします。

【到達目標】

日本語研究に関する調査・分析・考察を学び、プリントを作成して発表する。時代を問わず、様々な視点から自分なりの論を立てられるようになることを目的にした授業です。博士論文の作成に役立つ知識やスキルを身につけることが到達目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講生による研究発表を中心に行います。発表者はプリントを人数分準備、配布して発表し、発表後に質疑応答や助言などを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業の内容・受講の仕方・成績評価等についての説明
第 2 回	近世文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と今回の課題
第 3 回	近世文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と今回の課題
第 4 回	近世文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第 5 回	近世文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説
第 6 回	近代文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と今回の課題
第 7 回	近代文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と今回の課題
第 8 回	近代文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第 9 回	近代文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説
第 10 回	現代文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と今回の課題
第 11 回	現代文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と今回の課題
第 12 回	現代文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第 13 回	現代文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説と大レポートの説明
第 14 回	まとめ	大レポート提出と総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
図書館を大いに活用し、必要に応じて、研究相談に来て下さい。

【テキスト（教科書）】

プリントを配布し、テキストは指定しません。

【参考書】

参考書は各自の研究テーマにそって、そのつど提示します。

【成績評価の方法と基準】

発表の内容（30％）・質疑応答の発言（30％）・レポート（40％）を勘案して、総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

博士課程の受講生が履修している場合には、修士の受講生との違いを考慮するようにしたい。

【担当教員の専門分野等】

日本古典語学・日本語史

<研究テーマ>

『万葉集』や『おもしろさうし』等の言語研究

<主要研究業績>

『おもしろさうしの言語』（笠間書院、2005 年）

『沖縄古語の深層 [増補版]』（森話社、2014 年）

『万葉異説 [増補版]』（森話社、2021 年）

【Outline (in English)】

This course will be an interactive lecture. In this course, you are going to have a presentation about what we learn in the class related to Japanese Language and a question and answer session.

Learning objectives of this class:

Students learn investigation, analysis, and consideration regarding Japanese language studies, and students prepare documents to have presentations.

Focus on theorizing your thoughts about Japanese language studies from different perspective and era.

Acquire the necessary skill and knowledge for writing doctoral thesis.

Learning activities outside of classroom:

As preparation and review of the class, students will be expected to spend about 2 hours.

Use the library for study and students can come to the laboratory for consultation if needed.

Grading Criteria/Policies:

Your overall grade in the class will be decided based on the following:

Contents of Presentation (30%), In-class contribution (30%), Report (40%).

LIT500B2

能楽作品特殊研究 A

山中 玲子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

能は 700 年近い歴史を持つ伝統芸能で、レパートリーもほぼ固定され、演出の決まりも多いが、それでも演者・流儀によりさまざまな演出の工夫があり、すぐれた工夫はそれがまた新たな「決まり」「秘伝」となって伝えられてきた。作品の主題や主人公の人物像をどう解釈するかによって特別の演出が作られている場合もある。この授業では能の作品研究に演出についての考察を活かす方法や、演出資料の解説方法を学ぶ。

【到達目標】

- 1) 古写謄本を校合し研究対象となる能のテキストを作成できる。
- 2) 能の所作や囃子の演奏法など、演出に関する古い資料を読み解き、作品研究の材料として使えるようになる。
- 3) 伝統芸能である能にとって「演出」がどういう意味を持つかを理解する。
- 4) 小書と呼ばれる能の替演出の概要を知る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

前期は講義を主体とします。能の演出の基本的な考え方や、演出研究に必要な資料の読み方などを、具体的な作品に沿って説明し、授業参加者にも実際に古い資料を読んでもらいながら進めていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	能の概説と能楽研究所の資料紹介	能について学ぶ際の基礎資料、能楽研究所の使い方の紹介。
第 2 回	能演出のバリエーション	能の「演出」とはどのようなことか。伝統芸能の決まりの中での工夫について。
第 3 回	演出研究のための資料	演出研究のための基礎文献とその使い方を学ぶ。
第 4 回	《朝長》を読む	《朝長》のテキストを読み、作品の主題や演出のポイントを知る。
第 5 回	《朝長》の小書「懺法」について	《朝長》の小書演出「懺法」の内容や成立過程を知る。
第 6 回	本来の演出が別置されてきた小書	《清経》の「音取」、《安宅》の「延年」など、本来の演出が能の類型化の中で別置されてきた小書について、概観する。
第 7 回	《采女》を読む	能《采女》のテキストを読み、主題と演出のポイントを知る。
第 8 回	《采女》の小書「美奈保之伝」について	《采女》の作品解釈と深く関わる小書「美奈保之伝」の内容と変遷を学ぶ。
第 9 回	観世元章と小書演出	観世元章により能の演出の改革について概観する。
第 10 回	作品解釈と深く関わる小書	元章による小書演出の実例を動画で鑑賞する。
第 11 回	ワークショップ：「型付」を読む①	下間少進の『童舞抄』を読んでみる。型付に共通の用語や個々の資料に特有の用語を知る。
第 12 回	ワークショップ：「型付」を読む②	『宗節仕舞付』を読んでみる。型付に共通の用語や個々の資料に特有の用語を知る。

第 13 回 ワークショップ：「囃 鼓伝書や笛伝書を読み、特有の用子伝書」を読む 語を知る。

第 14 回 まとめ 前期のまとめとしてのミニ発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

謡本の古写本や演出資料の解説などは、各自がおこなったうえで授業に参加してもらうことになるので、能楽研究所の閲覧室等での自習時間は多くなるはずだ。

【テキスト（教科書）】

使わない

【参考書】

横道萬里雄『能にも演出がある 小書演出・新演出など』（2007 年 檜書店）

横道萬里雄・山中玲子・松本雍『能を面白く見せる工夫 小書演出の歴史と諸相』（2009 年 檜書店）

【成績評価の方法と基準】

授業内での発言や授業への貢献度（30 %）、ワークショップ及びミニ発表（70 %）

【学生の意見等からの気づき】

今年度の授業は、前年度から参加している学生たちの希望によって決めました。現代の能を彩る「小書」や能演出の基本を押さえ、作品研究と結びつけたいというのが彼らの希望でしたので、それに添うように組み立てていきます。できれば前期後期続けて受講していただきたいと考えています。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 中世文学 能楽研究

<研究テーマ> 能の作品研究・演出研究

<主要研究業績>

・「修羅能以前の『平家の能』—〈経盛〉の再検討を通して—」、『無常の鐘声 平家物語』（松尾葦江編、花鳥社、2020.7）、pp.213-229
・「〈二人静〉—音阿弥の演出・元章の解釈」、『観世』 85 巻 3 号、檜書店、2018.3、pp.28-35

・「『御世話筋秘曲』の解説と復元の記録」、『能楽研究』 41、法政大学能楽研究所、2017.3、pp.91-112

・「能の「習事」と番組上の小字注記—「小書」という語の意味するところ—」、『能楽研究』 40、能楽研究所、2016.3、pp.135-160

・「能〈通小町〉遡源」、『国語と国文学』 93 巻 3 号、東京大学国語国文学会、2016.3、pp.3-16

【Outline (in English)】

In this class, you will learn how to apply the consideration of staging to the study of Noh works and how to decipher staging materials.

Learning Objectives are:

1) to be able to correctly interpret the content of the noh text,
2) to be able to use old materials on staging as material for researching the work.

3) to understand what "staging" means to Noh as a traditional performing art.

Each student is responsible for collating old chant manuscripts as preparatory work.

LIT500B2

能楽作品特殊研究 B

山中 玲子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

能は 700 年近い歴史を持つ伝統芸能で、レパートリーもほぼ固定され、演出の決まりも多いが、それでも演者・流儀によりさまざまな演出の工夫があり、すぐれた工夫はそれがまた新たな「決まり」「秘伝」となって伝えられてきた。作品の主題や主人公の人物像をどう解釈するかによって特別の演出が作られている場合もある。この授業では能の作品研究に演出についての考察を活かす方法や、演出資料の解説方法を学ぶ。

【到達目標】

- 1) 能の所作や囃子の演奏法など、演出に関する古い資料を読み解き、作品研究の材料として使えるようになる。
- 2) 伝統芸能である能にとって「演出」がどういう意味を持つかを理解する。
- 3) 小書と呼ばれる能の替演出の概要を知る。
- 4) 作品の精読と演出史の確認などから、個々の作品について新たな知見や問題とすべき点を見いだすことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

後期は学生による発表を中心にし、そこで出た問題について必要な講義を混ぜていく形にします。はじめに、小書演出を構成するユニットについていくつか説明をした後、各自の発表に移ります。能の小書演出全体をよく知るためにふさわしい曲目をこちらで指定してあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	能の小書演出概観	前期の復習
第 2 回	笛の盤渉調について	能の笛が通常よりも高い「盤渉」調で演奏される場合について
第 3 回	「クツロギ」の小書について	舞のなかでの橋懸の利用やシテと囃子方との関係について
第 4 回	赤頭・黒頭・白頭について	後シテの仮髪の色が持つ意味と替演出について
第 5 回	能《邯鄲》の演出① テキストの解釈	《邯鄲》のテキストを読み、主題と演出のポイントを知る。
第 6 回	能《邯鄲》の演出② 小書演出の諸相	《邯鄲》に数多くある小書と作品解釈との関わりについて知る。
第 7 回	能《海人》の演出① テキストの解釈	《海人》のテキストを読み、主題と演出のポイントを知る。
第 8 回	能《海人》の演出② 小書演出の諸相	《海人》に数多くある小書と作品解釈との関わりについて知る。
第 9 回	能《通小町》の演出① テキストの解釈	《通小町》のテキストを読み、主題と演出のポイントを知る。
第 10 回	能《通小町》の演出② 小書演出の諸相	《通小町》の小書と作品解釈との関わりについて知る。
第 11 回	能《羽衣》の演出① テキストの解釈	《羽衣》のテキストを読み、主題と演出のポイントを知る。
第 12 回	能《羽衣》の演出② 小書演出の諸相	《羽衣》の小書と作品解釈との関わりについて知る。
第 13 回	《石橋》《乱》《道成寺》の小書	重い習いの曲に、ことさら小書演出が多いこと
第 14 回	新作能と小書演出のユニット	新作能の演出に用いられる技法

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

謡本の古写本や演出資料の解説などは、各自がおこなったうえで授業に参加してもらうことになるので、能楽研究所の閲覧室等での自習時間は多くなるはずですが。

【テキスト（教科書）】

使わない

【参考書】

横道萬里雄『能にも演出がある 小書演出・新演出など』（2007 年 能楽研究所）

横道萬里雄・山中玲子・松本雅『能を面白く見せる工夫 小書演出の歴史と諸相』（2009 年 能楽研究所）

【成績評価の方法と基準】

授業内での発言や授業への貢献度（30 %）、担当曲の発表（70 %）

【学生の意見等からの気づき】

今年度の授業は、前年度から参加している学生たちの希望によって決めました。現代の能を彩る「小書」や能演出の基本を押さえ、作品研究と結びつけたいというのが彼らの希望でしたので、それに添うように組み立てていきます。できれば、前期後期併せて受講していただきたいと考えています。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞中世文学 能楽研究

＜研究テーマ＞能の作品研究・演出研究

＜主要研究業績＞

- ・「修羅能以前の『平家の能』—〈経盛〉の再検討を通して—」、『無常の鐘声 平家物語』（松尾葦江編、花鳥社、2020.7）、pp.213-229
- ・「〈二人静〉—音阿弥の演出・元章の解釈」、『観世』 85 巻 3 号、能楽研究所、2018.3、pp.28-35
- ・「『御世話筋秘曲』の解説と復元の記録」、『能楽研究』 41、法政大学能楽研究所、2017.3、pp.91-112
- ・「能の「習事」と番組上の小字注記—「小書」という語の意味するところ—」、『能楽研究』 40、能楽研究所、2016.3、pp.135-160
- ・「能〈通小町〉遡源」、『国語と国文学』 93 巻 3 号、東京大学国語国文学会、2016.3、pp.3-16

【Outline (in English)】

In this class, you will learn how to apply the consideration of staging to the study of Noh works and how to decipher staging materials.

Learning Objectives are:

- 1) to be able to correctly interpret the content of the noh text,
 - 2) to be able to use old materials on staging as material for researching the work.
- Each student is responsible for collating old chant manuscripts as preparatory work.
- 3) to understand what "staging" means to Noh as a traditional performing art.

LIT500B2

能楽資料特殊研究 A

宮本 圭造

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

能楽資料を用いた基礎的研究の方法を学ぶ。

能楽研究の基礎となる資料にはどのようなものがあるか。その概説からはじめ、主に能及び狂言の実際の上演に関わる台本・演出資料の紹介、それらの資料に基づく能楽研究の方法と課題について考察する。

【到達目標】

能楽研究を進める上で最低限必要な文献学的な知識を身に着けるとともに、資料を読解する力、そこから問題点と解決を自ら導き出す力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

研究の基礎となるのは資料であり、資料をいかに集め、それをいかに読解・解釈して真実に近づくかが、研究者の腕の見せ所です。それは、能楽研究においても例外ではありません。戦後、能楽研究を大きく推進する原動力となったのは、新しい資料の発掘と、その精緻な解読作業の積み重ねでした。この授業では、能楽研究を進めていく上で必要となる、能楽資料に関する基本的な知識を身に着けると、資料に基づいて研究を構築する方法をそれぞれが見出すことを目的とするものです。幸い、法政大学能楽研究所は、日本でも有数の能楽資料のコレクションを所蔵することで知られています。その中には、能のテキストである謡本をはじめ、演技の習得に関する教則本、能役者の日記、手紙など、ありとあらゆる種類の資料が含まれています。これらを実際の教材として、能楽研究の諸問題について考えていきたいと思います。授業は前半を講義主体で進める予定ですが、後半では学生による発表の場を持ちたいと考えています。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	能楽資料の概要	能楽資料にはどのようなものがあるのか。その概要を紹介する。
第 2 回	能楽資料の伝来	能楽研究所には多数の能楽資料が所蔵されているが、それらがどのような伝来を経たものであるのかを紹介する。
第 3 回	能本と謡本	能のテキストである能本と謡本の関係、および製作過程について考察する。
第 4 回	謡本の諸系統	現存の謡本はいくつかの系統に分かれている。その見分け方と、そうした諸系統がどのようにして形成されてきたのかを考える。
第 5 回	謡本の写本と版本	室町時代における謡本写本の制作状況、江戸時代における謡本の出版状況とその特徴を紹介する。
第 6 回	能の型付の今昔	能の演技を文字に書き留めた型付がどのように形成されてきたか。初期の型付と江戸以降の型付とを比較して、それぞれの特徴を考える。
第 7 回	能の型付の位相	教則本としての型付がどのように作られ、伝えられたのかを考察する。

第 8 回	能の道具に関わる資料	能の面・装束・小道具に関わる資料とその問題点について考察する。
第 9 回	狂言関係資料の概要	能楽資料のうち、狂言に関わる資料の概要を紹介する。
第 10 回	狂言台本の諸問題	狂言台本の諸資料を概観するとともに、台本と実際の上演との関係を考察する。
第 11 回	間狂言台本の諸問題	狂言台本のうち、能一曲の中で演じられる間狂言に関わる台本の諸資料を概観するとともに、その問題点を検討する。
第 12 回	能楽資料を用いた能上演の再現的研究	謡本や型付などの資料を用い、どのような研究が具体的に可能かを検討する。
第 13 回	能楽資料を用いた狂言上演の再現的研究	狂言台本を用い、どのような研究が具体的に可能かを検討する。
第 14 回	総括	これまでの授業を踏まえ、能楽資料を用いた研究の可能性を総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

能楽に関する基本的な著書（岩波講座『能・狂言』など）を読んでおくことが望ましい。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しないが、毎回プリントを参考資料として配布する。

【参考書】

岩波講座『能・狂言』
平凡社『別冊太陽 能』

【成績評価の方法と基準】

出席平常点 30 パーセント、発表・レポート課題 70 パーセント
資料を分析し、自ら問題点を見出すことができているか、それを論理的に説明・文章化することができているかを評価のポイントとする。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 能楽研究 芸能史
<研究テーマ> 能楽史、能面史など
<主要研究業績>

- ①『上方能楽史の研究』（和泉書院、2005 年）
- ②『近代日本と能楽』（法政大学能楽研究所、2017 年、編著）
- ③『金春家文書の世界』（法政大学能楽研究所、2017 年、編著）

【Outline (in English)】

This course deals with the Noh-related materials dating from the Muromachi period to the Meiji period. Before/after each class meeting, students will be expected to have read the relevant books. Grading will be decided based on lab reports (70%), and the quality of the students' experimental performance in the lab (30%).

LIT500B2

能楽資料特殊研究 B

宮本 圭造

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

能楽資料を用いた基礎的研究の方法を学ぶ。

能楽研究の基礎となる資料を活用してどのような研究が可能となるか。この授業では、能役者が書いた日記や能の公演に関わる資料、能を見物した人々の記録などを取り上げて、能がどのような環境の中で演じられてきたかを考察する。

【到達目標】

能楽研究を進める上で最低限必要な文献学的な知識を身に着けるとともに、資料を読解する力、そこから問題点と解決を自ら導き出す力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

研究の基礎となるのは資料であり、資料をいかに集め、それをいかに読解・解釈して真実に近づくかが、研究者の腕の見せ所です。それは、能楽研究においても例外ではありません。戦後、能楽研究を大きく推進する原動力となったのは、新しい資料の発掘と、その精緻な解読作業の積み重ねでした。この授業では、能楽研究を進めていく上で必要となる、能楽資料に関する基本的な知識を身に着けると、資料に基づいて研究を構築する方法をそれぞれが見出すことを目的とするものです。幸い、法政大学能楽研究所は、日本でも有数の能楽資料のコレクションを所蔵することで知られています。その中には、能のテキストである謡本をはじめ、演技の習得に関する教則本、能役者の日記、手紙など、ありとあらゆる種類の資料が含まれています。これらを実際の教材として、能楽研究の諸問題について考えていきたいと思います。授業は前半を講義主体で進める予定ですが、後半では学生による発表の場を持ちたいと考えています。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第一回	能楽資料の概要	能楽資料のうち、能の環境に関わる資料にはどのようなものがあるのか。その概要について解説する。
第二回	能役者が書き留めた資料	能楽資料のうち、能役者が書き留めた資料にはどのようなものがあるのかを解説する。
第三回	能伝書の成立と展開	能の演技の心構えを記した能伝書にはどのようなものがあるのかを概観する。
第四回	能伝書に見る能の世界	能伝書から何が読み取れるのか。いくつかの伝書を読み解き、そこから窺える能の世界を読み解く。
第五回	能役者の伝記	能役者の伝記に関わる資料にはどのようなものがあるのかを紹介し、その問題点を考察する。
第六回	能役者の日記—江戸時代—	能役者の日記にはどのようなものがあるのか。ここでは江戸時代の能役者の日記を取り上げて、紹介する。
第七回	能役者の日記—明治時代—	明治時代の能役者の日記を取り上げて、そこから何が読み取れるのかを考察する。

第八回	能の上演記録のさまざま	能の上演に関する記録として番組を取り上げ、その史料としての問題点を論じる。
第九回	能の興行に関する諸資料	能の興行に関する資料を取り上げ、興行形態がどのように変遷したかを考察する。
第十回	能を見た人々の記録	能楽資料の中には、数は多くないが、能を見た人の感想を記したものがいくつかある。それらを紹介して、人々がどのようなまなざしで能を見ていたのかを考察する。
第十一回	能の絵画資料	能の上演の様子を描いた絵画資料を取り上げ、そこから何が読み取れるのかを考察する。
第十二回	能を演ずる人々	能を演ずる人々について、能楽資料からどこまで明らかにできるかを考察する。
第十三回	能が演じられた場	能が演じられた場について、能楽資料からどこまで明らかにできるかを考察する。
第十四回	総括	これまでの授業を踏まえ、能楽資料を用いた研究の可能性を総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

能楽に関する基本的な著書（岩波講座『能・狂言』など）を読んでおくことが望ましい。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しないが、毎回プリントを参考資料として配布する。

【参考書】

岩波講座『能・狂言』

平凡社『別冊太陽 能』

【成績評価の方法と基準】

出席平常点30パーセント、発表・レポート課題70パーセント資料を分析し、自ら問題点を見出すことができているか、それを論理的に説明・文章化することができるかを評価のポイントとする。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 能楽研究 芸能史

＜研究テーマ＞ 能楽史、能面史など

＜主要研究業績＞

①『上方能楽史の研究』（和泉書院、2005年）

②『近代日本と能楽』（法政大学能楽研究所、2017年、編著）

③『金春家文書の世界』（法政大学能楽研究所、2017年、編著）

【Outline (in English)】

This course deals with the Noh-related materials dating from the Muromachi period to the Meiji period. By the end of the course, students should be able to deeply research documentary materials of Noh. Before/after each class meeting, students will be expected to have read the relevant books. Grading will be decided based on lab reports (70%), and the quality of the students' experimental performance in the lab (30%).

OTR600B7

国際日本学演習 I

君嶋 泰明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

マルティン・ハイデガーが 1922 年夏学期講義（全集 62 巻）において行ったアリストテレス『自然学』第 1 巻第 2~3 章の解釈を読む。同章でアリストテレスは「万物は一つである」とするパルメニデスの存在観を批判しており、ハイデガーはこの批判に存在と言葉の関係にかんする重要な洞察が潜んでいると見ている。その洞察に迫るのが目標である。

なお受講者の関心に応じて、西洋と日本における存在と言葉についての考え方の違いも検討する。

【到達目標】

- ①アリストテレスのパルメニデス批判をハイデガーがどのように解釈しているかを理解する。
- ②そのことを通じて、存在と言葉の関係についてのハイデガーの見方を理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

担当者は、テキストの割り当てられた箇所を音読し、日本語訳を述べ、解釈が必要な点については自分の解釈を提示する。参加者はこれに基づき全員で議論し、内容についての理解を深める。別途課題を課した場合、それへのフィードバックは次回授業で行う。

なお、以下の授業計画に記したページ数はあくまで目安であり、進度に応じて適宜変更する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	概要の説明
第 2 回	ハイデガーの『自然学』解釈①	報告と討議（165-167 頁）
第 3 回	ハイデガーの『自然学』解釈②	報告と討議（168-170 頁）
第 4 回	ハイデガーの『自然学』解釈③	報告と討議（171-173 頁）
第 5 回	ハイデガーの『自然学』解釈④	報告と討議（174-176 頁）
第 6 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑤	報告と討議（177-179 頁）
第 7 回	ハイデガーの『自然学』解釈①	報告と討議（200-202 頁）
第 8 回	ハイデガーの『自然学』解釈②	報告と討議（203-205 頁）
第 9 回	ハイデガーの『自然学』解釈③	報告と討議（206-208 頁）
第 10 回	ハイデガーの『自然学』解釈④	報告と討議（209-211 頁）
第 11 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑤	報告と討議（212-214 頁）
第 12 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑥	報告と討議（215-217 頁）
第 13 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑦	報告と討議（218-220 頁）
第 14 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑧	報告と討議（221-223 頁）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。担当者は、テキストの割り当てられた箇所の音読、日本語訳、解釈を準備して授業に臨む。参加者は該当箇所を熟読してくる。

【テキスト（教科書）】

Martin Heidegger, *Phänomenologische Interpretationen ausgewählter Abhandlungen des Aristoteles zur Ontologie und Logik*, Gesamtausgabe Bd. 62, Vittorio Klostermann, 2005.
未邦訳。希望者には該当箇所のコピーを配布する。

【参考書】

アリストテレス著・内山勝利訳、『アリストテレス全集 4 自然学』、岩波書店、2017 年
William Charlton, *Aristotle's Physics Books I and II*, Oxford University Press, 1970.
前者はアリストテレスの『自然学』の邦訳。後者はその英訳と注釈。これらも希望者には該当箇所のコピーを配布する。

【成績評価の方法と基準】

担当者としての評価が 80%、議論への参加度の評価が 20%。上記の到達目標がどれだけ達成されているかが主な評価基準となる。

【学生の意見等からの気づき】

受講者の理解度を配慮しながら適宜解説を加えつつ授業を進める。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
現象学・解釈学
<研究テーマ>
ハイデガーの西洋哲学史観の批判的検討
<主要研究業績>
・「『存在忘却』とは何か」、『法政大学文学部紀要』82 号、2020 年。
・「信仰と哲学——ハイデガーのアウグスティヌス解釈について」、『アルケー』26 号、2018 年。
・「ハイデガーのデカルト解釈について」、『哲学論叢』41 号、2014 年。
・「不断の逸れに抗して真正な道を歩むこと——ハイデガー初期フライブルク講義に見る「形式的告示」が持つ含意」、『アルケー』20 号、2012 年。

【Outline (in English)】

(Course outline)
This course deals with Martin Heidegger's interpretation of Aristotle's *Physics*.
(Learning Objectives)
The goal of this course is to understand Heidegger's view on the relationship between being and language.
(Learning activities outside of classroom)
Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter(s) from the texts. Your required study time is at least two hours for each class meeting.
(Grading Criteria / Policies)
Grading will be decided based on short reports (80%) and in-class contribution (20%).

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

君嶋 泰明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

春学期に引き続き、マルティン・ハイデガーが 1922 年夏学期講義（全集 62 巻）において行ったアリストテレス『自然学』第 1 巻第 2~3 章の解釈を読む。同章でアリストテレスは「万物は一つである」とするパルメニデスの存在観を批判しており、ハイデガーはこの批判に存在と言葉の関係にかんする重要な洞察が潜んでいると見ていた。その洞察に迫るのが目標である。なお受講者の関心に応じて、西洋と日本における存在と言葉についての考え方の違いも検討する。

【到達目標】

- ①アリストテレスのパルメニデス批判をハイデガーがどのように解釈しているかを理解する。
- ②そのことを通じて、存在と言葉の関係についてのハイデガーの視点を理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

担当者は、テキストの割り当てられた箇所を音読し、日本語訳を述べ、解釈が必要な点については自分の解釈を提示する。参加者はこれに基づき全員で議論し、内容についての理解を深める。別途課題を課した場合、それへのフィードバックは次回授業で行う。なお、以下の授業計画に記したページ数はあくまで目安であり、進度に応じて適宜変更する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	春学期の振り返りと概要の説明
第 2 回	ハイデガーの『自然学』解釈①	報告と討議（224-226 頁）
第 3 回	ハイデガーの『自然学』解釈②	報告と討議（227-229 頁）
第 4 回	ハイデガーの『自然学』解釈③	報告と討議（230-232 頁）
第 5 回	ハイデガーの『自然学』解釈④	報告と討議（233-235 頁）
第 6 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑤	報告と討議（236-237 頁）
第 7 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑥	報告と討議（238-240 頁）
第 8 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑦	報告と討議（241-243 頁）
第 9 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑧	報告と討議（244-246 頁）
第 10 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑨	報告と討議（247-249 頁）
第 11 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑩	報告と討議（250-252 頁）
第 12 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑪	報告と討議（253-255 頁）
第 13 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑫	報告と討議（256-258 頁）
第 14 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑬	報告と討議（259-261 頁）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。担当者は、テキストの割り当てられた箇所の音読、日本語訳、解釈を準備して授業に臨む。参加者は該当箇所を熟読してくる。

【テキスト（教科書）】

Martin Heidegger, *Phänomenologische Interpretationen ausgewählter Abhandlungen des Aristoteles zur Ontologie und Logik*, Gesamtausgabe Bd. 62, Vittorio Klostermann, 2005.
未邦訳。希望者には該当箇所のコピーを配布する。

【参考書】

アリストテレス著・内山勝利訳、『アリストテレス全集 4 自然学』、岩波書店、2017 年
William Charlton, *Aristotle's Physics Books I and II*, Oxford University Press, 1970.
前者はアリストテレスの『自然学』の邦訳。後者はその英訳と注釈。これらも希望者には該当箇所のコピーを配布する。

【成績評価の方法と基準】

担当者としての評価が 80%、議論への参加度の評価が 20%。上記の到達目標がどれだけ達成されているかが主な評価基準となる。

【学生の意見等からの気づき】

受講者の理解度を配慮しながら適宜解説を加えつつ授業を進める。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞
現象学・解釈学
＜研究テーマ＞
ハイデガーの西洋哲学史観の批判的検討
＜主要研究業績＞
・「『存在忘却』とは何か」、『法政大学文学部紀要』82 号、2020 年。
・「信仰と哲学——ハイデガーのアウグスティヌス解釈について」、『アルケー』26 号、2018 年。
・「ハイデガーのデカルト解釈について」、『哲学論叢』41 号、2014 年。

【Outline (in English)】

(Course outline)
This course deals with Martin Heidegger's interpretation of Aristotle's *Physics*.
(Learning Objectives)
The goal of this course is to understand Heidegger's view on the relationship between being and language.
(Learning activities outside of classroom)
Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter(s) from the texts. Your required study time is at least two hours for each class meeting.
(Grading Criteria /Policies)
Grading will be decided based on short reports (80%) and in-class contribution (20%).

OTR600B7

国際日本学演習 I

西塚 俊太

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

和辻哲郎の著作『日本倫理思想史（一）』『日本倫理思想史（二）』を読み進めることを通じて、日本近代哲学において西洋思想が受け入れられていく過程を把握していく。特に、日本近代において一体何が問われていたのか、日本の近代性とは一体いかなるものであったのか、などの点に関する理解を目指していく。

【到達目標】

- ・和辻哲郎の著作を中心に、日本近代の哲学のテキストを読み解くことが出来る。
- ・哲学的思索や考察内容を自身の言葉として語ることが出来る。
- ・議論を通じて、自身の思考内容を深めることが出来る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- （１）受講者全員に和辻哲郎の『日本倫理思想史（一）』『日本倫理思想史（二）』の担当箇所を割り当てる。
- （２）担当者は該当箇所に関するレジュメを作成し、講義で発表をする。
- （３）その発表に基づいて、テキスト解釈について参加者全員で議論する。
- （４）討論の中で見出された重要な論点を、次回の演習の冒頭で講評しフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	和辻哲郎『日本倫理思想史』に関する概要の説明と、講義内容や進め方および評価方法の説明。
第 2 回	和辻哲郎『日本倫理思想史』の「序」および「緒論」	和辻哲郎の「日本倫理思想史」の構想をおさえる pp.13-46（以下、岩波文庫版『日本倫理思想史（一）』の頁数表記による）
第 3 回	宗教的権威による統一	宗教的権威によって国民が統一されるあり方を捉える pp.49-83
第 4 回	神話伝説と神の意義	思想史における「神話」の位置付けの把握 pp.85-120 の 5 行目
第 5 回	清明心についての解釈	祭祀と道德の関係について考察する pp.120-156 の 9 行目
第 6 回	国家統一の政治化	政治によって国家が統一されていく過程の把握 pp.156-193 の 2 行目
第 7 回	国家と人倫	国家の形成と人倫の拡がりについての考察 pp.193-232
第 8 回	天皇の存在について	「あきつかみ」として天皇が位置付けられていく過程の把握 pp.233-274

第 9 回 平安朝と皇室

朝廷の文化と皇室との関係の解釈
pp.275-296 および『日本倫理思想史（二）』の pp.15-30 の 8 行目（以下、岩波文庫版『日本倫理思想史（二）』の頁数表記による）
武士社会という新たな文化・社会が成立する背景を捉える
pp.30-68 の 6 行目
武士社会の中でも特に「坂東武者」の倫理を把握する
pp.68-103 の後ろから 2 行目
武士社会の中の「公平さ」「無私の思想」を捉える
pp.103-141 の後ろから 4 行目
鎌倉時代の思想を、特に「神国観」から捉える
pp.141-177 の後ろから 5 行目
仏教思想を「慈悲」の観点からおさえる
pp.177-205

第 10 回 武士社会の成立

第 11 回 坂東武者の習い

第 12 回 武士と公平無私

第 13 回 鎌倉時代の文化

第 14 回 慈悲の道德

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の該当箇所を熟読した上で講義に参加することが必須である。特に、発表担当者は担当箇所を幾度も綿密に読み込んだ上でレジュメを作成することが強く求められる。
本授業の準備・復習時間は、計 6 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

和辻哲郎『日本倫理思想史（一）』『日本倫理思想史（二）』（ともに岩波文庫）
参加者は各自で必ず入手した上で演習に参加すること。

【参考書】

まずは参考書などを参照せず、和辻哲郎の原典そのものにあたって入念に読み込むことが先決である。そこで理解しきれなかった点を、演習内の議論を通じて深めていくことになる。
参考文献は演習を通じて互いに提示し合うことになる。

【成績評価の方法と基準】

発表担当時の発表内容（レジュメの水準を含む）（70 %）と、講義内での発言や講義への参加姿勢（30 %）によって評価する。
講義においては毎回の発言・質問を「必須」として求め、発言・質問しなかった場合は出席したものとは見なさないで、事前学習として事前に該当箇所を読み込んだ上で講義に出席することが必要である。

【学生の意見等からの気づき】

演習参加者の希望によっては、より多くの文献を演習内で扱ってきたい。

【学生が準備すべき機器他】

発表担当の際には必ずレジュメを作成し配布すること。
紙媒体のレジュメが望ましいが、パワーポイントを使用する場合においても、議論を展開しやすいように重要箇所はなるべく文章形式を採用すること。
パワーポイントの使用を希望する際には、前の週までに講義担当教員にその旨を連絡すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近代哲学・日本思想史
<研究テーマ> 京都学派を中心とした日本近代哲学の研究、ならびに日本思想史（神・儒・仏・物語・武士道など）の研究
<主要研究業績>
① 「『ひと』であること、「私」であること—三木清の「哲学的人間学」をめぐる—」（『日本倫理思想論究 第 2 号』、2014）
② 『科学技術の倫理学Ⅱ』（勢力尚雅 編共著、2015）
③ 「『三河物語』における譜代意識の根底—「慈悲」と「情」と「武辺」との関係から—」（『倫理学紀要第 24 輯』、2017）
より詳細な情報は「法政大学学術研究データベース」の西塚俊太のページ <http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/107/0010646/profile.html> を参照

【Outline (in English)】

The aim of this course is to acquire an understanding of Japanese philosophy through reading thoroughly "History of Japanese Ethical Thought" by Tetsuro Watsuji. By the end of this course, students should be able to fully grasp the background of Japanese thought in modern times.

Student will be expected to have completed the required assignments after each class. Your study time will be more than six hours for a class.

Grading will be decided based on the quality of the students' experimental performance in the lab 70%, in-class contribution 30%.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

西塚 俊太

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

和辻哲郎の著作『日本倫理思想史（二）』『日本倫理思想史（三）』を読み進めることを通じて、日本近代哲学において西洋思想が受け入れられていく過程を把握していく。特に、日本近代において一体何が問われていたのか、日本の近代性とは一体いかなるものであったのか、などの点に関する理解を目指していく。

【到達目標】

- ・和辻哲郎の著作を中心に、日本近代の哲学のテキストを読み解くことが出来る。
- ・哲学的思索や考察内容を自身の言葉として語ることが出来る。
- ・議論を通じて、自身の思考内容を深めることが出来る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- （１）受講者全員に和辻哲郎の『日本倫理思想史（二）』『日本倫理思想史（三）』の担当箇所を割り当てる。
- （２）担当者は該当箇所に関するレジュメを作成し、講義で発表をする。
- （３）その発表に基づいて、テキスト解釈について参加者全員で議論する。
- （４）討論の中で見出された重要な論点を、次回の演習の冒頭で講評しフィードバックする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	和辻哲郎『日本倫理思想史』に関する概要の説明と、講義内容や進め方および評価方法の説明。
第 2 回	和辻哲郎『日本倫理思想史（二）』における、大名の出現について	大名の誕生による社会構造の変化を捉える pp.209-241（以下、岩波文庫版『日本倫理思想史（二）』の頁数表記による）
第 3 回	民衆の勢力の拡大	民衆の社会的な勢力の拡大について理解する pp.242-278 の 7 行目
第 4 回	神皇正統記と太平記	武士の背後の「天皇」の位置付けを把握する pp.278-317 の後ろから 2 行目
第 5 回	室町時代の教養のあり方	室町時代に花開いていく教養について考察する pp.317-347
第 6 回	謡曲の思想	謡曲に表現されている思想の把握 pp.349-387 の後ろから 3 行目
第 7 回	物語の倫理	物語に表現されている倫理思想についての考察 pp.387-424 の後ろから 6 行目
第 8 回	「物語る」という営み	物語らずにはいられない人間の心のあり方の把握 pp.424-448 および『日本倫理思想史（三）』 pp.15-30 の後ろから 6 行目（以下、岩波文庫版『日本倫理思想史（三）』の頁数表記による）

第 9 回 武士社会の再建	武士社会が再建される過程の把握 pp.30-71 の 9 行目
第 10 回 戦国武士社会の成立	戦国期の武士社会という新たな文化・社会が成立する背景を捉える pp.71-105 の後ろから 5 行目
第 11 回 戦乱における道義	武士社会の中で醸成されていく倫理を把握する pp.105-140
第 12 回 キリシタンの伝道	日本社会におけるキリシタンの位置付けを捉える pp.141-179 の後ろから 3 行目
第 13 回 儒教の興隆	日本思想における儒教の展開を把握する pp.179-213
第 14 回 民間思想	民間思想のあり方をおさえる pp.214-268 の 1 行目

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の該当箇所を熟読した上で講義に参加することが必須である。特に、発表担当者は担当箇所を幾度も綿密に読み込んだ上でレジュメを作成することが強く求められる。本授業の準備・復習時間は、計 6 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

和辻哲郎『日本倫理思想史（二）』『日本倫理思想史（三）』（ともに岩波文庫）
参加者は各自で必ず入手した上で演習に参加すること。

【参考書】

まずは参考書などを参照せず、和辻哲郎の原典そのものにあたって入念に読み込むことが先決である。そこで理解しきれなかった点を、演習内の議論を通じて深めていくことになる。参考文献は演習を通じて互いに提示し合うことになる。

【成績評価の方法と基準】

発表担当時の発表内容（レジュメの水準を含む）（70 %）と、講義内での発言や講義への参加姿勢（30 %）によって評価する。講義においては毎回の発言・質問を「必須」として求め、発言・質問しなかった場合は出席したものとは見なさないの、事前学習として事前に該当箇所を読み込んだ上で講義に出席することが必要である。

【学生の意見等からの気づき】

演習参加者の希望によっては、より多くの文献を演習内で扱ってみたい。

【学生が準備すべき機器他】

発表担当の際には必ずレジュメを作成し配布すること。
紙媒体のレジュメが望ましいが、パワーポイントを使用する場合においても、議論を展開しやすいように重要箇所はなるべく文章形式を採用すること。
パワーポイントの使用を希望する際には、前の週までに講義担当教員にその旨を連絡すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近代哲学・日本思想史
<研究テーマ>京都学派を中心とした日本近代哲学の研究、ならびに日本思想史（神・儒・仏・物語・武士道など）の研究
<主要研究業績>
①「『ひと』であること、「私」であること—三木清の「哲学的人間学」をめぐる—」（『日本倫理思想論究 第 2 号』、2014）
②『科学技術の倫理学Ⅱ』（勢力尚雅 編共著、2015）
③「『三河物語』における譜代意識の根底—「慈悲」と「情」と「武辺」との関係から—」（『倫理学紀要 第 24 輯』、2017）
より詳細な情報は「法政大学学術研究データベース」の西塚俊太のページ <http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/107/0010646/profile.html> を参照

【Outline (in English)】

The aim of this course is to acquire an understanding of Japanese philosophy through reading thoroughly "History of Japanese Ethical Thought" by Tetsuro Watsuji. By the end of this course, students should be able to fully grasp the background of Japanese thought in modern times.

Student will be expected to have completed the required assignments after each class. Your study time will be more than six hours for a class.

Grading will be decided based on the quality of the students' experimental performance in the lab 70%, in-class contribution 30%.

OTR600B7

国際日本学演習 I

伊海 孝充

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本講義では、世阿弥の伝書を通して鬼の物真似・演技について考えていく。世阿弥は鬼の芸について、否定的な見解を述べる一方で、その演技の効果についても述べている。伝書を通してその演技を分析するとともに、能や狂言の作品も読んでいく。また、受講者の興味に関わらせて、能以前の鬼の芸能や、能以降の鬼の描き方についても取り上げたい。

【到達目標】

本講義では、世阿弥の伝書と能・狂言の作品の精読を通して、能や狂言、その他の芸能の基本的知識と研究手法を正確に理解することを目指す。自分自身の研究を進めるためには、論文で論じるための問題点を見つけ方、それを掘り下げための手法を身につける必要がある。本講義ではこの二点を意識して、当該資料を分析していく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式によって進める。参加者は当該資料から興味のある曲を選択し、資料分析とともに作品解釈を行なっていく。また発表者は自分自身の問題意識を提示してもらい、参加者で討論していく。専門外の者は、別な方法での発表も考える。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	受講生の自己紹介と半期の計画を相談。
第 2 回	鬼と芸能①	日本芸能史と鬼
第 3 回	鬼と芸能②	追儺について
第 4 回	世阿弥について	世阿弥の生涯
第 5 回	世阿弥の伝書	世阿弥伝書の概略
第 6 回	『花伝』第二物学条々①	諸本比較と注釈
第 7 回	『花伝』第二物学条々②	諸本比較と注釈
第 8 回	その他の世阿弥伝書①	諸本比較と注釈
第 9 回	その他の世阿弥伝書②	諸本比較と注釈
第 10 回	鬼能①	受講者の報告
第 11 回	鬼能②	受講者の報告
第 12 回	鬼狂言	受講者の報告
第 13 回	鬼狂言	受講者の報告
第 14 回	まとめ	本講義内容の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自主的に舞台鑑賞に行くことを勧める。能・狂言だけでなく、歌舞伎・人形浄瑠璃にも観劇に行ってほしい。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

授業内に指示する。

【参考書】

授業内に指示する。

【成績評価の方法と基準】

講義での発表 70%

講義での発言 30%

【学生の意見等からの気づき】

専門外の学生にも配慮してすすめる。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本中世文学

＜研究テーマ＞能楽

＜主要研究業績＞『切合能の研究』（檜書店、2011 年）「舞う身体としての曾我兄弟：幸若舞曲との比較から」（『能と狂言』19 号、2021 年 11 月）

【Outline (in English)】

In this lecture, we will study the mimicry and performance of Oni based on Zeami's biography. We will read Oni Noh and Oni Kyogen, and we will also cover Oni in other performing arts. The purpose of this lecture is to gain knowledge of classical performing arts and to learn how to study literature and performing arts. Grades will be based on presentations (70%) and remarks in class (30%).

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

伊海 孝充

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

春学期同様、能・狂言における鬼の物真似・演技について考えていく。まず春学期に行った世阿弥伝書の鬼の演技についての記述や鬼能・鬼狂言をもとに、他のジャンルの鬼の描写と比較していく。

【到達目標】

本講義では、世阿弥の伝書と能・狂言の作品の精読を通して、能や狂言、その他の芸能の基本的知識と研究手法を正確に理解することを目標とする。さらにその知識や方法を別の研究にも応用できるようにする。本講義ではこの二点を意識して、当該資料を分析していく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式によって進める。参加者は当該資料から興味のある曲を選択し、資料分析とともに作品解釈を行なっていく。また発表者は自分自身の問題意識を提示してもらい、参加者で討論していく。専門外の者は、別な方法での発表も考える。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	春学期発表分の振り返り。秋学期からの参加者への概要説明。
第2回	世阿弥伝書における鬼の演技	春学期の復習
第3回	鬼能・鬼狂言	春学期の復習
第4回	説話文学の鬼と能楽の鬼①	受講者の発表
第5回	説話文学の鬼と能楽の鬼②	受講者の発表
第6回	説話文学の鬼と能楽の鬼③	受講者の発表
第7回	御伽草子の鬼と能楽の鬼①	受講者の発表
第8回	御伽草子の鬼と能楽の鬼②	受講者の発表
第9回	近世文学の鬼と能楽の鬼①	受講者の発表
第10回	近世文学の鬼と能楽の鬼②	受講者の発表
第11回	民俗芸能の鬼と能楽の鬼①	受講者の発表
第12回	民俗芸能の鬼と能楽の鬼②	受講者の発表
第13回	民俗芸能の鬼と能楽の鬼③	受講者の発表
第14回	総括	能・狂言の鬼のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自主的に舞台鑑賞に行くことを勧める。能・狂言だけでなく、歌舞伎・人形浄瑠璃にも観劇に行ってほしい。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

授業内に指示する。

【参考書】

授業内に指示する。

【成績評価の方法と基準】

講義での発表 70%

講義での発言 30%

【学生の意見等からの気づき】

専門外の学生にも配慮する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本中世文学

<研究テーマ> 能楽

<主要研究業績> 『切合能の研究』（檜書店、2011年）「舞う身体としての曾我兄弟：幸若舞曲との比較から」（『能と狂言』19号、2021年11月）

【Outline (in English)】

As in the spring semester, we will study the mimicry and performance of Oni in Noh and Kyogen. In this semester, we will compare and analyze Oni in Noh, Kyogen and other genres. The purpose of this lecture is to absorb knowledge of classical arts and to apply that knowledge to other research. Grades will be based on presentations (70%) and remarks in class (30%).

OTR600B7

国際日本学演習 I

甲斐 雄一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

『文選』は、中国・梁代に編纂された、詩文をジャンル別に分類したアンソロジーである。中国では官吏任用試験である科挙受験の必読書となり、また日本においても広く流行した、中国古典文学の歴史的展開を考える上で重要な地位を占める書物である。

本授業では、『文選』巻 29「雑詩上」所収作品を読む。本文及び注釈（旧注）を対象に、テキストの校勘（日本伝存の旧鈔本・和刻本を含む）を行って訓読・日本語訳を作成し、本文批判を中心とした文献学の知識・技術、訓読を含めた中国古典の文言文テキストの読解力を養成することを身につけることを目標とする。さらに、作品読解のために必要な注釈を受講者自ら補うことで、先行する注釈・翻訳を土台に新たな解釈を提示する訓練とし、学術論文を執筆するための基礎力を身につけることを目指す。

【到達目標】

1. 『文選』についての基礎的な知識を習得する。
2. 本文批判を中心とした文献学の知識・技術、訓読を含めた中国古典の文言文テキストの読解力を養成することを身につける。
3. 古注（李善注・五臣注）を読み解きながら先行の訳注を批判的に検討し、『文選』所収作に新たな解釈・鑑賞を提示する力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

最初の数回のみ講義形式、残りは演習形式で行う。『文選』所収作品に対してそれぞれ担当者を決める。発表担当者は作品の校勘・訓読・日本語訳と注釈（旧注及び担当者注）を記載したレジュメを作成し、担当回に発表し、その内容を元にして全員で討論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス（1）	『文選』について—内容・編纂の背景・受容、及び担当者の決定
第 2 回	ガイダンス（2）	『文選』諸テキストについて
第 3 回	ガイダンス（3）	『文選』の注釈と日本語の訳注について
第 4 回	『文選』精読（1）	「古詩十九首」其一「行行重行行」
第 5 回	『文選』精読（2）	「古詩十九首」其二「青青河畔草」
第 6 回	『文選』精読（3）	「古詩十九首」其三「青青陵上柏」
第 7 回	『文選』精読（4）	「古詩十九首」其四「今日良宴会」
第 8 回	『文選』精読（5）	「古詩十九首」其五「西北有高楼」
第 9 回	『文選』精読（6）	「古詩十九首」其六「涉江采芙蓉」
第 10 回	『文選』精読（7）	「古詩十九首」其七「明月皎夜光」
第 11 回	『文選』精読（8）	「古詩十九首」其九「庭中有奇樹」
第 12 回	『文選』精読（9）	「古詩十九首」其十「迢迢牽牛星」
第 13 回	『文選』精読（10）	「古詩十九首」其十二「東城高且長」
第 14 回	『文選』精読（11）	「古詩十九首」其十九「明月何皎皎」

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表担当者はその準備、その他の受講者は発表者の担当部分について予習し、事前に内容を把握した上で、疑問点や検討を要する箇所について整理しておく。授業後には討論で得た情報と意見を自分なりにまとめておく。なお、本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

テキスト（教科書）は使用しない。プリントを配布する。

【参考書】

- ・内田泉之助・網祐次・中島千秋『文選』（新釈漢文大系 14-15、79-83、93、明治書院、1963-2001 年）
- ・小尾郊一『文選』（全釈漢文大系 26-32、集英社、1974-76 年）
- ・川合康三等『文選 詩篇』（岩波文庫赤 45-1-6、2018-19 年）
- ・富永一登『文選李善注の研究』（研文出版、1999 年 2 月）
- ・岡村繁『文選の研究』（岩波書店、1999 年 4 月）
- ・清水凱夫『新文選学—『文選』の新研究』（研文出版、1999 年 10 月）

【成績評価の方法と基準】

担当者としての発表内容（70%）、討論への参加度・貢献度・積極性（30%）。

【学生の意見等からの気づき】

特になし（本年度新規担当のため）。

【その他の重要事項】

授業の進み具合によっては、事前に受講者に説明をした上で、授業内容を一部変更する可能性がある。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

中国古典文学

<研究テーマ>

宋代における、出版文化を背景とした文学作品の流通と受容について
<主要研究業績>

『南宋の文人と出版文化—王十朋と陸游をめぐる—』（著書、九州大学出版会、2016 年）

「陸游詩の自注について」（論文、『日本宋代文学学会報』6、2019 年）

【Outline (in English)】

Compiled in Liang era China, the Wen Xuan is an anthology containing poems that are classified by genre. In China, the Wen Xuan was a must-read for candidates for the imperial examinations, which were examinations for the selection of bureaucrats. The book was read widely in Japan as well and is an important text to explore the historical development of Chinese classical literature.

This course will involve reading poems included in the anthology section of Wen Xuan, vol. 29. The goals are for students to revise the main text and annotations of the book (including old abridged versions preserved in Japan and versions printed in Japan), read the Chinese text in Japanese (kundoku), and create a Japanese translation; to acquire knowledge and skills in philology, especially in textual criticism; and to develop reading comprehension in classical texts written in literary Chinese, including skills in reading Chinese texts in Japanese. A further aim is for students to develop the basic skills in writing academic articles by creating their own annotations to interpret the work and undergo training so that they can present new interpretations by building on previous annotations and translations.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

甲斐 雄一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

【『文選』精読】

『文選』は、中国・梁代に編纂された、詩文をジャンル別に分類したアンソロジーである。中国では官吏任用試験である科挙受験の必読書となり、また日本においても広く流行した、中国古典文学の歴史的展開を考える上で重要な地位を占める書物である。

本授業では、『文選』巻29「雑詩上」所収作品を読む。本文及び注釈（旧注）を対象に、テキストの校勘（日本伝存の旧鈔本・和刻本を含む）を行って訓読・日本語訳を作成し、本文批判を中心とした文献学の知識・技術、訓読を含めた中国古典の文言文テキストの読解力を養成することを身につけることを目標とする。さらに、作品読解のために必要な注釈を受講者自ら補うことで、先行する注釈・翻訳を土台に新たな解釈を提示する訓練とし、学術論文を執筆するための基礎力を身につけることを目指す。

【到達目標】

1. 『文選』についての基礎的な知識を習得する。
2. 本文批判を中心とした文献学の知識・技術、訓読を含めた中国古典の文言文テキストの読解力を養成することを身につける。
3. 古注（李善注・五臣注）を読み解きながら先行の訳注を批判的に検討し、『文選』所収作に新たな解釈・鑑賞を提示する力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

最初の数回のみ講義形式、残りは演習形式で行う。『文選』所収作品に対してそれぞれ担当者を決める。発表担当者は作品の校勘・訓読・日本語訳と注釈（旧注及び担当者注）を記載したレジュメを作成し、担当回に発表し、その内容を元にして全員で討論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス（1）	『文選』について一内容・編纂の背景・受容、及び担当者の決定
第2回	ガイダンス（2）	『文選』諸テキストについて
第3回	ガイダンス（3）	『文選』の注釈と日本語の訳注について
第4回	『文選』精読（1）	李陵「与蘇武三首」其の一読解
第5回	『文選』精読（2）	李陵「与蘇武三首」其の二読解
第6回	『文選』精読（3）	李陵「与蘇武三首」其の三読解
第7回	『文選』精読（4）	蘇武「詩四首」其の一読解
第8回	『文選』精読（5）	蘇武「詩四首」其の二読解
第9回	『文選』精読（6）	蘇武「詩四首」其の三読解
第10回	『文選』精読（7）	蘇武「詩四首」其の四読解
第11回	『文選』精読（8）	王粲「雑詩一首」読解
第12回	『文選』精読（9）	劉楨「雑詩一首」読解
第13回	『文選』精読（10）	曹丕「雑詩二首」其の一読解
第14回	『文選』精読（11）	曹丕「雑詩二首」其の二読解

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表担当者はその準備、その他の受講者は発表者の担当する詩について予習し、事前に内容を把握した上で、疑問点や検討を要する箇所について整理しておく。授業後には討論で得た情報と意見を自分なりにまとめておく。なお、本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

テキスト（教科書）は使用しない。プリントを配布する。

【参考書】

- ・内田泉之助・網祐次・中島千秋『文選』（新釈漢文大系 14-15, 79-83, 93, 明治書院、1963-2001 年）
- ・小尾郊一『文選』（全釈漢文大系 26-32, 集英社、1974-76 年）
- ・川合康三等『文選 詩篇』（岩波文庫赤 45-1-6, 2018-19 年）
- ・富永一登『文選李善注の研究』（研文出版、1999 年 2 月）
- ・岡村繁『文選の研究』（岩波書店、1999 年 4 月）
- ・清水凱夫『新文選学—『文選』の新研究』（研文出版、1999 年 10 月）

【成績評価の方法と基準】

担当者としての発表内容（70%）、討論への参加度・貢献度・積極性（30%）。

【学生の意見等からの気づき】

特になし（本年度新規担当のため）。

【その他の重要事項】

授業の進み具合によっては、事前に受講者に説明をした上で、授業内容を一部変更する可能性がある。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

中国古典文学

<研究テーマ>

宋代における、出版文化を背景とした文学作品の流通と受容について
<主要研究業績>

『南宋の文人と出版文化—王十朋と陸游をめぐる—』（著書、九州大学出版会、2016 年）

「陸游詩の自注について」（論文、『日本宋代文学学会報』6、2019 年）

【Outline (in English)】

Compiled in Liang era China, the Wen Xuan is an anthology containing poems that are classified by genre. In China, the Wen Xuan was a must-read for candidates for the imperial examinations, which were examinations for the selection of bureaucrats. The book was read widely in Japan as well and is an important text to explore the historical development of Chinese classical literature.

This course will involve reading poems included in the anthology section of Wen Xuan, vol. 29. The goals are for students to revise the main text and annotations of the book (including old abridged versions preserved in Japan and versions printed in Japan), read the Chinese text in Japanese (kundoku), and create a Japanese translation; to acquire knowledge and skills in philology, especially in textual criticism; and to develop reading comprehension in classical texts written in literary Chinese, including skills in reading Chinese texts in Japanese. A further aim is for students to develop the basic skills in writing academic articles by creating their own annotations to interpret the work and undergo training so that they can present new interpretations by building on previous annotations and translations.

OTR600B7

国際日本学演習 I

王 安

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日中対照研究に関する重要なトピックを中心に、重要文献・論文を精読し、日中両言語の類似性及び相違点への理解を深める。

【到達目標】

- 1、日中両言語の相違点・共通点を客観的に捉え、対照研究の研究方法を理論的かつ体系的に学ぶ。
- 2、批判的に論文を読む力を身に付け、言語現象や問題点を発見する問題意識、分析する能力を養う。
- 3、対照研究の研究方法を用いて自分の興味ある言語現象を説明できるように研究力を向上させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的に演習形式で行う。初回の授業で発表担当を決め、レジュメの作り方や授業のやり方について説明を行う。それ以後一週間または二週間に論文1本のペースで講読していく。具体的には、参加者全員が各自論文を読み、分からない用語や概念があれば事前に調べておく。発表担当者は論文の要点を要約しレジュメ（A4サイズ3～4枚／一人で担当する場合は6枚）を用意する。発表担当者以外の学生は授業でコメント・質問ができるように準備をしておく（例えば質問リストを作成するなど）。

また、春学期の授業は日本入国できない受講生がいる場合にはZoomによるオンライン形式で行う。授業計画について変更がある場合、学習支援システムでまたは前回の授業で知らせる。

授業のフィードバックは随時授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	論文の紹介、授業の進め方、発表分担を決める
第2回	論文解説（その1）	「対照言語学とは」（石綿、高田1990）
第3回	論文解説（その2）	（石綿、高田1990）に関して議論を行う
第4回	論文解説（その3）	「表現と発想」（石綿、高田1990）
第5回	論文解説（その4）	石綿、高田（1990）に関して議論を行う
第6回	論文解説（その5）	「日本語の“はずだ”と中国語の“應該”について」王（2016）
第7回	論文解説（その6）	王（2016）に関して議論を行う
第8回	論文解説（その7）	中島（2012）「日中対照研究ヴォイスー受け身を中心として」
第9回	論文解説（その8）	中島（2012）に関して議論を行う
第10回	論文解説（その9）	全体議論
第11回	論文解説（その10）	沈（1995）「有界と無界」
第12回	論文解説（その11）	沈（1995）に関して議論を行う
第13回	論文解説（その12）	メタファー
第14回	まとめ	今学期に読んだ論文について意見交換し、各自の最も興味を持ったテーマ（最終レポートにするテーマ）について議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 1、参加者全員：論文中の知らなかった用語、概念について、事前に調べておく。

- 2、発表担当者：論文の要点を要約し、発表用レジュメを作成する（論文要約レポート：二人で発表する場合一人当たりA4サイズ3～4枚、一人で発表する場合は6枚以内）

- 3、発表担当者以外の学生は授業でコメント・質問ができるように準備をしておく（例えば質問リストを作成するなど）
- 本授業の準備学習・復習時間は、各10～12時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特になし。授業で資料を配布する。

【参考書】

＜中国語学＞

- 『現代中国語総説』松岡栄志・古川裕 監訳 2004 三省堂
- 『現代漢語』北京大学中文系現代漢語教研室編 2003 商務印書館

『現代中国語文法総覧』劉月華他 1996 くおしお出版

『現代漢語專題教程』北京大学中文系現代漢語教研室編 2003 北京大学出版社

『語法講義』朱德熙 1982 商務印書館

『語法問答』朱德熙 1986

『現代漢語語法研究教程』陸俊明 2005 北京大学

『現代中国語用法辞典』呂叔湘 1983 現代出版

『現代漢語八百詞』呂叔湘 2008 商務印書館（虚詞が中心）

『漢語基本知識（語法篇）』施春宏 2011 北京語言大学出版社

『中国語学概論』王占華他 2004 駿河台出版社

＜対照言語学関係参考文献＞

井上優（2002）『対照研究と日本語教育』日本語と外国語との対照研究 X, 国立国語研究所

石綿敏雄 高田誠（1990）『対照言語学』桜楓社

生越直樹（2002）『シリーズ言語科学4 対照言語学』東京大学出版会

大河内康内編（1997）『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお出版

寺村秀夫（1982）「言語の対照的分析と記述の方法」『講座日本語学10 外国語との対照』明治書院

中川正之（1997）「類型論からみた中国語・日本語・英語」『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお出版

張 黎（2012）『漢語意合語法研究』白帝社

張麟声（2007）「言語研究のための対照研究について—日本国内の事例を中心に—」『言語文化研究—言語情報編2』1-14. 大阪府立大学。

＜中国語教育参考書＞

『中国語文法教室』杉村博文 1994 大修館書店

『中国語の文法書』相原茂 他 1996 同学校

『国際漢語語法与語法教学』楊玉玲他 高等教育出版社

【成績評価の方法と基準】

論文要約レポート（20%）＋論文内容発表（20%）＋質問・発言（20%）＋期末レポート（40%）で総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

春学期・秋学期合わせての履修を推奨。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

対照言語学、現代中国語文法、認知言語学

＜研究テーマ＞

形容詞の意味と機能、感情の概念化と言語の多様性、感情表現の構文パターンにおける類型論的研究

＜主要研究業績＞

「中国語の＜主観性＞の再考察—使役表出文を例として—」『認知言語学研究の広がり』大橋浩・川瀬義清・古賀恵介・長加奈子・村尾治彦編。pp.35-50. 2018. 開拓社

「感情の普遍性とその言語化—感情表現の類型論的研究に向けて—」『ことばのバースペクティブ』（中村芳久教授退職記念論文集刊行会編。pp.71-84. 2018. 開拓社

第8章「主体化」『認知言語学 基礎から最前線へ』森雄一・高橋英光編 2013. くろしお出版

「感情表現における日中対照研究—感情の語り方と人称制限の普遍性に着目して—」『言語研究の諸相』pp.35-45. 2010. 北海道大学出版

【Outline (in English)】

The aim of this class is to help students understand the main topics in Japanese Chinese Contrastive Linguistics and to deepen the students' understanding of research methodologies in the field.

(Learning Objectives)

1. To capture the differences and similarities between Chinese and Japanese languages, and study the research methods of comparative study theoretically and systematically.
2. Cultivate the ability to read papers critically, and develop the problem awareness and analytical ability to discover language phenomena and problem points.
3. Improve research ability, and be able to explain language phenomena.

(Learning activities outside of classroom)

Before/after each class, students will be expected to spend 10 hours reviewing the course content.

(Grading Criteria /Policy)

Overall grade in the class will be decided based on the following parts:

- presentation: 40%
- discussion: 20%
- final report: 40%

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

王 安

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

引き続き日中対照研究に関する重要なトピックを中心に、重要文献・論文を精読し、日中両言語の類似性及び相違点への理解を深める。また、学期後半の授業では各自の研究について発表をしてもらい、議論を行う。

【到達目標】

- 1、日中両言語の相違点・共通点を客観的に捉え、対照研究の研究方法を理論的かつ体系的に学ぶ。
- 2、批判的に論文を読む力を身に付け、言語現象、問題点を発見する問題意識、分析する能力を養う。
- 3、対照研究の研究方法をを用いて自分の興味持つ言語現象を説明できるように研究力を向上させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的に演習形式で行う。初回の授業で発表担当を決め、レジュメの作り方や授業のやり方について説明を行う。それ以後一週間または二週間に論文1本のペースで講読していく。具体的には、参加者全員が各自論文を読み、分からない用語や概念があれば事前に調べておく。発表担当者は論文の要点を要約しレジュメ（A4サイズ3～4枚／一人で担当する場合は6枚）を用意する。発表担当者以外の学生は授業でコメント・質問ができるように準備をしておく（例えば質問リストを作成するなど）。授業は対面形式で行う予定ですが、変更があった場合学習支援システムにてお知らせします。また、授業のフィードバックは随時授業内で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	論文の紹介、授業の進め方、発表分担を決める
第2回	論文解説（その1）	論文講読：日中対照表現論（藤田2007）
第3回	論文解説（その2）	メタファー関係
第4回	論文解説（その3）	メタファー関係
第5回	論文解説（その4）	研究発表1
第6回	論文解説（その5）	研究発表2
第7回	論文解説（その6）	研究発表3
第8回	論文解説（その7）	研究発表4
第9回	論文解説（その8）	研究発表5
第10回	論文解説（その9）	研究発表6
第11回	論文解説（その10）	研究発表7
第12回	研究発表（その1）	研究発表8
第13回	研究発表（その2）	研究発表9
第14回	まとめ	今学期に読んだ論文について意見交換し、各自の最も興味を持ったテーマ（最終レポートにするテーマ）について議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 1、参加者全員：論文中の知らなかった用語、概念について、事前に調べておく。
- 2、発表担当者：論文の要点を要約し、発表用レジュメを作成する（論文要約レポート：二人で発表する場合一人当たりA4サイズ3～4枚、一人で発表する場合は6枚以内）

3、発表担当者以外の学生は授業でコメント・質問ができるように準備しておく(例えば質問リストを作成するなど)
本授業の準備学習・復習時間は、各10～12時間を標準とします。

【テキスト(教科書)】

特になし。授業で資料を配布する。

【参考書】

＜中国語学＞

○『現代中国語総説』松岡栄志・古川裕 監訳 2004 三省堂
○『現代漢語』北京大学中文系現代漢語教研室編 2003 商務印書館

『現代中国語文法総覧』劉月華他 1996 くろしお出版

『現代漢語專題教程』北京大学中文系現代漢語教研室編 2003 北京大学出版社

『語法講義』朱德熙 1982 商務印書館

『語法問答』朱德熙 1986

『現代漢語語法研究教程』陸俊明 2005 北京大学

『現代中国語用法辞典』呂叔湘 1983 現代出版

『現代漢語八百詞』呂叔湘 2008 商務印書館(虚詞が中心)

『漢語基本知識(語法篇)』施春宏 2011 北京語言大学出版社

『中国語学概論』王占華他 2004 駿河台出版社

＜対照言語学関係参考文献＞

井上優(2002)『対照研究と日本語教育』日本語と外国語との対照研究 X, 国立国語研究所

石綿敏雄 高田誠(1990)『対照言語学』桜楓社

生越直樹(2002)『シリーズ言語科学4 対照言語学』東京大学出版会
大河内康内編(1997)『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお出版

寺村秀夫(1982)『言語の対照的分析と記述の方法』講座日本語学 10 外国語との対照 明治書院

中川正之(1997)『類型論からみた中国語・日本語・英語』『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお出版

張 黎(2012)『漢語意合語法研究』白帝社

張麟声(2007)『言語研究のための対照研究について—日本国内の事例を中心に—』『言語文化学研究—言語情報編 2』1-14. 大阪府立大学.

＜中国語教育参考書＞

『中国語文法教室』杉村博文 1994 大修館書店

『中国語の文法書』相原茂 他 1996 同人社

『国際漢語語法与語法教学』楊玉玲他 高等教育出版社

【成績評価の方法と基準】

論文要約レポート(20%) + 論文内容発表(20%) + 質問・発言(20%) + 期末レポート(40%)で総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【その他の重要事項】

春学期・秋学期合わせての履修を推奨。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

対照言語学、現代中国語文法、認知言語学

＜研究テーマ＞

形容詞の意味と機能、感情の概念化と言語の多様性、感情表現の構文パターンにおける類型論的研究

＜主要研究業績＞

「中国語の＜主観性＞の再考察—使役表出文を例として—」『認知言語学研究の広がり』大橋浩・川瀬義清・古賀恵介・長加奈子・村尾治彦編. pp.35-50. 2018. 開拓社

「感情の普遍性とその言語化—感情表現の類型論的研究に向けて—」『ことばのパースペクティヴ』(中村芳久教授退職記念論文集刊行会編. pp.71-84. 2018. 開拓社

第8章「主体化」『認知言語学 基礎から最前線へ』森雄一・高橋英光編 2013. くろしお出版

「感情表現における日中対照研究—感情の語り方と人称制限の普遍性に着目して—」『言語研究の諸相』pp.35-45. 2010. 北海道大学出版

【Outline (in English)】

The aim of this class is to help students understand the main topics in Japanese Chinese Contrastive Linguistics and to deepen the students' understanding of research methodologies in the field.

(Learning Objectives)

1.To capture the differences and similarities between Chinese and Japanese languages, and study the research methods of comparative study theoretically and systematically.

2. Cultivate the ability to read papers critically, and develop the problem awareness and analytical ability to discover language phenomena and problem points.

3. Improve research ability, and be able to explain language phenomena.

(Learning activities outside of classroom)

Before/after each class, students will be expected to spend 10 hours reviewing the course content.

(Grading Criteria /Policy)

Overall grade in the class will be decided based on the following parts:

– presentation: 40%

– discussion:20%

– final report:40%

OTR600B7

国際日本学演習 I

尾谷 昌則

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、前半は認知言語学（認知意味論）の基本的な考え方を学ぶためにテキストを皆で読み進める。受講生は、要約レポートを毎週作成し、授業開始時に提出する。その後、基本概念についての質疑応答、疑問点についての討論を行う。後半は、テキストで学んだことが実際の言語研究でどのように利用されているのかを学ぶために、意味について分析している学術論文を読む。受講生は、論文の要約レポートを毎週作成し、授業開始時に提出する。授業内容は、前半と同じように進める。

【到達目標】

テキストに出てくる認知言語学および言語学一般の基礎概念・用語を理解するとともに、具体例を挙げながら他者にそれらの概念を説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

▼前半は、指定した教科書を皆で読み進める。当日の授業開始時までに要約レポートを Hoppii へ提出し、その後、その章の内容に関する確認の質疑応答を行い、最後に疑問点や問題点についてディスカッションを行う。

▼後半は、前半で学習した事項が分析に利用されている学術論文を毎週1本読むが、授業の進め方は前半と同じである。

▼必要に応じて、ZOOM を用いたオンライン授業を行う。その場合は、学習支援システムの「お知らせ」で URL や事前課題などを連絡する。チャット機能を利用した双方向授業になるため、通信環境を整えておくこと。

▼課題やリアクションペーパー等における良いコメント・質問は授業内で紹介・フィードバックして、さらなる議論に活かす。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	学習の仕方、要約の書き方、各種参考資料について	要約レポートの書き方などをレクチャーする
第2回	第1章「多義語をめぐる諸問題」	受講生による発表・討論
第3回	第2章「多義語の多様性：多義的別義の自立生と関連性」	受講生による発表・討論
第4回	第3章「プロトタイプの意味の認定」	受講生による発表・討論
第5回	第4章「比喻から多義語へ」	受講生による発表・討論
第6回	第5章「放射状ネットワークモデルに基づく多義語の分析」	受講生による発表・討論
第7回	第6章「スキーマ・ネットワークモデルに基づく多義語の分析」	受講生による発表・討論
第8回	第7章「フレームに基づく多義語の分析」	受講生による発表・討論
第9回	第8章「統合モデルに基づく多義語の分析」	受講生による発表・討論
第10回	論文レポート1（メタファーに関するもの）	受講生による発表・討論
第11回	論文レポート2（メトニミーに関するもの）	受講生による発表・討論

第12回 論文レポート3（構文的多義に関するもの） 受講生による発表・討論

第13回 論文レポート4（主体化に関するもの） 受講生による発表・討論

第14回 まとめ 本授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

【宿題】

(1) テキストの該当箇所もしくは課題論文の要約レポート（A4 用紙一枚）。毎週、授業開始時までに提出する。（2 時間程度）

(2) 課題論文に出てきた分からない概念・専門用語について、授業で質問されても答えられるように、調べておく。（1 時間程度）

(3) 当日の授業で質問できるように、課題論文への反論・疑義・その他不備と思われる点をまとめておく。（1 時間程度）

【テキスト（教科書）】

『例解』日本語の多義語研究 認知言語学の視点から』（初山洋介著、大修館書店、2021 年、3400 円＋消費税）

【参考書】

『認知言語学大事典』（朝倉書店）

『意味論キータム事典』（開拓社）

『新編 認知言語学キーワード事典』（研究社）

『ことばの認知科学事典』（大修館書店）

『日本語学キーワード事典』（朝倉書店）

『言語学大辞典』（三省堂）

『日本語文法大辞典』（明治書院）

『日本語学研究事典』（明治書院）

『語用論キータム事典』（開拓者）

『日本語研究のための認知言語学』（初山洋介著、研究社）

『認知意味論のしくみ』（初山洋介著、研究社）

『認知意味論の新展開—メタファーとメトニミー』（谷口一美著、研究社）

『認知言語学 基礎から最新線へ』（森雄一・高橋英光編著、くろしお出版）

【成績評価の方法と基準】

宿題 (1)「要約レポート」(40 %)

宿題 (2)(3) 質疑応答・ディスカッションへの参加態度 (40 %)

学期末レポート (20 %)

【学生の意見等からの気づき】

論文を書くための基礎になる知識を中心に教えて欲しいとの要望があったので、知識と論文レビューの両方を行うこととした。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現代日本語における意味論、文法論、語用論、認知言語学

<研究テーマ>

認知言語学からみた意味拡張、文法化、構文ネットワーク

<主要研究業績>

「アマルガム構文としての『「全然」＋肯定』に関する語用論的分析」（『言葉と認知のメカニズム』pp.103-115, ひつじ書房、2008 年）

「接続詞ケドの手続き的意味」（『語用論研究』第7号, pp.17-30, 2005 年）

「構文ネットワークと文法 —認知文法論のアプローチ」（共著、研究社、2011 年）

【Outline (in English)】

Course Outline:

To understand the basic concepts of cognitive linguistics, we read the textbook for cognitive linguistics(semantic) and academic papers on (cognitive) semantics. Students are supposed to submit a summary of the chapter(or a paper) that we are to read on the day.

Learning Objectives:

The objectives of this course are (1)to learn the basic (Cognitive) linguistic terms, (2)to acquire the ability to explain them with a lot of examples to other people.

Learning Activities Outside of the Classroom:

Before/after each class meeting, students will be expected to spend 2 hours to understand the course content.

Grading Criteria/Policy:

Your overall grade in the class will be decided based on the following:

assignments (40%), discussions (40%), term-end paper (20%).

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

尾谷 昌則

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、(認知)言語学的な研究手法を学ぶことができる雑誌記事・学術論文を読む。論文ごとに担当者を決め、担当者には、論文の要旨を分かりやすくレジュメにまとめたものを授業で配付し、口頭でレポートしてもらう。その後、質疑応答・ディスカッションを行い、論文の分析手法について批判的に検討する。

【到達目標】

- (1) 論文における主張と根拠を的確に理解し、分かりやすく要約してレポートができるようになる。
- (2) 言語学の諸概念が言語分析においてどのように応用されているのかを理解し、具体例を挙げながら、それらについて説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式で行う。発表者はレジュメを作って、論文の内容を分かりやすく他の受講者に伝える。知らない概念などは事前にすべて調べておき、それらについても補足的に説明できるよう準備しておく。受講者は、事前に論文の不明点や欠点について容赦なく質問し、発表者とひたすらディベートを行う。最後に皆でその論文の欠点と改善点について考える。▼必要に応じて、ZOOMを用いたオンライン授業を行う。その場合は、学習支援システムの「お知らせ」で URL や事前課題などを連絡する。チャット機能を利用した双方向授業になるため、通信環境を整えておくこと。

▼課題やリアクションペーパー等における良いコメント・質問は授業内で紹介・フィードバックして、さらなる議論に活かす。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	論文レポートの方法について	論文の要約の仕方を学ぶ
第2回	論文レポート (1)	動詞の多義について
第3回	論文レポート (2)	形容詞の多義について
第4回	論文レポート (3)	接続詞の多義について
第5回	論文レポート (4)	言いさし文と文法化について
第6回	論文レポート (5)	モダリティ副詞と文法化について
第7回	論文レポート (6)	接続詞の文法化について
第8回	論文レポート (7)	談話標識について
第9回	論文レポート (8)	若者言葉と対話表現について
第10回	論文レポート (9)	待遇表現について
第11回	論文レポート (10)	活用の変化について
第12回	論文レポート (11)	新語の発生について
第13回	論文レポート (12)	コーパスについて
第14回	まとめ	総括をする

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

【宿題】

- (1) 課題論文の要約レポート（A4用紙一枚）。毎週、授業開始時に提出する。（1時間程度）
- (2) 課題論文に出てきた分からない概念・専門用語について、授業で質問されても答えられるように、調べておく。（1時間程度）
- (3) 当日の授業で質問できるように、課題論文への反論・疑義・その他不備と思われる点をまとめ、授業内でそれを発言する（2時間程度）。

【テキスト（教科書）】

使用しない。（必要に応じて、教員が資料を配付する。）

【参考書】

『認知言語学大事典』（朝倉書店）
『意味論キータム事典』（開拓社）
『新編 認知言語学キーワード事典』（研究社）

『ことばの認知科学事典』（大修館書店）
『日本語学キーワード事典』（朝倉書店）
『言語学大辞典』（三省堂）
『日本語文法大辞典』（明治書院）
『日本語学研究事典』（明治書院）
『語用論キータム事典』（開拓者）
『日本語研究のための認知言語学』（初山洋介著、研究社）
『認知意味論：言語から見た人間の心』（ジョージレイコフ著、紀伊国屋書店）
『認知意味論のしくみ』（初山洋介著、研究社）
『認知意味論の新展開—メタファーとメトニミー』（谷口一美著、研究社）
『概念化と意味の世界 認知意味論のアプローチ』（深田智・仲本康一郎著、研究社）
『認知言語学 基礎から最前線へ』（森雄一・高橋英光編著、くろしお出版）

【成績評価の方法と基準】

宿題 (1)(2)(3)	40 %
授業中の議論	40 %
学期末レポート	20 %

【学生の意見等からの気づき】

論文の書き方が具体的に理解できた、というコメントが多かったので、今年度の実際に多くの論文を取り上げる予定である。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現代日本語における意味論、文法論、語用論、認知言語学

<研究テーマ>

認知言語学からみた意味拡張、文法化、構文ネットワーク

<主要研究業績>

「アマルガム構文としての『『全然』+肯定』に関する語用論的分析」（『言葉と認知のメカニズム』pp.103-115. ひつじ書房、2008年）

「構文文法の歴史的背景と今後の展望」（『人間情報学研究』第11巻、pp.25-43. 2006年）

「接続詞ケドの手続き意味」（『語用論研究』第7号、pp.17-30. 2005年）

『構文ネットワークと文法 —認知文法論のアプローチ』（共著、研究社、2011年）

【Outline (in English)】

Course Outline: We will read the academic papers on (cognitive) linguistics, semantics and pragmatics.

Learning Objectives: The objectives of this class are as follows. (1) To understand the outline of the paper and make a summary of it. (2) To understand how to use the linguistic concepts or theory for the linguistic analysis.

Learning Activities Outside of the Classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend 2 hours to understand the course content.

【Grading Criteria/Policy】

Your overall grade in the class will be decided based on the following:

assignments (40%), discussions (40%), term-end paper (20%).

OTR600B7

国際日本学演習 I

小秋元 段

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の古典文学を学ぶためには、文学史的な知識をもつだけでなく、研究対象とする作品を原文で読む力をもつことが不可欠である。この授業では主に留学生の皆さんが古文の読解に慣れるよう、基礎的な力を養う。今学期は『古今著聞集』を扱う。

【到達目標】

『古今著聞集』巻十七「怪異」、巻十八「飲食」、巻十九「草木」を読み、古典文学読解の基礎力を身につける。具体的には、中世の古典文学作品の本文に適宜注釈を施し、語義を明らかにしながら適切に現代語訳できる力を養う。その過程で、様々な同時代の文学作品、国語資料、歴史史料の存在を知り、その活用方法を習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

この授業は、『古今著聞集』をテキストとして、履修者が各種の工具書、資料を使って注釈を施し、現代語訳する形式で進める。履修者は岩波書店・日本古典文学大系本より適宜の分量を分担し、注釈・現代語訳をレジュメにまとめ、発表するものとする。どのような文献を使えば古典が深く読め、問題点を発見することができるのか、ということに力点を置いて進めたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	作品解説 1（概要）	『古今著聞集』の概要について講義する。
第 2 回	作品解説 2（研究方法）	『古今著聞集』の研究法について講義する。
第 3 回	作品講読 1「怪異の恐れ慎むべき事」ほか	p.453～p.456 の講読。
第 4 回	作品講読 2「延長八年六月右近の陣に変化の事」ほか	p.457～p.460 の講読。
第 5 回	作品講読 3「東大寺の春舞房上醍醐にして天狗に浚はるる事」ほか	p.461～p.464 の講読。
第 6 回	作品講読 4「大原の唯蓮房法験に依りて天狗の難を通る事」ほか	p.465～p.468 の講読。
第 7 回	作品講読 5「大納言泰通狐狩を催さんとするに老狐夢枕に立つ事」ほか	p.469～p.472 の講読。
第 8 回	作品講読 6「観教法印が嵯峨山庄の飼猫変化の事」ほか	p.473～p.476 の講読。
第 9 回	作品講読 7「禅林寺の僧正瓜の歌を詠む事」ほか	p.477～p.480 の講読。
第 10 回	作品講読 8「仲胤僧都法勝寺八講に遅参し籠居して詠歌の事」ほか	p.481～p.484 の講読。
第 11 回	作品講読 9「新蔵人邦時分配次第を行ふ事」ほか	p.485～p.488 の講読。

- 第 12 回 作品講読 10「三条中納言某大食の事」ほか p.489～p.492 の講読。
- 第 13 回 作品講読 11「天曆七年十月殿上残菊合の事」ほか p.493～p.496 の講読。
- 第 14 回 作品講読 12「宇治頼通四条大納言公任と春秋の花の勝劣を論ずる事」ほか p.497～p.500 の講読。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

分担箇所の語釈・口語訳の作成。

【テキスト（教科書）】

永積安明・島田勇雄校注、日本古典文学大系『古今著聞集』（岩波書店、1966 年）

【参考書】

西尾光一・小林保治校注、新潮日本古典集成『古今著聞集』上・下（新潮社、1983・86 年）

【成績評価の方法と基準】

発表の完成度（70 %）、討論への貢献（30 %）

【学生の意見等からの気づき】

初心者にもわかりやすいように、調査・研究の方法について具体的に講義してゆきます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本中世文学、書誌学

<研究テーマ> 軍記物語、古活字版

<主要研究業績> 小秋元段『増補太平記と古活字版の時代』（新典社、2018 年）、小秋元段『太平記・梅松論の研究』（汲古書院、2005 年）

【Outline (in English)】

(Course outline) In this course, we will read Kokonchomonju. (Learning Objectives) The goals of this course are to Learn the skills to read classical literature. (Learning activities outside of classroom) Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. (Grading Criteria /Policy) Final grade will be calculated according to the following process Mid-term report (70%) and in-class contribution (30 %).

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

小秋元 段

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の古典文学を学ぶためには、文学史的な知識をもつだけでなく、研究対象とする作品を原文で読む力をもつことが不可欠である。この授業では主に留学生の皆さんが古文の読解に慣れるよう、基礎的な力を養う。今学期は『平治物語』（古活字本）を扱う。

【到達目標】

『平治物語』（古活字本）を読み、古典文学読解の基礎力を身につける。具体的には、中世の古典文学作品の本文に適宜注釈を施し、語義を明らかにしながら適切に現代語訳できる力を養う。その過程で、様々な同時代の文学作品、国語資料、歴史史料の存在を知り、その活用方法を習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

この授業は、『平治物語』（古活字本）をテキストとして、履修者が各種の工具書、資料を使って注釈を施し、現代語訳する形式で進める。履修者は岩波書店・日本古典文学大系本より適宜の分量を分担し、注釈・現代語訳をレジュメにまとめ、発表するものとする。どのような文献を使えば古典が深く読め、問題点を発見することができるのか、ということに力点を置いて進めたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	作品解説 1（概要）	『平治物語』の概要について講義する。
第 2 回	作品解説 2（研究方法）	『平治物語』の研究法について講義する。
第 3 回	作品講読 1「信頼・信西不快の事」ほか	p.403～p.404 の講読。
第 4 回	作品講読 2「信頼信西を亡ぼさる議の事」ほか	p.405～p.406 の講読。
第 5 回	作品講読 3「三条殿へ発向付けたる信西の宿所焼き払ふ事」ほか	p.407～p.408 の講読。
第 6 回	作品講読 4「信西出家の由来並びに南都落ちの事付けたる最後の事」ほか	p.409～p.410 の講読。
第 7 回	作品講読 5「唐僧来朝の事」ほか	p.411～p.412 の講読。
第 8 回	作品講読 6「六波羅より紀州へ早馬を立てらるる事」ほか	p.413～p.414 の講読。
第 9 回	作品講読 7「光頼卿参内の事並びに許由が事付けたる清盛六波羅上著の事」ほか	p.415～p.416 の講読。
第 10 回	作品講読 8「信西の子息遠流に宥めらるる事」ほか	p.417～p.418 の講読。
第 11 回	作品講読 9「主上六波羅へ行幸の事」ほか	p.419～p.420 の講読。
第 12 回	作品講読 10「源氏勢汰への事」ほか	p.421～p.422 の講読。

第 13 回 作品講読 11「待賢門の軍の事付けたる信頼落つる事」ほか

第 14 回 作品講読 12「待賢門の軍の事付けたる信頼落つる事」つづき

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

分担箇所の語釈・口語訳の作成。

【テキスト（教科書）】

永積安明・島田勇雄校注、日本古典文学大系『古今著聞集』（岩波書店、1966 年）

【参考書】

西尾光一・小林保治校注、新潮日本古典集成『古今著聞集』上・下（新潮社、1983・86 年）

【成績評価の方法と基準】

発表の完成度（70 %）、討論への貢献（30 %）

【学生の意見等からの気づき】

初心者にもわかりやすいように、調査・研究の方法について具体的に講義してゆきます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本中世文学、書誌学

<研究テーマ> 軍記物語、古活字版

<主要研究業績> 小秋元段『増補太平記と古活字版の時代』（新典社、2018 年）、小秋元段『太平記・梅松論の研究』（汲古書院、2005 年）

【Outline (in English)】

(Course outline) In this course, we will read Heiji-monogatari. (Learning Objectives) The goals of this course are to Learn the skills to read classical literature.

(Learning activities outside of classroom) Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

(Grading Criteria /Policy) Final grade will be calculated according to the following process Mid-term report (70%) and in-class contribution (30 %) .

OTR600B7

国際日本学演習 I

小林 ふみ子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では研究文献を読むことを通じて通じて日本文学とその周辺各分野の研究法を学び、その要件を考える。江戸時代をおもな対象とし、とくに文学・美術関係およびその関連分野の論考を取りあげる。

【到達目標】

(1) 各分野の研究アプローチの方法や要件を知り、またそれらに共通する点について説明できるようになる。
(2) 文献から論点を探し、研究を発展させる視点を自分なりに獲得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講生の研究テーマを勘案して毎回、前の週に論文を配付する。各回の担当者は、その論文のテーマとその背景、内容、課題・問題をまとめて発表し、全員で議論する。そのなかでよい論文に求められるものについての理解を深める。
発表時にその場で講評するほか、最終レポートにはコメントを付けて返却する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	研究とは	学際研究の課題
第 2 回	授業の進め方	一文献を例に本授業の発表方法についての理解を共有する。
第 3 回	文献講読 1 A 文学	近世文学 1 韻文
第 4 回	文献講読 1 B 文学	同上
第 5 回	文献講読 2 A 文学	近世文学 2 散文
第 6 回	文献講読 2 B	同上
第 7 回	文献講読 3 A 美術	近世美術 1
第 8 回	文献講読 3 B	同上
第 9 回	文献講読 4 A 美術	近世美術 2
第 10 回	文献講読 4 B	同上
第 11 回	文献講読 5 A 関連分野	関連分野 1
第 12 回	文献講読 5 B	同上
第 13 回	文献講読 6 A 関連分野	関連分野 2
第 14 回	文献講読 6 B	同上

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
前の週に配られた文献を読んでくこと。

【テキスト（教科書）】

コピーを配布する。

【参考書】

適宜、授業内で紹介する。

【成績評価の方法と基準】

毎回の出席は当然の前提とした上で、報告 50 %、授業中の質疑などの参加態度 50 %によって総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

学生の関心に即して文献を選択するようにしたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近世文芸・日本近世文化

<研究テーマ> 大田南畝・江戸狂歌を中心とする近世中期文学・文化の研究

<近年の主要著書>

『へんちくりん江戸挿絵本』（集英社インターナショナル [インターナショナル新書] 2019）

『大田南畝 江戸に狂歌の花咲かす』（岩波書店 2014）

（共編著）

『水都としての東京とヴェネツィア』（法政大学出版局 2022）

『墨水四時雑詠』（太平書屋 2021）

『最後の文人石川淳の世界』（集英社 [集英社新書] 2021）

『好古趣味の歴史 江戸東京からたどる』（文学通信 2020）

『北斎 視覚のマジック 小布施・北斎館名品集』（平凡社 2019）

『奇と妙の江戸文学史』（文学通信 2019）

『別冊太陽 歌麿決定版』（平凡社 2016）

『日本人は日本をどうみてきたか—江戸から見る自意識の変遷』（田中優子編 笠間書院 2015）

『化物で楽しむ江戸狂歌』（江戸狂歌研究会編 共著 笠間書院 2014）

【Outline (in English)】

(Course outline) Learning difference of disciplines to approach Tokugawa period cultures by reading essays from the fields of literature, art history, and related to them.

(Learning activities outside of classroom) Before each class meeting, students will be expected to have read designated papers. Your required study time is four hours for each class meeting.

(Grading Criteria/Policy) Final grade will be calculated according to the presentations(50%) and in-class contribution(50%).

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

小林 ふみ子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、受講生相互の研究分野についての発表を通じて、学際的な日本研究をいかに意義づけるかについて、多様な視点から考える。

【到達目標】

- (1) 日本近世・近代文化研究がどのような学問領域にまたがっているかを認識する。
- (2) 日本文化史研究という広い視野で自らの研究の位置づけを説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

前半は受講生が自らの研究において最重要と考える文献を紹介することを通じて、事例に則して「いい論文」とは何かを考える。後半は受講生相互の研究発表とする。発表時にその場で講評するほか、最終レポートにはコメントを付けて返却する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	研究をどう意義づけるか（講義）
第2回	文献講読 先行研究Aに学ぶ	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（1）
第3回	文献講読 先行研究Bに学ぶ	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（2）
第4回	文献講読 先行研究Cに学ぶ	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（3）
第5回	文献講読 先行研究Dに学ぶ	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（4）
第6回	文献講読 先行研究Eに学ぶ	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（5）
第7回	文献講読 先行研究Fに学ぶ	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（6）
第8回	中間まとめ 討論	「いい論文」「いい研究」とは？
第9回	研究発表 学生A	受講生相互の研究発表と討論1
第10回	研究発表 学生B	受講生相互の研究発表と討論2
第11回	研究発表 学生C	受講生相互の研究発表と討論3
第12回	研究発表 学生D	受講生相互の研究発表と討論4
第13回	研究発表 学生E	受講生相互の研究発表と討論5
第14回	まとめ	全体をふり返る

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
事前に配付された文献を読んでくるようにしましょう。

【テキスト（教科書）】
適宜配付します。

【参考書】
随時紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎回の出席は当然の前提とした上で、報告50%、授業中の質疑などの参加態度50%によって総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

学生の積極的な討論を期待します。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近世文芸・文化

＜研究テーマ＞近世中期文学・文化の研究

＜近年の論文＞

「南畝の狂歌の評価軸」『近世文藝』113号 2021

「東アジアの地図を読む－19世紀大坂商人の東アジア」『東アジア文化講座3 東アジアに共有される文学圏』（文学通信）2021

「文政期前後の風景画入狂歌本の出版とその改題・再印—浮世絵風景版画流行の前史として」『浮世絵芸術』179号 2020

「狂歌に文芸性はあるのか」『古典文学の常識を疑うⅡ』（勉誠出版）2019

「書籍を模倣する遊び—「見立絵本」にかんする疑問、から—」『京都語文』26号 2018

【Outline (in English)】

(Outline) Thinking how to attach significance to your interdisciplinary study/dissertation in a field of Japanese Studies.

(Learning activities outside of classroom) Before each class meeting, students will be expected to have read designated papers. Your required study time is four hours for each class meeting.

(Grading Criteria/Policy) Final grade will be calculated according to the presentations(50%) and in-class contribution(50%).

OTR600B7

国際日本学演習 I

坂本 勝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

万葉集を講読する。

【到達目標】

上代文学作品の基本的な読解法を学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示された
どの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針
に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義と演習形式によって進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	上代文学研究法について説明する。	注釈書の役割について。
第 2 回	各自、万葉集の作家研究についての第 1 のテーマを選定して発表する。	資料を用意して研究発表する。
第 3 回	各自、前回選定した作家研究のテーマにそって、具体的に取り上げる作品を選定して発表する。	資料を用意して研究発表する。
第 4 回	前回選定した作品について、注釈上の問題点を確認し発表する。	資料を用意して研究発表する。
第 5 回	前回選定した作品について、研究史上の問題点を確認して発表する。	資料を用意して研究発表する。
第 6 回	前回選定した作品について、引き続き研究史上の問題点を確認して発表する。	資料を用意して研究発表する。
第 7 回	各自、万葉集の作家研究についての第 2 のテーマを選定して発表する。	資料を用意して研究発表する。
第 8 回	各自、前回選定した作家研究のテーマにそって、具体的に取り上げる作品を選定して発表する。	資料を用意して研究発表する。
第 9 回	前回選定した作品について、注釈上の問題点を確認し発表する。	資料を用意して研究発表する。
第 10 回	前回選定した作品について、研究史上の問題点を確認して発表する。	資料を用意して研究発表する。
第 11 回	前回選定した作品について、引き続き研究史上の問題点を確認して発表する。	資料を用意して研究発表する。

第 12 回 前回までの発表を踏まえて、レポート作成の方針について発表する。

第 13 回 前回までの発表を踏まえて、再度、レポート作成の方針について発表する。

第 14 回 まとめと今後の課題を 各自の発表について問題点、評価すべき点について講評する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

配布資料をよく読んでおくこと。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間（計 4 時間）を標準とする。

【テキスト（教科書）】

万葉集（原文付き）

【参考書】

必要に応じて提示する。

【成績評価の方法と基準】

学期末のレポート提出（60 %）、発表（40 %）により評価する。

【学生の意見等からの気づき】

作品を丁寧に読むことの重要性。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 上代文学

<研究テーマ> 古事記、万葉集の作品研究<主要研究業績>

【Outline (in English)】

【Course outline】 Read the Manyoshu（万葉集），

【Learning Objectives】 To understand the basic research methods of Japanese literature of the upper ages.

【Learning activities outside of classroom】 Please read the handouts carefully. The standard preparation and review time for a class is 2 hours each, (4 hours for a week).

【Grading Criteria /Policy】 Grading will be based on the term paper(60%) and the submission of several assignments and reaction papers (40%). will be based on the term paper(60%) and the submission of several assignments and reaction papers (40%). (Course outline)

(Learning Objectives)

(Learning activities outside of classroom)

(Grading Criteria /Policy)

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

坂本 勝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

万葉集を精読する。

【到達目標】

注釈書の精読を通して作品解釈の問題点を検討し、万葉集読解の基本的力を養う。学生が作品論研究の抱える問題点についての的確に説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

万葉集の中から各自研究テーマ・作品を選び、注釈書の精読を通して作品解釈の問題点を発表する。最終授業で、13 回までの講義内容のまとめや復習だけでなく、授業内で行った課題に対する講評や解説も行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	授業概説	万葉集研究の歴史と問題点について概説する。
第 2 回	各自、第 1 の研究テーマを選定して発表する。	左記発表について批評、検討する。
第 3 回	前回選定したテーマについて、その妥当性を検証し発表する。	左記発表について批評、検討する。
第 4 回	各自が選定したテーマにそって、取り上げる作品番号を発表する。	左記発表について批評、検討する。
第 5 回	前回取り上げた作品について、注釈書の解釈の歴史を整理して発表する。	左記発表について批評、検討する。
第 6 回	前回取り上げた作品について、研究史を整理して発表する。	左記発表について批評、検討する。
第 7 回	各自、第 2 の研究テーマを選定して発表する。	左記発表について批評、検討する。
第 8 回	前回選定したテーマについて、その妥当性を検証し発表する。	左記発表について批評、検討する。
第 9 回	各自が選定したテーマにそって、取り上げる作品番号を発表する。	左記発表について批評、検討する。
第 10 回	前回取り上げた作品について、注釈書の解釈の歴史を整理して発表する。	左記発表について批評、検討する。
第 11 回	前回取り上げた作品について、研究史を整理して発表する。	左記発表について批評、検討する。
第 12 回	これまでの発表を踏まえて今後の研究の方向を検討する。	左記発表について批評、検討する。

第 13 回 前回までの発表を踏まえて、各自レポートの概要について発表する。

第 14 回 まとめ 万葉集研究の歴史と研究方法の問題点について確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

予習、復習、課題など、毎週 4 時間以上を必要とする。

【テキスト（教科書）】

万葉集、原文付き

【参考書】

授業の中で指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表（50 %）とレポート（50 %）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

原典を読むことの重要性。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本上代文学

<研究テーマ> 古事記、万葉集の研究

<主要研究業績>

『古事記の読み方』（岩波新書 2003 年）「亡き人に逢える島一万葉集巻一六・筑前国志賀白水郎歌を読む」（『法政大学文学部紀要』2008 年）「鴨山と石川の詩心ー柿本人麻呂臨死自傷歌群についてー」（『日本文学誌要』2008 年）「都市の大物主」（『日本文学誌要』2011 年）

【Outline (in English)】

【Course outline】 Read the Manyoshu（万葉集），

【Learning Objectives】 To understand the basic research methods of Japanese literature of the upper ages.

【Learning activities outside of classroom】 Please read the handouts carefully. The standard preparation and review time for a class is 2 hours each, (4 hours for a week).

【Grading Criteria /Polic】 Grading will be based on the term paper(60%) and the submission of several assignments and reaction papers (40%). will be based on the term paper(60%) and the submission of several assignments and reaction papers (40%). (Course outline)

(Learning Objectives)

(Learning activities outside of classroom)

(Grading Criteria /Policy)

OTR600B7

国際日本学演習 I

スティーヴン・ネルソン

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本研究（特に古典音楽、伝統芸能、古典文学など）の在り方と方法。具体例として、古写本、古版本、活字本などを用いて、『古今著聞集』巻第六 管絃歌舞第七を2年計画で講読する（2022-23年度）。

【到達目標】

国際日本学演習のネルソン・ゼミは、さまざまな国籍の、さまざまな研究分野に関心をもつ学生が所属するので、「日本研究」をするに当たり、どのような研究テーマを選び、どのように焦点を絞り、どのような手続きをとっていかなければならないかを、参加学生それぞれに即して、指導していく場とする。学生の学年によって到達目標は異なってくる。修士課程1年次生（や研修生）は研究課題を明確にし、先行研究を十分に調査・精読し、秋学期の中間発表等を経て論文の構想を十分に練ること。修士課程2年次生は春学期の中間発表に備え、授業や中間発表会等における指摘を受け止め、十分に練った目次案に従い、余裕を持って論文を執筆すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的に学生の研究発表を中心に、質疑応答、全員での討論、指導教員の講評等を交えて行う。以下に一応の授業計画を示してみたが、具体的な内容・スケジュールは、参加学生の人数・関心対象・学習意欲・予備知識などを鑑みて、第1回のガイダンスの際に決めたいと考えている。演習形式なので、フィードバックは授業内にて行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス 講読序説	自己紹介（全員）、教員による授業の進め方の説明 『古今著聞集』巻第六 管絃歌舞第七について
第2回	研究課題の紹介（2年次生）① 講読①	修士論文のテーマをすでに決めている学生の研究報告 説話 230（小序）
第3回	研究課題の紹介（2年次生）② 講読②	修士論文のテーマをすでに決めている学生の研究報告 説話 231・232
第4回	研究課題の紹介（2年次生）③ 講読③	修士論文のテーマをすでに決めている学生の研究報告 説話 233
第5回	関心対象の紹介（1年次生）① 講読④	関心対象について、学術研究の可能性を考える 説話 234・235
第6回	関心対象の紹介（1年次生）② 講読⑤	関心対象について、学術研究の可能性を考える 説話 236・237・238
第7回	修士課程の中間報告（2年次生）① 講読⑥	中間発表会に向けた配布資料・読み上げ原稿の準備 説話 239・240
第8回	修士課程の中間報告（2年次生）② 講読⑦	中間発表会に向けた配布資料・読み上げ原稿の準備 説話 241・242
第9回	研究動向の確認（1年次生） 講読⑧	先行研究の調査に基づいた文献目録の提示と検討 説話 243

第10回	先行研究の論旨の整理（2年次生）① 講読⑨	先行研究の状況を調査し、論旨を整理した上、各自の研究テーマの研究史上の意義を検討 説話 244
第11回	先行研究の論旨の整理（2年次生）② 講読⑩	先行研究の状況を調査し、論旨を整理した上、各自の研究テーマの研究史上の意義を検討 説話 245
第12回	先行研究の論旨の整理（1年次生）① 講読⑪	先行研究の状況を調査し、論旨を整理した上、各自の研究テーマの研究史上の意義を検討 説話 246・247
第13回	先行研究の論旨の整理（1年次生）② 講読⑫	先行研究の状況を調査し、論旨を整理した上、各自の研究テーマの研究史上の意義を検討 説話 248・249
第14回	夏期休暇中の作業計画立案 講読 まとめ	各自が行うべき作業の検討 春学期総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

第1回 5分程度の自己紹介を用意し、授業に期待することが述べられるように考えてくる。
以後 各自の研究を意欲的に進める。
本授業の準備（予習）および復習時間は、合わせて4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特になし。副読本として岩波書店日本古典文学大系（旧大系）『古今著聞集』を用いるが、入手方法については第1回講義の際に案内する。

【参考書】

必要に応じて授業内や個人指導の際に指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表・各種作成資料の内容 50%、討論への参加等の平常点 50%。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本音楽史学

<研究テーマ> 日本の楽譜、初期の講式（漢文訓読体の声明の一種）と平家語りの音楽構成法、平安時代の年中行事と音楽、声歌／唱歌～越殿楽謡物～箏組歌の系譜、『源氏物語』『平家物語』の音楽、日本古典文学の英訳など

<主要研究業績>

- ①「唐代伝来の音楽とその再現」（『唐代音楽の研究と再現 資料集』上野学園大学日本音楽史研究所、2014年）
- ②「〔秘曲尽くし〕再現—『文机談』に見える秘曲を聴く—」（磯水絵編『今日は一日、方丈記』新典社、2013年）◇付録CD「〔秘曲尽くし〕再現」（秘曲再現監修）に次の雅楽秘曲の復元演奏を収録：筆簾《小調子》、笙《平調入調》、琵琶《大常博士楊真操》、箏《千金調子》、琵琶《石上流泉》、琵琶《上原石上流泉》、箏《由加見調子》、琵琶《啄木》、笛・筆簾・笙・太鼓（陵王）《荒序》
- ③「工尺譜の起源をめぐる—唐代の文字譜との関係—」（磯水絵編『論集 文学と音楽史—詩歌管絃の世界—』、和泉書院、2013年）

【Outline (in English)】

Course Outline: This is a postgraduate seminar in Japanese studies, mainly for students writing their master's thesis under the instructor's supervision. It is also open to students from other seminars who are interested in methodological issues involved in the study of the performing arts of Japan. The class centers on presentations given by students on their research and other related topics. In each class of the academic years 2022-23, we will also read a section or sections from the 'Kangen-kabu' ('Music, song and dance') chapter of *Kokon chomon-jū* ('A collection of notable tales old and new'), a collection of historical tales compiled by Tachibana no Narisue in 1254.

Learning Objectives: The primary objective of the class is for the students to successfully complete their theses in the stipulated timeframe, while obtaining the methodological skills to do so, as well as to continue research in the future if they so desire.

Learning Activities Outside of the Classroom: Students are expected to undertake the activities necessary for successful completion of their theses, and participate actively in our reading of the source text described above. The latter will require some hours of library work each week.

Grading Criteria/Policy: 50% for preparation of materials used in class: 50% for active participation in class discussion.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

スティーヴン・ネルソン

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本研究（特に古典音楽、伝統芸能、古典文学など）の在り方と方法。具体例として、古写本、古版本、活字本を用いて、『古今著聞集』巻第六 管絃歌舞第七 を 2 年計画で講読する（2022-23 年度）。

【到達目標】

国際日本学演習のネルソン・ゼミは、さまざまな国籍の、さまざまな研究分野に関心をもつ学生が所属するので、「日本研究」をするに当たり、どのような研究テーマを選び、どのように焦点を絞り、どのような手続きをとっていかなければならないかを、参加学生それぞれに即して、指導していく場とする。学生の学年によって到達目標は異なってくる。修士課程 1 年次生（や研修生）は研究課題を明確にし、先行研究を十分に調査・精読し、秋学期の中間発表等を経て論文の構想を十分に練ること。修士課程 2 年次生は春学期の中間発表に備え、授業や中間発表会等における指摘を受け止め、十分に練った目次案に従い、余裕を持って論文を執筆すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的に学生の研究発表を中心に、質疑応答、全員での討論、指導教員の講評等を交えて行う。以下に一応の授業計画を示してみたが、具体的な内容・スケジュールは、参加学生の人数・関心対象・学習意欲・予備知識などを鑑みて、第 1 回のガイダンスの際に決めたいと考えている。演習形式なので、フィードバックは授業内にて行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	夏期休暇の成果報告	秋学期スケジュールの確認 院生全員による夏期休暇中の研究成果報告
第 2 回	修士論文構想の報告 (2 年次生) ① 講読 ①	修士論文の構想を説明し、作成作業の進捗状況を報告 説話 250・251
第 3 回	修士論文構想の報告 (2 年次生) ② 講読 ②	修士論文の構想を説明し、作成作業の進捗状況を報告 説話 252
第 4 回	先行研究の紹介と整理 (1 年次生) ① 講読 ③	研究課題に関する先行研究を調査・精読し、学術論文の作成方法、論理展開、文体や体裁の特徴を学ぶ 説話 253
第 5 回	先行研究の紹介と整理 (1 年次生) ② 講読 ④	研究課題に関する先行研究を調査・精読し、学術論文の作成方法、論理展開、文体や体裁の特徴を学ぶ 説話 254
第 6 回	修士課程の中間報告 (1 年次生) ① 講読 ⑤	中間発表会に向けた配布資料・読み上げ原稿の準備 説話 255
第 7 回	修士課程の中間報告 (1 年次生) ② 講読 ⑥	中間発表会に向けた配布資料・読み上げ原稿の準備 説話 256
第 8 回	修士論文の中間報告 (2 年次生) ① 講読 ⑦	修士論文執筆の進捗状況に関する報告 説話 257

第 9 回	修士論文の中間報告 (2 年次生) ② 講読 ⑧	修士論文執筆の進捗状況に関する 報告 説話 258
第 10 回	修士論文の構想発表 (1 年次生) ① 講読 ⑨	学術的な論理展開に基づき、修士 論文の目次案を立て、各章の内容 について概要を記す 説話 259
第 11 回	修士論文の構想発表 (1 年次生) ② 講読 ⑩	学術的な論理展開に基づき、修士 論文の目次案を立て、各章の内容 について概要を記す 説話 260・261
第 12 回	修士論文提出前の総点 検 (2 年次生) 講読 ⑪	論文構成、要旨、英文要旨、参考 文献などについて点検を行う 説話 262・263
第 13 回	担当教員による年末講 義	担当教員自身の、本年度の研究活 動に関する講義
第 14 回	まとめ 講読 まとめ	1 年次生は春季休暇中の作業課題 に関する計画を示し、2 年次生は 提出論文について報告し、講評を 受ける

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

第 1 回 夏期休暇中の研究成果をまとめてくる。

以後 各自の研究を意欲的に進める。

本授業の準備（予習）および復習時間は、合わせて 4 時間を標準と
します。

【テキスト（教科書）】

特になし。副読本として岩波書店日本古典文学大系（旧大系）『古今
著聞集』を用いる。

【参考書】

必要に応じて授業内や個人指導の際に指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表・各種作成資料の内容 50 %、討論への参加等の平常点 50 %。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 日本音楽史学

＜研究テーマ＞ 日本の楽譜、初期の講式（漢文訓読体の声明の一
種）と平家語りの音楽構成法、平安時代の年中行事と音楽、声歌／唱
歌～越殿楽謡物～箏組歌の系譜、『源氏物語』・『平家物語』の音楽、
日本古典文学の英訳など

＜主要研究業績＞

①「唐代伝来の音楽とその再現」（『唐代音楽の研究と再現 資料集』
上野学園大学日本音楽史研究所、2014 年）

②「「秘曲尽くし」再現—『文机談』に見える秘曲を聴く—」（磯水
絵編『今日是一日、方丈記』新典社、2013 年）◇付録 CD 「秘曲
尽くし」再現（秘曲再現監修）に次の雅楽秘曲の復元演奏を収録：
箏《小調子》、笙《平調入調》、琵琶《大常博士楊真操》、箏《千金
調子》、琵琶《石上流泉》、琵琶《上原石上流泉》、箏《由加見調子》、
琵琶《啄木》、笛・箏・笙・太鼓（陵王）《荒序》

③「蘇る平安の音」（神野藤昭夫・多忠輝監修『越境する雅楽文化』、
書肆フローラ、2009 年）

【Outline (in English)】

Course Outline: This is a postgraduate seminar in Japanese studies, mainly for students writing their master's thesis under the instructor's supervision. It is also open to students from other seminars who are interested in methodological issues involved in the study of the performing arts of Japan. The class centers on presentations given by students on their research and other related topics. In each class of the academic years 2022-23, we will also read a section or sections from the 'Kangen-kabu' ('Music, song and dance') chapter of *Kokon chomon-jū* ('A collection of notable tales old and new'), a collection of historical tales compiled by Tachibana no Narisue in 1254.

Learning Objectives: The primary objective of the class is for the students to successfully complete their theses in the stipulated timeframe, while obtaining the methodological skills to do so, as well as to continue research in the future if they so desire.

Learning Activities Outside of the Classroom: Students are expected to undertake the activities necessary for successful completion of their theses, and participate actively in our reading of the source text described above. The latter will require some hours of library work each week.

Grading Criteria/Policy: 50% for preparation of materials used in class; 50% for active participation in class discussion.

OTR600B7

国際日本学演習 I

間宮 厚司

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語学の研究方法について学びます。この授業では、上代・中古・中世における文学作品について言語学的に考え、正しく解釈する方法を学ぶことを目的にします。

【到達目標】

日本語研究に関する調査・分析・考察を学び、プリントを作成して発表する。時代を問わず、様々な視点から自分なりの論を立てられるようになることを目的にした授業です。修士論文の作成に役立つ知識やスキルを身につけることが到達目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講生による研究発表を中心に行います。発表者はプリントを人数分準備、配布して発表し、発表後に質疑応答や助言などを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業内容・受講の仕方・成績評価等についての説明
第 2 回	上代文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第 3 回	上代文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第 4 回	上代文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第 5 回	上代文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説
第 6 回	中古文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第 7 回	中古文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第 8 回	中古文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第 9 回	中古文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説
第 10 回	中世文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第 11 回	中世文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第 12 回	中世文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第 13 回	中世文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説と大レポートの説明
第 14 回	まとめ	大レポート提出と総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

研究テーマや課題について、まずはサイニーなどで先行研究を調査し、研究する余地があるか否か、よく考えて図書館等を大いに活用し、もしわからないことがあれば、授業の前後など、いつでも研究相談に来て下さい。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

プリントを配布し、テキストは指定しません。

【参考書】

『新編日本古典文学全集』（小学館）など、研究テーマにそって、そのつど紹介します。

【成績評価の方法と基準】

春学期における発表とレポートを各 50 % で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

留学生の受講生が、年々多くなっているため、わかりやすい授業を心がけるようにします。加えて、100 分授業における発表者数についても工夫します。

【担当教員の専門分野等】

日本古典語学・日本語史

<研究テーマ>

『万葉集』や『おもしろさうし』等の言語研究

<主要研究業績>

『おもしろさうしの言語』（笠間書院、2005 年）

『沖縄古語の深層 [増補版]』（森話社、2014 年）

『万葉異説 [増補版]』（森話社、2021 年）

【Outline (in English)】

This course will be an interactive lecture. In this course, you are going to have a presentation about what we learn in the class related to Japanese Language and a question and answer session.

Learning objectives of this class:

Students learn investigation, analysis, and consideration regarding Japanese language studies, and students prepare documents to have presentations.

Focus on theorizing your thoughts about Japanese language studies from different perspective and era.

Acquire the necessary skill and knowledge for writing master's thesis.

Learning activities outside of classroom:

Students need to research about their study theme and subject via website such as CiNii and make sure if there is still room for research.

Use the library for study and students can come to the laboratory for consultation before or after the class if needed.

As preparation and review of the class, students will be expected to spend about 2 hours.

Grading Criteria/Policies:

Your overall grade in the class will be decided based on the following:

Presentation (50%), Report (50%).

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

間宮 厚司

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語学の研究方法について学びます。この授業では、近世・近代・現代における文学作品について言語学的に考え、正しく解釈する方法を学ぶことを目的にします。

【到達目標】

日本語研究に関する調査・分析・考察を学び、プリントを作成して発表する。時代を問わず、様々な視点から自分なりの論を立てられるようになることを目的にした授業です。修士論文の作成に役立つ知識やスキルを身につけることが到達目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講生による研究発表を中心に行います。発表者はプリントを人数分準備、配布して発表し、発表後に質疑応答や助言などを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業の内容・受講の仕方・成績評価等についての説明
第 2 回	近世文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と今回の課題
第 3 回	近世文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第 4 回	近世文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第 5 回	近世文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説
第 6 回	近代文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と今回の課題
第 7 回	近代文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第 8 回	近代文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第 9 回	近代文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説
第 10 回	現代文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と今回の課題
第 11 回	現代文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第 12 回	現代文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第 13 回	現代文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説と大レポートの説明
第 14 回	まとめ	大レポート提出と総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

研究テーマや課題について、まずはサイニーなどで先行研究を調査し、研究する余地があるか否か、よく考えて図書館等を大いに活用し、もしわからないことがあれば、授業の前後など、いつでも研究相談に来て下さい。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

プリントを配布し、テキストは指定しません。

【参考書】

『新編日本古典文学全集』（小学館）など、研究テーマにそって、そのつど紹介します。

【成績評価の方法と基準】

秋学期における発表とレポートを各 50 % で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

教室授業にしてほしい。

【担当教員の専門分野等】

日本古典文学・日本語史

<研究テーマ>

『万葉集』や『おもしろさうし』等の言語研究

<主要研究業績>

『おもしろさうしの言語』（笠間書院、2005 年）

『沖縄古語の深層 [増補版]』（森話社、2014 年）

『万葉異説 [増補版]』（森話社、2021 年）

【Outline (in English)】

This course will be an interactive lecture. In this course, you are going to have a presentation about what we learn in the class related to Japanese Language and a question and answer session.

Learning objectives of this class:

Students learn investigation, analysis, and consideration regarding Japanese language studies, and students prepare documents to have presentations.

Focus on theorizing your thoughts about Japanese language studies from different perspective and era.

Acquire the necessary skill and knowledge for writing master's thesis.

Learning activities outside of classroom:

Students need to research about their study theme and subject via website such as CiNii and make sure if there is still room for research.

Use the library for study and students can come to the laboratory for consultation before or after the class if needed.

As preparation and review of the class, students will be expected to spend about 2 hours.

Grading Criteria/Policies:

Your overall grade in the class will be decided based on the following:

Presentation (50%), Report (50%).

OTR600B7

国際日本学演習 I

川崎 貴子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

音声/音韻の第二言語習得に関する論文を読み、発表することにより、言語習得の分野での問いの立て方、検証方法を確認する。様々なテーマの論文を読むことを通して、テーマの立て方、仮説検証の仕方を学び、学生それぞれが研究テーマを見つけ、研究計画を組み立てる。

【到達目標】

本授業では、特に音韻分野の第一言語習得、および第二言語習得の主な研究を紹介することにより、言語習得の理論研究がどのように進んできたのかを学ぶ。また、様々な論文で用いられている実験方法を比較し、第二言語習得の研究手法を学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

論文を読み、毎回全員で発表・議論する演習方式で行う。主に音声・音韻の第二言語習得に関する論文を読み、発表することにより、言語習得の分野での問いの立て方、検証方法を確認し、取り上げられている問題に対して、どのような実験を行っているかを学ぶ。その後、各自、1年間で実行可能な研究テーマを設定し、それぞれのテーマの先行研究を読み、研究計画を構築していく。担当者は担当箇所の核になるデータ、及びその分析方法をまとめ、批判をおりまぜながら議論する。

授業で提出されたリアクションペーパーなどにおけるコメント・質問へは、そのうちのいくつかを取り上げ、全体に対してフィードバックを行い、議論に活かす。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	Orientation	授業内容の説明
2	リサーチメソッド・授業プランの作成	課題論文リストの提示と概要の説明
3	言語習得研究	第一言語習得と第二言語習得
4	第二言語習得の理論	音韻習得理論を取り上げ、概要を紹介する
5	SLA Phonology 論文発表（1）	SLA Phonology 論文発表と分析手法について
6	SLA Phonology 論文発表（2）	分析手法について・演習（2）
7	研究計画発表1	修士2年生による研究テーマ発表
8	研究計画発表2	修士1年生による研究テーマ発表
9	エラーに関する研究	エラーのタイプについての分析
10	処理可能性理論（1）	処理可能性理論についての概要、理論の説明
11	処理可能性理論（2）	処理可能性理論に関する論文発表
12	学生による発表（1）	レビュー論文
13	学生による発表（2）	学生による論文のポスター発表（1）
14	学生による発表（3）	学生による論文のポスター発表（2）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業前に指定された範囲の論文を読むこと。そして、担当箇所については、発表の準備を十分に行うこと。本授業の準備・復習時間は、4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

授業内で必要に応じて論文を指定します。

【参考書】

授業内でその都度、指定します。

【成績評価の方法と基準】

＜修士課程学生＞

授業での議論への参加：40%

授業内発表：40%

研究計画書：20%

【学生の意見等からの気づき】

担当学生により発表資料のアップロードが遅れ、予習が間に合わないとのコメントがありました。今年度は資料や課題論文の提出の期限を厳守し、早めに準備するように学期当初から声かけをしたいと思います。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 音韻論、第二言語習得

＜研究テーマ＞ 音韻対比の音声的影響、第二言語学習者の音韻習得など

＜主要研究業績＞

川崎貴子・田中邦佳「L2 英語摩擦音の知覚における高周波数帯域情報の利用」『法政大学文学部紀要』第65号 pp. 63-70. (2012)

川崎貴子「カタカナ代用による第2言語音知覚調査」『法政大学文学部紀要』第63号 pp. 29-37. (2011)

Takako Kawasaki, John Matthews, and Kuniyoshi Tanaka "Processability of Acoustic Cues in the Perception of L2 Speech." Paper presented at 12th International Symposium on Processability Approaches to Language Acquisition, Ghent University, Ghent, Belgium. (2012)

川崎貴子・マシューズジョン・田中邦佳「L2 音韻カテゴリーの構築過程における音響的手がかりの利用と抑制—日本語母語話者による英語摩擦音習得—」白畑知彦・須田孝司 編『名詞句と音声・音韻の習得（第二言語習得モノグラフシリーズ）』くろしお出版.(2017)

【Outline (in English)】

Through reading SLA Phonetics/Phonology papers, students will learn how to set their research theme and test their hypotheses.

Learning Objectives: The aim of this course is to deepen the students' understanding of theories of SLA and research methodologies in the field and help them to find their own research topics.

Learning activities outside of classroom: Students are expected to read the assigned papers before class. Students are required to study about 4 hours outside of classroom.

Grading Criteria:

In-class participation: 40%

In-class presentation : 40%

Research abstract : 20%

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

川崎 貴子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語話者の英語習得、および第二言語としての日本語習得の、特に音韻・音声習得の研究論文を読み、議論することを通して、自らの論文の基礎となる理論、研究法を学ぶ。

【到達目標】

一音韻論、及び SLA の音韻・語彙分野の基礎文献を読みつつ、第二言語習得・教育の分野での調査手法についての知識を身に付ける。一自らの研究計画を策定、研究を遂行し、博士論文の執筆に生かす。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

春学期に続き、指定文献を読み、毎回全員で発表・議論していく。担当者は担当箇所の核になるデータ、及びその分析方法をまとめ、批判をおりまぜながら議論すること。修士論文執筆の際に役立つよう、おもに研究法・論文の構成・データ分析などについて学ぶ。授業で提出されたリアクションペーパーなどにおけるコメント・質問へは、そのうちのいくつかを取り上げ、全体に対してフィードバックを行い、議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業内容の説明
2	修士2年生の研究発表（1）	研究の進捗状況発表（2年生）（1）
3	修士2年生の研究発表（2）	研究の進捗状況発表（2年生）（2）
4	修士1年生の研究発表（1）	研究の進捗状況の発表（1年生、および研修生）（1）
5	修士1年生の研究発表（2）	研究の進捗状況の発表（1年生、および研修生）（2）
6	論文購読—母語音声の影響に関する論文	母語の目録の L2 への影響（解説）
7	論文購読—母語音声の影響（研究方法）	母語の目録の L2 への影響（学生による発表）（1）
8	論文購読—母語音声の影響（分析方法・結果記述）	母語の目録の L2 への影響（学生による発表）（2）
9	論文購読—音韻・語彙習得	語彙の特定と音韻処理—学生による発表（1）
10	論文購読—音韻・語彙習得（研究手法）	語彙の特定と音韻処理—学生による発表（2）
11	論文購読—音韻・語彙習得（分析）	語彙の特定と音韻処理—データ分析演習
12	1年生による修論計画発表	1年生は研究計画・先行研究リスト・今後のプランなどを発表
13	2年生による修論発表	2年生による修士論文の概要・目的・方法・結果の発表
14	博士後期課程学生による論文発表・講評	博士後期課程学生による論文の発表・発表の講評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業前に指定された範囲の論文を読むこと。そして、担当箇所については、発表の準備を十分に行うこと。本授業の準備・復習時間は、4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特に設定しない。必要に応じて授業内で指示する。

【参考書】

必要に応じて授業内で指示する。

【成績評価の方法と基準】

＜修士課程＞

授業発表....40%

授業内での発言・議論への貢献....40%

学期末論文....20%

【学生の意見等からの気づき】

理解を細かく確かめつつ進めたことが好評であった。また、追加文献を提案しながら、それぞれの研究テーマに応じた学習を授業外で進められるように、アドバイスしたい。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 音韻論、第二言語習得

＜研究テーマ＞ 音韻対比の音声的影響、第二言語学習者の音韻習得など

＜主要研究業績＞

川崎貴子・田中邦佳「L2 英語摩擦音の知覚における高周波数帯域情報の利用」『法政大学文学部紀要』第 65 号 pp. 63-70. (2012)

川崎貴子「カタカナ代用による第2言語音知覚調査」『法政大学文学部紀要』第 63 号 pp. 29-37. (2011)

Takako Kawasaki, John Matthews, and Kuniyoshi Tanaka "Processability of Acoustic Cues in the Perception of L2 Speech." Paper presented at 12th International Symposium on Processability Approaches to Language Acquisition, Ghent University, Ghent, Belgium. (2012)

川崎貴子・マシューズジョン・田中邦佳「L2 音韻カテゴリーの構築過程における音響の手がかりの利用と抑制—日本語母語話者による英語摩擦音習得—」白畑知彦・須田孝司 編『名詞句と音声・音韻の習得（第二言語習得モノグラフシリーズ）』くろしお出版.(2017)

【Outline (in English)】

Through reading papers on phonological and phonetic acquisition, students will learn theories and research methods that will form the basis of their own papers.

Learning Objectives:

-To acquire knowledge of research methods in the field of second language acquisition and teaching, while reading basic literature in the field of phonology and SLA phonology and vocabulary.

-Students will be able to formulate their own research plan, conduct research, and produce a thesis.

Learning activities outside of classroom : Students are required to read assigned papers and prepare for their presentations. Students are expected to study at least 4 hours outside of classroom.

Grading Criteria:

In-Class presentations....40%

In-Class participation....40%

Term paper....20%

OTR600B7

国際日本学演習 I

椎名 美智

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

英語学特殊研究で学ぶのは、基本的には書かれたテキスト分析の方法です。書かれた言葉であれ、話された言葉であれ、それを一つのテキストとみなし、そのスタイルを、英文法、文体論、語用論の観点から分析する訓練をします。春学期は談話分析の領域を概観します。それを出発点として、狭い意味での言語的構築物のみならず、広い意味での言語活動、コミュニケーション全体を射程に入れて、一つのテキスト分析の方法を確認していきます。

【到達目標】

この授業は英語学の諸分野の内、テキスト分析に関わる基本的なトピックを扱った論文を読み、英語学の研究方法を身につけるとともに、自分が扱う言語学の課題を検討し、論文を執筆する応用力をつけることを目的とします。学生は、英語学の課題、問いの立て方、それを追求していく視点を獲得します。

The goal of this class is to read the chapter before and after the class.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業の形態は HOPPII で連絡します。担当を決めるので、履修予定の学生は、必ず初回に出席してください。状況によって zoom と対面授業をします。HOPPII の「教材」のところで連絡をしますので、毎週必ず見てください。

テキストは担当者を決めて、発表してもらいます。その後で、みんなでコメントを交換し、ディスカッションをします。リアクションペーパーは毎時間、提出していただきます。授業の初めに、前回の授業に提出されたリアクションペーパーからいくつか取り上げて、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	「語用論」とは何か？
第 2 回	序：談話分析のアプローチ	文脈における意味、英語の語用論：担当学生のプレゼンテーションと議論
第 3 回	第 1 章：意味の表現と理解の原理 (1): 1 節：意図表現と解釈	担当学生のプレゼンテーションと議論
第 4 回	第 1 章：意味の表現と理解の原理 (2): 2 節：分野区情報と意味	担当学生のプレゼンテーションと議論
第 5 回	第二章：会話における言語使用のメカニズム 1 節：会話の構造	担当学生のプレゼンテーションと議論
第 6 回	第二章：会話における言語使用のメカニズム 2 節：会話のストラテジー	担当学生のプレゼンテーションと議論
第 7 回	第三章：言語形式の機能 1 節：テキストと情報	担当学生のプレゼンテーションと議論
第 8 回	第三章：言語形式の機能 1 節：言語機能と文法	担当学生のプレゼンテーションと議論

第 9 回	第四章：言語使用の社会・文化的側面 1 節：言語と文化	担当学生のプレゼンテーションと議論
第 10 回	第四章：言語使用の社会・文化的側面 2 節：相互行為の理論	担当学生のプレゼンテーションと議論
第 11 回	第四章：言語使用の社会・文化的側面 3 節：相互行為の分析	担当学生のプレゼンテーションと議論
第 12 回	第四章：言語使用の社会・文化的側面 4 節：相互行為と社会的真理	担当学生のプレゼンテーションと議論
第 13 回	第四章：言語使用の社会・文化的側面 5 節：言語と社会的権力	担当学生のプレゼンテーションと議論
第 14 回	談話分析のアプローチのまとめ	総括とまとめ、論文執筆の指導など

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

予習・復習については各 2 時間を標準とします。担当者でなくても、かならずテキストを読んで予習をしてきてください。

【テキスト（教科書）】

林卓男編著 (2008)『談話分析のアプローチ：理論と実践』（研究社）

【参考書】

適宜、指示します。

【成績評価の方法と基準】

レポート (50 %) に加え、授業中の参加の度合、貢献度 (50 %) を考慮し、総合的に判断します。

Grading includes attendance and presentation (50%) and term paper (50%).

【学生の意見等からの気づき】

面談が評判がよいので、指導は授業と面談とのコンビネーションで進めていきます。

【学生が準備すべき機器他】

特にありません。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>語用論、文体論、コミュニケーション論

<研究テーマ>英語の呼称について、日本語のベネファクティブとポライトネスについて

<主要研究業績> 『「させていただく」の語用論』 2021, ひつじ書房、『「させていただく」の使い方』 2022, 角川新書、KADOKAWA.

【Outline (in English)】

The purpose of this course is to gain an overview of pragmatics and discourse analysis so that students can apply the methodologies and theories that are needed in their own research.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

椎名 美智

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

英語学特殊研究で学ぶのは、基本的には書かれたテキスト分析の方法である。書かれた言葉であれ、話された言葉であれ、それの一つのテキストとみなし、その語用論的意味を、英文法、文体論、語用論の観点から分析する訓練をします。狭い意味での言語的構築物のみならず、広い意味での言語活動、コミュニケーション全体を射程に入れて、一つ一つのテキスト分析の方法を確認していきます。

【到達目標】

この授業は英語学の諸分野の内、テキスト分析に関わる基本的なトピックを扱った論文を読み、英語学の研究方法を身につけるとともに、自分が扱う英語学の課題を検討し、論文を執筆する応用力をつけることを目的とします。学生には、英語学の課題、問いの立て方、それを追求していく視点を獲得してもらうことをめざします。

The goal of this class is to acquire the research methodology for one's own research.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

コロナ禍の状況により授業の形態は変わるので、毎回 HOPPII でお知らせしますので、毎週必ずチェックしてください。

担当者がテキストについて発表し、その後、みんなでコメントを交わしてディスカッションをします。

秋セメスターは基本的にリモート授業ですが、コロナの感染状況によって大学の基準が変更する場合は、授業形式も変更になります。その場合は、HOPPII でお知らせします。大学の HP も定期的に見ておいて下さい。

リアクションペーパーは毎時間、提出していただきます。授業の初めに、前回の授業に提出されたリアクションペーパーからいくつか取り上げて、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	担当箇所の決定、論文執筆指導など
第 2 回	『「させていただく」の使い方』第一章：新しい敬語表現：街中の言語学的観察	担当学生の発表とディスカッション
第 3 回	『「させていただく」の使い方』第二章：ブームの到来：「させていただく」の勢力図	担当学生の発表とディスカッション
第 4 回	『「させていただく」の使い方』第三章：違和感の正体：700人の意識調査	担当学生の発表とディスカッション
第 5 回	『「させていただく」の使い方』第四章：拡がる守備範囲	担当学生の発表とディスカッション
第 6 回	『「させていただく」の使い方』第五章：日本語コミュニケーションのゆくえ	担当学生の発表とディスカッション

第 7 回	『日本語の大疑問』第一章：どうも気になる最近の日本語	担当学生の発表とディスカッション
第 8 回	『日本語の大疑問』第二章：過剰か無礼か？敬語と接客言葉の謎	担当学生の発表とディスカッション
第 9 回	『日本語の大疑問』第三章：世界のことばと日本のことば	担当学生の発表とディスカッション
第 10 回	『日本語の大疑問』第四章：どちらを選ぶ？迷う日本語	担当学生の発表とディスカッション
第 11 回	『日本語の大疑問』第五章：便利で奇妙な外来語	担当学生の発表とディスカッション
第 12 回	『日本語の大疑問』第六章：歴史で読み解く日本語のフシギ	担当学生の発表とディスカッション
第 13 回	修論発表会（2 年生）	学生の修論発表会とディスカッション
第 14 回	修論の執筆計画（1 年生）と総括	学生の修論発表会とディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

予習・復習については各 2 時間を標準とします。担当者もそれ以外の人も、全員、テキストを読んで予習をして来てください。

【テキスト（教科書）】

椎名美智（2022）『「させていただく」の使い方—日本語と敬語のゆくえ』（角川新書）KADOKAQA, 国立国語研究所（編）（2021）『日本語の大疑問—眠れなくなるほど面白いことばの世界』（幻冬舎新書）幻冬舎

【参考書】

適宜指示します。

【成績評価の方法と基準】

レポート（50 %）に加え、授業中の参加の度合、貢献度（50 %）を考慮し、総合的に判断します。

The grading includes presentation and attendance (50%) and term paper (50%).

【学生の意見等からの気づき】

面談が指導に有効で良かったと言われているので、授業に並行して、定期的に面談を行い、一人一人の論文作成を進めていきます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 語用論、文体論、コミュニケーション論

<研究テーマ> 英語の呼称問題、日本語のベネファクティブとポラリティネス

<主要研究業績> 『「させていただく」の語用論』2021, ひつじ書房, 『「させていただく」の使い方』2022, 角川新書, KADOKAWA.

【Outline (in English)】

The purpose of this course is to gain an overview of pragmatics and discourse analysis so that students can apply the methodologies and theories that are needed in their own research.

OTR600B7

国際日本学演習 I

小口 雅史

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

国際日本学として、日本史を客観的に見ようとするとき、一つの重要な視点として、「日本のなかの異文化」を検討するという方法がある。とくに日本古代という時代は、中央の地方に対する異文化観が強いので、そうした分析の格好の舞台である。この演習では、日本古代における「日本のなかの異文化」を分析する素材として『陸奥話記』を選ぶこととする。その著者は北方史について相当の見識を有していたものと思われ、その内容を、演習形式で原典史料をじっくりと読み解いていくこととしたい。春学期は第 12 話までの検討を行う。

【到達目標】

中央史料から北方世界の実態をどのように読み取るのか、その方法論を取得することを目標とする。
あわせて、自力で日本史を客観的に分析する能力を身につけることをも目標とする。
またディベート能力の向上も目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は、受講者による文献の精読・発表、教員による補足・講義、全員での討論を織り交ぜて行う。
また適宜パソコンを用いて、デジタルテキスト検索実習や用語解析などの実習も行う。
本演習参加者には、あらかじめ担当を指定するので、上記の目標をふまえて事前に十分予習してから本演習に臨むことを期待する。事前に最低限行うこととしては、本文の書き下し、現代語訳、語句註解、論点の整理、先行研究のまとめ、自分の見解などである。発表原稿の作成の仕方は、第 1 回目の講義で詳しく説明する。なお第 1 回目の講義において、実際の参加者のレベルや興味に応じて、素材を一部変更することもあり得る。
発表へのフィードバックについては、今回の授業の初めに、前回の授業で提出資料からいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整、概説
第 2 回	陸奥話記第 1 話講読	1 俘囚長安倍頼良叛す
第 3 回	陸奥話記第 2 話講読	2 追討將軍源頼義の登場
第 4 回	陸奥話記第 3 話講読	3 安倍頼良帰順す
第 5 回	陸奥話記第 4 話講読	4 阿久利川の事件
第 6 回	陸奥話記第 5 話講読	5 頼義、平永衡を切る
第 7 回	陸奥話記第 6 話講読	6 亘理経清の離反
第 8 回	陸奥話記第 7 話講読	7 頼義重任し征討に努む
第 9 回	陸奥話記第 8 話講読	8 黄海の戦い
第 10 回	陸奥話記第 9 話講読	9 佐伯経範の奮戦
第 11 回	陸奥話記第 10 話講読	10 藤原景季の忠死
第 12 回	陸奥話記第 11 話講読	11 和気致輔・為清らの奮死
第 13 回	陸奥話記第 12 話講読	12 藤原茂頼の忠節
第 14 回	春学期のまとめ	陸奥話記前半部の内容整理と陸奥話記史観の検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストは難解なので、発表者はいうまでもないが、他の参加者も事前に必ず担当テキストを熟読しておくこと。発表者は準備学習に標準的に 3 時間程度。他の受講者は標準的に 1 時間程度は必要である。復習にはそれぞれ 1 時間程度。発表者は、発表終了後に再構成した発表レジュメをアップロードしてもらいが、それに別途 1 時間程度。

【テキスト（教科書）】

新編日本古典文学全集本（小学館）

【参考書】

特に指定しない。発表に応じてその都度指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表 55 %、討論への参加 30 %、期末レポート 15 %
現地側の視点を明確に読み取り、中央側の視点と比較できたかどうかを重視する。

【学生の意見等からの気づき】

前年度サバティカルにつきなし

【学生が準備すべき機器他】

資料のデジタル分析をするので携帯できる電子機器を持参できることが望ましい。
所有していない場合はこちらでゼミ室のパソコンなどを使用できるように用意する。

【その他の重要事項】

受講希望者の専門は問わないが、大学学部史学科卒業程度の知識は最低限でも持っていることを前提に演習を進めていく。また古文・漢文を読解する能力は必須である。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

日本古代史・法制史・北方史・国際日本学

〈研究テーマ〉

日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史

〈主要研究業績〉

2010 年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』

2008 年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院

2008 年、「近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって」『古文書研究』66

2007 年、「『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後－FileMaker による Database の Web 公開の一例として」『漢字文献情報処理研究』8

【Outline (in English)】

Course outline : In this lecture, in order to learn a new analytical method of Japanese ancient history, we introduce the method of international Japanese study.

Learning Objectives : We will study the classic "Mutsuwaki" on Japanese ancient northern world. We will read until the 12th episode this time.

Learning activities outside of classroom : Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting . Your study time will be more than five hours for a class.

Grading Criteria /Policies : Grading will be decided based on lab reports (85 %) , and the quality of the students' experimental performance in the lab (15 %) .

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

小口 雅史

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

国際日本学として、日本史を客観的に見ようとするとき、一つの重要な視点として、「日本のなかの異文化」を検討するという方法がある。とくに日本古代という時代は、中央の地方に対する異文化観が強いので、そうした分析の格好の舞台である。この演習では、日本古代における「日本のなかの異文化」を分析する素材として『陸奥話記』を選ぶこととする。その著者は北方史について相当の見識を有していたものと思われ、その内容を、演習形式で原典史料をじっくりと読み解いていくこととしたい。秋学期は第 24 話までの検討を行う。

【到達目標】

中央史料から北方世界の実態をどのように読み取るのか、その方法論を取得することを目標とする。
あわせて、自力で日本史を客観的に分析する能力を身につけることをも目標とする。
またディベート能力の向上も目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は、受講者による文献の精読・発表、教員による補足・講義、全員での討論を織り交ぜて行う。
また適宜パソコンを用いて、デジタルテキスト検索実習や用語解析などの実習も行う。

本演習参加者には、あらかじめ担当を指定するので、上記の目標をふまえて事前に十分予習してから本演習に臨むことを期待する。事前に最低限行うこととしては、本文の書き下し、現代語訳、語句註解、論点の整理、先行研究のまとめ、自分の見解などである。発表原稿の作成の仕方は、第 1 回目の講義で詳しく説明する。なお第 1 回目の講義において、実際の参加者のレベルや興味に応じて、素材を一部変更することもあり得る。

発表へのフィードバックについては、今回の授業の初めに、前回の授業で提出資料からいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整、概説
第 2 回	陸奥話記第 13 話	講読 13 平国妙捕らわる
第 3 回	陸奥話記第 14 話	講読 14 頼義苦境を訴う
第 4 回	陸奥話記第 15 話	講読 15 清原光頼に援を頼む
第 5 回	陸奥話記第 16 話	講読 16 頼義軍容を整う
第 6 回	陸奥話記第 17 話	講読 17 小松の柵攻略
第 7 回	陸奥話記第 18 話	講読 18 官軍霖雨に遭い飢えに悩む
第 8 回	陸奥話記第 19 話	講読 19 貞任勢の反撃。武則勝利を予言す
第 9 回	陸奥話記第 20 話	講読 20 官軍奮戦して大勝す
第 10 回	陸奥話記第 21 話	講読 21 頼義負傷者を見舞う
第 11 回	陸奥話記第 22 話	講読 22 武則奇襲し貞任勢を破る
第 12 回	陸奥話記第 23 話	講読 23 衣川の関を攻略
第 13 回	陸奥話記第 24 話	講読 24 鳥海の柵を攻略
第 14 回	秋学期のまとめ	陸奥話記中間部の内容整理と陸奥話記史観の再検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストは難解なので、発表者はいうまでもないが、他の参加者も事前に必ず担当テキストを熟読しておくこと。発表者は準備学習に標準的に 3 時間程度。他の受講者は標準的に 1 時間程度は必要である。復習にはそれぞれ 1 時間程度。発表者は、発表終了後に再構成した発表レジュメをアップロードしてもらいが、それに別途 1 時間程度。

【テキスト（教科書）】

新編日本古典文学全集本（小学館）

【参考書】

特に指定しない。発表に応じてその都度指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表 55 %、討論への参加 30 %、期末レポート 15 %
現地側の視点を明確に読み取り、中央側の視点と比較できたかどうかを重視する。

【学生の意見等からの気づき】

前年度サバティカルにつきなし

【学生が準備すべき機器他】

資料のデジタル分析をするので携帯できる電子機器を持参できることが望ましい。
所有していない場合はこちらでゼミ室のパソコンなどを使用できるように用意する。

【その他の重要事項】

受講希望者の専門は問わないが、大学学部史学科卒業程度の知識は最低限でも持っていることを前提に演習を進めていく。また古文・漢文を読解する能力は必須である。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

日本古代史・法制史・北方史・国際日本学

〈研究テーマ〉

日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史

〈主要研究業績〉

2010 年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』

2008 年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院

2008 年、「近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって」『古文書研究』66

2007 年、「『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後－FileMaker による Database の Web 公開の一例として」『漢字文献情報処理研究』8

【Outline (in English)】

Course outline : In this lecture, in order to learn a new analytical method of Japanese ancient history, we introduce the method of international Japanese study.

Learning Objectives : We will study the classic "Mutsuwaki" on Japanese ancient northern world. We will read until the 24th episode this time.

Learning activities outside of classroom : Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting . Your study time will be more than five hours for a class.

Grading Criteria /Policies : Grading will be decided based on lab reports (85 %) , and the quality of the students' experimental performance in the lab (15 %) .

OTR600B7

国際日本学演習 I

松本 剣志郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、受講生が日本近世史についての研究能力を高め、個々が有する研究テーマを深めていくことを目的とする。

【到達目標】

- ①研究論文の位置を理解することができる。
- ②史料から議論を立ち上げることができる。
- ③学会発表ができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

個人による研究発表をおこなう。発表者は各自の研究テーマについてレジュメを作成し、発表する。全員参加の質疑応答で発表に対するフィードバックする。論文講読は、事前に割り当てを決め、担当者が発表し、これを全員で批評するかたちをとる。対面授業である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業概要の説明、発表順の決定
第 2 回	研究発表（1）	研究テーマの学術上の位置づけ
第 3 回	研究発表（2）	研究テーマの史料論的分析
第 4 回	研究発表（3）	研究テーマの可能性
第 5 回	研究発表（4）	研究テーマのひろがり
第 6 回	研究発表（5）	学会発表をめざして
第 7 回	論文講読（1）	研究史上の位置づけ
第 8 回	論文講読（2）	論文構成の方法
第 9 回	論文講読（3）	史料批判
第 10 回	論文講読（4）	論理展開の仕方
第 11 回	論文講読（5）	研究視野の拡大
第 12 回	研究計画発表（1）	今後の方針
第 13 回	研究計画発表（2）	史料探訪にむけて
第 14 回	まとめ	研究者の姿勢

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
論文講読にあたっては、事前にその論文を読んでおくこと。また、その著者の他の論文も目を通すと良い。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

『岩波講座日本歴史』ほか

【成績評価の方法と基準】

発表内容、授業への参加度等をみて、平常点 100% で成績評価する。

【学生の意見等からの気づき】

教室について配慮したいと思います。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近世史

＜研究テーマ＞都市論、記憶論

＜主要研究業績＞『江戸の都市化と公共空間』（塙書房、2019 年）

【Outline (in English)】

This course deals with the early modern history of Japan. It also enhances the development of student's skill in making oral presentation. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Grading will be decided based on students presentation.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

松本 剣志郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、受講生が日本近世史についての研究能力を高め、個々が有する研究テーマを深めていくことを目的とする。

【到達目標】

論文を執筆することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

個人による研究発表をおこなう。発表者は各自の研究テーマについてレジュメを作成し、発表する。全員参加の質疑応答で発表に対するフィードバックとする。論文講読は、事前に割り当てを決め、担当者が発表し、これを全員で批評するかたちをとる。対面授業である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業概要の説明、発表順の決定
第2回	研究発表（1）	研究史との格闘
第3回	研究発表（2）	論理展開の仕方
第4回	研究発表（3）	史料の読みの深さ
第5回	研究発表（4）	表の効果的使用
第6回	研究発表（5）	他流試合のなかで
第7回	論文講読（1）	分野の選定
第8回	論文講読（2）	表現力の問題
第9回	論文講読（3）	史料引用の恣意性
第10回	論文講読（4）	先行研究の曲解
第11回	論文講読（5）	結論の妥当性
第12回	研究計画発表（1）	今後の進め方
第13回	研究計画発表（2）	史料収集のすすめ
第14回	まとめ	つぎのステージへむけて

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
論文講読においては、事前に当該論文を読んでおくこと。各自で研究を進めること。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

『岩波講座日本歴史』ほか

【成績評価の方法と基準】

発表内容、授業への参加度等をみて、平常点100%で成績評価する。

【学生の意見等からの気づき】

教室について配慮したいと思います。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近世史

＜研究テーマ＞都市論、記憶論

＜主要研究業績＞『江戸の都市化と公共空間』（塙書房、2019年）

【Outline (in English)】

This course deals with the early modern history of Japan. It also enhances the development of student's skill in making oral presentation. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Grading will be decided based on students presentation.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅰ

伊藤 達也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

受講生は修士論文の作成経過を報告し、討論をすることによって、修士論文の完成を目指します。同時に論文作成に必要な諸項目を学びます。他の受講生は発表に対して、質問、意見を提出することによって、発表の内容を高めることを目指し、同時に自らの修士論文作成の学びとします。

【到達目標】

適切な修士論文の完成を目指します。具体的には、修士論文を作成するための適切な知識の獲得、適切な説明論理の獲得、適切なオリジナリティを有した修士論文の作成が授業のテーマとなります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的に学生の発表を中心に行います。教員は論文の作成方法を説明します。フィードバックについては、できる限り授業中のコミュニケーションで対応しますが、足りない場合は次の授業において継続して議論します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ゼミガイダンス	春学期のゼミ概要の説明とゼミ方針の決定
第2回	論文の作成技法	論文の作成技法の講義
第3回	文献検索方法	文献検索方法の講義
第4回	修士2年生の発表、発表レジュメ	修士2年生の研究テーマ発表と発表レジュメの解説
第5回	修士1年生の発表、日本語の文法	修士1年生の研究テーマ発表と日本語の文法の説明
第6回	修士1年生の発表、引用文献の表示	修士1年生の研究テーマ発表と引用文献の表示方法の説明
第7回	修士1年生の発表、参考文献の表示	修士1年生の研究テーマ発表と参考文献の表示方法の説明
第8回	修士1年生の発表、注の付け方	修士1年生の研究テーマ発表と注の付け方の説明
第9回	構成表の作り方	構成表の作り方の説明
第10回	修士2年生二度目の発表、理論の考え方	修士2年生二度目の研究テーマ発表と理論の考え方の説明
第11回	方法論の選択	方法論の選択の説明
第12回	説明順序	説明順序の説明
第13回	夏季休暇のフィールドワーク準備(1)－調査マナー－	調査マナーの説明
第14回	夏季休暇のフィールドワーク準備(2)－調査方法－	調査方法の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

修士論文は授業以外での努力が圧倒的に求められます。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しません。

【参考書】

別途、授業内で提示します。

【成績評価の方法と基準】

発表：50％、討論：50％

十分な準備が大前提となります。問題、論点の明確化された発表の評価が高く、討論は、単純な質問、意見に対する疑問の提示、反論を丁寧に分けて行うことが望ましいです。

【学生の意見等からの気づき】

丁寧な説明に心がけます。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 水資源研究、資源環境論、地域経済論

＜研究テーマ＞ 木曾川水系の水資源問題、地域資源の持続可能な利用、地域経済

＜主要研究業績＞

1. 「熊本県五木村における村民意識調査の分析結果と地域再生」法政大学文学部紀要 82 2021

2. 「ダムと環境問題について考えるー川辺川ダム問題を事例にー」都市問題 112-8 2021

3. 「熊本県五木村における観光客の意識調査の分析結果と地域再生」法政大学文学部紀要 83 2021

4. 伊藤達也・小田宏信・加藤幸治編『経済地理学への招待』ミネルヴァ書房 2020

5. 「河童による水辺環境保全運動と地域振興効果ー福岡県久留米市田主丸町を事例にー」水資源・環境研究 32 - 1 2019

6. 「長良川河口堰最適運用方法の模索」法政大学文学部紀要 78 2019

7. 「国土利用」（岡橋秀典・伊藤達也共著）（経済地理学会編『キーワードで読む経済地理学』原書房 2018）

8. 「環境問題への地理学のかかわり」（竹中克行編『人文地理学への招待』ミネルヴァ書房 2015

【Outline (in English)】

(Course outline) (Learning Objectives) Students aim to complete their master's thesis by reporting and discussing the progress of the master's thesis. At the same time, students will learn the various items necessary for writing a paper. Other students aim to enhance the content of the presentation by submitting questions and opinions to the presentation, and at the same time learn to write their own master's thesis. (Learning activities outside of classroom) Master's thesis requires overwhelming effort outside of class. Preparatory study and review time for this class is standard for 2 hours each.

(Grading Criteria /Policy) Presentation: 50%, Debate: 50%

Sufficient preparation is a major prerequisite. The question and the clarification of the issues are highly evaluated, and it is desirable to carefully separate simple questions, questions about opinions, and rebuttals.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

伊藤 達也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

受講生は修士論文の作成経過を報告し、討論をすることによって、修士論文の完成を目指します。同時に論文作成に必要な諸項目を学びます。他の受講生は発表に対して、質問、意見を提出することによって、発表の内容を高めることを目指し、同時に自らの修士論文作成の学びとします。

【到達目標】

適切な修士論文の完成を目指します。具体的には、修士論文を作成するための適切な知識の獲得、適切な説明論理の獲得、適切なオリジナリティを有した修士論文の作成が授業のテーマとなります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的に学生の発表を中心に行います。教員は論文の作成方法を説明します。フィードバックについては、できる限り授業中のコミュニケーションで対応しますが、足りない場合は次の授業において継続して議論します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	秋学期のゼミ概要の説明とゼミ方針の決定をします
第2回	修士2年生の発表と研究題名	修士2年生の研究テーマ発表と「疑問文で成り立つ題名」の説明をします
第3回	修士1年生の発表と研究目的	修士1年生の研究テーマ発表と研究目的における「オリジナリティの必要性」について説明します
第4回	修士1年生の発表と方法論(1)	修士1年生の研究テーマ発表と経済地理学の方法論について説明します
第5回	修士1年生の発表と方法論(2)	修士1年生の研究テーマ発表と方法論「地域事例の理論」について説明します
第6回	修士1年生の発表と先行研究(1)	修士1年生の研究テーマ発表と理論をたどる先行研究の重要性について説明します
第7回	修士2年生の二度目の発表と先行研究(2)	修士2年生の二度目の研究テーマ発表と先行研究の類型化の重要性について説明します
第8回	修士1年生の二度目の発表と説明順序の説明(1)	修士1年生の二度目の研究テーマ発表と説明順序「単純ストーリー」の重要性について説明します
第9回	修士1年生の二度目の発表と説明順序の説明(2)	修士1年生の二度目の研究テーマ発表と説明順序「クロスストーリー」の重要性について説明します
第10回	修士1年生の二度目の発表と構成表の説明(1)	修士1年生の二度目の研究テーマ発表と構成表による「全説明事項の見える化」の重要性について説明します

第11回	修士1年生の二度目の発表と構成表の説明(2)	修士1年生の二度目の研究テーマ発表と構成表による「ボリュームの見える化」の重要性について説明します
第12回	日本語の説明	論文を支える日本語の文法的重要性について説明します
第13回	結論の説明	結論の中の「提案と願望」について説明します
第14回	論文を支える問題意識の説明	研究を支える「熱い心と冷静な頭」の重要性について説明します

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

修士論文は授業以外での努力が圧倒的に求められます。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しません。

【参考書】

別途、授業内で提示します。

【成績評価の方法と基準】

発表：50%、討論：50%

十分な準備が大前提となります。問題、論点の明確化された発表の評価が高く、討論は、単純な質問、意見に対する疑問の提示、反論を丁寧に分けて行うことが望ましいです。

【学生の意見等からの気づき】

丁寧な説明に心がけます。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 経済地理学、地域経済論、水資源研究、資源環境論
 ＜研究テーマ＞ 木曾川水系の水資源問題、地域資源の持続可能な利用、地域経済
 ＜主要研究業績＞

1. 「熊本県五木村における村民意識調査の分析結果と地域再生」法政大学文学部紀要 82 2021
2. 「ダムと環境問題について考えるー川辺川ダム問題を事例にー」都市問題 112-8 2021
3. 「熊本県五木村における観光客の意識調査の分析結果と地域再生」法政大学文学部紀要 83 2021
4. 伊藤達也・小田宏信・加藤幸治編『経済地理学への招待』ミネルヴァ書房 2020
5. 「河童による水辺環境保全運動と地域振興効果ー福岡県久留米市田主丸町を事例にー」水資源・環境研究 32-1 2019
6. 「長良川河口堰最適運用方法の模索」法政大学文学部紀要 78 2019
7. 「国土利用」（岡橋秀典・伊藤達也共著）（経済地理学会編『キーワードで読む経済地理学』原書房 2018）
8. 「環境問題への地理学のかかわり」（竹中克行編『人文地理学への招待』ミネルヴァ書房 2015）

【Outline (in English)】

(Course outline) (Learning Objectives) Students aim to complete their master's thesis by reporting and discussing the progress of the master's thesis. At the same time, students will learn the various items necessary for writing a paper. Other students aim to enhance the content of the presentation by submitting questions and opinions to the presentation, and at the same time learn to write their own master's thesis. (Learning activities outside of classroom) Master's thesis requires overwhelming effort outside of class. Preparatory study and review time for this class is standard for 2 hours each.

(Grading Criteria /Policy) Presentation: 50%, Debate: 50%

Sufficient preparation is a major prerequisite. The question and the clarification of the issues are highly evaluated, and it is desirable to carefully separate simple questions, questions about opinions, and rebuttals.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅰ

小原 文明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業では、受講生が各自の修士論文の研究内容について報告し、それら報告に基づいて討論をすることで、各自の研究を進捗させていくことを授業の目的とします。また、受講生自身の研究を進めるだけでなく、他者の報告を聞き、討論を行うことを通じて、社会経済地理学的な考え方やモノの見方を修得することを目指します。

【到達目標】

本授業を通じて、受講生が適切な修士論文を完成すべく各自が研究を進捗させるとともに、社会経済地理学的な思考・観点を修得できるようになることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業は受講生の発表とそれに基づく討論を中心に展開していきます。また、適宜、各受講生の発表テーマに関連する分野についての課題を設定し、その課題について検討を行います。

また、本授業は演習（ゼミナール）形式ですので、課題等のフィードバックは適宜行います。

なお、今年度、本授業は対面形式で行いますが、場合によってはZoomによるリアルタイムオンライン形式やハイフレックス形式で行う授業回がある可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ゼミガイダンス	ゼミ概要の説明／方針の決定
第2回	研究テーマの発表	全受講生による発表
第3回	研究内容の報告(1)	担当者の発表と質疑応答
第4回	研究内容の報告(2)	担当者の発表と質疑応答
第5回	研究内容の報告(3)	担当者の発表と質疑応答
第6回	研究内容の報告(4)	担当者の発表と質疑応答
第7回	研究テーマに関する課題の検討(1)	関連分野についての説明と討論
第8回	研究テーマに関する課題の検討(2)	関連分野についての説明と討論
第9回	研究テーマに関する課題の検討(3)	関連分野についての説明と討論
第10回	研究テーマに関する課題の検討(4)	関連分野についての説明と討論
第11回	研究内容の報告(5)	担当者の発表と質疑応答
第12回	研究内容の報告(6)	担当者の発表と質疑応答
第13回	研究内容の報告(7)	担当者の発表と質疑応答
第14回	研究内容の報告(8)	担当者の発表と質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

しかし、自らの研究課題に対しての発表準備をしっかりと行うことが求められ、また、適宜、授業内容（発表内容）に関連する事項の課題について取り組むことが求められるので、授業外学習の時間は上記の限りではありません。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しません。

【参考書】

各担当者の発表や討論に関連する文献については、適宜、授業内で提示します。

【成績評価の方法と基準】

発表内容：50%，討論内容（発言等）：50％で評価します。発表については十分な準備が大前提となり、問題の所在・背景や論点を明確にした発表を高く評価します。また、討論については、疑問点・問題点を整理しつつ、論拠を提示した上で自身の考えを表明する発言を高く評価します。

【学生の意見等からの気づき】

討論が活発になるように授業を進めることを心掛けます。

【その他の重要事項】

秋学期開講の「社会経済地理学演習Ⅱ」／「国際日本学演習Ⅱ」（小原担当）も必ず併せて受講してください。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

人文地理学（都市地理学，経済地理学，社会地理学），都市開発論
＜研究テーマ＞

都市開発，都市形成，土地利用，土地所有

【Outline (in English)】

The aims of this course are to help students make progress each master theses and acquire the ability to consider various phenomena geographically. The students taking this course need to make a presentation and discuss each researches in this course in order to achieve these aims.

Before / after each class meeting, students will be expected to spend each 2 hours to understand the course content.

Final grade will be calculated according to the following process: making a presentation (50 %) and in-class contribution (50 %).

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

小原 文明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業では、受講生が各自の修士論文の研究内容について報告し、それら報告に基づいて討論をすることで、各自の研究を進捗させていくことを授業の目的とします。また、受講生自身の研究を進めるだけでなく、他者の報告を聞き、討論を行うことを通じて、社会経済地理学的な考え方やモノの見方を修得することを目指します。

【到達目標】

本授業を通じて、受講生が適切な修士論文を完成すべく各自が研究を進捗させるとともに、社会経済地理学的な思考・観点を修得できるようになることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業は受講生の発表とそれに基づく討論を中心に展開していきます。また、適宜、各受講生の発表テーマに関連する分野についての課題を設定し、その課題について検討を行います。

また、本授業は演習（ゼミナール）形式ですので、課題等のフィードバックは適宜行います。

なお、今年度、本授業は基本的には対面形式で行いますが、場合によっては、Zoomによるリアルタイムオンライン形式やハイフレックス形式で行う授業回がある可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	研究テーマの発表	全受講生による研究の進捗状況の報告
第2回	研究内容の報告(1)	担当者の発表と質疑応答
第3回	研究内容の報告(2)	担当者の発表と質疑応答
第4回	研究内容の報告(3)	担当者の発表と質疑応答
第5回	研究内容の報告(4)	担当者の発表と質疑応答
第6回	研究テーマに関する課題の検討(1)	関連分野についての説明と討論
第7回	研究テーマに関する課題の検討(2)	関連分野についての説明と討論
第8回	研究テーマに関する課題の検討(3)	関連分野についての説明と討論
第9回	研究テーマに関する課題の検討(4)	関連分野についての説明と討論
第10回	研究内容の報告(5)	担当者の発表と質疑応答
第11回	研究内容の報告(6)	担当者の発表と質疑応答
第12回	研究内容の報告(7)	担当者の発表と質疑応答
第13回	研究内容の報告(8)	担当者の発表と質疑応答
第14回	総合討論	まとめ／包括的な討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

しかし、自らの研究課題に対しての発表準備をしっかりと行うことが求められ、また、適宜、授業内容（発表内容）に関連する事項の課題について取り組むことが求められるので、授業外学習の時間は上記の限りではありません。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しません。

【参考書】

各担当者の発表や討論に関連する文献については、適宜、授業内で提示します。

【成績評価の方法と基準】

発表内容：50%，討論内容（発言等）：50％で評価します。発表については十分な準備が大前提となり、問題の所在・背景や論点を明確にした発表を高く評価します。また、討論については、疑問点・問題点を整理しつつ、論拠を提示した上で自身の考えを表明する発言を高く評価します。

【学生の意見等からの気づき】

討論が活発になるように授業を進めることを心掛けます。

【その他の重要事項】

春学期開講の「社会経済地理学演習Ⅰ」／「国際日本学演習Ⅰ」（小原担当）も必ず併せて受講してください。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

人文地理学（都市地理学，経済地理学，社会地理学），都市開発論
＜研究テーマ＞

都市開発，都市形成，土地利用，土地所有

【Outline (in English)】

The aims of this course are to help students make progress each master theses and acquire the ability to consider various phenomena geographically. The students taking this course need to make a presentation and discuss each researches in this course in order to achieve these aims.

Before / after each class meeting, students will be expected to spend each 2 hours to understand the course content.

Final grade will be calculated according to the following process: making a presentation (50 %) and in-class contribution (50 %).

OTR600B7

国際日本学演習Ⅰ

米家 志乃布

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

歴史地理学の論文の作成方法を学ぶ（1）

【到達目標】

歴史地理学の論文を作成するための先行研究の読み方やデータの収集方法・分析方法について把握することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

1. 歴史地理学の論文を読み、筆者の主張や学史における位置づけを読みとる訓練を行う。
 2. 歴史地理学的研究を行ううえでの史料収集の方法や史料読解の技術を身につけるため、実際の史料を読む練習を行い、該当分野のテキストを読んで学習する。
 3. 歴史地理学の論文内でのデータの利用方法や処理の仕方を学習する。
 4. 具体的な史料やデータを用いて、歴史地理学的な論理構成を考える訓練を行う。
- 大学の方針により、本年は対面授業を基本とします。発表レジュメやPPTなどの資料類はすべてGoogle クラウドにアップするようにします。紙での配布は行いません。提出されたレジュメにコメントをつけて返送し、疑問点などをやりとりします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	出席者の確認、授業の概要について説明する。発表の順番を決める。
2	歴史地理学の論文の収集方法	テキストを読みながら、歴史地理学的テーマとは何かを把握し、それらに関連する論文の収集方法について学ぶ。
3	歴史地理学の論文の読み方①	論文の著者の主張について十分に理解する。
4	歴史地理学の論文の読み方②	論文の中で図表の効果的な扱い方について、先行研究をもとに学ぶ。
5	歴史地理学の論文の読み方③	統計資料や行政の報告書類を用いた研究方法について、先行研究をもとに議論する。
6	史料の収集方法①	図書館における史料収集の方法を学ぶ。
7	史料の収集方法②	地方の文書館や博物館における史料収集の方法を学ぶ。
8	史料の読解練習①	古地図の読解方法について学ぶ。
9	史料の読解練習②	文書史料の読解方法について学ぶ。
10	データの処理方法①	史料をもとに、どのようなデータが論文作成に必要なかを学ぶ。
11	データの処理方法②	歴史地理学的な研究テーマに即した効果的なグラフや表を作成する。
12	データの処理と論文構成①	先行研究をもとに、収集・処理したデータと論文構成の関係について分析する。

- 13 データの処理と論文構成② 先行研究をもとに、データと論旨の関係について把握する。
- 14 データの処理と論文構成③ 自分の研究テーマに即したデータの処理方法と構成について議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。自分の発表前には、図書館における事前の文献調査は十分に行うようにしてください。また、テキストなどのわからない（読めない）専門用語などは事前に各自で調べてから授業に参加してください。

【テキスト（教科書）】

特にありません。適宜授業内で指示します。

【参考書】

授業内において適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】

発表 50 %、平常点 30 %、討論への参加 20 %
評価基準：平常点

【学生の意見等からの気づき】

オリジナリティの高い論文が作成できるように、一人ずつ丁寧に指導するようにします。

【その他の重要事項】

歴史地理学分野で修士論文（学術論文）を作成する受講生向きの演習です。大学院および学部的人文地理学・歴史地理学分野の関連科目（講義等）は事前に履修するか、合わせて履修するなど、基礎的な知識や方法は学んでおいてください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 歴史地理学 地図史研究
<研究テーマ> 日本北方の歴史地理学、日本・ロシアの地図史研究
江戸東京の名所研究
<主要研究業績>
『近世蝦夷地の地域情報- 日本北方地図史再考』法政大学出版局
「人びとにとっての近世日本のかたち」（田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか』笠間書院、2015 年）
「近世日本図の北辺・『蝦夷地』表象」『文学』2015 年
「近代の名所図会にみる江戸イメージ」『法政地理』51 号 2020 年予定など

【Outline (in English)】

(Course outline) This course is to learn how write a paper on historical geography
(Learning Objectives) The course aims to give students an understanding of how to read previous research and how to collect and analyse data in order to prepare a paper on historical geography
(Learning activities outside of classroom) Your study time will be 4 hours for a class
(Grading Criteria /Policy) Grading will be decided based on lab reports(50%), and the quality of the students experimental performance in the lab (50%)

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

米家 志乃布

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

歴史地理学の論文の作成方法を学ぶ（2）

【到達目標】

歴史地理学の論文を作成するための先行研究の読み方やデータの収集方法、分析方法について、自分の関心あるテーマを選んで、発表し、論文作成の手順について学ぶことを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

1. 春学期の歴史地理学演習Ⅰの授業内容を踏まえ、各自の関心にもとづいて、歴史地理学的研究テーマを選ぶ。
 2. 受講者が先行研究の紹介、史料収集、データ処理と分析を行い、それを発表し、授業内で議論する。
- 大学の方針に従って、本年は対面授業を基本とします。資料はすべて Google クラウドにアップするようにします。紙での配布はいたしません。提出されたレジュメにコメントをつけて返送し、疑問点などをやりとりします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	受講者を確認し、発表の順番を決める。
2	先行研究の紹介①	受講者による研究テーマにもとづいた先行研究の紹介およびそれについての議論を行う（発表グループ①）。
3	先行研究の紹介②	受講者による研究テーマにもとづいた先行研究の紹介およびそれについての議論を行う（発表グループ②）。
4	先行研究の紹介③	受講者による研究テーマにもとづいた先行研究の紹介およびそれについての議論を行う（発表グループ③）。
5	先行研究の紹介④	受講者による研究テーマにもとづいた先行研究の紹介およびそれについての議論を行う（発表グループ④）。
6	史料紹介①	受講者が、各自で収集した史料の面白さや研究上の重要性などを紹介する（発表グループ①）。
7	史料紹介②	受講者が、各自で収集した史料の面白さや研究上の重要性などを紹介する（発表グループ②）。
8	史料紹介③	受講者が、各自で収集した史料の面白さや研究上の重要性などを紹介する（発表グループ③）。
9	史料紹介④	受講者が、各自で収集した史料の面白さや研究上の重要性などを紹介する（発表グループ④）。
10	研究報告①	受講者各自が研究報告を行い、それにもとづいて議論する（発表グループ①）。

11	研究報告②	受講者各自が研究報告を行い、それにもとづいて議論する（発表グループ②）。
12	研究報告③	受講者各自が研究報告を行い、それにもとづいて議論する（発表グループ③）。
13	研究報告④	受講者各自が研究報告を行い、それにもとづいて議論する（発表グループ④）。
14	まとめ	受講者による研究報告を踏まえて、歴史地理学の研究の今後の展開について議論を行う（受講者全員）。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。各自の発表の前には、その内容を十分に準備してください。

【テキスト（教科書）】

特にありません。適宜授業内で指示します。

【参考書】

各自のテーマに即して、適宜、授業内で紹介します。

【成績評価の方法と基準】

発表 50 %、平常点 50 %

評価基準：平常点

【学生の意見等からの気づき】

先行研究の読み込みや論文の書き方など、一人ずつ丁寧に指導いたします。

【その他の重要事項】

歴史地理学分野で修士論文（学術論文）を作成する受講生向けの演習です。大学院および学部的人文地理学・歴史地理学分野の関連科目（講義等）は事前に履修するか、合わせて履修するなど、基礎的な知識や方法は学んでおいてください。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞歴史地理学 地図史研究

＜研究テーマ＞日本北方の歴史地理学、日本・ロシアの地図史研究
江戸東京の名所研究

＜主要研究業績＞

『近世蝦夷地の地域情報- 日本北方地図史再考』法政大学出版局

「人びとにとっての近世日本のかたち」（田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか』笠間書院、2015 年）

「近世日本図の北辺・『蝦夷地』表象」『文学』2015 年

「近代の名所図会にみる江戸イメージ」『法政地理』51 号 2020 年予定など

【Outline (in English)】

(Course outline) This course is to learn how write a paper on historical geography

(Learning Objectives) The course aims to give students an understanding of how to read previous research and how to collect and analyse data in order to prepare a paper on historical geography

(Learning activities outside of classroom) Your study time will be 4 hours for a class

(Grading Criteria /Policy) Grading will be decided based on lab reports(50%), and the quality of the students experimental performance in the lab (50%)

OTR600B7

国際日本学演習 I

島田 雅彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

批評な知性が人文科学には欠かせない。単に時代のニーズに対応するだけでなく、より広範囲の文化現象に有効な批評のスタイル、理論、形式を開発する必要がある。サブカルチャー全盛の時代にあっても、文学や映画の古典にはまだリサイクルの可能性が残っている。忘れられた名作の発掘に努め、その潜在的な価値を前面に押し出すための批評的コンテンツの開発は急務である。この課題を共有し、批評と二次産品の制作を行う。

【到達目標】

修士論文の副産物をたくさん生み出せるように進める。同時にゼミ生共通のテーマでの研究発表会も行う予定。今年度は日本語の表現力向上のためのワークショップを行う予定。具体的にはエッセイや創作の実践。成績評価は修士論文の出来次第だが、演習での中間発表などを通じて個別に指導、評価する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

上記に並行して修士論文の指導を行うが、院生各自のテーマに即し、最終的に論文としての体裁を完璧に整えてもらい、それをメイン・コンテンツと位置付ける。同時に研究テーマ関連のコンテンツ制作は論文執筆の豊かな副産物となることを望む。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	はじめに：春学期の計画および論文執筆計画	春学期のメニューを確認 ゼミ生の希望調査 各人の論文テーマの紹介
第 2 回	計画：論文執筆指導 1	論文執筆の方法論の確認と指導
第 3 回	計画：論文執筆の副産物の可能性	研究のサブテーマの設定、およびサブ・コンテンツ作りの計画
第 4 回	共同研究：テーマ設定分担	「この人を見よ」（仮）それぞれの研究テーマに関連したキーパーソンを選ぶ。
第 5 回	共同研究：発表 1	「この人を見よ」（仮）それぞれの研究テーマに関連したキーパーソンに焦点を当て、その功罪を検証する。
第 6 回	共同研究：発表 2	「この人を見よ」（仮）それぞれの研究テーマに関連したキーパーソンに関する論評と討議
第 7 回	共同研究：鑑賞	日本映画鑑賞
第 8 回	共同研究：発表	映画レビューの執筆
第 9 回	実践：各種コンテンツ作り	サブ・コンテンツ作りの計画
第 10 回	実践：コンテンツ作りの指導	論文の一章、あるいは補足になるような小論文、書評を書く。
第 11 回	実践：コンテンツの完成	論文の一章、あるいは補足になるような小論文、書評の発表
第 12 回	実践：発表	それぞれの発表に対する講評と議論
第 13 回	実践：中間発表	目次案の提出
第 14 回	論文指導：中間発表	個別指導を通じ、論文の進行状況のチェック

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

折々の課題、レポートをこなし、論文執筆の進捗状況を随時報告する。本授業の準備（予習）および復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

『深読み日本文学』 島田雅彦著 集英社インターナショナル新書 2017

ほか授業内で指示

【参考書】

授業内で指示

【成績評価の方法と基準】

小論文、サブコンテンツ、共同制作の貢献度、論文完成度など総合的に判断。評価基準は平常点 20 %、サブコンテンツ 20 %、論文進捗状況 30 %、論文完成度 30 %とする。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

創作 日本近代文学 日本戦後史 日欧交流史

<研究テーマ>

小説論 サブカルチャー研究

<主要研究業績>

小説作法ABC 新潮選書2008

徒然王子全2巻 朝日新聞出版2009

悪貨 講談社2010

傾国子女 文藝春秋2013

ニッチを探して 新潮社2013

往生際の悪い奴 日本経済新聞社2014

暗黒寓話集 文藝春秋2014

【Outline (in English)】

Critic intelligence is indispensable to humanities. In addition to responding to the needs of the times, we need to develop criticism style, theory, and format effective for a wider range of cultural phenomena. Even in the age of subculture, the possibility of recycling still remains in the classics of literature and movies. It is an urgent matter to develop critical content to strive to find forgotten masterpieces and push their potential values to the front. Share this issue and make critiques and produce secondary products. Comprehensive judgment of essays, sub-contents, contribution of collaborative production, degree of completion of dissertation, etc. The evaluation criteria are normal score 20%, sub-content 20%, dissertation progress 30%, and dissertation completion 30%.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

島田 雅彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

批評な知性が人文科学には欠かせない。単に時代のニーズに対応するだけでなく、より広範囲の文化現象に有効な批評のスタイル、理論、形式を開発する必要がある。サブカルチャー全盛の時代にあっても、文学や映画の古典にはまだリサイクルの可能性が残っている。忘れられた名作の発掘に努め、その潜在的な価値を前面に押し出すための批評的コンテンツの開発は急務である。この課題を共有し、批評と二次製品の制作を行う。

【到達目標】

修士論文の副産物をたくさん生み出せるように進める。同時にゼミ生共通のテーマでの研究発表会も行う。エッセイや創作の実践、演習での中間発表などを通じて、修士論文やレポートの調査、分析方法の問題点を把握し、その解決策を提示できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

上記に並行して修士論文の指導を行うが、院生各自のテーマに即し、最終的に論文としての体裁を完璧に整えるよう毎回個別指導する。最終授業で、13 回までの講義内容のまとめや復習だけでなく、授業内で行った試験や小レポート等、課題に対する講評や解説も行う

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	はじめに：秋学期の計画	秋学期のメニューを確認 夏休みの課題の提出
第 2 回	立案：コンテンツ制作計画	各人の新たな制作テーマの紹介
第 3 回	指導：論文執筆指導 2	論文執筆の方法論の確認と個別指導
第 4 回	立案：論文執筆の副産物の生産	新たな研究のサブテーマの設定、およびサブ・コンテンツ作りの計画
第 5 回	立案：論文執筆の副産物の生産	新たな研究のサブテーマの設定、およびサブ・コンテンツの発表
第 6 回	実践：各テーマに基づく小論文	小論文執筆および関連コンテンツの制作
第 7 回	小論文、コンテンツ作り	小論文執筆および関連コンテンツの制作
第 8 回	発表と討議	小論文および関連コンテンツの発表
第 9 回	論文指導 1	論文に関連した書物、先行研究に対する批評
第 10 回	論文指導 2	論理展開の検証
第 11 回	論文指導 3	論文要旨の確認
第 12 回	模擬発表	口頭試験準備
第 13 回	論文の不正チェック	引用参照チェック
第 14 回	論文最終確認	個別面談

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

折々の課題、レポートをこなし、論文執筆の進捗状況を随時報告する。本授業の準備（予習）および復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

『深読み日本文学』 島田雅彦著 集英社インターナショナル新書 2017

ほか授業内で指示

【参考書】

授業内で指示

【成績評価の方法と基準】

小論文、サブコンテンツ、共同制作の貢献度、論文完成度など総合的に判断。評価基準は平常点 20 %、サブコンテンツ 20 %、論文進行状況 30 %、論文完成度 30 %とする。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

創作 日本近代文学 日本戦後史 日欧交流史

<研究テーマ>

小説論 サブカルチャー研究

<主要研究業績>

小説作法ABC 新潮選書2008

徒然王子全2巻 朝日新聞出版2009

悪貨 講談社2010

傾国子女 文藝春秋2013

ニッチを探して 新潮社2013

往生際の悪い奴 日本経済新聞社2014

暗黒寓話集 文藝春秋2014

虚人の星 講談社2015

【Outline (in English)】

Critic intelligence is indispensable to humanities. In addition to simply responding to the needs of the times, we need to develop criticism style, theory, and format effective for a wider range of cultural phenomena. Even in the age of subculture, the possibility of recycling still remains in the classics of literature and movies. It is an urgent matter to develop critical content to strive to find forgotten masterpieces and push their potential values to the front. Share this issue and make critiques and produce secondary products. Comprehensive judgment of essays, sub-contents, contribution of collaborative production, degree of completion of dissertation, etc. The evaluation criteria are normal score 20%, sub-content 20%, dissertation progress 30%, and dissertation completion 30%.

OTR600B7

国際日本学演習 I

謝 荔

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

オンライン授業の実施にあたり、授業方法・内容・課題については、学習支援システムでご確認ください。

授業を通して目指すのは、(1) 研究テーマにアプローチするための研究分野の視点を理解し、文献の講読を通じて先行研究の研究手法と成果に対する理解を高め、これらを研究発表と論文の作成に生かしていくこと、(2) 先行研究の論点と現地調査のデータを結びつけて修士論文を書き上げることである。

【到達目標】

1 年次生は研究背景、問題提起、テーマ設定を明確にし、先行研究の論点を整理する。2 年次生は自らの調査データを文章化すると同時に、先行研究を吟味しながら執筆作業を進め、修士論文を完成させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

リアルタイム配信型のオンライン授業を主とし、オンデマンド授業（資料型）を限定的に活用する。

受講生による文献の講読および発表・討議を中心に行う。先行研究の視点、研究方法、データ、結論について議論を交わし、自らの調査データや文献資料の整理・分析結果を発表することを主な内容とする。具体的なスケジュールは受講生の研究の進捗状況に基づいて決める。最終授業で、課題に対する講評や解説も行う。

なお、授業計画は授業の展開によって若干の変更、また、受講者の状況などによって中国語による補足説明があり得る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	教員による授業形態、授業の進め方と評価方法の説明、受講生による研究の進捗状況の報告、発表スケジュールの確認
第 2 回	討議	文献の講読・討議
第 3 回	個人発表	研究発表の内容の討議
第 4 回	個人発表	研究発表の内容の討議
第 5 回	個人発表	研究発表の内容の討議
第 6 回	個人発表	研究発表の内容の討議
第 7 回	個人発表	研究発表の内容の討議
第 8 回	個人発表	研究発表の内容の討議
第 9 回	個人発表	研究発表の内容の討議
第 10 回	個人発表	研究発表の内容の討議
第 11 回	個人発表	研究発表の内容の討議
第 12 回	個人発表	研究発表の内容の討議
第 13 回	個人発表	研究発表の内容の討議
第 14 回	講評	ゼミ生の提出物・課題に対する講評を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 4 時間を標準とするが、確実に研究を進めていくにはより多くの時間が必要である。

事前に配布する文献を読み、自分の意見や質問を準備しておくこと。個別に指導した文献資料を必ず読んでまとめて提出すること。授業外においても、研究方法や自分の研究テーマに関連する基礎知識と基本概念の学習、文献調査および現地調査に基づく資料の収集と整理、まとめ（文献のポイントや、フィールドワークのデータを文章化すること、日本語訳を含む）が不可欠である。

【テキスト（教科書）】

文献のプリントを配布する。

【参考書】

授業中に提示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（発表内容、ディスカッション、提出物）は 50 %、レポートは 50 % である。

【学生の意見等からの気づき】

研究指導を受けた内容のポイントを整理し、できるだけ早く実行することがさらなる研究の進展に功を奏する。

引用を明記しないものと期限を過ぎて提出したものは評価しない。

【学生が準備すべき機器他】

個人発表をする場合、ゼミ開始までに、資料写真などの調査データや参考文献の引用部分などをすぐ確認することができるように準備しておく。

【その他の重要事項】

チューター、日本語相談室による日本語指導をしっかり受け、完成度の高い日本語の文章を提出すること。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

文化人類学。現代中国と日本社会の生活文化の比較

＜研究テーマ＞

グローカリゼーションにおける文化の伝承と変化、暦と社会生活
＜主要研究業績＞

① 2021 年、「近代の日本社会と中国社会における旧暦の伝承」、林淳編『新陰陽道叢書第五巻特論』、名著出版

② 2015 年、「グローカル化における祝祭日の再構築——中国端午節の文化変容を事例に」、韓敏編『中国社会における文化変容の諸相——グローカル化の視点から』（国立民族学博物館論集③）風響社

③ 2012 年、「端午節儀式活動伝承主体的社会变化——以中国嘉兴市端午民俗文化節与日本相模原市児童節為例」『文化遺産』2012 年 03 期、中山大学中国非物質文化遺産研究中心

【Outline (in English)】

The students are instructed about the planning of study schedule, the way of collecting data, the way of doing the research and summarizing the results of research. Upon successful completion of the course, they will be able to understand the phenomena of the subject of research, as well as to analyze the current topics, finally complete the master's thesis. Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class. Grading will be decided based on lab reports (50%), and the quality of the students' performance in the lab (50%).

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

謝 荔

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

オンライン授業の実施にあたり、授業方法・内容・課題については、学習支援システムでご確認ください。

授業を通して目指すのは、（１）研究テーマにアプローチするための研究分野の視点を理解し、文献の講読を通じて先行研究の研究手法と成果に対する理解を高め、これらを研究発表と論文の作成に生かしていくこと、（２）先行研究の論点と現地調査のデータを結びつけて修士論文を書き上げることである。

【到達目標】

１年次生は研究背景、問題提起、テーマ設定を明確にし、先行研究の論点を整理する。２年次生は自らの調査データを文章化すると同時に、先行研究を吟味しながら執筆作業を進め、修士論文を完成させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

リアルタイム配信型のオンライン授業を主とし、オンデマンド授業（資料型）を限定的に活用する。

受講生による文献の講読および発表・討議を中心に行う。先行研究の視点、研究方法、データ、結論について議論を交わし、自らの調査データや文献資料の整理・分析結果を発表することを主な内容とする。具体的なスケジュールは受講生の研究の進捗状況に基づいて決める。最終授業で、課題に対する講評や解説も行う。

なお、授業計画は授業の展開によって若干の変更、また、受講者の状況などによって中国語による補足説明があり得る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	教員による授業形態、授業の進め方と評価方法の説明、受講生による研究の進捗状況の報告、発表スケジュールの確認
第 2 回	討議	文献の講読・討議
第 3 回	個人発表	研究発表の内容の討議
第 4 回	個人発表	研究発表の内容の討議
第 5 回	個人発表	研究発表の内容の討議
第 6 回	個人発表	研究発表の内容の討議
第 7 回	個人発表	研究発表の内容の討議
第 8 回	個人発表	研究発表の内容の討議
第 9 回	個人発表	研究発表の内容の討議
第 10 回	個人発表	研究発表の内容の討議
第 11 回	個人発表	研究発表の内容の討議
第 12 回	個人発表	研究発表の内容の討議
第 13 回	個人発表	研究発表の内容の討議
第 14 回	まとめと講評	ゼミ生の提出物・課題に対する講評を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 4 時間を標準とするが、確実に研究を進めていくにはより多くの時間が必要である。

事前に配布する文献を読み、自分の意見や質問を準備しておくこと。個別に指導した文献資料を必ず読んでまとめて提出すること。授業外においても、研究方法や自分の研究テーマに関連する基礎知識と基本概念の学習、文献調査および現地調査に基づく資料の収集と整理、まとめ（文献のポイントや、フィールドワークのデータを文章化することと、日本語訳を含む）が不可欠である。

【テキスト（教科書）】

文献のプリントを配布する。

【参考書】

授業中に提示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（発表内容、ディスカッション、提出物）は 50 %、レポートは 50 % である。

【学生の意見等からの気づき】

研究指導を受けた内容のポイントを整理し、できるだけ早く実行することがさらなる研究の進展に功を奏する。

引用を明記しないものと期限を過ぎて提出したものは評価しない。

【学生が準備すべき機器他】

個人発表をする場合、ゼミ開始までに、資料写真などの調査データや参考文献の引用部分などをすぐ確認することができるように準備しておく。

【その他の重要事項】

チューター、日本語相談室による日本語指導をしっかり受け、完成度の高い日本語の文章を提出すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域><研究テーマ><主要研究業績>
文化人類学。現代中国と日本社会の生活文化の比較

【Outline (in English)】

The students are instructed about the planning of study schedule, the way of collecting data, the way of doing the research and summarizing the results of research. Upon successful completion of the course, they will be able to understand the phenomena of the subject of research, as well as to analyze the current topics, finally complete the master's thesis. Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class. Grading will be decided based on lab reports (50%), and the quality of the students' performance in the lab (50%).

OTR600B7

国際日本学演習 I

高田 圭

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業では、グローバルな視点から、日本社会の「成り立ち」や、現在の「変化」ととらえる視座をやしない、それらを研究をしていくためのアプローチや方法論についてセミナー形式で学ぶ。グローバルな視点とは、他国・他地域との「比較」、あるいは他国との「国境を越えたつながり」から日本社会を調査、分析するものである。こうした視点を念頭に置きながら、本授業では、特に以下の課題をカバーする：①テーマと問いの設定、②先行研究調査、③研究計画、④理論とデータの関係。また、日本の政治社会の諸問題を概観する文献を講読し、日本についての理解を深めるとともに、受講者の学位論文テーマを探り、発展させていく。

【到達目標】

受講者は、以下の知識の習得を通してオリジナルな研究を計画し、学位論文を執筆できるようにする。
- 日本の戦後・現代の社会と思想を調査、研究するためのアプローチと方法を知得する。
- 「比較」と「越境」の視座と方法を学ぶ。
- 日本社会の諸問題についての理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を知得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業は、セミナー形式で実施する。講義、文献講読、研究報告をベースに討論をおこなう。参加者自身の経験、文化的な背景を織り交ぜながら日本の社会や思想について論じ、受講者たちお互いに学び合う場を形成する。従って、報告発表へのフィードバックについても、主にディスカッションの場において実施する。その他、個別にフィードバックが必要な場合には、オフィス・アワーを用いる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロタクシオン	授業の進め方、研究について
第 2 回	関心テーマの発表：これまで	研究の動機について
第 3 回	関心テーマの発表：これから	どのような研究をしたいのか
第 4 回	社会調査とは何か？	Research Question とは何か？ ：問いの設定
第 5 回	社会調査とは何か？	先行研究の整理の方法 ：先行研究分析
第 6 回	日本社会の文献講読：思想①	受講者のテーマにあった日本思想 関連の文献を読み、議論する
第 7 回	日本社会の文献講読：政治①	受講者のテーマにあった日本政治 関連の文献を読み、議論する
第 8 回	日本社会の文献講読：社会①	受講者のテーマにあった日本社会 関連の文献を読み、議論する
第 9 回	先行研究調査の発表：範囲	「どの程度探したのか」についての報告・議論
第 10 回	先行研究調査の発表：探し方	「どのように探したのか」についての報告・議論
第 11 回	先行研究調査の発表：整理	「どのように整理するか」についての報告・議論
第 12 回	日本社会の文献講読：思想②	受講者のテーマにあった日本思想 関連の文献を読み、議論する

- 第13回 日本社会の文献講読： 受講者のテーマにあった日本政治
政治② 関連の文献を読み、議論する
- 第14回 日本社会の文献講読： 受講者のテーマにあった日本社会
社会② 関連の文献を読み、議論する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 受講者は文献を読み、討論に備えて準備する。
- 報告者は、文献を丹念に読み込み、重要なポイントをまとめ、関連する情報を追加調査し、問題提起を含めた報告を準備する。
- 受講者は、自身の関心テーマを探し、掘り下げ、それについてまとめ、報告する準備をおこなう。
- 本授業の準備（予習）および復習時間は、各2時間を標準とするが、文献および研究報告をする週には、さらに2時間程度の準備の時間が、必要な場合がある。

【テキスト（教科書）】

上野千鶴子、2018年『情報生産者になる』筑摩書房
ほか

【参考書】

- Robert, Alford, 1998. The Craft of Inquiry: Theories, Methods, Evidence, Oxford University Press.
- Ragin, Charles. 2010. Constructing Social Research: The Unity and Diversity of Method. Sage.

【成績評価の方法と基準】

- 授業参加・発言: 20%
- 文献・個人研究プレゼンテーション: 40%
- 最終レポート: 40%

【学生の意見等からの気づき】

初年度授業につき「特になし」。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

授業計画についての詳細は初回授業にて説明する。

【担当教員の専門分野等】

< 専門領域 >

政治社会学、歴史社会学、文化社会学、国際日本学

< 研究テーマ >

- 日本の市民社会と社会運動

- グローバル化と日本の社会変容

< 近年の主要著書 >

- 「コスモポリタンなアカデミック・パブリクスと国際日本学 ―誰に向けて、どのように日本を語るか―」『国際日本学』第19号、2022年、27-60頁。

- 「グローバル地域研究としての国際日本学 ―日本を超えて、日本をとらえる、思考と手法―」『国際日本学』第18号、2021年、3-36頁。

- "The Japanese Global Sixties in Isolation: Towards a Global Historical Sociology of the Sixties " in 1968 - A Global Approach, Europejskie Centrum Solidarności, 2020, pp. 137 - 155.

- "Connecting with the First or the Third World? Two Paths Toward the Cross-National Movement Mobilization in the Japanese Global Sixties" Moving the Social: Journal of Social History and the History of Social Movements, 63, 2020, pp. 65-90, Klartext publishers.

- "Escaping through the Networks of Trust: The U.S. Deserter Support Movement in the Japanese Global Sixties" The Sixties: A Journal of History, Politics and Culture, 10(2), 2017, pp. 165-181, Taylor & Francis.

【None】

None

【None】

None

【None】

None

【None】

None

【Outline (in English)】

In this course, we will learn various approaches and methods for understanding the development and changes of Japanese society from a global perspective. A global perspective here means researching and analyzing Japanese society through comparison with other countries and regions and exploring transnational connections and linkage between Japan and foreign countries. The course will particularly discuss the following topics for social research - finding a research topic, literature reviews, planning research, and the relationship between theory and data. Also, we will deepen our knowledge about Japan and, at the same time, explore students' possible dissertation topics through reading books and articles related to issues and problems in Japanese society today.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

高田 圭

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業では、グローバルな視点から、日本社会の「成り立ち」や、現在の「変化」をとらえる視座をやしなひ、それらを研究をしていくためのアプローチや方法論について学ぶ。グローバルな視点とは、他国・他地域との「比較」、あるいは他国との「国境を越えたつながり」から日本社会を調査、分析するものである。こうした視点を念頭に置きながら、本授業では、特に以下の課題をカバーする：1 データ収集、2 質的データ分析、3 アウトプット。また、グローバル化と日本社会についての文献を講読し、日本への理解を深めるとともに、各人の学位論文テーマを掘り下げていく。

【到達目標】

受講者は、以下の知識の習得を通して、オリジナルな研究を計画し、学位論文を執筆できるようにする。

- 日本の戦後・現代の社会と思想を調査、研究するためのアプローチと方法を習得する。

- 「比較」と「越境」の視座と方法を学ぶ。

- 日本社会の諸問題についての理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業は、セミナー形式で実施する。講義、文献講読、研究報告をベースに討論をおこなう。参加者自身の経験、文化的な背景を織り交ぜながら日本の社会や思想について論じ、受講者たちも互いに学び合う場を形成する。従って、報告発表へのフィードバックについても、主にディスカッションの場において実施する。その他、個別にフィードバックが必要な場合には、オフィス・アワーを用いる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロタクシオン	授業の進め方
第2回	研究の経過報告：調査対象	「何を調べたのか」についての報告
第3回	研究の経過報告：調査方法	「どのように調べたのか」についての報告
第4回	社会調査：データ収集	データの集め方について学ぶ
第5回	社会調査：データ分析	データの分析の方法について学ぶ
第6回	社会調査：アウトプット	どのように書くのかについて学ぶ
第7回	日本社会の文献講読：思想①	受講者のテーマにあった日本思想関連の文献を読む
第8回	日本社会の文献講読：政治①	受講者のテーマにあった日本政治関連の文献を読む
第9回	日本社会の文献講読：社会①	受講者のテーマにあった日本社会関連の文献を読む
第10回	データ分析実践：歴史データ	受講者が収集した歴史データを分析する
第11回	データ分析実践：フィールド・データ	受講者が収集したフィールド・データを分析する
第12回	日本社会の文献講読：思想②	受講者のテーマにあった日本思想関連の文献を読む
第13回	日本社会の文献講読：政治②	受講者のテーマにあった日本政治関連の文献を読む

第14回 日本社会の文献講読：受講者のテーマにあった日本社会関連の文献を読む

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 受講者は文献を読み、討論に備えて準備する。
- 報告者は、文献を丹念に読み込み、重要なポイントをまとめ、関連する情報を追加調査し、問題提起を含めた報告を準備する。
- 受講者は、自身の関心テーマを探し、掘り下げて、それについてまとめ、報告する準備をおこなう。
- 本授業の準備（予習）および復習時間は、各2時間を標準とするが、文献および研究報告をする週には、さらに2時間程度の準備の時間が必要の場合がある。

【テキスト（教科書）】

- 上野千鶴子、2018年『情報生産者になる』筑摩書房
ほか

【参考書】

- Robert, Alford, 1998. The Craft of Inquiry: Theories, Methods, Evidence, Oxford University Press.
- Ragin, Charles. 2010. Constructing Social Research: The Unity and Diversity of Method. Sage.

【成績評価の方法と基準】

- 授業参加・発言：20%
- 文献・個人研究プレゼンテーション：40%
- 最終レポート：40%

【学生の意見等からの気づき】

初年度授業につき「特になし」。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

授業計画についての詳細は初回授業にて説明する。

【担当教員の専門分野等】

< 専門領域 >

政治社会学、歴史社会学、文化社会学、国際日本学

< 研究テーマ >

- 日本の市民社会と社会運動

- グローバル化と日本の社会変容

< 近年の主要著書 >

「コスモポリタンなアカデミック・パブリクスと国際日本学 ―誰に向けて、どのように日本を語るか―」『国際日本学』第19号、2022年、27-60頁。

「グローバル地域研究としての国際日本学 ―日本を超えて、日本をとらえる、思考と手法―」『国際日本学』第18号、2021年、3-36頁。

- "The Japanese Global Sixties in Isolation: Towards a Global Historical Sociology of the Sixties" in 1968 - A Global Approach, Europejskie Centrum Solidarności, 2020, pp. 137 - 155.

- "Connecting with the First or the Third World? Two Paths Toward the Cross-National Movement Mobilization in the Japanese Global Sixties" Moving the Social: Journal of Social History and the History of Social Movements, 63, 2020, pp. 65-90, Klartext publishers.

- "Escaping through the Networks of Trust: The U.S. Deserter Support Movement in the Japanese Global Sixties" The Sixties: A Journal of History, Politics and Culture, 10(2), 2017, pp. 165-181, Taylor & Francis.

【None】

None

【None】

None

【None】

None

【None】

None

【Outline (in English)】

In this course, we will learn various approaches and methods for understanding the development and changes of Japanese society from a global perspective. A global perspective here means researching and analyzing Japanese society through comparison with other countries and regions and exploring transnational connections and linkage between Japan and foreign countries. The course will particularly discuss the following topics for social research - gathering data, analyzing qualitative data, and outputs. Also, we will deepen our knowledge about Japan and, at the same time, further explore individuals' research projects through reading books and articles on various historical and global changes in Japanese society and politics.

OTR600B7

国際日本学合同演習 I

椎名 美智

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

それぞれのゼミに属する学生が一堂に会して、ともに日本学について知見を広め、話題を共有します。

【到達目標】

国際日本学インスティテュートに在籍する修士課程学生（および博士後期課程学生で希望する者）が、国際日本学に関する共通の知識を得、互いの研究を知り、それを土台として、多角的な視点から日本について語ることが出来るようになる。

The goal of this class is to learn about Japan through lectures by professionals inside and outside the university and also by presentation by the students.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

国際日本学インスティテュート修士課程に在籍する学生は2年間にわたって国際日本学合同演習を受講し、合計4単位を取得しなければなりません。この授業は3種の企画から構成されます。すなわち、① 国際日本学入門：国際日本学研究に必要な「姿勢」とは何か、国際日本学研究所の「論文」とはどういうものか、共同研修を行います。4月に実施します。

② 講師による日本文化に関する講演（あるいは実演）：原則としてセメスターに1回ずつ実施します（5月、10月予定）。講演の細目については開講時に発表します。

③ 修士論文・博士論文中間発表会：国際日本学インスティテュートに在籍するすべての修士課程および博士後期課程の学生が、自己の研究活動の状況について報告し、他の学生からの質問と教授たちからレビューを受け、それを修士・博士論文に生かします。実施時期は博士後期3年が6月、修士2年が7月（2回）、修士1年が11月（2回）、博士後期1・2年が12月（2回）。

国際日本学合同演習は、土曜日5時限および6時限を利用し、2時限単位で実施されます。

国際日本学合同演習は修士の学位を取得するために必要不可欠な授業である。2年間にわたって、必ず履修登録し、単位を取得する必要があります。この授業の実施にかかわる細目は国際日本学インスティテュートの掲示板（大学院棟3階）、および国際日本学インスティテュート専攻室入口に公示するので注意すること。

▼必要に応じて、ZOOMを用いたオンライン授業を行います。その場合は、学習支援システムの「お知らせ」でURLや事前課題などを連絡します。チャット機能を利用した双方向授業になるため、通信環境を整えておくこと。

▼第1回目の授業についてはHoppiiでお知らせしますので、必ず確認しておくこと。

▼リアクションペーパーは毎時間、提出していただきます。授業の初めに、前回の授業に提出されたリアクションペーパーからいくつか取り上げて、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	国際日本学入門	共同研修：3人の教員による講義 4月16日（土）5、6時限に実施
第2回	講演① 映像ディレクター尾崎竜二氏による講演	講演者：尾崎竜二 （「世界ふれあい街歩き」「街角ピアノ」等のディレクター） 5月28日5、6時限に実施予定

- 第3回 国際日本学インスティテュート 博士後期3年
テュート論文中間発表 6月11日(土) 5、6時限に実施会①
- 第4回 国際日本学インスティテュート 修士2年
テュート論文中間発表 7月9日(土) 5、6時限に実施会②
- 第5回 国際日本学インスティテュート 修士2年
テュート論文中間発表 7月16日(土) 5、6時限に実施会③

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
講演者によって参考文献が提示された場合はそれを読んでください。

中間発表会における発表資料を準備してください。

You have to prepare for your presentation.

【テキスト（教科書）】

・国際日本学入門および講演については、講師が準備したものを授業時に配付します。
・中間発表会に際しては、報告者は、学生委員会の指示に従い、修士の学生はA4判1枚、博士の学生はA4判2枚の資料を作成し、授業時に配付できるよう準備してください。授業形態によっては、前もって、HOPPIIの課題にアップする形式の場合もあります。

【参考書】

国際日本学入門および講演については、講師が事前に参考文献を指示することがあります。

【成績評価の方法と基準】

▼出席とリアクションペーパーの内容(100%)
リアクションペーパーは毎回20点満点で採点し、全5回分の合計で成績をつけます。

The grading includes attendance and a short review of lectures and presentations.

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし。

【Outline (in English)】

Every student is supposed to give a presentation on their study and discuss the problems on Japanese Studies. The objective of this class is to share a variety of problems on Japanese Studies.

OTR600B7

国際日本学合同演習Ⅱ

椎名 美智

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

それぞれのゼミに属する学生が一堂に会して、ともに日本学について知見を広め、話題を共有します。

【到達目標】

国際日本学インスティテュートに在籍する修士課程学生（および博士後期課程学生で希望する者）が、国際日本学に関する共通の知識を得、互いの研究を知り、それを土台として、多角的な視点から日本について語ることが出来るようになる。

The goal of this class is to learn about Japan through lectures by professionals inside and outside the university and also by presentation by the students.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

国際日本学インスティテュート修士課程に在籍する学生は2年間にわたって国際日本学合同演習を受講し、合計4単位を取得しなければならない。この授業は、以下に示す3種の企画から構成されます。

① 国際日本学入門：国際日本学研究に必要な「姿勢」とは何か、国際日本学研究所の「論文」とはどういうものか、共同研修を行う。4月14日に実施します。

② 講師による日本文化に関する講演（あるいは実演）：原則として2回実施します（5月、10月予定）。講演の細目については開講時に発表します。

③ 修士論文・博士論文中間発表会：国際日本学インスティテュートに在籍するすべての修士課程および博士後期課程の学生が、自己の研究活動の状況について報告し、他の学生からの質問と教授たちからレビューを受け、それを修士・博士論文に生かします。実施時期は博士後期3年が6月、修士2年が7月（2回）、修士1年が11月（2回）、博士後期1・2年が12月（2回）。

国際日本学合同演習は、土曜日5時限および6時限を利用し、2時限単位で実施されます。

国際日本学合同演習は修士の学位を取得するために必要不可欠な授業です。2年間にわたって、必ず履修登録し、単位を取得する必要があります。この授業の実施にかかわる細目は国際日本学インスティテュートの掲示板（大学院棟3階）、および国際日本学インスティテュート専攻室入り口に公示するので注意すること。

▼必要に応じて、ZOOMを用いたオンライン授業を行います。その場合は、学習支援システムの「お知らせ」でURLや事前課題などを連絡します。チャット機能を利用した双方向授業になるため、通信環境を整えておくこと。

▼第1回目の授業は、所定の時間通り行います。日程はHOPPIIでお知らせしますので、必ず確認しておくこと。

▼リアクションペーパーは毎時間、提出していただきます。授業の初めに、前回の授業に提出されたリアクションペーパーからいくつか取り上げて、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	講演② ライター（武田砂鉄氏）による講演	10月の土曜日5、6限目に実施（決まり次第HOPPIIでお知らせします。） 武田砂鉄さんの講演 タイトル（仮）：ライターというお仕事

- 第 2 回 国際日本学インスティ 修士 1 年
テュート論文中間発表 11 月 19 日 (土) 5、6 時限に実施
会④
- 第 3 回 国際日本学インスティ 修士 1 年
テュート論文中間発表 11 月 26 日 (土) 5、6 時限に実施
会⑤
- 第 4 回 国際日本学インスティ 博士後期 1・2 年
テュート論文中間発表 12 月 10 日 (土) 5、6 時限に実施
会⑥
- 第 5 回 国際日本学インスティ 博士後期 1・2 年
テュート論文中間発表 12 月 17 日 (土) 5、6 時限に実施
会⑦

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
講演者によって参考文献が提示された場合はそれを読んでくる。
中間発表会における発表資料を準備する。

You have to prepare for your presentation.

【テキスト（教科書）】

・国際日本学入門および講演については、講師が準備したものを授業時に配付する。
・中間発表会に際しては、報告者は、学生委員会の指示に従い、修士の学生は A4 判 1 枚、博士の学生は A4 判 2 枚の資料を作成し、授業時に配付できるよう準備する。HOPPII の課題で前もって提出する。

【参考書】

国際日本学入門および講演については、講師が事前に参考文献を指示することがある。

【成績評価の方法と基準】

▼出席とリアクションペーパーの内容（100%）
リアクションペーパーは毎回 20 点満点で採点し、全 5 回分の合計を成績の 80 % に換算する。白紙で提出した場合は 0 点となる。
The grading includes attendance, presentation and a short review of each lecture.

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし。

【Outline (in English)】

Every student is supposed to give a presentation on their study and discuss the problems on Japanese Studies. The objective of this class is to share a variety of problems on Japanese Studies.

ASR500B7

世界の日本論と日本学 I

リネベ・アンドレ

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本論（＝日本文化論）について西洋と日本の著名な英文の文献をもとに、「世界の日本論」の言説史とそれにおけるキーとなるコンセプトを検討する。そのうえで、現代の日本学の可能性を考える。春学期には、新渡戸稲造の著名な『Bushido. The Soul of Japan』（1899 年）を読解しながら、明治後期から昭和前期にかけて西洋の読者に向けて書かれた文献や、英訳されて西洋で読まれた文献を検討する。注意：「世界の日本論と日本学 I」と「世界の日本論と日本学 II」はそれぞれ単独での受講が可能です。

【到達目標】

- ・世界の日本論の言説史を説明できる
- ・世界の日本論のキーとなるコンセプトを説明できる
- ・世界の日本論に関わる近年の研究傾向と方法論を説明できる
- ・日本学の可能性と、現代的意義などを説明することができる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・リアクションペーパー等における良いコメントは授業内で紹介し、さらなる討論に活かします
- ・授業内の講読（クロース・リーディングの方法による）
- ・授業内の発表（ショートプレゼンテーション、資料の紹介）
- ・討論（グループワーク、ペアワーク）
- ・課題へのフィードバック

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	授業の概要、授業の進め方、教材についての説明がある
第 2 回	新渡戸稲造『武士道』第 1 章を読む	・文献読解 ・リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（新渡戸稲造の伝記と『武士道』の成立過程）
第 3 回	新渡戸稲造『武士道』第 2 章を読む	・文献読解 ・リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（小島毅『近代日本の陽明学』の紹介）
第 4 回	新渡戸稲造『武士道』第 3～4 章を読む	・文献読解 ・リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（佐伯真一『戦場の精神史：武士道という幻影』の紹介）
第 5 回	新渡戸稲造『武士道』第 5～6 章を読む	・文献読解 ・リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（E. ホブズボウム；T. レンジャー編『創られた伝統』の紹介）
第 6 回	新渡戸稲造『武士道』第 7～8 章を読む	・文献読解 ・リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（B.H. Chamberlain, The Invention of a New Religion の紹介）

第7回	新渡戸稲造『武士道』第9章を読む	・文献読解 リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（丸山眞男『忠誠と反逆』の紹介）
第8回	新渡戸稲造『武士道』第10章を読む	・文献読解 リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（雑誌『日本人』／『日本及日本人』の紹介）
第9回	新渡戸稲造『武士道』第11章を読む	・文献読解 リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（井上哲次郎『武士道』の紹介）
第10回	新渡戸稲造『武士道』第12～13章を読む	・文献読解 ・リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（Uchimura Kanzo, <i>Representative Men of Japan</i> の紹介）
第11回	新渡戸稲造『武士道』第14～15章を読む	・文献読解 ・リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（Okakura Tenshin, <i>The Book of Tea</i> の紹介）
第12回	新渡戸稲造『武士道』第16章を読む	・文献読解 ・リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（菅野覚明『武士道の逆襲』の紹介）
第13回	新渡戸稲造『武士道』第17章を読む	・文献読解 ・リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（宇野田『武士道論の成立』の紹介）
第14回	総括	前期の授業で修得した内容を復習し、世界の日本論についての理解を深めながら、現代の日本学の可能性を考える

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を準備とします。
- ・本授業で指示した文献を読み、歴史・思想的背景について調べる
- ・プレゼンテーションを準備する（レジュメ、資料のコメント）
- ・授業の出席前に前回の授業ノートを読み返し、復習する

【テキスト（教科書）】

教科書は指定なし。プリントを作成し、授業中に配布する予定。また、オンラインで掲載される資料へのリンクを指示する予定。

【参考書】

宇野田（1997）「武士道論の成立：西洋と東洋のあいだ」『江戸の思想』第7号、29～50頁
 新渡戸稲造；矢内原忠雄訳（2018）『武士道』岩波文庫
 船曳健夫（2016）『「日本人論」再考』講談社学術文庫
 南博（2006）『日本人論：明治から今日まで』岩波現代文庫
 Benesch, Oleg. *Inventing the Way of the Samurai. Nationalism, Internationalism, and Bushidō in Modern Japan*, Oxford University Press 2014

【成績評価の方法と基準】

平常点（20％） 授業への参加、発言などを総合的に評価する
 課題、リアクション・ペーパーへの回答（20％）
 発表（30％）
 期末レポート（30％）

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

日本思想史（近世）

【Outline (in English)】

This course offers students an introduction into discourses about Japanese culture. It is designed to give an overview of key texts and concepts between the late Meiji-period until the end of the Pacific war in international perspective. Students can expect to come out of the course better prepared to engage in an informed discussion about international discourses about Japanese culture and the challenges for future research in the field of Japanese studies.

ASR500B7

世界の日本論と日本学Ⅱ

リネベ・アンドレ

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本論（＝日本文化論）について西洋と日本の著名な英文の文献をもとに、「世界の日本論」の言説史とそれにおけるキーとなるコンセプトを検討する。そのうえで、現代の日本学の可能性を考える。秋学期にはアメリカの文化人類学者であるルース・ベネディクトの『The Chrysanthemum and the Sword. Patterns of Japanese Culture』（1946年）を読解しながら、昭和期から現代に至るまで西洋の読者に向けて書かれた文献や英訳されて西洋で読まれた文献を検討する。注意:「世界の日本論と日本学Ⅰ」と「世界の日本論と日本学Ⅱ」はそれぞれ単独での受講が可能です。

【到達目標】

- ・世界の日本論の言説史を説明できる
- ・世界の日本論のキーとなるコンセプトを説明できる
- ・世界の日本論に関わる近年の研究傾向と方法論を説明できる
- ・日本学の可能性と、現代的意義などを説明することができる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・リアクションペーパー等における良いコメントは授業内で紹介し、さらなる討論に活かします
- ・授業内の講読（クロース・リーディングの方法による）
- ・授業内の発表（ショートプレゼンテーション、資料の紹介）
- ・討論（グループワーク、ペアワーク）
- ・課題へのフィードバック

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の概要、授業の進め方、教材についての説明がある
第2回	ルース・ベネディクト『菊と刀』第1章を読む	・文献読解 ・リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（R. ベネディクト『文化のパターン』の紹介）
第3回	ルース・ベネディクト『菊と刀』第2章を読む	・文献読解 ・リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（中根千枝『タテ社会の力学』の紹介）
第4回	ルース・ベネディクト『菊と刀』第3～4章を読む	・文献読解 ・リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（苅部直「『象徴』はどこへゆくのか」の紹介）
第5回	ルース・ベネディクト『菊と刀』第5章を読む	・文献読解 ・リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（ハルミ・ベフ『イデオロギーとして日本文化論』）
第6回	ルース・ベネディクト『菊と刀』第6章を読む	・文献読解 ・リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（マーガレット・ミード『火薬をしめせるな：文化人類学者のアメリカ論』の紹介）

第7回	ルース・ベネディクト『菊と刀』第7章を読む	・文献読解 ・リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（丸山眞男『日本の思想』の紹介）
第8回	ルース・ベネディクト『菊と刀』第8章を読む	・文献読解 ・リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（和辻哲郎「科学的価値に対する疑問」の紹介）
第9回	ルース・ベネディクト『菊と刀』第9章を読む	・文献読解 ・リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（源了圓『義理と人情：日本的心情の一考察』の紹介）
第10回	ルース・ベネディクト『菊と刀』第10章を読む	・文献読解 ・リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（作田啓一『恥の文化再考』の紹介）
第11回	ルース・ベネディクト『菊と刀』第11章を読む	・文献読解 ・リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（C. ギアツ「われわれ対われわれでない人びと：ベネディクトの旅」の紹介）
第12回	ルース・ベネディクト『菊と刀』第12章を読む	・文献読解 ・リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（土井健郎『「甘え」の構造の紹介』）
第13回	ルース・ベネディクト『菊と刀』第13章を読む	・文献読解 ・リアクション・ペーパーの発表とその討論 ・発表（D. ルミス『内なる外国：『菊と刀』再考』の紹介）
第14回	総括	後期の授業で修得した内容を復習し、世界の日本論とその言説史の理解を深めながら、現代の日本学の可能性を考える

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を準備とします。
- ・本授業で指示した文献を読み、歴史・思想的背景について調べる
- ・プレゼンテーションを準備する（レジュメ、資料のコメント）
- ・授業の出席前に前回の授業ノートを読み返し、復習する

【テキスト（教科書）】

教科書は指定なし。プリントを作成し、授業中に配布する予定。また、オンラインで掲載される資料へのリンクを指示する予定。

【参考書】

青木保（1999）『『日本文化論』の変容：戦後日本の文化とアイデンティティ』中公文庫
 赤澤史朗（2020）『戦中・戦後文化論：転換期日本の文化統合』法律文化社
 エドワード・W・サイド『オリエンタリズム』、2巻、平凡社ライバリー
 船曳健夫（2016）『日本人論』再考』講談社学術文庫
 南博（2006）『日本人論：明治から今日まで』岩波現代文庫
 ルース・ベネディクト；長谷川松治訳（2005）『菊と刀：日本文化の型』講談社学術的文庫
 ルース・ベネディクト；米山俊直訳（2008）『文化の型』講談社学術文庫

【成績評価の方法と基準】

平常点（20%） 授業への参加、発言などを総合的に評価する
 課題、リアクション・ペーパーへの回答（20%）
 発表（30%）
 期末レポート（30%）

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

日本思想史（近世）

【Outline (in English)】

This course offers students an introduction into discourses about Japanese culture. It is designed to give an overview of key texts and concepts between the late Meiji-period until the end of the Pacific war in international perspective. Students can expect to come out of the course better prepared to engage in an informed discussion about international discourses about Japanese culture and the challenges for future research in the field of Japanese studies.

BSP500B7

国際日本学論文作成実習（英語）Ⅰ

スティーヴン・ネルソン

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

大学院レベルの英語読解・表現力を主題とする。

【到達目標】

人文科学系の英文文献を正確に読み、誤解を招かない英文で論文要旨を作成することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

国際日本学を拠点に研究しようとする者には、正確な日本語で文章を書く能力はもちろんのこと、他の言語で情報と知識を獲得し、また日本について自分自身の紡いだ言葉で自国語や外国語で説明する能力も求められる。いずれは中国語や韓国語の重要性が増してくるだろうが、国際日本学の現状からして当面においては英語の力が最も重要と思われる。本授業では、専門分野の英文文献を正確に読む能力と、自分自身が作成した論文の要旨を英語で作成する能力を身に付けてもらうのが主たる目標となる。授業は、教員による講義、及び全員での討論を織り交ぜて行なう。3回目以降、苦手意識を克服して正確な英語を書くための文法解説、及び受講者の作成した英文要旨等の添削・評価が中心になる。受講者は作成した英文を事前に提出し、授業後には誤りなどの指摘を受けて訂正したものを再提出する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業履修の確認 自己紹介、授業の進め方の説明
第2回	英語の日本学	日本学関係の英文著作・論文の検索法などに関する講義
第3回	文法：基本動詞の用法 英文要旨作成：論旨の整理	文法：伝達の表現 作文：教員が選んだ文章（和文）の英文要旨作成
第4回	文法：基本動詞の用法 英文要旨作成：論旨整理・英語の論理構造	文法：感覚と認識の表現 作文：教員が選んだ文章（和文）の英文要旨作成
第5回	文法：基本動詞の用法 自由英作文：段落構成	文法：使役・被害等の表現 作文：教員が指定したテーマに関する自由英作文（1段落）
第6回	文法：基本動詞の用法 自由英作文：文章構成（複数段落）	文法：存在の表現 作文：教員が指定したテーマに関する自由英作文（3段落）
第7回	文法：基本動詞の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成	文法：時の表現① 作文：各自が選んだ論文の英文要旨作成
第8回	文法：基本動詞の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成	文法：変化の表現 作文：各自が選んだ論文の英文要旨作成
第9回	文法：基本動詞の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成	文法：時の表現② 作文：各自が選んだ論文の英文要旨作成
第10回	文法：分詞形容詞と形容詞構文の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成	文法：叙述の表現 作文：各自が選んだ論文の英文要旨作成

第 11 回	文法：名詞相当語句の用法 英文要旨作成：論旨整理	文法：「もの・こと」の表現 作文：各自の研究テーマに関する要旨作成
第 12 回	文法：比較の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成（1 段落）	文法：比較の表現① 作文：各自の研究テーマに関する要旨作成
第 13 回	文法：比較の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成（複数段落）	文法：比較の表現② 作文：各自の研究テーマに関する要旨作成
第 14 回	文法：数量表現の用法 英文要旨作成：文章構成（仕上げ）	文法：数量の表現 作文：各自の研究テーマに関する要旨作成

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 1 英語による簡単な自己紹介を用意
- 2 各自の研究テーマに関する紹介文（英文 100 語前後）及びキーワードのリストを事前提出
- 3-14 文法：解答を用意。作文：課題を事前提出、授業後訂正版を再提出

【テキスト（教科書）】

担当教員作成のテキストとプリントを配付する。

【参考書】

小田麻里子・味園真紀著『英語論文すぐに使える表現集』（ベレ出版、1999）

【成績評価の方法と基準】

平常点 30 %、課題 70 %。各自が作成した英文課題、再提出のものを中心に評価する。言い換えれば、授業で指導を受けて、誤解を招かない正確な英文を書く力がどれだけ付いたかが評価の鍵を握る。

【学生の意見等からの気づき】

受講した学生は満足しているようであり、変更の必要はないと考えている。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 日本音楽史学

＜研究テーマ＞ 日本の楽譜、初期の講式（漢文訓読体の声明の一種）と平家語りの音楽構成法、平安時代の年中行事と音楽、声歌／唱歌～越殿楽謡物～箏組歌の系譜、『源氏物語』・『平家物語』の音楽、日本古典文学の英訳など

＜主要研究業績＞ 【英語関連】

① “Issues in the interpretation of notation for East Asian lutes (*pipa* / *biwa*) as preserved in scores of the eighth to twelfth centuries.” (『日本音楽史研究』8、上野学園大学日本音楽史研究所、2012)

② “Pitch, scale and mode in early *gagaku* and *shōmyō*.” (『日本音楽史研究』8、上野学園大学日本音楽史研究所、2012)

③ “Court and Buddhist music (1): history of *gagaku* and *shōmyō*” / “Court and Buddhist music (2): music of *gagaku* and *shōmyō*.” (Tokita, Alison, and David Hughes, ed., *The Ashgate Research Companion to Japanese Music*. Hants [U.K.]: Ashgate Publishing Ltd, 2008.)

【Outline (in English)】

Course Outline: This class in academic writing in English takes two approaches. The first half of each class comprises remedial treatment of English grammar and sentence structure, focussing on a different aspect of English grammar each week. There is a textbook edited by the instructor, distributed in class free of charge. In the second half of each class, students are divided into groups and asked to examine texts of between one and three paragraphs in length that they have drafted and submitted in advance. The instructor distributes versions of these texts with indications of parts that need to be corrected. He then lets the students discuss the problems and possible solutions, before assisting the students in getting the texts into their final form. Each student then submits a final, revised version of their own text.

Learning Objectives: Very simply, to increase the students' writing skill by means of these two approaches.

Learning Activities Outside of Classroom: Preparing answers for the first and second half of each class; submitting those for the second half in advance; and submitting the final, revised version of this after the class.

Grading Criteria/Policy: Grading is based on each student's portfolio of revised versions.

BSP500B7

国際日本学論文作成実習（英語）Ⅱ

スティーヴン・ネルソン

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

大学院レベルの英語読解・表現力を主題とする。

【到達目標】

人文科学系の英文文献を正確に読み、および誤解を招かない英文で論文要旨を作成することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

国際日本学を拠点に研究しようとする者には、正確な日本語で文章を書く能力はもちろんのこと、他の言語で情報と知識を獲得し、また日本について自分自身の紡いだ言葉で自国語や外国語で説明する能力も求められる。いずれは中国語や韓国語の重要性が増してくるだろうが、国際日本学の現状からして当面においては英語の力が最も重要と思われる。本授業では、専門分野の英文文献を正確に読む能力と、自分自身が作成した論文の要旨を英語で作成する能力を身に付けてもらうのが主たる目標となる。授業は、教員による講義、及び全員での討論を織り交ぜて行なう。3回目以降、苦手意識を克服して正確な英語を書くための文法解説、及び受講者の作成した英文要旨等の添削・評価が中心になる。受講者は作成した英文を事前に提出し、授業後には誤りなどの指摘を受けて訂正したものを再提出する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業履修の確認 自己紹介、授業の進め方の説明
第 2 回	英語の日本学	日本学関係の英文著作・論文の検索法などに関する講義
第 3 回	文法：基本動詞の用法 英文要旨作成：論旨の整理	文法：感情の表現 作文：教員が選んだ文章（和文）の英文要旨作成
第 4 回	文法：基本動詞の用法 英文要旨作成：論旨整理・英語の論理構造	文法：感覚・認識・判断の表現 作文：教員が選んだ文章（和文）の英文要旨作成
第 5 回	文法：接続の用法 自由英作文：段落構成	文法：原因・理由の表現 作文：教員が指定したテーマに関する自由英作文（1段落）
第 6 回	文法：接続の用法 自由英作文：文章構成（複数段落）	文法：目的・程度・様態の表現 作文：教員が指定したテーマに関する自由英作文（3段落）
第 7 回	文法：基本動詞の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成	文法：譲歩・仮定・条件の表現 作文：各自が選んだ論文の英文要旨作成
第 8 回	文法：基本動詞の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成	文法：許可・勧誘・提案の表現 作文：各自が選んだ論文の英文要旨作成
第 9 回	文法：名詞修飾の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成	文法：詞修飾の表現 作文：各自が選んだ論文の英文要旨作成
第 10 回	文法：品詞転換の技法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成	文法：品詞転換の表現 作文：各自が選んだ論文の英文要旨作成
第 11 回	文法：強調の用法 英文要旨作成：論旨整理	文法：強調の表現 作文：各自の研究テーマに関する要旨作成

第 12 回	文法：否定の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成（1段落）	文法：否定の表現 作文：各自の研究テーマに関する要旨作成
第 13 回	文法：比較の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成（複数段落）	文法：比較の表現 作文：各自の研究テーマに関する要旨作成
第 14 回	文法：時・態の用法 英文要旨作成：文章構成（仕上げ）	文法：時と受身の表現 作文：各自の研究テーマに関する要旨作成

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 1 英語による簡単な自己紹介を用意
- 2 各自の研究テーマに関する紹介文（英文 100 語前後）及びキーワードのリストを事前提出
- 3-14 文法：解答を用意。作文：課題を事前提出、授業後訂正版を再提出

【テキスト（教科書）】

担当教員作成のテキストとプリントを配付する。

【参考書】

小田麻里子・味園真紀著『英語論文すぐに使える表現集』（ベレ出版、1999）

【成績評価の方法と基準】

平常点 30 %、課題 70 %。各自が作成した英文課題、再提出のものを中心に評価する。言い換えれば、授業で指導を受けて、誤解を招かない正確な英文を書く力がどれだけ付いたかが評価の鍵を握る。

【学生の意見等からの気づき】

受講した学生は満足しているようであり、変更の必要はないと考えている。

【その他の重要事項】

科目名でわかる通り、これは国際日本学論文作成実習（英語）Ⅰの続きとして作成された内容であり、Ⅰの単位をとってからの履修を勧める。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本音楽史学

<研究テーマ> 日本の楽譜、初期の講式（漢文訓読体の声明の一種）と平家語りの音楽構成法、平安時代の年中行事と音楽、声歌／唱歌～越殿楽謡物～箏組歌の系譜、『源氏物語』・『平家物語』の音楽、日本古典文学の英訳など

<主要研究業績> 【英語関連】

- ① “Issues in the interpretation of notation for East Asian lutes (*pipa* / *biwa*) as preserved in scores of the eighth to twelfth centuries.” (『日本音楽史研究』8、上野学園大学日本音楽史研究所、2012)
- ② “Pitch, scale and mode in early *gagaku* and *shōmyō*.” (『日本音楽史研究』8、上野学園大学日本音楽史研究所、2012)
- ③ “Court and Buddhist music (1): history of *gagaku* and *shōmyō*” / “Court and Buddhist music (2): music of *gagaku* and *shōmyō*.” (Tokita, Alison, and David Hughes, ed., *The Ashgate Research Companion to Japanese Music*. Hants [U.K.]: Ashgate Publishing Ltd, 2008.)

【Outline (in English)】

Course Outline: This class in academic writing in English takes two approaches. The first half of each class comprises remedial treatment of English grammar and sentence structure, focussing on a different aspect of English grammar each week. There is a textbook edited by the instructor, distributed in class free of charge. In the second half of each class, students are divided into groups and asked to examine texts of between one and three paragraphs in length that they have drafted and submitted in advance. The instructor distributes versions of these texts with indications of parts that need to be corrected. He then lets the students discuss the problems and possible solutions, before assisting the students in getting the texts into their final form. Each student then submits a final, revised version of their own text.

Learning Objectives: Very simply, to increase the students' writing skill by means of these two approaches.

Learning Activities Outside of the Classroom: Preparing answers for the first and second half of each class; submitting those for the second half in advance; and submitting the final, revised version of this after the class.

Grading Criteria/Policy: Grading is based on each student's portfolio of revised versions.

BSP500B7

国際日本学論文作成実習（英語）Ⅰ

ヤナ・ウルバノヴァー

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

大学院レベルの英語読解・表現力を主題とする。

This course will enable students to acquire and further develop academic reading and writing skills required at graduate level.

【到達目標】

人文科学系の英文文献を正確に読み、および誤解を招かない英文で論文要旨を作成することができる。

You will improve your reading and writing skills by engaging with a variety of materials and texts, and writing short assignments in English.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

国際日本学を拠点に研究しようとする者には、正確な日本語で文章を書く能力はもちろんのこと、他の言語で情報と知識を獲得し、また日本について自分自身の紡いだ言葉で自国語や外国語で説明する能力も求められる。いずれは中国語や韓国語の重要性が増してくるだろうが、国際日本学の現状からして当面においては英語の力が最も重要と思われる。本授業では、専門分野の英文文献を正確に読む能力と、自分自身が作成した論文の要旨を英語で作成する能力を身に付けてもらうのが主たる目標となる。授業は、教員による講義、及び全員での討論を織り交ぜて行なう。3回目以降、苦手意識を克服して正確な英語を書くための文法解説、及び受講者の作成した英文要旨等の添削・評価が中心になる。受講者は作成した英文を事前に提出し、授業後には誤りなどの指摘を受けて訂正したものを再提出する。

課題に対する説明やコメント等は授業の最後に行う。そこでは受講生からの質問も受け付ける。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業履修の確認 自己紹介、授業の進め方の説明
第2回	英語の日本学	日本学関係の英文著作・論文の検索法などに関する講義
第3回	文法：基本動詞の用法 英文要旨作成：論旨の整理	文法：伝達の表現 作文：教員が選んだ文章（和文）の英文要旨作成
第4回	文法：基本動詞の用法 英文要旨作成：論旨整理・英語の論理構造	文法：感覚と認識の表現 作文：教員が選んだ文章（和文）の英文要旨作成
第5回	文法：基本動詞の用法 自由英作文：段落構成	文法：使役・被害等の表現 作文：教員が指定したテーマに関する自由英作文（1段落）
第6回	文法：基本動詞の用法 自由英作文：文章構成（複数段落）	文法：存在の表現 作文：教員が指定したテーマに関する自由英作文（3段落）
第7回	文法：基本動詞の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成	文法：時の表現① 作文：各自が選んだ論文の英文要旨作成
第8回	文法：基本動詞の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成	文法：変化の表現 作文：各自が選んだ論文の英文要旨作成

第 9 回	文法：基本動詞の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成	文法：時の表現② 作文：各自が選んだ論文の英文要旨作成
第 10 回	文法：分詞形容詞と形容詞構文の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成	文法：叙述の表現 作文：各自が選んだ論文の英文要旨作成
第 11 回	文法：名詞相当語句の用法 英文要旨作成：論旨整理	文法：「もの・こと」の表現 作文：各自の研究テーマに関する要旨作成
第 12 回	文法：比較の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成（1 段落）	文法：比較の表現① 作文：各自の研究テーマに関する要旨作成
第 13 回	文法：比較の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成（複数段落）	文法：比較の表現② 作文：各自の研究テーマに関する要旨作成
第 14 回	文法：数量表現の用法 英文要旨作成：文章構成（仕上げ）	文法：数量の表現 作文：各自の研究テーマに関する要旨作成

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 1 英語による簡単な自己紹介を用意
- 2 各自の研究テーマに関する紹介文（英文 100 語前後）及びキーワードのリストを事前提出
- 3～14 文法：解答を用意。作文：課題を事前提出、授業後訂正版を再提出

本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

Please prepare a short self-introduction. In addition, you will be asked to submit short writing assignments related to the topics introduced in class and resubmit them after having incorporated corrections suggested by the lecturer and/or other students.

Preparatory study and review time for this class are 2 hours each.

【テキスト（教科書）】

担当教員作成のテキストとプリントを配付する。

【参考書】

小田麻里子・味園真紀著『英語論文すぐに使える表現集』（ベレ出版、1999）

【成績評価の方法と基準】

平常点 30 %、課題 70 %。各自が作成した英文課題、再提出のものを中心に評価する。言い換えれば、授業で指導を受けて、誤解を招かない正確な英文を書く力がどれだけ付いたかが評価の鍵を握る。

Grading criteria:

- Active participation in class: 30%
- Writing assignments: 70%

(Assignments resubmitted after careful correction will be evaluated.)

【学生の意見等からの気づき】

国際化が進んでいる社会においては英語が不可欠です。

論文要旨などを含め、各自の研究を英語で説明し、様々なテーマに関して英語で意見を述べられるよう支援します。

【担当教員の専門分野等】

- <専門領域>
- <研究テーマ>
- <主要研究業績>

【<専門領域>】

日本文学、沖縄の文学、和歌、琉歌、オモロ

【<研究テーマ>】

琉歌の表現研究—和歌やオモロとの比較

【<主要研究業績>】

- 「琉歌における「雪」について（下）」（『沖縄文化』123 号（第 52 巻 1 号）、沖縄文化協会、2019 年 6 月）
- 「琉歌における「雪」について（中）」（『沖縄文化』122 号（第 51 巻 2 号）、沖縄文化協会、2018 年 3 月）

- 「琉歌における「雪」について（上）」（『沖縄文化』121 号（第 51 巻 1 号）、沖縄文化協会、2017 年 8 月）

- 「The Four Seasons in Okinawan Ryūka Poetry – Comparison with Classical Waka Poetry and Old Okinawan Omoro Songs. (『沖縄の歌である琉歌における四季について—古典の和歌と沖縄のオモロとの比較—)」（『Studia Orientalia Slovaca (SOS) (スロバキアの東洋研究)』第 15 巻 1 号、Comenius University, Department of East Asian Studies (コメニウス大学東アジア研究学科)、2016 年）
- 『琉歌の表現研究—和歌・オモロとの比較から—』（森話社、2015 年）
- 「オモロと琉歌における「大和」のイメージ」（田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか—江戸から見る自意識の変遷』笠間書院、2015 年）

【Outline (in English)】

This course will enable students to acquire and further develop academic reading and writing skills required at graduate level.

BSP500B7

国際日本学論文作成実習（英語）Ⅱ

ヤナ・ウルバノヴァー

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

大学院レベルの英語読解・表現力を主題とする。

This course will enable students to acquire and further develop academic reading and writing skills required at graduate level.

【到達目標】

人文科学系の英文文献を正確に読み、および誤解を招かない英文で論文要旨を作成することができる。

You will improve your reading and writing skills by engaging with a variety of materials and texts, and writing short assignments in English.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

国際日本学を拠点に研究しようとする者には、正確な日本語で文章を書く能力はもちろんのこと、他の言語で情報と知識を獲得し、また日本について自分自身の紡いだ言葉で自国語や外国語で説明する能力も求められる。いずれは中国語や韓国語の重要性が増してくるだろうが、国際日本学の現状からして当面においては英語の力が最も重要と思われる。本授業では、専門分野の英文文献を正確に読む能力と、自分自身が作成した論文の要旨を英語で作成する能力を身に付けてもらうのが主たる目標となる。授業は、教員による講義、及び全員での討論を織り交ぜて行なう。3回目以降、苦手意識を克服して正確な英語を書くための文法解説、及び受講者の作成した英文要旨等の添削・評価が中心になる。受講者は作成した英文を事前に提出し、授業後には誤りなどの指摘を受けて訂正したものを再提出する。

課題に対する説明やコメント等は授業の最後に行う。そこでは受講生からの質問も受け付ける。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業履修の確認 自己紹介、授業の進め方の説明
第 2 回	英語の日本学	日本学関係の英文著作・論文の検索法などに関する講義
第 3 回	文法：基本動詞の用法 英文要旨作成：論旨の整理	文法：感情の表現 作文：教員が選んだ文章（和文）の英文要旨作成
第 4 回	文法：基本動詞の用法 英文要旨作成：論旨整理・英語の論理構造	文法：感覚・認識・判断の表現 作文：教員が選んだ文章（和文）の英文要旨作成
第 5 回	文法：接続の用法 自由英作文：段落構成	文法：原因・理由の表現 作文：教員が指定したテーマに関する自由英作文（1段落）
第 6 回	文法：接続の用法 自由英作文：文章構成（複数段落）	文法：目的・程度・様態の表現 作文：教員が指定したテーマに関する自由英作文（3段落）
第 7 回	文法：基本動詞の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成	文法：譲歩・仮定・条件の表現 作文：各自が選んだ論文の英文要旨作成
第 8 回	文法：基本動詞の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成	文法：許可・勧誘・提案の表現 作文：各自が選んだ論文の英文要旨作成

第 9 回	文法：名詞修飾の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成	文法：詞修飾の表現 作文：各自が選んだ論文の英文要旨作成
第 10 回	文法：品詞転換の技法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成	文法：品詞転換の表現 作文：各自が選んだ論文の英文要旨作成
第 11 回	文法：強調の用法 英文要旨作成：論旨整理	文法：強調の表現 作文：各自の研究テーマに関する要旨作成
第 12 回	文法：否定の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成（1段落）	文法：否定の表現 作文：各自の研究テーマに関する要旨作成
第 13 回	文法：比較の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成（複数段落）	文法：比較の表現 作文：各自の研究テーマに関する要旨作成
第 14 回	文法：時・態の用法 英文要旨作成：文章構成（仕上げ）	文法：時と受身の表現 作文：各自の研究テーマに関する要旨作成

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 1 英語による簡単な自己紹介を用意
- 2 各自の研究テーマに関する紹介文（英文 100 語前後）及びキーワードのリストを事前提出
- 3 ～ 14 文法：解答を用意。作文：課題を事前提出、授業後訂正版を再提出

本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

Please prepare a short self-introduction. In addition, you will be asked to submit short writing assignments related to the topics introduced in class and resubmit them after having incorporated corrections suggested by the lecturer and/or other students.

Preparatory study and review time for this class are 2 hours each.

【テキスト（教科書）】

担当教員作成のテキストとプリントを配付する

【参考書】

小田麻里子・味園真紀著『英語論文すぐに使える表現集』（ベレ出版、1999）

【成績評価の方法と基準】

平常点 30 %、課題 70 %。各自が作成した英文課題、再提出のものを中心に評価する。言い換えれば、授業で指導を受けて、誤解を招かない正確な英文を書く力がどれだけ付いたかが評価の鍵を握る。

Grading criteria:

- Active participation in class: 30%

- Writing assignments: 70%

(Assignments resubmitted after careful correction will be evaluated.)

【学生の意見等からの気づき】

国際化が進んでいる社会においては英語が不可欠です。論文要旨などを含め、各自の研究を英語で説明し、様々なテーマに関して英語で意見を述べられるよう支援します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

<研究テーマ>

<主要研究業績>

【<専門領域>】

日本文学、沖縄の文学、和歌、琉歌、オモロ

【<研究テーマ>】

琉歌の表現研究—和歌やオモロとの比較

【<主要研究業績>】

- 「琉歌における「雪」について（下）」（『沖縄文化』123 号（第 52 巻 1 号）、沖縄文化協会、2018 年 6 月）
- 「琉歌における「雪」について（中）」（『沖縄文化』122 号（第 51 巻 2 号）、沖縄文化協会、2018 年 3 月）
- 「琉歌における「雪」について（上）」（『沖縄文化』121 号（第 51 巻 1 号）、沖縄文化協会、2017 年 8 月）

● The Four Seasons in Okinawan Ryūka Poetry – Comparison with Classical Waka Poetry and Old Okinawan Omoro Songs. (『沖縄の歌である琉歌における四季について－古典の和歌と沖縄のオモロとの比較－』) (『Studia Orientalia Slovaca (SOS) (スロバキアの東洋研究)』第15巻1号、Comenius University, Department of East Asian Studies (コメニウス大学東アジア研究学科)、2016年)
 ●『琉歌の表現研究－和歌・オモロとの比較から－』(森話社、2015年)
 ●「オモロと琉歌における「大和」のイメージ」(田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか－江戸から見る自意識の変遷』笠間書院、2015年)

【Outline (in English)】

This course will enable students to acquire and further develop academic reading and writing skills required at graduate level.

BSP500B7

日本語論文作成実習Ⅰ

山中 玲子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では日本語の文章を多く読み、受講生には多くの作文を書いてもらい、添削していきます。専門分野の論文を書くための日本語表現や、明確な文章を書くための論理構造を身につけることが目的です。

【到達目標】

- ①助詞や自動詞・他動詞等、基礎的な文法のミスを減らす。
- ②論文にふさわしい文体を維持する。
- ③論理展開の明確な文章が書けるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

作文をメール（添付ファイル）で提出してもらい、添削してそれぞれに返すとともに、授業ではみなさんの文章から「よくある間違い」をピックアップして説明します。作文の準備として授業中にディスカッションをおこなうこともあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の進め方や参考書の紹介。受講者の専門分野の確認。
第2回	論文の文体	論文にふさわしい文体を学ぶ。
第3回	ねじれない文	主部と述部が論理的に対応している文を書く。
第4回	間違いやすい文法事項のチェック① 短文作り	留学生が間違いやすい助詞や自動詞他動詞、受け身の言い方などを確認しながら短文を作る。
第5回	間違いやすい文法事項のチェック② 添削とフィードバック	前回の続き。受講者が書いて教員に送った例文を材料にして間違いやすい箇所を確認。
第6回	文章の要約① 短めの文章の要約	短い文章を読み、表現を学ぶ。要約を宿題にして次回までに提出。
第7回	文章の要約② 添削とフィードバック	受講者の要約例を材料に、文法的な間違いのチェックやより良い要約の仕方を学習。
第8回	文章の要約③ 長めの文章の要約	第6回より長めの文章を読み、理解したうえで、要約を宿題にし、次回までに提出。
第9回	文章の要約④ 添削とフィードバック	受講者の要約例を材料に、文法的な間違いのチェックやより良い要約の仕方を学習。
第10回	条件を比べる①	いくつかの条件を比べて優劣や差異を述べる文を書くため、材料となる文章を読んで理解する。
第11回	条件を比べる②	学生が自宅学習で書いて提出した文章を材料に、文法的な間違いや表現の不十分な部分等を集めて検討する。
第12回	要約とコメント①	授業では第8回よりもさらに長い文章を読んで表現を学び、各自がその要約と自分のコメントを書いて提出する。
第13回	要約とコメント②	提出された要約とコメントの例を材料に、文法的な誤りをチェックし、よりよい表現の仕方を学ぶ。

第14回 まとめ 学習した事項の復習とまとめ。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
授業で学んだ表現や語彙を辞書等で調べ直し、理解を確実にする。
宿題の作文を毎回書き、期限内に提出する。

【テキスト（教科書）】

特定のテキストは使いません。資料は授業中に配布します。

【参考書】

授業中に適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】

作文の提出率（60％）とその成績（40％）によって総合的に判断します。

【学生の意見等からの気づき】

他の学生の書いた文章を読むことも互いの勉強になるとの意見が多かったです。今年度も、教師と学生との個別のやりとりだけでなく、クラス全員に公開しながらの添削やそれについての質問・意見交換などをしていきます。

【その他の重要事項】

自分のレベルにあったクラスで学べるよう、授業開始前のレベルチェックは必ず受けてください。
作文の添削はメールでおこないます。PCでメールのやりとりができるような環境を整えておいてください。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 能楽研究
＜研究テーマ＞ 能の作品研究・演出研究
＜主要研究業績＞

★「修羅能以前の「平家の能」―〈経盛〉の再検討を通して―」
軍記物語講座第二巻『無常の鐘声 平家物語』（松尾葦江編 花鳥社 2020年）

★「能〈通小町〉遡源」『国語と国文学』93巻3号・2016年3月

★「〈檀風〉「孝養」の習事―死者を悼む演技をめぐる―」『文学』16巻2号・2015年

【Outline (in English)】

The aim of this class is to acquire the knowledge and skills necessary to write a dissertation in Japanese.

Students will practice reducing grammatical errors and writing logically in a style appropriate to the paper. Writing essays is a study outside of class time.

BSP500B7

日本語論文作成実習Ⅱ

山中 玲子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では日本語の文章を多く読み、受講生には多くの作文を書いてもらい、添削していきます。自分の研究内容について論文を書く力を身につけることが目的です。

【到達目標】

①論文にふさわしい語彙や文体を身につけ、②各自の論文作成に必要な表現を数多く知り、③わかりやすい論理展開ができるよう、接続詞の使い方や段落等も学んで、自分の研究内容を日本語で的確に述べるができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

作文をメール（添付ファイル）で提出してもらい、添削してそれぞれに返すとともに、授業ではみなさんの文章から「よくある間違い」をピックアップして説明します。作文の準備として授業中にディスカッションをおこなうこともあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	論文にふさわしい表現を確認する	春学期の復習も兼ねて、論文にふさわしい表現を確認。宿題は、学習した表現を使った短文作り。
第2回	論文にふさわしい表現―短文の添削とフィードバック	提出された短文を材料に、文法的な誤りや、使えるケース・使えないケースを確認。
第3回	文章の論理構造① 接続語の整理	論理的な文章を書くために、文と文を適切な接続語でつなぐ練習をする。
第4回	文章の論理構造② 練習問題	前回の続き。練習問題を用いて、文章の論理構造を確認する作業も行う。
第5回	文章の要約とコメント	前期よりも長い文章を読み、内容を要約したうえでコメントを付ける。
第6回	文章の要約とコメント―要約例の添削とフィードバック	受講者の要約例とコメント例を材料に、間違えやすい表現のチェックをし、要約文やコメントのブラッシュアップをめざす。
第7回	統計資料を見て書く	表やグラフに基づいてことがらを述べる際の表現を学ぶ。
第8回	絵や写真を見て書く	目の前にある絵や写真から見て取れることを書く際の表現（特に文末表現）を学ぶ。
第9回	比較して書く① ディスカッション	複数の事象を比べてその内容を叙述し、優劣や順位を述べる文を書くため、材料となる資料を用いて討議し、意見の相違を確認する。
第10回	比較して書く② 添削とフィードバック	学生が自宅で書いて提出した文章を材料に、文法的な間違いや表現の不十分な部分を集めて検討。
第11回	比較して書く③ 予想される反論	優劣・順位について他のメンバーの異なる意見を踏まえたうえでそれに再反論する文章を書く

第12回	意見を述べる① 材料となる文章の読解	授業では論文作成に有益な表現や文体を学ぶ。読んだ文章について、3～4段落程度の意見を説得力のある形で書く（宿題）。
第13回	意見を述べる② 添削とフィードバック	提出された文章を材料に、間違えやすい表現や論理展開を確認する。
第14回	まとめ	全体に間違えやすい文法事項の確認と復習。各学生のウィークポイントの確認。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

書く練習自体は教室ではありませんから、宿題をきちんとやって期限内に提出してください。

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特定のテキストは使いません。資料は授業中に配布します。

【参考書】

授業中に適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】

作文の提出率（60％）とその成績（40％）によって総合的に判断します。

【学生の意見等からの気づき】

他の学生の書いた文章を読み、いろいろな表現や間違いやすい点などを学ぶこと、自分とは違う考え方を知ることが有益だとの意見が多くありました。今年度も、教師と学生との一対一のやりとりではなく、クラス全体に公開しながらの添削やそれについての質問・意見交換などをしていきます。

【その他の重要事項】

自分のレベルにあったクラスで学べるよう、授業開始前のレベルチェックは必ず受けてください。

作文の添削はメールでおこないます。PCでメールのやりとりができるような環境を整えておいてください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 能楽研究

<研究テーマ> 能の作品研究・演出研究

<主要研究業績>

★「修羅能以前の「平家の能」―〈経盛〉の再検討を通して―」
軍記物語講座第二巻『無常の鐘声 平家物語』（松尾葦江編 花鳥社 2020年）

★「能〈通小町〉遡源」『国語と国文学』93巻3号・2016年3月

★「〈檀風〉「孝養」の習事―死者を悼む演技をめぐる―」『文学』16巻2号・2015年

【Outline (in English)】

The aim of this class is to acquire the knowledge and skills necessary to write a dissertation in Japanese.

Students will learn vocabulary and expressions appropriate for academic writing, and how to use conjunctions and paragraphs correctly to clarify logical development. Writing essays is a study outside of class time.

BSP500B7

日本語論文作成基礎A I

幸田 佳子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

大学院で必要な論文の書き方を学ぶ。

【到達目標】

論文に必要な書き言葉のルールを学び、書けるようになる。

段落構成を習得できるようになる。

文章全体の章立て構成を習得できるようになる。

参考資料の引用の仕方を学び、引用方法ができるようになる。

本論で使う文章展開の方法ができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

対面（1-2回）とオンラインのブレンド型の授業とする。

授業の進め方について

授業の初めに、前回の授業で提出されたりアクションペーパーからいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行う。

講義形式で各々項目のレジメを見ていく。練習問題や書き方を説明する。

調べたことや自分の文は発表してもらうこともある。またテーマについてディスカッションすることもある。

最終授業で、13回までの講義内容のまとめや復習だけでなく、授業内で行った試験や小レポート等、課題に対する講評や解説も行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	自己の研究テーマ紹介	授業のガイダンス クラス内で研究テーマを話す。対面で顔合わせをする
第2回	書き言葉のルール①文体	話し言葉と書き言葉 丁寧体と普通体 文体について調べる
第3回	書き言葉のルール②語彙と文法	物事視点にして、主語が変わること。名詞句の使い方を見る。文章を書いてみる。
第4回	書き言葉のルール③段落と構成	構成を立てながら一段落の文を書く。
第5回	段落内の構成	論の展開 逆接と添加 構成を考えながら、文を書く。
第6回	二段落の構成の展開	二段落で事実と意見の文を書く。
第7回	現象などの事実と意見	アウトラインを ppt にして、要約を発表。その後文章化する。
第8回	引用の意味と目的を学ぶ。	モデル例の引用の仕方を見る。資料の要約の仕方とそのあとの引用方法まで、行う。
第9回	引用―先行研究の提示	自分の専門の研究の本の要約紹介をする。
第10回	引用―事実と意見文	事実や現象に引用を入れる。
第11回	論証の仕方①構成	事実、意見、理由の構成を立てて、文を書いていく。
第12回	論証の仕方②証明の種類	意見と理由を説得できるか検討する。統計資料を使って文を書く。
第13回	論証の仕方③構成の立て方	与えられたテーマで現象、意見、理由の構成をたてて、文章を書く。 対面で確認する。

第14回 まとめ 文章のフィー みんなの文章の推敲と評価 ドバック

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
授業中に書き終えなかったものは、次週までに提出。書き直しは、PCでメール提出する。授業の終わりに必要な資料の検索を指示するので、調べておくこと。
課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定です。

【テキスト（教科書）】

特定の教科書は使用しない。コピーとレジメを配布する。

【参考書】

『留学生のためのここが大切文章表現のルール』石黒圭 スリーエーネットワーク
『新訂版留学生のための論理的な文章の書き方』二通信子 スリーエーネットワーク
『大学で学ぶ日本語ライティング』佐々木瑞枝 The Japan Times
『Good Writing へのパスポート』田中真理 くろしお出版

【成績評価の方法と基準】

毎回の提出物 50%（遅れた場合は8割となる） 学期末のレポート 30%（既習の到達度から見る） 平常点 20%（授業参加、発表、質問など）

【学生の意見等からの気づき】

早口で、先生の出した指示がわからないという指摘を受けたので、意識してゆっくり話すようにする。板書の字がわかりづらいと言われ、丁寧に書くようにする。

【学生が準備すべき機器他】

必要時にパソコン持参などの指示

【その他の重要事項】

提出遅れは80%になる。期限に遅れないこと。
欠席した場合は、クラスメートに聞いて補っておくこと。特に提出物は注意してください。
出席は全出席が前提。5回以上の欠席は不可とする。
連絡事項は hoppi を見てください。
授業は基本対面授業としていますが、海外からの受講がある場合は、オンラインと対面の授業します。

【日本語学】

<専門領域>日本語学
<研究テーマ>文法と日本語教育
<主要研究業績>

- ① 1994『『わけがない』『わけではない』『わけにはいかない』について』『語学教育研究論叢』11号 大東文化大学
- ② 2002『副詞『一応』について』『語学教育研究論叢』19号 大東文化大学
- ③ 2011『接尾辞『がち』『ぞみ』について』『語学教育研究論叢』28号 大東文化大学
- ④ 2012『教師主導型から活動型授業への改善の考察—脱タスクを指して—』2012年度 web 版実践研修フォーラム報告
- ⑤ 2014「活動型授業への展開」『教育推進開発機構紀要』5号 國學院大学
- ⑥ 2016「日本語の中上級クラスにおける論文作成指導とその問題点」『語学教育研究論叢』34号 大東文化大学
- ⑦ 2020「日本語教育に日本語文法を活かしていくには—「として」を例に考えた試み—」『語学教育研究論叢』第37号 大東文化大学

【Outline (in English)】

This class learns how to write necessary report, article at a university.

BSP500B7

日本語論文作成基礎AⅡ

中島 久朱

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

大学院で必要となるレポートや論文の書き方を学ぶ

【到達目標】

日本語によるアカデミックな文章の作成において求められる語彙や適切な文体、文章構成のルールを身につけ、論理的な文章を作成できるようになる。
資料の要点を的確に読み取る力をつけ、適切な引用方法を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業の方法：教員の講義および、ペアワーク、ディスカッション、各自での文章の作成など。
フィードバックの方法：授業で作成した文章に対しては、教員からの個別のコメントの返却の他、授業内での講評や解説、受講生間でのピア・レビューなどによるフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業概要の説明
第2回	書き言葉文体	日本語の表記 書き言葉にふさわしい文体
第3回	書き言葉と語彙	書き言葉にふさわしい語と表現
第4回	文章構成	文章の構成
第5回	段落構成	段落内容の構成
第6回	課題の提示	課題の提示の展開とパターン
第7回	研究行動の提示	研究行動の提示のための文型と表現
第8回	研究設問	研究テーマと問題の提示の展開とパターン
第9回	先行研究の紹介	先行研究の紹介、研究の目的を示すための文型と表現
第10回	研究方法の提示	研究方法の説明、定義と分類のための文型と表現
第11回	用語の定義と考察対象の提示	用語の定義と考察の対象の選択の練習
第12回	図表の提示	図表の提示のための文型と表現 図表を使った説明の練習
第13回	引用の仕方	適切な引用の仕方 参考文献の引用の練習 期末レポートのテーマの選定とアウトラインの作成
第14回	レポート作成	レポート作成

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
授業内で出す課題が終わらない場合は、授業終了後に各自で仕上げ、指示された期日までに提出することとする。
授業前に準備が必要な場合は、その都度指示をするので、授業までに各自で準備を終えてくること。予習課題が出された場合は、授業までに各自で取り組み、指示のある場合には事前に提出することとする。

【テキスト（教科書）】

毎回ハンドアウトを配布する。

【参考書】

アカデミック・ジャパニーズ研究会編著『留学生の日本語②作文編』アルク

アカデミック・ジャパニーズ研究会編著『留学生の日本語④論文作成編』アルク

【成績評価の方法と基準】

提出課題：40 %、期末レポート：20%、平常点（授業参加、発表等）：40%

【学生の意見等からの気づき】

本授業は文章作成能力を高めることを目的とするため、授業時間内での作文時間を可能な限りとるようにしています。

【学生が準備すべき機器他】

自習の際に使用する PC

作成したデータを保存する USB メモリ等

【その他の重要事項】

教員の指示をよく聞き、課題の内容、提出期限等は厳守すること。指示した内容が守られない場合は、減点の対象となる。

欠席する場合は、各自で欠席回の内容を確認して次週の授業までに自習してくること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本語教育学、比較教育学

<研究テーマ>マイノリティ教育、教育政策

<主要研究業績>

中島久朱（2008）「グローバル化と公教育—教育基本法「改正」の論議と日本における多文化教育の可能性—」、『多言語多文化—実践と研究』vol.1

中島久朱（2008）「イギリスにおける『コミュニティの結束』政策と公教育」、『国際教育』第14号

中島久朱（2009）「英国における『コミュニティの結束』政策とエスニック・マイノリティの教育」、『日本国際教育学会20周年記念年報 国際教育学の展開と多文化共生』、学文社

中島久朱（2011）「現代イギリスの多文化主義と社会統合—公教育における多様性の容認と平等の問題—」、『国際移動と教育』、江原裕美編、明石書房

【Outline (in English)】

This course aims to help students develop their academic writing skills in Japanese. During this course, students will have opportunities to study and discuss examples of Japanese academic writing.

At the end of this course, students will be able to write a structured academic paper in Japanese.

BSP500B7

日本語論文作成基礎AⅢ

幸田 佳子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

大学で必要な論文の書き方を学ぶ。

【到達目標】

論文に必要な書き言葉のルールを習得する。

段落構成を習得する。

文章全体の章立てをつけた構成方法を習得する。

参考資料の引用を習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業形態は、1-2 回対面とするブレンド型授業とする。

レジメプリント導入後、調べたことやよくできた作文等は発表してもらう。課題提出後、添削した作文の書き直しを行う。共通の間違いや表現を取り上げる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	春学期の復習	秋学期のガイダンス オンラインと対面で顔合わせする。
第2回	表現の方法①	定義の意味、表現などを学ぶ。簡単な文を書く。
第3回	表現の方法②	分類の意味、表現等を学ぶ。簡単な文を書く。
第4回	表現の方法③	原因・理由の意味、表現等を学ぶ。簡単な文を書く。
第5回	表現の方法④	結果の意味、表現などを学ぶ。簡単な文を書く。
第6回	本論の展開の方法を見える。	モデル文でどんな展開をしているかみる。その後各自の論の展開方法を考える。
第7回	レポートの語彙表現	語彙や決まり句を調べてみる。
第8回	レポート作成の流れ	全体をとらえてから、一つずつ見ていく。
第9回	問題提起と目標規定	資料を調べる。メモの取り方を指導。
第10回	アウトラインの作成	自分レポートの構成を考えて、要点を ppt で表す。発表
第11回	アウトラインから文章化	各自のアウトラインの評価。良いものを見せる。
第12回	序章の段落の書き方の提示本論の論証の仕方	段落の構成と常套句を使って書く。
第13回	結論、参考文献の書き方	全体を仕上げる。最後に対面とオンラインで文章の書き方を確認する
第14回	全員で読み合わせ、推敲	各自の評価、他者の文を読んで評価する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

授業中書き終えなかった物は次週までに提出。書き直しはメール提出すること

【テキスト（教科書）】

特定の教科書は使用しない。

【参考書】

『留学生のためのここが大切文章表現』 石黒圭 スリーエーネットワーク
『新訂版留学生のための論理的な文章書き方』 二通信子 スリーエーネットワーク
『大学で学ぶ日本語ライティング』 佐々木瑞枝 The Japan Times
『Good Writing へのパスポート』 田中真理 くろしお出版

【成績評価の方法と基準】

毎回の提出物 50% 学期の末のレポート 30% 平常点 20%

【学生の意見等からの気づき】

知識を深めるために、話し合いも行うようにする。添削の字がわかりづらいとの指摘があったので、丁寧に書くようにする。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン持参については事前に指示する。

【その他の重要事項】

提出遅れは 80%になる。期限に遅れないこと。
欠席した場合は、クラスメートに聞いて補っておくこと。特に提出物は注意してください。
出席は全出席が前提。5 回以上の欠席は不可とする。
連絡事項は hoppi を見てください。
授業は基本対面授業としていますが、海外からの受講がある場合は、オンラインと対面の授業します。

【日本語学】

<専門領域>日本語学

<研究テーマ>文法と日本語教育

<主要研究業績>

- ① 1994 「『わけがない』『わけではない』『わけにはいかない』について」『語学教育研究論叢 11』大東文化大学
- ② 2002 「副詞『一応』について」『語学教育論叢』19 号 大東文化大学
- ③ 2011 「接尾辞『がち』と『ごみ』について」『語学教育論叢』28 号 大東文化大学
- ④ 2012 「教師主導型から活動型授業への改善の考察—脱タスクを目指して—」2012 年度 web 版実践研修フォーラム報告
- ⑤ 2014 「活動型授業への展開」『教育推進開発機構紀要』5 号 國學院大學
- ⑥ 2016 「日本語の中上級クラスにおける論文作成指導とその問題点」『語学教育研究論叢』第 34 号
- ⑦ 2020 「日本語教育に日本語文法を活かしていくには—「として」を例に考えた試み—」『語学教育研究論叢』第 37 号 大東文化大学

【Outline (in English)】

This class learns how to write necessary report, article at a university.

BSP500B7

日本語論文作成基礎 AⅣ

中島 久朱

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

大学院で必要となるレポートや論文の書き方を学ぶ

【到達目標】

日本語によるアカデミックな文章の作成において求められる語彙や適切な文体、文章構成のルールを身につけ、論理的な文章を作成できるようになる。
資料の要点を的確に読み取る力をつけ、適切な引用方法を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業の方法：教員の講義および、ペアワーク、ディスカッション、各自での文章の作成など。
フィードバックの方法：授業で作成した文章に対しては、教員からの個別のコメントの返却の他、授業内での講評や解説、受講生間でのピア・レビューなどによるフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	変化の形容	変化を表す図表の提示のための文型と表現
第 2 回	データの説明と分析	データの説明と分析の練習
第 3 回	数値データの対比と比較	数値データの対比と比較のための文型と表現
第 4 回	事実の対比と比較	データからわかる事実の対比と比較の練習
第 5 回	事実関係の考察	データが表す事実の考察と予測のための文型と表現
第 6 回	原因の考察	データを使用した原因の考察の練習
第 7 回	列挙	要点の列挙のための表現
第 8 回	引用	論述文の引用の仕方
第 9 回	同意と反論	引用に対する同意と反論の仕方
第 10 回	意見の提示	筆者自身の見解を表す表現
第 11 回	意見の段程の度合い	様々な表現による断定の度合いと使い分け
第 12 回	結論の提示	文章全体の結論を述べるための文型と表現
第 13 回	期末レポート作成準備	期末レポートのテーマの選定とアウトラインの作成
第 14 回	期末レポート作成	期末レポートの作成

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
授業内で出す課題が終わらない場合は、授業終了後に各自で仕上げ、指示された期日までに提出することとする。
授業前に準備が必要な場合は、その都度指示をするので、授業までに各自で準備を終えてくること。予習課題が出された場合は、授業までに各自で取り組み、指示のある場合には事前に提出することとする。

【テキスト（教科書）】

毎回ハンドアウトを配布する。

【参考書】

アカデミック・ジャパニーズ研究会『留学生の日本語②作文編』アルク

アカデミック・ジャパニーズ研究会『留学生の日本語④論文作成編』アルク
 二通信子・佐藤不二子『留学生のための論理的な文章の書き方』スリーエーネットワーク
 井上千以子『思考を鍛える レポート・論文作成方』慶應義塾大学出版会

【成績評価の方法と基準】

提出課題：40 %、期末レポート：20%、平常点（授業参加、発表等）：40%

【学生の意見等からの気づき】

本授業は文章作成能力を高めることを目的とするため、授業時間内でも可能な限り作文作業の時間をとるようにしています。

【学生が準備すべき機器他】

自習の際に使用する PC
 作成したデータを保存する USB メモリ等

【その他の重要事項】

教員の指示をよく聞き、課題の内容、提出期限等は厳守すること。指示した内容が守られない場合は、減点の対象となる。
 欠席する場合は、欠席した回の内容を各自で確認して次週の授業までに自習してくること。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本語教育学、比較教育学
 ＜研究テーマ＞マイノリティ教育、教育政策
 ＜主要研究業績＞

中島久朱（2008）「グローバル化と公教育—教育基本法「改正」の論議と日本における多文化教育の可能性—」、『多言語多文化—実践と研究』vol.1

中島久朱（2008）「イギリスにおける『コミュニティの結束』政策と公教育」、『国際教育』第14号

中島久朱（2009）「英国における『コミュニティの結束』政策とエスニック・マイノリティの教育」、『日本国際教育学会20周年記念年報 国際教育学の展開と多文化共生』、学文社

中島久朱（2011）「現代イギリスの多文化主義と社会統合—公教育における多様性の容認と平等の問題—」、『国際移動と教育』、江原裕美編、明石書房

【Outline (in English)】

This course aims to help students develop their academic writing skills in Japanese. During this course, students will have opportunities to study and discuss examples of Japanese academic writing.

At the end of this course, students will be able to write a structured academic paper in Japanese.

BSP500B7

日本語論文作成基礎 B I

幸田 佳子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

大学院で必要な論文の書き方を学ぶ

【到達目標】

論文に必要な書き言葉のルールを学び、書けるようになる。
 段落構成を習得できるようになる。
 文章全体の章立て構成をできるようになる。
 参考資料の引用の仕方を学び、引用方法ができるようになる。
 本論で使う文章展開の方法ができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本対面授業とする。入国できない学生用にオンラインも行い、ブレンド型とする。

授業の進め方

授業の初めに前回の授業で提出された課題のフィードバックを行う。講義形式で各々の項目のレジメを見ていく。練習問題や書き方を説明する。

調べたことや自分の文章を発表してもらうこともある。またテーマについて話し合いをすることもある。

最終授業で13回までの講義内容のまとめや復習だけでなく、課題に対する講評や解説を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	自己の研究テーマ紹介	授業のガイダンス クラス内で研究テーマを話す。対面で顔合わせをする。
第2回	書き言葉のルール①文体	話し言葉と書き言葉 丁寧体と普通体 文体について調べる
第3回	書き言葉のルール②文法と語彙	物事視点にして、主語が変わること、述語の選択 書き言葉の語彙の練習
第4回	書き言葉のルール③	名詞句
第5回	書き言葉のルール④	段落内の構成
第6回	レポート全体の構成	序・本・結、注、参考文献リストの書き方
第7回	序論①	課題の提示
第8回	序論②	目的の提示
第9回	本論文の種類	事実文と意見文
第10回	本論文の種類	描写 現前の描写
第11回	本論文の種類	描写 ナラティブ
第12回	事実文 定義	定義の説明
第13回	ppt のスライド作り方 研究テーマの ppt 作り	ppt のスライド見せ方
第14回	研究テーマの ppt 発表	各自の発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、1時間を標準とします。
 授業の中に書き終えなかったものは、hoppii に提出。

【テキスト（教科書）】

特定の教科書は使用しない。コピーとレジメを配布する

【参考書】

『新訂版留学生のための論理的な文章の書き方』二通信子他 スリーエーネットワーク
『改訂版大学・大学院留学生の日本語④論文作成編』アカデミック・ジャパニーズ研究会 アルク
『レポート・論文を書くための日本語文法』小森真理他 くろしお出版

【成績評価の方法と基準】

毎回の提出物 50 % (遅れた場合は 8 割となる) 学期末発表 20% レポートまとめ 20%
平常点 10 % {授業参加、出席、質問等}

【学生の意見等からの気づき】

早口で、指示がわからないという指摘を受けたので、意識してゆっくり話すようにする。

【学生が準備すべき機器他】

パソコンやタブレット端末

【その他の重要事項】

提出遅れは 80%になるので、期限におくれないこと
欠席した場合は、クラスメートに聞いて補っておくこと
出席は全出席が前提。5 回以上の欠席は不可とする
連絡事項は hoppii をみてください
授業は基本対面授業としますが、海外からの受講がある場合は、オンラインと対面の授業にします

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本語学
<研究テーマ>文法と日本語教育
<主要研究業績>

- ① 1994 「『わけがない』『わけではない』『わけにはいかない』について」『語学教育研究論叢』11 号 大東文化大学
- ② 2002 「副詞『一応』について」『語学教育研究論叢』19 号 大東文化大学
- ③ 2011 「接尾辞『がち』『ぎみ』について」『語学教育研究論叢』28 号 大東文化大学
- ④ 2012 「教師主導型から活動型授業への改善の考察—脱タスクを目指す—」2012 年度 web 版実践研修フォーラム報告
- ⑤ 2014 「活動型授業への展開」『教育推進開発機構紀要』5 号 國學院大學
- ⑥ 2016 「日本語の中上級クラスにおける論文作成指導とその問題点」『語学教育研究論叢』34 号 大東文化大学
- ⑦ 2020 「日本語教育に日本語文法を活かしていくには—「として」を例に考えた試み—」『語学教育研究論叢』第 37 号 大東文化大学

【Outline (in English)】

This class learns how to write necessary report, article at a university.

BSP500B7

日本語論文作成基礎 B II

中島 久朱

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

大学院で必要となるレポートや論文の書き方を学ぶ

【到達目標】

書き言葉のルールを学び、レポート、論文に必要な文章表現を身につける。
アカデミックな文章の構成力を身につけ、日本語で論理的な文章が書けるようになる。
適切な参考資料の引用方法を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業の方法：教員の講義および、ペアワーク、ディスカッション、各自での文章の作成など。
フィードバックの方法：授業で作成した文章に対しては、教員からの個別のコメントの返却の他、授業内での講評や解説、受講生間でのピア・レビューなどによるフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	授業内容の説明
第 2 回	文法・文型 助詞の使い方① 目的格、主格 など	「で」と「を」、「を」と「に」、「を」と「が」の使い分け
第 3 回	文法・文法 助詞の使い方② 複合助詞、「は」と「が」の使い分け	複合助詞、複合助詞、分け
第 4 回	言葉の形の使い分け① 適切な形	適切な形の選択
第 5 回	言葉の形の使い分け② 適切な時間表現	適切な時間表現の使い分け
第 6 回	自動詞・他動詞	自動詞と他動詞の形のルール 自動詞と他動詞の使い分けのルール
第 7 回	受身	受け身表現の使い方のルール
第 8 回	呼応	呼応表現の使い方
第 9 回	文末表現	文末表現の調整
第 10 回	文字・表記① ひらがな・カタカナ・漢字	ひらがなと漢字の使い分け カタカナ表記のルール
第 11 回	文字・表記② 漢字の選択、句読点	漢字の選択と誤変換 句読点の打ち方
第 12 回	書き言葉	書き言葉らしさ 表現のかたさ
第 13 回	文体と語彙	意味の似ている表現 名詞化、する動詞化 専門用語の選び方
第 14 回	ミニ・レポート作成	ミニ・レポート作成

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
授業内で出す課題が終わらない場合は、授業終了後に各自で仕上げ、指示された期日までに提出することとする。

授業前に準備が必要な場合は、その都度指示をするので、授業までに各自で準備を終えてくること。予習課題が出された場合は、授業までに各自で取り組み、指示のある場合には事前に提出することとする。

【テキスト（教科書）】

毎回ハンドアウトを配布する。

【参考書】

石黒圭・筒井千絵「留学生のためのここが大切文章表現のルール」スリーエーネットワーク

佐々木瑞江・細井和代・藤尾喜代子「大学で学ぶための日本語ライティング 短文作成からレポート作成まで」The Japan Times
二通信子・佐藤不二子『留学生のための論理的な文章の書き方』スリーエーネットワーク

【成績評価の方法と基準】

提出課題：40 %、期末レポート：20%、平常点（授業参加、発表等）：40%

【学生の意見等からの気づき】

文章作成のための授業ですので、実際に文章を書いて表現力を身につけるため、授業内でも作文の時間を多めに設けています。
文法については、要望により適宜説明の時間を増やしたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】

自習の際に使用する PC

作成したデータを保存する USB メモリ等

【その他の重要事項】

教員の指示をよく聞き、課題の内容、提出期限等は厳守すること。指示した内容が守られない場合は、減点の対象となる。

欠席する場合は、欠席した回の内容を各自で確認して次週の授業までに自習してくること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本語教育学、比較教育学

<研究テーマ>マイノリティ教育、教育政策

<主要研究業績>

中島久朱（2008）「グローバル化と公教育—教育基本法「改正」の論議と日本における多文化教育の可能性—」、『多言語多文化—実践と研究』vol.1

中島久朱（2008）「イギリスにおける『コミュニティの結束』政策と公教育」、『国際教育』第14号

中島久朱（2009）「英国における『コミュニティの結束』政策とエスニック・マイノリティの教育」、『日本国際教育学会20周年記念年報 国際教育学の展開と多文化共生』、学文社

中島久朱（2011）「現代イギリスの多文化主義と社会統合—公教育における多様性の容認と平等の問題—」、『国際移動と教育』、江原裕美編、明石書房

【Outline (in English)】

This course aims to help students develop their academic writing skills in Japanese. During this course, students will have opportunities to study and discuss examples of Japanese academic writing.

At the end of this course, students will be able to write a structured academic paper in Japanese.

BSP500B7

日本語論文作成基礎BⅡ

幸田 佳子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

大学に必要な論文の書き方を学ぶ。

【到達目標】

論文に必要な書き言葉のルールを学び、書けるようになる。

段落構成を習得できるようになる。

文章全体の章立て構成をできるようになる。

参考資料の引用の仕方を学び、引用方法ができるようになる。

本論で使う文章展開の方法ができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本対面授業とする。入国できない学生用にオンラインも行い、ブレンド型とする。

授業の進め方

授業の初めに前回の授業で提出された課題のフィードバックを行う。講義形式で各々の項目のレジメを見ていく。練習問題や書き方を説明する。

調べたことや自分の文章を発表してもらうこともある。またテーマについて話し合いをすることもある。

最終授業で13回までの講義内容のまとめや復習だけでなく、課題に対する講評や解説を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	春学期の復習	秋学期のガイダンス
第2回	事実説明 比較	事柄を比較する。表現と構成を見ていく。
第3回	事実説明 分類	物事を分類する。分類基準と構成を見ていく。
第4回	事実説明 原因・理由	物事の原因・理由の表現と構成を見ていく。
第5回	事実説明 帰結	物事の帰結の表現と構成を見ていく。
第6回	意見文の構成	意見文と根拠の構成、また反駁の仕方も見ていく。
第7回	論証の仕方	データ 引用 ケースなどの種類を見ていく
第8回	レポート作成フロー	レポートの過程プロセスの説明と問題の焦点を考える方法を見ていく
第9回	問題提起	序論復習をしながら、自分の問題設定を明らかにする
第10回	本論のためのアウトライン	全体のアウトライン作成の方法を見る
第11回	結論の書き方	結論 注 参考文献の書き方を見る
第12回	レポート作成①	実践 アウトライン作成 教師に確認してもらう
第13回	レポート作成②	アウトラインの文章化
第14回	レポート作成③	文章推敲をして、書き直していく。提出する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、1時間を標準とします。

授業の中に書き終えなかったものは、hoppii に提出。

【テキスト（教科書）】

特定の教科書は使用しない。コピーとレジメを配布する。

【参考書】

『新訂版留学生のための論理的な文章の書き方』二通信子他 スリーエーネットワーク

『改訂版大学・大学院留学生の日本語④論文作成編』アカデミック・ジャパニーズ研究会 アルク

『レポート・論文を書くための日本語文法』小森真理他 くろしお出版

【成績評価の方法と基準】

毎回の提出物 50 %（遅れた場合は 8 割となる） レポートまとめ 30%

平常点 20% [授業参加、出席、質問等]

【学生の意見等からの気づき】

板書の字が読みにくいと言われ、丁寧に書くようにしている

【学生が準備すべき機器他】

必要時にパソコン持参などの指示

【その他の重要事項】

提出遅れは 80%になるので、期限におくれないこと

欠席した場合は、クラスメートに聞いて補っておくこと

出席は全出席が前提。5 回以上の欠席は不可とする

連絡事項は hoppii をみてください

授業は基本対面授業としますが、海外からの受講がある場合は、オンラインと対面の授業にします

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本語学

<研究テーマ>文法と日本語教育

<主要研究業績>

① 1994 『『わけがない』『わけではない』『わけにはいかない』について』『語学教育研究論叢』11 号 大東文化大学

② 2002 『副詞『一応』について』『語学教育研究論叢』19 号 大東文化大学

③ 2011 『接尾辞『がち』『ざみ』について』『語学教育研究論叢』28 号 大東文化大学

④ 2012 『教師主導型から活動型授業への改善の考察—脱タスクを目指して—』2012 年度 web 版実践研修フォーラム報告

⑤ 2014 「活動型授業への展開」『教育推進開発機構紀要』5 号 國學院大學

⑥ 2016 「日本語の中上級クラスにおける論文作成指導とその問題点」『語学教育研究論叢』34 号 大東文化大学

⑦ 2020 「日本語教育に日本語文法を活かしていくには—「として」を例に考えた試み—」『語学教育研究論叢』第 37 号 大東文化大学

【Outline (in English)】

This class learns how to write necessary report, article at a university.

BSP500B7

日本語論文作成基礎 BⅣ

中島 久朱

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

大学院で必要となるレポートや論文の書き方を学ぶ

【到達目標】

書き言葉のルールを学び、レポート、論文に必要な文章表現を身につける。

アカデミックな文章の構成力を身につけ、日本語で論理的な文章が書けるようになる。

適切な参考資料の引用方法を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業の方法：教員の講義および、ペアワーク、ディスカッション、各自での文章の作成など。

フィードバックの方法：授業で作成した文章に対しては、教員からの個別のコメントの返却の他、授業内での講評や解説、受講生間でのピア・レビューなどによるフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	文書・談話①	文の長さを読みやすさ
第 2 回	文書・談話②	読み手に配慮した文の書き方
第 3 回	指示詞による文の接続	文脈指示と接続
第 4 回	接続詞と文章の構成	接続詞による文章の接続と構成
第 5 回	意見と事実の提示	自身の意見を表す表現 他者の意見や事実を表す表現
第 6 回	レポート・論文の作成①	複雑な内容を説明する場合の内容の整理 アカデミックな文章の段落構成
第 7 回	レポート・論文の作成②	導入部の構成 定義と例示
第 8 回	レポート・論文の作成③	データの提示と整理 データの提示
第 9 回	レポート・論文の作成④	引用の方法と引用文の作成 引用
第 10 回	レポート・論文の作成⑤	対比と比較の方法 対比と比較
第 11 回	レポート・論文の作成⑥	同意と反論の述べ方 同意と反論
第 12 回	レポート・論文の作成⑦	考察と結論の述べ方 期末レポートのテーマの検討 考察と結論
第 13 回	期末レポート準備	期末レポートのアウトラインの作成と資料の整理
第 14 回	期末レポート作成	期末レポートの作成

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

授業内で出す課題が終わらない場合は、授業終了後に各自で仕上げ、指示された期日までに提出することとする。
授業前に準備が必要な場合は、その都度指示をするので、授業までに各自で準備を終えてくること。予習課題が出された場合は、授業までに各自で取り組み、指示のある場合には事前に提出することとする。

【テキスト（教科書）】

毎回ハンドアウトを配布する。

作成したデータを保存する USB メモリ等

【参考書】

アカデミック・ジャパニーズ研究会『留学生の日本語④論文作成編』アルク

石黒圭・筒井千絵「留学生のためのここが大切文章表現のルール」スリーエーネットワーク

佐々木瑞江・細井和代・藤尾喜代子「大学で学ぶための日本語ライティング 短文作成からレポート作成まで」The Japan Times
二通信子・佐藤不二子『留学生のための論理的な文章の書き方』スリーエーネットワーク

【成績評価の方法と基準】

提出課題：40 %、期末レポート：20%、平常点（授業参加、発表等）：40%

【学生の意見等からの気づき】

文章作成のための授業ですので、実際に文章を書いて表現力を身につけるため、授業内でも作文の時間を多めに設けています。

文法については、要望により適宜説明の時間を増やしたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】

自習の際に使用する PC

【その他の重要事項】

教員の指示をよく聞き、課題の内容、提出期限等は厳守すること。指示した内容が守られない場合は、減点の対象となる。

欠席する場合は、欠席した回の内容を各自で確認して次週の授業までに自習してくること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本語教育学、比較教育学

<研究テーマ>マイノリティ教育、教育政策

<主要研究業績>

中島久朱（2008）「グローバル化と公教育—教育基本法「改正」の論議と日本における多文化教育の可能性—」、『多言語多文化—実践と研究』vol.1

中島久朱（2008）「イギリスにおける『コミュニティの結束』政策と公教育」、『国際教育』第14号

中島久朱（2009）「英国における『コミュニティの結束』政策とエスニック・マイノリティの教育」、『日本国際教育学会20周年記念年報 国際教育学の展開と多文化共生』、学文社

中島久朱（2011）「現代イギリスの多文化主義と社会統合—公教育における多様性の容認と平等の問題—」、『国際移動と教育』、江原裕美 編、明石書房

【Outline (in English)】

This course aims to help students develop their academic writing skills in Japanese. During this course, students will have opportunities to study and discuss examples of Japanese academic writing.

At the end of this course, students will be able to write a structured academic paper in Japanese.

LIN500B7

日本語の性格 I

滝浦 真人

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

“日本語らしさ”とはどのようなもので、またそれはどこから生じてくるかを探っていく。「日本語学」の本や授業で触れたことのある事柄でも、そののどこがどう“日本語らしい”のかを考えることは、日本語を複眼的に見ることを可能にしてくれるだろう。春学期は、文字、音、語、文といった言語学的単位に沿いながら、ひと味違った角度からトピックを眺めていく。

【到達目標】

- (1) 日本語が漢字をどのように取り入れたかを理解し説明できるようになる。
- (2) 日本語の音声をコミュニケーションの観点で理解し説明できるようになる。
- (3) 言語の変化というもの正しい捉え方を理解し説明できるようになる。
- (4) 「ハ」と「ガ」を語り方の構えの相違として理解し説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

毎回、考察のための素材を配布し、受講者自身による考察と講師の解説とを組み合わせながら進行する。授業内で提出する小課題は、グループ・ラインなどを通じて他の受講生の考えも互いに見ながら、ディスカッションし考察していく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	日本語の「性格」とはどのようなことを考え、授業の趣旨や目標を明確にする。
第2回	漢字と日本語	日本語が漢字をどのように取り入れたかを見て、そこから漢字使用の日本語らしさを見出す。
第3回	日本語の表記	漢字・ひらがな・カタカナを併用することの意味を、それぞれの経緯に遡って考える。
第4回	日本語の語種	日本語の語彙を構成する和語・漢語・外来語という語種のもつ機能的相違を探索する。
第5回	日本語の音とリズム	モーラと音節の相違を理解した上で、日本語のリズムがどう構成されるか考察する。
第6回	音象徴と日本語	日本語で好まれる擬音・擬態語を支える音象徴を普遍と特殊の側面から考察する。
第7回	日本語のオノマトペ	日本語の擬音・擬態語がもっている語構成的な特徴を探り、その機能を考察する。
第8回	連濁と日本語①	連濁が音声現象に見えてそうではないことを、生起／不生起環境の考察から見出す。
第9回	連濁と日本語②	連濁の機能を理解した上で、アクセントなどによる類似の機能についても検討する。

第10回 位相語	社会的条件や心理的条件などによって言葉が変わる側面に目を向けることを通して、日本社会を考える。
第11回 言語変化	若者言葉と言われるような言語変化の進み方を、言語一般の次元に置いて考察する。
第12回 ラ抜き言葉	「日本語の乱れ」と言われたラ抜き言葉が、実は長期におよぶ言語変化の一局面だったことを理解する。
第13回 「ハ」の語り	日本語の特徴である助詞「ハ」を取り上げ、それを語り方の構えとして考察する。
第14回 「ガ」の語り	「ハ」と対比的に用いられる「ガ」を取り上げ、語り方の構えとして比較考察する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
参考書の内容は事前に確認しておき、授業内容に関係の深い箇所について、授業前・授業後に読んで理解を深める習慣をつける。
授業時に配布される資料についても、さらなる考察の出発点として振り返る。

【テキスト（教科書）】

教科書という形では使用しない。毎回授業時に配布する資料を用いる。

【参考書】

滝浦真人編（2020）『日本語学入門』放送大学教育振興会
ほか授業内で指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（授業内での課題やディスカッション等） 60 %
期末レポート 40 %

【学生の意見等からの気づき】

学問する楽しさを伝えられる授業にしたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】

授業資料を印刷すると大部になるため、クラスの共有フォルダを作成し、そこにアップされたファイルを資料として見てもらいながら授業を進めます。受講の際は、パソコンやスマホなど、インターネットに接続できる機器を持参してください。

【その他の重要事項】

昨年度と基本的に同内容なので、去年履修した人は取れません（ゴメン！）。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞言語学・語用論・コミュニケーション論

＜研究テーマ＞ポライトネス、日本語語用論

＜主要研究業績＞

滝浦真人（2016）『日本語リテラシー』放送大学教育振興会

滝浦真人（2008）『ポライトネス入門』研究社

【Outline (in English)】

Some characteristics of contemporary Japanese will be considered in terms of how it is used and understood by native speakers. In the spring semester, linguistic functional aspects are focused on.

LIN500B7

日本語の性格Ⅱ

滝浦 真人

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

“日本語らしさ”とはどのようなもので、またそれはどこから生じてくるかを探っていく。「日本語学」の本や授業で触れたことのある事柄でも、そのどこがどう“日本語らしい”のかを考えることは、日本語を複眼的に見ることを可能にしてくれるだろう。秋学期は、日本語に特徴的な対人関係表現をはじめ「語用論的」な面に着目して、“人が言葉で何をなすか？”について、中国語などとも比較しながら考えていく。

【到達目標】

- (1) 日本語を語用論的に見るための基礎知識を理解する。
- (2) ポライトネスの考え方を理解し説明することができる。
- (3) 対人関係の表現に関わる諸現象を考察することができる。
- (4) 現代日本語の成立事情を理解し他言語と比較考察できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

毎回、考察のための素材を配布し、受講者自身による考察と講師の解説とを組み合わせながら進行する。授業内で提出する小課題は、グループ・ラインなどを通じて他の受講生の考えも互いに見ながら、ディスカッションし考察していく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	日本語の「性格」とはどういうことかを考え、授業の趣旨や目標を明確にする。
第2回	語用論の基本	グライスの協調の原理と会話の原則をはじめ、語用論の基礎知識を再確認する。
第3回	効率と配慮	伝達効率と対人配慮が反比例の関係にあることを確認し、具体的に考察する。
第4回	ポライトネス	ポライトネスの理論的枠組みを理解し、日本語のポライトネス的性格を考察する。
第5回	呼称	対人関係専用の手段として呼称をとらえ、理論的と具体的な両面から考察する。
第6回	あいさつ	あいさつという行為の意味に立ち返り、あいさつの意味論と語用論を考察する。
第7回	感謝・謝罪	非常に基本的な言語行為を取り上げ、他言語とも対照しつつ日本語らしさを考察する。
第8回	依頼・勧誘と応諾・断り	典型的な言語行為の1つを取り上げ、他言語とも対照しつつ日本語らしさを考察する。
第9回	褒め／褒められ・フェイスイスワーク	フェイスに直接関わる言語行為を取り上げ、他言語とも対照しつつ日本語らしさを考察する。
第10回	敬語（意味論）	対人関係専用手段としての敬語を取り上げ、それが対人的な（距離）の表現として機能していることを理解する。

第 11 回 敬語（語用論）	敬語は人間関係の像を表現するとの考えに立った上で、敬語の語用論を考察する。
第 12 回 授受表現	授受動詞を 3 系列有する日本語話者が、それによって何をやりとりしているのか考察する。
第 13 回 標準語と日本語	近代日本語の成立事情による影響を確認し、日本語のありかたについて考える。
第 14 回 日本語はどこへ向かっているか？	“気になる日本語”がいつも取り沙汰され、敬語などの“馬鹿丁寧化”が感じられる日本語の行く末を考える。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
参考書の内容は事前に確認しておき、授業内容に関係の深い箇所について、授業前・授業後に読んで理解を深める習慣をつける。
授業時に配布される資料についても、さらなる考察の出発点として振り返る。

【テキスト（教科書）】

教科書という形では使用しない。毎回授業時に配布する資料を用いる。

【参考書】

滝浦真人（2008）『ポライトネス入門』研究社
滝浦真人・大橋理枝（2015）『日本語とコミュニケーション』放送大学教育振興会
滝浦真人編（2018）『新しい言語学』放送大学教育振興会
椎名美智（2021）『「させていただく」の語用論』ひつじ書房

【成績評価の方法と基準】

平常点（授業内での課題やディスカッション等） 60 %
期末レポート 40 %

【学生の意見等からの気づき】

学問する楽しさを伝えられる授業にしたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】

授業資料を印刷すると大部になるため、クラスの共有フォルダを作成し、そこにアップされたファイルを資料として見てもらいながら授業を進めます。受講の際は、パソコンやスマホなど、インターネットに接続できる機器を持参してください。

【その他の重要事項】

昨年度と基本的に同内容なので、去年履修した人は取れません（ゴメン！）。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>言語学・語用論・コミュニケーション論
<研究テーマ>ポライトネス、日本語語用論
<主要研究業績>（参考書に挙げたもの以外で）
滝浦真人（2013）『日本語は親しさを伝えられるか』岩波書店
滝浦真人（2005）『日本の敬語論 ポライトネス理論からの再検討』大修館書店
加藤重広・滝浦真人編（2016）『語用論研究法ガイドブック』ひつじ書房

【Outline (in English)】

Some characteristics of contemporary Japanese will be considered in terms of how it is used and understood by native speakers. In the fall semester, interpersonal aspects such as politeness and honorifics are focused on.

CUA500B7

伝統文化と民衆世界 I

ヤナ・ウルバノヴァー

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の古典文学と和歌、沖縄の琉歌から読み取れる日本の伝統文化について考えていきます。日本の文学と沖縄の文学の比較だけでなく、東洋と西洋の文学、文化、考え方も紹介し、それぞれの特徴について学びます。グローバル世界に置かれている日本の伝統文化の位置付けに関する意識を深め、考察力を促します。

This course focuses on the characteristics of Japanese and Okinawan approach mainly in classical poetry, prose and culture. The topic will be further highlighted by discussing differences in Eastern and Western world views, and by encouraging students to develop and present their own ideas on importance and position of Japanese traditional culture in the global world.

【到達目標】

この授業を通じて次のスキルが獲得できます

1. 代表的な文学作品、表現、修辞法について学ぶことで、その文化や歴史的な背景に関する理解が深まります
2. 日本と沖縄、また東洋と西洋の文化、文学、世界観の特徴に関する知見を養うことができます
3. 学んだことや気付いたことについて各自が意見交換、議論、プレゼンテーションすることによって幅広い考察力を身に付けることができます

Through this course you will acquire the following skills:

1. You will deepen your understanding of Japanese culture, history and literature by studying classical Japanese literary works together with literary devices and expressions
2. You will further enhance your understanding of culture and literature by comparing literary works and cultures of Japan and Okinawa as well as comparing them with Western philosophical and literary approaches
3. You will learn how to express your ideas in speaking and writing by engaging in discussions and presentations and submitting a final essay on a designated topic

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

プリントや映像資料を使用した講義形式での授業を基本としますが、コースの後半において、受講生には、各自が学んだ知識を最大限に活用し、関心のある関連分野について考察した成果を発表してもらう機会を設けます。また、最終回には授業で取り上げたテーマに関してのエッセイを提出して頂きます。
課題に対する説明やコメント等は授業の最後に行います。そこでは受講生からの質問も受け付けます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業の概略、受講の心構え、成績評価の方法、発表の日程についての説明
第 2 回	日本文学の概要	奈良時代と平安時代を中心とした日本古典文学の代表的な作品やその時代背景の紹介
第 3 回	日本人の自然観	自然を愛する日本人、四季の意味、陰陽思想。自然に見る日本および西洋の文化・考え方の違い

第4回	日本美意識における主要な概念	兼好法師による『徒然草』から読み取れる日本文化や文学における美意識の四つの主要な概念
第5回	日本の神話世界	『古事記』に見られる古代日本の世界観。日本の神話、ギリシャ神話、聖書から伝わるそれぞれの世界観の特徴と比較
第6回	和歌の修辞法	和歌の序詞、枕詞、掛詞の役割。日本の歌と西洋の詩における伝統技法の特徴
第7回	物語の世界	作り物語（『竹取物語』）と歌物語（『伊勢物語』）を中心に物語というジャンルの紹介
第8回	沖縄の言葉①	琉球列島の言葉と文化の発達。琉球語の中にある沖縄語
第9回	沖縄の言葉②	沖縄本島の言葉の特徴、琉歌の言葉と表記法について
第10回	琉歌の世界	琉歌の特徴（言葉、形式、作者、伴奏等）、古典音楽と民謡
第11回	恩納なべと吉屋つる	琉歌の伝説的な二人の女流歌人の生涯と代表的な琉歌の紹介
第12回	和歌と琉歌の表現に見られる類似点	和歌から影響を受けた琉歌における表現、和歌の改作琉歌
第13回	和歌と琉歌の表現に見られる特徴	和歌と琉歌に共通する表現におけるそれぞれの観念の違い。たとえば「雪」について
第14回	まとめ	これまでの授業で取り上げたテーマの議論。エッセイの提出

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

前回の授業で学んだことを復習し、授業内に行われる発表および最後に提出するエッセイを書くための十分な考察を進めて頂きたい。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

Please revise all the materials distributed in class, as they will form the basis for the discussions and final essay. In addition, each student will be asked to deliver an oral presentation on a designated topic and to submit a final essay at the end of the semester.

Preparatory study and review time for this class are 2 hours each.

【テキスト（教科書）】

テキストは指定せず、プリントを使用します。

【参考書】

他の参考書については授業の進行にそって、そのつど紹介します。

【成績評価の方法と基準】

平常点（授業への参加、毎時提出するリアクションペーパー、ディスカッションへの参加等、約30%）、発表（40%）、エッセイ（30%）により評価します。

Grading criteria:

- Active participation in class (expressing opinions, engaging in discussions): 30%
- Oral presentation: 40%
- Final essay: 30%

【学生の意見等からの気づき】

国際的な視点で、伝統文化の重要性および異文化の存在について考察し、意見の交換ができる環境作りに努めます。受講生からのコメントを歓迎します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
<研究テーマ>
<主要研究業績>

【<専門領域>】

日本文学、沖縄の文学、和歌、琉歌、オモロ

【<研究テーマ>】

琉歌の表現研究—和歌やオモロとの比較

【<主要研究業績>】

●「琉歌における「雪」について（下）」（『沖縄文化』123号（第52巻1号）、沖縄文化協会、2019年6月）

●「琉歌における「雪」について（中）」（『沖縄文化』122号（第51巻2号）、沖縄文化協会、2018年3月）

●「琉歌における「雪」について（上）」（『沖縄文化』121号（第51巻1号）、沖縄文化協会、2017年8月）

●The Four Seasons in Okinawan Ryūka Poetry – Comparison with Classical Waka Poetry and Old Okinawan Omoro Songs. (「沖縄の歌である琉歌における四季について—古典の和歌と沖縄のオモロとの比較—」) (『Studia Orientalia Slovaca (SOS) (スロバキアの東洋研究)』第15巻1号、Comenius University, Department of East Asian Studies (コメニウス大学東アジア研究学科)、2016年)
●『琉歌の表現研究—和歌・オモロとの比較から—』(森話社、2015年)
●「オモロと琉歌における「大和」のイメージ」(田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか—江戸から見る自意識の変遷』笠間書院、2015年)

【Outline (in English)】

This course focuses on the characteristics of Japanese and Okinawan approach mainly in classical poetry, prose and culture. The topic will be further highlighted by discussing differences in Eastern and Western world views, and by encouraging students to develop and present their own ideas on importance and position of Japanese traditional culture in the global world.

CUA500B7

伝統文化と民衆世界Ⅱ

横山 泰子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の絵本文化を、比較文化的な観点から学びます。日本では前近代から子ども向けの絵本が多数出版されており、歴史的に有名な作品は外国語に翻訳されています。絵本文化の伝統をふまえたうえで、日本語の原書と翻訳版の差異を通し、文化の多様性を楽しむことを目的とします。

【到達目標】

例年、日本人学生と留学生の履修が多いクラスであり、互いのコミュニケーション能力を高めることが全体の目標です。学生は授業時間内での発表、翻訳の課題、他者の発表への応答を行い、最終的な期末レポートを書きます。それにより、以下の知識とスキルを身に付けることができます。

＊日本語を母語とする学生は、日本語や英語等を用いながら翻訳やディスカッションに参加することでコミュニケーション能力を高めるとともに、異文化の相手に対して論理的な日本語で絵本文化についての説明ができるようになる。

＊外国人留学生は、日本語や自らの母語能力を活用しながら翻訳やディスカッションに参加することでコミュニケーション能力を高めるとともに、日本の絵本文化について論理的な日本語で説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

日本の絵本についての概要を講義で説明します。その後、課題として受講生一人一人に各自が使用できる言語〔日本語以外〕で書かれた絵本を案内しますので、その文章を自力で日本語に翻訳してもらいます。その翻訳文を授業中に発表、全員での議論を経て、よりよい表現を工夫しながら、異文化理解につとめます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	授業についての説明	シラバス内容の確認とテキストの選定
第2回	日本の絵本史（講義）	日本の絵本の歴史について教員が概略を説明（江戸～明治）
第3回	日本の絵本史〔講義〕	日本の絵本の歴史について教員が概略を説明（大正以降）
第4回	学生の発表 日本の絵本の絵について	担当者の発表と全体のディスカッション
第5回	学生の発表 日本の絵本の色彩について	担当者の発表と全体のディスカッション
第6回	学生の発表 日本の絵本のテーマについて	担当者の発表と全体のディスカッション
第7回	学生の発表 日本の絵本と漫画について	担当者の発表と全体のディスカッション
第8回	学生の発表 絵本と児童文化について	担当者の発表と全体のディスカッション
第9回	学生の発表 絵本と教育について	担当者の発表と全体のディスカッション

第10回	学生の発表 絵本と言葉遊びについて	担当者の発表と全体のディスカッション
第11回	学生の発表 絵本と大人の関わり	担当者の発表と全体のディスカッション
第12回	学生の発表 社会における絵本の位置づけ	担当者の発表と全体のディスカッション
第13回	学生の発表 絵本の読み聞かせ方	担当者の発表と全体のディスカッション
第14回	全体のまとめ	扱った絵本全体についてのディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備準備・復習時間は講義1回につき1時間程度です。発表が当たっている回は、事前に翻訳と音読の準備が求められます。

【テキスト（教科書）】

特にありません

【参考書】

特にありません

【成績評価の方法と基準】

期末レポート50パーセント

平常点（学習状況、発表内容、授業時の参加度）50パーセント

【学生の意見等からの気づき】

昨年度は受講生全員が中国語の話者であったことから、日本語の絵本を学生各自が中国語に翻訳し、文を比較検討する時間を作ってみました。実験的な試みでしたが「日本と中国の文化や言語を比較するのに役だった」というアンケート結果がありました。今後も可能な範囲で、日本語を学生の母語に翻訳する機会を作ります。

【学生が準備すべき機器他】

情報機器

【その他の重要事項】

質問はメールで yyoko@hosei.ac.jp

をお願いします。

【担当教員の専門分野等】

<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/16/0001557/profile.html>

【Outline (in English)】

The aim of this course is to help students acquire basic knowledge of comparative history about Japanese children's books.

The goal of this course is to understand the diversity of culture through seeing the differences between originals and the translated books.

Before each class meeting, students will be expected to spend one hour to understand the course content.

Your overall grade in this class will be decided based on the following

Term-end report: 50%, in class contribution: 50%.

PHL500B7

日本の思想・西欧の思想 I

高田 圭

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業では、「日本を超えて日本を捉える思考と手法」について学ぶ。春学期は、「トランスナショナリズム」をキーワードに日本を世界的な視野で捉える。ナショナル、インターナショナル、移動、ネットワークといった関連する概念と対比させながらトランスナショナルの意味を探究するとともに、国境を越える現象を捉える研究手法を概観した上で、日本のトランスナショナルなかたちを探っていく。

【到達目標】

- トランスナショナリズムの概念を理解する。
- トランスナショナルな視点から日本社会を捉える方法論を習得する。
- 日本のトランスナショナルな現象を学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業は、セミナー形式で実施する。講義、文献講読、プレゼンテーションをベースに討論をおこなう。学際的、国際的な視点から、互いに学び合う空間を形成する。報告発表へのフィードバックについても、主にディスカッションの場において実施する。その他、個別にフィードバックが必要な場合には、オフィス・アワーを用いる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の進め方
第2回	国民国家とトランスナショナリズム	国民国家とは何かを理解する
第3回	世界システム・世界社会	グローバル社会学の方法を理解する
第4回	グローバル・ヒストリー	グローバル歴史学の方法を理解する
第5回	移動・ネットワーク	隣接概念を理解する
第6回	雑種文化	日本的「雑種文化」を理解する
第7回	地政学的位置	日本文明の地政学的位置を理解する
第8回	国境の越え方	日本的な「国境の越え方」を理解する
第9回	トランスナショナルな語り	「他者」への語り方の問題を考える
第10回	市民社会とトランスナショナリズム	市民社会とトランスナショナリズムを日本の事例から読み解く
第11回	移民とトランスナショナリズム	移民とトランスナショナリズムを日本の事例から読み解く
第12回	文化のトランスナショナリズム	文化とトランスナショナリズムを日本の事例から読み解く
第13回	観光のトランスナショナリズム	観光とトランスナショナリズムを日本の事例から読み解く
第14回	まとめ	全体の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 受講者は文献を読み、討論に備えて準備する。
- 報告者は、文献を丹念に読み込み、重要なポイントと、関連する情報を追加調査し、問題提起を含めた報告を準備する。
- 本授業の準備（予習）および復習時間は、各2時間を標準とするが、文献および研究報告をする週には、さらに2時間程度の準備の時間が必要な場合がある。

【テキスト（教科書）】

セバスチャン・コンラード、2021年『グローバル・ヒストリー：批判的歴史叙述のために』岩波書店
加藤周一、1974年『雑種文化 日本の小さな希望』講談社
加藤周一、丸山眞男他編、2004年『日本文化のかくれた形』岩波書店
西川長夫、2004年『国境の越え方』平凡社
など

【参考書】

授業内で必要に応じて提示。

【成績評価の方法と基準】

- 授業参加・発言: 20%
- プレゼンテーション: 40%
- 最終レポート: 40%

【学生の意見等からの気づき】

初回授業のため特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

授業の詳細については初回授業にて説明する。

【担当教員の専門分野等】

< 専門領域 >

政治社会学、歴史社会学、文化社会学、国際日本学

< 研究テーマ >

- 日本の市民社会と社会運動
- グローバル化と日本の社会変容

< 近年の主要著書 >

「コスモポリタンなアカデミック・パブリクスと 国際日本学 ー誰に向けて、どのように日本を語るかー」『国際日本学』第19号、2022年、27-60頁。

「グローバル地域研究としての国際日本学 ー日本を超えて、日本をとらえる、思考と手法 ー」『国際日本学』第18号、2021年、3-36頁。

- "The Japanese Global Sixties in Isolation: Towards a Global Historical Sociology of the Sixties " in 1968 - A Global Approach, Europejskie Centrum Solidarność, 2020, pp. 137 - 155.

- "Connecting with the First or the Third World? Two Paths Toward the Cross-National Movement Mobilization in the Japanese Global Sixties" Moving the Social: Journal of Social History and the History of Social Movements, 63, 2020, pp. 65-90, Klartext publishers.

- "Escaping through the Networks of Trust: The U.S. Deserter Support Movement in the Japanese Global Sixties" The Sixties: A Journal of History, Politics and Culture, 10(2), 2017, pp. 165-181, Taylor & Francis.

【None】

None

【None】

None

【None】

None

【None】

None

【Outline (in English)】

In recent years transnationalism has been a thriving approach for understanding phenomena that cut across national borders in social science and humanities. This course examines Japan through such a transnational lens. We will first learn different theoretical and methodological approaches to transnationalism. Then, we explore various debates over Japanese transnationalism by the Japanese authors along with cases of transnational phenomena between Japan and foreign countries.

PHL500B7

日本の思想・西欧の思想Ⅱ

高田 圭

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業では、「日本を超えて日本を捉える思考と手法」について学ぶ。秋学期は、欧米と日本の社会思想、社会理論の比較、理論化を通じて日本を世界的な視野で捉える。西洋の普遍主義の問題、西洋と非西洋の二項対立といった大枠を踏まえた上で、比較や理論化の手法について学ぶ。また具体的な比較、理論化の例として、全体主義の思想および市民性・公共性の問題などを予定している。

【到達目標】

- 理論・思想の意味と意義を理解する。
- 普遍主義の問題、西洋と非西洋の思想的緊張関係を理解する。
- 思想・理論の比較を通じて日本への理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業は、セミナー形式で実施する。講義、文献講読、プレゼンテーションをベースに討論をおこなう。学際的、国際的な視点から、互いに学び合う空間を形成する。報告発表へのフィードバックについても、主にディスカッションの場において実施する。その他、個別にフィードバックが必要な場合には、オフィス・アワーを用いる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の進め方
第2回	理論と思想	日本研究における理論と思想を理解する
第3回	普遍主義と複数性	Universality と Multiplicity について理解する
第4回	比較と理論化	比較の方法、理論化の方法について理解する
第5回	西洋と非西洋、西洋と日本	西洋と非西洋の二項対立を考える
第6回	西洋の全体主義の思想	文献を通じてドイツの全体主義の思想を理解する
第7回	西洋の全体主義への反省の思想	文献を通じてドイツの全体主義への反省を理解する
第8回	日本の全体主義の思想	文献を通じて日本の全体主義の思想を理解する
第9回	日本の全体主義への反省の思想	文献を通じて日本の全体主義への反省を理解する
第10回	西洋の市民社会の理論	文献を通じて西欧の市民社会の理論を理解する
第11回	西洋の公共圏の理論	文献を通じて西欧の公共圏の理論を理解する
第12回	日本の市民社会の理論	文献を通じて日本の市民性の理論を理解する
第13回	日本の公共圏の理論	文献を通じて日本の公共圏の理論を理解する
第14回	まとめ	全体総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 受講者は文献を読み、討論に備えて準備する。
- 報告者は、文献を丹念に読み込み、重要なポイントをとまとめ、関連する情報を追加調査し、問題提起を含めた報告を準備する。

- 本授業の準備（予習）および復習時間は、各2時間を標準とするが、文献および研究報告をする週には、さらに2時間程度の準備の時間が必要ながある。

【テキスト（教科書）】

丸山眞男、2006年『現代政治の思想と行動』未来社
 ハンナ・アーレント、2017年『全体主義の起源 3』みすず書房
 池上英子、2005年『美と礼節の絆 日本における交際文化の政治的起源』NTT出版
 ユルゲン・ハーバマス、1994年『公共性の構造転換』未来社
 酒井直樹、2017年『ひきこもりの国民主義』岩波書店
 イマニュエル・ウォーラーステイン、2008年『ヨーロッパの普遍主義—近代世界システムにおける構造的暴力と権力の修辞学』明石書店
 など

【参考書】

適宜授業内で提示する。

【成績評価の方法と基準】

- 授業参加・発言: 20%
- プレゼンテーション: 40%
- 最終レポート: 40%

【学生の意見等からの気づき】

初回授業のため特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

授業の詳細については初回授業にて説明する。

【担当教員の専門分野等】

< 専門領域 >

政治社会学、歴史社会学、文化社会学、国際日本学

< 研究テーマ >

- 日本の市民社会と社会運動

- グローバル化と日本の社会変容

< 近年の主要著書 >

「コスモポリタンなアカデミック・パブリクスと 国際日本学 —誰に向けて、どのように日本を語るか—」『国際日本学』第19号、2022年、27-60頁。

「グローバル地域研究としての国際日本学 —日本を超えて、日本をとらえる、思考と手法—」『国際日本学』第18号、2021年、3-36頁。

- "The Japanese Global Sixties in Isolation: Towards a Global Historical Sociology of the Sixties " in 1968 - A Global Approach, Europejskie Centrum Solidarność, 2020, pp. 137 - 155.

- "Connecting with the First or the Third World? Two Paths Toward the Cross-National Movement Mobilization in the Japanese Global Sixties" Moving the Social: Journal of Social History and the History of Social Movements, 63, 2020, pp. 65-90, Klartext publishers.

- "Escaping through the Networks of Trust: The U.S. Deserter Support Movement in the Japanese Global Sixties" The Sixties: A Journal of History, Politics and Culture, 10(2), 2017, pp. 165-181, Taylor & Francis.

【None】

None

【None】

None

【None】

None

【None】

None

【Outline (in English)】

In this course, we will examine Japan through a comparative theoretical lens. There has long been a complex and challenging issue while employing western-based theory to capture Japan - whether or not the Western theory can apply to non-western Japan. To understand the intricate relationship between Japanese studies and usage of theory, we will start with debates over universalism and particularism as well as the west and the rest dichotomy. Then we devote sessions to examine works by Japanese and western thinkers who examined similar theoretical problems and compare their differences and similarities.

HIS500B7

史料から読む琉球とアジア I

得能 壽美

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

琉球からみた東アジアとの関係史を、琉球史料の講読をしつつ考察する。前近代琉球を考えるためには、その歴史的環境から、中国・日本の史料、当然ながら琉球の史料にあたらなくてはならない。史料講読は琉球史料を中心に進める。

【到達目標】

琉球史料を中心に史料講読を進め、一定程度の理解と読解能力を身に付け、歴史学の方法により総合的・実証的に考える眼を養う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

前半は琉球史の概括的な理解と、史料の全体的な把握にあたる。後半は、琉球史料から、その解読方法を学びつつ、東アジアにおける関係史をみる。基本的な方法論を身につけようとしていきたい。史料講読に際して、習熟度によっては担当部分を決めて報告を求め、講評や解説、論文指導までできればと考えている。また、必要に応じて史料を追加することもある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	琉球史入門	講義の紹介と、琉球・中国・日本の関係史を概括的にみる。
2	日本史と琉球史の史料論	日本史研究と琉球史研究における史料論と、その相違。
3	古琉球期史料にみる対外関係（中国・日本古代史料）	古代の琉球をめぐる中国と日本の史料について
4	古琉球史料にみる対外関係（歴代宝案・朝鮮王朝実録・琉球史料）	中世の琉球をめぐる中国・朝鮮・琉球の史料について
5	近世琉球史料にみる対外関係（島津関係史料）	1609 年以降の島津による琉球統治関係史料について
6	近世琉球史料にみる対外関係（琉球史料）	いわゆる日中両属に関する琉球史料について
7	史料講読 中山世譜・中山世鑑	史料講読。首里王府編纂史料にみる近世琉球のありかた。
8	史料講読 羽地仕置	史料講読。羽地朝秀の施策にみる琉球の立場と政治的転換
9	史料講読 羽地仕置	史料講読。近世琉球の成立
10	史料講読 御教条	史料講読。蔡温の琉球史の認識と立場
11	史料講読 御教条	史料講読。近世琉球に生きた人々
12	史料講読 御教条	史料講読。琉球における儒教的支配の成立
13	史料講読 伊江親方日々記	史料講読。対島津関係
14	史料講読 伊江親方日々記	史料講読。琉球内政関係

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
全体的に下記で示す参考書を読む。史料講読については、事前に複写を配布するので、予習をする。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。史料等を配布する。

【参考書】

『沖縄からアジアが見える』比嘉政夫 岩波ジュニア新書
『アジアのなかの琉球王国』高良倉吉 吉川弘文館（歴史文化ライブラリー 47）
『琉球王国』高良倉吉 岩波新書
『沖縄入門－アジアをつなぐ海域構想』浜下武志 ちくま新書

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 % レポート 50 %

毎回の史料の性格と内容が異なり、当該史料から解説を繰り返すことがないので、出席を重視する。平常点は、史料講読に積極的にあたること、授業の内容にとって有益な議論や質問を用意できること、史料批判や史料に即した議論ができることなどを考慮する。レポートでは、琉球史からみた対外関係史の理解度を確認し、さらに史料による考察を加えてほしい。

【学生の意見等からの気づき】

多様な研究、あるいは新しい研究分野の創出につながるよう、最新の研究成果をとりこむ。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 琉球史 近世史

＜研究テーマ＞ 八重山地域史、生業と民衆生活史、史料論

＜主要研究業績＞

『近世八重山の民衆生活史－石西礁湖をめぐる海と島々のネットワーク』単著（榕樹書林 2007 年 316 頁）

「中山政権と宮古・八重山」（財団法人沖縄県文化振興会史料編集室『沖縄県史 各論編第三巻 古琉球』沖縄県教育委員会 2010 年 240～259 頁）

「移動するナマコと変化するその役割－近世八重山ナマコの行方－」『琉球・沖縄研究』3（早稲田大学琉球・沖縄研究所 2010 年 115～140 頁）

「明和大津波の被害概況と復旧・復興」『最新科学が明かす明和大津波』南山舎 2020 年

【Outline (in English)】

The history of Ryukyu relations with East Asia is considered while reading Ryukyu historical materials.

HIS500B7

史料から読む琉球とアジアⅡ

得能 壽美

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

琉球からみた東アジアとの関係史を、具体的な論考で使った史料を確認しつつ考察を進める。論文作成のための課題設定、史料調査の方法、史料の所在なども、具体的事例をもとに講義する。

【到達目標】

史料について理解を身に着ける。日本史とは異なる琉球史の方法と史料によって、学生自身の研究テーマにもそくして、新たな研究テーマの創成を考える。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

具体的な論考に使用した史料を講読しつつ、近世琉球の生産と税制、物流を、具体的な産物を取りあげて、東アジアにおよぶ広がりを見る。史料講読から新たな研究テーマを創成し、その報告を求め、講評や解説、論文指導にまでおよぶたい。また、必要に応じて史料を追加することもある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	琉球史入門	講義の概要と、琉球・中国・日本の関係史を概説する
2	近世琉球産品の由来と島産化Ⅰ	東アジアにおける技術などの移動
3	近世琉球産品の由来と島産化Ⅱ	琉球国内の島産化の展開と商品流通
4	ナマコⅠ	琉球関係史料にみる生産と上納
5	ナマコⅡ	薩摩・幕府への献上と中国との貿易
6	海人草	近世琉球の専売制、近現代における生産・流通
7	上布	人頭税と八重山上布
8	木綿Ⅰ	伝搬と栽培の広がり
9	木綿Ⅱ	近世における利用と商品としての展開
10	ジュゴン	近世の税制・捕獲・信仰
11	イノシシ	近世における害獣駆除と利用
12	牛馬	近世の利用と規制
13	アダン	近世における上納と民衆生活での利用
14	バインナップル	近代の導入事情と展開

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
全体的に下記で示す参考書を読む。

【テキスト（教科書）】

「移動するナマコと変化するその役割」（得能、『琉球・沖縄研究』第 3 号）など、それぞれのテーマに関連した論文のコピーを配布する。

【参考書】

『琉球王国』高良倉吉 岩波新書
『琉球・沖縄史の世界』豊見山和行（編） 吉川弘文館（日本の同時代史 18）
『近世八重山の民衆生活史』得能壽美 榕樹書林

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 % レポート 50 %

毎回の史料の性格と内容が異なり、当該史料から解説を繰り返すことがないので、出席を重視する。平常点は、史料講読に積極にあたること、史料に即した議論ができることなどを考慮する。レポートでは、それぞれの研究テーマに即しつつ、琉球史からみた対外関係史の理解度を確認する。

【学生の意見等からの気づき】

毎回、時間の許す限り、史料の読み方を解説する。多様な研究、新しい研究分野を考えるために、最新の研究成果をみる。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン、プロジェクター

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 琉球史 近世史

＜研究テーマ＞ 八重山地域史、生業と民衆生活史、史料論

＜主要研究業績＞

『近世八重山の民衆生活史－石西礁湖をめぐる海と島々のネットワーク－』単著（榕樹書林 2007年 316頁）

『日本近世生活絵引 奄美・沖縄編』編集・分担執筆（神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター 2014）

『八重山の歴史と文化、自然』分担執筆（石垣市教育委員会 2015）
「明和大津波の被害概要と復旧・復興」『最新科学が明かす明和大津波』南山舎 2020

【Outline (in English)】

The history of Ryukyu relations with East Asia is considered while reading Ryukyu historical materials.

HIS500B7

戦後沖縄と対外関係Ⅰ

明田川 融

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

沖縄戦（1945年）から四分の三世紀が、そして沖縄の「本土復帰」（1972年）から半世紀がたつ。沖縄に対する米国の軍事植民地意識、そして日本本土の構造的差別は消え去っていない—むしろ、2015年後半からの、日本政府による名護市辺野古への米海兵隊普天間飛行場移設強行のようすをみていると、そうした差別は、より執拗になってさえいるように思われる。

本授業では、沖縄・日本本土・米国の、ときに引き合い、ときに反撥し合う力学が、戦後沖縄の形成にどのような影響を及ぼしたかを解き明かす糸口を学生とともに探りたい。「戦後」とはさしあたり、プロローグとしての沖縄戦から冷戦期までを扱う。

【到達目標】

学生は、戦後沖縄の対外関係について、近年の外交文書をはじめとする史料公開によって実証的に目覚ましい進展を示している研究業績を系統だてて検討することができ、さらに、その検討を踏まえたうえで、戦後沖縄の対外関係について新たなイメージを紡ぎだすことができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

以下に列挙するトピックを道標に、基本文献と史資料の精読、および学生中心の討論によって進めていく。

第2回目以降、授業のはじめに、前回授業で教員が課したレポート等の課題に対する個々の受講生の解答からいくつか取りあげ、受講生全体に対するフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	なぜ沖縄戦は闘かわれたか	日米両国の戦略における沖縄の位置づけを探る。
2	恩賜の民権／恢復民権	沖縄と本土における初期占領政策を比較研究する。
3	沖縄とマッカーサーの「平和」憲法	制憲過程のウラにある「沖縄要塞化」構想について考察する。
4	昭和天皇「沖縄メッセージ」の深淵	昭和天皇にとって「沖縄」とは何であり、何でなかったのかを考える。
5	講和問題のなかの沖縄	対日講和をめぐって噴出する帰属論の位相を整理する。
6	「潜在主権」論	対日講和条約第3条の前提をなす「潜在主権」とは誰が何のために発案したのか検討する。
7	海兵隊と核の島の形成	冷戦期を象徴する「海兵隊と核の島」＝沖縄は、どのように形成されたのか跡づける。
8	軍用地問題の生起と展開	「土地を守る四原則」（立法院請願決議）を軸に軍用地問題とは何であったのか考えてみる。
9	沖縄の「赤狩り」	極東の軍事拠点沖縄で起こった人民党非合法化の動きは、沖縄戦後史ばかりでなく冷戦史の文脈でいかなる意味をもつのか検討する。

10	南と北の領土問題	日ソ国交回復交渉に対して米国は、「日本が二島返還でソ連に譲歩するなら米国は沖縄をもらう」と干渉した。この北と南の領土問題の形成過程を調べてみる。
11	沖縄と安保改定	沖縄という視点から60年安保改定を捉えなおす。
12	沖縄返還交渉の公約・違約・密約	外務省による「いわゆる密約」調査の結果も踏まえながら、沖縄返還交渉を検証してみる。
13	沖縄が怒った日	1970年12月におこったコザ騒動とは戦後沖縄にとって何であつたのかを考える。
14	「安保」から「同盟」への変容と沖縄	「安保」が「同盟」へと変容するなか、日本の役割も基地提供に「行動」や「思いやり予算」を伴うものへと変わっていくが、沖縄については何が変わり、何が変わらなかったのか。この問題を検討してみたい。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

大学設置基準によれば、この授業の準備学習・復習時間は、各2時間が標準となる。そのうえで、百聞は一見に如かず。米空軍嘉手納基地、同海兵隊普天間飛行場、キャンプ・ハンセン、日米両政府が普天間飛行場の代替施設建設を「粛々と、強行している名護市辺野古崎など、沖縄基地問題の現場を各自が実際に訪れ、感じる事が望ましい。

「戦後沖縄と対外関係Ⅱ」をも履修することが望ましい。

【テキスト（教科書）】

古典のなかの古典といえますが、さしあたり手ごろな通史として中野好夫・新崎盛暉『沖縄戦後史』（岩波書店、1976年）、および新崎『沖縄現代史』（岩波書店、2005年）、ならびに宮里政玄ほか編著『戦後沖縄の政治と法—1945-72年』（東京大学出版会、1975年）を、また、沖縄をめぐる日米関係史について書かれた研究として、河野康子『沖縄返還をめぐる政治と外交—日米関係史の文脈』（東京大学出版会、1994年）、宮里『日米関係と沖縄—1945-1972』（岩波書店、2000年）、沖縄国際大学公開講座委員会編集・発行『基地をめぐる法と政治』（2006年）、我部政明『戦後日米関係と安全保障』（吉川弘文館、2007年）、平良好利『戦後沖縄と米軍基地 「受容」と「拒絶」のはざま—1945-1972年』（法政大学出版局、2012年）、および中島琢磨『沖縄返還と日米安保体制』（有斐閣、2012年）を挙げておきます。近年の示唆にとむ研究成果として、鳥山淳『沖縄基地社会の起源と相克 1945-1956』（勁草書房、2013年）および大野光明『沖縄闘争の時代 1960／70』（人文書院、2014年）ならびに櫻澤 誠『沖縄現代史—米国防統治、本土復帰から「オール沖縄」まで』（中央公論新社、2015年）、さらに野添文彬『沖縄返還後の日米安保—米軍基地をめぐる相克』吉川弘文館、2016年もぜひ一読されたい。

【参考書】

拙著『沖縄基地問題の歴史—非武の島、戦の島』（みすず書房、2008年）。

【成績評価の方法と基準】

出席状況や授業中のコメントなどによる平常点（100 %）

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムを活用したり、オンラインによる授業に参加できるような機器およびネット環境

【その他の重要事項】

重要なお知らせ（2022年2月8日）

新型コロナ禍により、授業の開始日や方法等につき重要な連絡がなされる可能性がありますので、受講生は本 Web シラバスおよび学習支援システムを小まめにチェックするようにしてください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日米関係史、日本政治外交史

<研究テーマ> 日米地位協定の成立過程
沖縄と日米安保体制の歴史
日本と核兵器との関係史

<主要研究業績および刊行物>

・『日米行政協定の政治史—日米地位協定研究序説—』法政大学出版局、1999年。
・『沖縄基地問題の歴史—非武の島、戦の島—』みすず書房、2008年（第30回沖縄協会・沖縄研究奨励賞[社会科学部門]受賞）。
・『日米地位協定—その歴史と現在—』みすず書房、2017年。
・波多野澄雄・河野康子監修（明田川補）『沖縄返還関係資料』（第1回配本分、全7巻）現代史料出版、2017年。
・「核兵器と『国民の特殊な感情』」1～6（雑誌『みすず』に2013年6月号より2015年8月まで不定期連載）。
・ジョン・ハーシー『ヒロシマ 増補版』法政大学出版局、2003年（共訳）。
・ジョン・W. ダワー著『昭和 戦争と平和の日本』みすず書房、2010年（監訳）。
・ジョン・W. ダワー／ガバン・マコーマック著『転換期の日本へ「ボックス・アメリカナ」か「ボックス・アジア」か』NHK出版、2014年（共訳）。
・『占領期年表 1945-1952年 沖縄・憲法・日米安保』創元社、2015年（監修）。

近年、広島・長崎・ビキニを経験した日本の核兵器に対する「国民感情」と政府の安全保障政策との連関について研究をまとめるべく、資料収集や分析視覚の検討を行っている。

また、1950年代半ばの沖縄で米軍により強行された土地強制収用にさいして、住民代表である立法院（県議会のような組織）がなしたと、なしえなかったことの実証にも取り組んできた。

現在は、波多野澄雄・筑波大学名誉教授および河野康子・法政大学名誉教授ならびに平良好利・中京大学准教授らによる監修で刊行が進められている沖縄施政権返還交渉関係資料集成の編集補佐がもな仕事となっている。

【Outline (in English)】

【Course outline】

Seventy years have passed from the battle in Okinawa, and fifty years from the reversion of Okinawa. Okinawa still seems to be under U.S. military colonialism. It suffers structural discrimination by the people of Japan proper as well. In post-war Okinawa and foreign relations 1, we consider and discuss the dynamism that formed post-war Okinawa. In this class, post-war means the period from the battle in Okinawa to the end of the cold war.

【Learning objectives】

The goal of this course is to understand Ryukyu/Okinawa and its foreign relations after World War II.

【Learning activities outside of classroom】

Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

【Grading criteria/policy】

Your overall grade in the class will be decided based on the following

In class contribution:100%

HIS500B7

戦後沖縄と対外関係Ⅱ

明田川 融

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

これまで沖縄には在日米軍専用基地が著しく偏在してきた。その基地には米軍が排他的管理権を行使し、さらに、基地の外の軍用機事故等に対する捜査・検分から日本側が排除されることも少なくない。また、1972年の施政権返還まで、米軍構成員・軍属・それらの家族に琉球民裁判所の裁判権は及ばず、施政権返還後も日本側の裁判権行使はままならない。本授業で学生は、これらの事柄に象徴される「戦後」沖縄が負わされた日米地位協定問題をめぐる日米琉関係の歴史を考察することになる。

【到達目標】

学生は、戦後沖縄の対外関係について、近年の外交文書をはじめとする史料公開によって実証的に目覚ましい進展を示している研究業績を系統だてて検討することができ、さらに、その検討を踏まえたうえで、戦後沖縄の対外関係について新たなイメージを紡ぎだすことができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

以下に列挙するテーマを道標に、基本文献と史資料の精読、および学生中心の討論によって進めていく。

第2回目以降、授業のはじめに、前回授業で教員が課したレポート等の課題に対する個々の受講生の解答からいくつか取りあげ、受講生全体に対するフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	対象	「軍人・軍属・それらの家族」をめぐる琉・米・日関係について考察し、議論する。
第2回	基地設定条項の形成	全土基地方式の形成をめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。
第3回	基地設定をめぐる諸問題	全土基地方式の展開をめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。
第4回	管理権条項の形成	排他的管理権の形成をめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。
第5回	管理権をめぐる諸問題	排他的管理権の展開をめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。
第6回	受け入れ国法令	受け入れ国国内法令の適用をめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。
第7回	裁判権条項の形成	刑事裁判権規定（第17条）の形成をめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。
第8回	日本側一次裁判権放棄密約	受け入れ国の一次裁判権放棄取り決めをめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。
第9回	被疑者の告訴前身柄引き渡し問題	被疑者引き渡しをめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。
第10回	負担分担条項の形成	「思いやり予算」の成立をめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。

第11回	「思いやり予算」をめぐる政治過程	「思いやり予算」の展開をめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。
第12回	環境	環境保全をめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。
第13回	合議組織	日米合同委員会をめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。
第14回	改定	協定改定問題をめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

大学設置基準によれば、この授業の準備学習・復習時間は、各2時間が標準となる。そのうえで、百聞は一見に如かず。米空軍嘉手納基地、同海兵隊普天間飛行場、キャンプ・ハンセン、日米両政府が普天間飛行場の代替施設建設を「肅々と」強行している名護市辺野古崎など、沖縄基地問題の現場を各自が実際に訪れ、感じるものが望ましい。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

さしあたり、近年に刊行された以下の文献を挙げておく。

拙著『日米地位協定 その歴史と現在』みすず書房、2017年。

山本章子『日米地位協定 在日米軍と「同盟」の70年』中央公論新社、2019年。

信夫隆司『米軍基地権と日米密約 奄美・小笠原・沖縄返還を通して』岩波書店、2019年。

信夫隆司『米兵はなぜ裁かれないのか』みすず書房、2021年。

【成績評価の方法と基準】

出席状況や授業中のコメントなどによる平常点（100％）

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし。

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムを活用したり、オンラインによる授業に参加できるような機器およびネット環境

【その他の重要事項】

重要なお知らせ（2022年2月8日）

新型コロナウイルス禍により、授業の開始日や方法等につき重要な連絡がなされる可能性がありますので、受講生は本 Web シラバスおよび学習支援システムを小まめにチェックするようにしてください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日米関係史、日本政治外交史

<研究テーマ> 日米地位協定の成立過程
沖縄と日米安保体制の歴史
日本と核兵器との関係史

<主要研究業績および刊行物>

・『日米行政協定の政治史—日米地位協定研究序説—』法政大学出版局、1999年。

・『沖縄基地問題の歴史—非武の島、戦の島—』みすず書房、2008年（第30回沖縄協会・沖縄研究奨励賞〔社会科学部門〕受賞）。

・『日米地位協定—その歴史と現在—』みすず書房、2017年。

・波多野澄雄・河野康子監修（明田川補）『沖縄返還関係資料』（第1回配本分、全7巻）現代史料出版、2017年。

・「核兵器と『国民の特殊な感情』」1～6（雑誌『みすず』に2013年6月号より2015年8月まで不定期連載）。

・ジョン・ハーシー『ヒロシマ 増補版』法政大学出版局、2003年（共訳）。

・ジョン・W. ダワー著『昭和 戦争と平和の日本』みすず書房、2010年（監訳）。

・ジョン・W. ダワー／ガバン・マコーマック著『転換期の日本へ「ボックス・アメリカナ」か「ボックス・アジア」か』NHK出版、2014年（共訳）。

・『占領年表 1945-1952年 沖縄・憲法・日米安保』創元社、2015年（監修）。

近年、広島・長崎・ビキニを経験した日本の核兵器に対する「国民感情」と政府の安全保障政策との連関について研究をまとめるべく、資料収集や分析視覚の検討を行っている。

また、1950年代半ばの沖縄で米軍により強行された土地強制収用にさいして、住民代表である立法院（県議会のような組織）がなしたと、なしえなかったことの実証にも取り組んできた。

現在は、波多野澄雄・筑波大学名誉教授および河野康子・法政大学名誉教授ならびに平良好利・中京大学准教授らによる監修で刊行が進められている沖縄施政権返還交渉関係資料集成の編集補佐がおもな仕事となっている。

【Outline (in English)】

【Course outline】

United States military bases in Japan unevenly exist in Okinawa prefecture. U.S. armed forces exercise exclusive rights over them. And the Japanese authorities often can not exercise the right of search or inspection with respect to the accidents of U.S. military aircraft. Before the reversion of Okinawa, Okinawan court could not have criminal jurisdiction over the members of U. S. armed forces, civilian component and their dependents. Even after the reversion, Japanese court often cannot exercise the criminal jurisdiction over them. In post-war Okinawa and foreign relations 2, we consider the U.S.-Japan Status of Forces Agreement (SOFA or Chii-Kyotei) providing the conditions of the stationing of the U.S. military forces. And focusing SOFA problems, we discuss the history of the U.S.-Japan-Ryukyu/Okinawa relations.

【Learning objectives】

The goal of this course is to understand Ryukyu/Okinawa and its foreign relations after reversion of Okinawa.

【Learning activities outside of classroom】

Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

【Grading criteria/policy】

Your overall grade in the class will be decided based on the following

In class contribution:100%

ART500B7

仏教思想と仏教美術 I

高橋 悠介

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の中世には、聖徳太子関連寺院を中心に、太子の伝記が連綿として編まれた。こうした太子伝には、聖徳太子をめぐる伝承のみならず、仏教教説や寺院における注釈学、太子関連の諸寺院の動向など、様々な背景がうかがえる。また、聖徳太子の伝記は絵画化されて絵解きが行われ、特徴的な太子像も造像された。ここでは、後世への影響力の大きかった『聖徳太子伝暦』と、鎌倉後期の『正法輪蔵（聖法輪蔵）』という二つの太子伝から、特徴的な場面を取り上げて、読み比べつつ、これらと関連の深い太子絵伝や太子像などの造形作品について検討したい。

2021年に聖徳太子 1400 年御遠忌記念として開催された複数の展覧会や新たな研究動向もふまえて授業を行う。

【到達目標】

- ・画像資料とその背景にある文献資料を、複合的に読解する技術を身につける。
- ・寺院園で成立し享受された文献の性格を学び、これを読解する技術を習得する。
- ・日本の寺院における学問についての基礎知識を身に付け、中世の聖徳太子信仰をはじめ、日本の仏教文化に関する理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

最初は、聖徳太子伝の展開に関する概要と太子関連の造形作品、講読にあたっての基本的な知識について、講義形式で授業を進める。続いて、担当を決め、受講者による報告と討議を行っていく。授業内で議論できなかったことも、リアクションペーパー等の方法により意見を集め、次回に取り上げる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	講義の概要・進め方について説明。
第 2 回	『聖徳太子伝暦』と太子伝諸本	『聖徳太子伝暦』と太子伝諸本について講義。
第 3 回	太子絵伝の展開	聖徳太子の伝記の造形化（彫刻・絵画）について講義。
第 4 回	太子二十四歳条	淡路国に霊木漂着等の記事を講読し、その造形を検討。
第 5 回	太子二十五歳条	法華経の落字・法興寺落慶等の記事を講読し、その造形を検討。
第 6 回	聖徳太子と法華経説話	太子伝に限らず幅広く展開した太子の法華経関連説話を検討。
第 7 回	太子二十六歳条	百濟より阿佐太子来朝等の記事を講読し、その造形を検討。
第 8 回	太子二十七歳条（一）	黒駒で富士山に登る等の記事を講読し、その造形を検討。
第 9 回	太子二十七歳条（二）	膳大娘との婚礼・新羅からの孔雀献上等の記事を講読し、その造形を検討。
第 10 回	太子二十七歳条（三）	甲斐国からの黒駒の献上等の記事を講読し、その造形を検討。
第 11 回	太子二十八歳条（一）	百濟からの驢、羊、白雉等の献上の記事を講読し、その造形を検討。

第 12 回	太子二十八歳条（二）	太子の地震についての予言等の記事を講読し、その造形を検討。
第 13 回	太子二十九歳条	新羅への派兵等の記事を講読し、その造形を検討。
第 14 回	太子三十歳条	新羅の間諜等捕縛等の記事を講読し、その造形を検討。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とします。指定した講読文献の当該記事をよく読んで理解すると共に、関連する複数の造形を見て比較検討すること。また、授業中に言及する参考書を読むこと。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。

【参考書】

- ・『東大寺図書館蔵文明十六年書写『聖徳太子伝暦』影印と研究』（桜楓社、1985 年）
 - ・『日本庶民文化史料集成』第二巻（三一書房、1974 年）
 - ・慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編『中世聖徳太子伝集成』（勉誠出版、2005 年）
 - ・『日本の美術 442 中世の童子形』（至文堂 2003 年）
 - ・図録『聖徳太子展』（NHK・NHK プロモーション、2001 年）
 - ・図録『聖徳太子一日出づる処の天子』（日本経済新聞社、2021 年）
- その他、授業の中で指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表 5 0 %、平常点 5 0 %。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

- <専門領域> 日本中世文学・中世宗教思想史・書誌学
- <研究テーマ> 中世仏教文学・芸能・寺院資料論
- <主要研究業績>
- ・『禅竹能楽論の世界』（慶應義塾大学出版会、2014 年）
- ・「荒神の図像について―如来荒神を中心に―」（仏教美術論集第二巻『図像学Ⅰ―イメージの成立と伝承（密教・垂迹）』竹林舎、2012 年 5 月）
- ・「律院称名寺と聖徳太子伝―釋了敏の写本を中心に」（『説話文学研究』52 号、2017 年 9 月）

【Outline (in English)】

This course deals with the biography and image of Prince Shotoku.

At the end of the course, students are expected to become able to read and understand ancient Buddhist documents.

Before/after each class meeting, students will be expected to spend two hours to understand the course content.

Grading will be decided based on lab reports (50%), and in-class contribution (50%).

ART500B7

仏教思想と仏教美術Ⅱ

高橋 悠介

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

鎌倉時代を代表する絵巻の傑作『春日権現験記絵』の記事と絵を検討する。この絵巻に収められた春日権現（春日大明神）の霊験譚には、貴顕や南都僧の春日信仰、鎌倉時代の南都の宗教環境、南都僧の教学や儀礼、神仏習合など様々な背景がうかがえる。これまでに、美術史・日本史・日本文学など諸方面で積み重ねられてきた研究史をふまえ、『春日権現験記絵』を講読する。

【到達目標】

- ・寺社圏で成立し享受された文献の性格を学び、これを読解する技術を習得する。
- ・文献と図像資料を複合的に読解する技術を身につける。
- ・『春日権現験記絵』を通して、日本の神仏習合や仏教文化に関する理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

最初は、『春日権現験記絵』と南都の寺社文化についての基本的な知識について、講義形式で授業を進める。続いて、担当を決め、受講者による報告と討議を行っていく。授業内で議論できなかったことも、リアクションペーパー等の方法により意見を集め、次回に取り上げる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	講義の概要・進め方について説明。
第 2 回	春日社と春日曼荼羅	『春日権現験記絵』を講読する上での基礎知識として、春日社の沿革と春日曼荼羅について講義。
第 3 回	『春日権現験記絵』と貞慶の唱導資料	『春日権現験記絵』の成立をめぐる研究史を整理し、特に貞慶とその周辺による春日権現をめぐる霊験の集録との関係について講義。
第 4 回	『春日権現験記絵』巻四（一）	巻四「天狗参入東三条事」「永久春日詣時神託事」と絵の検討。
第 5 回	『春日権現験記絵』巻四（二）	巻四「普賢寺撰政事」「三条内府事」と絵の検討。
第 6 回	『春日権現験記絵』巻四（三）	巻四「後徳大寺左府事」と絵の検討。
第 7 回	『春日権現験記絵』巻五	巻五「俊盛卿事」「季能卿事」と絵の検討。
第 8 回	『春日権現験記絵』巻六（一）	巻六「伯行光事」と絵の検討。
第 9 回	『春日権現験記絵』巻六（二）	巻六「親宗卿事」「蛇吞心経事」と絵の検討。
第 10 回	『春日権現験記絵』巻七（一）	巻七「経通卿事」と絵の検討。
第 11 回	『春日権現験記絵』巻七（二）	巻七「開蓮房夢事」「近真陵王事」「隆季卿家女房夢事」と絵の検討。
第 12 回	『春日権現験記絵』巻八（一）	巻八「清涼寺本尊事」「依唯識論功能通病難事」と絵の検討。
第 13 回	『春日権現験記絵』巻八（二）	巻八「増利僧都事」「壹和僧都事」と絵の検討。

第14回 『春日権現験記絵』 卷八「法蔵僧都事」「離寺僧蒙神託事」と絵の検討、及び最後のまとめ。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。『春日権現験記絵』の当該記事をその場面の絵と共によく読み、関連説話を含めて利解すること。また、授業中に言及する参考書を読むこと。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。

【参考書】

藤田経世『校刊美術史料 寺院篇上』（中央公論美術出版、1972年）
『続日本の絵巻 春日権現験記絵』（中央公論社、1991年）
神戸説話研究会編『春日権現験記絵注解』（和泉書院、2005年）

【成績評価の方法と基準】

発表50%、平常点（出席状況等）50%

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本中世文学・中世宗教思想史・書誌学

<研究テーマ> 中世仏教文学・芸能・寺院資料論

<主要研究業績>

・「称名寺聖教中の春日関係資料と『春日権現験記絵』」（『説話文学研究』46、2011年7月）

・「貞慶をめぐる説話と律院―「異砂記」・「伯行光春日霊験譚」（『説話文学研究』55、2020年9月）

・「正楽寺蔵・荒神曼荼羅について―蔵王権現と習合した忿怒相の荒神像と諸尊」（『寺院文献資料学の新展開 第五巻 中四国諸寺院Ⅰ』臨川書店、2020年3月）

【Outline (in English)】

This course deals with the "Kasuga Gongen Genkie" (miraculous stories of Kasuga deity picture scroll).

At the end of the course, students are expected to become able to read and understand ancient Buddhist documents.

Before/after each class meeting, students will be expected to spend two hours to understand the course content.

Grading will be decided based on lab reports (50%), and in-class contribution (50%).

PRI500B7

データ分析法Ⅰ

田中 邦佳

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究を進める上で様々な機関が発表している数値データを利用したり、実験を実施して得たデータを使用することがある。そのようなデータは、研究テーマに合わせて分析し、その結果を可視化（グラフ化）して示す必要がある。本授業では演習を通じ、分析の目的によってどのような手法を用いるのが適切か、データ化や可視化における注意点について学ぶ。

【到達目標】

- (1) Excel や R を使用して基本的なデータの処理ができるようになる。
- (2) Excel や R を使用してデータの適切なグラフ化ができるようになる。
- (3) データの種類に応じた適切な分析・可視化ができるようになる。
- (4) 上記の3つの項目を踏まえて、参加者各自が関心を持つ研究テーマで用いられている手法の利点を説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義と演習形式で行う。

参加者は、Excel を用いたデータ処理や作図する演習を行い、データの解釈やまとめ方についてディスカッションを行う。授業の最終目標の発表に向け、各自が考えたデータ分析のテーマや可視化の手法について議論する。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定です。授業計画は授業の展開によって若干、変更する可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	Introduction	授業の進め方の説明
第2回	データの入力	Excel を使いデータの入力、注意点について
第3回	データの代表値の提示	平均値
第4回	平均値以外のデータの代表値の提示	中央値・最頻値
第5回	データのバラツキの提示	標準偏差
第6回	データの集計	集計結果のまとめ方
第7回	グラフを用いたデータの可視化	棒グラフ・折れ線グラフ
第8回	データの頻度の可視化	ヒストグラム
第9回	複数のタイプのデータの可視化	複数の要素が含まれたグラフ
第10回	複数のデータを扱うタイプのデータの可視化	散布図
第11回	データの量が多い場合の分析	大きなデータの分析
第12回	データ分析の結果の言葉での説明	データ分析の結果の文章化
第13回	研究テーマに合った分析と可視化	適切な分析手法の選択
第14回	総合演習	データ分析のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

参加者は、各種データを読み取って文にまとめたり、数値データをまとめてグラフなどの形に作図し準備しておく必要があります。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

プリントを配布します。

【参考書】

山田剛史, & 村井潤一郎. (2004). よくわかる心理統計. ミネルヴァ書房.

【成績評価の方法と基準】

60%: 平常点（授業への積極的な参加度・課題）

40%: レポート課題

欠席回数が通算 4 回に達した者は単位取得の資格を失う。また授業に積極的に参加する姿勢が見られない場合、欠席と同等の扱いとする。

【学生の意見等からの気づき】

具体的なデータを用いた分析演習の時間をより長く設定します。

【学生が準備すべき機器他】

Microsoft Excel (PC 版) が使える環境。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

第二言語習得

<研究テーマ>

第二言語の音韻習得やリーディングについて

<主要研究業績>

北原真冬・田嶋圭一・田中邦佳『音声学を学ぶ人のための Praat 入門』ひつじ書房 (2017)

川崎貴子・マシューズジョン・田中邦佳「L2 音韻カテゴリーの構築過程における音響の手がかりの利用と抑制—日本語母語話者による英語摩擦音習得—」白畑知彦・須田孝司 編『名詞句と音声・音韻の習得 (第二言語習得モノグラフシリーズ)』くろしお出版.(2017)

【Outline (in English)】

Course outline: In this course, students will learn the basic approach to summarizing data and methods for visualizing data.

Learning Objectives: At the end of the course, students are expected to do the followings:

(1) Reading various types of graphs.

(2) Making graph data according to specific cases.

(3) Reporting data objectively in writing.

Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend two hours to understand the course content.

Grading Criteria /Policy: Final Report 40%, Class Assignment 60%

PRI500B7

データ分析法Ⅱ

田中 邦佳

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究を進める上で様々な機関が発表している数値データを利用したり、実験を実施して得たデータを使用することがある。そのようなデータは、研究テーマに合わせて統計学的分析を行う必要がある。本授業では演習を通じ、いくつかの基礎的な統計的手法の仕組みを知り、分析の目的によってどのような手法を用いるのが適切か学ぶ。

【到達目標】

(1) 基本的な統計手法の仕組みについて理解する。

(2) 統計的な数値の意味を理解する。

(3) テーマに応じて適切な統計的分析ができるようになる。

(4) 上記の 3 つの項目を踏まえて、参加者各自の研究計画でどのような手法を用いるのが適切か提案できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義と演習形式で行う。

参加者は、Excel などを用いたデータ処理や統計に関する演習を行い、データの解釈やまとめ方についてディスカッションを行う。授業の最終目標の発表に向け、各自が考えたデータ分析のテーマや可視化の手法について議論する。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定です。授業計画は授業の展開によって若干、変更する可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	Introduction	授業の進め方の説明
第 2 回	記述統計と推測統計	記述統計と推測統計の違い
第 3 回	記述統計で用いた数値	平均・標準偏差
第 4 回	データのバラツキ	正規分布・標準偏差
第 5 回	信頼区間	信頼区間
第 6 回	カイ 2 乗検定	カイ 2 乗検定
第 7 回	カイ 2 乗検定の演習	カイ 2 乗検定の分析演習
第 8 回	t 検定（対応あり）	t 検定（対応あり）
第 9 回	t 検定（対応なし）	t 検定（対応なし）
第 10 回	t 検定の演習	t 検定の分析演習
第 11 回	2 要因の分散分析	2 要因の分散分析
第 12 回	多重比較と交互作用	多重比較と交互作用
第 13 回	言葉での報告	統計結果の文章での報告
第 14 回	総合演習	データの統計的分析のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

参加者は、各種データの分析を行う。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

プリントを配布します。

【参考書】

山田剛史, & 村井潤一郎. (2004). よくわかる心理統計. ミネルヴァ書房.

【成績評価の方法と基準】

60%: 平常点（授業への積極的な参加度・課題）

40%: レポート課題

欠席回数が通算 4 回に達した者は単位取得の資格を失う。また授業に積極的に参加する姿勢が見られない場合、欠席と同等の扱いとする。

【学生の意見等からの気づき】

分析課題を行う時間をより多く設定します。

【学生が準備すべき機器他】

Microsoft Excel (PC 版) が使える環境。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

第二言語習得

<研究テーマ>

第二言語の音韻習得やリーディングについて

<主要研究業績>

北原真冬・田嶋圭一・田中邦佳『音声学を学ぶ人のための Praat 入門』ひつじ書房 (2017)

川崎貴子・マシューズジョン・田中邦佳「L2 音韻カテゴリーの構築過程における音響の手がかりの利用と抑制—日本語母語話者による英語摩擦音習得—」白畑知彦・須田孝司 編『名詞句と音声・音韻の習得 (第二言語習得モノグラフシリーズ)』くろしお出版.(2017)

【Outline (in English)】

Course outline: In this course, students will learn the basic statistical methods.

Learning Objectives: At the end of the course, students are expected to do the followings:

- (1) Reading various types of graphs.
- (2) Making graph data according to specific cases.
- (3) Reporting data objectively in writing.
- (4) Summarizing some data in a poster

Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend two hours to understand the course content.

Grading Criteria /Policy: Final report (poster) 40%, Class Assignment 60%

LIT500B7

サブカルチャー論 I

倉本 さおり

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代のポップカルチャーはインターネットや SNS をはじめ、テレビ、雑誌、ゲームといった複数の媒体を通じて連動するように浸透し、社会的規範やわたしたちの自己形成にさまざまな影響を与えています。この授業では漫画やアニメ、ライトノベル、映画、ドラマ、2.5 次元舞台、アイドルなどのポップカルチャーを中心に、具体的な作品やコンテンツを取りあげ批評的に鑑賞するスタイルを採用します。さまざまな角度から積極的に楽しみつつ、ときに批判を交えた分析を行うことで、思考停止に陥らず、流動的な現実や個々の社会そのものの在り方を主体的に捉えるための視点や方法を学んでいきます。

【到達目標】

- ・授業中に学んだ視座を応用して自ら問題を発見し、多様なメディアで形作られる情報を用いて、多角的にポップカルチャーについて考えることができるようになる
- ・先行研究を体系的に理解した上で批判的に評価し、論点を整理しながら建設的な意見を述べるようになる
- ・異文化間の差異や共通性を踏まえながら、研究上の問題を発見することができるようになる
- ・先行研究を踏まえ、一次資料を発掘して検証しながら、客観的な説得力をそなえた論文を書いたり、口頭発表したりすることができるようになる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

履修生の人数と各自の状況を考慮したうえで、対面での授業を基本としつつオンラインを併用した講義を行う予定です。

講義では画像や映像サンプルを用いながら表象分析の具体的な方法をいくつか紹介し、歴史的・文化的な背景を踏まえて諸問題について検討していきます。授業中の質問やコメント、取り上げたいトピックの提案、フィールドワークの希望も歓迎。履修者の意見を取り入れつつ選んだコンテンツを実際に鑑賞し、ディスカッションを行い、ミニレポートの発表等もまじえながら論点を整理していくことで、プレゼン能力も同時に養っていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	授業の進め方について説明したのち、各自「サブカル歴」をまじえつつ自己紹介をしてもらいます。これまで自分がどんな文化の中で育ってきたのか、どんなジャンルやコンテンツに興味があるのか改めて意識することで、サブカルチャーないしポップカルチャーというものの存在がどのような手続きを経て人びとの自己形成に関わっていくのか主体的に確認していきます。
第 2 回	メディアとポップカルチャーの現況	『鬼滅の刃』や『呪術廻戦』といった最新のメガコンテンツをイントロダクションに、「サブカルチャー」と呼ばれてきたものの変遷、そして複数のメディアと連動して成長していく現代ポップカルチャーの特徴について概説します。
第 3 回	大衆とカルチャーと「物語」	日本の昔噺「桃太郎」と、その受容の歴史、そして現代の広告表現などに見られるイメージの変容を検証しながら、「物語」というものがポップカルチャーにおいてどのように援用／転用されてきたかを考えていきます。
第 4 回	ポップカルチャーの諸相①	2013 年度文化庁メディア芸術祭マンガ部門優秀賞を受賞した雲田はるこ『昭和元禄落語心中』を教材に、漫画・アニメ化作品それぞれで描かれる落語シーンの演出の違いに着目しつつ、各ジャンルの表現形態の特徴についてディスカッションしながら立体的に検討していきます。

第 5 回	ポップカルチャーの諸相 ②	『昭和元禄落語心中』に登場する落語が落語家によって実際に上演されている様子を「語り」ないし「語り手」という枠組みに注目しながら鑑賞します。その後、前回の授業を踏まえ、「枠組み」や「場」の形成というものがポップカルチャーの中で果たす意味について考えます。
第 6 回	ポップカルチャーの諸相 ③	『昭和元禄落語心中』に登場する演目「死神」と、サゲ（＝落ち）のバリエーションを中心に、第 3 回の授業で検証した「物語」の変容について改めて考察を深めていきます。
第 7 回	ミニレポート発表会	これまでの授業を踏まえ、自分が興味のあるモチーフを選び、簡単なレポート発表を行ってもらいます。その後クラス内で論点を洗い出しディスカッションを重ねることで期末レポートに各自フィードバックします。
第 8 回	テキストとコンテキスト ①	日本のアニメーション映画『天気の子』（新海誠監督）と韓国の映画『パラサイト』（ポン・ジュノ監督）における〈水〉ないし〈豪雨〉の表象の差異に着目し、同じ言葉やモチーフが異なる文脈に置かれることでまったく別の表象を伴ったたちのぼる事例について検討します。
第 9 回	テキストとコンテキスト ②	『天気の子』を実際に鑑賞した上で、前回の授業を踏まえてディスカッションを行い、社会背景とポップカルチャーにおける表象の相関について考察を深めていきます。
第 10 回	テキストとコンテキスト ③	『パラサイト』を実際に鑑賞した上で、前回の授業を踏まえてディスカッションを行い、社会背景とポップカルチャーにおける表象の相関について考察を深めていきます。
第 11 回	解釈とアダプテーション ①	田辺聖子の短編小説「ジョゼと虎と魚たち」（1985 年）を読んだうえで、犬童一心監督の実写映画『ジョゼと虎と魚たち』（2003 年）を鑑賞し、原作となったテキストがどのような解釈を経て映像化作品へと翻案されたのか分析していきます。
第 12 回	解釈とアダプテーション ②	前回の授業を踏まえ、タムラコータロー監督のアニメーション映画『ジョゼと虎と魚たち』（2020 年）を鑑賞し、どのようなプロセスを経て翻案に至ったのか、特に時代背景や社会環境の変化に着目しディスカッションしながら考察していきます。
第 13 回	解釈とアダプテーション ③	キム・ジョンゲン監督によるリメイク版『ジョゼと虎と魚たち』（2020）を鑑賞し、「テキストとコンテキスト」の回で検討した要素を念頭に入れたうえで、アダプテーションの様相についてディスカッションします。
第 14 回	まとめとレポート指導	期末レポートや研究発表に向け、授業中に提示された視点と論点を整理しつつ、各自の研究テーマを設定、互いにアドバイスします。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業内で扱うコンテンツは各テーマに文献調査や作品鑑賞をはじめ、ポップカルチャーをめぐるニュース、話題になっているコンテンツで気になったものは積極的にメモしておき、授業内での議論に役立ててください。
本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

必要に応じて資料を配布します。

【参考書】

※無理にそろえる必要はありません

- ・橋本陽介『ナラトロジー入門——プロップからジュネットまでの物語論』（水声社）
 - ・東浩紀『動物化するポストモダン——オタクから見た日本社会』（講談社現代新書）
 - ・三原芳秋、渡邊英理、鶴戸聡＝編著『クリティカル・ワード 文学理論 読み方を学び文学と出会いなおす』（フィルムアート社）
 - ・倉橋耕平『歴史修正主義とサブカルチャー 90 年代保守言説のメディア文化』（青弓社）
 - ・堀あきこ、守如子＝編『BL の教科書』（有斐閣）
 - ・永田大輔、松永伸太郎＝編『アニメの社会学—アニメファンとアニメ制作者たちの文化産業論』（ナカニシヤ出版）
 - ・山田奨治『マンガ・アニメで論文・レポートを書く——「好き」を学問にする方法』（ミネルヴァ書房）
- 他、授業ごとに参考書や参考作品を提示します。

【成績評価の方法と基準】

授業への参加態度 20 %、授業内で執筆・提出する課題 30 %、期末レポート 50 %

【学生の意見等からの気づき】

特に対面とオンラインを併用する場合は、個々の学生の発言が建設的な意見交換へとつながるよう、適宜調整を行いながら活発な議論の場を用意する。また授業ごとに論点の整理を行い、議論の足場をわかりやすく設定していく。

【学生が準備すべき機器他】

パソコンやタブレット等、オンライン授業に対応した機器（※難しい場合は応相談）

【その他の重要事項】

本科目は他専攻学生の履修も受け入れます。
授業は原則的に教室での対面形式で行う予定ですが、新型コロナウイルスの影響で通学が困難な学生がいることも鑑み、ハイフレックス形式を採用します。

【担当教員の専門領域等】

国内外の小説やマンガを中心に、雑誌や新聞、ラジオ等で書評やポップカルチャー批評を担当。共同通信文芸時評「デザインする文学」、週刊新潮「ベストセラー街道をゆく！」連載中。他、小説トリッパー、ダ・ヴィンチ誌レビューア。『文学界』新人小説月評 (2018)、毎日新聞文芸時評「私のおすすめ」(2019)。TBS ラジオ「文化系トークラジオ Life」サブパーソナリティ。

【Outline (in English)】

【Course outline】

Modern pop culture spreads through multiple media such as the Internet, social media, television, magazines and games, and has various influences on social norms and our self-formation. In this class, you will critically appreciate and discuss pop culture content such as manga, animation, light novels, movies, TV dramas, 2.5dimensional musicals, and idols. By identifying and analyzing problems from various angles, you will learn perspectives and methods for actively grasping dynamic reality and social situations without stopping thinking.

【Learning Objectives】

At the end of the course, students are expected to apply the perspectives learned in class to discover problems on their own, and to think about pop culture from multiple perspectives using information formed by a variety of media, and identify research problems based on the differences and commonalities among different cultures.

【Learning activities outside of classroom】

In addition to researching literature and viewing art related to each theme, students will be expected to take notes on pop culture-related news and other topics of interest and use them in class discussions.

The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.

【Grading Criteria /Policy】

The overall grade for the class will be determined based on the following
Attitude toward class participation: 20%, assignments to be written and submitted in class: 30%, final report: 50%.

LIT500B7

サブカルチャー論Ⅱ

倉本 さおり

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代のポップカルチャーはインターネットや SNS をはじめ、テレビ、雑誌、ゲームといった複数の媒体を通じて連動するように浸透し、社会的規範やわたしたちの自己形成にさまざまな影響を与えています。後期の授業では「ジェンダー化されたマンガ・コンテンツ」としての側面を持つ『週刊少年ジャンプ』に注目し、現代社会の論点をあぶりだすと共に、ポップカルチャー批評が豊かな未来へとつながるような提言を模索していきます。

【到達目標】

- ・授業中に学んだジェンダーに関わる視座を応用して自ら問題を発見し、多様なメディアで形作られる情報を用いて、多角的にポップカルチャーについて考えることができるようになる
- ・先行研究を体系的に理解した上で批判的に評価し、論点を整理しながら建設的な意見を述べるができるようになる
- ・異文化間の差異や共通性を踏まえながら、研究上の問題を発見することができるようになる
- ・先行研究を踏まえ、一次資料を発掘して検証しながら、客観的な説得力をそなえた論文を書いたり、口頭発表したりすることができるようになる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

履修生の人数と各自の状況を考慮したうえで、対面での授業を基本としつつオンラインを併用した講義を行う予定です。講義では画像や映像サンプルをふんだんに用いながら表象分析の具体的な方法をいくつか紹介し、歴史的・文化的な背景を踏まえてポップカルチャーとジェンダーをめぐる諸問題について学んでいきます。授業中の質問やコメント、取り上げたいトピックの提案、フィールドワークの希望も歓迎。履修者の意見を取り入れつつ選んだコンテンツを実際に鑑賞し、ディスカッションを行い、論点を整理していくことで、プレゼン能力も同時に養っていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	自己紹介と授業の進め方についての説明。また、ジェンダーをめぐるいくつかの論点を紹介し、サブカルチャーないしポップカルチャーと呼ばれているものから社会規範や人びとの自己認識をかたちづくるプロセスを読み解くための有効な視点や手法について考えていきます。
第 2 回	マンガ雑誌とジェンダー、メディア文化と再帰性	今なお日本で最も発行部数の多い雑誌メディアであり、かつ「(区分上)ジェンダー化されたコミック雑誌」という複合的な性格を有する『週刊少年ジャンプ』の今日に至るまでの位置づけと変化について、国内外のメディアにおける言及のされ方を参照しつつ社会的な文脈から検証します。また、読者アンケートが作品の掲載順や内容にまで影響を及ぼす同メディアの特徴を取り上げ、メディアとコンテンツとコミュニティの流動的な関係性に焦点を当てていきます。
第 3 回	「少年マンガ」と〈成長〉のゆくえ①（バトル形式と物語の展開）	週間発行部数 653 万部を記録し黄金期と呼ばれていた 1990 年代の『週刊少年ジャンプ』掲載作品（鳥山明『ドラゴンボール』、富樫義博『幽遊白書』、井上雄彦『SLUM DUNK』等）を取り上げ、その展開と結末の様相をめぐって噴出した言説から、当時の日本の「少年マンガ」の像がどのような論点を社会に提示したのか考えていきます。
第 4 回	「少年マンガ」と〈成長〉のゆくえ②（ヒーローの相対化）	2014 年から連載中の堀越耕平『僕のヒーローアカデミア』におけるヒーローとヴィラン（≒ 敵役）の描き方に着目し、いくつかの論文を参照しながら、近年の「少年マンガ」がどのような文脈で社会に受容されているか検討していきます。

第 5 回	「少年マンガ」と〈成長〉のゆくえ③（チーム化とロジック化）	2013 年から連載が開始された葦原大介『ワールドトリガー』の構造に着目し、近年の「少年マンガ」が 90 年代に提示された〈バトル〉をめぐる論点をどのような形で更新しようと試みてきたか考えてみます。
第 6 回	「少年マンガ」と〈成長〉のゆくえ④（勝者と敗者の解体）	2012 年から 2020 年にかけて連載され、2.5 次元ミュージカルという分野でも大きな注目を浴びている古舘春一の『ハイキュー!!』368 話「なにもの」にスポットを当て、群像劇としてのスポーツマンガの影響と可能性について多角的に検証していきます。
第 7 回	「少年マンガ」と〈成長〉のゆくえ⑤（ディスカッション）	これまでの授業を踏まえ、自分が影響を受けた／自分が研究対象として興味を持っているコンテンツの主人公／主要キャラクターを取り上げ、その動機付けと物語の展開について、オリエンテーションで紹介した有効な視点を加えながらクラス全体でディスカッションすることで、〈成長〉をめぐるさまざまな表象の在り方を検討していきます。
第 8 回	中間レポート発表会	自分が興味のあるコンテンツや派生したメディアのトピックから期末レポートに向けた論点を見つけ出し、簡単な発表を行っていただきます。
第 9 回	「少年マンガ」とジェンダーロール①（テキストとしてのキャラクター）	週刊少年ジャンプ掲載作品における「役割語」の様相に着目し、テキストとしてのキャラクターが形成されるプロセスについて検証していきます。
第 10 回	「少年マンガ」とジェンダーロール②（「少年マンガ」における女性性）	前回の授業の踏まえつつ、2018 年から連載されている芥見下々『呪術廻戦』における女性キャラクターの様相に着目し、彼女たちがどのようなジェンダーロールを内面化し、あるいはそれを乗り越えようとしているか考察していきます。
第 11 回	「少年マンガ」とジェンダーロール③（ヒーローとヒロイン）	2016 年から 2020 年まで連載されていた白井カイウ原作・出水ぽすか作画『約束のネバーランド』の主人公・エマの造型を逆説的に参照することで、従来の「少年マンガ」の女性キャラクターたちがどんな磁場のもとに登場していたか検証していきます。
第 12 回	「少年マンガ」とジェンダーロール④（ラブコメの類型と逸脱）	過去に掲載されてきた作品のうち「ラブコメ」と呼ばれるジャンルを中心に、読者の反応を参照しつつ、これまで「少年マンガ」の磁場においてジェンダー規範とロマンチック・ラブがどのように受容されてきたか考えていきます。
第 13 回	「少年マンガ」とジェンダーロール⑤（ディスカッション）	これまでの授業を踏まえ、自分が影響を受けた／自分が研究対象として興味を持っているコンテンツを取り上げ、そのキャラクター造型や物語の構造について有効な視点を加えながらクラス全体でディスカッションすることで、〈ジェンダー〉をめぐるさまざまな表象の在り方を検討していきます。
第 14 回	まとめとフィードバック	期末レポートに向け、授業中に提示された視点と論点を整理しつつ、各自の研究テーマを設定・発表し、互いにアドバイスします。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業内で扱うコンテンツは各テーマに文献調査や作品鑑賞をはじめ、ポップカルチャーをめぐるニュース、話題になっているコンテンツで気になったものは積極的にメモしておき、授業内での議論に役立ててください。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

必要に応じて資料を配布します。

【参考書】

※無理にそろえる必要はありません
 ・東浩紀『動物化するポストモダン——オタクから見た日本社会』（講談社現代新書）
 ・足立加勇『日本のマンガ・アニメにおける「戦い」の表象』（現代書館）
 ・倉橋耕平『歴史修正主義とサブカルチャー 90 年代保守言説のメディア文化』（青弓社）
 ・金水聡『役割語研究の展開』（くろしお出版）
 ・河野真太郎『戦う姫、働く少女』（POSSE 叢書）
 ・押山美知子『少女マンガ ジェンダー表象論 〈男装の少女〉の造形とアイデンティティ』（アルファベータブックス）
 ・堀あきこ、守如子＝編『BL の教科書』（有斐閣）
 ・山田奨治『マンガ・アニメで論文・レポートを書く——「好き」を学問にする方法』（ミネルヴァ書房）
 他、授業ごとに参考書や参考作品を提示します。

【成績評価の方法と基準】

授業への参加態度 30 %、授業内で執筆・提出する課題 30 %、期末レポート 40 %

【学生の意見等からの気づき】

特に対面とオンラインを併用する場合は、個々の学生の発言が建設的な意見交換へとつながるよう、適宜調整を行いながら活発な議論の場を用意する。また授業ごとに論点の整理を行い、議論の足場をわかりやすく設定していく。

【学生が準備すべき機器他】

パソコンやタブレット等、オンライン授業に対応した機器（※難しい場合は応相談）

【その他の重要事項】

本科目は他専攻学生の履修も受け入れます。授業は原則的に教室での対面形式で行う予定ですが、新型コロナウイルスの影響で通学が困難な学生がいることも鑑み、ハイフレックス形式を採用します。

【担当教員の専門領域等】

国内外の小説やマンガを中心に、雑誌や新聞、ラジオ等で書評やポップカルチャー批評を担当。共同通信文芸時評「デザインする文学」、週刊新潮「ベストセラー街道をゆく！」連載中。他、小説トリッパー、ダ・ヴィンチ誌レビュー。『文藝界』新人小説月評（2018）、毎日新聞文芸時評「私のおすすめ」（2019）。TBS ラジオ「文化系トークラジオ Life」サブパーソナリティ。

【Outline (in English)】

【Course outline】

Modern pop culture spreads through multiple media such as the Internet, social media, television, magazines and games, and has various influences on social norms and our self-formation. In this class, you focus on "Weekly Shonen Jump" one of the magazine media that has been characterized from the perspective of gender, and learn about issues facing modern society and suggestions for leading criticism of pop culture to a prosperous future.

【Learning Objectives】

At the end of the course, students are expected to think about pop culture from a variety of perspectives by applying the gender-related perspectives learned in class to discover issues on their own, and by using information formed by various media., and identify research problems based on the differences and commonalities among different cultures.

【Learning activities outside of classroom】

In addition to researching literature and viewing art related to each theme, students will be expected to take notes on pop culture-related news and other topics of interest and use them in class discussions.

The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.

【Grading Criteria /Policy】

The overall grade for the class will be determined based on the following
Attitude toward class participation: 30%, assignments to be written and submitted in class: 30%, final report: 40%.

BSP500B2

日本文学・国際日本学基礎演習

本塚 亘

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本に関する各種の文献を読み、その内容を要約し、それに対する自分自身の見解を小論文形式の文章にまとめることで、日本研究に求められる基礎的能力を養う。

【到達目標】

- 1、日本の言語・文学・歴史・文化・社会等に関する論文を読み、その内容・着眼点・意義等について理解する。
- 2、文献の内容を要約する作業を通して、読解力と文章力を高める。
- 3、自分自身の見解を小論文形式でまとめ、学術論文に相応しい文章を書けるようにする。
- 4、修士論文執筆のための研究計画を具体的にし、文章化する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

原則として、対面形式での授業を行う予定です。ただし、新型コロナウイルスに関する大学の方針変更等の事由により、形式を変更する可能性があります。

まず日本の各分野（言語・文学・歴史・文化・社会等）に関する論文を読みます。そして、その内容を 400 字程度の文章で要約し、自分自身の見解を 800 字程度の小論文にまとめます。さらに、履修者同士で小論文を読み合い、論文の内容について討論を行います。また、履修者は修士論文執筆に向けた研究計画書の作成を行います。なお、履修者が執筆した要約・小論文・研究計画書には、担当教員がすべて添削を行い、返却します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	国際日本学とは何か	国際日本学とは何かを解説し、その研究方法について説明する。
第 2 回	研究の進め方	大学院修士課程での研究の進め方について説明する。
第 3 回	法政大学図書館のデータベースの使用法	法政大学図書館で利用できるオンラインデータベースについて説明する。
第 4 回	オンラインデータベースの活用文献検索の方法	NDL オンラインほか、各種の文献検索ツールについて説明する。
第 5 回	研究倫理について	剽窃をはじめとする研究不正の概要を説明し、正しい研究のあり方を共有する。
第 6 回	課題論文 A1（日本語）	課題論文 A を読み、要約する。
第 7 回	課題論文 A2（日本語）	課題論文 A に関する自分自身の見解を小論文形式でまとめる。
第 8 回	課題論文 B1（日本文化）	課題論文 B を読み、要約する。
第 9 回	課題論文 B2（日本文化）	課題論文 B に関する自分自身の見解を小論文形式でまとめる。
第 10 回	課題論文 C1（日本社会）	課題論文 C を読み、要約する。
第 11 回	課題論文 C2（日本社会）	課題論文 C に関する自分自身の見解を小論文形式でまとめる。
第 12 回	研究計画の検討 1	履修者による研究計画の報告と、それに関する討論を行う。
第 13 回	研究計画の検討 2	履修者による研究計画の報告と、それに関する討論を行う。

第 14 回 研究計画の発表 履修者による研究計画の発表を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
宿題として作文を課す場合があります。また、第 12 回（履修者の研究計画の検討）までに、各自で A4 用紙 3 枚以上の研究計画書を準備する必要があります。

【テキスト（教科書）】

プリント等を適宜配付します。

【参考書】

授業時に適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎回の提出物：60 %

研究計画書の内容：40 %

【学生の意見等からの気づき】

個々の学生の専門になるべく関連のある内容を取り扱えるよう善処します。

【その他の重要事項】

1. この科目は外国人留学生（なかでも中国 5 大学入試により入学した特別研修生）を主な対象とします。
2. 新型コロナウイルスに関する大学の方針変更等の事由により、上記の授業内容を変更する可能性があります。変更があった場合は、hoppii にて連絡いたします。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本古代歌謡 日本音楽史

<研究テーマ> 催馬楽

<主要研究業績> 「催馬楽の成立に関する研究」(博士論文、2017)、「催馬楽「同音グループ」における「替え歌」生成の原理について——歌の詞章と旋律の関係を中心に」(『日本歌謡研究』59 号、2019 年)

【Outline (in English)】

Outline: Reading various literatures on Japan, summarizing the contents, and summarizing your own opinion on it in small thesis, develop the basic abilities required for Japanese studies.

Goal: By the end of the course, students should be able to do the followings:

- To read articles on Japanese language, literature, history, culture, and society, and to understand their contents, viewpoints, and significance
- To improve reading and writing skills by summarizing the contents of literature
- To compose your own opinions and write sentences suitable for a thesis.
- To concretize a research plan for writing a master's thesis and express the results in writing.

Learning activities outside of classroom: Students are expected to spend about four hours before and after each class period on assignments and independent study.

Grading Criteria / Policies: In accordance with the above Goals, the following two will be scored.

- Assignments 60.
- Format and clarity of research plan 40.

BSP500B2

日本文学・国際日本学論文作成基礎実習

金子 広幸

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

先行研究の閲覧から自らの研究課題の明確化を行い、研究活動における手法・手順・発表などを学ぶことができる。あわせてその過程から自らの日本語の問題点についての解決策を導くことができる。

【到達目標】

1. 研究の方向性を明確化することができる。具体的には、その研究課題について、何を明らかにするかを表明できるようになる。
2. 研究の手法・手順を学び、日本語の能力向上と併せて、進めることができるようになる。
3. 自らの研究課題などを研究言語である日本語で他者に明確に伝えることができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

9 月 23 日（金曜日）からクラスが行われる。

教育支援システム（グーグルクラスルームやズームなど）を使用する。

1. 研究課題・計画を精緻化し明文化する作業を共同で行う。
2. 先行研究の文献・研究手法についての模擬的な発表をする。
3. 必要なら学期中に「ミニ調査（パイロット調査）」を行い、方向性を探る材料とする。
4. 後半日程には、研究の進捗について成果の発表を行う。
5. 完成した論文がどのようなものになるのか想定する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	参加者の研究の課題を確認、学期全体の進め方とスケジュールを決める。
第 2 回	私の研究課題 1	それまでに構築した研究課題をクラスで共有・検討する
第 3 回	私の研究課題 2	それまでに構築した研究課題をクラスで共有・検討する。
第 4 回	私の研究課題 3	【自らの日本語の問題点を探る】研究課題を振りかえって何が学べたかを総括する。 【発表時に必要な日本語について模索する】【参考文献の引用などの扱い方、発表レジュメの書式などを学ぶ】
第 5 回	研究手法 1	研究の過程で必要な手法について学ぶ。
第 6 回	研究手法 2	研究の過程で必要な手法について学ぶ。 【研究・調査時に必要な日本語について学ぶ。連絡のメールや、調査依頼など】
第 7 回	研究手法 3	研究の過程で必要な手法について学ぶ。【ミニ調査のガイダンス】
第 8 回	先行研究発表 1	各自が探した先行研究について発表する。 【要旨をまとめる時の日本語の使い方を学ぶ】

第 9 回 先行研究発表 2	各自が探した先行研究について発表する。 【スライドの作り方を学ぶ】
第 10 回 先行研究発表 3	各自が探した先行研究について発表する。 【ミニ調査の進捗状況・テーマを確認する】
第 11 回 先行研究発表 4	各自が探した先行研究について発表する。 【調査報告書への反映】
第 12 回 先行研究発表 5	各自が探した先行研究について発表する。 【スライドの作り方を学ぶ】
第 13 回 成果発表 1	本調査・ミニ調査の結果発表及び本調査での進捗状況を報告する。 【研究論文の目次を作ってみる】 これは最終課題となる。
第 14 回 成果発表 2 今後の課題を明確化する	本調査・ミニ調査の結果発表及び本調査での進捗状況を報告する。 【前週に発表が終わっているものは反映点を明らかにする】

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備・復習時間は、1 回の講義に対して、以下のことを行うにあたって、各 3 時間を標準とします。

1. 研究の方向性を明確にするために、常に文献を探し、クラスで簡単に発表できるよう要点をまとめておくこと。
2. クラスでは問題を共有し、積極的に発言し、手法等について工夫を重ねること。
3. 日本語能力については、とくにスタイルや表現の選択を中心とした、「研究時に必要な日本語」を究明すること。
4. 発表がある場合には必ず「スライド」と「レジュメ」をその都度提出・配付すること。
5. 日本語使用者としての自覚に基づいて、クラスでの課題を作成・提出すること。
6. 発表や課題提出の時などは、必要ならクラスメート同士相互にチェックすること。

【テキスト（教科書）】

研究課題明確化が主目的なので教科書は使用しません。

【参考書】

金子広幸（2014）『初級が終わったら始めよう 新・にほんご敬語トレーニング』

<https://www.ask-books.com/978-4-87217-856-2/>

研究活動を行うにあたってはメールで依頼する、調査時の使用言語など、敬語が必要です。敬語に関する知識・練習が足りない人は自主学习として使用してください。

日本版以外に中国版・台湾版・韓国版と KINDLE 版があります。最新版であることを確認してください。

【成績評価の方法と基準】

・提出物の完成度（研究計画書 発表時のスライド・レジュメ 日本語に関する宿題、「今週の学び」 最終提出物（要旨と目次）など）15 %

・提出物の期限厳守の提出 15 %

・発表参加 20 %

・発表完成度 20 %

・日本語能力振り返り・小試験（2 回程度実施予定）10 %

・クラスでの参加態度（積極的な発言、オンラインでも顔を出しての参加など）20 %

成績評価は 100 点満点で採点。60 点以上が合格。

【学生の意見等からの気づき】

参加者の皆さんへ。

●毎回参加者の発表があり、それについての教師のコメントや参加者の参加討議でクラスが進みます。準備をお願いします。

●参加人数にもよりますが、1 学期あたり、4 回程度の発表があります。他にもスライドやレジュメの作成、先行研究を探ることなど、様々な課題があります。積極的に参加してください。

●準備してきた資料を読むだけでは、いい発表にはなりません。準備をさらに充実させて、視覚資料を使ったり、わかりやすく研究テーマを説明できるよう、教師といっしょに方法を探しましょう。もちろん自宅で発表の練習を「十分に」してください。

●「今週の学び」を初めとして、毎回の講義には課題が出ます。時間厳守で提出してください。

●これからの学術の世界を考える時、国際学会会議などでのオンライン発表は重要な鍵となります。対面クラスになっても、このオンライン発表などにぜひチャレンジしてください。

【学生が準備すべき機器他】

● ZOOM・グーグルクラスルームなどが使える機器・ネット環境の準備をお願いします。

クラスでのお知らせ・課題の提示・提出・連絡などは全てグーグルクラスルームで行います。

●クラスにアクセスする場合は法政大学の Google アカウントが必要です。

●海外からアクセスする場合は特にその準備をお願いします。

【その他の重要事項】

●クラスのスケジュールが決まった後、第 3 回目以降はクラスに新しく参加できなくなります。

第 1 回と第 2 回に必ず出席してください。

●日本語能力が不十分であることを恥じることはありませんが、しっかりと挑戦してください。

●オフィスワークの時間を 2020 年度から多くしました。以下の時間帯から「予約をとって」ZOOM で会いましょう。

「火曜日の 14 時から 15 時」

「金曜日の 16 時 30 分から 17 時 30 分」

連絡はメールでお願いします。

hiroyuki.kaneko.75@hosei.ac.jp

【担当者の研究背景】

<専門領域>日本語教育学 社会言語学 地理学 歴史学 日本文化
<研究テーマ>敬語など待遇表現 日本語クラス活動 地域日本語支援 留学生相談業務 日中言語比較

<主要研究業績>

①『初級が終わったら始めよう にほんご敬語トレーニング』（アスク 2006 年）

②『初級が終わったら始めよう 新・にほんご敬語トレーニング』（アスク 2014 年）

③『人と人をつなぐ日本語クラスアクティビティ 50』（アスク 2005 年）

④「日中漢字音対照研究の成果と今後の教学応用への可能性の模索」基礎研究その 1（『日中学院紀要教学』 2008 年）

⑤「初級日本語クラスで使用する絵の要素の分析」（桜美林大学大学院言語教育研究科日本語教育専攻修士論文 2012 年）

【担当者の出演番組】

日本語教育関係の NHK の番組「しごとのにほんご」に出演・監修しています。（2023 年まで以下で視聴可能）

<https://www3.nhk.or.jp/nhkworld/en/tv/easyjapaneseforwork/>

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course outline）】

The students of this class can clarify their own research issues by browsing previous research, and learn methods, procedures, and presentation methods in their research activities. At the same time, they can draw solutions for their Japanese language usage problems from the process.

【到達目標（Learning Objectives）】

By the end of the course, students should be able to do the followings:

1. To clarify the direction of research. Specifically, to be able to state what they will clarify about the research subject.
2. To be able to learn research methods and procedures and proceed with improving their Japanese proficiency.
3. To be able to clearly convey research topics to others in Japanese, which is the research language.

【授業時間外の学習（Learning activities outside of classroom）】

The standard preparation and review time for this class is 3 hours each for doing the following for each lecture.

1. In order to clarify the direction of your research, always search the literature and summarize the points so that you can easily present it in the class.
2. In the class, share the problem, speak positively, and devise methods.

3. Regarding Japanese proficiency, investigate "Japanese necessary for research", especially focusing on the selection of styles and expressions in formal situations.

4. Whenever there is a presentation, submit and distribute "slides" and "resumes" each time.

5. Create and submit assignments in the class based on your awareness as a Japanese language "user" not as a "learner".

6. When presenting or submitting assignments, check with each other in class if necessary.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria /Policy)】

・ Completion of submissions (slides and resumes at the time of presentation of the research plan, homework related to Japanese, "learning of the week", final submissions (summary and table of contents), etc.) 15%

・ Submissions that adhere to the deadline for submissions 15%

・ Participation in the presentation 20%

・ Completion of presentation 20%

・ Review of Japanese proficiency

・ Small exam (scheduled to be held about twice) 10%

・ Participation attitude in class (active remarks, face-to-face participation(even if it was online session), etc.) 20%

Grades are evaluated on a scale of 100 points. Passed 60 points or more.

LIT500B7

近代の文芸批評 I

田中 和生

実務教員：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

日本の近代文学における文芸批評の歴史を、個々の文芸評論家の文章と批評自体の流れから概観します。

【到達目標】

まず近代文学における批評の役割を理解すること、次に日本の近代文学史を相対化する視点を手に入れることが目標になります。理想としては、文芸評論家の文章を要約・分析・模倣することを通じ、自らのうちに一つの批評眼を確立したいと思います。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

講義と発表を組みあわせて進めます。

まず講義では、具体的な評論文を読みながら批評自体の流れについて解説します。次に発表では、個々の文芸評論家の文章について、内容と文体の両面から紹介・解説・考察を加えてもらいます。

また個々の文芸評論家について理解が深まったところで、レポート提出を求めることがあります。レポートでは、文芸評論家の文章を模倣して自ら文芸批評を実践することによって、批評というものの内的な理解を目指します。

授業では、できるだけ学生からの発言と発表についての質疑を引き出すようにしますが、必要に応じて教員からのフィードバックを行い、授業内容についての理解を深めます。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	日本の近代文学について	近代ヨーロッパと近代日本を比較して、近代文学全体について概説します。
第 2 回	森鷗外と北村透谷	森鷗外「早稲田文学の没理想」と北村透谷「人生に相渉るとは何の謂ぞ」を読み、その意義を理解します。
第 3 回	正岡子規と作家夏目漱石の誕生	正岡子規「歌よみに与ふる書」を読み、写生文の意義と夏目漱石の文学について解説します。
第 4 回	坪内逍遙『小説神髓』を読む	日本の近代文学の出発点として、坪内逍遙『小説神髓』について発表してもらいます。
第 5 回	自然主義と 1910 年	田山花袋「露骨なる描写」を読み、日本の近代文学史における自然主義の隆盛と 1910 年の状況を理解します。
第 6 回	正宗白鳥の評論文を読む	印象批評の例として、正宗白鳥の評論文について発表してもらいます。
第 7 回	佐藤春夫と永井荷風	佐藤春夫「創作月旦」と永井荷風「花火」を読み、その意義を理解します。
第 8 回	小林秀雄の登場	日本の文芸評論の誕生を告げる、小林秀雄の前期の評論文について発表してもらいます。
第 9 回	私小説から心境小説へ	広津和郎「散文芸術の位置」と久米正雄「『私』小説と『心境』小説」を読み、その意義を理解します。

- 第10回 保田與重郎の批評 戦前における文芸評論の到達点の一つである、保田與重郎の評論文について発表してもらいます。
- 第11回 プロレタリア文学と芥川龍之介の死 蔵原惟人「プロレタリア・レアリズムへの道」と宮本顕治「『敗北』の文学」を読み、その意義を理解します。
- 第12回 中村光夫の再出版 戦後文学の空間をかたちづくる、中村光夫の評論文について発表してもらいます。
- 第13回 河上徹太郎と平野謙 河上徹太郎「配給された『自由』」と平野謙「ひとつの反指図」を読み、その意義を理解します。
- 第14回 江藤淳の登場 戦後文学を問い直す視点を提示しつつけた、江藤淳の評論文について発表してもらいます。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

日本の近代文学史についての基礎的な知識を確認して授業を受けてください。また授業で取り上げられる作家や評論家の代表作に目を通してから授業に臨むことが望まれます。発表の対象となる文章は、ぜひ全員が読んで参加することで活発な議論が起きることを期待します。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

千葉俊二／坪内祐三編『日本近代文学評論選』[明治・大正篇]および[昭和篇]（岩波文庫）

【参考書】

必要に応じて授業で指示します。

【成績評価の方法と基準】

成績は平常点4割、発表およびレポート6割で総合的に評価します。

まず平常点では、きちんと出席しているか、授業内容に積極的に取り組んでいるか、授業外の学習ができているか、を授業態度から判断します。

また発表では、発表対象の評論文についてしっかり理解できているか、発表の仕方とレジュメの内容は適切か、ただの解説にとどまらず分析から考察まで行おうとしているか、を発表内容から判断します。加えてレポートでは、積極的に取り組んでいるかどうかを判断します。

【学生の意見等からの気づき】

発表の内容を受講生の研究テーマに応じて修正しました。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本近・現代文学、文芸評論

〈研究テーマ〉

現在の主な関心は、日本の近代文学の特質を明らかにすること、そこから現代文学の条件を考えること、同時に詩・物語・批評といった言葉の機能から文学について論じる方法を探ることである。具体的には戦後文学史の検証、北村透谷・小林秀雄についての研究、新しい近代文学史の切り口を準備している。

〈主要研究業績〉

- 1、『江藤淳』（慶應義塾大学出版会）2001年
- 2、『あの戦場を越えて——日本現代文学論』（講談社）2005年
- 3、『新約太宰治』（講談社）2006年
- 4、『吉本隆明』（アーツアンドクラフツ）2014年
- 5、『震災後の日本で戦争を引きうける』（現代書館）2017年

【Outline (in English)】

< Course outline > Acquire an overview of the history of literary criticism in the Japanese modern literature through the writings of each critic and the stream of criticism.

< Learning Objectives > The first goal is to understand the role of criticism in modern literature, and the second is to gain a relative perspective on the history of modern Japanese literature. Ideally, through summarizing, analyzing, and imitating the writings of literary critics, I would like to establish a critical eye within myself.

< Learning activities outside of classroom > Please come to class with a basic knowledge of the history of modern Japanese literature. It is also recommended that you read the representative works of the writers and critics discussed in the class before coming to class. All students are expected to read and participate in the texts to be presented, so that lively discussions can take place. The standard preparation and review time for this class is two hours each.

< Grading Criteria/Policy > Grades will be based on an overall evaluation of 40% of normal points and 60% of presentations and reports. In terms of the normal score, I will judge whether the student attends class properly, actively engages in the class content, and studies outside of class. In the presentation, we will judge whether you have a clear understanding of the critique you are presenting, whether your presentation style and resume are appropriate, and whether you have attempted to go beyond mere explanation to analysis and consideration. In addition, we will judge whether or not you are actively working on the report.

LIT500B7

近代の文芸批評Ⅱ

田中 和生

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の戦後文学における文芸批評の歴史を、個々の文芸評論家の文章と批評自体の流れから概観します。

【到達目標】

まず戦後文学における批評の役割を理解すること、次に日本の戦後文学史を相対化する視点を手に入れることが目標になります。理想としては、文芸評論家の文章を要約・分析・模倣することを通じ、自らのうちに一つの批評眼を確立したいと思います。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義と発表を組み合わせて進めます。

まず講義では、具体的な評論文を読みながら批評自体の流れについて解説します。次に発表では、個々の文芸評論家の文章について、内容と文体の両面から紹介・解説・考察を加えてもらいます。

また個々の文芸評論家について理解が深まったところで、レポート提出を求めることがあります。レポートでは、文芸評論家の文章を模倣して自ら文芸批評を実践することによって、批評というものの内的な理解を目指します。

授業では、できるだけ学生からの発言と発表についての質疑を引き出すようにしますが、必要に応じて教員からのフィードバックを行い、授業内容についての理解を深めます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	日本の戦後文学について	欧米と日本を比較して、現在までつづく戦後文学の空間について概説する
第 2 回	中野重治と高見順	中野重治「閏二月二九日」と高見順「描写のうしろに寝ておられない」を読み、その意義を理解します。
第 3 回	1945 年と無頼派の誕生	日本の敗戦の年である 1945 年前後の文学における変化に注意しながら、坂口安吾「墮落論」を読みます。
第 4 回	吉本隆明の出版	戦後文学の空間を超える普遍的な視点を提供しようとしてつづけた、吉本隆明の評論文について発表してもらいます。
第 5 回	戦前批判と戦後文学のはじまり	宮本百合子「歌声よ おこれ」と小野十三郎「詩論」を読み、その意義を理解します。
第 6 回	奥野健男の批評	戦後文学の代表的な文芸評論家である、奥野健男の評論文について発表してもらいます。
第 7 回	武田泰淳と竹内好	武田泰淳「滅亡について」と竹内好「近代主義と民族の問題」を読み、その意義を理解します。
第 8 回	磯田光一の批評	戦後文学の代表的な文芸評論家である、磯田光一の評論文について発表してもらいます。

第 9 回	福田恒存と国語の問題	福田恒存「私の国語教室」を読み、その意義を理解するとともに大岡昇平の新字新かなに対する態度について考察します。
第 10 回	蓮実重彦の登場	ポストモダン派の代表的な文芸評論家である、蓮実重彦の評論文について発表してもらいます。
第 11 回	言語論と吉本隆明	20 世紀以降の言語論の意義について考察した上で吉本隆明の評論文を読み、その意義を理解します。
第 12 回	加藤典洋の出版	ポストモダン派と戦後文学を架橋する視点を提供した、加藤典洋の評論文について発表してもらいます。
第 13 回	ポストモダン文学論	1970 年代以降の日本のポストモダン派の評論文について考察を加え、その意義を理解します。
第 14 回	斉藤美奈子の批評	フェミニズム批評の代表的な評論家である、斉藤美奈子の評論文について発表してもらいます。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

日本の戦後文学史についての基礎的な知識を確認して授業を受けてください。また授業で取りあげられる作家や評論家の代表作に目を通してから授業に臨むことが望まれます。発表の対象となる文章は、ぜひ全員が読んで参加することで活発な議論が起きることを期待します。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

千葉俊二／坪内祐三編『日本近代文学評論選』[昭和篇]（岩波文庫）

【参考書】

必要に応じて授業で指示します。

【成績評価の方法と基準】

成績は平常点 4 割、発表およびレポート 6 割で総合的に評価します。

まず平常点では、きちんと出席しているか、授業内容に積極的に取り組んでいるか、授業外の学習ができていているか、を授業態度から判断します。

また発表では、発表対象の評論文についてしっかり理解できているか、発表の仕方とレジュメの内容は適切か、ただの解説にとどまらず分析から考察まで行おうとしているか、を発表内容から判断します。加えてレポートでは、積極的に取り組んでいるかどうかを判断します。

【学生の意見等からの気づき】

発表の内容を受講生の研究テーマに応じて修正しました。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本近・現代文学、文芸評論

〈研究テーマ〉

現在の主な関心は、日本の近代文学の特質を明らかにすること、そこから現代文学の条件を考えること、同時に詩・物語・批評といった言葉の機能から文学について論じる方法を探ることである。具体的には戦後文学史の検証、北村透谷・小林秀雄についての研究、新しい近代文学史の切り口を準備している。

〈主要研究業績〉

- 『江藤淳』（慶應義塾大学出版会）2001 年
- 『あの戦場を越えて——日本現代文学論』（講談社）2005 年
- 『新約太宰治』（講談社）2006 年
- 『吉本隆明』（アーツアンドクラフツ）2014 年
- 『敗戦後の日本で戦争を引きうける』（現代書館）2017 年

【Outline (in English)】

< Course outline > Acquire an overview of the history of literary criticism in the Japanese postwar literature through the writings of each critic and the stream of criticism.

< Learning Objectives > The first goal is to understand the role of criticism in postwar literature, and the second is to obtain a perspective that relativizes the history of postwar literature in Japan. Ideally, through summarizing, analyzing, and imitating the writings of literary critics, I would like to establish a critical eye within myself.

< Learning activities outside of classroom > Please come to class with a basic knowledge of the history of Japanese postwar literature. It is also recommended that you read the representative works of the writers and critics to be discussed in the class before coming to class. All students are expected to read and participate in the texts to be presented, so that lively discussions can take place. The standard preparation and review time for this class is two hours each.

< Grading Criteria/Policy > Grades will be based on an overall evaluation of 40% of normal points and 60% of presentations and reports. In terms of the normal score, I will judge whether the student attends class properly, actively engages in the class content, and studies outside of class. In the presentation, we will judge whether you have a clear understanding of the critique you are presenting, whether your presentation style and resume are appropriate, and whether you have attempted to go beyond mere explanation to analysis and consideration. In addition, we will judge whether or not you are actively working on the report.

LIT500B7

神話と歌 I

坂本 勝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

万葉集を講読する。

【到達目標】

万葉集を読み進める。その中から各自が最も関心のある作品を取り上げ、注釈的な読解を中心に発表する。それにより、上代文献の基礎的な読解法、研究法を学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

各自選定したテーマや作品を中心に、注釈的な読解を行う。最終授業で、13 回までの講義内容のまとめや復習だけでなく、授業内で行った課題に対する講評や解説も行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	講義概説	万葉集と柿本人麻呂について概説する。
第 2 回	近江荒都歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 3 回	吉野讃歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 4 回	留京三首	左記のテーマについて批評、検討する。
第 5 回	安騎野歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 6 回	石見相聞歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 7 回	日並皇子挽歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 8 回	河嶋皇子挽歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 9 回	明日香皇女挽歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 10 回	高市皇子挽歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 11 回	泣血哀慟哭歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 12 回	吉備津采女挽歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 13 回	狭岑島死人歌	左記のテーマについて批評、検討する。
第 14 回	臨死歌	左記のテーマについて批評、検討する。 各自、春学期の研究テーマを総括し、新たな発展の方法を確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、毎週 4 時間以上を必要とする。

【テキスト（教科書）】

万葉集、原文のついているもの。

【参考書】

必要に応じて教室で指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表（50％）とレポート（50％）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

原典を読む基本的知識の重要性。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞上代文学

＜研究テーマ＞古事記・万葉集を中心とする上代文学研究

＜主要研究業績＞

『古事記の読み方』（岩波新書 2003 年）「亡き人に逢える鳥一万葉集卷一六・筑前国志賀白水郎歌を読む」（『法政大学文学部紀要』2008 年）「鴨山と石川の詩心ー柿本人麻呂臨死自傷歌群についてー」（『日本文学誌要』2008 年）「都市の大物主」（『日本文学誌要』2011 年）

【Outline (in English)】

【Course outline】Read the Manyoshu（万葉集），

【Learning Objectives】To understand the basic research methods of Japanese literature of the upper ages.

【Learning activities outside of classroom】Please read the handouts carefully. The standard preparation and review time for a class is 2 hours each, (4 hours for a week).

【Grading Criteria /Polic】 Grading will be based on the term paper(60%) and the submission of several assignments and reaction papers (40%). will be based on the term paper(60%) and the submission of several assignments and reaction papers (40%).

LIT500B7

神話と歌Ⅱ

坂本 勝

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

万葉集を読む。

【到達目標】

上代文献の基礎的な読解法、研究法を学ぶ。各自、万葉集の中から学問的興味を持つ歌人、作品などを選定し、その作品について演習形式で読解を進める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

各自選定したテーマや作品を中心に、注釈的な読解を行う。最終授業で、13 回までの講義内容のまとめや復習だけでなく、授業内で行った課題に対する講評や解説も行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	授業概説	万葉集研究の方法について概説する。
第 2 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 3 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 4 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 5 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 6 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 7 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 8 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 9 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 10 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 11 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 12 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 13 回	各自が選定した歌人、作品について発表する。	左記発表について批評、検討を行う。
第 14 回	まとめ	万葉集研究の方法と問題点を確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

予習、復習、課題など、毎週 3 時間以上の学習を必要とする。

【テキスト（教科書）】

万葉集、原文付き

【参考書】

授業の中で指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表（50 %）とレポート（50 %）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

原典を読むことの重要性。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本上代文学

＜研究テーマ＞古事記、万葉集の研究

＜主要研究業績＞

『古事記の読み方』（岩波新書 2003 年）「亡き人に逢える島一万葉集 卷一六・筑前国志賀白水郎歌を読む」（『法政大学文学部紀要』2008 年）「鴨山と石川の詩心－柿本人麻呂臨死自傷歌群について－」（『日本文学誌要』2008 年）「都市の大物主」（『日本文学誌要』2011 年）

【Outline (in English)】

【Course outline】Read the Manyoshu（万葉集），

【Learning Objectives】To understand the basic research methods of Japanese literature of the upper ages.

【Learning activities outside of classroom】Please read the handouts carefully. The standard preparation and review time for a class is 2 hours each, (4 hours for a week).

【Grading Criteria /Polic】Grading will be based on the term paper(60%) and the submission of several assignments and reaction papers (40%). will be based on the term paper(60%) and the submission of several assignments and reaction papers (40%).

LIT500B7

平安時代の物語Ⅰ

加藤 昌嘉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

『源氏物語』の写本を読みます。本年度は、河内本の「若紫」巻を解説してゆきます。

【到達目標】

以下の2点を身に付けることが目標です。

◎古文を翻訳する能力

◎語法を調査する能力

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

発表者は、『源氏物語』の写本を元に、整定本文と正確な現代語訳を作ります。それを元に、参加者全員で議論します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	『源氏物語』概説
2	「若紫」	わらは病
3	「若紫」	僧都
4	「若紫」	明石
5	「若紫」	竜王
6	「若紫」	尼
7	「若紫」	少女
8	「若紫」	僧都の坊
9	「若紫」	少女の出自
10	「若紫」	相談
11	「若紫」	和歌
12	「若紫」	聖
13	「若紫」	和歌
14	「若紫」	玉

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

「桐壺」巻と「若紫」巻を読み進めること。予習復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

『尾州家河内本源氏物語 第一巻』（八木書店）を用います。授業時に説明をします。

【参考書】

以下のいずれかを座右に置いてください。

◎柳井滋ほか校注『源氏物語』1（岩波文庫）

◎石田穰二ほか校注『新潮日本古典集成 源氏物語』1（新潮社）

◎伊藤博編集『源氏物語の鑑賞と基礎知識 若紫』（至文堂）

◎林望『謹訳源氏物語 改訂新修』1（祥伝社文庫）

◎大塚ひかり全訳『源氏物語』1（ちくま文庫）

【成績評価の方法と基準】

発表の出来50%、議論参加度50%。

【学生の意見等からの気づき】

議論しやすい雰囲気作りを心がけます。

【担当教員の専門分野等】

◆専門領域：日本古典文学

◆研究テーマ：平安時代の物語

◆主要研究業績：著書『『源氏物語』前後左右』（勉誠出版）

【Outline (in English)】

▼ 【Course outline】

This course deals with the manuscript of "The Tale of Genji". This year, we will decode "Kawachi-bon", "Wakamurasaki" chapter.

▼【Learning Objectives】

By the end of this course, students are expected to acquire A and B.

-A.The ability to translate ancient texts.

-B.The ability to investigate grammar.

▼【Learning activities outside of classroom】

Before each class meeting, students will be expected to have read "Kiritsubo" and "Wakamurasaki" chapter. Your study time will be more than four hours for a class.

▼【Grading Criteria /Policy】

Grading will be determined by the X and Y.

-X.Quality of the presentation. 50%

-Y.Participation in the discussion. 50%

LIT500B7

平安時代の物語Ⅱ

加藤 昌嘉

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

『源氏物語』の写本を読みます。本年度は、河内本の「若紫」巻を解読してゆきます。

【到達目標】

以下の2点を身に付けることが目標です。

◎古文を翻訳する能力

◎語法を調査する能力

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

発表者は、『源氏物語』の写本を元に、整定本文と正確な現代語訳を作ります。それを元に、参加者全員で議論します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	『源氏物語』概説
2	「若紫」	管絃
3	「若紫」	左大臣邸
4	「若紫」	葵の上
5	「若紫」	手紙
6	「若紫」	惟光
7	「若紫」	藤壺
8	「若紫」	和歌
9	「若紫」	妊娠
10	「若紫」	夢
11	「若紫」	尼の家
12	「若紫」	遺言
13	「若紫」	若草
14	「若紫」	尼の死

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

「桐壺」巻と「若紫」巻を読み進めること。予習復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

『尾州家河内本源氏物語 第一巻』（八木書店）を用います。授業時に説明をします。

【参考書】

以下のいずれかを座右に置いてください。

◎柳井滋ほか校注『源氏物語』1（岩波文庫）

◎石田穰二ほか校注『新潮日本古典集成 源氏物語』1（新潮社）

◎伊藤博編集『源氏物語の鑑賞と基礎知識 若紫』（至文堂）

◎林望『謹訳源氏物語 改訂新修』1（祥伝社文庫）

◎大塚ひかり全訳『源氏物語』1（ちくま文庫）

【成績評価の方法と基準】

発表の出来50%、議論参加度50%。

【学生の意見等からの気づき】

絵や写真なども使い、理解を深めます。

【担当教員の専門分野等】

◆専門領域：日本古典文学

◆研究テーマ：平安時代の物語

◆主要研究業績：著書『揺れ動く『源氏物語』』（勉誠出版）

【Outline (in English)】

▼【Course outline】

This course deals with the manuscript of "The Tale of Genji". This year, we will decode "Kawachi-bon", "Wakamurasaki" chapter.

▼【Learning Objectives】

By the end of this course, students are expected to acquire A and B.

-A.The ability to translate ancient texts.

-B.The ability to investigate grammar.

▼【Learning activities outside of classroom】

Before each class meeting, students will be expected to have read "Kiritsubo" and "Wakamurasaki" chapter. Your study time will be more than four hours for a class.

▼【Grading Criteria /Policy】

Grading will be determined by the X and Y.

-X.Quality of the presentation. 50%

-Y.Participation in the discussion. 50%

LIT500B7

書誌学と文献学 I

阿部 真弓

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業は、中世の文芸作品を緻密に読み解き、理解を深めることを目的とします。中世文芸の基礎的な研究方法を学ぶとともに、プレゼンテーション能力・ディスカッション能力を身につけ、他者との討論から新たな研究課題を見出すことを目指します。

今年度は、『百人一首』の古注釈である『百人一首 宗祇抄』を取り上げます。影印本を翻刻し、的確かつ詳細に注釈を施して現代語に訳していきます。また他の古注釈も参照し、『百人一首』が中世・近世でどのように解釈されていたかを確認し、『宗祇抄』の位置づけについても考察を試みます。

【到達目標】

- ①適切に文献を調査し、歌語や修辭等の和歌表現、また歌人についての確かつ精緻な注釈を施し、和歌を読み解く能力を身につける。
- ②中世において『百人一首』がどのように解釈されてきたか、考察できる。
- ③くずし字を読むことができる。
- ④プレゼンテーション能力を身につける。
- ⑤ディスカッション能力を身につけ、他者との討論から新たな研究課題を見出すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

古活字本の影印をテキストとし、受講生の発表・討論と教員の講義を取り混ぜながら、『百人一首 宗祇抄』を精読します。なお、授業のはじめに、リアクションペーパーに書かれた受講生からの質問や意見を取り上げてフィードバックし、前回授業の振り返りを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	授業の概要の説明
2	『百人一首』の概要について	『百人一首』に関する問題を整理し、説明する。
3	宗祇について	宗祇の事績等の説明。
4	『百人一首』研究史について	中世から現代に至るまでの研究史を概観する。
5	発表の方法について	発表にあたって調査すべき文献、注釈項目を説明する。
6	変体仮名について	変体仮名の解説・解読練習。
7	『百人一首 宗祇抄』読解	受講生 A による発表と討論
8	『百人一首 宗祇抄』読解	受講生 B による発表と討論
9	『百人一首 宗祇抄』読解	受講生 C による発表と討論
10	『百人一首 宗祇抄』読解	受講生 D による発表と討論
11	『百人一首 宗祇抄』読解	受講生 E による発表と討論
12	『百人一首 宗祇抄』読解	受講生 F による発表と討論
13	『百人一首 宗祇抄』読解	受講生 G による発表と討論
14	まとめ	春学期の内容に関する総括を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業前には参考書等を読み、『百人一首』に関する基礎的な知識を身につけておいて下さい。

発表にあたっては、担当者はわかりやすく、不備のない資料を作り、要を得た説明ができるよう、綿密に準備を行ってください。それ以外の受講者はテキスト、また注釈書等を確認し、どのような問題点のある和歌なのか予習をした上で、授業にのぞんでください。

本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

『影印本百人一首抄〈宗祇抄〉』（吉田幸一編、笠間書院、1969年）

【参考書】

・講談社学術文庫『百人一首』（有吉保、講談社、1983年）
・角川ソフィア文庫『新版 百人一首』（島津忠夫、KADOKAWA、1999年）

【成績評価の方法と基準】

【授業の到達目標】①～⑤に照らし、発表内容またはレポート 70 %（①～⑤）、討論への参加度 30 %（⑤）という配分で、総合的に判断します。

【学生の意見等からの気づき】

一度に複数の和歌を担当・発表する形ではなく、一首ずつ丁寧に読み進めます。また、受講者のレベルに合ったプリント教材を適宜配布し、随時、くずし字を読む練習も行います。

【その他の重要事項】

基本的に対面式授業ですが、第1回・第2回授業はオンライン式の授業です。第1回授業日までに、学習支援システム上の当科目「お知らせ」をよく確認し、受講してください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本中世文学

<研究テーマ> 日記文学、和歌

<主要研究業績> 「『とはずがたり』の恋一物語る二条」（『文学』8巻5号、2007年9月）、「『弁内侍日記』論—糾える言葉の連鎖—」（『日本古典文学研究の新展開』2011年、笠間書院）、「『嵯峨のかよひち』考—藤原為家の涙—」（『日本文学誌要』89号、2014年3月）

【Outline (in English)】

This course deals with *Hyakunin isschu So - gi sho -*.

The aim of this course is to help graduate students acquire an understanding of the characteristics of the Medieval Japanese Literature and the fundamentals of the study of waka poetry. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

Your overall grade in the class will be decided based on the following

Oral presentation or Term-end report : 70%, in class contribution : 30%.

LIT500B7

書誌学と文献学Ⅱ

阿部 真弓

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業は、中世の文芸作品を緻密に読み解き、理解を深めることを目的とします。中世文芸の基礎的な研究方法を学ぶとともに、プレゼンテーション能力・ディスカッション能力を身につけ、他者との討論から新たな研究課題を見出すことを目指します。

今年度は、『百人一首』の古注釈である『百人一首 宗祇抄』を取り上げます。影印本を翻刻し、的確かつ詳細に注釈を施して現代語に訳していきます。また他の古注釈も参照し、『百人一首』が中世・近世でどのように解釈されていたかを確認し、『宗祇抄』の位置づけについても考察を試みます。

【到達目標】

- ①適切に文献を調査し、歌語や修辭等の和歌表現、また歌人についての的確かつ精緻な注釈を施し、和歌を読み解く能力を身につける。
- ②中世において『百人一首』がどのように解釈されてきたか、考察できる。
- ③くずし字を読むことができる。
- ④プレゼンテーション能力を身につける。
- ⑤ディスカッション能力を身につけ、他者との討論から新たな研究課題を見出すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

古活字本の影印をテキストとし、受講生の発表・討論と教員の講義を取り混ぜながら、『百人一首 宗祇抄』を精読します。なお、授業のはじめに、リアクションペーパーに書かれた受講生からの質問や意見を取り上げてフィードバックし、前回授業の振り返りを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	授業の概要の説明
2	春学期授業のふりかえり	春学期授業で浮かび上がった問題点・課題について整理を行う。
3	異種百人一首について	近世の異種百人一首について解説する。
4	百人一首かるたについて	百人一首と歌仙絵について考察する。
5	変体仮名について	古筆に関する解説。
6	変体仮名解読練習	変体仮名解読練習
7	『百人一首 宗祇抄』読解	受講生 A による発表と討論
8	『百人一首 宗祇抄』読解	受講生 B による発表と討論
9	『百人一首 宗祇抄』読解	受講生 C による発表と討論
10	『百人一首 宗祇抄』読解	受講生 D による発表と討論
11	『百人一首 宗祇抄』読解	受講生 E による発表と討論
12	『百人一首 宗祇抄』読解	受講生 F による発表と討論
13	『百人一首 宗祇抄』読解	受講生 G による発表と討論
14	まとめ	春学期の内容に関する総括を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業前には参考書等を読み、『百人一首』に関する基礎的な知識を身につけておいて下さい。

発表にあたっては、担当者はわかりやすく、不備のない資料を作り、要を得た説明ができるよう、綿密に準備を行ってください。それ以外の受講者はテキスト、また注釈書等を確認し、どのような問題点のある和歌なのか予習をした上で、授業にのぞんでください。

本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

『影印本百人一首抄〈宗祇抄〉』（吉田幸一編、笠間書院、1969年）

【参考書】

・講談社学術文庫『百人一首』（有吉保、講談社、1983年）
・角川ソフィア文庫『新版 百人一首』（島津忠夫、KADOKAWA、1999年）

【成績評価の方法と基準】

【授業の到達目標】①～⑤に照らし、発表内容またはレポート70%（①～⑤）、討論への参加度30%（⑤）という配分で、総合的に判断します。

【学生の意見等からの気づき】

一度に複数の和歌を担当・発表する形ではなく、一首ずつ丁寧に読み進めます。また、受講者のレベルに合ったプリント教材を適宜配布し、随時、くずし字を読む練習も行います。

【その他の重要事項】

基本的に対面式授業ですが、第1回・第2回授業はオンライン式の授業です。第1回授業日までに、学習支援システム上の当科目「お知らせ」をよく確認し、受講してください。

なお、秋学期科目のみの履修も可能ですが、理解を深めるために春学期科目Aの受講をおすすめします。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本中世文学

<研究テーマ>日記文学、和歌

<主要研究業績>『「とはずがたり」の恋一物語る二条』（『文学』8巻5号、2007年9月）、『「弁内侍日記」論—糾える言葉の連鎖—』（『日本古典文学研究の新展開』2011年、笠間書院）、『「嵯峨のかよひち」考—藤原為家の涙—』（『日本文学誌要』89号、2014年3月）

【Outline (in English)】

This course deals with *Hyakunin issyu So`gi sho`*.

The aim of this course is to help graduate students acquire an understanding of the characteristics of the Medieval Japanese Literature and the fundamentals of the study of waka poetry. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

Your overall grade in the class will be decided based on the following

Oral presentation or Term-end report : 70%, in class contribution : 30%.

LIT500B7

能と楽劇I

山中 玲子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

能は700年近い歴史を持つ伝統芸能で、レパートリーもほぼ固定され、演出の決まりも多いが、それでも演者・流儀によりさまざまな演出の工夫があり、すぐれた工夫はそれがまた新たな「決まり」「秘伝」となって伝えられてきた。作品の主題や主人公の人物像をどう解釈するかによって特別の演出が作られている場合もある。この授業では能の作品研究に演出についての考察を活かす方法や、演出資料の解説方法を学ぶ。

【到達目標】

- 1) 謡曲独特の表現に慣れ、テキストの内容を正しく解釈できるようになる。
- 2) 能の所作や囃子の演奏法など、演出に関する古い資料を読み解き、作品研究の材料として使えるようになる。
- 3) 伝統芸能である能にとって「演出」がどういう意味を持つかを理解する。
- 4) 小書と呼ばれる能の替演出の概要を知る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

前期は講義を主体とします。能の演出の基本的な考え方や、演出研究に必要な資料の読み方などを、具体的な作品に沿って説明し、授業参加者にも実際に古い資料を読んでもらいながら進めていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	能の概説と能楽研究所の資料紹介	能について学ぶ際の基礎資料、能楽研究所の使い方の紹介。
第2回	能演出のバリエーション	能の「演出」とはどういうことか。伝統芸能の決まりの中での工夫について。
第3回	演出研究のための資料	演出研究のための基礎文献とその使い方を学ぶ。
第4回	《朝長》を読む	《朝長》のテキストを読み、作品の主題や演出のポイントを知る。
第5回	《朝長》の小書「懺法」について	《朝長》の小書演出「懺法」の内容や成立過程を知る。
第6回	本来の演出が別置されてできた小書	《清経》の「音取」、《安宅》の「延年」など、本来の演出が能の類型化の中で別置されてできた小書について、概観する。
第7回	《采女》を読む	能《采女》のテキストを読み、主題と演出のポイントを知る。
第8回	《采女》の小書「美奈保之伝」について	《采女》の作品解釈と深く関わる小書「美奈保之伝」の内容と変遷を学ぶ。
第9回	観世元章と小書演出	観世元章により能の演出の改革について概観する。
第10回	作品解釈と深く関わる小書	元章による小書演出の実例を動画で鑑賞する。
第11回	ワークショップ：「型付」を読む①	下間少進の『童舞抄』を読んでみる。型付に共通の用語や個々の資料に特有の用語を知る。
第12回	ワークショップ：「型付」を読む②	『宗節仕舞付』を読んでみる。型付に共通の用語や個々の資料に特有の用語を知る。

- 第13回 ワークショップ：「囃 鼓伝書や笛伝書を読み、特有の用子伝書」を読む 語を知る。
- 第14回 まとめ 前期のまとめとしてのミニ発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

謡本の古写本や演出資料の解説などは、各自がおこなったうえで授業に参加してもらうことになるので、能楽研究所の閲覧室等での自習時間は多くなるはずです。

【テキスト（教科書）】

使わない

【参考書】

横道萬里雄『能にも演出がある 小書演出・新演出など』（2007年 檜書店）
横道萬里雄・山中玲子・松本雍『能を面白く見せる工夫 小書演出の歴史と諸相』（2009年 檜書店）

【成績評価の方法と基準】

授業内での発言や授業への貢献度（40％）、ワークショップ及びミニ発表（60％）

【学生の意見等からの気づき】

今年度の授業は、前年度から参加している学生たちの希望によって決めました。現代の能を彩る「小書」や能演出の基本を押さえ、作品研究と結びつけたいというのが彼らの希望でしたので、それに添うように組み立てていきます。できれば前期後期続けて受講していただきたいと考えています。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 中世文学 能楽研究

<研究テーマ> 能の作品研究・演出研究

<主要研究業績>

・「修羅能以前の『平家の能』—（経盛）の再検討を通して—」、『無常の鐘声 平家物語』（松尾華江編、花鳥社、2020.7）、pp.213-229
・「〈二人静〉—音阿弥の演出・元章の解釈」、『観世』 85巻3号、檜書店、2018.3、pp.28-35
・「『御世話筋秘曲』の解説と復元の記録」、『能楽研究』 41、法政大学能楽研究所、2017.3、pp.91-112
・「能の「習事」と番組上の小字注記—「小書」という語の意味するところ—」、『能楽研究』 40、能楽研究所、2016.3、pp.135-160
・「能〈通小町〉遡源」、『国語と国文学』 93巻3号、東京大学国語国文学会、2016.3、pp.3-16

【Outline (in English)】

In this class, you will learn how to apply the consideration of staging to the study of Noh works and how to decipher staging materials.

Learning Objectives are:

- 1) to be able to correctly interpret the content of the noh text,
- 2) to be able to use old materials on staging as material for researching the work.
- 3) to understand what "staging" means to Noh as a traditional performing art.

Each student is responsible for collating old chant manuscripts as preparatory work.

LIT500B7

能と楽劇Ⅱ

山中 玲子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

能は700年近い歴史を持つ伝統芸能で、レパートリーもほぼ固定され、演出の決まりも多いが、それでも演者・流儀によりさまざまな演出の工夫があり、すぐれた工夫はそれがまた新たな「決まり」「秘伝」となって伝えられてきた。作品の主題や主人公の人物像をどう解釈するかによって特別の演出が作られている場合もある。この授業では能の作品研究に演出についての考察を活かす方法や、演出資料の解説方法を学ぶ。

【到達目標】

- 1) 謡曲独特の表現に慣れ、テキストの内容を正しく解釈できるようになる。
- 2) 能の所作や囃子の演奏法など、演出に関する古い資料を読み解き、作品研究の材料として使えるようになる。
- 3) 伝統芸能である能にとって「演出」がどういう意味を持つかを理解する。
- 4) 小書と呼ばれる能の替演出の概要を知る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

後期は学生による発表を中心にし、そこで出た問題について必要な講義を混ぜていく形にします。はじめに、小書演出を構成するユニットについていくつか説明をした後、各自の発表に移ります。能の小書演出全体をよく知るためにふさわしい曲目をこちらで指定してあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	能の小書演出概観	前期の復習
第2回	笛の盤渉調について	能の笛が通常よりも高い「盤渉」調で演奏される場合について
第3回	「クツログ」の小書について	舞のなかでの橋懸の利用やシテと囃子方との関係について
第4回	赤頭・黒頭・白頭について	後シテの仮髪の色が持つ意味と替演出について
第5回	能《邯鄲》の演出① テキストの解釈	《邯鄲》のテキストを読み、主題と演出のポイントを知る。
第6回	能《邯鄲》の演出② 小書演出の諸相	《邯鄲》に数多くある小書と作品解釈との関わりについて知る。
第7回	能《海人》の演出① テキストの解釈	《海人》のテキストを読み、主題と演出のポイントを知る。
第8回	能《海人》の演出② 小書演出の諸相	《海人》に数多くある小書と作品解釈との関わりについて知る。
第9回	能《通小町》の演出① テキストの解釈	《通小町》のテキストを読み、主題と演出のポイントを知る。
第10回	能《通小町》の演出② 小書演出の諸相	《通小町》の小書と作品解釈との関わりについて知る。
第11回	能《羽衣》の演出① テキストの解釈	《羽衣》のテキストを読み、主題と演出のポイントを知る。
第12回	能《羽衣》の演出② 小書演出の諸相	《羽衣》の小書と作品解釈との関わりについて知る。
第13回	《石橋》《乱》《道成寺》の小書	重い習いの曲に、ことさら小書演出が多いこと
第14回	新作能と小書演出のユニット	新作能の演出に用いられる技法

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

謡本の古写本や演出資料の解説などは、各自がおこなったうえで授業に参加してもらうことになるので、能楽研究所の閲覧室等での自習時間は多くなるはずです。

【テキスト（教科書）】

使わない

【参考書】

横道萬里雄『能にも演出がある 小書演出・新演出など』（2007 年 檜書店）

横道萬里雄・山中玲子・松本雍『能を面白く見せる工夫 小書演出の歴史と諸相』（2009 年 檜書店）

【成績評価の方法と基準】

授業内での発言や授業への貢献度（30 %）、担当曲の発表（70 %）

【学生の意見等からの気づき】

今年度の授業は、前年度から参加している学生たちの希望によって決めました。現代の能を彩る「小書」や能演出の基本を押さえ、作品研究と結びつけたいというのが彼らの希望でしたので、それに添うように組み立てていきます。できれば、前期後期併せて受講していただきたいと考えています。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞中世文学 能楽研究

＜研究テーマ＞能の作品研究・演出研究

＜主要研究業績＞

・「修羅能以前の『平家の能』—〈経盛〉の再検討を通して—」、『無常の鐘声 平家物語』（松尾葦江編、花鳥社、2020.7）、pp.213-229
・「〈二人静〉—音阿弥の演出・元章の解釈」、『観世』 85 巻 3 号、檜書店、2018.3、pp.28-35

・「『御世話筋秘曲』の解説と復元の記録」、『能楽研究』 41、法政大学能楽研究所、2017.3、pp.91-112

・「能の「習事」と番組上の小字注記—「小書」という語の意味するところ—」、『能楽研究』 40、能楽研究所、2016.3、pp.135-160

・「能〈通小町〉遡源」、『国語と国文学』 93 巻 3 号、東京大学国語国文学会、2016.3、pp.3-16

【Outline (in English)】

In this class, you will learn how to apply the consideration of staging to the study of Noh works and how to decipher staging materials.

Learning Objectives are:

1)to be able to correctly interpret the content of the noh text,
2)to be able to use old materials on staging as material for researching the work.

3) to understand what "staging" means to Noh as a traditional performing art.

Each student is responsible for collating old chant manuscripts as preparatory work.

LIT500B7

江戸の文芸と文化 I

小林 ふみ子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

春学期は 18 世紀後半～19 世紀前半における江戸狂歌の流行を背景とした狂歌摺物のうち、和漢の古典籍をテーマとして制作された作品を読解する。当時の和漢の学芸の流行をふまえて設定されたテーマを題として詠まれた狂歌と、それに取り合わされた北斎やその門人魚屋北溪、岳亭定岡など、北斎派の絵師、北尾派の窪俊満等の挿絵は、どのような関係にあるのか。いまだ定説をみないこの謎に挑んでみましょう！

【到達目標】

（1）作品を翻刻し、みずから注釈を施しながら読む力をつける。
（2）近世における基本的な知識、情報を調査するための文献に習熟する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

背景についての概説のあと、まずは作品を割り当ててテキストを翻刻し、相互に確認しましょう。

その後、それぞれの図像の分析とテキストとの関係について発表してもらいます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	講義 1	江戸狂歌の流行と摺物制作について
第 2 回	講義 2	浮世絵の歴史のなかの摺物・作品選定
第 3 回	講義 3	絵師の紹介
第 4 回	翻刻をしてみよう 1	くずし字の基本
第 5 回	翻刻をしてみよう 2	各自の担当作品の翻刻確認
第 6 回	学生の発表 1	作品 1
第 7 回	学生の発表 2	作品 2
第 8 回	学生の発表 3	作品 3
第 9 回	学生の発表 4	作品 4
第 10 回	学生の発表 5	作品 5
第 11 回	学生の発表 6	作品 6
第 12 回	学生の発表 7	作品 7
第 13 回	学生の発表 8	作品 8
第 14 回	まとめ	作品を評価する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

毎週、次の場面を確認してきましょう。

発表担当者は作品解釈の発表を用意してください。

【テキスト（教科書）】

とくになし。

【参考書】

江戸狂歌の基本については江戸狂歌研究会編『化物で楽しむ江戸狂歌』（笠間書院 2014）参照。

【成績評価の方法と基準】

毎回の出席は当然の前提とした上で、報告 70 %、授業中の質疑などの参加態度 30 %によって総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

翻刻の確認を通じて、おもに仮名のくずし字が読解できるようになるようにします。

各分野の参考文献を紹介することで、江戸の事物を調べるための基本的な知識が得られるようにします。

【その他の重要事項】

授業の実施形態は受講生の様子を見てみんなで相談して決めましょう。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近世文芸・日本近世文化

<研究テーマ>大田南畝・江戸狂歌・戯作

<著書>

【単著】

『へんちくりん江戸挿絵本』インターナショナル新書（集英社インターナショナル、2019）

『大田南畝 江戸に狂歌の花咲かす』（岩波書店 2014）

『天明狂歌研究』（汲古書院 2009）

【共編著】

『水都としての東京とヴェネツィア』（法政大学出版局 2022）

『最後の文人 石川淳の世界』集英社新書（集英社 2021）

『東アジア文化講座 3 東アジアに共有される文学圏』（文学通信 2021）

『好古趣味の歴史 江戸東京からたどる』（文学通信 2020）

『北斎 視覚のマジック 小布施・北斎館名品集』（平凡社 2019）

『〈奇〉と〈妙〉の江戸文学史』（文学通信 2019）

『別冊太陽 歌麿決定版』（平凡社 2016）

『日本人は日本をどうみてきたか—江戸から見る自意識の変遷』（田中優子編、笠間書院 2015）

『化物で楽しむ江戸狂歌』（笠間書院 2014）

『別冊太陽 北斎決定版』（平凡社 2010）

【Outline (in English)】

(Outline) Reading surimono, or privately published prints with verses produced in 18-19th century Edo to analyze relationship between texts and images.

(Learning activities outside of classroom) Before each class meeting, students will be expected to have read a designated part of the text. Your required study time is four hours for each class meeting.

(Grading Criteria /Policy) Final grade will be calculated according to the presentations(50%) and in-class contribution(50%).

LIT500B7

江戸の文芸と文化Ⅱ

小林 ふみ子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

江戸時代の絵入の作品を、挿絵と合わせて読解する。秋学期は、春学期の受講生と相談して作品を決定する。

【到達目標】

（１）作品を翻刻し、注釈を施しながら読む力をつける。

（２）近世における基本的な知識、情報を調査するための文献に習熟する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式で学生の分担によって進行する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	概説	作者と画工、時代状況についての概説
第 2 回	学生の発表	上巻 1
第 3 回	学生の発表	上巻 2
第 4 回	学生の発表	上巻 3
第 5 回	学生の発表	上巻 4
第 6 回	学生の発表	中巻 1
第 7 回	学生の発表	中巻 2
第 8 回	学生の発表	中巻 3
第 9 回	学生の発表	中巻 4
第 10 回	学生の発表	下巻 1
第 11 回	学生の発表	下巻 2
第 12 回	学生の発表	下巻 3
第 13 回	学生の発表	下巻 4
第 14 回	まとめ	作品を評価する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

毎週、次回のテキストを読んでくる。

発表担当者は語釈・解釈の発表を用意する。

【テキスト（教科書）】

なし

【参考書】

小林ふみ子『へんちくりん江戸挿絵本』（集英社インターナショナル・インターナショナル新書 2019）。その他、適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎回の出席は当然の前提とした上で、報告 70 %、授業中の質疑などの参加態度 30 %によって総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

翻刻を通じて、おもに仮名のくずし字が読解できるようになるようにします。

各分野の参考文献を紹介することで、江戸の事物を調べるための基本的な知識が得られるようにします。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近世文芸・日本近世文化

<研究テーマ>大田南畝・江戸狂歌・戯作

<近年の論文・その他書き物>

【論文】

「南畝の狂歌の評価軸」『近世文藝』113 号 2021（査読付）

「文政期前後の風景画入狂歌本の出版とその改題・再印―浮世絵風景版画流行の前史として」『浮世絵芸術』179号 2020（査読付）
「狂歌に文芸性はあるのか」『古典文学の常識を疑うⅡ』（単行本）勉誠出版） 2019

「書籍を模擬する遊び―「見立絵本」にかんする疑問、から―」『京都語文』26号 2018

「山東京伝の地方読者へのまなざし」『文学（隔月刊）』17巻4号 2016

【一般誌】「江戸の名所は、都市の発達と行楽文化の成熟とともに変化した」『歴史 REAL 大江戸の都市力』洋泉社 MOOK 2018

「歌麿が描いた江戸、描かなかった江戸」『別冊太陽 歌麿決定版』2016

「国芳時代の絵師ビジネス」『芸術新潮 2016年4月号

【Outline (in English)】

(Outline) Reading illustrated works to learn how to deeply read those kind of works from 18-19th century Edo.

(Learning activities outside of classroom) Before each class meeting, students will be expected to have read a designated part of the text. Your required study time is four hours for each class meeting.

(Grading Criteria /Policy) Final grade will be calculated according to the presentations(50%) and in-class contribution(50%).

LIT500B7

江戸の思想史 I

高木 元

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、日本の近世文芸を読み理解するに際して不可欠である注釈的読解に必要な参考資料群を紹介しつつ、具体的なテキストを注釈的に読解する演習を通じての読解力の養成と、その文学史における評価に際して要求される見識を育成することをめざす。

【到達目標】

近世期の板本に使用されている所謂崩し字を判読し、固有名詞を中心とした語句の注釈が適切に出来るようになる。この場合の注釈とは文脈上の語句の意味だけではなく、作者が如何なる典拠を用いていたかと言う点の解明に及ぶ必要がある。これらの、原テキストに拠る注釈的な読解を踏まえて、近世文学史における位置や、その意義について問題設定をして論じることが出来るようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

年度始めに受講生の顔ぶれとその専攻する分野を見きわめつつ、採り上げるに相応しいテキストを複数提示する。その後、受講生の希望を聞きつつ採り上げるテキストを決定する。テキストが決まったら、研究史における文学史的位置付けと、参考資料を提示しつつ概説的講義をする。その後に、テキストを巻ごとに区切って発表担当者を決定した上で、毎回担当院生による注釈と現代語訳、そして担当部分から発見した問題点に関する発表と討議を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	テキストの決定	受講生の専攻する分野を聞きつつ、扱うテキストを選ぶ。
第2回	テキストに関する研究史概観	決まったテキストに関する研究史を踏まえた概説をする。
第3回	テキストの文学史的概括	テキストの近世文学史における位置について概観する。
第4回	第一巻注釈	第一巻の受講生による注釈
第5回	第一巻をめぐる諸問題	第一巻の受講生による問題提起ならびに討議
第6回	第二巻注釈	第二巻の受講生による注釈
第7回	第二巻をめぐる諸問題	第二巻の受講生による問題提起ならびに討議
第8回	第三巻注釈	第三巻の受講生による注釈
第9回	第三巻をめぐる諸問題	第三巻の受講生による問題提起ならびに討議
第10回	第四巻注釈	第四巻の受講生による注釈
第11回	第四巻をめぐる諸問題	第四巻の受講生による問題提起ならびに討議
第12回	第五巻注釈	第五巻の受講生による注釈
第13回	第五巻をめぐる諸問題	第五巻の受講生による問題提起ならびに討議
第14回	総括とまとめ	第一巻から第五巻を通じた問題点の整理と討議

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
テキストを読んでおくことは当然として、研究史を踏まえた問題の所在について考えてくる。発表者の注釈の可否については事前に調べてこないと論じられない。
また、授業で扱う範囲における問題の所在について検討してから授業に臨むことが不可欠である。

【テキスト（教科書）】

テキストが決定次第、原本（板本）のコピーを用意する。

【参考書】

二回目以降の授業で提示する。

【成績評価の方法と基準】

発表の水準を基準として、議論への参加の度合いを加味する（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

授業の進み具合を受講者の理解度にそくして、適宜かえてみる。

【学生が準備すべき機器他】

なし

【その他の重要事項】

なし

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本十九世紀文学

＜研究テーマ＞絵入小説史の書誌学的研究

＜主要研究業績＞『江戸読本の研究 -十九世紀小説様式攷-』（ぺりかん社 1995/10）、『中本型読本集』（国書刊行会 1988/1）ほか。

<https://fumikura.net> 参照

【Outline (in English)】

【Course outline】

This course aims to develop reading comprehension skills through exercises in the annotated reading of specific texts while introducing reference materials necessary for annotated reading, which is essential for reading and understanding Japanese early modern literature, and to cultivate the insights required for evaluation in literary history.

【Learning Objectives】

The student should decipher the Kuzushiji (manuscript characters) used in the early modern book block-printed books and appropriately annotate words and phrases, especially proper nouns. In this case, the annotations should cover the meaning of the words in the context and clarify what kind of sources the author used. The student should be set up a problem and discuss its place and significance in the history of early modern literature based on the annotated reading of the original text.

【Learning activities outside of classroom】

The standard preparation and review time required for this class is two hours each. It is necessary to read the textbook before the course and think about the problem's location based on the research history, because it is impossible to discuss whether the presenter's annotations are acceptable unless you have researched them beforehand.,in addition, you must consider where the problems lie within the scope of the class before coming to class.

【Grading Criteria /Policy】

It will be based on the result of the student's presentation and participation in the discussion.

LIT500B7

江戸の思想史Ⅱ

高木 元

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、日本の近世文芸を読み理解するに際して不可欠である具体的なテキストを注釈的に読解する演習を通じての読解力の養成と、その文学史における評価に際して要求される見通しを育成することをめざす。

【到達目標】

近世期の板本に使用されている所謂崩し字を判読力をつける。参考図書を活用して語句の注釈が適切に出来るようにする。この場合の注釈とは文脈上の語句の意味だけではなく、作者が如何なる典拠を用いていたかと云う点の解明に及ぶ必要がある。これらの原本に拠る注釈的な読解を踏まえて、近世文学史における位置や、その意義について問題設定をして論じることが出来るようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講生の専攻する分野を見きわめつつ、受講生の希望を聞きつつ採り上げるテキストを決定する。テキストが決まったら、研究史における文学史的位置付けと、参考資料を提示しつつ概説的講義をする。その後、テキストを巻ごとに区切って発表担当者を決定した上で、毎回担当院生による注釈と現代語訳、そして担当部分から発見した問題点に関する発表と討議を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	テキストの決定	受講生の専攻する分野を聞きつつ、扱うテキストを選ぶ。
第2回	テキストに関する研究史概観	決まったテキストに関する研究史を踏まえた概説をする。
第3回	テキストの文学史的概括	テキストの近世文学史における位置について概観する。
第4回	第一巻注釈	第一巻の受講生による注釈
第5回	第一巻をめぐる諸問題	第一巻の受講生による問題提起ならびに討議
第6回	第二巻注釈	第二巻の受講生による注釈
第7回	第二巻をめぐる諸問題	第二巻の受講生による問題提起ならびに討議
第8回	第三巻注釈	第三巻の受講生による注釈
第9回	第三巻をめぐる諸問題	第三巻の受講生による問題提起ならびに討議
第10回	第四巻注釈	第四巻の受講生による注釈
第11回	第四巻をめぐる諸問題	第四巻の受講生による問題提起ならびに討議
第12回	第五巻注釈	第五巻の受講生による注釈
第13回	第五巻をめぐる諸問題	第五巻の受講生による問題提起ならびに討議
第14回	総括とまとめ	第一巻から第五巻を通じた問題点の整理と討議

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。テキストを読んでくることは当然として、研究史を踏まえた問題の所在について考えてくる。発表者の注釈の可否については事前に調べてこないと論じられない。また、授業で扱う範囲における問題の所在について検討してから授業に臨むことが不可欠である。

【テキスト（教科書）】

テキストが決定次第、原本（板本）のコピーを用意する。

【参考書】

二回目以降の授業で提示する。

【成績評価の方法と基準】

発表の水準を基準として、議論への参加の度合いを加味する（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

受講生の理解度を見ながら授業の進行速度を調整する。

【学生が準備すべき機器他】

なし

【その他の重要事項】

なし

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本十九世紀文学

＜研究テーマ＞絵入小説史の書誌学的研究

＜主要研究業績＞『江戸読本の研究 -十九世紀小説様式攷-』（ぺりかん社 1995/10）、『中本型読本集』（国書刊行会 1988/1）ほか。

<https://fumikura.net> 参照

【Outline (in English)】

【Course outline】

This course aims to develop reading comprehension skills through exercises in the annotated reading of specific texts while introducing reference materials necessary for annotated reading, which is essential for reading and understanding Japanese early modern literature, and to cultivate the insights required for evaluation in literary history.

【Learning Objectives】

The student should decipher the Kuzushiji (manuscript characters) used in the early modern book block-printed books and appropriately annotate words and phrases, especially proper nouns. In this case, the annotations should cover the meaning of the words in the context and clarify what kind of sources the author used. The student should be set up a problem and discuss its place and significance in the history of early modern literature based on the annotated reading of the original text.

【Learning activities outside of classroom】

The standard preparation and review time required for this class is two hours each. It is necessary to read the textbook before the course and think about the problem's location based on the research history, because it is impossible to discuss whether the presenter's annotations are acceptable unless you have researched them beforehand.,in addition, you must consider where the problems lie within the scope of the class before coming to class.

【Grading Criteria /Policy】

It will be based on the result of the student's presentation and participation in the discussion.

LIN500B7

日本語の歴史と現在 I

竹林 一志

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本古典文学の言語表現は如何なるものか、それをどのように解析すればよいのか、ということ学ぶ（本授業は、おもに留学生を対象とする）。一字一句をゆるがせにせず、古典本文を丁寧に読み解けるようになることを目指す。

【到達目標】

1. 日本古典文学の言語表現の特徴について、特定の作品の具体例を挙げつつ説明することができる。
2. 日本古典文学の言語表現を的確に解析するための方法・姿勢を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

いわゆる「古典文法」の基礎知識を確認した後、古代・中世・近世の文学作品を対象として表現解析を行う。授業は、テキストと配付プリントを用い、おもに講義形式で進める。提出物（授業内容に関するワークシート）に対するフィードバックは次の授業回において口頭で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	本授業の全体像を伝える。
第 2 回	古典文法	助詞・助動詞を中心に古典文法の基礎知識を確認する。
第 3 回	表現解析の方法	日本古典文学の表現解析法について概説する。
第 4 回	『古今和歌集』所収歌の読解（先行研究についての検討）	『古今和歌集』「春歌上」の和歌（特に 16 番歌）について先行研究の論を検討する。
第 5 回	『古今和歌集』所収歌の読解（新たな解釈の提示）	『古今和歌集』「春歌上」の和歌（特に 16 番歌）の表現を解析する。
第 6 回	『枕草子』冒頭部の読解（先行研究についての検討）	『枕草子』冒頭部について先行研究の論を検討する。
第 7 回	『枕草子』冒頭部の読解（新たな解釈の提示）	『枕草子』冒頭部の表現を解析する。
第 8 回	『大鏡』『平家物語』の重層表現（先行研究についての検討）	『大鏡』『平家物語』における謎の表現について先行研究の論を検討する。
第 9 回	『大鏡』『平家物語』の重層表現（新たな解釈の提示）	『大鏡』『平家物語』における謎の表現を解析する。
第 10 回	『徒然草』第 89 段の読解（先行研究についての検討）	『徒然草』第 89 段について先行研究の論を検討する。
第 11 回	『徒然草』第 89 段の読解（新たな解釈の提示）	『徒然草』第 89 段の表現を解析する。
第 12 回	松尾芭蕉の俳句の読解（先行研究についての検討）	松尾芭蕉の病中吟「旅に病んで…」について先行研究の論を検討する。
第 13 回	松尾芭蕉の俳句の読解（新たな解釈の提示）	松尾芭蕉の病中吟「旅に病んで…」の表現を解析する。

第14回 総括

本授業の要点をまとめつつ、受講者の理解度を確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間（計4時間）を標準とする。各回の授業までに、所定のテキスト箇所を一読しておくこと。授業後は、ノート、テキストや配付物を見直しておくこと。

【テキスト（教科書）】

『日本古典文学の表現をどう解析するか』竹林一志、笠間書院、2009年、2,200円（税別）

【参考書】

『徒然草拔書』小松英雄、講談社
『みそひと文字の抒情詩』小松英雄、笠間書院

【成績評価の方法と基準】

学期末レポート（上記の到達目標に関連する課題を出す）：60％
提出物：30％
受講姿勢：10％

【学生の意見等からの気づき】

専門的な内容を分かりやすく解説するように努めます。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本語文法、日本古典文学の表現、三浦綾子文学

<研究テーマ>

文の本質、助詞・助動詞の意味・用法、文学表現の解析など

<主要研究業績>

単著：

『日本古典文学の表現をどう解析するか』笠間書院、2009年
『聖書で読み解く『氷点』『続 氷点』』いのちのことば社、2014年
『文の成立と主語・述語』花鳥社、2020年

【Outline (in English)】

【Course outline】

In this class we study about the linguistic expressions of Japanese classical literature and the methods of analyzing them. The aim of the class is to improve the skills for reading Japanese classical literature. We try not to neglect any word or phrase in the texts. This class is mainly intended for overseas students.

【Learning Objectives】

The goals of this course are as follows:

1. Students can explain the characteristics found in the expressions of Japanese classical literature, drawing instances from works.
2. Students acquire the methods and attitudes for analyzing the expressions of Japanese classical literature.

【Learning activities outside of classroom】

Before each class meeting, you will be expected to have read the relevant chapter from the text. And after each class meeting, you will be expected to reread your notes, text and handouts. Your study time will be about four hours for a class.

【Grading Criteria /Policy】

Your overall grade in the class will be decided based on the following:

Term-end report: 60%, Works to be submitted: 30%, in-class contribution 10%

LIN500B7

日本語の歴史と現在Ⅱ

竹林 一志

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

『伊勢物語』第1段～第15段を丁寧に読み解きながら、日本古典文学の言語表現と、その解析法について学ぶ（本授業は、おもに留学生を対象とする）。仮名文の性質を理解し、ディスコースの中で表現を読み解けるようになることを目指す。

【到達目標】

1. 『伊勢物語』の言語表現の特徴について、具体例を挙げつつ説明することができる。
2. 日本古典文学の言語表現を的確に解析するための方法・姿勢を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

テキストと配付プリントを用い、おもに演習形式（受講者の分担発表と出席者全員による討議）で進める。提出物（授業内容に関するワークシート）に対するフィードバックは次の授業回において口頭で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	テキスト「読者のみなさんへのよびかけ」の読解	本授業の全体像を伝えた後、テキスト「読者のみなさんへのよびかけ」を一緒に読む。発表の分担も行う。
第2回	テキスト「イントロダクション」の読解	担当教員作成のワークシートをもとに、テキスト「イントロダクション」を読み解く。
第3回	第1段「昔、をところ」～「心地まどひにけり」の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第1段「昔、をところ」～「心地まどひにけり」の表現を解析する。
第4回	第1段「をとこの着たりける」～「雅をなむしける」の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第1段「をとこの着たりける」～「雅をなむしける」の表現を解析する。
第5回	第2段・第3段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第2段・第3段の表現を解析する。
第6回	第4段・第5段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第4段・第5段の表現を解析する。
第7回	第6段～第8段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第6段～第8段の表現を解析する。
第8回	第9段「昔、をとこありけり」～「ほとびにけり」の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第9段「昔、をとこありけり」～「ほとびにけり」の表現を解析する。
第9回	第9段「行き行きて」～「しほじりのやうになむ、ありける」の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第9段「行き行きて」～「しほじりのやうになむ、ありける」の表現を解析する。

第10回	第9段「なほ行き行きて」～「こそぞりて泣きにけり」の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第9段「なほ行き行きて」～「こそぞりて泣きにけり」の表現を解析する。
第11回	第10段～第12段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第10段～第12段の表現を解析する。
第12回	第13段・第14段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第13段・第14段の表現を解析する。
第13回	第15段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第15段の表現を解析する。
第14回	総括	本授業の要点をまとめつつ、受講者の理解度を確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間（計4時間）を標準とする。
各回の授業までに、所定のテキスト箇所を一読しておくこと。
授業後は、ノートやテキスト、配付物を見直しておくこと。

【テキスト（教科書）】

『伊勢物語の表現を掘り起こす』小松英雄、笠間書院、2010年、1,900円（税別）

【参考書】

『日本古典文学の表現をどう解析するか』竹林一志、笠間書院
『みそひと文字の抒情詩』小松英雄、笠間書院

【成績評価の方法と基準】

学期末レポート（上記の到達目標に関連する課題を出す）：40％
発表：40％
提出物：10％
受講姿勢：10％

【学生の意見等からの気づき】

専門的な内容を分かりやすく解説するように努めます。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

春学期科目「日本語・日本文学の基礎A」（「日本語の歴史と現在Ⅰ」）を受講していることが望ましい。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

日本語文法、日本古典文学の表現、三浦綾子文学

＜研究テーマ＞

文の本質、助詞・助動詞の意味・用法、文学表現の解析など

＜主要研究業績＞

単著：

『日本古典文学の表現をどう解析するか』笠間書院、2009年
『聖書で読み解く『氷点』『続 氷点』』いのちのことば社、2014年
『文の成立と主語・述語』花鳥社、2020年

【Outline (in English)】

【Course outline】

In this class we carefully read 'The tale of Ise' (from chapter 1 through 15) for studying about the linguistic expressions of Japanese classical literature and the methods of analyzing them. The aim of the class is to understand the characteristics of classical texts written in *kana* and interpret the linguistic expressions precisely in the context. This class is mainly intended for overseas students.

【Learning Objectives】

The goals of this course are as follows:

1. Students can explain the characteristics found in the expressions of 'The tale of Ise', drawing instances from the work.
2. Students acquire the methods and attitudes for analyzing the expressions of Japanese classical literature.

【Learning activities outside of classroom】

Before each class meeting, you will be expected to have read the relevant chapter from the text. And after each class meeting, you will be expected to reread your notes, text and handouts. Your study time will be about four hours for a class.

【Grading Criteria /Policy】

Your overall grade in the class will be decided based on the following:

Term-end report: 40%, Presentation: 40%, Works to be submitted: 10%, in-class contribution 10%

LIN500B7

現代日本語のしくみⅠ

古牧 久典

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

認知言語学（主に認知意味論）の基本的な考え方を理解し、現代日本語の分析技法を学ぶ。テキストの認知意味論の概説書を通じて、毎回、実例分析・考察を行う。認知意味論を踏まえた現代日本語についての論文の読解や執筆につながる能力を身につける。

【到達目標】

- ・日本語学の見地から、現代日本語を観察することができる。
- ・認知意味論の基本的な考え方を理解することができる。
- ・認知意味論の基盤に沿って、現代日本語を説明することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業は、演習形式を基本とする。テキストを毎回 1 章のペースで読み進める。全受講者はテキスト指定部を熟読しておく。事前にテキストから担当箇所が指定されるので、担当学生はテキスト内容を発表する。内容に基づき、要点整理、疑問点、理解確認、発展可能性に関するディスカッションを実施する。内容によっては講義形式での解説から学習する。（受講者に応じ、追加で教材資料や論文を配布し、講読する場合もある。）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス／認知意味論の基本的な考え方（テキスト 第 1 章）	授業概要・形式と進め方・導入／日本語「大きい」についての分析・考察・討論
第 2 回	プロトタイプカテゴリー（テキスト 第 2 章）	日本語「悔し涙」「うれし泣き」についての分析・考察・討論
第 3 回	同じ物事に対する異なる捉え方（テキスト 第 3 章）	日本語「まだ三十二だよ」についての分析・考察・討論
第 4 回	焦点化の違いに基づく表現（テキスト 第 4 章）	日本語「後退」についての分析・考察・討論
第 5 回	視点の違いに基づく表現（テキスト 第 5 章）	日本語「来る」「行く」についての分析・考察・討論
第 6 回	主体化（テキスト 第 6 章）	日本語「小さくなる」についての分析・考察・討論
第 7 回	時間の捉え方（テキスト 第 7 章）	日本語「冬がやってくる」についての分析・考察・討論
第 8 回	百科事典的意味（テキスト 第 8 章）	日本語「石」についての分析・考察・討論
第 9 回	指示対象に対する他者の関与（テキスト 第 9 章）	日本語「雪だるま式」についての分析・考察・討論
第 10 回	フレームに基づく類義語の意味の違い（テキスト 第 10 章）	日本語「空地」「さら地」についての分析・考察・討論
第 11 回	典型例（テキスト 第 11 章）	日本語「おもちゃみたい」についての分析・考察・討論
第 12 回	顕著例・理想例（テキスト 第 12 章）	日本語「質問の雨」についての分析・考察・討論
第 13 回	ステレオタイプ（1）（テキスト 第 13 章）	日本語「サラリーマン教師」についての分析・考察・討論
第 14 回	ステレオタイプ（2）（テキスト 第 14 章）／授業全体総括	日本語「ロケットスタート」についての分析・考察・討論／授業全体の総まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・日本語学や言語学の最低限の基礎知識を事前に準備学習として各自習得しておくこと。（授業と並行して学習を進めることも可。）
- ・受講学生はテキスト指定部（毎回テキスト 1 章分）を事前に読み、疑問点などを挙げて整理しておく。
- ・発表担当回の学生はテキストについての発表資料を準備し、項目内容の大枠と詳細、両者を授業内で説明できるようにしておく。
- ・準備学習・復習・宿題等の時間は、授業の前と後で、それぞれ 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

棚山洋介 (2020) 『実例で学ぶ認知意味論』 研究社、2,000 円（＋税）

【参考書】

- 池上嘉彦 (2006) 『英語の感覚・日本語の感覚』, NHK ブックス。
- 大堀壽夫 (2002) 『認知言語学』, 東京大学出版会。
- 児玉一宏・谷口一美・深田智 編著 (2020) 『はじめて学ぶ認知言語学』, ミネルヴァ書房。

- 高橋英光・野村益寛・森雄一 編 (2018) 『認知言語学とは何かーあの先生に聞いてみよう』, くろしお出版。
- 谷口一美 (2006) 『学びのエクササイズ 認知言語学』, ひつじ書房。
- 辻幸夫 編 (2013) 『新編 認知言語学キーワード事典』, 研究社。
- 辻幸夫 編集主幹 (2019) 『認知言語学大事典』, 朝倉書店。
- 西村義樹・野矢茂樹 (2013) 『言語学の教室ー哲学者と学ぶ認知言語学』, 中公新書。
- 野村益寛 (2014) 『ファンダメンタル認知言語学』, ひつじ書房。
- 棚山洋介 (2010) 『認知言語学入門』, 研究社。
- 森雄一 (2012) 『学びのエクササイズ レトリック』, ひつじ書房。
- 山梨正明 (2000) 『認知言語学原理』, くろしお出版。
- 吉村公宏 (2004) 『はじめての認知言語学』, 研究社。
- （上記以外は授業時に提示。）

【成績評価の方法と基準】

テキスト内容紹介とディスカッションへの参加度（紹介方法を含む）（50 %）
小レポート（レジュメ・リアクションペーパー等）（25 %）
期末レポート（25 %）

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【その他の重要事項】

日本語学・英語学・中国語学などの言語学関連の学部教養科目程度の知識を必須とする。
秋学期開講の同科目 B も合わせて履修することを推奨する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 認知言語学、意味論、語用論、コーパス言語学

<研究テーマ> 認知意味論と（認知）語用論の接点

<主要研究業績>

「<重複>表現とメトニミ」（坂原茂編『日仏名詞限定表現の対照研究』平成 18～20 年度科学研究費補助金・基盤研究（C）研究成果報告書 2009 年）
「トートロジー構文から迫る認知語用論」（山梨正明他編『認知言語学論考 No.10』ひつじ書房 2012 年）
『語用論キータム事典』（共訳 開拓社 2014 年）
『語彙語用論と認知意味論』（辻幸夫 編集主幹『認知言語学大事典』朝倉書店 2019 年）

【Outline (in English)】

(Course outline)

This course gives an overview of basic theories with special reference to modern Japanese language, within Cognitive Semantics, as part of the field of Cognitive Linguistics, such as prototypes, construal, viewpoints, focusing, subjectification, and encyclopedic view on meaning. The aim of this class is to help students learn cognitive-semantic analysis to linguistic meaning in Japanese.

(Learning Objectives)

The goals of this course are to understand modern Japanese language from the linguistic perspectives; to understand basic cognitive-semantic concepts; and to apply them to Japanese language.

(Learning activities outside of classroom)

Students will be expected to spend four hours each class on out-of-class preparation by reading the relevant chapter from the textbook and giving brief and/or detailed presentations on it, to understand the course content.

(Grading Criteria /Policy)

Your overall grade in the class will be decided based on the following:

- In-class contribution: 50%
- Short reports: 25%
- Term-end report: 25%

LIN500B7

現代日本語のしくみⅡ

古牧 久典

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

認知言語学（主に認知意味論）の基本的な考え方を理解し、現代日本語の分析技法を学ぶ。テキストの認知意味論の概説書を通じて、毎回、実例分析・考察を行う。認知意味論を踏まえた現代日本語についての論文の読解や執筆につながる能力を身につける。

【到達目標】

- ・日本語学の見地から、現代日本語を観察することができる。
- ・認知意味論の基本的な考え方を理解することができる。
- ・認知意味論の基盤に沿って、現代日本語を説明することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業は、演習形式を基本とする。テキストを毎回 1 章のペースで読み進める。全受講者はテキスト指定部を熟読しておく。事前にテキストから担当箇所が指定されるので、担当学生はテキスト内容を発表する。内容に基づき、要点整理、疑問点、理解確認、発展可能性に関するディスカッションを実施する。さらに、追加で論文を講読する。（扱われている内容や受講者の研究テーマに応じ、追加配布資料による講義形式での解説で学習する場合もある。）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス／メタファー（テキスト 第 15 章）	授業概要・形式と進め方・導入／日本語「マシーン」についての分析・考察・討論
第 2 回	メトニミー（テキスト 第 16 章）	日本語「食卓」についての分析・考察・討論
第 3 回	シネクドキー（テキスト 第 17 章）	日本語「結果」についての分析・考察・討論
第 4 回	比喩に基づく婉曲表現の仕組み（テキスト 第 18 章）	日本語「不幸」についての分析・考察・討論
第 5 回	多義語（テキスト 第 19 章）	日本語「遠い」についての分析・考察・討論
第 6 回	典型的な多義語（テキスト 第 20 章）	日本語「かたい」についての分析・考察・討論
第 7 回	単義語寄りの多義語（テキスト 第 21 章）	日本語「学校」についての分析・考察・討論
第 8 回	同音異義語寄りの多義語（テキスト 第 22 章）	日本語「たずねる」についての分析・考察・討論
第 9 回	多義語のプロトタイプの意味（1）（テキスト 第 23 章）	日本語「にらむ」についての分析・考察・討論
第 10 回	多義語のプロトタイプの意味（2）（テキスト 第 24 章）	日本語「ところ」についての分析・考察・討論
第 11 回	メトニミーおよびフレームに基づく多義語（テキスト 第 25 章）	日本語「聞く」についての分析・考察・討論
第 12 回	多義構造（テキスト 第 26 章）	日本語「タマゴ」についての分析・考察・討論
第 13 回	もじりの認知意味論（1）（テキスト 第 27 章）	日本語「昨日の敵は敵のまま」についての分析・考察・討論
第 14 回	もじりの認知意味論（2）（テキスト 第 28 章）／授業全体総括	日本語「一姫 二トラ 三ダンブ」についての分析・考察・討論／授業全体の総まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・日本語学や言語学の最低限の基礎知識を事前に準備学習として各自習得しておくこと。（授業と並行して学習を進めることも可。）
- ・受講学生はテキスト指定部（毎回テキスト 1 章分）を事前に読み、疑問点などを挙げて整理しておく。
- ・発表担当回の学生はテキストや追加論文についての発表資料を準備し、項目内容の大枠と詳細、両者を授業内で説明できるようにしておく。
- ・準備学習・復習・宿題等の時間は、授業の前と後で、それぞれ 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

初山洋介 (2020) 『実例で学ぶ認知意味論』 研究社、2,000 円（＋税）

【参考書】

池上嘉彦 (2006) 『英語の感覚・日本語の感覚』、NHK ブックス。

大堀壽夫 (2002) 『認知言語学』、東京大学出版会。

児玉一宏・谷口一美・深田智 編著 (2020) 『はじめて学ぶ認知言語学』、ミネルヴァ書房。

高橋英光・野村益寛・森雄一 編 (2018) 『認知言語学とは何かーあの先生に聞いてみよう』、くろしお出版。

谷口一美 (2006) 『学びのエクササイズ 認知言語学』、ひつじ書房。

辻幸夫 編 (2013) 『新編 認知言語学キーワード事典』、研究社。

辻幸夫 編集主幹 (2019) 『認知言語学大事典』、朝倉書店。

西村義樹・野矢茂樹 (2013) 『言語学の教室－哲学者と学ぶ認知言語学』、中公新書。

野村益寛 (2014) 『ファンダメンタル認知言語学』、ひつじ書房。

初山洋介 (2010) 『認知言語学入門』、研究社。

森雄一 (2012) 『学びのエクササイズ レトリック』、ひつじ書房。

山梨正明 (2000) 『認知言語学原理』、くろしお出版。

吉村公宏 (2004) 『はじめての認知言語学』、研究社。

（上記以外は授業時に提示。）

【成績評価の方法と基準】

テキスト内容紹介とディスカッションへの参加度（紹介方法を含む）（50 %）
小レポート（レジュメ・リアクションペーパー等）（25 %）
期末レポート（25 %）

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【その他の重要事項】

日本語学・英語学・中国語学などの言語学関連の学部教養科目程度の知識を必須とする。

春学期開講の同科目 A も合わせての履修することを推奨する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 認知言語学、意味論、語用論、コーパス言語学

<研究テーマ> 認知意味論と（認知）語用論の接点

<主要研究業績>

「<重複>表現とメトニミ」（坂原茂編 『日仏名詞限定表現の対照研究』平成 18～20 年度科学研究費補助金・基盤研究（C）研究成果報告書 2009 年）

「トートロジー構文から迫る認知語用論」（山梨正明他編 『認知言語学論考 No.10』ひつじ書房 2012 年）

『語用論キータム事典』（共訳 開拓社 2014 年）

『語彙語用論と認知意味論』（辻幸夫 編集主幹 『認知言語学大事典』朝倉書店 2019 年）

【Outline (in English)】

(Course outline)

This course gives an overview of basic theories with special reference to modern Japanese language, within Cognitive Semantics, as part of the field of Cognitive Linguistics, such as metaphor, metonymy, synecdoche, and polysemy. The aim of this class is to help students learn cognitive-semantic analysis to linguistic meaning in Japanese.

(Learning Objectives)

The goals of this course are to understand modern Japanese language from the linguistic perspectives; to understand basic cognitive-semantic concepts; and to apply them to Japanese language.

(Learning activities outside of classroom)

Students will be expected to spend four hours each class on out-of-class preparation by reading the relevant chapter from the textbook and giving brief and/or detailed presentations on it, to understand the course content.

(Grading Criteria/Policy)

Your overall grade in the class will be decided based on the following:

- In-class contribution: 50%

- Short reports: 25%

- Term-end report: 25%

LIT500B7

沖縄文芸史 I

福 寛美

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ・琉球王国初の文字資料『おもろさうし』に親しむ。
- ・琉球の口頭伝承を記した『遺老説伝（いろうせつでん）』の説話を読む。
- ・また簡単な発表を通し、神歌や口頭伝承への理解を深める。
- ・琉球文学の古典に親しむ。

【到達目標】

- ・『おもろさうし』はおもろと称する神歌を集成した冊子である。おもろは日本本土のどのような歌謡とも似ていない。その世界観、そして神霊観を知ることが目的とする。
- ・また琉球の口頭伝承を記した『遺老説伝（いろうせつでん）』の説話を読み、その説話に影響を与えたと考えられる事象の考察も目的とする。
- ・琉球文学の古典に親しむことを目的とする。
- ・琉球文学を深く理解することを到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・講義形式と演習形式をまぜて行う。
- ・講義をした後、講義の内容にかかわる事象を学生が調べ発表する、という形をとる。
- ・調べものは琉球・沖縄に関する基本的な文献（辞典など）を使う程度とする。
- ・対面形式の授業とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	『おもろさうし』のおもろとおもろの鷺の用例を読む 1	おもろの読み方を知り、おもろ世界の鷺の用例を読む。
第 2 回	『おもろさうし』のおもろとおもろの鷺の用例を読む 2	おもろ世界の鷺の用例を読んでいく。
第 3 回	第 1 回、第 2 回の講義をふまえ、学生が調べたことを発表する	琉球・沖縄の文学や民俗に関する辞典の記述を読み、簡単に発表する。
第 4 回	おもろ世界の鷺の霊能、鷺のつく地名を考察する	おもろ世界の鷺は霊能ある存在とされている。そのことを考察していく。
第 5 回	鷺、そして鷺羽には戦勝の霊力があるとされた。そのことを考察する	おもろ世界の鷺、そして鷺羽の用例のうち、戦勝と関わる用例をみていく。
第 6 回	第 4 回、第 5 回の講義をふまえ、学生が調べたことを発表する	『おもろさうし』の研究書で鷺の用例を考察したものを読み、簡単に発表する。
第 7 回	おもろ世界の船と猛禽類のダブルイメージのおもろを読む	おもろ世界では船が猛禽類とダブルイメージされることがある。その用例を読んでいく。
第 8 回	琉球船は実際に猛禽類と重ね合わされている。そのことを考察する	琉球船には猛禽類の目玉模様が付けられていた。その意味を考察していく。

第 9 回	第 7 回、第 8 回の講義をふまえ、学生が調べたことを発表する	琉球船の絵図は残っており、インターネットでも検索できる。その絵図、またおもろについて調べ、簡単に発表する。
第 10 回	『遺老説伝』を知る	琉球の口頭伝承を集成した『遺老説伝』について学び、鷺羽の説話を読む。
第 11 回	鷺のイメージを考察する	おもろ世界の鷺のイメージ形成に関与した、と思われる神話を読む。また矢羽根として珍重された鷺の尾羽について学ぶ。
第 12 回	第 10 回、第 11 回の講義をふまえ、学生が調べたことを発表する	『遺老説伝』の現代語訳を読む、またインターネットで読める文献を読み、簡単に発表する。
第 13 回	鳥の墓の伝承、現代の八重山諸島で愛される「鷺之鳥節」について考察する	多良間（たらま）島の鳥の墓の伝承、現代も愛される「鷺之鳥節」とおもろ世界の鷺を比較する。
第 14 回	春学期の講義をふまえ、学生が調べたことを発表する	主に第 13 回の講義に関わる事象を簡単に調べ、発表し、春学期をまとめる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・『火山と竹の女神』（教科書）の「おもろ世界の鷺」の部分を読む。
- ・授業支援システムにおもろの読み方、「おもろ世界の鷺」に関わる事柄を記したプリントをアップするので、あわせて読む。
- ・大学の沖縄文化研究所にはおもろ、ほか琉球文学に必要な文献が揃っているので、発表する時はそこで辞書を引いたり、参考文献を読んだりする。
- ・学習時間は各自の任意とする。

【テキスト（教科書）】

- ・『火山と竹の女神』（福寛美、七月社、2021 年）本体 2500 円＋税

【参考書】

- ・『喜界島・鬼の海域』（福寛美、新典社、2008 年）
- ・『『おもろさうし』と群雄の世紀』（福寛美、森話社、2013 年）
- ・『ぐすく造営のおもろ』（福寛美、新典社、2015 年）
- ・『奄美群島おもろの世界』（福寛美、南方新社、2018 年）

【成績評価の方法と基準】

- ・期末試験は、問題を複数提示し、2 問を選んでそれぞれ 400 字以上記述することとする。
- ・平常点に含まれる、出席回数、発表への積極性も評価基準とする。
- ・期末試験 70%、平常点 30% で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

担当者は琉球文学のほか、民俗学、神話学も専攻している。そのため、『おもろさうし』以外の学生の関心に応えることも可能である。学生からの申し出があった場合、『おもろさうし』のほか、シャーマン、神話なども積極的に授業で対応していきたい。過去の授業では、学生からの申し出によってシャーマンについて述べた。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

春学期、秋学期ともに同じテキストを使用する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
琉球文学（『おもろさうし』）
民俗学（南西諸島のシャーマン）
神話学（日本神話、琉球神話）

【<研究テーマ>】

現在の研究テーマの中心は南西諸島の神霊観である。また『おもろさうし』の言語の中に奈良時代の東国方言と同じものがあることに注目し、研究を進めている。

【<主要研究業績>】

『ぐすく造営のおもろ』（新典社、2015 年）
『うたの神話学』（森話社、2014 年）
『ユタ神誕生』（南方新社、2013 年）

『『おもしろさうし』と群雄の世紀』（森話社、2013 年）
『夜の海、永劫の海』（新典社、2011 年）

【主要研究業績】

『琉球の恋歌』（新典社、2010 年）
『喜界島・鬼の海域』（新典社、2008 年）
その他
『奄美三少年 ユタへの道』（円聖修著、南方新社、2017 年）の監修

【Outline (in English)】

The Omoro Soshi is the first written compilation of sacred songs and poems collected by Ryukyu kingdom. The Ryukyuan folklores in the Irousetsuden and the Okinawan cultural background may have affected the development of its oral traditions. In this course, you will learn the Ryukyuan sacred songs and literature are related to the cultures of surrounding areas and developed their own unique styles. The members of this course will also be required to make a presentation to deepen their understandings. The goal is to have a deep understanding of Ryukyuan literature. For learning outside of class hours, read textbooks and references carefully. The method and criteria for grade evaluation are to attend at least 6 times and take a test. The test is 70% and the normal score is 30%.

LIT500B7

沖縄文芸史Ⅱ

福 寛美

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ・琉球文学・民俗を考察する際には南九州（薩摩）や薩南の島々についてよく知る必要がある。
- ・古代日本の神話において、南九州を重視する箇所がある。
- ・そのことを考察し、沖縄島を中心とする南西諸島への理解を深めるようつとめる。
- ・日本神話における隼人の重要性を理解することを到達目標とする。

【到達目標】

- ・日本神話の従来の研究とは別の視点で神話を考察することにより、見えてくるものは多い。そのことを学ぶ。
- ・日本神話を火山や噴火という視点で考察する研究はあまり見られなかった。しかし、火山列島の日本で古代の噴火は神の仕業とされていた。そのことに注目し、新たな知見を得る。
- ・神話のコノハナノサクヤビメと『竹取物語』のカグヤヒメを比較検討する。
- ・日本語のヨ（世・代・節）は南西諸島の祭祀においても重要な存在である。またヨは世界観や時間意識を表現する語でもあるので、そのことを学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・講義を数回した後、学生が講義に関わる事象について簡単な発表をする、という形をとる。
- ・講義と演習の混合形式で授業を進める。
- ・対面授業とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	噴火・火山の女神	古代における火山の噴火と、火山の女神とされるコノハナノサクヤビメについて考察する。
第 2 回	コノハナノサクヤビメの行動	コノハナノサクヤビメが天上のアマテラス同様の行動をとったり、隼人の女神らしく振舞ったりすることを考察する。
第 3 回	ヨ（節）	ヨが竹の節を意味する事例を考察し、『竹取物語』のカグヤヒメがそこにいた意義を考察する。
第 4 回	学生の発表	第 1～3 回の講義の中で関心のある箇所を調べ、簡単に発表する。辞書を引く、参考文献の粗筋を紹介する、などの発表をする。
第 5 回	ヨと輝き・カグヤヒメのカグ	カグヤヒメは竹の節の間におり、ヨ（節）は輝いていた。カグヤヒメと香具山、火の神カグツチを比較検討する。
第 6 回	影（カゲ）	カグと関わるカゲ（影）は霊力や魂、そして光とも結びつく語である。そのことを考察する。
第 7 回	隼人と畿内	隼人は畿内に移住し、その痕跡は考古学的事象、地名などに残っている。そのことを考察する。
第 8 回	学生の発表	第 4～7 回の講義の中で、学生が興味を持った箇所について発表する。

第9回	コノハナノサクヤビメ・ナヨタケノカグヤヒメ	コノハナノサクヤビメとカグヤヒメが神話的に極めて興味深い対応をしていることを考察する。
第10回	富士山	コノハナノサクヤビメは富士山の女神とされている。その意義を考察する。
第11回	隼人と水の献上	隼人は朝廷で水を献上する役割を担っていた。そのことの意義を考察する。
第12回	日向出身の皇妃	日本古代、日向（現在の宮崎県）出身、つまり隼人の女性が皇妃になったことが語られる。そのことの意義を考察する。
第13回	隼人と狗吠え（いぬばえ）	隼人は魔を祓うため狗吠えという特殊な声を出す役割を担っていた。そのことを考察する。
第14回	学生の発表	第9～13回の講義で学生が興味を持った箇所を調べ、発表する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・『火山と竹の女神』の「火山と竹の女神」をよく読むこと。
- ・教科書の理解を助けるため、学習支援システムにプリントをアップするので、プリントもあわせて読むこと。
- ・参考文献、インターネットで読める参考文献を指示するので、それも読むこと。
- ・学習時間については、各自の任意とする。

【テキスト（教科書）】

- ・『火山と竹の女神』（福寛美、七月社、2021年）本体 2500円＋税

【参考書】

- ・『夜の海、永劫の海』（福寛美、新典社、2011年）
- ・『うたの神話学』（福寛美、森話社、2014年）
- ・『新うたの神話学』（福寛美、新典社、2020年）

【成績評価の方法と基準】

- ・学期末に期末試験を行う。問題を複数提示し、2問選んでそれぞれ400字以上記述する、という形をとる。
- ・平常点も評価に加える。最低6回は出席すること。
- ・期末試験を70%、平常点を30%として評価する。

【学生の意見等からの気づき】

- ・筆者は琉球文学のほかに、南西諸島のシャーマン（ユタガミ・ユタ）の研究もしている。
- ・学生の関心が琉球文学や神話学よりもシャーマンの場合、シャーマンについても講じることは可能である。
- ・シラバスに沿った授業のほかに関心がある、という申し出が過去にあり、その対応をしたこともある。そのような場合、授業の時に申し出てほしい。
- ・また授業の内容があまり馴染みのないものであると、難解すぎる、という声が聞かれる。なるべくわかりやすく解説するようにつとめる。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

- ・春学期、秋学期は共に同じテキストを使用する。

【担当教員の専門分野等】

- ＜専門領域＞
- ・琉球文学（『おもろさうし』）
- ・神話学
- ・民俗学（シャーマン研究）

【＜研究テーマ＞】

- ・『おもろさうし』の文学研究
- ・日本神話・琉球神話研究
- ・奄美のシャーマン研究

【＜主要研究業績＞】

- ・『新うたの神話学』（新典社、2020年）
- ・『奄美群島おもろの世界』（南方新社、2018年）
- ・『歌とシャーマン』（南方新社、2015年）

【＜主要研究業績＞】

- ・『ぐすく造営のおもろ』（新典社、2015年）
- ・『『おもろさうし』と群雄の世紀』（森話社、2013年）
- ・『ユタ神誕生』（南方新社、2013年）

- ・『夜の海、永劫の海』（新典社、2011年）

【＜主要研究業績＞】

- ・『うたの神話学』（森話社、2010年）
- ・『琉球の恋歌』（新典社、2010年）
- ・『喜界島・鬼の海域』（新典社、2008年）

その他

『奄美三少年 ユタへの道』（円聖修著、南方新社、2017年）の監修

【Outline (in English)】

The myth and folklore of Nansei Islands are closely related to Southern Kyushu. The Hayato were the people who sailed across the Southern Kyushu and Southern Satsuma islands. In this course, the myth of the Hayato and the people of the sea who sailed across the Nansei areas will be learned. The relationship between the Hayato from the Southern Kyushu and Japanese myths reveals the presence of Hayato people in Japanese myths. The culture of ancient Kyushu will be deeply learned. The members of this course will also be required to make a presentation to deepen their understandings. The goal is to understand the importance of Hayato in Japanese mythology. For learning outside of class hours, read textbooks and references carefully. The method and criteria for grade evaluation are to attend at least 6 times and take a test. The test is 70% and the normal score is 30%.

LIT500B7

女性文学 I

藤木 直実

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

男女を再生産する文化構造、および性差そのものの見直しなど、性の制度に対する根本的な再審の潮流は、いわゆる第二波フェミニズムを画期として世界規模で広がった。日本においても、戦後の新体制と教育環境の中で成人した女性たちが、女性としての存在、身体性、関係性などを問い直す作業のなかから、男性作家主導の戦後文学の理念や方法への批評性にもとづいた新たな文学世界を拓いていった。これらの新しい表現は、男性文学を本流として前提する「女流文学」ではなく、「女性文学」として再定位されるのにふさわしい。以上の視座に立ち、現代女性作家の作品を具体的に検討することで、女性による文学表現やその基盤となった女性文化の評価、また女性文学がそなえる性差を変容し越境する志向などの論理化を、演習形式で実践する。

【到達目標】

この授業においては、現代の女性作家による文学テキストを取り上げ、精読を行う。現代日本のジェンダー規範を確認し、それらの規範と女性の文学との交渉の様相を具体的な作品に即して読み、書き手のジェンダーが作品や表現にどのような影響を及ぼすかを考える。また、近代女性文学史の流れを適宜参照し、把握に努める。これらの作業を通して、女性文学を精読するための視点と技術と方法を身につけ、実社会にもつながる課題や自身の研究への示唆を、受講者それぞれが発見し、考える、きっかけとなることを目指す。

In this class, we will take up literary texts by modern female writers and read them carefully. We will review the gender norms of modern Japan, read the aspects of negotiations between those norms and women's literature in line with concrete works, and consider how the writer's gender affects the works and expressions. In addition, we will try to understand the flow of modern women's literature by referring to it as appropriate. Through these tasks, students will acquire perspectives, techniques, and methods for perusing women's literature, and aim to be an opportunity for each student to discover, think, and think about issues that lead to the real world and suggestions for their own research.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式による。現代女性作家による 1990 年代以降の作品を精読する。担当者はあらかじめ対象作家作品にかかわる調査をハンドアウトまたはスライドにまとめて報告し、それにもとづいて受講生全員で討議をおこなう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス①	授業の目的、計画、方法についての概説
第 2 回	ガイダンス②	担当作品の決定
第 3 回	石沢麻依「貝に続く場所にて」	担当者による報告と受講生による討議
第 4 回	李琴峰「彼岸花が咲く島」	担当者による報告と受講生による討議
第 5 回	笹野頼子「水晶内制度」	担当者による報告と受講生による討議
第 6 回	多和田葉子「献灯使」	担当者による報告と受講生による討議

第 7 回	綿矢りさ「夢を与える」	担当者による報告と受講生による討議
第 8 回	金原ひとみ「マザーズ」	担当者による報告と受講生による討議
第 9 回	小林エリカ「脱皮」	担当者による報告と受講生による討議
第 10 回	深沢潮「乳房のくにで」	担当者による報告と受講生による討議
第 11 回	松田青子「持続可能な魂の利用」	担当者による報告と受講生による討議
第 12 回	村田沙耶香「消滅世界」	担当者による報告と受講生による討議
第 13 回	田中兆子「徴産制」	担当者による報告と受講生による討議
第 14 回	今期のまとめ	今期の学修内容の振り返り

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【予習】報告者は、担当の作家作品について調査と考察を行い、ハンドアウトを作成する。他の受講生は、対象作家作品を読み、必要事項を確認して、私見をまとめておく。

【復習】授業での討議や教員のコメントを踏まえて、対象作品への調査考察を深める。

【Before】The reporter investigates and considers the work of the author in charge and prepares a handout. Other students should read the works of the target author, check the necessary items, and summarize their personal opinions.

【After】Based on the discussions in the class and the comments of the teacher, deepen the research and consideration of the target work.

Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

【テキスト（教科書）】

開講時に指示する

【参考書】

岩淵宏子・北田幸恵編著『はじめて学ぶ日本女性文学史【近現代編】』（ミネルヴァ書房、2005）、岩淵宏子・北田幸恵・長谷川啓編『編年体近代現代女性文学史』（至文堂、2005）、与那覇恵子『後期 20 世紀女性文学論』（晶文社、2014）、新・フェミニズム批評の会編『昭和後期女性文学論』（翰林書房、2020）、その他授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】

期末レポート（50 %）に加えて、報告の内容と水準（30 %）、授業中の貢献度（20 %）を勘案し、総合的に判断する。

Your overall grade in the class will be decided based on the following

Term-end report : 50%, Presentation content and quality : 30%, in class contribution: 20%

【学生の意見等からの気づき】

学生の興味関心を広げるための話題提供につとめる。学生の意見を尊重し、その発想に学問的裏付けが得られるようサポートし、自由に発言しやすい環境をつくる。

【学生が準備すべき機器他】

ノートパソコンが自宅にあることが望ましい。プリンターがあれば学習効率がより高くなると思われる。オンライン会議用アプリケーションのダウンロードを求める可能性がある。

【その他の重要事項】

質問については学修支援システムとメールで対応する。メールでの質問の場合は、件名を「女性文学 学籍番号 氏名」とすること。メール宛先：fujiki@olive.ocn.ne.jp

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近代文学、フェミニズム・ジェンダー批評

<研究テーマ> 森鷗外と女性、女性文学

<主要研究業績> 『〈妊婦〉アート論』（共編著）、『日本文学の「女性性」』（共著）

【Outline (in English)】

We will focus our scrutiny on works of literature by contemporary female authors. After ascertaining Japan's contemporary gender norms, we will attempt to discern aspects of the interplay between these norms and women's literature in line with specific works, reflecting on how the gender of the writer has influenced their works and expressions. In addition, making references as appropriate, we shall work to apprehend the historical course of modern women's literature. Through these tasks, we seek to provide students with the opportunity to master the perspectives, techniques, and methods for critical reading of women's literature. In doing so, students will discover and think about challenges that are also relevant to today's society, as well as suggestions for their own research. By the end of the course, students should be able to do the followings:

In this class, we will take up literary texts by modern female writers and read them carefully. We will review the gender norms of modern Japan, read the aspects of negotiations between those norms and women's literature in line with concrete works, and consider how the writer's gender affects the works and expressions. In addition, we will try to understand the flow of modern women's literature by referring to it as appropriate. Through these tasks, students will acquire perspectives, techniques, and methods for perusing women's literature, and aim to be an opportunity for each student to discover, think, and think about issues that lead to the real world and suggestions for their own research.

Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

Before : The reporter investigates and considers the work of the author in charge and prepares a handout. Other students should read the works of the target author, check the necessary items, and summarize their personal opinions.

After : Based on the discussions in the class and the comments of the teacher, deepen the research and consideration of the target work.

Your overall grade in the class will be decided based on the following

Term-end report : 50%、Presentation content and quality : 30%、in class contribution: 20%

LIT500B7

女性文学Ⅱ

藤木 直実

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

男女を再生産する文化構造、および性差そのものの見直しなど、性の制度に対する根本的な再審の潮流は、いわゆる第二波フェミニズムを画期として世界規模で広がった。日本においても、戦後の新体制と教育環境の中で成人した女性たちが、女性としての存在、身体性、関係性などを問い直す作業のなかから、男性作家主導の戦後文学の理念や方法への批評性にもとづいた新たな文学世界を拓いていった。これらの新しい表現は、男性文学を本流として前提する「女流文学」ではなく、「女性文学」として再定位されるのにふさわしい。以上の視座に立ち、現代女性作家の作品を具体的に検討することで、女性による文学表現やその基盤となった女性文化の評価、また女性文学がそなえる性差を変容し越境する志向などの論理化を、演習形式で実践する。

【到達目標】

この授業においては、現代の女性作家による文学テキストを取り上げ、精読を行う。現代日本のジェンダー規範を確認し、それらの規範と女性の文学との交渉の様相を具体的な作品に即して読み、書き手のジェンダーが作品や表現にどのような影響を及ぼすかを考える。また、近代女性文学史の流れを適宜参照し、把握に努める。これらの作業を通して、女性文学を精読するための視点と技術と方法を身につけ、実社会にもつながる課題や自身の研究への示唆を、受講者それぞれが発見し、考える、きっかけとなることを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式による。担当者はあらかじめ対象作家作品にかかわる調査をハンドアウトにまとめて報告し、それにもとづいて受講生全員で討議をおこなう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の目的、計画、方法についての概説、春学期の振り返り
第2回	中島京子「FUTON」	担当者による報告と受講生による討議
第3回	柳美里「JR 上野駅公園口」	担当者による報告と受講生による討議
第4回	崔実「ジニのパズル」	担当者による報告と受講生による討議
第5回	今村夏子「こちらあみ子」	担当者による報告と受講生による討議
第6回	西加奈子「i」	担当者による報告と受講生による討議
第7回	梨木香歩「僕は、そして僕たちはどう生きるか」	担当者による報告と受講生による討議
第8回	桐野夏生「路上のX」	担当者による報告と受講生による討議
第9回	角田光代「森に眠る魚」	担当者による報告と受講生による討議
第10回	中脇初枝「きみはいい子」	担当者による報告と受講生による討議
第11回	くどうれいん「氷柱の声」	担当者による報告と受講生による討議

- 第12回 小川洋子「ミナナ」の行進 担当者による報告と受講生による
進 討議
第13回 今期のまとめ 秋学期の学修内容の振り返り
第14回 今年度のまとめ 春学期秋学期を通じた学修内容の
振り返り

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【予習】報告者は、担当の作家作品について調査と考察を行い、ハンドアウトを作成する。他の受講生は、対象作家作品を読み、必要事項を確認して、私見をまとめておく。

【復習】授業での討議や教員のコメントを踏まえて、対象作品への調査考察を深める。

【テキスト（教科書）】

開講時に指示する

【参考書】

岩淵宏子・北田幸恵編著『はじめて学ぶ日本女性文学史【近現代編】』（ミネルヴァ書房、2005）、岩淵宏子・北田幸恵・長谷川啓編『編年体近代現代女性文学史』（至文堂、2005）、与那覇恵子『後期20世紀女性文学論』（晶文社、2014）、その他、授業時に適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

期末レポート（50％）に加えて、報告の内容と水準（30％）、授業中の貢献度（20％）を勘案し、総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】

学生の興味関心を広げるための話題提供につとめる。学生の意見を尊重し、その発想に学問的裏付けが得られるようサポートし、自由に発言しやすい環境をつくる。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近代文学、フェミニズム・ジェンダー批評

＜研究テーマ＞森鷗外と女性、女性文学

＜主要研究業績＞『〈妊婦〉アート論』（共編著）、『日本文学の「女性性」』（共著）

【Outline (in English)】

We will focus our scrutiny on works of literature by contemporary female authors. After ascertaining Japan's contemporary gender norms, we will attempt to discern aspects of the interplay between these norms and women's literature in line with specific works, reflecting on how the gender of the writer has influenced their works and expressions. In addition, making references as appropriate, we shall work to apprehend the historical course of modern women's literature. Through these tasks, we seek to provide students with the opportunity to master the perspectives, techniques, and methods for critical reading of women's literature. In doing so, students will discover and think about challenges that are also relevant to today's society, as well as suggestions for their own research. By the end of the course, students should be able to do the followings:

In this class, we will take up literary texts by modern female writers and read them carefully. We will review the gender norms of modern Japan, read the aspects of negotiations between those norms and women's literature in line with concrete works, and consider how the writer's gender affects the works and expressions. In addition, we will try to understand the flow of modern women's literature by referring to it as appropriate. Through these tasks, students will acquire perspectives, techniques, and methods for perusing women's literature, and aim to be an opportunity for each student to discover, think, and think about issues that lead to the real world and suggestions for their own research.

Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

Before : The reporter investigates and considers the work of the author in charge and prepares a handout. Other students should read the works of the target author, check the necessary items, and summarize their personal opinions.

After : Based on the discussions in the class and the comments of the teacher, deepen the research and consideration of the target work.

Your overall grade in the class will be decided based on the following

Term-end report : 50%、Presentation content and quality : 30%、in class contribution: 20%

ART500B7

文学と映画 I

越川 道夫

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

実際に映画を制作、監督している担当講師との対話、ディスカッション、作品の研究発表を通して、映画と文学の関係、「映画」とは「文学」とは何か、そして、それぞれの基盤となる身体との関係について各自の考えを深めていく。

【到達目標】

担当講師の作品だけでなく、様々な参考作品を鑑賞し、または関連するテーマについて書かれた文献を読み、さまざまな角度から検証し、作品の生成過程に触れ、「映画」と「文学」の比較によって、「映画」とは何か、「文学」とは何かを考え、講師とともに研究への視点を掘り下げていく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

担当講師の講義、場合によっては実際の映画製作現場の見学、参考作品を視聴し、その作品についてのディスカッションと、学生のゼミナール方式の研究発表によってすすめる。またコロナの感染状況によってオンラインの授業になった場合も各回ごとに学生の考えを吸い上げ、それに講師が授業、または個別に回答する形で授業を進めていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業内容の概説
第 2 回	講義 1 / 現場からの報告①	毎年のことながら、映画の原理を知ることから授業を始めます。
第 3 回	講義 2 / 現場からの報告②	講師の映画制作現場での経験に則しながら、できるだけ具体的に映画の原理と身体との関係を学びます。
第 4 回	講義 3 / 現場からの報告③	実際の映画制作者が映画の現場において何を考えているかということ伝えていきます。
第 5 回	講義 4 / 現場からの報告④	必要に応じて文献を読んだり、作品を見ることを指示します。
第 6 回	講義 5 / 現場からの報告⑤	随時質問や学生の考えを吸い上げ、それに応える形で有機的に授業を進めていく予定です。
第 7 回	参考作品①／鑑賞	鑑賞する作品は、学生の感心の持ち方を掘り上げながら可能なものの中から適宜指示します。
第 8 回	参考作品①／ディスカッション①	参考作品①についてのディスカッション
第 9 回	参考作品①／ディスカッション②	参考作品①についてのディスカッション
第 10 回	講義 6 / 現場からの報告⑥	前回までのディスカッションを受けての講義
第 11 回	参考作品②／鑑賞	参考作品②の鑑賞
第 12 回	参考作品②／ディスカッション①	参考作品②についてのディスカッション
第 13 回	参考作品②／ディスカッション②	参考作品②についてのディスカッション
第 14 回	講義 7 / 現場からの報告⑦	講師による講義 春期授業のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

授業で指示した映画作品を必ず見ること。

またオンライン授業の場合は YouTube に授業動画をアップするので、視聴後感想、質問等のメールを必ず講師に送ること。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しません。

【参考書】

柄谷行人『定本 日本近代文学の起源』（岩波現代文庫）

前田英樹『小津安二郎の家—持続と浸透』（書肆山田）

この 2 冊には通年必ず言及します。またその他の文献に関しては適宜指示します。

【成績評価の方法と基準】

研究発表、レポート (50 %)、授業参加度等 (50 %) によって、総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

昨年一昨年とオンラインでの授業となり、試行錯誤がありました。昨年の学生からの反応から本年もオンラインでの授業になった場合は、基本的に YouTube に限定公開します。授業を視聴後に講師のメールに必ず授業の感想、質問、授業を受けての考えを送ってください。そのメールに個別に回答、もしくは授業内でメールを紹介しつつつたつながら臨機応変に授業を進めていきます。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 映画

<研究テーマ> 映画

<主要研究業績> 『アレノ』（監督・脚本／2015）

『海辺の生と死』（監督・脚本／2017）

『月子』（監督・脚本／2017）

『二十六夜待ち』（監督・脚本／2017）

『夕陽のあと』（監督／2019）など

またプロデューサーとして『海炭市叙景』『楽隊のうさぎ』『かぞくのくに』『ゲゲゲの女房』『私は猫ストーカー』『ドライブイン蒲生』『白河夜船』など多くの映画を制作する。

【Outline (in English)】

Through discussion and research, students will deepen their own ideas about the relationship between film and literature, what "film" means and what "literature" means, and the relationship between the body and the foundation of each.

ART500B7

文学と映画Ⅱ

越川 道夫

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

実際に映画を制作、監督している担当講師との対話、ディスカッション、作品の研究発表を通じて、映画と文学の関係、「映画」とは「文学」とは何か、そして、それぞれの基盤となる身体との関係について各自の考えを深めていく。また秋期は特に映画表現の多様性に触れることも目的とする。

【到達目標】

主に参考映画作品を鑑賞し、その作品に関連するテーマについて書かれた文献を読み、さまざまな角度から検証し、作品の生成過程に触れ、「映画」と「文学」の比較によって、「映画」とは何か、「文学」とは何かを考え、講師とともに研究への視点を掘り下げていく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

担当講師の講義、場合によっては実際の映画製作現場の見学、参考作品を視聴し、その作品についてのディスカッションと、学生のゼミナール方式の研究発表によってすすめる。オンラインの授業になった場合も各回ごとに学生の考えを吸い上げ、それに講師が授業、または個別に回答する形で授業を進めていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	講義 1 / 現場からの報告①	秋期の授業についてのガイダンス
第 2 回	参考作品① / 鑑賞	参考作品①を鑑賞する
第 3 回	参考作品① / ディスカッション①	参考作品①についてのディスカッション
第 4 回	参考作品① / ディスカッション②	参考作品①についてのディスカッション
第 5 回	参考作品② / 鑑賞	参考作品②を鑑賞する
第 6 回	参考作品② / ディスカッション①	参考作品②についてのディスカッション
第 7 回	参考作品② / ディスカッション②	参考作品②についてのディスカッション
第 8 回	講義 2 / 現場からの報告②	秋期はできるだけ多様な映画表現に触れることを目標とします。
第 9 回	参考作品③ 鑑賞	参考作品③を鑑賞する
第 10 回	参考作品③ / ディスカッション①	参考作品③についてのディスカッション
第 11 回	参考作品③ / ディスカッション②	参考作品③についてのディスカッション
第 12 回	参考作品④ 鑑賞	参考作品④を鑑賞する
第 13 回	参考作品④ / ディスカッション①	参考作品④についてのディスカッション
第 14 回	秋学期のまとめ	秋学期の講義を概括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
授業で指示した映画作品を必ず見ること。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しません。

【参考書】

柄谷行人『定本 日本近代文学の起源』（岩波現代文庫）
前田英樹『小津安二郎の家—持続と浸透』（書肆山田）

この 2 冊には通年必ず言及します。またその他の文献に関しては適宜指示します。

【成績評価の方法と基準】

研究発表、レポート (50 %)、授業参加度等 (50 %) によって、総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

昨年一昨年とオンラインでの授業となり、試行錯誤がありました。昨年の学生からの反応から本年もオンラインでの授業になった場合は、基本的に YouTube に限定公開します。授業を視聴後に講師のメールに必ず授業の感想、質問、授業を受けての考えを送ってください。そのメールに個別に回答、もしくは授業内でメールを紹介しつつ回答しながら臨機応変に授業を進めていきます。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 映画

<研究テーマ> 映画

<主要研究業績> 『アレノ』（監督・脚本／2015）

『海辺の生と死』（監督・脚本／2017）

『月子』（監督・脚本／2017）

『二十六夜待ち』（監督・脚本／2017）

『夕陽のあと』（監督／2019）など

またプロデューサーとして『海炭市叙景』『楽隊のうさぎ』『かぞくのくに』『ゲゲゲの女房』『私は猫ストーカー』『ドライブイン蒲生』『白河夜船』など多くの映画を制作する。

【Outline (in English)】

Through discussions and research presentations of their works, students will deepen their own ideas about the relationship between film and literature, what "film" means and what "literature" means, the relationship between the body and the foundation of each, and the diversity of film expression.

LIT500B7

文学と風土 I

庄司 達也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

近代作家の残した書簡を素材として、調査と分析の経験を培う。
直筆資料を読むとはどういうことか、その現実的なあり方を探求するなかで、先入観に囚われることなく資料に向き合い、資料の持つ豊かな情報を取り上げる事の出来る力を養い、合わせて、文学研究にその成果を活かす事を目指す。

【到達目標】

資料を読むための基本的な手順に習熟し、読み解きのための基本的なスキルを身につけ、資料それぞれが有する豊かな情報を引き出し、自らの発表や論文で十分に活用できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

担当者の発表と全員での討議による演習形式。人数によっては司会とコメント担当も設ける。受講者は、講義毎にコメントペーパーを提出する。前回講義の振り返りにも使う。最初の時間に要領を説明する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	授業のコンセプトおよび進め方についての説明と、受講者それぞれの研究的関心を共有する。素材として提供する書簡資料についての説明と担当する書簡資料の決定。
第 2 回	担当教員による報告 1	直筆資料を読み解くと云う事についてのガイダンス 1
第 3 回	担当教員による報告 1	直筆資料を読み解くと云う事についてのガイダンス 1
第 4 回	受講者による報告 1	担当する資料体についての報告
第 5 回	受講者による報告 2	担当する資料体についての報告
第 6 回	受講者による報告 3	担当する資料体についての報告
第 7 回	受講者による報告 4	担当する資料体についての報告
第 8 回	受講者による報告 5	担当する資料体についての報告
第 9 回	受講者による報告 6	担当する資料体についての報告
第 10 回	受講者による報告 7	担当する資料体についての報告
第 11 回	受講者による報告 8	担当する資料体についての報告
第 12 回	受講者による報告 9	担当する資料体についての報告
第 13 回	受講者による報告 10	担当する資料体についての報告
第 14 回	総括	授業の全体を振り返って、成果と反省点を共有する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
受講者は、毎回素材となる資料についての基本情報を得ておくこと。事典等で基本知識を得、自分なりに資料に対するアプローチを考えておくことが望ましい。各自が発表者の立場になり、先行研究等も参照して講義に臨みたい。

【テキスト（教科書）】

教員により、提供される。

【参考書】

特に指定しない。適宜指示。

【成績評価の方法と基準】

コメントペーパー（Microsoft Forms により提出する事を予定。20 %）、発表（40 %）、レポート等の提出物（40 %）による総合評価。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

学外授業として、文学館への見学を予定している。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近代文学

<研究テーマ> 芥川龍之介・文学とメディア・近代作家に於ける西洋音楽の受容

<主要研究業績>

編著『芥川龍之介ハンドブック』（2015 鼎書房）・共編『改造社のメディア戦略』（2013 双文社出版）

【Outline (in English)】

In this class ,we will exercise in how to read writer's autograph from an expert's point of view,while thinking background.

LIT500B7

文学と風土Ⅱ

庄司 達也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

近代作家の残した原稿（草稿）を素材として、調査と分析の経験を培う。

直筆資料を読むとはどういうことか、その現実的なあり方を探求するなかで、先入観に囚われることなく資料に向き合い、資料の持つ豊かな情報を取り上げる事の出来る力を養い、合わせて、文学研究にその成果を活かす事を旨とする。

【到達目標】

資料を読むための基本的な手順に習熟し、読み解きのための基本的なスキルを身につけ、資料それぞれが有する豊かな情報を引き出し、自らの発表や論文で充分に活用できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

担当者の発表と全員での討議による演習形式。人数によっては司会とコメント担当も設ける。受講者は、講義毎にコメントペーパーを提出する。前回講義の振り返りにも使う。最初の時間に要領を説明する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業のコンセプトおよび進め方についての説明と、受講者それぞれの研究的関心を共有する。素材として提供する原稿（草稿）資料についての説明と担当する原稿（草稿）資料の決定。
第2回	担当教員による報告1	直筆資料を読み解くと云う事についてのガイダンス1
第3回	担当教員による報告1	直筆資料を読み解くと云う事についてのガイダンス1
第4回	受講者による報告1	担当する資料体についての報告
第5回	受講者による報告2	担当する資料体についての報告
第6回	受講者による報告3	担当する資料体についての報告
第7回	受講者による報告4	担当する資料体についての報告
第8回	受講者による報告5	担当する資料体についての報告
第9回	受講者による報告6	担当する資料体についての報告
第10回	受講者による報告7	担当する資料体についての報告
第11回	受講者による報告8	担当する資料体についての報告
第12回	受講者による報告9	担当する資料体についての報告
第13回	受講者による報告10	担当する資料体についての報告
第14回	総括	授業の全体を振り返って、成果と反省点を共有する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
受講者は、毎回素材となる資料についての基本情報を得ておくこと。事典等で基本知識を得、自分なりに資料に対するアプローチを考えておくことが望ましい。各自が発表者の立場になり、先行研究等も参照して講義に臨みたい。

【テキスト（教科書）】

教員により、提供される。

【参考書】

特に指定しない。適宜指示。

【成績評価の方法と基準】

コメントペーパー（Microsoft Forms により提出する事を予定。20 %）、発表（40 %）、レポート等の提出物（40 %）による総合評価。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

学外授業として、文学館への見学を予定している。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近代文学

＜研究テーマ＞芥川龍之介・文学とメディア・近代作家に於ける西洋音楽の受容

＜主要研究業績＞

編著『芥川龍之介ハンドブック』（2015 鼎書房）・共編『改造社のメディア戦略』（2013 双文社出版）

【Outline (in English)】

In this class ,we will exercise in how to read writer's autograph from an expert's point of view,while thinking background.

LIT500B2

表現と社会

内藤 裕之

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

知的財産権について理解し、現実には起る事例に沿って、争点を理解することで、実生活における的確な判断が行えることを目指す。

【到達目標】

事例に対して、自身の判断ができること

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講人数によって変更するが、基本的には前半を知的財産権についての講義、後半を実際の判例に基づく各人の発表形式で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	授業概観と進め方	半期全体の進め方と手順
第 2 回	知的財産権とは何か	知的財産権について考える
第 3 回	知的財産権の判例を検討する	争点の分析、判決について現場との乖離を考える。
第 4 回	ジャンルで考える	言語、写真、建築、美術などジャンルによる権利侵害の比較。
第 5 回	メディアで考える	メディアの種類による比較。
第 6 回	実際の判例に関する解説 1	判決からみる、侵害の理由
第 7 回	実際の判例に関する解説 2	判決からみる、侵害の理由
第 8 回	受講者が関心を持った実際の判例①を検討する。	受講者による発表。補足説明とディスカッション。
第 9 回	受講者が関心を持った実際の判例②を検討する。	受講者による発表。補足説明とディスカッション。
第 10 回	受講者が関心を持った実際の判例③を検討する。	受講者による発表。補足説明とディスカッション。
第 11 回	受講者が関心を持った実際の判例④を検討する。	受講者による発表。補足説明とディスカッション。
第 12 回	受講者が関心を持った実際の判例⑤を検討する。	受講者による発表。補足説明とディスカッション。
第 13 回	受講者が関心を持った実際の判例⑥を検討する。	受講者による発表。補足説明とディスカッション。
第 14 回	総括	全体に関する締めくくりと、質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

判決の出ている知的財産権についての訴訟例を探し、自身で判決内容について検討する。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

裁判例を探して課題点を発表すること 60%、他の発表者への積極的質問、発言など 30%、平常点 10%。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

対面形式とします。

【担当教員の専門分野等】

総合出版社の講談社で、「FRIDAY」「PENTHOUSE」「群像」「小説現代」などの雑誌編集や、文庫、書き下ろし単行本の企画、編集、また文芸分野の責任者。

【Outline (in English)】

【Course outline】 By understanding intellectual property rights and understanding the issues in line with actual cases, we aim to make accurate decisions in real life.

【Learning Objectives】 At the end of the course, students are expected to have the judgment of intellectual property infringement

【Learning activities outside of classroom】 Usually you might consider how is the intellectual property.

【Grading Criteria/Policy】 Your overall grade in the class will be decided based on the following
the active consideration about judgment of intellectual property: 60%, in class contribution: 40%

LIT500B2

編集理論

仲俣 暁生

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「編集」という行為がもつ創造的機能をさまざまな現代日本の雑誌の事例をもとに理解する。

【到達目標】

「編集」という行為の価値を理解することを通して、日本における出版メディアの現代史についての基礎的な知識を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義を中心としつつも、各自が課題を設定しての研究レポートや討論をおりまぜる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	「編集」（エディターシップ）とは何か	この講義において取り扱う「編集」の範囲について確定し、全体のオリエンテーションとする。
第 2 回	編集されたメディアとしての「雑誌」	「雑誌」というメディアを編集という観点から概観する。
第 3 回	雑誌における「編集者」とはなにか	雑誌において「編集者（editor）」が担うさまざまな機能を理解する。
第 4 回	「雑誌」のケーススタディ①～文芸誌／論壇誌の場合	おもに文芸、論説などをあつかう雑誌を「編集」という観点から分析する。
第 5 回	「雑誌」のケーススタディ②～ビジュアル雑誌の場合	グラフィカルな要素をもつ雑誌を「編集」という観点から分析する。
第 6 回	「雑誌」のケーススタディ③～ジャンル雑誌の場合	特定のジャンルに根ざした雑誌を「編集」という観点から分析する。
第 7 回	「雑誌」のケーススタディ④～ミニコミ、ジンの場合	ミニコミやジンと呼ばれる「小さなメディア」を「編集」という観点から分析する。
第 8 回	「雑誌」における編集についての中間まとめと討議	ケーススタディ①から③までを受けて学生をまじえてディスカッションを行う。
第 9 回	「編集」の拡散	出版以外の世界に「編集」という行為が広がっていることを理解する。
第 10 回	デジタルメディアにおける「編集」のケーススタディ①～ワールドワイドウェブの登場	インターネット上における「編集」行為の場としての WWW のもつ意義を理解する。
第 11 回	デジタルメディアにおける「編集」のケーススタディ②～ウェブ 2.0 以後	「ウェブ 2.0」以後に起きた WWW の変質について「編集」という観点から理解する。
第 12 回	デジタルメディアにおける「編集」のケーススタディ③～ソーシャルメディア	ソーシャルメディア勃興による「編集」の危機について理解する。
第 13 回	あらたな「編集」に向けての討議	これまでの講義を受けて、現在のメディア環境のなかでどのような「編集」が可能かを討議する。

第 14 回 総まとめ

講義全体のまとめとレポートについてのガイダンスを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
講義内で培った「編集」への問題意識をもとに、身のまわりの出版物やメディア環境をとらえかえすこと。具体的な出版物（雑誌や書物、ウェブサイト）およびそれを編集している人物（編集者）や出版主体について、つねに関心を抱くことが望まれる。

【テキスト（教科書）】

必要な教材は講義の際に配布する。とくに教科書は指定しないが、参考図書には自発的に目を通すことを推奨する。

【参考書】

- ・外山滋比古『新・エディターシップ』（みすず書房、2009）
- ・佐藤卓己編『青年と雑誌の黄金時代——若者はなぜそれを読んでいたのか』（岩波書店、2015）
- ・野中モモ、ばるばら『日本の ZINE について知ってることすべて：同人誌、ミニコミ、リトルプレス—自主制作出版史 1960 ～ 2010 年代』（誠文堂新光社、2017）
- ・赤田祐一、ばるばら『20 世紀エディトリアル・オデッセイ：時代を創った雑誌たち』（誠文堂新光社、2014）
- ・仲俣暁生『再起動せよと雑誌はいう』（京阪神エルマガジン社、2011）

【成績評価の方法と基準】

講義に対する姿勢＝30%、自主課題への取り組み＝30%、最終レポート＝40%

【学生の意見等からの気づき】

昨年度はすべてオンラインでの開講となったため、事前に参考資料の配布を行った。今季は対面講義となる場合も、できるだけ事前学習が可能となるようにしたい。

【学生が準備すべき機器他】

オンライン講義となる可能性があるため、なるべく良好な通信環境とパソコンの用意を望む。

【担当教員の専門分野等】

- <専門領域>出版論、メディア論
- <研究テーマ>雑誌研究、メディア環境論、現代日本文学論
- <主要研究業績>
- ①『再起動せよと雑誌はいう』（京阪神エルマガジン社、2011）
- ②編著『「電子社会」誕生～日本語ワープロからインターネットまで』（晶文社、1998）
- ③『極西文学論』（晶文社、2004 年）

【Outline (in English)】

To understand the creative function of "editorship" through the case studies of various magazines in modern Japan.

LIN500B7

英語発音法 I

高橋 豊美

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

個人の力量に依存する「習うより慣れる」という方法ではなく、「十分に習ってから慣れる」ことで効率良く発音・聞き取りの技能を高める方法を学ぶ。これにより、履修者自身の英語コミュニケーション・スキルの向上が期待できる。また、英語教員を志す学生には、効果的な発音・リスニングの教材を準備するための知識を得る機会にもなるはずである。

<講義題目>

英語音声の記述・分析と発音の実践的知識・技術の習得

【到達目標】

分節音の特徴を理解し、その知識を実践に反映できる技術の習得を目指す。到達目標は次のとおりである。

- (A) 分節音の体系、分布、音声変化について、理論的に説明できる。
 (B) 発話を聞いて、分節音を発音記号で正確に書き取ることができる。
 (C) 発音記号を適切な発音で読むことができる。
 (D) 与えられた英文について、音声変化を予測し、発音モデルを示すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業では、英国標準英語を主な対象とし、個々の分節音の調音的・音響的特徴、分節音の体系について学んだ上で、授業計画に示すように分節音がかかわるさまざまな音声現象の仕組みを理解する。【到達目標 (A)】

配付資料を使用して理論を学び、さらに、その理解を実際に応用できる力を身につけるために、音声教材を使用した発音・聴き取り、発音記号による発話モデルの作成などの練習などを行う。【到達目標 (B)(C)】

課題の提出及び返却には学習支援システムを用いる。この課題については、返却時にコメントを付し、また、返却後の授業で全体的なフィードバックを行う。【到達目標 (D)】

リアクションペーパーは学習支援システムで回収し、個別のフィードバックは同システムで、全体に共通するフィードバックは授業で行う。

授業は対面で実施する予定であるが、COVID-19 の感染状況が拡大している場合は、ビデオ会議システムと（Zoom）学習支援システム（Hoppi）を併用したオンライン授業に切り替えて実施するので、授業前に学習支援システムのお知らせを確認すること。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 01 回	授業案内	授業の概要／参考文献
第 02 回	音声の基礎、母音	発声の仕組み／母音の調音的特徴／課題 1
第 03 回	子音、音素論	子音の調音的特徴／音声の分類／課題 2
第 04 回	音節の機能、構造	分節音と超分節音／リズムの基本単位／分節音現象の構造記述／課題 3
第 05 回	音節現象	音声変化／押韻／音節構造と音声分布／課題 4
第 06 回	音節とリズム	音節区分／音節子音／音節圧縮／課題 5
第 07 回	母音の変化	弱化／中和／短縮／課題 6

第 08 回	弱形	引用形と弱形／弱形の種類／課題 7
第 09 回	分節音現象	音声変化の概要／子音の分布／課題 8
第 10 回	連結、脱落	語境界を挟む音のつながり／子音の連続における発音の簡略化／課題 9
第 11 回	交替、挿入、短縮	語境界を挟む子音の同化／歯茎破裂音の挿入／硬音前母音短縮／課題 10
第 12 回	地域的な音声変化	母音体系／歯茎破裂音の異音／声門音化／r の現れ方
第 13 回	総括	前回までの授業内容のまとめと考察
第 14 回	課題報告、試験	音声現象の理論的記述と実践

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を目安とする。

資料は事前に配布されるので、授業に臨む前に内容を確認すること。また、授業を受けた後で学習内容を振り返り、知識の定着を図ること。【到達目標 (A)】

授業では、学んだ知識を実践に活かすための発音・聴き取りの練習を行う。授業を受けた後で、要点を確認しながら練習を重ねて技術の向上を目指すこと。【到達目標 (B)(C)】

この授業では、10 回の課題を予定している。この課題の目的は発音モデルの作成をととして知識の定着を図るとともに実践力を伸ばすことである。配布資料と授業内容をしっかりと復習した上で、最初は何も資料等を参照しないで取り組み、それから資料や辞書を利用しながら丁寧に直しを行うこと。その際、最初に間違えたり記入できなかったところは、赤字で訂正・加筆をすることが望ましい。（訂正・加筆箇所の多寡は評価に影響しない。）提出された課題は担当教員がチェックと評価を行った上でコメントと共に返却される。また、返却後の授業では全体的な解説が行われる。チェックを受けた部分及び解説の要点をよく確認し、作成したモデルの発音練習を行うこと。【到達目標 (D)】

授業で学ぶ知識と技術を実践で活かすには課外の積極的な取組が不可欠である。上記課題のほかに、授業で適宜示す参考資料やウェブサイトを利用するなどして、発音・聴き取りの練習を重ねることが望ましい。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用せず、配布資料にそって授業を進める。

【参考書】

- ・ Wells, John C. (2008) *Longman Pronunciation Dictionary (third edition)*. London: Longman.
- ・ Tench, Paul (2011) *Transcribing the Sound of English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- ・ Cruttenden, Alan (2014) *Gimson's Pronunciation of English (8th edition)*. London: Routledge.
- ・ BBC Learning English: Pronunciation Tips < <http://www.bbc.co.uk/worldservice/learningenglish/grammar/pron/> >

【成績評価の方法と基準】

平常点 (35 %)、課題 (35 %)、試験 (30 %) に基づき成績を評価する。

・ 平常点 【到達目標 (B)(C)】

音声のしくみの知識と技術は体得する要素が多いので、平常点として、授業における発音・聴き取り練習への取り組み、授業中の発言・質問の頻度と内容を評価する。授業外の学習活動（授業に臨むための準備、授業内容の振り返り）を欠かさず、積極的な姿勢で授業に臨むこと。

・ 課題 【到達目標 (A)(D)】

課題では、授業で学んだ基礎を発展させて発話モデルを示す力を評価する。課題ごとに示す評価のポイントをよく確認した上で、授業内容を十分に確認しながら、また、辞書で丁寧に発音を調べながら取り組むこと。

・ 試験 【到達目標 (A)(B)(C)(D)】

試験（実技を含む）では、各到達目標に対応した設問により、授業で学んだ知識の定着度と技術の修練度を評価する。

【学生の意見等からの気づき】

授業改善アンケートの結果及びリアクションペーパーの回答では、総じて否定的な評価はなく、授業の難易度や進度については概ね適切であったと思われる。ただし、特に英文学専攻以外の学生にとっては理解が難しいところもあったので、復習の参考となるように、毎回の授業の要点を掲示板に記録する。理解度については、課題で毎回同じ誤りが繰り返されている場合が見られるので、課題に評価基準を掲載して注意喚起に努め、授業の最後に質疑応答、リフレクションの時間をとるようにして、理解の定着を図る。

【学生が準備すべき機器他】

資料配付、課題提出、リフレクションに学習支援システム Hoppiを使用する。

【その他の重要事項】

英文学専攻では「英語発音法B」、日本国際学専攻では「英語発音法II」とあわせて履修することが望ましい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

音声学、音韻論

<研究テーマ>

音韻理論、英語音声学・音韻論、日本語音声学・音韻論、英語教育
<主要研究業績>

・Toyomi Takahashi (2014). Identity avoidance in the onset. Nasukawa, Kuniya & Henk van Riemsdijk (eds.) *Identity Relations in Grammar*. Boston/Berlin: De Gruyter Mouton. 101-120.

Unique Path. 『音韻研究』2008 (第 11 号). 3-10.

・Toyomi Takahashi (2008). Unique Path. 『音韻研究』2008 (第 11 号). 3-10.

・高橋豊美 (2005). 『弁別素性理論』. 西原哲雄・那須川訓也 (編著) 『音韻理論ハンドブック』. 英宝社. 131-142.

・Toyomi Takahashi (1999). Constraint interaction in Aranda stress. In Hannahs, S. J. & Mike Devenport (eds.) *Issues in Phonological Structure*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins. 151-181.

【Outline (in English)】

[Course outline]

The goal of this course is to acquire practical knowledge and skills of English pronunciation through studying the features of spoken English as well as practicing its models.

This course aims to study an effective and efficient method of improving oral/aural communication skills by well understanding the English sound system prior to practical exercises.

This course discusses segmental aspects of English pronunciation. Its topics include the articulatory features of individual sounds, their accentual variations, the syllable structure, the distribution of sounds, and connected speech phenomena (lenition, alteration and insertion). These topics are first theoretically explained and then this knowledge is put into practice by describing and analysing recorded materials and by practicing pronunciation exercises.

This course should enable students to observe and improve their own pronunciation skills. For those who aspire to be English teachers, this course should provide background knowledge useful for preparing effective materials to teach pronunciation/listening skills as well as teaching tips and techniques.

[Learning Objectives]

Students are expected to understand the segmental features and to be able to apply that knowledge to their performance. The specific objectives are as follows:

(A) to describe the theory of English phonemic inventory, distribution and alteration,

(B) to dictate spoken words and phrases in phonemic transcription,

(C) to read out given phonemic transcriptions with appropriate pronunciation,

(D) and to provide a transcription of a model pronunciation including possible alterations for a given passage.

[Learning activities outside of classroom]

Students should spare sufficient time for the following activities before/after each class (roughly four hours or more per week):

- Look over handouts provided beforehand in preparation, and go through them more carefully after class to check their understanding. [Objective (A)]

- Go over pronunciation/dictation exercises practised in class, checking their focus, and try to improve skills in question. [Objective (B)(C)]

- Complete assignments in which students are required to demonstrate their knowledge of segmental features and skills of applying that knowledge to practice through the production of model pronunciation. Students are advised to work on the assignments all by themselves first, and then to make corrections in red referring to handouts and dictionaries; this way they should learn where they tend to make mistakes. Submitted assignments are returned with marks and comments and are also discussed in class in order to help students enhance their knowledge and skills. [Objective (D)]

[Grading Criteria /Policy]

The course final grade will be calculated according to the following components and weights: in-class activities (35%), assignments (35%), and the course-final exam (30%).

- In-class activities are mostly related to skill-oriented Objectives (B) and (C). Pronunciation/dictation skills are sometimes hard to acquire through just four-month practices, depending on whether one is a quick learner or not, so this course attach importance to the effort students make in in-class activities that, if continued, will in due course help improve their skills. Students are advised to engage in in-class activities without worrying about making mistakes, not to hesitate making questions and/or comments.

- Assignments are related to Objectives (A) and (D). Students are expected to demonstrate not only the knowledge they have learnt through this course but also the ability to make use of that knowledge when planning model pronunciation.

- The exam comprises components corresponding to each Objective, and is intended to evaluate the overall learning outcomes of the course.

LIN500B7

英語発音法Ⅱ

高橋 豊美

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

個人の力量に依存する「習うより慣れる」という方法ではなく、「十分に習ってから慣れる」ことで効率良く発音・聞き取りの技能を高める方法を学ぶ。これにより、履修者自身の英語コミュニケーション・スキルの向上が期待できる。また、英語教員を志す学生には、効果的な発音・リスニングの教材を準備するための知識を得る機会にもなるはずである。

<講義題目>

英語音声の記述・分析と発音の実践的知識・技術の習得

【到達目標】

韻律の特徴を理解し、その知識を実践に反映できる技術の習得を目指す。到達目標は次のとおりである。

- (A) 音節の強さと発音の特徴、強勢の配置と役割、イントネーションのパターンと機能について、理論的に説明できる。
 (B) 発話を聞いて、強勢とイントネーションを含めて発音記号で正確に書き取ることができる。
 (C) 発音記号を適切な発音で読むことができる。
 (D) 与えられた英文について、基本的なリズムとイントネーションのパターンを予測し、発音モデルを示すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業では、英国標準英語（Received Pronunciation）を主な対象とし、日本語との比較を適宜行いながら、リズムが形成される仕組みと、イントネーションの形式と機能を学び、韻律を含めた基本的な発話モデルの組み立てや、談話分析の方法を理解する。【到達目標 (A)】

配付資料を使用して理論を学び、さらに、その理解を実際に応用できる力を身につけるために、音声教材を使用した発音・聴き取りの練習、発音記号で発話モデルを提示したり発話を書き取ったりする練習などを行う。【到達目標 (B)(C)】

課題の提出及び返却には学習支援システムを用いる。この課題については、返却時にコメントを付し、また、返却後の授業で全体的なフィードバックを行う。【到達目標 (D)】

リアクションペーパーは学習支援システムで回収し、個別のフィードバックは同システムで、全体に共通するフィードバックは授業で行う。

授業は対面で実施する予定であるが、COVID-19 の感染状況が拡大している場合は、ビデオ会議システムと（Zoom）学習支援システム（Hoppi）を併用したオンライン授業に切り替えて実施するので、授業前に学習支援システムのお知らせを確認すること。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	授業案内／語・句強勢	授業概要／参考文献／強勢の音声的特徴／複合語と句の強勢／課題 1
第 2 回	文強勢（理論）	強勢移動／文強勢の配置／韻脚／課題 2
第 3 回	文強勢（実践）	文強勢モデルの記述と実践／課題 3
第 4 回	イントネーション概説	イントネーションの形式と機能／音調アクセント／課題 4
第 5 回	イントネーション理論	イントネーション句の構成／核声調／課題 5
	(1)：声調	

第 6 回	イントネーション理論	イントネーション句の機能／課題 (2)：調性 6
第 7 回	イントネーション理論	イントネーション句の焦点／核配置と焦点領域／課題 7 (3)：核配置
第 8 回	イントネーション理論	イントネーション句の頭部と核声調の組合せ／課題 8 (4)：音調曲線
第 9 回	イントネーションの意味	下降声調の表す意味と用法／課題 味 (1)：下降声調 9
第 10 回	イントネーションの意味	非下降声調の表す意味と用法／課題 味 (2)：非下降声調 10
第 11 回	イントネーションの定型 (1)	複文・重文の音調曲線
第 12 回	イントネーションの定型 (2)	対照的な要素を含む文の音調曲線
第 13 回	イントネーションの定型 (3)	慣習的な音調曲線
第 14 回	課題報告、試験	音声現象の理論的記述と実践

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を目安とする。

資料は事前に配布されるので、授業に臨む前に内容を確認すること。また、授業を受けた後で学習内容を振り返り、知識の定着を図ること。【到達目標 (A)】

授業では、学んだ知識を実践に活かすための発音・聴き取りの練習を行う。授業を受けた後で、要点を確認しながら練習を重ねて技術の向上を目指すこと。【到達目標 (B)(C)】

この授業では、10 回の課題を予定している。この課題の目的は発音モデルの作成をとおして知識の定着を図るとともに実践力を伸ばすことである。配布資料と授業内容をしっかりと復習した上で、最初は何も資料等を参照しないで取り組み、それから資料や辞書を利用しながら丁寧に見直しを行うこと。その際、最初に間違えたり記入できなかったところは、赤字で訂正・加筆することが望ましい。（訂正・加筆箇所の多寡は評価に影響しない。）提出された課題は担当教員がチェックと評価を行った上でコメントと共に返却される。また、返却後の授業では全体的な解説が行われる。チェックを受けた部分及び解説の要点をよく確認し、作成したモデルの発音練習を行うこと。【到達目標 (D)】

授業で学ぶ知識と技術を実践で活かすには課外の積極的な取組が不可欠である。上記課題のほかに、授業で適宜示す参考資料やウェブサイトを利用するなどして、発音・聴き取りの練習を重ねることが望ましい。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用せず、配布資料にそって授業を進める。

【参考書】

- ・Wells, John C. (2006) *English Intonation: An Introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- ・Tench, Paul (2011) *Transcribing the Sound of English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- ・Wells, John C. (2008) *Longman Pronunciation Dictionary (third edition)*. London: Longman.
- ・Cruttenden, Alan (2014) *Gimson's Pronunciation of English (8th edition)*. London: Routledge.

【成績評価の方法と基準】

平常点 (35 %)、課題 (35 %)、試験 (30 %) に基づき成績を評価する。

・平常点 【到達目標 (B)(C)】

音声のしくみの知識と技術は体得する要素が多いので、平常点として、授業における発音・聴き取り練習への取り組み、授業中の発言・質問の頻度と内容を評価する。授業外の学習活動（授業に臨むための準備、授業内容の振り返り）を欠かさず、積極的な姿勢で授業に臨むこと。

・課題 【到達目標 (A)(D)】

課題では、授業で学んだ基礎を発展させて発話モデルを示す力を評価する。課題ごとに示す評価のポイントをよく確認した上で、授業内容を十分に確認しながら、また、辞書で丁寧に発音を調べながら取り組むこと。

・試験 【到達目標 (A)(B)(C)(D)】

試験（実技を含む）では、各到達目標に対応した設問により、授業で学んだ知識の定着度と技術の修練度を評価する。

【学生の意見等からの気づき】

授業改善アンケートの結果及びリアクションペーパーの回答では、総じて否定的な評価はなく、授業の難易度や進度については概ね適切であったと思われる。理解度については、課題で毎回同じ誤りが繰り返されている場合が見られるので、課題に評価基準を掲載して注意喚起に努め、授業の最後に質疑応答、リフレクションの時間をとるようにして、理解の定着を図る。

【学生が準備すべき機器他】

資料配付、課題提出、リフレクションに学習支援システム Hoppi を使用する。

【その他の重要事項】

この授業は英文学専攻では「英語発音法A」、日本国際学専攻では「英語発音法I」の内容を前提としている。「英語発音法A」・「英語発音法I」を履修していない場合は、履修登録の前に担当教員まで連絡すること。また、授業が始まるまでに、参考書に挙げた Tench (2011) の Part 1 をよく読んで理解しておくこと。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

音声学、音韻論

<研究テーマ>

音韻理論、英語音声学・音韻論、日本語音声学・音韻論、英語教育
<主要研究業績>

・Toyomi Takahashi (2014). *Identity avoidance in the onset*. Nasukawa, Kuniya & Henk van Riemsdijk (eds.) *Identity Relations in Grammar*. Boston/Berlin: De Gruyter Mouton. 101-120.

・Toyomi Takahashi (2008). *Unique Path*. 『音韻研究』2008 (第11号). 3-10.

・高橋豊美 (2005). 弁別素性理論. 西原哲雄・那須川訓也 (編著) 音韻理論ハンドブック. 英宝社. 131-142.

・Toyomi Takahashi (1999). Constraint interaction in Aranda stress. In Hannahs, S. J. & Mike Devenport (eds.) *Issues in Phonological Structure*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins. 151-181.

【Outline (in English)】

[Course outline]

The goal of this course is to acquire practical knowledge and skills of English pronunciation through studying the features of spoken English as well as practicing its models.

This course aims to study an effective and efficient method of improving oral/aural communication skills by well understanding the English sound system prior to practical exercises.

This course discusses prosodic aspects of English pronunciation. Its topics include the location and interpretation of stress in different domains (word/phrase/sentence), the components of intonational phrase and their pitch patterns, the location of nuclear accents and their focusing function, and the types and usage/meaning of tunes. These topics are first theoretically explained and then this knowledge is put into practice by describing and analysing recorded materials and by practicing pronunciation exercises.

This course should enable students to observe and improve their own pronunciation skills. For those who aspire to be English teachers, this course should provide background knowledge useful for preparing effective materials to teach pronunciation/listening skills as well as teaching tips and techniques.

[Learning Objectives]

Students are expected to understand the prosodic features and to be able to apply that knowledge to their performance. The specific objectives are as follows:

(A) to describe the theory of English syllable structure and prominence, stress system, and the inventory of intonational contours and their functions,

(B) to dictate spoken words and phrases in phonemic transcription including prosodic features,

(C) to read out given phonemic transcriptions with appropriate pronunciation, rhythm and intonation,

(D) and to provide a transcription of a model pronunciation including relevant rhythmic stress and intonation for a given passage.

[Learning activities outside of classroom]

Students should spare sufficient time for the following activities before/after each class (roughly four hours or more per week):

- Look over handouts provided beforehand in preparation, and go through them more carefully after class to check their understanding. [Objective (A)]

- Go over pronunciation/dictation exercises practised in class, checking their focus, and try to improve skills in question. [Objective (B)(C)]

- Complete assignments in which students are required to demonstrate their knowledge of segmental features and skills of applying that knowledge to practice through the production of model pronunciation. Students are advised to work on the assignments all by themselves first, and then to make corrections in red referring to handouts and dictionaries; this way they should learn where they tend to make mistakes. Submitted assignments are returned with marks and comments and are also discussed in class in order to help students enhance their knowledge and skills. [Objective (D)]

[Grading Criteria /Policy]

The course final grade will be calculated according to the following components and weights: in-class activities (35%), assignments (35%), and the course-final exam (30%).

- In-class activities are mostly related to skill-oriented Objectives (B) and (C). Pronunciation/dictation skills are sometimes hard to acquire through just four-month practices, depending on whether one is a quick learner or not, so this course attach importance to the effort students make in in-class activities that, if continued, will in due course help improve their skills. Students are advised to engage in in-class activities without worrying about making mistakes, not to hesitate making questions and/or comments.

- Assignments are related to Objectives (A) and (D). Students are expected to demonstrate not only the knowledge they have learnt through this course but also the ability to make use of that knowledge when planning model pronunciation.

- The exam comprises components corresponding to each Objective, and is intended to evaluate the overall learning outcomes of the course.

LIN500B7

行動科学方法論 I

石川 潔

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

言語研究の方法論としての以下の2つの入門的な把握を目指す。
 ・物理学と同じ意味における理論の科学的構築法および評価法
 ・実験設計およびデータの統計処理
 <講義題目> 言語科学の研究に必要な方法論の修得

【到達目標】

自分の疑問を「科学」として追及可能な形にし、可能な複数の答え（仮説）を、初歩的な実験および統計学的な検定と比較できるようにすること

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義およびパソコン実習。
 試験には各人ごとに採点コメントを返します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
 あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
 なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	科学って何？	仮説、予測
第2回	経験科学で「証明」があり得ない理由	「仮説通りのデータ」は何を意味しないか
第3回	因果関係の主張の方法	科学的基準として要求されること、注目していない要因の効果の除去
第4回	論文執筆の基本	構成、引用の方法
第5回	統計学的検定の基本1	帰無仮説および対立仮説、有意性
第6回	統計ツール	Excel、ANOVA4、SPSS、R、JASP、etc.
第7回	統計学的検定の基本2	帰無仮説、有意性
第8回	記述統計	代表値、分散・標準偏差、など
第9回	実験計画の基本	被験者内要因と被験者間要因
第10回	t 検定（その1）	被験者間要因の場合
第11回	t 検定（その2）	1 サンプルの t 検定
第12回	t 検定（その3）	被験者内要因
第13回	その他の検定法	初歩的な他の検定法の概観
第14回	fixed vs. random factor	subject/participant analysis & item analysis

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
 パソコンの基本的な操作法の知識は事前に得ておくことが望ましい。
 わからない箇所は教員や周囲に質問すること。
 また、身の回りの事柄（新聞やニュースなどで出てきた話も含む）を、授業内容を参照しつつ、見つめなおしていただくこと。

【テキスト（教科書）】

学習支援システムでハンドアウトおよびデータ・セットを配布。

【参考書】

A. F. Chalmers. (1976/1999). *What is this thing called Science?* (3rd ed.) Hackett.
 大村 平. (1984). 実験計画と分散分析のはなし. 日科技連.
 Howell, D. C. (2006). *Statistical Methods for Psychology*. (6th ed.) Wadsworth.
 Field, A. (2005). *Discovering Statistics Using SPSS*. Sage.
 Baayen, R. H. (2008). *Analyzing Linguistic Data*. Cambridge University Press.
 その他、適宜指示。

【成績評価の方法と基準】

学期末試験 100 %

【学生の意見等からの気づき】

全員の理解度をもっと上げたいです。

【その他の重要事項】

この授業は原則、英文学専攻の言語系の院生全員が履修すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

理論言語学（統語論、意味論）、心理言語学（音声知覚、文理解）

<研究テーマ>

音声知覚の単位と様式、アスペクトの実時間処理、読みにおける視覚処理と音韻処理の関係

<主要研究業績>

<http://www.i.hosei.ac.jp/~kiyoshi/research.html> などを参照。

【Outline (in English)】

[Course outline]

An introduction to research methodology in linguistic sciences

[Learning Objectives]

- Scientific construction and evaluation of theories
- Experimental design and statistical data analysis
- Realization of the (in)validities of the above

[Learning activities outside of classroom]

Practice of PC skills, applications of the methods to various issues encountered outside of the classroom

[Grading Criteria/Policy]

Final 100%

LIT500B7

西欧比較文学 I

日中 鎮朗

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

理想的な社会の追求は人類の歴史の中の根源的なテーマである。現代においても、あらゆる国家はそれを目指して考え続け、努力しているといっても過言ではない。

そのために理想社会、あるいはユートピアについて、とりわけ思想、文学、映画、芸術においてどのように考えられ、受容され、作用してきたのかを Gregory Claey's の『Searching for Utopia. The History of an Idea』を講読しながら、考える。

とりわけ、＜現在＞という時点からのアクチュアルな問題提起として、近代から現代の文学・芸術を分析対象とし、さまざまな作品を読み解きながら、文学や芸術がその時代の社会に対してどう取り組んだかを考察する。

＜講義題目＞

近現代のユートピア像の歴史と受容

【到達目標】

近現代以降のユートピアの歴史を理解することが目標である。

また、その際に Gregory Claey's の『Searching for Utopia. The History of an Idea』やこの講義で挙げられた小説や作品を読み、論じるので、その小説や作品をユートピアという視点から批判的に分析できるようになることも目標である。

そうした討議の際に、自分の意見を明確に表現し、伝えられるようになることも目標である。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

ユートピアの歴史的な概説として Gregory Claey's の『Searching for Utopia. The History of an Idea.』を読んでゆく。

また同時に、各回の授業計画で挙げられるユートピア関連の文学を中心に、思想、芸術などの諸分野においてどのように扱われ、表現されているかを見る。

その際に、テキストの担当部分を決めて、それをまとめ、プレゼンしてもらう。独自の観点でいいので、議論・検討を加えていきたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	ユートピア概念の共通理解を検討する。 授業の進め方等についての説明。
第 2 回	Gregory Claey's 『Searching for Utopia. The History of an Idea』 Chapter12 の読解①	The Emergence of Science Fiction 訳読と議論（1）
第 3 回	Gregory Claey's 『Searching for Utopia. The History of an Idea』 Chapter12 の読解②	科学技術とヒューマニティ 訳読と議論（2）
第 4 回	人工と人造の生命 Chapter12 の応用①	『フランケンシュタイン』 （1818/1831）あるいは、怪物たち（ゴーレム、ヴァンパイア）
第 5 回	機械・人間・ユート ピア Chapter12 の応用②	『フランケンシュタイン』の読解 と動物（フランツ・カフカ）

第 6 回	Gregory Claey's 『Searching for Utopia. The History of an Idea』 Chapter11 の読解①	Inventing Progress: Rationalism, Technology and Modernity as Utopia 訳読と議論（1）
第 7 回	Gregory Claey's 『Searching for Utopia. The History of an Idea』 Chapter11 の読解②	エドワード・ベラミー『顧みれば』（1888）を中心に
第 8 回	経済・科学・社会 主義－ 近代性への異議申し立 てとユートピア Chapter11 の応用	ウィリアム・モリス『ユートピア 便り』（1890）、サミュエル・バト ラー『エレホン』（1872）と反近代
第 9 回	ウィリアム・モリスか ら 20 世紀ヘーモリス の時代・芸術	世紀末芸術とアーツ・アンド・ク ラフト
第 10 回	Gregory Claey's 『Searching for Utopia. The History of an Idea』 Chapter8 の読解①	Ideal Cities: Medieval to Modern 訳読と議論（1）
第 11 回	Gregory Claey's 『Searching for Utopia. The History of an Idea』 Chapter8 の読解②	災害の後： 多和田葉子『献灯使』 綿矢りさ『大地のゲーム』
第 12 回	近代の理想都市 田園都市（ガーデン・ シティ）運動とその 構想 Chapter8 の応用	エベニーザー・ハワード 『明日の田園都市』——ル・コル ビュジエと建築におけるモダニズ ム
第 13 回	ユートピアと近代社 会・近代科学	レポート発表・討議
第 14 回	ユートピアをめぐる問 題に関する考察－まと め	レポート発表・総評とまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、1 回につき 4 時間以上を標準とする。全体を通して基本文献である Claey's のテキストの精読をおこなってくる。

また、その都度のテーマについての文献を読んできて、内容について考えてくることが授業への関心を高め、また積極的に討議に参加できる土台となるので、それをおこなうこと。

【テキスト（教科書）】

Gregory Claey's
『Searching for Utopia. The History of an Idea』
Thames and Hudson
New York
ISBN-978-0-500-25174-4

が全体を通しての基本文献である。これはコピーにて配布する。

また、その他の文献については、文庫本などで手に入るものが多いので、手に入れるか、図書館を利用。そうでない場合はコピー資料にて配布する。

【参考書】

上記の各回で取り上げるさまざまな文献に関するものが参考書であるが、各回でテーマとして取り扱うものに関連したものを積極的に読んでおくこと。

【成績評価の方法と基準】

平常点（レジュメ・プレゼン・議論）70 %
レポート課題（最終回での各人の独自の発表）30 %

【学生の意見等からの気づき】

活発な議論ができる環境を作る。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞
比較文学、比較芸術、現代ドイツ文学
＜研究テーマ＞

①比較文学という手法を通して文学と現実＝社会との関わりを軸に、文学の意味や意義を考える。②文学以外の諸芸術におけるテーマの扱われ方③ユートピアニズム、科学と文学

＜主要研究業績＞①『英語文化研究』（2021 年 春風社、共著）②「監視というオブセッション」（2021 年 成城大学経済学会、『木下直也名誉教授退任記念論文集』）③「文学・科学・知の相互浸透—イシグロ、ダウドナ、ソーカルと学問分野の越境」（2020 年 法政大学 言語・文化センター編『言語と文化』第 17 号）④「知の獲得と語りのあて先—Kazuo Ishiguro の Never Let Me Go におけるその手続き—」（2019 年 日本英語文化学会編『異文化の諸相』第 39 号）

⑤翻訳 W. イーザー『虚構と想像力』2007 年、法政大学出版局

【Outline (in English)】

【Outline and objectives】 The main aims of this course are to deepen knowledge and understanding of the concept of utopianism and to review the history of utopianism in the world based on Gregory Claeys'《Searching for Utopia. The History of an Idea》.

We will focus on the theoretical foundations and the conceptual framework of utopianism through the different types of works including modern literature and art to provide graduate students with opportunities to treat American, English, German, French and Japanese literature/artworks from the perspective of comparative literature and culture.

Graduate Students are required to do a close reading of the textbooks.

【Goal】 :By the end of the course, students should be able to :

- understand the history of utopianism.
- conduct a critical analysis of the works mentioned in Gregory Claeys'《Searching for Utopia. The History of an Idea.》 from the perspective of utopianism.
- express your own point of view clearly in discussion.

【Work to be done outside of class】 : Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter(s) from the text. Students are required to study at least 4 hours outside of classroom.

【Grading criteria】 : Your overall grade in the class will be decided based on the following

Term-end presentation: 30%, an assignment and in-class contribution: 70%

LIT500B7

西欧比較文学Ⅱ

日中 鎮朗

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

秋学期のこの授業では、春学期のテキストである『ユートピアの歴史』の 2 つの章を読んだ後に、比較文学研究の総括として、比較文学/世界文学の考え方、問題意識、意義、手法、適用などをテキストを読みながら、学びます。

後半で使用するテキストはデヴィッド・ダムロッシュ『世界文学とは何か？』（David Damrosch の《What is World Literature》とフランコ・モレッティの『遠読—＜世界文学システム＞への挑戦』（Franco Moretti, 《Distant Reading》です。

これらのテキストには様々な国の様々な文学作品が現れるが、それらがどういう視点で、またどういう意味において結びつき、反映しあうのかを知ることによって、文学そのものについて考える思考を形成します。

また、テキストに現れる文学作品のこうした視点からの分析も学びます。

最後に、現実社会と文学作品のかかわり方についても意識形成することを目的とします。

＜講義題目＞比較文学・世界文学とは何か？

【到達目標】

Gregory Claeys, David Damrosch および Franco Moretti のテキストに沿って、西欧文学・比較文学・世界文学に関する歴史的俯瞰と意味付けを理解することが目標です。

比較文学、世界文学の全体としての意味や定義、またそうした視点に立つての文学作品への研究・分析また取り組み手法を学ぶことができます。

またその際に、これらのテキストで挙げられた作品を論じることになるので、そうした作品を理解し、批判的に分析できます。

討議の際に自分の意見をわかりやすく表現し、伝え、また他者の意見を理解し、議論できます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

Gregory Claeys の《Searching For Utopia》、David Damrosch の《What is World Literature?》および、Franco Moretti,《Distant Reading》を比較文学、世界文学の視点に立って、読みすすめていきます。

また、関連する作品についても考察していきます。

各回の授業では、担当者が内容をレポートし、それについて討議していきます。

独自の観点でいいので、議論・検討に積極的に加わってください。

従って、自由にまた関連に討論できるような場を形成したいと思います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	比較文学の共通理解を検討する。授業の進め方等についての説明。
第 2 回	『ユートピアの歴史』第 6 章 The Age of Defoe and Swift	『ガリバー旅行記』をめぐる問題について
第 3 回	『ユートピアの歴史』第 6 章 ウォーラーステインと 18 世紀	『ロビンソン・クルーソー』をめぐる問題について

第4回	『ユートピアの歴史』第4章 A Genre Defined	共同体と千年王国思想 石川淳『至福千年』 桐野夏生『ポリティコン』
第5回	『ユートピアの歴史』第4章 ユートピアの始原	「ユートピア」をめぐる問題についてのまとめと展望：トマス・モアのユートピア
第6回	ダムロッシュ『世界文学とは何か?』序章について	ゲーテ、新語を造る
第7回	ダムロッシュ『世界文学とは何か?』第3章について	旧世界から全世界へ
第8回	ダムロッシュ『世界文学とは何か?』第6章と終章について	「カフカ、故郷へ帰る」「ありあまるほどの世界と時間」をめぐる問題について
第9回	モレッティ『遠読』第1章	「近代ヨーロッパ文学——その地理的素描」をめぐる問題について
第10回	モレッティ『遠読』第2章と第3章	「世界文学への試論」 「文学の屠場」
第11回	モレッティ『遠読』第8章と第9章	「小説——理論と歴史」 「スタイル株式会社——18世紀から19世紀の英国小説」
第12回	モレッティ『遠読』第10章	ネットワーク理論、プロット分析
第13回	ユートピアと比較文学について（まとめ）	レポート発表と討議・考察
第14回	世界文学とデジタル・ヒューマニティーズ（まとめ）	レポート発表・総評とまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、1回につき4時間以上を標準とする。全体を通して基本文献である **Claeys** のテキストの精読をおこなってくることを。

また、その都度のテーマについての文献を読んできて、内容について考えてくることが授業への関心を高め、また積極的に討議に参加できる土台となるので、それをおこなうこと。

【テキスト（教科書）】

テキストは基本的にコピーにて配布する。
グレゴリー・クレイズ『ユートピアの歴史』（東洋書林）

Gregory Claeys の『Searching For Utopia』(London; Thames and Hudson, 2011)

ダムロッシュ『世界文学とは何か?』（国書刊行会）

David Damrosch, 『What is World Literature』(Princeton University Press, Princeton and Oxford, 2003).

フランコ・モレッティ『遠読』

Franco Moretti, 『Distant Reading』(Verso, 2013)

が全体を通しての基本文献である。

言及されるその他の文献については、図書館を利用するなどする。

【参考書】

上記の各回で取り上げるさまざまな文献が参考書であるが、各回でテーマとして取り扱うものに関連したものを積極的に読んでおくこと。

【成績評価の方法と基準】

平常点（レジュメ・プレゼンテーション・議論）70 %

最終回での各人のレポート発表 30 %

【学生の意見等からの気づき】

議論の時間を十分に確保し、活発な議論を促す。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

比較文学、比較芸術、現代ドイツ文学

＜研究テーマ＞

①比較文学という手法を通して文学と現実＝社会との関わりを軸に、文学の意味や意義を考える。②文学以外の諸芸術におけるテーマの扱われ方③ユートピアニズム、科学と文学

＜主要研究業績＞①『英語文化研究』（2021年 春風社、共著）②「監視というオブセッション」（2021年 成城大学経済学会、『木下直也名誉教授退任記念論文集』）③「文学・科学・知の相互浸透——イシグロ、ダウドナ、ソーカルと学問分野の越境」（2020年 法政大学 言語・文化センター編『言語と文化』第17号）④「知の獲得と語りのあて先— Kazuo Ishiguro の Never Let Me Go におけるその手続き—」（2019年 日本英語文化学会編『異文化の諸相』第39号）

⑤翻訳 W. イーザー『虚構と想像力』2007年、法政大学出版局

【Outline (in English)】

【Outline and objectives】 The main aims of this course are to deepen knowledge and understanding of the concept of utopianism and to review the history of utopianism in the world based on Gregory Claeys'『Searching for Utopia. The History of an Idea』and of world literature based on David Damrosch'『What is World Literature』and Franco Moretti's『Distant Reading』.

We will focus on the theoretical foundations and the conceptual framework of utopianism and world literature through the different types of works to provide graduate students with opportunities to treat various types of literature/artworks from the perspective of comparative literature and culture.

Graduate Students are required to do a close reading of the textbook.

【Goal】:By the end of the course, students should be able to:

- understand the history of utopianism and the method and concept of world literature studies.
- conduct a critical analysis of the works mentioned in the textbooks.
- express your own point of view clearly in discussion.

【Work to be done outside of class】: Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter(s) from the text. Students are required to study at least 4 hours outside of classroom.

【Grading criteria】: Your overall grade in the class will be decided based on the following

Term-end presentation: 30%, an assignment and in-class contribution: 70%

PHL500B7

西欧の思想 I

山下 真

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この講義は、西洋哲学の歴史とその諸問題について、基礎的な知識を習得することを目的とします。古代ギリシャから現代に至るまで、哲学的思考は極めて多様な形態をとってきました。「哲学とは何か？」という自己理解すら一様ではなく、異なる仕方で語り直されています。本講義では、主要な哲学者たちの思想を捉え、問いの展開を追うことを通じて、〈哲学〉という営み自体の本質的な性格を考察していきます。これにより受講者は、各人の専門研究にとって前提となり、視野を広くする、哲学の基本的態度や考え方を学ぶこととなるでしょう。

【到達目標】

受講者が達成すべき目標は、以下の三点です。
 ①西洋哲学史の基本展開と中心問題を学ぶ。
 ②個々の哲学者の課題と諸概念、思考方法を理解する。
 ③自分の専門研究との関係において、〈哲学〉の内実と意義とを考察する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は、配布資料を使って講義形式で進めます。毎回、テーマとなる哲学者の中心課題や基本概念を解説し、問題となっている事柄を捉えていきます。また、受講者に意見・質問を求めた上で、議論や応答をすることとします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	講義の概要と導入	哲学とは何か、哲学史概観
第 2 回	古代哲学（1）	ソクラテス以前の哲学者たち
第 3 回	古代哲学（2）	ソフィストとソクラテス
第 4 回	古代哲学（3）	プラトン
第 5 回	古代哲学（4）	アリストテレス
第 6 回	中世哲学	キリスト教の哲学と神学
第 7 回	近世哲学（1）	大陸合理論：デカルト
第 8 回	近世哲学（2）	大陸合理論：スピノザ、ライプニッツ
第 9 回	近世哲学（3）	イギリス経験論：ロック、バークリー、ヒューム
第 10 回	近世哲学（4）	カント
第 11 回	近世哲学（5）	ヘーゲル
第 12 回	現代哲学（1）	キルケゴールとニーチェ
第 13 回	現代哲学（2）	ハイデガーとヤスパーズ
第 14 回	講義全体の総括	哲学的思考の意義と広がり

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

受講者は、配布資料や指定した参考文献を読解し、予習・復習を実施して参加すること（大学の基準では、本授業の準備・復習時間は、毎回 4 時間以上が標準とされています）。

各回の連続性が高いので、欠席が多いと内容を理解できなくなります。学んだ事柄を自主的に整理した上で、極力休まず参加してください。

【テキスト（教科書）】

特定のテキストは使用しません。

【参考書】

最も基本的・通史的なものとして、以下数点だけ挙げておきます。
 岩崎武雄『西洋哲学史（再訂版）』有斐閣、1975 年
 生松敬三／木田元／伊東俊太郎／岩田靖夫編『概念と歴史がわかる 西洋哲学小事典』ちくま学芸文庫、2011 年（初刊：『西洋哲学史の基礎知識』有斐閣、1977 年）
 峰島旭雄編著『概説 西洋哲学史』ミネルヴァ書房、1989 年

新田義弘『哲学の歴史 哲学は何を問題にしてきたか』講談社現代新書、1989 年

その他、各論については多岐に渡るので、授業内で配布資料に掲載して紹介します。

【成績評価の方法と基準】

出席状況および理解度や意見・質問の積極性、受講態度などの平常点（50 %）と、学期末の課題レポート（50 %）で、上記「到達目標」三点の達成度を総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

本講義は、今年度から新規に担当します。

各人の経験に引きつけて思考できるよう、常に具体的な事例を織り交ぜた説明を心がけています。また、背景となる哲学的な知識や、様々な術語のニュアンスなど、詳しく話していきます。

【担当教員の専門分野等】

■専門分野

西洋哲学。特にカール・ヤスパーズを中心とする近現代ドイツ哲学、実存思想。

■最近の研究業績

論文「ヤスパーズ『哲学』における〈共同性〉概念の意義と射程」（日本ヤスパーズ協会編『コムニカチオン』第 23 号、2016 年）

論文「世界定位から根本知へ——ヤスパーズにおける哲学知とその媒体性」（日本ヤスパーズ協会編『コムニカチオン』第 25 号、2018 年）

論文「不死の共同性——ヤスパーズ『原子爆弾と人間の未来』読解」（日本倫理学会編『倫理学年報』第 68 集、2019 年）

論文「暗号のパスペクティヴィズム——ヤスパーズ『哲学』における一性と多性」（日本ヤスパーズ協会編『コムニカチオン』第 27 号、2020 年）

【Outline (in English)】

[Course outline]

This course deals with the history and central issues of western philosophy. The student will obtain basic knowledge about historical diversity and common universal character of the thinking by major philosophers.

[Learning Objectives]

The goals of this course are to

- (1) learn basic knowledge about the development and problems of western philosophy.
- (2) understand the thought process and concepts of major philosophers.
- (3) can consider the meaning of philosophical thinking in conjunction with each student's specialized research.

[Learning activities outside of classroom]

Before/ after each class meeting, students will be expected to have read the teaching materials and reference books. Your required study time is at least four hours for each class meeting.

[Grading Criteria]

Grading will be decided based on usual performance score (50%), and final paper (50%).

PHL500B7

西欧の思想Ⅱ

板橋 勇仁

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ショーペンハウアー哲学研究。ショーペンハウアー研究では、近年、欧米圏でも日本でも従来の解釈が誤解に基づくものとして大きく修正されてきている。「意志」とは実体であり「意志の否定」とはこの実体の消滅であるという解釈は、恣意的なものにすぎないことが明らかになってきている。ただし「意志」と「表象」との関係、意志の自由、意志の否定における倫理と宗教の関係など、彼の哲学の主要な思想は、いまだ十分に明らかになったとは言えない。本授業では、主著である『意志と表象としての世界 正編 Die Welt als Wille und Vorstellung, Band 1』（第三版）を講読していく。講読箇所を吟味し議論していくことで、受講者が最新の研究成果をふまえて彼の思想の内実と射程とを把握することを目的とする。とくに西欧哲学史における彼の思想の位置を測定することに注力し、そのことでショーペンハウアー哲学の意義を受講者なりに解釈できることをめざす。邦訳を用いつつ適宜原典を参照する予定であるが、受講者の希望に応じる。

【到達目標】

ショーペンハウアー哲学を専門にするかどうかにかかわらず、各自の研究會・学会における口頭発表や論文発表において、自身の問題意識と考察の筋道に即してショーペンハウアー哲学を援用できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業計画に示す毎回の講読箇所について教員から説明した後、問題を提起し受講者とともに解釈について議論する。受講者との相談のうえで、受講者にレジュメを作成してもらいそれを元に議論することも試みる予定。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	『意志と表象としての世界』第 1 節～第 4 節	表象としての世界の思想についての検討
第 2 回	『意志と表象としての世界』第 5 節～第 10 節	身体性の思想についての検討
第 3 回	『意志と表象としての世界』第 11 節～第 16 節	理性と悟性の思想についての検討
第 4 回	『意志と表象としての世界』第 17 節～第 20 節	身体と意志の思想についての検討
第 5 回	『意志と表象としての世界』第 21 節～第 24 節	意志のアナロジーの思想についての検討
第 6 回	『意志と表象としての世界』第 25 節～第 29 節	意志としての世界の思想についての検討
第 7 回	『意志と表象としての世界』第 30 節～第 35 節	アイデアの思想についての検討
第 8 回	『意志と表象としての世界』第 36 節～第 41 節	アイデア認識と藝術の思想についての検討

第 9 回	『意志と表象としての世界』第 42 節～第 52 節	諸藝術の体系の思想についての検討
第 10 回	『意志と表象としての世界』第 53 節～第 55 節	意志の観智的性格の思想についての検討
第 11 回	『意志と表象としての世界』第 56 節～第 61 節	意志と生の苦悩の思想についての検討
第 12 回	『意志と表象としての世界』第 62 節～第 67 節	意志の否定の倫理についての検討
第 13 回	『意志と表象としての世界』第 68 節～第 71 節	意志の否定の宗教についての検討
第 14 回	総括	総合的討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備・復習時間は、講読箇所の事前予習など、各 4 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

『意志と表象としての世界 I・II・III』（中公クラシックス）
『Die Welt als Wille und Vorstellung, Band 1』（Suhrkamp ほか）

【参考書】

板橋勇仁『底無き意志の系譜 ショーペンハウアーと意志の否定の思想』
高橋陽一郎『藝術としての哲学 ショーペンハウアー哲学における矛盾の意味』
伊藤貴雄『ショーペンハウアー 兵役拒否の哲学』

【成績評価の方法と基準】

授業内での講読箇所についての解釈や討論への取り組み（100 %）

【学生の意見等からの気づき】

本年度新規科目につきアンケートを実施していません

【学生が準備すべき機器他】

集中講義のため、授業開始前に受講者と連絡を取り合うことを予定しているので、学習支援システムにて授業登録を行うこと

【担当教員の専門分野等】

近代ドイツ超越論哲学・日本哲学
『西田哲学の論理と方法』
『歴史的現実と西田哲学』
『底無き意志の系譜』
『こわばる身体がほどけるとき』

【Outline (in English)】

This course enhances the development of students' skill in reading Arthur Schopenhauer's "Die Welt als Wille und Vorstellung, Band 1." At the end of the course, students are expected to acquire their own consequent interpretation. Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapters from the text. Your required study time is at least four hours for each class meeting. Final grade will be calculated according to the in-class contribution(100 %).

HIS500B7

東北アジアの文化伝播 I - 1

阿部 朝衛

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

考古学の基礎である編年研究の方法を修得することを目的とする。

【到達目標】

編年研究の基礎的方法を修得し、それを各自が保有する資料へ適用することによってその理解を深める。この過程で、考古学の課題・問題点の把握能力を高める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

テキストの型式学、層位学、編年に関する課題を日本語訳し、実践例を検討して、各自の保有する資料にそれらの方法を適用する。修士2年の場合は、状況に応じ、課題の順番を入れ替える。

対面授業の演習形式とし、議論しながら課題内容の理解を深める。また、課題によって講義時間を設ける。講義形式であっても常時、質問を受け付け、議論の発展させ、課題の理解を深める。発表に対するフィードバックは授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	授業方針と基礎的方法論の説明
第2回	編年研究の基礎1	型式学の前提、属性の抽出と操作方法
第3回	編年研究の基礎2	地層累重・地層同定の法則を利用した遺構・遺物の時間軸上での配列
第4回	編年研究の基礎3	型式学、層位学、絶対年代測定値を基にした地域編年
第5回	実践的研究の検討1	モンテリウスの研究1
第6回	実践的研究の検討2	モンテリウスの研究2
第7回	実践的研究の検討3	セリエーション1
第8回	実践的研究の検討4	セリエーション2
第9回	論文の検討1	旧石器時代論文
第10回	論文の検討2	縄文時代論文
第11回	論文の検討3	弥生時代・他論文
第12回	資料の検討1	旧石器時代資料
第13回	資料の検討2	縄文時代資料
第14回	資料の検討3	弥生時代資料

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
テキストの熟読、課題に関連する論文・各自の保有する資料の検討を求める。

【テキスト（教科書）】

Patterson, T. C. 1994 The Theory and Practice of Archaeology. Prentice Hall, Englewood Cliffs, New Jersey.
上記テキストは複写して配布する。

【参考書】

Renfrew, C. and Barn, P. 1991 Archaeology: Theories, Methods, and Practice. Thames and Hudson, London.

【成績評価の方法と基準】

発表（50％）とレポート（50％）をもとに評価。

【学生の意見等からの気づき】

日本語訳を基にした検討は、若干、早めに行う。院生の理解度に応じ、細かな課題を設定する。すでに履修した大学院生の場合、最初の授業で、授業の進め方の検討を行う。

【その他の重要事項】

資料の検討では、各自が保有する資料に主眼をおいて検討する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本旧石器時代、縄文時代

<研究テーマ>

先史時代における技術伝承と社会化、子ども考古学、先史時代における石材利用形態

<主要研究業績>

「旧石器時代人の利き手の研究法」『日本考古学』23号 2007年

「道具の原材料と組織化」『考古学ジャーナル』560号 2007年

「石器のメンテナンス」『縄文時代の考古学』6 2007年 同成社

「石器製作の技能」『芹沢長介先生追悼考古・民族・歴史学論叢』

2008年 六一書房

「遺跡形成における子供の役割」『新潟県の考古学』Ⅱ 2009年

新潟県考古学会

「新潟県南部における石器材料資源環境」『帝京史学』25号 2010年

「子ども考古学の誕生」上下 『考古学雑誌』97-1・2 2012・2013年

「原人の子どもをめぐる社会」『法政考古学』44 2018年

「ネアンデルタールの子どもの社会」『法政考古学』46 2020年

【Outline (in English)】

Course outline

The purpose of this study is to learn the method of chronological study, which is the basis of archaeology.

Learning objectives

Students will acquire basic methods of chronological research, apply their abilities to their own archaeological materials, and deepen their understanding.

Learning activities outside of classroom

Preparation and review time for this class is 2 hours each.

Students are asked to read through texts and related papers, and to examine their own archaeological materials.

Grading criteria/policy

Grades are judged based on the presentation (50%) and the report (50%).

HIS500B7

東北アジアの文化伝播 I - 2

阿部 朝衛

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

春学期で検討した各課題・方法に関連した資料の検討によって、課題・方法の有効性・援用方法を深く理解することを目的とする。春期パターンソンのテキストを継続して使う。

【到達目標】

春学期の課題における基礎的原理・方法の理解を深め、それを各自が保有する資料に適用することによって実践的な能力の修得を目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

各自の保有する考古学資料に対して、春学期の課題・方法を適用して検討する。あるいは春学期の課題・方法をもとに論文書評を行う。その結果を従来の成果と比較し、課題・方法の意義を討議して考察する。

最初の数回の授業は、パターンソンのテキストの読解を行う。修士2年の場合、状況に応じて課題の順番を入れ替える。

対面授業の演習形式とし、議論しながら課題内容の理解を深める。また課題によって講義時間を設ける。講義形式であっても常時、質問を受け付け、議論を進展させ、課題内容の理解を深める。発表に対するフィードバックは授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	春学期の課題・方法の整理
第2回	資料・論文の検討 1	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 1
第3回	資料・論文の検討 2	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 2
第4回	資料・論文の検討 3	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 3
第5回	資料・論文の検討 4	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 4
第6回	資料・論文の検討 5	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 5
第7回	資料・論文の検討 6	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 6
第8回	資料・論文の検討 7	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 7
第9回	資料・論文の検討 8	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 8
第10回	資料・論文の検討 9	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 9
第11回	資料・論文の検討 10	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 10
第12回	資料・論文の検討 11	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 11
第13回	資料・論文の検討 12	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 12
第14回	資料・論文の検討 13	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 13

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
上記の課題・方法に関する資料を収集し、検討を加える。

【テキスト（教科書）】

春学期のテキストと同じ。

【参考書】

春学期の参考書と同じ。

【成績評価の方法と基準】

討議（50％）とレポート（50％）を基に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

各課題の原理・方法を大学院生の資料をもとにより集中的に討議する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本旧石器時代、縄文時代

<研究テーマ>

先史時代における技術伝承と社会化、子ども考古学、先史時代における石材利用形態

<主要研究業績>

「旧石器時代人の利き手の研究法」『日本考古学』23号 2007年

「道具の原材料と組織化」『考古学ジャーナル』560号 2007年

「石器のメンテナンス」『縄文時代の考古学』6 2007年 同成社

「石器製作の技能」『芹沢長介先生追悼考古・民族・歴史学論叢』

2008年 六一書房

「遺跡形成における子供の役割」『新潟県の考古学』II 2009年

新潟県考古学会

「新潟県南部における石器材料資源環境」『帝京史学』25号 2010年

「子ども考古学の誕生」上下 『考古学雑誌』97-1・2 2012・2013年

「原人の子どもをめぐる社会」『法政考古学』44 2018年

「ネアンデルタールの子どもの社会」『法政考古学』46 2020年

【Outline (in English)】

Course outline

The purpose of this class is to learn the observation viewpoints and methods of relics, which are the basic materials of archaeology. In the second half, stone tools will be used as teaching materials.

Learning objectives

Students analyze materials related to each assignment and method examined in the spring semester. The purpose of this study is to gain a deeper understanding of the effectiveness of research methods.

Learning activities outside of classroom

Preparation and review time for this class is 2 hours each. Students are asked to read through texts and related papers, and to examine their own archaeological materials.

Grading criteria/policy

Grades are judged based on the presentation (50%) and the report (50%).

HIS500B7

東北アジアの文化伝播Ⅱ－1

小倉 淳一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

考古学資料を扱って研究を行うための理論と方法について実践的に学び身につけることを目標とする。実物資料から情報を引き出すこと、その情報から考古学的知見をいかに引き出すかがテーマとなる。

【到達目標】

物質文化に表象される人間集団を検討する際に、多面的な見方によって説明できるようになる。

実際の遺跡から出土した資料から必要な情報を引き出し、論文ならびに発掘調査報告書に必要な水準で記録することができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

近年における考古学資料の増加と検討の進行によって、原始・古代の全体像は大きく変わりつつある。物質文化によって復原される当時の社会を認識するためには、資料に対する見方や検討方法を一層整備することが求められる。また、研究論文を作成するためには、資料を表現する技術を高める必要がある。本講義では考古学資料から情報を引き出すための方法論について、資料調査（整理・修復）・講読と発表を通じて実践・検討する。各テーマにおける受講者の実習・発表・討論を基礎とする。

1) 考古学資料の整理・修復等の方法に関する実践・検討

2) 考古学の方法論に関する論文・書籍の講読

授業形式は対面授業を基本とする。

レポート等のフィードバックについては授業内に行うかオフィス・アワー（月曜 5 限）で対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	授業概要	概要紹介・授業計画の提示
第 2 回	実習資料の概要把握	対象資料の選定と資料整理に関わる予備調査
第 3 回	資料整理の実践（1）	土器の拓本
第 4 回	資料整理の実践（2）	土器の断面実測
第 5 回	資料整理の実践（3）	写真撮影
第 6 回	資料整理の実践（4）	事実記載
第 7 回	考古学方法論に関する文献講読（1）	『考古学の方法』（第 1 章）講読（1）
第 8 回	考古学方法論に関する文献講読（2）	『考古学の方法』（第 1 章）講読（2）
第 9 回	考古学方法論に関する文献講読（3）	『考古学の方法』（第 2 章）講読（1）
第 10 回	考古学方法論に関する文献講読（4）	『考古学の方法』（第 2 章）講読（2）
第 11 回	考古学方法論に関する文献講読（5）	『考古学の方法』（第 3 章）講読（1）
第 12 回	考古学方法論に関する文献講読（6）	『考古学の方法』（第 3 章）講読（2）
第 13 回	考古学資料の見学	博物館等での考古学資料の見学と解説
第 14 回	成果（レポート）提出と講評	実習成果レポートの提出、授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

第 1 回 自己の実習計画の立案

第 2 回 選定した考古学資料に関する学習と整理方針のまとめ

第 3 回～第 6 回 実習内容の復習 用具・用材の特性の理解

第 7 回～第 12 回 テキスト指定箇所の精読と発表資料の作成

第 13 回 見学対象資料についての事前学習

第 14 回 成果レポートの執筆・作成

【テキスト（教科書）】

V.G. チャイルド／近藤義郎訳（1981）『考古学の方法』河出書房新社

【参考書】

コリン・レンフルー、ポール・バーン／池田裕ほか訳（2007）『考古学 理論・方法・実践』東洋書林

ブルース・G・トリッガー／下垣仁志訳（2015）『考古学的思考の歴史』同成社

その他、授業内で適宜指示する。関連文献を渉猟する能力も求める。

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的な貢献 20 %（実習・講読への積極的な参加・平常点）
個別発表の水準 30 %（発表資料の完成度、発表態度、文献要約の精度、問題点の指摘、総合的な理解）

討論の成果 20 %（指摘した問題点や読解にもとづく議論の展開、新たな視点・論点の提示、議論全体の総括）

期末レポート（成果報告）30 %（資料整理技術の精度、資料解釈と関連資料の適切な位置づけ、報告文の完成度）

【学生の意見等からの気づき】

前年度実績なし（本科目では授業改善アンケートを実施しなかった）。

【その他の重要事項】

※受講人数や到達度によっては授業内容を変更することもあるので注意すること。

※担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても検討・解説する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

日本考古学

〈研究テーマ〉

東日本弥生文化の研究

〈主要研究業績〉

「小シーボルトと日本考古学の黎明期」『小シーボルトと日本の考古・民族学の黎明』（同成社 2011 年）

「印旛沼周辺地域の宮ノ台式土器出土遺跡の変遷—壺形土器を中心として—」『法政考古学』第 40 集記念論文集（法政考古学会 2014 年）

「関東地方における弥生時代の溝」『論集 環濠集落の諸問題 2015』（環濠（壕）論集刊行会 2015 年）

「弥生時代中期の南関東地方における環濠の造営時期」『法政考古学』第 43 集（法政考古学会 2017 年）

「早瀬川流域における弥生時代中期環濠集落の形成時期—樫田原遺跡の検討を中心として—」『法政考古学』第 45 集（法政考古学会 2019 年）

「東日本の環濠集落からみた午王山遺跡」『埼玉県和光市 午王山遺跡総括報告書』（和光市教育委員会 2019 年）

【Outline (in English)】

The aim of this course is to provide the students with

knowledge on the theory of studies and the methods of archaeology.

Students will be able to examine and explain archaeological materials from multiple perspectives. Students will be able to

write papers based on archaeological materials to the required standard.

The standard preparation and review time by students is 2 hours each.

The final grade will be calculated based on the following factors: normal score (20%), results of the research presentation

(30%), participation in the discussion (20%), and the final report (30%).

HIS500B7

東北アジアの文化伝播Ⅱ－2

小倉 淳一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

考古学資料を扱って研究を行うための理論と方法について実践的に学び身につけることを目標とする。実物資料から情報を引き出すこと、その情報から考古学的知見をいかに引き出すかがテーマとなる。

【到達目標】

物質文化に表象される人間集団を検討する際に、多面的な見方によって説明できるようになる。
実際の遺跡から出土した資料から必要な情報を引き出し、論文ならびに発掘調査報告書に必要な水準で記録することができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

近年における考古学資料の増加と検討の進行によって、原始・古代の全体像は大きく変わりつつある。物質文化によって復原される当時の社会を認識するためには、資料に対する見方や検討方法を一層整備することが求められる。また、研究論文を作成するためには、資料を表現する技術も高める必要がある。本講義では考古学資料から得られる情報を表現するための方法について、資料実測・文献講読と発表等を通じて実践・検討する。各テーマにおける受講者の実習・発表・討論を基礎とする。

- 1) 考古学資料の整理・作図の方法に関する実践・検討
- 2) 考古学の方法論に関する論文・書籍の講読

授業形式は対面授業を基本とする。

レポート等のフィードバックについては授業内に行うかオフィス・アワー（月曜 5 限）で対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	授業概要	概要紹介・授業計画の提示
第 2 回	実習資料の検討	対象資料の概要把握と整理方法の検討
第 3 回	資料整理の実践（1）	土器の実測
第 4 回	資料整理の実践（2）	石器の実測
第 5 回	資料整理の実践（3）	資料のトレース
第 6 回	資料整理の実践（4）	デジタルトレースの概要と実技
第 7 回	資料整理の実践（5）	挿図・図版の構成
第 8 回	考古学方法論に関する文献講読（1）	『考古学の方法』（第 4 章）講読（1）
第 9 回	考古学方法論に関する文献講読（2）	『考古学の方法』（第 4 章）講読（2）
第 10 回	考古学方法論に関する文献講読（3）	『考古学の方法』（第 5 章）講読（1）
第 11 回	考古学方法論に関する文献講読（4）	『考古学の方法』（第 5 章）講読（2）
第 12 回	考古学方法論に関する文献講読（5）	『考古学の方法』（第 6 章）講読（1）
第 13 回	考古学方法論に関する文献講読（6）	『考古学の方法』（第 6 章）講読（2）
第 14 回	成果（レポート）提出と講評	実習成果レポートの提出、授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

- 第 1 回 自己の実習計画の立案
- 第 2 回 発掘調査報告書等からみる報告計画のまとめ
- 第 3 回～第 4 回 実習内容の復習

- 第 5 回～第 7 回 トレースの復習と図化の完了
- 第 8 回～第 13 回 テキスト指定箇所の精読と発表資料の作成
- 第 14 回 成果レポートの執筆・作成

【テキスト（教科書）】

V.G. チャイルド／近藤義郎訳（1981）『考古学の方法』河出書房新社

【参考書】

コリン・レンフルー、ポール・バーン／池田裕ほか訳（2007）『考古学 理論・方法・実践』東洋書林

ブルース・G・トリッガー／下垣仁志訳（2015）『考古学的思考の歴史』同成社

その他、授業内で適宜指示する。関連文献を渉猟する能力も求める。

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的な貢献 20 %（実習・講読への積極的な参加・平常点）
個別発表の水準 30 %（発表資料の完成度、発表態度、文献要約の精度、問題点の指摘、総合的な理解）

討論の成果 20 %（指摘した問題点や読解にもとづく議論の展開、新たな視点・論点の提示、議論全体の総括）

期末レポート（成果報告）30 %（資料整理技術の精度、資料解釈と関連資料の適切な位置づけ、報告文の完成度）

【学生の意見等からの気づき】

前年度実績なし（本科目では授業改善アンケートを実施しなかった）。

【その他の重要事項】

※受講人数や到達度によっては授業内容を変更することもあるので注意すること。

※担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても検討・解説する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

日本考古学

〈研究テーマ〉

東日本弥生文化の研究

〈主要研究業績〉

「小シーボルトと日本考古学の黎明期」『小シーボルトと日本の考古・民族学の黎明』（同成社 2011 年）

「印旛沼周辺地域の宮ノ台式土器出土遺跡の変遷—壺形土器を中心として—」『法政考古学』第 40 集記念論文集（法政考古学会 2014 年）

「関東地方における弥生時代の溝」『論集 環濠集落の諸問題 2015』（環濠（壕）論集刊行会 2015 年）

「弥生時代中期の南関東地方における環濠の造営時期」『法政考古学』第 43 集（法政考古学会 2017 年）

「早瀬川流域における弥生時代中期環濠集落の形成時期—樫田原遺跡の検討を中心として—」『法政考古学』第 45 集（法政考古学会 2019 年）

「東日本の環濠集落からみた午王山遺跡」『埼玉県和光市 午王山遺跡総括報告書』（和光市教育委員会 2019 年）

【Outline (in English)】

The aim of this course is to provide the students with knowledge on the theory of studies and the methods of archaeology.

Students will be able to examine and explain archaeological materials from multiple perspectives. Students will be able to write papers based on archaeological materials to the required standard.

The standard preparation and review time by students is 2 hours each.

The final grade will be calculated based on the following factors: normal score (20%), results of the research presentation (30%), participation in the discussion (20%), and the final report (30%).

HIS600B7

東北アジアの文化伝播Ⅲ－1

小倉 淳一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本考古学分野においてより専門的な論文を執筆する能力を身につけることを目標とする。実践的な研究発表を行い、なおかつ専門的な論文の内容について理解し検討することがテーマとなる。考古学研究を実践的に行うことで、受講者の目指す論文の作成につながる視点と方法を涵養する。

【到達目標】

受講者の実践研究の発表の機会を通じて、修士論文の水準を理解するとともに、その執筆のために十分な方法上の実力が備わる。先行研究を実践的に検討することで、研究方法や成果の提示方法を習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

考古学資料を用いた実践研究の成果を受講者各々が発表し、内容について検討する。受講者は研究論文の体裁と形式をふまえたうえで、具体的な考古学資料を提示するとともに考古学の方法にもとづいて発表内容を作成する。実際の発表においてはレジュメをまとめ、研究の詳細を報告するものとする。次いで全員での討論に移り、発表者の研究目的と問題の所在がいかなるところにあり、設定された問題が適切であるかどうかを検討し、さらに取り扱う資料群の全体が議論にふさわしいものであるのか、提示された方法が適切であるか、考察および結論が正しいか等についても検討する。

また、本授業では各自の研究に関連する課題論文の講読も合わせて行うこととする。受講者は研究論文を読解してレジュメをまとめ、報告する。論文の主題、研究史、展開、資料操作、考察、結論などについて批判的かつ建設的な議論を展開することとする。

これらの後に、自らの論文の構想発表指導を行う。

上記のように各回を演習形式で行うので、発表者の扱う主題や内容については事前に予告するとともに受講者全員の予習を求め、活発な議論の展開を望む。扱う資料は考古学資料であり、各自が資料に語らせるための準備を充分に行うことを期待する。

授業形式は対面授業を基本とする。

レポート等のフィードバックについては授業内に行うかオフィス・アワー（月曜 5 限）で対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	授業概要	概要紹介・授業計画の提示
第 2 回	研究実践発表（1）	受講者による実践研究の発表と討議（1）
第 3 回	研究実践発表（2）	受講者による実践研究の発表と討議（2）
第 4 回	研究実践発表（3）	受講者による実践研究の発表と討議（3）
第 5 回	研究実践発表（4）	受講者による実践研究の発表と討議（4）
第 6 回	論文講読発表（1）	受講者による論文講読の成果発表と討議（1）
第 7 回	論文講読発表（2）	受講者による論文講読の成果発表と討議（2）
第 8 回	論文講読発表（3）	受講者による論文講読の成果発表と討議（3）
第 9 回	論文講読発表（4）	受講者による論文講読の成果発表と討議（4）

第 10 回	論文構想発表（1）	受講者による論文構想の発表と討議（1）
第 11 回	論文構想発表（2）	受講者による論文構想の発表と討議（2）
第 12 回	論文構想発表（3）	受講者による論文構想の発表と討議（3）
第 13 回	論文構想発表（4）	受講者による論文構想の発表と討議（4）
第 14 回	成果提出と講評	期末レポートの提出と授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

第 1 回 自己の学習計画の立案

第 2 回～第 5 回 発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は関連分野の事前学習

第 6 回～第 9 回 発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は指定文献の精読と関連分野の事前学習

第 10 回～第 13 回 発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は関連分野の事前学習

第 14 回 成果レポートの執筆・作成

【テキスト（教科書）】

発表形式の授業のため、特に指定しない。

【参考書】

コリン・レンフルー、ポール・バーン／池田裕ほか訳（2007）『考古学 理論・方法・実践』東洋書林

ブルース・G・トリッガー／下垣仁志訳（2015）『考古学的思考の歴史』同成社

その他、授業内で適宜指示する。関連文献を渉猟する能力は必須である。

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的な貢献 20 %（平常点）

個別発表の水準 30 %（発表資料の完成度、発表態度、個別研究の完成度、文献要約の精度、問題点の指摘、総合的な理解・考察の程度）
討論の成果 20 %（指摘した問題点や読解にもとづく議論の展開、新たな視点・論点の提示、議論全体の総括）

期末レポート（成果報告）30 %（問題設定の妥当性、研究史の扱い、資料解釈と関連資料の適切な位置づけ、考察の水準、学術文献としての完成度）

【学生の意見等からの気づき】

前年度実績なし（本科目では授業改善アンケートを実施しなかった）。

【その他の重要事項】

※受講人数や到達度によっては授業内容を変更することもあるので注意すること。

※担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても実践的に解説・指導する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

日本考古学

〈研究テーマ〉

東日本弥生文化の研究

〈主要研究業績〉

「小シーボルトと日本考古学の黎明期」『小シーボルトと日本の考古・民族学の黎明』（同成社 2011 年）

「印旛沼周辺地域の宮ノ台式土器出土遺跡の変遷—壺形土器を中心として—」『法政考古学』第 40 集記念論文集（法政考古学会 2014 年）

「関東地方における弥生時代の溝」『論集 環濠集落の諸問題 2015』（環濠（壕）論集刊行会 2015 年）

「弥生時代中期の南関東地方における環濠の造営時期」『法政考古学』第 43 集（法政考古学会 2017 年）

「早瀬川流域における弥生時代中期環濠集落の形成時期—樫田原遺跡の検討を中心として—」『法政考古学』第 45 集（法政考古学会 2019 年）

「東日本の環濠集落からみた午玉山遺跡」『埼玉県和光市 午玉山遺跡総括報告書』（和光市教育委員会 2019 年）

【Outline (in English)】

The aim of this course is to acquire the ability to write a master's thesis by students doing research presentations on Japanese archeology.

Students will understand the academic standards of a master's thesis and cultivate their competence.
The standard preparation and review time by students is 2 hours each.
The final grade will be calculated based on the following factors: normal score (20%), results of the research presentation (30%), participation in the discussion (20%), and the final report (30%).

HIS600B7

東北アジアの文化伝播Ⅲ－２

小倉 淳一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本考古学分野においてより専門的な論文を執筆する能力を身につけることを目標とする。実践的な研究発表を行い、なおかつ専門的な論文の内容について理解し検討することがテーマとなる。考古学研究を実践的に行うことで、受講者の目指す論文の作成につながる視点と方法を涵養する。

【到達目標】

受講者の実践研究の発表の機会を通じて、修士論文の水準を理解するとともに、その執筆のために十分な方法上の実力が備わる。先行研究を実践的に検討することで、研究方法や成果の提示方法を習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

考古学の分野で自らの論文を執筆する受講者に対して、論文構想の提示、研究上の最重要文献の講読、実践研究の報告などを行う。まず、自らの論文構想を提示し、具体的な資料検討状況についても報告し、それにもとづいた討議を行う。次いで、今後の研究の核となる先行研究の成果について論文をもとに報告し、研究論文を読解してレジュメをまとめ、報告する。論文の主題、研究史、展開、資料操作、考察、結論などについて批判的かつ建設的な議論を展開することとする。さらに、受講者それぞれの研究状況を具体的に報告し、討議を行う。上記のように各回を演習形式で行うので、発表者の扱う主題や内容については事前に予告するとともに受講者全員の予習を求め、活発な議論の展開を望む。扱う資料は考古学資料であり、各自が資料に語らせるための準備を充分に行うことを期待する。授業形式は対面授業を基本とする。レポート等のフィードバックについては授業内に行うかオフィス・アワー（月曜 5 限）で対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	授業概要	概要紹介・授業計画の提示
第 2 回	論文構想発表（1）	受講者による論文構想の発表と討議（1）
第 3 回	論文構想発表（2）	受講者による論文構想の発表と討議（2）
第 4 回	論文構想発表（3）	受講者による論文構想の発表と討議（3）
第 5 回	論文構想発表（4）	受講者による論文構想の発表と討議（4）
第 6 回	論文講読発表（1）	受講者による論文講読の成果発表と討議（1）
第 7 回	論文講読発表（2）	受講者による論文講読の成果発表と討議（2）
第 8 回	論文講読発表（3）	受講者による論文講読の成果発表と討議（3）
第 9 回	論文講読発表（4）	受講者による論文講読の成果発表と討議（4）
第 10 回	研究実践発表（1）	受講者による実践研究の発表と討議（1）
第 11 回	研究実践発表（2）	受講者による実践研究の発表と討議（2）

- 第12回 研究実践発表（3） 受講者による実践研究の発表と討議（3）
 第13回 研究実践発表（4） 受講者による実践研究の発表と討議（4）
 第14回 成果提出と講評 期末レポートの提出と授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

第1回 自己の学習計画の立案

第2回～第5回 発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は関連分野の事前学習

第6回～第9回 発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は指定文献の精読と関連分野の事前学習

第10回～第13回 発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は関連分野の事前学習

第14回 成果レポートの執筆・作成

【テキスト（教科書）】

発表形式の授業のため、特に指定しない。

【参考書】

コリン・レンフルー、ポール・バーン／池田裕ほか訳（2007）『考古学 理論・方法・実践』東洋書林

ブルース・G・トリッガー／下垣仁志訳（2015）『考古学的思考の歴史』同成社

その他、授業内で適宜指示する。関連文献を渉猟する能力は必須である。

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的な貢献 20 %（平常点）

個別発表の水準 30 %（発表資料の完成度、発表態度、個別研究の完成度、文献要約の精度、問題点の指摘、総合的な理解・考察の程度）
 討論の成果 20 %（指摘した問題点や読解にもとづく議論の展開、新たな視点・論点の提示、議論全体の総括）

期末レポート（成果報告） 30 %（問題設定の妥当性、研究史の扱い、資料解釈と関連資料の適切な位置づけ、考察の水準、学術文献としての完成度）

【学生の意見等からの気づき】

前年度実績なし（本科目では授業改善アンケートを実施しなかった）。

【その他の重要事項】

※受講人数や到達度によっては授業内容を変更することもあるので注意すること。

※担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても実践的に解説・指導する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

日本考古学

〈研究テーマ〉

東日本弥生文化の研究

〈主要研究業績〉

「小シーボルトと日本考古学の黎明期」『小シーボルトと日本の考古・民族学の黎明』（同成社 2011 年）

「印旛沼周辺地域の宮ノ台式土器出土遺跡の変遷—壺形土器を中心として—」『法政考古学』第40集記念論文集（法政考古学会 2014 年）

「関東地方における弥生時代の溝」『論集 環濠集落の諸問題 2015』（環濠（壕）論集刊行会 2015 年）

「弥生時代中期の南関東地方における環濠の造営時期」『法政考古学』第43集（法政考古学会 2017 年）

「早瀬川流域における弥生時代中期環濠集落の形成時期—権田原遺跡の検討を中心として—」『法政考古学』第45集（法政考古学会 2019 年）

「東日本の環濠集落からみた午王山遺跡」『埼玉県和光市 午王山遺跡総括報告書』（和光市教育委員会 2019 年）

【Outline (in English)】

The aim of this course is to acquire the ability to write a master's thesis by students doing research presentations on Japanese archeology.

Students will understand the academic standards of a master's thesis and cultivate their competence.

The standard preparation and review time by students is 2 hours each.

The final grade will be calculated based on the following factors: normal score (20%), results of the research presentation (30%), participation in the discussion (20%), and the final report (30%).

HIS600B7

東アジアの律令文化Ⅰ－1

小口 雅史

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

東アジア古代世界では、社会の分析に際して、租税制度とならんで土地制度の分析が非常に重要な位置を占める。基本史料としては土地法である田令について、その注釈書の集大成である、「田令集解」を、順次、条文配列に従って読み解いていく。その際に、六国史などの正史や他の法制史料（律や類聚三代格）、あるいは関連古文書などからわかる事例についても、おりにふれて考えていく。

【到達目標】

日本古代史の基本史料の一つである『令集解』を自力で読解し、研究に十分に活用できる能力を養うとともに、法制史料から社会の実態を読み取る方法を取得したり、中国の社会の実態と比較する方法を取得することを目的とします。単に発表者の報告を聞くだけではなく、常に報告者とは違った見方を試みて討論に持ち込む習慣を身につけます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業形式は対面授業を原則とする。春学期は第 22 条より開始する。あらかじめ条文ごとに担当を指定するので、上記の目標をふまえて事前に十分予習してから本研究に臨むことを期待する。事前に取り組んでおく研究内容としては、対象条文の諸写本間の校合、書き下し、現代語訳、語句註、大宝令文の復原、対象条文に基づく論点整理、先行研究の紹介、自分なりの意見などである。発表へのフィードバックについては、次の授業の初めに、前回の授業で提出資料からいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整、概説
第 2 回	田令集解第 31 条在外諸司職分田条講読 (1)	田令集解第 31 条在外諸司職分田条 A 部分の論理展開 1
第 3 回	田令集解第 31 条在外諸司職分田条講読 (2)	田令集解第 31 条在外諸司職分田条 A 部分の論理展開 2
第 4 回	田令集解第 31 条在外諸司職分田条講読 (3)	古記による大宝田令第 31 条在外諸司職分田条の復原
第 5 回	田令集解第 31 条在外諸司職分田条講読 (4)	田令集解第 31 条在外諸司職分田条の論理展開
第 6 回	田令集解第 31 条在外諸司職分田条講読 (5)	中央官職田と地方の在外職分田の比較
第 7 回	田令集解第 32 条郡司職分田条講読 (1)	田令集解第 32 条郡司職分田条 A 部分の論理展開
第 8 回	田令集解第 32 条郡司職分田条講読 (2)	田令集解第 32 条郡司職分田条 B 部分の論理展開
第 9 回	田令集解第 32 条郡司職分田条講読 (3)	古記による大宝田令第 32 条郡司職分田条の復原
第 10 回	田令集解第 32 条郡司職分田条講読 (4)	郡司職分田の特性
第 11 回	田令集解第 32 条郡司職分田条講読 (5)	地方官としての郡司の特性
第 12 回	田令集解第 33 条駅田条講読 (1)	田令集解第 33 条駅田条 A 部分の論理展開
第 13 回	田令集解第 33 条駅田条講読 (2)	田令集解第 33 条駅田条 B 部分の論理展開

第 14 回 職分田（職田）の特性 半年間の講読を踏まえて職分田とは何かについて意見交換を行う。
修論執筆に資する内容にする。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストはかなり難解なので、発表者はいうまでもないが、他の参加者も事前に必ず担当テキストを熟読しておくこと。発表者の準備学習は標準的に 2 時間程度、聴講者の準備学習は標準的に 1 時間程度を要する。復習はそれぞれ 1 時間程度。発表者は、発表終了後に再構成した発表レジュメをアップロードしてもらうが、それに別途 1 時間程度。

【テキスト（教科書）】

『新訂増補国史大系 令集解』（吉川弘文館）
鷹司本令集解マイクロフィルム紙焼

【参考書】

『日本思想大系 律令』（岩波書店）、国立歴史民俗博物館 蔵 貴重典籍叢書〈歴史篇〉 第一巻～第六巻『令集解』。
その他、条文内容に応じて随時指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表が中心となるが、難解な田令集解を構成する諸法家の説を正しく理解できたか、諸法家の間の論点の違いを明確に示せたか、それにもとづいて田制についての論理を正しく構築できたかを重視する（75 % 相当）。また討論においては自主的な発言の内容を重視する（25 % 相当）。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし

【学生が準備すべき機器他】

とくになし

【その他の重要事項】

ゼミでの成果を何らかの形で活字化し学界へ公開することを検討しているので頑張ってください。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉
日本古代史・法制史・北方史・国際日本学
〈研究テーマ〉
日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史
〈主要研究業績〉

2010 年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』

2008 年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院

2008 年、『近時の在吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって』『古文書研究』66

2007 年、『『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後－FileMaker による Database の Web 公開の一例として』『漢字文献情報処理研究』8

【Outline (in English)】

Course outline : In the ancient East Asia, when analyzing the society, analysis of the land system occupies a very important position.

Learning Objectives : We will study the fundamental historical code "Deryo" and its annotation "Denryo-Shuge" in turn.

Learning activities outside of classroom : Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting . Your study time will be more than five hours for a class.

Grading Criteria /Policies : Grading will be decided based on lab reports (85 %), and the quality of the students' experimental performance in the lab (15 %). code "Deryo" and its annotation "Denryo-Shuge" in turn.

HIS600B7

東アジアの律令文化Ⅰ－2

小口 雅史

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

東アジア古代世界では、社会の分析に際して、租税制度とならんで土地制度の分析が非常に重要な位置を占める。基本史料としては土地法である田令について、その注釈書の集大成である、「田令集解」を、順次、条文配列に従って読み解いていく。その際に、六国史などの正史や他の法制史料（律や類聚三代格）、あるいは関連古文書などからわかる事例についても、おりにふれて考えていく。

【到達目標】

日本古代史の基本史料の一つである『令集解』を自力で読解し、研究に十分に活用できる能力を養うとともに、法制史料から社会の実態を読み取る方法を取得したり、中国の社会の実態と比較する方法を取得することを目的とします。単に発表者の報告を聞くだけではなく、常に報告者とは違った見方を試みて討論に持ち込む習慣を身につけてもらいます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業形式は対面授業を原則とする。秋学期は第 25 条より開始する。あらかじめ条文ごとに担当を指定するので、上記の目標をふまえて事前に十分予習してから本研究に臨むことを期待する。事前に取り組んでおく研究内容としては、対象条文の諸写本間の校合、書き下し、現代語訳、語句註、大宝令文の復原、対象条文に基づく論点整理、先行研究の紹介、自分なりの意見などである。発表へのフィードバックについては、次の授業の初めに、前回の授業で提出資料からいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整、概説
第 2 回	田令集解第 33 条 駅田条講読 (3)	古記による大宝田令第 33 条 駅田条の復原
第 3 回	田令集解第 33 条 駅田条講読 (4)	田令集解第 33 条 駅田条の論理展開
第 4 回	田令集解第 33 条 駅田条講読 (5)	駅田と駅家の関係
第 5 回	田令集解第 34 条 在外諸司条講読 (1)	田令集解第 34 条 在外諸司条 A 部分の論理展開
第 6 回	田令集解第 34 条 在外諸司条講読 (2)	田令集解第 34 条 在外諸司条 B 部分の論理展開
第 7 回	田令集解第 34 条 在外諸司条講読 (3)	古記による大宝田令第 34 条 在外諸司条の復原
第 8 回	田令集解第 34 条 在外諸司条講読 (4)	古記による大宝田令第 34 条 在外諸司条の復原
第 9 回	田令集解第 34 条 在外諸司条講読 (5)	早川庄八による大宝令制分析批判
第 10 回	田令集解第 35 条 外官新至条講読 (1)	田令集解第 35 条 外官新至条 A 部分の論理展開 1
第 11 回	田令集解第 35 条 外官新至条講読 (2)	田令集解第 35 条 外官新至条 A 部分の論理展開 2
第 12 回	田令集解第 35 条 外官新至条講読 (3)	古記による大宝田令第 35 条 外官新至条の復原
第 13 回	田令集解第 35 条 外官新至条講読 (4)	新任者の田地耕営の問題

第 14 回 地方に置かれた公田の分析 半年間の講読を踏まえて班田制の地方における特性について意見交換を行う。修論執筆に資する内容にする。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストはかなり難解なので、発表者はいうまでもないが、他の参加者も事前に必ず担当テキストを熟読しておくこと。発表者の準備学習は標準的に 2 時間程度、聴講者の準備学習は標準的に 1 時間程度を要する。復習はそれぞれ 1 時間程度。発表者は、発表終了後に再構成した発表レジュメをアップロードしてもらうが、それに別途 1 時間程度。

【テキスト（教科書）】

『新訂増補国史大系 令集解』（吉川弘文館）
鷹司本令集解マイクロフィルム紙焼

【参考書】

『日本思想大系 律令』（岩波書店）、国立歴史民俗博物館 蔵 貴重典籍叢書〈歴史篇〉 第一巻～第六巻『令集解』。
その他、条文内容に応じて随時指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表が中心となるが、難解な田令集解を構成する諸法家の説を正しく理解できたか、諸法家の間の論点の違いを明確に示せたか、それにもとづいて田制についての論理を正しく構築できたかを重視する（75 % 相当）。また討論においては自主的な発言の内容を重視する（25 % 相当）。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし

【学生が準備すべき機器他】

とくになし

【その他の重要事項】

ゼミでの成果を何らかの形で活字化し学界へ公開することを検討しているので頑張ってください。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

日本古代史・法制史・北方史・国際日本学

〈研究テーマ〉

日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史

〈主要研究業績〉

2010 年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』

2008 年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院

2008 年、「近時の在吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって」『古文書研究』66

2007 年、「『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総目録』のその後－FileMaker による Database の Web 公開の一例として」『漢字文献情報処理研究』8

【Outline (in English)】

Course outline : In the ancient East Asia, when analyzing the society, analysis of the land system occupies a very important position.

Learning Objectives : We will study the fundamental historical code "Deryo" and its annotation "Denryo-Shuge" in turn.

Learning activities outside of classroom : Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting . Your study time will be more than five hours for a class.

Grading Criteria /Policies : Grading will be decided based on lab reports (85 %%), and the quality of the students' experimental performance in the lab (15 %).

HIS600B7

東アジアの律令文化Ⅱ－1

小口 雅史

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

東アジア古代世界では、社会の分析に際して、租税制度とならんで土地制度の分析が非常に重要な位置を占める。日本古代史研究においては、さらにそのモデルとなった唐の諸制度のとの比較が必須である。そこでこの演習では、日本の土地制度の直接の母法となった唐田令を、近年発見されて公開された天聖令に基づいて比較研究することとする。今年度も併行して講読している田令集解に対応する天聖令部分を引き続き検討する。

【到達目標】

日本の田令は中国の田令を母法として作成されているので、どこが丸写しでどこが日本的なのかを、両者を比較史ながら識別する能力を身につける。

単に報告者の発表を聞くだけではなく積極的に自分の意見を述べるディベート能力を身につける。

海外史料を自力で読み解く技術を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業形式は対面授業を原則とする。本年度は田令集解第22条に対応する天聖令より開始する。あらかじめ条文ごとに担当を指定するので、上記の目標をふまえて事前に十分予習してから本研究に臨むことを期待する。

発表へのフィードバックについては、今回の授業の初めに、前回の授業で提出資料からいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整、概説
第2回	天聖田令（日本令第31条相当）講読（1）	日本田令第31条相当条文の比定と配列
第3回	天聖田令（日本令第31条相当）講読（2）	日本田令第31条相当条文前半部分の読解
第4回	天聖田令（日本令第31条相当）講読（3）	日本田令第31条相当条文後半部分の読解
第5回	天聖田令（日本令第31条相当）講読（4）	日本田令第31条相当条文前半部分と武徳令・開元7年令との比較。
第6回	天聖田令（日本令第31条相当）講読（5）	日本田令第31条相当条文後半部分と武徳令・開元7年令との比較。修論テーマについての報告会を兼ねます。
第7回	天聖田令（日本令第32条相当）講読（1）	日本田令第32条相当条文の比定と配列
第8回	天聖田令（日本令第32条相当）講読（2）	日本田令第32条相当条文前半部分の読解
第9回	天聖田令（日本令第32条相当）講読（3）	日本田令第232条相当条文後半部分の読解
第10回	天聖田令（日本令第32条相当）講読（4）	日本田令第32条相当条文前半部分と武徳令・開元7年令との比較。

第11回	天聖田令（日本令第32条相当）講読（5）	日本田令第32条相当条文後半部分と武徳令・開元7年令との比較。修論テーマについての報告会を兼ねます。
第12回	天聖田令（日本令第33条相当）講読（1）	日本田令第33条相当条文の比定と配列
第13回	天聖田令（日本令第33条相当）講読（2）	日本田令第33条相当条文前半部分の読解
第14回	秋学期の総括	唐代の官人支給田田種と吐魯番文書にみえる田制実例との比較を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に取り組んでおく研究内容としては、発表者は対象条文の復原根拠となった関連史料間の異同の確認、書き下し、現代語訳、語句註、日本令との比較、唐令拾遺の成果との比較、対象条文に基づく論点整理、先行研究の紹介、自分なりの意見のまとめなどが要求される。標準的に2時間以上を要する。受講者もそれに準じるが標準的に1時間以上を要する。復習はそれぞれ1時間程度。発表者は、発表終了後に再構成した発表レジュメをアップロードしてもらうが、それに別途1時間程度。

【テキスト（教科書）】

天一閣博物館・中国社会科学院歴史研究所天聖令整理課題組校證『天一閣藏明鈔本天聖令校證 附 唐令復原研究』上・下（中華書局、2006年10月）

【参考書】

唐令拾遺（仁井田陞著、東京大学出版会）
唐令拾遺補（池田温編、東京大学出版会）
その他、条文内容に応じて随時指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表が中心となるが、海外史料である天聖令の正確な理解ができたか、日本令との違いを明確に示せたか、それにもとづいて土地制度についての唐代の論理を日本古代と比較しながら正しく構築できたかを重視する（発表70%）。また討論においては自主的な発言の内容を重視する（討論への参加30%）。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし

【学生が準備すべき機器他】

とくになし

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉
日本古代史・法制史・北方史・国際日本学
〈研究テーマ〉
日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史
〈主要研究業績〉

2010年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』
2008年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院
2008年、「近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって」『古文書研究』66
2007年、「『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後－FileMakerによるDatabaseのWeb公開の一例として」『漢学文献情報処理研究』8

【Outline (in English)】

Course outline : In the ancient East Asia, when analyzing the society, analysis of the land system occupies a very important position.

Learning Objectives : We will study the fundamental historical code "Deryo", while complying with the corresponding Old Chinese code "Tensei-Denrei".

Learning activities outside of classroom : Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting . Your study time will be more than five hours for a class.

Grading Criteria /Policies : Grading will be decided based on lab reports (85 %) , and the quality of the students' experimental performance in the lab (15 %) .

HIS600B7

東アジアの律令文化Ⅱ－2

小口 雅史

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

東アジア古代世界では、社会の分析に際して、租税制度とならんで土地制度の分析が非常に重要な位置を占める。日本古代史研究においては、さらにそのモデルとなった唐の諸制度のとの比較が必須である。そこでこの演習では、日本の土地制度の直接の母法となった唐田令を、近年発見されて公開された天聖令に基づいて比較研究することとする。今年度も併行して講読している田令集解に対応する天聖令部分を引き続き検討する。

【到達目標】

日本の田令は中国の田令を母法として作成されているので、どこが丸写しでどこが日本的なのかを、両者を比較史ながら識別する能力を身につける。

単に報告者の発表を聞くだけではなく積極的に自分の意見を述べるディベート能力を身につける。

海外史料を自力で読み解く技術を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業形式は対面授業を原則とする。秋学期は田令集解第 25 条に対応する天聖令より開始する。あらかじめ条文ごとに担当を指定するので、上記の目標をふまえて事前に十分予習してから本研究に臨むことを期待する。

発表へのフィードバックについては、回目の授業の初めに、前回の授業で提出資料からいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整、概説
第 2 回	天聖田令（日本令第 33 条相当）講読（3）	日本田令第 33 条相当条文後半部分の読解
第 3 回	天聖田令（日本令第 33 条相当）講読（4）	日本田令第 33 条相当条文前半部分と武徳令・開元 7 年令との比較
第 4 回	天聖田令（日本令第 33 条相当）講読（5）	日本田令第 33 条相当条文後半部分と武徳令・開元 7 年令との比較。修論テーマについての報告会を兼ねます。
第 5 回	天聖田令（日本令第 34 条相当）講読（1）	日本田令第 34 条相当条文の比定と配列
第 6 回	天聖田令（日本令第 34 条相当）講読（2）	日本田令第 34 条相当条文前半部分の読解
第 7 回	天聖田令（日本令第 34 条相当）講読（3）	日本田令第 34 条相当条文後半部分の読解
第 8 回	天聖田令（日本令第 34 条相当）講読（4）	日本田令第 34 条相当条文前半部分と武徳令・開元 7 年令との比較
第 9 回	天聖田令（日本令第 34 条相当）講読（5）	日本田令第 34 条相当条文後半部分と武徳令・開元 7 年令との比較。修論テーマについての報告会を兼ねます。
第 10 回	天聖田令（日本令第 35 条相当）講読（1）	日本田令第 35 条相当条文の比定と配列
第 11 回	天聖田令（日本令第 35 条相当）講読（2）	日本田令第 35 条相当条文前半部分の読解

第 12 回	天聖田令（日本令第 35 条相当）講読（3）	日本田令第 35 条相当条文後半部分の読解
第 13 回	天聖田令（日本令第 35 条相当）講読（4）	日本田令第 35 条相当条文と武徳令・開元 7 年令との比較。修論テーマについての報告会を兼ねます。
第 14 回	秋学期の総括	日唐の官人田の違いについて比較史的に総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に取り組んでおく研究内容としては、発表者は対象条文の復原根拠となった関連史料間の異同の確認、書き下し、現代語訳、語句註、日本令との比較、唐令拾遺の成果との比較、対象条文に基づく論点整理、先行研究の紹介、自分なりの意見のまとめなどが要求される。標準的に 2 時間以上を要する。受講者もそれに準じるが標準的に 1 時間以上を要する。復習はそれぞれ 1 時間程度。発表者は、発表終了後に再構成した発表レジュメをアップロードしてもらうが、それに別途 1 時間程度。

【テキスト（教科書）】

天一閣博物館・中国社会科学院歴史研究所天聖令整理課題組校證『天一閣藏明鈔本天聖令校證 附 唐令復原研究』上・下（中華書局、2006 年 10 月）

【参考書】

唐令拾遺（仁井田陞著、東京大学出版会）
唐令拾遺補（池田温編、東京大学出版会）
その他、条文内容に応じて随時指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表が中心となるが、海外史料である天聖令の正確な理解ができたか、日本令との違いを明確に示せたか、それにもとづいて土地制度についての唐代の論理を日本古代と比較しながら正しく構築できたかを重視する（発表 70 %）。また討論においては自主的な発言の内容を重視する（討論への参加 30 %）。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし

【学生が準備すべき機器他】

とくになし

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉
日本古代史・法制史・北方史・国際日本学
〈研究テーマ〉
日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史
〈主要研究業績〉

2010 年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』
2008 年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院
2008 年、『近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって』『古文書研究』66
2007 年、『『在バルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後－FileMaker による Database の Web 公開の一例として』『漢学文献情報処理研究』8

【Outline (in English)】

Course outline : In the ancient East Asia, when analyzing the society, analysis of the land system occupies a very important position.

Learning Objectives : We will study the fundamental historical code "Deryo", while complying with the corresponding Old Chinese code "Tensei-Denrei".

Learning activities outside of classroom : Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting . Your study time will be more than five hours for a class.

Grading Criteria /Policies : Grading will be decided based on lab reports (85 %), and the quality of the students' experimental performance in the lab (15 %).

HIS500B7

王権の政治文化 I

春名 宏昭

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「平安時代と貴族社会」と題して講義します。平安前期の改革の時代の国家・政治のあり方、貴族たちのあり方を理解するようつとめます。

【到達目標】

平安時代の貴族社会のあり方の把握を目指します。基礎的な知識を得て、その上でそれぞれの事象に興味を持ってアプローチし、国家・政治の本質を理解できる能力を身につけることができます。平安時代の官僚のあり方は現代の日本にも通じるオンタイムの問題ですから、現代の政治が抱える問題点も理解できるようになります。そのような視点から課題レポートにも取り組んで下さい。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

平安前期の改革によって国家・政治のあり方がどのように変わっていったのか、この変化が平安中期の王朝貴族の時代に帰結していったのかを検証していきます。この授業では、一般啓蒙書に書かれることのない天皇や貴族たちのあり方を見ていきます。講義ですが、聴いているだけでは話が耳を通り抜けていきますから、問題意識をもって授業に取り組むことが必要です。授業を聴いて問題意識をもった後、参考書等をあらためて読み直すと新しい理解が見えてきます。就職活動や教育実習等あるでしょうが、十分な聴講（もちろん遅刻は含まず）が最低限の必須条件です。心して下さい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業の内容の説明
第 2 回	〈時代〉の変化	ワンランク上の国家を目指して
第 3 回	官人たちの変化	良吏政治のスタート＝大同元年勅
第 4 回	天皇の性格変化	桓武天皇と平城天皇
第 5 回	良吏政治の展開	嵯峨朝への政策継承
第 6 回	良吏政治の実践	弘仁三年勅から天長元年官符へ
第 7 回	承和の変の前奏	淳和朝・仁明朝の政治状況
第 8 回	承和の変	母橘嘉智子と娘正子内親王
第 9 回	貴族の時代へ	文徳朝・清和朝の様相
第 10 回	応天門の変	安定の時代、摂関政治へ
第 11 回	源氏と藤原氏	源氏の左大臣と藤原氏の右大臣
第 12 回	藤原基経の国政運営	清和天皇の悲嘆と陽成天皇の廃位
第 13 回	阿衡の紛議	昌泰の変へ
第 14 回	平安前期という時代	平安時代史概観

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

平安時代に関して問題意識を持つには、その前提として平安前期・中期の知識が必要ですし、奈良時代から平安時代への推移についても概括的な理解は必要です。それらを得るために、どれでも参考書（該当巻）を読んでみて下さい。ただし、著者の理解・興味関心によって内容はずいぶん違います。

この講義では、通説的理解がいかに不十分（言葉足らず）かということ述べます。それを確認するためにも参考書（該当巻）を読んで下さい。また、平城天皇の事績をより詳しく知るには私の『平城天皇』（吉川弘文館人物叢書）を、延喜年間以降については『岩波講座日本歴史』第5巻の「摂関時代と政治構造」を読んで下さい。この講義の準備・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

春名宏昭『〈謀反〉の古代史 平安朝の政治改革』（吉川弘文館）

授業に必要な史料はプリントして配布します。

【参考書】

中央公論社（文庫）・小学館（文庫）・集英社・講談社（文庫）から出版された『日本の歴史』や、吉川弘文館の『日本の時代史』・『日本古代の歴史』、東京大学出版会の『日本史講座』、岩波書店の『シリーズ日本の古代史』（新書）、『岩波講座日本歴史』の該当巻。

【成績評価の方法と基準】

基準は平常点 30 %、レポート 70 %です。レポートで取り上げる範囲は平安時代に限りますが、テーマは学生各人で選んでよいことにしています。ただ、どのようなテーマを選んでも、授業の理解の度合いはおのずとレポートの内容にあらわれます。

【学生の意見等からの気づき】

板書は教師の書いたものをただ写すだけでは身につけません。人物名・事象名・年号や学術用語などのキーワードを書きますから、それらも含めて、自分で工夫して自分なりのノートを作って下さい。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本古代政治史

〈研究テーマ〉日本古代の皇権と官制

〈主要研究業績〉

『律令国家官制の研究』（吉川弘文館）

『平城天皇』（吉川弘文館）

『皇位継承 歴史をふりかえり変化を見定める』（共著、山川出版社）

『〈謀反〉の古代史 平安朝の政治改革』（吉川弘文館）

【Outline (in English)】

This lecture is attended under the heading of “The Heian period and the aristocracy”. This course introduces how should be the nation and aristocrats in the former term of the Heian period to students taking this course. By the end of the course, students should be able to understand the essence of the nation and politics. Before/after each class meetings, students will be expected to spend four hours to read the textbook and one of reference books introduced. Grading will be decided based on term-end report(70%) and usual contribution(30%).

HIS500B7

王権の政治文化Ⅱ

春名 宏昭

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「続日本紀の史料学」と題して講義を行ないます。八世紀の日本は、当時先進の文化を誇った中国のような国家建設を目標に掲げて邁進していました。『続日本紀』を題材に史料への取り組み方を学び、日本古代史における歴史の流れ、あり方の把握を目指します。

【到達目標】

続日本紀の記事を数点取り上げ、史料へのアプローチの仕方を知得することができます。この授業を通して、奈良時代の基礎的な理解を身につけ、他の史料に対してもつねに興味を持って臨めるようになり、それを論理的に解析し正しい理解に到達できる技能が身につきます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

取り上げた記事を糸口に、その背後にある問題点を探り出し検証していきます。講義ですが、聴いているだけでは話が耳を通り抜けていきますから、問題意識をもって授業に取り組む必要があります。授業を聴いて問題意識をもった後、参考書等をあらためて読み直すと新しい理解が見えてきます。就職活動や教育実習等あるでしょうが、十分な聴講（もちろん遅刻は含まず）が最低限の必須条件です。心して下さい。

課題を課した場合は、次の授業でコメントします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	続日本紀とはどのような史料か？
第2回	左右京尹の設置（1）	天平宝字五年二月丙辰朔条の紹介
第3回	左右京尹の設置（2）	左右京尹に対するわたしの理解
第4回	左右京尹の設置（3）	左右京尹の新たな性格分析
第5回	紫微内相と兵権（1）	天平宝字元年五月丁卯条の紹介
第6回	紫微内相と兵権（2）	紫微内相の性格分析
第7回	奈良から平安へ	藤原仲麻呂政権の評価
第8回	天平二年の太政官奏（1）	天平二年六月甲寅朔条の紹介
第9回	天平二年の太政官奏（2）	続日本紀の3つのテキスト
第10回	天平二年の太政官奏（3）	わずか 31 文字の史料の“奥行”
第11回	慶雲元年の公廨銀（1）	慶雲元年七月庚子条の紹介
第12回	慶雲元年の公廨銀（2）	公廨銀から見えてくるもの
第13回	税司主鑑（1）	大宝二年二月乙丑条の紹介
第14回	税司主鑑（2）	大宝令施行直後の地方政治

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

取り上げた記事が含む意味を理解するためには、それぞれの記事に現れた事象の時代背景を知る必要があります。そのためには、どれでもいいですから参考書（奈良時代該当巻）を読んでみて下さい。著者の理解・興味関心によって内容はずいぶん違います。この講義では、現在の通説的理解がいかに不十分（言葉足らず）かということを述べていきます。それを確認するためにも参考書（該当巻）を読んでおいて下さい。この講義の準備・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特に定めません。授業に必要な史料はプリントして配布します。

【参考書】

岩波書店・新日本古典文学大系『続日本紀』が基本です。他に一般啓蒙書として、中央公論社（文庫）・小学館（文庫）・集英社・講談社（文庫）から出版された『日本の歴史』や、吉川弘文館の『日本の時代史』・『日本古代の歴史』、東京大学出版会の『日本史講座』、岩波新書『シリーズ日本の古代史』、『岩波講座日本歴史』の該当巻があります。

【成績評価の方法と基準】

基準は平常点 30 %、レポート 70 %です。レポートで取り上げるテーマは学生各人で選んでよいことにしていますが、どのようなテーマを選んでも授業の理解の度合いはおのずとレポートの内容にあらわれます。

【学生の意見等からの気づき】

板書は教師の書いたものをただ写すだけでは身につけません。人物名・事象名・年号や学術用語などのキーワードを書きますから、それらも含めて、自分で工夫して自分なりのノートを作ってください。”自分で考える”がキーワードです。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本古代政治史

〈研究テーマ〉日本古代の皇権と官制

〈主要研究業績〉

『律令国家官制の研究』（吉川弘文館）

『平城天皇』（吉川弘文館）

『皇位継承 歴史をふりかえり変化を見定める』（共著、山川出版社）

『〈謀反〉の古代史 平安朝の政治改革』（吉川弘文館）

【Outline (in English)】

This lecture is attended under the heading of “The world of Shokunihongi”. This course introduces “shokunihongi” and the way of wrestle Japanese history to students taking this course. By the end of the course, students should be able to understand how to make a new approach to problems. Before/after each class meetings, students will be expected to spend four hours to read one of reference books introduced to tell the difference between it and my lecture. Grading will be decided based on term-end report(70%) and usual contribution(30%).

HIS500B7

天皇制と政務・儀礼 I

山口 英男

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

テーマ「平安時代の政務・儀式関係史料の研究」
平安時代の政治・社会・文化を明らかにする上で有力な手掛かりとなる政務・儀式関係史料への理解を深めることを目的とします。

【到達目標】

平安時代史研究の展開の中で、政治・社会・文化を明らかにするための有力な手掛かりとして注目されるのが政務・儀式関係史料です。その読解と検討のための基礎作業を学び、身に付けること、それを通じて政務・儀式への具体的な理解を深めることが目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

儀式書・法制史料・古記録・編年史料などを中心に、平安時代の個別の政務・儀式ごとに関係史料を精確に読解し、政務・儀式の内容・構造と時代的変遷について把握を進めることで、平安時代の国家体制の特徴や、政治史・政策史・文化史・社会史に関する知見を抽出していきます。演習形式（対面授業）により、報告についてその都度フィードバックしながら進めます。取り上げる政務・儀式や、授業で扱う史料については、受講者の希望も踏まえて選択します。それに応じて授業計画を組みなおす場合があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業の進め方について説明します。
第 2 回	平安時代史研究と政務・儀式関係史料	平安時代史の理解にとって、政務・儀式関係史料が持つ意義を解説します。
第 3 回	平安時代政務・儀式史料概説	平安時代の政務関係史料、儀式関係史料について概説します。
第 4 回	行政実務関係史料の検討（儀式書・法制史料）	行政実務に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第 5 回	行政実務関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第 6 回	行政実務関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第 7 回	行政実務関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第 8 回	文芸関係史料の検討（儀式書・法制史料）	文芸に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第 9 回	文芸関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第 10 回	文芸関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第 11 回	文芸関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第 12 回	武芸関係史料の検討（儀式書・法制史料）	武芸に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。

第 13 回	武芸関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第 14 回	武芸関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
報告担当以外の場合も授業で取り扱う史料には必ず事前に目を通して出席してください。

【テキスト（教科書）】

事前に印刷物を配布します（『延喜式』『儀式』『内裏式』『西宮記』『北山抄』、『大日本古記録』など）。

【参考書】

『大日本史料』第 1・2・3 編
『訳注延喜式』上・中・下
「駒牽関係史料」（『山梨県史 資料編 3』山梨県、2001 年、山口英男編纂担当）
「駒牽と相撲」（『山梨県史 通史編 1』2004 年、山口英男執筆担当）

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的参加、報告の発表内容、作成資料、討議への関与、レポートの内容などから総合的に判定します（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

授業で扱う史料については、受講者の希望も踏まえて選択します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
日本古代史（奈良・平安時代史）
<研究テーマ>
古代史料学（正倉院文書の〈書類学〉）
古代の社会と行政機構
牧と駒牽をめぐる諸問題
<主要研究業績>
『日本古代の地域社会と行政機構』吉川弘文館、2019 年
「貢馬をめぐる牧の諸相」（佐々木虔一他編『馬と古代社会』八木書店 2021 年）
「装潢小治田人公口状とその背景」（古瀬奈津子編『古代日本の政治と制度』同成社 2021）
「正倉院文書に見える「口状」について」（佐藤信編『史料・史跡と古代社会』吉川弘文館、2018 年）

【Outline (in English)】

To acquire the ability to read and understand historical materials on the imperial court ritual of the Heian period.

HIS500B7

天皇制と政務・儀礼Ⅱ

山口 英男

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

テーマ「平安時代の政務・儀式関係史料の研究」

平安時代の政治・社会・文化を明らかにする上で有力な手掛かりとなる政務・儀式関係史料への理解を深めることを目的とします。

【到達目標】

平安時代史研究の展開の中で、政治・社会・文化を明らかにするための有力な手掛かりとして注目されるのが政務・儀式関係史料です。その読解と検討のための基礎作業を学び、身に付けること、それを通じて政務・儀式への具体的な理解を深めることが目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

儀式書・法制史料・古記録・編年史料などを中心に、平安時代の個別の政務・儀式ごとに関係史料を精確に読解し、政務・儀式の内容・構造と時代的変遷について把握を進めることで、平安時代の国家体制の特徴や、政治史・政策史・文化史・社会史に関する知見を抽出していきます。演習形式（対面授業）により、報告についてその都度フィードバックしながら進めます。取り上げる政務・儀式や、授業で扱う史料については、受講者の希望も踏まえて選択します。それに応じて授業計画を組みなおす場合があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の進め方について説明します。
第2回	仏事関係史料の検討（儀式書・法制史料）	仏事に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第3回	仏事関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第4回	仏事関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第5回	仏事関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第6回	神事関係史料の検討（儀式書・法制史料）	神事に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第7回	神事関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第8回	神事関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第9回	神事関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第10回	朝廷儀礼関係史料の検討（儀式書・法制史料）	朝廷儀礼に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第11回	朝廷儀礼関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第12回	朝廷儀礼関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。

- 第13回 朝廷儀礼関係儀式・政務の歴史的位置付け それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
- 第14回 平安時代の政務・儀式の展開と特質 平安時代政務・儀式の展開と特質について、得られた成果を総括します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

報告担当以外の場合も授業で取り扱う史料には必ず事前に目を通して出席してください。

【テキスト（教科書）】

担当教員が作成した印刷物を配布します（「延喜式」「儀式」「内裏式」「西宮記」「北山抄」、『大日本古記録』など）。

【参考書】

『大日本史料』第1・2・3編
『訳注延喜式』上・中・下
「駒牽関係史料」（『山梨県史 資料編3』山梨県、2001年、山口英男編集担当）
「駒牽と相撲」（『山梨県史 通史編1』2004年、山口英男執筆担当）

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的参加、報告の発表内容、作成資料、討議への関与、レポートの内容などから総合的に判定します（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

授業で扱う史料については、受講者の希望も踏まえて選択します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本古代史（奈良・平安時代史）

<研究テーマ>

古代史料学（正倉院文書の〈書類学〉）

古代の社会と行政機構

牧と駒牽をめぐる諸問題

<主要研究業績>

『日本古代の地域社会と行政機構』吉川弘文館、2019年

「貢馬をめぐる牧の諸相」（佐々木虔一他編『馬と古代社会』八木書店 2021年）

「装潢小治田人公口状とその背景」（古瀬奈津子編『古代日本の政治と制度』同成社 2021）

「正倉院文書に見える「口状」について」（佐藤信編『史料・史跡と古代社会』吉川弘文館、2018年）

【Outline (in English)】

To acquire the ability to read and understand historical materials on the imperial court ritual of the Heian period.

HIS500B7

日本の歴史と宗教

及川 亘

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の 16 世紀末～17 世紀初頭は城郭建設の時代である。当該期の城郭建設に関する大名間もしくは大名と家臣の間で取り交わされた書状を中心に読解し、当時の政治・社会の在り方について考える。

【到達目標】

16～17 世紀の日本史を研究するうえで、書状の読解は重要な要素であるが、難しい点の一つは、書状には基本的に日付のみで年次が記されないことにある。書状の年次を確定することは、その内容を正確に把握するうえで必要不可欠であり、一方で書状の年次を確定するためには、その内容を正確に把握しなければならない。本授業では城郭建設に関する書状の読解を通じて、16～17 世紀史料の取り扱いの基礎的技術を獲得することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

細川家（豊前小倉・肥後熊本）、鍋島家（肥前佐賀）、毛利家（長門萩）、浅野家（安芸広島）など、主に西国大名の史料を用いる。最初の数回は教員側で史料読解の方法を例示する。その後は担当者を決めて、担当史料の内容解釈・解説をしてもらい、参加者全員で討論する。教員側からは関連史料などを提示し解説する。課題や発表に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。
なお、授業は ZOOM を用いて行う。新型コロナウイルス感染症の状況が改善した場合は対面授業に戻す。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業方法と使用テキストに関する説明。
第 2 回	名古屋城建設に関する史料を読む ①	教員による史料読解の例示
第 3 回	名古屋城建設に関する史料を読む ②	教員による史料読解の例示
第 4 回	名古屋城建設に関する史料を読む ③	担当者による報告と討論
第 5 回	名古屋城建設に関する史料を読む ④	担当者による報告と討論
第 6 回	駿府城建設に関する史料を読む ①	担当者による報告と討論
第 7 回	駿府城建設に関する史料を読む ②	担当者による報告と討論
第 8 回	駿府城建設に関する史料を読む ③	担当者による報告と討論
第 9 回	駿府城建設に関する史料を読む ④	担当者による報告と討論
第 10 回	江戸城建設に関する史料を読む ①	担当者による報告と討論
第 11 回	江戸城建設に関する史料を読む ②	担当者による報告と討論
第 12 回	江戸城建設に関する史料を読む ③	担当者による報告と討論
第 13 回	江戸城建設に関する史料を読む ④	担当者による報告と討論
第 14 回	まとめ—書状から読み解く時代性	第 13 回までの全体の内容について討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
報告担当者は、担当史料を読解し、その年次・内容について十分に調査検討することが求められる。もちろん担当者以外も予習することが求められる。

【テキスト（教科書）】

教科書は用いず、テキストはプリントを配布する。

【参考書】

『大日本史料』第十二編之一～六十二
『佐賀県史料集成』一～三〇
『佐賀県近世史料』第一編・第二編
『大日本近世史料』細川家史料
『松井家文庫所蔵古文書調査報告書』一～二十
『出水叢書 綿考輯録』一～四
など

【成績評価の方法と基準】

平常点（授業内での担当箇所の報告と授業への参加度）により評価する。（100%）

【学生の意見等からの気づき】

関連史料なども使いながら、中近世の政治・社会が具体的にイメージできるようにしたい。また実践を通じて史料読解の方法が身に着くようにしたい。

【学生が準備すべき機器他】

ZOOM を利用できるインターネット環境。

【その他の重要事項】

新型コロナウイルス感染症流行の状況により、ZOOM を用いて実施する。

URL は学習支援システムの当該授業のページで通知する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
日本中・近世史
<研究テーマ>
中世・近世の都市・流通史研究、中近世移行期の社会経済変動の研究
<主要研究業績>
論文「現場監督する大名—多久家文書にみる公儀普請—」小宮木代良編『近世前期の公儀軍役負担と大名家—佐賀藩多久家文書を読みなおす—』（岩田書院、2019 年）
論文「旅行者と通行証—関所通過のメカニズム—」高橋慎一郎・千葉敏之編『移動者の中世—史料の機能、日本とヨーロッパ—』（東京大学出版会、2017 年）
編著『薬師寺の中世文書』東京大学史料編纂所研究成果報告 2015-3、2016 年
論文「中世の戦争と商人」（高橋典幸編『生活と文化の歴史学 5 戦争と平和』竹林舎、2014 年）
論文「町の経済—算用帳にみる京都の人的結合—」（高橋慎一郎・千葉敏之編『中世の都市—史料の魅力、日本とヨーロッパ—』東京大学出版会、2009 年）
論文「戦国期の薬師寺と唐招提寺」（勝俣鎮夫編『寺院・検断・徳政—戦国時代の寺院史料を読む—』山川出版社、2004 年）

【Outline (in English)】

From the end of the 16th century to the beginning of the 17th century, Japan entered the era of castle construction. Read mainly the letters regarding the construction of the castle during that period, and think about the state of politics and society at that time.

【Goal】

Reading comprehension of letters is an important factor in studying Japanese history in the 16th and 17th centuries, but one of the difficulties is that the letters are basically dated only and do not include the year. Determining the year of a letter is indispensable for accurately grasping its contents, while in order to determine the year of a letter, it is necessary to accurately grasp its contents. The goal of this class is to acquire the basic skills of handling historical materials from the 16th to 17th centuries through reading comprehension of letters on castle construction.

【Work to be done outside of class (preparation, etc.)】

The standard preparatory study / review time for this class is 2 hours each.

The reporter is required to read the historical materials in charge and thoroughly investigate and examine the year and contents. Of course, it is required to prepare for others.

【Grading Criteria】

Evaluate based on normal points (report of the part in charge in the class and degree of participation in the class). (100%)

HIS500B7

古文書から読む江戸社会・入門編 I

松本 剣志郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

近世史研究において、くずし字の読解能力を身につけていることは、研究の幅を大きく広げると同時に、学問をより深めるものとなる。本授業は、基礎的な読解能力を養成することを目的とする。あわせて基本的な近世文書の種類を覚えていってもらいたい。

【到達目標】

- ①くずし字の読解能力を身につける。
- ②基本的な近世文書の種類を覚える。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義と演習を併用するかたちをとる。古文書のコピー Hoppii にアップするので、まずは自力で読解に取り組む（教室でプリントは配布しない）。授業時に割り当てるので、学生はこれを板書きし、答え合わせをする。教師は当該古文書について解説する（課題に対するフィードバック）。対面授業である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	くずし字の辞典について
第 2 回	古文書読解入門	近世史料学講義
第 3 回	検地帳読解（1）	数字を覚えよう
第 4 回	検地帳読解（2）	単位を覚えよう
第 5 回	武家屋敷組合名簿読解（1）	名前を覚えよう
第 6 回	武家屋敷組合名簿読解（2）	通称を覚えよう
第 7 回	領地宛行状読解	大名家領の安堵
第 8 回	年貢割付状読解	年貢請求書
第 9 回	年貢皆済目録読解	年貢領収書
第 10 回	宗門人別改帳読解	江戸時代の家族
第 11 回	五人組帳前書読解	百姓への規制
第 12 回	変体仮名読解	俳句をよむ
第 13 回	金子借用証文読解	年貢滞納
第 14 回	試験とまとめ	解説とも

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に、配布された古文書のコピーを辞書を引きながら予習すること。事後には、読めなかった字を必ず復習すること。とにかく古文書をながめる時間をたくさんとること。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

『新編古文書読解辞典』（柏書房）
『くずし字用例辞典』（東京堂出版）など
辞書は必須。毎回持参のこと。

【成績評価の方法と基準】

期末試験（90 %）、平常点（10 %）

【学生の意見等からの気づき】

まずは自分で辞書をひきながら読むことが大事です。

【その他の重要事項】

学部合同科目である。本授業担当者は学芸員の実務経験を有しており、古文書を中心とした史料の整理や活用に一定の実践経験をもつ。このことを活かして実際の古文書の取り扱いや保存管理等についての情報も織り交ぜながら授業を展開する。

【Outline (in English)】

This course deals with the historical documents of early modern Japan. It also enhances the development of student's skill in decipherment of cursive-style writing. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Your overall grade in the class will be decided based on the following Term-end examination: 90%, in class contribution: 10%.

HIS500B7

古文書から読む江戸社会・入門編Ⅱ

松本 剣志郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

多様な近世史料の読解能力を養うことを目的とする。さまざまなくずし字を解読すると同時に、読解した史料の意味を理解することが重要となる。

【到達目標】

- ①くずし字を解読することができる。
- ②読解した史料の意味を理解することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業は日本近世史料学Ⅰを履修済みであることを前提として授業を進める。Hoppiiに古文書のコピーをアップするので、これにまずは自力で読解に取り組む。授業時に答え合わせし、教師は当該古文書について解説する（課題に対するフィードバック）。古文書解読の中級編として、近世の行政文書のほか、書状や発句など書体の異なる史料も対象とする。なお、近世ゼミの夏合宿で撮影した古文書をテキストとすることがある。また、現物古文書の整理作業を体験することもある。対面授業である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	発句読解	変体仮名
第2回	離縁状読解	三行半
第3回	触書読解（1）	ペリー来航
第4回	触書読解（2）	株仲間再興
第5回	武家文書読解（1）	御堀の管理
第6回	武家文書読解（2）	橋梁の管理
第7回	武家文書読解（3）	三方領地替（前半）
第8回	武家文書読解（4）	三方領知替（後半）
第9回	漢詩読解	七言絶句
第10回	書状読解（1）	松平容保書簡（前半）
第11回	書状読解（2）	松平容保書簡（後半）
第12回	日記読解（1）	自家年譜（前半）
第13回	日記読解（2）	自家年譜（後半）
第14回	試験とまとめ	解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に配布された古文書のコピーを、辞書を使って自力で読むこと。事後には、必ず復習すること。多くの古文書に触れることが重要である。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

『新編古文書解読字典』（柏書房）
『くずし字用例辞典』（東京堂出版）
辞書は必須。毎回持参のこと。

【成績評価の方法と基準】

期末試験（90％）、平常点（10％）

【学生の意見等からの気づき】

筆の動きをみるのが、古文書読解能力向上のためのポイントです。

【その他の重要事項】

学部合同科目である。本授業担当者は学芸員の実務経験を有しており、古文書を中心とした史料の整理や活用に関する実践経験をもつ。このことを活かして実際の古文書の取り扱いや保存管理等についての情報も織り交ぜながら授業を展開する。

【Outline (in English)】

This course deals with the historical documents of early modern Japan. It also enhances the development of student's skill in decipherment of cursive-style writing. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Your overall grade in the class will be decided based on the following Term-end examination: 90%, in class contribution: 10%.

HIS500B7

江戸の地方文化 I

西沢 淳男

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

江戸幕府の地方行政官である郡代の日記を講読します。個人の日記を通して、支配所であった飛騨一国（越前・美濃も含む）の地誌・風俗・民俗・物価・気象・動植物や、民政・行政、家族、山村・漁村生活を知る。また、地方行政の立案・実行過程についても具体的に知ることを目的とする。

【到達目標】

日本近世史社会の諸様相を史料を通して学びながら、生きた地方の町や農・山村社会の具体相を知り、各自の問題関心を高め、個々の研究テーマに対する研究能力を高めていきます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

江戸幕府郡代であった豊田友直の日記を講読します。飛騨高山在勤の地方官であった友直を通して、江戸時代の社会・文化を読み解いて行きます。史料で読み解く史実の広がり、各自の研究を進める上でも役立つでしょう。発表は輪読・発表・討議形式で進めます。授業はオンライン授業で行います。課題や発表に対するフィードバックは基本的に授業内で行い、場合により資料等を配信し共有化を図ります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	自己紹介、授業方法の説明、史料講読の範囲と発表順序の決定、その他
第2回	豊田友直と在勤日記について	教員による代官制度と豊田友直及び日記についての概要講義
第3回	「豊田友直日記」(1)	日記の講読と質疑・応答
第4回	「豊田友直日記」(2)	日記の講読と質疑・応答
第5回	「豊田友直日記」(3)	日記の講読と質疑・応答
第6回	「豊田友直日記」(4)	日記の講読と質疑・応答
第7回	「豊田友直日記」(5)	日記の講読と質疑・応答
第8回	「豊田友直日記」(6)	日記の講読と質疑・応答
第9回	「豊田友直日記」(7)	日記の講読と質疑・応答
第10回	「豊田友直日記」(8)	日記の講読と質疑・応答
第11回	「豊田友直日記」(9)	日記の講読と質疑・応答
第12回	「豊田友直日記」(10)	日記の講読と質疑・応答
第13回	「豊田友直日記」(11)	日記の講読と質疑・応答
第14回	「豊田友直日記」(12)	日記の講読と質疑・応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。日記の講読は、各々の分担について、①日記上の人物・事項の解説、②史料解釈、③関連研究の紹介、④史料内容の発展です。十分準備すると共に、担当以外の部分も各自読み込んでおくこと。また、既出事項についても十分に復読し理解しておくこと。

【テキスト（教科書）】

西沢淳男『飛騨郡代豊田友直在勤日記』1（岩田書院、2019年）7,000円。必要に応じて教員がコピーを配付します。購入希望の場合は、教員より3割引で購入できます。

【参考書】

西沢淳男『代官の日常生活』（角川ソフィア文庫、2015年）920円。その他は、授業時に紹介します。

【成績評価の方法と基準】

各自の発表と討論参加 (70 %)、平常点 (30 %)

【学生の意見等からの気づき】

より日記の内容が理解できるように、図版等も積極的に提示していきたい。

【担当教員の専門分野等】

https://www.tcue.ac.jp/professor/nishizawa_atsuo.html

【Outline (in English)】

(Course outline)

This class, you will read the diary of a local official of the Edo Shogunate.

(Learning Objectives)

The goals of this course are to understand the local life and culture of the Edo period.

(Learning activities outside of classroom)

Students will be expected to read and review the historical materials thoroughly. Your study time will be more than four hours for a class.

(Grading Criteria /Policies)

Your overall grade in the class will be decided based on the following.

Presentation and discussion participation : 70%, normal score:30%

HIS500B7

江戸の地方文化Ⅱ

西沢 淳男

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

江戸幕府の地方行政官である郡代の日記を講読します。個人の日記を通して、支配所であった飛騨一國（越前・美濃も含む）の地誌・風俗・民俗・物産・気象・動植物や、民政・行政、家族、山村・漁村生活を知る。また、地方行政の立案・実行過程についても具体的に知ることを目的とする。

【到達目標】

日本近世史社会の諸様相を史料を通して学びながら、生きた地方の町や農・山村社会の具体相を知り、各自の問題関心を高め、個々の研究テーマに対する研究能力を高めていきます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

江戸幕府郡代であった豊田友直の日記を講読します。飛騨高山在勤の地方官であった友直を通して、江戸時代の社会・文化を読み解いて行きます。史料で読み解く史実の広がり、各自の研究を進める上でも役立つでしょう。発表は輪読・発表・討議形式で進めます。授業はオンライン授業で行います。フィードバックは基本的に授業内で行い、場合により資料等を配信し共有化を図ります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	自己紹介、授業方法の説明、史料講読の範囲と発表順序の決定、その他
第2回	豊田友直と在勤日記について	教員による代官制度と豊田友直及び日記についての概要講義 新規受講者がいない場合は講読とします。
第3回	「豊田友直日記」1	日記の講読と質疑・応答
第4回	「豊田友直日記」2	日記の講読と質疑・応答
第5回	「豊田友直日記」3	日記の講読と質疑・応答
第6回	「豊田友直日記」4	日記の講読と質疑・応答
第7回	「豊田友直日記」5	日記の講読と質疑・応答
第8回	「豊田友直日記」6	日記の講読と質疑・応答
第9回	「豊田友直日記」7	日記の講読と質疑・応答
第10回	「豊田友直日記」8	日記の講読と質疑・応答
第11回	「豊田友直日記」9	日記の講読と質疑・応答
第12回	「豊田友直日記」10	日記の講読と質疑・応答
第13回	「豊田友直日記」11	日記の講読と質疑・応答
第14回	「豊田友直日記」12	日記の講読と質疑・応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。日記の講読は、各々の分担について、①日記上の人物・事項の解説、②史料解釈、③関連研究の紹介、④史料内容の発展ですので、十分準備すると共に、担当以外の部分も各自読み込んでおくこと。また、既出事項についても十分に復読し理解しておくこと。

【テキスト（教科書）】

西沢淳男『飛騨郡代豊田友直在勤日記』1（岩田書院、2019年）7,000円。必要に応じて教員がコピーを配付します。購入希望の場合は、教員より3割引で購入できます。

【参考書】

西沢淳男『代官の日常生活』（角川ソフィア文庫、2015年）920円。その他は、授業時に紹介します。

【成績評価の方法と基準】

各自の発表と討論参加 (70 %)、平常点 (30 %)

【学生の意見等からの気づき】

より日記の内容が理解できるように、図版等も積極的に提示していきたい。

【担当教員の専門分野等】

https://www.tcue.ac.jp/professor/nishizawa_atsuo.html

【Outline (in English)】

(Course outline)

This class, you will read the diary of a local official of the Edo Shogunate.

(Learning Objectives)

The goals of this course are to understand the local life and culture of the Edo period.

(Learning activities outside of classroom)

Students will be expected to read and review the historical materials thoroughly. Your study time will be more than four hours for a class.

(Grading Criteria /Policies)

Your overall grade in the class will be decided based on the following.

Presentation and discussion participation : 70%, normal score:30%

HIS500B7

日本文化と西洋文化 I

森田 貴子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

明治期の日本について、法律・経済・社会・教育など、多角的な制度変革の観点から、近代社会の形成について、史料から論点を構成し、検討する。「法規分類大全」等を基本史料とする。

【到達目標】

近代日本の諸制度について、①関連する文献を読み、研究史を理解する能力、②史料を自力で収集し、史料批判を行う技術、を習得することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

テーマと史料は、第1回目に提示する。受講者は関心のあるテーマを選び、第3回目以降、各自、担当したテーマについて、研究課題を設定し、文献・史料を調査し、研究史上における意味、問題点を提示し、論点を発展させて報告する。

受講者の人数により、適宜、各自の研究テーマに関する研究発表を行う。

発表に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業について。報告担当者の決定など。
第2回	史料読解と研究発表	近代天皇制（1）
第3回	史料読解と研究発表	近代天皇制（2）
第4回	史料読解と研究発表	官僚制（1）
第5回	史料読解と研究発表	官僚制（2）
第6回	史料読解と研究発表	軍隊（1）
第7回	史料読解と研究発表	軍隊（2）
第8回	史料読解と研究発表	教育（1）
第9回	史料読解と研究発表	教育（2）
第10回	史料読解と研究発表	教育（3）
第11回	史料読解と研究発表	経済（1）
第12回	史料読解と研究発表	経済（2）
第13回	史料読解と研究発表	経済（3）
第14回	史料読解と研究発表	経済（4）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回の授業で取り上げる基本史料について、各自あらかじめ読み、論点を考えてくる。

本授業の準備・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

適宜プリントを配布する。

【参考書】

適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

報告内容（70 %）、コメント等の授業への参加度（30 %）。

【学生の意見等からの気づき】

2021年度とテーマを変更しています。

【学生が準備すべき機器他】

資料配布・Zoom 接続が可能なメールアドレス・パソコンを準備して下さい。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近現代史

＜研究テーマ＞土地制度、近現代経済史、近代都市史

＜主要研究業績＞

森田貴子『近代土地制度と不動産経営』（塙書房、2007 年）

森田貴子『三野村利左衛門と益田孝——三井財閥の礎を築いた人びと』（山川出版社、2011 年）

森田貴子「華族資本の形成と家政改革——岡山池田家の場合」（高村直助編『明治前期の日本経済——資本主義への道』日本経済評論社、2004 年）

森田貴子「不動産——岡山藩池田家大崎下屋敷の変容」（伊藤毅・吉田伸之編『伝統都市 3 インフラ』東京大学出版会、2010 年）

【Outline (in English)】

This course aims for students to study Japan of the Meiji era from diverse perspectives, including laws, economy, society, education, and to discuss various issues. The goals of this course are to acquire the ability to organize research history and the technique of criticizing historical materials. Students will be expected to have completed the required assignments before/after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class. Your overall grade in the class will be decided based on the following; Research presentation: 70%, in class contribution: 30%.

HIS500B7

日本文化と西洋文化Ⅱ

森田 貴子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

明治期の日本について、法律・経済・社会・教育など、多角的な制度変革の観点から、近代社会の形成について、史料から論点を構成し、検討する。「法規分類大全」等を基本史料とする。

【到達目標】

近代日本の諸制度について、①関連する文献を読み、研究史を理解する能力、②史料を自力で収集し、史料批判を行う技術、を習得することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

テーマと史料は、第 1 回目に提示する。受講者は関心のあるテーマを選び、第 2 回目以降、各自、担当したテーマについて、研究課題を設定し、文献・史料を調査し、研究史上における意味、問題点を提示し、論点を発展させて報告する。

受講者の人数により、適宜、各自の研究テーマに関する研究発表を行う。

発表に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業について。報告担当者の決定など。
第 2 回	史料読解と研究発表	近代天皇制（1）
第 3 回	史料読解と研究発表	近代天皇制（2）
第 4 回	史料読解と研究発表	官僚制（1）
第 5 回	史料読解と研究発表	官僚制（2）
第 6 回	史料読解と研究発表	軍隊（1）
第 7 回	史料読解と研究発表	軍隊（2）
第 8 回	史料読解と研究発表	教育（1）
第 9 回	史料読解と研究発表	教育（2）
第 10 回	史料読解と研究発表	教育（3）
第 11 回	史料読解と研究発表	経済（1）
第 12 回	史料読解と研究発表	経済（2）
第 13 回	史料読解と研究発表	経済（3）
第 14 回	史料読解と研究発表	経済（4）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回の授業で取り上げる基本史料について、各自あらかじめ読み、論点を考えてくる。

本授業の準備・復習時間は各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

適宜プリントを配布する。

【参考書】

適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

報告内容（70 %）、コメント等の授業への参加度（30 %）。

【学生の意見等からの気づき】

2021 年度とテーマを変更しています。

【学生が準備すべき機器他】

オンライン回のために、資料配布・Zoom 接続が可能なメールアドレス・パソコンを準備して下さい。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近現代史

＜研究テーマ＞土地制度、近現代経済史、近代都市史

＜主要研究業績＞

森田貴子『近代土地制度と不動産経営』（塙書房、2007 年）

森田貴子『三野村利左衛門と益田孝——三井財閥の礎を築いた人びと』（山川出版社、2011 年）

森田貴子「華族資本の形成と家政改革——岡山池田家の場合」（高村直助編『明治前期の日本経済——資本主義への道』日本経済評論社、2004 年）

森田貴子「不動産——岡山藩池田家大崎下屋敷の変容」（伊藤毅・吉田伸之編『伝統都市 3 インフラ』東京大学出版会、2010 年）

【Outline (in English)】

This course aims for students to study Japan of the Meiji era from diverse perspectives, including laws, economy, society, education, and to discuss various issues. The goals of this course are to acquire the ability to organize research history and the technique of criticizing historical materials. Students will be expected to have completed the required assignments before/after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class. Your overall grade in the class will be decided based on the following; Research presentation: 70%, in class contribution: 30%.

HIS500B7

日本の近代と国際社会 I

内藤 一成

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本近代史を、政治史を中心に天皇の観点から読み解く。その際、明治・大正・昭和、三代の天皇についての人間像や歴史的な役割を重視する。近年、天皇個人に関する歴史的解明が進んだことから、君主制の各国比較など議論が活発である。授業を通じて、実証研究の蓄積が学問領域に新たな地平を開くことを明らかにしていく。

【到達目標】

①日本近代史と立憲君主制について歴史的に理解する。②制度と人間、双方に注目しながら歴史を再考する。③歴史の連続性について考える手がかりを得る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義形式とし、板書とパワーポイントを併用させる。適宜史料のコピー等を配布し、史料を音読したり、内容を検討することもある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	講義に関する全体の説明、注意など
第 2 回	近世の朝廷と幕府	近世の天皇・朝廷と幕府について最新の研究動向をもとに論じる
第 3 回	明治天皇 1 明治維新と天皇	幕末維新の政治を孝明天皇・明治天皇の観点から再考する
第 4 回	明治天皇 2 天皇と日本の近代化	明治日本の近代化について天皇の観点から見直す
第 5 回	明治天皇 3 天皇と立憲政治	憲法制定と立憲政治の歩みを天皇の観点から見直す
第 6 回	明治天皇 4 天皇と戦争	西南戦争・日清戦争・日露戦争、明治国家が経験した大きな戦争を天皇との関わりから論じる
第 7 回	明治天皇 5 天皇のまなざしと支配	近代天皇の支配原理とは何か。「臨・覧・聴」という天皇の行為から読み解く
第 8 回	大正天皇 1 大帝の相続者	明治の終焉と大正新政、大日本帝国はいかに引き継がれたのかを大正天皇の観点から見直す
第 9 回	大正天皇 2 デモクラシーと天皇（1）	第一次大戦後の世界的なデモクラシーの潮流のなか、日本の政党政治はいかに成立したのか。天皇の観点から見直す
第 10 回	昭和天皇 1 デモクラシーと天皇（2）	昭和初期、政党政治と天皇はどう向き合ったのかをみていく
第 11 回	昭和天皇 2 デモクラシーと天皇（3）	政党政治の危機と終焉に、天皇はどう向き合ったのかをみていく
第 12 回	昭和天皇 3 天皇と軍事	昭和期の軍部の台頭に、天皇はどう向き合ったのかをみていく
第 13 回	昭和天皇 4 昭和の大戦と天皇	天皇は対米開戦をいかにして受け入れ、終戦を決断したのか、最新の研究動向をもとにみていく
第 14 回	まとめ	講義全体のまとめ、質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に配布する資料には必ず目を通しておく。授業後には内容をよく確認し、指示のあった文献や資料に目を通しておく。平素より参考文献を読んでおくことが望ましい。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

刊本のテキストは用いない。参照が必要な文献等がある場合には、講義の際、指示する。

【参考書】

『明治天皇紀』全13巻、『大正天皇実録 補訂版』第1～6巻、『昭和天皇実録』全19巻、伊藤之雄『明治天皇』（ミネルヴァ書房）、同『昭和天皇伝』（文芸春秋）、古川隆久『大正天皇』（吉川弘文館）、同『昭和天皇』（中公新書）、『天皇の歴史』全10巻（講談社学術文庫）、吉田孝『歴史のなかの天皇』（岩波新書）

【成績評価の方法と基準】

平常点（40％）、期末試験（60％）をもとに総合的に評価する。期末試験はノート持ち込み可。なお、特別の事情がなく、授業への参加度が不良と判断された場合、あるいは期末試験を受けない場合には不合格の評価とする。

【学生の意見等からの気づき】

現時点ではないが、クエスチョンタイムに相当する時間を適宜設けるなどして、授業理解が得られるよう努める。

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムが利用可能なIT機器

【その他の重要事項】

- ・「日本近代史科学」（秋学期・学部合同科目・大学院科目「日本近代史研究」Ⅱ）との継続履修を推奨する。
- ・学部合同科目（「日本近代史」）である。
- ・やむを得ない事情により授業を欠席する場合（介護体験実習、教育実習など）には、その事情を証明する文書を提出すること。新型コロナウイルス感染防止策として教室での対面授業を行わない場合には、授業内容を変更することがある。
- ・授業に関連する連絡は、学習支援システムの「お知らせ」サイトや、「授業内掲示板」サイトを利用して行うので、見落とさないようにすること。
- ・担当教員への直接連絡にはメールを利用すること。担当教員のメールアドレスは、学習支援システムに掲示する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本近現代史

<研究テーマ>

近現代の政治と文化

<主要研究業績>

『貴族院と立憲政治』（思文閣出版）、『貴族院』（同成社）、『華族令嬢たちの大正・昭和』（吉川弘文館）、『三条実美』（中公新書）、『新編旧話会速記』（芙蓉書房出版）、『四條男爵家関係文書』（同成社）、『田健治郎日記』第3・7巻（芙蓉書房出版）、『河井弥八日記〈戦後篇〉』全5巻（信山社出版）

【Outline (in English)】

(Course outline)

This course examines the modern era of Japan, focusing on political history. I will explain while paying attention to the personalities and historical roles of the three emperors, namely Emperor Meiji(1852-1912), Emperor Taisho(1879-1926), and Emperor Showa(1901-1989). A particular emphasis in this course is a correct and historical understanding of modern Japanese history and the constitutional monarchy.

(Learning Objectives)

By the end of the course, students should be able to do the followings:

- A. Historical understanding of modern Japan and constitutional monarchy.
- B. Rethinking history while paying attention to both institutions and humans.
- C. Get clues to think about the continuity of history.

(Learning activities outside of classroom)

Students should read the materials distributed in advance. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. (Grading Criteria /Policy)

Your overall grade in the class will be decided based on the following

Term-end examination: 60%, in class contribution: 40%

HIS500B7

日本の近代と国際社会Ⅱ

内藤 一成

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本近代史研究では、数多くの、かつさまざまな史（資）料を駆使して議論を組み立てることが珍しくない。本授業では各種の史（資）料を取り上げ、それぞれの特色や限界を明らかにしていく。さらに自ら史料発掘やオーラルヒストリーに取り組むときの手順についても学ぶことで、実践的なスキルを磨く。これらの内容を通じて、日本の歴史史（資）料の特色の一端を窺うことができるようになる。

【到達目標】

①一次・二次史料の違いとそれぞれの特色を理解する。②公文書・私文書の違いとそれぞれの特色を理解する。③文字・非文字資料の違いと、それぞれの特色を理解する。①～③を総合し、近代史（資）料について基礎的な理解をはかる。また独自に史（資）料調査を行う際に必要となる知識を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義形式をとる。板書とパワーポイントを併用する。授業で使用する史（資）料は、学習支援システムを利用して配布する。史（資）料は授業時に音読したり、内容の検証を行う。状況が許せば学外で行う講義もある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	講義に関する全体の説明、注意点など
第2回	書簡研究（1）	近代の書簡の形態・書式等について
第3回	書簡研究（2）	近代の書簡の内容について（政治家の書簡を読む）
第4回	書簡研究（3）	近代の書簡の内容について（文化人の書簡を読む）
第5回	日記研究（1）	近代の日記の形態・書式等について
第6回	日記研究（2）	近代の日記の内容について（政治家の日記を読む）
第7回	日記研究（3）	近代の日記の内容について（文化人の日記を読む）
第8回	公文書研究	さまざまな公文書の特色について
第9回	新聞、雑誌、書籍の世界	新聞、雑誌や各種書籍といった活字資料の特色と歴史研究での活用方法について学ぶ
第10回	史料調査の世界	史料調査の手順や注意点について学ぶ
第11回	オーラルヒストリーの世界	オーラルヒストリーとは何か、調査の手順、注意点について学ぶ
第12回	金石文の世界	金石文の特色について、フィールドワークとともに学ぶ
第13回	編纂史料の世界	翻刻された史料や伝記などの編纂物の特色について
第14回	まとめ 総括と質疑応答	講義全体のまとめ、質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に配布する史（資）料には必ず目を通しておく。その際、読みや意味のわからない文字を調べ、さらに記された内容や、作成した人物についても予習しておく。授業後には内容を再確認することで、知識の定着をはかる。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

テキストに使用する史（資）料は、学習支援システムにより事前に配布する。

【参考書】

五味文彦・杉森哲也編『日本史史料論』（放送大学教育振興会）、中村隆英・伊藤隆編『近代日本研究入門〔増補版〕』（東京大学出版会）、佐々木隆「近代文書と政治史研究」（『日本の時代史 30 歴史と素材』吉川弘文館）、御厨貴編著『近現代日本を史料で読む』（中公新書）、『日記に読む近代日本』全5巻（吉川弘文館）、御厨貴編『オーラル・ヒストリーに何がわかるか』（岩波書店）

【成績評価の方法と基準】

平常点（40 %）、期末試験（60 %）をもとに総合的に評価する。期末試験はノート持ち込み可。なお、特別の事情がなく、授業への参加度が不良と判断された場合、あるいは期末試験を受けない場合には不合格の評価とする。

【学生の意見等からの気づき】

現時点ではないが、クエスチョンタイムに相当する時間を適宜設けるなどして、授業理解が得られるよう努める。

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムが利用可能な IT 機器

【その他の重要事項】

・「日本近代史」（春学期・学部合同科目・大学院科目「日本近代史研究」Ⅰ）との継続履修を推奨する。
・学部合同科目（「日本近代史科学」）である。
・やむを得ない事情により授業を欠席する場合（介護体験実習、教育実習など）には、その事情を証明する文書を提出すること。新型コロナウイルス感染防止策として教室での対面授業を行わない場合には、授業内容を変更することがある。
・授業に関連する連絡は、学習支援システムの「お知らせ」サイトや、「授業内掲示板」サイトを利用して行うので、見落とさないようにすること。
・担当教員への直接連絡にはメールを利用すること。担当教員のメールアドレスは、学習支援システムに掲載する。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞
日本近現代史
＜研究テーマ＞
近現代の政治と文化
＜主要研究業績＞
『貴族院と立憲政治』（思文閣出版）、『貴族院』（同成社）、『華族令嬢たちの大正・昭和』（吉川弘文館）、『三条実美』（中公新書）、『新編旧話会速記』（芙蓉書房出版）、『四條男爵家関係文書』（同成社）、『田健治郎日記 第3・7巻』（芙蓉書房出版）、『河井弥八日記〈戦後篇〉』全5巻（信山社出版）

【Outline (in English)】

(Course outline)

In this course, I will explain the characteristics and limitations of each of the various modern Japanese historical materials while analyzing them in detail. I will also teach you the steps to discover historical sources and conduct oral history research yourself. Through the lessons, you will gain basic knowledge and understanding of historical materials.

(Learning Objectives)

The goal of this course is to recognize the characteristics of various historical materials and to acquire the professional abilities necessary for documentary research.

(Learning activities outside of classroom)

Students should read the materials distributed in advance. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. (Grading Criteria/Policy)

Your overall grade in the class will be decided based on the following

Term-end examination: 60%, in class contribution: 40%

CUA500B4

沖縄学入門 I

大里 知子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は「沖縄学」の入門として、主に沖縄の近現代史について学ぶことを目的としている。

「沖縄学」とは何か、という問いを立てることによって、近代から現代へかけて取り組まれてきた沖縄研究の成果が持つ意味とその時代背景について探っていく。

【到達目標】

琉球・沖縄の歴史と文化について基礎的な知識を身につけたうえで、沖縄の近現代史のなかで問われてきた諸事象を、東アジアにおける近代化や国際情勢という視点から考察し、そこで得られた問題意識を自己の研究に生かす。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

テキスト及び関連文献を読みながら講義と報告、議論を交えて進めていきたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業の概略、進め方についての説明
第 2 回	琉球・沖縄史概説	時代区分論、基礎資料・文献、研究動向など
第 3 回	欧米船の来航	19 世紀以降の欧米のアジア進出と琉球への欧米船来航
第 4 回	「琉球処分」琉球国併合	琉球藩設置以降の琉球国併合過程、「分島・改約」交渉
第 5 回	初期県政	沖縄県設置後の初期県政における「旧慣温存」政策と県内の状況
第 6 回	沖縄における民権運動	宮古島における人頭税廃止運動、謝花昇と沖縄倶楽部
第 7 回	「旧慣」の改革	土地整理事業、沖縄県及島嶼町村制、徴兵制の実施
第 8 回	日清戦争後の文化、教育	沖縄学と日琉同祖論、尋常中学校ストライキ事件、河上肇舌禍事件
第 9 回	「ソテツ地獄」と沖縄振興計画	沖縄における恐慌、救済論と振興計画
第 10 回	海外移民と出稼ぎ	海外への移民、本土への出稼ぎ、大東島の開拓
第 11 回	沖縄における労働問題	西表炭鉱、沖縄青年同盟と労働運動
第 12 回	近代沖縄の文化	新聞の発刊、文学、美術、音楽、近代演劇
第 13 回	第 1 次世界大戦前後の沖縄	台湾における霧社事件と沖縄出身者、満州開拓移民
第 14 回	戦時下の沖縄	標準語の励行、改姓改名運動と日本民芸協会・柳宗悦らとの「方言論争」

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。事前に指示したテキストの該当箇所や関連文献を読み、自分なりの問題意識を持って授業に臨む。

【テキスト（教科書）】

前田勇樹・古波蔵契・秋山道宏編『つながる沖縄近現代史』（2021）
ボーダーインク

【参考書】

・新城俊昭『教養講座 琉球・沖縄史』（2014）東洋企画
・沖縄県教育委員会編『沖縄県史 各論編第5巻 近代』（2011）東洋企画
・金城正篤・高良倉吉『「沖縄学」の父 伊波普猷〔新訂版〕』（2017）清水書院

【成績評価の方法と基準】

平常点 80 %、レポート 20 % 毎回の授業への参加態度に、授業に取り組む姿勢や意欲が顕れるものと考えている。

【学生の意見等からの気づき】

「入門」という科目のため、基本的な内容をベースにしているが、より専門的なディスカッションを求める学生に対して個別に対応する工夫が必要となる。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

<研究テーマ>

<主要研究業績>

<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/105/0010447/profile.html>

【Outline (in English)】

In this class, you will learn about modern history of Okinawa as an introduction to “Okinawan studies”.

It also the purpose of this course is to study “Okinawan studies” from the perspective of modernization and international affairs in East Asia.

CUA500B4

沖縄学入門Ⅱ

大里 知子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は「沖縄学」の入門として、主に沖縄の近現代史について学ぶことを目的としている。
「沖縄学」とは何か、という問いを立てることによって、近代から現代へかけて取り組まれてきた沖縄研究の成果が持つ意味とその時代背景について探っていく。

【到達目標】

琉球・沖縄の歴史と文化について基礎的な知識を身につけたうえで、沖縄の近現代史のなかで問われてきた諸事象を、東アジアにおける近代化や国際情勢という視点から考察し、そこで得られた問題意識を自己の研究に生かす。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

テキスト及び関連文献を読みながら講義と報告、議論を交えて進めていきたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の概略、進め方についての説明
第2回	伊波普猷と「沖縄学」	伊波普猷と沖縄学
第3回	伊波普猷と「日琉同祖論」	伊波普猷の歴史思想
第4回	沖縄戦の実相	学童疎開と空襲、地上戦「鉄の暴風」、集団死、宮古・八重山での戦争マラリア
第5回	収容所からはじまった戦後	米軍支配の始まりと住民の暮らし
第6回	土地の強制収用と基地の成り立ち	米軍による接収だけではない基地の成り立ち
第7回	沖縄戦体験の語りと記録	語りなおされる沖縄戦、沖縄戦像と記憶、記述
第8回	アメリカ世の沖縄	アメリカのアジア戦略と核兵器配備
第9回	島ぐるみ闘争	基地の拡大と「島ぐるみ闘争」、「命どう宝」の訴え
第10回	日本への「復帰運動」	「復帰運動」が生んだ亀裂
第11回	戦後移民	移民政策と沖縄経済、「世界のウチナーンチュ」
第12回	「復帰」後の沖縄	「日本復帰」と「沖縄イメージ」
第13回	沖縄ブームと基地問題	終わらない基地問題、共同体の解体
第14回	近現代沖縄の歴史	これまでのまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。事前に指示したテキストの該当箇所や関連文献を読み、自分なりの問題意識を持って授業に臨む。

【テキスト（教科書）】

前田勇樹・古波蔵契・秋山道宏編『つながる沖縄近現代史』（2021）
ボーダーインク

【参考書】

・新城俊昭『教養講座 琉球・沖縄史』（2014）東洋企画

・沖縄県教育委員会編『沖縄県史 各論編第5巻 近代』（2011）東洋企画
・金城正篤・高良倉吉『「沖縄学」の父 伊波普猷 [新訂版]』（2017）清水書院

【成績評価の方法と基準】

平常点 80 %、レポート 20 % 毎回の授業への参加態度に、授業に取り組む姿勢や意欲が顕れるものと考えている。

【学生の意見等からの気づき】

「入門」という科目のため、基本的な内容をベースにしているが、より専門的なディスカッションを求める学生に対して個別に対応する工夫が必要となる。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

＜研究テーマ＞

＜主要研究業績＞

<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/105/0010447/profile.html>

【Outline (in English)】

In this class, you will learn about modern history of Okinawa as an introduction to “Okinawan studies”.

It also the purpose of this course is to study “Okinawan studies” from the perspective of modernization and international affairs in East Asia.

CUM500B4

アーカイブズ学Ⅰ

宮間 純一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

アーカイブズ学の概要と基本理念を理解する。また、記録管理のあり方をその背景にある人間社会の営みと関連付けて考える思考力を身につける。

アーカイブズとは、①組織や個人の活動のなかで蓄積された記録（とくに、永久保存される文書）、②記録を管理・公開する組織や施設のことを意味する用語であり、アーカイブズ学とはアーカイブズを支える学問分野である。

【到達目標】

アーカイブズ学の諸分野について具体的に探求するとともに、自己の研究領域とアーカイブズとの関係を認識し、具体的な研究課題を発見・設定することができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義を中心とするが一部演習形式で実施する。第1回から10回は講義とし、第11回から13回は演習形式で論文講読を行う。論文講読は、受講生が分担して担当・発表したのち、教員が解説を加え、ディベートを実施する。第14回は、総括討論を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	アーカイブズ学の概要と学ぶ意義に関する講義
第2回	アーカイブズ学総論	アーカイブズの歴史と基本理念に関する講義
第3回	アーカイブズと周縁の学問領域	アーカイブズと歴史学・博物館学・図書館学などに関する講義
第4回	前近代のアーカイブズ	前近代のアーカイブズに関する講義
第5回	近代日本の官僚組織と記録管理	近代日本の官僚組織と記録管理に関する講義
第6回	戦争と記録	戦争と記録に関する講義
第7回	アーカイブズと現代社会	アーカイブズと現代社会に関する講義
第8回	オーラル・ヒストリー	オーラル・ヒストリーに関する講義
第9回	近世「家」文書の構造	近世日本の文書群の構造分析に関する講義
第10回	近現代行政文書の構造	近現代の行政組織と公文書の構造に関する講義
第11回	近現代の企業記録	近代の企業記録に関する文献を講読する
第12回	評価選別論	アーカイブズの評価選別論に関する文献を講読する
第13回	アーカイブズの編成と記述	アーカイブズの編成と記述に関する論文を講読する
第14回	まとめ	ふり返りと総括討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回に指示する論文および関連する文献を各自が事前に目を通してくる。

本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

国文学研究資料館史料館編『アーカイブズの科学』上・下（柏書房、2003 年）

【参考書】

安澤秀一『史料館・文書館学への道-記録・文書をどう残すか-』（吉川弘文館、1985 年）

大藤修・安藤正人『史料保存と文書館学』（吉川弘文館、1986 年）

鈴江英一『近現代史料の管理と史料認識』（北海道大学図書刊行会、2002 年）

他は授業中に適宜紹介する

【成績評価の方法と基準】

平常点（100%）。特に発表と討論での発言を重視する。

【学生の意見等からの気づき】

ディベートをより有意義にするために、関連する論考を事前に配布するようにした。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

以下のアーカイブズ機関での実践・研究をふまえた授業を行う

2016 年 4 月 - 2018 年 3 月国文学研究資料館研究部 准教授

2011 年 4 月 - 2016 年 3 月宮内庁書陵部宮内公文書館 内閣府事務官

2007 年 4 月 - 2011 年 3 月千葉県文書館県史・古文書課 嘱託職員

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近世史・近代史およびアーカイブズ学

<研究テーマ>政治史、地域史、記録管理

<主要研究業績>

「公文書管理法前後の自治体アーカイブズアンケート調査の結果から」（『日本歴史学協会年報』（34）、2019 年）／『天皇陵と近代－地域の中の大友皇子伝説－』（平凡社、2018 年）／『国葬の成立－明治国家と「功臣」の死－』（勉誠出版、2015 年）／『戊辰内乱期の社会－佐幕と勤王のあいだ－』（思文閣出版、2015 年）

【Outline (in English)】

(Course outline) This course introduces overview and philosophy of archival science to students taking this course.

(Learning Objectives) The goals of this course are to master the basics of archival science.

(Learning activities outside of classroom) Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.

(Grading Criteria /Policy) Your overall grade in the class will be decided based on the following in class contribution: 100%

CUM500B4

アーカイブズ学Ⅱ

宮間 純一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

アーカイブズ学におけるアーカイブズ資源研究の基本的な理念・手法を理解し、具体的な文書群の構造分析を行うことができるようになる。

アーカイブズ資源研究とは、記録管理に関わる研究、記録の伝来をめぐる研究、アーカイブズの構造分析などからなる分野である。

【到達目標】

アーカイブズ学資源研究の理念・手法を踏まえて、自己の研究において利活用している（あるいはこれから利活用することが予定されている）文書群を対象としたアーカイブズ学的分析を具体的にを行い、その成果・課題を適切に示すことができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義および演習。第1回から10回は講義とし、第11回から13回は演習形式で、受講生が具体的な文書群に関わる研究発表を行う（文書群や研究テーマは各自が設定する、授業計画に示したのは例）。発表ののちディベートを実施する。第14回は、総括討論を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	アーカイブズ学の理念・概要に関する講義
第2回	アーカイブズ資源研究の方法論	アーカイブズ資源研究の研究史・方法論に関する講義
第3回	古代朝廷の文書管理	古代朝廷の文書管理に関する講義
第4回	戦国大名の文書管理	戦国大名の文書管理に関する講義
第5回	徳川幕府の文書管理	徳川幕府の官僚組織と文書管理に関する講義
第6回	前近代の「家」と文書管理	前近代の「家」における文書管理に関する講義
第7回	近代官僚組織と文書管理	近代官僚組織の成立・展開と文書管理に関する講義
第8回	軍隊と文書管理	軍隊と文書管理に関する講義
第9回	政治家と文書管理	政治家と文書管理に関する講義
第10回	企業と文書管理	企業と文書管理に関する講義
第11回	寺院と文書管理	寺院と文書管理に関する研究報告
第12回	神社と文書管理	神社と文書管理に関する研究報告
第13回	天皇と文書管理	天皇と文書管理に関する研究報告
第14回	まとめ	ふり返りと総括討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回の発表担当者は関連する史料・文献を熟読し、報告の準備をする。それ以外の受講生は、発表担当者から事前に紹介された参考文献に目を通してくる。

本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

国文学研究資料館史料館編『アーカイブズの科学』上・下（柏書房、2003 年）

【参考書】

安澤秀一『史料館・文書館学への道-記録・文書をどう残すか-』（吉川弘文館、1985 年）

大藤修・安藤正人『史料保存と文書館学』（吉川弘文館、1986 年）

鈴江英一『近現代史料の管理と史料認識』（北海道大学図書刊行会、2002 年）

国文学研究資料館編『近世大名のアーカイブズ資源研究』（思文閣出版、2016 年）

他は授業中に適宜紹介する

【成績評価の方法と基準】

平常点（100%）。特に発表と討論での発言を重視する。

【学生の意見等からの気づき】

ディベートをより有意義にするために、関連する論考を事前に配布するようにした。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

以下のアーカイブズ機関での実践・研究をふまえた授業を行う

2016 年 4 月-2018 年 3 月国文学研究資料館 研究部准教授

2011 年 4 月-2016 年 3 月宮内庁書陵部宮内公文書館 内閣府事務官

2007 年 4 月-2011 年 3 月千葉県文書館県史・古文書課 嘱託職員

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近代史およびアーカイブズ学

<研究テーマ>政治史、地域史、記録管理

<主要研究業績>「公文書管理法前後の自治体アーカイブズアンケート調査の結果から」（『日本歴史学協会年報』（34）、2019 年）／『天皇陵と近代－地域の中の天友皇子伝説－』（平凡社、2018 年）／『国葬の成立－明治国家と「功臣」の死－』（勉誠出版、2015 年）／『戊辰内乱期の社会－佐幕と勤王のあいだ－』（思文閣出版、2015 年）

【Outline (in English)】

(Course outline) This course introduces the archival study of resources to students taking this course.

(Learning Objectives) The goals of this course are to master the basics of archival study of resources.

(Learning activities outside of classroom) Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.

(Grading Criteria /Policy) Your overall grade in the class will be decided based on the following in class contribution: 100%

CUM500B4

文書館管理研究Ⅰ

宇都宮美生・青木直己・葦名ふみ・新井浩文・富塚一彦・白石烈

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

授業の概要：日本および各国のアーカイブズ（記録と文書館）とアーキビストの歴史と現在について、また、その実務について学ぶ。

目的：アーキビストとしての識見・能力を高め、その基本技能を身につける。

なお、この授業は、文書館管理研究Ⅱ（秋学期）と連続して受講することを必須とする。

【到達目標】

到達目標：１）アーカイブズ（記録と文書館）について深く理解し、その意義を自覚すると共に説明することができる。２）アーキビストとしての技能を身に着け、実践することができる。３）アーカイブズ及びアーキビストについてグローバルな視点から考え、論じることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業の進め方：オムニバス形式で教員が講義する。

方法：初回のみオンライン授業とする。２回目より対面授業とする。その具体的方法については、学習支援システムで通知する。教員が講義を行い、その中で受講生との質疑応答およびフィードバックを行う。それによって、受講生の理解度及び理解の定着度を確認しつつ、自主的・発展的学習への動機付けを図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション (04/13 宇都宮美生)	授業の計画と心構え
第 2 回	とらや文庫 1 (04/20 青木直己)	企業アーカイブズの歴史
第 3 回	とらや文庫 2 (04/27 青木直己)	企業における記録史料の収集と管理
第 4 回	とらや文庫 3 (05/11 青木直己)	企業アーカイブズの利用
第 5 回	外務省外交史料館 1 (05/18 富塚一彦)	外交史料館所蔵記録の概要と記録公開の現状
第 6 回	外務省外交史料館 2 (05/25 富塚一彦)	外務省記録および日本外交文書の歴史学的利用
第 7 回	国立国会図書館憲政資料室 1 (06/1 葦名ふみ)	憲政資料室の収集活動（歴史と現状）
第 8 回	国立国会図書館憲政資料室 2 (06/08 葦名ふみ)	憲政資料室における利用提供と実務
第 9 回	宮内庁書陵部 1 (06/15 白石烈)	「皇室アーカイブズ」の概要
第 10 回	宮内庁書陵部 2 (06/22 白石烈)	宮内公文書館所蔵資料の構造
第 11 回	宮内庁書陵部 3 (06/29 白石烈)	図書寮文庫の資料保存
第 12 回	埼玉県立文書館 1 (07/06 新井浩文)	概論：公立文書館の歴史と運営
第 13 回	埼玉県立文書館 2 (07/13 新井浩文)	公文書等の保存と運営
第 14 回	埼玉県立文書館 3 (07/20 新井浩文)	公文書等の公開と活用

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

準備学習：参考書を読むこと。各回のテーマに関わるウェブサイトの公開情報を読んでおくこと。

復習：参考書や関連文献を読み、理解を深めること。各国アーカイブズのウェブサイトを利用して識見を広げること。

本授業の準備・復習時間は、各2時間以上を標準とする。

【テキスト（教科書）】

刊本としてのテキストは使用しない。授業内容をまとめたプリントを配布する。

【参考書】

安澤秀一『史料館・文書館学への道』（吉川弘文館、1985年）

高野修『日本の文書館』（岩田書院、1997年）

安藤正人『記録史料学と現代』（吉川弘文館、1998年）

青山英幸『アーカイブズとアーカイバル・サイエンス』（岩田書院、2004年）

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 %、期末試験（レポート形式） 50 %。なお、特別の事情がなく、授業への参加度が不良と判断された場合には、不合格の評価とする。

【学生の意見等からの気づき】

担当教員間の内容重複、関連する他の授業との内容重複に留意し、受講生との授業内コミュニケーションを密にする。

【担当教員の専門分野等】

〈現職〉

青木直己・元とらや文庫研究主幹

葦名ふみ・国立国会図書館利用者サービス部政治史料課主査

新井浩文・埼玉県立文書館首席学芸主幹

白石烈・宮内庁書陵部編修課主任研究官

富塚一彦・外務省外交史料館外交公文書編纂官

【Outline (in English)】

Course outline: Students of this class can get practical and basic knowledge and skills as to four points below.(1)What's an archives? (2)What's an archivist? (3) What's the mission of an archives and an archivist? (4)What's the skills of an archivist working for an archives? Student's questions, comments and discussion on the contents of this class are welcomed by professors.

Learning Objectives: The goal of this course is to understand practical and basic knowledge and skills as an archivist.

Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

Grading Criteria/Policies: Your overall grade in the class will be decided based on assignments at each class meeting (50%) and term-end Examination (50%)

CUM500B4

文書館管理研究Ⅱ

宇都宮美生・青木睦・赤松道子・長谷部圭彦・山田太造・渡辺浩一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

授業の概要：日本および各国のアーカイブズ（記録と文書館）とアーキビストの歴史と現在について、また、その実務について学ぶ。

目的：アーキビストとしての識見・能力を高め、その基本技能を身につける。

【到達目標】

到達目標：1) アーカイブズ（記録と文書館）について深く理解し、その意義を自覚すると共に説明することができる。2) アーキビストとしての技能を身につけ、実践することが出来る。3) アーカイブズ及びアーキビストについてグローバルな視点から考え、論じることが出来る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業の進め方：オムニバス形式で教員が講義する。

方法：対面授業とする。その具体的方法については、学習支援システムで通知する。教員が講義を行い、その中で受講生との質疑応答およびフィードバックを行う。それによって、受講生の理解度及び理解の定着度を確認しつつ、自主的・発展的学習への動機付けを図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション (09/21 宇都宮美生)	授業全体の概要説明と受講上の注意。
第2回	東京大学史料編纂所1 (09/28 山田太造)	史料編纂所とコンピューターシステム～総論～
第3回	東京大学史料編纂所2 (10/05 山田太造)	史料編纂所のDB～テキスト系DBとメタデータ～
第4回	東京大学史料編纂所3 (10/12 山田太造)	史料編纂所のDB～複製史料の画像系DB～
第5回	アーカイブズ記述編成の方法 (10/19 渡辺浩一)	ISAD (G)「記録史料記述の国際標準」を学ぶ
第6回	アーカイブズ記述編成の実際 (10/26 渡辺浩一)	日本近世の文書を対象にISAD (G)を実際に試してみる
第7回	ロシアの文書館1 (11/09 赤松道子)	ロシアの文書と文書管理システムの歴史
第8回	ロシアの文書館2 (11/16 赤松道子)	ロシアの文書と亡命
第9回	ロシアの文書館3 (11/23 赤松道子)	ロシアの文書館の特徴：ロシア国立文書館など
第10回	トルコの文書館1 (11/30 長谷部圭彦)	大統領府オスマン文書館の沿革と所蔵史料
第11回	トルコの文書館2 (12/07 長谷部圭彦)	オスマン語文書史料を用いた研究の実例
第12回	国文学研究資料館1 (12/14 青木睦)	戦後の史料保存運動と史料保存の原則
第13回	国文学研究資料館2 (12/21 青木睦)	史料のための保存環境と劣化の予防
第14回	国文学研究資料館3 (01/11 青木睦)	アーカイブズ建築・設備と災害対策

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

準備学習：参考書を読むこと。各回のテーマに関わるウェブサイトの公開情報を読んでおくこと。

復習：参考書や関連文献を読み、理解を深めること。各国アーカイブズのウェブサイトを利用して識見を広げること。
本授業の準備・復習時間は、各2時間以上を標準とする。

【テキスト（教科書）】

刊本としてのテキストは使用しない。授業内容をまとめたプリントを配布する。

【参考書】

青山英幸『アーカイブズとアーカイバル・サイエンス』岩田書院、2004 年
安藤正人『記録史料学と現代』吉川弘文館、1998 年
今村文彦『災害記録を未来に活かす』勉誠出版、2019 年
加藤諭『大学アーカイブズの成立と展開』吉川弘文館、2019 年
国文学研究資料館編『アーカイブズの構造認識と編成記述』思文閣出版、2014 年
高埜利彦『近世史研究とアーカイブズ学』青史出版、2018 年
壺阪龍哉『文書と記録』樹村房、2018 年

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 %、期末試験（レポート形式）50 %。なお、特別の事情がなく、授業への参加度が不良と判断された場合には、不合格の評価とする。

【学生の意見等からの気づき】

担当教員間の内容重複、関連する他の授業との内容重複に留意し、受講生との授業内コミュニケーションを密にする。

【その他の重要事項】

「文書館管理研究Ⅰ」（春学期）との継続履修を強く推奨する。

【担当教員の専門分野等】

<現職>

青木 陸・国文学研究資料館准教授
赤松（梶）道子・法政大学大学院兼任講師
長谷部圭彦・東京大学東洋文化研究所特任研究員
山田太造・東京大学史料編纂所准教授
渡辺浩一・国文学研究資料館教授

【Outline (in English)】

Course outline: Students of this class can get practical and basic knowledge and skills as to four points below.(1)What's an archives? (2)What's an archivist? (3) What's the mission of an archives and an archivist? (4)What's the skills of an archivist working for an archives? Student's questions, comments and discussion on the contents of this class are welcomed by professors.

Learning Objectives: The goal of this course is to understand practical and basic knowledge and skills as an archivist.

Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

Grading Criteria/Policies: Your overall grade in the class will be decided based on assignments at each class meeting (50%) and term-end Examination (50%)

CUM500B4

記録史料学研究Ⅰ

小宮山 敏和

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

前近代の記録史料（古文書・古記録）についての理解を深めるため、アーカイブズ学等の理論と方法について学ぶ。

【到達目標】

前近代の幕府や朝廷等の政治組織、村・町・寺社等の組織構造をまず理解することが求められる。その上で、前近代の組織にとって、記録を作成し残すことの意味や記録管理システム等の特質を探究するとともに、アーカイブズ学と前近代の記録史料の関係等について理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義と演習形式で授業を進める。各テーマに沿って講義を行うが、参加者が順番に関連論文について報告し討論を行うことも重視する。よって、参加人数等によっては講義内容の組み替え等を行う場合がある。担当論文、順番等については参加者の人数や属性を考慮しガイダンスの際に決定するが、その後も調整等行う。課題や発表に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。**Zoom**を用いたオンライン授業を想定しているが、状況により対面授業等に変更する可能性もある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	目的 計画 報告者の調整 etc
第2回	記録史料とアーカイブズ学	古文書学、記録史料学、アーカイブズ学などの整理、日本の前近代文書の特徴等
第3回	前近代の組織とアーカイブズ	前近代の組織の構造や特質等
第4回	記録史料の特性 (1)	中世の武家における記録・文書の管理
第5回	記録史料の特性 (2)	江戸幕府における記録・文書の管理Ⅰ
第6回	記録史料の特性 (3)	江戸幕府における記録・文書の管理Ⅱ
第7回	記録史料の特性 (4)	藩における記録・文書の管理
第8回	記録史料の特性 (5)	中世の朝廷・公家における記録・文書の管理
第9回	記録史料の特性 (6)	朝廷における記録・文書の管理
第10回	記録史料の特性 (7)	公家における記録・文書の管理
第11回	記録史料の特性 (8)	村方における記録・文書の管理
第12回	記録史料の特性 (9)	町方における記録・文書の管理
第13回	記録史料の特性 (10)	寺社その他における記録・文書の管理
第14回	まとめ	ふり返りと総括討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。報告担当者は報告準備を行う。報告担当者以外も報告対象となる論文を精読して不明な点などをまとめておく。

安藤正人『記録史料学と現代——アーカイブズの科学をめざして——』（吉川弘文館、1998 年）は共通の認識を得るための貴重な成果であるので、これをあらかじめ読んでおくこと。

【テキスト（教科書）】

特定のテキストは使用しない。

【参考書】

安藤正人『記録史料学と現代』（吉川弘文館）
 日本歴史学会編『概説古文書学』近世編（吉川弘文館）
 国文学研究資料館編『アーカイブズの科学』（柏書房）。

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 %／研究発表 50 %

【学生の意見等からの気づき】

特になし（本年度授業担当者変更のため）

【その他の重要事項】

本授業担当者は認証アーキビストとしてアーカイブズ機関での実務経験を有しており、アーカイブズ機関における資料の整理や活用に関する実践経験をもつ。このことを活かして、アーカイブズ機関の観点からの情報も織り交ぜながら授業を展開する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本近世史、アーカイブズ学
 〈研究テーマ〉幕藩関係論、幕府制度論等
 〈研究業績〉『譜代大名の創出と幕藩体制』（吉川弘文館、2015 年）、
 「江戸幕府の行政運用における申合の機能」（幕藩研究会編『論集 近世国家と幕府・藩』、岩田書院、2019 年）「農林水産省の文書管理と移管文書の特徴」（『北の丸』44 号、2012 年）等

【Outline (in English)】

This course deals with the basic concepts and principles of premodern Japanese archives. It also enhances the development of student's skill in decipherment of cursive-style writing.

The goals of this course are to understand the premodern organizational structure of shogunate and the imperial court, villages and towns. In addition, we will explore the characteristics of record management systems for pre-modern organizations.

Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

Final grade will be calculated according to the following process report (50%) and in-class contribution(50%).

CUM500B4

記録史料学演習Ⅰ

小宮山 敏和

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

江戸時代の記録史料（古文書・古記録）調査の理論と方法について学ぶ。

【到達目標】

記録史料学研究Ⅰの内容を踏まえ、より深く江戸時代の文書の保存・調査（整理）・管理について実践的に習得することを到達目標とする。実際の記録史料群をいかに構造的に理解し、有効な検索システムを構築するか。そのためには個々の史料を理解し、それを史料群全体に位置づけるという作業が必要となる。このとき史料群を生み出した人ないし組織への理解が必要不可欠となる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

実際の史料群の整理作業を行う実習を基本としつつ、基礎的な知識に関する講義、また参加者による関係論文の報告及び報告をもとにしたディスカッションも平行して行う。参加者の人数や属性を考慮し、授業内容は調整等することがある。課題等に対するフィードバックは授業の中でおこなう。対面授業である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	目的 計画 報告者の調整 etc
第 2 回	記録史料の調査（1）	史料調査論 史料 1
第 3 回	記録史料の調査（2）	史料 2
第 4 回	記録史料の調査（3）	史料 3
第 5 回	記録史料の調査（4）	史料 4
第 6 回	史料群構造の理解（1）	目録論等 史料群 1
第 7 回	史料群構造の理解（2）	史料群 2
第 8 回	史料群構造の理解（3）	史料群 3
第 9 回	記録史料の取扱い（1）	様式論、料紙その他 古文書 1
第 10 回	記録史料の取扱い（2）	古文書 2
第 11 回	記録史料の取扱い（3）	古文書 3
第 12 回	記録史料の取扱い（4）	古文書 4
第 13 回	利用提供	利用閲覧、展示論
第 14 回	まとめ	ふり返りと総括討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。報告担当者は報告準備を行う。報告担当者以外も報告対象となる論文を精読して不明な点などをまとめておく。

安藤正人『記録史料学と現代——アーカイブズの科学をめざして——』（吉川弘文館、1998 年）は共通の認識を得るための貴重な成果であるので、これをあらかじめ読んでおくこと。

【テキスト（教科書）】

文学部史学科所蔵の古文書。

【参考書】

安藤正人『記録史料学と現代』（吉川弘文館）

日本歴史学会編『概説古文書学』近世編(吉川弘文館)
国文学研究資料館編『アーカイブズの科学』(柏書房)
児玉幸多編『くずし字解読辞典』(東京堂出版)
児玉幸多編『くずし字用例辞典』(東京堂出版)

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 %／発表 50 %

【学生の意見等からの気づき】

特になし(本年度授業担当者変更のため)

【その他の重要事項】

本授業担当者は認証アーキビストとしてアーカイブズ機関での実務経験を有しており、アーカイブズ機関における資料の整理や活用に一定の実践経験をもつ。このことを活かして、アーカイブズ機関の観点からの情報も織り交ぜながら授業を展開する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本近世史、アーカイブズ学

〈研究テーマ〉幕藩関係論、幕府制度論等

〈研究業績〉『譜代大名の創出と幕藩体制』(吉川弘文館、2015 年)、『江戸幕府の行政運用における申合の機能』(幕藩研究会編『論集 近世国家と幕府・藩』、岩田書院、2019 年)『農林水産省の文書管理と移管文書の特徴』(『北の丸』44 号、2012 年)等

【Outline (in English)】

This course deals with the basic concepts and principles of investigation such as early modern Japanese archives. It also enhances the development of student's skill in decipherment of cursive-style writing.

The goals of this course are to understand more deeply about the preservation, investigation, and management of documents from the Edo period.

Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

Final grade will be calculated according to the following process report (50%) and in-class contribution(50%).

CUM500B4

記録史料学研究Ⅱ

浅井 良亮

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

近代の記録史料について理解を深めるため、記録管理と史料編纂の歴史を学ぶ。

【到達目標】

記録史料について、その内容情報だけでなく、史料そのものをメタ的に捉えるための知識と技能の習得を目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

オンライン方式による講義を予定している。ただし、受講生からの希望があれば、ハイフレックス方式への切替を検討する。

授業は講義形式で行う。ただし、まとめの回には、質疑応答・ディスカッションを取り交えて授業を進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	本授業の概要
第 2 回	太政官期の記録管理と史料編纂 (1)	太政官の記録管理制度
第 3 回	太政官期の記録管理と史料編纂 (2)	内務省の記録管理制度
第 4 回	太政官期の記録管理と史料編纂 (3)	太政官による史料編纂
第 5 回	太政官期の記録管理と史料編纂 (4)	外務省による史料編纂
第 6 回	太政官期の記録管理と史料編纂 (5)	災害と太政官記録
第 7 回	太政官期の記録管理と史料編纂 (6)	太政官期の記録・史料のあり方
第 8 回	内閣期の記録管理と史料編纂 (1)	内閣の記録管理制度
第 9 回	内閣期の記録管理と史料編纂 (2)	地方行政の記録管理制度
第 10 回	内閣期の記録管理と史料編纂 (3)	帝国大学による史料編纂
第 11 回	内閣期の記録管理と史料編纂 (4)	文部省による史料編纂
第 12 回	内閣期の記録管理と史料編纂 (5)	災害と内閣記録
第 13 回	内閣期の記録管理と史料編纂 (6)	内閣期の記録・史料のあり方
第 14 回	まとめ	質疑応答・ディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

準備（2 時間を標準）：各講義に関連する文献を随時紹介するので、事前にそれらを読んで授業に臨むこと。

復習（2 時間を標準）：授業を通じて得た知見が自身の研究にどのように活かすことができるのか、について整理・確認しておくこと。

【テキスト（教科書）】

特定のテキストは使用しない。

【参考書】

・佐藤雄基編『明治が歴史になったとき』勉誠出版、2020 年
・松沢裕作編『近代日本のヒストリオグラフィー』山川出版社、2015 年

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 % ・ レポート 50 %

【学生の意見等からの気づき】

アナウンスやディスカッション・事後質問などを行うにあたって、学習支援システムの活用を進めることとしたい。

【学生が準備すべき機器他】

オンライン授業に対応できる情報機器を各自準備すること。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

- ・ 日本近世近代史
- ・ 史料学

＜研究テーマ＞

- ・ 近世近代移行期の政治と社会
- ・ 歴史の編纂と叙述

＜関連業績＞

- ・ 「関東大震災と維新史料編纂事務局」（『法政史学』97号、2022年）
- ・ 「金原明善伝記編纂における史料と叙述」（『静岡県地域史研究』10号、2020年）
- ・ 「明治を編む」（『北の丸』50号、2018年）

【Outline (in English)】

Learn the history of record management and historical compilation in Modern Japan through lectures. The goal is to acquire knowledge and skills related to the Archive Materials. Read the references introduced before class. Grades are evaluated by 50% of participation in class and 50% of reports.

CUM500B4

記録史料学演習Ⅱ

浅井 良亮

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

近代の記録史料について理解を深めるため、アーカイブズ学や史料学・書誌学の方法論を学ぶ。

【到達目標】

記録史料学研究Ⅱで学んだ知識を、近代史料の調査研究やアーカイブ実務（史料整理・保存管理等）に応用することのできる実践的能力の習得を目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

オンライン方式による演習を予定している。ただし、受講生からの希望があれば、ハイフレックス方式への切替を検討する。授業は演習形式で行う。発表・質疑応答・ディスカッションを取り交えて授業を進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	本授業の概要
第2回	発表（1）	担当受講生による発表・質疑応答
第3回	講評（1）	教員による講評およびディスカッション
第4回	発表（2）	担当受講生による発表・質疑応答
第5回	講評（2）	教員による講評およびディスカッション
第6回	発表（3）	担当受講生による発表・質疑応答
第7回	講評（3）	教員による講評およびディスカッション
第8回	発表（4）	担当受講生による発表・質疑応答
第9回	講評（4）	教員による講評およびディスカッション
第10回	発表（5）	担当受講生による発表・質疑応答
第11回	講評（5）	教員による講評およびディスカッション
第12回	発表（6）	担当受講生による発表・質疑応答
第13回	講評（6）	教員による講評およびディスカッション
第14回	まとめ	授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

準備（2時間を標準）：各発表に関連する文献を随時紹介するので、事前にそれらを読解・理解して授業に臨むこと。
復習（2時間を標準）：授業を通じて得た知見が自身の研究にどのように活かすことができるのか、について整理・確認しておくこと。

【テキスト（教科書）】

特定のテキストは使用しない。

【参考書】

- ・ 佐藤雄基編『明治が歴史になったとき』 勉誠出版、2020年
- ・ 松沢裕作編『近代日本のヒストリオグラフィ』 山川出版社、2015年

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 % ・ 発表 50 %

【学生の意見等からの気づき】

アナウンスやディスカッション・事後質問などを行うにあたって、学習支援システムの活用を進めることとしたい。

【学生が準備すべき機器他】

オンライン授業に対応できる情報機器を各自準備すること。

【その他の重要事項】

記録史料学研究Ⅱで学んだ知識を基礎として授業を進めるため、同科目と合わせて受講することを推奨する。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

- ・日本近世近代史
- ・史料学

＜研究テーマ＞

- ・近世近代移行期の政治と社会
- ・歴史の編纂と叙述

＜関連業績＞

- ・「関東大震災と維新史料編纂事務局」（『法政史学』97号、2022年）
- ・「金原明善伝記編纂における史料と叙述」（『静岡県地域史研究』10号、2020年）
- ・「明治を編む」（『北の丸』50号、2018年）

【Outline (in English)】

Learn various archival methodologies through presentations and discussions. The goal is to acquire knowledge and skills related to the Archive Materials. Read the references introduced before class. Grades are evaluated by 50% of participation in class and 50% of presentations.

HUG500B7

日本の環境論Ⅰ

伊藤 達也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

経済地理学の基本的な方法論、研究分野の書かれたテキストを読み、発表することによって、経済地理学的方法についての深い理解を目指します。具体的には経済地理学の目標、理論、方法論、研究アプローチを取得し、自らの研究遂行時にそれらを使うことができるようにします。

【到達目標】

経済地理学に関する知識の蓄積、思考力、解決能力のアップを目指します。具体的にはテキストの内容を適切に理解すること、テキストの内容を適切にまとめること、テキストの内容を適切に発表すること、その上でテキストを通じてより広く経済地理学の専門内容を理解すること、そして、自らの研究テーマに関わらせて、それをより深めることをテーマとします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は受講生による報告と討議、教員の解説等を中心に行います。さらに受講生の関心領域、研究テーマと関係した論文や著書の紹介等を通じて、授業内容の深化に努めます。フィードバックについては、できる限り授業中のコミュニケーションで対応しますが、足りない場合は次の授業において継続して議論します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロ	授業方針の決定
第2回	テキスト「序章」	「序章 環境・空間と経済社会」の報告と討論
第3回	テキスト「第1章」	「第1章 経済立地の理論」の報告と討論
第4回	テキスト「第2章」	「第2章 地域経済の発展のメカニズム」の報告と討論
第5回	テキスト「第3章」	「第3章 サービス経済化と広がる地域間格差」の報告と討論
第6回	テキスト「第4章」	「第4章 人々のキャリアと経済空間」の報告と討論
第7回	テキスト「第5章」	「第5章 経済のグローバル化と産業立地・地域経済」の報告と討論
第8回	テキスト「第6章」	「第6章 サプライチェーンと南北問題」の報告と討論
第9回	テキスト「第7章」	「第7章 経済を左右する地域の制度と文化」の報告と討論
第10回	テキスト「第8章」	「第8章 都市の発展が生むインナーシティ問題」の報告と討論
第11回	テキスト「第9章」	「第9章 グローバル化時代の都市と都市ネットワーク」の報告と討論
第12回	テキスト「第10章」	「第10章 地域のなかでのものづくり」の報告と討論
第13回	テキスト「第11章」	「第11章 工業で変わる新興国」の報告と討論
第14回	まとめ	まとめ 授業において得たもの、得られなかったものの確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

授業前、テキストの該当箇所を読んでくることはもちろん、該当箇所のテーマに沿った論文や本を読み、理解をより深める努力をします。

授業後、関連文献を読むことによって、自らの知識を高めます。

【テキスト（教科書）】

伊藤・小田・加藤編著（2020）『経済地理学への招待』ミネルヴァ書房

【参考書】

山崎 朗ほか著（2016）『地域政策』中央経済社

【成績評価の方法と基準】

発表：50％、討論：50％

十分な準備が大前提となります。問題、論点の明確化された発表の評価が高く、討論は、単純な質問、意見に対する疑問の提示、反論を丁寧に分けて行うことが望ましいです。

【学生の意見等からの気づき】

丁寧な議論に努めます。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 経済地理学、地域経済論、水資源研究、資源環境論
＜研究テーマ＞ 木曾川水系の水資源問題、地域資源の持続可能な利用、地域経済

＜主要研究業績＞

1. 「熊本県五木村における村民意識調査の分析結果と地域再生」法政大学文学部紀要 82 2021
2. 「ダムと環境問題について考える－川辺川ダム問題を事例に－」都市問題 112-8 2021
3. 「熊本県五木村における観光客の意識調査の分析結果と地域再生」法政大学文学部紀要 83 2021
4. 伊藤達也・小田宏信・加藤幸治編『経済地理学への招待』ミネルヴァ書房 2020
5. 「河童による水辺環境保全運動と地域振興効果－福岡県久留米市田主丸町を事例に－」水資源・環境研究 32－1 2019
6. 「長良川河口堰最適運用方法の模索」法政大学文学部紀要 78 2019
7. 「国土利用」（岡橋秀典・伊藤達也共著）（経済地理学会編『キーワードで読む経済地理学』原書房 2018）
8. 「環境問題への地理学のかかわり」（竹中克行編『人

【Outline (in English)】

(Course outline) I aim at deep understanding about economic geography by reading and releasing the text on which basic methodology and research field of economic geography are written.

(Learning Objectives) A target, theory, methodology and research approach of economic geography are acquired and makes sure that it'll be possible to use those at the time of the study execution.

(Learning activities outside of classroom) Preparatory study and review time for this class is standard for 2 hours each. In addition to reading the relevant parts of the text before class, we will make efforts to deepen our understanding by reading papers and books according to the theme of the relevant part. After class, students improve their knowledge by reading related literature.

(Grading Criteria /Policy) Presentation: 50%, Debate: 50%

Sufficient preparation is a major prerequisite. The question and the clarification of the issues are highly evaluated, and it is desirable to carefully separate simple questions, questions about opinions, and rebuttals.

HUG500B7

日本の環境論Ⅱ

伊藤 達也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

授業の最初に調査テーマ、調査項目、調査方法等を決定し、アンケート票を作成します。その後、具体的にアンケート調査を実施し、授業の後半では調査結果を集計し、分析し、報告書を作成します。今年度は「地方都市の地域活性化」をテーマに行います。人文地理学に関する調査能力のアップを目指します。

【到達目標】

人文地理学に関する調査能力のアップを目指します。授業の最初に調査テーマ、調査項目、調査方法等を決定し、アンケート票を作成します。その後、具体的にアンケート調査を実施し、授業の後半では調査結果を集計し、分析し、報告書を作成します。こうした作業を通じて、自らの調査能力のスキルアップを目指し、修士論文作成時の分析能力の向上を到達目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業の最初に調査テーマ、調査項目、調査方法等を決定し、アンケート票を作成します。アンケート票の作成は学生が行います。その後、具体的にアンケート調査を実施します。調査地域は学生が相談の上決定します。現地へ出向き、調査を共同で実施し、より多くの調査票の回収を目指します。授業の後半では、回収された調査票を集計し、その後、単純集計、クロス集計の分析を行います。最後に各自で報告書を作成します。フィードバックについては、できる限り授業中のコミュニケーションで対応しますが、足りない場合は次の授業において継続して議論します。レポートなどについては、コメントをつけて返却します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロ	調査目的と調査方針の決定
第2回	社会調査の基本の説明	社会調査の基本の説明
第3回	アンケート票作成時のルール (1)	フェイスシートの作成
第4回	アンケート票作成時のルール (2)	質問項目の作成
第5回	アンケート票作成時のルール (3)	回答項目の作成
第6回	現地調査のマナーの説明	現地調査のマナーの説明
第7回	アンケート票の作成 (1)	アンケート票の形式の作成
第8回	アンケート票の作成 (2)	質問項目の選定
第9回	アンケート票の作成 (3)	アンケート票の完成
第10回	アンケート票の分析 (1)	データ打ち込み
第11回	アンケート票の分析 (2)	単純集計
第12回	アンケート票の分析 (3)	クロス集計
第13回	報告書の作成 (1)	作成手順の説明
第14回	報告書の作成 (2)	完成書の提出

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
授業時間内に十分な説明を行い、作業時間の確保に努めますが、作業は授業外でも行うことになります。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

別途、授業内で提示します。

【成績評価の方法と基準】

作業：50 %、報告書：50 %

【学生の意見等からの気づき】

授業時間内に十分な説明を行い、作業時間の確保に努めます。

【学生が準備すべき機器他】

授業では必ずパソコンを使用します。

【担当教員の専門分野等】

- <専門領域> 水資源研究、資源環境論、地域経済論
<研究テーマ> 木曾川水系の水資源問題、地域資源の持続可能な利用、地域経済
<主要研究業績>
1. 「熊本県五木村における村民意識調査の分析結果と地域再生」法政大学文学部紀要 82 2021
2. 「ダムと環境問題について考えるー川辺川ダム問題を事例にー」都市問題 112-8 2021
3. 「熊本県五木村における観光客の意識調査の分析結果と地域再生」法政大学文学部紀要 83 2021
4. 伊藤達也・小田宏信・加藤幸治編『経済地理学への招待』ミネルヴァ書房 2020
5. 「河童による水辺環境保全運動と地域振興効果ー福岡県久留米市田主丸町を事例にー」水資源・環境研究 32 - 1 2019
6. 「長良川河口堰最適運用方法の模索」法政大学文学部紀要 78 2019
7. 「国土利用」（岡橋秀典・伊藤達也共著）（経済地理学会編『キーワードで読む経済地理学』原書房 2018）
8. 「環境問題への地理学のかかわり」（竹中克行編『人文地理学への招待』ミネルヴァ書房 2015

【Outline (in English)】

(Course outline) (Learning Objectives) At the beginning of the class, we will determine the survey theme, survey items, survey method, etc., and prepare a questionnaire. After that, we will conduct a questionnaire survey specifically, and in the second half of the class, we will aggregate, analyze, and prepare a report. This year, we will do so under the theme of "regional revitalization of local cities". We aim to improve our research capabilities in human geography. Through these tasks, we aim to improve our own research skills and aim to improve our analytical skills when writing a master's thesis.

(Learning activities outside of classroom) Preparatory study and review time for this class is standard for 2 hours each.

We will try to secure working hours by explaining sufficiently during class hours, but the work will be carried out outside of class.

(Grading Criteria /Policy) Work: 50%, Report: 50%

HUG500B7

日本の都市と産業 I

小原 文明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、都市に関する様々な理論・概念について学ぶものです。また、それら都市に関する理論や概念に対する理解を通じて、地理学の立場から都市の特徴や機能、役割などについて学びます。本年春学期の授業では、主として都市の経済や産業に関わる都市の理論や概念、実践について考えていきます。

【到達目標】

都市に関する基礎的な知識を修得するとともに、都市に関する理論や概念に対する理解を深め、都市の特徴や機能、役割などについて考える力を身に付けることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業では授業テーマに関する概念整理など基礎的な事項についての講義を踏まえた後、都市の理論や概念に関する文献講読の発表およびディスカッションを中心に授業を展開します。各回のテーマに合わせて、あらかじめ文献を読み、関連する内容について理解しておくことが求められます。

また、課題等のフィードバックは次回以降の授業等で適宜行います。

なお、今年度、本授業は基本的に対面形式で行う予定ですが、場合によっては、Zoom によるリアルタイムオンライン形式やハイフレックス形式で行う授業回がある可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	都市に関する理論・概念の概観（1）	都市に関する理論・概念についての整理
第 2 回	都市に関する理論・概念の概観（2）	都市に関する理論・概念についての関係性
第 3 回	都市の経済・産業からみた都市の理論・概念（1）	都市の経済・産業からの理論・概念に関する講読（1）
第 4 回	都市の経済・産業からみた都市の理論・概念（2）	都市の経済・産業からの理論・概念に関する講読（2）
第 5 回	都市の経済・産業からみた都市の理論・概念（3）	都市の経済・産業からの理論・概念に関する議論（1）
第 6 回	都市の経済・産業からみた都市の理論・概念（4）	都市の経済・産業からの理論・概念に関する講読（3）
第 7 回	都市の経済・産業からみた都市の理論・概念（5）	都市の経済・産業からの理論・概念に関する講読（4）
第 8 回	都市の経済・産業からみた都市の理論・概念（6）	都市の経済・産業からの理論・概念に関する議論（2）
第 9 回	都市の経済・産業に関する都市への実践例（1）	都市の経済・産業に関する実践例についての講読（1）
第 10 回	都市の経済・産業に関する都市への実践例（2）	都市の経済・産業に関する実践例についての講読（2）

- 第11回 都市の経済・産業に関する実践例
都市への実践例 についての議論 (1)
(3)
- 第12回 都市の経済・産業に関する実践例
都市への実践例 についての講読 (3)
(4)
- 第13回 都市の経済・産業に関する実践例
都市への実践例 についての講読 (4)
(5)
- 第14回 都市の経済・産業に関する実践例
都市への実践例 についての議論 (2)
(6)

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

本授業では文献講読の発表、およびそれに基づくディスカッションを中心に展開することから、あらかじめ各回のテーマに関する文献を読むとともに、関連する内容について理解を深め、自身の意見・見解を整理しておくことが求められます。

【テキスト（教科書）】

概説ならびに発表・討論で使用する文献・資料は授業内にて決定します。

【参考書】

授業の中で、適宜関連する文献を紹介します。

【成績評価の方法と基準】

プレゼンテーション：50 %、ディスカッション：50 %で評価します。具体的には、文献講読におけるプレゼンテーションの内容や方法、それぞれのディスカッションにおける討論内容・姿勢によって総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

ディスカッションが深まるように心掛けます。

【その他の重要事項】

秋学期開講の「社会経済地理学研究Ⅱ」（地理学専攻科目）・「日本の産業風土Ⅱ」（国際日本学インスティテュート科目）も併せて受講することを推奨します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

人文地理学（都市地理学、経済地理学、社会地理学）、都市開発論
<研究テーマ>

都市開発、都市形成、土地利用、土地所有

【Outline (in English)】

This course introduces various urban theories and concepts to students taking this course. Especially, this course deals with the urban theories, concepts and practices about urban economy and industries.

The goals of this course are to be able to understand the urban theories and to acquire the ability to consider characteristics, functions and roles of urban area.

Before / after each class meeting, students will be expected to spend each 2 hours to understand the course content.

Final grade will be calculated according to the following process: making a presentation (50 %) and in-class contribution (50 %).

HUG500B7

日本の都市と産業Ⅱ

小原 文明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、都市に関する様々な理論・概念について学ぶものです。また、それら都市に関する理論や概念、実践に対する理解を通じて、地理学の立場から都市の特徴や機能、役割などについて学びます。本年秋学期の授業では、主として都市計画と都市開発に関わる都市の理論や概念について考えていきます。

【到達目標】

都市に関する基礎的な知識を修得するとともに、都市に関する理論や概念に対する理解を深め、都市の特徴や機能、役割などについて考える力を身に付けることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業では授業テーマに関する概念整理など基礎的な事項についての講義を踏まえた後、都市の理論や概念に関する文献講読の発表およびディスカッションを中心に授業を展開します。各回のテーマに合わせて、あらかじめ文献を読み、関連する内容について理解しておくことが求められます。

また、課題等のフィードバックは次回以降の授業等で適宜行います。

なお、今年度、本授業は基本的に対面形式で行う予定ですが、場合によっては、Zoom によるリアルタイムオンライン形式やハイフレックス形式で行う授業回がある可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	都市に関する理論・概念の概観 (1)	都市に関する理論・概念についての整理
第2回	都市に関する理論・概念の概観 (2)	都市に関する理論・概念についての関係性
第3回	都市計画・都市開発からみた都市の理論・概念 (1)	都市計画・都市開発からの理論・概念に関する講読 (1)
第4回	都市計画・都市開発からみた都市の理論・概念 (2)	都市計画・都市開発からの理論・概念に関する講読 (2)
第5回	都市計画・都市開発からみた都市の理論・概念 (3)	都市計画・都市開発からの理論・概念に関する議論 (1)
第6回	都市計画・都市開発からみた都市の理論・概念 (4)	都市計画・都市開発からの理論・概念に関する講読 (3)
第7回	都市計画・都市開発からみた都市の理論・概念 (5)	都市計画・都市開発からの理論・概念に関する講読 (4)
第8回	都市計画・都市開発からみた都市の理論・概念 (6)	都市計画・都市開発からの理論・概念に関する議論 (2)
第9回	都市計画・都市開発に関する都市への実践 (1)	都市計画・都市開発の実践に関する講読 (1)
第10回	都市計画・都市開発に関する都市への実践 (2)	都市計画・都市開発の実践に関する講読 (2)

- 第11回 都市計画・都市開発に関する都市への実践 都市計画・都市開発の実践に関する議論 (1)(3)
- 第12回 都市計画・都市開発に関する都市への実践 都市計画・都市開発の実践に関する講読 (3)(4)
- 第13回 都市計画・都市開発に関する都市への実践 都市計画・都市開発の実践に関する講読 (4)(5)
- 第14回 都市計画・都市開発に関する都市への実践 都市計画・都市開発の実践に関する議論 (2)(6)

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
本授業では文献講読の発表、およびそれに基づくディスカッションを中心に展開することから、あらかじめ各回のテーマに関する文献を読むとともに、関連する内容について理解を深め、自身の意見・見解を整理しておくことが求められます。

【テキスト（教科書）】

概説ならびに発表・討論で使用する文献・資料は授業内にて決定します。

【参考書】

授業の中で、適宜関連する文献を紹介します。

【成績評価の方法と基準】

プレゼンテーション：50 %、ディスカッション：50 %で評価します。具体的には、文献講読におけるプレゼンテーションの内容や方法、それぞれのディスカッションにおける討論内容・姿勢によって総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

ディスカッションが深まるように心掛けます。

【その他の重要事項】

春学期開講の「社会経済地理学研究Ⅰ」（地理学専攻科目）・「日本の産業風土Ⅰ」（国際日本学インスティテュート科目）も併せて受講することを推奨します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

人文地理学（都市地理学、経済地理学、社会地理学）、都市開発論
<研究テーマ>

都市開発、都市形成、土地利用、土地所有

【Outline (in English)】

This course introduces various urban theories and concepts to students taking this course. Especially, this course deals with the urban theories, concepts and practices about urban planning and urban development.

The goals of this course are to be able to understand the urban theories and to acquire the ability to consider characteristics, functions and roles of urban area.

Before / after each class meeting, students will be expected to spend each 2 hours to understand the course content.

Final grade will be calculated according to the following process: making a presentation (50 %) and in-class contribution (50 %).

HUG500B7

地図の文化誌Ⅰ

米家 志乃布

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

江戸東京を学び、江戸東京アトラスを作成しよう！～東京の史蹟/史跡マップから古代～近代の江戸東京の地域史を考える (1)

【到達目標】

様々な史料を読み、データを収集し、自ら地図作成（マッピング）することから、江戸東京を歴史的・空間的に把握し、その時代性・地域性を自分の頭で考え、論じることができるようになることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

大学の方針により、本年は対面授業を基本としますが、受講学生と相談しながら進めます。Google ドライブ上でデータを共有し、そこで作業をします。紙の配布・紙での作業は極力控えます。Google ドライブで作業したデータは教員がチェックをしてコメントします。オンラインの方が学習効率が上がる場合は、オンライン授業（Zoom）も取り入れます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	授業内容の説明、データの管理と注意事項、研究発表の方法、履修者・出席者の確認。
2	古代の遺跡・史蹟	古墳、武蔵国府や国分寺、古道など古代由来の遺跡・史蹟について学ぶ
3	中世の史蹟	寺院・神社など信仰に関わる史蹟、江戸以前の様々な史蹟を学ぶ
4	江戸史蹟	江戸史蹟の特徴について、先行研究をもとに学ぶ
5	明治以降、近代の史蹟	天皇聖蹟など近代以降の史蹟について、関連文献を読んで学ぶ
6	江戸東京の史蹟データの収集①	地図化するために、どのようなデータがあるのか、東京都 35 区および地域別に検討する。
7	江戸東京の史蹟データの収集②	麹町区・神田区のデータを収集する。
8	江戸東京の史蹟データの収集③	日本橋区・京橋区のデータを収集してまとめる。
9	江戸東京の史蹟データの収集④	その他の東京都区部におけるデータをまとめる。
10	東京の地図上にマッピングする①	史蹟の分布を地図上に示した地図をみながら考察する。
11	東京の地図上にマッピングする②	東京の史蹟の分布の特徴を考察し、その検討事項をまとめる。
12	東京の地図上にマッピングする③	東京の史蹟の分布の意味を分析する。
13	江戸東京における史蹟の分布を考察する	それぞれの分布について、その特徴を分析・考察し、議論する。
14	まとめ	作成した地図をもとに、江戸東京の空間的な多様性および歴史的な地域性についてまとめる

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

東京都内の博物館・資料館の常設展および様々な企画展をこまめにチェックし、機会をつくって足を運んでいただくことをおすすめします。

【テキスト（教科書）】

分析史料は主に東京都『東京都史蹟名勝天然記念物-旧市域内』（1943）を使います。その他、戸川残花『江戸史蹟』（1912）・同『東京史蹟写真帖』（1914）、東京府『東京府史蹟』も使います。すべて国会図書館デジタルコレクションを利用します。Google ドライブに配布します。

【参考書】

Google ドライブに適宜、関連文献を紹介します。

参考文献：米家志乃布（2021）：「戦前期東京都における史蹟の分布とその特徴-『東京都史蹟名勝天然記念物旧市域内』（1943）の分析」『法政大学地理学会 70 周年記念論文集』法政大学地理学会 70 周年記念事業

齋藤智志（2015）：『近代日本の史蹟保存事業とアカデミズム』法政大学出版局

岩淵令治（2009）：『江戸史蹟』の誕生-旧幕臣戸川残花の軌跡から-」（久留島浩ほか『文人世界の光芒と古都奈良』思文閣出版）

【成績評価の方法と基準】

「配分（%）」：参加 50 %、発表・作業 50%

「評価基準」：平常点

【学生の意見等からの気づき】

史料からデータを収集して地図を作成する作業、それに基づいて議論することは、とても面白い！と受講生の皆さんから感想をいただきました。江戸東京の歴史と地理に詳しくなります。地理学専攻以外の大学院生も大歓迎です。

【学生が準備すべき機器他】

地図上の位置を探すために Google マップが必要です。スマートフォンや PC、iPad などの機器類を持参してください。

【その他の重要事項】

年間を通して作業しますので、春学期・秋学期合わせての受講を推奨いたします。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞歴史地理学 地図史研究

＜研究テーマ＞日本北方の歴史地理学、日本・ロシアの地図史研究 江戸東京の名所研究

＜主要研究業績＞

「人びとにとっての近世日本のかたち」（田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか』、笠間書院、2015 年）

「近世日本図の北辺・『蝦夷地』表象」『文学』、2015 年「近代の名所図会にみる江戸イメージ」『法政地理』51 号、2020 年予定など

【Outline (in English)】

(Course outline) This course deals with mapping historical sites and studying historical geography of Edo Tokyo.

(Learning Objectives) The goals of this course is to enable students to understand Edo-Tokyo historically and spatially, and to be able to think and discuss its historical and regional characteristics.

(Learning activities outside of classroom) Your study time will be more than four hours for a class.

(Grading Criteria /Policy) Grading will be decided based on lab reports(

50%), and the quality of the students experimental performance in the lab(50%).

HUG500B7

地図の文化誌Ⅱ

米家 志乃布

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

江戸東京を学び、江戸東京アトラスを作成しよう！～東京の史蹟/史跡マップから古代～近代の江戸東京の地域史を考える（2）

【到達目標】

様々な史料を読み、データを収集し、自ら地図作成（マッピング）することから、江戸東京を歴史的・空間的に把握し、その時代性・地域性を自分の頭で考え、論じることができるようになることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

大学の方針により、本年は対面授業を基本としますが、受講生と相談しながら進めます。Google ドライブ上で作業をし、紙の配布・紙での作業は極力控えます。Google ドライブで作業したデータは教員がチェックをしてコメントします。オンラインの方が学習効率が高まる場合は、オンライン授業（Zoom）も取り入れます。毎年 10 月頃に法政大学江戸東京研究センターの研究発表会に参加を予定しています。受講者同士、お互いに協力して、成果をまとめていただきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業内容の説明、データの管理と注意事項、研究発表の方法、履修者・出席者の確認。
第 2 回	研究発表会の準備①	春学期授業Ⅰの内容を振り返り、さらにどの点に課題があるのか、議論する。
第 3 回	研究発表会の準備②	補足の資料を収集し、分析をする
第 4 回	研究発表会の準備③	研究発表できそうな論点を整理する
第 5 回	研究発表会の準備④	研究発表の内容を決定する
第 6 回	研究発表会の準備⑤	研究発表用のパワーポイントを共同して作成する
第 7 回	研究発表会のリハーサル	研究発表会にむけてリハーサルをして、発表内容をブラッシュアップする
第 8 回	研究発表会の振り返り	今後の課題を議論する
第 9 回	地図のブラッシュアップ作業にむけて	補足データを収集する
第 10 回	地図上にマッピングする①	収集したデータを重ね合わせて、地図にのせる。
第 11 回	地図上にマッピングする②	収集したデータを地図上に表現して考察する。
第 12 回	地図上にマッピングする③	各要素の分布の意味を分析する。
第 13 回	地図上にマッピングする④	分布を考察し、江戸東京の地域的特徴を考察する。
第 14 回	まとめ	地図から見える江戸東京の歴史地理的特性を考察し、まとめる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。江戸東京の地形や水系、交通網や土地開発を把握するために、各自でフィールドにでて、実際に歩いてみることをおすすめします。

【テキスト（教科書）】

分析史料は主に東京都『東京都史蹟名勝天然記念物- 旧市域内』（1943）を使います。その他、戸川残花『江戸史蹟』（1912）・同『東京史蹟写真帖』（1914）、東京府『東京府史蹟』も使います。すべて国会図書館デジタルコレクションを利用します。Google ドライブに配布します。

【参考書】

Google ドライブに適宜、関連文献を紹介します。

参考文献：米家志乃布（2021）：「戦前期東京都における史蹟の分布とその特徴- 『東京都史蹟名勝天然記念物旧市域内』（1943）の分析」『法政大学地理学会 70 周年記念論文集』法政大学地理学会 70 周年記念事業

齋藤智志（2015）：『近代日本の史蹟保存事業とアカデミズム』法政大学出版局

岩淵令治（2009）：『江戸史蹟』の誕生- 旧幕臣戸川残花の軌跡から - 」（久留島浩ほか『文人世界の光芒と古都奈良』思文閣出版）

【成績評価の方法と基準】

「配分（%）」：参加 50 %、発表・作業 50 %

「評価基準」：平常点

【学生の意見等からの気づき】

実際に東京を歩いてみたいという意見もいただきました。秋～冬は気候も温暖で歩きやすいので、ぜひ外にでてみたいと思います。史料からデータを収集して地図を作成する作業、それに基づいて議論し発表することは、とても面白い！と受講生の皆さんから感想をいただきました。江戸東京の歴史と地理に詳しくなります。地理学専攻以外の大学院生も大歓迎です。

【学生が準備すべき機器他】

地図上の位置を探すために Google マップが必要で、スマートフォンや PC、iPad などの機器類を持参してください。

【その他の重要事項】

春学期・秋学期を通して作業を行います。年間の履修を推奨いたします。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 歴史地理学 地図史研究

<研究テーマ> 日本北方の歴史地理学 日本・ロシアの地図史研究 江戸東京の名所研究

<主要研究業績>

『近世蝦夷地の地域情報- 日本北方地図史再考』法政大学出版局
「人びとにとっての近世日本のかたち」（田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか』、笠間書院、2015 年）

「近世日本図の北辺・蝦夷地」表象『文学』、2015 年「近代の名所図会にみる江戸イメージ」『法政地理』51 号、2020 年予定など

【Outline (in English)】

(Course outline) This course deals with mapping historical sites and studying historical geography of Edo Tokyo.

(Learning Objectives) The goals of this course is to enable students to understand Edo-Tokyo historically and spatially, and to be able to think and discuss its historical and regional characteristics.

(Learning activities outside of classroom) Your study time will be more than four hours for a class.

(Grading Criteria /Policy) Grading will be decided based on lab reports(

50%), and the quality of the students experimental performance in the lab(50%).

OTR700B7

国際日本学研究 I

スティーヴン・ネルソン

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本研究（特に古典音楽、伝統芸能、古典文学など）の在り方と方法。具体例として、古写本、古版本、活字本などを用いて、『古今著聞集』巻第六 管絃歌舞第七 を 2 年計画で講読する（2022-23 年度）。

【到達目標】

ネルソン・ゼミは、さまざまな国籍の、さまざまな研究分野に関心をもつ学生が所属するので、「日本研究」をするに当たり、どのような研究テーマを選び、どのように焦点を絞り、どのような手続きをとっていかなければならないかを、参加学生それぞれに即して、指導していく場とする。学生の学年によって到達目標は異なってくる。博士後期課程 1 年次生は研究課題を明確にし、先行研究を十分に調査・精読し、秋学期の中間発表等を経て論文の構想を十分に練ること。博士後期課程 2・3 年次はそれぞれ秋学期と春学期の中間発表に備え、授業や中間発表会等における指摘を受け止め、十分に練った目次案に従い、余裕を持って論文を執筆すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的に学生の研究発表を中心に、質疑応答、全員での討論、指導教員の講評等を交えて行う。以下に一応の授業計画を示してみたが、具体的な内容・スケジュールは、参加学生の人数・関心対象・学習意欲・予備知識などを鑑みて、第 1 回のガイダンスの際に決めたいと考えている。演習形式なので、フィードバックは授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス 講読序説	自己紹介（全員）、教員による授業の進め方の説明 『古今著聞集』巻第六 管絃歌舞第七 について
第 2 回	研究課題の紹介（2・3 年次生）①	博士論文のテーマをすでに決めている学生の研究報告 説話 230（小序）
第 3 回	研究課題の紹介（2・3 年次生）②	博士論文のテーマをすでに決めている学生の研究報告 説話 231・232
第 4 回	研究課題の紹介（2・3 年次生）③	博士論文のテーマをすでに決めている学生の研究報告 説話 233
第 5 回	関心対象の紹介（1 年次生）①	関心対象について、学術研究の可能性を考える 説話 234・235
第 6 回	関心対象の紹介（1 年次生）②	関心対象について、学術研究の可能性を考える 説話 236・237・238
第 7 回	博士後期課程の中間報告（2・3 年次生）①	中間発表会に向けた配布資料・読み上げ原稿の準備 説話 239・240
第 8 回	修士課程の中間報告（2・3 年次生）②	中間発表会に向けた配布資料・読み上げ原稿の準備 説話 241・242
第 9 回	研究動向の確認（1 年次生）	先行研究の調査に基づいた文献目録の提示と検討 説話 243

第10回	先行研究の論旨の整理 (2・3年次生) ① 講読 ⑨	先行研究の状況を調査し、論旨を 整理した上、各自の研究テーマの 研究史上の意義を検討 説話 244
第11回	先行研究の論旨の整理 (2・3年次生) ② 講読 ⑩	先行研究の状況を調査し、論旨を 整理した上、各自の研究テーマの 研究史上の意義を検討 説話 245
第12回	先行研究の論旨の整理 (1年次生) ① 講読 ⑪	先行研究の状況を調査し、論旨を 整理した上、各自の研究テーマの 研究史上の意義を検討 説話 246・247
第13回	先行研究の論旨の整理 (1年次生) ② 講読 ⑫	先行研究の状況を調査し、論旨を 整理した上、各自の研究テーマの 研究史上の意義を検討 説話 248・249
第14回	夏期休暇中の作業計画 立案 講読 まとめ	各自が行うべき作業の検討 春学期総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

第1回 5分程度の自己紹介を用意し、授業に期待することが述べられるように考えてくる。
以後 各自の研究を意欲的に進める。
本授業の準備（予習）および復習時間は、合わせて4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特になし。副読本として岩波書店日本古典文学大系（旧大系）『古今著聞集』を用いるが、入手の仕方に関しては第1回講義の際に案内する。

【参考書】

必要に応じて授業内や個人指導の際に指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表・各種作成資料の内容 50%、討論への参加等の平常点 50%。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 日本音楽史学

＜研究テーマ＞ 日本の楽譜、初期の講式（漢文訓読体の声明の一種）と平家語りの音楽構成法、平安時代の年中行事と音楽、声歌／唱歌～越殿楽謡物～箏組歌の系譜、『源氏物語』・『平家物語』の音楽、日本古典文学の英訳など

＜主要研究業績＞

①「唐代伝来の音楽とその再現」（『唐代音楽の研究と再現 資料集』上野学園大学日本音楽史研究所、2014年）

②「『秘曲尽くし』再現—『文机談』に見える秘曲を聴く—」（磯水絵編『今日是一日、方丈記』新典社、2013年）◇付録 CD 「『秘曲尽くし』再現」（秘曲再現監修）に次の雅楽秘曲の復元演奏を収録：箏《小調子》、笙《平調入調》、琵琶《大常博士楊真操》、箏《千金調子》、琵琶《石上流泉》、琵琶《上原石上流泉》、箏《由加見調子》、琵琶《啄木》、笛・箏・笙・太鼓（陵王）《荒序》

③「工尺譜の起源をめぐって —唐代の文字譜との関係—」（磯水絵編『論集 文学と音楽史 —詩歌管絃の世界—』、和泉書院、2013年）

【Outline (in English)】

Course Outline: This is a postgraduate seminar in Japanese studies, mainly for students writing their doctoral dissertation under the instructor's supervision. It is also open to students from other seminars who are interested in methodological issues involved in the study of the performing arts of Japan. The class centers on presentations given by students on their research and other related topics. In each class of the academic years 2022-23, we will also read a section or sections from the 'Kangen-kabu' ('Music, Song and Dance') chapter of *Kokon chomon-jū* ('A collection of notable tales old and new'), a collection of historical tales compiled by Tachibana no Narisue in 1254.

Learning Objectives: The primary objective of the class is for the students to successfully complete their dissertations in the stipulated timeframe, while obtaining the methodological skills to do so, as well as to continue research in the future if they so desire.

Learning Activities Outside of the Classroom: Students are expected to undertake the activities necessary for successful completion of their dissertations, and participate actively in our reading of the source text described above. The latter will require some hours of library work each week.

Grading Criteria/Policy: 50% for preparation of materials used in class; 50% for active participation in class discussion.

OTR700B7

国際日本学研究所

スティーヴン・ネルソン

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本研究（特に古典音楽、伝統芸能、古典文学など）の在り方と方法。具体例として、古写本、古版本、活字本を用いて、『古今著聞集』巻第六 管絃歌舞第七 を 2 年計画で講読する（2022-23 年度）。

【到達目標】

ネルソン・ゼミは、さまざまな国籍の、さまざまな研究分野に関心をもつ学生が所属するので、「日本研究」をするに当たり、どのような研究テーマを選び、どのように焦点を絞り、どのような手続きをとっていかなければならないかを、参加学生それぞれに即して、指導していく場とする。学生の学年によって到達目標は異なってくる。博士後期課程 1 年次生は研究課題を明確にし、先行研究を十分に調査・精読し、秋学期の中間発表等を経て論文の構想を十分に練ること。博士後期課程 2・3 年次生はそれぞれ秋学期、春学期の中間発表に備え、授業や中間発表会等における指摘を受け止め、十分に練った目次案に従い、余裕を持って論文を執筆すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的に学生の研究発表を中心に、質疑応答、全員での討論、指導教員の講評等を交えて行う。以下に一応の授業計画を示してみたが、具体的な内容・スケジュールは、参加学生の人数・関心対象・学習意欲・予備知識などを鑑みて、第 1 回のガイダンスの際に決めたいと考えている。演習形式なので、フィードバックは授業内にて行なう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	夏期休暇の成果報告	秋学期スケジュールの確認 院生全員による夏期休暇中の研究成果報告
第 2 回	博士論文構想の報告（2・3 年次生）① 講読 ①	博士論文の構想を説明し、作成作業の進捗状況を報告 説話 250・251
第 3 回	博士論文構想の報告（2・3 年次生）② 講読 ②	博士論文の構想を説明し、作成作業の進捗状況を報告 説話 252
第 4 回	博士論文構想の報告（2・3 年次生）③ 講読 ③	博士論文の構想を説明し、作成作業の進捗状況を報告 説話 253
第 5 回	先行研究の紹介と整理（1 年次生）① 講読 ④	研究課題に関する先行研究を調査・精読し、学術論文の作成方法、論理展開、文体や体裁の特徴を学ぶ 説話 254
第 6 回	先行研究の紹介と整理（1 年次生）② 講読 ⑤	研究課題に関する先行研究を調査・精読し、学術論文の作成方法、論理展開、文体や体裁の特徴を学ぶ 説話 255
第 7 回	博士後期課程の中間報告（1・2 年次生）① 講読 ⑥	中間発表会に向けた配布資料・読み上げ原稿の準備 説話 256
第 8 回	博士後期課程の中間報告（1・2 年次生）② 講読 ⑦	中間発表会に向けた配布資料・読み上げ原稿の準備 説話 257

第 9 回	博士論文の中間報告（2 年次生）① 講読 ⑧	博士論文執筆の進捗状況に関する報告 説話 258
第 10 回	博士論文の中間報告（2 年次生）② 講読 ⑨	博士論文執筆の進捗状況に関する報告 説話 259
第 11 回	博士論文の構想発表（1 年次生）① 講読 ⑩	学術的な論理展開に基づき、博士論文の目次案を立て、各章の内容について概要を記す 説話 260・261
第 12 回	博士論文の構想発表（1 年次生）② 講読 ⑪	学術的な論理展開に基づき、博士論文の目次案を立て、各章の内容について概要を記す 説話 262・263
第 13 回	担当教員による年末講義	担当教員自身の、本年度の研究活動に関する講義
第 14 回	まとめ 講読 まとめ	春季休暇中の作業課題に関する計画を示す

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

第 1 回 夏期休暇中の研究成果をまとめてくる。
以後 各自の研究を意欲的に進める。
本授業の準備（予習）および復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特になし。副読本として岩波書店日本古典文学大系（旧大系）『古今著聞集』を用いる。

【参考書】

必要に応じて授業内や個人指導の際に指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表・各種作成資料の内容 50 %、討論への参加等の平常点 50 %。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本音楽史学
<研究テーマ> 日本の楽譜、初期の講式（漢文訓読体の声明の一種）と平家語りの音楽構成法、平安時代の年中行事と音楽、声歌／唱歌～越殿楽謡物～箏組歌の系譜、『源氏物語』・『平家物語』の音楽、日本古典文学の英訳など
<主要研究業績>
①「唐代伝来の音楽とその再現」（『唐代音楽の研究と再現 資料集』上野学園大学日本音楽史研究所、2014 年）
②「『秘曲尽くし』再現—『文机談』に見える秘曲を聴く—」（磯水絵編『今日は一日、方丈記』新典社、2013 年）◇付録 CD 「『秘曲尽くし』再現」（秘曲再現監修）に次の雅楽秘曲の復元演奏を収録：筆簾《小調子》、笙《平調入調》、琵琶《大常博士楊真操》、箏《千金調子》、琵琶《石上流泉》、琵琶《上原石上流泉》、箏《由加見調子》、琵琶《啄木》、笛・筆簾・笙・太鼓（陵王）《荒序》
③「蘇の平安の音」（神野藤昭夫・多忠輝監修『越境する雅楽文化』、書肆フローラ、2009 年）

【Outline (in English)】

Course Outline: This is a postgraduate seminar in Japanese studies, mainly for students writing their doctoral dissertation under the instructor's supervision. It is also open to students from other seminars who are interested in methodological issues involved in the study of the performing arts of Japan. The class centers on presentations given by students on their research and other related topics. In each class of the academic years 2022-23, we will also read a section or sections from the 'Kangen-kabu' ('Music, song and dance') chapter of *Kokon chomon-jū* ('A collection of notable tales old and new'), a collection of historical tales compiled by Tachibana no Narisue in 1254.

Learning Objectives: The primary objective of the class is for the students to successfully complete their dissertations in the stipulated timeframe, while obtaining the methodological skills to do so, as well as to continue research in the future if they so desire.

Learning Activities Outside of the Classroom: Students are expected to undertake the activities necessary for successful completion of their dissertations, and participate actively in our reading of the source text described above. The latter will require some hours of library work each week.

Grading Criteria/Policy: 50% for preparation of materials used in class; 50% for active participation in class discussion.

OTR700B7

国際日本学研究 I

川崎 貴子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

音声/音韻の第二言語習得に関する論文を読み、発表することにより、言語習得の分野での問いの立て方、検証方法を確認する。様々なテーマの論文を読むことを通して、テーマの立て方、仮説検証の仕方を学び、学生それぞれが研究テーマを見つけ、研究計画を組み立てる。

【到達目標】

本授業では、特に音韻分野の第一言語習得、および第二言語習得の主な研究を紹介することにより、言語習得の理論研究がどのように進んできたのかを学ぶ。また、様々な論文で用いられている実験方法を比較し、第二言語習得の研究手法を学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

論文を読み、毎回全員で発表・議論する演習方式で行う。主に音声・音韻の第二言語習得に関する論文を読み、発表することにより、言語習得の分野での問いの立て方、検証方法を確認し、取り上げられている問題に対して、どのような実験を行っているかを学ぶ。その後、各自、1年間で実行可能な研究テーマを設定し、それぞれのテーマの先行研究を読み、研究計画を構築していく。担当者は担当箇所の核になるデータ、及びその分析方法をまとめ、批判をおりまぜながら議論する。

授業で提出されたりアクションペーパーなどにおけるコメント・質問へは、そのうちのいくつかを取り上げ、全体に対してフィードバックを行い、議論に活かす。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	Orientation	授業内容の説明
2	リサーチメソッド・授業プランの作成	課題論文リストの提示と概要の説明
3	言語習得研究	第一言語習得と第二言語習得
4	第二言語習得の理論	音韻習得理論を取り上げ、概要を紹介する
5	SLA Phonology 論文発表（1）	SLA Phonology 論文発表と分析手法について
6	SLA Phonology 論文発表（2）	分析手法について・演習（2）
7	研究計画発表1	修士2年生による研究テーマ発表
8	研究計画発表2	修士1年生による研究テーマ発表
9	エラーに関する研究	エラーのタイプについての分析
10	処理可能性理論（1）	処理可能性理論についての概要、理論の説明
11	処理可能性理論（2）	処理可能性理論に関する論文発表
12	学生による発表（1）	レビュー論文
13	学生による発表（2）	学生による論文のポスター発表（1）
14	学生による発表（3）	学生による論文のポスター発表（2）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業前に指定された範囲の論文を読むこと。そして、担当箇所については、発表の準備を十分に行うこと。本授業の準備・復習時間は、4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

授業内で必要に応じて論文を指定します。

【参考書】

授業内でその都度、指定します。

【成績評価の方法と基準】

授業での議論への参加：40%

授業内発表：40%

研究計画書：20%

【学生の意見等からの気づき】

担当学生により発表資料のアップロードが遅れ、予習が間に合わないとのコメントがありました。今年度は資料や課題論文の提出の期限を厳守し、早めに準備するように学期当初から声かけをしたいと思います。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 音韻論、第二言語習得

＜研究テーマ＞ 音韻対比の音声的影響、第二言語学習者の音韻習得など

＜主要研究業績＞

川崎貴子・田中邦佳「L2 英語摩擦音の知覚における高周波数帯域情報の利用」『法政大学文学部紀要』第 65 号 pp. 63-70. (2012)

川崎貴子「カタカナ代用による第 2 言語音知覚調査」『法政大学文学部紀要』第 63 号 pp. 29-37. (2011)

Takako Kawasaki, John Matthews, and Kuniyoshi Tanaka "Processability of Acoustic Cues in the Perception of L2 Speech." Paper presented at 12th International Symposium on Processability Approaches to Language Acquisition, Ghent University, Ghent, Belgium. (2012)

川崎貴子・マシューズジョン・田中邦佳「L2 音韻カテゴリーの構築過程における音響の手がかりの利用と抑制—日本語母語話者による英語摩擦音習得—」白畑知彦・須田孝司 編『名詞句と音声・音韻の習得 (第二言語習得モノグラフシリーズ)』くろしお出版.(2017)

【Outline (in English)】

Through reading SLA Phonetics/Phonology papers, students will learn how to set their research theme and test their hypotheses.

Learning Objectives: The aim of this course is to deepen the students' understanding of theories of SLA and research methodologies in the field and help them to find their own research topics.

Learning activities outside of classroom: Students are expected to read the assigned papers before class.

Students are required to study about 4 hours outside of classroom.

Grading Criteria:

In-class participation: 40%

In-class presentation : 40%

Research abstract : 20%

OTR700B7

国際日本学研究Ⅱ

川崎 貴子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語話者の英語習得、および第二言語としての日本語習得の、特に音韻・音声習得の研究論文を読み、議論することを通して、自らの論文の基礎となる理論、研究法を学ぶ。

【到達目標】

一音韻論、及び SLA の音韻・語彙分野の基礎文献を読みつつ、第二言語習得・教育の分野での調査手法についての知識を身に付ける。一自らの研究計画を策定、研究を遂行し、論文の形にすることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

春学期に続き、指定文献を読み、毎回全員で発表・議論していく。担当者は担当箇所の核になるデータ、及びその分析方法をまとめ、批判をおりまぜながら議論すること。修士論文執筆の際に役立つよう、おもに研究法・論文の構成・データ分析などについて学ぶ。授業で提出されたりアクションペーパーなどにおけるコメント・質問へは、そのうちのいくつかを取り上げ、全体に対してフィードバックを行い、議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業内容の説明
2	修士 2 年生の研究発表 (1)	研究の進捗状況発表 (2 年生) (1)
3	修士 2 年生の研究発表 (2)	研究の進捗状況発表 (2 年生) (2)
4	修士 1 年生の研究発表 (1)	研究の進捗状況の発表 (1 年生、および研修生) (1)
5	修士 1 年生の研究発表 (2)	研究の進捗状況の発表 (1 年生、および研修生) (2)
6	論文購読—母語音声の影響に関する論文	母語の目録の L2 への影響 (解説)
7	論文購読—母語音声の影響 (研究方法)	母語の目録の L2 への影響 (学生による発表) (1)
8	論文購読—母語音声の影響 (分析方法・結果記述)	母語の目録の L2 への影響 (学生による発表) (2)
9	論文購読—音韻・語彙習得	語彙の特定と音韻処理—学生による発表 (1)
10	論文購読—音韻・語彙習得 (研究手法)	語彙の特定と音韻処理—学生による発表 (2)
11	論文購読—音韻・語彙習得 (分析)	語彙の特定と音韻処理—データ分析演習
12	1 年生による修論計画発表	1 年生は研究計画・先行研究リスト・今後のプランなどを発表
13	2 年生による修論発表	2 年生による修士論文の概要・目的・方法・結果の発表
14	博士後期課程学生による論文発表・講評	博士後期課程学生による論文の発表・発表の講評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業前に指定された範囲の論文を読むこと。そして、担当箇所については、発表の準備を十分に行うこと。本授業の準備・復習時間は、4 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特に設定しない。必要に応じて授業内で指示する。

【参考書】

必要に応じて授業内で指示する。

【成績評価の方法と基準】

<修士課程>

授業発表....40%

授業内での発言・議論への貢献....40%

学期末論文....20%

【学生の意見等からの気づき】

理解を細かく確かめつつ進めたことが好評であった。また、追加文献を提案しながら、それぞれの研究テーマに応じた学習を授業外で進められるように、アドバイスしたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 音韻論、第二言語習得

<研究テーマ> 音韻対比の音声的影響、第二言語学習者の音韻習得など

<主要研究業績>

川崎貴子・田中邦佳「L2 英語摩擦音の知覚における高周波数帯域情報の利用」『法政大学文学部紀要』第 65 号 pp. 63-70. (2012)

川崎貴子「カタカナ代用による第 2 言語音知覚調査」『法政大学文学部紀要』第 63 号 pp. 29-37. (2011)

Takako Kawasaki, John Matthews, and Kuniyoshi Tanaka "Processability of Acoustic Cues in the Perception of L2 Speech." Paper presented at 12th International Symposium on Processability Approaches to Language Acquisition, Ghent University, Ghent, Belgium. (2012)

川崎貴子・マッシュューズジョン・田中邦佳「L2 音韻カテゴリーの構築過程における音響的手がかりの利用と抑制—日本語母語話者による英語摩擦音習得—」白畑知彦・須田孝司 編『名詞句と音声・音韻の習得（第二言語習得モノグラフシリーズ）』くろしお出版.(2017)

【Outline (in English)】

Through reading papers on phonological and phonetic acquisition, students will learn theories and research methods that will form the basis of their own papers.

Learning Objectives:

-To acquire knowledge of research methods in the field of second language acquisition and teaching, while reading basic literature in the field of phonology and SLA phonology and vocabulary.

-Students will be able to formulate their own research plan, conduct research, and produce a thesis.

Learning activities outside of classroom : Students are required to read assigned papers and prepare for their presentations. Students are expected to study at least 4 hours outside of classroom.

Grading Criteria:

In-Class presentations....40%

In-Class participation....40%

Term paper....20%

OTR700B7

国際日本学研究 I

伊藤 達也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

受講生の博士論文テーマを報告し、討論をすることによって、博士論文の完成を目指す。受講生は基本的に授業内で博士論文の構想、準備状況を発表する。同時に共同調査を実施する。

【到達目標】

適切な博士論文が作成できるようになる。具体的には、博士論文を作成するための適切な知識、適切な説明論理、適切な説明能力を獲得し、適切なオリジナリティを有した博士論文の作成ができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は受講生の発表と共同調査を行う。研究内容の報告については、授業内のやりとりで対応する。共同調査については、最後に提出してもらったレポートの評価を行い、受講生に返却する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	ゼミの運営についての議論を行う。
第 2 回	研究内容の報告（1）と論文の作成技法	受講生の発表と論文の作成技法について説明を行う。
第 3 回	研究内容の報告（2）と文献検索方法	受講生の発表と文献検索方法について説明を行う。
第 4 回	研究内容の報告（3）と発表レジュメ	受講生の発表と発表レジュメについて説明を行う。
第 5 回	研究内容の報告（4）と日本語の文法	受講生の発表と日本語の文法について説明を行う。
第 6 回	共同調査（1）－アンケート調査（1）－	フィールドワークを行う。アンケート調査の実施（1）
第 7 回	共同調査（2）－アンケート調査（2）－	フィールドワークを行う。アンケート調査の実施（2）
第 8 回	共同調査（3）－公的機関への訪問（1）－	フィールドワークを行う。関係公的機関への訪問（1）
第 9 回	共同調査（4）－公的機関への訪問（2）－	フィールドワークを行う。関係公的機関への訪問（2）
第 10 回	共同調査（5）－アンケート調査のとりまとめ－	フィールドワークを行う。アンケート調査のとりまとめを行う。
第 11 回	共同調査（6）－公的機関での聞き取り調査のとりまとめ－	フィールドワークを行う。公的機関での聞き取り調査のとりまとめを行う。
第 12 回	研究内容の報告（5）と説明順序の説明（1）	受講生の発表と説明順序「単純ストーリー」の重要性について説明を行う。
第 13 回	研究内容の報告（6）と説明順序の説明（2）	受講生の発表と説明順序「クロスストーリー」の重要性について説明を行う。
第 14 回	研究内容の報告（7）と結論	受講生の発表と結論の中の「提案と願望」について説明を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。自らの研究課題に対しての準備をしっかりと行うこと。具体的には、先行研究の読破、説明論理の獲得、分析手段の獲得、調査の実施、調査結果のとりまとめと分析などである。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しない。

【参考書】

別途、授業内で提示する。

【成績評価の方法と基準】

発表：50 % 討論：50 % 十分な準備が大前提となる。問題、論点の明確化された発表の評価が高い。討論は、単純な質問、意見に対する疑問の提示、反論を丁寧に分けて行われることが望ましい。

【学生の意見等からの気づき】

十分な議論の時間の確保に努めます。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 水資源研究、資源環境論、地域経済論

＜研究テーマ＞ 木曽川水系の水資源問題、地域資源の持続可能な利用、地域経済

＜主要研究業績＞

1. 「熊本県五木村における村民意識調査の分析結果と地域再生」法政大学文学部紀要 82 2021
2. 「ダムと環境問題について考えるー川辺川ダム問題を事例にー」都市問題 112-8 2021
3. 「熊本県五木村における観光客の意識調査の分析結果と地域再生」法政大学文学部紀要 83 2021
4. 伊藤達也・小田宏信・加藤幸治編『経済地理学への招待』ミネルヴァ書房 2020
5. 「河童による水辺環境保全運動と地域振興効果ー福岡県久留米市田主丸町を事例にー」水資源・環境研究 32 - 1 2019
6. 「長良川河口堰最適運用方法の模索」法政大学文学部紀要 78 2019
7. 「国土利用」（岡橋秀典・伊藤達也共著）（経済地理学会編『キーワードで読む経済地理学』原書房 2018）
8. 「環境問題への地理学のかかわり」（竹中克行編『人文地理学への招待』ミネルヴァ書房 2015）

【Outline (in English)】

(Course outline) (Learning Objectives) We aim to complete the doctoral dissertation by reporting and discussing the doctoral thesis theme of the students. Students basically present the concept and preparation status of their doctoral dissertations in class. Conduct joint surveys at the same time. Be able to create appropriate doctoral dissertations. Specifically, students will acquire appropriate knowledge, appropriate explanatory logic, and appropriate explanatory skills to write doctoral dissertations, and will be able to write doctoral dissertations with appropriate originality.

(Learning activities outside of classroom) The preparation study and review time for this class is 2 hours each as the standard. Be prepared for your research projects. Concretely, students read the preceding research, acquire the explanation logic, acquire the analysis means, execute the investigation, and summarize and analyze the investigation result, etc.

(Grading Criteria /Policy) Presentation: 50% Discussion: 50%

Well prepared is a major prerequisite. The evaluation of the presentation with the clarification of the problem and the issue is high. It is desirable that discussions be conducted in a carefully divided manner: simple questions, questions about opinions, and rebuttals.

OTR700B7

国際日本学研究Ⅱ

伊藤 達也

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

受講生の博士論文テーマを報告し、討論をすることによって、博士論文の完成を目指す。受講生は基本的に授業内で博士論文の構想、準備状況を発表する。同時に共同調査を実施する。

【到達目標】

適切な博士論文が作成できるようになる。具体的には、博士論文を作成するための適切な知識、適切な説明論理、適切な説明能力を獲得し、適切なオリジナリティを有した博士論文の作成ができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は受講生の発表と共同調査を行う。研究内容の報告については、授業内のやりとりで対応する。共同調査については、最後に提出してもらったレポートの評価を行い、受講生に返却する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	ゼミの運営についての議論
第2回	研究内容の報告（1）と研究題名	受講生の発表と研究題名について説明する。
第3回	研究内容の報告（2）と研究目的	受講生の発表と研究目的における「オリジナリティの重要性」について説明する。
第4回	研究内容の報告（3）と方法論	受講生の発表と経済地理学の方法論、地域事例の理論について説明する。
第5回	研究内容の報告（4）と先行研究	受講生の発表と理論をたどる先行研究の重要性、類型化について説明する。
第6回	共同調査（1）ーアンケート調査（1）ー	フィールドワークを行う。アンケート調査の実施（1）
第7回	共同調査（2）ーアンケート調査（2）ー	フィールドワークを行う。アンケート調査の実施（2）
第8回	共同調査（3）ー公的機関への訪問（1）ー	フィールドワークを行う。関係公的機関への訪問（1）
第9回	共同調査（4）ー公的機関への訪問（2）ー	フィールドワークを行う。関係公的機関への訪問（2）
第10回	共同調査（5）ーアンケート調査の取りまとめー	フィールドワークを行う。アンケート調査の取りまとめを行う。
第11回	共同調査（6）ー公的機関での聞き取り調査の取りまとめー	フィールドワークを行う。公的機関での聞き取り調査の取りまとめを行う。
第12回	研究内容の報告（5）と引用文献の表示方法	受講生の発表と引用文献の表示方法について説明する。
第13回	研究内容の報告（6）と注の付け方	受講生の発表と注の付け方について説明する。
第14回	研究内容の報告（7）と構成表	受講生の発表と構成表について説明する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

自らの研究課題に対する準備をしっかりと行うこと。具体的には、先行研究の読破、説明論理の獲得、分析手段の獲得、調査の実施、調査結果のとりまとめと分析などである。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しない。

【参考書】

別途、授業内で提示する。

【成績評価の方法と基準】

発表：50 % 討論：50 % 十分な準備が大前提となる。問題、論点の明確化された発表の評価が高い。討論は、単純な質問、意見に対する疑問の提示、反論を丁寧に分けて行われることが望ましい。

【学生の意見等からの気づき】

十分な議論の時間の確保に努めます。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 水資源研究、資源環境論、地域経済論

＜研究テーマ＞ 木曾川水系の水資源問題、地域資源の持続可能な利用、地域経済

＜主要研究業績＞

1. 「熊本県五木村における村民意識調査の分析結果と地域再生」法政大学文学部紀要 82 2021

2. 「ダムと環境問題について考える－川辺川ダム問題を事例に－」都市問題 112-8 2021

3. 「熊本県五木村における観光客の意識調査の分析結果と地域再生」法政大学文学部紀要 83 2021

4. 伊藤達也・小田宏信・加藤幸治編『経済地理学への招待』ミネルヴァ書房 2020

5. 「河童による水辺環境保全運動と地域振興効果－福岡県久留米市田主丸町を事例に－」水資源・環境研究 32 - 1 2019

6. 「長良川河口堰最適運用方法の模索」法政大学文学部紀要 78 2019

7. 「国土利用」（岡橋秀典・伊藤達也共著）（経済地理学会編『キーワードで読む経済地理学』原書房 2018）

8. 「環境問題への地理学のかかわり」（竹中克行編『人文地理学への招待』ミネルヴァ書房 2015

【Outline (in English)】

(Course outline) (Learning Objectives) We aim to complete the doctoral dissertation by reporting and discussing the doctoral thesis theme of the students. Students basically present the concept and preparation status of their doctoral dissertations in class. Conduct joint surveys at the same time. Be able to create appropriate doctoral dissertations. Specifically, students will acquire appropriate knowledge, appropriate explanatory logic, and appropriate explanatory skills to write doctoral dissertations, and will be able to write doctoral dissertations with appropriate originality.

(Learning activities outside of classroom) The preparation study and review time for this class is 2 hours each as the standard. Be prepared for your research projects. Concretely, students read the preceding research, acquire the explanation logic, acquire the analysis means, execute the investigation, and summarize and analyze the investigation result, etc.

(Grading Criteria /Policy) Presentation: 50% Discussion: 50% Well prepared is a major prerequisite. The evaluation of the presentation with the clarification of the problem and the issue is high. It is desirable that discussions be conducted in a carefully divided manner: simple questions, questions about opinions, and rebuttals.

OTR700B7

国際日本学研究 I

小口 雅史

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

課程博士としての論文を仕上げるために、その構想から執筆、全体の調整をへて1つにまとめていく過程全体を徹底的に支援してもらうための演習である。

【到達目標】

最終的に博士論文をまとめるために、年に最低でも2本程度（できれば3本の脱稿を目指す）の論文を執筆出来るように努力する。ときおり高度な模範論文を輪読して、論理的な論文の書き方を会得することも目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業形式は対面授業を原則とする。基本的には博士課程の院生が輪番で毎回論文文化したい一つのテーマを選び、先行研究のまとめ、利用する史料とその解釈を紹介しながら、一つの論文になるよう報告してもらう。ときおり名著とされる日本古代史関係の古典的論文を取り上げて、参加者全員で輪読することも実施する。また既修者による論文構想過程についても紹介してもらう。

発表へのフィードバックについては、次の授業の初めに、前回の授業で提出資料からいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整。
第2回	博士課程院生による論文発表(1)	賜姓源氏経済をめぐる1 禄令位田
第3回	博士課程院生による論文発表(2)	賜姓源氏経済をめぐる2 禄令位封
第4回	博士課程院生による論文発表(3)	賜姓源氏経済をめぐる3 禄令
第5回	博士課程院生による論文発表(4)	賜姓源氏経済をめぐる4 荘園
第6回	博士課程修了者による論文発表(1)	渤海とは何か
第7回	博士課程修了者による論文発表(2)	日渤海交渉の歴史定義
第8回	博士課程修了者による論文発表(3)	日渤海交渉の変質
第9回	博士課程修了者による論文発表(4)	日中外交儀礼の特徴
第10回	博士課程院生による論文発表(5)	日本古代の駅制とは何か
第11回	博士課程院生による論文発表(6)	日本古代駅制・駅路の特質
第12回	博士課程院生による論文発表(7)	駅伝制・伝馬制の検討
第13回	博士課程院生による論文発表(8)	中国と日本の古代交通制度の比較
第14回	春学期の総括	これまで発表した成果について相互批判する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に発表要旨を配布してもらうので、それを熟読してから参加すること。

発表者の事前準備は標準的に 2 時間。受講生の手前準備は標準的に 1 時間を要する。

【テキスト（教科書）】

使用しない。

【参考書】

その都度指定する。

【成績評価の方法と基準】

最終的に脱稿した論文の完成度によって評価する（90 %）。演習中における他の発表者への指摘内容についても考慮することがある（10 %）。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本古代史

<研究テーマ>

日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史

<主要研究業績>

2010 年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』

2008 年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院

2008 年、『近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって』『古文書研究』66

2007 年、『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後－ FileMaker による Database の Web 公開の一例として』『漢字文献情報処理研究』8

【Outline (in English)】

Course outline : To finish the research as a doctorate in the course, Profeesor and seminar students repeatedly discuss the subjects.

Learning Objectives : WAt the end of the course, students are expected to being able to write a doctoral dissertation

Learning activities outside of classroom : Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting . Your study time will be more than five hours for a class.

Grading Criteria /Policies : Grading will be decided based on lab reports (85 %)(%), and the quality of the students' experimental performance in the lab (15 %).

OTR700B7

国際日本学研究Ⅱ

小口 雅史

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

課程博士としての論文を仕上げるために、その構想から執筆、全体の調整をへて1つにまとめていく過程全体を徹底的に支援してもらうための演習である。

【到達目標】

最終的に博士論文をまとめるために、年に最低でも2本程度（できれば3本の脱稿を目指す）の論文を執筆出来るように努力する。ときおり高度な模範論文を輪読して、論理的な論文の書き方を会得することも目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業形式は対面授業を原則とする。基本的には博士課程の院生が輪番で毎回論文文化したい一つのテーマを選び、先行研究のまとめ、利用する史料とその解釈を紹介しながら、一つの論文になるよう報告してもらう。ときおり名著とされる日本古代史関係の古典的論文を取り上げて、参加者全員で輪読することも実施する。また既修了者による論文構想過程についても紹介してもらう。発表へのフィードバックについては、次の授業の初めに、前回の授業で提出資料からいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整
第2回	博士課程院生による論文発表(1)	大化前代氏姓制度の特質 1 負名氏
第3回	博士課程院生による論文発表(2)	大化前代氏姓制度の特質 2 膳部
第4回	博士課程院生による論文発表(3)	大化前代氏姓制度の特質 3 陶部
第5回	博士課程院生による論文発表(4)	大化前代氏姓制度の特質 4 服部
第6回	博士課程修了者による論文発表(1)	外交儀礼の日唐比較
第7回	博士課程修了者による論文発表(2)	外交儀礼の歴史的意味
第8回	博士課程修了者による論文発表(3)	渤海と新羅の比較
第9回	博士課程修了者による論文発表(4)	遣唐使と新羅使の比較
第10回	博士課程修了者による論文発表(5)	俘囚とはなにか
第11回	博士課程修了者による論文発表(6)	俘囚移配の特質
第12回	博士課程修了者による論文発表(7)	夷俘と俘囚の違い
第13回	博士課程修了者による論文発表(8)	律令国家の北方政策
第14回	秋学期の総括	発表者による相互批判と論文文化の成果報告

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に発表要旨を配布してもらうので、それを熟読してから参加すること。

発表者の事前準備は標準的に 2 時間。受講生の手前準備は標準的に 1 時間を要する。

【テキスト（教科書）】

使用しない。

【参考書】

その都度指定する。

【成績評価の方法と基準】

最終的に脱稿した論文の完成度によって評価する（90 %）。演習中における他の発表者への指摘内容についても考慮することがある（10 %）。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につきとくになし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

日本古代史

＜研究テーマ＞

日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史

＜主要研究業績＞

2010 年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』

2008 年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院

2008 年、『近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって』『古文書研究』66

2007 年、『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後－FileMaker による Database の Web 公開の一例として』『漢字文献情報処理研究』8

【Outline (in English)】

Course outline : To finish the research as a doctorate in the course, Profeesor and seminar students repeatedly discuss the subjects.

Learning Objectives : WAt the end of the course, students are expected to being able to write a doctoral dissertation

Learning activities outside of classroom : Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting . Your study time will be more than five hours for a class.

Grading Criteria /Policies : Grading will be decided based on lab reports (85 %)(%), and the quality of the students' experimental performance in the lab (15 %).

OTR700B7

国際日本学研究 I

小林 ふみ子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

受講生の関連分野の研究動向を分析しながら、博士論文の完成に至るまでの各自の研究の意義と進捗を確認する。

【到達目標】

受講生各自が自身の研究の意義を考えつつ、博士論文完成に向けて発表を重ねて研究を進め、学期に少なくとも 1 論文をしあげる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的に各自、成果を 2～4 週に 1 度程度報告します。オンラインか対面か、状況によって相談しましょう。演習時にコメントするほか、執筆した原稿を添削して返却します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	現状の確認	各自が現状と今年度の論文執筆目標を報告しあう。
第 2 回	学生の報告 1	研究の現状と課題を報告し、助言しあう
第 3 回	学生の報告 2	同上 2
第 4 回	学生の報告 3	同上 3
第 5 回	学生の報告 4	同上 4
第 6 回	学生の報告 5	同上 5
第 7 回	学生の報告 6	同上 6
第 8 回	学生の報告 7	同上 7
第 9 回	学生の報告 8	同上 8
第 10 回	学生の報告 9	同上 9
第 11 回	学生の報告 10	同上 10
第 12 回	学生の報告 11	同上 11
第 13 回	学生の報告 12	同上 12
第 14 回	学生の報告 13	同上 13

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
ひたすら論文執筆と学会報告準備を！

【テキスト（教科書）】

適宜助言する。

【参考書】

適宜助言する。

【成績評価の方法と基準】

論文執筆状況で評価する（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。互いに率直に意見しあうのは大歓迎です。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近世文芸、文化

＜研究テーマ＞戯作と挿絵、絵本、江戸東京

＜ 2020-21 年の主要業績＞

「南畝の狂歌の評価軸」『近世文芸』113 号 2020 年（査読付）

「四方赤良こと大田南畝判『狂歌角力草』稿本解題・翻刻」『法政大学文学部紀要』81 号

「文政期前後の風景画入狂歌本の出版とその改題・再印—浮世絵風景版画流行の前史として」『浮世絵芸術』179 号 2020（査読付）

共編・執筆『水都としての東京とヴェネツィア』（2022 法政大学出版局）

『墨水四時雑詠』（2021 太平書屋）
『最後の文人 石川淳の世界』（2021 集英社・集英社新書）
『趣味の歴史 江戸東京からたどる』（2020 文学通信）
みなさんもがんばって書きましょう！

【Outline (in English)】

Reporting and discussing each student's academic activities

OTR700B7

国際日本学研究Ⅱ

小林 ふみ子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

受講生の関連分野の研究動向を分析しながら、各自の研究の意義と進捗を確認する。

【到達目標】

受講生各自が自身の研究の意義を考えつつ、博士論文に向けて発表を重ねて研究を進める。学期に少なくとも1論文を書くことを目標とする。演習での発表にコメントし、執筆した論文は添削して返却する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

学生の報告と議論で進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	現状の確認	各自が現状と今年度の論文執筆目標を報告しあう。
第2回	学生の報告1	研究の現状と課題を報告し、助言しあう
第3回	学生の報告2	同上
第4回	学生の報告3	同上
第5回	学生の報告4	同上
第6回	学生の報告5	同上
第7回	学生の報告6	同上
第8回	学生の報告7	同上
第9回	学生の報告8	同上
第10回	学生の報告9	同上
第11回	学生の報告10	同上
第12回	学生の報告11	同上
第13回	学生の報告12	同上
第14回	学生の報告13	同上

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
ひたすら論文執筆と学会報告準備を！

【テキスト（教科書）】

適宜助言する。

【参考書】

適宜助言する。

【成績評価の方法と基準】

論文執筆状況で評価する（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。互いに率直に意見しあうのは大歓迎です。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近世文芸、文化
＜研究テーマ＞最近は、プロジェクトの関係で
江戸東京の地理や地誌をやっています。

【Outline (in English)】

Reporting and discussing each student's academic activities

OTR700B7

国際日本学研究 I

小秋元 段

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文およびその過程における学会発表原稿、投稿論文原稿の執筆に向けた各種研究について錬磨するとともに、日本文学研究に携わるうえで必要な書誌学の基礎についても講義する。

【到達目標】

博士論文およびその過程における学会発表原稿、投稿論文原稿の完成。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講者の口頭発表・討論を行うとともに、研究の指導、原稿の添削指導については、授業時およびオフィスアワーで実施する。授業は来校できない学生がいることも考慮し、ハイフレックス方式で実施する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	基礎発表 1（太平記）	『太平記』に関する発表・討論。
第 2 回	基礎発表 2（平家物語）	『平家物語』に関する発表・討論。
第 3 回	基礎発表 3（平家物語）	『平家物語』に関する発表・討論。
第 4 回	書誌学の基礎 1（概説）	本の歴史と形態について講義する。
第 5 回	書誌学の基礎 2（応用）	本の歴史と形態について講義する。
第 6 回	学会発表指導 1（太平記）	『太平記』に関する学会発表指導。
第 7 回	学会発表指導 2（平家物語）	『平家物語』に関する学会発表指導。
第 8 回	学会発表指導 3（平家物語）	『平家物語』に関する学会発表指導。
第 9 回	書誌学の基礎 3（版本の基礎）	版本の歴史について講義する。
第 10 回	書誌学の基礎 4（版本の応用）	版本の歴史について講義する。
第 11 回	学会誌投稿論文指導 1（太平記）	『太平記』に関する学会誌投稿論文添削指導。
第 12 回	学会誌投稿論文指導 2（平家物語）	『平家物語』に関する学会誌投稿論文添削指導。
第 13 回	学会誌投稿論文指導 3（平家物語）	『平家物語』に関する学会誌投稿論文添削指導。
第 14 回	夏期休業に向けての研究計画指導	今後の研究計画についての指導。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
基礎発表、学会発表、学会誌投稿論文の準備。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

なし。

【成績評価の方法と基準】

発表（50 %）、論文（50.0 %）の完成度。

【学生の意見等からの気づき】

授業時間以外の場でも指導の時間を設けるので、積極的に取り組んでもらいたい。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉中世文学、書誌学

〈研究テーマ〉軍記物語、中世～近世初頭の出版

〈主要研究業績〉『太平記・梅松論の研究』（汲古書院、2005 年）、『校訂京大本太平記』（共編、勉誠出版、2011 年）、『太平記をとらえる』第 1～3 巻（共著、笠間書院、2014～16 年）、『増補太平記と古活字版の時代』（新典社、2018 年）

【Outline (in English)】

In this course, I will advise graduate students on their papers and lecture on basic bibliography. The goals of this course are to complete the paper. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Final grade will be calculated according to the following process: Mid-term report (50%) and paper (50 %).

OTR700B7

国際日本学研究Ⅱ

小秋元 段

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文およびその過程における学会発表原稿、投稿論文原稿の執筆に向けた各種研究について錬磨するとともに、日本文学研究に携わるうえで必要な書誌学の基礎についても講義する。

【到達目標】

博士論文およびその過程における学会発表原稿、投稿論文原稿の完成。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講者の口頭発表・討論を行うとともに、研究の指導、原稿の添削指導については、授業時およびオフィスアワーで実施する。授業は来校できない学生がいることも考慮し、ハイフレックス方式で実施する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	基礎発表1（太平記）	『太平記』に関する発表・討論。
第2回	基礎発表2（平家物語）	『平家物語』に関する発表・討論。
第3回	基礎発表3（平家物語）	『平家物語』に関する発表・討論。
第4回	書誌学の基礎1（写本の基礎）	写本の書誌をとる。
第5回	書誌学の基礎2（写本の応用）	写本の書誌をとる。
第6回	学会発表指導1（太平記）	『太平記』に関する学会発表指導。
第7回	学会発表指導2（平家物語）	『平家物語』に関する学会発表指導。
第8回	学会発表指導3（平家物語）	『平家物語』に関する学会発表指導。
第9回	書誌学の基礎3（版本の基礎）	版本の書誌をとる。
第10回	書誌学の基礎4（版本の応用）	版本の書誌をとる。
第11回	学会誌投稿論文指導1（太平記）	『太平記』に関する学会誌投稿論文添削指導。
第12回	学会誌投稿論文指導2（平家物語）	『平家物語』に関する学会誌投稿論文添削指導。
第13回	学会誌投稿論文指導3（平家物語）	『平家物語』に関する学会誌投稿論文添削指導。
第14回	春期に向けての研究計画指導	今後の研究計画についての指導。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
基礎発表、学会発表、学会誌投稿論文の準備。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

なし。

【成績評価の方法と基準】

発表（50 %）、論文（50.0 %）の完成度。

【学生の意見等からの気づき】

授業時間以外の場でも指導の時間を設けるので、積極的に取り組んでもらいたい。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉中世文学、書誌学

〈研究テーマ〉軍記物語、中世～近世初頭の出版

〈主要研究業績〉『太平記・梅松論の研究』（汲古書院、2005年）、『校訂京大本太平記』（共編、勉誠出版、2011年）、『太平記をとらえる』第1～3巻（共著、笠間書院、2014～16年）、『増補太平記と古活字版の時代』（新典社、2018年）

【Outline (in English)】

In this course, I will advise graduate students on their papers and lecture on basic bibliography. The goals of this course are to complete the paper. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Final grade will be calculated according to the following process: Mid-term report (50%) and paper (50%).

OTR700B7

国際日本学研究 I

尾谷 昌則

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代日本語研究で博士論文を書くための知識および研究方法を学ぶ

【到達目標】

(1) 意味論・語用論・統語論の基礎概念を理解し、適切な具体例を用いて説明できるようになる。(2) それらの分野における様々な研究・分析・論証の方法を理解し、自身でも実践できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

学会誌などに掲載された学術論文を精読し、言語学における基礎概念や分析方法について学ぶ。

▼必要に応じて、ZOOMを用いたオンライン授業を行う。その場合は、学習支援システムの「お知らせ」で URL や事前課題などを連絡する。チャット機能を利用した双方向授業になるため、通信環境を整えておくこと。

▼課題やリアクションペーパー等における良いコメント・質問は授業内で紹介・フィードバックして、さらなる議論に活かす。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	論文について	論文の構成について
第 2 回	論文レポート 1	名詞 受講生による発表・討論の意味拡張
第 3 回	論文レポート 2	動詞 受講生による発表・討論の意味拡張
第 4 回	論文レポート 3	形容 受講生による発表・討論詞の意味拡張
第 5 回	論文レポート 4	接続 受講生による発表・討論詞の意味拡張
第 6 回	論文レポート 5	語用 受講生による発表・討論論と意味論
第 7 回	論文レポート 6	語用 受講生による発表・討論論推論
第 8 回	論文レポート 7	ボラ 受講生による発表・討論イトネス
第 9 回	論文レポート 8	イン 受講生による発表・討論ボライトネス
第 10 回	論文レポート 9	対人 受講生による発表・討論的モダリティ
第 11 回	論文レポート 10	対 受講生による発表・討論事的モダリティ
第 12 回	論文レポート 11	若 受講生による発表・討論者ことば
第 13 回	論文レポート 12	文 受講生による発表・討論末表現
第 14 回	論文レポート 13	受講生による発表・討論ネットスラング

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回課題となる学術論文を読み、分からない概念・専門用語について事前に調べておくこと（2時間程度）。論文の根幹である問題提起・主張・根拠が分かるように、要約を A4 用紙一枚に書くこと（1時間程度）。当日の授業で質問できるように、論文への反論・疑義・その他不備と思われる点をまとめておく（1時間程度）。

【テキスト（教科書）】

読む論文のリストは初回授業で配布する。

【参考書】

『新編 認知言語学キーワード事典』（辻幸夫、研究社）
『ことばの認知科学事典』（辻幸夫編集、大修館書店）
『日本語学キーワード事典』（小池清治ほか編著、朝倉書店）
『言語学大辞典』（三省堂）
『日本語文法大辞典』（山口明穂・秋本守英編著、明治書院）
『日本語学研究事典』（飛田良文ほか編著、明治書院）
『語用論キーターム事典』（今井邦彦監訳、開拓者）

【成績評価の方法と基準】

宿題 40 % 発言等受講態度 30 % 期末レポート 30 %

【学生の意見等からの気づき】

博士論文のテーマだけに絞らず、言語学全般についての理解・知識が深められるコースワークになるよう、幅広い内容の研究論文を取り上げよう心がけている。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現代日本語における意味論、文法論、語用論、認知言語学

<研究テーマ>

認知言語学からみた意味拡張、文法化、構文ネットワーク

<主要研究業績>

「アマルガム構文としての『全然』+肯定」に関する語用論的分析」（『言葉と認知のメカニズム』pp.103-115. ひつじ書房、2008 年）

「構文文法の歴史的背景と今後の展望」（『人間情報学研究』第 11 巻、pp.25-43. 2006 年）

「接続詞ケドの手続き的意味」（『語用論研究』第 7 号、pp.17-30. 2005 年）

『構文ネットワークと文法 ―認知文法論のアプローチ』（共著、研究社、2011 年）

【Outline (in English)】

We will read the academic papers on (cognitive) linguistics, semantics and pragmatics.

The objectives of this class are as follows. (1) To understand the outline of the paper and make a summary of it. (2) To understand how to use the linguistic concepts or theory for the linguistic analysis.

Students will be expected to have completed the required assignments before each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.

Grading will be decided based on assignments (40%), the quality of the students' experimental performance in the lab (30%), and the final report (30%).

OTR700B7

国際日本学研究Ⅱ

尾谷 昌則

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代日本語の意味を分析するための手法を学ぶ

【到達目標】

(1) 意味論の専門用語・諸概念について理解し、説明できる。(2) 意味を研究するための様々な分析手法を理解し、実践できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

学会誌などに掲載された学術論文を精読し、意味研究における基礎概念や分析方法について学ぶ。

▼必要に応じて、ZOOMを用いたオンライン授業を行う。その場合は、学習支援システムの「お知らせ」でURLや事前課題などを連絡する。チャット機能を利用した双方向授業になるため、通信環境を整えておくこと。

▼課題やリアクションペーパー等における良いコメント・質問は授業内で紹介・フィードバックして、さらなる議論に活かす。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	はじめに	意味を分析する上での諸注意
第2回	論文レポート1 多義	受講生による発表・討論
第3回	論文レポート2 メタファー	受講生による発表・討論
第4回	論文レポート3 ニミー	受講生による発表・討論
第5回	論文レポート4 キーマとプロトタイプ	受講生による発表・討論
第6回	論文レポート5 ネットワーク	受講生による発表・討論
第7回	論文レポート6 拡張と動的用法基盤モデル	受講生による発表・討論
第8回	論文レポート7 文法化と意味変化	受講生による発表・討論
第9回	論文レポート8 主体化と文法化	受講生による発表・討論
第10回	論文レポート9 語用論的強化と文法化	受講生による発表・討論
第11回	論文レポート10 接続詞と文法化	受講生による発表・討論
第12回	論文レポート11 尾辞と文法化	受講生による発表・討論
第13回	論文レポート12 否定表現の拡張	受講生による発表・討論
第14回	論文レポート13 コーパスと定量的分析	受講生による発表・討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回課題となる学術論文を読み、分からない概念・専門用語について事前に調べておくこと（2時間程度）。論文の根幹である問題提起・主張・根拠が分かるように、要約をA4用紙一枚に書くこと（1時間程度）。当日の授業で質問できるように、論文への反論・疑義・その他不備と思われる点をまとめておく（1時間程度）。

【テキスト（教科書）】

読む論文のリストは初回授業で配布する。

【参考書】

『認知言語学研究の方法 ― 内省・コーパス・実験』（辻幸夫監修、ひつじ書房）
『日本語教育のためのコーパス調査入門』（李在鎬・石川慎一郎・砂川有里子著、くろしお出版）
『新編 認知言語学キーワード事典』（辻幸夫、研究社）
『ことばの認知科学事典』（辻幸夫編集、大修館書店）
『日本語学キーワード事典』（小池清治ほか編著、朝倉書店）
『言語学大辞典』（三省堂）
『日本語文法大辞典』（山口明穂・秋本守英編著、明治書院）
『日本語学研究事典』（飛田良文ほか編著、明治書院）
『語用論キータム事典』（今井邦彦監訳、開拓者）

【成績評価の方法と基準】

宿題 40 % 発言等受講態度 30 % 期末レポート 30 %

【学生の意見等からの気づき】

論文の具体的な書き方が理解できるよう、また博士課程らしい専門性が身につけられるよう、言語（意味）変化について深く理解するための研究論文を取り上げるよう心がけた。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現代日本語における意味論、文法論、語用論、認知言語学

<研究テーマ>

認知言語学からみた意味拡張、文法化、構文ネットワーク

<主要研究業績>

「アマルガム構文としての『全然』+肯定」に関する語用論的分析」（『言葉と認知のメカニズム』pp.103-115. ひつじ書房、2008年）

「構文文法の歴史的背景と今後の展望」（『人間情報学研究』第11巻、pp.25-43. 2006年）

「接続詞ケドの接続的意味」（『語用論研究』第7号、pp.17-30. 2005年）

『構文ネットワークと文法 ― 認知文法論のアプローチ』（共著、研究社、2011年）

【Outline (in English)】

We will read the academic papers on (cognitive) linguistics, semantics and pragmatics.

The objectives of this class are as follows. (1) To understand the outline of the paper and make a summary of it. (2) To understand how to use the linguistic concepts or theory for the linguistic analysis.

Students will be expected to have completed the required assignments before each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.

Grading will be decided based on assignments (40%), the quality of the students' experimental performance in the lab (30%), and the final report (30%).

LIN500B7

国際日本学特殊講義 B I

滝浦 真人

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

“日本語らしさ”とはどのようなもので、またそれはどこから生じてくるかを探っていく。「日本語学」の本や授業で触れたことのある事柄でも、そのどこがどう“日本語らしい”のかを考えることは、日本語を複眼的に見ることを可能にしてくれるだろう。春学期は、文字、音、語、文といった言語学的単位に沿いながら、ひと味違った角度からトピックを眺めていく。

【到達目標】

- (1) 日本語が漢字をどのように取り入れたかを理解し説明できるようになる。
- (2) 日本語の音声をコミュニケーションの観点で理解し説明できるようになる。
- (3) 言語の変化というものの正しい捉え方を理解し説明できるようになる。
- (4) 「ハ」と「ガ」を語り方の構えの相違として理解し説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

毎回、考察のための素材を配布し、受講者自身による考察と講師の解説とを組み合わせながら進行する。授業内で提出する小課題は、グループ・ラインなどを通じて他の受講生の考えも互いに見ながら、ディスカッションし考察していく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	日本語の「性格」とはどういうことかを考え、授業の趣旨や目標を明確にする。
第 2 回	漢字と日本語	日本語が漢字をどのように取り入れたかを見て、そこから漢字使用の日本語らしさを見出す。
第 3 回	日本語の表記	漢字・ひらがな・カタカナを併用することの意味を、それぞれの経緯に遡って考える。
第 4 回	日本語の語種	日本語の語彙を構成する和語・漢語・外来語という語種のもつ機能的相違を探索。
第 5 回	日本語の音とリズム	モーラと音節の相違を理解した上で、日本語のリズムがどう構成されるか考察する。
第 6 回	音象徴と日本語	日本語で好まれる擬音・擬態語を支える音象徴を普遍と特殊の側面から考察する。
第 7 回	日本語のオノマトペ	日本語の擬音・擬態語がもっている語構成的な特徴を探り、その機能を考察する。
第 8 回	連濁と日本語①	連濁が音声現象に見えてそうではないことを、生起／不生起環境の考察から見出す。
第 9 回	連濁と日本語②	連濁の機能を理解した上で、アクセントなどによる類似の機能についても検討する。

第 10 回 位相語

社会的条件や心理的条件などによって言葉が変わる側面に目を向けることを通して、日本社会を考える。

第 11 回 言語変化

若者言葉と言われるような言語変化の進み方を、言語一般の次元に置いて考察する。

第 12 回 ラ抜き言葉

「日本語の乱れ」と言われたラ抜き言葉が、実は長期におよぶ言語変化の一局面だったことを理解する。

第 13 回 「ハ」の語り

日本語の特徴である助詞「ハ」を取り上げ、それを語り方の構えとして考察する。

第 14 回 「ガ」の語り

「ハ」と対比的に用いられる「ガ」を取り上げ、語り方の構えとして比較考察する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
参考書の内容は事前に確認しておき、授業内容に関係の深い箇所について、授業前・授業後に読んで理解を深める習慣をつける。
授業時に配布される資料についても、さらなる考察の出発点として振り返る。

【テキスト（教科書）】

教科書という形では使用しない。毎回授業時に配布する資料を用いる。

【参考書】

滝浦真人編（2020）『日本語学入門』放送大学教育振興会
ほか授業内で指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（授業内での課題やディスカッション等） 60 %
期末レポート 40 %

【学生の意見等からの気づき】

学問する楽しさを伝えられる授業にしたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】

授業資料を印刷すると大部になるため、クラスの共有フォルダを作成し、そこにアップされたファイルを資料として見てもらいながら授業を進めます。受講の際は、パソコンやスマホなど、インターネットに接続できる機器を持参してください。

【その他の重要事項】

昨年度と基本的に同内容なので、去年履修した人は取れません（ゴメン！）。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>言語学・語用論・コミュニケーション論

<研究テーマ>ポライトネス、日本語語用論

<主要研究業績>

滝浦真人（2016）『日本語リテラシー』放送大学教育振興会

滝浦真人（2008）『ポライトネス入門』研究社

【Outline (in English)】

Some characteristics of contemporary Japanese will be considered in terms of how it is used and understood by native speakers. In the spring semester, linguistic functional aspects are focused on.

LIN500B7

国際日本学特殊講義 B II

滝浦 真人

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

“日本語らしさ”とはどのようなもので、またそれはどこから生じてくるかを探っていく。「日本語学」の本や授業で触れたことのある事柄でも、そのどこがどう“日本語らしい”のかを考えることは、日本語を複眼的に見ることを可能にしてくれるだろう。秋学期は、日本語に特徴的な対人関係表現をはじめ「語用論的」な面に着目して、“人が言葉で何をなすか？”について、中国語などとも比較しながら考えていく。

【到達目標】

- (1) 日本語を語用論的に見るための基礎知識を理解する。
- (2) ポライイトネスの考え方を理解し説明することができる。
- (3) 対人関係の表現に関わる諸現象を考察することができる。
- (4) 現代日本語の成立事情を理解し他言語と比較考察できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

毎回、考察のための素材を配布し、受講者自身による考察と講師の解説とを組み合わせながら進行する。授業内で提出する小課題は、グループ・ラインなどを通じて他の受講生の考えも互いに見ながら、ディスカッションし考察していく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	日本語の「性格」とはどういうことかを考え、授業の趣旨や目標を明確にする。
第 2 回	語用論の基本	グライスの協調の原理と会話の原則をはじめ、語用論の基礎知識を再確認する。
第 3 回	効率と配慮	伝達効率と対人配慮が反比例の関係にあることを確認し、具体的に考察する。
第 4 回	ポライイトネス	ポライイトネスの理論的枠組みを理解し、日本語のポライイトネス的性格を考察する。
第 5 回	呼称	対人関係専用の手段として呼称をとらえ、理論的と具体的の両面から考察する。
第 6 回	あいさつ	あいさつという行為の意味に立ち返り、あいさつの意味論と語用論を考察する。
第 7 回	感謝・謝罪	非常に基本的な言語行為を取り上げ、他言語とも対照しつつ日本語らしさを考察する。
第 8 回	依頼・勧誘と応諾・断り	典型的な言語行為の 1 つを取り上げ、他言語とも対照しつつ日本語らしさを考察する。
第 9 回	褒め／褒められ・フェイスイワーク	フェイスに直接関わる言語行為を取り上げ、他言語とも対照しつつ日本語らしさを考察する。
第 10 回	敬語（意味論）	対人関係専用手段としての敬語を取り上げ、それが対人的な〈距離〉の表現として機能していることを理解する。

第 11 回 敬語（語用論）

敬語は人間関係の像を表現するとの考えに立った上で、敬語の語用論を考察する。

第 12 回 授受表現

授受動詞を 3 系列有する日本語話者が、それによって何をやりとりしているのか考察する。

第 13 回 標準語と日本語

近代日本語の成立事情による影響を確認し、日本語のありかたについて考える。

第 14 回 日本語はどこへ向かっているか？

“気になる日本語”がいつも取り沙汰され、敬語などの“馬鹿丁寧化”が感じられる日本語の行く末を考える。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。参考書の内容は事前に確認しておき、授業内容に関係の深い箇所について、授業前・授業後に読んで理解を深める習慣をつける。授業時に配布される資料についても、さらなる考察の出発点として振り返る。

【テキスト（教科書）】

教科書という形では使用しない。毎回授業時に配布する資料を用いる。

【参考書】

滝浦真人（2008）『ポライイトネス入門』研究社
 滝浦真人・大橋理枝（2015）『日本語とコミュニケーション』放送大学教育振興会
 滝浦真人編（2018）『新しい言語学』放送大学教育振興会
 椎名美智（2021）『「させていただく」の語用論』ひつじ書房

【成績評価の方法と基準】

平常点（授業内での課題やディスカッション等） 60 %
 期末レポート 40 %

【学生の意見等からの気づき】

学問する楽しさを伝えられる授業にしたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】

授業資料を印刷すると大部になるため、クラスの共有フォルダを作成し、そこにアップされたファイルを資料として見てもらいながら授業を進めます。受講の際は、パソコンやスマホなど、インターネットに接続できる機器を持参してください。

【その他の重要事項】

昨年度と基本的に同内容なので、去年履修した人は取れません（ゴメン！）。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞言語学・語用論・コミュニケーション論
 ＜研究テーマ＞ポライイトネス、日本語語用論
 ＜主要研究業績＞（参考書に挙げたもの以外で）
 滝浦真人（2013）『日本語は親しさを伝えられるか』岩波書店
 滝浦真人（2005）『日本の敬語論 ポライイトネス理論からの再検討』大修館書店
 加藤重広・滝浦真人編（2016）『語用論研究法ガイドブック』ひつじ書房

【Outline (in English)】

Some characteristics of contemporary Japanese will be considered in terms of how it is used and understood by native speakers. In the fall semester, interpersonal aspects such as politeness and honorifics are focused on.

CUA500B7

国際日本学特殊講義C I

ヤナ・ウルバノヴァー

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の古典文学と和歌、沖縄の琉歌から読み取れる日本の伝統文化について考えていきます。日本の文学と沖縄の文学の比較だけでなく、東洋と西洋の文学、文化、考え方も紹介し、それぞれの特徴について学びます。グローバル世界に置かれている日本の伝統文化の位置付けに関する意識を深め、考察力を促します。

This course focuses on the characteristics of Japanese and Okinawan approach mainly in classical poetry, prose and culture. The topic will be further highlighted by discussing differences in Eastern and Western world views, and by encouraging students to develop and present their own ideas on importance and position of Japanese traditional culture in the global world.

【到達目標】

この授業を通じて次のスキルが獲得できます

1. 代表的な文学作品、表現、修辞法について学ぶことで、その文化や歴史的な背景に関する理解が深まります
2. 日本と沖縄、また東洋と西洋の文化、文学、世界観の特徴に関する知見を養うことができます
3. 学んだことや気付いたことについて各自が意見交換、議論、プレゼンテーションすることによって幅広い考察力を身に付けることができます

Through this course you will acquire the following skills:

1. You will deepen your understanding of Japanese culture, history and literature by studying classical Japanese literary works together with literary devices and expressions
2. You will further enhance your understanding of culture and literature by comparing literary works and cultures of Japan and Okinawa as well as comparing them with Western philosophical and literary approaches
3. You will learn how to express your ideas in speaking and writing by engaging in discussions and presentations and submitting a final essay on a designated topic

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

プリントや映像資料を使用した講義形式での授業を基本としますが、コースの後半において、受講生には、各自が学んだ知識を最大限に活用し、関心のある関連分野について考察した成果を発表してもらう機会を設けます。また、最終回には授業で取り上げたテーマに関するエッセイを提出して頂きます。課題に対する説明やコメント等は授業の最後に行います。そこでは受講生からの質問も受け付けます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業の概略、受講の心構え、成績評価の方法、発表の日程についての説明
第 2 回	日本文学の概要	奈良時代と平安時代を中心とした日本古典文学の代表的な作品やその時代背景の紹介
第 3 回	日本人の自然観	自然を愛する日本人、四季の意味、陰陽思想。自然に見る日本および西洋の文化・考え方の違い

第 4 回	日本美意識における主要な概念	兼好法師による『徒然草』から読み取れる日本文化や文学における美意識の四つの主要な概念
第 5 回	日本の神話世界	『古事記』に見られる古代日本の世界観。日本の神話、ギリシャ神話、聖書から伝わるそれぞれの世界観の特徴と比較
第 6 回	和歌の修辞法	和歌の序詞、枕詞、掛詞の役割。日本の歌と西洋の詩における伝統技法の特徴
第 7 回	物語の世界	作り物語（『竹取物語』）と歌物語（『伊勢物語』）を中心に物語というジャンルの紹介
第 8 回	沖縄の言葉①	琉球列島の言葉と文化の発達。琉球語の中にある沖縄語
第 9 回	沖縄の言葉②	沖縄本島の言葉の特徴、琉歌の言葉と表記法について
第 10 回	琉歌の世界	琉歌の特徴（言葉、形式、作者、伴奏等）、古典音楽と民謡
第 11 回	恩納なべと吉屋つる	琉歌の伝説的な二人の女流歌人の生涯と代表的な琉歌の紹介
第 12 回	和歌と琉歌の表現に見られる類似点	和歌から影響を受けた琉歌における表現、和歌の改作琉歌
第 13 回	和歌と琉歌の表現に見られる特徴	和歌と琉歌に共通する表現におけるそれぞれの観念の違い。たとえば「雪」について
第 14 回	まとめ	これまでの授業で取り上げたテーマの議論。エッセイの提出

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

前回の授業で学んだことを復習し、授業内に行われる発表および最後に提出するエッセイを書くための十分な考察を進めて頂きたい。本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

Please revise all the materials distributed in class, as they will form the basis for the discussions and final essay. In addition, each student will be asked to deliver an oral presentation on a designated topic and to submit a final essay at the end of the semester.

Preparatory study and review time for this class are 2 hours each.

【テキスト（教科書）】

テキストは指定せず、プリントを使用します。

【参考書】

他の参考書については授業の進行にそって、そのつど紹介します。

【成績評価の方法と基準】

平常点（授業への参加、毎時提出するリアクションペーパー、ディスカッションへの参加等、約 30%）、発表（40%）、エッセイ（30%）により評価します。

Grading criteria:

- Active participation in class (expressing opinions, engaging in discussions): 30%
- Oral presentation: 40%
- Final essay: 30%

【学生の意見等からの気づき】

国際的な視点で、伝統文化の重要性および異文化の存在について考察し、意見の交換ができる環境作りに努めます。受講生からのコメントを歓迎します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
<研究テーマ>
<主要研究業績>

【<専門領域>】

日本文学、沖縄の文学、和歌、琉歌、オモロ

【<研究テーマ>】

琉歌の表現研究—和歌やオモロとの比較

【<主要研究業績>】

●「琉歌における「雪」について（下）」（『沖縄文化』123 号（第 52 巻 1 号）、沖縄文化協会、2019 年 6 月）

- 「琉歌における「雪」について（中）」（『沖縄文化』122号（第51巻2号）、沖縄文化協会、2018年3月）
- 「琉歌における「雪」について（上）」（『沖縄文化』121号（第51巻1号）、沖縄文化協会、2017年8月）
- The Four Seasons in Okinawan Ryūka Poetry – Comparison with Classical Waka Poetry and Old Okinawan Omoro Songs. (『沖縄の歌である琉歌における四季について－古典の和歌と沖縄のオモロとの比較－』) (『Studia Orientalia Slovaca (SOS) (スロバキアの東洋研究)』第15巻1号、Comenius University, Department of East Asian Studies (コメニウス大学東アジア研究学科)、2016年)
- 『琉歌の表現研究－和歌・オモロとの比較から－』(森話社、2015年)
- 「オモロと琉歌における「大和」のイメージ」(田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか－江戸から見る自意識の変遷』笠間書院、2015年)

【Outline (in English)】

This course focuses on the characteristics of Japanese and Okinawan approach mainly in classical poetry, prose and culture. The topic will be further highlighted by discussing differences in Eastern and Western world views, and by encouraging students to develop and present their own ideas on importance and position of Japanese traditional culture in the global world.

CUA500B7

国際日本学特殊講義CⅡ

横山 泰子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の絵本文化を、比較文化的な観点から学びます。日本では前近代から子ども向けの絵本が多数出版されており、歴史的に有名な作品は外国語に翻訳されています。絵本文化の伝統をふまえたうえで、日本語の原書と翻訳版の差異を通し、文化の多様性を楽しむことを目的とします。

【到達目標】

例年、日本人学生と留学生の履修が多いクラスであり、互いのコミュニケーション能力を高めることが全体の目標です。学生は授業時間内での発表、翻訳の課題、他者の発表への応答を行い、最終的な期末レポートを書きます。それにより、以下の知識とスキルを身に付けることができます。

＊日本語を母語とする学生は、日本語や英語等を用いながら翻訳やディスカッションに参加することでコミュニケーション能力を高めるとともに、異文化の相手に対して論理的な日本語で絵本文化についての説明ができるようになる。

＊外国人留学生は、日本語や自らの母語能力を活用しながら翻訳やディスカッションに参加することでコミュニケーション能力を高めるとともに、日本の絵本文化について論理的な日本語で説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

日本の絵本についての概要を講義で説明します。その後、課題として受講生一人一人に各自が使用できる言語〔日本語以外〕で書かれた絵本を案内しますので、その文章を自力で日本語に翻訳してもらいます。その翻訳文を授業中に発表、全員での議論を経て、よりよい表現を工夫しながら、異文化理解につとめます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	授業についての説明	シラバス内容の確認とテキストの選定
第2回	日本の絵本史（講義）	日本の絵本の歴史について教員が概略を説明（江戸～明治）
第3回	日本の絵本史（講義）	日本の絵本の歴史について教員が概略を説明（大正以降）
第4回	学生の発表 日本の絵本の絵について	担当者の発表と全体のディスカッション
第5回	学生の発表 日本の絵本の色彩について	担当者の発表と全体のディスカッション
第6回	学生の発表 日本の絵本のテーマについて	担当者の発表と全体のディスカッション
第7回	学生の発表 日本の絵本と漫画について	担当者の発表と全体のディスカッション
第8回	学生の発表 絵本と児童文化について	担当者の発表と全体のディスカッション
第9回	学生の発表 絵本と教育について	担当者の発表と全体のディスカッション

第10回	学生の発表 絵本と言葉遊びについて	担当者の発表と全体のディスカッション
第11回	学生の発表 絵本と大人の関わり	担当者の発表と全体のディスカッション
第12回	学生の発表 社会における絵本の位置づけ	担当者の発表と全体のディスカッション
第13回	学生の発表 絵本の読み聞かせ方	担当者の発表と全体のディスカッション
第14回	全体のまとめ	扱った絵本全体についてのディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備準備・復習時間は講義1回につき1時間程度です。発表があたっている回は、事前に翻訳と音読の準備が求められます。

【テキスト（教科書）】

特にありません

【参考書】

特にありません

【成績評価の方法と基準】

期末レポート50パーセント

平常点（学習状況、発表内容、授業時の参加度）50パーセント

【学生の意見等からの気づき】

昨年度は受講生全員が中国語の話者であったことから、日本語の絵本を学生各自が中国語に翻訳し、文を比較検討する時間を作ってみました。実験的な試みでしたが「日本と中国の文化や言語を比較するのに役だった」というアンケート結果がありました。今後も可能な範囲で、日本語を学生の母語に翻訳する機会を作ります。

【学生が準備すべき機器他】

情報機器

【その他の重要事項】

質問はメールで yyoko@hosei.ac.jp をお願いします。

【担当教員の専門分野等】

<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/16/0001557/profile.html>

【Outline (in English)】

The aim of this course is to help students acquire basic knowledge of comparative history about Japanese children's books.

The goal of this course is to understand the diversity of culture through seeing the differences between originals and the translated books.

Before each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

Your overall grade in this class will be decided based on the following

Term-end report:50%, in class contribution:50%.

PHL500B7

国際日本学特殊講義D I

高田 圭

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業では、「日本を超えて日本を捉える思考と手法」について学ぶ。春学期は、「トランスナショナリズム」をキーワードに日本を世界的な視野で捉える。ナショナル、インターナショナル、移動、ネットワークといった関連する概念と対比させながらトランスナショナルの意味を探究するとともに、国境を越える現象を捉える研究手法を概観した上で、日本のトランスナショナルなかたちを探っていく。

【到達目標】

- トランスナショナリズムの概念を理解する。
- トランスナショナルな視点から日本社会を捉える方法論を習得する。
- 日本のトランスナショナルな現象を学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業は、セミナー形式で実施する。講義、文献講読、プレゼンテーションをベースに討論をおこなう。博士課程の受講者は、2回程度の文献発表が望まれる。学際的、国際的な視点から、互いに学び合う空間を形成する。報告発表へのフィードバックについても、主にディスカッションの場において実施する。その他、個別にフィードバックが必要な場合には、オフィス・アワーを用いる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の進め方
第2回	国民国家とトランスナショナリズム	国民国家とは何かを理解する
第3回	世界システム・世界社会	グローバル社会学の方法を理解する
第4回	グローバル・ヒストリー	グローバル歴史学の方法を理解する
第5回	移動・ネットワーク	隣接概念を理解する
第6回	雑種文化	日本的「雑種文化」を理解する
第7回	地政学的位置	日本文明の地政学的位置を理解する
第8回	国境の越え方	日本的な「国境の越え方」を理解する
第9回	トランスナショナルな語り	「他者」への語り方の問題を考える
第10回	市民社会とトランスナショナリズム	市民社会とトランスナショナリズムを日本の事例から読み解く
第11回	移民とトランスナショナリズム	移民とトランスナショナリズムを日本の事例から読み解く
第12回	文化のトランスナショナリズム	文化とトランスナショナリズムを日本の事例から読み解く
第13回	観光のトランスナショナリズム	観光とトランスナショナリズムを日本の事例から読み解く
第14回	まとめ	全体の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 受講者は文献を読み、討論に備えて準備する。
- 報告者は、文献を丹念に読み込み、重要なポイント・イントロをまとめ、関連する情報を追加調査し、問題提起を含めた報告を準備する。
- 博士課程の受講者は、2回程度の文献発表が望まれる。

- 本授業の準備(予習)および復習時間は、各 2 時間を標準とする
か、文献および研究報告をする週には、さらに 2 時間程度の準備の時間が、必要な場合がある。

【テキスト(教科書)】

セバスチャン・コンラード、2021 年『グローバル・ヒストリー：批判的歴史叙述のために』岩波書店
加藤周一、1974 年『雑種文化 日本の小さな希望』講談社
加藤周一、丸山眞男他編、2004 年『日本文化のかくれた形』岩波書店
西川長夫、2004 年『国境の越え方』平凡社
など

【参考書】

授業内で必要に応じて提示。

【成績評価の方法と基準】

- 授業参加・発言: 20%
- プレゼンテーション: 40%
- 最終レポート: 40%

【学生の意見等からの気づき】

初回授業のため特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

授業の詳細については初回授業にて説明する。

【担当教員の専門分野等】

< 専門領域 >

政治社会学、歴史社会学、文化社会学、国際日本学

< 研究テーマ >

- 日本の市民社会と社会運動

- グローバル化と日本の社会変容

< 近年の主要著書 >

- 「コスモポリタンなアカデミック・パブリクスと 国際日本学 ―誰に向けて、どのように日本を語るか―」『国際日本学』第 19 号、2022 年、27-60 頁。

- 「グローバル地域研究としての国際日本学 ―日本を超えて、日本をとらえる、思考と手法―」『国際日本学』第 18 号、2021 年、3-36 頁。

- "The Japanese Global Sixties in Isolation: Towards a Global Historical Sociology of the Sixties " in 1968 - A Global Approach, Europejskie Centrum Solidarno  ci, 2020, pp. 137 - 155.

- "Connecting with the First or the Third World? Two Paths Toward the Cross-National Movement Mobilization in the Japanese Global Sixties" Moving the Social: Journal of Social History and the History of Social Movements, 63, 2020, pp. 65-90, Klartext publishers.

- "Escaping through the Networks of Trust: The U.S. Deserter Support Movement in the Japanese Global Sixties" The Sixties: A Journal of History, Politics and Culture , 10(2), 2017, pp. 165-181, Taylor & Francis.

【None】

None

【None】

None

【None】

None

【None】

None

【Outline (in English)】

In recent years transnationalism has been a thriving approach for understanding phenomena that cut across national borders in social science and humanities. This course examines Japan through such a transnational lens. We will first learn different theoretical and methodological approaches to transnationalism. Then, we explore various debates over Japanese transnationalism by the Japanese authors along with cases of transnational phenomena between Japan and foreign countries.

PHL500B7

国際日本学特殊講義 D II

高田 圭

実務教員：

【授業の概要と目的(何を学ぶか)】

本授業では、「日本を超えて日本を捉える思考と手法」について学ぶ。秋学期は、欧米と日本の社会思想、社会理論の比較、理論化を通じて日本を世界的な視野で捉える。西洋の普遍主義の問題、西洋と非西洋の二項対立といった大枠を踏まえた上で、比較や理論化の手法について学ぶ。また具体的な比較、理論化の例として、全体主義の思想および市民性・公共性の問題などを予定している。

【到達目標】

-理論・思想の意味と意義を理解する。
-普遍主義の問題、西洋と非西洋の思想的緊張関係を理解する。
-思想・理論の比較を通じて日本への理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

本授業は、セミナー形式で実施する。講義、文献講読、プレゼンテーションをベースに討論をおこなう。博士課程の受講者は、2 回程度の文献発表が望まれる。学際的、国際的な視点から、互いに学び合う空間を形成する。報告発表へのフィードバックについても、主にディスカッションの場において実施する。その他、個別にフィードバックが必要な場合には、オフィス・アワーを用いる。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】
あり/Yes

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業の進め方
第 2 回	理論と思想	日本研究における理論と思想を理解する
第 3 回	普遍主義と複数性	Universality と Multiplicity について理解する
第 4 回	比較と理論化	比較の方法、理論化の方法について理解する
第 5 回	西洋と非西洋、西洋と日本	西洋と非西洋の二項対立を考える
第 6 回	西洋の全体主義の思想	文献を通じてドイツの全体主義の思想を理解する
第 7 回	西洋の全体主義への反省の思想	文献を通じてドイツの全体主義への反省を理解する
第 8 回	日本の全体主義の思想	文献を通じて日本の全体主義の思想を理解する
第 9 回	日本の全体主義への反省の思想	文献を通じて日本の全体主義への反省を理解する
第 10 回	西洋の市民社会の理論	文献を通じて西欧の市民社会の理論を理解する
第 11 回	西洋の公共圏の理論	文献を通じて西欧の公共圏の理論を理解する
第 12 回	日本の市民社会の理論	文献を通じて日本の市民性の理論を理解する
第 13 回	日本の公共圏の理論	文献を通じて日本の公共圏の理論を理解する
第 14 回	まとめ	全体総括

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

- 受講者は文献を読み、討論に備えて準備する。
- 報告者は、文献を丹念に読み込み、重要なポイントをまとめ、関連する情報を追加調査し、問題提起を含めた報告を準備する。

- 本授業の準備(予習)および復習時間は、各 2 時間を標準とする
か、文献および研究報告をする週には、さらに 2 時間程度の準備の時間が必要場合がある。

【テキスト(教科書)】

丸山眞男、2006 年『現代政治の思想と行動』未来社
ハンナ・アーレント、2017 年『全体主義の起源 3』みすず書房
池上英子、2005 年『美と礼節の絆 日本における交際文化の政治的起源』NTT 出版
ユルゲン・ハーバマス、1994 年『公共性の構造転換』未来社
酒井直樹、2017 年『ひきこもりの国民主義』岩波書店
イマニュエル・ウォーラーステイン、2008 年『ヨーロッパの普遍主義—近代世界システムにおける構造的暴力と権力の修辞学』明石書店
など

【参考書】

適宜授業内で提示する。

【成績評価の方法と基準】

- 授業参加・発言: 20%
- プレゼンテーション: 40%
- 最終レポート: 40%

【学生の意見等からの気づき】

初回授業のため特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

授業の詳細については初回授業にて説明する。

【担当教員の専門分野等】

< 専門領域 >

政治社会学、歴史社会学、文化社会学、国際日本学

< 研究テーマ >

- 日本の市民社会と社会運動
- グローバル化と日本の社会変容

< 近年の主要著書 >

- 「コスモポリタンなアカデミック・パブリクスと 国際日本学 —誰に向けて、どのように日本を語るか—」『国際日本学』第 19 号、2022 年、27-60 頁。

- 「グローバル地域研究としての国際日本学 —日本を超えて、日本をとらえる、思考と手法—」『国際日本学』第 18 号、2021 年、3-36 頁。

- "The Japanese Global Sixties in Isolation: Towards a Global Historical Sociology of the Sixties " in 1968 - A Global Approach, Europejskie Centrum Solidarność, 2020, pp. 137 - 155.

- "Connecting with the First or the Third World? Two Paths Toward the Cross-National Movement Mobilization in the Japanese Global Sixties" Moving the Social: Journal of Social History and the History of Social Movements, 63, 2020, pp. 65-90, Klartext publishers.

- "Escaping through the Networks of Trust: The U.S. Deserter Support Movement in the Japanese Global Sixties" The Sixties: A Journal of History, Politics and Culture, 10(2), 2017, pp. 165-181, Taylor & Francis.

【None】

None

【None】

None

【None】

None

【None】

None

【Outline (in English)】

In this course, we will examine Japan through a comparative theoretical lens. There has long been a complex and challenging issue while employing western-based theory to capture Japan - whether or not the Western theory can apply to non-western Japan. To understand the intricate relationship between Japanese studies and usage of theory, we

will start with debates over universalism and particularism as well as the west and the rest dichotomy. Then we devote sessions to examine works by Japanese and western thinkers who examined similar theoretical problems and compare their differences and similarities

HIS500B7

国際日本学特殊講義 E I

得能 壽美

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

琉球からみた東アジアとの関係史を、琉球・中国・日本の基本的な史料講読を中心に考察する。

【到達目標】

- (1) 近代琉球を考えるために必要な中国・日本・琉球の史料を読解できるようになる。
- (2) それらの読解から得た知識をも利用して、琉球史を考えることができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

前半は琉球史の概括的な理解と、史料の全体的な把握にあたる。後半は、琉球史料から、その読解方法を学びつつ、東アジアにおける関係史をみる。基本的には講義だが、史料講読に際しては、習熟度によっては担当部分を決めて報告を求め、講評や解説を行なう。また、個別の疑問にも答える。また、必要に応じて史料を追加することもある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	琉球史入門	講義の紹介と、琉球・中国・日本の関係史を概括的にみる
2	日本史と琉球史の史料論	日本史研究と琉球史研究における史料論と、その相違
3	古琉球期史料にみる対外関係（中国・日本古代史料）	古代の琉球をめぐる中国と日本の史料について
4	古琉球史料にみる対外関係（歴代宝案・朝鮮王朝実録・琉球史料）	中世の琉球をめぐる中国・朝鮮・琉球の史料について
5	近世琉球史料にみる対外関係（島津関係史料）	1609 年以降の島津による琉球統治関係史料について
6	近世琉球史料にみる対外関係（琉球史料）	いわゆる日中両属に関する琉球史料について
7	史料講読 中山世譜・中山世鑑・球陽	史料講読。首里王府編纂史料にみる近世琉球のありかた
8	史料講読 羽地仕置	史料講読。羽地朝秀の施策にみる琉球の立場と政治的転換
9	史料講読 御教条	史料講読。蔡温の琉球史の認識と立場
10	史料講読 農務帳と絵画史料	史料講読。近世琉球の農業政策と絵画にみる農業
11	史料講読 尚家文書	史料講読。王家文書の概要と利用
12	史料講読 評定所文書	史料講読。首里王府最高議決機関の史料
13	史料講読 琉球家譜史料	史料講読。琉球士族の家譜を読む
14	史料講読 地方史料と在台湾琉球関係史料	史料講読。琉球内政関係と、台湾で確認されている琉球関係史料について

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。全体的に下記で示す参考書を読む。毎回の授業では史料等を配布する。該当する史料の概要について、事前に調べる。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。史料等を配布する。

【参考書】

『沖縄からアジアが見える』比嘉政夫 岩波ジュニア新書
『アジアのなかの琉球王国』高良倉吉 吉川弘文館（歴史文化ライブラリー 47）
『琉球王国』高良倉吉 岩波新書
『沖縄入門－アジアをつなぐ海域構想』浜下武志 ちくま新書

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 % レポート 50 %
毎回の史料の性格と内容が異なり、当該史料から解説を繰り返すことがないので、出席を重視する。平常点は、史料講読に積極的にあたること、授業の内容にとって有益な議論や質問を用意できること、史料批判や史料に即した議論ができることなどを考慮する。レポートでは、それぞれの研究テーマに即しつつ、琉球史からみた対外関係史の理解度を確認し、さらに史料による考察を加えてほしい。

【学生の意見等からの気づき】

毎回、時間の許す限り、史料の読み方などを基礎から説明する。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン、プロジェクター

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 琉球史 近世史
<研究テーマ> 八重山地域史、生業と民衆生活史、史料論
<主要研究業績>
『近世八重山の民衆生活史－石西礁湖をめぐる海と鳥々のネットワーク－』単著（榕樹書林 2007 年 316 頁）
『日本近世生活絵引 奄美・沖縄編』編集・分担執筆（神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター 2014）
『八重山の歴史と文化、自然』分担執筆（沖縄県石垣市教育委員会 2015）
「明和天津波の被害概要と復旧・復興」『最新科学が明かす明和天津波』南山舎 2020

【Outline (in English)】

The history of Ryukyu relations with East Asia is considered while reading Ryukyu historical materials.

HIS500B7

国際日本学特殊講義 E II

得能 壽美

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

琉球からみた東アジアとの関係史を、具体的な論考で使用した史料を確認しつつ考察を進める。論文作成のための課題設定、史料調査の方法、史料の所在なども、具体的事例をもとに講義する。

【到達目標】

史料について理解と読解能力を身に付けられるようにする。日本史とは異なる琉球史の方法と史料によって、学生自身の研究テーマにもそくして、新たな研究テーマの創成を考えられるようにする。個別の発表を求め、講評・解説、論文作成までできればと考える。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

具体的な論考に使用した史料を講読しつつ、近世琉球の生産と税制、物流を、具体的な産物を取りあげて、東アジアにおよぶ広がりをみる。史料講読から新たな研究テーマを創成し、その報告を求めることも考えたい。また、必要に応じて史料を追加することもある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	琉球史入門	講義の概要と、琉球・中国・日本の関係史を概説する
2	近世琉球産品の由来と島産化Ⅰ	東アジアにおける技術などの移動
3	近世琉球産品の由来と島産化Ⅱ	琉球国内の島産化の展開と商品流通
4	ナマコⅠ	琉球関係史料にみる生産と上納
5	ナマコⅡ	薩摩・幕府への献上と中国との貿易
6	海人草	近世琉球の専売制、近現代における生産・流通
7	上布	人頭税と八重山上布
8	木綿Ⅰ	伝搬と栽培の広がり
9	木綿Ⅱ	近世における利用と商品としての展開
10	ジュゴン	近世の税制・捕獲・信仰
11	イノシシ	近世における害獣駆除と利用
12	牛馬	近世の利用と規制
13	アダン	近世における上納と民衆生活での利用
14	パインナップル	近代の導入事情と展開

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。
全体的に下記で示す参考書を読む。

【テキスト（教科書）】

「移動するナマコと変化するその役割」（得能、『琉球・沖縄研究』第 3 号）など、それぞれのテーマに関連した論文のコピーを配布する。

【参考書】

『琉球王国』高良倉吉 岩波新書

『琉球・沖縄史の世界』豊見山和行（編）吉川弘文館（日本の同時代史 18）

『近世八重山の民衆生活史』得能壽美 榕樹書林

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 % レポート 50 %

毎回の史料の性格と内容が異なり、当該史料から解説を繰り返すことがないので、出席を重視する。平常点は、史料講読に積極にあたること、授業の内容にとって有益な議論や質問を用意できること、史料批判や史料に即した議論ができることなどを考慮する。レポートでは、琉球史からみた対外関係史の理解度を確認するとともに、新たな研究テーマについて提案してほしい。

【学生の意見等からの気づき】

毎回、時間の許す限り、史料の読み方を解説する。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン、プロジェクター

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 琉球史 近世史

<研究テーマ> 八重山地域史、生業と民衆生活史、史料論

<主要研究業績>

『近世八重山の民衆生活史－石西礁湖をめぐる海と島々のネットワーク』単著（榕樹書林 2007 年 316 頁）

『日本近世生活絵引 奄美・沖縄編』編集・分担執筆（神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター 2014）

『八重山の歴史と文化、自然』分担執筆（石垣市教育委員会 2015）

「明和大津波の被害概要と復旧・復興」『最新科学が明かす明和大津波』南山舎 2020

【Outline (in English)】

The history of Ryukyu relations with East Asia is considered while reading Ryukyu historical materials.

HIS500B7

国際日本学特殊講義 F I

明田川 融

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

沖縄戦（1945 年）から四分の三世紀が、そして沖縄の「本土復帰」（1972 年）から半世紀がたつ。沖縄に対する米国の軍事植民地意識、そして日本本土の構造的差別は消え去っていない—むしろ、2015 年後半からの、日本政府による名護市辺野古への米海兵隊普天間飛行場移設強行のようすをみていると、そうした差別は、より執拗になってさえいるように思われる。

本授業では、沖縄・日本本土・米国の、ときに引き合い、ときに反撥し合う力学が、戦後沖縄の形成にどのような影響を及ぼしたかを解き明かす糸口を学生とともに探りたい。「戦後」とはさしあたり、プロローグとしての沖縄戦から冷戦期までを扱う。

【到達目標】

学生は、戦後沖縄の対外関係について、近年の外交文書をはじめとする史料公開によって実証的に目覚ましい進展を示している研究業績を系統だてて検討することができ、さらに、その検討を踏まえたうえで、戦後沖縄の対外関係について新たなイメージを紡ぎだすことができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

以下に列挙するトピックを道標に、基本文献と史資料の精読、および学生中心の討論によって進めていく。

第 2 回目以降、授業のはじめに、前回授業で教員が課したレポート等の課題に対する個々の受講生の解答からいくつか取りあげ、受講生全体に対するフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	なぜ沖縄戦は闘われたか	日米両国の戦略における沖縄の位置づけを探る。
第 2 回	恩賜の民権／恢復の民権	沖縄と本土における初期占領政策を比較研究する。
第 3 回	沖縄とマッカーサーの「平和」憲法	制定過程のウラにある「沖縄要塞化」構想について考察する。
第 4 回	昭和天皇「沖縄メッセージ」の深淵	昭和天皇にとって「沖縄」とは何であり、何でなかったのかを考える。
第 5 回	講和問題のなかの沖縄	対日講和をめぐって噴出する帰属論の位相を整理する。
第 6 回	「潜在主権」論	対日講和条約第 3 条の前提をなす「潜在主権」とは誰が何のために発案したのかを検討する。
第 7 回	海兵隊と核の島の形成	冷戦期を象徴する「海兵隊と核の島」＝沖縄は、どのように形成されたのかを跡づける。
第 8 回	軍用地問題の生起と展開	「土地を守る四原則」（立法院請願決議）を軸に軍用地問題とは何であったのかを考えてみる。
第 9 回	沖縄の「赤狩り」	極東の軍事拠点沖縄で起こった人民党非法化の動きは、沖縄戦後史ばかりでなく冷戦史の文脈でいかなる意味をもつのか検討する。

第 10 回 南と北の領土問題

日ソ国交回復交渉に対して米国は、「日本が二島返還でソ連に譲歩するなら米国は沖縄をもらう」と干渉した。この北と南の領土問題の形成過程を調べてみる。

第 11 回 沖縄と安保改定

沖縄という視点から 60 年安保改定を捉えなおす。

第 12 回 沖縄返還交渉の公約・違約・密約

外務省による「いわゆる密約」調査の結果も踏まえながら、沖縄返還交渉を検証してみる。

第 13 回 沖縄が怒った日

1970 年 12 月におこったコザ騒動とは戦後沖縄にとって何であったのか考える。

第 14 回 「安保」から「同盟」への変容と沖縄

「安保」が「同盟」へと変容するなか、日本の役割も基地提供に「行動」や「思いやり予算」を伴うものへと変わっていくが、沖縄については何が変わり、何が変わらなかったのか。この問題を検討してみたい。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

大学設置基準によれば、この授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間が標準となる。そのうえで、百聞は一見に如かず。米空軍嘉手納基地、同海兵隊普天間飛行場、キャンプ・ハンセン、日米両政府が普天間飛行場の代替施設建設を「粛々と、強行している名護市辺野古崎など、沖縄基地問題の現場を各自が実際に訪れ、感じることで望ましい。

「国際日本学特殊講義 F II」も履修することが望ましい。

【テキスト（教科書）】

古典のなかの古典といえますが、さしあたり手ごろな通史として中野好夫・新崎盛暉『沖縄戦後史』（岩波書店、1976 年）、および新崎『沖縄現代史』（岩波書店、2005 年）、ならびに宮里政玄ほか編著『戦後沖縄の政治と法— 1945-72 年』（東京大学出版会、1975 年）を、また、沖縄をめぐる日米関係史について書かれた研究として、河野康子『沖縄返還をめぐる政治と外交—日米関係史の文脈』（東京大学出版会、1994 年）、宮里『日米関係と沖縄— 1945-1972』（岩波書店、2000 年）、沖縄国際大学公開講座委員会編集・発行『基地をめぐる法と政治』（2006 年）、我部政明『戦後日米関係と安全保障』（吉川弘文館、2007 年）、平良好利『戦後沖縄と米軍基地 「受容」と「拒絶」のはざま— 1945-1972 年』（法政大学出版局、2012 年）、および中島琢磨『沖縄返還と日米安保体制』（有斐閣、2012 年）を挙げておきます。近年の示唆にとむ研究成果として、鳥山淳『沖縄基地社会の起源と相克 1945-1956』（勁草書房、2013 年）および大野光明『沖縄闘争の時代 1960 / 70』（人文書院、2014 年）ならびに櫻澤 誠『沖縄現代史—米国統治、本土復帰から「オール沖縄」まで』（中央公論新社、2015 年）、さらに野添文彬『沖縄返還後の日米安保—米軍基地をめぐる相克』吉川弘文館、2016 年もぜひ一読されたい。

【参考書】

拙著『沖縄基地問題の歴史—非武の島、戦の島』（みすず書房、2008 年）。

【成績評価の方法と基準】

出席状況や授業中のコメントなどによる平常点（100 %）

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムを活用したり、オンラインによる授業に参加できるような機器およびネット環境

【その他の重要事項】

重要なお知らせ（2022 年 2 月 8 日）

新型コロナ禍により、授業の開始日や方法等につき重要な連絡がなされる可能性がありますので、受講生は本 Web シラバスおよび学習支援システムを小まめにチェックするようにしてください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日米関係史、日本政治外交史

<研究テーマ> 日米地位協定の成立過程
沖縄と日米安保体制の歴史
日本と核兵器との関係史

<主要研究業績および刊行物>

- ・『日米行政協定の政治史—日米地位協定研究序説—』法政大学出版局、1999 年。
- ・『沖縄基地問題の歴史—非武の島、戦の島—』みすず書房、2008 年（第 30 回沖縄協会・沖縄研究奨励賞 [社会科学部門] 受賞）。
- ・『日米地位協定—その歴史と現在—』みすず書房、2017 年。
- ・波多野澄雄・河野康子監修（明田川補）『沖縄返還関係資料』（第 1 回配本分、全 7 巻）現代史料出版、2017 年。
- ・『核兵器と『国民の特殊な感情』』1～6（雑誌『みすず』に 2013 年 6 月号より 2015 年 8 月まで不定期連載）。
- ・ジョン・ハーシー『ヒロシマ 増補版』法政大学出版局、2003 年（共訳）。
- ・ジョン・W. ダワー著『昭和 戦争と平和の日本』みすず書房、2010 年（監訳）。
- ・ジョン・W. ダワー／ガバン・マコーマック著『転換期の日本へ「パックス・アメリカナ」か「パックス・アジア」か』NHK 出版、2014 年（共訳）。
- ・『占領期年表 1945-1952 年 沖縄・憲法・日米安保』創元社、2015 年（監修）。

近年、広島・長崎・ビキニを経験した日本の核兵器に対する国民感情、と政府の安全保障政策との連関について研究をまとめるべく、資料収集や分析視覚の検討を行っている。

また、1950 年代半ばの沖縄で米軍により強行された土地強制収用にさいして、住民代表である立法院（県議会のような組織）がなしたと、なしえなかったことの実証にも取り組んできた。

現在は、波多野澄雄・筑波大学名誉教授および河野康子・法政大学名誉教授ならびに平良好利・中京大学准教授らによる監修で刊行が進められている沖縄施政権返還交渉関係資料集成の編集補佐がおもな仕事となっている。

【Outline (in English)】

【Course outline】

Seventy years have passed from the battle in Okinawa, and fifty years from the reversion of Okinawa. Okinawa still seems to be under U.S. military colonialism. It suffers structural discrimination by the people of Japan proper as well. In post-war Okinawa and foreign relations 1, we consider and discuss the dynamism that formed post-war Okinawa. In this class, post-war means the period from the battle in Okinawa to the end of the cold war.

【Learning objectives】

The goal of this course is to understand Ryukyu/Okinawa and its foreign relations after World War II.

【Learning activities outside of classroom】

Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

【Grading criteria/policy】

Your overall grade in the class will be decided based on the following

In class contribution:100%

HIS500B7

国際日本学特殊講義 F II

明田川 融

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

これまで沖縄には在日米軍専用基地が著しく偏在してきた。その基地には米軍が排他的管理権を行使し、さらに、基地の外の軍用機事故等に対する捜査・検分から日本側が排除されることも少なくない。また、1972 年の施政権返還まで、米軍構成員・軍属・それらの家族に琉球民裁判所の裁判権は及ばず、施政権返還後も日本側の裁判権行使はままならない。本授業で学生は、これらの事柄に象徴される「戦後」沖縄が負わされた日米地位協定問題をめぐる日米琉関係の歴史を考察することになる。

【到達目標】

学生は、戦後沖縄の対外関係について、近年の外交文書をはじめとする史料公開によって実証的に目覚ましい進展を示している研究業績を系統だてて検討することができ、さらに、その検討を踏まえたうえで、戦後沖縄の対外関係について新たなイメージを紡ぎだすことができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

以下に列挙するテーマを道標に、基本文献と史資料の精読、および学生中心の討論によって進めていく。

第 2 回目以降、授業のはじめに、前回授業で教員が課したレポート等の課題に対する個々の受講生の解答からいくつか取りあげ、受講生全体に対するフィードバックを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	対象	「軍人・軍属・それらの家族」をめぐる琉・米・日関係について考察し、議論する。
第 2 回	基地設定条項の形成	全土基地方式の形成をめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。
第 3 回	基地設定をめぐる諸問題	全土基地方式の展開をめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。
第 4 回	管理権条項の形成	排他的管理権の形成をめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。
第 5 回	管理権をめぐる諸問題	排他的管理権の展開をめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。
第 6 回	受け入れ国法令	受け入れ国国内法令の適用をめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。
第 7 回	裁判条項の形成	刑事裁判権規定（第 17 条）の形成をめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。
第 8 回	日本側一次裁判権放棄密約	受け入れ国の一次裁判権放棄取り決めをめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。
第 9 回	被疑者の公訴前身柄引き渡し問題	被疑者引き渡しをめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。
第 10 回	負担分担条項の形成	「思いやり予算」の成立をめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。

第 11 回 「思いやり予算」をめぐる政治過程	「思いやり予算」の展開をめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。
第 12 回 環境	環境保全をめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。
第 13 回 合議組織	日米合同委員会をめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。
第 14 回 改定	協定改定問題をめぐる琉・米・日関係について考察・議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

大学設置基準によれば、この授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間が標準となる。そのうえで、百聞は一見に如かず。米空軍嘉手納基地、同海兵隊普天間飛行場、キャンプ・ハンセン、日米両政府が普天間飛行場の代替施設建設を「肅々と、強行している名護市辺野古崎など、沖縄基地問題の現場を各自が実際に訪れ、感じるものが望ましい。

【テキスト（教科書）】

特になし

【参考書】

さしあたり、近年に刊行された以下の文献を挙げておく。
拙著『日米地位協定 その歴史と現在』みすず書房、2017 年。
山本章子『日米地位協定 在日米軍と「同盟」の 70 年』中央公論新社、2019 年。
信夫隆司『米軍基地権と日米密約 奄美・小笠原・沖縄返還を通して』岩波書店、2019 年。
信夫隆司『米兵はなぜ裁かれないのか』みすず書房、2021 年。

【成績評価の方法と基準】

出席状況や授業中のコメントなどによる平常点（100 %）

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムを活用したり、オンラインによる授業に参加できるような機器およびネット環境

【その他の重要事項】

重要なお知らせ（2022 年 2 月 8 日）
新型コロナ禍により、授業の開始日や方法等につき重要な連絡がなされる可能性がありますので、受講生は本 Web シラバスおよび学習支援システムを小まめにチェックするようにしてください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日米関係史、日本政治外交史
<研究テーマ> 日米地位協定の成立過程
沖縄と日米安保体制の歴史
日本と核兵器との関係史
<主要研究業績および刊行物>
・『日米行政協定の政治史—日米地位協定研究序説—』法政大学出版局、1999 年。
・『沖縄基地問題の歴史—非武の島、戦の島—』みすず書房、2008 年（第 30 回沖縄協会・沖縄研究奨励賞【社会科学部門】受賞）。
・『日米地位協定—その歴史と現在—』みすず書房、2017 年。
・波多野澄雄・河野康子監修（明田川補）『沖縄返還関係資料』（第 1 回配本分、全 7 巻）現代史料出版、2017 年。
・「核兵器と『国民の特殊な感情』」1～6（雑誌『みすず』に 2013 年 6 月号より 2015 年 8 月まで不定期連載）。
・ジョン・ハーシー『ヒロシマ 増補版』法政大学出版局、2003 年（共訳）。
・ジョン・W. ダワー著『昭和 戦争と平和の日本』みすず書房、2010 年（監訳）。
・ジョン・W. ダワー／ガバン・マコーマック著『転換期の日本へ「パックス・アメリカナ」か「パックス・アジア」か』NHK 出版、2014 年（共訳）。
・『占領期年表 1945-1952 年 沖縄・憲法・日米安保』創元社、2015 年（監修）。

近年、広島・長崎・ビキニを経験した日本の核兵器に対する「国民感情」と政府の安全保障政策との連関について研究をまとめるべく、資料収集や分析視覚の検討を行っている。

また、1950 年代半ばの沖縄で米軍により強行された土地強制収用にさいして、住民代表である立法院（県議会のような組織）がなされたことと、なしえなかったことの実証にも取り組んできた。

現在は、波多野澄雄・筑波大学名誉教授および河野康子・法政大学名誉教授ならびに平良好利・中京大学准教授らによる監修で刊行が進められている沖縄施政権返還交渉関係資料集成の編集補佐がおもな仕事となっている。

【Outline (in English)】

【Course outline】

United States military bases in Japan unevenly exist in Okinawa prefecture. U.S. armed forces exercise exclusive rights over them. And the Japanese authorities often cannot exercise the right of search or inspection with respect to the accidents of U.S. military aircraft. Before the reversion of Okinawa, Okinawan court could not have criminal jurisdiction over the members of U. S. armed forces, civilian component and their dependents. Even after the reversion, Japanese court often cannot exercise the criminal jurisdiction over them. In post-war Okinawa and foreign relations 2, we consider the U.S.-Japan Status of Forces Agreement (SOFA or Chii-Kyotei) providing the conditions of the stationing of the U.S. military forces. And focusing SOFA problems, we discuss the history of the U.S.-Japan-Ryukyu/Okinawa relations.

【Learning objectives】

The goal of this course is to understand Ryukyu/Okinawa and its foreign relations after reversion of Okinawa.

【Learning activities outside of classroom】

Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

【Grading criteria/policy】

Your overall grade in the class will be decided based on the following

In class contribution:100%

ART500B7

国際日本学特殊講義 G I

高橋 悠介

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の中世には、聖徳太子関連寺院を中心に、太子の伝記が連綿として編まれた。こうした太子伝には、聖徳太子をめぐる伝承のみならず、仏教教説や寺院における注釈学、太子関連の諸寺院の動向など、様々な背景がうかがえる。また、聖徳太子の伝記は絵画化されて絵解きが行われ、特徴的な太子像も造像された。ここでは、後世への影響力の大きかった『聖徳太子伝暦』と、鎌倉後期の『正法輪蔵（聖法輪蔵）』という二つの太子伝から、特徴的な場面を取り上げて、読み比べつつ、これらと関連の深い太子絵伝や太子像などの造形作品について検討したい。

2021年に聖徳太子1400年御遠忌記念として開催された複数の展覧会や新たな研究動向もふまえて授業を行う。

【到達目標】

- ・画像資料とその背景にある文献資料を、複合的に読解する技術を身につける。
- ・寺院圏で成立し享受された文献の性格を学び、これを読解する技術を習得する。
- ・日本の寺院における学問についての基礎知識を身に付け、中世の聖徳太子信仰をはじめ、日本の仏教文化に関する理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

最初は、聖徳太子伝の展開に関する概要と太子関連の造形作品、講読にあたっての基本的な知識について、講義形式で授業を進める。続いて、担当を決め、受講者による報告と討議を行っていく。授業内で議論できなかったことも、リアクションペーパー等の方法により意見を集め、次回に取り上げる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	講義の概要・進め方について説明。
第2回	『聖徳太子伝暦』と太子伝諸本	『聖徳太子伝暦』と太子伝諸本について講義。
第3回	太子絵伝の展開	聖徳太子の伝記の造形化（彫刻・絵画）について講義。
第4回	太子二十四歳条	淡路国に霊木漂着等の記事を講読し、その造形を検討。
第5回	太子二十五歳条	法華経の落字・法興寺落慶等の記事を講読し、その造形を検討。
第6回	聖徳太子と法華経説話	太子伝に限らず幅広く展開した太子の法華経関連説話を検討。
第7回	太子二十六歳条	百濟より阿佐太子来朝等の記事を講読し、その造形を検討。
第8回	太子二十七歳条（一）	黒駒で富士山に登る等の記事を講読し、その造形を検討。
第9回	太子二十七歳条（二）	膳大娘との婚礼・新羅からの孔雀献上等の記事を講読し、その造形を検討。
第10回	太子二十七歳条（三）	甲斐国からの黒駒の献上等の記事を講読し、その造形を検討。
第11回	太子二十八歳条（一）	百濟からの驢、羊、白雉等の献上の記事を講読し、その造形を検討。

- 第12回 太子二十八歳条（二） 太子の地震についての予言等の記事を講読し、その造形を検討。
- 第13回 太子二十九歳条 新羅への派兵等の記事を講読し、その造形を検討。
- 第14回 太子三十歳条 新羅の間諜等捕縛等の記事を講読し、その造形を検討。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。指定した講読文献の当該記事をよく読んで理解すると共に、関連する複数の造形を見て比較検討すること。また、授業中に言及する参考書を読むこと。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。

【参考書】

- ・『東大寺図書館蔵文明十六年書写『聖徳太子伝暦』影印と研究』（桜楓社、1985年）
 - ・『日本庶民文化史料集成』第二巻（三一書房、1974年）
 - ・慶應義塾大学附属研究所道文庫編『中世聖徳太子伝集成』（勉誠出版、2005年）
 - ・『日本の美術 442 中世の童子形』（至文堂 2003年）
 - ・図録『聖徳太子展』（NHK・NHK プロモーション、2001年）
 - ・図録『聖徳太子一日出づる処の天子』（日本経済新聞社、2021年）
- その他、授業の中で指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表50%、平常点50%。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本中世文学・中世宗教思想史・書誌学

<研究テーマ> 中世仏教文学・芸能・寺院資料論

<主要研究業績>

- ・『禅竹能楽論の世界』（慶應義塾大学出版会、2014年）
- ・「荒神の図像について—如来荒神を中心に—」（仏教美術論集第二巻『図像学Ⅰ—イメージの成立と伝承（密教・垂迹）』竹林舎、2012年5月）
- ・「律院称名寺と聖徳太子伝—釋了敏の写本を中心に—」（『説話文学研究』52号、2017年9月）

【Outline (in English)】

This course deals with the biography and image of Prince Shotoku.

At the end of the course, students are expected to become able to read and understand ancient Buddhist documents.

Before/after each class meeting, students will be expected to spend two hours to understand the course content.

Grading will be decided based on lab reports (50%), and in-class contribution (50%).

ART500B7

国際日本学特殊講義 G II

高橋 悠介

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

鎌倉時代を代表する絵巻の傑作『春日権現験記絵』の記事と絵を検討する。この絵巻に収められた春日権現（春日大明神）の霊験譚には、貴顕や南都僧の春日信仰、鎌倉時代の南都の宗教環境、南都僧の教学や儀礼、神仏習合など様々な背景がうかがえる。これまでに、美術史・日本史・日本文学など諸方面で積み重ねられてきた研究史をふまえ、『春日権現験記絵』を講読する。

【到達目標】

- ・寺社圏で成立し享受された文献の性格を学び、これを読解する技術を習得する。
- ・文献と図像資料を複合的に読解する技術を身につける。
- ・『春日権現験記絵』を通して、日本の神仏習合や仏教文化に関する理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

最初は、『春日権現験記絵』と南都の寺社文化についての基本的な知識について、講義形式で授業を進める。続いて、担当を決め、受講者による報告と討議を行っていく。授業内で議論できなかったことも、リアクションペーパー等の方法により意見を集め、次回に取り上げる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	講義の概要・進め方について説明。
第 2 回	春日社と春日曼荼羅	『春日権現験記絵』を講読する上での基礎知識として、春日社の沿革と春日曼荼羅について講義。
第 3 回	『春日権現験記絵』と貞慶の唱導資料	『春日権現験記絵』の成立をめぐる研究史を整理し、特に貞慶とその周辺による春日権現をめぐる霊験の集録との関係について講義。
第 4 回	『春日権現験記絵』巻四（一）	巻四「天狗参入東三条事」「永久春日詣時神託事」と絵の検討。
第 5 回	『春日権現験記絵』巻四（二）	巻四「普賢寺摂政事」「三条内府事」と絵の検討。
第 6 回	『春日権現験記絵』巻四（三）	巻四「後徳大寺左府事」と絵の検討。
第 7 回	『春日権現験記絵』巻五	巻五「俊盛卿事」「季能卿事」と絵の検討。
第 8 回	『春日権現験記絵』巻六（一）	巻六「伯行光事」と絵の検討。
第 9 回	『春日権現験記絵』巻六（二）	巻六「親宗卿事」「蛇吞心経事」と絵の検討。
第 10 回	『春日権現験記絵』巻七（一）	巻七「経通卿事」と絵の検討。
第 11 回	『春日権現験記絵』巻七（二）	巻七「開蓮房夢事」「近真陵王事」「隆季卿家女房夢事」と絵の検討。
第 12 回	『春日権現験記絵』巻八（一）	巻八「清涼寺本尊事」「依唯識論功能遁病難事」と絵の検討。
第 13 回	『春日権現験記絵』巻八（二）	巻八「増利僧都事」「壺和僧都事」と絵の検討。

第 14 回 『春日権現験記絵』巻八「法蔵僧都事」「離寺僧蒙神託事」と絵の検討、及び最後のまとめ。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とします。『春日権現験記絵』の当該記事をその場面の絵と共によく読み、関連説話を含めて利解すること。また、授業中に言及する参考書を読むこと。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。

【参考書】

藤田経世『校刊美術史料 寺院篇上』（中央公論美術出版、1972 年）
『続日本の絵巻 春日権現験記絵』（中央公論社、1991 年）
神戸説話研究会編『春日権現験記絵注解』（和泉書院、2005 年）

【成績評価の方法と基準】

発表 50%、平常点（出席状況等）50%

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本中世文学・中世宗教思想史・書誌学

<研究テーマ> 中世仏教文学・芸能・寺院資料論

<主要研究業績>

- ・「称名寺聖教中の春日関係資料と『春日権現験記絵』」（『説話文学研究』46、2011 年 7 月）
- ・「貞慶をめぐる説話と律院―異砂記・伯行光春日霊験譚」（『説話文学研究』55、2020 年 9 月）
- ・「正楽寺蔵・荒神曼荼羅について―一蔵王権現と習合した忿怒相の荒神像と諸尊」（『寺院文献資料学の新展開 第五巻 中四国諸寺院 I』臨川書店、2020 年 3 月）

【Outline (in English)】

This course deals with the "Kasuga Gongen Genkie" (miraculous stories of Kasuga deity picture scroll).

At the end of the course, students are expected to become able to read and understand ancient Buddhist documents.

Before/after each class meeting, students will be expected to spend two hours to understand the course content.

Grading will be decided based on lab reports (50%), and in-class contribution (50%).

PRI500B7

国際日本学特殊講義 J I

田中 邦佳

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究を進める上で様々な機関が発表している数値データを利用したり、実験を実施して得たデータを使用することがある。そのようなデータは、研究テーマに合わせて分析し、その結果を可視化（グラフ化）して示す必要がある。本授業では演習を通じ、分析の目的によってどのような手法を用いるのが適切か、データ化や可視化における注意点について学ぶ。

【到達目標】

- (1) Excel や R を使用して基本的なデータの処理ができるようになる。
- (2) Excel や R を使用してデータの適切なグラフ化ができるようになる。
- (3) データの種類に応じた適切な分析・可視化ができるようになる。
- (4) 上記の 3 つの項目を踏まえて、参加者各自が関心を持つ研究テーマで用いられている手法の利点を説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義と演習形式で行う。
参加者は、Excel を用いたデータ処理や作図する演習を行い、データの解釈やまとめ方についてディスカッションを行う。授業の最終目標の発表に向け、各自が考えたデータ分析のテーマや可視化の手法について議論する。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定です。授業計画は授業の展開によって若干、変更する可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	Introduction	授業の進め方の説明
第 2 回	データの入力	Excel を使いデータの入力、注意点について
第 3 回	データの代表値の提示	平均値
第 4 回	平均値以外のデータの代表値の提示	中央値・最頻値
第 5 回	データのバラツキの提示	標準偏差
第 6 回	データの集計	集計結果のまとめ方
第 7 回	グラフを用いたデータの可視化	棒グラフ・折れ線グラフ
第 8 回	データの頻度の可視化	ヒストグラム
第 9 回	複数のタイプのデータの可視化	複数の要素が含まれたグラフ
第 10 回	複数のデータを扱うタイプのデータの可視化	散布図
第 11 回	データの量が多い場合の分析	大きなデータの分析
第 12 回	データ分析の結果の言葉での説明	データ分析の結果の文章化
第 13 回	研究テーマに合った分析と可視化	適切な分析手法の選択
第 14 回	総合演習	データ分析のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

参加者は、各種データを読み取って文にまとめたり、数値データをまとめてグラフなどの形に作図し準備しておく必要があります。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

プリントを配布します。

【参考書】

山田剛史, & 村井潤一郎. (2004). よくわかる心理統計. ミネルヴァ書房.

【成績評価の方法と基準】

60%: 平常点（授業への積極的な参加度・課題）

40%: レポート課題

欠席回数が通算 4 回に達した者は単位取得の資格を失う。また授業に積極的に参加する姿勢が見られない場合、欠席と同等の扱いとする。

【学生の意見等からの気づき】

具体的なデータを用いた分析演習の時間をより長く設定します。

【学生が準備すべき機器他】

Microsoft Excel (PC 版) が使える環境。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

第二言語習得

<研究テーマ>

第二言語の音韻習得やリーディングについて

<主要研究業績>

北原真冬・田嶋圭一・田中邦佳『音声学を学ぶ人のための Praat 入門』ひつじ書房 (2017)

川崎貴子・マシューズジョン・田中邦佳「L2 音韻カテゴリーの構築過程における音響の手がかりの利用と抑制—日本語母語話者による英語摩擦音習得—」白畑知彦・須田孝司 編『名詞句と音声・音韻の習得 (第二言語習得モノグラフシリーズ)』くろしお出版.(2017)

【Outline (in English)】

Course outline: In this course, students will learn the basic approach to summarizing data and methods for visualizing data.

Learning Objectives: At the end of the course, students are expected to do the followings:

(1) Reading various types of graphs.

(2) Making graph data according to specific cases.

(3) Reporting data objectively in writing.

Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend two hours to understand the course content.

Grading Criteria /Policy: Final Report 40%, Class Assignment 60%

PRI500B7

国際日本学特殊講義 K I

田中 邦佳

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究を進める上で様々な機関が発表している数値データを利用したり、実験を実施して得たデータを使用することがある。そのようなデータは、研究テーマに合わせて統計学的分析を行う必要がある。本授業では演習を通じ、いくつかの基礎的な統計的手法の仕組みを知り、分析の目的によってどのような手法を用いるのが適切か学ぶ。

【到達目標】

- (1) 基本的な統計手法の仕組みについて理解する。
- (2) 統計的な数値の意味を理解する。
- (3) テーマに応じて適切な統計的分析ができるようになる。
- (4) 上記の 3 つの項目を踏まえて、参加者各自の研究計画でどのような手法を用いるのが適切か提案できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義と演習形式で行う。

参加者は、Excel などを用いたデータ処理や統計に関する演習を行い、データの解釈やまとめ方についてディスカッションを行う。授業の最終目標の発表に向け、各自が考えたデータ分析のテーマや可視化の手法について議論する。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」を通じて行う予定です。授業計画は授業の展開によって若干、変更する可能性があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	Introduction	授業の進め方の説明
第 2 回	記述統計と推測統計	記述統計と推測統計の違い
第 3 回	記述統計で用いた数値	平均・標準偏差
第 4 回	データのバラツキ	正規分布・標準偏差
第 5 回	信頼区間	信頼区間
第 6 回	カイ 2 乗検定	カイ 2 乗検定
第 7 回	カイ 2 乗検定の演習	カイ 2 乗検定の分析演習
第 8 回	t 検定（対応あり）	t 検定（対応あり）
第 9 回	t 検定（対応なし）	t 検定（対応なし）
第 10 回	t 検定の演習	t 検定の分析演習
第 11 回	2 要因の分散分析	2 要因の分散分析
第 12 回	多重比較と交互作用	多重比較と交互作用
第 13 回	言葉での報告	統計結果の文章での報告
第 14 回	総合演習	データの統計的分析のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

参加者は、各種データの分析を行う。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

プリントを配布します。

【参考書】

山田剛史, & 村井潤一郎. (2004). よくわかる心理統計. ミネルヴァ書房.

【成績評価の方法と基準】

60%: 平常点（授業への積極的な参加度・課題）

40%: レポート課題

欠席回数が通算 4 回に達した者は単位取得の資格を失う。また授業に積極的に参加する姿勢が見られない場合、欠席と同等の扱いとする。

【学生の意見等からの気づき】

分析課題を行う時間をより多く設定します。

【学生が準備すべき機器他】

Microsoft Excel (PC 版) が使える環境。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

第二言語習得

＜研究テーマ＞

第二言語の音韻習得やリーディングについて

＜主要研究業績＞

北原真冬・田嶋圭一・田中邦佳『音声学を学ぶ人のための Praat 入門』ひつじ書房 (2017)

川崎貴子・マシューズジョン・田中邦佳「L2 音韻カテゴリーの構築過程における音響の手がかりの利用と抑制—日本語母語話者による英語摩擦音習得—」白畑知彦・須田孝司 編『名詞句と音声・音韻の習得 (第二言語習得モノグラフシリーズ)』くろしお出版.(2017)

【Outline (in English)】

Course outline: In this course, students will learn the basic statistical methods.

Learning Objectives: At the end of the course, students are expected to do the followings:

- (1) Reading various types of graphs.
- (2) Making graph data according to specific cases.
- (3) Reporting data objectively in writing.
- (4) Summarizing some data in a poster

Learning activities outside of classroom: Before/after each class meeting, students will be expected to spend two hours to understand the course content.

Grading Criteria /Policy: Final report (poster) 40%, Class Assignment 60%

LITA500B7

国際日本学特殊講義 L I

倉本 さおり

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代のポップカルチャーはインターネットや SNS をはじめ、テレビ、雑誌、ゲームといった複数の媒体を通じて連動するように浸透し、社会的規範やわたしたちの自己形成にさまざまな影響を与えています。この授業では漫画やアニメ、ライトノベル、映画、ドラマ、2.5 次元舞台、アイドルなどのポップカルチャーを中心に、具体的な作品やコンテンツを取りあげ批評的に鑑賞するスタイルを採用します。さまざまな角度から積極的に楽しみつつ、ときに批判を交えた分析を行うことで、思考停止に陥らず、流動的な現実や個々の社会そのものの在り方を主体的に捉えるための視点や方法を学んでいきます。

【到達目標】

- ・授業中に学んだ視座を応用して自ら問題を発見し、多様なメディアで形作られる情報を用いて、多角的にポップカルチャーについて考えることができるようになる
- ・先行研究を体系的に理解した上で批判的に評価し、論点を整理しながら建設的な意見を述べることができるようになる
- ・異文化間の差異や共通性を踏まえながら、研究上の問題を発見することができるようになる
- ・先行研究を踏まえ、一次資料を発掘して検証しながら、客観的な説得力をそなえた論文を書いたり、口頭発表したりすることができるようになる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

履修生の人数と各自の状況を考慮したうえで、対面での授業を基本としつつオンラインを併用した講義を行う予定です。講義では画像や映像サンプルを用いながら表象分析の具体的な方法をいくつか紹介し、歴史的・文化的な背景を踏まえて諸問題について検討していきます。授業中の質問やコメント、取り上げたいトピックの提案、フィールドワークの希望も歓迎。履修者の意見を取り入れつつ選んだコンテンツを実際に鑑賞し、ディスカッションを行い、ミニレポートの発表等もまじえながら論点を整理していくことで、プレゼン能力も同時に養っていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	授業の進め方について説明したのち、各自「サブカル歴」をまじえつつ自己紹介をしてもらいます。これまで自分がどんな文化の中で育ってきたのか、どんなジャンルやコンテンツに興味があるのか改めて意識することで、サブカルチャーないしポップカルチャーというものの存在がどのような手続きを経て人びとの自己形成に関わっていくのか主体的に確認していきます。
第 2 回	メディアとポップカルチャーの現況	『鬼滅の刃』や『呪術廻戦』といった最新のメガコンテンツをイントロダクションに、「サブカルチャー」と呼ばれてきたものの変遷、そして複数のメディアと連動して成長していく現代ポップカルチャーの特徴について概説します。
第 3 回	大衆とカルチャーと物語	日本の昔噺「桃太郎」と、その受容の歴史、そして現代の広告表現などに見られるイメージの変容を検証しながら、「物語」というものがポップカルチャーにおいてどのように援用／転用されてきたか考えていきます。
第 4 回	ポップカルチャーの諸相 ①（マンガの表現とアニメの表現）	2013 年度文化庁メディア芸術祭マンガ部門優秀賞を受賞した雲田はるこ『昭和元禄落語心中』を教材に、漫画・アニメ化作品それぞれで描かれる落語シーンの演出の違いに着目しつつ、各ジャンルの表現形態の特徴についてディスカッションしながら立体的に検討していきます。

第 5 回	ポップカルチャーの諸相 ②（語り、語り手、枠組み、場の形成）	『昭和元禄落語心中』に登場する落語が落語家によって実際に上演されている様子を「語り」ないし「語り手」という枠組みに注目しながら鑑賞します。その後、前回の授業を踏まえ、「枠組み」や「場」の形成というものがポップカルチャーの中で果たす意味について考えます。
第 6 回	ポップカルチャーの諸相 ③（ストーリーとプロット、物語とオチ）	『昭和元禄落語心中』に登場する演目「死神」と、サゲ（＝落ち）のバリエーションを中心に、第 3 回の授業で検証した「物語」というものの変容について改めて考察を深めていきます。
第 7 回	ミニレポート発表会	これまでの授業を踏まえ、自分が興味のあるモチーフを選び、簡単なレポート発表を行ってもらいます。その後クラス内で論点を洗い出しディスカッションを重ねることで期末レポートに各自フィードバックします。
第 8 回	テキストとコンテキスト ①（文脈と表象）	日本のアニメーション映画『天気の子』（新海誠監督）と韓国の映画『パラサイト』（ポン・ジュノ監督）における〈水〉ないし〈豪雨〉の表象の差異に着目し、同じ言葉やモチーフが異なる文脈に置かれることでまったく別の表象を伴ってたちのぼる事例について検討します。
第 9 回	テキストとコンテキスト ②（ポップカルチャーの文脈）	『天気の子』を実際に鑑賞した上で、前回の授業を踏まえてディスカッションを行い、社会背景とポップカルチャーにおける表象の相関について考察を深めていきます。
第 10 回	テキストとコンテキスト ③（社会背景とポップカルチャー）	『パラサイト』を実際に鑑賞した上で、前回の授業を踏まえてディスカッションを行い、社会背景とポップカルチャーにおける表象の相関について考察を深めていきます。
第 11 回	解釈とアダプテーション ①（アダプテーションの考え方）	田辺聖子の短編小説『ジョゼと虎と魚たち』（1985 年）を読んだうえで、犬童一心監督の実写映画『ジョゼと虎と魚たち』（2003 年）を鑑賞し、原作となったテキストがどのような解釈を経て映像化作品へと翻案されたのか分析していきます。
第 12 回	解釈とアダプテーション ②（時代背景の変化から考える）	前回の授業を踏まえ、タムラコータロー監督のアニメーション映画『ジョゼと虎と魚たち』（2020 年）を鑑賞し、どのようなプロセスを経て翻案に至ったのか、特に時代背景や社会環境の変化に着目しディスカッションしながら考察していきます。
第 13 回	解釈とアダプテーション ③（社会環境の差異から考える）	キム・ジョンガン監督によるリメイク版『ジョゼと虎と魚たち』（2020）を鑑賞し、「テキストとコンテキスト」の回で検討した要素を念頭に入れたうえで、アダプテーションの様相についてディスカッションします。
第 14 回	まとめとレポート指導	期末レポートや研究発表に向け、授業中に提示された視点と論点を整理しつつ、各自の研究テーマを設定、互いにアドバイスします。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業内で扱うコンテンツは各テーマに文献調査や作品鑑賞をはじめ、ポップカルチャーをめぐるニュース、話題になっているコンテンツで気になったものは積極的にメモしておき、授業内での議論に役立ててください。本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

必要に応じて資料を配布します。

【参考書】

※無理にそろえる必要はありません
 ・橋本陽介『ナラトロジー入門——プロップからジュネットまでの物語論』（水声社）
 ・東浩紀『動物化するポストモダン——オタクから見た日本社会』（講談社現代新書）
 ・三原芳秋、渡邊英理、鶴戸聡＝編著『クリティカル・ワード 文学理論 読み方を学び文学と出合いなす』（フィルムアート社）
 ・倉橋耕平『歴史修正主義とサブカルチャー 90 年代保守言説のメディア文化』（青弓社）
 ・堀あきこ、守如子＝編『BL の教科書』（有斐閣）
 ・永田大輔、松永伸太郎＝編『アニメの社会学—アニメファンとアニメ制作者たちの文化産業論』（ナカニシヤ出版）
 ・山田奨治『マンガ・アニメで論文・レポートを書く——「好き」を学問にする方法』（ミネルヴァ書房）
 他、授業ごとに参考書や参考作品を提示します。

【成績評価の方法と基準】

授業への参加態度 20 %、授業内で執筆・提出する課題 30 %、期末レポート 50 %

【学生の意見等からの気づき】

特に対面とオンラインを併用する場合は、個々の学生の発言が建設的な意見交換へとつながるよう、適宜調整を行いながら活発な議論の場を用意する。また授業ごとに論点の整理を行い、議論の足場をわかりやすく設定していく。

【学生が準備すべき機器他】

パソコンやタブレット等、オンライン授業に対応した機器（※難しい場合は応相談）

【その他の重要事項】

本科目は他専攻学生の履修も受け入れます。授業は原則的に教室での対面形式で行う予定ですが、新型コロナウイルスの影響で通学が困難な学生がいることも鑑み、ハイフレックス形式を採用します。

【担当教員の専門分野等】

国内外の小説やマンガを中心に、雑誌や新聞、ラジオ等で書評やポップカルチャー批評を担当。共同通信文芸時評「デザインする文学」、週刊新潮「ベストセラー街道をゆく！」連載中。他、小説トリッパー、ダ・ヴィンチ誌レビューア。『文藝界』新人小説月評（2018）、毎日新聞文芸時評「私のおすすめ」（2019）。TBS ラジオ「文化系トークラジオ Life」サブパーソナリティ。

【Outline (in English)】
(Course outline)

Modern pop culture spreads through multiple media such as the Internet, social media, television, magazines and games, and has various influences on social norms and our self-formation. In this class, you will critically appreciate and discuss pop culture content such as manga, animation, light novels, movies, TV dramas, 2.5dimensional musicals, and idols. By identifying and analyzing problems from various angles, you will learn perspectives and methods for actively grasping dynamic reality and social situations without stopping thinking. (Learning Objectives)

At the end of the course, students are expected to apply the perspectives learned in class to discover problems on their own, and to think about pop culture from multiple perspectives using information formed by a variety of media, and identify research problems based on the differences and commonalities among different cultures. (Learning activities outside of classroom)

In addition to researching literature and viewing art related to each theme, students will be expected to take notes on pop culture-related news and other topics of interest and use them in class discussions. The standard preparation and review time for this class is 2 hours each. (Grading Criteria /Policy)

The overall grade for the class will be determined based on the following Attitude toward class participation: 20%, assignments to be written and submitted in class: 30%, final report: 50%.

LITA500B7

国際日本学特殊講義ⅠⅡ

倉本 さおり

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代のポップカルチャーはインターネットや SNS をはじめ、テレビ、雑誌、ゲームといった複数の媒体を通じて連動するように浸透し、社会的規範やわたしたちの自己形成にさまざまな影響を与えています。後期の授業では「ジェンダー化されたマンガ・コンテンツ」としての側面を持つ『週刊少年ジャンプ』に注目し、現代社会の論点をあぶりだすと共に、ポップカルチャー批評が豊饒な未来へとつながるような提言を模索していきます。

【到達目標】

- ・授業中に学んだジェンダーに関わる視座を応用して自ら問題を発見し、多様なメディアで形作られる情報を用いて、多角的にポップカルチャーについて考えることができるようになる
- ・先行研究を体系的に理解した上で批判的に評価し、論点を整理しながら建設的な意見を述べるができるようになる
- ・異文化間の差異や共通性を踏まえながら、研究上の問題を発見することができるようになる
- ・先行研究を踏まえ、一次資料を発掘して検証しながら、客観的な説得力をそなえた論文を書いたり、口頭発表したりすることができるようになる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

履修生の人数と各自の状況を考慮したうえで、対面での授業を基本としつつオンラインを併用した講義を行う予定です。講義では画像や映像サンプルをふんだんに用いながら表象分析の具体的な方法をいくつか紹介し、歴史的・文化的な背景を踏まえてポップカルチャーとジェンダーをめぐる諸問題について学んでいきます。授業中の質問やコメント、取り上げたいトピックの提案、フィールドワークの希望も歓迎。履修者の意見を取り入れつつ選んだコンテンツを実際に鑑賞し、ディスカッションを行い、論点を整理していくことで、プレゼン能力も同時に養っていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	自己紹介と授業の進め方についての説明。また、ジェンダーをめぐるいくつかの論題を紹介し、サブカルチャーないしポップカルチャーと呼ばれているものから社会規範や人びとの自己認識をかたちづくるプロセスを読み解くための有効な視点や手法について考えていきます。
第 2 回	マンガ雑誌とジェンダー、メディア文化と再帰性	今なお日本で最も発行部数の多い雑誌メディアであり、かつ「(区分上) ジェンダー化されたコミック雑誌」という複合的な性格を有する『週刊少年ジャンプ』の今日に至るまでの位置づけと変化について、国内外のメディアにおける言及のされ方を参照しつつ社会的な文脈から検証します。また、読者アンケートが作品の掲載順や内容にまで影響を及ぼす同メディアの特徴を取り上げ、メディアとコンテンツとコミュニティの流動的な関係性に焦点を当てていきます。
第 3 回	「少年マンガ」と〈成長〉のゆくえ①（バトル形式と物語の展開）	週間発行部数 653 万部を記録し黄金期と呼ばれていた 1990 年代の『週刊少年ジャンプ』掲載作品（鳥山明『ドラゴンボール』、富樫義博『幽遊白書』、井上雄彦『SLUM DUNK』等）を取り上げ、その展開と結末の様相をめぐって噴出した言説から、当時の日本の「少年マンガ」の像がどのような論点を社会に提示したのか考えていきます。
第 4 回	「少年マンガ」と〈成長〉のゆくえ②（ヒーローの相対化）	2014 年から連載中の堀越耕平『僕のヒーローアカデミア』におけるヒーローとヴィラン（≒ 敵役）の描き方に着目し、いくつかの論文を参照しながら、近年の「少年マンガ」がどのような文脈で社会に受容されているか検討していきます。

第 5 回	「少年マンガ」と〈成長〉のゆくえ③（チーム化とロジック化）	2013 年から連載が開始された葦原大介『ワールドトリガー』の構造に着目し、近年の「少年マンガ」が 90 年代に提示された〈バトル〉をめぐる論点をどのような形で更新しようと試みてきたか考えてみます。
第 6 回	「少年マンガ」と〈成長〉のゆくえ④（勝者と敗者の解体）	2012 年から 2020 年にかけて連載され、2.5 次元ミュージカルという分野でも大きな注目を浴びている古舘春一の『ハイキュー!!』368 話「なにもの」にスポットを当て、群像劇としてのスポーツマンガの影響と可能性について多角的に検証していきます。
第 7 回	「少年マンガ」と〈成長〉のゆくえ⑤（ディスカッション）	これまでの授業を踏まえ、自分が影響を受けた／自分が研究対象として興味を持っているコンテンツの主人公／主要キャラクターを取り上げ、その動機付けと物語の展開について、オリエンテーションで紹介した有効な視点を加えながらクラス全体でディスカッションすることで、〈成長〉をめぐるさまざまな表象の在り方を検討していきます。
第 8 回	中間レポート発表会	自分が興味のあるコンテンツや派生したメディアのトピックから期末レポートに向けた論点を見つけ出し、簡単な発表を行っていただきます。
第 9 回	「少年マンガ」とジェンダーロール①（テキストとしてのキャラクター）	週刊少年ジャンプ掲載作品における「役割語」の様相に着目し、テキストとしてのキャラクターが形成されるプロセスについて検証していきます。
第 10 回	「少年マンガ」とジェンダーロール②（「少年マンガ」における女性性）	前回の授業の踏まえつつ、2018 年から連載されている芥見下々『呪術廻戦』における女性キャラクターの様相に着目し、彼女たちがどのようなジェンダーロールを内面化し、あるいはそれを乗り越えようとしているか考察していきます。
第 11 回	「少年マンガ」とジェンダーロール③（ヒーローとヒロイン）	2016 年から 2020 年まで連載されていた白井カイウ原作・出水ぽすか作画『約束のネバーランド』の主人公・エマの造型を逆説的に参照することで、従来の「少年マンガ」の女性キャラクターたちがどんな磁場のもとに登場していたか検証していきます。
第 12 回	「少年マンガ」とジェンダーロール④（ラブコメの類型と逸脱）	過去に掲載されてきた作品のうち「ラブコメ」と呼ばれるジャンルを中心に、読者の反応を参照しつつ、これまで「少年マンガ」の磁場においてジェンダー規範とロマンチック・ラブがどのように受容されてきたか考えていきます。
第 13 回	「少年マンガ」とジェンダーロール⑤（ディスカッション）	これまでの授業を踏まえ、自分が影響を受けた／自分が研究対象として興味を持っているコンテンツを取り上げ、そのキャラクター造型や物語の構造について有効な視点を加えながらクラス全体でディスカッションすることで、〈ジェンダー〉をめぐるさまざまな表象の在り方を検討していきます。
第 14 回	まとめとフィードバック	期末レポートに向け、授業中に提示された視点と論点を整理しつつ、各自の研究テーマを設定・発表し、互いにアドバイスします。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業内で扱うコンテンツは各テーマに文献調査や作品鑑賞をはじめ、ポップカルチャーをめぐるニュース、話題になっているコンテンツで気になったものは積極的にメモしておき、授業内での議論に役立ててください。
本授業の準備学習・復習時間は各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

必要に応じて資料を配布します。

【参考書】

※無理にそろえる必要はありません

- ・東浩紀『動物化するポストモダン——オタクから見た日本社会』（講談社現代新書）
 - ・足立加勇『日本のマンガ・アニメにおける「戦い」の表象』（現代書館）
 - ・倉橋耕平『歴史修正主義とサブカルチャー 90 年代保守言説のメディア文化』（青弓社）
 - ・金水聡『役割語研究の展開』（くろしお出版）
 - ・河野真太郎『戦う姫、働く少女』（POSSE 叢書）
 - ・押山美知子『少女マンガ ジェンダー表象論 〈男装の少女〉の造形とアイデンティティ』（アルファベータブックス）
 - ・堀あきこ、守如子＝編『BL の教科書』（有斐閣）
 - ・山田奨治『マンガ・アニメで論文・レポートを書く——「好き」を学問にする方法』（ミネルヴァ書房）
- 他、授業ごとに参考書や参考作品を提示します。

【成績評価の方法と基準】

授業への参加態度 30 %、授業内で執筆・提出する課題 30 %、期末レポート 40 %

【学生の意見等からの気づき】

特に対面とオンラインを併用する場合は、個々の学生の発言が建設的な意見交換へとつながるよう、適宜調整を行いながら活発な議論の場を用意する。また授業ごとに論点の整理を行い、議論の足場をわかりやすく設定していく。

【学生が準備すべき機器他】

パソコンやタブレット等、オンライン授業に対応した機器（※難しい場合は応相談）

【その他の重要事項】

本科目は他専攻学生の履修も受け入れます。

授業は原則的に教室での対面形式で行う予定ですが、新型コロナウイルスの影響で通学が困難な学生がいることも鑑み、ハイフレックス形式を採用します。

【担当教員の専門分野等】

国内外の小説やマンガを中心に、雑誌や新聞、ラジオ等で書評やポップカルチャー批評を担当。共同通信文芸時評「デザインする文学」、週刊新潮「ベストセラー街道をゆく！」連載中。他、小説トリッパー、ダ・ヴィンチ誌レギュラー。『文芸界』新人小説月評 (2018)、毎日新聞文芸時評「私のおすすめ」(2019)。TBS ラジオ「文化系トークラジオ Life」サブパーソナリティ。

【Outline (in English)】

(Course outline)

Modern pop culture spreads through multiple media such as the Internet, social media, television, magazines and games, and has various influences on social norms and our self-formation. In this class, you focus on "Weekly Shonen Jump" one of the magazine media that has been characterized from the perspective of gender, and learn about issues facing modern society and suggestions for leading criticism of pop culture to a prosperous future.

(Learning Objectives)

At the end of the course, students are expected to think about pop culture from a variety of perspectives by applying the gender-related perspectives learned in class to discover issues on their own, and by using information formed by various media., and identify research problems based on the differences and commonalities among different cultures.

(Learning activities outside of classroom)

In addition to researching literature and viewing art related to each theme, students will be expected to take notes on pop culture-related news and other topics of interest and use them in class discussions.

The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.

(Grading Criteria /Policy)

The overall grade for the class will be determined based on the following
Attitude toward class participation: 30%, assignments to be written and submitted in class: 30%, final report: 40%.

OTR700B7

国際日本学研究 I

島田 雅彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

批評な知性が人文科学には欠かせない。単に時代のニーズに対応するだけでなく、より広範囲の文化現象に有効な批評のスタイル、理論、形式を開発する必要がある。サブカルチャー全盛の時代にあっても、文学や映画の古典にはまだリサイクルの可能性が残っている。忘れられた名作の発掘に努め、その潜在的な価値を前面に押し出すための批評的コンテンツの開発は急務である。この課題を共有し、批評と二次産品の制作を行う。

【到達目標】

博士論文の副産物をたくさん生み出せるように進める。博士論文は広範囲に渡る知識と教養をベースに先行研究にはない独自性と啓蒙性が求められる。それにはサブテーマに基づく補完的な研究論文が随時生み出されるべきである。

成績評価はサブ論文の出来次第だが、中間発表などの成果も評価する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

修士の演習と共同で行うが、随時、研究室で個別の論文執筆指導、リサーチテーマの指示、追加研究の必要性を吟味する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	論文執筆計画の吟味	概要の発表
第 2 回	論文執筆計画の修正	詳細の検討
第 3 回	論文執筆計画の完成	詳細の決定
第 4 回	サブテーマの設定	サブテーマ選を議論を通じて行う
第 5 回	サブテーマについての討議	サブテーマについてのブレインストーミング
第 6 回	共同研究	修士のゼミと合同で共通テーマに基づくワークショップ
第 7 回	共同研究発表	修士のゼミと合同で共通テーマでの論文発表
第 8 回	議論、質疑応答	論文発表に関する議論、質疑応答
第 9 回	中間発表	論文の進捗状況報告
第 10 回	中間発表の修正	論文の内容吟味
第 11 回	テキスト購読	読書会
第 12 回	書評発表会	書評発表
第 13 回	論文指導	論文細部のチェック
第 14 回	論文修正	論文の修正点のチェック

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

折々の課題、レポートをこなし、論文執筆の進捗状況を随時報告する。本授業の準備（予習）および復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

『深読み日本文学』島田雅彦著 集英社インターナショナル新書 2017

ほか授業内で指示

【参考書】

授業で指示

【成績評価の方法と基準】

小論文、サブコンテンツ、共同制作の貢献度、論文完成度など総合的に判断。評価基準は平常点 20 %、サブコンテンツ 20 %、論文進行状況 30 %、論文完成度 30 %とする。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【学生が準備すべき機器他】

情報端末 パソコンなど

【その他の重要事項】

オフィスアワーは水曜昼休み

【小説論 サブカルチャー研究】

創作 日本近代文学 日本戦後史 日欧交流史
＜研究テーマ＞

＜主要研究業績＞

小説作法ABC 新潮選書2008
徒然王子全2巻 朝日新聞出版2009
悪貨 講談社2010
傾国子女 文藝春秋2013

【創作】

ニッチを探して 新潮社2013
往生際の悪い奴 日本経済新聞社2014
暗黒寓話集 文藝春秋2014

【創作】

虚人の星 講談社 2016
カタストロフマニア 新潮社2017
人類最年長 文藝春秋 2018
君が異端だった頃 集英社2019

【創作】

スノードロップ 新潮社2020

【Outline (in English)】

Critic intelligence is indispensable to humanities. In addition to responding to the needs of the times, we need to develop criticism style, theory, and format effective for a wider range of cultural phenomena. Even in the age of subculture, the possibility of recycling still remains in the classics of literature and movies. It is an urgent matter to develop critical content to strive to find forgotten masterpieces and push their potential values to the front. Share this issue and make critiques and produce secondary products. Comprehensive judgment of essays, sub-contents, contribution of collaborative production, degree of completion of dissertation, etc. The evaluation criteria are normal score 20%, sub-content 20%, dissertation progress 30%, and dissertation completion 30%.

OTR700B7

国際日本学研究Ⅱ

島田 雅彦

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

批評な知性が人文科学には欠かせない。単に時代のニーズに対応するだけでなく、より広範囲の文化現象に有効な批評のスタイル、理論、形式を開発する必要がある。サブカルチャー全盛の時代にあっても、文学や映画の古典にはまだリサイクルの可能性が残っている。忘れられた名作の発掘に努め、その潜在的な価値を前面に押し出すための批評的コンテンツの開発は急務である。この課題を共有し、批評と二次産品の制作を行う。

【到達目標】

博士論文の副産物をたくさん生み出せるように進める。博士論文は広範囲に渡る知識と教養をベースに先行研究にはない独自性と啓蒙性が求められる。それにはサブテーマに基づく補完的な研究論文が随時生み出されるべきである。成績評価はサブ論文の出来次第だが、中間発表などの成果も評価する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

修士の演習と共同で行うが、随時、研究室で個別の論文執筆指導、リサーチテーマの指示、追加研究の必要性を吟味する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	論文執筆計画の見直し	計画の修正
第2回	論文執筆計画の補足	補足テーマの確認
第3回	論文執筆計画の完成	計画の決定
第4回	サブテーマ研究1	サブテーマ選を議論を通じて行う
第5回	サブテーマ研究2	ディベート
第6回	サブテーマ研究3	発表
第7回	共同ゼミ	修士のゼミと合同ワークショップ
第8回	共同研究	修士のゼミと共通テーマに基づく研究会
第9回	共同発表会	修士のゼミと合同で共通テーマに基づくワークショップ発表会
第10回	論文中間報告	論文の進捗状況報告
第11回	論文内容吟味	論文の内容吟味
第12回	テキスト購読	読書会
第13回	論文指導	論文細部のチェック
第14回	最終指導	論文細部の修正

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

折々の課題、レポートをこなし、論文執筆の進捗状況を随時報告する。本授業の準備（予習）および復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

『深読み日本文学』島田雅彦著 集英社インターナショナル新書2017

ほか授業内で指示

【参考書】

授業で指示

【成績評価の方法と基準】

小論文、サブコンテンツ、共同制作の貢献度、論文完成度など総合的に判断。評価基準は平常点20%、サブコンテンツ20%、論文進行状況30%、論文完成度30%とする。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【学生が準備すべき機器他】

パソコン等情報端末

【その他の重要事項】

オフィスアワーは水曜昼休み

【創作】

徒然王子全2巻 朝日新聞出版 2009

悪貨 講談社 2010

傾国子女 文藝春秋 2013

虚人の星 講談社 2016

カタストロフマニア 新潮社 2017

人類最年長 文藝春秋 2018

君が異端だった頃 集英社 2019

【小説論】

小説作法 ABC 新潮選書 2008

【日本近代文学】

深読み日本文学史 集英社インターナショナル新書2017

【Outline (in English)】

Critic intelligence is indispensable to humanities. In addition to responding to the needs of the times, we need to develop criticism style, theory, and format effective for a wider range of cultural phenomena. Even in the age of subculture, the possibility of recycling still remains in the classics of literature and movies. It is an urgent matter to develop critical content to strive to find forgotten masterpieces and push their potential values to the front. Share this issue and make critiques and produce secondary products. Comprehensive judgment of essays, sub-contents, contribution of collaborative production, degree of completion of dissertation, etc. The evaluation criteria are normal score 20%, sub-content 20%, dissertation progress 30%, and dissertation completion 30%.

OTR600B7

国際日本学演習 I

水野 和夫

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士論文の作成とその準備、最終的に修士号の取得
研究テーマに関する論文を数多く読み、未解決なテーマに関して解答を提示すること（論文のオリジナリティを明確にする）
修士論文を完成することで、研究分野の進歩に貢献すること

【到達目標】

研究分野のレベルアップに貢献する修士論文を完成すること

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示された
どの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針
に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

M2 は修士論文を途中経過発表（月に 1 回以上）

M1 は修士論文作成のための論文・文献の発表（月に 1 回以上）
（留学生在日本に入学できない場合はオンライン授業）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	院生の研究テーマの概 略と研究動機を発表 (第 1 回)	論文の構成についての検討 (M2)
第 2 回	院生の研究テーマの概 要と研究動機を発表 (第 2 回)	論文の構成についての検討 (M1)
第 3 回	修士論文作成に際して 参考にした論文・著作 の発表 (第 1 回)	先行研究についての議論 (M2)
第 4 回	修士論文作成に際して 参考にした論文・著作 の発表 (第 2 回)	先行研究についての議論 (M2)
第 5 回	日米貿易摩擦について 発表	日米貿易摩擦の歴史と中米貿易摩 擦の現状 (M2)
第 6 回	メガ FTA について発 表	2 国間自由貿易協定からメガ FTA へと流れが変わった背景 (M2)
第 7 回	新自由主義について発 表 (第 1 回)	新自由主義が台頭してきた背景 (M1)
第 8 回	修士論文の途中経過発 表 (第 1 回) ①	はじめにと先行研究、論文全体の 構成について発表 (M2)
第 9 回	修士論文の途中経過発 表 (第 1 回) ②	はじめにと先行研究、論文全体の 構成について発表 (M2)
第 10 回	新自由主義についての 発表 (第 2 回)	新自由主義が世界経済に与えた影 響 (M1)
第 11 回	修士論文の途中経過発 表 (第 2 回) ①	7 割の完成をめざす (M2)
第 12 回	修士論文の途中経過発 表 (第 2 回) ②	7 割の完成をめざす (M2)
第 13 回	新自由主義について (第 3 回)	論文構成を発表 (M1)
第 14 回	まとめ	春学期で見つかった課題の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本演習の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

とくになし

【参考書】

『次なる 100 年』水野和夫、東洋経済新報社、2022 年
<https://str.toyokeyzai.net/books/9784492444658/>

【成績評価の方法と基準】

演習におけるプレゼン（50 %）、演習の活発な議論に貢献（50 %）

【学生の意見等からの気づき】

授業支援システムや質問票の配布を通じて学生からの意見を取り入れ、授業内容の改善を図る。

【学生が準備すべき機器他】

演習形式のため、授業の冒頭で毎回学生の意見・質問を聞いて、進める。

【その他の重要事項】

内閣府（内閣府大臣官房審議官）および内閣官房（内閣審議官）での実務経験がある教員が、政府月例経済報告、経済財政白書などで養った経済分析、および政策立案のプロセスなどを授業で解説する

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 現代日本経済論、グローバル経済論

<研究テーマ> グローバル化が経済に及ぼす影響、ゼロ金利の歴史的意義、資本主義の課題

<主要研究業績>

- 『100 年デフレ～21 世紀は物価下落型のバブル多発時代～』日本経済出版社、2003 年
- 『人々はなぜグローバル経済の本質を見誤るのか』日本経済新聞出版社、2003 年
- 『終わりのなき危機 君はグローバリゼーションの真実を見たか』日本経済新聞出版社、2011 年
- 『資本主義の終焉と歴史の危機』集英社新書、2014 年
- 『資本主義の終焉、その先の世界』詩想社新書、榊原栄資共著、2015 年
- 『株式会社終焉』ディスカバー 21、2016 年
- 『閉じてゆく帝国と逆説の 21 世紀経済』集英社新書、2017 年
- 『次なる 100 年 歴史の危機から学ぶこと』東洋経済新報社、2022 年

【Outline (in English)】

(Course outline) Preparation and preparation of master's thesis. You have read many papers on research themes, and provide answers to unresolved subjects. You can contributing to the advancement of the research field by completing the master's thesis
(Learning Objectives) The goals of this course are to get a Master's Degree.

(Learning activities outside of classroom) : Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. You have read many papers on research themes,

(Grading Criteria) Evaluation of seminar presentations : 50 %, in class contribution:50 %

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

水野 和夫

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士論文の作成とその準備、最終的に修士号の取得
研究テーマに関する論文を数多く読み、未解決なテーマに関して解答を提示すること（論文のオリジナリティを明確にする）
修士論文を完成することで、研究分野の進歩に貢献すること

【到達目標】

研究分野のレベルアップに貢献する修士論文を完成すること

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示された
どの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針
に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

M2 は修士論文を途中経過発表（月に 1 回以上）

M1 は修士論文作成のための論文・文献の発表（月に 1 回以上）
（留学生が日本に入国できない場合はオンライン授業）

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	課題の確認	春学期で見つかった課題について 議論（M2,M1）
第 2 回	各自の修論の報告①	メガ FTA 誕生の背景と代表的な メガ FTA の事例研究（M2）
第 3 回	各自の修論の報告②	日米貿易摩擦の歴史（M2）
第 4 回	各自の修論の報告③	新自由主義台頭の背景（M1）
第 5 回	修士論文の完成報告①	メガ FTA の経済効果と現状 （M2）
第 6 回	修士論文の完成報告②	日米貿易摩擦はいかに解決してき たのか（M2）
第 7 回	修士論文の先行研究に ついて発表	新自由主義の功罪（M1）
第 8 回	修士論文の完成報告の 修正①	メガ FTA の課題（M2）
第 9 回	修士論文の完成報告の 修正②	日米貿易摩擦の中国への教訓 （M2）
第 10 回	修士論文の概要発表	新自由主義と新保守主義の関係 （M1）
第 11 回	修士論文の完成報告の 最終調整①	メガ FTA の将来性について （M2）
第 12 回	修士論文の完成報告の 最終調整②	日米貿易摩擦の教訓をどう活かす か（M2）
第 13 回	修士論文の概要発表	新自由主義は生き残れるのか （M1）
第 14 回	まとめ	秋学期で見つかった課題について 議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自らの研究課題に対しての準備をしっかりと行うこと。

【テキスト（教科書）】

とくになし。

【参考書】

『次なる 100 年 歴史の危機から学ぶこと』（水野和夫、東洋経済新
報社、2022 年）

<https://str.toyokeizai.net/books/9784492444658/>

【成績評価の方法と基準】

発表：50 % 討論：50 % 十分な準備が大前提となる。問題、
論点の明確化された発表の評価が高い。

【学生の意見等からの気づき】

十分な議論の時間の確保に努める。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 現代日本経済論、グローバル経済論

＜研究テーマ＞ グローバル化が経済に及ぼす影響、ゼロ金利の歴
史的意義、資本主義の課題

＜主要研究業績＞

- 『100 年デフレ～21 世紀は物価下落型のバブル多発時代～』日本
経済出版社、2003 年
- 『人々はなぜグローバル経済の本質を見誤るのか』日本経済新聞
出版社、2003 年
- 『終わりのなき危機 君はグローバリゼーションの真実を見たか』
日本経済新聞出版社、2011 年
- 『資本主義の終焉と歴史の危機』集英社新書、2014 年
- 『資本主義の終焉、その先の世界』詩想社新書、榊原栄資共著、
2015 年
- 『株式会社の終焉』ディスカバー 21、2016 年
- 『閉じてゆく帝国と逆説の 21 世紀経済』集英社新書、2017 年

【Outline (in English)】

(Course outline) Preparation and preparation of master's
thesis. You have read many papers on research themes, and
provide answers to unresolved subjects. You can contribut-
ing to the advancement of the research field by completing the
master's thesis

(Learning Objectives) The goals of this course are to get a
Master's Degree.

(Learning activities outside of classroom) : Before/after each
class meeting, students will be expected to spend four hours to
understand the course content. You have read many papers on
research themes,

(Grading Criteria /Evaluation of seminar presentations :
50 %, in class contribution:50 %

OTR600B7

国際日本学演習 I

佐々木 達

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士論文の作成をめざします。

【到達目標】

修士論文作成の作業段階を踏まえて、完成をめざします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示された
どの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針
に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講生の修士論文テーマについて、発表と討論を中心に授業を進めていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業の進め方
第 2 回	修士論文のテーマ (1)	テーマの検討と参考文献の紹介
第 3 回	修士論文のテーマ (2)	テーマの設定と研究の位置づけ
第 4 回	研究目的	修士論文研究目的の検討
第 5 回	修士論文章構成 (1)	章構成と関連文献の提示
第 6 回	修士論文章構成 (2)	章・節・項の設定
第 7 回	実態調査 (1)	調査内容の検討
第 8 回	実態調査 (2)	調査計画の検討
第 9 回	統計資料 (1)	統計資料の分析
第 10 回	統計資料 (2)	統計資料の整理
第 11 回	図表の作成	図表の作成計画
第 12 回	研究構想の再検討	研究構想の再検討、修正
第 13 回	中間報告	中間報告
第 14 回	まとめ	まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テーマの設定や問題意識に醸成は、広く深く文献を読むことから始まります。その研究は社会にとってどんな役に立つのか？ という問いかけを持ってください。そして、統計や資料の整理は、コツコツとやるのが肝心です。少なくとも準備・復習時間は演習（2 単位）では 1 回につき 4 時間以上が必要となります。

【テキスト（教科書）】

特になし

【参考書】

荒木一視ほか編 (2021) 『食と農のフィールドワーク入門』, 昭和堂

【成績評価の方法と基準】

発表・討論 50 %, 修正論文の完成 50 % で成績評価します。

【学生の意見等からの気づき】

特にありませんでした。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

経済地理学, 農業地理学, 地域経済論

＜研究テーマ＞

東北地方における水田農業の構造再編

日本経済の再生産構造と地域問題

【Outline (in English)】

【Course outline】 We aim to create a master's thesis based on your research interests.

【Learning Objectives】 Completion and submission of master's thesis

【Learning activities outside of classroom】 Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.

【Grading Criteria /Policy】 : Final grade will be calculated according to the following process Report and Discussion (50%), submission of master's thesis(50%)

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

佐々木 達

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士論文の執筆・完成を目指すために、研究内容を徹底的に鍛え上げます。

【到達目標】

修士論文作成の作業段階を踏まえて、完成をめざします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講生の修士論文テーマについて、発表と討論を中心に授業を進めていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の進め方
第2回	調査結果報告	夏季休暇時の調査結果報告
第3回	調査結果の吟味	調査結果から論点を洗い出す
第4回	研究目的	研究目的の再確認
第5回	章構成の再検討	章構成から論理展開を考える
第6回	統計資料	統計分析の結果報告
第7回	補足調査	補足調査の必要性の再確認
第8回	章構成の最終決定	章構成の確定
第9回	図表の完成	完成図表の確認
第10回	参考・引用文献	参考・引用文献の最終確認
第11回	完成原稿の予定枚数	完成原稿予定枚数の確認
第12回	結論と要約	論文の結論の発表
第13回	最終報告	最終報告
第14回	まとめ	まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自分の論文は何を明らかにするのか、どのような順序だてや組み立てから説明するのか、結論として何を主張できるのかを意識して作成にあたってください。

【テキスト（教科書）】

特になし

【参考書】

荒木一視ほか編著（2021）『食と農のフィールドワーク入門』、昭和堂

【成績評価の方法と基準】

発表と議論（50％）、修士論文の提出（50％）で成績評価します。

【学生の意見等からの気づき】

特にありませんでした。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

経済地理学

<研究テーマ>

日本農業の地域構造

東北地方における水田農業の構造再編

【Outline (in English)】

【Course outline】 The goals of this seminar is completion of master's thesis

【Learning Objectives】 Completing a high-level master's thesis

【Learning activities outside of classroom】 Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.

【Grading Criteria /Policy】 Final grade will be calculated according to the following process Report and Discussion (50%), submission of master's thesis(50%)

HUG500B7

日本の農業と農村 I

佐々木 達

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本農業の構造問題を、多面的に学習します。農産物市場、労働市場、農地市場の 3 つの枠組みから農業地域を分析するフレームワークを学習します。

【到達目標】

日本農業をめぐる現状は、農産物純輸入額世界第 1 位、労働力不足と高齢化、農地面積の絶対的減少と課題が山積しています。さらに、これらの現象が一律一様に進んでいるのではなく、複雑な地域性を伴っています。この授業では、最新のテキストを取り上げて、日本農業が抱えている構造的問題を把握するとともに、各自の研究課題を設定できるように学習していきます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

テキストを読み、それを踏まえて受講生による報告と討議を中心にして授業を進めていきます。また、授業開始時には、「週刊経済報告」と題して、一週間の新聞記事から議論したい記事をピックアップして報告します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	自己紹介、文献紹介、担当者の決定
第 2 回	日本農業の構造問題①	食料自給率について
第 3 回	日本農業の構造問題②	主産地形成論について
第 4 回	日本農業の構造問題③	農産物市場論について
第 5 回	日本農業の構造問題④	フードシステム論について
第 6 回	日本農業の構造問題⑤	アグリビジネスについて
第 7 回	各自の研究テーマの報告	自分が取り上げたい農業・農村問題のテーマ報告
第 8 回	日本農業の構造問題⑥	地域労働市場論について
第 9 回	日本農業の構造問題⑦	兼業農家について
第 10 回	日本農業の構造問題⑧	労働力の過剰と不足
第 11 回	日本農業の構造問題⑨	地代論について
第 12 回	日本農業の構造問題⑩	農地の所有と利用について
第 13 回	各自の研究テーマの報告	修士論文の構想発表
第 14 回	まとめ	まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。読むべき文献を事前に配布もしくは指示します。それを各自が読むことを前提にして発表、討論していきます。授業の冒頭 10 分間を利用した「週刊経済報告」のために、日本経済新聞を毎日読んでおくこと。

【テキスト（教科書）】

取り上げるテキストを事前に指示します。

【参考書】

伊藤達也・小田宏信・加藤幸治編著（2020）『経済地理学への招待』、ミネルヴァ書房

【成績評価の方法と基準】

発表 50 %、討論 50 % で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

特にありませんでした。

【学生が準備すべき機器他】

学修支援システムを利用する予定です。

【その他の重要事項】

対面授業を想定しておりますが、コロナウイルス感染症の状況次第によってオンラインになる場合があります。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

経済地理学、農業地理学

＜研究テーマ＞

日本経済と農業問題の地理学

＜主要研究業績＞

佐々木達ほか（2020）「生産調整以降における稲作農業の地域性」

佐々木達ほか（2021）「東北地方における農家の世代交代と労働力

利用の再編成」

【Outline (in English)】

【Course outline】 In this lecture, we will study the structural problems of Japanese agriculture from multiple perspectives.

【Learning Objectives】 Understand the structural problems of Japanese agriculture, and learn so that you can set your own research themes.

【Learning activities outside of classroom】

Your study time will be more than four hours for a class.

【Grading Criteria /Policy】： Your overall grade in the class will be decided based on the following Presentation and Discussion: 50%, in class contribution: 50%

HUG500B7

日本の農業と農村Ⅱ

佐々木 達

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本経済が変化する中で、農業・農村はどのような変貌を遂げてきたのかを振り返りながら、現代的課題について取り上げることで、批判的思考を獲得することを狙いとします。

【到達目標】

- ①日本農業・農村が日本経済の展開において果たし役割を捉えることができる
- ②農業・農村の現代的課題について取り上げることができる
- ③世界経済の中で日本農業が進む方向性を見通すことができる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

テキストを読み、それを踏まえて受講生による報告と討議を中心に授業を進めていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	テキスト紹介、自己紹介、報告者の決定
第2回	戦前期の日本経済	米と繭の経済構造
第3回	戦後復興期の日本経済	農地改革
第4回	高度経済成長期①	農業基本法農政
第5回	高度経済成長期②	農業構造の変貌
第6回	高度経済成長期③	減反政策とその影響
第7回	高度経済成長期④	農村社会・生活の変貌
第8回	安定成長期	兼業農家と出稼ぎ
第9回	低成長期①	コメ流通の多様化
第10回	低成長期②	食料消費構造の多様化
第11回	低成長期③	農家の世代交代と労働力利用
第12回	国際化と日本経済	地方消滅論
第13回	国際化と日本経済	食料供給体制の見直し
第14回	まとめ	まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。
授業の冒頭10分間を利用した「週刊経済報告」のために、日本経済新聞を毎日読んでおくこと。

【テキスト（教科書）】

テキストは決まり次第、事前に指示します。

【参考書】

授業中に適宜指示します。

【成績評価の方法と基準】

発表50%，討論50％で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

特にありませんでした。

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムを利用する予定です。

【その他の重要事項】

授業は対面での実施を予定していますが、状況によってはオンラインに変更する場合があります。その際には、事前に連絡します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

経済地理学、農業地理学

<研究テーマ>

東北農業論、日本経済の地域構造

<主要研究業績>

佐々木達ほか（2020）「生産調整以降における稲作農業の地域性」

佐々木達ほか（2021）「東北地方における農家の世代交代と労働力利用の再編成」

【Outline (in English)】

【Course outline】In this lecture, we will learn about the impact of structural changes in the Japanese economy on agriculture and rural areas.

【Learning Objectives】The aim is to acquire critical thinking while analyzing how agriculture and rural areas have undergone changes as the Japanese economy changes.

【Learning activities outside of classroom】Your study time will be more than four hours for a class.

【Grading Criteria/Policy】Your overall grade in the class will be decided based on the following Presentation and discussion: 50%、in class contribution: 50%

OTR600B7

国際日本学演習 I

福元 広二

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

英語がどのようにして世界中で使用されるようになり、世界共通語となってきたかを解説する。また、英語の歴史を学ぶことで、現代の英語に対してさらに理解を深めることを主な目的としている。

【到達目標】

英語史における文法変化について説明できるようになる。
英語史における文献をきちんと正確に読めるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示された
どの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針
に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は、基本的に教科書に沿って進めていきます。教科書の中で、学生は自分に関心のある章を選び、その内容について発表していく形式です。また、英語で書かれた論文などをわかりやすく発表してもらいます。

リアクションペーパー等における良いコメントは授業内で紹介し、さらなる議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業内容の紹介
第 2 回	Chapter 1 Introductory (1)	統語論の説明と歴史的データ
第 3 回	Chapter 1 Introductory (2)	インド・ヨーロッパ祖語、ゲルマン祖語
第 4 回	Chapter 2 Old English (1)	古英語の時代背景
第 5 回	Chapter 2 Old English (2)	古英語の文法
第 6 回	Chapter 2 Old English (3)	古英語の語彙
第 7 回	Chapter 3 The Vikings in England	バイキングの影響
第 8 回	Chapter 4 The Norman Conquest (1)	フランスの影響
第 9 回	Chapter 4 The Norman Conquest (2)	フランス語借用語
第 10 回	Chapter 5 Middle English (1)	中英語の時代背景
第 11 回	Chapter 5 Middle English (2)	中英語の文法
第 12 回	プレゼンテーション (1)	論文紹介（1）
第 13 回	プレゼンテーション (2)	論文紹介（2）
第 14 回	春学期のまとめ	補足とまとめを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に教科書を読んで、予習をしてください。
本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

Charles Barber The History of English (英宝社)

【参考書】

適宜指示します。

【成績評価の方法と基準】

平常点とレポートで総合的に評価します。（平常点 60 点、レポート 40 点）

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

英語学・英語史

<研究テーマ>

初期近代英語期の文法

<主要研究業績>

「第 6 章 Shakespeare の英語」

『英語教師のための英語史』

開拓社 (2018)

【Outline (in English)】

The purpose of this course is to introduce the major changes in English grammar from Old English to Present-day English.

The goal of this course is to give students the basic knowledge necessary to understand the history of the English language.

Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.

Final grades will be calculated according to the following process:

Mid-term report (40%) and in-class contribution (60%)

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

福元 広二

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

英語がどのようにして世界中で使用されるようになり、世界共通語となってきたかを解説する。また、英語の歴史を学ぶことで、現代の英語に対してさらに理解を深めることを主な目的としている。

【到達目標】

英語史における文法変化について説明できるようになる。
英語史における文献をきちんと正確に読めるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示された
どの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針
に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は、基本的に教科書に沿って進めていきます。教科書の中で、学生は自分に興味のある章を選び、その内容について発表していく形式です。また、英語で書かれた論文などをわかりやすく発表してもらいます。

リアクションペーパー等における良いコメントは授業内で紹介し、さらなる議論に活かします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業の概要説明
第 2 回	Chapter 6 Early modern English (1)	初期近代英語の時代背景
第 3 回	Chapter 6 Early modern English (2)	初期近代英語の文法
第 4 回	Chapter 6 Early modern English	初期近代英語の借用語
第 5 回	Chapter 7 English in the Scientific Age (1)	後期近代英語の時代背景
第 6 回	Chapter 7 English in the Scientific Age (2)	後期近代英語の文法
第 7 回	Chapter 7 English in the Scientific Age (3)	後期近代英語の借用語
第 8 回	Chapter 8 English as a World Language (1)	アメリカ英語
第 9 回	Chapter 8 English as a World Language (2)	標準英語
第 10 回	Chapter 9 English Today and Tomorrow (1)	英語の方言
第 11 回	Chapter 9 English Today and Tomorrow (2)	現在起きている変化
第 12 回	プレゼンテーション (1)	論文紹介（1）
第 13 回	プレゼンテーション (2)	論文紹介（2）
第 14 回	秋学期のまとめ	補足とまとめを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に教科書を読んで、予習をしてください。本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

Charles Barber (1978) The History of English 英宝社

【参考書】

適宜指示します。

【成績評価の方法と基準】

平常点とレポートで総合的に評価します。（平常点 60 点、レポート 40 点）

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

英語学・英語史

<研究テーマ>

初期近代英語期の文法

<主要研究業績>

「第 6 章 Shakespeare の英語」

『英語教師のための英語史』

開拓社 (2018)

【Outline (in English)】

The purpose of this course is to introduce the major changes in English grammar from Old English to Present-day English.

The goal of this course is to give students the basic knowledge necessary to understand the history of the English language.

Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.

Final grades will be calculated according to the following process:

Mid-term report (40%) and in-class contribution (60%)

OTR700B7

国際日本学研究 I

君嶋 泰明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

マルティン・ハイデガーが 1922 年夏学期講義（全集 62 巻）において行ったアリストテレス『自然学』第 1 巻第 2~3 章の解釈を読む。同章でアリストテレスは「万物は一つである」とするパルメニデスの存在観を批判しており、ハイデガーはこの批判に存在と言語の関係にかんする重要な洞察が潜んでいると見ている。その洞察に迫るのが目標である。

なお受講者の関心に応じて、西洋と日本における存在と言語についての考え方の違いも検討する。

博士後期課程に所属する学生を対象に、上記に加え、博士論文執筆のための研究指導を行う。

【到達目標】

- ①アリストテレスのパルメニデス批判をハイデガーがどのように解釈しているかを理解する。
- ②そのことを通じて、存在と言語の関係についてのハイデガーの見方を理解する。
- ③博士後期課程に所属する受講者は、研究指導を受けることで、博士論文の完成を目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

担当者は、テキストの割り当てられた箇所を音読し、日本語訳を述べ、解釈が必要な点については自分の解釈を提示する。参加者はこれに基づき全員で議論し、内容についての理解を深める。別途課題を課した場合、それへのフィードバックは次回授業で行う。

なお、以下の授業計画に記したページ数はあくまで目安であり、進度に応じて適宜変更する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	概要の説明
第 2 回	ハイデガーの『自然学』解釈①	報告と討議（165-167 頁）
第 3 回	ハイデガーの『自然学』解釈②	報告と討議（168-170 頁）
第 4 回	ハイデガーの『自然学』解釈③	報告と討議（171-173 頁）
第 5 回	ハイデガーの『自然学』解釈④	報告と討議（174-176 頁）
第 6 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑤	報告と討議（177-179 頁）
第 7 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑥	報告と討議（200-202 頁）
第 8 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑦	報告と討議（203-205 頁）
第 9 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑧	報告と討議（206-208 頁）
第 10 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑨	報告と討議（209-211 頁）
第 11 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑩	報告と討議（212-214 頁）
第 12 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑪	報告と討議（215-217 頁）
第 13 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑫	報告と討議（218-220 頁）

第 14 回 ハイデガーの『自然学』解釈⑬ 報告と討議（221-223 頁）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。担当者は、テキストの割り当てられた箇所の音読、日本語訳、解釈を準備して授業に臨む。参加者は該当箇所を熟読してくる。

【テキスト（教科書）】

Martin Heidegger, *Phänomenologische Interpretationen ausgewählter Abhandlungen des Aristoteles zur Ontologie und Logik*, Gesamtausgabe Bd. 62, Vittorio Klostermann, 2005.
未邦訳。希望者には該当箇所のコピーを配布する。

【参考書】

アリストテレス著・内山勝利訳、『アリストテレス全集 4 自然学』、岩波書店、2017 年
William Charlton, *Aristotle's Physics Books I and II*, Oxford University Press, 1970.
前者はアリストテレスの『自然学』の邦訳。後者はその英訳と注釈。これらも希望者には該当箇所のコピーを配布する。

【成績評価の方法と基準】

担当者としての評価が 80%、議論への参加度の評価が 20%。上記の到達目標がどれだけ達成されているかが主な評価基準となる。

【学生の意見等からの気づき】

受講者の理解度を配慮しながら適宜解説を加えつつ授業を進める。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞
現象学・解釈学
＜研究テーマ＞
ハイデガーの西洋哲学史観の批判的検討
＜主要研究業績＞
・「『存在忘却』とは何か」、『法政大学文学部紀要』82 号、2020 年。
・「信仰と哲学——ハイデガーのアウグスティヌス解釈について」、『アルケー』26 号、2018 年。
・「ハイデガーのデカルト解釈について」、『哲学論叢』41 号、2014 年。
・「不断の逸れに抗して真正な道を歩むこと——ハイデガー初期フライブルク講義に見る「形式的告示」が持つ含意」、『アルケー』20 号、2012 年。

【Outline (in English)】

(Course outline)
This course deals with Martin Heidegger's interpretation of Aristotle's *Physics*.
(Learning Objectives)
The goal of this course is to understand Heidegger's view on the relationship between being and language.
(Learning activities outside of classroom)
Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter(s) from the texts. Your required study time is at least two hours for each class meeting.
(Grading Criteria /Policies)
Grading will be decided based on short reports (80%) and in-class contribution (20%).

OTR700B7

国際日本学研究Ⅱ

君嶋 泰明

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

春学期に引き続き、マルティン・ハイデガーが 1922 年夏学期講義（全集 62 巻）において行ったアリストテレス『自然学』第 1 巻第 2~3 章の解釈を読む。同章でアリストテレスは「万物は一つである」とするパルメニデスの存在観を批判しており、ハイデガーはこの批判に存在と言葉の関係にかんする重要な洞察が潜んでいると見ている。その洞察に迫るのが目標である。

なお受講者の関心に応じて、西洋と日本における存在と言葉についての考え方の違いも検討する。

博士後期課程に所属する学生を対象に、上記に加え、博士論文執筆のための研究指導を行う。

【到達目標】

- ①アリストテレスのパルメニデス批判をハイデガーがどのように解釈しているかを理解する。
- ②そのことを通じて、存在と言葉の関係についてのハイデガーの見方を理解する。
- ③博士後期課程に所属する受講者は、研究指導を受けることで、博士論文の完成を目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

担当者は、テキストの割り当てられた箇所を音読し、日本語訳を述べ、解釈が必要な点については自分の解釈を提示する。参加者はこれに基づき全員で議論し、内容についての理解を深める。別途課題を課した場合、それへのフィードバックは次回授業で行う。

なお、以下の授業計画に記したページ数はあくまで目安であり、進度に応じて適宜変更する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	春学期の振り返りと概要の説明
第 2 回	ハイデガーの『自然学』解釈①	報告と討議（224-226 頁）
第 3 回	ハイデガーの『自然学』解釈②	報告と討議（227-229 頁）
第 4 回	ハイデガーの『自然学』解釈③	報告と討議（230-232 頁）
第 5 回	ハイデガーの『自然学』解釈④	報告と討議（233-235 頁）
第 6 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑤	報告と討議（236-237 頁）
第 7 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑥	報告と討議（238-240 頁）
第 8 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑦	報告と討議（241-243 頁）
第 9 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑧	報告と討議（244-246 頁）
第 10 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑨	報告と討議（247-249 頁）
第 11 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑩	報告と討議（250-252 頁）
第 12 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑪	報告と討議（253-255 頁）
第 13 回	ハイデガーの『自然学』解釈⑫	報告と討議（256-258 頁）

第 14 回 ハイデガーの『自然学』解釈⑬ 報告と討議（259-261 頁）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。担当者は、テキストの割り当てられた箇所の音読、日本語訳、解釈を準備して授業に臨む。参加者は該当箇所を熟読してくる。

【テキスト（教科書）】

Martin Heidegger, *Phänomenologische Interpretationen ausgewählter Abhandlungen des Aristoteles zur Ontologie und Logik*, Gesamtausgabe Bd. 62, Vittorio Klostermann, 2005.

未邦訳。希望者には該当箇所のコピーを配布する。

【参考書】

アリストテレス著・内山勝利訳、『アリストテレス全集 4 自然学』、岩波書店、2017 年

William Charlton, *Aristotle's Physics Books I and II*, Oxford University Press, 1970.

前者はアリストテレスの『自然学』の邦訳。後者はその英訳と注釈。これらも希望者には該当箇所のコピーを配布する。

【成績評価の方法と基準】

担当者としての評価が 80%、議論への参加度の評価が 20%。上記の到達目標がどれだけ達成されているかが主な評価基準となる。

【学生の意見等からの気づき】

受講者の理解度を配慮しながら適宜解説を加えつつ授業を進める。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現象学・解釈学

<研究テーマ>

ハイデガーの西洋哲学史観の批判的検討

<主要研究業績>

・「『存在忘却』とは何か」、『法政大学文学部紀要』82 号、2020 年。

・「信仰と哲学——ハイデガーのアウグスティヌス解釈について」、『アルケー』26 号、2018 年。

・「ハイデガーのデカルト解釈について」、『哲学論叢』41 号、2014 年。

【Outline (in English)】

(Course outline)

This course deals with Martin Heidegger's interpretation of Aristotle's *Physics*.

(Learning Objectives)

The goal of this course is to understand Heidegger's view on the relationship between being and language.

(Learning activities outside of classroom)

Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant chapter(s) from the texts. Your required study time is at least two hours for each class meeting.

(Grading Criteria /Policies)

Grading will be decided based on short reports (80%) and in-class contribution (20%).

HIS700B4

史学特殊演習 A I

小口 雅史

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

課程博士としての論文を仕上げるために、その構想から執筆、全体の調整をへて1つにまとめていく過程全体を徹底的に支援してもらうための演習である。

【到達目標】

最終的に博士論文をまとめるために、年に最低でも2本程度（できれば3本の脱稿を目指す）の論文を執筆出来るように努力する。ときおり高度な模範論文を輪読して、論理的な論文の書き方を会得することも目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業形式は対面授業を原則とする。基本的には博士課程の院生が輪番で毎回論文文化したい一つのテーマを選び、先行研究のまとめ、利用する史料とその解釈を紹介しながら、一つの論文になるよう報告してもらう。ときおり名著とされる日本古代史関係の古典的論文を取り上げて、参加者全員で輪読することも実施する。また既修了者による論文構想過程についても紹介してもらう。
発表へのフィードバックについては、次の授業の初めに、前回の授業で提出資料からいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整。
第2回	博士課程院生による論文発表(1)	賜姓源氏経済をめぐる1 禄令位田
第3回	博士課程院生による論文発表(2)	賜姓源氏経済をめぐる2 禄令位封
第4回	博士課程院生による論文発表(3)	賜姓源氏経済をめぐる3 禄令
第5回	博士課程院生による論文発表(4)	賜姓源氏経済をめぐる4 荘園
第6回	博士課程修了者による論文発表(1)	渤海とは何か
第7回	博士課程修了者による論文発表(2)	日渤海交渉の歴史定義
第8回	博士課程修了者による論文発表(3)	日渤海交渉の変質
第9回	博士課程修了者による論文発表(4)	日中外交儀礼の特徴
第10回	博士課程院生による論文発表(5)	日本古代の駅制とは何か
第11回	博士課程院生による論文発表(6)	日本古代駅制・駅路の特質
第12回	博士課程院生による論文発表(7)	駅伝制・伝馬制の検討
第13回	博士課程院生による論文発表(8)	中国と日本の古代交通制度の比較
第14回	春学期の総括	これまで発表した成果について相互批判する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に発表要旨を配布してもらうので、それを熟読してから参加すること。

発表者の事前準備は標準的に2時間。受講生の事前準備は標準的に1時間を要する。

【テキスト（教科書）】

使用しない。

【参考書】

その都度指定する。

【成績評価の方法と基準】

最終的に脱稿した論文の完成度によって評価する（90％）。演習中における他の発表者への指摘内容についても考慮することがある（10％）。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本古代史

<研究テーマ>

日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史

<主要研究業績>

2010年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』

2008年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院

2008年、『近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって』『古文書研究』66

2007年、『『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後－FileMakerによるDatabaseのWeb公開の一例として』『漢字文献情報処理研究』8

【Outline (in English)】

Course outline : To finish the research as a doctorate in the course, Professor and seminar students repeatedly discuss the subjects.

Learning Objectives : WAt the end of the course, students are expected to being able to write a doctoral dissertation

Learning activities outside of classroom : Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting . Your study time will be more than five hours for a class.

Grading Criteria /Policies : Grading will be decided based on lab reports (85 %)%), and the quality of the students' experimental performance in the lab (15 %).

HIS700B4

史学特殊演習 A II

小口 雅史

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

課程博士としての論文を仕上げるために、その構想から執筆、全体の調整をへて1つにまとめていく過程全体を徹底的に支援してもらうための演習である。

【到達目標】

最終的に博士論文をまとめるために、年に最低でも2本程度（できれば3本の脱稿を目指す）の論文を執筆出来るように努力する。ときおり高度な模範論文を輪読して、論理的な論文の書き方を会得することも目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業形式は対面授業を原則とする。基本的には博士課程の院生が輪番で毎回論文文化したい一つのテーマを選び、先行研究のまとめ、利用する史料とその解釈を紹介しながら、一つの論文になるよう報告してもらう。ときおり名著とされる日本古代史関係の古典的論文を取り上げて、参加者全員で輪読することも実施する。また既修了者による論文構想過程についても紹介してもらう。

発表へのフィードバックについては、次の授業の初めに、前回の授業で提出資料からいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整
第2回	博士課程院生による論文発表(1)	大化前代氏姓制度の特質 1 負名氏
第3回	博士課程院生による論文発表(2)	大化前代氏姓制度の特質 2 膳部
第4回	博士課程院生による論文発表(3)	大化前代氏姓制度の特質 3 陶部
第5回	博士課程院生による論文発表(4)	大化前代氏姓制度の特質 4 服部
第6回	博士課程修了者による論文発表(1)	外交儀礼の日唐比較
第7回	博士課程修了者による論文発表(2)	外交儀礼の歴史的意味
第8回	博士課程修了者による論文発表(3)	渤海と新羅の比較
第9回	博士課程修了者による論文発表(4)	遣唐使と新羅使の比較
第10回	博士課程修了者による論文発表(5)	俘囚とはなにか
第11回	博士課程修了者による論文発表(6)	俘囚移配の特質
第12回	博士課程修了者による論文発表(7)	夷俘と俘囚の違い
第13回	博士課程修了者による論文発表(8)	律令国家の北方政策
第14回	秋学期の総括	発表者による相互批判と論文文化の成果報告

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に発表要旨を配布してもらうので、それを熟読してから参加すること。

発表者の事前準備は標準的に2時間。受講生の事前準備は標準的に1時間を要する。

【テキスト（教科書）】

使用しない。

【参考書】

その都度指定する。

【成績評価の方法と基準】

最終的に脱稿した論文の完成度によって評価する（90%）。演習中における他の発表者への指摘内容についても考慮することがある（10%）。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につきとくになし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本古代史

<研究テーマ>

日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史

<主要研究業績>

2010年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』

2008年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院

2008年、『近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって』『古文書研究』66

2007年、『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後－FileMakerによるDatabaseのWeb公開の一例として』『漢字文献情報処理研究』8

【Outline (in English)】

Course outline : To finish the research as a doctorate in the course, Professor and seminar students repeatedly discuss the subjects.

Learning Objectives : WAt the end of the course, students are expected to being able to write a doctoral dissertation

Learning activities outside of classroom : Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting . Your study time will be more than five hours for a class.

Grading Criteria /Policies : Grading will be decided based on lab reports (85 %)%), and the quality of the students' experimental performance in the lab (15 %).

HIS700B4

史学特殊演習 A I

大塚 紀弘

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本中世史に関する論文の構成や内容について個別に相談する。
また、希望に応じて研究発表をする機会を設ける。

【到達目標】

日本中世史に関する論文を執筆し、学術雑誌等に公表することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示された
どの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針
に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式で進める。事前に提出された論文の草稿またはレジュメに
基づいて議論する。課題等の提出・フィードバックは「学習支援シ
ステム」または「メール」を通じて行なう予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	研究現状報告（1）	研究計画の提示と相談
第 2 回	論文相談（1）	論文草稿の提示と議論
第 3 回	論文相談（2）	論文草稿の提示と議論
第 4 回	論文相談（3）	論文草稿の提示と議論
第 5 回	研究発表（1）	研究報告と議論
第 6 回	論文相談（4）	論文草稿の提示と議論
第 7 回	論文相談（5）	論文草稿の提示と議論
第 8 回	論文相談（6）	論文草稿の提示と議論
第 9 回	研究発表（2）	研究報告と議論
第 10 回	論文相談（7）	論文草稿の提示と議論
第 11 回	論文相談（8）	論文草稿の提示と議論
第 12 回	論文相談（9）	論文草稿の提示と議論
第 13 回	研究発表（3）	研究報告と議論
第 14 回	研究現状報告（2）	研究計画の提示と相談

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自身の研究を進め、論文の草稿を執筆する。また、レジュメを作成
する。授業後に論文を修正して完成させる。本授業の準備・復習時
間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点50%、学期末レポート点50%の合計で評価する予定である。

【学生の意見等からの気づき】

議論が活発になるように努める。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本中世史

＜研究テーマ＞日中関係史・日本仏教史

【Outline (in English)】

The aim of this course is to help students read the medieval Chinese texts. The goals of this course are to train the ability to understand the contents deeply. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Your overall grade in the class will be decided based on the following. Short reports : 50%, in class contribution: 50%.

HIS700B4

史学特殊演習 A II

大塚 紀弘

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本中世史に関する論文の構成や内容について個別に相談する。
また、希望に応じて研究発表をする機会を設ける。

【到達目標】

日本中世史に関する論文を執筆し、学術雑誌等に公表することが
できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示された
どの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針
に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式で進める。事前に提出された論文の草稿またはレジュメに
基づいて議論する。課題等の提出・フィードバックは「学習支援シ
ステム」または「メール」を通じて行なう予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	研究現状報告（1）	研究計画の提示と相談
第 2 回	論文相談（1）	論文草稿の提示と議論
第 3 回	論文相談（2）	論文草稿の提示と議論
第 4 回	論文相談（3）	論文草稿の提示と議論
第 5 回	研究発表（1）	研究報告と議論
第 6 回	論文相談（4）	論文草稿の提示と議論
第 7 回	論文相談（5）	論文草稿の提示と議論
第 8 回	論文相談（6）	論文草稿の提示と議論
第 9 回	研究発表（2）	研究報告と議論
第 10 回	論文相談（7）	論文草稿の提示と議論
第 11 回	論文相談（8）	論文草稿の提示と議論
第 12 回	論文相談（9）	論文草稿の提示と議論
第 13 回	研究発表（3）	研究報告と議論
第 14 回	研究現状報告（2）	研究計画の提示と相談

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自身の研究を進め、論文の草稿を執筆する。また、レジュメを作成
する。授業後に論文を修正して完成させる。本授業の準備・復習時
間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点50%、学期末レポート点50%の合計で評価する予定である。

【学生の意見等からの気づき】

議論が活発になるように努める。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本中世史

＜研究テーマ＞日中関係史・日本仏教史

【Outline (in English)】

The aim of this course is to help students read the medieval Chinese texts. The goals of this course are to train the ability to understand the contents deeply. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Your overall grade in the class will be decided based on the following. Short reports : 50%, in class contribution: 50%.

HIS700B4

史学特殊演習 A I

松本 剣志郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、受講生が日本近世史についての研究能力を高め、個々が有する研究テーマを深めていくことを目的とする。

【到達目標】

- ①査読付学術雑誌に論文を掲載する。
- ②博士論文を執筆する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

個人による研究発表をおこなう。発表者は各自の研究テーマについてレジュメを作成し、発表する。論文講読は、事前に割り当てを決め、担当者が発表し、これを全員で批評するかたちをとる。発表等に対するフィードバックは授業後半におこなう。対面授業である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業概要の説明、発表順の決定
第2回	研究発表（1）	研究テーマの学術上の位置づけ
第3回	研究発表（2）	研究テーマの史料論的分析
第4回	研究発表（3）	研究テーマの可能性
第5回	研究発表（4）	研究テーマのひろがり
第6回	研究発表（5）	学術雑誌への投稿をめざして
第7回	論文講読（1）	研究史上の位置づけ
第8回	論文講読（2）	論文構成の方法
第9回	論文講読（3）	史料批判
第10回	論文講読（4）	論理展開の仕方
第11回	論文講読（5）	研究視野の拡大
第12回	研究計画発表（1）	今後の方針
第13回	研究計画発表（2）	史料探訪にむけて
第14回	まとめ	研究者の姿勢

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

論文講読にあたっては、事前にその論文を読んでおくこと。また、その著者の他の論文も目を通すと良い。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

『岩波講座日本歴史』ほか

【成績評価の方法と基準】

発表内容、授業への参加度等をみて、平常点100%で成績評価する。

【学生の意見等からの気づき】

教室について配慮したいと思います。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近世史

＜研究テーマ＞都市論、記憶論

＜主要研究業績＞『江戸の都市化と公共空間』（塙書房、2019年）

【Outline (in English)】

This course deals with the early modern history of Japan. It also enhances the development of student's skill in making oral presentation and writing an article. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Grading will be decided based on students presentation.

HIS700B4

史学特殊演習 A II

松本 剣志郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、受講生が日本近世史についての研究能力を高め、個々が有する研究テーマを深めていくことを目的とする。

【到達目標】

- ①査読付学術雑誌に論文を複数掲載する。
- ②博士論文を執筆する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

個人による研究発表をおこなう。発表者は各自の研究テーマについてレジュメを作成し、発表する。論文講読は、事前に割り当てを決め、担当者が発表し、これを全員で批評するかたちをとる。発表等に対するフィードバックは授業後半におこなう。対面授業である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業概要の説明、発表順の決定
第2回	研究発表（1）	研究史との格闘
第3回	研究発表（2）	論理展開の仕方
第4回	研究発表（3）	史料の読みの深さ
第5回	研究発表（4）	表の効果的使用
第6回	研究発表（5）	他流試合のなかで
第7回	論文講読（1）	分野の選定
第8回	論文講読（2）	表現力の問題
第9回	論文講読（3）	史料引用の恣意性
第10回	論文講読（4）	先行研究の曲解
第11回	論文講読（5）	結論の妥当性
第12回	研究計画発表（1）	今後の進め方
第13回	研究計画発表（2）	史料収集のすすめ
第14回	まとめ	つぎのステージへむけて

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

論文講読においては、事前に当該論文を読んでおくこと。各自で研究を進めること。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

『岩波講座日本歴史』ほか

【成績評価の方法と基準】

発表内容、授業への参加度等をみて、平常点100%で成績評価する。

【学生の意見等からの気づき】

教室について配慮したいと思います。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近世史

＜研究テーマ＞都市論、記憶論

＜主要研究業績＞『江戸の都市化と公共空間』（塙書房、2019年）

【Outline (in English)】

This course deals with the early modern history of Japan. It also enhances the development of student's skill in making oral presentation and writing an article. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Grading will be decided based on students presentation.

HIS700B4

史学特殊演習 A I

内藤 一成

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本近現代史に関する発表や専門書・論文の検討などを行い、博士論文を完成させるために必要な能力を養う。

【到達目標】

本授業では以下の点を目標とする。①日本近現代史に関する最新の研究動向の把握、②独創的な研究テーマの確立、③高い水準の論文の作成。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式で行う。具体的には、受講生による、①論文の構想発表、執筆中の論文の中間発表と質疑応答、②関心をもった専門書・論文の合評会、③最新の研究や史料の紹介、などを中心とする。課題等の提出やフィードバックなどは主に「学習支援システム」を活用する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	講義に関する全体の説明、注意点など
第 2 回	研究発表 1	明治史研究（1）
第 3 回	研究発表 2	明治史研究（2）
第 4 回	研究発表 3	明治史研究（3）
第 5 回	研究発表 4	明治史研究（4）
第 6 回	研究発表 5	大正史研究（1）
第 7 回	研究発表 6	大正史研究（2）
第 8 回	中間総括	中間総括と質疑応答
第 9 回	研究発表 7	昭和戦前史研究（1）
第 10 回	研究発表 8	昭和戦前史研究（2）
第 11 回	研究発表 9	昭和戦前史研究（3）
第 12 回	研究発表 10	昭和戦後史研究（1）
第 13 回	研究発表 11	昭和戦後史研究（2）
第 14 回	全体総括	全体総括と質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

平素より論文の作成を進め、研究発表後にはその内容をフィードバックさせておく。論文評に際しては、事前に熟読しておく。本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

特に用いない。

【参考書】

授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表内容、授業への参加度などに、執筆論文の完成度を加味して総合化し、これを平常点（100 %）として評価する。

【学生の意見等からの気づき】

現時点ではないが、授業が活発な議論の場となるよう努める。

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムが利用可能な IT 機器

【その他の重要事項】

・「史学特殊演習」A II（秋学期）との継続履修を推奨する。

・やむを得ない事情により授業を欠席する場合（介護体験実習、教育実習など）には、その事情を証明する文書を提出すること。新型コロナウイルス感染防止策として教室での対面授業を行わない場合には、授業内容を変更することがある。

・授業に関連する連絡は、学習支援システムの「お知らせ」サイトや、「授業内掲示板」サイトを利用して行うので、見落とさないようにすること。

・担当教員への直接連絡にはメールを利用すること。担当教員のメールアドレスは、学習支援システムに掲載する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本近現代史

<研究テーマ>

近現代の政治と文化

<主要研究業績>

『貴族院と立憲政治』（思文閣出版）、『貴族院』（同成社）、『華族令嬢たちの大正・昭和』（吉川弘文館）、『三条実美』（中公新書）、『新編旧話会速記』（芙蓉書房出版）、『四條男爵家関係文書』（同成社）、『田健治郎日記 第 3・7 巻』（芙蓉書房出版）、『河井弥八日記〈戦後篇〉』全 5 巻（信山社出版）

【Outline (in English)】

(Course outline)

This course mainly reports on the modern history of Japan, criticizes academic books and dissertations, and discusses them. Through these processes, you will acquire the abilities necessary to complete your doctoral dissertation.

(Learning Objectives)

By the end of the course, students should be able to do the followings:

– A.Understanding the latest research trends related to modern Japanese history.

– B.Create an original research theme.

– C.Complete a high-level dissertation.

(Learning activities outside of classroom)

Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

(Grading Criteria /Policy)

Final grades are calculated according to the process of presentation, discussion and the quality of the dissertation.Combine all elements to make 100%

HIS700B4

史学特殊演習 A II

内藤 一成

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本近現代史に関する発表や専門書・論文の検討などを行い、博士論文を完成させるために必要な能力を養う。

【到達目標】

本授業では以下の点を目標とする。①日本近現代史に関する最新の研究動向の把握、②独創的な研究テーマの確立、③高い水準の論文の作成。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式で行う。具体的には、受講生による、①論文の構想発表、執筆中の論文の中間発表と質疑応答、②関心をもった専門書・論文の合評会、③最新の研究や史料の紹介、などを中心とする。課題等の提出やフィードバックなどは主に「学習支援システム」を活用する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	講義に関する全体の説明、注意点など
第 2 回	研究発表 1	論文構想発表（1）
第 3 回	研究発表 2	論文構想発表（2）
第 4 回	研究発表 3	論文構想発表（3）
第 5 回	研究発表 4	論文構想発表（4）
第 6 回	研究発表 5	論文合評（1）
第 7 回	研究発表 6	史料紹介（1）
第 8 回	中間総括	中間総括と質疑応答
第 9 回	研究発表 7	論文構想発表（5）
第 10 回	研究発表 8	論文構想発表（6）
第 11 回	研究発表 9	論文構想発表（7）
第 12 回	研究発表 10	論文合評（2）
第 13 回	研究発表 11	史料紹介（2）
第 14 回	全体総括	全体総括と質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

平素より論文の作成を進め、研究発表後にはその内容をフィードバックさせておく。論文評に際しては、事前に熟読しておく。本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

特に用いない。

【参考書】

授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表内容、授業への参加度などに、執筆論文の完成度を加味して総合化し、これを平常点（100 %）として評価する。

【学生の意見等からの気づき】

現時点ではないが、授業が活発な議論の場となるよう努める。

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムが利用可能な IT 機器

【その他の重要事項】

・「史学特殊演習」A I（春学期）との継続履修を推奨する。

・やむを得ない事情により授業を欠席する場合（介護体験実習、教育実習など）には、その事情を証明する文書を提出すること。新型コロナウイルス感染防止策として教室での対面授業を行わない場合には、授業内容を変更することがある。

・授業に関連する連絡は、学習支援システムの「お知らせ」サイトや、「授業内掲示板」サイトを利用して行うので、見落とさないようにすること。

・担当教員への直接連絡にはメールを利用すること。担当教員のメールアドレスは、学習支援システムに掲載する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本近現代史

<研究テーマ>

近現代の政治と文化

<主要研究業績>

『貴族院と立憲政治』（思文閣出版）、『貴族院』（同成社）、『華族令嬢たちの大正・昭和』（吉川弘文館）、『三条実美』（中公新書）、『新編旧話会速記』（芙蓉書房出版）、『四條男爵家関係文書』（同成社）、『田健治郎日記 第 3・7 巻』（芙蓉書房出版）、『河井弥八日記（戦後篇）』全 5 巻（信山社出版）

【Outline (in English)】

(Course outline)

This course mainly reports on the modern history of Japan, criticizes academic books and dissertations, and discusses them. Through these processes, you will acquire the abilities necessary to complete your doctoral dissertation.

(Learning Objectives)

By the end of the course, students should be able to do the followings:

– A.Understanding the latest research trends related to modern Japanese history.

– B.Create an original research theme.

– C.Complete a high-level dissertation.

(Learning activities outside of classroom)

Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

(Grading Criteria /Policy)

Final grades are calculated according to the process of presentation, discussion and the quality of the dissertation.Combine all elements to make 100%

HIS700B4

史学特殊演習 A I

後藤 篤子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ラテン語読解能力のさらなる向上、学会発表やその活字化、後進の指導など、研究者・教育者として自立的に活動していくための基盤を形成・強化する。

【到達目標】

- (1) 自らのラテン語読解能力をさらに向上させる。
 - (2) これまでの口頭発表や活字化した論文をアップデートし、博士論文完成に向けてまとめる。
 - (3) 自分がこれまでに修得した専門的知識を生かして、修士課程在籍者に対する指導経験を積む。
- 以上の3点を目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

主として受講者による研究の現状報告、博士論文完成に向けた原稿作成とそれに対する指導を中心に、授業を進める。最後の数回は修士課程科目「西洋史学演習Ⅰ」と合同授業とし、博士課程在籍の受講者から修士課程在籍者に対し、ラテン語史料の読み方などについて、教員と共に指導してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	研究の進捗状況について	受講者による研究の現状報告と討議
第2回	研究内容の活字化に向けて (1)	受講者がまとめた論文原稿に関する討議 (1)
第3回	研究内容の活字化に向けて (2)	受講者がまとめた論文原稿に関する討議 (2)
第4回	研究内容の活字化に向けて (3)	論文で使用するラテン語史料の読解に関する討議 (1)
第5回	研究内容の活字化に向けて (4)	論文で使用するラテン語史料の読解に関する討議 (2)
第6回	研究内容の活字化に向けて (5)	受講者が提出した修正原稿に関する討議 (1)
第7回	研究内容の活字化に向けて (6)	受講者が提出した修正原稿に関する討議 (2)
第8回	研究内容の活字化に向けて (7)	受講者が提出した修正原稿に関する討議 (3)
第9回	博士論文完成に向けて (1)	受講者による博士論文構成案の提示と討議
第10回	博士論文完成に向けて (2)	博士論文完成に向けて、残っている課題の整理と討議
第11回	後進への指導経験を積む (1)	ラテン語初心者『プリニウス書簡集』読解を補助する (1)
第12回	後進への指導経験を積む (2)	ラテン語初心者『プリニウス書簡集』読解を補助する (2)
第13回	後進への指導経験を積む (3)	ラテン語初心者『プリニウス書簡集』読解を補助する (3)
第14回	博士論文完成のためのタイムスケジュールの確認	夏期休暇中の研究計画と教員からの助言

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文に向けた研究を自主的に進め、既発表の研究内容に必要な修正を加えると同時に、博士論文の構成を考えて更に調査研究を進める。後進のラテン語史料読解を補助するにあたっての予習と復習。本授業の授業外学習時間は事前準備と事後の作業を合わせて、大学設置基準が求める1回計4時間以上をはるかに上回るであろう。

【テキスト（教科書）】

後進の指導については、A. N. Sherwin-White (ed.), *Fifty Letters of Pliny*, Oxford, 2nd ed. 2000.

【参考書】

後進の指導については、
國原吉之助訳『プリニウス書簡集—ローマ帝国一貴紳の生活と信条』、講談社学術文庫、1999年。

【成績評価の方法と基準】

平常点のみ（博士論文完成に向けての自主的努力 70%、ラテン語読解補助の予習も含めた後進の指導に向けての準備 30%）で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート非実施科目につき該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 古代ローマ史

<研究テーマ> 帝政後期ローマの歴史と社会、ローマ帝国の「キリスト教化」の問題

<主要研究業績>

① The 'conversion' of Constantine the Great: his religious legislation in the Theodosian Code, *Studia Patristica*, XCIII (2017).

② (分担執筆・史料邦訳) 歴史学研究会編『世界史史料1・古代のオリエントと地中海世界』、岩波書店、2012年。

③ シドニウス・アポリナリスにおける「ローマニズム」、『史学雑誌』91-10 (1982年10月)。

【Outline (in English)】

< Course Outline > The aim of this course is to help students become an independent researcher and educator.

< Learning Objectives > At the end of the course, students are expected to improve their abilities to read and comprehend the historical sources written in Latin, to make presentations concerning their own research, and to help younger students in their researches.

< Learning activities outside of classroom > Students are required to progress their own research in order to accomplish their dissertations, and prepare to help younger students read Latin texts. Their study time will be far more than four hours for a class.

< Grading Policy > Grading will be decided based on the progress toward accomplishing their own dissertations (70%), and the preparation to help younger students (30%).

HIS700B4

史学特殊演習 A II

後藤 篤子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

学術雑誌への論文投稿や、ラテン語読解能力のさらなる向上など、研究者・教育者として自立的に活動していくための基盤を強化する。

【到達目標】

- （１）ラテン語読解能力をさらに向上させる。
 - （２）博士論文草稿で残った課題を自分で洗い出し、新たな研究発表を行える。
 - （３）後進の研究指導の補助ができる。
- 以上の３点を目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業は受講者による研究報告とその内容に関する討議を中心に授業を進める。学期後半には修士課程「西洋史学演習Ⅱ」との合同授業を数回入れ、受講生に後進のラテン語読解の補助や研究面でのアドヴァイスの経験を積んでもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	研究の現状報告	受講生による博士論文草稿についての報告と討議
第 2 回	博士論文で残った課題について	博士論文で残った課題を整理し、新たな研究発表を準備する。
第 3 回	新たな研究発表に向けて（１）	受講者による研究テーマ・使用予定史料の提示と討議
第 4 回	新たな研究発表に向けて（２）	ラテン語史料の読解（１）
第 5 回	新たな研究発表に向けて（３）	ラテン語史料の読解（２）
第 6 回	新たな研究発表に向けて（４）	学術誌に投稿する新たな論文原稿の検討と討議（１）
第 7 回	新たな研究発表に向けて（５）	学術誌に投稿する新たな論文原稿の検討と討議（２）
第 8 回	新たな研究発表に向けて（６）	投稿予定原稿と史料読解の最終確認
第 9 回	後進への指導経験を積む（１）	ラテン語初心者『プリニウス書簡集』読解を補助する（１）
第 10 回	後進への指導経験を積む（２）	ラテン語初心者『プリニウス書簡集』読解を補助する（２）
第 11 回	後進への指導経験を積む（３）	ラテン語初心者『プリニウス書簡集』読解を補助する（３）
第 12 回	後進への指導経験を積む（４）	ラテン語初心者『プリニウス書簡集』読解を補助する（４）
第 13 回	既発表の研究内容の総括と今後の課題の整理	受講生による振り返りと討議
第 14 回	今後の研究活動について	受講生による今後の研究計画の提示と討議

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文提出後を見据えて新たな研究テーマを設定し、必要な史料読解を進め、さらなる研究発表の準備をする。後進指導のためのラテン語読解の予習・復習。本授業の授業外学習時間は、大学設置基準では１回につき計４時間以上とされているが、それをはるかに上回る授業時間外学習が必要なことは論を俟たないであろう。

【テキスト（教科書）】

後進の指導については、A. N. Sherwin-White (ed.), *Fifty Letters of Pliny*, Oxford, 2nd ed. 2000.

【参考書】

後進の指導については、
國原吉之助訳『プリニウス書簡集—ローマ帝国一貴紳の生活と信条』、講談社学術文庫、1999 年。

【成績評価の方法と基準】

平常点のみ（自主的研究の進捗と内容 70 %、ラテン語読解の精度 30 %）で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート非実施科目につき該当なし。

【その他の重要事項】

史学特殊演習 A I（後藤）から継続して履修すること。

【担当教員の専門分野等】

< 専門領域 > 古代ローマ史

< 研究テーマ > 帝政後期ローマの歴史と社会、ローマ帝国の「キリスト教化」の問題

< 主要研究業績 >

① The 'conversion' of Constantine the Great: his religious legislation in the Theodosian Code, *Studia Patristica*, XCIII (2017).

② (分担執筆・史料邦訳) 歴史学研究会編『世界史史料 1・古代のオリエントと地中海世界』、岩波書店、2012 年。

③ シドニウス・アポリナリスにおける「ローマニズム」、『史学雑誌』91-10 (1982 年 10 月)。

【Outline (in English)】

< **Course Outline** > The aim of this course is the enhancement of the abilities necessary for an independent researcher and educator.

< **Learning Objectives** > At the end of the course, students are expected to improve their abilities to read and comprehend the historical sources written in Latin, to make presentations concerning their own research, and to help younger students in their researches.

< **Learning activities outside of classroom** > Students are required to advance their own research independently, and to prepare to help younger students read Latin texts. Their study time will be far more than four hours for a class.

< **Grading Policy** > Grading will be decided based on the research reports (70%), and the preparation to help younger students (30%).

HIS700B4

史学特殊演習 A I

小倉 淳一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

考古学の方法にもとづいて物質文化から再構成される社会について検討する。それをもとに博士論文作成を進めるための力量を培い、独自の研究の確立につなげていく。

【到達目標】

・先史社会の内実を物質資料の分析に基づいて検討し、批判を加えつつ建設的な展望を提示することができる。
・先史社会に関する特定のテーマをもとにした論文を多面的に構成するための能力が高まる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講者が関心を寄せる先史時代の社会に関する先行研究を講読し、受講者の研究テーマを設定するために検討と討論を重ねる。関連する諸研究を横断しながら、研究の現状と課題を明らかにし、受講者の問題意識の形成につなげ、資料の分析方法を見通していく。

授業形式は対面授業を基本とする。

レポート等のフィードバックについては授業内に行うかオフィス・アワー（月曜 5 限）で対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	先史社会研究の意義
第 2 回	構想発表（1）	受講者の目指す論文構想
第 3 回	構想発表（2）	現状の論文構想の課題と問題の検討
第 4 回	学史的論文の検討（1）	主に 1990 年代までの研究分野をリードしてきた先史社会研究のテーマと目的に関する検討
第 5 回	学史的論文の検討（2）	上記論文の資料と操作方法に関する検討
第 6 回	学史的論文の検討（3）	上記論文の考察と展望に関する検討
第 7 回	近年の研究論文の検討（1）	2000 年代以降の研究分野を形成した先史社会研究のテーマと目的に関する検討
第 8 回	近年の研究論文の検討（2）	上記論文の資料と操作方法に関する検討
第 9 回	近年の研究論文の検討（3）	上記論文の考察と展望に関する検討
第 10 回	最新の研究論文の検討（1）	当該分野における最新研究のテーマと目的に関する検討
第 11 回	最新の研究論文の検討（2）	上記論文の資料と操作方法に関する検討
第 12 回	最新の研究論文の検討（3）	上記論文の考察と展望に関する検討
第 13 回	先史社会研究の発達過程と多面的な方向性	受講者の掲げたテーマの有効性と問題点の摘出
第 14 回	総括	研究テーマと方針の策定

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。当該分野の諸研究に関する論文集成および研究史の概要把握。

【テキスト（教科書）】

用いない。

【参考書】

授業内で提示する。

【成績評価の方法と基準】

授業内の発表・討論（70 %・必須）、レポート（30 %・必須）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【その他の重要事項】

※担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても実践的に解説・指導する。

【Outline (in English)】

The aim of this course is to acquire the ability to write doctoral dissertations by students doing research presentations in Japanese archeology.

Students will be able to examine the image of prehistoric societies based on the analysis of material sources and present a constructive perspective.

Students will develop the ability to construct a multi-faceted thesis based on a specific theme related to prehistoric societies. The standard preparation and review time by students is 2 hours each.

The final grade will be calculated based on the following factors: results of the research presentation and participation in the discussion (70%), and the final report (30%).

HIS700B4

史学特殊演習 A II

小倉 淳一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

考古学の方法にもとづいて物質文化から再構成される社会について検討する。この授業では受講者の研究テーマを先行研究の中に確実に位置づけたうえで、資料の実践的な検討と考察を行い、博士論文作成に資することとする。

【到達目標】

- ・諸研究を総合的に検討することで受講者自身が新たな研究の方向を展望できる。
- ・受講者自身の研究テーマにもとづく資料集成を実践できる。
- ・集成した資料の分類と分析を一定の基準の下で実践できる。
- ・分析を元にした考察をまとめ、新たな展望を得ることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講者の設定した研究テーマの学史的背景と妥当性を検討するとともに、対象となる資料の分析視点を絞り込んでいく。次いで資料の分類と分析に進み、その手順と理解の妥当性を検討する。最終的に考察された内容が資料にもとづいて正確になされているかについて討論し、最新の研究成果との相関性や先進性について理解を深めていく。

授業形式は対面授業を基本とする。

レポート等のフィードバックについては授業内に行うかオフィス・アワー（月曜 5 限）で対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	先史社会研究の実戦に向けた諸段階
第 2 回	研究テーマの学史的検討（1）	先行研究の展開過程
第 3 回	研究テーマの学史的検討（2）	研究史上の転換点・画期
第 4 回	研究テーマの学史的検討（3）	現状の研究の方向性と展望
第 5 回	資料集成（1）	資料集成の目的と方向性
第 6 回	資料集成（2）	目的にもとづく資料集成方法の検討
第 7 回	資料の分析（1）	資料のもつ諸属性の理解
第 8 回	資料の分析（2）	観察視点と属性抽出方法
第 9 回	資料の分析（3）	資料分析の実践と問題
第 10 回	資料の分析（4）	分析結果の処理
第 11 回	分析結果の読み取り（1）	分析結果の提示・表現方法
第 12 回	分析結果の読み取り（2）	分析結果の解釈と考察
第 13 回	成果の検討	研究テーマと結論の相関性および最新研究との関連性の検討
第 14 回	総括	研究論文の内容と構成の策定

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。受講者のテーマに関連する研究論文の渉猟、考古学的方法論に関する理解。

【テキスト（教科書）】

用いない。

【参考書】

授業内で提示する。

【成績評価の方法と基準】

授業内の発表・討論（70 %・必須）、レポート（30 %・必須）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【その他の重要事項】

※担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても実践的に解説・指導する。

【Outline (in English)】

The aim of this course is to acquire the ability to write doctoral dissertations by students doing research presentations in Japanese archeology.

Students will be able to examine the image of prehistoric societies based on the analysis of material sources and present a constructive perspective.

Students will develop the ability to construct a multi-faceted thesis based on a specific theme related to prehistoric societies. The standard preparation and review time by students is 2 hours each.

The final grade will be calculated based on the following factors: results of the research presentation and participation in the discussion (70%), and the final report (30%).

HIS500B4

日本史学特殊講義 A I

阿部 朝衛

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

考古学の基礎である編年研究の方法を修得することを目的とする。

【到達目標】

編年研究の基礎的方法を修得し、それを各自が保有する資料へ適用することによってその理解を深める。この過程で、考古学の課題・問題点の把握能力を高める。そして、理論・方法を各自が保有する資料に適用できる能力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

テキストの型式学、層位学、編年に関する課題を日本語訳し、実践例を検討して、各自の保有する資料にそれらの方法を適用する。論文作成をめざし、そのテーマとの関連で授業を進める。

対面授業の演習形式とし、議論しながら課題内容の理解を深める。また、課題によって講義時間を設ける。講義形式であっても常時、質問を受け付け、議論を進展させ、課題の理解を深める。発表に対するフィードバックは授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	授業方針と基礎的方法論の説明
第 2 回	編年研究の基礎 1	型式学的前提、属性の抽出と操作方法
第 3 回	編年研究の基礎 2	地層累重・地層同定の法則を利用した遺構・遺物の時間軸上での配列
第 4 回	編年研究の基礎 3	型式学、層位学、絶対年代測定値を基にした地域編年
第 5 回	実践的研究の検討 1	モンテリウスの研究 1
第 6 回	実践的研究の検討 2	モンテリウスの研究 2
第 7 回	実践的研究の検討 3	セリエーション 1
第 8 回	実践的研究の検討 4	セリエーション 2
第 9 回	論文の検討 1	旧石器時代論文
第 10 回	論文の検討 2	縄文時代論文
第 11 回	論文の検討 3	弥生時代・他論文
第 12 回	資料の検討 1	旧石器時代資料
第 13 回	資料の検討 2	縄文時代資料
第 14 回	資料の検討 3	弥生時代資料

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
テキストの熟読、課題に関連する論文・各自の保有する資料の検討を求める。

【テキスト（教科書）】

Patterson, T. C. 1994 The Theory and Practice of Archaeology. Prentice Hall, Englewood Cliffs, New Jersey.
上記テキストは複写して配布する。

【参考書】

Renfrew, C. and Barn, P. 1991 Archaeology: Theories, Methods, and Practice. Thames and Hudson, London.

【成績評価の方法と基準】

発表（50 %）とレポート（50 %）をもとに評価。

【学生の意見等からの気づき】

日本語訳を基にした検討は、若干、早めに行う。院生の理解度に応じ、細かな課題を設定する。すでに履修した大学院生の場合、最初の授業で、授業の進め方の検討を行う。

【その他の重要事項】

資料の検討では、各自が保有する資料に主眼をおいて検討する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本旧石器時代、縄文時代

<研究テーマ>

先史時代における技術伝承と社会化、子ども考古学、先史時代における石材利用形態

<主要研究業績>

「旧石器時代人の利き手の研究法」『日本考古学』23 号 2007 年
「道具の原材料と組織化」『考古学ジャーナル』560 号 2007 年
「石器のメンテナンス」『縄文時代の考古学』6 2007 年 同成社
「石器製作の技能」『芹沢長介先生追悼考古・民族・歴史学論叢』2008 年 六一書房
「遺跡形成における子供の役割」『新潟県の考古学』Ⅱ 2009 年 新潟県考古学会
「新潟県南部における石器材料資源環境」『帝京史学』25 号 2010 年
「子ども考古学の誕生」上下 『考古学雑誌』97-1・2 2012・2013 年
「原人の子どもをめぐる社会」『法政考古学』44 2018 年
「ネアンデルタールの子どもの社会」『法政考古学』46 2020 年

【Outline (in English)】

Course outline

The purpose of this study is to learn the method of chronological study, which is the basis of archaeology.

Learning objectives

Students will acquire basic methods of chronological research, apply their abilities to their own archaeological materials, and deepen their understanding.

Learning activities outside of classroom

Preparation and review time for this class is 2 hours each. Students are asked to read through texts and related papers, and to examine their own archaeological materials.

Grading criteria/policy

Grades are judged based on the presentation (50%) and the report (50%).

HIS500B4

日本史学特殊講義 A II

阿部 朝衛

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

春学期で検討した各課題・方法に関連した資料の検討によって、課題・方法の有効性・援用方法を深く理解することを目的とする。

【到達目標】

春学期の課題における基礎的原理・方法の理解を深め、それを各自が保有する資料に適用することによって実践的な能力の修得を目指す。そして理論・方法をもとにした論文を書けることを目的とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

各自の保有する考古学資料に対して、春学期の課題・方法を適用して検討する。あるいは春学期の課題・方法をもとに論文書評を行う。その結果を従来の成果と比較し、課題・方法の意義を討議して考察する。論文作成を目指し、そのテーマとの関連でも授業を進める。

対面授業の演習形式とし、議論しながら課題内容の理解を深める。また、課題によって講義時間を設ける。講義形式であっても常時、質問等を受け付け、議論を発展させ、課題内容の理解を深める。発表内容に対するフィードバックは授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	春学期の課題・方法の整理
第 2 回	資料・論文の検討 1	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 1
第 3 回	資料・論文の検討 2	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 2
第 4 回	資料・論文の検討 3	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 3
第 5 回	資料・論文の検討 4	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 4
第 6 回	資料・論文の検討 5	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 5
第 7 回	資料・論文の検討 6	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 6
第 8 回	資料・論文の検討 7	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 7
第 9 回	資料・論文の検討 8	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 8
第 10 回	資料・論文の検討 9	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 9
第 11 回	資料・論文の検討 10	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 10
第 12 回	資料・論文の検討 11	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 11
第 13 回	資料・論文の検討 12	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 12
第 14 回	資料・論文の検討 13	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 13

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

上記の課題・方法に関する資料を収集し、検討を加える。

【テキスト（教科書）】

春学期のテキストと同じ。

【参考書】

春学期の参考書と同じ。

【成績評価の方法と基準】

討議（50 %）とレポート（50 %）を基に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

各課題の原理・方法を大学院生の資料をもとにより集中的に討議する。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

日本旧石器時代、縄文時代

＜研究テーマ＞

先史時代における技術伝承と社会化、子ども考古学、先史時代における石材利用形態

＜主要研究業績＞

「旧石器時代人の利き手の研究法」『日本考古学』23 号 2007 年

「道具の原材料と組織化」『考古学ジャーナル』560 号 2007 年

「石器のメンテナンス」『縄文時代の考古学』6 2007 年 同成社

「石器製作の技能」『芹沢長介先生追悼考古・民族・歴史学論叢』

2008 年 六一書房

「遺跡形成における子供の役割」『新潟県の考古学』II 2009 年

新潟県考古学会

「新潟県南部における石器材料資源環境」『帝京史学』25 号 2010 年

「子ども考古学の誕生」上下 『考古学雑誌』97-1・2 2012・2013 年

「原人の子どもをめぐる社会」『法政考古学』44 2018 年

「ネアンデルタールの子どもの社会」『法政考古学』46 2020 年

【Outline (in English)】

Course outline

The purpose of this class is to learn the observation viewpoints and methods of relics, which are the basic materials of archaeology. In the second half, stone tools will be used as teaching materials.

Learning objectives

Students analyze materials related to each assignment and method examined in the spring semester. The purpose of this study is to gain a deeper understanding of the effectiveness of research methods.

Learning activities outside of classroom

Preparation and review time for this class is 2 hours each.

Students are asked to read through texts and related papers, and to examine their own archaeological materials.

Grading criteria/policy

Grades are judged based on the presentation (50%) and the report (50%).

HIS500B4

日本史学特殊講義 B I

山口 英男

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

テーマ「平安時代の政務・儀式関係史料の研究」

平安時代の政治・社会・文化を明らかにする上で有力な手掛かりとなる政務・儀式関係史料への理解を深めることを目的とします。

【到達目標】

平安時代史研究の展開の中で、政治・社会・文化を明らかにするための有力な手掛かりとして注目されるのが政務・儀式関係史料です。その読解と検討のための基礎作業を学び、身に付けること、それを通じて政務・儀式への具体的な理解を深めることが目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

儀式書・法制史料・古記録・編年史料などを中心に、平安時代の個別の政務・儀式ごとに関係史料を精確に読解し、政務・儀式の内容・構造と時代的変遷について把握を進めることで、平安時代の国家体制の特徴や、政治史・政策史・文化史・社会史に関する知見を抽出していきます。演習形式（対面授業）により、報告についてその都度フィードバックしながら進めます。取り上げる政務・儀式や、授業で扱う史料については、受講者の希望も踏まえて選択します。それに応じて授業計画を組みなおす場合があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業の進め方について説明します。
第 2 回	平安時代史研究と政務・儀式関係史料	平安時代史の理解にとって、政務・儀式関係史料が持つ意義を解説します。
第 3 回	平安時代政務・儀式史料概説	平安時代の政務関係史料、儀式関係史料について概説します。
第 4 回	行政実務関係史料の検討（儀式書・法制史料）	行政実務に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第 5 回	行政実務関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第 6 回	行政実務関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第 7 回	行政実務関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第 8 回	文芸関係史料の検討（儀式書・法制史料）	文芸に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第 9 回	文芸関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第 10 回	文芸関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第 11 回	文芸関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第 12 回	武芸関係史料の検討（儀式書・法制史料）	武芸に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。

第 13 回	武芸関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第 14 回	武芸関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とします。報告担当以外の場合も授業で取り扱う史料には必ず事前に目を通して出席してください。

【テキスト（教科書）】

事前に印刷物を配布します（『延喜式』『儀式』『内裏式』『西宮記』『北山抄』、『大日本古記録』など）。

【参考書】

『大日本史料』第 1・2・3 編
『訳注延喜式』上・中・下
『駒牽関係史料』（『山梨県史 資料編 3』山梨県、2001 年、山口英男編纂担当）
『駒牽と相撲』（『山梨県史 通史編 1』2004 年、山口英男執筆担当）

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的参加、報告の発表内容、作成資料、討議への関与、レポートの内容などから総合的に判定します（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

授業で扱う史料については、受講者の希望も踏まえて選択します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本古代史（奈良・平安時代史）

<研究テーマ>

古代史料学（正倉院文書の〈書類学〉）

古代の社会と行政機構

牧と駒牽をめぐる諸問題

<主要研究業績>

『日本古代の地域社会と行政機構』吉川弘文館、2019 年

「貢馬をめぐる牧の諸相」（佐々木虔一他編『馬と古代社会』八木書店 2021 年）

「装潢小治田人公口状とその背景」（古瀬奈津子編『古代日本の政治と制度』同成社 2021）

「正倉院文書に見える「口状」について」（佐藤信編『史料・史跡と古代社会』吉川弘文館、2018 年）

【Outline (in English)】

To acquire the ability to read and understand historical materials on the imperial court ritual of the Heian period.

HIS500B4

日本史学特殊講義 B II

山口 英男

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

テーマ「平安時代の政務・儀式関係史料の研究」

平安時代の政治・社会・文化を明らかにする上で有力な手掛かりとなる政務・儀式関係史料への理解を深めることを目的とします。

【到達目標】

平安時代史研究の展開の中で、政治・社会・文化を明らかにするための有力な手掛かりとして注目されるのが政務・儀式関係史料です。その読解と検討のための基礎作業を学び、身に付けること、それを通じて政務・儀式への具体的な理解を深めることが目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

儀式書・法制史料・古記録・編年史料などを中心に、平安時代の個別の政務・儀式ごとに関係史料を精確に読解し、政務・儀式の内容・構造と時代的変遷について把握を進めることで、平安時代の国家体制の特徴や、政治史・政策史・文化史・社会史に関する知見を抽出していきます。演習形式（対面授業）により、報告についてその都度フィードバックしながら進めます。取り上げる政務・儀式や、授業で扱う史料については、受講者の希望も踏まえて選択します。それに応じて授業計画を組みなおす場合があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業の進め方について説明します。
第 2 回	仏事関係史料の検討（儀式書・法制史料）	仏事に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第 3 回	仏事関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第 4 回	仏事関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第 5 回	仏事関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第 6 回	神事関係史料の検討（儀式書・法制史料）	神事に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第 7 回	神事関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第 8 回	神事関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第 9 回	神事関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第 10 回	朝廷儀礼関係史料の検討（儀式書・法制史料）	朝廷儀礼に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第 11 回	朝廷儀礼関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第 12 回	朝廷儀礼関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。

第 13 回	朝廷儀礼関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第 14 回	平安時代の政務・儀式の展開と特質	平安時代政務・儀式の展開と特質について、得られた成果を総括します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。報告担当以外の場合も授業で取り扱う史料には必ず事前に目を通して出席してください。

【テキスト（教科書）】

担当教員が作成した印刷物を配布します（「延喜式」「儀式」「内裏式」「西宮記」「北山抄」、『大日本古記録』など）。

【参考書】

『大日本史料』第 1・2・3 編
『訳注延喜式』上・中・下
「駒牽関係史料」（『山梨県史 資料編 3』山梨県、2001 年、山口英男編集担当）
「駒牽と相撲」（『山梨県史 通史編 1』2004 年、山口英男執筆担当）

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的参加、報告の発表内容、作成資料、討議への関与、レポートの内容などから総合的に判定します（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

授業で扱う史料については、受講者の希望も踏まえて選択します。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞
日本古代史（奈良・平安時代史）
＜研究テーマ＞
古代史料学（正倉院文書の〈書類学〉）
古代の社会と行政機構
牧と駒牽をめぐる諸問題
＜主要研究業績＞
『日本古代の地域社会と行政機構』吉川弘文館、2019 年
「貢馬をめぐる牧の諸相」（佐々木虔一他編『馬と古代社会』八木書店 2021 年）
「装潢小治田人公口状とその背景」（古瀬奈津子編『古代日本の政治と制度』同成社 2021）
「正倉院文書に見える「口状」について」（佐藤信編『史料・史跡と古代社会』吉川弘文館、2018 年）

【Outline (in English)】

To acquire the ability to read and understand historical materials on the imperial court ritual of the Heian period.

HIS500B4

日本史学特殊講義 C I

末柄 豊

実務教員：

【Outline (in English)】

Diary of the Muromachi period

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

室町時代の日記を読む

【到達目標】

室町時代の日記の読解法を習得するとともに、室町時代の政治・社会・文化・宗教等について理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

室町時代中後期の貴族甘露寺親長の日記『親長卿記』文明4年（1472）条を講読する（ただし、テキストについては、受講者との相談により変更することもありうる）。演習形式でおこなう。対面授業またはオンライン授業による。報告に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	概要の説明、分担箇所の決定
第2回	輪読1	担当者の報告、質疑応答、解説
第3回	輪読2	担当者の報告、質疑応答、解説
第4回	輪読3	担当者の報告、質疑応答、解説
第5回	輪読4	担当者の報告、質疑応答、解説
第6回	輪読5	担当者の報告、質疑応答、解説
第7回	輪読6	担当者の報告、質疑応答、解説
第8回	輪読7	担当者の報告、質疑応答、解説
第9回	輪読8	担当者の報告、質疑応答、解説
第10回	輪読9	担当者の報告、質疑応答、解説
第11回	輪読10	担当者の報告、質疑応答、解説
第12回	輪読11	担当者の報告、質疑応答、解説
第13回	輪読12	担当者の報告、質疑応答、解説
第14回	輪読13	担当者の報告、質疑応答、解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
 報告担当者は、担当日条について詳細に調査検討するのはもちろん、関連する史料・先行研究を渉猟し、十全な報告を目指す。担当者以外も、当該日条について予習することが求められる。

【テキスト（教科書）】

『親長卿記』（史料大成または史料纂集）

【参考書】

元木泰雄・松蘭斎編『日記で読む日本中世史』（ミネルヴァ書房、2011年）の12章「親長卿記」（末柄執筆）ならびに同章末尾の参考文献

【成績評価の方法と基準】

報告内容および討論への参加（100 %）

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本中世史

<研究テーマ>室町時代の政治史・文化史・史料論

<主要研究業績>

『戦国時代の天皇（日本史リブレット 82）』（山川出版社、2018年）

「応仁・文明の乱」（『岩波講座日本歴史』8・中世3、2014年）

「禁裏文書にみる室町幕府と朝廷」（『ヒストリア』230号、2012年）

HIS500B4

日本史学特殊講義 C II

末柄 豊

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

室町時代の日記を読む

【到達目標】

室町時代の日記の読解法を習得するとともに、室町時代の政治・社会・文化・宗教等について理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

室町時代中後期の貴族甘露寺親長の日記『親長卿記』文明4年（1472）条を講読する（ただし、テキストについては、受講者との相談により変更することもありうる）。演習形式でおこなう。対面授業またはオンライン授業による。報告に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	輪読1	担当者の報告、質疑応答、解説
第2回	輪読2	担当者の報告、質疑応答、解説
第3回	輪読3	担当者の報告、質疑応答、解説
第4回	輪読4	担当者の報告、質疑応答、解説
第5回	輪読5	担当者の報告、質疑応答、解説
第6回	輪読6	担当者の報告、質疑応答、解説
第7回	輪読7	担当者の報告、質疑応答、解説
第8回	輪読8	担当者の報告、質疑応答、解説
第9回	輪読9	担当者の報告、質疑応答、解説
第10回	輪読10	担当者の報告、質疑応答、解説
第11回	輪読11	担当者の報告、質疑応答、解説
第12回	輪読12	担当者の報告、質疑応答、解説
第13回	輪読13	担当者の報告、質疑応答、解説
第14回	輪読14	担当者の報告、質疑応答、解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
報告担当者は、担当日条について詳細に調査検討するのはもちろん、関連する史料・先行研究を渉猟し、十全な報告を目指す。担当者以外も、当該日条について予習することが求められる。

【テキスト（教科書）】

『親長卿記』（史料大成または史料纂集）

【参考書】

元木泰雄・松蘭斎編『日記で読む日本中世史』（ミネルヴァ書房、2011年）の12章「親長卿記」（末柄執筆）ならびに同章末尾の参考文献

【成績評価の方法と基準】

報告内容および討論への参加（100 %）

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本中世史

＜研究テーマ＞室町時代の政治史・文化史・史料論

＜主要研究業績＞

『戦国時代の天皇（日本史リブレット 82）』（山川出版社、2018年）

「応仁・文明の乱」（『岩波講座日本歴史』8・中世3、2014年）

「禁裏文書にみる室町幕府と朝廷」（『ヒストリア』230号、2012年）

【Outline (in English)】

Diary of the Muromachi period

HIS500B4

日本史学特殊講義 D I

落合 功

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

近世史研究の諸問題。各人の研究テーマ、関心に即しながら、近世史の問題点を摘出し検討する。
受講生は、自分の関心から何を明らかにすべきかを考え、その学問的意味を理解することを目指したい。

【到達目標】

各人の研究で何をやりたいかを明らかにする。報告を期待するが、難しい場合、論文購読を行うようにする。
受講生は、批判的に論文が読めるようになること、また、自身の研究が如何なる研究史に位置づけられるかを明確にしたい。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義は基本的に報告とそれに対する議論とする。可能であれば合宿も考えたいが、それは、受講生と相談の上、決める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	テーマの紹介	Introduction of a theme
第 2 回	中近世移行期を考える。	Time during the modernized world medieval
第 3 回	徳川政権	Tokugawa political power
第 4 回	近世前期論	The early modern period first term is considered.
第 5 回	新井白石の政治	Arai Hakuseki's politics
第 6 回	享保改革	Tokugawa Yoshimune's politics
第 7 回	田沼時代	Tanuma's politics
第 8 回	寛政改革	Matudaira Sadanobu's politics
第 9 回	天保改革	Mizuno Tadakuni's politics
第 10 回	近世後期の社会	Society in the modern period latter period
第 11 回	幕末社会論	Society in the early modern period last years
第 12 回	明治維新时期	Meiji restoration period
第 13 回	近世社会論	I think about the early modern period.
第 14 回	まとめ	Summary

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

報告は事前に当てるので、その準備を行う。もちろん、論文を読んだり、史料を読んだうえでのぞまなければならない。報告担当者でない場合でも、当該テーマについて、事前に予習しておくこと。本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

必要に応じてその都度指示する。

【参考書】

必要に応じてその都度指示する。

【成績評価の方法と基準】

各回に課せられた報告内容と議論の質（100 %）

【学生の意見等からの気づき】

単位を目的とするのであれば、履修しないで欲しい。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【日本社会経済史】

「近世後期、広島藩の経済政策思想」『日本経済思想史研究』17、2017 年

【日本金融史】

「戦後直後の中小企業金融論議」（『青山経済論叢』68 - 4、2017 年）

【近世社会論】

「二か領用水の展開と水争い」中央大学人文科学研究所編『地域史研究の今日的課題』（中央大学出版会、2018 年 3 月）

【日本経済思想史】

『国益思想の源流』（同成社、2016 年）

【Outline (in English)】

Outline and objectives

Miscellaneous problems of early modern history study.It's based on each person's research subject and interest.The problem of a modern history study is made clear on it.A member of a class thinks what to do clearly from the interest.And I aim to understand its scientific point.

Goal

What you'd like to do by a study is made clear.I'll can read a thesis critically.

Method

Report and argument. When it's possible, a training camp is considered.

Work to be done outside of class

A thesis is read beforehand.

Textbooks

It's directed as the need arises.
required

It's directed as the need arises.

Grading criteria

The quality of the report contents and the argument

Changes following student comments

Only I don't give a grade in a destination.

HIS500B4

日本史学特殊講義Ⅱ

落合 功

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

近世史研究の諸問題。各人の研究テーマ、関心に即しながら、近世史の問題点を摘出し検討する。

受講生は、自分の関心から何を明らかにすべきかを考え、その学問的意味を理解することを目指したい。

【到達目標】

各人の研究で何をやりたいかを明らかにする。報告を期待するが、難しい場合、論文購読を行うようにする。

受講生は、批判的に論文が読めるようになること、また、自身の研究が如何なる研究史に位置づけられるかを明確にしたい。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業形式はブレンド型で行う。1回目は対面で実施するので、その時に計画を報告する。

講義は基本的に報告とそれに対する議論とする。可能であれば合宿も考えたいが、それは、受講生と相談の上、決める。

課題や発表に対するフィードバックは授業内で講評として実施する

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	テーマの紹介	Introduction of a theme
第2回	兵農分離	The dissociation of the soldier and the farmer
第3回	鎖国と海禁	National isolation and sea prohibition
第4回	飢饉	Famine
第5回	国益	National interests
第6回	徳川政権論	Tokugawa political power
第7回	貨幣と紙幣	Money and bill
第8回	実学	Practical science
第9回	砂糖業史	Sugar industry history
第10回	塩業史	Salt industry history
第11回	都市打毀し	House destruction
第12回	農兵	Farmer's soldier
第13回	大久保利通	Okubo Tshimiti
第14回	まとめ	Summary

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

報告は事前に当てるので、その準備を行う。もちろん、論文を読んだり、史料を読んだうえでのぞまなければならない。報告担当者でない場合でも、当該テーマについて、事前に予習しておくこと。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

必要に応じてその都度指示する。

【参考書】

必要に応じてその都度指示する。

【成績評価の方法と基準】

各回に課せられた報告内容と議論の質（100 %）

【学生の意見等からの気づき】

単位を目的とするのであれば、履修しないで欲しい。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【日本社会経済史】

「近世後期、広島藩の経済政策思想」『日本経済思想史研究』17、2017年

【日本金融史】

「戦後直後の中小企業金融論議」（『青山経済論叢』68 - 4、2017年）

【近世社会論】

「二か領用水の展開と水争い」中央大学人文科学研究所編『地域史研究の今日的課題』（中央大学出版会、2018年3月）

【日本経済思想史】

『国益思想の源流』（同成社、2016年）

【Outline (in English)】

Outline and objectives

Miscellaneous problems of early modern history study.It's based on each person's research subject and interest.The problem of a modern history study is made clear on it.A member of a class thinks what to do clearly from the interest.And I aim to understand its scientific point.

Goal

What you'd like to do by a study is made clear.I'll can read a thesis critically.

Method

Report and argument. When it's possible, a training camp is considered.

Work to be done outside of class

A thesis is read beforehand.

Textbooks

It's directed as the need arises.

References

It's directed as the need arises.

Grading criteria

The quality of the report contents and the argument

Changes following student comment

Only I don't give a grade in a destination.

HIS500B4

日本史学特殊講義 E I

森田 貴子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

明治期の日本について、法律・経済・社会・教育など、多角的な制度変革の観点から、近代社会の形成について、史料から論点を構成し、検討する。「法規分類大全」等を基本史料とする。

【到達目標】

近代日本の諸制度について、①史料を自力で収集し、史料批判を行う技術、②論点を構成する能力、を習得することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

テーマと史料は、第1回目に提示する。受講者は関心のあるテーマを選び、第2回目以降、各自、担当したテーマについて、研究課題を設定し、文献・史料を調査し、研究史上における意味、問題点を提示し、論点を発展させて報告する。

受講者の人数により、適宜、各自の研究テーマに関する研究発表を行う。

発表に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業について。報告担当者の決定など。
第2回	史料読解と研究発表	近代天皇制（1）
第3回	史料読解と研究発表	近代天皇制（2）
第4回	史料読解と研究発表	官僚制（1）
第5回	史料読解と研究発表	官僚制（2）
第6回	史料読解と研究発表	軍隊（1）
第7回	史料読解と研究発表	軍隊（2）
第8回	史料読解と研究発表	教育（1）
第9回	史料読解と研究発表	教育（2）
第10回	史料読解と研究発表	教育（3）
第11回	史料読解と研究発表	経済（1）
第12回	史料読解と研究発表	経済（2）
第13回	史料読解と研究発表	経済（3）
第14回	史料読解と研究発表	経済（4）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回の授業で取り上げる基本史料について、各自あらかじめ読み、論点を考えてくる。

本授業の準備・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

適宜プリントを配布する。

【参考書】

適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

報告内容（70％）、コメント等の授業への参加度（30％）。

【学生の意見等からの気づき】

2021年度とテーマを変更しています。

【学生が準備すべき機器他】

資料配布・Zoom 接続が可能なメールアドレス・パソコンを準備して下さい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近現代史

<研究テーマ>土地制度、近現代経済史、近代都市史

<主要研究業績>

森田貴子『近代土地制度と不動産経営』（塙書房、2007年）

森田貴子『三野村利左衛門と益田孝——三井財閥の礎を築いた人びと』（山川出版社、2011年）

森田貴子『華族資本の形成と家政改革——岡山池田家の場合』（高村直助編『明治前期の日本経済——資本主義への道』日本経済評論社、2004年）

森田貴子『不動産——岡山藩池田家大崎下屋敷の変容』（伊藤毅・吉田伸之編『伝統都市3 インフラ』東京大学出版会、2010年）

【Outline (in English)】

This course aims for students to study Japan of the Meiji era from diverse perspectives, including laws, economy, society, education, and to discuss various issues. The goals of this course are to acquire the technique of criticizing historical materials and the ability to compose issues. Students will be expected to have completed the required assignments before/after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class. Your overall grade in the class will be decided based on the following; Research presentation: 70%, in class contribution: 30%.

HIS500B4

日本史学特殊講義 E II

森田 貴子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

明治期の日本について、法律・経済・社会・教育など、多角的な制度変革の観点から、近代社会の形成について、史料から論点を構成し、検討する。「法規分類大全」等を基本史料とする。

【到達目標】

近代日本の諸制度について、①史料を自力で収集し、史料批判を行う技術、②論点を構成する能力、を習得することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

テーマと史料は、第1回目に提示する。受講者は関心のあるテーマを選び、第2回目以降、各自、担当したテーマについて、研究課題を設定し、文献・史料を調査し、研究史上における意味、問題点を提示し、論点を発展させて報告する。

受講者の人数により、適宜、各自の研究テーマに関する研究発表を行う。

発表に対するフィードバックは基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業について。報告担当者の決定など。
第2回	史料読解と研究発表	近代天皇制（1）
第3回	史料読解と研究発表	近代天皇制（2）
第4回	史料読解と研究発表	官僚制（1）
第5回	史料読解と研究発表	官僚制（2）
第6回	史料読解と研究発表	軍隊（1）
第7回	史料読解と研究発表	軍隊（2）
第8回	史料読解と研究発表	教育（1）
第9回	史料読解と研究発表	教育（2）
第10回	史料読解と研究発表	教育（3）
第11回	史料読解と研究発表	経済（1）
第12回	史料読解と研究発表	経済（2）
第13回	史料読解と研究発表	経済（3）
第14回	史料読解と研究発表	経済（4）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回の授業で取り上げる基本史料について、各自あらかじめ読み、論点を考えてくる。

本授業の準備・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

適宜プリントを配布する。

【参考書】

適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

報告内容（70％）、コメント等の授業への参加度（30％）。

【学生の意見等からの気づき】

2021年度とテーマを変更しています。

【学生が準備すべき機器他】

オンライン回のために、資料配布・Zoom 接続が可能なメールアドレス・パソコンを準備して下さい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近現代史

<研究テーマ>土地制度、近現代経済史、近代都市史

<主要研究業績>

森田貴子『近代土地制度と不動産経営』（塙書房、2007年）

森田貴子『三野村利左衛門と益田孝——三井財閥の礎を築いた人びと』（山川出版社、2011年）

森田貴子『華族資本の形成と家政改革——岡山池田家の場合』（高村直助編『明治前期の日本経済——資本主義への道』日本経済評論社、2004年）

森田貴子『不動産——岡山藩池田家大崎下屋敷の変容』（伊藤毅・吉田伸之編『伝統都市3 インフラ』東京大学出版会、2010年）

【Outline (in English)】

This course aims for students to study Japan of the Meiji era from diverse perspectives, including laws, economy, society, education, and to discuss various issues. The goals of this course are to acquire the technique of criticizing historical materials and the ability to compose issues. Students will be expected to have completed the required assignments before/after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class. Your overall grade in the class will be decided based on the following; Research presentation: 70%, in class contribution: 30%.

HIS500B4

東洋史学特殊講義 A I

大島 誠二

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この講座では、古代中国における都市について考察する。都市の変遷は、政治、経済の発展と深いつながりがあり、国家の性格を示す指標でもある。新発見が相次いでいる考古学資料を用いて、中国古代の中核都市の発展経過をたどり、中国の都市の特質について考察する。テキストとして劉慶柱主編『中国古代都城考古発現與研究』上巻を用いる。前期は、「東周都城」を輪読する。どのように東周時代の諸国の都城が構成され成立したのか、その過程を追ひ、比較することで「都市の発展と古代国家の成立」の問題を考えてみたい。

【到達目標】

文物や遺構など、考古学資料の分析を通して、社会の在り方を考察する研究方法を身に付ける。

都市の形成過程を学ぶことにより、中国社会の特質について理解を深める。

都市の機能と構造を復元することにより、当時の社会の特質を考察し、多角的な視座で古代中国古像を構築できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式。基本的に受講者の発表によって進行する。

対面授業で実施予定。状況が悪化すればオンライン授業【リアルタイム配信型】に移行する。

課題や発表に対するフィードバックは、基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	西周時代の都城と東周時代の都城	西周時代と東周時代の都城の在り方を比較検討する。
第 2 回	侯馬晋国故城①	「侯馬晋国故城」の「城址概況」を読み、侯馬晋国故城の全体像を把握する。
第 3 回	侯馬晋国故城②	「侯馬晋国故城」の「宮殿建築基址」を読み、宮殿区の配置と構造について理解する。
第 4 回	侯馬晋国故城③	「侯馬晋国故城」の「祭祀遺址」を読み、祭祀の在り方について理解する。
第 5 回	侯馬晋国故城④	「侯馬晋国故城」の「手工業遺址」を読み、当時の手工業について理解する。
第 6 回	侯馬晋国故城⑤	「侯馬晋国故城」の「墓葬分布区」を読み、墓葬の在り方について理解する。
第 7 回	侯馬晋国故城⑥	「侯馬晋国故城」の遺跡分布を確認し、その特徴を考察する。
第 8 回	鄭韓故城①	「鄭韓故城」の「城址概況」を読み、鄭韓故城の全体像を把握する。
第 9 回	鄭韓故城②	「鄭韓故城」の「宮殿建築基址」を読み、宮殿区の配置と構造について理解する。
第 10 回	鄭韓故城③	「鄭韓故城」の「手工業遺址」を読み、当時の手工業について理解する。

第 11 回 鄭韓故城④

「鄭韓故城」の「祭祀及倉儲遺址」を読み、祭祀と倉儲遺址について理解する。

第 12 回 鄭韓故城⑤

「鄭韓故城」の「墓葬分布区」を読み、墓葬の在り方について理解する。

第 13 回 陽翟故城

「陽翟故城」を読み、一時、韓の都が置かれた陽翟故城について検討する。

第 14 回 侯馬晋国故城と鄭韓故城の比較検討

侯馬晋国故城と鄭韓故城の遺跡を比較検討し、東周時代の都城の立地と都市構造について考察する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

発表担当者は、参加者の理解のために、レジュメを作成してほしい。博物館、美術館に足を運び、実際に考古学的資料を見る目を養ってほしい。

【テキスト（教科書）】

劉慶柱主編『中国古代都城考古発現與研究』上巻 社会科学文献出版社 2016 年 1 月

最初の時間に、詳細を説明します。

【参考書】

中国社会科学院考古研究所『中国考古学 夏商卷』中国社会科学出版社 2003 年（2011 年重印）

中国社会科学院考古研究所『中国考古学 两周卷』中国社会科学出版社 2004 年（2011 年重印）

【成績評価の方法と基準】

発表 50 %、レポート作成 50 %

【学生の意見等からの気づき】

画像資料なども利用し、できるだけわかりやすく進めたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 中国古代史、中国考古学

<研究テーマ> 秦国を中心とした、春秋戦国時代から秦漢帝国成立までの社会研究

<主要研究業績>

「秦の東進と陝東社会」『アジア史における制度と社会』 刀水書房 1996 年

「侯馬晋国墓地の変遷について」『アジア史における社会と国家』 中央大学出版部 2005 年

「咸陽周辺の住民に関する一考察－周辺墓葬の分析から－」『池田雄一教授古稀記念アジア史論叢』 白東史学会発行 2008 年

【Outline (in English)】

【Course outline】

Using archaeological data, we will follow the development process of an ancient Chinese city and consider the characteristics of Chinese cities.

As the text, we used Liu Qingzhu, the editor-in-chief, "The Archaeological Discovery and Research of Ancient Chinese Capital" first volume. In this term, we read the part of "Eastern Zhou period city". We would also like to follow the formation process of the city, and consider the problems regarding the "Development of the city and the formation of an ancient state".

【Learning Objectives】

By the end of the course, students should be able to do the followings:

A. Learn how to analyze archaeological data.

B. Understand the formation process of ancient Chinese society.

C. Understand the morphology, function and development of ancient Chinese cities.

【Learning activities outside of classroom】

Before after each class meeting, students will be expected to spend two hours to understand the course content

【Grading Criteria/Policies】

Final grade will be calculated according to the following process
Mid-term report 50 %, and in-class contribution 50%

HIS500B4

東洋史学特殊講義 A II

大島 誠二

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この講座では、古代中国における都市について考察する。都市の変遷は、政治、経済の発展と深いつながりがあり、国家の性格を示す指標でもある。新発見が相次いでいる考古学資料を用いて、中国古代の中核都市の発展経過をたどり、中国の都市の特質について考察する。テキストとして劉慶柱主編『中国古代都城考古発現与研究』上巻を用いる。後期は、「東周都城」を輪読する。東周時代の各国の都城を比較検討し、「都市の発展と古代国家の成立」の問題を考えてみたい。

【到達目標】

文物や遺構など、考古学資料の分析を通して、社会の在り方を考察する研究方法を身に付ける。
都市の形成過程を学ぶことにより、中国社会の特質について理解を深める。
都市の機能と構造を復元することにより、当時の社会の特質を考察し、多角的な視座で古代中国古像を構築できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式。基本的に受講者の発表によって進行する。
対面授業で実施予定。状況が悪化すればオンライン授業【リアルタイム配信型】に移行する。
課題や発表に対するフィードバックは、基本的に授業内で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	西周時代と東周時代の都城	西周時代と比較し東周時代の都城の役割について考える
第 2 回	趙国邯鄲故城①	「趙国邯鄲故城」の「城址概況」を読み、立地や使用年代を確認する。
第 3 回	趙国邯鄲故城②	「趙国邯鄲故城」の「城址概況」を読み、調査の経緯と遺跡の分布状況を確認する。
第 4 回	趙国邯鄲故城③	「趙国邯鄲故城」の「宮殿建築基址」を読み、宮殿建築の分布状況を把握する。
第 5 回	趙国邯鄲故城④	「趙国邯鄲故城」の「居住区及手工業作坊遺址」を読み、居住区と工房の立地を把握する。
第 6 回	趙国邯鄲故城⑤	「趙国邯鄲故城」の「墓葬区」を読み、墓葬分布状況を把握する。
第 7 回	趙国邯鄲故城⑥	「趙国邯鄲故城」の遺跡分布状況を分析し、その特色を考察する。
第 8 回	魏国都城安邑故城①	「魏国都城安邑故城」の「城址概況」を読み、立地や使用年代を把握する。
第 9 回	魏国都城安邑故城②	「魏国都城安邑故城」の「城址概況」を読み、調査の経緯と遺跡の分布状況を確認する。
第 10 回	魏国都城安邑故城③	「魏国都城安邑故城」の「宮殿建築基址」を読み、大型建築遺跡の分布状況を理解し、その機能を考察する。

第 11 回	魏国都城安邑故城④	「魏国都城安邑故城」の「手工業作坊遺址」を読み、遺跡の状況を把握する。
第 12 回	魏国都城安邑故城⑤	「魏国都城安邑故城」の遺跡の分布状況を考察し、その特色を考察する。
第 13 回	東周都城の比較検討	「侯馬晋国故城」「鄭韓故城」「趙国邯鄲故城」「魏国都城安邑故城」を比較検討し、東周時代の都城の構造を把握する。
第 14 回	西周時期と東周時代の都城形態	西周時期と東周時代の都城形態の変化を踏まえながら、背後にある社会状況の変化を考察する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。
発表担当者は、他の参加者の理解のために参考文献にあたり、レジュメを作成してほしい。
また博物館、美術館に足を運び、実際に考古学的資料を見る目を養ってもらいたい。

【テキスト（教科書）】

劉慶柱主編『中国古代都城考古発現与研究』上巻 社会科学文献出版社 2016 年 1 月
最初の時間に、詳細を説明します。

【参考書】

中国社会科学院考古研究所『中国考古学 夏商卷』中国社会科学出版社 2003 年（2011 年重印）
中国社会科学院考古研究所『中国考古学 两周卷』中国社会科学出版社 2004 年（2011 年重印）

【成績評価の方法と基準】

発表 50 %、レポート作成 50 %

【学生の意見等からの気づき】

画像資料なども利用し、できるだけわかりやすく進めたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 中国古代史、中国考古学
<研究テーマ> 秦国を中心とした、春秋戦国時代から秦漢帝国成立までの社会研究
<主要研究業績>
「秦の東進と陝東社会」『アジア史における制度と社会』 刀水書房 1996 年
「侯馬喬村墓地の変遷について」『アジア史における社会と国家』中央大学出版社 2005 年
「咸陽周辺の住民に関する一考察－周辺墓葬の分析から－」『池田雄一教授古稀記念アジア史論叢』白東史学会発行 2008 年

【Outline (in English)】

【Course outline】

Using archaeological data, we will follow the development process of an ancient Chinese city and consider the characteristics of Chinese cities.

As the text, we used Liu Qingzhu, the editor-in-chief, "The Archaeological Discovery and Research of Ancient Chinese Capital" first volume. In this term, we read the part of "Eastern Zhou period city". We would also like to follow the formation process of the city, and consider the problems regarding the "Development of the city and the formation of an ancient state".

【Learning Objectives】

By the end of the course, students should be able to do the followings:

- Learn how to analyze archaeological data.
- Understand the formation process of ancient Chinese society.
- Understand the morphology, function and development of ancient Chinese cities.

【Learning activities outside of classroom】

Before after each class meeting, students will be expected to spend two hours to understand the course content

【Grading Criteria/Policies】

Final grade will be calculated according to the following process
Mid-term report 50 % , and in-class contribution 50%

HIS500B4

東洋史学特殊講義 B I

水上 和則

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

中国陶磁生産文化研究

より深く陶芸作品を理解するために学ぶ。

【到達目標】

陶磁生産技法を通じて、制作文化を研究する能力を獲得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示された
どの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針
に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・毎回対面授業を基本として行う。
- ・教員の講義の後に、テーマごとに各自課題の発表を行う。
- ・実技理解の為に学外見学を行う。
- ・疑問点は、授業時間内で解決し、予習・復習時の質問は学内メールにて受ける。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	概説	アジア陶磁生産研究の意義と目的
第 2 回	アジア陶磁研究の意味	アジア陶磁文化の世界視野上の位置付け
第 3 回	中国陶磁の調査方法	調査対象と調査方法の具体例
第 4 回	中国陶磁生産の基準資料	陶磁生産の基準資料とは。何を窯業生産と言うのか
第 5 回	中国陶磁機能分岐と年代設定	土器・陶器・磁器の分類と、開始年代設定
第 6 回	中国陶磁研究状況	中国に於ける研究状況
第 7 回	陶磁考古資料と取扱い	考古資料と分析試料の取扱い方法
第 8 回	陶磁生産研究上の基本文献（一）	『中国陶磁見聞録』（清・康熙六十一年）を読む
第 9 回	同 基本文献（二）	『景德鎮陶録』（清・嘉慶二十年）を読む
第 10 回	中国陶磁器の東アジア交易	新安沖沈船と交易品
第 11 回	陶磁交易と製陶技術伝搬	瀬戸と唐津の製陶技術からみる中国技法
第 12 回	朝鮮半島への技術伝搬	北宋官窯と高麗青磁の技
第 13 回	日本への技術伝搬	唐津の窯と肥前磁器窯の形態比較
第 14 回	中国陶磁の展示見学（日程未定）	東京国立博物館を予定

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

提示する基本文献を身近に置き、繰り返し通読すること。

本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

必要に応じプリント配布

【参考書】

授業の進行に沿って随時紹介する。

講義で扱う文献は以下

『中国陶磁見聞録』（清・康熙六十一年）平凡社、東洋文庫（363）、ISBN-13: 978-4582803631

『景德鎮陶録 1 2』（清・嘉慶二十年）平凡社、東洋文庫（464・465）、ISBN-13: 978-4582804645 ISBN-13: 978-4582804652

【成績評価の方法と基準】

平常点（60%）と研究発表・レポート（40%）の合計で成績評価を行う。

【学生の意見等からの気づき】

今後順次対応してゆく。

【その他の重要事項】

陶磁制作の学外見学(日程未定)

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

中国陶磁史

＜研究テーマ＞

唐宋代の陶磁技法の研究

＜主要研究業績＞

(1)「中国釉下彩瓷釉の研究」『東洋陶磁 Vol.31』2002 年

(2)「宋元代景德鎮窯における素地土配合の研究」『元代青花白瓷研究』六一書房、2009 年

(3)「景德鎮調合原料の成形性不良と胴継ぎ技法の始まり」『中近世陶磁器の考古学 第八巻』雄山閣、2018 年

(4)「曜変天目再現研究の調査報告」『法政史学 第 90 号』2018 年

(5)「宋代建窯黒褐釉煤熔剤原料についての考察」『中近世陶磁器の考古学 第十三巻』雄山閣、2021 年

(6)「宋代建窯黒褐釉煤熔剤原料についての考察」『中近世陶磁器の考古学 第十三巻』株式会社 雄山閣・2021 年

【Outline (in English)】

Chinese ceramics production and cultural study

Learning of preparations and review time of this class make 2 hours for each the standard.

Your question is accepted by a mail on campus.

I make estimate a desire to learn by preparation(60%), and gives a grade in total on a final report (40%).

HIS500B4

東洋史学特殊講義 B II

水上 和則

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

中国陶磁生産文化研究

【到達目標】

陶磁生産技法を通じて、制作文化を研究する能力を獲得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・毎回対面授業を基本として行う。
- ・教員の講義の後に、テーマごとに各自課題の発表を行う。
- ・実技理解の為に学外見学を行う。
- ・疑問点は、授業時間内で解決し、予習・復習時の質問は学内メールにて受ける。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	生産研究の基礎	中国陶磁生産で用いられる特殊用語
第 2 回	先史時代資料と研究方法	《土器》という言葉について考える
第 3 回	施釉陶器の始まりと構造	釉とは何か。釉の役割。釉の価値観。
第 4 回	陶磁発達の具体例	華北窯と使用原料
第 5 回	陶磁文化の発達	磁州窯の生産技法
第 6 回	陶磁文化の伝達	磁州窯と白瓷諸窯
第 7 回	青瓷の隆盛	越州窯と生産品
第 8 回	焼成すること	饅頭窯と石炭燃料の選択
第 9 回	陶磁と茶文化	建盞と茶文化に適した機能
第 10 回	陶磁の伝統技法	景德鎮窯と伝統技法 (一) 北村弥一郎の支那窯業調査
第 11 回	陶磁の伝統技法 (二)	同 伝統技法 (二)
第 12 回	陶磁文化の広がり	華南陶磁器と沖縄陶器
第 13 回	中国陶磁とインド洋交易	肥前磁器の意匠と欧州への影響
第 14 回	まとめ	これまでのまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

提示する基本文献を身近に置き、繰り返し通読すること。
本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

プリント配布

【参考書】

授業の進行に沿って随時紹介する

講義で扱う文献は以下

『中国陶磁見聞録』(清・康熙六十一年) 平凡社、東洋文庫 (363)、ISBN-13: 978-4582803631

『景德鎮陶録 1 2』(清・嘉慶二十年) 平凡社、東洋文庫 (464・465)、ISBN-13: 978-4582804645 ISBN-13: 978-4582804652

【成績評価の方法と基準】

平常点 (60%) と研究発表・レポート (40%) の合計で成績評価を行う。

【学生の意見等からの気づき】

今後順次対応してゆく。

【その他の重要事項】

博物館・美術館への中国陶磁器見学を予定する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

中国陶瓷史

<研究テーマ>

唐宋代の陶瓷技法の研究

<主要研究業績>

(1)「中国釉下彩瓷釉の研究」『東洋陶磁 Vol.31』2002 年

(2)「宋元代景德鎮窯業における素地土配合の研究」『元代青花白瓷研究』六一書房、2009 年

(3)「景德鎮調査原料の成形性不良と胴継ぎ技法の始まり」『中近世陶磁器の考古学 第八巻』雄山閣、2018 年

(4)「曜変天目再現研究の調査報告」『法政史学 第 90 号』2018 年

(5)「宋代建窯黒褐釉媒溶剤原料についての考察」『中近世陶磁器の考古学 第十三巻』雄山閣、2021 年

(6)「宋代建窯黒褐釉媒溶剤原料についての考察」『中近世陶磁器の考古学 第十三巻』株式会社 雄山閣・2021 年

【Outline (in English)】

Chinese ceramics production and cultural study

Learning of preparations and review time of this class make 2 hours for each the standard.

Your question is accepted by a mail on campus.

I make estimate a desire to learn by preparation(60%), and gives a grade in total on a final report (40%).

HIS500B4

西洋史学特殊講義 A I

松原 俊文

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

古代ローマ史に関する英文文献の講読を通じて、英語で書かれた西洋史関連の研究文献の精読力と速読力を身につける。

【到達目標】

本授業は、以下を到達目標とします。

- ・ 英文学術文献を正確かつ速く読むことができる。
- ・ 論じられているテーマに関して自主的に調べ、批判的に考えることができる。
- ・ 古代ローマ史上の問題とそれに対する取り組み方を身につけ、自分の論点を立てることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

1. 古代ローマの政治・社会・文化に関する英文文献を講読します。テキストは通史や特定の問題に絞った論文ではなく、政治制度や属州経営といったテーマを包括的に扱った文献から、受講者の希望も加味した上で決定します。
2. 授業は任意の受講者にテキストを和訳してもらい、適宜解説を行う形で進めます。また内容や英文に関して全受講者に質問を行い、正しく把握しているか確認します。したがって全員が前もって英文テキストを下読みし、内容を把握しておく必要があります。
3. フィードバックは、授業時間内に講評と解説の機会をもうける形で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	テキスト決定・予習方法の説明
第 2 回	文献講読 1	問題の背景説明・イントロダクション講読
第 3 回	文献講読 2	イントロダクションの解説と質疑
第 4 回	文献講読 3	第一節講読
第 5 回	文献講読 4	第一節の解説と質疑
第 6 回	文献講読 5	第二節講読
第 7 回	文献講読 6	第二節の解説と質疑
第 8 回	文献講読 7	第三節講読
第 9 回	文献講読 8	第三節の解説と質疑
第 10 回	文献講読 9	第四節講読
第 11 回	文献講読 10	第四節の解説と質疑
第 12 回	文献講読 11	第五節講読
第 13 回	文献講読 12	第五節の解説と質疑
第 14 回	春学期の総括	文献の論点整理と討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。事前に指定された英文テキストの箇所を充分に下読みしておくのは言うまでもなく、固有名詞・事項・専門用語などで不明なものについてもできる限り調べておくこと。授業後は、誤読していた箇所を重点的に読み直して、論旨を再確認すること。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しません。Blackwell Companions to the Ancient World シリーズから、古代ローマ史を扱ったテキストを配信します。

【参考書】

・ Hornblower, S., Spawforth, A. (eds.), *Oxford Classical Dictionary* (4th ed.), Oxford, 2012.

- ・ Bagnall, R. S., et al. (eds.), *The Encyclopedia of Ancient History*, Malden, MA, 2012.
- ・ Cancik, H., Schneider, H. (eds.), Salazar, C. F. (Eng. ed.), *Brill's New Pauly*, Leiden, 2002-2010.
- ・ バウダー編、小田謙爾他訳『古代ローマ人名事典』原書房、1994 年
- ・ 松原國師『西洋古典学事典』京都大学学術出版会、2010 年

【成績評価の方法と基準】

平常点 100% (英文読解の精度と内容理解度 50 %、議論の背景と史料の把握度 50%) で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし。

【その他の重要事項】

毎回授業に英和辞書を持ってくる。辞書の指定はありませんが、収録語句 20 万語以上の辞書 (リーダーズ英和辞典、ジーニアス英和大辞典、研究社新英和大辞典等)、もしくはそれに相当する電子辞書が望ましい。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

古代ローマ史

＜研究テーマ＞

ギリシア・ローマの歴史叙述

＜主要研究業績＞

1. 'Out of Many, One? An Aspect of the Public Rôle of Roman Historiography', *Kodai: Journal of Ancient History* 16, Editorial Board of Kodai, 2015.
2. 「伝記と歴史の境界を越えて - 英雄伝というジャンルの誕生」、小池登、佐藤昇、木原志乃編『『英雄伝』の挑戦 新たなプルタルコス像に迫る』、京都大学学術出版会、2019 年
3. 「記憶 (メモリア) と政治 - ローマの政治文化における歴史の役割 -」、『西洋史研究』新輯第 48 号、西洋史研究会、2019 年

【Outline (in English)】

(Course outline)

The course offers tutorials on reading ancient Roman history in English. It is primarily designed for students specialised in Western history who wish to improve their reading fluency and efficiency of academic English.

(Learning Objectives)

The course aims to:

- improve the students' ability to read academic English quickly and accurately.

- enable them to grasp important aspects as well as problems of ancient Roman history.

(Learning activities outside of classroom)

Lecture/Exercise (two-credits)

Students are expected:

- thoroughly to read the designated section of the English text before each class.

- to revise the text and their translations, in particular corrected points, after each class.

(Grading Criteria /Policy)

Grading is based on in-class contribution (100%).

HIS500B4

西洋史学特殊講義 A II

松原 俊文

実務教員：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

古代ローマ史に関する英文文献の講読を通じて、英語で書かれた西洋史関連の研究文献の精読力と速読力を身につける。

【到達目標】

本授業は、以下を到達目標とします。

- ・ 英文学術文献を正確かつ速く読むことができる。
- ・ 論じられているテーマに関して自主的に調べ、批判的に考えることができる。
- ・ 古代ローマ史上の問題とそれに対する取り組み方を身につけ、自分の論点を立てることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

1. 古代ローマの政治・社会・文化に関する英文文献を講読します。テキストは通史や特定の問題に絞った論文ではなく、政治制度や属州経営といったテーマを包括的に扱った文献から、受講者の希望も加味した上で決定します。
2. 授業は任意の受講者にテキストを和訳してもらい、適宜解説を行う形で進めます。また内容や英文に関して全受講者に質問を行い、正しく把握しているか確認します。したがって全員が前もって英文テキストを下読みし、内容を把握しておく必要があります。
3. フィードバックは、授業時間内に講評と解説の機会をもうける形で行います。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	テキスト決定・予習方法の説明
第 2 回	文献講読 1	問題の背景説明・イントロダクション講読
第 3 回	文献講読 2	イントロダクションの解説と質疑
第 4 回	文献講読 3	第一節講読
第 5 回	文献講読 4	第一節の解説と質疑
第 6 回	文献講読 5	第二節講読
第 7 回	文献講読 6	第二節の解説と質疑
第 8 回	文献講読 7	第三節講読
第 9 回	文献講読 8	第三節の解説と質疑
第 10 回	文献講読 9	第四節講読
第 11 回	文献講読 10	第四節の解説と質疑
第 12 回	文献講読 11	第五節講読
第 13 回	文献講読 12	第五節の解説と質疑
第 14 回	秋学期の総括	文献の論点整理と討論

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とします。事前に指定された英文テキストの箇所を充分に下読みしておくのは言うまでもなく、固有名詞・事項・専門用語などで不明なものについてもできる限り調べておくこと。授業後は、誤読していた箇所を重点的に読み直して、論旨を再確認すること。

【テキスト (教科書)】

教科書は使用しません。Blackwell Companions to the Ancient World シリーズから、古代ローマ史を扱ったテキストを配信します。

【参考書】

・ Hornblower, S., Spawforth, A. (eds.), *Oxford Classical Dictionary* (4th ed.), Oxford, 2012.

- ・ Bagnall, R. S., et al. (eds.), *The Encyclopedia of Ancient History*, Malden, MA, 2012.
- ・ Cancik, H., Schneider, H. (eds.), Salazar, C. F. (Eng. ed.), *Brill's New Pauly*, Leiden, 2002-2010.
- ・ バウダー編、小田謙爾他訳『古代ローマ人名事典』原書房、1994 年
- ・ 松原國師『西洋古典学事典』京都大学学術出版会、2010 年

【成績評価の方法と基準】

平常点 100% (英文読解の精度と内容理解度 50 %、議論の背景と史料の把握度 50%) で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし。

【その他の重要事項】

毎回授業に英和辞書を持ってくる。辞書の指定はありませんが、収録語句 20 万語以上の辞書 (リーダーズ英和辞典、ジーニアス英和大辞典、研究社新英和大辞典等)、もしくはそれに相当する電子辞書が望ましい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

古代ローマ史

<研究テーマ>

ギリシア・ローマの歴史叙述

<主要研究業績>

1. 'Out of Many, One? An Aspect of the Public Rôle of Roman Historiography', *Kodai: Journal of Ancient History* 16, Editorial Board of Kodai, 2015.
2. 「伝記と歴史の境界を越えて - 英雄伝というジャンルの誕生」、小池登、佐藤昇、木原志乃編『『英雄伝』の挑戦 新たなプルタルコス像に迫る』、京都大学学術出版会、2019 年
3. 「記憶 (メモリア) と政治 - ローマの政治文化における歴史の役割 -」、『西洋史研究』新輯第 48 号、西洋史研究会、2019 年

【Outline (in English)】

(Course outline)

The course offers tutorials on reading ancient Roman history in English. It is primarily designed for students specialised in Western history who wish to improve their reading fluency and efficiency of academic English.

(Learning Objectives)

The course aims to:

- improve the students' ability to read academic English quickly and accurately.
- enable them to grasp important aspects as well as problems of ancient Roman history.

(Learning activities outside of classroom)

Lecture/Exercise (two-credits)

Students are expected:

- thoroughly to read the designated section of the English text before each class.
- to revise the text and their translations, in particular corrected points, after each class.

(Grading Criteria /Policy)

Grading is based on in-class contribution (100%).

HIS500B4

西洋史学特殊講義 B I

篠原 琢

実務教員：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

18 世紀末から第一次世界大戦期までの「長い 19 世紀史」におけるハプスブルク君主国の歴史を概観しながら、「国民形成」、ナショナリズム、市民社会、帝國的秩序といったより一般的な歴史的テーマについて再検討を加える。ハプスブルク帝国史研究の現段階を理解するだけでなく、目的論的なヨーロッパ近代史の概念への批判的なアプローチを獲得することが授業の目標である。それを通して、現代世界の問題について、新たな歴史的視点を得ることを目指そう。ハプスブルク帝国の領域は、ハプスブルク帝室が戦争と婚姻によって相続した雑多な諸王国・諸地域の複合的な集積でしかなく、そもそも近代国家を構成する凝集力に欠けており、帝国末期には、国民主義が浸透し、言語紛争が絶えなかった。長い 19 世紀は、そもそも帝国が必然的に衰退する過程であった……。この種の議論は、集権的で同質的な「国民国家」Nation State を近代国家の理念型として想定し、ハプスブルク帝国を近代ヨーロッパの発展から逸脱した「非正常」とみなす視点を暗黙のうちに持っている。帝国の継承諸国では、社会主義体制下も含めて、それぞれの国家の「民族的」性格が強調されたため、この種の歴史観は、当然の前提とみなされることが多かった。

果たして帝国の 19 世紀史をそのように捉えることは妥当だろうか。授業では最初に若干の理論的・史学史的考察を行った後、帝国史のトピックを順に検討し、帝国史の再検討を行う。

【到達目標】

受講者はハプスブルク帝国の歴史についての最新の研究動向を主に英語論文を講読することによって理解する。その作業を通じて、ネイション形成・ナショナリズム論について、批判的な視点を獲得し、それぞれの研究領域でその方法論を生かす能力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

講義と、英語論文の輪読、各回のテーマについてのグループディスカッションを組み合わせる。授業はオンライン・同時配信で行います。フィードバックは、Hoppii 上でコメント・質問を集め、そこで対応するか、授業時に取り上げます。参加人数が少ないことが予想されるので、授業時に積極的に発言してください。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ハプスブルク帝国とは何か：その遺産とイメージ 1. 帝国概論	ハプスブルク帝国とはどのような帝国だったのか、概説的に解説する。
第 2 回	ハプスブルク帝国とは何か：その遺産とイメージ 2. 帝国を思い出す	ハプスブルク帝国崩壊後、帝国にどのようなイメージが存在したのか、代表的な流れを考える。
第 3 回	ハプスブルク帝国史研究の歴史 1. 帝国解体は必然だったのか？	ハプスブルク帝国後継諸国の歴史認識を問う。
第 4 回	ハプスブルク帝国史研究の歴史 2. 時代錯誤の帝国？	Oscar Jaszi, <i>The Dissolution of Habsburg Monarchy</i>

第 5 回	ハプスブルク帝国史研究の歴史 3. 帝国の長い解体過程	Alan Sked, The Fall and Decline of the Habsburg Monarchy
第 6 回	ハプスブルク帝国史研究の歴史 4. 帝国解体は必然ではない！	Pieter Judson, Habsburg Empire. New History
第 7 回	国民形成・ナショナリズム研究と帝国史 1. 諸国民社会の形成	Miroslav Hroch, Social Preconditions of National Revival in Europe
第 8 回	国民形成・ナショナリズム研究と帝国史 2. できごととしてのネーション	Rogers Brubaker, Nation without Groups
第 9 回	国民形成・ナショナリズム研究と帝国史 3. National Indifference	Tara Zahra, "Imagined Non-communities"
第 10 回	国民形成・ナショナリズム研究と帝国史 4. 国民化する帝国	Alexei Miller, Nationalizing Empires
第 11 回	植民地帝国としてのハプスブルク帝国 1. ガリツィア・プロヴェナ	Larry Wolff, The Idea of Galicia
第 12 回	植民地帝国としてのハプスブルク帝国 2. 文明化の使命	Larry Wolff, The Idea of Galicia
第 13 回	ハンナ・アーレント『全体主義の起原』から帝国を考える	ハンナ・アーレント、『全体主義の起原』のうち、第二巻「帝国主義」を扱う。
第 14 回	まとめ	講義・演習の成果を振り返る

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業時に扱うテキストは PDF で配布するので、当日、議論に参加できるように必ず準備してくる。本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

授業予定にあげたもののうち、Pieter Judson, Habsburg Empire. New History を教科書とする。

【参考書】

授業予定を参照。

【成績評価の方法と基準】

演習への貢献度、演習時の報告を 40%、学期末のレポートを 60% として評価する。

【学生の意見等からの気づき】

昨年度は受講者がいなかったため、特に該当しない。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 中央ヨーロッパ近現代史

<研究テーマ> 中央ヨーロッパにおける国民形成とナショナリズム、第二次世界大戦の記憶、文化遺産保存の思想と運動

【Outline (in English)】

Learning Objectives

We will survey basic historical development of Habsburg Monarchy in the "long Nineteenth century" from the time of French Revolution to the First World War to analyze more general notions such as nation-building, nationalism, civil society etc. The purpose of the course is not only to understand the most recent trends of historiography on the Monarchy, but also to get critical approach to the teleological concept of modern history of Europe.

Habsburg Monarchy was a mere amalgam of different territories acquired and inherited by the house of Habsburgs through marriages and wars. Therefore it was anachronistic existence by itself, lacking a potentiality to develop to an integrated modern state. The Long Nineteenth century was for it a process of decay leading to an inevitable dissolution, a process driven by nationalism, nationality conflicts... Such an argument is based on a view which presupposes a centralized homogeneous nation-state as a normality of modern state, and depicts history the Habsburg monarchy as an anomaly deviated from the "normal" development of European modernity. As its succeeding states in Central and Eastern Europe legitimates their existing by stressing their "national" characters, such vision of history often constructed basic pattern of historical narrative. Can we still understand history of the Monarchy in such a way? In this lecture, after summarizing historiography of Habsburg monarchy and more important theoretical problems, we will investigate some of the most essential topics of history of the Monarchy.

Learning activities outside of classroom:

Critical reading of academic essays on the topic in advance.

Grading Criteria:

Comments and discussion in the class: 40%

Final report: 60%

HIS500B4

西洋史学特殊講義 B II

篠原 琢

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

18 世紀末から第一次世界大戦期までの「長い 19 世紀史」におけるハプスブルク君主国の歴史を概観しながら、「国民形成」、ナショナリズム、市民社会、帝國的秩序といったより一般的な歴史的テーマについて再検討を加える。ハプスブルク帝国史研究の現段階を理解するだけでなく、目的論的なヨーロッパ近代史の概念への批判的なアプローチを獲得することが授業の目標である。それを通して、現代世界の問題について、新たな歴史的視点を得ることを目指そう。

ハプスブルク帝国の領域は、ハプスブルク帝室が戦争と婚姻によって相続した雑多な諸王国・諸地域の複合的な集積でしかなく、そもそも近代国家を構成する凝集力に欠けており、帝国末期には、国民主義が浸透し、言語紛争が絶えなかった。長い 19 世紀は、そもそも帝国が必然的に衰退する過程であった……。この種の議論は、集権的で同質的な「国民国家」Nation State を近代国家の理念型として想定し、ハプスブルク帝国を近代ヨーロッパの発展から逸脱した「非正常」とみなす視点を暗黙のうちに持っている。帝国の継承諸国では、社会主義体制下も含めて、それぞれの国家の「民族的」性格が強調されたため、この種の歴史観は、当然の前提とみなされることが多かった。

果たして帝国の 19 世紀史をそのように捉えることは妥当だろうか。授業では最初に若干の理論的・史学史的考察を行った後、帝国史のトピックを順に検討し、帝国史の再検討を行う。前期は帝国史について、方法論を主に検討したが、後期は帝国の諸地域を具体的に検討する。

【到達目標】

受講者はハプスブルク帝国の歴史についての最新の研究動向を主に英語論文を講読することによって理解する。その作業を通じて、ネイション形成・ナショナリズム論について、批判的な視点を獲得し、それぞれの研究領域でその方法論を生かす能力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義と、英語論文の輪読、各回のテーマについてのグループディスカッションを組み合わせる。授業はオンライン・同時配信で行います。フィードバックは、Hoppii 上でコメント・質問を集め、そこで対応するか、授業時に取り上げます。参加人数が少ないことが予想されるので、授業時に積極的に発言してください。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	ボヘミア（パーメン）史 1.	「国民再生」概念について概説する。
	チェコ「国民再生」の思想と運動 1.	
第 2 回	ボヘミア（パーメン）史 2.	Vladimír Macura を読む
	チェコ「国民再生」の思想と運動 2.	
第 3 回	ボヘミア（パーメン）史 3.	「フランクフルトへの手紙」を考える
	1848 年革命 1	
第 4 回	ボヘミア（パーメン）史 4.	「フランクフルトへの手紙」を考える
	1848 年革命 2	

第 5 回	ボヘミア（パーメン）史 5.	チェコ・ナショナリズムと「ボヘミア王国の歴史的権利」
	19 世紀後半のチェコ社会	
第 6 回	ボヘミア（パーメン）史 6.	19 世紀のハプスブルク帝国の「ナショナリズム」問題について、「言語闘争」は典型的だと考えられてきた。その問題について批判的に検討を加える。
	「言語闘争」	
第 7 回	ボヘミア（パーメン）史 7.	第一次世界大戦中の「帝国愛国主義」とチェコスロヴァキア独立論について検討する。
	第一次世界大戦とチェコ社会	
第 8 回	チェコにおけるユダヤ人社会	ボヘミア・モラヴィアにおける「ユダヤ人社会」、その同化とユダヤ・ナショナリズムを考える。
第 9 回	ガリツィア史 1.	1846 年のガリツィア蜂起、およびそれに伴って起こった「ガリツィアの虐殺」をナショナリズムの観点から考える。
	「ガリツィアの虐殺」	
第 10 回	ガリツィア史 2.	ポーランド分割後のポーランド貴族の政治的影響力について考える。
	ポーランド貴族とポーランド王国の正統性	
第 11 回	ガリツィア史 4.	19 世紀後半のポーランドの国民農民ナショナリズムの形成過程を農民を中心に考える。
	農民ナショナリズムの進展	
第 12 回	ガリツィア史 5.	ポーランド貴族の政治的・文化的ヘゲモニーに抗して進展したウクライナ・ナショナリズムをリヴィウを中心に考える。
	ウクライナのピエモンテ？	
第 13 回	ガリツィア史 6.	ガリツィアにおけるシオニズム、ユダヤ自治主義、同化主義の問題を考える。
	ガリツィアにおけるユダヤ人社会	
第 14 回	まとめ	講義・演習の成果を振り返る

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業時に扱うテキストは PDF で配布するので、当日、議論に参加できるように必ず準備しておくこと。本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

授業予定にあげたもののうち、Pieter Judson, Habsburg Empire. New History を教科書とする。

【参考書】

授業予定を参照。

【成績評価の方法と基準】

演習への貢献度、演習時の報告を 40%、学期末のレポートを 60% として評価する。

【学生の意見等からの気づき】

受講生数が少ないことが見込まれるので、各自の研究内容に充分配慮しながら授業を進める。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 中央ヨーロッパ近現代史

<研究テーマ> 中央ヨーロッパにおける国民形成とナショナリズム、第二次世界大戦の記憶、文化遺産保存の思想と運動

【Outline (in English)】

We will survey basic historical development of Habsburg Monarchy in the "long Nineteenth century" from the time of French Revolution to the First World War to analyze more general notions such as nation-building, nationalism, civil society etc. The purpose of the course is not only to understand the most recent trends of historiography on the Monarchy, but also to get critical approach to the teleological concept of modern history of Europe.

Habsburg Monarchy was a mere amalgam of different territories acquired and inherited by the house of Habsburgs through marriages and wars. Therefore it was anachronistic existence by itself, lacking a potentiality to develop to an integrated modern state. The Long Nineteenth century was for it a process of decay leading to an inevitable dissolution, a process driven by nationalism, nationality conflicts... Such an argument is based on a view which presupposes a centralized homogeneous nation-state as a normality of modern state, and depicts history the Habsburg monarchy as an anomaly deviated from the "normal" development of European modernity. As its succeeding states in Central and Eastern Europe legitimates their existing by stressing their "national" characters, such vision of history often constructed basic pattern of historical narrative. Can we still understand history of the Monarchy in such a way? In this lecture, after summarizing historiography of Habsburg monarchy and more important theoretical problems, we will investigate some of the most essential topics of history of the Monarchy.

Learning activities outside of classroom:

Critical reading of academic essays on the topic in advance.

Grading Criteria:

Comments and discussion in the class: 40%

Final report: 60%

HIS500B4

西洋史学特殊講義C I

稲垣 春樹

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

テキストの講読とグループディスカッションにより近現代ヨーロッパ史研究の基本的な方法を身につける。各自の学位論文の課題に沿った文献講読と研究報告とする。ただし受講者が多い場合には共通テキストとして感情史に関する日本語文献を読む。

【到達目標】

学生は、近現代ヨーロッパ史に関する研究を具体的に進めていく方法を身につけることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の進め方について案内する。
第2回	研究報告1	受講者各自の研究について簡単に報告する。次週以降に読む文献を持ち寄る。
第3回	文献講読1	受講生の選んだ文献1の講読
第4回	文献講読2	受講生の選んだ文献2の講読
第5回	文献講読3	受講生の選んだ文献3の講読
第6回	文献講読4	受講生の選んだ文献4の講読
第7回	研究報告2	受講生各自の研究の進捗状況について報告する。
第8回	文献講読5	受講生の選んだ文献5の講読
第9回	文献講読6	受講生の選んだ文献6の講読
第10回	文献講読7	受講生の選んだ文献7の講読
第11回	文献講読8	受講生の選んだ文献8の講読
第12回	研究報告3	受講生各自の研究の進捗状況について報告する。
第13回	文献講読9	受講生の選んだ文献9の講読
第14回	文献講読10、まとめ	受講生の選んだ文献10の講読

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備時間は4時間を標準とする。授業前に文献講読あるいは研究報告の準備をし、授業後は授業の内容を自身の研究に反映させること。

【テキスト（教科書）】

各自の選んだ論文や研究書をテキストとして使用する。受講者が多い場合には感情史の日本語テキストを読む。まずは以下の参考書から始める。

【参考書】

ヤン・プランパー『感情史の始まり』みすず書房、2020年
バーバラ・H・ローゼンワイン、リッカルド・クリスティアーニ『感情史とは何か』岩波書店、2021年

【成績評価の方法と基準】

平常点100%。毎回の事前準備（論点コメントの作成）と授業中のディスカッションへの参加により判断する。

【学生の意見等からの気づき】

受講生の研究関心に基づく授業内容にすることで、学習効果が高まることがわかったので、今年度も学生主体の授業にする。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>イギリス帝国史

＜研究テーマ＞植民地における政治と法、インド、ジャマイカ
 ＜主要研究業績＞「専制と法の支配—1820年代ボンベイにおける政府と裁判所の対立—」『史学雑誌』127編1号（2018年1月）1～34頁。

【Outline (in English)】

Course Outline:

The class will read books and discuss various topics on modern European history.

Learning Objectives:

The goal of this class is to cultivate skills of critical reading and writing relevant for historical research.

Learning activities outside of classroom:

Students are expected to read course materials in advance of the class (2 hours). After the class, they need to spend 2 hours to upgrade their own research based on the discussion in the class.

Grading Criteria/Policy:

Grading will be decided based on their performance in the class (preparation for and contribution to the discussion: 100%).

HIS500B4

西洋史学特殊講義CⅡ

稲垣 春樹

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

テキストの講読とグループディスカッションにより近現代ヨーロッパ史研究の基本的な方法を身につける。各自の学位論文の課題に沿った文献講読と研究報告とする。ただし受講者が多い場合には共通テキストとして史学史に関する英語文献を読む。

【到達目標】

学生は、近現代ヨーロッパ史に関する研究を具体的に進めていく方法を身につけることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の進め方について案内する。
第2回	研究報告1	受講者各自の研究について簡単に報告する。次週以降に読む文献を持ち寄る。
第3回	文献講読1	受講生の選んだ文献1の講読
第4回	文献講読2	受講生の選んだ文献2の講読
第5回	文献講読3	受講生の選んだ文献3の講読
第6回	文献講読4	受講生の選んだ文献4の講読
第7回	研究報告2	受講生各自の研究の進捗状況について報告する。
第8回	文献講読5	受講生の選んだ文献5の講読
第9回	文献講読6	受講生の選んだ文献6の講読
第10回	文献講読7	受講生の選んだ文献7の講読
第11回	文献講読8	受講生の選んだ文献8の講読
第12回	研究報告3	受講生各自の研究の進捗状況について報告する。
第13回	文献講読9	受講生の選んだ文献9の講読
第14回	文献講読10、まとめ	受講生の選んだ文献10の講読

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備時間は4時間を標準とする。授業前に文献講読あるいは研究報告の準備をし、授業後は授業の内容を自身の研究に反映させること。

【テキスト（教科書）】

各自の選んだ論文や研究書をテキストとして使用する。受講者が多い場合には史学史に関する英語テキストを読む。まずは以下の参考書から始める。

【参考書】

John Tosh, The Pursuit of History: Aims, methods and new directions in the study of history, 7th edition (Routledge, 2021).

【成績評価の方法と基準】

平常点100%。毎回の事前準備（論点コメントの作成）と授業中のディスカッションへの参加により判断する。

【学生の意見等からの気づき】

受講生の研究関心に基づく授業内容にすることで、学習効果が高まることがわかったので、今年度も学生主体の授業にする。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞イギリス帝国史

＜研究テーマ＞植民地における政治と法、インド、ジャマイカ

＜主要研究業績＞「専制と法の支配― 1820 年代ボンベイにおける政府と裁判所の対立―」『史学雑誌』 127 編 1 号（2018 年 1 月）1～34 頁。

【Outline (in English)】

Course Outline:

The class will read books and discuss various topics on modern European history.

Learning Objectives:

The goal of this class is to cultivate skills of critical reading and writing relevant for historical research.

Learning activities outside of classroom:

Students are expected to read course materials in advance of the class (2 hours). After the class, they need to spend 2 hours to upgrade their own research based on the discussion in the class.

Grading Criteria/Policy:

Grading will be decided based on their performance in the class (preparation for and contribution to the discussion: 100%).

HIS700B4

史学特殊演習 B I

大塚 紀弘

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本中世史に関する論文の構成や内容について個別に相談する。また、希望に応じて研究発表をする機会を設ける。

【到達目標】

日本中世史に関する論文を執筆し、学術雑誌等に公表することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式で進める。事前に提出された論文の草稿またはレジュメに基づいて議論する。課題等の提出・フィードバックは「学習支援システム」または「メール」を通じて行なう予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	研究現状報告（1）	研究計画の提示と相談
第 2 回	論文相談（1）	論文草稿の提示と議論
第 3 回	論文相談（2）	論文草稿の提示と議論
第 4 回	論文相談（3）	論文草稿の提示と議論
第 5 回	研究発表（1）	研究報告と議論
第 6 回	論文相談（4）	論文草稿の提示と議論
第 7 回	論文相談（5）	論文草稿の提示と議論
第 8 回	論文相談（6）	論文草稿の提示と議論
第 9 回	研究発表（2）	研究報告と議論
第 10 回	論文相談（7）	論文草稿の提示と議論
第 11 回	論文相談（8）	論文草稿の提示と議論
第 12 回	論文相談（9）	論文草稿の提示と議論
第 13 回	研究発表（3）	研究報告と議論
第 14 回	研究現状報告（2）	研究計画の提示と相談

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自身の研究を進め、論文の草稿を執筆する。また、レジュメを作成する。授業後に論文を修正して完成させる。本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点 50%、学期末レポート点 50% の合計で評価する予定である。

【学生の意見等からの気づき】

議論が活発になるように努める。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本中世史

＜研究テーマ＞日中関係史・日本仏教史

【Outline (in English)】

The aim of this course is to help students read the medieval Chinese texts. The goals of this course are to train the ability to understand the contents deeply. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Your overall grade in the class will be decided based on the following. Short reports : 50%, in class contribution: 50%.

HIS700B4

史学特殊演習 B II

大塚 紀弘

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本中世史に関する論文の構成や内容について個別に相談する。
また、希望に応じて研究発表をする機会を設ける。

【到達目標】

日本中世史に関する論文を執筆し、学術雑誌等に公表することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示された
どの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針
に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式で進める。事前に提出された論文の草稿またはレジュメに
基づいて議論する。課題等の提出・フィードバックは「学習支援シ
ステム」または「メール」を通じて行なう予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	研究現状報告（1）	研究計画の提示と相談
第2回	論文相談（1）	論文草稿の提示と議論
第3回	論文相談（2）	論文草稿の提示と議論
第4回	論文相談（3）	論文草稿の提示と議論
第5回	研究発表（1）	研究報告と議論
第6回	論文相談（4）	論文草稿の提示と議論
第7回	論文相談（5）	論文草稿の提示と議論
第8回	論文相談（6）	論文草稿の提示と議論
第9回	研究発表（2）	研究報告と議論
第10回	論文相談（7）	論文草稿の提示と議論
第11回	論文相談（8）	論文草稿の提示と議論
第12回	論文相談（9）	論文草稿の提示と議論
第13回	研究発表（3）	研究報告と議論
第14回	研究現状報告（2）	研究計画の提示と相談

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自身の研究を進め、論文の草稿を執筆する。また、レジュメを作成
する。授業後に論文を修正して完成させる。本授業の準備・復習時
間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点50%、学期末レポート点50%の合計で評価する予定である。

【学生の意見等からの気づき】

議論が活発になるように努める。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本中世史

<研究テーマ> 日中関係史・日本仏教史

【Outline (in English)】

The aim of this course is to help students read the medieval Chinese texts. The goals of this course are to train the ability to understand the contents deeply. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Your overall grade in the class will be decided based on the following. Short reports : 50%, in class contribution: 50%.

HIS700B4

史学特殊演習 B I

小口 雅史

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

課程博士としての論文を仕上げるために、その構想から執筆、全体
の調整をへて1つにまとめていく過程全体を徹底的に支援してもら
うための演習である。

【到達目標】

最終的に博士論文をまとめるために、年に最低でも2本程度（でき
れば3本の脱稿を目指す）の論文を執筆出来るように努力する。と
きおり高度な模範論文を輪読して、論理的な論文の書き方を会得す
ることも目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示され
たどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方
針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業形式は対面授業を原則とする。基本的には博士課程の院生が輪
番で毎回論文文化したい一つのテーマを選び、先行研究のまとめ、利
用する史料とその解釈を紹介しながら、一つの論文になるよう報告
してもらう。ときおり名著とされる日本古代史関係の古典的論文を
取り上げて、参加者全員で輪読することも実施する。また既修了者
による論文構想過程についても紹介してもらう。
発表へのフィードバックについては、次の授業の初めに、前回の
授業で提出資料からいくつか取り上げ、全体に対してフィードバ
ックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告 担当の調整。
第2回	博士課程院生による論文発表(1)	賜姓源氏経済をめぐる1 禄 令位田
第3回	博士課程院生による論文発表(2)	賜姓源氏経済をめぐる2 禄 令位封
第4回	博士課程院生による論文発表(3)	賜姓源氏経済をめぐる3 禄令 文発表
第5回	博士課程院生による論文発表(4)	賜姓源氏経済をめぐる4 荘園 文発表
第6回	博士課程修了者による論文発表(1)	渤海とは何か
第7回	博士課程修了者による論文発表(2)	日渤海交渉の歴史定義
第8回	博士課程修了者による論文発表(3)	日渤海交渉の変質
第9回	博士課程修了者による論文発表(4)	日中外交儀礼の特徴
第10回	博士課程院生による論文発表(5)	日本古代の駅制とは何か
第11回	博士課程院生による論文発表(6)	日本古代駅制・駅路の特質
第12回	博士課程院生による論文発表(7)	駅伝制・伝馬制の検討
第13回	博士課程院生による論文発表(8)	中国と日本の古代交通制度の比較
第14回	春学期の総括	これまで発表した成果について相互批判する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に発表要旨を配布してもらうので、それを熟読してから参加す
ること。

発表者の事前準備は標準的に 2 時間。受講生の手前準備は標準的に 1 時間を要する。

【テキスト（教科書）】

使用しない。

【参考書】

その都度指定する。

【成績評価の方法と基準】

最終的に脱稿した論文の完成度によって評価する（90 %）。演習中における他の発表者への指摘内容についても考慮することがある（10 %）。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

日本古代史

＜研究テーマ＞

日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史

＜主要研究業績＞

2010 年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』

2008 年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院

2008 年、『近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって』『古文書研究』66

2007 年、『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後－ FileMaker による Database の Web 公開の一例として』『漢字文献情報処理研究』8

【Outline (in English)】

Course outline : To finish the research as a doctorate in the course, Profeesor and seminar students repeatedly discuss the subjects.

Learning Objectives : WAt the end of the course, students are expected to being able to write a doctoral dissertation

Learning activities outside of classroom : Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting . Your study time will be more than five hours for a class.

Grading Criteria /Policies : Grading will be decided based on lab reports (85 %)(%), and the quality of the students' experimental performance in the lab (15 %).

HIS700B4

史学特殊演習 B II

小口 雅史

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

課程博士としての論文を仕上げるために、その構想から執筆、全体の調整をへて1つにまとめていく過程全体を徹底的に支援してもらうための演習である。

【到達目標】

最終的に博士論文をまとめるために、年に最低でも2本程度（できれば3本の脱稿を目指す）の論文を執筆出来るように努力する。ときおり高度な模範論文を輪読して、論理的な論文の書き方を会得することも目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業形式は対面授業を原則とする。基本的には博士課程の院生が輪番で毎回論文文化したい一つのテーマを選び、先行研究のまとめ、利用する史料とその解釈を紹介しながら、一つの論文になるよう報告してもらう。ときおり名著とされる日本古代史関係の古典的論文を取り上げて、参加者全員で輪読することも実施する。また既修了者による論文構想過程についても紹介してもらう。発表へのフィードバックについては、次の授業の初めに、前回の授業で提出資料からいくつか取り上げ、全体に対してフィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整
第2回	博士課程院生による論文発表(1)	大化前代氏姓制度の特質 1 負名氏
第3回	博士課程院生による論文発表(2)	大化前代氏姓制度の特質 2 膳部
第4回	博士課程院生による論文発表(3)	大化前代氏姓制度の特質 3 陶部
第5回	博士課程院生による論文発表(4)	大化前代氏姓制度の特質 4 服部
第6回	博士課程修了者による論文発表(1)	外交儀礼の日唐比較
第7回	博士課程修了者による論文発表(2)	外交儀礼の歴史的意味
第8回	博士課程修了者による論文発表(3)	渤海と新羅の比較
第9回	博士課程修了者による論文発表(4)	遣唐使と新羅使の比較
第10回	博士課程修了者による論文発表(5)	俘囚とはなにか
第11回	博士課程修了者による論文発表(6)	俘囚移配の特質
第12回	博士課程修了者による論文発表(7)	夷俘と俘囚の違い
第13回	博士課程修了者による論文発表(8)	律令国家の北方政策
第14回	秋学期の総括	発表者による相互批判と論文文化の成果報告

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に発表要旨を配布してもらうので、それを熟読してから参加すること。

発表者の事前準備は標準的に 2 時間。受講生の事前準備は標準的に 1 時間を要する。

【テキスト（教科書）】

使用しない。

【参考書】

その都度指定する。

【成績評価の方法と基準】

最終的に脱稿した論文の完成度によって評価する（90 %）。演習中における他の発表者への指摘内容についても考慮することがある（10 %）。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につきとくになし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本古代史

<研究テーマ>

日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史

<主要研究業績>

2010 年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』

2008 年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院

2008 年、『近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって』『古文書研究』66

2007 年、『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後－FileMaker による Database の Web 公開の一例として』『漢字文献情報処理研究』8

【Outline (in English)】

Course outline : To finish the research as a doctorate in the course, Profeesor and seminar students repeatedly discuss the subjects.

Learning Objectives : WAt the end of the course, students are expected to being able to write a doctoral dissertation

Learning activities outside of classroom : Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting . Your study time will be more than five hours for a class.

Grading Criteria /Policies : Grading will be decided based on lab reports (85 %)(%), and the quality of the students' experimental performance in the lab (15 %).

HIS700B4

史学特殊演習 B I

小倉 淳一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

考古学の方法にもとづいて物質文化から再構成される社会について検討する。それをもとに博士論文作成を進めるための力量を培い、独自の研究の確立につなげていく。

【到達目標】

・先史社会の内実を物質資料の分析に基づいて検討し、批判を加えつつ建設的な展望を提示することができる。
・先史社会に関する特定のテーマをもとにした論文を多面的に構成するための能力が高まる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講者が関心を寄せる先史時代の社会に関する先行研究を講読し、受講者の研究テーマを設定するために検討と討論を重ねる。関連する諸研究を横断しながら、研究の現状と課題を明らかにし、受講者の問題意識の形成につなげ、資料の分析方法を見通していく。授業形式は対面授業を基本とする。

レポート等のフィードバックについては授業内に行うかオフィス・アワー（月曜 5 限）で対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	先史社会研究の意義
第 2 回	構想発表（1）	受講者の目指す論文構想
第 3 回	構想発表（2）	現状の論文構想の課題と問題の検討
第 4 回	学史的 research 論文の検討（1）	主に 1990 年代までの研究分野をリードしてきた先史社会研究のテーマと目的に関する検討
第 5 回	学史的 research 論文の検討（2）	上記論文の資料と操作方法に関する検討
第 6 回	学史的 research 論文の検討（3）	上記論文の考察と展望に関する検討
第 7 回	近年の研究論文の検討（1）	2000 年代以降の研究分野を形成した先史社会研究のテーマと目的に関する検討
第 8 回	近年の研究論文の検討（2）	上記論文の資料と操作方法に関する検討
第 9 回	近年の研究論文の検討（3）	上記論文の考察と展望に関する検討
第 10 回	最新の研究論文の検討（1）	当該分野における最新研究のテーマと目的に関する検討
第 11 回	最新の研究論文の検討（2）	上記論文の資料と操作方法に関する検討
第 12 回	最新の研究論文の検討（3）	上記論文の考察と展望に関する検討
第 13 回	先史社会研究の発達過程と多面的な方向性	受講者の掲げたテーマの有効性と問題点の抽出
第 14 回	総括	研究テーマと方針の策定

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。当該分野の諸研究に関する論文集成および研究史の概要把握。

【テキスト（教科書）】

用いない。

【参考書】

授業内で提示する。

【成績評価の方法と基準】

授業内の発表・討論（70 %・必須）、レポート（30 %・必須）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【その他の重要事項】

※担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても実践的に解説・指導する。

【Outline (in English)】

The aim of this course is to acquire the ability to write doctoral dissertations by students doing research presentations in Japanese archeology.

Students will be able to examine the image of prehistoric societies based on the analysis of material sources and present a constructive perspective.

Students will develop the ability to construct a multi-faceted thesis based on a specific theme related to prehistoric societies. The standard preparation and review time by students is 2 hours each.

The final grade will be calculated based on the following factors: results of the research presentation and participation in the discussion (70%), and the final report (30%).

HIS700B4

史学特殊演習 B II

小倉 淳一

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

考古学の方法にもとづいて物質文化から再構成される社会について検討する。この授業では受講者の研究テーマを先行研究の中に確実に位置つけたうえで、資料の実践的な検討と考察を行い、博士論文作成に資することとする。

【到達目標】

- ・諸研究を総合的に検討することで受講者自身が新たな研究の方向を展望できる。
- ・受講者自身の研究テーマにもとづく資料集成を実践できる。
- ・集成した資料の分類と分析を一定の基準の下で実践できる。
- ・分析を元にした考察をまとめ、新たな展望を得ることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講者の設定した研究テーマの学史的背景と妥当性を検討するとともに、対象となる資料の分析視点を絞り込んでいく。次いで資料の分類と分析に進み、その手順と理解の妥当性を検討する。最終的に考察された内容が資料にもとづいて正確になされているかについて討論し、最新の研究成果との相関性や先進性について理解を深めていく。

授業形式は対面授業を基本とする。

レポート等のフィードバックについては授業内に行うかオフィス・アワー（月曜 5 限）で対応する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	先史社会研究の実戦に向けた諸段階
第 2 回	研究テーマの学史的検討（1）	先行研究の展開過程
第 3 回	研究テーマの学史的検討（2）	研究史上の転換点・画期
第 4 回	研究テーマの学史的検討（3）	現状の研究の方向性と展望
第 5 回	資料集成（1）	資料集成の目的と方向性
第 6 回	資料集成（2）	目的にもとづく資料集成方法の検討
第 7 回	資料の分析（1）	資料のもつ諸属性の理解
第 8 回	資料の分析（2）	観察視点と属性抽出方法
第 9 回	資料の分析（3）	資料分析の実践と問題
第 10 回	資料の分析（4）	分析結果の処理
第 11 回	分析結果の読み取り（1）	分析結果の提示・表現方法
第 12 回	分析結果の読み取り（2）	分析結果の解釈と考察
第 13 回	成果の検討	研究テーマと結論の相関性および最新研究との関連性の検討
第 14 回	総括	研究論文の内容と構成の策定

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各 2 時間を標準とする。受講者のテーマに関連する研究論文の渉獵、考古学的方法論に関する理解。

【テキスト（教科書）】

用いない。

【参考書】

授業内で提示する。

【成績評価の方法と基準】

授業内の発表・討論（70 %・必須）、レポート（30 %・必須）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【その他の重要事項】

※担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても実践的に解説・指導する。

【Outline (in English)】

The aim of this course is to acquire the ability to write doctoral dissertations by students doing research presentations in Japanese archeology.

Students will be able to examine the image of prehistoric societies based on the analysis of material sources and present a constructive perspective.

Students will develop the ability to construct a multi-faceted thesis based on a specific theme related to prehistoric societies. The standard preparation and review time by students is 2 hours each.

The final grade will be calculated based on the following factors: results of the research presentation and participation in the discussion (70%), and the final report (30%).

HIS700B4

史学特殊演習 B I

後藤 篤子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ラテン語読解能力のさらなる向上、学会発表やその活字化、後進の指導など、研究者・教育者として自立的に活動していくための基盤を形成・強化する。

【到達目標】

- （１）自らのラテン語読解能力をさらに向上させる。
 - （２）これまでの口頭発表や活字化した論文をアップデートし、博士論文完成に向けてまとめる。
 - （３）自分がこれまでに修得した専門的知識を生かして、修士課程在籍者に対する指導経験を積む。
- 以上の３点を目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

主として受講者による研究の現状報告、博士論文完成に向けた原稿作成とそれに対する指導を中心に、授業を進める。最後の数回は修士課程科目「西洋史学演習Ⅰ」と合同授業とし、博士課程在籍の受講者から修士課程在籍者に対し、ラテン語史料の読み方などについて、教員と共に指導してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第 1 回	研究の進捗状況について	受講者による研究の現状報告と討議
第 2 回	研究内容の活字化に向けて (1)	受講者がまとめた論文原稿に関する討議 (1)
第 3 回	研究内容の活字化に向けて (2)	受講者がまとめた論文原稿に関する討議 (2)
第 4 回	研究内容の活字化に向けて (3)	論文で使用するラテン語史料の読解に関する討議 (1)
第 5 回	研究内容の活字化に向けて (4)	論文で使用するラテン語史料の読解に関する討議 (2)
第 6 回	研究内容の活字化に向けて (5)	受講者が提出した修正原稿に関する討議 (1)
第 7 回	研究内容の活字化に向けて (6)	受講者が提出した修正原稿に関する討議 (2)
第 8 回	研究内容の活字化に向けて (7)	受講者が提出した修正原稿に関する討議 (3)
第 9 回	博士論文完成に向けて (1)	受講者による博士論文構成案の提示と討議
第 10 回	博士論文完成に向けて (2)	博士論文完成に向けて、残っている課題の整理と討議
第 11 回	後進への指導経験を積む (1)	ラテン語初心者の『プリニウス書簡集』読解を補助する (1)
第 12 回	後進への指導経験を積む (2)	ラテン語初心者の『プリニウス書簡集』読解を補助する (2)
第 13 回	後進への指導経験を積む (3)	ラテン語初心者の『プリニウス書簡集』読解を補助する (3)
第 14 回	博士論文完成のためのタイムスケジュールの確認	夏期休暇中の研究計画と教員からの助言

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文に向けた研究を自主的に進め、既発表の研究内容に必要な修正を加えると同時に、博士論文の構成を考えて更に調査研究を進める。後進のラテン語史料読解を補助するにあたっての予習と復習。本授業の授業外学習時間は事前準備と事後の作業を合わせて、大学設置基準が求める1回計4時間以上をはるかに上回るであろう。

【テキスト（教科書）】

後進の指導については、A. N. Sherwin-White (ed.), *Fifty Letters of Pliny*, Oxford, 2nd ed. 2000.

【参考書】

後進の指導については、
國原吉之助訳『プリニウス書簡集—ローマ帝国—貴紳の生活と信条』、講談社学術文庫、1999年。

【成績評価の方法と基準】

平常点のみ（博士論文完成に向けての自主的努力 70 %、ラテン語読解補助の予習も含めた後進の指導に向けての準備 30 %）で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート非実施科目につき該当なし。

【担当教員の専門分野等】

- ＜専門領域＞古代ローマ史
- ＜研究テーマ＞帝政後期ローマの歴史と社会、ローマ帝国の「キリスト教化」の問題
- ＜主要研究業績＞
 - ① The 'conversion' of Constantine the Great: his religious legislation in the Theodosian Code, *Studia Patristica*, XCIII (2017).
 - ② (分担執筆・史料邦訳) 歴史学研究会編『世界史史料1・古代のオリエンと地中海世界』、岩波書店、2012年。
 - ③ シドニウス・アポリナリスにおける「ローマニズム」、『史学雑誌』91-10 (1982年10月)。

【Outline (in English)】

＜ **Course Outline** ＞ The aim of this course is to help students become an independent researcher and educator.

＜ **Learning Objectives** ＞ At the end of the course, students are expected to improve their abilities to read and comprehend the historical sources written in Latin, to make presentations concerning their own research, and to help younger students in their researches.

＜ **Learning activities outside of classroom** ＞ Students are required to progress their own research in order to accomplish their dissertations, and prepare to help younger students read Latin texts. Their study time will be far more than four hours for a class.

＜ **Grading Policy** ＞ Grading will be decided based on the progress toward accomplishing their own dissertations (70%), and the preparation to help younger students (30%).

HIS700B4

史学特殊演習 B II

後藤 篤子

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

学術雑誌への論文投稿や、ラテン語読解能力のさらなる向上など、研究者・教育者として自立的に活動していくための基盤を強化する。

【到達目標】

- (1) ラテン語読解能力をさらに向上させる。
 - (2) 博士論文草稿で残った課題を自分で洗い出し、新たな研究発表を行える。
 - (3) 後進の研究指導の補助ができる。
- 以上の3点を目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

本授業は受講者による研究報告とその内容に関する討議を中心に授業を進める。学期後半には修士課程「西洋史学演習Ⅱ」との合同授業を数回入れ、受講生に後進のラテン語読解の補助や研究面でのアドヴァイスの経験を積んでもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
第1回	研究の現状報告	受講生による博士論文草稿についての報告と討議
第2回	博士論文で残った課題について	博士論文で残った課題を整理し、新たな研究発表を準備する。
第3回	新たな研究発表に向けて (1)	受講者による研究テーマ・使用予定史料の提示と討議
第4回	新たな研究発表に向けて (2)	ラテン語史料の読解 (1)
第5回	新たな研究発表に向けて (3)	ラテン語史料の読解 (2)
第6回	新たな研究発表に向けて (4)	学術誌に投稿する新たな論文原稿の検討と討議 (1)
第7回	新たな研究発表に向けて (5)	学術誌に投稿する新たな論文原稿の検討と討議 (2)
第8回	新たな研究発表に向けて (6)	投稿予定原稿と史料読解の最終確認
第9回	後進への指導経験を積む (1)	ラテン語初心者の『プリニウス書簡集』読解を補助する (1)
第10回	後進への指導経験を積む (2)	ラテン語初心者の『プリニウス書簡集』読解を補助する (2)
第11回	後進への指導経験を積む (3)	ラテン語初心者の『プリニウス書簡集』読解を補助する (3)
第12回	後進への指導経験を積む (4)	ラテン語初心者の『プリニウス書簡集』読解を補助する (4)
第13回	既発表の研究内容の総括と今後の課題の整理	受講生による振り返りと討議
第14回	今後の研究活動について	受講生による今後の研究計画の提示と討議

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文提出後を見据えて新たな研究テーマを設定し、必要な史料読解を進め、さらなる研究発表の準備をする。後進指導のためのラテン語読解の予習・復習。本授業の授業外学習時間は、大学設置基準では1回につき計4時間以上とされているが、それをはるかに上回る授業時間外学習が必要なことは論を俟たないであろう。

【テキスト（教科書）】

後進の指導については、A. N. Sherwin-White (ed.), *Fifty Letters of Pliny*, Oxford, 2nd ed. 2000.

【参考書】

後進の指導については、
國原吉之助訳『プリニウス書簡集—ローマ帝国—貴紳の生活と信条』、
講談社学術文庫、1999 年。

【成績評価の方法と基準】

平常点のみ（自主的研究の進捗と内容 70 %、ラテン語読解の精度 30 %）で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート非実施科目につき該当なし。

【その他の重要事項】

史学特殊演習 A I（後藤）から継続して履修すること。

【担当教員の専門分野等】

< 専門領域 > 古代ローマ史

< 研究テーマ > 帝政後期ローマの歴史と社会、ローマ帝国の「キリスト教化」の問題

< 主要研究業績 >

① The 'conversion' of Constantine the Great: his religious legislation in the Theodosian Code, *Studia Patristica*, XCIII (2017).

② (分担執筆・史料邦訳) 歴史学研究会編『世界史史料 1・古代のオリエンと地中海世界』、岩波書店、2012 年。

③ シドニウス・アポリナリスにおける「ローマニズム」、『史学雑誌』91-10 (1982 年 10 月)。

【Outline (in English)】

< **Course Outline** > The aim of this course is the enhancement of the abilities necessary for an independent researcher and educator.

< **Learning Objectives** > At the end of the course, students are expected to improve their abilities to read and comprehend the historical sources written in Latin, to make presentations concerning their own research, and to help younger students in their researches.

< **Learning activities outside of classroom** > Students are required to advance their own research independently, and to prepare to help younger students read Latin texts. Their study time will be far more than four hours for a class.

< **Grading Policy** > Grading will be decided based on the research reports (70%), and the preparation to help younger students (30%).

HIS700B4

史学特殊演習 B I

内藤 一成

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本近現代史に関する発表や専門書・論文の検討などを行い、博士論文を完成させるために必要な能力を養う。

【到達目標】

本授業では以下の点を目標とする。①日本近現代史に関する最新の研究動向の把握、②独創的な研究テーマの確立、③高い水準の論文の作成。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式で行う。具体的には、受講生による、①論文の構想発表、執筆中の論文の中間発表と質疑応答、②関心をもった専門書・論文の合評会、③最新の研究や史料の紹介、などを中心とする。課題等の提出やフィードバックなどは主に「学習支援システム」を活用する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	講義に関する全体の説明、注意点など
第 2 回	研究発表 1	明治史研究 (1)
第 3 回	研究発表 2	明治史研究 (2)
第 4 回	研究発表 3	明治史研究 (3)
第 5 回	研究発表 4	明治史研究 (4)
第 6 回	研究発表 5	大正史研究 (1)
第 7 回	研究発表 6	大正史研究 (2)
第 8 回	中間総括	中間総括と質疑応答
第 9 回	研究発表 7	昭和戦前史研究 (1)
第 10 回	研究発表 8	昭和戦前史研究 (2)
第 11 回	研究発表 9	昭和戦前史研究 (3)
第 12 回	研究発表 10	昭和戦後史研究 (1)
第 13 回	研究発表 11	昭和戦後史研究 (2)
第 14 回	全体総括	全体総括と質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

平素より論文の作成を進め、研究発表後にはその内容をフィードバックさせておく。論文評に際しては、事前に熟読しておく。本授業の準備・復習時間は、各 2 時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

特に用いない。

【参考書】

授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表内容、授業への参加度などに、執筆論文の完成度を加味して総合化し、これを平常点 (100 %) として評価する。

【学生の意見等からの気づき】

現時点ではないが、授業が活発な議論の場となるよう努める。

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムが利用可能な IT 機器

【その他の重要事項】

・「史学特殊演習」B II（秋学期）との継続履修を推奨する。

・やむを得ない事情により授業を欠席する場合（介護体験実習、教育実習など）には、その事情を証明する文書を提出すること。新型コロナウイルス感染防止策として教室での対面授業を行わない場合には、授業内容を変更することがある。

・授業に関連する連絡は、学習支援システムの「お知らせ」サイトや、「授業内掲示板」サイトを利用して行うので、見落とさないようにすること。

・担当教員への直接連絡にはメールを利用すること。担当教員のメールアドレスは、学習支援システムに掲示する。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

日本近現代史

＜研究テーマ＞

近現代の政治と文化

＜主要研究業績＞

『貴族院と立憲政治』（思文閣出版）、『貴族院』（同成社）、『華族令嬢たちの大正・昭和』（吉川弘文館）、『三条実美』（中公新書）、『新編旧話会速記』（芙蓉書房出版）、『四條男爵家関係文書』（同成社）、『田健治郎日記』第3・7巻（芙蓉書房出版）、『河井弥八日記（戦後篇）』全5巻（信山社出版）

【Outline (in English)】

(Course outline)

This course mainly reports on the modern history of Japan, criticizes academic books and dissertations, and discusses them. Through these processes, you will acquire the abilities necessary to complete your doctoral dissertation.

(Learning Objectives)

By the end of the course, students should be able to do the followings:

- A.Understanding the latest research trends related to modern Japanese history.
- B.Create an original research theme.
- C.Complete a high-level dissertation.

(Learning activities outside of classroom)

Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

(Grading Criteria /Policy)

Final grades are calculated according to the process of presentation, discussion and the quality of the dissertation.Combine all elements to make 100%

HIS700B4

史学特殊演習 B II

内藤 一成

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本近現代史に関する発表や専門書・論文の検討などを行い、博士論文を完成させるために必要な能力を養う。

【到達目標】

本授業では以下の点を目標とする。①日本近現代史に関する最新の研究動向の把握、②独創的な研究テーマの確立、③高い水準の論文の作成。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

演習形式で行う。具体的には、受講生による、①論文の構想発表、執筆中の論文の中間発表と質疑応答、②関心をもった専門書・論文の合評会、③最新の研究や史料の紹介、などを中心とする。課題等の提出やフィードバックなどは主に「学習支援システム」を活用する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	講義に関する全体の説明、注意点など
第2回	研究発表1	論文構想発表（1）
第3回	研究発表2	論文構想発表（2）
第4回	研究発表3	論文構想発表（3）
第5回	研究発表4	論文構想発表（4）
第6回	研究発表5	論文合評（1）
第7回	研究発表6	史料紹介（1）
第8回	中間総括	中間総括と質疑応答
第9回	研究発表7	論文構想発表（5）
第10回	研究発表8	論文構想発表（6）
第11回	研究発表9	論文構想発表（7）
第12回	研究発表10	論文合評（2）
第13回	研究発表11	史料紹介（2）
第14回	全体総括	全体総括と質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

平素より論文の作成を進め、研究発表後にはその内容をフィードバックさせておく。論文評に際しては、事前に熟読しておく。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

特に用いない。

【参考書】

授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表内容、授業への参加度などに、執筆論文の完成度を加味して総合化し、これを平常点（100 %）として評価する。

【学生の意見等からの気づき】

現時点ではないが、授業が活発な議論の場となるよう努める。

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムが利用可能な IT 機器

【その他の重要事項】

・「史学特殊演習」B I（春学期）との継続履修を推奨する。

・やむを得ない事情により授業を欠席する場合（介護体験実習、教育実習など）には、その事情を証明する文書を提出すること。新型コロナウイルス感染防止策として教室での対面授業を行わない場合には、授業内容を変更することがある。

・授業に関連する連絡は、学習支援システムの「お知らせ」サイトや、「授業内掲示板」サイトを利用して行うので、見落とさないようにすること。

・担当教員への直接連絡にはメールを利用すること。担当教員のメールアドレスは、学習支援システムに掲示する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本近現代史

<研究テーマ>

近現代の政治と文化

<主要研究業績>

『貴族院と立憲政治』（思文閣出版）、『貴族院』（同成社）、『華族令嬢たちの大正・昭和』（吉川弘文館）、『三条実美』（中公新書）、『新編旧話会速記』（芙蓉書房出版）、『四條男爵家関係文書』（同成社）、『田健治郎日記』第3・7巻（芙蓉書房出版）、『河井弥八日記（戦後篇）』全5巻（信山社出版）

【Outline (in English)】

(Course outline)

This course mainly reports on the modern history of Japan, criticizes academic books and dissertations, and discusses them. Through these processes, you will acquire the abilities necessary to complete your doctoral dissertation.

(Learning Objectives)

By the end of the course, students should be able to do the followings:

- A.Understanding the latest research trends related to modern Japanese history.
- B.Create an original research theme.
- C.Complete a high-level dissertation.

(Learning activities outside of classroom)

Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

(Grading Criteria /Policy)

Final grades are calculated according to the process of presentation, discussion and the quality of the dissertation.Combine all elements to make 100%

HIS700B4

史学特殊演習 B I

松本 剣志郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、受講生が日本近世史についての研究能力を高め、個々が有する研究テーマを深めていくことを目的とする。

【到達目標】

- ①査読付学術雑誌に論文を掲載する。
- ②博士論文を執筆する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

個人による研究発表をおこなう。発表者は各自の研究テーマについてレジュメを作成し、発表する。論文講読は、事前に割り当てを決め、担当者が発表し、これを全員で批評するかたちをとる。発表等に対するフィードバックは授業後半におこなう。対面授業である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業概要の説明、発表順の決定
第2回	研究発表（1）	研究テーマの学術上の位置づけ
第3回	研究発表（2）	研究テーマの史料論的分析
第4回	研究発表（3）	研究テーマの可能性
第5回	研究発表（4）	研究テーマのひろがり
第6回	研究発表（5）	学術雑誌への投稿をめざして
第7回	論文講読（1）	研究史上の位置づけ
第8回	論文講読（2）	論文構成の方法
第9回	論文講読（3）	史料批判
第10回	論文講読（4）	論理展開の仕方
第11回	論文講読（5）	研究視野の拡大
第12回	研究計画発表（1）	今後の方針
第13回	研究計画発表（2）	史料探訪にむけて
第14回	まとめ	研究者の姿勢

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

論文講読にあたっては、事前にその論文を読んでおくこと。また、その著者の他の論文も目を通すと良い。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

『岩波講座日本歴史』ほか

【成績評価の方法と基準】

発表内容、授業への参加度等をもて、平常点100%で成績評価する。

【学生の意見等からの気づき】

教室について配慮したいと思います。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近世史

<研究テーマ> 都市論、記憶論

<主要研究業績> 『江戸の都市化と公共空間』（塙書房、2019年）

【Outline (in English)】

This course deals with the early modern history of Japan. It also enhances the development of student's skill in making oral presentation and writing an article. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Grading will be decided based on students presentation.

HIS700B4

史学特殊演習 B II

松本 剣志郎

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、受講生が日本近世史についての研究能力を高め、個々が有する研究テーマを深めていくことを目的とする。

【到達目標】

- ①査読付学術雑誌に論文を複数掲載する。
- ②博士論文を執筆する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

個人による研究発表をおこなう。発表者は各自の研究テーマについてレジュメを作成し、発表する。論文講読は、事前に割り当てを決め、担当者が発表し、これを全員で批評するかたちをとる。発表等に対するフィードバックは授業後半におこなう。対面授業である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業概要の説明、発表順の決定
第2回	研究発表（1）	研究史との格闘
第3回	研究発表（2）	論理展開の仕方
第4回	研究発表（3）	史料の読みの深さ
第5回	研究発表（4）	表の効果的使用
第6回	研究発表（5）	他流試合のなかで
第7回	論文講読（1）	分野の選定
第8回	論文講読（2）	表現力の問題
第9回	論文講読（3）	史料引用の恣意性
第10回	論文講読（4）	先行研究の曲解
第11回	論文講読（5）	結論の妥当性
第12回	研究計画発表（1）	今後の進め方
第13回	研究計画発表（2）	史料収集のすすめ
第14回	まとめ	つぎのステージへむけて

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

論文講読においては、事前に当該論文を読んでおくこと。各自で研究を進めること。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

『岩波講座日本歴史』ほか

【成績評価の方法と基準】

発表内容、授業への参加度等をみて、平常点100%で成績評価する。

【学生の意見等からの気づき】

教室について配慮したいと思います。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近世史

＜研究テーマ＞都市論、記憶論

＜主要研究業績＞『江戸の都市化と公共空間』（塙書房、2019年）

【Outline (in English)】

This course deals with the early modern history of Japan. It also enhances the development of student's skill in making oral presentation and writing an article. Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content. Grading will be decided based on students presentation.

HIS700B4

史学特殊演習 A I

塩沢 裕仁

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、受講生が中国古代物質（特に考古）資料についての研究能力を高め、個々が有する研究テーマを深めていくことを目的とする。

【到達目標】

研究資料としての中国考古学報告を読み進めるための力を養うとともに博士論文を執筆する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

東アジア文化の発達やその変遷を探索し、宗教・思想や社会状態の推移を探究するためには物質・環境考証というアプローチもまた不可欠な手法である。本授業では洛陽地域における考古学報告を用い、その読解や内容に対する議論を通して中国物質文化への理解を深め、その成果を以て論文作成を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	中国考古学の状況と考古学報告活用の意味
第 2 回	資料講読 (1)	研究史の整理 (1)
第 3 回	資料講読 (2)	研究史の整理 (2)
第 4 回	資料講読 (3)	研究史の整理 (3)
第 5 回	資料講読 (4)	研究史の整理 (4)
第 6 回	資料講読 (5)	研究史の整理 (5)
第 7 回	資料読解 (1)	研究資料の検証 (1)
第 8 回	資料読解 (2)	研究資料の検証 (2)
第 9 回	資料読解 (3)	研究資料の検証 (3)
第 10 回	研究所訪問 (1)	研究資料の収集 (1)
第 11 回	研究所訪問 (2)	研究資料の収集 (2)
第 12 回	研究計画発表 (1)	研究方針の検証
第 13 回	研究計画発表 (2)	研究水準の検証
第 14 回	まとめ	研究計画の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

資料は中国語であるが、読解という点からみれば辞書を活用することで十分に対応ができる。積極的な予習を期待する。また、資料の読解と内容への理解を深めるため、博物館や展示会には頻繁に出掛け自分の目で遺物を観察してもらいたい。また、学会への積極的な参加も求める。

【テキスト（教科書）】

授業中に使用する資料は随時配布する。

【参考書】

塩沢裕仁『千年帝都洛陽—その遺跡と人文・自然環境—』雄山閣、2010 年

【成績評価の方法と基準】

資料解釈の深度と発表内容：100

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>中国考古学・中国古代歴史地理

＜研究テーマ＞漢より唐にいたる古代都城遺跡とそれを取り巻く地域の生態環境。＜主要研究業績＞『東漢魏晉南北朝都城境域研究』洛陽博物館文化叢書、2009 年『千年帝都洛陽—その遺跡と人文・自然環境—』雄山閣、2010 年「漢魏洛陽城の都市空間」『史潮』新 67 号、2010 年「洛陽から四方に通じる大道とその遺跡」『古代東アジアの道路と交通』勉誠出版、2011 年「洛陽における都城遺跡の保護とその問題点」『中国考古学』11 号、2011 年「漢魏洛陽城穀水水文考」『東洋史研究』71-2、2012 年『後漢魏晉南北朝都城境域研究』雄山閣、2013 年

【Outline (in English)】

【Course outline and Learning Objectives】On reading the Chinese archaeological reports, we will be able to understand the study situation of Chinese Archaeology and cultivate our ability to research on the Chinese archaeological data.

【Learning activities outside of classroom】Need two hours in a day.

【Grading Criteria /Policy】Based on class performance 100 percent.

HIS700B4

史学特殊演習 A II

塩沢 裕仁

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、受講生が中国古代物質（特に考古）資料についての研究能力を高め、個々が有する研究テーマを深めていくことを目的とする。

【到達目標】

研究資料としての中国考古学報告を読み進めるための力を養うとともに博士論文を執筆する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

東アジア文化の発達やその変遷を探索し、宗教・思想や社会状態の推移を探究するためには物質・環境考証というアプローチもまた不可欠な手法である。本授業では洛陽地域における考古学報告を用い、その読解や内容に対する議論を通して中国物質文化への理解を深め、その成果を以て論文作成を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	休暇中の課題整理
第 2 回	資料講読 (1)	研究状況の整理 (1)
第 3 回	資料講読 (2)	研究状況の整理 (2)
第 4 回	資料講読 (3)	研究状況の整理 (3)
第 5 回	資料講読 (4)	研究状況の整理 (4)
第 6 回	資料講読 (5)	研究状況の整理 (5)
第 7 回	研究活動報告 (1)	学会参加報告 (1)
第 8 回	研究所訪問 (1)	研究資料の実地検証 (1)
第 9 回	研究所訪問 (2)	研究資料の実地検証 (2)
第 10 回	研究活動報告 (2)	学会参加報告 (2)
第 11 回	研究発表 (1)	研究成果報告 (1)
第 12 回	研究発表 (2)	研究成果報告 (2)
第 13 回	研究発表 (3)	研究水準の検証
第 14 回	まとめ	研究活動の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

資料は中国語であるが、読解という点からみれば辞書を活用することで十分に対応ができる。積極的な予習を期待する。また、資料の読解と内容への理解を深めるため、博物館や展示会には頻繁に出掛け自分の目で遺物を観察してもらいたい。また、学会への積極的な参加も求める。

【テキスト（教科書）】

授業中に使用する資料は随時配布する。

【参考書】

塩沢裕仁『千年帝都洛陽—その遺跡と人文・自然環境—』雄山閣、2010 年

【成績評価の方法と基準】

資料解釈の深度と発表内容：100

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞中国考古学・中国古代歴史地理

＜研究テーマ＞漢より唐にいたる古代都城遺跡とそれを取り巻く地域の生態環境。＜主要研究業績＞『東漢魏晉南北朝都城境域研究』洛陽博物館文化叢書、2009 年『千年帝都洛陽—その遺跡と人文・自然環境—』雄山閣、2010 年「漢魏洛陽城の都市空間」『史潮』新 67 号、2010 年「洛陽から四方に通じる大道とその遺跡」『古代東アジアの道路と交通』勉誠出版、2011 年「洛陽における都城遺跡の保護とその問題点」『中国考古学』11 号、2011 年「漢魏洛陽城穀水水文考」『東洋史研究』71-2、2012 年『後漢魏晉南北朝都城境域研究』雄山閣、2013 年

【Outline (in English)】

【Course outline and Learning Objectives】On reading the Chinese archaeological reports, we will be able to understand the study situation of Chinese Archaeology and cultivate our ability to research on the Chinese archaeological data.

【Learning activities outside of classroom】Need two hours in a day.

【Grading Criteria /Policy】Based on class performance 100 percent.

HIS700B4

史学特殊演習 B I

塩沢 裕仁

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、受講生が中国古代物質（特に考古）資料についての研究能力を高め、個々が有する研究テーマを深めていくことを目的とする。

【到達目標】

研究資料としての中国考古学報告を読み進めるための力を養うとともに博士論文を執筆する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

東アジア文化の発達やその変遷を探索し、宗教・思想や社会状態の推移を探究するためには物質・環境考証というアプローチもまた不可欠な手法である。本授業では洛陽地域における考古学報告を用い、その読解や内容に対する議論を通して中国物質文化への理解を深め、その成果を以て論文作成を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】 授業形態：

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	中国考古学の状況と考古学報告活用の意味
第 2 回	資料講読 (1)	研究史の整理 (1)
第 3 回	資料講読 (2)	研究史の整理 (2)
第 4 回	資料講読 (3)	研究史の整理 (3)
第 5 回	資料講読 (4)	研究史の整理 (4)
第 6 回	資料講読 (5)	研究史の整理 (5)
第 7 回	資料閲読 (1)	研究資料の検証 (1)
第 8 回	資料閲読 (2)	研究資料の検証 (2)
第 9 回	資料閲読 (3)	研究資料の検証 (3)
第 10 回	研究所訪問 (1)	研究資料の収集 (1)
第 11 回	研究所訪問 (2)	研究資料の収集 (2)
第 12 回	研究計画発表 (1)	研究方針の検証
第 13 回	研究計画発表 (2)	研究水準の検証
第 14 回	まとめ	研究計画の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

資料は中国語であるが、読解という点からみれば辞書を活用することで十分に対応ができる。積極的な予習を期待する。また、資料の読解と内容への理解を深めるため、博物館や展示会には頻繁に出掛け自分の目で遺物を観察してもらいたい。また、学会への積極的な参加も求める。

【テキスト（教科書）】

授業中に使用する資料は随時配布する。

【参考書】

塩沢裕仁『千年帝都洛陽—その遺跡と人文・自然環境—』雄山閣、2010 年

【成績評価の方法と基準】

資料解釈の深度と発表内容：100

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞中国考古学・中国古代歴史地理

＜研究テーマ＞漢より唐にいたる古代都城遺跡とそれを取り巻く地域の生態環境。＜主要研究業績＞『東漢魏晉南北朝都城境域研究』洛陽博物館文化叢書、2009 年『千年帝都洛陽—その遺跡と人文・自然環境—』雄山閣、2010 年「漢魏洛陽城の都市空間」『史潮』新 67 号、2010 年「洛陽から四方に通じる大道とその遺跡」『古代東アジアの道路と交通』勉誠出版、2011 年「洛陽における都城遺跡の保護とその問題点」『中国考古学』11 号、2011 年「漢魏洛陽城穀水水文考」『東洋史研究』71-2、2012 年『後漢魏晉南北朝都城境域研究』雄山閣、2013 年

【Outline (in English)】

【Course outline and Learning Objectives】On reading the Chinese archaeological reports, we will be able to understand the study situation of Chinese Archaeology and cultivate our ability to research on the Chinese archaeological data.

【Learning activities outside of classroom】Need two hours in a day.

【Grading Criteria /Policy】Based on class performance 100 percent.

HIS700B4

史学特殊演習 B II

塩沢 裕仁

実務教員：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、受講生が中国古代物質（特に考古）資料についての研究能力を高め、個々が有する研究テーマを深めていくことを目的とする。

【到達目標】

研究資料としての中国考古学報告を読み進めるための力を養うとともに博士論文を執筆する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

東アジア文化の発達やその変遷を探索し、宗教・思想や社会状態の推移を探究するためには物質・環境考証というアプローチもまた不可欠な手法である。本授業では洛陽地域における考古学報告を用い、その読解や内容に対する議論を通して中国物質文化への理解を深め、その成果を以て論文作成を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	休暇中の課題整理
第 2 回	資料講読 (1)	研究状況の整理 (1)
第 3 回	資料講読 (2)	研究状況の整理 (2)
第 4 回	資料講読 (3)	研究状況の整理 (3)
第 5 回	資料講読 (4)	研究状況の整理 (4)
第 6 回	資料講読 (5)	研究状況の整理 (5)
第 7 回	研究活動報告 (1)	学会参加報告 (1)
第 8 回	研究所訪問 (1)	研究資料の実地検証 (1)
第 9 回	研究所訪問 (2)	研究資料の実地検証 (2)
第 10 回	研究活動報告 (2)	学会参加報告 (2)
第 11 回	研究発表 (1)	研究成果報告 (1)
第 12 回	研究発表 (2)	研究成果報告 (2)
第 13 回	研究発表 (3)	研究水準の検証
第 14 回	まとめ	研究活動の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

資料は中国語であるが、読解という点からみれば辞書を活用することで十分に対応ができる。積極的な予習を期待する。また、資料の読解と内容への理解を深めるため、博物館や展示会には頻繁に出掛け自分の目で遺物を観察してもらいたい。また、学会への積極的な参加も求める。

【テキスト（教科書）】

授業中に使用する資料は随時配布する。

【参考書】

塩沢裕仁『千年帝都洛陽—その遺跡と人文・自然環境—』雄山閣、2010 年

【成績評価の方法と基準】

資料解釈の深度と発表内容：100

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞中国考古学・中国古代歴史地理

＜研究テーマ＞漢より唐にいたる古代都城遺跡とそれを取り巻く地域の生態環境。＜主要研究業績＞『東漢魏晉南北朝都城境域研究』洛陽博物館文化叢書、2009 年『千年帝都洛陽—その遺跡と人文・自然環境—』雄山閣、2010 年「漢魏洛陽城の都市空間」『史潮』新 67 号、2010 年「洛陽から四方に通じる大道とその遺跡」『古代東アジアの道路と交通』勉誠 出版、2011 年「洛陽における都城遺跡の保護とその問題点」『中国考古学』11 号、2011 年「漢魏洛陽城穀水水文考」『東洋史研究』71-2、2012 年『後漢魏晉南北朝都城境域研究』雄山閣、2013 年

【Outline (in English)】

【Course outline and Learning Objectives】On reading the Chinese archaeological reports , we will able to understand the study situation of Chinese Archaeology and cultivate our ability to research on the Chinese archaeological data.

【Learning activities outside of classroom】Need two hours in a day.

【Grading Criteria /Policy】Based on class performance 100 percent.

